

IS 喜んで引き立て役となりましょう！

ゆ～き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏はカッコいい。男の目から見てもカッコいい。カッコいい上に性格までいい。

普通なら幸せな人生を送ることができただろう。

だが世界最強の姉を持ち男ながらにISを動かしてしまった以上、当然世間は放っておいてくれない。

ならばいつそ、その類稀な才能を見せつけて英雄の階段を駆け上げるのだ。

目次

一卷 クラス代表決定戦とリーグマッチ

1. カモがネギ背負ってやって来た。 ————— 1

2. 美人であろうとそうでなかりうと怖いものは怖い。 ————— 15

3. 俺の計画がうまくいっていないのはどう考えても俺が悪い。 ————— 27

4. 織斑一夏はきつと生まれてくる時代が数百年遅かった。 ————— 42

5. 奇跡とは祈るものか頼るものか、それとも諦めるものか。 ————— 55

6. もしかしたら俺はとんでもない思い違いをしていたのかもしれない。 ————— 71

7. 学生の日常とは毎日同じだと思えば同じだし違うと言えば違う。 ————— 89

8. 賽を投げてしまった。 ————— 106

9. 女は恋をすると変わると言うが、変わり過ぎて別人になれるとすごく怖い。 ————— 119

10. 一言で女性上位主義と言っても、その形は国によって違う。 ————— 133

11. 俺が同じことをやったら即命はない。 ————— 151

12. 昨日まで味方してくれたからって今日も味方してくれるとは限らない。 ————— 166

13. 問題とは順に片付けていくべきものだが、山と積まれるとうんざりする。 ————— 183

14. 平穩に暮らしていると忘れがちになるが、世界は簡単に変

わったりしない。

211

15. 秘密というものは墓まで持って行くのが非常に難しい。

237

16. 鳳鈴音を初めて見た時、同級生の女子に右ストレートを叩き込んでいた。

257

17. このご時世に女が男へ求めるものは優しさと癒やしだ。

286

18. 一人の男を巡って争う二人の女。実に見苦しくて美しくない光景だ。

307

19. 才能の一言で片付けられて嬉しい人間などそうそういないだろう。

330

20. 相手と仲良くするにはまず共通の敵を作れ。

354

21. どこまでやれば準備できたと言えるのだろうか。

376

22. 理想的な勝ち方とはどういうものを言うのだろうか。

394

23. うまくいきそうかどうか、始まる前から分かることもある。

422

24. 勝てば勝ったで負ければ負けたで常に問題という厄介事はやってくる。

446

25. 素直に吐き出した方が気は楽になるが、そうしない方がいい場合もあると思う。

464

26. うまくいっているように見えたら見えたで不安に思ってしまった。

482

27. 有名税を払わなかったらその資格は剥奪されてしまうのだろうか。

508

28. 何かを決断するというのはそれ以外の可能性をゼロにする

508

ということだ。

29. 世の中には人の邪魔をすることが生きがいの神様が絶対にいると思う。

30. 何かを変えろというのはそれだけで難しい。

31. きつと、俺の中には予感があったのだろうと思う。

32. 逃げられないというのは本当に気が滅入る。

二巻 余波と転入生とタツグマツチ

1. IS発明者篠ノ之束

2. 外部への影響

閑話 ある女生徒の話

3. 内部への影響

4. 反省会

5. 逃亡

6. 反発

7. 解決への道すじ

8. 和解

9. 旧友との再会

10. 面会 Round 1

11. 面会 Round 2

12. 面会 Round 3

13. 平穏な一日(午前)

14. 平穏な一日(午後)

15. 平穏な一日(夜)

16. 転入生

17. 酢豚とサンドイッチ

| | | |
|-----|-----------------|------|
| 18. | フランスとドイツの専用機 | 1056 |
| 19. | タッグマッチのレギュレーション | 1082 |
| 20. | 自分のやるべきこと | 1106 |
| 21. | パートナー決めを巡る諸々 | 1135 |
| 22. | お届け物 | 1170 |
| 23. | 計画 | 1197 |
| 24. | 『嫁』 | 1223 |
| 25. | 各クラスの動向 | 1253 |
| 26. | タッグマッチの組み合わせ | 1279 |
| 27. | 噂の真相への足がかり | 1308 |
| 28. | 噂の真相へと至る過程 | 1322 |
| 29. | 真相からタッグマッチへ | 1337 |
| 30. | タッグマッチ一日目 難題 | 1363 |
| 31. | タッグマッチ二日目 暗躍 | 1400 |

一卷 クラス代表決定戦とリーグマッチ

1. カモがネギ背負ってやって来た。

カモがネギ背負ってやって来た。

それがセシリア・オルコットに対する俺の感想だ。

生まれの良さそうな縦ロール金髪、釣り上がった気の強そうな目、初対面の相手に対する上から目線の物言い。

嫌になるくらい現代の典型的な女性上位主義者の態度だ。

つまり噛ませ犬にはもってこいだ。

「ちよつと待った、代表候補生って何？」

しかし我らが織斑一夏は、そんなオルコットの自己紹介に対して少しも物怖じしない。それどころか斜め下の返答をしてのけた。

遠巻きに様子を眺めていたクラスメイト達は、もちろん全て女子だが、何言ってるんのこいつ？ という顔で見ている。

確かに一夏は最初の授業でISについて全く勉強してきていないことが発覚した。だが、だからといって堂々と知らないと言ってるのけられるのは一夏の美徳なんだろうかどうかどうなんだろうか。

「し、知らない!? わたくしのことを知らないどころか、代表候補生という単語すら知らない!」

オルコットもまさかそう返されるとは思っていなかったのだろう。よろめいて額に手を当てる。

一夏はそれを見て軽く引いている。きっとそこまで言われることなのかとも思っているに違いない。そこまで言われることなのだが知らぬは仏、いつだって無知は強い。

「読んで字の通りじゃないの？ 国か何かの代表の候補」
「なるほど！ 言われてみれば確かにその通りだ！」

とはいえあまり一夏をバカ呼ばわりはされたくはないので俺は助

け船を出す。そんな大げさな反応しなくてもいいと思うが、ここは織斑一夏は素直な人間だと周囲が思ってくれるのを期待することにする。

「もしやそちらの方も知らないのですか？　はあ……やはり男性というの自分の興味ない事柄に対してはまるで見向きもしないのですわね」

オルコットが呆れ混じりにわざとらしくため息をついた。ISに関することなのだから知っていなければまずいと思うが、勝手に納得してくれたのならわざわざ藪をつつくような真似はしない。

「うん、代表候補生については分かった。で、その代表候補生が俺達男子に何の用だ？」

あ、さらつと巻き込まれた。オルコットは一夏しか視界に入っていなかったようなのだが。

「そ、そうです、わたくしは代表候補生で、言わば……そう、エリートなのです。ですからそのエリートであるわたくしがISの操縦について教えてさしあげてもよいのですよ？　何しろわたくしはこのIS学園の入試で唯一教官を倒したほどの腕前ですから」

女性上位主義者がさっそく男にケチつけに来たのかと思ったが、初対面でそこまでするつもりではなかったようだ。

むしろ訓練で実際にボコボコにして嘲笑ってやろうとかそんな感じなのだろう。

男であるというだけで罵倒してくるよりはまだマシだろうか。

個人的にはそっちの方が一夏の今後のためにもありがたかったのだけれど。

「ん？　入試でなら俺も教官倒したぞ、一応」

「はーん？」

一夏の返しに周囲がざわめく。

それはそうだろう。出会って数時間とはいえ、一夏の態度を見ていればたまたまISを動かさせただけのど素人にしか見えないのだから。

入試ではISの実技試験があり教官を相手にしてどの程度ISを動かすことができるかを測られた。

大抵の受験生にほとんど初めて触るISで教官に勝つことなど普通は不可能である。

俺は逃げまわった挙句ISのエネルギー切れで終わったし、他の受験生も似たようなものだったに違いない。

もし勝てるとしたらそれなりの操縦経験があるか、あるいは自分専用の優れた機体を持っているか。

代表候補生ということからオルコットは後者、いや両方だろうか。

「そんな……教官を倒せたのはわたくしだけだと……」

「それは女子の中ではつてことじゃないか？ とはいっても俺も実力で勝ったというよりは結果的にだったけどな」

お、これは好感度高いかもしれない。最初の授業で情けない態度を見せて、一夏の評価が初日から少々下降気味だった。だが、今周囲の女性陣が感心した顔をしている。

自慢の種にしたオルコットに対し、一夏は謙遜して見せた。対比としてどちらが好ましいか態度かは明らかだ。日本人的かもしれないが、少なくともオルコットの力をひけらかして相手をなじる態度よりは断然いいと思う。

そしてこういうことを意識せずナチュラルにやっつてのけられるのが織斑一夏であり、不意打ちでそうした行為に触れた女はいつの間にか一夏に惚れているのが日常だった。

「な、納得がいきませんわ！ 専用機もなしにいったいどうやって……！」

「どうやってと言われても……」

詰め寄るオルコットに困惑しきりな一夏。

素直に言っつてやればいいのと思っつたが、相手を慮っつたのか一夏は言葉を濁す。

結局オルコットの攻勢は、次の授業のチャイムが鳴り担任である一夏の姉、織斑千冬先生の登場まで続いた。

IS（インフィニット・ストラトス）

天才・篠ノ之東博士が若干十四歳にして開発したマルチフォーム・スーツ。

たった一機で既存の軍隊を相手にできる兵器は世界の軍備のあり方を変えてしまった。

ISがあれば戦車も戦闘機も必要なくなると判明し、軍事費削減の声の下世界各国はこぞって軍備の主力をISに乗り換えるという大変化が起こる。

そしてそれはただでさえ女性中心となっていた世の中において、男性の地位低下に拍車をかけた。ISは女性にしか扱うことができなかったのだ。

元々男という存在は何十年にもわたって人口が減り続けており、今ではもう人口比で三割を下回っている。減るに従って年々社会における活躍の場を失っていた。

そんな折に、男はISを動かすことができない、つまり男は女よりも劣っているのだ、という女性上位論が唱えられるようになり、いよいよ男の地位は地に落ちようとしていた。

そして今や、女性だけで子供を作ることのできる技術があれば男性の存在は不要であろう、とまで言われてしまうようになっていく。

ところが織斑一夏はその現状を覆してしまう。

今からほんの二ヶ月前、なぜかIS操縦者育成の場であるIS学園の入試会場に迷いこんでしまった一夏は、こともあろうにISを起動させてしまった。

ISは女性にしか扱えないという大前提をひっくり返してしまったのだ。

当然世界中は大混乱に陥り、世界各地で男性のIS適性の検査が一斉に行われる。

そしてわずか三名ではあるが、一夏以外にも男性適合者が見つかる。男性にもISを使える可能性が決定的となったのだ。

だがそれ以上は見つからず、今のところ一夏や俺を含めて世界に四人、男ながらISを動かすことができると言われている。

それが一ヶ月前の話。

男性適合者は各国所属として保護されることとなり、IS適合者であると発覚してしまった俺も日本政府の保護下に置かれるはずだった。

しかしそこで他国の横槍が入る。すなわち、日本が一夏と俺の二人も所属させるのは不平等だという抗議だ。

当然日本政府は発見した国の保護下に置く決まりだと主張するも多勢に無勢、世界中が混乱のさなかにあったこともあり、先に見つかった一夏が日本所属、俺は暫定的にISの大元締め国際IS委員会の預かりとなった。

今後のことは誰にも分からず、俺と一夏はとりあえずとばかりにこのIS学園へ放り込まれて今に至る。

「では授業を始める前にクラスの代表を決めようと思う」

「代表？ ああ、オルコットってクラス代表の候補だったんだな」

一夏が笑顔でオルコットの方を振り向くと同時に、一夏の頭へ担任一夏姉の持つ出席簿が縦に振り下ろされた。

一夏の席は教室中央最前列、つまり教師姉の手が届く至近距離。

鈍く重い衝撃音が教室に響き渡る。

「つてえな！ 何すんだよ千冬姉！」

「学園では織斑先生と呼べ」

織斑千冬先生、女性としては長身でスーツ姿が凛とした一夏の姉は、鋭く冷ややかに一夏を見下ろした。

対する一夏は相当脳天にきたらしく、本気で痛がっている。本来なら笑い声のひとつでも起こる場面なのだろう。だがあまりに高速の一撃だったためクラスメイトは息を呑み、教室は静まり返っていた。

あれは絶対に喰らいたくない、おそろくこの瞬間みんな心を一つにしたと思う。

「オルコットは母国の代表候補生だ。これから決めるのはこのクラスの代表だ。先程の授業といい無知にも程がある」

織斑先生は顔色一つ変えず吐き捨てる。そこに弟へ対する容赦な

ど一切なかった。いや、もしかしたらこの手の人は人前ではむしろ家族の対して厳しく行くのかもしれない。

「あ、あの、クラスの代表とはどんなことをするんでしょうか?」

勇気を振り絞ったのか、それともこの空気に耐えられなかったのか、少しの間があつてクラスメイトの一人がおそるおそる手を上げた。

「すまないな鷹月、無知蒙昧な馬鹿のせいで話がそれてしまった。クラス代表とは要するにクラス委員のことだ。普段はクラスをまとめ、行事のある際はクラスの顔として行動する」

「一般的なクラス委員長のことだと考えてよいでしょうか」

「基本的にはそうだと思ってくれていい。ただし行事の際はクラスの代表として人前に出ることになる。例えば来月にあるリーグマッチだな」

「リーグマッチ?」

学園規模の行事か。一夏IS学園デビューの舞台の予感がする。

「一言で説明すれば今年の新入生のお披露目の場だ。クラスの代表同士がISを着て一対一の模擬戦を行う。一年五クラスの総当り戦だ」
それならばもう一夏を華々しく活躍させるしかない。

「それは責任重大ですね……」

質問した鷹月さんはちよつと嫌そうな顔をしている。普通の学校ならきつと鷹月さんのような人が委員長を努めるのだろうが、IS学園の場合は大分事情が違いそうだ。

躊躇してしまうのも無理はない。

「最低限の意味は理解したな? では決めるとしよう。意見のある者はいるか?」

最低限とかまた地味に気になる言葉を発しながら、織斑先生が教室を見渡す。

横目で見るとクラスメイト達もチラチラと周囲の様子を窺っている。だがすぐに沈黙は破られた。

「はいはい! 織斑君がいいと思いまーす!」

わりかし能天気な声が教室に響いた。よくやった。

「ほう、相川、その理由は？」

「え？ や、やっぱりこのクラスには男子がいるから男子の方がいいんじゃないかと……」

ところが最初の威勢はどこへやら、織斑先生に一瞥されただけでその相川さんはひるんでしまったようだ。

できればもうちよつとがんばって欲しかった。それでは俺まで当てはまってしまう。

「わ、私も織斑君がいいかと……」

「私も……」

「だよね！ やっぱり織斑君がいいよね！ なんとたつてかつこいいし！」

控えめではあるも周囲の賛同に、相川さんが復活した。

そして次第にその空気が教室に広がっていく。一夏がいいと思っ
ている人、自分になりたいなくて生贄を差し出そうとしている人が大
多数のようだが、数名不満そうな顔をしている人もいるか。

「ちよつと待て！ 男なら俺の隣にもいるだろ！」

当然その筆頭は声を荒げる。まあそれはそうだろう。

「でもみんな一夏がいいって言ってるし、一夏がやればいいんじゃないかな」

だがもちろん俺はこの空気に乗る。この際数と勢いで押し切つてしまえ。

「いやいや、俺ISのこと全然分かってないし、さっきの授業でお前の方が勉強してるって分かったし、お前の方が適任だよ智希（ともき）！」

クラス代表などやりたくない一夏はしつこく食い下がる。顔からして本気で嫌がっている。

だが元々一夏しかいないと俺は思っているので引き下がるような真似は当然しない。

「入学してすぐなんだからみんな大して変わらないって。それよりもクラスの代表なんだから、みんなに支持されてる人が出るべきだと思うよ？」

俺はあえて笑顔で返す。必死な一夏、笑顔の俺。学生として空気を読めばどちらに付くべきかは明らかはずだ。

ちらりと周囲を見てみるともう一夏でいいや的な空気が漂っている。

「そんなことねえよ！ クラスの代表なんだから俺みたいな素人を出しちやダメだろ！ ISに詳しいとか人を纏められるとかそういう人がなるべきだろ!?!」

元々空気を読まない男だけに流れに逆らうのは得意なようだ。やりたくない一心でらしくない正論を使ってまで反攻を試みるが、残念、もはや大勢は決しているのだ。後はとどめを刺すのみ。

「知識はみんな大差ないし、一夏なら間違いなくみんなを纏められる。何も問題はないね。織斑先生、多数決で決めていいですか？」

織斑先生は眉を上げて俺を見下ろす。相川さんは怯えたが俺は元々知っているのもあり、そこまで怖くはないので真っ直ぐ見返す。いややっぱり怖かった。

「いいだろう、では一応聞くが他に立候補もしくは推薦はいるか？」

「はい！ わたくしが！」

間髪入れず声上がる。こんな場で空気読めないのは誰だと振り返くと、それはオルコットだった。

女性上位主義者がここで出て来たか。

「やる気もない人に押し付けるのはどうかと思いますわ！ それに知識ならわたくしは十分にありますし、ISも専用機があります。母国の学校でもリーダーを努めておりました。わたくしの方が適任です！」

まずい、本人やる気だと嫌がる他人に押し付けたくない良識派がそつちに流れてしまう。

「でもこのクラスの一番の特徴は男子がいることだし、クラスの外の人達も気になると思うよ。男子が前に出た方がいいんじゃないかな？」

「だったらお前もそうだよな！ はい甲斐田智希を推薦！」

待つてましたとばかりに一夏が手を挙げた。俺に向かつてして

やったりの顔をしているが、甘い。どっちでもいいならかつこいい方に投票するのが女という生き物なのだ。ここでわざわざ俺の方に投票する理由などない。

「他にはいないか？　では決を取るとしよう。山田先生、黒板に記録をお願いします」

「は、はい。投票用紙を作りますか？」

呼ばれたのは副担任の山田先生。短髪で眼鏡をかけていて、何より抜群に存在感のあるスタイルだ。おそらくこのクラスで織斑先生含めても及ぶ者はいないだろうという次元にある。

であるのだが、朝から今まで喋る時以外は存在感を微塵も感じさせることがなかった。ステルス機能が搭載されているのかそれとも忍者の末裔なのか。自然と周囲を威圧する織斑先生とは実に対称的な姿だと思う。

「いやいい。挙手で決める。この程度でわざわざ無記名にする必要などない」

「了解しました。では正の字で書いていきますね。ええと、織斑一夏……」

「では織斑一夏がいいと思う者」

手を上げつつ周りを見るとパラパラと手が上がっていた。これは、意外と少ない。相川さんは別に声を出さなくていいと思う。

黒板に書かれた正の字は三つもなかった。たったの十三人……このクラスは三十二人だから半数もない。

「ふむ、次にオルコットがいいと思う者」

急いで上がった手の数を数える。よかった、半数はなさそうだ。一夏と同じくらいか。

黒板には正の字二つに三本、十三人か。一夏と並んでしまったようだ。

「最後に甲斐田がいいと思う者」

俺に投票するどっちつかずは誰だと教室を見回す。

威勢よく手を上げている隣は置いておいて、ああ、篠ノ之箒さんか。この人は分からないでもない。

そして他に四人ほどいたが顔を覚えておこう。この人達がキャスティングボードだ。

制服のサイズが合ってなくてやたらと袖余ってる人なんかは特に忘れなさいそうだ。

黒板には正の字一つに一本。

「織斑とオルコットが並んだか。さてどうするかな」

「二人の決選投票でいいと思います」

「これが通れば勝ちだ。俺に入った票が一票除いて一夏に流れる。」

「そんなの納得できませんわ!」

「誰がお前の思惑に乗るか!」

さすがにそれくらいは誰でも分かるか。

「やる気のない方が代表になるのはおかしいですわ!」

「やる気のある奴が代表になればいいじゃないか!」

まずい。このままだと二人の利害が一致してしまう。

「それなら実力で決めるのはどうでしょうか? リーグマッチのこともあるし例えばISの模擬戦でとか?」

二人が気づく前に話をそらす。うまくいけば二人とも乗るはず。

「模擬戦ですか?」

「はあ!? 俺が勝てるわけないだろ!?! ……いや、それでいいのか?」

一見、お互いの得になるように見えるが。

「まあ……わたくしが男性ごときに遅れを取るとも思えません……」

「そうそう……男ごとき?」

わざわざ煽る必要もなく、あっさりオルコットが引つかかってくれたようだ。

「ええ、ただISを動かせるだけの男性ごときと代表候補生のわたくしでは勝負にすらなりませんし」

「は? いや別に俺が勝てるとは言わないけどそれは言い過ぎじゃないか?」

「はい? 言い過ぎも何も事実ですわ」

「いやいや、やってもいないのに事実とかないだろう?」

勝手にお互いがヒートアップを始める。

周囲はこいつら何やってんのという目で見つめている。

「と言われましても客観的な事実ですわ。わたくしは三ヶ月前から専用機を扱っておりますので、そもそもISに乗って間もない織斑さんと比べられても困りますわね」

「たった三ヶ月じゃねえか。一年二年乗ってるならともかくそこまで差はないだろ」

「たった？ はあ……何も知らない相手との会話は疲れますわ」

「エリートだとか威張ってるからどれだけすごいのかと思えばその程度かよ。なんだ、この分なら正直俺でも勝てそうだな」

火に油を注ぐとはきつとこういう状況を言うに違いない。

ふと視界の端で忙しい動きがあるなど目をやると、山田先生が珍しく存在感を出しておろおろと揺らしていた。

対して織斑先生は直立不動で目が超怖い。一夏に対してか、あるいは両方にか。

「はあ!? 言うに事欠いてそのようなことをおっしゃいますの!?! いいでしよう。それならばつきりとした現実を持って証明して差し上げましょう。決闘ですわ!」

「上等だ!」

オルコットが一夏を指差し一夏が胸の前で拳を握る。

ドラマのワンシーンみたいだ。

「結論が出たようだな。では模擬戦の勝者がクラスの代表になるものとする。模擬戦は……そうだな、一週間後としよう」

すぐ決めるのかと思いきや意外と先の話だった。とはいえ今からと言われたら引き延ばそうと思っていたので、むしろ好都合だ。

「わたくしはいつでも結構ですわ」

「なんでそんなに先なんだよ千冬姉?」

「織斑先生と呼べ」

再び一夏の頭に出席簿が振り下ろされる。もちろん縦に。

悶絶する一夏、ドン引きのクラスメイト。オルコットも我に返ったようだ。

「織斑に対する救済措置だ。一週間でせめて勝負になる程度には鍛えておけ」

「痛ええええ……！ 別に俺は……！」

そこまで差があるのか。だが一夏には。

「まあまあ、そろそろ一夏にも専用機が届くんだしちようどいいと思うよ」

そう、日本国所属となった一夏には日本の企業からISの一夏専用機が提供されることになっている。

一週間後というのはきつと専用機が届く頃なのだろう。

模擬戦を提案した時点で、俺は専用機のことを考慮に入れていた。

技術では劣っていても最新の機体の性能があれば勝負になると踏んでいたからこそその提案だった。

「それもそうか……首洗って待ってろよ」

「それはこちらの台詞ですわ」

二人は不敵に笑い再び火花を散らし合う。

それでひとまずこの場は収まるかに思えたその時。

「ああ、織斑の専用機は早くても二週間後になるだろうからおそらく間に合わない。訓練機の打鉄でも使え」

織斑先生が爆弾を落とした。

「え？」

思わず口からこぼれる。

織斑先生は一瞬口の端を上げた後無表情に戻し、一夏に向かって言い放った。

「何、訓練三ヶ月程度の相手には余裕で勝てるのだろうか？ それなら多少機体の性能に差があったからといって大した問題ではあるまい」

ああ、一夏は姉の尻尾まで踏んでしまっていたのか。

教師である姉も当然IS乗り。売り言葉に買い言葉だとしても、一夏は初心者立場でIS訓練者を侮辱してしまっていた。

だから姉ではなく、教師として何も知らず調子に乗っている生徒に現実を見せつけるつもりのようなのだ。

一週間の間を置いたのは温情、もしくは挑発したオルコットに対す

るバーター的なものか。

いや、十倍以上の訓練時間の差を実感させるためかもしれない。何にしても、一夏が著しく不利であることに変わりはなかった。

「ちえっ、まあいいさ、それでやってやるよ」

分かっているのかいないのか、きつと分かっているまいであろう一夏は不承不承頷いた。

オルコットは改めて勝ちを確信したらしく笑顔だ。

これは、どうすれば一夏を勝たせることができるだろうか。

「ああ、そういえば決まるまでクラス代表の代行が必要だな。甲斐田、お前がやれ」

「は？」

不意打ちの指名に反射的に織斑先生を見上げる。模擬戦のことを考えていて完全に虚を突かれてしまった。

「別に大した仕事もない。点呼を取ったりクラスの雑用をする程度だ。一週間程度なのだからそれくらいやれ」

無表情に見えて目の奥が笑っていた。全部お見通しか。模擬戦の提案をした時点で黒幕扱いされても仕方ないと言えばその通りだが。

そして余計なことを言い出した罰が一週間の雑用ということか。

やられた、この人を甘く見ていた。

「返事はどうした？」

「了解しました」

笑顔を作って答える。参りました、でも次は負けませんよという意思表示。

俺がIS学園でやろうとしていることがこの人の意に沿うものではないことは最初から分かっている。

他でもない織斑千冬先生の弟一夏に関する話だ。

織斑先生はこのIS学園で弟の一夏を真っ直ぐに育てようとしているのだろう。

これは慢心以前に何も理解していない一夏をまず谷底へ叩き落として、まず一夏の目を開けるところから始めるつもりだ。

もちろん一夏の人生を長い目で見ればそういう挫折も必要なのか

もしれない。

だが俺としては一夏をしょっぱなから躓かせる気など毛頭ない。

それどころか常に階段を登り続けてもらおうとさえ思っている。

では英雄として輝くための第一歩に、まずは織斑一夏にハーレムを
実現してもらおうか。

2. 美人であろうとそうでなかろうと怖いものは怖い。
い。

美人であろうがそうでなかろうが怖いものは怖い。

これがもし自分に向けられていたらどれほどのものだらうと思う。
その視線は俺を通過して隣の無神経男へと突き刺さっていた。
少しも動じていないのはさすがは我らが織斑一夏と言うべきか。
今この男の頭の中は昼飯のことしかないに違いない。

「おい智希メシ行こうぜメシ！ 学食楽しみにしてたんだよ俺！」

先生達が出て行くと同時に教科書をしまった一夏は嬉しそうに俺
の方を向いた。

もちろん自分に向けられた視線などお構いなしだ。

その毛の生えた心臓には時々羨ましくさえなる。

もちろん俺も他人に見られること、微妙な視線を受けること自体に
は慣れている。

男としてこの日本に生まれてしまった以上、一生偏見の目は付きま
とう。

何しろ日本は世界でも有数の女性上位主義国家であり、また少数の
男性の在り方に折り合いを付けられていない社会でもある。

男なしで子供を作る研究の最前線を突き進み、果ては男性不要論ま
で唱えられてしまっていたのが少し前までの日本の社会だった。

ところがその研究はどうにもうまく行かず、欧米は既に男性と共存
する方向に舵を切り替えた。

日本は研究の最前線を行っていたこともあり後ろ髪を引かれて方
向転換できず、さりとて研究がうまくいかないのですそのまま突き進む
こともできず、思想だけが残ったまま宙ぶらりんな状態に陥ってし
まっていた。

男を馬鹿にしておきながら子孫繁栄のために男を必要とするという矛盾に嵌まり、世界の失笑を買って反面教師になってしまっているのが今の日本である。

だから俺も男として見られる視線は気にならないのだが、今俺の横から飛んでくるレーザーのように鋭い視線はその類のものではないのでどうにも無視できないでいる。

それは愛憎の入り混じった視線とでも言えればいいだろうか、実に居心地の悪くなる種類のものだった。

「どうした智希？ 腹減って目が回りそうなのか？」

俺の微妙な顔に気づいた一夏がレーザー視線など物ともせず俺の顔を覗き込んできた。

きつと一夏自身はそういう種類の視線も受け続けてきたのだろう。何しろ出会う女全てを虜にしていく男だから。

俺は答えず、自分の顔を一夏とは反対側に振って一夏の視線を俺越しの向こう側へと動かした。

一夏の視線を向けられた側、長い黒髪をリボンで結んだポニーテールの女生徒は、自分の方を向くとは思っていなかったのか目を丸くする。

一夏はようやく合点がいったようで、恐る恐る彼女の名前を呼んだ。

「箒……でいいんだよね？」

およそ六年ぶりの再会は感動的でも何でもなく、実に締まらないものになったようだ。

「分かっていたのならなぜ知らない振りをした？」

「だってお前自己紹介の時一瞬で終わらせて有無を言わせない空気全開だったし、同姓同名ってこともあるのかなあと……」

どの口から空気を語るのかと思いつつ白身魚のフライを頬張る。

さすがは国の金が大量に注ぎ込まれたIS学園、学食の料理一つにしても材料もいい物を使っているようだ。これを外で食べたならこん

な値段では済まないだろう。

「こんな名前そうそうあるか！ だいたい篠ノ之という苗字の時点で分かれ！」

「いやまあその通りだけど……なんかお前よそよそしかつたし……」

基本はマイペースを貫く一夏だが、一旦自分のペースを崩されると中々立て直しができない。

篠ノ之さんの攻勢に対してしばらくは守勢のままだろう。

相当に鬱憤が溜まっていそうな篠ノ之さんの勢いはとても止まりそうもない。

「ねえねえ甲斐田君、ここいい？」

声が出た方を向くと三人の女生徒がお盆を持って立っていた。見覚えのある顔だったのでクラスメイトだろう。

「別にいいけど、ええと……」

「谷本ですっ！」

「すぐには覚えられないよね、鷹月よ」

「私の名前は布仏本音つて言うんだよ」

鷹月さんには覚えがある。クラス代表のことを織斑先生に質問してた人だ。

それに最後の袖余りまくりのも……というかこの三人、さつき俺に投票した連中ではないか。

この三人が一夏へ投票していれば過半数取れて自然に一夏をクラス代表にできたのに、実に余計なことをしてくれた。

天邪鬼な性質かもしれないので今後は警戒しておこう。

「いったただきまーす！」

谷本さんの威勢のいい声に釣られて横目で三人の食べるメニューを見る。

カツ丼に俺と同じB定食に一夏の選んだA定食。

見比べて見ると気持ち量が俺よりも少ない気がする。

食堂の人が気を利かせてくれたのか。よく見れば一夏のA定食も量が多い。

その一夏は篠ノ之さんの説教から逃げるかのように、一心不乱に箸

を動かしていた。

「織斑君と篠ノ之さんって知り合いなの？」

と、一夏にはなく俺に鷹月さんが聞いてきた。

そこは一夏本人に聞くべきだろうに。一夏に話しかけるチャンスだぞ。

困っている一夏に助け舟を出して好感度アップ狙えたのに、もったいない。

何のために俺がチラチラと助けを求め続ける一夏の視線を無視してきたというのか。

やはりまだ初日では一夏への好感度が足りないようだ。

「幼馴染だつてさ。おりむら、しののの、まあそういうことだよね」

「やっぱり篠ノ之さんってそうなんだ……」

篠ノ之さんは自己紹介の時一夏にすら有無を言わせないオーラ全開だったため、誰もが気になりつつも聞けないでいた。

鷹月さんも理解したように、篠ノ之箒は、天才にしてISの生みの親、篠ノ之東博士の実際の妹である。

そして篠ノ之東博士は織斑一夏の姉千冬先生の大親友。

弟一夏と妹箒がお互いをよく知っているのは普通に納得できる話だ。

「へー。織斑君たじたじだねー。今度聞いてみよ。それよりさ、どうだった？ IS学園初日は？」

「へ？」

それよりというのは、まさか一夏の話がもう終わりなのか。そこはもうちよつと突っ込んで聞いてみるところではないのか。今度ではなく今聞けば済む話だろう。本人が目の前にいるのだし。

というかどうして誰も一夏を助けようとしない。まさか説教する篠ノ之さんがそんなに怖いのか。

「まだ半日だけどき、女子校に来たようなもんじゃない？ やっぱり肩身狭くてつらいのかなーって」

「私は楽しかったよ〜」

制服の合っていない布仏さんが箸持った手を上げて、ピントの合っ

てるんだか合っていないだか分からない発言を挟んだ。

さすがにご飯食べる時は袖をまくるのか。

「女子が多いのは今に始まったことでもないけど……意外と普通だったかな?」

「意外と?」

そう、意外と。

「何何? どんなのを想像してたの?」

「いや、クラスのみんなの態度が普通だなんて」

「もしかして男子だからいじめられるとか思ってた?」

ISと言えば世界における女性上位主義の象徴。それを操る女はどんな連中だと問われれば自然な話だと思うが。

「確かにオルコットさんみたいな人見ちゃうと女子がみんなそういう風に思えるのも無理はないか」

「実際いるしねああいう人」

「みんな仲良くすればいいのにね」

ふむ、この三人は少なくとも男というだけで突っかかってくるような連中ではないようだ。

顔だけで一夏に突撃しないという点でもいくらか分別があるのかもしれない。

「ちよつと考えれば分かることなんだけど、世の中男子の方が少ないんだから大事にしないといけないよね」

「だいにだいに」

「そうそう、いじめとか論外だね。むしろ守ってあげないと」

ああ、そういうことか。むしろナチュラルに女の方が上だと思ってるのか。

か弱く数の少ない男は保護すべき存在だと。

こういうのは悪意のない分かえって厄介かもしれない。

「その通りよ。だからこそ今いじめられて困っている織斑君を助けてあげないとね!」

とその時、タイミングを見計らったかのように別の声が出た。

声のした方を見ると、外に跳ねた癖毛の女生徒が得意気に立って

た。

その場の視線を集めた女生徒は、決めポーズを取るかのよう胸の前で手に持った扇子を広げる。

『いじめかつこわるい』と扇子には書いてあった。

「だよな！ 誰も助けてくれないのはやっぱおかしいよな！」

「ちよつと待つてください！ 私は別に一夏をいじめているわけでは……！」

待ち望んでいた救いの手に歓喜の声を上げる一夏、予想外な方向からの横槍に動揺する篠ノ之さん。

「お姉さん悲しいわ。白昼堂々いじめが行われてしかも誰もが見て見ぬ振りをしているだなんて……」

女生徒はわざとらしく悲しげな声を出し、顔を背けてよろめくように床に膝をつく。

それから顔の前で扇子を閉じてまた開くと扇子には『沈痛』と書いてあった。便利だな。

「今のつていじめだったんですか？」

「てつきり織斑君が何か悪さして怒られているのかと……」

「かいだーが何も言わないからあれでいいんだと思ってましたよ」

「えっ!? 俺ってそういう存在なの!？」

「待つてください！ ですからこれは決まっています！」

めいめいが自分の思ったことを口にする。甲斐田のイントネーションがおかしい気がした。

床に膝をついた女生徒はしばらく悲しげに肩を震わせていたが、やがて俺の方をチラッと見た。

ああ、俺のリアクション待ちなのか。

「その扇子って便利ですね」

女生徒は盛大に滑って着地失敗した蛙のように床に突っ伏した。

「智希!？」

「甲斐田君!？」

「あはは！ かいだーおもしろい！」

やっぱり甲斐田のイントネーションがおかしい。それでは特撮映

画にでも出て来そうな名前だ。

「あ、ありがとう……？」

女生徒はよろよろと起き上がり、何に対するものか分からない感謝の言葉を疑問形で口にした。

納得がいかないようできりに首を傾げている。

「その扇子便利でいいですね。どこで買えるんですか？」

「えっ!? いや、これは特注だからどこかで買えるものじゃ……」

「そうですか、それは残念だ」

「え、ええ……悪いけどそういうことなの」

一夏がバカみたいに口を開けてこちらを見ている。

いくら一夏がかっこいいといってもそういうのは絵にならないのでやめて欲しい。

「分かりました。じゃあ仕方ないのでそれをください」

「はい!？」

今度は女生徒が口を大きく開けた。

「だってそれって特注だから一つしかないですよね？ だからそれください」

「どうして君にあげないといけないの!？」

「くれないんですか？」

「当たり前よ!」

「なんだくれないのか。この人ケチだな」

「ケチ!？」

「だってそれくれないですよね？」

「どうして私初対面の人からケチなんて言われないといけないの!？」
「でも事実ですし」

女生徒は両手で頭を抱えて頭の上で扇子を開いた。

『困惑』と書いてある。ちよつとおもしろかった。

「お、おい智希……」

「あれおもしろいね一夏。自在に文字を変えられるみたいだ」

「そ、そういうことじゃなくてだな……」

付き合いのある分一夏が最初に再起動した。

他の面々はフリーズしたままのようだ。いや、袖余りの小さい子は相変わらず爆笑しているか。

「ご、ごめん。こいついつもはこんなじゃないんだけど、たまに変なことを言い出す癖があつて……」

「う、ううん。ちよつと、いやかなりびつくりしたけど、大丈夫」

「誰だか知らないけど悪かった。代わりに俺から謝らせてもらう」

「いえいえお氣になさらず……え!？」

今度は女生徒が固まった。

それを一夏は相手が怒り全開にあると解釈したようで、顔の前で両手を合わせて謝罪を続ける。

「ほんとごめん! あいつ別に悪気は……きつとないんだ! そう、いわゆる天然つてやつで!」

一夏の口から出る天然という言葉ほど似合わないものはない。

だが女生徒が言いたいのはそのうちのことではなく。

「知らない!? 誰だか知らない!？」

「えつ? 今初対面つて言つてたよな?」

「た、確かに直接会話するのは初めてだけど……私の事知らない?」

「えつ? もしかして君も有名人なのか?」

衝撃を受けたであろう女生徒は涙目になつてよろよろと後ずさつた。

数秒ほどして精神を立て直したのか両足を踏みしめ、それから右手を上げて力強く一夏を指差す。

「いいわ! 今日はこのへんにしておいてあげる!」

お前はどこの小悪党だと言いたくなる捨て台詞と共に左手で扇子を開いた。

『覚えてなさい!』と扇子には書いてあつた。

「俺!？」

自分を指差して驚愕する一夏を他所に、女生徒は後ろを向いて駆け出し去つていった。

実に見事な負け犬の後ろ姿だった。

「いったいなんだつたんだ……」

一夏の問いに答える声はなく、食堂は騒ぎを眺めていた周囲の爆笑の渦に包まれた。

「あの人がここの生徒会長だと!?!」

「甲斐田君知ってたの!?!」

「だって今朝の入学式で挨拶してたし」

先ほど食堂で自爆した挙句逃げ去った女生徒はこのIS学園の生徒会長だった。

数日後なら怪しかったかもしれないが、さすがに今日の今日では見え聞き覚えがあった。

「挨拶?」

「ほら、在校生代表の挨拶で、女ばかりで大変だろうけどやりにくいことがあったら遠慮なく言っておいて、こっちに向けて言ってた人」

「ああ……ごめん、あんま覚えてないわ。どれもこれも似たような話だったし」

「まあそうだろうと思った。だからこそ向こうはショックを受けたんだろうけど」

生徒会長になるような人だからなのか、派手好きお祭り好きな印象だった。

ただ書かれたものを読むのではなく、壇上でマイク握って動きながらやたらオーバークションしていたあたりが特に。

「じゃあ何か? 智希お前全部かかってやったのか?」

「分かっているとしか、人をおちよくるのが好きそうな人だったからこっちがおちよくっても罰は当たらないかなと思って」

「素で言ってたんじゃないんだ……」

失礼な。初対面の人間に扇子よこせとか意味が分からない。

もっとも、言った本人も意味が分からないのだから、言われた側にはもっと意味不明だっただろうけれど。

「甲斐田君ってそういうキャラかと思った」

「どういうキャラか分からないけど、そっちの方がいい?」

「私達には絶対に止めて。生徒会長はともかく」

鷹月さんに全力で拒否された。だが生徒会長にはいいのか。

向こうではカツ丼を食べていた谷本さんが食堂での顛末を身振り手振り交えて熱く語っている。

袖余ってる布仏さんはその隣で爆笑し続けている。いつまで笑っているのかあの人は。

「しかし甲斐田、それなら尚更あれは目上の人間に対してあまり褒められた態度ではないと思うぞ」

隣の席の篠ノ之さんが苦言を呈してきた。

フリーダムな姉を持つと堅物になってしまふのだろうか。姉の篠ノ之東博士は天才過ぎて頭のネジが数十本飛んでしまっていると云われるほど奔放な性格で有名なのだが。

「とばっちりで何故か俺が覚えてろとか言われるし……いや扇子に書いてあったから言われたわけじゃないけど」

今度は反対側の隣の一夏が深くため息を吐く。

元々生徒会長は一夏と篠ノ之さんをいじるつもりだったのだろう。

篠ノ之東の妹と織斑千冬の弟にして男のIS適合者。

生徒会長的な立場の人間でなくとも気になるし、二人と接点を持ちたいと考えるのは不思議なことでもない。

俺によつてファーストインプレッションを意味不明に台無しにされても次を取り付けるあたり、生徒会長はちゃっかり、いやしっかりしていたと思う。

とはいえこの二人は説教を邪魔されたこと、助けが来なかったことを根に持っているようだ。

「いいか、どこかの誰かのように無知であることも失礼だが分かってやるのはもつと失礼な話だぞ」

「次あの人来たらお前が相手してくれよな」

俺に八つ当たりを始めた。

「どこかの無知蒙昧な馬鹿ならともかく、どんな相手であろうと初対面の相手であればそれ相応の敬意をもって接するべきだ。冗談というものは親しき仲に通用するものであってな……」

もしかして篠ノ之さんは説教好きなのだろうか。さりげ……でもなく一夏を罵倒しつつ滔々と語り始めた。

自己紹介では簡潔にして冗長な言葉を好まない古き良き侍のような印象だったが、一夏の時といい喋り出すと長い人だ。

「とうかさ、お前どうして食堂で俺のこと無視して飯食いながら楽しそうに喋ってたりすんの？ お前ってそういう薄情な奴だったの？ 俺お前のこともうちよつと優しい奴だと思ってた」

反対側では一夏がここぞとばかりに食堂での恨みつらみをぶつけてくる。

うん、誰かがお近づきになろうと一夏へ話しかけてくるに違いないと思っていた。

ところが実際は周りから遠巻きに眺めるくらいで、足を踏み入れたのは生徒会長だけだった。

俺の態度が普通だったのもよくなかったみたいだ。もう手が付けられません的な焦りを見せておけばよかったと思う。一夏の要求する意味ではないけれど、反省。

「聞いているのか甲斐田！」

「聞いてんのか智希！」

聖徳太子は十人纏めて聞き分けたそうだが、実際同時にやられると二人も無理ではないかと思う。

こちらとしては特に聞く気もないのでどうでもいいといえどもいいが。

と、そんなことを考えていたら急に二人の喋りが止んだ。

先生でも来たのかと思えば顔を上げると、いつの間にか一夏と篠ノ之さんが睨み合っていた。

「一夏、私は今甲斐田と話をしている。悪いが邪魔をしないでもらおうか」

「箒こそ俺の邪魔すんなよ。今智希と話してんのは俺だ」

どちらも会話などではなく一方的にまくし立てただけではないかと思うが、とうかさこの二人は文句を言えば誰でもいいのだろうか。

もう目に入るものは全部潰すとばかりにお互いをターゲットにしてしまっている。

そうじゃない、そこは意気投合して一緒に俺を責めるところだろう？

敵の敵は味方の論理で同盟を組み、仲間意識を作って仲良くなるどころではないのか。それがどうしてお互いに不倶戴天の敵を見つけた的な顔するような展開になってしまう。

「どうやら先程の話では不十分だったようだな。いいだろう、お前の弱い頭に合わせて分かりやすく説明してやろう」

「ていうかそもそも悪いのは箒だろ？ お前が余計なことしなけりや俺はおいしく昼飯食べたのにさ」

幼馴染という気のおけない間柄な分、遠慮もどこかへ飛んでしまっただようだ。

俺の頭の上で罵詈雑言が飛び交う。

もう誰かが間に入れるような状況ではないよなと思いつつ、一縷の望みをかけて後ろを見る。目の前で手を出さずに出せなくなった鷹月さんが右手を宙に浮かせておろおろしていた。

それから一夏の後ろ、鷹月さんの前の席の眼鏡の子と目が合う。両手を胸の前で握って、がんばれ、という無言のエールを送ってきた。そういうのは一夏に向かってやって欲しかった。

他にこちらへと向けられているのは優しい目、生暖かい目、単純に面白がっている目で、あらぬ方向を見ていて妄想の世界に旅立ってしまったっているのもある。

オルコットはものすごい眼力で睨んできた。

おかしい。俺の計画ではクラスはまず相川さんのような一夏派とオルコットのような反一夏派の二つに分かれ、一夏派からは熱い眼差しが送られ、頬を赤くして一夏に話しかける女子の姿が見られるはずだったのだが。

結局この混沌とした状況は、聖剣シュツセキボの二振りによって終止符を打たれることとなった。

3. 俺の計画がうまくいっていないのはどう考えても俺が悪い。

俺の計画がうまくいっていないのはどう考えても俺が悪い。

今俺は海よりも深く反省をしていた。

もちろん食堂で一夏を放置したことに対してではない。それはだいぶ前に三秒で済ませた。

すなわち、一夏を注目させなければならぬのに俺が目立ってどうする、というごくごく当たり前の事実に対してだった。

目の前では副担任の山田先生がこのISの学園で過ごす上での注意事項を説明している。

それはどちらかというと入学の際に配られた資料の確認のようなもので、特別目新しいことを言っているようではなかった。一夏が初めて聞くかのようにふんふんと頷いていたので、もしかしたら主に一夏に聞かせるためなのかもしれない。

というわけで俺は遠慮無く思考の海に沈むことにした。
なぜあの時食堂で俺は自分が目立つような真似をしてしまったのか。

生徒会長が小芝居を始め俺をその舞台に誘った瞬間、なぜだかこれは台無しにしなければならぬという妙な使命感に駆られてしまったのだ。

彼女ならいいリアクションを見せてくれるに違いないと信じ、そして実際に魅せてくれ、最後は綺麗にオチがつくというこの上ない結末にまで高まった。

負け犬として逃げ去る後ろ姿を見ながら、彼女には間違いなく芸人としての素質があることを俺は感慨深く確信していた。

だがそんなことは端から端までどこからどこまでもどうでもいい

ことで。

助けに入らせるために一夏を放置していたのに、実際助けに入ってきた人を俺が追い払ってどうする、という本末転倒主客転倒一体お前何がしたかったの的自己矛盾な行動を、心の底から反省しなければならぬ。

やはり俺もIS学園に入学して環境が変わり多少浮かれているのだろうか。

オルコットはともかく、クラスメイト達は想像以上に友好的だった。多少女性上位的な感覚は持っているものの、だからといってあからさまに敵意を向けたり嘲笑ったりするようなことはない。オルコットにしても男だからと無条件に罵ってはこなかった。

中学までの扱いとは雲泥の違いで、以前はもつと嫌な視線を浴びたものだった。だがまだ一日ではあるものの、ここではそういう視線を感じない。

とはいえさすがに差が極端すぎるので、きつと織斑先生あたりがこのクラスにはそういう人達を集めたのだろうと思う。

オルコットの時はさあ来たかと思ひ、この手合いが次々やって来るのかと構えていたが、クラスメイト達の雰囲気はむしろオルコットに対して否定的だった。

投票の時オルコットに投票した連中も、オルコットに賛成したというよりは一夏が嫌がっているから押し付けたくないという良識派的な態度に見えた。

ここで生活していく上で結構なことなのは間違いないが、俺の予想とだいぶ違っていたのも事実だ。おかげで拍子抜けと共にかなり俺の計画に狂いが生じてしまっていた。

そもそも、俺はまずここで味方を作らなければならないと思っていた。

女にしか扱えないはずのISを動かしてしまった一夏や俺に対する反発は相当なもので、新聞やテレビでは否定的懐疑的な反応が大きな割合を占めていた。

そんな中女性上位主義の象徴であるIS学園に男が入学するとい

うのは、敵地に突入するも同然だ。まず何より味方を作って足場を固めないことには何もできない、と俺は考えていた。

ところがそんな雰囲気は微塵もなくクラスはのんびりと穏やかな空気だ。

友好的な人とそうでない人を見分けなければと意気込んでいた俺の出鼻はあっさりくじかれてしまった。

肩透かしを食らって気が緩んでいたというのはきつとあるだろう。

だから食堂で余計な悪戯心に従ってしまったのかもしれない。反省終わり。

とはいってもマイナスからのスタートでないことは大いに歓迎すべきことだ。

男に否定的な女子が一夏を前にコロツと態度を反転させてしまうのもいいが、元々好意的であれば一夏への好感度を上げることもやりやすい。

まだ一夏は顔と雰囲気以外でクラスの女子にかっこいいところを見せていないので、これから見せていけば次々と虜にしてくれることだろう。

「はい、ではこれでショートホームルームを終わります。放課後はどこかを見学するもよし、寮でゆっくり休むのもよし、まだ初日ですから焦ることは何もないですよ」

あれこれ考えている間に山田先生の説明が終わった。さてようやく放課後だが何をするか。

やはりまずは一週間後の模擬戦の対策を一夏と考えるのが先だろうか。

「ああ甲斐田、さっそくお前に仕事がある。一緒に職員室まで来てもらおうか」

と思つたら織斑先生直々にご指名を受けてしまった。もしかしてこれから一週間ごき使われ続けてしまうのだろうか。

「そんな嫌な顔をするな。今日は初日でもあるし一時間程度で解放してやろう」

それはつまり日に日に拘束時間が増えていくということなのか。

こんな時にだけ笑顔を見せる目の前の教師が実に憎たらしい。後ろの方からため息が聞こえてるがあの笑顔は邪悪な種類の微笑みだ。思春期の女子が憧れるようなものでは決してないと思う。

「あらら、残念だったな智希。まあせいぜいがんばれよ」

一夏がニヤニヤしながら言う。まだ昼の恨みが残っているのか。

「それはどうも。一夏は放課後どうするの?」

「そうだな、どうするかなあ……?」

瞬間、一夏の向こう側に見える相川さんの目が光った。いや、張り詰めた空気からしておそらくクラス中の女子の目が光ったと思う。

うん、気持ちはよく分かる。だが今日は。

「じゃあ……」

俺は言いながら篠ノ之さんの方を振り返る。篠ノ之さんはハツとして弾かれたように立ち上がった。

「い、一夏! それなら剣道場に行かないか!? 久しぶりにどうだ!」

「箒?」

昼間余計なことをしでかしてしまった俺だが、その結果で一つだけいいことがあった。

一夏の篠ノ之さんに対する態度が柔らかくなったのだ。

「む、昔道場でよくやったではないか。久しぶりに手合わせをしないか?」

「うくん……そうだな、特に予定もないしやるか!」

周囲の時を停止させる魔剣出席簿の一撃を受けた二人は、しばらく悶絶した後でお互いを見て何か通じ合ったかのように笑い合っていた。

そのときにそれまで二人に間にあっただしこりのようなものがなくなったようだ。

きつと昔同じようなことがあったのだろうと思う。

「そそそそうか! それなら行こう! さっそく行こう!」

「いいけどどうした箒? 顔赤いぞ?」

しかし態度が柔らかくなったのは一夏だけで、篠ノ之さんは一夏を意識し過ぎているのだろう、むしろ態度がぎこちなくなってしまうて

いた。

顔が赤く挙動不審な時点で誰にでも分かるが、そういう態度はこと一夏に対してはよろしくない。

一夏の幼馴染を名乗るのならもうちよつと自然にやって欲しかった。

「甲斐田、行くぞ」

「あ、はい」

フオローを入れるか迷っていたら織斑先生に催促されてしまった。できれば側にいたかったが仕方ない。

「じゃあ一夏、後で様子を見に行くかも」

「おう智希、またな。箒、剣道場ってどっちだ？」

一夏に一言かけて立ち上がる。この状態で二人だけにするのは大いに不安だが、一夏の幼馴染の座にいるというポテンシャルに期待しよう。

先生達について廊下を歩きながらふと後ろを振り返ると、篠ノ之さんと並んだ一夏の後をぞろぞろとクラスメイト達がついていっている。さすがに二人きりにはさせてくれないようだ。

と、最後尾にいる女子がこちらを向いて手を振ってきた。鷹月さんと布仏さんともう一人、昼にカツ丼を食べていた誰かが手を振りながら笑っている。きつとご愁傷様とでも言っているのだろう、実に余計なお世話だと思った。

「ふむ、今日はこの辺にしておくか」

別の部屋に移動して小一時間ほど作業をしてから、織斑先生が俺と山田先生に声をかけた。

やったことは書類の整理、並び替え。

周囲には全くそう思われていないようだが、この一夏の姉の本質はズボラだ。頭がよく記憶力も抜群なので本人的には困っていないようだが、実は整理整頓の類が苦手な人である。

去年一夏の家に行った時にその姉のずさんさを目の当たりにし、な

るほどこういう姉だからこそ一夏は主夫を腕を磨いたのかと納得させられたものだ。

きつとこの人は家では一夏、学園では山田先生に頼りきりなのだろう。今年から一夏が寮に入ってしまったて家は大丈夫なのだろうかと他人事ながら心配になる。

「ではお茶を入れてきますね」

山田先生が立ち上がって背伸びをした。

この人の事務処理能力はすごかった。普段はおっとりしているように見えたが、仕事モードに入るとスイッチが切り替わったかのようになってきばきと作業をしていた。

正直俺など全く必要ないように見えたので、やはりこの作業は俺への罰だったのだろう。

「でもいいんですか？ こんな書類を僕に見せて？ 一般の生徒が見ていいようなものじゃないと思うんですけど」

「それを言うならお前の存在自体が機密の塊だ。だが生徒の成績を言いつらして人気者になりたいのであればそうするがいい」

ここまで俺が整理したのは去年の生徒の成績表だったが、確かに見てどうするという程度のもものではあった。

だがそういう問題ではないと思う。

「信用されているのか馬鹿にされているのか、どっちだろう？」

「今のところは半々だな。そこから先は今後のお前次第だ」

教室でとは打って変わって、織斑先生の口調は軽い。

元々顔見知りであり、時期が重なっていないとはいえ同じ施設の出身でもある。

施設で弟一夏と二年弱寝食を共にしていたというのもあり、人としての信用くらいはあるのだろう。

「それで、お前は何をしようとしているんだ？」

と、織斑先生が突っ込んできた。ああ、それが目的だったか。

「それって教師として聞いてますか？ だったらそこまで言われるよなことはしてないと思いますけれど」

「男とはいえISを動かせるだけの素人をクラス代表にしようとする

「ことがか？」

「学園中が気にしてるじゃないですか。一夏なら絵になるしいいと思いますか？」

織斑先生は額にしわを寄せた。どうやら今は教師モードではなさそうだ。

この人は人前にいない時は割と表情豊かになる。微細な変化ではあるけれど。

「つまり自分が目立ちたくないから一夏に押し付けようとしているということか？」

「別に僕のこととはどうでもよくて、純粋に一夏の学生生活を考えるとそっちの方がいいからです」

「智希、それはどういうことだ？」

千冬さんはじつと俺の目を覗き込む。ここで俺が嘘を言っていたら一発でバレるが、嘘ではないので今そういう心配はない。

「だって一夏にも自分の人生を楽しんでもらいたいじゃないですか。今までずっと他人の世話ばかりで青春とか全然できてないですよ」

千冬さんは呻き声を出しそうになり慌てて手で抑えた。さすがにその他人に自分も含まれているのは理解しているようだ。

「基本的に自分のことを二の次にする奴なので、周りが引っぱり出さないと自分について考えないですよね」

千冬さんは口には手を当てて考え始めた。思い当たる節が多いだけに効いている。もうひと押し行こう。

「要するに、他人のことを気にする暇をなくして自分の心配だけさせておこうという話です。いくらマイペースでも人前に出ることを意識すれば嫌でも考えるでしょうから」

「なるほど……意図は理解した」

どうやら納得まではしていないようだ。されようがされまいが俺のやることに変わりはないのだけれど。

「正直、お前達を出来る限り目立たせないようにしようと思っていた」「どうしてですか？」

「男だ女だという話を抜きにすれば、二人ともIS学園の水準にはと

ても及ばないからだ」

「どうということだろうか。」

「二人ともただISを起動することができるだけであって、入試での合格基準には遠く達していない。筆記は言うに及ばず、実技に対してもだ」

「あれ、一夏は教官倒したって言っていましたか？」

「それは……山田君、いい加減入ってきていいぞ」

見ると山田先生がお茶を持って入ってきた。なぜか顔が真っ赤だ。

「入試の時一夏の相手をしたのは山田君だった。相手の自爆を勝利と言えるのならそうだろう」

だからあの時一夏はオルコットに対して言葉を濁していたのか。

確かに勝負であれば勝ち負けは勝ちだから倒しただろうが。

「その……何というかすみません……」

山田先生は顔を真っ赤にして俯いている。

「いや、相手が相手だし怪我させたりしないようにとかでやりづらかったんでしょうから、仕方ない部分もかなりあったと思いますけれど……」

「い、いえ……」

何俺は教師を気遣っているのか。

しかし先方の歯切れが悪い。どうやらそういうことでもなさそうだが、これはきつと突っ込まない方がいいのだろう。

お茶をすすった後話の向きを戻すことにする。

「僕の時は……あんまり相手が近寄って来なかつたですね。気がついたらエネルギー切れで」

「一夏と比べてすんなりとISを装着したから少しはやるかと思っただが、ひたすら逃げ回るだけだったな。余裕で不合格だ」

「駄目ですか」

「お前が女だったらな」

長引いた方が評価にはいいかと思っただけで逃げたのだがあれでは駄目だったのか。他のクラスメイト達はどれほど動けるのだろう。

「つまり恥を晒すだけだから人目につかないようにしておこうという

わけですか?」

「平たく言えばそういうことだ」

相当に舐められたものだ、と言いたいところだが、この人が言うのであればきつとそうなってしまふのだろう。普通は。

「の割には一夏に恥をかかせる気満々ですね」

「お前達が自分の身の程を全く理解していないからだ。こうなれば谷底まで叩き落としてやるから自力で這い上がって来い」

まあ、予想通りではある。

「オルコットさんに一夏は勝てませんか?」

「万に一つの可能性もなく無理だな。今はまだ同じ土俵にすら上がっていない」

「じゃあもし専用機があれば?」

「……お前はその性能を知っているのか?」

「知っていたからこそ模擬戦の提案をしました」

納得したのか千冬さんがため息をつく。

一夏の機体は能力差に関わらず一発逆転を期待できる。

だから小細工をすれば十分に勝ち目があり、一夏ならその期待に込めてくれる。

そういう皮算用をしていたのだが。

「それなら残念だったな。専用機は元々今月中という話だから来週には到底間に合わない」

「まさか引き延ばそうとはしてないですよね?」

「くだらん。奴のために早いに越したことはないのも事実だ」

むしろ引き延ばしをしていてくれたなら縮めることもできたのだが、仕方ない。

訓練機でどうにかする術を考えておく必要もありそうだ。

「了解しました。じゃあそろそろ行っていいですか。一夏とこの一週間をどうするか考えないといけないので」

「そうか、それなら行って来い。明日以降に訓練機を使って自主訓練をしたいというのであれば、山田君に相談するといい。ある程度は融通を利かせてくれるだろう」

「え!? 私ですか!? 放課後の訓練機の申し込みなんてずっと埋まっていますけれど……」

この人全部山田先生にぶん投げてしまった。いいのかそれで。

「ええええと……ど、努力はしますけれど……」

ああ、この人はやつぱり一夏の姉だ。方向性さえ決めてしまえば後はどうとでもなるというこの樂觀性。

問答無用で他人を巻き込んで引き込んでしまう強引き。

そして結果的にどうにかなってしまうという運の強さ。

「あ、もし代わってもらおう必要とかあったら一夏も連れて一緒に行きます。事情を話してお願ひするくらいはやりえますから」

「ぞ、そう!? ありがとう!!」

山田先生の全身から感謝の気持ちがあひしひしと伝わってくる。

同類のよしみだ。できることであればやろう。一夏を連れて行けば割と簡単に話を通せると思う。

といっても今のこちらに他人の心配をする余裕はない。

まずは一夏と合流して作戦会議をしようと思い、俺は剣道場に向かうことにした。

「鬼だ!! 智希この女鬼だ!!」

剣道場に入るとすぐ、一夏が悲痛な叫び声をこちらに飛ばしてきた。

周囲の視線が俺に集まるのを感じる。一体何があったというのか。見ると中央に正座して泣きそうな顔でこちらを向いている一夏と、竹刀を持ち仁王立ちしている篠ノ之さん。

何が起きていたのかは容易に想像がついた。

「誰が他所に目を向けていいと言ったか!」

床に叩きつけられた竹刀の音が剣道場に響く。

自分が叩かれたわけでもないのに一夏は怯えに怯えている。

たった一時間でどれだけ恐怖を植え付けられたのだろうか。

「助けてくれ智希! 昼間は俺が悪かったから!」

必死に助けを求め叫ぶ一夏だが、泣きたいのはこちらだ。

女子にかっこいい姿を見せるどころか、目の前にあるのはこの上なく情けない男である。

壁沿いにいるギャラリィを見ると揃って哀れみの表情を浮かべていた。

教室を出て行く時は恋する乙女だったのに、どうして篠ノ之さんはこんなひどい状況を作り上げてしまうのか。もしかして一夏の情けない姿を晒すことでライバルを減らそうとしているのかとさえ疑ってしまう。

「ええと、篠ノ之さん、ここで何をしてたの？」

とりあえず一夏は置いておいて、元凶の認識を確認することにする。

篠ノ之さんの表情は明確に怒りだ。それも食堂や教室の時とは次元が違うほどに大きな。

「一夏の性根を叩き直そうとしていた」

一夏を憎々しげに見ながら篠ノ之さんは返してきた。

待て、どこをどうしたらそこまで感情をひっくり返せるのか。さっきまで一夏と話ができて嬉しくて仕方ないという顔していたではないか。

「なるほど、それは一夏が真面目にやってなかったから？」

「そんなわけあるか！ 全力でやったに決まってるだろ！」

心外だとばかりに声を張り上げる一夏を、分かっていると頷きながら手で抑える。

一夏が手を抜いたりいい加減なことをするような性格でないのは重々承知している。

問題は篠ノ之さんがそう思っているかどうかだ。

「それ以前の問題だ。しばらく会わない間に一夏は墮落しきって腐ってしまっている。中学では剣道どころか部活さえしていなかったというではないか。であるから今ここで一から性根を叩き直そうと思っただけ」

分かった。これはきつとギャップだ、それも悪い方への。

二人が離れていた六年の間に、篠ノ之さんは理想の一夏を自分の中で育て上げてしまっていたに違いない。

その理想像は世の女性が求める理想の男の姿とはだいぶかけ離れているようだが、どちらにしても篠ノ之さんの中で理想と現実が衝突してしまっただと思われる。

だが折り合いを付けることができず、結果やつてしまったことは、目の前の一夏への八つ当たり。

一夏からすれば実に知ったことではないという話だ。

「篠ノ之さん、ちよつとやり過ぎだと思っうよ」

と、どう説明するかを悩んでいたら鷹月さんが入ってきた。

さすがは委員長気質というべきか、きつとタイミングを見計らっていたのだろう。

「やり過ぎだど?」

「うん、だってできない人に無理にやらせようとしても無理なものは無理だよな? その人に合ったやり方でやらせない」と

「む……」

そういうことじゃない、問題はそこじゃない、と言いたかったがなぜか声に出せなかった。

「そうだよ。というかそういう強さみたいなものって男子に求めることじゃないよね?」

「そうそう。男子に必要なのはやっぱ優しさだよ優しさ」

「篠ノ之さんは自分が強いんだからそれで十分なんじゃないの?」

言いそびれた俺とは対照的に、ギャラリーのクラスメイト達はここぞとばかりに声を上げる。

篠ノ之さんは急に集中砲火を浴びて動揺していた。

「そ、それは……」

考えが纏まらないのだろう、篠ノ之さんは弁解を試みるもそれが形にならず口ごもる。

相川さん他抜け目ない女子は今こそチャンスとばかりに一夏に声をかけたりしている。

待ち望んだ救助を得られた一夏は膝を崩して心の底から嬉しそう

だ。

「い、一夏。その……すまなかつた」

「ようやく冷静になったみたいだな筈。ほんとびっくりしたぜ」

鷹月さん達に説得されたであろう篠ノ之さんは綺麗な姿勢で深々と頭を下げた。

それに対して一夏は笑顔で軽く手を振って別に気にしていないと返している。

一夏は自分の姉他女のヒステリーを受けることがしばしばで、女とはそういうものだと思われているためか相手が謝れば根に持つようなことはない。今日の俺のように謝らず流し続けるとしつこいが、そのあたりは基本さっぱりしている。

一夏があつさりと言ひ許してしまったので場は一転、和やかな雰囲気になった。

このあたり女子はさすがというべきか、クラスメイト達は笑顔で篠ノ之さんに話しかけたり剣道の腕を褒めたりして篠ノ之さん一人を悪者にしないようにと気を遣っているようだ。

きつと納得はしていないであろうが、篠ノ之さんもあえてこの場を乱す発言をするつもりはなさそうだ。

「どうしたの甲斐田君？ 何か難しい顔をしてるけれど」

「どうやら今の気分が顔に出ていたらしい。横から鷹月さんが話しかけてきた。」

「んー、一夏も大変だなと思って」

さすがにこの空気を乱すつもりもないので適当に返す。

「甲斐田君は篠ノ之さんとは幼馴染じゃなかったの？」

「一夏とは中学からだから違うよ。篠ノ之さんはその前に引っ越したそうだし」

「そうなんだ。えっと、私寮で篠ノ之さんと同じ部屋なの。だから何かあったら言っただけ」

そのうちまた篠ノ之さんが一夏に何かやらかしそうだからという話か。

委員長気質も大変だなと思うが、好きでやっているのなら他人がと

やかく言うことでもない。

そのときはよろしく、と笑顔の鷹月さんに返して、目の前で脳天気
に笑う一夏を見る。

今の一連で分かったのは、このクラスで一夏に一番近いのは、俺の
望む一夏ハーレムに一番近いのは、やはり篠ノ之箒さんだということ
だ。

元々この人は一夏ハーレムに入ってもらおうと考えていたので、距
離が近いというのは大いに歓迎できる。

篠ノ之さんの方も態度で丸分かりだったので、無関心であったり
嫌っていたりした場合は余程やりやすい。

もちろん、一夏が女子の気持ちに対して果てしなく無頓着であるこ
と、篠ノ之さんはどうやら自分の気持ちを素直に出せなさそうだとい
うこと、つまりハーレム以前の問題が山ほどある。

一夏の方はしばらくそのままできてくれた方が何かと都合がいい
し、ないとは思うが変に純愛とかいうくだらない思想に目覚められて
も困る。

篠ノ之さんは意識改革を少しづつやっていこう。隣の席だし会話
はしやすい。

一言に纏めてしまえば一夏をそのまま受け入れさせるというだけ
の話だが、言葉にするのは簡単でも実際どうやっていくのかは非常に
難しい作業だ。

計画しているのだから俺の中にアウトラインはある。いずれ彼女
にとつてのターニングポイントがやってくるはずだ。

一番大事なのはそこで意地を張らせないようにすること。そのた
めに日々コツコツと会話して、篠ノ之さんが一夏を受け入れられるよ
うにしていこう。

それから並行して一夏の評判を上げていかなければならない。初
日の今日は予想外な部分がたくさん出て来てことごとくがうまくい
かなかった。

相川さんのような顔雰囲気重視の人達には大丈夫だったようだが、
鷹月さんのような真面目な人達にはおそらく今日の一夏は情けなく

見えてしまっただろう。

まあ一夏の本質に触れてしまえばコロツと行くのは想像できるが、弱く情けない男として今後色眼鏡で見られてしまうのはやりにくくなる部分でもある。

やはりできれば来週の模擬戦でオルコツトに勝利して、一夏の勇姿をクラスメイト達に見せつけたいところだ。

どうすれば千冬さんに万に一つも勝ち目なしと言われてしまう状況をひっくり返せるのか。

それともいつそ負ける前提で考えるか。

とあれこれ色々考えていても、目の前で笑う男は一切合切をあつさりど軽く吹き飛ばしてくれる。

そういう期待をさせ、そして見事に応えてくれるのが俺にとっての織斑一夏という人間なのだ。

4・織斑一夏はきつと生まれてくる時代が数百年遅かった。

織斑一夏はきつと生まれてくる時代が数百年遅かった。

つくづくと思う。

その昔、ハーレムという単語が存在した時代、女を囲って侍らす、という表現があったそうだ。

どう考えてもその関係は対等ではない。かつては今のようになんか女の方が多かったというわけではないのだ。むしろ男の方が多かったくらいだと言われている。

それなのに一対多の関係を作れてしまうとは、どれだけ昔の男という存在は強かったのか、どれほど弱肉強食な世界だったのか。

その頃男は戦う存在であったため死亡率が高く未亡人を保護する必要があったとか、血筋を繋がないといけない王家には跡継ぎを生む女をたくさん用意しておかなければならなかったとか、色々理由はあったようだ。

だが他に結婚相手がないので仕方なく、というような話ではない。

きつと普通の男と結婚するよりも優秀な男の二番目以降となることを選んだのだろう。

現代の結婚できない大半の女とは天と地ほどの開きがある意識の違いだ。

そしてそこで選ばれる男というのが、織斑一夏のような人間だったのだろうと思う。

改めて、織斑一夏という一人の人間について考えてみる。

はつきり言って、性格だけを切り取ってしまえばこの現代社会に置いて女の支持を得ることはあり得ない。

何より女の気持ちを理解しない男だ。そしてどこまでも自己中心的な男でもある。

悪人ではない。思いやりはあるし、老若男女問わず困っている人間に迷わず手を差し伸べられる男だ。ただ女の気持ちが全く分からず自分を基準に判断し動くため、しばしばその行動が的外れになってしまうのである。

これだけ聞けばただのはた迷惑な存在でしかないが、それで終わらないのが我らが織斑一夏、的外れな行動をしながらも女の心を掴んでしまうのだ。

聞けばその純粋な気持ちに心打たれてしまうそうさ。結果が伴わないのに実に不可解な話だが、一夏が関わってしまうと女子はもうそれだけで胸の中がいつぱいになってしまいうらしい。

同じことを中学時代の友人である弾や数馬がやつても唾を吐かれて一瞬で終了となってしまう、二人は絶対に納得がいかないと憤慨していた。

まあそのあたりは邪心、下心のあるなしが大いに関係しているようではあった。

ならば結局は顔か、と問われると、確かに一夏の顔は整っている。思春期の女子が夢を見るには十分らしい。

百八十には届かないが身長もあり、足も長い。見た目が第一の相川さんのような女子には突撃したくなる相手だそうさ。

だが、他に類を見ないほどであるかと言われるとそこまではない。俳優やアイドルと比べれば確実に向こうのほうが上だと言われるだろうし、中学時代も一夏より顔がいい男子はいた。

別に俺一人の意見ではなく、周りの女子に聞いてみても好き嫌いを抜きにすれば一夏よりも顔がいいといえる男子はそれなりにいた。

しかし、一夏よりも女子にモテる男子はいなかった。「おう智希遅くなった。湯船が気持ちよくてついのおんびりしちやったよ」

ようやく一夏が浴室から出て来た。長いと思ったら初日から湯を張ったようだ。

この男は去年施設を出て姉千冬さんと暮らすようになったのだが、
どうやらそこで一人湯の楽しみを覚えたらしい。

「寮とはいえお金のことを気にしなくていいとなると贅沢しちゃうも
んだね」

施設で大人数で暮らしていた頃は基本というかほとんどシャワー
で済ませていたものだったのだが。

「いや、初日だしな。それに箒にいびられて節々が痛いんだよ。だか
らな」

「冗談だよ」

昼間の意趣返しに少し皮肉を言ったら意外と一夏は焦っていた。

施設で一緒に暮らしていた俺からそういう風に見られたくはない
のだろう。

「じゃあ作戦会議しようか」

「ああ、来週だな」

湯上がりで半裸の一夏は冷蔵庫からペットボトルの水を取り出し、
飲みながらベッドに座った。

この構図はいいな。間違いなく売れる。

「放課後織斑先生と話したんだけど、このままじゃ一夏はオルコット
に勝てないって」

「千冬姉でいいだろ、今は俺らしかいないんだし」

一夏に呼び方を突っ込まれた。俺は見る者全てを恐怖に陥れる魔
剣出席簿の一撃を喰らいたくない。だから油断して一夏みたいに人
前で言わないように、基本織斑先生で通したいのが正直なところだ
が。

「オーケー。千冬さんは一夏は絶対に勝てないって言った。谷底に
叩き落としてやるから這い上がって来いと」

「マジかよ。オルコットつてそこまでののか？」

「やっぱり訓練の有無が大きいみたい」

一夏が真顔になった。やはり教室での様子からして絶対とまでは
思っていないかったんだろう。

「千冬姉がそこまで言うとはなあ……絶対とか千冬姉の嫌いな言葉な

「ただけだ」

「そうなの？ まあ絶対って言う言葉を使ったわけじゃなくて、万に一つの可能性もないって言ったんだけど」

「いやー……同じだな。そういう完全とか完璧とかはあり得ないってのがいつもの千冬姉なんだけど……千冬姉にそこまで言わせる程なのか？」

一夏が思わぬところで考え込み始めた。差は歴然としている、というだけの気がするが。

「千冬さんの中では一夏の負けが確定しているってことだと思うよ。負けるところから始めろって言いたいんだろうと」

「うーん、そういうことなのか……。でもやる前から負けが決まっているのは納得いかねえな」

「それでもまず一夏に聞いておきたいことがあるんだ」

一夏に向き直る。

「何だ？」

「勝つためにやるか、負けるためにやるか」

「どういうことだ？」

一夏の眉が寄る。答えが分かっているようにと決まっていようとはつきりと確認しておかなければならない。

「千冬さんの言い方からしても、一夏の勝ちの目は薄いと思う。だから綺麗に負ける方法を考えてもいいということ」

「何言ってるのお前？ 綺麗にも何もそもそも負け方を考えるってあるのか？」

「今回に限ってはある。千冬さん的には一夏をどん底まで叩き落とすつもりらしいから、その手前で引つかかるようにするって話」

一夏が首を傾げる。言い方が抽象的過ぎた。

「つまり、オルコットの目の前で無様な姿を晒さないようにするってこと。一夏がみつともないことになる」とオルコットが調子に乗るだろうし、学園中からなめられるだろうから」

「あー、分かった。それで綺麗に負けるってことか」

理解した一夏はものすごく嫌そうな顔をしている。もちろん俺も

好きなやり方ではない。現実には即した被害を最小限に抑える賢いやり方かも知れないが、小狡くてもみつきいと個人的には思う。

そういうことをする他人をどうこう言うつもりはないが、自分やるとなれば話は別だ。それに一夏にそんな真似をさせたくもない。もし一夏が望んでやるのであればまた考えるが。

「ないな」

「だよな」

お互いの顔を見て即答した。聞く前から答えは分かりきっていたが、口にしておくのは大事なことだ。特に一夏の覚悟的に。

「千冬姉がいつも言ってるけど物事に絶対なんてないんだ。今勝ち目がなければこれから作ろうぜ」

「そうだね。それで今一番可能性を考えられるのは、やっぱり専用機だと思ってるんだ」

「ああ。でも間に合わないんだろ？」

当てにして発言をしてしまったのは本当に俺の失策だったが、有効な手段であるというのもまたはつきりしている。

「うん。別に千冬さんが邪魔をしているわけじゃなくて、元々そういう話だったみたい」

「早くても二週間後って言ってたっけ？　じゃあどうするんだ？」

「無理を言ってみる」

「は？」

一夏がポカンと口を開けた。昼間の食堂の時と言いこの姿の一夏はよくないな。度々見せるようなら注意をしておこう。

「一夏の専用機を作ってる企業？」

「倉持技研ね」

「その倉持技研の人に事情を話して、間に合わせてもらえないかお願いをしてみる」

「おいおい、お前何言ってるの？　少なくとも二週間はかかるって言われてるんだろ？　さすがに無理だろ」

「だからその無理をあえてお願いしてみる」

一夏がものすごく困ったという顔をしている。お世話になってい

る人達に無理難題を言いたくない気持ちは分かる。

「普通に無理だつて断られて終わりだと思っぞ?」

「普通に言えばね。だから、これはクラス代表を決める模擬戦だと説明するんだ」

「どういうことだ?」

俺は一夏に理由を説明した。

昼に千冬さんが言っていたが、クラス代表は行事の時は文字通りクラスの代表として人前に入る。

つまり、目立つ。倉持技研からしてみれば一夏がクラス代表になれば自分の会社の機体の宣伝機会が大いに増えるわけだ。

さらに機体のデータも収集できる。授業で動かす程度では取れるデータはたかが知れているそうで、一夏は倉持の人からとにかく色々やってみてくれとお願いされているとのことである。特殊な行事やイベントに参加できればそれだけ多彩なデータを得られるというメリットがある。

「なるほどな。倉持技研的には俺がクラス代表になった方がいいんだな」

「そうだね。それに一夏がクラス代表になれなかった場合のデメリットもある」

その場合、一組の代表は自分をイギリスの代表候補生だと言っていたオルコットになる。クラス代表のメリットをそのままイギリスの企業に持つていかれることになるわけだ。

さらに対外的には日本の倉持技研が下に見られてしまうだろう。

もちろん俺の想像ではあるが、そのまま指を啜えて眺めている場合ではないと思う。

「う〜ん……鼻で笑われて終わりってことはなさそうだな。きっと嫌な顔はされるだろうけど」

「そうだね。もしかしたらもう千冬さんとの間で話がついてて、一夏はクラス代表にはならないってことになってるかもしれない」

「じゃあ無理はしたくないって言われるかもしれないわけか」

「十分あり得る。だから、お願いだけして後の判断は向こうに任せる

しかない」

一夏が目をつぶって頭をかく。お願いする時のことを想像しているんだろう。

自分が無理をするのは厭わない男だが、やはり他人に無理を言うのは抵抗があるか。

「まあ……言うだけは言ってみるか」

「そもそもやりたくても時間的に無理って場合も普通にあるし、ダメ元って感じで言ってみれば駄目だった時もしようがないねで済むと思うよ」

つまるところは倉持技研の良心と、技術と、色気と、根性次第だ。

こちらとしては自分からアクションを起こさなければ可能性はゼロだからやってみよう、でしかない。

「分かった。どうせ決めるのは向こうだしこっちはこっちでやることをやろう。もうちよつとしたら話しやすい人が出てくれると思うから後で電話する。あ、智希が説明した方がいいか？」

「いやいや、一夏のことなんだから一夏が自分の口で言わないと」

「それもそうか。よし、じゃあ専用機のこととはそれでいいな。あと他の方法はあるのか？ さすがにこれだけに賭けるのは厳しいと思うぞ？」

「そうだね。そしてそれが一番の難関だ」

腕が劣る状態で性能の劣る機体に乗って勝つ。

正攻法では到底無理な話だろう。

「何よりもまずは俺が機体を動かせないことには話にならないよな」

「一夏がI Sに乗ったのって試験の時だけ？」

「初めて男がI Sを動かしたってことでいろんなところで起動させられたけど、まともに乗ったのは試験とその前の練習くらいかな？」

対してオルコットは既に自分の専用機を乗り回している。

千冬さんが絶対負けると言ってしまうのもよく分かる話だ。

「とりあえず一夏は模擬戦の日まで、毎日放課後訓練機で練習するべきだと思う。訓練機の予約はもう埋まってるみたいだけど、山田先生が協力してくれる。だから一夏は明日先生と一緒に予約取ってる人

に代わってもらえるようお願いしに行つて欲しい」

「え、それ大丈夫なのか？ 代わってもらえるもんなのか？」

「先生と一緒にいってお願いすれば何とかなると思うよ。それに断られたらまた別な人をお願いしに行けばいいし」

「そうか、別に訓練機は一機しかないってわけじゃないもんな」

まあ一夏に頼まれば大抵の人はうんと言つてくれるだろう。女性上位主義者の存在は気になるが、山田先生もいるし予約してる人全員が全員そうだといいことはないと思いたい。

「おし、それじゃこれから一週間一緒に訓練しようぜ」

「それは無理」

「なんで？」

「だって放課後は千冬さんに捕まってるから」

「あー……」

千冬さんが憎らしいのはここだ。模擬戦の提案をしたのは俺なのに、放課後一夏に関わる事ができない。事前に話はできてても実際の訓練は全て一夏任せになってしまう。

もちろん模擬戦を戦うのは一夏だが、それにしても様子を見ることさえできないというのはかなり厳しい。

ああ、そういうえば休日のことをすっかり忘れていた。そのあたりはどうなっているのだろうか。これは調べておかないと。

「じゃあどうするんだ？ さすがに一人だと意味ないのは俺でも分かるぞ。ああ、山田先生？」

「先生に一週間毎日放課後付き合ってくださいはいまず無理だと思う。訓練相手は篠ノ之さんがいいんじゃないかな？」

「えっ？ 箒!？」

一夏は露骨に嫌そうな顔をした。眼の奥が怯えているように見える。たった一時間でどれだけのトラウマを植え付けられたというのか。

「ISに乗ってるんだから生身とは違うよ。それに篠ノ之さんだってIS動かすので精一杯だと思うし」

「だけどさー……それなら別に箒でなくてもいいんじゃないか？」

ごもつとも。はつきり言えば二人で一緒に訓練して仲良くなつて
もらおうという作戦である。

しかしここまで一夏が嫌がるとは、篠ノ之さんも自分で自分の首を
絞めてどうする。予め釘を差しておいた方がよさそうだ。

「でも他の女子だと勝手が分からないから一夏は加減して遠慮するよ
ね？ 篠ノ之さんなら遠慮無くやれるだろうし、一週間もないからあ
んまりのんびりやってられないよ」

「う〜ん……」

当然俺は事前に考えておいたもつともらしい理由で説得にかかる。
千冬さんの話を聞く限りクラスメイト達の技量はおそらく俺や一夏
よりも上だ。事情も理解しているし全力でやってくれと一夏が頼め
ば喜んでやってくれるだろう。

だから極論を言えば一夏の言う通り誰でもいいのだが、それなら俺
の都合に合わせてもらおう、という話。

「一夏の専用機って近接戦闘型なんですよ？」

「うん」

「篠ノ之さんも剣道やってるからそっちのタイプだろうし、ISに慣
れるための訓練相手としてちようどいいと思うよ」

「……そうだな。今は俺が我がまま言ってる場合じゃないよな。分
かった、明日箒に頼んでみるか。あ、でも断られたらその時は仕方な
いからな？」

それはないので心配しなくていい。むしろ喜んで全力で応えてく
れるだろう。

「でも一週間でもどこまでやれるかだな。あ、別に箒がどうこうって
わけじゃなくて、オルコットに勝てるどころまでいけるかって話だ」

「うん、今それを悩んでる」

一夏が頭の痛いところをついてきた。明日くらいはISに慣れる
程度でもいいかもしれないが、これは模擬戦に向けての自主訓練だ。適
当にダラダラやっていいわけではない。

「先生に教えてもらうのは？」

「千冬さんは論外で、山田先生なら一日くらいは付き合ってくれるか

もしれない。他にIS指導の先生を探してお願いしてみるのもあるかもしれない。でもそうすると千冬さんに筒抜けになるからあんまりやりたくない」

「千冬姉にバレると何かまずいのか？」

「今回に限っては敵側だからね。ないとは思うけどオルコットにそのまま情報を流されたらますます勝てなくなる」

「さすがに千冬姉はそういうことしないぞ」

俺もそう思うが、はつきり叩き落とすと宣言されている以上千冬さんやそれに近いところに頼るのはよろしくない。

「それに敵を倒すのに敵の助けを借りるってのも変だと思うし」

「うーん……それで勝てるんならそれに越したことはないけど……じゃあ代わりの当てはあるのか？」

「一夏は先輩に知り合いとかいないよね？」

「ISとか正直キョーミなかったからなあ……千冬姉も全然ISの話はしてくれなかったし」

俺と一夏は男であるが故にこれまでISの世界からは遠かった。関係者としてはど真ん中だが、関わり合いがなかったためIS関係の知り合いがほとんどいない。

「俺の知り合いは……倉持の人達はさすがにこれ以上は無理だろうし……智希は所属すらないからなあ……」

机の中にどこかの偉い人の名刺はたくさんあるが、今の俺は決まったことに従うだけで何かを主張できるような立場にはいない。無理してお願いをしてみるにしても、知らない大人達を相手に立ち回れるような自信はとてもない。

それに自分のことならまだしも今は一夏の話だ。日本に取られた一夏を快く思わない人達も多いらしい。逆に一夏に近づきたい人達もいるようだが、全体像がさっぱり分からない以上は正直手を出すに出せない。

「学園内の話だし、倉持の人達以外に手を広げるのはやめておいた方がいいと思う。今ちよつと考えたけど何がどうなるか全然想像できないから」

「IS委員会とかなんか面倒くさそうな人達だったもんな。いかにも男が嫌いってのもいたし、関わらないで済むならそっちの方が俺もいいな。じゃあやっぱり学園内か」

「といってもこっちにも知り合いはいないけどね、お互い」

誰でもいいならクラスメイトでいいわけで、今必要なのは勝つための技術を教えてくれる人だ。

手当たり次第に声をかけるといわけにもいかない。

「クラスの誰かに姉とかいないか？俺達にないならそういう伝手を頼ってみるってのは？」

「確かにそれくらいしかないかな……」

こちらには一夏がいる。相手が女性上位主義者でなければ一夏が真剣に頼めば何とかなるはずだ。だから教えてくれるのに適した人がいればそれが一番だ。

クラスの誰かの姉や知り合いがそうだとは限らないが、一年以上のアドバンテージがある分まだ同級生よりはいいだろうか。

「うくん、どっかに勝ち方を優しく教えてくれるような優秀な人いないかなー」

「あ」

瞬間、脳裏に閃きが走った。

「どうした智希？」

これは偶然だろうか、必然だろうか。

「智希？」

もしかして最初からそういうことだったのだろうか。俺達は実は敷かれたレールの上を走っていただけなのだろうか。

「どうした智希？何か思いついたのか？」

いや、それにしても不確定要素が多過ぎる。そもそも模擬戦を口にしたのは俺だし、どう行動するかは自分次第だ。決めるのは自分だ。

これはつまり選択肢を与えられたということなのかもしれない。

「智希ー」

いつの間にか一夏の顔が目の前にあった。やたらと至近距離だ。女子にやったら相手の心臓を止めかねない行為だ。

「何か思いついたんだな？」

「うん。当てができた」

笑って一夏に返す。別に笑顔を作ったわけではなく、自然と顔が緩んだ。

この際他人の思惑なんてどうでもいい。今何より大事なのは模擬戦で一夏がオルコットに勝利を収めることだ。

そのためなら別に人の手のひらの上で踊ったっていいだろう。

「それは何だ？」

「そうだね、明日の夜に誰に頼むかを決めよう。一夏は明日の放課後でISをそれなりに動かせるようになって欲しい。そしてあさつての昼にでもその人に頼みに行こう」

「待て待て、ちよつと待て。お前の悪い癖なんだけど一人で勝手に話を進めるな。何がどうなってそういうことになるんだ？ 始めから説明してくれ」

いけないいけない、光明が見えたせいで思考が先へ先へと飛んでしまっていた。

まだ方向性が見えただけで、超えるべきハードルは山ほどある。そして一夏がそれを越えることができたとしても、勝つのはとても無理だという結論に達してしまう可能性も大いにある。

今安心できる要素は何ひとつないのだ。

「ごめんごめん。これから説明するよ。正直、僕らじゃオルコットに勝つ方法は思いつかないと思う。知識も技術も相手のほうが上だ」

「まあな。だから教えてくれる人ってことなんだろうけど、それはいったい誰なんだ？」

「明日探す」

「探すって、IS学園の生徒の中か？ 一学年百五十人だから、五百人近くもいるんだぞ？」

「そんなにはいないよ。去年千冬さんがIS学園に来たおかげで人気が高まって年々定員が増えてるけど、今は全校で四百人くらいだよ」

「まあ千冬姉は全世界のISパイロットの憧れの的だからな。いや、でもそれでも四百人だぞ？」

一夏の姉織斑千冬先生は世界最高峰のISSパイロットであり、今なお並ぶ者のないカリスマだ。

朝の自己紹介では千冬さんに向かって一夏に対してよりも大きな黄色い声が飛び交っていた。織斑先生のいるクラスに入れたのは人生最大の幸運だと感動するクラスメイトもいたくらいだ。

「でも試験だ何だで順位がつくんだから、その中で優秀な人ってのは決まってる」

「順位ってことはつまり相手は上級生で、その人を明日探すってことか。でもどうやって？ ひたすら聞いて回るのか？」

俺はまた笑った。今度は自分の意志で。

まだ相手が誰だかも分からないのに、どうやってお願いして説得するか何も考えていないというのに、俺は進むべき道が見えたせいかわくわくしてしまっていた。

本当は一夏には俺なんて必要ないだろう。

一夏は自分で階段を登っていくだろうし、案外オルコットにだって一人だけで勝ってしまうのかもしれない。

俺のやっていることは余計なお世話で、きっとただの自己満足だ。だけど、いやだからこそ全力でやろうと思うし、一夏にとっていい結果を出せるようにしたい。

何より今回一夏を模擬戦に巻き込んだのは他ならぬ俺だ。

一夏が俺の説明を待ってじっと見ているので、俺はまず最初の言葉を口にした。

「数字を見れば一発で分かるよ」

5. 奇跡とは祈るものか頼るものか、それとも諦めるものか。

奇跡とは祈るものか頼るものか、それとも諦めるものか。

頼るのはさすがにないだろう。奇跡と言われた時点で可能性はものすごく低い。さらにその時点で運命は自分の手から離れてしまっている。起こることを普通に期待できるのであればそれは奇跡とは言わない。よって当てにはできない。

ならばすっぱりと諦めるか。だがそれには後ろ髪を引かれてしまう。可能性がすごく低くとも、ゼロではないのだ。ほぼ無理だけれども絶対に無理ではない。奇跡と口にしてしまった時点で起こって欲しいのだ。だから諦めきれない。

祈る。可能性が高まるのであれば誰だって全力で祈るだろう。だがもちろんのこと、祈ろうが祈るまいが結果には何の影響ももたらさない。ならばまるつきり無駄かと言われると、ひとつだけ、あることに効果があると思う。それはすなわち、現実逃避。祈っている間は他のことを考えなくて済む。待つしかない状況になってしまったら、もう精神安定上無心に祈っておくのがいいのではないだろうか。

倉持技研が社内で協議した上での結論を出してきた。

奇跡が起こらない限り一週間で一夏の専用機を用意するのは無理。

まあ、予想の範囲内の話ではあった。

一夏が渋い顔をしていたので内容はすぐ察することができた。夜に頼んで次の午前中で結論を返してきたのだが、少なくとも即諦めたという空気ではなかったようだ。

さすがに倉持技研はIS学園に一番多くのISを提供しているだけあって、クラス代表のあれこれも理解していた。一夏曰く、倉持技研的にはクラス代表になれるものならぜひなって欲しいとのことだ。

間に合わないならと織斑先生に模擬戦の日程を延ばしてくるよう
にお願いまでしたとのことである。もちろん即断られたらしいが。

形だけポーズだけでやっているようではなかった。元々諦めてい
た話らしく、倉持技研は降って湧いた幸運に全力で飛びつこうとして
いた。

間に合わない原因は技術的などころにあるようだった。一夏がま
るで理解できなかったらしく俺への説明も要領を得なかったが、搭乗
者の安全に関わる部分でどうしてもクリアしなければならぬ問題
があり、その解決にはどうあがいても時間を必要とするという話だそ
うだ。

模擬戦を行う上ではどうにも目をつぶるわけにはいかないらしく、
技術者として一夏の安全を考えれば血の涙を流して不可能だという
結論に達したようである。

とは言っても完全に諦めたというわけではなく、奇跡が起こったと
きのために準備だけはしておくとのことだ。この場合の奇跡とは、技
術的問題を解決できるか織斑先生の気が変わるかである。

技術的な方は半分諦めているようで、どうやら織斑先生の気が変わ
ることを期待しているようだ。

時間があれば技術的な問題は何とかできる自信があるらしく、今倉
持技研は全力で織斑先生への説得工作を行っている。

対する織斑先生は着信拒否状態に入った。元々一夏を勝たせる気
もないしいちいち会話するのが面倒になったのだろう。昼は職員室
に居座らず、放課後は俺と山田先生を連れて別室にこもって事務作業
にかかりきりになるつもりのようなようだ。その日は同時に余計なことを
しでかしてくれた俺への、実にしつこい説教も行われた。

作業で手を動かし説教を右から左へと聞き流しながら、その時俺は
何かデジャヴのようなものを感じていた。

そして織斑先生から解放された後、自主訓練をしている一夏と篠ノ
之さんの顔を見た時にそのデジャヴの正体が分かった。

ああ、篠ノ之さんの説教好きは織斑先生の影響だ。

このIS学園に限らず男が一人で歩いていると、やたら見られる。日本の男女比は一对三から四なのだから別にそこまで珍しくもないと思うのだが、女にとって男とはどうにも異質な存在のようだ。女性上位主義者が憎々しげに見てくるのは男そのものが気に入らないのだから理解できなくはない。でも負の感情はなしにじっと見られてしまうと非常に居心地が悪くなる。観察しているのか真顔で見ているのは、こっちはただ歩いているだけなのになんなのかと思う。

一人でいるというのも心細さが増すのだろう。基本的に男は固まって数人で行動するのが常だった。

そしてこのIS学園、全校生徒四百人に対して男子二人、男など存在しないも同然だ。

そんな中男一人で行動するようになってしまったのか。誰も声はかけてこないのに視線だけが俺に集中していて、居たたまれない気持ちでいっぱいになり即安全な場所に逃げ出したくてたまらない。

昨日一昨日と俺と一夏は放課後に別行動だったが、一夏は女子とはいえ知ったクラスメイトや幼馴染と一緒に、俺も一人で行動したのは職員室から訓練場のアリーナへと移動した時くらいだった。

あの時は放課後でも少なかつたし、また一夏の訓練が気になっていて周囲もそこまで気にならなかつたのだが、今は違う。昼休み、学園は生徒、すなわち全て女子で溢れている。対して俺は一夏とも離れて一人、知り合いのいない廊下を歩いている。

自分で選んだこととはいえ、始まる前から試練があるとは誤算だった。これから交渉をしなければならぬというのにゴリゴリと自分の中のエネルギーが失われていくのを感じる。数分の距離で本当に助かった。

と、目的の教室に到着した。脇目もふらず歩いていけば誰も声をかけてこないというのはここでも有効なようだ。今後もそうしよう。

教室の扉が空いていたので入り口に立ち、失礼します、と教室内へ向けて声を出す。

瞬間、教室内の全ての視線が俺へと飛び、教室は無音となった。それは魔剣出席簿が振り下ろされた時とはまた別の種類の沈黙で、クラス内の女生徒の表情は綺麗に驚き一色だ。

「宮崎先輩はいらっしゃいますか？」

俺が喋らないと当然話が進まないので教室の中へと呼びかける。

呼ばれた本人であろう黒髪セミロングの女生徒が弾かれたように椅子の音を立てて自分を指差した。

「私!？」

「宮崎先輩ですか？」

「え、ええ……」

「ご相談したいことがあるんですけど、今お話させてもらってもいいですか？」

笑顔を作るのはさすがにわざとらしいかと思っただのでそこまではせず、できるだけ柔らかい声で話しかける。

予想外の展開に動揺しているであろう先輩は忙しく体が動いていた。

「い、いいけど……」

「あ。別に変な話じゃないです。それに隠すようなことでもないのです、ここでそのまま話させてもらえれば」

「な、ならどうぞ……」

とりあえず話は聞いてもらえそうだ。最悪の場合有無を言わさず追い返される可能性もあった

何しろ俺はこの人について成績と評価以外は何も知らないのだから。

俺は教室に入って先輩の隣の席に立つ。そして促されてから席に座る。初対面なだけにつまらないことで機嫌を損ねたくない。まあ先輩は混乱中でまだそういうところにはまだは頭が回っていないように、周囲の方々もまだ理解が追いつかないのだろう、無言で俺を見守っている。

「それでご相談したいことなんですけれど、一言で言うると来週ISでの模擬戦をやるので、初心者がそれに勝つための知恵を貸して下さい

という話です」

まず俺は事情を説明することにした。こつちが喋っている間に向こうも落ち着くだろうし、助けてくれるにしろ断られるにしろ、何より状況を理解してもらわないことには始まらない。

俺は自分ではなく一夏が模擬戦を戦うこと、相手はイギリス代表候補生で専用機を持っていること、こちらは専用機が間に合わないので量産機で戦わなければならないこと、そして織斑先生に絶対負けると言われていることなどを話した。

話しているうちに先輩方も平静を取り戻したようで、話の後半には時折俺の話に確認や補足を求めるようになっていた。目の前の宮崎先輩だけでなく周囲の先輩達も会話に加わってきていた。

「とりあえずこんなものでいいでしょうか？」

「そうね。事情は概ね理解できたと思うわ」

意外と細かいところまで聞かれたので時間がかかった。これからは交渉の時間だ。

「じゃあ甲斐田君のお願いに返事をする前に私から質問なんだけけど、どうして私のところに来たの？」

さあ来た。

「それは先輩が三年生で一番の成績だからです。だから真っ先にここに来ました」

「なるほど、でも甲斐田君はまだ入学して三日目だよね。どうしてそんなことまで知っているの？ 私の友達と知り合いとかならその人と一緒に来てもいいと思うんだけど」

「伝手があればもちろんそうしたんですが、何もないのではこうやって直接行くしかなかったんです。あと成績とかは別に隠されているものじゃないですよ。まして先輩は一番なんですからすぐ分かりました」

目の前の先輩が、へえ、とでも言いそうな感心した顔を見せた。

俺は暗に上級生の成績を調べましたと答えた。もちろんはったりだ。IS学園の成績の調べ方など当然の如く知らない。そもそも成績上位者が公開されているのかさえ知らない。

だが結果だけは知っている。なぜなら、この二日間織斑先生の元でやった作業が今の二三年生の成績表の整理だったからだ。

昨日の放課後俺は織斑先生の説教を聞き流しながら、俺は全力で成績表から優秀な生徒を探し、そして目の前の宮崎先輩に白羽の矢を立てた。教えてくれるのにもっと適当な人はいたかもしれない。だが時間もなかったので成績が良くて人格がまともそうならいいかということで、夜に一夏と相談して数名の候補の中から決めた。

もちろんこれが偶然だったとは思わない。昨日の放課後、最後はもうあからさまに怪しい動きをしている俺を織斑先生は咎めなかったし、第一俺に必要な成績表を触らせている時点で間違いないだろう。

遊ばれているのか試されているのか、何も言わないあたり織斑先生はとてもいい性格をしていると思う。

「でもそれなら模擬戦は実技なんだからそっち方面で優秀な人をお願いした方がよかったんじゃないの？ 隣のパイロット科なら私よりもできる人はたくさんいるわよね？」

予想通り乗ってきた。きつとこういう会話好きなんだろうなと想像していたが、さすがは指揮科の生徒だ。目が笑ってるしきつとデイベートとか大好きな人だ。

「ええ、ですがもう一週間もないので、操縦技術を磨くには付け焼き刃にもならないかなと思ひまして。だったら指揮科の宮崎先輩なら戦略レベルでひっくり返してもらえるんじゃないかと期待して今ここにいます」

持ち上げることも忘れてはいけな。何しろ俺には思いつけない解決策を出してもらおう相手だ。

しかも織斑先生に絶対と言わせてしまうほどの無理難題。せめて取っ掛かりくらいは切実に欲しい。

「こちらは素人で、量産機で、相手は専用機持ちの代表候補生。しかも準備する時間も全然ない。普通に考えたらとても勝てそうにない話ね」

そう、交渉とは言っても絶対的にこちらの立場は弱い。基本的に相

手に全部ぶん投げるお願いなので、相手にその気になってもらわなければ何も始まらない。

余裕を取り戻したらしき先輩はにこにここちらを見ている。さあ私をやる気にさせる言葉は何？ と目が言っている。

「やりがいのある話だとは思いませんか？ 絶対的不利を跳ね返すつてすごく楽しいと思いますよ？」

「あら、でもそれはうまく行く見込みがあつてこそその話よね。今の状況じゃちよつとそれは厳しいかな？」

「つまり先輩ではとても不可能な話だということですか？」

先輩がむつとした。軽い挑発ではある。お願いする相手に対して挑発なんてよろしくないのは俺も分かっているが、不毛な会話に時間をかけている余裕はあまりない。断られたら次に行けばいいし、いざとなればここには連れて来なかったが最終兵器一夏のお願ひもある。

「いえ、織斑先生が絶対勝てないと言うような話ですから、無茶なお願ひだというのは十分理解しています。先輩が無理だと言うのであればそれも仕方ないと思うので、はつきり言ってください」

「君はせつかちね。もうちよつとこう会話を楽しもうとかそういう気持ちはないの？ どう厳しいのかとかどれくらい差があるのかとか話せることはいっぱいあるわよね？」

どうやら先輩がむつとしたのは挑発されたからではなく、俺が結論を急いだことにあるようだった。

「いや、こつちもあまり時間がなくて駄目なら駄目で次に行きたいので」

「会話を振ってきたのは甲斐田君なんだから、中途半端じゃなくしつかり付き合つて欲しかったなあ」

正直知るかという話だが、確かに話を振つたのはこちらだ。相手がけむにまいてきそうな予感があつたので踏み込んだが、勝手だというのはまあその通りか。

「まあまあ、それくらいにしといていいんじゃない」

「綾、こつちまで男子一人で来た度胸は認めてあげようよ」

「少なくとも男子であることを前に出してこなかったのは評価してい

いと思うな」

と、ここで周囲の先輩方が口を挟んできた。言われた内容は俺も考えた上での話だった。多分指揮科の人達はそういうのを嫌うだろうと想像してのことだ。他のパイロット科や整備科、衛生科の先輩が相手なら一夏を連れて行って惹き付けたり母性本能に訴えたりして全力で同情を誘うつもりだが。

「うーん、じゃあ最後にこれだけ。どうして君はそこまでがんばってるの？ これは甲斐田君自身の話じゃないよね？ やっぱ友達だから？」

「いえ、それ以前にけしかけたのが僕ですし、最後まで責任は持ちますよ」

答えると先輩方はみんな揃って意外だという顔になった。そこまですんなり解答をしたつもりはないのだが。

「男子ってこういうものなのかな？」

「かっこつけてるとか？」

「あー、素直じゃないってやつ？」

いや、本人の目の前で思いきり聞こえるようなひそひそ話とかされても反応に困るのだが。

「あの……」

「ごめんごめん。ちよつとびつくりしちゃった。てつきり親友のためなら当然ですとか言うと思ってたから」

もちろんそういうのが効果的な相手なら迷わずそう言うつもりだ。目の前の先輩方には鼻で笑われて逆効果になると踏んで言わなかったのはかえってよくなかったのだろうか。

「そうだね、その表情が本心なのか背伸びなのかは今後の君を見て判断しようかな」

ああ、何となく理解できた。相手に合わせて話そうとしたことが背伸びしているように見えたのか。今まで年上の先輩と接する機会なんてほとんどなかったが、年下として振る舞うなら多少青臭くても許されるのかもしれない。

いや待て、それ以前に。

「うん、いいよ。手伝ってあげる」

今後という意味に気づいて顔を上げた俺に先輩は笑って答えた。クラスメイト達よりも大人な笑顔だなと何となく思った。これが二年間の差なんだろうか。

「ありがとうございます。それで……」

「うんうん、言いたいことは分かるよ。実際勝てるのって話よね？」

「はい」

俺はじつと先輩の目を見る。先輩は軽く俺の視線を受け止めて、はつきりと言い切った。

「勝てる可能性があるかないかと言われたら、十分ある」

「織斑先生は絶対勝てないと言いましたが」

「それ」

と、先輩は俺の口を指差した。

「それって……？」

「織斑先生が絶対勝てないと言ったこと」

どうということだろうか。

「えっと、絶対という言葉自体は使ってなくて、万に一つも勝ち目はな
いと言ったんですが」

「一緒ね。織斑先生は絶対とか完璧という言葉は使わない」

この人も一夏みたいなことを言い出した。

「いや、実際使いましたし、確かに弟の一夏から織斑先生はそういうこ
とと言わないとは言われましたけど」

「なんだ、そこまで知ってるんじゃない」

「どういうことですか？」

全く意味が分からない。普段使おうが使うまいが実際に俺は面と
向かって言われたのだが。

「普段絶対という単語を使わない人があえて使った。おかしいと思わ
ない？」

「いや……それだけの差があるということじゃ……」

「なるほど、素直に受け止めちゃったわけね」

織斑先生は俺に嘘を言った？ 何のために？ 諦めさせるため？

「例えばね、模擬戦の日、相手の子が風邪引いて立つのもフラフラになつてたら十分勝てるわよね?」

「えっ、そういう作戦ですか?」

「そんなのはいくらなんでもない。」

「そうじゃなくて、そういう可能性がすぐ考えられる時点で万に一つもないとか崩れてるわよねって話」

「理屈としてはそうですが……」

「どちらにしても厳しいことには変わりはないのだが。」

「まだピンとこないか。それならどうして織斑先生は全く勝ち目がないなんて言つたんだろう?」

「もちろん俺と一夏をビビらせるためとかそういうことじゃないんだろうが。」

「うーん、じゃあ質問変えるね。甲斐田君にとって勝ちってどういう状態?」

「勝ちですか? この場合は模擬戦で一夏が勝つこと?」

「模擬戦で勝つってどういうこと?」

「それは……相手の機体のエネルギーを一夏がゼロにすること?」

「それは誰が決めたの?」

「誰って、模擬戦ってそういうものじゃ……」

「そこよ。君は模擬戦という単語を使っているだけで、何をもって勝ちとするか考えていない」

「ルール?」

「先輩は笑った。」

「そう。模擬戦なんだから好きにルールを決めて相手を納得させればよかったのよ。別に半分削ったら終わりでもいいし、何か競争的なことで勝敗をつけてもいいし」

「つまり僕は自分が勝てるルールで提案をするべきだったって話ですか」

「過去形で言うってことは理解したようね。織斑先生が言いたいののはね、甲斐田君はそもそも勝とうとしていないんだから勝てるわけがないってことよ。絶対なんてありえないということから紐解いて、自

分にとつての勝利とは何かを考えなさいってね」

俺の勝利のイメージ。オルコットが地面に倒れ伏してその前で一夏が剣を高々と掲げる。それが俺にとつての英雄の姿だった。

間違っているとは思わない。だがそのための道筋を作っていないのは紛れもない事実だ。専用機のことを知ってこれなら一夏はやってくれるだろうと丸投げしただけ。メンタル弱そうなオルコットなら揺さぶれば余裕だろうなどと甘すぎる見積もりしかしていなかった。

拳句の果てに一夏の立場を窮地に追い込んでしまっていた。まあ一夏本人は今も負ける気は微塵もないだろうけれど。

「もちろん、これは私達、つまり指揮科としての意見。パイロット科の人達ならまずどうやって相手を捻じ伏せるかを考えるわ。整備科なら機体の性能差をどうするか考えるでしょうね。衛生科なら安全第一で勝負そのものを止めることを考えるかもしれない」

そこで先輩は言葉を切った。君はどうしたい？ と目が言っている。

「確認なんですけど、模擬戦のルールはもう一般的なもので行くしかないんですよ？」

「今からできるのはルールの確認くらいね。でも甲斐田君はそれすら知らないんですよけど」

非常に耳が痛い。何が自分の力で一夏を勝たせるだ。

「模擬戦までにできることはなんでもやって、オルコットに勝ちたいです」

「よろしい。希望は聞きました」

元よりなりふり構うつもりはない。一夏の評判が落ちること以外は。

「私だけじゃ手が足りないからみんなにも手伝ってもらっていいわよね？」

「それはもちろん。というかむしろ有難いです」

「やった！」

「よかった。ここでハブられたらどうしようかと思った」

周囲の先輩方までやる気になってくれている。好奇心を突けばもしかしたらとは思っていたが、これは俺にとって最上の成果だ。三人寄ればではないが考える脳が多いのは確実に可能性の上昇だ。船頭が一人であればそうそう無茶苦茶なことにもならないだろう。

「それは大丈夫、指揮科が指揮系統ぐちゃぐちゃとかありえないから。全体は私が見るけどみんないいわよね？ 直接頼まれたのは私なんだし」

心の中まで読まれてしまった。が、不快感など全くない。

あるのはなんとも言えない高揚感。

「で、具体的な作戦を今すぐ出せつてのはもちろん無理よ？ 時間なのは分かつてるけど今日の夜までちょうだい。それまでに大枠と織斑先生の弟さんがやるべきことだけは決めておくから」

「こういうときみんな寮つてのは便利だね。あ、君まだ見てないだろうけど寮に会議室あるから夜だつて平気なのさー！」

「いつそ会議室借り切つて作戦本部とか作っちゃおう？」

「それいいかも！ その名もオペレーション……何がいいかなあ？」

あつという間に先輩方が盛り上がり始めた。こうなればもう俺が役立たずなのは確かで、楽をできると言うべきか、考えたけど無理でしたごめんなさいと手のひら返されることがないのを祈るべきか。

「でも私達が考えるよりそつちの分野は任せた方がいいよね？ そこにいる人達!!」

と、いきなり先輩が俺の後ろに向かって投げかけた。

振り返ると、なんと教室の窓、入り口が女生徒達で埋め尽くされていた。俺は余裕がなくて気付かなかつたが、一部始終を見ていたという事なんだろう。まあいきなり男子が一人でやって来たら何事だと思ふのはよく分かるが。

「さつすが綾！」

「よく言った！」

「当然です！」

「言われなくても乱入する気満々でした！」

「指揮科だけにおいしいところは持つて行かせないよー！」

女生徒達から歓声が上がる。もしかしてこの人達は暇なのだろうか。

「はい甲斐田君！ お願いがあります！」

その中から手が上がった。もう蚊帳の外にいる気分だったので、急に現実には引き戻されて思わず身構える。

「いや、そこまで怖がらなくても……」

「それはきつと顔が怖いんじゃないでしょうかー！」

「なんだと!？」

「あ、すみません。何でしょうか？」

やっぱり女子が集まるとそのエネルギーは凄まじい。三人集まれば姦しく、それ以上ではもはや男の手には負えなくなる。

「はい！ 餌をください！」

「え？」

この人は何を言っているんだと一瞬考えたがすぐに思い当たった。

「いやね、馬は目の前にニンジンがあると頑張って走るんですよ」

「自分のこと馬とか言ってる」

「馬車馬のようにはたらけー！」

「例えよ例えー！」

どうして女はすぐ脇道に逸れたがるのだろうか。女子と会話していると話題があちこち飛んで油断すると何を話していたのか分からなくなってしまう。

「分かるよね？ 報酬ってこと。指揮科に頼みに行くくらいだからそういうの用意してないかなーっていう期待？」

俺に問いかける女生徒が言葉通り期待に満ちた目で俺を見ている。

もちろん、考えてはいた。金目の物はまだ無理なので、それ以外でこの人達が喜びそうなのは何だろうと昨日の夜あれこれと一人で悩んだ。こういうとき一夏は全く役に立たない。

宮崎先輩一人なら終わった後一夏とデートでもさせればいいかと思っていたが、さすがにこの人数ではきつと休日が足りなくなる。なので第二の案を提示してみることにした。

「写真なんてどうでしょうか？」

「君の？」

「まさか」

「じゃあ……織斑先生の弟君？」

それもありと言えばありなのだが、一夏の写真はプレミアをつけた上で広めたい。このIS学園において一夏はまだ織斑先生の弟君でしかないのだ。篠ノ之さんのように一夏本人に対して惹かれてくれれば、その写真には大いなる価値が生まれってくる。今から安売りするつもりは全くない。

「いいえ。織斑先生の写真はいかがですか？ 写真なら焼き増しすればみなさんに行き渡ると思いますし」

「ほう」

女生徒の目が光った。つまり、食いついた。

織斑先生と言えばISの世界においてカリスマ中のカリスマだ。そしてIS学園に限らず学生の憧れの的である。織斑先生がIS学園の教師として赴任することが決まった時、IS学園への入学志願者が桁違いに跳ね上がったそうさ。今や日本一入学が厳しい学校だともで言われている。

目の前の三年の先輩方はそうなる前の入学だが、織斑先生に憧れる気持ちに違いはないようだ。

「なかなかいいところに目をつけたね。ここまで一人で来たことといい、まずはさすがだと褒めておこう。だがしかし！」

芝居がかった動作が一昨日の生徒会長っぽいと思った。そういえばあの芸人志望の生徒会長は昨日も来るかと思ったが結局来なかった。

「何でしょう？」

「悪いけど、私は千冬様に関しちゃうものすごくうるさいよ？ 誰でも持つてるようなの見せられたって心は動かないからね？」

千冬様ときたか。中学時代にそう呼んでいる女子がいたが、なかなか織斑千冬マニアだった。

ならば俺の想像の範疇だ。

俺は勝利を確信し笑ってみせた。

「ほほう、よほど自信があるようだね。それは何か言ってみてごらん？」

「織斑千冬十五歳、入学式にて」

「ええええー！？」

驚きの声は目の前の女生徒だけでなく、この場にいる全員のもではないかという程のポリュームの大合唱になった。しまった、効き目がありすぎた。

「甲斐田君見せて！ それ見せて!!」

後ろから宮崎先輩に思い切り肩を掴まれた。これでもかというほど力が入っていて、おまけに小刻みに震えている。あつという間に周囲を他の先輩方に取り囲まれた。さっきまでの騒がしさはどこへやら、一瞬で空気が張り詰める。俺を見る目が真剣すぎて怖い。

「どうぞ、これです」

宮崎先輩に肩を掴まれていて腕を動かさずらかったが、なんとか胸の内ポケットから写真を取り出して見せる。

餌を要求した先輩が食い入るように見、それから震えながら涙を浮かべた。

「これが……千冬様……」

写真の中では俺や一夏と同じ年の織斑先生が立っていた。もちろん本人なので面影はそのままに、でも今の先輩達よりも幼い織斑先生がぎこちなく笑っていた。有名になる前なので今のように表情をうまく作れていない、素の姿がそこにはあった。

この写真は俺が入学前に揃えた中でも最大級の代物だ。

「見せて見せて！」

どこからか伸びてきた手に写真は取られ、女生徒達の奪い合いが始まった。見た者まだ見ていない者の差は明らかだ。見る前は殺してでも奪い取る状態だったのが、見た途端に顔が崩れて涙を見せる。そして次第に泣き顔が広がっていく。廊下から教室へと雪崩れ込んできた女生徒達は、揃って伝染病にでもかかったかのようにすすり泣きを始めた。

ここは誰の葬式会場だろう。織斑先生は今も元気に生きている人

なのだが。

「がんばるね！ 私ががんばるからね！」

宮崎先輩が泣きながら俺の肩を揺さぶった。

それなら今すぐ作戦を考えてくださいと声を大にして言いたいが、今この場で正常な思考ができる人は俺以外ないのでとても無理だ。

こういうときこそ場に平穩をもたらず聖劍シュツセキボの出番なのだが、と俺はなんとなく思った。

もつとも、本当にやってきたら真つ先に剣の錆となるのは俺なのだろうけれども。

6. もしかしたら俺はとんでもない思い違いをしていたのかもしれない。

もしかしたら俺はとんでもない思い違いをしていたのかもしれない。

教室の様子を見て直感的にそう思った。

一夏は俺の帰りを待ち望んでいたらしく、疲れた顔を見せながらお前早く何とかしてくれと目が必死だ。

どうやら篠ノ之さんにやられたわけではなさそうだ。なぜなら篠ノ之さんも疲れて投げやりな顔になっている。同じくどうにかしろと横目で俺を睨む。

つまり元凶は他にいる。まあ、間違いなく目の前に。

「ようやくぐい帰還のようね」

外に跳ねた癖毛は毎日整えているんだろうか、と何となく思う。無造作に見えて乱雑さは感じられない。

寝坊して寝起きでそのまま来ました、ということではきつとないんだろう。

目の前の相手は俺の目を見て強気に笑い、それから扇子を広げた。そこに書かれているのは『助っ人参上！』

「もう待ちくたびれちゃったわ。この子達は君に話してくれの一点張りだし」

それを聞いて俺は今までの自分の認識が間違っていたことを確信した。俺が三年の教室に行っている間に一夏と篠ノ之さんをこんな疲れた目にしてしまったのは、言うまでもなく目の前の生徒会長だ。

俺は今までこの人は芸人志望だと思い込んでいた。一昨日あれだけ見事に自分の役割を全うしてのけたその姿は、未来の栄光を俺に感じさせるには十分なものだった。

だがそうではなかった。芸人とは人を楽しませる存在。それが人をいびるような真似をするだなんて言語道断もいいところである。もちろん、素人いじりというものはある。が、それは下手な芸人がやっていいものではないし、しばしば見る者に不快感をもたらしてしまう危険な芸なのだ。

生徒会長の様子からして芸としてやったようにはとても見えない。つまり、この人は芸人ではない。

ならばこの人は何者なんだろうか、と即座に俺は考える。

一昨日の食堂での姿は並の人間にできることではない。そもそも普通の人は自分からああいいう風に話を切り出すことなどできないし、その後の俺の理不尽な行動についていつてオチまでつけるという高度な技術は、とても一朝一夕で身につくものではない。俺に慣れている一夏がかりうじて間に入れてくれたくらいで、他の面々は言葉を発するのとさえできなかったのだ。爆笑していた布仏さんはおそらく思考回路が普通の人とは異なっているのだろうが。

ともかく台本なんてどこにもなく、そこには瞬時に判断し行動するアドリブ力が必要なのだ。まして俺と生徒会長は初対面、お互いの呼吸さえ分かっていない。しかも俺は衝動的に行動をしていた。これだけの悪条件の中あれほどの見事な即席の舞台を作り上げたのだ。もしかしたら彼女は俺との相性を感じて相手としてのスカウトをしてくるかもしれない、とまで俺は思っていた。

そしてある考えが頭に至る。なるほど、そういうことか。ならばこちらも全力で応えなければならぬだろう。

俺は生徒会長の挑戦を受けることにした。

「どうしたんですか?」

「ふっ、あなた達がお困りのようだから、力を貸してあげようかなと思っ」

「間に合ってます」

俺は即答した。生徒会長の動きが止まった。

「いや、そんな道端でティッシュどうぞを断るんじゃないんだから、もうちよつとこう、会話の取っ掛かりくらい、ね?」

生徒会長は俺の反応が予想外だったかのようで、二秒ほど固まっただけから困ったように俺に返してきた。

俺に挑戦状を叩きつけておきながらそれくらい読めなかったのだろうか。

「別に困ってもいいので」

「またまた、そんなことはないでしょ？ 模擬戦をやるそうじゃない。それも圧倒的に不利な」

不利な、を強調した。どうやら少しは立て直したようだ。どこから聞いたのかと思うが今ISで学園で話題の男子生徒、それも一夏の話だ。隠しているわけでもないしクラスメイト達の誰かが話せば噂で耳にすることはあるか。

「それが何か？」

「あら、もしかして君、普通に勝てるでも思っているの？ それならちよーつと見込みが甘過ぎると言わざるを得ないわね」

調子を取り戻してきたようだ。弱気になりかけた目に力が入ってきている。

このまま付き合うか切って捨てるか。少し考えて聞いてみることにする。一般的な認識として聞いておくのもいいだろう。

「勝てませんか？」

「あらあら、君達は自分の立場を全く理解していないよね。ISをただ動かすこととISで何かをすることは全くの別物よ？」

だんだん調子に乗ってきた。いや、エンジンがかかってきたというべきか。これは俺も期待に応えなければならぬだろう。

「それくらい分かってます」

「いいえ、君は何も分かっていないわ。でもこういうのはきつと言葉では伝わらないんでしょ？ どう？ 私の言うことが本当かどうか確かめてみない？ 放課後自主訓練をしているならその時のついででいいから。ああ、現実を見せられるのが怖いならそれでもいいけど」

なるほどなるほど。相手のプライドをつついて自分のペースに持ち込もうと。オルコットなら即引つかかりそうだ。

「間に合ってるので結構です」

「えええ!？」

生徒会長は本気で驚くそぶりを見せた。さすがだ。

「いや、断るにしてもその返答はおかしくない？　そういう話じゃなかったと思うんだけど?。」

「そういう話ですよ」

「いやいやいやいや、君達の甘過ぎる認識がどうこうって話よね？　あ、もしかして話をそらしてごまかそうとか考えてる？　それならもう自分でも分かってるんでしょ?。」

生徒会長は必死に話題を戻そうとしている。だが俺は手を緩めるつもりはない。彼女の期待に全力で応えなければならぬのだから。

「まあそんなことはどうでもよくて」

「どうでもいい!？」

「どなたか知りませんが、あなたもしかしてスパイですか?。」

「スパイ!?　というかどなたか知りませんが!？」

もちろん彼女が生徒会長だということは知っている。ついでに成績表も見たので全ての分野においてとても優秀であることも知っている。顔が分かっているし模擬戦に向けての教師候補でもあったのだが、この人面倒そうだし何か嫌な予感がするという一夏の意見により却下されていた。

「だってこのタイミングで話しかけるとスパイとしか思えなくて」

「ええと……待って。とりあえずスパイの前に、私のこと知ってたんじゃないの?。」

「自己紹介された覚えはないですよ?　会話したのは食堂のときだけです」

そう、彼女は俺に対して自己紹介をしていない。このネタを使ってくれと言わんばかりの所業だ。

ならば期待に応えるのが彼女に対しての俺の役割だ。

「ああ、なるほど。そういうことね。それは確かに失礼したわ。私はね」

「いえ、別にあなたが誰かというのはどうでもよくて」

「どうでもいいの!?!」

「問題はあなたがスパイじゃないかってことなんですよ」

「どこからそういう発想が出てくるの!?!」

いけない、これではただのツツコミしている芸人でしかない。もつとがんばれ生徒会長。

「だってここをどこだと思ってるんですか? 教室ですよ? ほら、

対戦相手がそこにいるじゃないですか」

「わたくし!?!」

急に話を向けられてオルコットが本気でビビったかのように大声を上げる。

オルコットの動向が気になっていたので、本当は教室に戻ってから牽制のためにつつこうと思っていた。だが生徒会長の乱入で邪魔されてしまったのでこの際舞台に引き上げてしまうことにする。

「対戦相手の目の前で色々言われるとスパイとして心理戦仕掛けてきたのかなって思いますよ」

「待つてくださいますえ! わたくしはこの方のことなど知りませんわ!」

「知らない!?! 私のこと知らない!?!」

「いえ、そのようなことではなく!」

生徒会長が混乱し始めた。どうやら今日はここまでか。

「私ってその程度の存在だったんだ……」

「もちろんあなたのことは存じ上げておりますわ! 二年で生徒会長の更識楯無さんですわよね!」

「オルコットさん。模擬戦のことで確認があるんですけど」

「今その話ですか!?!」

もう生徒会長がこの場で立て直すのは無理だろうと感じたので、俺はオルコットに話題を振る。どうせならこの状況を利用させてもらおう。

「模擬戦のルールを決めてなかったと思うんだけど、IS学園の一般的なルールでいいよね?」

「それは今話すようなことですか!? 今あなたは生徒会長さんとお話されているのでは?」

「別に僕に用事があるわけじゃないし、それにスパイの人とはあんまり会話はしたくないし」

「だからわたくしは会長さんと繋がってなどいませんわ!」

「じゃあますます話すことはないね。それで模擬戦のルールなんだけど後から変なのを付け加えようとかないよね?」

「何をおっしゃいますか。そのようなことは当たり前ですわ。むしろあなたがそういうことをしでかさないか不安なくらいですわね」

「了解。じゃあそういうことで」

よし、宮崎先輩に言われた通りオルコットにルールの確認をさせなかった。そしてオルコットの認識も理解できた。

さつきまでの俺と同じで深いことは考えていないようだ。

勝つためにも今回はこのままオルコットに舐めていてもらった方が都合がいい。

「お、おい智希……」

「ああ一夏ごめん。勝手にルール決めちゃった。でも別に不利になるようなことはないから大丈夫だよ」

「そういうことじゃなくてだな……」

一夏の気の毒そうな目は放置されて涙目になっている生徒会長に向いていた。

生徒会長はいつも自分のペースだけでやってきたのだろう。だが世の中において自分のペースだけでうまく進むことはむしろ少ない。そこでどう対応していくかは彼女の人生においても大事なことだ。そして俺に求められているのはきつとそういう部分なんだろうと思う。

「ああ、もうそろそろ授業始まりますよ?」

「……」

目が合うと彼女はとても恨みがましい目で俺のことを睨んできた。その眼の奥には力がある。

「これで終わりだなんて思わないことね!!」

そう言い残し、生徒会長は脱兎のごとく駆けて行った。

よかった。彼女はこの程度で折れてしまうような弱い人間じゃない。次はもっと成長して俺の前に現れるだろう。もちろん俺はそれに対して全力で応えるつもりだ。

「か、甲斐田……？ さすがに今の扱いはひどいと思うのだが……」

一夏ではなく、篠ノ之さんが俺に向かって言ってきた。二回目についてこれるようになったのか。さすがは一夏の幼馴染だ。

「大丈夫。彼女はこの程度で挫けたりなんかしない」

「いや、あれは大分堪えていたと思うぞ？ とうるかそれ以前にお前はまた意識して今のをやったのか？」

俺は生徒会長が去った入り口を見つめる。

「大丈夫だよ。だって彼女は」

「彼女は？」

「生まれながらの女優なんだから」

篠ノ之さんは訳が分からないという顔をし、なぜか布仏さんが爆笑した。

「誰にも見られなかったでしょうね？」

開口一番、指揮科三年の宮崎先輩は俺達にそう言った。

「いや、見られるも何も先輩達がここまでの道を封鎖してたじゃないですか」

困惑しながら一夏が返事をする。

俺と一夏とあと篠ノ之さんは夜、寮の会議室に呼ばれていた。

「いいえ、完璧なんてことはありえないの。常日頃から本人も意識して行動しないと」

先輩方は完全にノリノリだった。

学生寮にある会議室は本当に作戦本部となってしまう、入り口の扉にはOperation K本部につき一般生徒の立入禁止、と張り紙が貼ってあった。

部屋の中は口の字に机が並べられ、先輩方が真剣な表情で座ってい

る。

俺達に声をかけたリーダーの宮崎先輩は入り口から一番奥、ホワイボードを背に立っていた。

「智希、いったいどういうことになってるんだ？」

「さあ」

「待て甲斐田、これはお前がしでかしたことはないか！」

そんなことを言われても、放課後俺は相変わらず織斑先生に拉致されている。今日何が行われたのか一夏達よりも把握していない。

一夏が言うには放課後篠ノ之さんとアリーナで自主訓練をしていたら先輩らしき人達がぞろぞろとやってきて、一夏達の観察を始めたそう。居心地が悪くて全く集中できなかったとのことである。

先輩達はそのうちに訓練する一夏をじろじろと見ながらひそひそ話を始め、異様な雰囲気にならず一夏と篠ノ之さんは訓練を早々に切り上げてしまった。

お陰で俺がアリーナへと着いた時には誰もおらず、寮に戻って一夏達から今度は何をしたと詰問を受けることになった。

三年の先輩方の協力を得られたことは話していた。夜まで作戦を考える時間をくれと言われていたので今日は一夏達には関係ないかなと思っていたのだが、どうやら先輩方はやる気全開になっているようだ。あの写真がそこまでの効果をもたらしたかどうかは分からない。

そして今作戦会議だということと呼ばれて会議室まで連れて来られたところだ。

「とりあえず座って。時間もないしすぐ始めるから」

言われて俺達は目の前の席につく。ノリだけでここまで大掛かりにしてしまうとは、この人達は本当に暇なのだろうか。

もちろん、ありがたいと思うし感謝はしているけれども。

「では会議を始めましょう。まず最初に、このOperation Kは来週行われる模擬戦で織斑一夏君に勝利させることを目的とします」

まさか前口上から始めるとは。いったいどこまでやる気なんだろ

うか。

「オペレーションKのKって何だ？」

「さあ」

「甲斐田のKではないのか？」

私語を始めた俺達を先輩が真剣な顔で見据える。慌てて姿勢を正した。

「相手はセシリア・オルコットで一年生。ただしイギリスの代表候補生で専用機まで持っている。対してこちらはおそらく専用機は間に合わず、量産機をもって戦わなければならない」

作戦会議とは分かりきったことを改めて言う必要があるのだろうか。一夏がさつそく退屈してきているようだ。

「で、どうやって勝つかの前に、私達は相手との差をはつきりさせなければならぬ。何よりまずは機体の性能の差よね。椎葉」

一夏の様子を見たのか宮崎先輩は話を端折ったようだ。

呼ばれた女生徒が立ち上がる。

「整備科の木城椎葉よ。今回織斑君の機体は主に私が見るわ。よろしくね。それで相手の専用機のことなんだけど、カタログでのスペックはもう把握してる。実験機とはいえ最新の機体ね」

おや、そんな情報をどこで手に入れてきたのだろうか。他国の実験機の性能なんてそんな簡単に分かるものとは思えないのだが。

「二年にイギリスの代表候補生がいるの。その子は専用機は持ってないんだけど、伝手はあるからそこから手に入れたわ」

「いや、そういうこととして大丈夫なんですか？ その、他国の情報とか？」

「ああ、サラ、そのイギリスの子はあの写真を見せたら即答してくれたわ」

それでいいのだろうか。いや、これは突っ込みまい。

「というのは半分冗談で」

いけない、半分だけかかと危うく声を出して突っ込みそうになってしまった。

「対戦相手のオルコットさんの今回の行動はイギリスにとってよくな

いみたい。初心者に喧嘩売ってる時点でどうかって話だし、しかも売った相手が相手だからね」

整備科の先輩はそう言っで一夏を見る。正確には売り言葉に買い言葉のだが、俺も細かくは説明していない。外から見ればオルコツトが初心者に対していじめのごとく喧嘩を売ったように見えたのだろうか。まあ勝ち目がないのを分かっているながらあえてこちらから喧嘩を売るといふのは考えにくいのもかもしれない。

「で、裏で情報とか渡して、私達がバックについたので勝てましたって形にすればイギリス的には一応許容範囲にできるみたい。個人の問題にして、調子に乗った子に代わりにお灸をすえてもらったって感じ？ もらった情報も公開できる範囲のものだし、後で問題にならないようにはしておくから」

後から文句を言われなければこちらとしては特にどうこう言うつもりもない。織斑先生からすれば調子に乗っているのはむしろ一夏の方だろう。というか仕掛け人の織斑先生が何も考えていないとは思わないので、明日にでもちらつと聞いておこうか。

「まあそのへんはこっちが勝手にやったことなので君達は気にしないでいいわ。それでその専用機んだけど、名前はブルーティアーズ、タイプは中距離射撃型ね」

おっと、とても気になる情報が入ってきた。一夏も体を乗り出して聞いている。さすがに自分が戦う相手のことだけに真剣な表情だ。

「細かいことは理解できないだろうから簡単に言うけど、本体が持つレーザー系の射撃武器に加えてビットと呼ばれる自律型の兵器からも攻撃が飛んでくる。イメージとしては同時に五六発ぐらいのレーザーが織斑君に向かってくると思っただけ」

一夏は目をつぶって想像しているようだ。難しい顔をしている。こつちが一発打つ間に相手に五六発撃たれてしまうのは確かに厳しそうだ。

「だから一対一で正面からぶつかるのはちよつと無理ね。一方的に削られて何もできずにおしまい。きちんと対策をした上で向かい合わない」

「それにはどうすればいいんですか？」

間髪入れずに一夏が突っ込む。模擬戦のことに実感が湧いて身近なものとなってきているようだ。

「焦らないで。みんなで色々考えているんだけど、私は整備科だからまずは機体の話。織斑君はどの機体に乗って戦うべきか」

「機体って言うと……」

「量産機の種類のことね。このIS学園にあるのは三種類、日本の打鉄、フランスのラファール・リヴァイブ、イギリスのメールシュトローム」

本当に俺は何も考えていなかったなと思う。織斑先生に打鉄と言われてそれしか頭になかった。

「どれが一番強いんですか？」

「それはもちろん一長一短、と言いたいところだけど、今回に限ってはメールシュトロームはやめておいた方がいいと思う。メールシュトロームは第二世代でも初期の方だし、何よりブルーティアーズが同じ国のISでしかもあらゆる点で性能はあっちの方が上だから。あ、もちろんこだわりとかあるなら話は別だけど」

「別に何でもいいので、それならメールシュトロームはやめておきます」

ああ、そういえば今しがた思い出した織斑先生の言葉は伝えていなかった。

「あの、織斑先生は打鉄使えって言ってましたが」

「そうだった？」

「正確には打鉄でも使え、だな。一夏、自分のことなのだぞ？ しつかり聞いておけ」

あの時一夏は頭に血が上っていたから多少は仕方ない部分もあるだろう。

それを聞いた整備科の先輩は腕を組んで何事かを考え、それから別の女生徒に声をかけた。

「美郷、パイロット科的にはどう思う？」

「それはもちろん一長一短だけど、織斑先生の言った意味は分かる」

「どういうこと？」

声をかけられたパイロット科の先輩は一夏を見た。

「つまりね、織斑君に難しいことはできないから、もう葵持って何も考えずに突っ込めってことだと思う。打鉄なら防御も一番高いし、耐えて耐えて一発でも当ててみろってことじゃないかな」

「葵って誰ですか？」

一夏が反射的に出した声を聞いて、先輩方から失笑らしき笑いが出てきた。

「ごめんね、葵は打鉄の装備でブレード、剣のこと。織斑君も今日訓練で使ってたよね」

「ああ、あれのことですか。そういえば葵って出てたな……」

言った後一夏は自分の発言の間抜けさに気づき、ちよつと赤くなつた。

篠ノ之さんも知らなかったのだろう。同じことを考えていたらしく下を向いた。ちなみに俺は知っている。

「そうすると打鉄の方がいいんですか？」

「どうしてそう思うの甲斐田君？」

「え、だって、織斑先生的にはそっちの方が可能性あるってことじゃない？」

「うーん、昼も思ってたけど君はちよつと素直過ぎるなあ」

宮崎先輩からダメ出しされてしまった。これも疑うべき所だったのだろうか。

「甲斐田君は相手の発言の理由、意味を常に考えるようにした方がいいわね。この場合織斑先生がそう言ったのは、君達が何も考えていなさそうだから。小細工する頭がないならもう何も考えずに剣一本で突っ込みなさいというアドバイスよ」

馬鹿にされてちよつと頭にくる言葉だが、実際その通りなので何も言えない。あの時何も反応しなかった時点で織斑先生はきつと俺達に呆れていただろう。

「じゃあどうすればいいんですか？」

一夏が少し不満気に言う。まあ一夏も俺と同じ気分ではあるのだ

ろう。

そんな表に出さなくてもいいのにと思いはするが。

「美郷」

「はいよ。織斑君、今ので気を悪くしたかもしれないけど、君が初心者だというのはやっぱり事実なんだ。放課後に訓練を見させてもらったけど、君は本当にただISを動かせるだけで、高度な作戦をやってもらうには技術も経験も何もかも足りない。あたしはパイロット科だから今の君の立場に一番近いけど、ほんの数日で君が作戦をこなせる水準の技量に達するのは不可能だと断定させてもらう」

「はい」

一夏は真つ直ぐにパイロット科の先輩を見据えた。さすがに一夏も真剣に言ってくれている人に対してふて腐れるような態度を取るようなことはしない。

「正直ね、パイロット科としての意見ならラファールを使った方がいいんだ。なぜならラファールは多彩な武装を使えるから、それだけ戦術に幅ができる。でも、今の織斑君にはそれを使いこなせるだけの技量がない。よって結論、打鉄に乗ってシンプルに相手をぶっ叩くことを目標としましょう！」

「分かりました！」

一夏は力強く頷いた。そこには何の迷いもない。こうなつた一夏は精神的にもとても強く、十分に期待のできる姿だ。

「甲斐田君」

「はい？」

「私達が打鉄を使うことにしたのは織斑先生に言われたからではない。織斑君のことを考えて、勝率が一番高い方法を選んだ。違い分かるよね？」

「もちろんです」

「よろしい」

誰々に言われたからそうしましたではただの思考停止だ。たとえ同じ結論であろうと自分の頭で考えた上で判断を下さなければならぬ。

「よし、機体が決まったね。それじゃあ整備科はこれから全力を上げて打鉄の改造に取り掛かることにしましょう！」

今この場がすごくいい雰囲気になっていたのに、整備科の先輩がいきなりマッドサイエンティスト的なことを言い始めた。

「椎葉、それどうするかもう決めてんの？」

「うん、だから今その方向性を決めないとね。時間ないから試行錯誤はできないし、もう決め打ちで」

「というかそんなことをしていいんだろうか。使っていていいとはいえない。ISはIS学園のもので、授業とかで普通に使うと思うのだが。」

「甲斐田君、そんなこととしていいのかって顔してるね」

宮崎先輩にはさつきから心を読まれてばかりだ。

「えーと、実際どうなんですか？ 模擬戦的にあるのかとか、改造したままでいいのかとか」

すると先輩は不敵に笑った。

「大丈夫、なぜなら模擬戦のルールにISを改造してはいけないとは書かれていないから！」

なんか胡散臭いこと言い始めた。

「こういう時のルールっていうのはね、何かを制限するために決めるんだ。実際にモンド・グロツソなんかの世界大会では機体に関する細かい規定がある。でも今は学生の遊びみたいなものだからね。相手がダメって言わないことは全部ありなんだよ。もし文句言われたらルールを盾にすればいい」

それ相手がふざけんなど怒るだけじゃないだろうか。

「純粹に技術だけを競うのであれば機体その他の条件は全て同じにしなければならぬ。今回相手が専用機を使う時点で、機体に関することは自動的に全部フリーになるんだよ」

何となく屁理屈な気がしないでもないが、確かにこつちにはあいつだけ専用機なんか使いやがってという気持ちがなくもない。よし、もし文句を言われたらお前って機体の性能に頼らないと何もできない情けない奴だなどでも罵って有耶無耶にしておこう。

「分かりました。でも改造したままで授業とか大丈夫なんですか？」

もう一つの懸念も出しておく。

まあこの調子だときつと大丈夫なんだろうが、今後自分でそうすることがあるかもしれないので一応聞いておこう。

「ふっ、整備科を舐めないでいただきたいものね。授業で使うのであればその前に元の状態に戻してしまえばいい！」

なんだろう、この人達はテンションが上がってくるとみんな芝居がかってくるのだろうか。

もしかして生徒会長は常時テンションが高いだけの人だったりするのだろうか。いや、さすがにそれは常人にはできない所業だろうか違うか。

とりあえず返答は意外と普通だった。技術的にどれほどのものかは分からないが、本人がやると言うのであればとやかくは言うまい。

「というわけで美郷、パイロット科的にはどっち方面の改造がいい？」

「おう、それならできるだけ攻撃と機動を強化して欲しい。装甲を削ってでも機動性重視。あと葵の打撃性を上げて一撃を重く」

「それ打鉄の利点を消しちゃうよ？ タフなのが打鉄の一番の売りなのに」

「織斑君の訓練を見ててみんなで考えたんだけどね」

と、パイロット科の先輩が一夏を見る。

「織斑君って何かスポーツとかやってた？」

「いや、小学生の時にちよつと剣道をやってたくらいで」

「ふーん、にしちゃあ動きが速かったんだよね。それに無理やり動かしてただけなのに綺麗に動けてた」

「はあ……」

一夏が不気味がっていたが先輩達はしつかりと一夏の動きを見ていたようだ。

「もちろん力の入れ方とか無駄だらけで初心者は初心者なんだけど、身体能力はかなりいいと思う。だから今回はそのメリットを最大限に活用して機動性で勝負する」

「耐える方向じゃないんだね。相手の燃費を考えたら持久戦でそつちかなと思ってたんだけど」

あ、一夏が話についていけなくて頭がショートしかけている。ついでに篠ノ之さんも。

「二人とも、織斑君達ついて行ってない」

「あ」

「あれ、割と一般的な話のつもりだったけど、一年生には難しかった？」

一夏は初心者どころかISに関する勉強を全くしていないので、まず単語の時点についていけない。そういえば篠ノ之さんはどの程度なのだろうか。

「えーっと……我慢して我慢してうりやー！　じゃなくて、よけてよけて食らいやがれ！」

「なるほど」

「そういうことか」

二人ともそれで納得してしまうのか。俺はうりやーとか言われてもかえって意味が分からないのだが。

「気にしなくていいよ甲斐田君。あれはあれで正しく伝わってるから」

「はあ……」

どうやら宮崎先輩はこちら側の人間らしい。IS関係者がみんなあっち側だったらどうしようかと思った。

「おっと、もうこんな時間か。じゃあ今日はこのくらいにして、具体的な細かい話はまた明日以降にね。そのうちレポートにでも纏めて甲斐田君に渡しておくから」

「それは助かります」

「訓練内容とかスケジュールは時間ないしこっちで決めておくね。織斑君と篠ノ之さんは毎日放課後にアリーナ集合で。昼休みは……まあ今のうちはいいいよ。状況次第で追加するかもしれないけど」

「了解です」

「あ、あの」

と、篠ノ之さんが手を挙げた。

「何か質問？」

「その、私の役割は何なのでしょうか？ 模擬戦を戦うわけではないですし、訓練相手にはもうならないでしょうし……」

「ごめん！ 肝心なこと言うの忘れてた！」

宮崎先輩が両手を合わせて謝る。

「篠ノ之さんはね、基本的に織斑君と同じ訓練をする。それで織斑君が休憩で体を休めてる時にも動いてもらって、それを織斑君に外から見てもらおう。織斑君は篠ノ之さんの動きを見て自分がどう動くべきかを客観的な視点で理解する。つまり篠ノ之さんは織斑君の見本になるってこと」

「それを私が？」

「私達がやるとうまく動いちゃうから悪い部分が見えないの。篠ノ之さんなら初心者がりやがちな動きとか隙を織斑君に自覚してもらうにはちようどいいと思うから。織斑君よりもちよつと大変かもしれないけどね」

「私が……」夏の見本に……」

篠ノ之さんが宮崎先輩の言葉を噛みしめている。

うまいな、と俺は感心した。

自分がんばることがそのまま一夏のためになる。

こんな篠ノ之さんをやる気にさせる役割はない。

一緒に訓練していれば……程度にしか考えていなかった俺はやはり全てにおいて考えが浅かったと自戒しよう。

「よろしく頼むぜ箒！」

「ああ、任せておけ！」

二人とも完全にやる気に火がついている。そしてそれを宮崎先輩がにこにここと眺めている。きつとこの人はそのへんも見越しているのだろう。

俺も経験を積みばそこまで頭が回るようになれるのだろうか。

ともかく、これで模擬戦までの道はできたと思う。

後は勝利という頂までたどり着けるかどうかだ。

もうほとんど俺の手から離れてしまったが、これから何か俺にできることはあるのか。

せいぜいがオルコットを煽って当日まで調子に乗らせておくぐらいだろうか。

いや、超重大なことを忘れていた。

こんな七面倒なことをしているのは全て、一夏にハーレムを作らせるためだった。

つまり、一夏の輝かしい勇姿を見せることができそうなこの状況、クラスの連中だけにしておくのはちよつともつたいたいではないか。

生徒会長も知っていたし、他のクラスや上級生でも知れば見たいと思う女子はいるだろう。

そういう人達も集めて、さらに写真や映像……いける。

よし、俺も燃えてきた。

さあ未来の一夏の嫁達よ、一夏のIS学園デビューはもう目の前だ。

7・学生の日常とは毎日同じだと思えば同じだし違うと言えば違う。

学生の日常とは毎日同じだと思えば同じだし違うと言えば違う。

昼は授業を受けて、放課後は織斑先生の手伝いをして、夜は作戦会議と勉強。

こう言葉にしてしまうと変わり映えのない毎日ということになるのだろう。

だが授業は日に日に先に進んでいくし、手伝いはやることがどんどんややこしくなっていく。作戦会議ではいちいち今日の成果的なことが確認され、先輩達は一夏と篠ノ之さんにきちんと進歩していることを褒めていた。

先輩に聞いてみると、同じことの繰り返しだと思ってしまうとそこでもう成長がなくなってしまうのだそう。地道な作業とはしばしば退屈で、手を抜きがちになってしまう。だから常に変化を意識して行動をすることが重要になるとのことである。

一夏は割と集中力が続かないタイプで、同じことを繰り返しているとそのうち飽きてくる。だからこうやって口に出して意識をさせる必要があるそう。なるほどと思った。

ちなみに篠ノ之さんの集中力はとてもすばらしいものであるらしい。

一方で、織斑先生の機嫌が日に日に悪くなっていつている。

倉持技研のお願いという名の攻勢が止まず、毎日恒例となつてしまった俺への説教が心なしでもなく明らかに厳しくなっている。

その上俺は火に油を注いでしまう。イギリス代表候補生のオルコットが男性IS操縦者である一夏に喧嘩を売って大丈夫なのかと聞いてしまったのだ。

すると織斑先生は悪鬼のごとく目を吊り上げて一言、絶対零度を感じさせるかのような冷えきった声を発した。

「貴様だったか」

俺ははつきりと自分の失言を悟ったが後の祭り、その場で正座を命じられた。

聞けばイギリスのIS関係者から問い合わせと謝罪が飛んできたそうだ。

織斑先生は内々で処理するつもりだったようで、俺は余計なことばかりしでかしてくれる生徒として認識され、めでたく栄光あるブラツクリストの第一号として先生方の脳内に記録されることとなった。

俺がその場で正座させられたままいつもにも増して厳しい説教を受けたことはさておき、この模擬戦が特に問題となることはないそうだ。

元々このIS学園は国家の干渉を一切受けないという取り決めがある。

だから極論IS学園で何が起ころうと、国家は元締め of IS委員会に文句を言うくらいしかできない。

とはいえ自分の国の人間を送り込んでいる以上はとても気になるようで、言うだけならタダだとばかりに自国の生徒などを通じて色々言ってくることは日常茶飯事らしい。

倉持技研が強気に出ているのも後ろに日本という国がいるからだそうで、これでイギリスまで前に出てくるとややこしいでは済まなくなるので絶対にこれ以上余計なことはするなと、俺は強く強く釘を差されてしまった。

ということと今のところは、オルコットがちよつと調子に乗っている、くらいで済んでいるようだ。織斑先生がオルコットを庇ったらしく、模擬戦がどうなろうとオルコットの立場に変わりはないそうだ。

とはいえオルコットの俺と一夏を睨む目が強くなったので、きつと怒られるのだろうか。

表向きは平和な毎日だが、裏側では色々と騒がしいことになっているようだった。

入学前に時間割を見て驚いたのだが、このIS学園、なんと土曜が休みではない。つまり、連休がほとんどないのだ。

そんなことありえるのかと思ったが、しつかりとカリキュラムには書かれていた。どうしてそうなっているのかと言うと、IS学園は学校としては高等学校にあたる。なので高校で学ぶべきことに加えてISに関する授業を加えると平日だけでは枠が足りないそうなのだ。従って土曜も午前中は授業が行われることになっている。俺と一夏がいる一年一組はIS実技の授業だ。

そして今、全部俺任せにして理解していなかった一夏が目の前でブツブツと文句を言っている。今までは土日遊べたのにと、子供のよう

に不満気な顔だ。
俺としては正直模擬戦に向けての訓練をしたかった。模擬戦が明日に迫っており、余裕はもう全くない。先輩達がスケジュールを組んでくれているとはいえ、そもそも厳しいことに変わりはないのだ。できることなら今日だけ自由にさせてくれと言いたいくらいだし実際言ってみたのだが、当然のごとく一蹴されてしまった。

先生達が来るのを待ちながら、なんとなく周りを眺めてみる。
中学時代の男友達、弾や数馬がこの光景を見たら泣いて喜んだらろうなと思う。

俺や一夏も含めたクラスメイト達は全員ISスーツを着ている。見た目的にはつまるところ水着だ。全身を覆ったウエットスーツと言う方が近いだろうか。

水着を着て広々としたアリーナ、すなわち訓練場にいるというのは何となく変な感じがしなくもない。

その中でオルコットは専用機持ちだからかISスーツまで特注のようだ。俺達は紺色なのだがオルコットだけは青に近い。と、俺の視線を感じたのかオルコットが体を背ける。この女はやはり自意識過剰だなと思った。

やがて先生達がやって来て授業が始まる。

入学して初のIS実技の授業だからか、クラスメイト達はテンションが非常に高い。

最初はISを起動して実際に動かすという練習だったが、みんな興奮して騒がしいことこの上なかった。望んでようやくここまで辿りつくことのできた人達だ。念願のISに触れて嬉しくて仕方ないのだろう。ISを起動させてその一挙一動に感動している。きっと今日の夜は興奮して寝られないのではないだろうか。明日が日曜でよかったなど他人事のように思った。

オルコットは俺達と関わらない分には普通で、今はクラスメイトがISを起動させる補助をしていた。初日に一夏に喧嘩を売ったものの、オルコットは自然とクラスに馴染んでいた。

そして一夏の周りには当然のごとく人だからができています。一夏が毎日自主訓練をしているのはみんな知っているので、慣れている一夏に教えてもらおうという口実で抜け目ないクラスメイト達が一夏に近寄って来ていた。念願のISに触ることよりも一夏を優先するとは見上げた根性だと言うべきだろうか。相川さんなどは最初のポジション取りから計算して一夏のすぐ側にいたようだ。

一夏も人に頼られるのは嫌いではないので割合機嫌よく教えていたが、この場に一人だけ、非常に機嫌の悪い人物がいた。

もちろん俺ではないし、織斑先生も内心はどうあれ教師モードでいる間は感情を露わにすることはない。

それは今俺の隣に立つ、篠ノ之さんだった。

授業が始まる前とは打って変わって、みるみるうちに不機嫌度のポルテージが上がっていつている。目が釣り上がり、今も一夏に向けて怒りの視線を突き刺し続けている。

言うまでもなく、一夏が女子に囲まれて楽しそうなのが気に入らないのだ。

ここ数日の放課後の訓練で一夏と打ち解け、篠ノ之さんの方もかなり態度が柔らかくなっていった。基本が仏頂面なのは変わらないが、時折笑顔を見せるようにもなり、一夏に褒められた時などは顔を真っ赤にして照れていた。その時の姿は大和撫子恋する乙女、とでもいう感

じだろうか。

女心を理解しない一夏でも相手が照れていることくらいは分かる。照れる篠ノ之さんとそれをからかう一夏の姿は、傍目から見れば幸せなカップルそのものだった。

「いいなあ、羨ましいなあ」

「憎い……リア充が憎い……」

「まさかIS学園でこんな光景があるとは思ってなかった分、何倍も悔しい……」

一夏達を教える先輩方は血の涙を流さんばかりだった。きつとその時の訓練中はいつもより力が入っていたと思う。

ちなみに俺はそれを見てとぼつちりを受ける前に即逃げた。

とまあそんな状況だったので、篠ノ之さんはもう一夏の恋人気分になつていたので。目の前で女子と楽しく話している一夏に腹が立って許せない。

そして一夏とは女心を一ミリも理解できない男だ。いくら篠ノ之さんが怒りの視線を向けようと、一夏はまるで意に介さない。昔からその手の視線を浴び続けたこともあつて、受け流すどころか今では意識さえしていないようにも見える。篠ノ之さんはそれを無視されたように感じてますます怒りの度合いを高める。なんとも言えない相乗効果が生まれていた。

入学初日の時点で篠ノ之さんが一夏を好きなことはおそらくクラス全員が分かっていたと思う。誰も話しかけなかった午前中はともかく、昼以降一夏と話すようになってから篠ノ之さんの態度は誰の目にも明らかだった。もちろん当人である我らが織斑一夏は除く。

一方で、篠ノ之さんの態度が丸分かりであるように、一夏の態度もはつきりしている。つまり、一夏の方に篠ノ之さんに対する恋愛感情がまるでないのもまたクラスメイト達は理解している。

だからこそ今のこの状況は本当にたちが悪い。つまり相川さん他今一夏の周りにいる女子は、篠ノ之さんの気持ちを分かった上でああやっているのだ。平たく言えば、篠ノ之さんに見せつけている。楽しそうにしてみせることで、まだ一夏は篠ノ之さんのものではないぞ、

と言っているわけだ。

まあ、相川さん達からすれば彼女でもないのに一夏を独占し過ぎだと主張したくなるのは理解できなくもない。

そうやって女達の戦いは言葉を交わすことなく行われていた。

そしてここからが俺の番だ。

一夏ハーレムを目論む俺は、篠ノ之さんがこういう状況を受け入れられるように変えていかなければならない。

純愛志向をなくしてしまえば篠ノ之さんは一夏にとっての正妻、もしくは第一夫人的な立場としてふさわしい人だ。今のところではあるけれど。

そして相川さん達には悪いが、彼女達は今のままでは一夏にとってのクラスメイトから一步も先に進むことができないうだろう。努力しているのは認めるが、篠ノ之さんに牽制などしているようでは今後自滅していく未来しか見えない。中学時代によくあった、一夏に迫った末玉砕するパターンにはまりかけているが、果たして自分の力で気付けるか。気付くようなら俺は協力を惜しまないつもりではある。もちろんハーレム容認は絶対条件だが。

ともかくまずは篠ノ之さんだ。他のクラスメイト達は念願のISに夢中で、織斑先生も気づいてはいるだろうが何も言っていない。ISの起動はもう俺も篠ノ之さんも普通にできるので、やる気がないなら勝手にしているということなのだろう。

ならば文句を言われるまでは好きにさせてもらおうということだ、俺は篠ノ之さんが気付くよう目の前に立って声をかけた。

「篠ノ之さん」

「どうした甲斐田、いきなりにな？」

「ISの起動訓練はやらないの？」

「私は放課後の自主訓練の際に散々やっている。甲斐田こそやらなくてよいのか？」

「僕も偉い人達の前で何度もやらされたからね。一夏と同じで」

篠ノ之さんは一夏という単語に反応するも一夏の姿は俺が邪魔で見えない。

不機嫌な顔をそのままに俺を睨んだ。

「だったら大人しくしている。織斑先生に怒鳴られたいか？」

「人をひたすら睨んでる方が怒られると思うよ」

「何が言いたい？」

篠ノ之さんは眉を吊り上げる。これを不意打ちでやられたら身がすくんでしまいそうだ。こここのところ織斑先生に怒られ続けて慣れてきたかと思っていたが、人間の原始的な感情というのはやはり相当に強固なものらしい。

「篠ノ之さんてさ、一夏の何？」

「どういう意味だ？」

「関係」

「それは……」

「幼馴染でいいんだよね」

「まあ……そうだ」

さすがにここで恋人だと言い出す程に思いつめてはいなかったようだ。恋人だと言い切るようならかなり危険な状態だったが、まだまだ理性は生きている。

「その幼馴染の篠ノ之さんは、どうしても一夏を睨んでるの？」

「それは……」

篠ノ之さんは顔を背け言いよどむ。傍目にはバレバレでも、本人は自分の感情が駄々漏れだとは欠片も思っていない。このあたりが相川さん達に子供扱いされてなめられるところではある。

「一夏が女子に囲まれて楽しそうなのが気に入らない？」

「……！」

凶星を突かれすぐに顔を上げて驚きの目で俺を見る。そんなどうして分かったた的な顔をしないで欲しい。一夏以外はみんな分かっているのだから。

「一夏が女子にモテるの知らなかった？ 六年前はそうでもなかった？」

「そうなのか？ いや、あまりそのような覚えは……」

これは意外だった。一夏なら小学生時代から女を惹き付けまくっ

ていると思っていた。今度一夏から当時のことを聞いておこう。

「へえ、そうだったんだ。じゃあ説明しておいた方がよさそうだね。一夏は女子だらけのIS学園にいるからモテているんじゃないよ。ここだろうとどこだろうと、一夏は女子にすごく好かれてる。中学時代からずっと女子に囲まれてるね」

「そうなのか!？」

ちよつと盛った。中学時代は基本男でつるんでいたのでいつも囲まれていたわけではない。それに女子を追い払う番犬もいた。もちろん誰よりもモテていたのは紛れもない事実だが。

「だからあれは別に珍しいことでもないよ。いつもの光景って言えばその通りだね」

「そんな……まさか一夏が……」

篠ノ之さんは本気でショックを受けている。これだから純愛思想は害悪なのだ。自分が素敵だと思う相手は他人から見てもそう見えるのだ。自分だけがなんてありえない。

「だからいちいち目くじら立てるようなことでもないよ。僕からしたらあまたか、つて程度の話かな」

「いや……だがしかし……」

もちろん俺は篠ノ之さんが納得できないのを承知で言う。今はまだ無理だとしても、いずれは当たり前のものとして受け入れてもらわなければならない。まずは事実を事実として認識させなければ。

それに篠ノ之さんには入学初日の前科がある。一週間見ていてどうも篠ノ之さんは予想外の事態に弱そうだ。またパニックになって一夏に新たなトラウマを植え付けられても困るので、俺も日々注意して見ておかなければならない。

「でも篠ノ之さんって本当に一夏の幼馴染なんだね。女子で一夏にここまで信頼されている人は初めて見たよ」

「ほ、本当か!？」

不安の海に沈んでしまいそうになっていた篠ノ之さんへ、俺は蜘蛛の糸を垂らす。

当然の如く篠ノ之さんは飛びついた。目がもう必死も必死だ。そ

う仕向けたのは他ならぬ俺だが。

「篠ノ之さんと一緒に訓練している一夏を見れば普通に分かるよ。あ、そうか、篠ノ之さんは最近の一夏を知らないんだもんね。篠ノ之さんには当たり前なのかもしれないけど、あの一夏の態度を見てるとやっぱり篠ノ之さんは特別なんだなあと思うよ」

「そそそそつ、そうか！ 私は特別か……！」

希望を取り戻した篠ノ之さんは両手を強く握り、体が小刻みに震えている。

相変わらず盛つてはいるが、俺も嘘は言っていない。初日の篠ノ之さんの一夏に対する所業を考えれば、一夏にとって篠ノ之さんが近い位置にいるのは明らかだ。あんなトラウマレベルの恐怖を与えられたら普通は次の日から避けられて当然だ。だが一夏はその後も何事もなかったかのように篠ノ之さんに接していた。それは一夏の姉織斑先生に対する態度と同じように見えたので、おそらく篠ノ之さんは一夏にとって家族のカテゴリに含まれているのだろう。

だから篠ノ之さんが特別だと言うのは全くもって間違いではない。

一番の問題は、それは篠ノ之さんが求める恋愛感情ではないということなのだけれども。

もちろん俺はまだそんな残酷な真実を告げるつもりなどない。今のは篠ノ之さんに対する飴だ。

生徒会長と違って篠ノ之さんは精神的にそこまで強くはなさそうなので、時々ご機嫌取りをした方がいいだろう。そもそも人間の感情は長く続かないし、女という生き物はその場その場でコロコロ気分が変わるものだから。

「だからさ、そうやって一夏を睨むのはよくないと思うよ」

「ん？ どういうことだ？」

妄想の世界に浸かった挙句暴走されても困るので、俺はほどほどで篠ノ之さんを現実へと引き戻す。

完全に機嫌の直った篠ノ之さんは素直な顔で俺を見た。この顔を一夏に対して普通に出せれば、もっと一夏も気を許すだろうなと思っただけ。

「ああやって一夏が女子に囲まれてるとそれを睨む女子がたくさんいるんだ。男が嫌いだっていう人もいるし、先を越されたって嫉妬している人もいる。今一夏に気付かれなくてよかったね。もし気付かれてたら一夏は篠ノ之さんのことをなんだ他の女子と一緒に考えたと思うよ」

「そ、そうだったのか……」

これは明確に嘘だ。一夏は自分の方からはつきりと意識して目を合わすでもない限り、他人の視線など全く意に介さない。

あえて嘘を言ったのは、篠ノ之さんに自制させて怒りの感情を表に出させないようにするためだ。

いちいち相川さん達の挑発に乗っても何の得もないし、睨んでいたら本当に憎くなってしまうことだってあるかもしれない。

それに何よりも一夏ハーレムのためには当たり前前のこととして受け入れてもらう必要がある。

と言ってもあまり体の中に溜め込まれてある日突然爆発されても困るので、適度に話を聞いて発散させようとは思うが。

「篠ノ之さんを見てると昔の一夏とのギャップに戸惑ってるみたいだから、何かあったら言っつてね。相談には乗るから」

「ありがとう。これからもよろしく頼む」

そう言うのと篠ノ之さんは綺麗にお辞儀をした。

まずは信頼関係を作るところから。

俺は別に篠ノ之さんを不幸にしようとは思っていないし、一夏とうまくいくことを後押しするつもりだ。ただ、一夏を独占することはさせないというだけなのだ。

そこだけ譲歩してくれば全力で応援するのだが、この女性上位な世の中、逆方向へと人の意識を変えさせるのは相当に難しいんだろうな、と常々思っている。

だからこそやりがいがあり、今の俺にとっての最大の生きがいだ。

そしてついにその日がやって来た。

週が明けて月曜日、模擬戦の日だ。

一夏はその日の朝もいつも通りの姿で起きてきて、体調は大丈夫かと尋ねると、聞くまでもない笑顔を返してきた。

「だって衛生科の先輩達に毎日うるさいくらい言われたもんな」

できることはなんでもやりたいと希望を言った結果、三年の先輩方は本当にありとあらゆる部分に気を遣ってくれていた。

整備科が機体のスペシャリストなら衛生科はISパイロットの体に関する専門家だ。食事から睡眠から日々の生活の細かな部分にまで衛生科の人達は考えてくれ、一夏は文句を言いながらも勝つために一週間くらいならと素直に従っていた。

強制的にやらせるとリストを渡されここまでやるのかと驚いたが、先輩達も嫌々ではなく楽しんでやっているようだった。結局三年生はほとんどの生徒が何かしらの部分で協力してくれたらしい。

またあの写真の効果も絶大で、お願いしたのはこちらなのにしばしば俺は先輩方から涙ながらのお礼を言われた。

改めて織斑千冬神話の凄まじさを思い知ると共に、これ本人にバレたらどうなるんだろうかと寒気がした。もちろん口止めはしてあるし、先輩方も織斑先生が知ったら怒るのは理解している。だが秘密を知る人が多くなればなるほど比例してバレやすくなるのは世の常だ。バレたら疑われるのはもちろんブラックリスト唯一にして最上位の俺で、その時俺の命はあるのだろうか。せめて一夏ハーレムを形にしてから死にたいので、その日ができるだけ先になることを祈っておこう。

俺と一夏と篠ノ之さんは三人並んで、模擬戦で使うISの置いてある待機室へと向かう。

その足取りは皆軽い。

日曜の昨日は一日訓練に費やしたのだが、夕方その終わりに、パイロット科の先輩は今やれることは全部できたと笑ってくれた。未練を残さないようにと気を遣ってくれたのかもしれないが、それでも自信になったこともまた確かだ。

そして同時に、それでも尚、地力は全然相手の方が上だとも言われ

た。結局のところたった数日では付け焼き刃にさえならないのもまた事実で、正面からぶつかってはとも勝ち目がなく、かと言って複雑な作戦は一夏の力量的にそもそも無理だ。

指揮科の先輩方が頭を絞って数個の原則を作り、模擬戦中は余計なことを考えずただそのことだけを意識して動けという、ほとんど細かな部分は一夏に委ねられた形で落ち着くこととなった。

勝率とは尋ねると、全てが咬み合っとうまく行ったとして六割だという答えが返ってきた。

元はゼロに近かったものを五分五分以上に持ち込めた時点で上出来どころではないのだろう。また全てがうまくいかない場合は瞬殺されて即終わるそうさ。そういう意味ではもう確率などあつてないようなものなのかもしれない。

ちなみに模擬戦をするのが一夏ではなく篠ノ之さんだった場合、勝率はきつと安定して八割を越えるだろうと言われた。

理由を尋ねると篠ノ之さんの集中力は桁違いだそうさ。剣道をやっているのは知っていたが、聞くところによると篠ノ之さんは去年中学で全国制覇をしている程の腕前だとのことである。つまり模擬戦のような場に慣れており、勝負とは何かを心得ている。だからISであろうと瞬時の判断にミスがなく、それは持久戦になればなるほど有利に働くらしい。

対する一夏は基本的に注意力が散漫な男だ。言われたことは器用にこなせるが、それを安定して続けることができない。完璧な動きで篠ノ之さんを圧倒することもあるが、的外れな動きをして叩きのめされることの方が多い。良くも悪くも博打向けの男である。

作戦を立てる側としては一番扱いづらいタイプで、指揮科の先輩方は最後まで頭を悩ませていた。

そして最後に出した結論は、一夏を出来るだけ束縛しないこと。もう織斑君の強運に賭けるのが一番可能性高いわねと、自嘲したように笑っていた。

俺としては一夏の本番強さ、強運をよく知っているので、五割六割なら越えて当然だと思っている。二割なら迷うが、三割なら勝負に出

るだろう。宮崎先輩に専用機に乗った一夏が作戦なしで戦った場合の可能性を聞いたが、専用機の性能があつてもよくて三割だろうと言われた。俺の感覚もそれくらいだったので、傍から見れば無謀でも俺としてはやはり十分にいける勝負だったのだ。

そんなことを考えているうちに待機室に到着する。

扉を開けると三つの顔がこちらを向いた。

宮崎先輩と整備科の先輩はいいとして、もう一人、白衣を着て眼鏡を掛けた大人の女の人が立っていた。

その人の目は血走っていて、だがこちらを見ると満面の笑みを浮かべた。白衣と合わせてその姿は怖すぎる。

こちらが声をかける前に、その人は大きな声を上げた。

「織斑君！ 奇跡が起きたわ！」

俺はすぐその意味を理解できた。

ああ、奇跡が起こっちゃったか。

頼るつもりはなかったが、一夏ならあり得ることだと思っていた。

「えっ？ どういうことですか？」

一夏はピンときていない。首を傾げる篠ノ之さんも同様だ。

目の前の女性は誇らしげに体を反らし、そして大きく手を後ろへと向ける。

「専用機が間に合ったのよ！」

そこには白いISがあつた。一夏専用となるISだ。

「その名も白式よ。もう準備は出来ているわ」

目の前のおそらく倉持技研の技術者は、得意気にそのISを指し示す。

その新品のISは部屋の中で白く輝いており、なるほどこれは確かに一夏のものだと納得させられるような、言葉にはし難い雰囲気があつた。

「よかったな智希！ 奇跡ってやっぱりあつたぞ！」

一夏が振り返り俺に向かって笑顔を見せる。

篠ノ之さんは白いISに目を奪われているようだ。

俺としても喜べるものなら喜びたい。だがよりによってこのタイ

ミングか。

「どうした智希？ 何かあるのか？」

一夏が不安げに俺の顔を覗き込む。さてどこから説明したらいいか。

「甲斐田君、時間も無いし私から説明するわ。織斑君、その専用機には重大な問題があるのよ」

俺が声を出す前に宮崎先輩が前に出た。重大な問題と言われて倉持技研の人は不満そうな顔をしている。だが何も言わないのは当然理解しているからだろう。

「重大な問題？」

「ええ、その専用機は確かに織斑君のものなんだけれど、まだ専用化処理がなされていない。私にでも動かそうと思えば動かせる状態なのよ」

「はあ……」

一夏には何も説明していないので当然理解できていない。

「つまりね、織斑くんがそのISを装着して専用化処理をしなければならぬんだけど、それには時間がかかるのよ。おそらく三十分くらいは」

「はあ……それが何か？」

俺の心の中に焦りが生まれてきたが、宮崎先輩は表情を変えず説明を続ける。

「処理は勝手にやってくれるから模擬戦を戦いながらもいいんだけど、その間はISの性能が大幅に落ちるの。この改造した打鉄Kには遠く及ばず、無改造の打鉄に乗った方がまだましなくらいになってしまおう」

「え」

さあ一夏も理解した。どうする。

「三十分凌げれば、専用化処理が終わって機体は十分にその性能を発揮できるわ。最新型だからブルーティアーズよりもおそらく上で、勝率はグンと上がると思う。その代わり三十分間は、打鉄未満の性能で相手の攻撃を凌ぎ続けなければならない。これが最大の問題よ」

「実際どうなんですか？」

「私達としてはお勧めしない。普通にやっても十五分持たせるのがいところだろうし、織斑君はもう打鉄Kに慣れてしまっている。だから処理中の専用機の重くて遅い動きには合わせられないと思う」

「いやいや大丈夫。三十分ひたすら逃げ回ればいい。かつこ悪いとかみつともないとか言わないで、勝負に勝つことを一番に考えれば十分いける。そもそも無理だと思うのなら私達は最初からここに持つてこようとは思わないから。織斑君のデータを踏まえただで勝算ありと判断したから私は今ここにいるの」

やはり綺麗に分かれた。専用機のこと宮崎先輩には相談してあって、前日までに届けば乗り換えることは決めていた。専用機の方が明らかに性能は上だからだ。一夏の訓練もどちらの機体でもいけるようにしてあって、戦術も基本は専用機の方に合わせてある。俺が期待していたように一夏の専用機は文字通りの一発逆転が可能で、先輩達も迷うことなく間に合うのであればと専用機を推していた。だからできることなら専用機にしたいのだが、専用機を推していた宮崎先輩はこの段階ではもう止めた方がいいと言っている。

一方で倉持技研は学生ではなくその道のプロだし、何より一夏を勝たせたがっている。その上で勝算ありと言っているのだから、こちらも十分信用はできるのだ。

「あ、あの、模擬戦の開始時間を遅らせてもらうのは？」

篠ノ之さんが手を上げるが、宮崎先輩はすぐ首を振った。

「それはとつくに断られてる。時間通りにやるって。あと五分ね」

「ごめんなさい！ 私達が織斑先生の機嫌を損ねちゃってて、もうお願いは聞いてもらえない状態だったの」

考える時間すらない。というかこの状況で俺が判断するのは無理だ。もう模擬戦を戦う一夏が決めるのがいいだろう。

「智希、どっちがいいと思う？」

だが一夏はよりによって俺に聞いてきた。分かるか。

「僕には判断つかない。実際に戦う一夏が決めた方がいいと思う」

「おいおい、俺に分かるかよ。俺に分かるのはやろうと思えばどっち

でも行けそうだってことくらいだ。じゃあお前ならどっちを選ぶんだ？」

「分かんないから判断できないって言ってるんだけど」

正解があるなら既に誰かが出している。どちらとも言えないからこういう状況なのだ。

「甲斐田、ここはお前が決めるべきだと思うぞ」

いきなり篠ノ之さんがとんでもないことを言い出した。

「は？」

「そうね、意見が分かれた以上、最終的に決めるのは甲斐田君でしょうね」

宮崎先輩まで。

「いやいや、実際乗るのは一夏なんだから」

「俺はどっちでもいいぞ。別に今でなくても専用機には乗れるんだし。いいですよ？」

「正直なところを言うと、私達はどちらであろうと勝ってもらえればいいわ。本命は来月だから」

下駄を預けられてしまった。整備科の先輩は笑ってこちらを見ているので任せるといふことなのだろう。

この場の全員の視線が俺に集まる。もう俺が決めるしかなさそうだ。

一週間前の俺なら迷うことなく専用機を選んだだろう。たとえ今より可能性が低くても。

だが今の俺は判断材料をたくさん持ってしまったため、かえって選択ができなくなっていた。

どちらが正しいかはもうない。俺の好みで決めろと言うことなのだろうか。

と、あることが頭に浮かぶ。顔を上げてここにいる全員の表情を見た。

篠ノ之さんは真剣な顔をしていて、一夏はいつも通りのんきそうに俺の返事を待っている。

そして他の人達、すなわち年上の方々は、みんな一様に笑顔だった。

それを見て俺はようやく理解した。
「分かりました。ではこちらにします」
そう言って、俺はそのISを指差した。

8. 賽を投げてしまった。

賽を投げてしまった。

もう決める前へは戻れない。

俺に対して誰も何も言わなかった。

一夏は当たり前のように頷き、篠ノ之さんはすぐにISを装着するよう促した。

宮崎先輩は一夏に再度確認事項を復唱させている。

俺はぼんやりと模擬戦の準備を眺めるだけだった。

模擬戦が始まる。

会場はいつも訓練をしていたアリーナで、IS学園におけるイベントは基本ここで行われるそうだ。

他にもいくつか訓練場はあるのだが、一番大きいのはここだ。数千人も収容できるらしい。

今回は一年一組のクラス代表を決めるだけの模擬戦なので観客はほとんどいないが。

そんな中、三年生の先輩方が見に来てくれた。

今は月曜の朝でしかも授業中なのだが、先輩方は後でその分の補習を受けると先生と交渉して見に来てくれた。三年生は学年で百人、今はそのほとんどが見に来てくれるようだ。

もっとも応援団というよりは野次馬で、飲み物食べ物を用意して完全にスポーツ観戦気分なのだろう。

応援団になっているのはむしろクラスの連中だ。もはや完全に一夏派となってしまった相川さん他数名の女子が一夏の名前を呼んで応援している。その他のクラスメイト達は中の良い者同士で固まって談笑しながら模擬戦が始まるのを待っていた。

俺は他のクラスや学年の人達も呼べないかと画策をしていたが、授業中だということで普通に一蹴されて終わった。まあこれに勝って

来月のリーグマッチで華々しく一夏デビューをしてもらうことにしよう。

そしてそれなら見ている人が少ないなら逆に希少価値をつけてやろうと思ひ、映像や写真の準備は万全だ。後に一夏のファンになった女生徒達は、このときのことを一夏の本当のデビュー戦として語るようになるのだ。

俺と篠ノ之さんは一夏の準備を見届けた後、急いでアリーナの観客席へと上がった。このまま待機室の映像で見ようと思っていたのだが、先輩が最初は生で見なさいと勧めたためだ。

もう俺も篠ノ之さんもやることはない。後は一夏が戦うだけだ。

俺達がアリーナの席につくのを見計らったかのように、一夏とオルコットがISを装着してアリーナの舞台へと姿を見せた。

歓声と拍手が上がる。歓声を上げたのは相川さん達で、拍手は先輩方だ。アリーナの広さに対しては寂しいものだが、一夏にはちゃんと伝わったようで、笑顔と共に手を振って応えていた。

対するオルコットは緊張しているのか硬い表情だ。観客席には一夏寄りの人間が多いといっても、そもそも数が少ないのでアウェイという程ではないのだが。

始まる前から対称的な姿ではあった。

やがて二人は少し離れて対峙する。

本当は模擬戦の始め方にもルールはあるのだが、まだ授業で扱ってはいないし、そもそも二人の間で確認し合ってすらいない。俺がどさくさ紛れに口頭で一般的にと言っただけだ。

織斑先生は基本的に最低限度のことしか説明をしない。だから今この二人の頭の中には、始まりの合図である鐘が鳴ったら開始、相手の機体の持つエネルギーを全部削ったら勝ち、くらいしかないだろう。

鐘が鳴らないので痺れを切らしたのか、オルコットが苛立った声を出す。

「まだ始まらないので一言注意させていただきますが、その顔どうにかなりませんか？」

「いきなりひどいこと言われたぞ俺！」

ちなみに二人の会話は会場にも聞こえるようになっていた。

「模擬戦とはいえ真剣勝負の場なのですよ！ それ相応の態度というものがあるでしょう！」

「いや、そんなこと言われても俺模擬戦とかやるの初めてだし」

「そういうことではありません！ ヘラヘラと笑っているのは相手に失礼だと思わないのですか！」

「そうか？ 変に緊張するより自然体でいるのは大事なことだと思っぞ？」

オルコットにとってはヘラヘラ、相川さんにとってはうっとりさせるような笑顔で一夏は軽く返す。

確かに真剣勝負の場でやられたら即殴りたくなるな、と俺の横で篠ノ之さんは顎に手を当てて怖いことを言っていた。

「相手を馬鹿にする行為は断じて自然なことではありません！」

「別に俺オルコットのことバカにしてないぞ？ むしろ今は尊敬してる」

「白々しいことを！」

「いいや、本当のことだ。じゃあこれからその気持ちを見てもらおうかな？」

「わたくしのことを口説くのでしたらもつと気の利いた台詞にしたいですけどね！」

オルコットの発言が終わると同時に鐘が鳴った。これ織斑先生も実は楽しんでいるな。

会話をしながらお互いに始まる予感があったのだろう、戦闘態勢を取っていた二人は鐘の音に弾かれたように動き出す。

一夏は右手にブレードを持ってオルコットへと特攻し、オルコットは自身の持つ巨大な銃を構えて突っ込んでくる一夏に向かって放った。

当然予期していた一夏はすぐさま回避し、そのまま浮かび上がってオルコットと距離を取る。

「あら、少しはやるようですわね」

「おいおい、今のでやるとか思われるようだと俺ちよつと悲しいんだけど」

笑顔のまま一夏は答えるも、オルコットは本当に意外だという顔をしていた。

「打鉄で突っ込んでくるくらいですから被弾覚悟の相打ち狙いかと思はせて」

「いやー、喰らわないに越したことはないと思うぞ」

俺は専用機を選ばなかった。

どちらを選んだとしても正解だ。なぜならどちらを選ぼうと一夏は必ず勝つのだから。

俺は確率の迷路の中で迷ってしまったっていて、どちらが正しいか、どちらの方が可能性があるのかと、何を大事にすべきかが分からなくなっていた。

物事を数字に置き換える時、そこで出てくる差は何なのか。

一割より二割、二割より三割、三割より四割。どうせなら五割と思ってしまうが、それでも半分は負けてしまうのだ。たとえば勝つ確率が九割あると、十回に一回は負ける可能性がある。そしてその一回が一発勝負のときに来ないはどうして言えるのか。

結局のところ確率というのは何かを保証してくれるものではない。

元々俺が専用機を欲したのは、一夏専用機の一発逆転に頼らざるをえなかったからだ。不利な状態で無理やり勝利を得るには、どこかで何かしらの博打を打たなければならぬ。普通にやったら負けてしまうから。

その後専用機が無理そうだから量産機で行くしかないとなり、一発逆転が使えなくなった俺は先輩方に全てを投げる。そして先輩達がやったことに博打の要素は一切なかった。相手との差を明確にし、その差を埋めるために何をしなければならぬかを一つ一つ積み上げていく。俺は運という不確定要素に頼ったが、先輩達は逆に曖昧な部分を潰していった。俺にとっての確率とは起こって欲しい可能性

だったが、先輩達にとっての確率とは起こって欲しくない不安要素だった。

篠ノ之さんなら八割勝てそうなのは、安定して同じ行動ができるので不確定要素が少ないから。一夏の勝率が六割以下になりそうなのは、動きにむらがあり過ぎて不確定要素だらけだから。

織斑先生や先輩の言う完璧などないというのは、どうしても人の手が及ばない部分はあるということだった。

そう考えると、このギリギリのタイミングで専用機に乗り換えるのははつきり言っていない。

何より機体に専用化処理の負荷がかかった状態での戦闘は全く想定されていない。専用化処理が終わった後のことは考えられているので、その状態なら一夏も問題なく動けるだろう。だがそれまで打鉄未満の性能で三十分耐えなければならぬというのは、リスク以前の問題だ。

ただでさえ一夏は動きが安定しないのに、これ以上不安要素を増やしてどうするのか。

それに頼るしかないならまだしも、もう量産機で勝てる見込みは十分にある。

だから俺は専用機を選ばなかった。

もちろんこんなことを先輩や倉持技研の専門家が分からないはずはない。それでも専用機を勧めてきたのは俺にとっては不安要素でも倉持技研にとってはそうではないからだ。素人の一夏だろうと三十分耐えられる自信があるからこそその発言だ。

だからどちらを選ぼうと勝負には問題なく、彼らは俺に選ばせた。

まあ、宮崎先輩の差し金だろう。倉持的には言っていた通り一夏が勝ってクラス代表になればよい。無理をしたとはいえ一夏が今後専用機を使うことも決まっているので、今専用機を使わせることに固執する必要はない。

結局宮崎先輩が見たかったのは、俺が決断に際して何を重要視するのかということだろう。

ここで専用機を選ぶのは、自分から見えない部分に目をつぶってで

も義理や信用を大事にするということだ。量産機を選ぶのは、何よりも自分が見聞きしたことを大事にするということだ。

それなら俺は後者を選ぶ。というか、ほとんどそつちに誘導されていた。

何度かお互いに牽制の動きと攻撃を行って、本格的な戦闘が始まるうとしていた。

一夏の攻撃を躲したオルコットが宙に上がり距離を取った。そして自身の周囲にビット型の兵器を四つ展開させる。

「さあ、そろそろ本番と参りましょうか。このまま十分に戦えると勘違いさせたままではかわいそうですから」

「何か変なのが出て来たな。ひいふうみい、よつつもあるな」

「変かどうかはこれから体験できますわ」

「ふーん。ところでオルコットに聞きたいことがあるんだけど」

「命乞いなら聞きませんわよ?」

「イギリスの料理がまずいって本当?」

「は?」

笑顔を維持したまま、一夏が再びオルコットへと突進する。

オルコットは意味を測りかねて一瞬動きが止まるも、すぐに四つのビットからレーザーを発射させた。

一夏はそれを綺麗に回避して離れる。

「おっと危なかった。なるほどね」

「いきなり何を言い出しますの?」

「だって不思議だと思わないか? 普通そんなこと言われたら美味しくしようって思うだろっ!」

言いながら再び一夏はオルコットへ近づこうとする。

オルコットはビットからレーザーを繰り出して一夏の接近を阻止した。

「戦闘中にいったい何を言っているのですか?」

「メシがまずいと言われるのってすごい屈辱だと思うんだよ。俺なら

絶対そのままにはしておかない。オルコットはそう思わないか？」
「だから何が言いたいのですか！」

一夏は相変わらず笑顔のまま、今度はひたすらオルコットに語りかける。同時に隙あらばオルコットに接近しようと繰り返す。

「そういえばオルコットって自分で料理とかするの？ それともしかして料理人とか雇ってたりする？」

「はあ!？」

「それでメシがまずかった場合ってどうなるんだ？ イギリスの料理が全部まずいならもう我慢するしかないの？」

「急に何なのですか！」

口も休まず、手も休まず。

一夏はひたすらに同じ作業を繰り返す。

ブレード片手にオルコットを狙い、同時にあだこうだともいい質問を繰り返す。

もちろん全部作戦だ。

「分かってはいたが、あまり美しい光景ではないな」

「美しく勝つには実力差が相当ないとね」

「さもありなん……しかしオルコットがあれを四つしか繰り返さないのは何故だ？」

「温存してる？ あるいはここぞでいきなり出すつもりかな？」

ブルーティアーズの武装は全部把握している。ビットが今は四つしか出ていないが、本当はもう二つあるはずなのだ。

一夏もそれを分かっている、まだ本気で攻めようとはしていない。今は様子を伺いつつひたすらに無意味な質問を浴びせかけている。

それに対してオルコットは次第に苛立ちを募らせていく。オルコットは模擬戦が始まってからまだ一発も一夏に当てていない。さらに一夏から理解不能な質問攻撃を浴びて、無傷ではあるも精神的には疲労が少しずつ蓄積されているように見えた。

「俺思うんだよ。イギリス人は実はおいしい料理を隠してるんじゃないかって。どうオルコット？」

「知りませんわ！」

「だって英国紳士とかつてなんかすげえプライド高過ぎてひねくれて
そうだし、家の中だけでこっさりおいしいもの食べてるんだろ？ オ
ルコットの家とかもさあ？」

「だからそのだらしない顔をどうにかしなさい！」

始まる前から一貫して、一夏は笑顔を作り続けている。相川さん達
はさわやかな笑顔で戦う一夏の姿を見られて実に幸せだろう。俺か
らすればこいつは戦闘狂かと思ってしまうが。

数日前、衛生科の先輩から寮でやることリストを渡されたのだが、
その中に笑顔の練習があった。

やれることは全部やりたいと言ったが何をやらせるんだと話を聞
けば、オルコットに精神的プレッシャーを与えるためだそうである。

戦闘中での笑顔は相手に対して精神的優位を示せる。逆に苛立ち
や怒りは劣勢であることを見せてしまう。相手に観察され余裕を与
えてしまわないように、ひたすら笑顔でいなさいと言われて一夏はそ
れを素直に実行している。

実際何度かヒヤリとさせる場面があったのだが一夏は全て笑顔で
誤魔化して、オルコットは一夏の笑顔に対して苛立ちを見せるよう
なっていた。

「俺の料理のレパートリーにまだイギリス料理はないんだけどなんか
いいのない？」

「知りませんわ！」

「イギリスって何作ってるんだっけ？ ジャガイモとか？」

「ああもうどうしてこうも当たらないのですか！」

あ、来た。

「口に出たな」

「だいぶ余裕なくなってきたね」

一夏が攻撃を当てられないのは近づけないからだだが、オルコットの
攻撃が当たらないのは機体の性能でオルコットの予想を全てずらし
ているからだ。

一夏の乗っている打鉄K、Kが甲斐田のKでないことを祈るこの機
体は、見た目は元の打鉄そのままに改造をしている。

機動力を強化してあるので無改造の打鉄よりも動きが少し早い。だから一般的な打鉄のイメージでオルコットが攻撃しても当たり前で当たらない。

もちろん熟練したISパイロットならすぐに気づいて修正してくるだろうが、オルコットは経験値が足りないからか打鉄が改造されていることにさえ思い当たっていない。

そもそも基本は前衛盾型相打ち上等の打鉄が動き回っている時点で相当おかしいのだが、一夏の言動に振り回されてオルコットには考える余裕がなくなってきたようなようだ。

「一夏が料理の話題しか出さないのなぜだ？」

「一夏が喋り続けられる話ってそれしかないからだよ。あ、一夏の料理スキルはすごいよ。食べたなら絶対驚く」

「そ、そうか。よし、機会があれば頼んでみよう」

内心は必死だというのもあるが、一夏もよく声を出し続けている。声が枯れないようにと発声練習までさせられて、俺もしかして遊ばれてるんだろうかとこぼしていたが十分に成果は出ている。明日はきつと声ガラガラだろうけれど。

涙ぐましい程の小細工の雨あられだが、そもそも実力差はどうしようもない。ならばせめて相手の実力を出させないようにしようというところで、ひたすらオルコットを精神的に追い詰めていた。

「しかし思ったよりもオルコットの攻撃は単調だな」

「それは疲れてきたからじゃ？」

「いや、最初からだ。ビットの展開の範囲が狭い上に、そもそも四つしかないのでは逃げ場がどうしてもできる。一夏はもう完全に慣れちゃまっているな」

それを聞いて先輩の感想を思い出した。

パイロット科の先輩がブルーティアーズの性能を聞いて、この機体は扱いが非常に難しいと言っていた。ビットを使つての複数同時攻撃ができるということは、裏返せばそれらを全て制御しなければならぬということになる。高機能であるがゆえにパイロットにも高い技量が必要とするという話だ。

それを使いこなすだなんてオルコットの操縦技術は相当にあると思っていたが、そうではない可能性もあったのだ。

「分かった。オルコットさんはビットを同時に四つしか使えないんだ。技術が足りなくて」

「なるほど。三ヶ月では使いこなすまでには至らなかったか」

こちらはオルコットの技量をビット六つに本体の射撃可能という想定で準備してきている。だが実際はビットは四つが限界で、さらにビット制御時には本体の持つレーザー銃を撃つことさえできていないようだ。近距離ではビット、一夏が離れた時はレーザー銃と使い分けているようだが、同時でなければ今の一夏でも十分に回避可能だ。

そして相手の目の前で死に物狂いで対峙している一夏がそれを分らないわけがない。

今は罨である可能性を危惧して自重しているが、そろそろ勝負に出るだろう。

一夏はひたすらに同じような攻撃パターンを見せてオルコットの行動をルーチン化させている。そこに変化をつける時が勝負の始まりだ。

「俺やつぱり日本人だから日本食が一番好きなんだよ。そうだ、オルコットって刺し身食べたことある？」

「もういい加減にしてくださいませ！」

「じゃあ終わりにしてやるよ！」

そして一夏が笑顔も捨てて勝負に出た。

ここまで一夏は距離を取った後オルコットのレーザー銃を躲してから次の攻撃に入っていたが、それを距離を取ると見せかけて再びオルコットに向かって突進する。

ビットとレーザー銃を同時に撃てないオルコットはどちらを使うかの判断が遅れ、一夏はその隙を見逃さず一気に肉迫して右手のブレードを突き出した。

オルコットは反射的にレーザー銃で受けるも改造され強化されたブレードに破壊され、ブレードはそのままオルコット本人にまで届いてそのエネルギーを大幅に削った。

「一夏！」

オルコットの悲鳴とともに篠ノ之さんが思わず立ち上がり、観客席から歓声と黄色い声が上がった。

そして一夏はオルコットの理解が追いつく前に追撃の体勢を取り、間髪入れず上から思い切りブレードをオルコットに叩きつける。

守るものもなくオルコットはその一撃を体で受け、勢いよく地面へと落下した。

「そこまで！」

織斑先生の声がアリーナに響き渡った。

止めを刺そうとオルコットへと向かっていた一夏は慌てて速度を緩め、ゆっくりとオルコットの倒れた側に着地する。

アリーナにささやかな歓声と拍手が沸き、クラス代表を決める模擬戦が終わった。

終わってみれば無傷の完勝。一夏は本番で百点以上の行動をしたのけた。

先輩達が一夏に与えた模擬戦における大原則は四つ、いつも笑う、喋る、よける、動く。

もちろん攻撃方法などひと通りの作戦もあったが、その四つだけは絶対に守れと口を酸っぱくして言っていた。

昨日は一日それを叩き込むことに終始したくらいだ。

笑う練習などあるのかと思ったが、顔の筋肉を動かして笑顔を自然と作るという練習があり、一夏と一緒にやらされて、人は意外と顔の筋肉を使っていないんだなという発見もあった。

喋ることについては一夏にアドリブなど無理なので、料理について思いつく限りの事を紙に書かせた。会話するつもりもないので思い浮かんだ単語についてひたすら適当に喋るという練習を行い、一時間はネタに詰まることはないようにしていた。

よけることはパイロット科の先輩方が相手をしてくれた。驚いたのは攻撃する時に必ず逃げ場を用意しておいて、そこに逃げるように

と指示していた。普通そんなことはありえないだろうと思ったが、先輩方はオルコットに死角なしの攻撃をできる技量はないと見切っていた。実際には想定以下で、一夏は最後にはもう余裕を持ってよけられるようになっていた。

動くというのはよけるも含まれるが足を止めず常に攻撃か回避か移動を行なえということだ。できるかぎりオルコットに思考をさせないためである。相手に落ち着いて冷静になる暇を与えるということだった。

単純なようだがこれら全てを同時に行うというのは意外と難しい。何かに気を取られてしまつては他の何かが疎かになってしまふ。昨日の時点では一夏は百点満点の六十点がいいところだっただろう。ダメなときはただよけることだけに集中しろと言われていた。

一方攻撃についてはもう当たらないものと思えだった。

もちろん当たればそれに越したことはないが、まあ無理だろうと言われて一夏はかなり不満そうだった。

もし当たるとすればそれはオルコットの精神が焦りと混乱の極みにあるときくらいだろうという話で、つまり一夏が勝つためにはオルコットをその状態にまでもつていかなければならない。従つて模擬戦でのほとんどはオルコットを精神的に追い詰めることに費やされた。

ところがその前に攻撃を当てて倒してしまつたのは一夏の強運か実力か。本当はあそこから恐怖や焦りの感情を植え付けてオルコットの動きを鈍らせる予定が、なんと一夏は一撃目でオルコットを沈めてしまった。

オルコットの技量が想定以下だったのもあるが、きつちりと機会をものにしてしまえるのはやはり俺の知っている織斑一夏という人間だ。

多少不利でも本番では華麗にひっくり返す姿をいつも見てきたので、正直俺に驚きはない。

実に賭けがいのある相手に、華があり、そういう姿が女子に夢を見させ虜にしていくのだろう。

急に観客席から歓声と悲鳴が上がった。

何事だとアリーナの中を見ると、なんと一夏がオルコットを抱き抱えている。

その姿はいわゆる、お姫様抱っこ。

意識のなさそうなオルコットを抱き抱えて一夏はゆっくりと出口へ歩いて行く。

どこまで絵になる男だと思いついてみると、急に隣の篠ノ之さんが立ち上がり、客席の出口へと駆けて行った。

ああ、お姫様抱っこ第一号を取られて悔しいのか。

自分も同じことをしてくれと一夏に……篠ノ之さんが言うわけない。

入学初日のことが頭によぎった。一夏の命が危ない。

俺は慌てて篠ノ之さんの後を追いついて、おそらく一夏のいるであろうアリーナの医務室へと向かう。

そしてそこで、俺は一夏が本領発揮している光景を見てしまった。

オルコットが幸せそうに、一夏の胸に顔をうずめていた。

9. 女は恋をすると変わると言うが、変わり過ぎて別人になられるとすごく怖い。

女は恋をすると変わると言うが、変わり過ぎて別人になられるとすごく怖い。

箱入りお嬢様のように手を口に当てて恥じらうオルコット見ていると寒気がしてきた。

この女は地面へ激突した際に脳をやられてしまったのだろうか。

それとも時々別人格の自分を演じるというかなり痛い人だったのだろうか。

もしそうなら話は早い。症状に対応した病院に連れて行けばいいからだ。

だが残念ながら俺はそうではないことを知っている。詳細は分からないが何が起こったのかは間違いなく正確に理解していると思っている。

「とりあえず山田先生寝かせたけど、大丈夫かな？」

意識を取り戻した山田先生が今のオルコットのようになってしまうていたらどうしようか。

俺のすぐ後に入ってきて一夏達を視界に入れた途端気絶してしまった山田先生が無事であることを心から祈った。

別に驚くことではない。

オルコットは全く悪くない。

悪いのは、いや悪いというのは語弊があるが、全ての原因は目の前の男にある。

この男にお姫様抱っこされて至近距離で優しく語りかけられて落

ちな女などいないだろう。

繰り返すが、オルコットには何の罪もない。

「やったぞ智希！」

その上この状況で普通に会話してこられると、もう清々しきさ感
じられてくる。

そうじゃないだろとかもつと他に言うことあるだろとかいう突っ
込み的台詞はもはや意味を成さない。

今俺にできるのはそのまま普通に会話を続けることだけだ。

「被弾はしてなかったようだけど、一夏に怪我は？」

「ないない。我ながら完璧だった」

「それはよかった。後で先輩達にお礼言いに行かないとね。昼にでも
行こうか」

「そりやもちろんだな。でもやってる時は必死だったけど今思い出す
と全てが想定範囲内というかうまくいったというか何というかも
うそんな感じだったぜ！」

悲しくなってきた。

模擬戦を思い出して興奮している一夏に対してでも、今の会話の内
容に対してでもない。

数時間前のオルコットなら突っ込まずにはいられなかったであろ
う会話なのに、今のオルコットは何も言わずただにこにこと一夏を眺
め続けているのだ。この女はいったい誰だろう。

「篠ノ之さん来なかった？」

「見てないぞ。箒がどうかしたのか？」

「一夏のところにお祝い言いに行っちゃったから」

「いやー見てないな。入れ違いになっちゃったかな？」

最悪の事態は避けられた。篠ノ之さんはきつとアリーナの入り口
の方へと走って行ってしまったのだろう。頭に血が上って一夏がど
こへ向かっているかを考えなかったに違いない。

「で、オルコットさんとどうい話をしたか聞いておきたいんだけど」

「ああそうだな……って、どうしたセシリア？」

一夏の口から出た箒という名の冷水を浴びせかけられて、オルコツ

トはようやくやく正気に返ったようだ。

「謝ったんだよ、セシリアが気を取り戻した後すぐに」

一夏は最初にそう言った。

突っ込みたくて仕方ないが、まだそこまで話は進んでいない。

「内容は分かるだろう？ 先輩達にすげー怒られたけど初日にセシリアを侮辱したこと」

「うん」

さつきまでののにこにこ顔はどこへやら、オルコットの表情は打って変わって厳しい。

理由はもちろん篠ノ之さんという存在に思い当たったためだ。

「一週間訓練して俺がどれだけセシリアに失礼なことを言ったかほんと分かってさ、もう全力で謝った」

「それで許してもらえたの？ オルコットさんの顔はとてもそうは見えないんだけど」

「えっ？」

一夏に顔を向けられて、オルコットは慌てて表情を取り繕う。

「ああ、やっぱダメだったのか。そうだよな、ごめん。さつきは俺が無理やり言わせちゃったみたいだ」

「そんなことはありません！ わたくしはもう一夏さんのことを恨んでないませんわ！」

「ありがとうセシリア……」

ここで突っ込んでしまつては俺はもう生徒会長に対して何も言う資格はない。

「じゃあ仲直りしたってことでいいんだね？」

「もちろんだ！」

「もちろんですわ！」

もちろんという単語がユニゾンし、二人は顔を見合わせて笑った。

分かるか生徒会長、俺はこういう光景をずっと見てきたんだ。あなたは俺より年上かも知れないが、俺はこういう場を幾度となく乗り越

えてきたんだ。綺麗に流せるようになってればあなたは次のステージへと進める。いつか自分の力で気付いて乗り越えて欲しい。

真に恐ろしいのはこれを恋愛感情など一切なく全て素でやっている一夏なのだけでも。

「それはよかった。じゃあ模擬戦の内容については？」

「それも話した。もちろんそのことについても謝ったぞ」

「驚きました。全てが計算し尽くされた作戦だったなんて」

精神的に追い詰めると言えば何となく聞こえは良さそうだが、実際やった行動はひたすらにオルコットをおちよくることではかない。

納得いかないふざけんなど怒鳴られても仕方のない行為ではあった。

「そういうことだったんだ。実力勝負じゃ一夏は絶対にオルコットさんに勝てないから、プライドなんて全部かなぐり捨ててみみっちくて器が小さくてどこまでも情けない行動をするしかなかったんだ」

「いや、いくらなんでもそこまで言わなくてもいいと思うぞ？」

「いいえ、決してそのようなことはありません。あの時の一夏さんは勝利のために全てを受け入れる覚悟を決めて、笑顔という名の仮面を被っていましたわ。きつとわたくしはその気迫に最初から最後まで飲み込まれていたのですよう」

恋という病に冒されてしまった女は熱に浮かされている限り全てを良い方に脳内変換してくれる。

だからこういうときはかえって大げさに言ってしまった方が相手も否定しやすくていいのだ。

全くもって俺がどさくさ紛れに一夏を罵りたかったわけではない。

「じゃあ先輩達のこととは？」

「あ、それはまだだな」

「何の話ですか？」

「それはね」

俺はオルコットに向き直った。

隣で眠っているように見える山田先生は顔を赤くして震えているが大丈夫だろうか。

「作戦その他オルコットさんに勝つための一切合切はね、全部三年生の先輩方に知恵を借りたんだ。ほら、アリーナの客席に知らない人達いたでしょ?」

「まあ」

「智希が一人で三年の教室に乗り込んだんだぜ。俺も行くって言っただけど一人で行かないと信用してもらえないってこいつ譲らなくてさあ」

「男子一人で行かれたのですか!?!」

確かにあの時はかなり後悔しかけたが、結果として最上だったので無理をした甲斐はあった。

「まあそういうのはどうでもよくて、聞いて欲しいのは結果的に三年生のほとんどの先輩が今回協力してくれたんだ」

「それは……!」

「つまりね、今回オルコットさんが戦ったのは一夏だけじゃなくて、一夏と一夏の後ろにいた三年生の先輩百人だったってわけなんだ」

「それは……わたくしが勝てるわけありませんわね……」

オルコットが肩を落とす。この手の理論型は理不尽にはうるさいが、理屈が通っていると途端に大人しくなるのだ。そうやっておちよくったという事実をあたかもすごいことをしたかのようにすり替えるのに成功した。

「だから僕らはオルコットさんのこと全部分かった。例えばビットは六つあるのにオルコットさんは四つしか同時に使えなかったとかね」

「そこまで知っていたのですか!?!」

種明かしして相手をびっくりさせるのはとても楽しいことかもしれない。

「あれ、それって……?」

「とにかく、オルコットさんが弱かったわけじゃ決していないんだ。僕らが勝つためになりふり構わなかったただけだって話」

「その通りですわね。実際何もできずにやられてしまつてよく分かりましたわ。完璧に準備を整えていたあなた方と、全てを軽く考えてい

たわたくしでは始まった時点でもう勝負は決まっていたのですね」

当初の予定を変更して俺はオルコットを持ち上げる。

最初は嘯ませ犬として地に這いつくばってもらおうと思っていたが、そもそも優秀であるし意外と話も通じる。

それに夫婦漫才をやるくらいだから一夏との相性も悪くはないだろう。

晴れて勝ったことだしオルコットが受け入れるのであればこれからは仲良くしておくのもいいな、と俺は算盤を弾いた。嫁云々は本人次第だが。

「ううっ、いい話ですね……」

いつの間にか山田先生が起き上がって涙ぐんでいた。

そこは最後まで眠った振りしておこうよと思った。

「そういうわけで、セシリアにクラス代表を譲ろうと思います！」

教室に戻って、一夏が得意気にバカなことを言い始めた。

倉持技研のあの人を卒倒させる気か。

「えー」

「ちよつとそれはないよー」

「みんな応援してたでしょー」

「あれだけ先輩方の手を煩わせておいて何を言っているのか分かって
いるのか！」

当然のごとく、ブーイングの嵐を浴びる。

「えっ!? だって、セシリアの方が俺よりも実力あるのはつきりしたし、俺は実力がないからああやって小細工なきや勝てなかったんだぞ」

「だから勝ったのは織斑君でしょ?」

「それじゃ何のためにわざわざ模擬戦をやったわけ?」

俺が何かを言うまでもなく、集中砲火の雨あられ。

この男は自分が支持されると思っていたのだろうか。

「だってクラスの代表だぞ? まさかみつともないところを見せるわ

けにはいけないだろう？ 俺は実力が無いんだから、ここは実力のあるセシリアに譲るべきだろう」

「だそうだが、オルコットはどう思う？」

「元々立候補してたんだし、やってくれるよなセシリア？」

「ふふつ、そうですね」

オルコットはどこのお嬢様だと言いたくなるような優雅な仕草でゆっくりと席から立ち上がった。

「だよな！ やっぱりセシリアが適任だよな！」

「いいえ、クラス代表は模擬戦での勝者が就任するという取り決めですわ。ですから先程模擬戦でわたくしから勝利を収めた一夏さんがクラス代表になるのは既に決まっていますことですよ」

「そんな？」

なるほど、オルコットと仲良くなれたからすんなり譲れるだろうと甘いことを考えていただけか。

確かにオルコットは立候補していたが、それは一夏への対抗意識によるものであって、別にクラス代表そのものに固執していたわけではない。そして今対抗意識まで消滅してしまった以上、オルコットのような人間がわざわざルールを破ろうとするはずはないのだ。今思い出したがオルコットは法律の国の人間だった。

「ねえ織斑君、オルコットさんと模擬戦をしてクラス代表にはなりたくないって思ったの？」

ところがこんな時でも優しい鷹月さんが、一夏に救いの手を差し出した。相変わらずの委員長気質と言うべきか、いつまでもうるさいからもういい加減に解放してやろうという哀れみからか。

「ん？ そんなん最初からに決まってるだろ。誰が好き好んでクラス代表になんかなりたがるかって」

だが哀れな一夏はわざわざ理由を作ってまで救おうとしてくれた鷹月さんの思いやりをあつさり踏みこじってしまった。

嘘をついたり小賢しいことをしないのが一夏の美点ではあるが、相手の意図にも気づかないでやってしまったのはただの馬鹿でしかない。

オルコットと戦って己の実力の無さ愚かさを思い知りましたとで

も言っておけば代表から逃れる目もあったというのに。まあその場合は俺が全力で阻止するわけだが。

鷹月さんは深くため息をつき、それから顔を上げて無表情に、一夏への同情を一切捨て去って言い放った。

「それならそもそも模擬戦をするかどうかの時点でオルコットさんに代表を譲るべきだったわね。模擬戦の勝者が代表になるんだから、模擬戦をやったということは代表になりたかったからしかないんじゃないぞ?」

「あれ?」

一夏はようやくその根本的な矛盾に思い当たり、しばらく考えてから真顔で俺を見た。

俺は今さら何言ってるのという目を一夏に返す。

一夏は目を閉じて天を仰ぎ、それから机に突っ伏した。

「では織斑一夏を一年一組のクラス代表とする」

織斑先生の締め言葉が教室に響き、拍手と爆笑が湧き上がった。

「い、一夏……? 少し言っておきたいことがあるのだが……」

「どうした筈? さっきの教室で何かあったのか?」

昼休み、俺達三人は三年生の教室へお礼を言っただけで回った。

今回勝てたのは最初から最後まで先輩方のおかげだ。先輩達に頼らなければたとえ専用機があったとしても一夏はオルコットに攻撃を当てることができないまま負けていただろう。

百人もいるので全員の顔を覚えられたわけではないが、全ての教室に挨拶をして回った。一応あの写真が前払いの報酬ということにはなっていたが、礼儀は礼儀だろう。

一夏は行く先々で褒め称えられていた。何しろ本番で完璧な動きをしてのけて、予想されていたよりも断然早く勝利してしまったのだ。まさか勝負に出てそのまま沈めてしまう展開になろうとは、先輩方としても驚きだったらしい。

先輩達の間ではちよつとした賭けが行われていたらしく、結果は大

穴に近いものであったようだ。それは一夏が勝ったからではない。一夏が想像しうる限りでの最速の勝利を収めたからだ。勝率六割というのはオルコットの技量が想定 of 最大値であった場合だそうで、実際には想定以下だったのだが、先輩方のほとんどは一夏が勝つと踏んでいたそう。調子に乗らせてはいけないので俺達には言わなかっただけで。

そんな中俺にとつてとても意外な事実があった。三年生の先輩方には、ぱつと見ではあるが一夏に惚れてしまうような人がいなかったのだ。

一夏は年上であろうと年下であろうと関係なく魅了してしまう男なのに、先輩達はこの一週間一夏を口説こうとかそういう方面で寄つてくることがなかった。

確かに一夏は初心者も初心者な姿ではあったが、代わりにその姿で母性本能を刺激して惹きつけていくのかなと思っていた。だから誰も引つかからなかったのは正直なところ不思議だった。

先輩達は親身に指導してくれていたが線引はしっかりしていた。終わった後来るのかと思つたが今も結局何もなかった。

やはり篠ノ之さんの存在があったからだろうか。

行く先々で篠ノ之さんは一夏の彼女扱いされて、照れながらもとても嬉しそうだった。

「そのな……女に対してあまり勘違いをさせるような行為はよくないと思うぞ?」

「はっ。」

当然一夏にその言葉が通じることはない。全てが無意識であるし、そういう方向に気を回せるような人間でもない。

「いや、もちろん私はお前にそういう邪な気持ちがないことを十分に理解している。だからこそさこうやって言わせてもらおうのだ」

「箒? お前さつきから何言ってるの?」

こと一夏に対して遠回しな物言いはどこまでも時間の無駄である。そもそも理解できるようであれば最初からの外的な行動をしたりはしない。

だがこの男が本当に厄介なのは、かといってストレートに言えばいいというわけではないことだ。相手にストレートにぶつかってこられると、一夏は全力で引く。

押せば引き、引いたら気づかれぬ。口説く相手としては最悪の部類だった。

俺の知る限りそれを乗り越えられたのはたった一人しかいない。とはいえそれも友達としてでしかなかったが。番犬鈴は元気だろうか。

篠ノ之さんは一夏の幼馴染という絶好の位置にはいるが、離れた時間が長過ぎる。理想化し過ぎて本当の一夏とのギャップに戸惑っているし、小学生レベルの感情表現しかできていない。今の立場がなければ一夏の視界に入ることさえなかっただろう。

だが俺はそれでも篠ノ之さんを推す。それは一夏の本質を理解しているからだ。正確には、俺が一夏の妻に求めるものを持っているからだ。今後は分からないが今時点では俺から見える範囲ではそれは篠ノ之さんしかいない。間違いなく小学生時代の一夏に触れていたことが大きいのだろう。

「いや、だから別にお前を責めているわけではないのだ。お前に悪気などあろうはずもない。ただ、どうしても相手は勘違いをしてしまうのだ」

「あのさ簿、そんな回りくどく言わなくていいからはつきり言ってくれ」

さつきは山田先生が邪魔だったので夜にでも聞こうかと思っていたのだが、篠ノ之さんは気が気ではなかったようだ。我も忘れて駆けて行ったし、当然と言えば当然か。

アリーナから教室に戻るときに出くわしたが、その時は一夏の横に山田先生がいたので篠ノ之さんも自重していた。

「だから、オルコットのことだ。その気もないのに優しい言葉をかけてしまったのは、相手も勘違いをしてしまうのだぞ?」

「セシリアが? 何を勘違いするんだよ? ちゃんと俺謝ったぞ?」

「だからそういうことではなくてな……」

前にもそういうのがいたので今の篠ノ之さんの気持ちはよく分かる。要は怖いのである。自分の不安が現実だったらどうしようと、篠ノ之さんははつきりとそれを口にできないのだ。

先輩達に一夏の彼女扱いされたことで勇気を出して話しかけたものの、いざ一夏を目の前にしてへタレてしまっていた。

そして篠ノ之さんは耐え切れず、ついに何とかしてくれと俺に目で助けを求める。先輩達にべた褒めされたその強靱な精神はどこへ行ってしまったのか。もっといい相手が出て来たら正妻の座から降ろすぞ。

今後は篠ノ之さんの精神も強化していかなければならないようだ。

「一夏、オルコットさんと仲直りしたのは聞いたけど、お互いに名前で呼ぶくらい仲良くなったの？」

「ああ、それね」

篠ノ之さんが息を呑んだ。

「セリシアがそうしてくれて。よかったよ、俺の気持ちがちやんと通じたってことだもんな」

「えっ!？」

たまにこの男はわざとやっているんじゃないかと思う時がある。

「どういふこと?」

「俺初日からセシリアにひどいこと言っただろ? ずっと俺のこと睨んでたから怒ってただろうし、さらに俺が模擬戦で勝ったもんだからもう絶対許してもらえないって思ってたんだよ」

「……」

もう篠ノ之さんは小さく震えて言葉を発する気力もない。弱過ぎるにも程がある。

「でも先輩達にもしつこく言われてたんだけど、たとえ許してもらえなくてもちやんと謝らないといけないと思ってさ、セシリアが気を取り戻したらすぐ謝った」

「それで許してもらえたんだ?」

「ああ! もう生きた心地がしなかったぞ。だってすぐ目の前にセシリアの顔があったし」

やっぱりオルコットに罪はなかった。

目を覚ましたらなぜか一夏が自分を抱いていて、自分の顔のすぐ前で真摯に謝り始める。吊り橋効果どころの話ではない。衝撃がそのまま恋心に変換されてしまったか。

「で、仲直りのしるしじゃないけど苗字じゃなくて名前で呼んでくれてセシリアが言い出して、確かにあっちってそういうのあるよな。だから俺は本当に許してくれたんだなって思えたよ」

一夏が得意げに笑う。一方篠ノ之さんは理解が追いついていないのか、はたまた脳がこれ以上考えるのを拒否しようとしているのか、微動だにしない。

俺が助け舟ばかり出していたら篠ノ之さんのためにはならないのだが、今は仕方ないか。

「なるほど。オルコットさんとはいい友達になれそうだね」

「そうだな。でも聞いたらあいつすごいお嬢様みたいだから、ちよつと住む世界が違う感じするけど」

篠ノ之さんの目に光が戻った。

「ああ、確かにそういう感じはするね。貴族っていうか」

「そうそう。庶民の俺達にはちよつと手の届かない世界だよなあ」

「本当か!？」

篠ノ之さんが復活した。

「どうした筈? 俺今本気でびっくりしたぞ」

「本当に、一夏はオルコットのことを何とも思っていないのだな!」

散々ヘタレたくせにここにきて直球ど真ん中か。ホームランを打ってくださいと言わんばかりの投球だ。

「は? だから、本当に悪いことをしたとは思ってるけど、何とも何もそれくらいだぞ? 他に何かあるのか?」

「オルコットに対して特別な感情はないのだな!」

「特別って……まあこれから友達になれたらいいなくらいは思ってるけど」

「そうか!」

篠ノ之さんは全身で喜び、俺は自分がホームランを打たれたかのよ

うな衝撃を受けた。

あの一夏が女子に対して友達になりたいだど!?

「箒、お前さつきからどうしたんだ？ 何かあったのか？」

「気にするな。懸案事項が一つ解決されただけだ」

「は？ まあ機嫌よくなつたみたいだからいいけど、何かあったら言ってくれよな」

「ああ、任せておけ」

上機嫌のあまり篠ノ之さんはもう自分が何を言っているか分からないようだ。

一夏が俺にどういうことだと目で聞いてくる。

俺はさあと両手を上げて返し、一夏はいつもの女の不可解な行動かと一人納得したようだ。

無事篠ノ之さんの懸案は解決したが、代わりに俺には重大な事案が発生した。

一夏に友達になりたいと言わせるオルコットとはいったい何者なのか調べなければならぬ。

正直、オルコットのことは適当に相手をしてあげばいいかと思っていた。

一夏は自分に好意的な相手を無下にすることはないし、オルコットも相川さん他一夏派の一人になるのだろうくらいの感覚だった。

なんだろう、模擬戦を戦うことで一夏の方にも何か芽生えたのだろうか。

昔の人は友情を確かめるために河原で殴りあつたらしいが、それと同じようなことが起きたのか。

一夏がどういう女子に興味を持つかは俺にとってとても重要な問題で、いくら俺がふさわしいと思ってもその人が一夏にとって苦痛な相手では全く意味がない。全員が幸せだと思えてこその一夏ハーレムなのだから。

前から一夏に近づく女子を見てきたが、一夏はタイプとかフェチ的な嗜好を特に持っていない。

また外面よりも内面を重要視するのは知っているが、女の内面のど

ういうところがいいのかまではまだ解析できていない。何しろ恋愛感情というものを全く解さない男であるが故に。

姉の織斑先生やその影響を受けた篠ノ之さんのようなタイプには割合平気で接するが、同じようなタイプでも一夏が嫌がる女子はいたので、同じタイプを揃える的なのはできない。

本人に聞いても優しい人がいいとか一般的過ぎて全く参考にならない返答しか戻って来ないので、一夏が興味を持つ女子が出て来たらその人を分析しようと思っていた。

そして今オルコツトが現れた。

機会を見つけてオルコツトと会話し、一夏が好む要素を見つけ出そう。

そうやって把握していけば、ゆくゆくは俺がこれと思った女子を一夏好みに仕立てあげることだって可能だ。

「なあ智希、女ってほんと分かんないな」

完全の上機嫌となった篠ノ之さんがスキップするかのような軽い足取りで教室に入って行く。

俺は一夏の方がもっと分からないな、と思った。

10. 一言で女性上位主義と言っても、その形は国によって違う。

一言で女性上位主義と言っても、その形は国によって違う。

お国柄、という言葉がある。

それは歴史によって積み上げられたもので、自分達のアイデンティティになったり他国が別の国を評して使い揶揄したりする。

それは少数の男性の扱いにしても変わりはない。

男性の出生率が低下の一途をたどり、かつての世界は男性に頼らない世界の構築を目指した。

社会の中核を女性にへと移し、いつそ女性だけで子孫を繋いでいくことができないかとあらゆる研究が行われた。

その結果女性中心の社会はできあがったが、男性なしに子供を作る研究は一向に進むことがなかった。人はやはりどこまでも人で、神の領域にまで進むことはできなかったのだ。

一時しのぎのつもりでしかなかったのに、男性の精子を売買して人工授精で子供を作るのを続けていくことしかできず、少数となつてしまった男性に頼らざるをえない状況のままだった。

ところが社会は女性だけで動くようになってしまったため、男性の扱いをどうしていくかという問題が生じる。

社会の歯車として不要だと一度弾いておきながら、今度は子孫繁栄のために手のひらを返さざるをえなくなったのである。

しかしその頃には女性あつての社会だという考え方が根付いてしまつており、それ以前の状態に戻すことはもはや不可能だった。

それぞれの国で議論が行われ、その国に合わせたやり方が取られるようになっていった。

アジア、アフリカ、南米あたりの国は基本的に近隣の国と協調して

似たやり方を取ったが、日本、中国、アメリカやヨーロッパの国々はその国独自の路線を選ぶ。

そこにはお国柄というものが強く反映されていた。

一番の問題となったのは結婚制度である。

もはや従来の一夫一婦制では女性が大量に余ってしまうのだが、かといって一夫多妻制は女性蔑視の過去の悪しき風習として認識されてしまっていたため、女性にはそのまま受け入れることができなかった。

また社会が女性で回っているため、一夫多妻制にしてしまうと女が男のために働くという構図になってしまい、なおさら受け入れることができなくなっていた。

もちろんイデオロギーであつたり感情的な部分が大きいものであつたので、そんなことを言っている場合ではないと冷静に主張する女性もいたが、世界はまだそこまで切羽詰まっていなかった。

男性の出生率低下は三割を切ったくらいで止まり、それからここ十年は安定している。

人は安定してしまえば、安心してしまふ。大多数の人間は喉にナイフを突きつけられるまでは動き出さないのだ。

そういう未来はあるのかもしれないが、自分や自分の子供くらいは大丈夫だろう。数字に変化が現れず実感もなければ、少数の人間が危機を叫んでも現在の自分が一番大事なのだ。

そうやって、各国の結婚制度は今の自分達がどうありたいのかが強く浮き出るものとなった。

一番明確に差が出たのはヨーロッパで、他の大陸が近隣と協調路線を取る中、自分は自分だとばかりにそれぞれが独自色の色合いが強い制度を打ち出していた。

それを比較して表すと特徴的な国々はこういう表現になる。

- ・ とりあえず法律だけは作っておこうのイギリス
- ・ 一夫一妻純愛主義のフランス
- ・ 形は残すけど結婚しても得はないよのドイツ
- ・ 自由恋愛もう結婚制度とかいらぬよねのイタリア

・そんなことよりウオツカ飲もうぜのロシア

恒例のオチ要員はさておき、大国、歴史のある国ほど自国の考え方を前面に押し出している。

そしてイギリス、すなわちセシリア・オルコットの母国は、世界で唯一、一夫多妻制度を認めていた。

ただしそれは形だけに近いものではあつたけれど。

「甲斐田さん、今お時間ありますか？」

機会はわりとすぐにやってきた。それも向こうから。

「あれ、今日の部活見学ツアーはもう終わり？」

「いえ、今日はわたくしはご一緒しませんでしたわ」

ようやく喉の調子が戻つた一夏は、こここのところ放課後はクラスメイト達に連れ回されている。

まあ、部活見学という名のアピールタイムだ。

相川さん達も馬鹿ではない。篠ノ之さんのご機嫌な態度を見て、一夏の彼女面などまだまだ早いとばかりに二人の離間工作を始めた。

まず一夏に対して部活には入らないのかと尋ねる。中学時代はバイトくらいしかしていなかった一夏が特に考えていないと答えると、じゃあみんなでいろんな部活を見学してみようよとの提案に繋がった。そして模擬戦が終わって特にやることもなくなっていた一夏が深くも考えずに頷いて、一年一組部活見学ツアーが始まった。

これがうまいのは一夏の側について自分のアピールができると共に、篠ノ之さんを一夏から遠ざけられることだ。篠ノ之さんは既に剣道部に入ると宣言してしまっていたため、そこに加わることができない。もちろん一夏も剣道部に引き込むつもりではあつたが、とりあえずいろいろ見てから決めるよと言われてしまつては反論のしようもない。

気付いた時には後の祭り、自然な流れではじき出されて、篠ノ之さんはぐぬぬと歯を食いしばっていた。

俺は横で見ている感心したのだが、それは相川さんの手際に対して

だけではない。相川さんは篠ノ之さんに対して勝ち誇らなかつたのだ。他にも自分が入る部活を決めている人はいたので、その人達と同じ扱いをしていた。決して嫌味を言ったりあからさまに無視をしたりするようなことはなかつた。

もうこの時点で役者は向こうが二枚も三枚も上だ。ここで変に篠ノ之さんが感情的になってしまつては篠ノ之さんの方の株が暴落する。何しろ一夏は普通に部活見学をするつもりなのだから。

幸いなことに篠ノ之さんは自重した。最初は怒りの様相を見せていたが、そのうち自分の立場がそもそも不安定なものであることに思い至つたようで、恨みがましく一夏を見るも何かを口に出すことはこらえた。はつきり言つて、感情を爆発させて一夏に疎まれてしまつては本末転倒どころではないのだ。

一夏の幼馴染という特別な立場にはあるが、それは結婚相手でも恋人でもない。自分の望む立場に対しては相川さん達とそう変わらなうということ篠ノ之さんは自覚したようだった。

そしてその代わりに俺に助けを求めてきた。目でチラチラと俺がどうかしてくれるんじゃないか的な期待を抱いているようだったが、俺は気づかない振りをして全部無視した。

俺はこの件に関しては相川さんの方に旗を挙げる。クラスの雰囲気巻き込んで、今のところ一夏には興味なさそうな女子まで加えて、むしろクラスの雰囲気をよくした相川さんの手腕には素直に賞賛の拍手を送る。

それにこここのところ篠ノ之さんは困つたら何かと俺に助けを求めようになつてきていたので、いい機会だから自分の力で考えさせようと思った。

一夏ハーレムメンバーが増えていけば俺も一人にかけられる時間は減るし、基本的に自分のことは自分で何とかしてもらわなければならない。

そもそもこの程度別に大したことではないのだ。一週間一緒に行動してきたからそれができなくなつて不安なのだろうが、別に篠ノ之

さんの立場に何も変わりはない。

恋愛感情ではないとしても篠ノ之さんはこの一週間で確実に一夏の信頼を得ているし、一夏だつてはつきりとそれを口にしてている。

先輩や俺の口から聞かなければ安心できないようでは、一夏と一緒においても篠ノ之さんは決して幸せにはなれない。それはつまり一夏のことを信じていないということなのだから。

迷走したり思いつめるようならまた考えるが、まずは篠ノ之さんが俺という協力者を失つてどういう行動をするか様子を見ることにして、篠ノ之さんは俺にまで恨みがましい目を向けつつ毎日放課後は剣道場へと通っている。

「甲斐田さんも毎日大変ですわね。代行としての仕事はもう終わったはずなのに」

「いや、今やっているのはどうか元々これは罰だから」

「罰ですか？」

「そう、織斑先生にとって余計なこととしてくれたことへの罰」

ようやく解放されるのかと思いきや、俺は未だに織斑先生にこき使われ続けていた。

もちろん激しい抗議の声は上げたのだが、

「先週までの分は初日の罰だ。これからはそれ以降の分の罰だ」

とはつきり罰と言われてしまい、俺は自分の行動に対してつけを払わされる結末を迎えていた。

幸いにして写真のことまでは知られていないようだったが、バレた後は間違いなく俺は三年間無償労働の刑に処せられるのだろう。

だが俺はこの程度で人生を諦めてしまうような弱い人間ではない。

非暴力不服従の象徴であるサボタージュによって運命に抗おうと
していた。

するとそれを見て取った織斑先生は教師としての顔を崩して笑つた。

「智希、お前も自分の身は自分で守れるようになっておけ。一夏には専用機があるがお前にはない。各国の駆け引きで所属する国もしば

らくは決まりそうにない。今のお前にあるのはその体だけだ。だが幸いなことに一夏と違ってお前には小賢しい企みを考え出す頭と、それを行動に移せるだけの実行力がある。利用できるものは何でも利用していけ」

隣では感動した山田先生が涙を流さんばかりだった。

やはりこの人は俺が成績表やら何やら活用したことを知っていた。きつとそうなんだろうなと分かってやったことではあるが、やはり人の手のひらで踊るのはあまり気持ちのいいものではない。

俺はせめて一矢だけは報いようと、照れ隠しも含めて反撃を行う。「でもそれって職権濫用じゃないんですか？」

笑顔のまま千冬さんは俺の頭の上に拳骨を落としてきた。

有耶無耶にされ織斑千冬第二秘書として就職してしまったことに気付いたのは、その日寮に戻ってからだだった。

「大丈夫ですか甲斐田さん？ 相当にお疲れなのでは？」

自分の愚かさ加減を罵っていたら現実から離れてしまっていたようだ。

オルコットが心配そうに俺を見ている。

「ごめんごめん、ちよつと考えごととしてた。それでどうしたの？ 時間なら全然あるけど」

「はい、実は甲斐田さんに少しご相談したいことがありました」

オルコットに限らず、基本的に俺に持ちかけられる相談事の内容は一つしかない。

「その……一夏さんのことについてなのです」

「えーと、その前に場所はそこの休憩室でいい？ 外を通る人から見えるし別の場所でもいいけど？」

オルコットは俺を待ち伏せしていたようで、俺が寮に入るとすぐ声をかけてきていた。

さすがに入り口で立ち話するような内容ではない。

「甲斐田さんがよろしければわたくしは構いませんわ」

「むしろ気にすべきはオルコットさんだと思うけど」

「ふふっ、お気遣いありがとうございます」

本当にこの女は誰だ。

もはや女性上位主義者の面影など微塵もない。

長くなりそうだし水でもと思い給水器の方へ行こうとすると、オルコットは足早に俺を追い抜いて給水器の前に立ち、手際よく二人分の紙コップに水を入れた。こういうことは男がやって当然だとする女性上位主義者にはとても考えられない所業だ。

それにオルコットは育ちも良さそうだし、まさか自分でやると思わなかった。

「どうぞお座りください。別にわたくしを待つ必要などないのですよ。お時間をいただいているのはわたくしの方なのですから」

驚きを通り越してもう怖い。この女模擬戦前後で間違いなく脳みそが入れ替わってる。

もしかして俺もこれから同じ目に遭うんじゃないだろうか。

すぐに本題には入らないのが上流階級の嗜みらしく、席についた俺とオルコットは世間話的に部活見学ツアーの様子について軽く話した。

だが放っておくといつまでも世間話が続きそうなので、俺の方から切り出す。

「で、オルコットさんは一夏の何が気になるの？」

「はい、それはですね」

さて真剣な表情になったオルコットは何を求めるのか。

おもしろいもので、こういうところにその人の人となりが出てくる。

一夏の彼女になりたいんだけどどうすればいいの的な丸投げをするのもいれば、一夏の好みを事細かに聞いてくるものもある。最近あいつ一夏と距離近いんだけど実際どうなのと他人の動向を気にするものもあるし、一夏は自分でどうにかするから番犬だけ追い払ってくれというような限定的な頼み事だけの女子もいた。

「一夏さんにはどのような女性がふさわしいのでしょうか？」

悪くない。最初にその質問を出せるオルコットは少なくとも馬鹿

ではない。

「やはり篠ノ之さんのような強い方がいいのでしょうか？ あの織斑先生の弟さんですし、強さという要素がなければならぬのでしょうか？」

「ええと、ちよつと待って」

念のためこれだけは確認しておかなければならない。

「はい、何か？」

「そういう話をする前の前提として、それを気にしているのは誰？

オルコットさん本人？ それとも他の誰か？」

相談にやって来るのは何も一夏に恋する本人ばかりではない。女の友情を見せてやるとばかりに意気込んでやってきて、ミイラとなつて一夏に惚れてしまうのもまた日常風景だった。他にも友達のためと言いながら最初からダシに使うつもりだった女子もいたりして、いったい女とはどういう生き物なのだろうかと考えさせられる事件に暇はなかった。

「それはもちろんわたくしですが？」

「ありがとう。聞き方からしてオルコットさんの友達の話かもしれないと思つたので」

「やはり甲斐田さんはこのような相談を数多く受けていらつしやるのですね」

オルコットが感心したように言う。

俺は一夏のことを相談するには最適な相手だという評判だった。

中学時代は基本男四人に番犬一匹でつるんでいたのだが、俺と一夏以外の男二人は自らの欲望に忠実なところが多分にあり、一夏に近寄ってきた女子を自分の方へと引き寄せようとするのがしばしばだった。

それは一度たりとも成功することはなかったが、いやなかつたが故に、彼らは時を重ねるごとに女子から遠ざけられていくという本人達にとって実に悲しい現象を生むこととなった。

また番犬とは一夏に邪な想いを抱く対象を追い払う存在であり、結局消去法という形で俺が相談相手として選ばれていた。

それだけなら最適とまではいかなかっただろうが、当時一夏の生態の観察を行っていた俺は、様々なサンプルを一夏にぶつけるを試みていた。

そのため向こうからやって来てくれる様々なタイプの女子は俺にとって絶好の実験相手で、当時の俺はハーレムというところまでは考えておらず、一夏はどんな女を好きになるのだろうかと相談に来た女子に対して親身にアドバイスを行った。

まさかそれも全てうまくいかないとは思わなかったが、その副産物として俺は女子からの信頼を得ることができたという話だ。

「まあ三年近い付き合いだからね。それでオルコットさんは一夏にふさわしい女性になりたいわけなんだ」

「その……恥ずかしながら……」

「いやいや、すごく立派な心がけだと思うよ。大抵の人は自分を強くアピールして一夏を好きにさせようとするんだけど、それは一夏には逆効果だから」

「そうなのですか!？」

自分のことをエリートだとまで言って威張っていた強気なオルコットはどこへ行ってしまったのか。一夏は相手の人格まで変えてしまえるというのであれば、是が非でもオルコットの分析を行わなければならぬ。

「一夏が女子にすごくモテるのは分かるよね？」

「……はい」

「だから一夏を好きな女子はみんな焦る。そして全力で前に出て自分をアピールして目立とうとする。でもそうすると一夏はドン引きしてその子を遠ざけるようになってしまっただ」

「まあ……」

オルコットといえど想像できる光景だろう。自分が自分だと目を血走らせて押し寄せてきたら一夏でなかろうと引く。普通に考えて怖い。

「だからまず最初に自分じゃなくて一夏のことを考えるのはとても大切なことなんだ。そういう意味で一夏にふわさしいという言葉が出

て来たオルコットさんは他の女子よりも何歩も先に進んでるよ」

「ありがとうございます。それはわたくしにとつてとても心強い言葉ですわ」

オルコットを持ち上げる言葉だが、実際そうであるのもまた事実だ。相川さん達はまだ好みとかタイプというような表面的な部分にしか気が及んでいない。一夏が平気で接しているので距離のとり方などはうまいようだが、一夏の心にまで踏み込めていないしそのままでは踏み込むことはできないだろう。

「その上で言わせてもらおうね。一夏にとつてふさわしい女性と言っているうちは無理」

「はい？」

オルコットも先を行つてはいるが、それでも一夏への道は遙か遠いのだ。

「だってそれは誰も知らないから。一夏本人を含めても」

「どういうことでしょうか？」

「外から見ても一夏にふさわしい人がどんなものか分かるようならみんなそれを目指す。一夏がそう言うなら一夏の言う通りにやればいい。でも、誰一人として一夏の心を掴んだ人はいない」

「それは……」

一夏にふさわしい女性なんて解答があれば俺が真っ先に活用している。それは今のところ一夏自身の中にさえないのだ。

「もちろん、一夏にふさわしい女性とはこういう人だろうと考えて努力している人もいる。でもそれはその人にとつてであつて、一夏がどう思うかは全く別の問題だ」

「答えがないものを目指すことはできない？」

「答えがあればとつくに誰かが到達してるだろうね」

俺は軽く笑つて両手を挙げ、お手上げだと示してみせた。

「それでは誰も一夏さんと恋人になることなどできないのでは……？」

「実際あれだけモテてるのに誰もできてないしね」

「そんな……」

壁にぶち当たったオルコットが下を向く。

この程度で諦めるならそれはまた仕方のないことではあるが、オルコットを分析したいので個人的にはもうちよつと頑張つて欲しい。

「もし諦めるのであれば」

下を向いたオルコットの体がピクリと動いた。

「告白すればいい。一夏は慣れてるし、綺麗に振つてくれる。いい加減な返答じゃなくて、きちんと真摯に伝えてくれる。大抵の女子はそれですつぱり諦められて別の方向に進めるって言うから、うじうじ悩むくらいなら告白して砕けた方がいい場合もある」

「……」

一夏に断られてストーカー化するという事案は意外と少ない。聞けば一夏の声を聞いて目を見ると悟つてしまうそうだ。ああ自分には無理だ、と。

女とは夢見がちでありながら同時に現実的でもある。可能性が欠片もないと分かれば切り替えて次へと向かうことができるようだ。一夏に振られた女子はどこか達観して大人の階段一步登りました的な顔をして、恋愛以外の何かに打ち込んでいる人が多い。

もちろん思い詰めてストーカー化するのもいるが、一夏の激しい拒絶を前にして例外なく心折れる。無理心中してやるというところまで燃え上がらせた女はまだいない。

「甲斐田さんは」

「なに？」

「クラスの方々もこれまでと同じ結末を迎えると思つていらつしやるのですか？」

「今のままでとね」

「では篠ノ之さんは？」

さすがはオルコット、いいところに気がついている。

篠ノ之さんは普通であればとても一夏に相手されるはずのない態度なのだが、一夏は今も普通に接している。幼馴染だからとクラスメイトは片付けているようだが、四六時中一緒にいたわけではないのだ。何しろ六年ぶりの再会なのだから。

「そもそわたくしが一夏さんにふさわしい女ということ考えたのは、篠ノ之さんを見ていてのことなのです。あの方の態度を見てみると、幼馴染とはいえどうして一夏さんはそれを普通に受け入れているのだらうといつも疑問に思うのですわ」

「だから篠ノ之さんのようなタイプが一夏は好みなんだろうと考えたわけだ」

「はい」

やはりオルコットは相川さんより一夏に近い。相川さんは幼馴染の分先に行かれていて考えると差を縮めようと努力しているようだが、オルコットは差があるとは考えていない。

篠ノ之さんが一夏にとって特別な何かを持っていると気づいている。

「よく見てるね。クラスの人はまだそこまで考えてないよきつと」

「ではやはり篠ノ之さんのような方が一夏さんにふさわしい女性なのでは？」

「そう思うならそれを目指せばいいんじゃないかな？　それで篠ノ之さんを越えられると思うのなら」

俺はあえて意地悪を言ってみる。確かに篠ノ之さんは一夏にとって特別な存在だが、それは俺が思うには家族としてである。普通に接しているとはいえど傍目にも一夏の方に恋愛感情はない。果たしてそこを目指す意味はあるのかという話だ。

オルコットも理解したようで軽く膨れてみせた。

「前から感じていましたが甲斐田さんはとても性格の悪い方なのですね」

「前から思ってたんだ」

「正確には模擬戦の真相を知った時からですわ」

「作戦を考えたのは僕じゃないんだけど」

実に失礼な話だ。オルコットをおちよくるように言ったのは先輩方であって俺ではない。

俺は少し一夏と喋る内容について協議したくらいだ。

「そういう意味ではないのですけれど……まあいいですわ。結局自分

の道は自分で探すしかないということですね」

「現在の結論としてはそうだね。あ、別に隠してるとかないからね。今のことは聞かれたら誰にでも答えていることだよ」

「甲斐田さんを疑っているわけではありませんわ。むしろよくここまでお話ししてもらえたと思っっているくらいです」

普通に会話していて慣れてしまったがやはりオルコットは相変わらずしおらしい。

もしかしてオルコットの素はこちらだったのだろうか。入学初日の時は虚勢を張っていただけという方が説明つきそうな気がしてきた。

「適当なこと言われてけむにまかれるとか思ってた？」

「はい。ですがそこから何か一つでも掴めればと考えておりましたわ」

「ひどい言われようだ」

笑い合って空気が緩む。お互いにその気があれば会話というのは通じるものだ。意地を張っていたり、感情的になっていたり、自分を押し付けようとしたりと一方的でなければそうそうおかしいことにはならない。

このまま終わってもよかったのだが、俺はあることを思いついたのでオルコットに投げかけることにした。

「じゃあその度胸に敬意を表して、僕から応援の言葉を一言」

「あら、応援をしていただけのですか？」

「意外？」

「ええ、甲斐田さんは篠ノ之さんを応援しているものとはかり……」

オルコットはただ一夏だけを見ていたわけではないようだ。

俺が一夏の篠ノ之さんの間に立っていたことを理解しているらしい。

「僕がどう思おうと、結局決めるのは一夏だよ。いくら応援しようが一夏が選ばないことだって普通にあるし、そもそも篠ノ之さんでなければならぬ理由もないから」

本当は篠ノ之さんを正妻として一夏の相手にするつもりですが。

「ではわたくしのことを推していただけると?」

「邪魔はしないけどあえて特別に一夏に推すようなこともしないよ。篠ノ之さんにしてるのもフォローくらいだし。アドバイスというか、ほんの一言だけ」

「何でしょう?」

「オルコットさんにも、一夏にとって特別な何かがある」

「えっ!？」

相当に驚いたようで、オルコットは大きく目を見開いた。

「それが何かは分からない。恋愛感情ではない。でも、一夏にとってオルコットさんはそのへんの女子とは違うってこと」

「どういう意味ですの!?! お願いですから詳しく説明をしてくださいませ!」

オルコットが椅子から立ち思い切り身を前に乗り出してきた。

その真剣な目は飛び出さんばかりの勢いで、俺は飛び出てきた目に引きずり込まれそうな気がして思わず椅子ごと後ろずさった。

「いや、だから僕にもそれが何かはよく分からない。一夏が言ったんだ」

「何を!!」

「オルコットさんと友達になりたいって」

「え……」

予想外な言葉を聞いて、オルコットの動きが止まった。

「一夏に聞いても何となくそう思ったくらいしか言わなかったけど、オルコットさんと友達になりたいって言ったよ。だからって特に何か行動をするわけじゃなかったから、深い意味はないのかもしれないけど」

「一夏さんが……わたくしを……」

立ったまま、オルコットは下を向いて呆然と眩く。

俺もいろいろ考えたが、結局よく分からなかった。それなら本人に伝えて考えさせてしまえという話だ。オルコットは一夏に興味ないどころではないので、絶対にその意味を深く探るだろう。

「友達だから恋愛方面じゃ全然ないよ。でも一夏がオルコットさんに

興味を持っているのは間違いない。模擬戦の後に言った言葉だから模擬戦を戦って何かを感じたのかもしれない」

「……」

今オルコットの頭の中はフル稼働していることだろう。

「オルコットさんは他の女子とは違って特別なんだと思うよ」

「そうですー！」

「は？」

と、オルコットが答えを見つけたかのように力強い声を上げた。

さあ何だ？

「わたくしは特別なのですから、ありのままの姿で一夏さんに向かっていけばいいのですー！」

「あの、何を言っているんでしようか？」

意味が分からない。選民思想的なこと言い始めた。

「もちろん自分が変わる必要があるのであれば喜んでそう致しましょう。ですが、そうでないのであればわたくしは今の自分に対して何ら恥じるものはありませんわ」

ここにきて自信満々なオルコットが復活した。

「わたくしの母国は常に世界の先頭に立とうという気概を持ち続けて来ました。その血を引くわたくしもそうでありたいと思っています。セシリア・オルコットで駄目なら他のどんな女でも駄目だろうという心意気で、一夏さんに挑戦しますわー！」

拳を握り斜め上を向いたオルコットの姿は気品に溢れ、まさしく貴族という単語が似合う凛々しい姿だった。今にもノーブレス・オブリージュとかその口から出て来そうだ。

「そうです、普通の女では一夏さんの側にいられるはずがないのです。世界の先頭に立つ姿、一夫多妻制度をも認めた我が母国の精神を持って、わたくしはこの運命に向かっていこうと決めましたわー！」

「えっ？」

驚きのあまり俺は素で返してしまった。

決意表明はさておき、まさかこの女の口からその単語が出てくるとは夢にも思わなかった。

「あら、ご存知ありませんか？ 我が母国は一夫多妻制度を認めている世界で唯一の国ですわよ？」

「いや、それはもちろん知ってるけど……」

「ええ、確かにそれは法律としては形だけのものです。ですが、だからと言って意味がないわけではないのです」

「どういふこと？」

オルコットは微笑んだ。

確かにイギリスは一夫多妻制を認めたが、その法律は特に夫に対する条件が非常に厳しく、誰もクリアすることのできない事実上形だけのものではなかった。ヒモを許さないとかそういう次元ではなく、収入資産人格地位など男に対する要求があまりにも厳し過ぎた。この法律が制定された時、他国はイギリス人とは法律さえ作ればそれだけで安心する民族だと揶揄したものだっし、俺もパフォーマンスにさえならないぞ馬鹿じゃねえのと思った。

「法律とはその範囲にいる人を縛るものですが、それは物理的なところだけに留まるものではありません。人の考え方も縛るのです」
「……？」

「法律が制定され時間が経てば、やがて人はそれを当たり前のことだと思うようになります」

「だから今はあえて形だけにしたんだ」

納得した俺を見てオルコットは誇らしげに笑った。

「はい、この法律によって我が国は、男性は複数の女性を妻に持つことができるという考え方を得たのです。今はまだその時ではありませんが、将来そうなっていくのは間違いありませんわ。時が来ればわたくし達は混乱もなく自然とそれを受け入れることができるのでしよ
うね」

日本やアメリカが最たるものだが、男に対する負の感情は厳しい。感情的であるが故に、少数の男の立場の保護や復権がなかなか進んでいない。

だから未来を見据えて今のうちにといいことか。立派な考えだと思いが、今生きている俺や一夏は享受することのできない話だ。

だが同時に、これだろうか、と思った。

一夏がオルコットのの中に見たのは前へ進もうとするその精神だろうか。

確かに一夏の周りにも俺の周りにも、今のオルコットののような女はいなかった。

一夏はほんの少し話しただけで感覚的な何かを得て、友達になりたいという言葉が出たのだろうか。

「なるほど、よく分かったよ。わざわざ説明ありがとう」「どう致しまして」

普通なら、オルコットは玉砕パターンまっしぐらだ。自分を押し付けてくる女を一夏は嫌う。

だが、友達としてとはいえ一夏側に受け入れる姿勢があればどうなるのだろうか。

友達になりたいという言葉の中にあるのは興味だ。興味とは知りたいということだ。オルコットが一夏に自分を知って欲しいと願い、一夏がオルコットを知りたいと感じた時、それはすごく噛み合うのではないだろうか。

そしてオルコットは俺にとっても重大な言葉を発していた。

一夫多妻制、すなわちハーレムに理解があるとか、一夏にうつつけどころの話ではない。もちろん俺の考えるハーレムと形は違うだろうが、一夏の周りに複数の女がいることを許容できるというのは何よりのアドバンテージだ。

この瞬間俺の中で一夏ハーレムメンバー第二号の座が確定した。

ここだけは慎重に慎重を重ねなければと思っていたので、同じ女性であるオルコットに他の妻達を説得させられる可能性ができたというのは、もうそれだけで大手を広げて迎え入れたい。

ただ目の前のオルコットは一夏に突撃してそのまま爆発してしまいうような勢いなので、適度に間に入って一夏の抵抗意識をやわらげる必要はありそうだ。

様子を見て篠ノ之さんと同じようにフォローを入れていくことにしよう。

「じゃあ一夏のことでも聞きたいことでもあったら言ってね。オルコツトさんに限ったことではなくて他の人にも聞かれたら答える程度の話だけど、知らないよりはいいだろうから」

「それは本当に助かりますわ！ 何しろわたくしは一夏さんのことをほとんど何も知りませんので」

その人を知って好きになることもあれば知らなくて好きになることもある。

恋愛感情とは本当に摩訶不思議なものだなと思った。

11. 俺が同じことをやったら即命はない。

俺が同じことをやったら即命はない。

山田先生を押し倒した一夏を見てそう思った。

豊満と言うより表現しようもない自身の胸に顔を埋められて、山田先生は完全にパニックに陥ってしまっている。

一夏は慌ててすぐに顔を上げるも、蒸気でも昇ってきそうなほど真っ赤な山田先生と目が合う。どうしたらいいか分からなくなり頭がショートした一夏はそのまま固まってしまった。

結果目の前にあるのは横たわり見つめ合う男と女。さあこれから何が始まるんだと言わんばかりの熱い光景だ。

もちろん、一夏が血迷ったわけではない。

ようやく、一夏の専用機がお目見えすることになった。

模擬戦で使わなかった一夏の専用機だが、倉持技研がそのまま持ち帰っていた。

曰く、時間があるならもう少し調整したいとのことである。

模擬戦での一夏のデータも反映させるそうで、名前聞くのを忘れた倉持技研の技術者は意気揚々と、でもフラフラになりながら帰っていった。

そして今日土曜日、ISの実技授業に合わせて専用機が搬入され、晴れて一夏は自らの専用機に搭乗することになった。

だが。のだが。なのだけれども。

「ありやりやく、おりむーはらつきーだね〜」

横でいつも笑顔の布仏さんがのんびりとした声を出す。

どうも俺はこの小動物に懐かれてしまったらしい。

数日に一度行われる生徒会長との口論バトルがツボにはまったらしく、布仏さんは俺達の近くで観戦しては爆笑を繰り返している。

他のクラスメイト達は慣れてしまったのか次第に気にも留めなく

なってきたのだが、布仏さんだけは毎回楽しみにしているようだ。一度廊下で練り広げたこともあって、見逃してなるものかとばかりにここ数日は俺の側をうろつくようになっていた。

「専用機つてそんなに扱いづらいものなのかしら？」

一方その隣で鷹月さんが少しも動じずに首を傾げる。

俺はこの人ともわりと話をするようになっていた。

何しろ篠ノ之さんと寮で同室で、常識人でもある。あえて放置をしているものの篠ノ之さんが一人で思いつめるんじゃないかと内心不安な俺は、鷹月さんに篠ノ之さんの監視とできればのメンタルケアもお願いしていた。

やはり部活見学ツアーからはじき出された日は自室で荒れたらしく、鷹月さんはなだめるのに苦労したそうだ。

次の日になぜ放置したと文句を言われてからちよくちよく篠ノ之さんトークをする仲になっている。

「あーあー、織斑君振り回されてるねー。思ったより動き過ぎるぜ的な？」

そこに相槌を入れるは自称、食にこだわりのある谷本さん。

この人は入学の日からカツ丼を始め毎日食堂で違うメニューを頼んでは味比べを行っていた。

結論としてはどれもおいしくて毎日幸せだそうである。

もちろん俺はそこに突っ込みを入れることもなく、突っ込みを期待していたらしき顔がスルーされて悲しみに彩られていく様はそれなりに見応えがあった。

それ以来俺に突っ込みをさせたいらしく、毎日色々と策を弄してきてはいるのだが、どれも生徒会長の足元にも及ぶレベルではない。

とまあ入学から二週間、クラスの中も一緒に行動するグループが固まってきた。

女とは群れる生き物だと言ったりもするが、数人のグループに分かれながらも特に諍いもなくクラスは穏やかな雰囲気を作っていた。

さすがに全国から集まった超優秀な人材と言われるだけあって、周囲とうまくやるスキルは皆十二分に持っている。

オルコットもお上品そうな数人と優雅にお茶を飲んでいたりしていた。

一夏しか見ていない篠ノ之さんだけは危うかったが、同室の鷹月さんが気を遣ったりして一夏や俺のいない時は彼女達と一緒に行動しているようだ。

「何をしている！ 早く離れないか！」

と、見つめ合う熱い二人の光景に耐え切れなくなり、ISスーツ姿の篠ノ之さんが飛び出した。

うつとりとしていたり鼻息荒そうなギャラリーもいたので見た目の悪い光景ではなかったと思うが、さすがにそこにいるのが自分ではなかったことは許せなかったようだ。

「あ、す、すいません！」

我に返った一夏が慌てて飛び起きるも、その反動で後ろの方へ吹っ飛んでゴロゴロと転がった。

さつきから一夏は万事がこの調子だ。専用化処理中は重い重いと文句を言っていたが、終わってからは機体の動きに体が全くついていけない。

前へ進めば自分でその速度に驚いて急ブレーキをかけて止まりきらず前に転がる。宙に浮かべば状態を維持できずあっちこっちへフラフラと移動し思うように動けない。拳句の果てが着地しようとして勢い余って地面に体ごと激突。そして駆け寄って手を差し伸べた山田先生に体重を預けてしまい、そのまま押し倒して今に至る。

「だ、大丈夫か!？」

体操選手さながら綺麗に転がった一夏へと駆け寄る篠ノ之さん。

まあISには搭乗者に危害が及ばないよう絶対防御と呼ばれるバリアが張られているのだが、とはいえ転がれば目は回る。一夏は上半身だけ起こし何ともないと手を振った。

「一夏さん、もしかして打鉄の時と同じ感覚で動いているではありませんか？」

自身の専用機に乗ったオルコットが原因に思い当たったらしく前に出てきた。

同じ体験をしたのだろうか。

「同じも何もISはISだろう？」

「量産機は自分のものではないので動かす、のですが、専用機は自分のものですから動く、ですわよ？ お分かりになりますか？」

動かす、動く。

「あれ、何かそのセリフどっかで聞いた気がする」

「それはきつとそのISを開発された企業ででしょうね。調整で装着した際に注意事項として言われたことだと思えますわ」

「それだ！」

それだじゃない。

こんなんじや専用機で模擬戦なんて絶対無理だったと冷や汗かいている俺はどうなる。

騙しやがったな倉持技研と危うく恨みまでぶつけるところだった。

「どうぞ一夏さん、お立ち上がりください。ISのことは意識せず、いつも生身の体でやっているように」

「あ、ありがとうセシリア」

オルコットに差し出された手を握り、一夏はおそるおそる立ち上がる。

今度は山田先生の時のように押し倒すことはなかった。

「ね？ 難しいことではありませんわよね？」

「ああ、そうだ！ こういう感じだった！」

あれほど四苦八苦したのは何だったのかという次元で、晴れて一夏は笑顔を取り戻した。

どうしてもできないならまだしも、簡単にできるのなら最初からやれと言う言葉しか浮かんでこない。

「感覚を取り戻したのですたら、宙に浮くのも問題はありませんわね？」

「ああ、思い出した思い出した！ そうだよ、打鉄動かしててすっかり忘れてた！」

一夏がカラカラと笑う。

つられてオルコットが口に手を当て上品に微笑むも、周囲に漂うは

微妙な空気。

そして一夏の後ろで燃え上がる怒りの炎。しまった。

「よし、そうと分かればこっちのもんだ。思いつきり飛び回ってやろう！」

「お伴しますわ、一夏さん」

幸いにして、そのまま飛び上がったことにより一夏は怒りの炎によって燃やされることはなかった。

本当にさつきまでののはなんだったのかという勢いで楽しく空を飛び回る一夏、とオルコット。

まあいい、一夏のことはいもういい。

問題は俺がこれから消防活動を行わなければならないという事実だ。

布仏さんを挟んで立っている鷹月さんに目をやると、鷹月さんは諦めたような目を返して頷いた。

そして二人して火事の発生現場へと向かう。

「篠ノ之さん」

「甲斐田！ あれはどういうことだ！」

「いや、どういうことって言われても見たまんまだよ」

炎が俺に向かって飛んできた。

最近の火事は無秩序に燃え広がるのではなくピンポイントで燃え移ろうとするものらしい。

「さつきまでの一夏は何だったのだ！ オルコットの一言だけでどうしてこうも変わる！」

「だから、一夏はその一言で思い出したんだよ。元々できてたって話」
燃え移ろうとする炎は当然相手の都合など構いはしない。

俺にできるのは努めて冷静に振る舞い、怒りの炎に理性の水をふりかけることだ。

「篠ノ之さん、そんなに怒っても織斑君は篠ノ之さんのこと見てくれるわけじゃないよ」

「何だ?!」

と思つたら鷹月消防士が炎に油をぶちまけるといふ暴挙に出た。

おかしい、消防士というのは消火活動を行う存在であつて、間違つ

ても火事を拡大させるような真似をするはずがない。

「だいたい篠ノ之さんは織斑君の側に行つてどうするつもりだったの？ 何か解決策でもあったの？」

「そ、それは……一夏の気を静めようと……」

一転、炎の勢いが急速に萎んだ。

危うく俺は鷹月さんを愉快犯の放火魔認定するところだったが、どうやら対処法を心得た上での行動だったようだ。

「解決策がないのならオルコットさんに文句は言えないわよね。それに織斑君もうまく動かせるようになったんだから、今どこに篠ノ之さんの怒る要素があるの？」

「そ、それは……」

嫉妬です、とはさすがに篠ノ之さんの公的な立場上口が裂けても言えない。

なるほど、鷹月さんは炎を燃やしている酸素の供給を断ち切るという手段に出たのか。

手馴れているあたりこの手の揉め事仲裁はよくやっているのだろう。

俺にとつても篠ノ之さんの扱い方としてとても参考になった。

「まあまあ、一夏も思い通り動かせるようになって喜んでるじゃない。だったら篠ノ之さんも一緒に喜んであげた方が一夏も嬉しいと思うよ？」

「むっ……」

あつ、と口を広げ鷹月さんが俺を見た。そのままにしておいては凹むだけだし、気分を上げさせるのはとても大事な役目だ。だからこれはただの役割分担であつて、自分にだけ憎まれ役をやらせやがってという目で睨まないでくださいお願いします。

「ほらほら、笑顔で手を振つてあげて。一夏ー！」

「わ、分かった……」

俺の声に気づいた一夏が大きく両手を振つてとても嬉しそうだ。ついでにオルコットも笑顔で小さく手を振っている。

篠ノ之さんはぎこちなく手を振るも、一夏の笑顔を見て怒りはどこ

かへ行ってくれたようだ。

鷹月さんがジト目で俺を睨んでいる。すいません今度埋め合わせはします。

いつの間にか近くへ来ていた布仏さんが手を伸ばして鷹月さんの頭をよしよしと撫でている。

谷本さんがやっぱり愛は世界を救うんだよとか意味の分からないことを得意気に言っていたが、俺はいつも通り気にしないことにした。

「あの……私は……」

すっかり存在を忘れられた山田先生は横になったまま涙目だ。

と、一瞬の寒気とともに音もなく笑顔の織斑先生が俺達の後ろに立っていた。何を思考する間もなく魔剣が次々と振り下ろされていく。

こんなところまで出席簿持ってくる必要があるのかという疑問は痛みで口に出せなかった。

「というわけで、来月のクラスリーグマッチのことを考えよう！」

壇上に立ち、俺はクラスメイト達に向かって投げかけた。

横ではにこにここと優しく俺を見守る山田先生と、疑わしげに俺を半睨みの織斑先生。

正直失敗した。俺はこの二人が出て行ってから声を出したのに、あろうことか聞きつけて戻ってきてしまった。もう少し離れるまで我慢をするべきだった。

月曜の一時間目はロングホームルームで、特に決められた授業内容は無い。

織斑先生も騒がず自習でもしていると言い残して一度教室を後にした。

ならばその時間ももらったと俺は土日で考えた計画を実行に移そうとしたのだが、少しばかり動くタイミングが早かったようだ。

ブラックリスト認定中の俺が好き勝手に行動することなど許され

るわけもなく、俺はまたも監視下の状況に置かれることとなった。まあ、知られても文句を言えないように理論武装はしているつもりだが。

「今度は何企んでるんだ？」

入学早々俺に騙されてクラス代表となった一夏が、訝しげに疑問を口にした。

今度も当事者であるだけに反応は早い。

だが今回に限っては一夏を騙したりするつもりはない。むしろみんなで一夏を応援する計画なのだ。

「これから話すから。それでまずみんな自分はクラス代表じゃないから関係ないと思ってるかもしれないけど、リーグマッチの内容分かってる？」

一夏にはではなく、教室に向かって聞いてみる。半分くらいは頷き、何人かは首を傾げた。まあ今はそんなもんだろう。

「じゃあ一応説明しておくね。一言で言うところクラス代表同士が戦う総当りの模擬戦だ。時期はゴールデンウィーク終わってから一週間後、三日間かけて行われて、うちのクラスはもちろん一夏が出る」

一度説明を切って様子を見る。まさか理解度に問題はないだろうが、それに対してどう思っているかだ。気になるのか、どうでもいいのか、自分のことか、他人事か。

まさに自分のことである一夏はふてくされた顔をしている。

「織斑先生は新入生のお目見えって言ってたけど、実はそんな単純なものじゃないみたいなんだ。この結果次第で学年におけるクラスの立場が半年間は縛られる」

興味なさげだった連中がこちらに目を向けた。視界には入っていないものの、自分の名前を出された織斑先生が俺を睨んでいるのがひしひしと感じられる。

「具体的には、アリーナや整備室といった特別教室使用の優先枠にI S 訓練機貸出の特別枠。寮では大浴場やマッサージルームの一日貸し切り権とか食堂で一ヶ月デザート一品付きとか細かいのもある」

「甲斐田君、特別枠とか優先枠について詳しく」

鷹月さんが手を挙げた。つまり、乗ってきた。

「優先枠は特別教室とかを借りるときに最初からうちのクラス用で枠が取られてるってこと。その時間に使いたいと言えばそのまま使える。こういうのって基本的に奪い合いだから、どれだけ有り難いかは分かるよね?」

「訓練機の特別枠も?」

「もし一位になれば、半年間放課後は事実上一年一組用として二台も訓練機を使える。IS訓練機なんて奪い合いどころじゃないからね。予約入れようと思ってもそもそも抽選なんだから」

「そうなんだ!」

予定通りクラスメイト達の顔色が変わった。

確信を持って言えるが、これを考えたのは間違いなく織斑先生だ。学園のホームページにはルール等の概要しか書かれておらず、職員室まで行って詳細の書かれた紙を手に入れてその裏側まで見てようやく分かるレベルの代物だ。

つまり詳細を気にかけて上で最後まで行動した人間にしか分からない。特典も申告制なので、知らなければ勝ったとしてもその権利を行使することができない。

意地が悪いどころではない。煽ってやる気を出させるようなこともなく何も言わないあたり、実に性格がねじ曲がっている。

「あとは六月にある一年生全員参加の個人戦でのシード権とかあるね。詳しいことはここにコピーしてきたから見れば分かると思う。あ、もちろんこれクラスの外に出しちゃダメだよ。わざわざ敵に塩を送る必要ないからね」

人差し指を立てて口に当てるが、みんな紙に集中していて誰も俺の方を見ていなかった。

しばらく沈黙が流れる。

全く興味なさげな一夏はこともあろうに配られた紙で折り紙を始めていた。

さすがにこれはやめさせようと思うもすぐに聖剣シユツセキボが振り下ろされ、一夏は自業自得で悶絶していたので見なかったことに

する。

やがて読み終えた順に顔を上げてこちらを向いてきたが、もう自分に無関係だという顔はない。

ここにいるのは厳しい競争を勝ち抜いた人達で、向上心は人並み以上にある。しかも憧れのISに関する様々な部分で有利になるのだから、乗らないわけはないのだ。

そしてみんな読んでいて気づいただろうが、このIS学園は自分だけがよければいいではやっていけないさそうなのだ。

何事においても集団に対する言及しかなく、個人に対するどうこうは一切ない。

おそらく今後もクラスという集団単位で考えて行動する必要があるのだろう。

だがそれでいて今回はクラス代表という個人に委ねなければならないというのだから、これを考えたであろう織斑先生は本当にいい性格をしているとしか言いようがないと思う。

「で、みんな協力してくれるってことでいいかな？」

全員が読み終わったのを見てから、俺は確認を取る。

もちろん、まさか協力しないのはいないよなという意味でだ。

全員が力強く頷く。いや、当のクラス代表だけは不承不承だった

が。
「じゃあこのまま話し合いを続けさせてもらうね。見て分かる通りもう試合順まで決まってる。午前午後で二試合づつあるんだけど、学年五クラスだから毎回どこか一クラス休みで、うちは初日の午前午後で二試合、二日目の午前やって午後休み、最後に三日目の午前って形だ」
「相手は綺麗に五組、四組、三組、二組の順なのね」
「分かりやすくていいんじゃない」

正直言えば既に決まっているこの組み合わせから疑うべきではないかと思っているが、今からみんなを混乱させても何なのでひとまず黙っておくことにする。

少なくとも休みを計算に入れた戦略は立てなければならぬだろう。

「できれば全勝したいと思う」

「それは普通に狙えるんじゃないの？　だって織斑君は専用機持ちなんだから」

「まあそう思うよね」

もちろん結構危ないという話である。

「でも今年はおルコットさん以外に専用機持ちっていないんでしょ？」

「ええ、今年はおたくしだけだと聞いておりましたわ」

「いや、普通に俺いるんだけど」

「失礼致しました。もちろんこれは一夏さんのことが知られる前の話ですので」

「あ、こっちこそすまん」

やはり楽観論が流れている。

だが本気で勝ちたい俺としてはみんなに危機感を持ってもらわなければならぬ。

「おルコットさん」

「何ですか？」

「今専用機持ちの一夏と模擬戦やったとして、勝てる自信はある？」

「それはどういう意味でしょうか？」

おルコットの顔色が険しくなる。別に馬鹿にしようとしているわけではないのだが。

「いや、別に深い意味あるわけじゃなくて、普通におルコットさん勝てるよねって話」

「おいそれは……ってまあそうか。セシリアには実力じゃ勝てないからあんなことしたんだもんな」

「ですが、わたくしも一組ですので一夏さんと戦うことはないのですけれど？」

「たとえば量産機でも、おルコットさんと同じ戦術で戦ったら？」

教室を見回して、何人かは気づいたようだ。おルコットにも篠ノ之さんにも理解の色が見える。

残念ながら我らが織斑一夏は全くピンときていないようだが。

「おい智希、俺にも分かるように説明してくれ」

最初から考える気すらないのはある意味清々しい。

少しは自分の力で考えさせようかと思っただが、時間がもったいないのでそれは今度の機会にすることにした。

「一夏の専用機の武装って何?」

「雪片式型だ! すごいんだぜこの剣!」

満面の笑みを浮かべる一夏だが、土曜の実技訓練で見せたその性能は確かに凄まじかった。知識としてはあつたが実際に見せられるとこれほどのものかと思えたほどだ。

「バリアー無効化攻撃とか極悪もいいとこだよねー」

「それって織斑君に対しては防御意味ないってことでしょ?」

「喰らったら最後、一撃必殺の技なのだ!」

気づいてない連中は盛り上がっているが、相手がいる以上そうそううまくはいってくれないのだ。

「一夏、他には?」

「他って?」

「他の武装」

「いや、それだけだけど?」

「ここでもほとんどが気づいた。」

「織斑君、それもしかして遠くから攻撃されると何もできない?」

「えっ?」

悲しいかな、一夏の武装は剣一本しかない。

オルコットのようにならなくて攻撃されて近づけないと、一夏は一方的に攻撃を受けるだけなのだ。

当てればといいと言っても、今の素人同然の一夏にどこまでその技術があるというのか。

よける技術にしても同様だ。

「でもオルコットさんに勝てたんだから……」

「あれはごまかしの極地を目指した結果だから、オルコットさんが平常心だったら瞬殺されて当然だった」

「何もできなかつたわたくしとしてはその件についてはコメントを控

えさせていただきますわ……」

ようやく実はマズインじゃないかというところに思い至り、みんな揃ってどうすればいいかを考え始めた。

「でも織斑君の専用機の性能なら量産機くらいなんとかなるんじゃないの?。」

「オルコットさんのよりも高性能なんだよね?。」

「おととい初めて専用機に乗った一夏が使いこなせてると思う?。」

「それは……」

今のこの場で思いつくような戦術はとつくに俺が考えている。

その上でやばいという話なのだ。

「専用機って武装は変えられないの?。」

「基本的にはそうですが……」

「あ、これ以上の武装追加は無理って言われた。空き容量がなくて剣一つで限界なんだとさ。」

「エネルギー無効化攻撃にほとんど持ってかれてるらしいよ」

「一点特化どころの話じゃないわね……」

教室がざわめき始めた。

「じゃあ特訓しよう! 持久戦になればいつかは勝てる!。」

「特訓するのはもちろんだけど、一夏の攻撃ってシールドエネルギーを使うから攻撃する度に消費するんだよね。だから長期戦には向いてない」

「何その欠陥機!。」

とうとう機体にまで文句をつけ始めてしまった。

「これ全勝は無理そうじゃない?。」

「どのへんが現実的なんだろ?。」

「なあみんなさつきからひどくないか?。」

いくらなんでも諦めるの早過ぎだ。

自分の機体をボロクソ言われて一夏が拗ねている。

「で、じゃあどうするかって話なんだけど」

場が混沌とし始めてきたので俺はまともに入る。

「正直、僕にもこれって考えはない。だからみんなの知恵を借りたい

んだけど、その前にみんなに言っておきたいことがある」

一度俺は言葉を切った。そして自分に視線が集中しているのを確認してから続ける。

「今回に限っては、一夏以外はみんな裏方なんだ。だから、一夏を勝たせるために自分は何ができるかってところから考えて欲しい。あるいは自分が何をしたいかってことでもいい。みんな将来の事とかどこまで考えてるか分からないけど、二年になったら学科が分かれるのは確かだ。だから指揮科目指す人は戦術を考えると、パイロット科なら一夏の訓練相手になるとか、整備科なら一夏の機体にはあまり触れないけど対戦相手の機体については考えられる。衛生科なら一夏の日常を管理するとかね」

一夏が嫌な顔をした。発声練習までさせられた日々を思い出しているのだろう。

だがその他の連中は考え始めた。さあ考えてくれ。もちろん俺は俺で考えるが、みんなで考えた方がアイデアが出るのは確かだ。

人一人ができることに限りはあるが、ここには三十人もいる。少なくとも俺一人でやるより三十倍のことができるはずだ。

俺はあえてクラス全員を巻き込んだが、だからといって彼女達に無茶を言うつもりはないし無理強いもしない。あくまで彼女達が自発的に協力するメリットがあるようにするつもりだ。特典を見た瞬間これは引き込めると思ったのは事実だが。

まあ元々そういう風にかけているのだから乗っかるだけだと言えばその通りだが、乗せられて嫌々やるよりは自分の意思で乗り込んだ方がいいだろう。

隣では感激屋の山田先生が感動して顔を赤くして震えている。

対して織斑先生は疑わしげに俺のことを見ている。もちろん俺がそんな殊勝なことを言うとは間違いなく裏があると確信していることだろう。

当然、俺の中に裏、真の目的はある。

このシチュエーション、一夏のためにクラス全員が行動するというこの状況は、まさしく俺が待ち望んでいたことだ。

無理をしてまで一夏をクラス代表にしたのはこのためと言っても過言ではない。

さあみんな、一夏のためにがんばろうじゃないか。

一夏はかけた期待に十分応えてくれるからやりがいはとてもある。

そしてあわよくば、一夏のことを深く知って惚れてくれればなおよしだ。

12. 昨日まで味方してくれたからって今日も味方してくれるとは限らない。

昨日まで味方してくれたからって今日も味方してくれるとは限らない。

宮崎先輩に断られた。

もちろん、リーグマッチの協力をだ。

さすがに今回はおんぶにだっこをするつもりはなく、助言の一つくらいはもらえないかと思つて話をしに行ったのだが、三年生は一切の協力を拒否するとまで言われてしまった。

さすがにその言い方はひどくないかと抗議をすると、基本はひとり教えたのだから後は自分の力でやれとのお説教だ。

別に俺は自分の成長のためとかは一切ないのだが、この先輩方は俺のことを向上心溢れる学生だとも思っているのだろうか。

確かにこのIS学園は上を目指す連中の集まりではある。が、俺と一夏だけは例外で形だけの受験で放り込まれたに過ぎない。

一夏は中学生生活の延長で楽しくやればいい程度だし、俺は一夏にハーレムを作らせることが何より第一だ。

極論を言えば過程などどうでもよく、楽に勝利という結果が得られればそれに越したことはない。

「そんな顔しないの。絶対その方が楽しいんだから」

「そうだよー。私とかIS学園の行事で何やり直したいかって聞かれたら迷わず一年次のリーグマッチと答えるくらいだし！」

「あたし今すぐく甲斐田君が羨ましい。だってこの時期から対策立てて準備できるんでしょ？ あれもできるこれもできる、何より時間がある。ああ、いいなあ……」

「指揮科の人間としちゃこれを経験するしないじゃ今後が全然違うね

！」
不満気な顔をした俺に対し先輩方が興奮してまくしたてる。俺は立場的にも指揮科に進む気は全くないのだが。将来など、一夏はきつと日の当たる道を進むのだろうか、どうせ俺はISを動かせるだけの希少な男性IS操縦者として、どこかのテストパイロットになるのだろうか。

「甲斐田君、分かっているとと思うけど、別に意地悪じゃないからね。将来とか考えなくても君ならこれは間違いなく楽しんでやれると思うから。だいたいクラス代表でもないのにリーグマッチの価値に気付くなんてその時点でみんな拍手だよ」

「いや、それは織斑先生に毎日拉致されて職員室に通ってるのでたまに知っただけです」

宮崎先輩は俺を褒めるがさすがにそのまま受け取ることなどできない。

入学初日にリーグマッチのことを知り、これは一夏のために何とかしてクラスの連中を巻き込みたいと俺は考えていた。

それ以来何かネタはないのかとあれこれ探していたのだが、ある日の放課後、織斑先生が席を外した隙に山田先生にリーグマッチのことを尋ねたところ、満面の笑みでルールの書かれた紙を渡してくれたのだ。

今のところ山田先生は俺の発言を額面通りに受け取ってくれていて、俺に対して協力的で非常に助かっている。IS学園は向上心のある生徒には十分応えていくとのお言葉だ。

そういう経緯なので他のクラスが聞いたらきつとずるいと言うだろう。

「ううん、そもそも興味のない人はルールの書かれた紙を見つけても読もうとさえない。情報は自分が意識して見ないと全く意味をなさないものだから、見つけた上できちんと理解までした甲斐田君はえらいー」

「ほんとこれは期待の星現るだねー」

「それが男子ってのがもう何かあるって感じるね！」

宮崎先輩からよくできましたと頭をなでられるが子供扱いされても全く嬉しくない。というか勝手に期待までして俺に何を求めているのだろうか。一夏には興味を示さないし本当におかしな連中だ。まさかと思つたが特に俺に何かをしてくるわけでもなく、基本的に色恋沙汰とは縁遠い人達なのだろうが。

「分かりました。助言含めて協力してもらうのは諦めます。でもそれなら今どうしてもうんと言ってもらわないといけないことがあるんですが」

「分かってるよ。だからって他のクラスに協力はするなだよな？」
「はい」

どちらかと言うと俺にとつてはこちらの方が大問題だ。何しろこの人達に一夏の手の内は全て知られてしまっている。

敵に回られるとオルコットの時以上に勝ち目がなくなってしまうのだ。

「もちろんそんなつまんないことはしない。別に私達は君を叩き潰したいとかそういう気持ちはないし。全力で傍観させてもらうね」

「それなら十分です。あともう一つ、相手が認めれば個人的な取引はありですか？」

「それは何をするかによるかな。不当に上級生の知識や経験を得ようとするのなら阻止させてもらうけど」

「今週の訓練機の予約を譲ってもらおうかと思つていて」
「ふむ。みんなどう？ 私的にはできるものならだけど」

全力で傍観つてそれストーリーカーじゃない的発言をした宮崎先輩が周囲を見渡す。

「他の一年生もそのうちやり始めることだしいいんじゃない？」

「まあ抽選までして得た予約を簡単にもらえるわけないんだけどねえ」

「言っておくけどこの前のは特別だよ？ 基本的に訓練機の予約は集団で申し込んで誰か当てようってくらいだから、そうそう譲るとかはないんだからね？」

よし、まあ大丈夫そうだ。

今の俺が一番怖いのは先輩達の機嫌を損ねて敵に回られることである。

大丈夫だろうと思っていたが、見込みだけで動いて失敗してしまつては元も子もない。

「うん、それなら甲斐田君の交渉術を見させてもらおうかな？ 君が訓練機の予約にどれほどの価値を見ているかも気になるし」

「よかったです。それじゃ先輩方いろいろありがとうございます」

「えっ？」

そう言つて俺は立ち上がると宮崎先輩が驚いた顔をした。

「何か？」

「これから私達に見せてくれるんじゃないの？」

「でも先輩つて予約持つてないですよ。予約を持っている人と交渉するつもりですが？」

「ああ、そういうこと。ということは個別交渉をするつもり？」

「はい」

普通に返した俺に宮崎先輩は呆れた表情をした。交渉自体はもう認められたので何もおかしなことはないはずなのだが。

「あのね、君は今どれだけ無茶なことをしようとしているのか理解してる？ 七人と交渉するのがどれだけ大変かちよつとでも考えてみた？」

「ああ、だから先輩に仲介をしてもらえれば交渉は一回で済むつて話でしたか」

「そうだけど、甲斐田君分かってないよね？」

指揮科とはそういう発想をする人種のようにだ。確かに宮崎先輩他指揮科の人達を説得できれば、その人達に個別の交渉は任せられる。

指揮の名を冠するだけあってまず人を使うことから考えるのか。自分でできるなら自分がやった方が早いと思うが、人にぶん投げられるのなら楽は楽で俺好みでもある。

「んー、でも今回は自分でやった方が早いと思うのでそうします」

「ええっ!？」

先輩は何をそんなに難しく考えているのかと思つたが、ようやく理

解した。

先輩は俺には言葉しかないと思ってる。

いやいや、今の俺には先輩達に絶大な威力を持つ対価を持っているのだ。

「綾、分かった。甲斐田君は最初から難しく考える必要ないんだ」「えっ?」

「あたしも分かった。そうだよ、最初に体一つで来たから何もなくて思い込んでたけど、持ってるじゃない!」

「ああー、あれか」

「えっ? えっ?」

珍しいことに宮崎先輩が気づいていないが、他の人達は分かったようだ。

そう、俺には織斑千冬信者が絶対逆らえないアレがあるのだ。

「じゃあそういうことで、失礼します」

教室から出たところで、やっと気づいた宮崎先輩の大きな声が聞こえた。

交渉は拍子抜けするほどあっさり終わり、パイロット科の先輩方は皆喜んで訓練機の予約を譲ってくれた。

今回用意した七枚の写真は以前のもの程ではないが、世間的には貴重な高校生時代の織斑先生の姿が写されている。

ISの世界大会モンド・グロッソで優勝して有名になって以降の写真は山とあるが、それ以前については織斑先生自身が嫌がったのかほとんど出回っていない。つまり俺の持っている写真は織斑千冬マニアの間では高く取引される代物なのだ。

だからマニアが見たこともなく俺しか持っていないと言われれば、後で取り返しの付く訓練機の予約を譲るのに躊躇はないだろうと思っていた。そして実際その通りだった。

こうして俺は着実に織斑先生に対する罪を重ねていつているが、どうせバレたら終身刑になるのは決まっている。ならばそれまではあ

りがたく使わせてもらおうということ、もう出し惜しみするのはやめにしてどんどん使っていくつもりだ。

もちろんそうすると早々に弾は尽きてしまうだろうから、それまでに一夏の価値を高めたところではある。一夏の写真や映像は着々と蓄積されていっているの。

そんなことを考えながら予約変更の手続きを済ませ、意気揚々と教室へと戻ってきたのだが、今俺のやったことで新たな問題、いや揉め事が発生していた。

「あたしに使わせてよ！」

「いやいやここは私が」

「私はずっと一夏の相手を務めてきたのだから……」

「だったら今回は譲ってくれていいんじゃないの？」

確保できた訓練機を誰が使うのかという話である。

予約が取れたことを聞いて一夏が喜んだまではよかった。が、今日の放課後誰か相手してくれる人いない？ と迂闊にも一夏が声を出した瞬間、はいの返事が教室内に何十もこだました。

相川さん他一夏派の女子はもちろん、未だ一夏に興味を示していない連中まで手を上げていた。まあ一夏のことを抜きにしてもISに触れる機会があれば逃したくはないのだろう。

押しの弱そうな女子と自身が専用機持ちのオルコット以外、つまりクラスのほとんどが立候補していた。

自分のやれることやりたいことを考えろと俺に言われたのに、いざISを目の前にしては理性など簡単に吹き飛んでしまったようだ。

一夏がお前どうにかしろよと目で必死に助けを求めてくる。クラスメイト連中は自分を選んでくれと鬼気迫る形相で一夏を取り囲んでおり、ドン引きした一夏はずっと顔がひきつったままだ。

本来なら仲裁に入るであろう鷹月さんまで一夏の胸ぐらを掴む勢いなので、この混沌とした状況を止める人間がない。

ちなみに加わる必要のないオルコットは余裕の表情で高みの見物を決め込んでいた。

「かいだー、これどうにかしないの？」

「甲斐田」

「かいだー」

最初は訛っているのかと思ったが、この小動物はクラス中の人間にあだ名をつけて回っていた。

いくらやめろと言っても聞かないあたり意外と頑固な人間だ。

「仕方ない、ここは私が爆弾を抱えて飛び込めばみんな幸せになれる！」

「きちんと一夏の相手をしてくれれば別に誰でもいいんだけどなあ」

いつも通り谷本さんを流して、誰がいいのかを考える。

実力的には実技訓練を見た限り全員初心者でそう変わらなない。篠ノ之さんは多少上だが剣しか扱えないので、銃で距離を取って相手してもらいたい俺としては偏っている分むしろ不適當の類に入る。

あえて一夏に興味なさそうな女子にしてもいいが、俺が決めて俺に感謝をされても意味ない。だからその場合は一夏に決めさせる必要があるが、今この場で一夏にそれを伝えるのは無理だ。

結論、やっぱり誰でもいい。

「智希！ お前が予約取ってきたんだからお前決めろ！」

そのうち殴り合いでもして決まるだろうと放置しようとした瞬間に一夏の悲鳴が飛んできた。

さすがに自身の命がかかっているとかなれば、見捨てようとした俺の態度を読み取るくらいわけなかったようだ。

一斉に視線が集中する。ギラついていて、そこにいるのは肉食獣の群れだった。

本能に従ってすぐさま逃走を試みるも、体を動かす間もなく両腕を掴まれた。右に笑顔の布仏さん、左に涙目の谷本さん。

そして前に眼の奥が少しも笑っていない笑顔の鷹月さんがいる。

「甲斐田君、君の私に対する仕打ちを考えればここは当然私よね？」

「あつ！ そういう脅しはするいぞー！」

「甲斐田君！ ここは私にー！」

肉食獣の群れが俺を捕食しようと襲い掛かってくる。

これが日本で一番優秀な人材なのかと心の中で悪態をつきつつ、俺

は身を守るためごく普通の提案を口にした。

「一週間あるんだからみんな順番に使えばいいんじゃないの？」

「え？」

「は？」

「何それ？」

肉食獣共の動きが止まった。

「智希、それどういうこと？」

「だから、予約は一週間分あるんだから交代でやればみんな使えるってこと」

「なんだそれ早く言えよ！」

そういえばそこまで言っていないなかった。というかその前に一夏が今日の対戦相手を募集してしまい、騒ぎになったので言いようがなかったのもあるが。

「甲斐田君、それ最初に言うべきことじゃない？」

「なんだなんだ、それならこんな焦る必要なかったじゃん」

「我を忘れて醜態を晒してしまった……」

「きつと甲斐田君はさあ愚民ども争え争えとかほくそ笑んでたんだね！」

「かいだーは悪い子だなあ」

谷本さんの争え争え発言に少しイラツとしたが、突っ込んで相手を楽しませるだけなのでここも触らない。

「じゃあ言うね。細かいんでメモの用意」

するとみんなあつという間に席についた。この変り身の早さは何なんだろうか。一言で言えば現金というやつだが。

「今日は打鉄、時間は四時七時、明日はラフアールで時間一緒、水曜はメイルシユトロームの時間同じ、木曜金曜は打鉄で時間変わらず、土曜はメイルシユトロームを午後一時から七時、日曜はラフアールを九時七時で一日使えます。いつ誰が何を使うかは特に指定しないので相談して決めて」

言い終わると教室が静まり返った。

今度は自分がどこに入るかの算段でも立てているのだろうか。

まさかないだろうがこれに文句つけてきたら俺は怒る。貸出予約表と相談して三種類の量産機を揃えたのだ。そして対戦相手が使つてきそうな万能型ラファール・リヴァイブを長時間使える日曜に当てるといふ気の遣いようだ。

「で、来週以降なんだけど予約はないからこれから取つていかないといけない。基本的に一週間前にならないと予約はできないので、もう今日からだ。予約は抽選なので数撃ちや当たる方式でいくしかない。今日から毎日みんな予約申込票に名前書いて持つて行つてね。本人と学生証ないと受け付けてくれないんで、授業終わつたら毎日それやつてから各自の行動をすること。発表は次の日に予約表に載るか誰か一人見に行けばいいよ」

誰も何も言わないのでどさくさ紛れに俺は予約を強制化した。

予約についてはさつきパイロット科の先輩から交渉ついでに聞いてきていた。

当選率は一割弱程度だそうで、三十人で申し込めば二人は引つかかってくれるはずだ。

「訓練場については一応予約制だけど、訓練機ない人が使うこともないから、訓練機を取れば基本使えるはず。予約を確認したその足でついでに取ればいいと思う。まあ他の人達も使つてて全面使えるわけじゃないけど」

なぜ誰も声を出さない。考えごとをしている割にはみんな揃つて呆然とした間抜け面だ。

あ、もしかして今俺は引かれているのだろうか。何こいつそんな必死になつてるの的な、ちよつとついでにいけないんだけど的な、一人空回っている状態なのだろうか。

「甲斐田君」

と、鷹月さんが手を挙げた。表情が硬くてちよつと怖い。

「いろいろ聞きたいことはあるんだけど、どうやってそんなにたくさんの予約を取れたの?」

「三年生の先輩に頼み込んで譲ってもらった。これはオルコットさんと模擬戦やる時もそうしたんだけどね」

「そうでしたの?」

「私と一夏はずっと打鉄を使っていたな」

「俺のは改造までしてもらったなあ」

予約を譲ってもらった詳細はあまり大きな声で言えないのでさりげなくそらす。

一夏と篠ノ之さんにオルコットが気づかずにしても乗ってくれた。

しかし模擬戦は先週の話か。ずいぶん前のような気がする。

「甲斐田君、ごめんなさい」

いきなり鷹月さんが綺麗に腰を折った。

すると他のクラスメイト達も次々と立ち上がり同じ動作と謝罪の言葉を繰り返す。

「ど、どうしたんだみんな?」

篠ノ之さんまでが同じ動作をし、そこに乗れなかった一夏がビビりながらあたりを見回す。

俺も同様だ。まさかこれ以上は協力できませんとか言われてしまふのだろうか。

「甲斐田君は真剣にやろうとしていたのに、私達はいい加減だった。特典に魅力を感じてたけど、模擬戦するのは織斑君だからと自分のこととして考えてなかった」

こうなればせめて訓練相手として篠ノ之さんとオルコットだけは引き込まなければと冷や汗をかいていた俺に、鷹月さんはよく分からない謝罪をしてきた。

模擬戦をするのは一夏だし、一夏が勝つための協力をしてくれれば内心はどうだろうと別に構わないのだが。まああわよくば一夏に惚れるとは思っているけれど。

「結局あたしも自分のことしか考えてなかった。何も努力せずに棚ボタで使えるISに飛びついて、みつともないってもんじゃないね」

相川さんまでまさかのシリアスモードに入ってしまった。真面目そうな女子ならともかく、お気楽系にまでやられてしまうと俺としてはもうどうやってこの空気を変えていいか分からない。

「まあまあみなさん、まだ話をお聞きした初日ではないですか。甲斐

田さんは週末から準備を始めていたのでしよう。でしたらわたくし達よりも先に進んでいるのは当然の話ですわ」

そんなこの場の救世主はオルコットだった。そういえば騒ぎの中この女は高みの見物を決め込んでいた。だからその分他の連中よりも精神的余裕があつたのだらう。

「むしろこれは喜ぶべきことだと思いますわ。甲斐田さんは自ら行動しわたくし達に何をすべきか具体的に示してくださいだったので。みなさんもこれからどういうことを考えていかなければならないかイメージができてきたと思いませんか？」

「うん、確かに今までピンときてなかったけど、実感として湧いてきたかも」

よく分からない共感が女子の間に広まり、俺と一夏は取り残されてどうしようと顔を見合わせた。

オルコットの言う通り土日かけて考えていた俺がいろいろやっているのは当然で、別にクラスメイト達が恥じる必要性などどこにもないのだが。

「甲斐田、お前はよく意味不明な言動をするが、自分の行動には常に責任を持つのだな。一夏にクラス代表に押し付けた時は何事かと思つたが、そのまま放り出すようなことをしていない。今自ら動いて示してみせたのは見事だ」

篠ノ之さんにまで信頼された目で見られて、ようやく俺も理解した。

みんな優等生だけあつて、根底は真面目なのだ。

俺を鏡にして、彼女達は自省をしている。

おそらく、そういう人間でないとIS学園には合格できないのだらう。

他人のせい、他人事としてしまつてはそれ以上の成長はない。何事も自分のこととして捉え、そこに自ら課題を見つけ出し挑戦する場所がIS学園だと織斑先生は言っていた。

なんと俺には似つかわしくない場所だろうか。

一方、一夏は篠ノ之さんに褒められた俺を疑わしげに見ている。俺

がそんな殊勝な人間でないことを知っているからだ。内心を一切吐露していいないので、一夏は俺のことをきつと愉快犯的にロクでもないことばかりしでかす奴だと思っっているだろう。まあ、あながち間違ってもない。

とりあえず俺は首を傾げて一夏に返す。俺と一夏の間では共通認識として何か勘違いをされているということにしておこう。さすがに俺も篠ノ之さんの言っていることは真実だと一夏に胸を張るつもりもない。

「よし、それじゃみんなこれから本当に真剣にやりましょう。まずは訓練機のことだけど、せっかく使えるんだからみんな一時間ずつどれかに乗るってことにしましょうか。日曜の余った時間については対戦した織斑君に一番苦戦した相手を選んでもらうということどうかな?」

「俺!」

「だって模擬戦をやるんだから最終的には技術のある人とやった方がいいわよ」

やる気を出した鷹月さんが仕切り始めた。これなら俺は楽できそうだ。宮崎先輩は楽しめと言ったが、みんなやる気になったし無理して俺が出張することもないだろう。俺が考えるより頭のいい彼女達の方がいい結果を出してくれそうだ。

現に一番うまい奴が日曜も使えるようにして、各自のモチベーションを上げている。

「甲斐田君は特に指定しないって言ってたけどそれでいい?」

「みんながいいならいいんじゃないの」

「甲斐田、最終決定権はお前にあるのだ。そのようないい加減な答え方をするものではないぞ」

「はい?」

篠ノ之さんは何を言い出すのか。そういえばこの人は模擬戦の時も同じことを言っていた。いったい俺を何だと思っている。

「甲斐田君はいつ何を使いたい? 優先的に入れていいよ」

「僕? 僕は別にいいよ。その分他の人が使って」

「はあ!？」

クラスメイト達からこいつ何言ってるのという目で見られた。ああ、さすがに普通憧れのISに乗る機会を投げる奴はいないか。

「いや、平日の放課後は織斑先生に捕まってるし、長時間使える土日はもったいないだろうから」

「智希、別に遠慮しなくていいぞ。全部お前が取ってきたんだから、一日お前が使うでも文句言うのはいないし俺が言わせねえ」

実に正しくていい奴なのだが、今はそういう問題ではない。

何のために俺は特定の人物に対する罪を犯してまで予約を取ってきたというのか。

「別にこの一週間で使わないといけなくていいし、そういうのはリーグマッチ終わってからでいいよ。むしろ今は技術のある人が一夏の相手をした方がいいし」

「今はみんなそんな変わらないだろ。まあセシリアとか経験者はいるだろうけど」

「少なくともみんな僕よりはいいよ」

俺のIS適正、簡単に言うともISとの相性の良さはDランク、普通ならばとてもIS学園に合格できるはずのないレベルだ。世間にとって俺はISを動かせるだけの男でしかなく、それ以上の価値はない。一夏はBランクなので一般的なIS操縦者と同等なのだが。

「甲斐田君、そういうの抜きにしてやってくれないと私達が困る。予約取ってきた人を乗せないで他のみんなが乗るとかちよつと無理」

「虫のいいこと言ってる悪いとは思っただけど、お願い!」

「まだ誰が織斑君の相手に向いてるのかも分かんないんだし!」

そんなの全く気にすることはないのだが、変な罪悪感でも持ちそうな連中だ。まあ一二週間もすれば一夏の相手も固定化されてくるだろうし、別に今は意固地になることもないか。

「分かった。じゃあ日曜の朝一に使わせてもらうってことで」

「ラファールね、了解。じゃあみんな放課後に誰がいつ何を使うか決めましょうか。部活ある人も時間少し頂戴」

これ鷹月さんが張り切って仕切ってくれるから楽だな。誰も乗り

気じゃないなら俺がやるしかないと思っていたが、うまい具合にみんな気合入ってくれたので俺はもう何もしなくてもよさそうな気がしてきた。

もちろん何もしないで偉そうにしてたら反発を食らうだろうが、リーダーの座ごと明け渡してしまえば文句も出るまい。

「あと決めなきや行けないのは各自がどういう部分を担当するかってことかな。パイロット科志望の人が多いだろうけど学年の半分は整備科に行くことになるし、今回はみんな裏方ってことでそっち方面は見ておいたほうがいいかもね。せつかく三種類ものISに触れるんだし」

ここにいるのは厳しい競争を勝ち抜いた人達だが、IS学園に入学してもまだまだ競争は続く。指揮科に行けるのが最上位一割、パイロット科が三割、残りは整備科へ進む。衛生科は毎年十人程度の物好きが行くそうである。

模擬戦に向けての訓練中暇だった俺は、先輩方からそのへんのシビアな内情を聞いていた。

とは言っても一番食いつぶぐれないのは整備科だそうで、コアまで扱える一級のIS整備士ともなればそのへんのパイロット連中には負けないほどの高給取りになるとのことだ。だから整備科が負け組というわけでは全くなく、最初から整備科を目指している生徒も多い。

それでもパイロット科が一番人気なのは、まあ、ISに憧れてここまで来たのだからやっぱりISに乗りたいたいという話である。

「全体の総指揮は甲斐田君に任せるとして、担当ごとの班を作ったほうがよさそうね。パイロットは今回は織斑君だけで、みんなでその訓練相手をしていくことになるかしら。だからパイロット以外で、指揮班、整備班、いれば衛生班を作って、それぞれの班でどういうことができるかを相談していくのがいいと思う」

すらすらと話を組み立てて進めてくれるのはいいのだが、そこでなぜ俺を出してくるのだろうか。

今はどう見ても鷹月さんが総指揮をしているのだが。

「あの」

「甲斐田君何か意見ある？」

「いや、総指揮は別に僕じゃなくて鷹月さんがやればいいんじゃないの？ 今みたいに」

「は!？」

何言ってるのこいつという目を俺に向けるのは鷹月さんだけではなかった。まさかの全員だ。

「智希、お前もしかして言うだけ言って逃げようとしてるんじゃないだろうな？」

「一夏さん、そういう言い方はよろしくないと思いますわ」

「大方鷹月に自分の出番を取られて拗ねているのであろう」

笑顔で俺を信じるオルコットと篠ノ之さん。だが真つ先に俺を疑った一夏が正解である。

「ごめんごめん、私は自分の意見を言っただけであって別にそうしろと主張してるわけじゃないから」

「こういうところで揉めても仕方ないし、とりあえず形決めてやっていくでいいと思うよ」

「うまくいかないようならその場で変えていけばいいしね」

俺の関与しないところで話が進んでいく。ますます俺がいる意味がないんじゃないだろうか。

もしかして俺はお飾りのトップというやつか？ それならそれですることができるから別にいいが。

「甲斐田君、みんなオツケーみたいだしとりあえずはこんな感じでやってみるでどうかな？ 無理そうなら言って」

「いや、いいと思うよ。そもそもやってみないことには分からない部分が多いし」

「よかった。じゃあみんなまずは自分はこの班にするかを考えること！」

「おー!」

このままよきにはからえとか言っていれば済みそうな気もしてきたが、失敗した時切腹させられるのはきつと俺なんだろう。断頭台に

送られて石を投げられるための存在だ。

まあ俺のことなどどうでもいいが、一番の問題はこれで一夏が勝てるようになるのかという話だ。

一夏本人はクラスメイト達が自分のためにがんばってくれ、自分を今は嬉しく思っているようだが、それはクラスの期待を一身に背負うということでもある。

繊細な男では全くないが、責任感は一並み以上にあり、人の期待に応えようと努力を続けられる男だ。

だからこそこの前の模擬戦でも手を抜くことはなかったのだが、一歩間違えばそれは空回りに繋がる。

吹っ切れてしまえばその時の一夏ほど心強い存在はないが、普段考えて行動しない分変に考え出すと迷路にはまりがちでもあるのだ。

やはり俺の主な役割は一夏のメンタルケアだろう。クラスに衛生科志望の人間が出てくるかは疑わしいこともある。

とどのつまりは愚痴聞き役だ。なんだ、いつもと変わらないじゃないか。

ともかく、他のクラスよりも何歩もリードしているのは確かだ。

先輩達が言うにはゴールデンウィーク前に気づくクラスは少ないとのことだから、一二週間はアドバンテージがある。

四月中にやり方を固めてしまえばそれ以降を質の向上に当てていけるだろう。

幸い他のクラスにオルコットののような専用機持ちはいない。だからこちらは量産機相手の対策が練りやすく、一方相手は専用機持ちの男という未知の存在を迎え撃たなければならぬ。

実際はそうではないのだが、心理的には有利だ。

とりあえず目下は一夏がクラスメイト相手にどこまでやれるかだ。専用機の力でも何でもいいので対等に渡り合えるようなら言うことはない。そのまま堅実にいけば全勝優勝を狙える。

だがそうでなかった場合にどうするかだ。俺はもう前のように一発逆転を狙うつもりなどない。

今の一夏に足りないものを見極めて、勝つために必要な何かを積み

上げていこうと思う。

前の模擬戦で俺は勝つべくして勝つとはどういうことかを学んだ。もちろん俺は先輩達のようにはいかないだろうし、クラスメイト達だってそうだろう。

だが相手だって俺達と変わらない初心者。ならば準備をしてきた方がきつと強いはずだ。

クラスメイトは十分やる気だ。できればオルコット戦のように姑息なことをせず正面から勝ちたいし、勝てるだろう。

舞台さえ整えてやれば、この前のように一夏なら必ずやってくれる。

そして観客はまた一夏の虜となるのだ。

13. 問題とは順に片付けていくべきものだが、山と積まれるとうんざりする。

問題とは順に片付けていくべきものだが、山と積まれるとうんざりする。

目の前の一夏は布団を被って完全に凹んでしまっている。

なんだかんだで模擬戦にも勝ってしまった分、負けてショックを受けてしまうのは分かる。

だがそれよりも、自分は専用機を使っていながら量産機の相手になすすべもなくやられてしまったという事実が、一夏の精神を打ちのめしてしまっていた。

クラスメイト達はものすごいやる気を出してくれた。

出してくれたのはいいのだが、その結果、彼女達は全力を出して一夏と戦い、完膚なきまでに叩きのめしてしまったのだ。

俺はいつも通り織斑千冬第二秘書としての勤めを全うしていたので、最後の方しか見られていない。

だが少し見るだけでも何が起こっているかは容易に知れた。

確かに一夏の機体は高性能だ。全てにおいて相手をしてきた量産機の打鉄など及ぶべくもない。

だがその動きに慣れてさえしまえば、剣一本しか持たない初心者の一夏など簡単に封殺できるのだ。

最初のうちは一夏が相手を圧倒する。何しろ当たれば必殺のバリア―無効化攻撃だ。当たるまいと相手は必死に逃げ回る。だが次第に相手が慣れてきてしまうと、一夏は攻撃を当てるところか近づくとすらできなくなってしまった。

まさか一夏と正面から打ち合うバカはいないだろうということでは、相手には射撃主体で戦ってもらおうようお願いをしている。

そうすると、距離を取って射撃をしていれば安全に一夏に勝ててし

まうようだった。

剣一本しかない一夏は隙を見て相手に突撃するしかない。だが相手もそれを理解していれば対応は容易だ。一夏の動きを阻害するよう射撃を続けていけば基本は安全で、距離が縮まって少しでも危ないなど思えばすぐ離れてしまえばいい。一夏もフイイントをかけたりにして自分が思いつく限りの行動はしたようだが、全て相手に見切られてしまっていて効果を挙げられていなかった。

その上一夏の機体の欠点まで発覚した。エネルギーの減りが早過ぎるのだ。一夏のバリアー無効化攻撃は自身の防御、シールドエネルギーを消費して行うのだが、燃費が非常に悪かった。相手に当たってもいないのにあつという間に減っていき、やがて使用不可能になってしまう。

そうすると今度は一夏の機体は無防備状態となり、あとは相手の攻撃が当たればそのままダメージとして蓄積されてしまうのみだ。

必殺の攻撃手段を失い、その上防御なしの紙装甲。この状態でどうやって勝てというのか。

回避については機体の性能のおかげもあつてある程度射撃を躲すことはできるようだ。だがそれも相手が慣れて動きを予想できるようになってしまえば、複雑な動きのできない一夏にはいつかは当たる。

結果ジリ貧となつてしまい、今日の一夏は全敗に終わったようだった。

「なあ智希、今からでもクラス代表をセシリアに変わつてもらおうこつてできないか？」

亀のように布団から首を出し、一夏が情けない声を出してきた。

「無理」

「そんな……いや、でもこれ本当に勝つの無理だぞ？ だつてこつちの攻撃まるで当たる気がしないし」

「見てたから分かつてるよ」

「だつたらさあ……」

一夏は完全に弱気になっていた。

身を持って十分過ぎるほどの体験をしてしまった結果ではあるが、まさかここまで凹むとは。

中学時代しか知らないが、基本的に一夏は何でもそつなくこなす。であるからここまで完膚なきまでにという状況はなかったのかもしれない。

「じゃあまた先輩達に頼るのは?」

「それもとづくに断られてる。この件について三年生は一切の協力を拒否するだつて」

「はあ!? お前今度は何したんだよ!」

「そういう意味じゃなくて、一年の行事なんだから自分の力でやれつてさ」

「なんだそりや……」

一夏はがつくりと頭を落とす。

一夏は割と負けず嫌いなところがあるので、俺にとってこの光景は少し意外だった。

凹みはするだろうが、そのうちにじやあどうすれば勝てるだろうか
と闘志を燃やすに違いないと思っていたのだが。

「やけに弱気だね。オルコットさんの時とは大違いだ」

「あん時はさあ……結局自分だけの問題だろ。でも今度はクラス全員に関わってくるんだぞ。はい負けましたで済むようなことじゃないし、それに四回も負け続けるとかもうありえないっていうか……」

「やつてもいないのにもう負ける気?」

「こんなんでもうやって勝てつて言うんだよ……」

一夏は顔を枕に押し付けてぐりぐりと動かしている。その姿は芋虫のようだ。

やはり無知は強かった。オルコットするときなど正直今より状況は悪かったのだが、一夏は勝つ気満々だった。自信というのは根拠のない方がかえって精神的にはいいのかもしれない。

「なあ智希、やっぱリセシリアにー」

「ねえ一夏、そんなにみんなが信用ならない?」

「は?」

一夏が顔を上げる。

やはりぽかんと口を開けているこの姿はイメージ的によろしくないな。

「なんでこんなことしてるのかって言うと、リーグマッチで一夏が勝つたためだつてのは分かるよね?」

「うん」

「今のままで勝てるならそもそも訓練なんてする必要ないけど、そうじゃないからやってるわけだ」

「それはまあ」

「目標は本番で勝つことであつて、今勝てなくたって別に何の問題もないよ」

「だからこんなんじゃないよとて勝てる気がしないっていうかさ……」

しかめっ面の一夏は顔をぐにやぐにやと動かした。笑顔の練習をした結果顔の筋肉を使えるようになり、一夏は顔芸をするようになった気がする。

「結局一夏は全部自分だけで考えるつもり?」

「はっ」

「クラスみんなが手伝うって言ってるのに、信用できないから全部自分でやるって言いたいのか?」

「お前何言つてんだよ。俺そんなこと一言も言つてねえだろ」

「だってどうにも勝てる気しないって言ってるじゃない。みんながこれからそれを考えようとしてるのに、そんなのは信用ならないってことでしょ?」

「あ」

俺はあえて意地悪な言い方をした。

その方が一夏には効く。

「そりゃあさ、僕らは先輩達には全然及ばないと思うよ。でもみんなはがんばって考えようとしてるのに、今の一夏の態度を見たらさぞかしがっかりするだろうね。ああ自分達はこんなにも信頼されてないのかって」

「悪かった。そういうつもりじゃなかったし、そもそもそこまで考え

てなかった」

バツが悪そうに一夏は顔を背ける。

俺はもちろん隙を逃さず畳みかける。

「それならクラスのみんなを信頼してよ。みんな一夏が勝てるようにって頭を捻らせてるし、きつといい作戦を考え出してくれるから。一夏のためだけど、それは同時にクラスのため、自分のためになるんだからいい加減なことはしない。戦うのは一夏の役割だけど、それ以外のことについてはみんなが全部引き受けるつもりでいるんだよ」

「そうだな。確かに自分が思いつかないからって別に悲観することもなかった。今からみんな考えていけばいいんだよな」

「そうそう。それに今回は時間がある。三週間、実質この前の四倍以上だ。それだけあればどれだけのことができるか実感できるよね？」
「ああ。この前は一週間もなかったし、そんだけあれば相当できそうだな」

「それに先輩達だって一夏の動きを見てから作戦を立ててた。だから今日はまだスタートラインで、これから一歩ずつ進んでいけばいいんだ」

「だよな！ よし、なんかいけそうな気がしてきたぞ」

ようやく一夏のメンタルが回復した。

正直悩むほどのない問題ではあったので、遅かれ早かれ一人で立ち直っただろうけれど。

「だから今の一夏で一番大事なのは、弱点を出しきること。そうしないともみんなが対策を立てられない」

「確かに」

「本番で見つかったらもうどうしようもないからね。だから今のうちに全部出してもらわないと、むしろみんなが困るんだ」

「おう、分かった」

「しばらく負け続けることになるのは本当に嫌だろうけど、一夏に本番で勝ってもらうためにはどうしても必要なことなんだ。訓練なんだからと思ってそこはぐっとこらえて」

「いやいや、よく考えたら俺前の時も先輩や箒にボコボコにされてた。

お前の言う通り訓練なんだから、悔しがるのかそういう次元の問題じゃないよな。うん」

布団から脱皮して立ち上がり、一夏は強く拳を握った。

明日の夜はどうなっているか分からないが、少なくともこれから二十四時間は大丈夫だろう。

とりあえず、いつものごとく俺は大事な事実を誤魔化すのに成功した。

すなわち、オルコットなら一夏よりも簡単に勝てるんじゃないのという話である。

オルコット本人が一夏を推しているしクラスも今のところそういう雰囲気ではないが、勝つこと自体を最優先にしてしまうところの問題はどうしても浮上してくる。

これはどうにも勝てなさそうだとなくなってしまったら、きつとクラスメイト連中はオルコットや技術の優れた誰かにした方がいいと言いつ出すだろう。

だから俺としては早いところ勝つ見込みを立てなければならぬ。一夏に言ったほど余裕があるわけではないのだ。俺にとってはだが。

明日は昼にでも今日の成果を確認して、指揮班に方向性から考えさせる必要があるだろう。

俺が思いつけばそれに越したことはないのだが、確実にクラスメイト達が出した方がいい自信はある。

他力本願万歳ではないが、少なくとも自分の力を過信することはもうしないつもりだ。

「あ、そういえば今日は柔軟してなかった。けっこうひどくやられたし、怪我しないためにも大事だよな」

すっかり機嫌を直した一夏は床で柔軟を始めた。

ISは基本搭乗者の体を守ってくれるのでそういう心配はしなくていいのだが、わざわざ水を差すこともないだろうと思ったので特に何かを言うことはせず、俺は自分の思考に没頭することにした。

「これは相当厳しい状況にあると思う」

開口一番、鷹月さんはそう言った。

指揮班に名乗りを上げたのはたった三人だった。鷹月さんにオルコット、四十院さんの三人。

鷹月さんは絶対出てくるだろうなと思っていたが、オルコットが名乗り出たのは意外だった。理由を聞けば、もちろん自分はパイロット科志望だが、整備については自分の機体だけを見ればいいので、今回は指揮の方にするとのことである。

もう一人、黒髪長髪にタレ目でお嬢様系の四十院さんは指揮科を希望しているとのことだ。この人も上流階級っぽく、よくオルコットと優雅にお茶している姿を見る。入学当初から一夏に興味を持つこともなく超然としていて、最近はどうでもないがオルコットと行動することも多い。

「どういうことでしょうか？」

「このままでは一夏さんは何もできずに負けてしまうということですよ」

四十院さんもオルコットも敬語使いなので、この場がフォーマルな雰囲気になってしまう。

堅苦しいのはあまり好きではないのだが、二人ともそういうつもりはなさそうなのでとりあえずは気にしないことにした。

「銃の一つでもあればよかったんだろうけど、剣一本だけというのが本当に痛いわ。シンプル過ぎてこっちは作戦が立てづらいし、相手は対処がしやすい」

「昨日は当てられないどころか近づくとさえまなりませんでしたものね……」

鷹月さんが腕を組み、オルコットが顎に手を当てて難しい顔をした。

「ですけど、セシリアさんとの模擬戦では十分戦えていたと思いませんか？」

「あれはあんまり参考にならないというか、対オルコットさん専用み

たいな部分がほとんどなんだよ」

首を傾げる四十院さんに対して俺は詳細を説明した。

あの時は先輩方がオルコットを完全に読みきったからできたことであって、俺達ではとても真似できないのだ。

「なるほど。そういうことだったのですね」

「やられてしまった側としては弁明のしようもありませんが、あの時わたくしは対戦する一夏さんのことを何も考えていませんでしたわ。ですが今回は相手も警戒してくるでしょうし、同じ手はまず使えないでしょうね」

「聞けば聞くほどオルコットさん用に立てられた作戦だから、一般化するのには私達ではちよつと無理そうね」

オルコットがため息をつく。

四十院さんも理解してくれたようだ。ちなみに鷹月さんには模擬戦の後でどうやって勝ったんだと聞かれたので既に説明してあった。「今の話を聞く限りでは心理戦という部分は使えそうですが、どうでしょうか?」

俺が何度も思い返してやっとひねり出した要素を、四十院さんは一度聞いただけで拾い上げてしまった。

やっぱり俺が考えるより任せた方がよさそうだ。

「うん、心理戦は相手のことを十分理解した上でやれば有効なんだけど、じゃあどうやってそれを調べるのって話になる」

「あんまり大っぴらにやりたくないのよ。正直他のクラスにはできるだけ気づいて欲しくないからね」

「他のクラスの周辺を嗅ぎまわってはきつと怪しまれますわよね」

ここにいるのは、このクラスにいるのは忍者でもなく情報収集のプロでもない。さりげに噂話程度なら聞けるかもしれないが、果たして心理戦を仕掛けられるほどの情報を集められるかという点、まず無理だろう。オルコットの時は本人を指導したこともあってよく知っている二年の先輩の存在があった。

「確かにそうかもしれません。ですが、対戦相手の情報を得ることはどの道必要になってくると思います。どこまで分かるかはともかく、

ある程度は踏み込む必要があるのではないのでしょうか」

「うーん、どこまでできるかしら……?」

「心理戦はともかくとして、知っているに越したことはありませんわよね」

言われてみれば最初から無理だと決め付けることはないかもしれない。知り合いがいたりして案外ポロツと出てくるかもしれないし。「よし、まずはクラスの中で聞いてみようか。同じ中学とかで知っている人がいるかもしれない。鷹月さん、他のクラスの代表の名前は調べたんだっつけ?」

「名前だけはね。じゃあ順に、二組代表、ティナ・ハミルトン。カナダから来ている。以上」

「それだけですか?」

「だってそれ以外に調べようがないもの。接点とか何もないし」

「うちのクラスのリアーデさんってどこから来てたっつけ?」

「スペインですわ」

「知ってるわけないわね」

「基本IS学園に日本の国外からの各国枠は一つか二つしかありませんからね……」

調べようとした矢先にいきなり頓挫してしまった。

「こういうときに上級生から聞けないのはつらいなあ。とりあえず次行こう」

「三組代表、アニータ・ベツティ。イタリアの代表候補生ね。以上」

「またですか」

「代表候補生だからオルコットさん並の操縦技術はありそうだってことくらいかな?」

とても情報と言えるレベルのものではない。

「四組代表、更識簪。日本の代表候補生」

「さらしき?」

「甲斐田君知ってるの?」

「生徒会長と同じ苗字だ。もしかして妹とかな?」

「生徒会長さんの苗字を覚えていらっしやったのですね」

実に失礼なことを言うオルコットだが、姉だとしても上級生相手では確認ができない。

こっさりできないかも考えてみたが、三年生にバレたときのリスクが大き過ぎる。

「でも日本の方ならどなたかご存知なのでは？」

「そうね。後で聞いてみましょうか」

「じゃあ次お願い」

「はいはい。五組代表、佐藤香織。特に国の代表とかではないみたい」

「今度は普通の名前過ぎる……」

「そうなのですか？」

「日本で一番多い苗字ですね」

逆の意味で調べづらい。日本には同姓同名がたくさんいるそう。

「まあ一応聞いてみましょうか。IS学園に受かった佐藤さんならどこかで引つかかるかもしれないし」

「そうですね、やれるだけはやってみましょう」

名前だけは分かったが、なんとも先行き不安な話だ。

とても心理戦を仕掛けるどころの話ではない。

噂話から辿るにしても、まだ入学後一ヶ月も経っていないのでそもそも噂すら大してない。

知り合いから話を聞こうにも、IS学園は全国から集まってくるのと同じ中学という可能性が基本低い。外国人に至っては各国一人くらいしかいないので、他のクラスからでは人となりなど全く見えない。

情報収集と言えどもつともらしいが、実際具体的にどうやって行くのかとなるとさっぱりで雲を掴むような話だ。

「後は寮で知り合ったとか部活からいかしら？」

「あまり期待はできそうにないですね」

「無駄かもしれませんが今はできることをやってみましょう。やらないうよりは何倍もいいと思います」

この四人では四十院さんが一番ポジティブだなと思った。

まあ全員が同じ方向を向いているよりはいいだろう。

「まだ大した話はできなさそうね」

「そもそも判断材料がほとんどありませんわ」

「外のこととはともかく、一夏のことを整備班にある程度固めてもらってからかな」

こうして第一回指揮班会議は、特に実りもなく終わった。

「整備班としては、打鉄をベースに考えていくのがいいと思います！」
整備班を代表してだろうか、岸原さんが最初に発言した。

「織斑君の専用機は日本製だけあって打鉄の性質に近いです。だから打鉄の戦術を基本に置くのがいいんじゃないかと考えました！」

夜、寮の会議室に整備班の報告ということで俺は呼ばれていた。
今クラスのほとんどがここにいる。

篠ノ之さんもいつもの仏頂面で腕を組んでいた。

「もしかして打鉄を作ってるのって、一夏の専用機を開発した倉持技研？」

「そうです！」

別にいちいち語尾を強めなくてもいいのだが。

やけに張り切っている岸原さん、丸い眼鏡で赤いカチューシャをつけたクラスメイトは、一夏のすぐ後ろの席で俺も何度か会話をしたことがある。

この人は自分の机の上を教科書で要塞のように囲んでおり、俺がその机を指さして聞いてみたところ、すごいでしょ！ となぜか満面の笑みで返されてしまった。

「ええと、その前に整備班のリーダーは岸原さんでいいの？」

「あっ！ ごめんなさい！ 言うの忘れてました！」

「りっこは私と同じで最初から整備科志望なのだ〜！」

「ということは布仏さんも？」

「そうだよ〜」

見渡すとみんながうんうんと頷いている。

なるほど、整備科志望の人間にリーダーを任せたということか。

整備科志望も多少はいるだろうが、ここにいるほとんどはパイロット科を目指している。

だから俺の前に出るのは専門家となる予定の人にやらせようという話なのだろう。

「話そらしちゃってごめん。それで打鉄の話だけど、確かに打鉄はブレードを主体としている前衛機だね。他の機体って射撃が基本だから、確かに一夏とは方向性が一緒だ」

「はい！ ブレード、葵を片手に味方の盾となるのが打鉄の大きな役割です！」

「それなら確かに打鉄らしい動き方みたいなのはあるかもしれない。でもそれって後ろから攻撃してくれる支援機の存在ありきの話で、今回は一夏一人だしそうはいかないよね」

「は、はい。通常はラファールが遊撃を行ったりメールシュトロームが遠距離攻撃を行ったりして打鉄を支援します。特にメールシュトロームは打鉄のとの連携における相性の良さで有名です」

打鉄は前に出て自身に攻撃を引き付け、強力な防御力で相手の攻撃を十分に耐えることができるのが強みだ。だが今回は前に出なくとも一夏一人しかいないので、当然攻撃は全部一夏に飛んでくる。

だからわざわざ耐える意味は全くない。

「ということは支援がない以上は打鉄単体での動きってことになるんだけど、それはどういう動きなの？」

「え、えっと、アサルトライフル、榴弾（ほむらび）をもう片手に持って、牽制を行いながら距離を詰めるのが常道です」

「でも一夏には射撃武器がない。そうするとどうやって距離を詰めればいんだらう。訓練すればどうにかなるものなのかな……」

結局はそこだ。相手の攻撃どうの以前に、こっちの攻撃をどうやって当てるかだ。

オルコット戦では平常心を失わせた上でルーチンワークの攻撃パターンから変化をつけ、オルコットを混乱させようとした。だがそれが集中している相手に通用するかはちよつと疑問だ。

「甲斐田くん甲斐田くん」

「なに鏡さん？」

「もしかして甲斐田くんって一人で調べてた？」

「はい？」

急に話しかけてきた相手は本気で驚いた顔をしている。

鏡さんとあまり会話をした記憶はないが、この場で俺に話しかけてくるくらいだから整備科志望なんだろうか。

ふと見渡すと、クラスメイト連中がポカンとしていた。

特に間違っただけを言った覚えはないのだが。

「私達の調べたことはもう全部当たり前知ってるみたいなんだけど、みんなで手分けした作業を一人でやったの？」

「いや、今話してることってカタログスペック的な話だよね？ まだそこまで深い話はしてないよ？」

「だからそのカタログスペック的な情報を自分で調べたの？ ISって基本は軍用で情報規制が厳しいから、そういうのは少なくともIS学園や関係企業でないと分からないだけけど？」

「あれ？」

そういえば俺はどうして当たり前前に知っていたのか。ああ、この前模擬戦をやったからだ。もちろん俺は自分で調べることなど一切なく、情報など全部先輩方からもらっている。

「甲斐田くん、もしかして調べたんじゃなくて知ってた？」
「えっ」

鏡さんにジト目で見られて気づいた。よく考えたら俺は彼女達に情報を渡していなかった。

周りが俺を白い目で見ている。もちろんてめえ何隠してるんだよという抗議だ。

「まあ待て、甲斐田はきつと我々を試していたのだろう。どれほどの情報を調べてこられるかと図っていたのだ」

「じ、実は……」

「などと言うかと思ったか馬鹿者が！」

篠ノ之さんからまさかの裏切りを受けてしまった。昨日の昼は自分から庇ってくれたのに、何という背信行為だ。

「だいたいお前は前からそうだ。自分の中だけで何もかも全てを進めてしまう。自分だけのことならまだしも、他人が関わってくるのだからもつと人とコミュニケーションを取ってだな……」

久しぶりに篠ノ之さんの説教が始まった。ここ最近フオローをせずに放置気味だったので、どうやら鬱憤が溜まっているようだ。

というか前からなどと言われてもまだ入学して二週間ちよいで、そこまでお互いを分かり合った覚えはないのだが。

「まあまあ篠ノ之さん、そういうのはまた後で。それよりも甲斐田くん、情報、持ってるの?」

「はい……」

「どこでそれを手に入れたの?」

「前の模擬戦のときに三年生の先輩から……」

今の俺は警察から取り調べを受ける容疑者だ。いや、既に罪は確定しているので、むしろ裁判長から事実確認を受ける被告か。

「私達がここ二日で調べたことはこれなんだけど、ぱつと見でいいから甲斐田くんの知ってる情報と比べてどう?」

「ええと……僕の方がちよつと多いかな……」

「ちよつと?」

「いや、だいぶ……」

俺の立場は総指揮を取る最高責任者ではなかったのか。今の俺は白い目に晒されて、お飾りですらない。

「よろしい。では甲斐田くんはこの後自分の部屋に戻ったら、即私達に資料をメールすること」

「はい」

「有用無用は考えなくていいから、あるものを全部出しなさい」

「はい」

今の俺に許されているのはイエスと答えることのみだ。

イエスと答えることでゴルゴダの丘へと連れて行かれないだけ幸運だとも言えいいだろうか。

「まったく、これに懲りて自分勝手な行動をするのではないぞ」「あれ、そういえば篠ノ之さんって同じ情報持ってなかった?」

「は？……持ってなどいないぞ」

今一瞬間があつた。一瞬間があつて、一瞬間があつて、篠ノ之さんは笑顔を返してきた。

この女、間違いなく嘘を吐いた。

よく考えれば篠ノ之さんも同じ情報を持っているはずだ。勉強用と、通常の打鉄と改造した打鉄Kとの差異を意識させるため、先輩達はI S関係の情報を一夏との篠ノ之さんにきちんと送っていたはずだ。

一夏がその資料を開いてすらいないのは知っている。きっと篠ノ之さんも同じで、今の今まで忘れていたな。

「篠ノ之さん？」

「知らんぞ。知っていれば皆に渡しているに決まっているだろうが」

「本当に？」

鏡さんが疑わしく見ているが、この場で他人事にしてしまうなど、甘い。

一枚岩にヒビが入ってしまったては後は崩壊するのみなのだ。

「それもそうか。みんな調べる前に情報交換くらいはしただろうし、最初から分かってたらもちろん言ってるよね？」

「えっ？」

よくよく考えれば俺が忘れていようと誰かが俺に聞いていれば済む話なのだ。

俺が三年生を巻き込んでいろいろやっていたのは周知の事実で、何かしらの情報を持っていたとしても全然不思議ではない。

調べ始める前に俺が何か情報を持ってないのかとか、どういう調べ方がいいのかとか一言でも声をかけていればよかったのだ。

別に俺が悪くないとは言わないが、俺だけが悪いとも言いたくない。

「そうだよね。知らなかったのなら仕方ないよね」

「勿論だとも。知らなかったからこそ聞かれても答えられなかったのだ」

お前らにも罪はあるんじゃないのと暗に言った俺に対して、なんと

この連中は保身に走った。

笑顔でお互いに庇い合つて、これが組織の腐敗という現実か。

昨日の決意はどこへ行った。罪を認めなければ人は未来へと進めないのだぞ。

「じゃ、じゃあ今日はこれ以上話もできなさそうだし、このへんでお開きにしようか」

「そ、そうだね。明日もあるし、先は長いんだから」

「メ、メールはよろしくね」

言いながら、そそくさと連中が出て行く。

というかお前ら、忘れてるかもしれないが俺は一応責任者だ。このままで済まずと思つたら大間違いだ。

「あ、明日からは間違いなくみんな本気出すから！」

「それじゃ会議終わつたつて言つておくね」

最後に片付けをしていた岸原さんと布仏さんが出ていき、会議室は俺一人となる。

こうして第一回整備班会議は、俺が組織の綱紀肅正を誓つて終わった。

そしてこれで最後なのだが、気が重い。

衛生班など誰もいないだろうと考えていたのだが、出て来た。もとい、出て来てしまった。

いや、もちろん誰か手を挙げてくれればいいとは思っていた。だが、よりにもよつて手を挙げたのがあれとは、全く想像すらしていなかった。

部屋の前に到着し、俺は一呼吸置いてからドアをノックした。

はいという声と共に、ドアが開いて彼女が顔を見せる。

「やだ、夜這い？」

俺は何も言わず即ドアを閉めた。

「ごめんなさい！ 冗談です！ 冗談ですから！」

再びドアが開いて、俺の前にはまたも涙目となった谷本さんがい

た。

「どうぞ、入学前にスーパーの大安売りで買ったティーバッグの粗茶ですが」

「これはわざわざどうも」

部屋の中、丸いテーブルを挟み、俺と谷本さんは向かい合って床に腰を下ろした。

ベッドの上では同室の布仏さんが正座して、わくわくした目をこちらへと向けている。

衛生科。

IS学園の生徒の中でも少数の物好き、変わり者が進むというこの学科、最初聞いた時はひどい言われようだなと思った。

だが変わり者と言うのはその通りだ。厳しい競争を勝ち抜いてIS学園に入学しておきながら、ISではなくISに搭乗する人間の方に興味が行ってしまったおかしな連中である。お前わざわざここまで何しに来たの、素直に医療系に進んでおけばよかつたんじゃないの、と普通は思う。

本人達に言わせると、ただの人間に興味があるんじゃない、ISに乗っている人間に興味があるだけだとのことで、彼女達の中では大きな違いがあるらしい。

そして実物はどうと、確かにどこか変な人達だった。

一夏の生活管理はいいとしても、そこに笑顔や発声の練習を盛り込んでくるとは、どこからその発想を持ってきたんだろうかと思う。

俺は最初に説明を聞いた時、絶対にこの理由は後付けだとすら考えていた。

だが理屈は通っていて、しかも実際にはつきりとした効果まで出てしまった。

なので俺はもう一ミリも文句を言うことなどできない。絶対に俺に真似は無理だと思うくらいだ。

もしクラスに一人でもいてくれれば、俺にはとても出せない奇抜な発想を見せてくれる得難い人になるだろうと期待していた。

しかし、目の前に出て来たのがこれである。

普段は俺に突っ込みをさせようとあの手この手で奇妙な言動を行うこの女、谷本癒子だ。

彼女は入学初日にあった俺と生徒会長のやり取りに感銘を受けたらしい。

それ以来自分の進むべき道に向かって日々奮闘中とは本人の言だ。もちろん自分の人生なのだから好きにすればいいと思うが、だからと言って毎回俺のところに来なくてもいいんじゃないだろうか。

相方が欲しければ自分に合った相手を探せと声を大にして言いたい。間違いない言っても聞かないだろうから実際に言う気はないけれど。

「さつき本音ちゃんが楽しかったって言ってたけど、整備班会議でもしろいことあった？」

「布仏さんなら何を見ても楽しめるんじゃないかな」

「いいなー。衛生班になったはいいけど私一人で寂しいんだよねえ」

「ゆーこには私がいるから大丈夫！」

「ありがとう我が親友よ！」

布仏さんを見ると笑顔で手を振ってきた。

側にいるのがストッパーではなく煽る輩では、暴走が止まることなどとてもありえないか。

「じゃあさつきと衛生班会議を始めようか」

「相変わらずクールビューティだねえ甲斐田君は」

クールビューティは男に使う言葉ではない、などと決して言っってはならない。

この女は布仏さんのような天然系ではない。全て計算をした上で発言している。

まあ計算だけなら俺だつてそうなのだが、問題は、それがことごとくつまらないのだ。センスがないのだ。どこまでも微妙なのだ。

別に俺にはセンスがあるとか言いたいわけではない。だけれども、突っ込みさせたいならもうちよつとおもしろいこと言えよ、とは思ってしまうのだ。

日々俺は生徒会長と熱い闘いを繰り広げている。生徒会長もきつと手応えを感じているだろうが、俺だってそうだ。

だからもう少しレベルの高いやり取りをしたいのであって、こんな取ってつけたような無理矢理な突っ込みなどやりたくもない。

そういうわけで、俺は徹頭徹尾谷本さんをスルーし続けている。

「とりあえずはさ、衛生班と言っても実際何をやるつもり？ 僕にはちよつと思いつかないんだけど」

「私も衛生科ってそもそもなんだろうと思って、資料室行って調べてきたんだ」

「最近できた分野らしいしね」

まさかこの女は衛生科が何かも知らずに手を挙げたというのか。もちろん突っ込まないが。

衛生科の目的とはISパイロットを身体的精神的にパーフェクトな状態でISに搭乗させることだそうだ。

ISパイロットは一夏や俺という数名の例外を除いて全て女で、女とは肉体的に強い生き物ではない。月のものなどがあるし、身体に引きずられて精神も不安定さを示してしまうことだってある。

だからそれらを個々人の問題として放り出すのではなく、全体として集団として対処し知恵を蓄積していこうという話だ。

ISが普及するにつれて現場でよく起こるようになった問題だそうで、たとえ普段が優秀でも肝心な時にその力を発揮できなくては意味がない、ということ最近語られるようになった分野だ。

「へー。甲斐田君は詳しいんだねえ。もしかして衛生科希望だったりするの？」

「この前の模擬戦の時に先輩から聞いたただだよ。全部受け売りだから」

一夏の訓練中が暇過ぎて、無駄に知識ばかり得てしまった。出番のない先輩達もそうだったのだろう。自分の科を自慢したり、他の科をけなしたり、お互いに罵り合いを始めたりとやたら騒いでいた。

まあ傍から見て、この人達はIS学園での日々を楽しんでいるなと思っただけだ。

「で、調べながら私も何をすべきかいろいろと考えました。その結果！」

「うん」

女の子座りをしていた谷本さんが膝を正し、背筋を伸ばして真剣な表情になる。

「織斑君に対して何をすればいいか分かりませんでした！」

俺は何も言わず立ち上がり、谷本さんに背を向けた。

そうだ、衛生班なんて最初からなかった。

「待って！ これは冗談じゃないの！ 真面目に考えた結果なの！」

なお悪い。質の悪い冗談でも論外だが、真面目に考えてそれではもはや存在する意味もない。

「だって衛生科って女の人のことしか考えてないから！ 織斑君は男子だから全然当てはまらないの！」

言われて俺はドアノブにかけようとしていた手を止める。

一夏と衛生科の先輩の間で一悶着があったことを思い出した。

一夏の生活を管理するにあたって、衛生科の先輩達は当然食事にも注文をつけた。

模擬戦の日までの食事メニューを考え、リスト化までして渡してくれたのだが、それに対して一夏は大きな不満を露わにした。

曰く、こんなんじや全然足りない、とのことである。

確かにこれは少ないなと俺も思ったが、その時は食べ過ぎてはいけないんだろうと解釈した。そして一夏をそう説得したのだが、空腹については一夏も我慢ができなかった。

初日からこっそりと間食を取るもあつさり篠ノ之さんにバレて、速攻でチクられる。

そしてすぐに先輩達が飛んできたのだが、一夏は一步も引かなかった。女子ならそれくらいで過ごせるのかもしれないが、男子としてはとても足りる量ではない。男子と女子は違うのだから一緒に考えないで欲しい、と堂々と主張した。

質はともかくその量だったら俺としてもちよつと嫌だなと思ったので、これは一夏の我がままではないと口添えをした。すると先輩達

は男子と女子の違いをきちんと考えていなかったと素直に非を認め、食事メニューを作り直してくれた。

相変わらず野菜を食わされることにブツブツ言っただけだが、それ以降一夏が空腹に悩まされることはなくなった、という話だ。

つまり、ISに関するあらゆるものは、男の存在が全く想定されていない。

身近なところではIS学園には男子トイレがほとんどないなどの実害があるが、おそらくまだ表面化していないことが山ほどあるのだろう。

何しろ俺と一夏が経験するまでは誰も実感できないのだから。

そして今話題の衛生科などその最たるものだ。

「確かに、それは前例がないどころじゃない。本当の意味でゼロから考えていけないんだ」

言いながら俺は再びテーブルの前に戻って腰を下ろす。

谷本さんがほっと胸を撫で下ろした。

布仏さんはいつも通り爆笑している。

「二応ISパイロットに対して気をつけることみたいなのはあったんだ。でもそれって全部女の人向けで、織斑君には当てはまらないし無理矢理当てはめるのもどうかと思ったの」

「うん。それは間違ってる。こういう問題があるからこうしようって話だから、結論だけ無理に当てはめたって本末転倒でしかない」

「ということとは問題を見つけることから始めないといけない？」

谷本さんが首を傾げる。

さすがに発生してもいない問題は見つけれないだろう。

「いや、問題っていうのは不都合があつて初めて分かるものだから、その時まで存在していないものを見つけるのはちよつと厳しいと思う」「でもこういう問題が起こりそうだからって先回りすることはできるんじゃない？」

「想像は対象に対する確かなイメージや経験がないと的外れになるよ。三年生の先輩達でも間違ってしまったくらいだし、入学したばかり

りの谷本さんじゃかなり難しいと思う」

俺が言うと、谷本さんはまたしても涙目になった。

「ということとは、私はクビですか？」

「別にそんなこと言っていないよ」

まあさつきはほとんどクビにしかけたが。

「で、でも……できることが何もなさそうだし……」

「別に今すぐ解答出せとは言わないよ。指揮班だって整備班だってまだ何も決まっちゃいないし」

「でも……これから出せるかと言われても無理そうだし……だから私最初分らないって……」

これくらいしおらしくしてくれれば俺にとって害がなくていいのだが、別に俺は谷本さんを潰そうとか思っているわけでもない。

「何もできないってことはないと思うよ。この前の模擬戦で衛生科の先輩達はいろんなアイデアを出してきた。実際に効果があったのも確認したし、きつとできることはあると思う」

「それは何?!? それは何?!? 教えて甲斐田君!!」

谷本さんがテーブルに手をつけて前のめりに俺へと迫ってくる。テーブルを挟んでいてよかった。

自分の体を後ろに引きながら、俺は前の模擬戦のときの衛生科の先輩達について説明をした。

谷本さんは怖い顔をして頷きながら俺の話聞いていたが、やがてちよつと待ってと言いつつ自分の机から手帳とペンを取り出した。

俺の話を確認しながら、忙しくメモを取っている。今どき電子手帳を使わず紙に手書きとはアナログな人だなと思った。

「こんなところかな。他に思い出したらまたその時は言うよ」

「ありがとう! おかげで今私の前に道が開いた!」

「そ、それは何より。一人で大変だと思うけど、がんばってね」

本当は一夏と同じ男の俺が考えるのがよさそうだが、今の状況では俺がそこまでやれるかというところとちよつと厳しい。

指揮班はまだ雲をつかむような状態だし、整備班にはまず制裁を加えるところから始めなければならぬ。

全体が見えてしまった分、他の人達と違って何か一つのこと集中するのは難しそうだ。

それに何より俺には主役のケアという重大な役割がある。不安しかないが、この分野は谷本さんに任せておくしかない。せめてロクでもないことをやらかさなないように監視くらいはしておこう。「ありがとう！ 私がんばるよ！ がんばって、織斑君に尽くすから！」

「うん、期待してる」

超意外なことに、谷本さんが最初に気づいてしまった。

主役の一夏を立てる、つまりそれは、一夏に尽くすということである。

これがリーグマッチにおいて密かに俺がクラスメイト達に期待していることだ。一夏に尽くして、そこに楽しみや喜びを見出してくればもう言うことはない。

「ならば十二分にその期待に応えてみせましょう！ 一年一組唯一にして最強な衛生班の誇りにかけて！」

「そのへんに落ちてるゴミ程度のホコリだね」

言ってから、俺はしまったと思った。谷本さんを見ると、目を大きく見開いて、信じられないようなものを見る目で俺を見ている。

なんとということだ。俺はやってしまった。

「本音ちゃん！」

「はいっ！」

なぜだ、なぜ俺は口に出してしまったのか。

「私、やったよ！」

「うん！」

悔しい、今はただ悔しい。

「ついに、ついに甲斐田君に突っ込みをさせたよ！」

「おめでとー！」

完全に油断をしてしまった。谷本さんの尽くす発言で気が緩んでしまっていた。

誇り、ほこり、ホコリ。たまたま目に入った塵とプライドをかけて

しまった。

それがおもしろいとかつまらないとかそういう次元の話ではない。重大なのは、つい谷本さんに突っ込んでしまったという最悪の事実だ。

この女を調子に乗せてはならないと徹底していたのに、俺はなんと
いう未熟者だろうか。今の俺はとてもし徒会長に顔向けなどでき
ない。

「よかった、よかった、よかった……」

「よしよし。ずーつとがんばってたもんね」

谷本さんは布仏さんに抱きつき、感極まって泣いている。

布仏さんは優しく谷本さんの頭を撫でている。

こうして第一回衛生班会議は、俺が敗北に打ちひしがれて終わっ
た。

「どうだった智希?!」

部屋に帰ってくるなり、出迎えた一夏が真剣な顔で聞いてきた。

会議とか面倒だからパスなどと言っていたくせに、結果だけは気
なるらしい。

「みんなすごいやる気出してたよ」

「本当か!?!」

ここで別に嘘を言うつもりはない。というかクラスメイト達のや
る気は一夏だっただけだ。というかクラスメイト達のや

「別に一夏が見てないからってサボったりしないよ」

「いや、そういうことを言いたいんじゃないよ、いい作戦はできたのか
?」

「そんな一日や二日で出てくるわけないって。先輩達だって模擬戦の
前の日まで悩んでたくらいだよ」

「そ、そうだよな。すまん」

別に嘘ではない。ただ今日は何も進展がなかっただけだ。

「俺の弱点とかそのへんについては?」

「整備班の人達がいろいろ相談してるみたい。一夏の専用機は打鉄と性質が似てるから参考にできそうだとか言ってた。でも一夏のデータがまだ少ないから、具体的にどうするっていうのは決まらないだろうね」

「そうか。俺もまだメイルシウトロームとはやってないしな」

「全くもって嘘ではない。ただ情報の問題により最初から考え直しになっただけだ。」

「俺の対戦相手とかはどうなんだろう?」

「やっぱり国の代表候補生はいるみたい。でもオルコットさんのような専用機持ちはいないから、相手の機体は量産機のどれかだろうね」
「うん。今俺のやってることは全然無駄じゃないな。でもそいつらがどういう戦い方をしてくるかは気になるぞ」

「そのへんの情報はまた今後だね。リーグマッチの価値に気づかれて相手にやる気出されたんじゃ本末転倒だし、慎重にやろうと思ってる」

「た、確かに。セシリアのときみたいに相手がナメててくれた方が俺もやりやすそうだ」

俺は嘘を言っていない。ただ情報の調べ方に全く見当がつかないだけだ。

「それからさあ……今回は衛生班とかいるのか? 前の時に変なことばっかさせられたけど、ああいうのはできればやりたくないだよ」
「あの時はあそこまでやらないと勝てなかったというのが大きいんだ。普通にやって勝てるのなら別にしなくていいと思うよ」

「だよなあ……結局は俺次第か」

「少なくとも今回は無理にやれとは言わないから。谷本さんと相談して嫌なら嫌で全然いいよ。このあたりはプラスアルファの部分で、必須というわけでもないし」

俺は事実を述べている。ただ今は谷本さんが信用できないだけだ。
「まだまだこれからって感じだな」

「そうだね。でもまだ時間はある。一歩ずつ進んでいけばいいと思うし、少しずつではあるけど実際に進んでる。焦ることは何もないよ」

「悪い。俺ちよつと焦ってたかも。漫画とかじゃある日必殺技を思いついたりするもんだけど、そんな都合のいいことはそうそうあるわけないよな」

「あればいいなあとは思うけど、ないものねだりしても仕方ない。だから今でできることを一つ一つね」

「おう！俺も模擬戦やって自分のやったことに意味があるってのは分かったからさ。クラスのみんなを信じて努力する」

「その意気だ」

俺はどこまでも事実のみを語っている。ただ今日は進み具合が一步分もないだけだ。

「よし、安心したところで今日はもう寝るか。待ってる間に宿題も終わらせたし」

「一夏もやる気だね」

「いや、正直言うとかかしてないと落ち着かなかっただけだ。この寮ってテレビとか休憩室くらいにしかないし、部屋の中は何もないからな」

一夏はそう言って笑った。

他の全寮制の学校がどうかは知らないが、少なくともIS学園は学ぶ場所であって遊ぶ場所ではないという話だ。娯楽の類はないこともないが、普通にそのへんに転がっているというわけでもない。

ダラダラとさせないよう置き場には気を遣われているようだった。

「智希はどうする？」

「今日のまとめとかあるから少し作業して寝るよ」

「手伝おうか？」

「会議に出てないと意味分らないだろうからいいよ。気持ちだけ」

「そうか、じゃあ電気はつけておくな。俺はどこでも寝られるから気にしなくていいぞ」

「もう知ってるから最初から気にしてないよ。ありがとう」

「おう、おやすみ」

一夏はそのままベッドに入って布団を被り、俺は机に向かった。

まずはメールで資料を送って、それから整備班の連中への制裁を考

えなければならぬ。

と、メールが大量に届いているのに気づいた。

送信者を見るとクラスメイト達だ。というかこれは整備班の連中だ。

言い訳でもするつもりかと一つ開いてみると、それはさっきの件の謝罪文だった。

まさかと思いい他のも開いてみると、それらは全て謝罪のための土下座メールだ。

どうやら連中は逃げて部屋に戻った後、良心の呵責に耐えられなくなっただけらしい。

もちろん明日の朝ちゃんと言面と向かって謝ると書いてあるが、今日中に言うだけは言わないと眠れないとのことだ。

消灯時間もあるので直接押しかけるのは自重したか、あるいは怖かったか。

篠ノ之さんに至っては謝罪に加えてやはり持っていた資料を配布していた。

顔を合わせるのも恥ずかしいと俺に向かって書いてあるが、だったら最初から誤魔化すなと思う。

悪人になりきれないというか、つい出来心でやって後悔しましたというか、こんなところでも生真面目さを発揮している。

改めて一つ一つ土下座メールを読んでみる。
謝罪の仕方一つでも性格が出るものだなと思った。

思いの丈をそのまま勢いでぶつけてくる者、推敲して綺麗な文章で書いてくる者、シンプルに明日きちんと謝りますとだけ書いた者、十人十色だ。

俺はこれから復讐の刃を研ごうと思っていたので、正直肩透かしではある。

だが別に復讐をすること自体が目的でもないのです、自分で反省するならいいかと思いい直した。

そんなつまらないことに構っているくらいなら、リーグマッチのあれこれに時間を使った方が何倍もマシだろう。何しろ考えなければ

ならないことは山ほどあるのだ。

だからささやかな復讐として、返信はしないでおくのみにすることにした。今日の夜は悪夢にうなされることを罰とでもしようか。

というか二十人以上に返信するとか俺の方が罰じやないか。

いや、俺の方も罪はないとは言えないので、それくらいはしておくべきだろうか。

どうするべきかメール画面とにらめっこをしていると、またメールが届いた。

誰かと思えば谷本さんだ。お前は関係ないだろうが。

開いてみると、それは俺に対する勝利宣言だった。やはりこの女は調子に乗ってしまったようだ。

とりあえず他のことはさておき、俺は真っ先にそのメールを削除した。

14. 平穩に暮らしていると忘れがちになるが、世界は簡単に変わったたりしない。

平穩に暮らしていると忘れがちになるが、世界は簡単に変わったたりしない。

いつものごとく、俺は職員室を出て一夏達の訓練するアリーナへと向かっていた。

そしてその途中、廊下の中央に女子がたむろしているのを見かける。

もちろん、そこをどけ道を開けろなどという馬鹿な真似をすることもなく、俺は脇にそれを通り抜けようとしたのだが、その前に待てと声をかけられた。

声をかけた女子の目を見る。ああ、久しぶりだ。

IS学園に来てからしばらく気にしていなかったが、それは男を見下す女の目だった。

「何でしょう？」

俺は特に感情を出すこともなく声を出した。

別にこの手の人間に今さら思うこともないし、こちらが感情を出してはロクなことにならない。

「あんたってどっちの方？ 弟？」

「弟じゃない方です」

「ああ、ISを動かせること以外は何の取り柄もない方ね」

びつくりするぐらい好戦的だった。

最初から分かかってその質問をしているというか、取り柄がないを強調するためにその質問を出しているというか。

「そうですね」

「はっ、口答えする度胸もないような腰抜けか」

「間違つてISを動かしたただけだから身の程くらいはわきまえてるのよ」

「IS適正Dランクだつて。本来IS学園にいちやいけないレベルの人間よね」

個人のIS適正など本来公開されるような情報ではないのだが、俺と一夏は例外だ。

自国に男子適性者が二人も見つかつて調子に乗った日本が喜び勇んだ結果、名前などと共にIS適正などの情報も全世界に公表されてしまつていた。

これからも男子のIS適正者は見つかつていくだろうから、今のように自国の優位性をアピールしようと算段していたらしい。

だがその後世界で見つかった男子のIS適正者はたった二人で、名前も年齢も一切公表されることはなかった。速攻でバラされた俺と一夏つて何なの？ とお互いに愚痴をこぼし合ったものだ。

幸いにして日本にはIS学園があつたので、そこに放り込まれた俺達のかえつて世間から隔離され助かつてはいるのだが。

「なんか言つたらどう？」

「特に言うこともないですが」

「何、あんたは本気で腰抜けなの？ 男つて負けん気とか根性すらないんだ」

「そういうのは人によると思いますよ」

「情けない。自分の力でどうにかしようと思わないのね」

たとえば何かを言つたところで、どうせこの手の連中は否定しかしない。

結局は男をけなしたいだけである。

「終わりですか？ では失礼します」

「ああ待ちなさい。あんまりにもかわいそうだから忠告しに来てあげたのよ。ありがたく思いなさいね」

「忠告ですか？」

「まあ身の程わきまえてるなら話は早いわ。あんたのお友達にも同じ

ことを自覚させなさいってこと」

「どういうことでしょう?」

「男なら男らしく身の程わきまえて大人しくしてればいいって話よ」
「どうやら本題は俺ではなく一夏のことだったらしい。」

「だったら最初からそう言えばいいし、わざわざ俺を罵倒する意味がないのだが。」

「もうちよつと具体的に言ってもらえますか?」

「やっぱ男って頭悪い生き物ねえ。そんなの一つしかないでしょ。
リーグマッチのことに決まってるじゃない」

「ああ、そのことですか」

「生まれつき頭が悪いのはしょうがないけど、話してて疲れるからせめてあたしの話についていく努力くらいはしてよね」

まさかこの連中、リーグマッチの価値に気づいたのか?

胸元のリボンを見ると、俺と同じ一年生を示す青色だ。IS学園の生徒はつけたリボンの色で学年が分かる。

つまりこの一連の動きは、同じくリーグマッチの価値を知っている俺達に対する牽制行為だろうか。

「そんなに勝ちたいんですか?」

「は? 誰があんな見世物行事に力入れないといけないのよ。あんなのに時間取られるとか何もかもがムダ」

「でも外の偉い人とか来るらしいですよ。意味がないこともないんじゃないですか?」

「バツカじゃないの。あれって要は学園が外にアピールをしたいだけ。寄付金狙いとかその程度の話よ。学びに来てるあたしにはほんといい迷惑」

「違った。それ以前だった。」

「これは間違いなく理解していない。」

「無駄なことに労力を費やすなどということですね。分かりました。一夏には一応言っておきます」

「そういうこと。必死に訓練してるみたいであんまりにもかわいそうになっっちゃったからね」

「毎日ボツコボコにされてるらしいね」

「なんで一組はよりによつてあんなのをクラス代表にしちゃったの？」

「卑怯な罠を張つて一組の代表候補生を陥れたつて本当？」

「知ってる？ それ聞いて三年生が怒つたらしいよ。上級生は一年のリーグマツチに一切の協力を行わないとか通達出てるのよ？」

何やつてるんだあの先輩方は。

微妙に真実を織り交ぜつつデマを流して遊んでるじゃないか。

もしかして全力で傍観とはそういうことなのだろうか。

「どんな手使つてクラス代表を奪つたのか知らないけど、おかげであんならの立場つてクラスでも微妙なんですよ？ 相手が織斑先生の弟だから誰も何も言えなくて、だから意趣返しとばかりに自主訓練でいじめられる日々とかお先真つ暗ね」

「専用機もらえたからつて調子に乗るとか笑えるよね」

「やっぱ俺は織斑千冬の弟だから何をしてもいいとか考えてるんだよ」

「クラスの誰にも勝てないのにどうしてクラスの代表に勝てるのか思っちゃったのかなあ？」

また一夏もひどい言われようだ。

これを聞いたら一夏は怒るだろうか、笑うだろうか。

予想。最初にふぎけんなど怒つて、そのうちそれおかしくねと首を傾げて、最後にそいつらバカだと呆れる。

「まああたしすらも鬼じゃないからさ、身の程わきまえておとなしくしてれば何も言わないから」

「お話はよく分かりました。わざわざありがとうございます」

「あんたはともかく弟くんの方はきつと言つても聞かないんだろっけどね。ま、それは自業自得だから、危なくなつたら近づかないこと」
この手の輩はわりと、相手が下手に出て自分の方が上だと確信すれば態度を変えるのが多い。

八つ当たりの的にかくけなしたいだけのもいるが、上位者としての風格的なものをなぜか見せたがる。

群れのボスは従順な下僕に対しては保護をしてやるというところだろうか。

「ああ、そういえばお名前聞いてなかったです。一年一組の甲斐田智希です」

「お、自分から名乗るとは意外と礼儀もわきまえてるじゃない」

日本人のクラス代表は四組か五組。どっちだ。

「一年五組クラス代表、佐藤香織。困ったら相談くらいは乗ってあげるわ」

そう言い残し、五組代表は取り巻きを連れて去っていった。

よし、初戦の相手五組代表には勝てる。

「笑えない話ね」

鷹月さんは俺の話聞いてそう感想をこぼした。

あまり気を遣われても何なので俺は軽く話したつもりだったのだが、外から聞けばやはり気持ちのいいものではなかったか。

「本当ですわね」

「少し前の私達も似たような認識でしたから」

どうやら俺のことではなかったらしい。

指揮班の三人が言っているのはリーグマッチに対する認識の話か。

「普通は意味があるのならやる気にさせるためにも生徒へ説明すると思うもの」

「大して説明もないのでは上からやらされている行事だと考えてしまいますね」

「わたくしは国や企業の駆け引きの場だと思っておりましたわ」

言われてみれば俺もオルコットと同じだった。

倉持技研の人は明らかにそういう雰囲気だったし、きつとIS学園の外側からすればその側面もあるのだろう。

もっとも俺が最初に思ったのは、これは目立てる、くらいだったが。

「甲斐田君が先輩達から聞いた話でもそうだけど、本当にこのIS学園は恐ろしい場所ね」

「意義すら自分で見つけていかなければならないのですからね」
「何も考えず安穩としていてはあつという間に置いて行かれてしまうのですわ」

三人が深刻そうに会話をしているが、枠の外にいる俺としてはまあどうでもいい話である。

もつともそれは、俺の人生には自由がないという裏返しでもあるけれど。

「えーと、リーグマッチの話に戻っていい？」

「あつ、ごめんなさい」

「このような話は雑談ですべきでしたね」

我に返った三人が姿勢を正す。

偶然とはいえまさか手に入ると思わなかった五組代表の情報だ。ぜひとも役立ててもらわなければならぬ。

「とりあえず、甲斐田君の情報はすごくありがたいわ。今私達のやろうとしていることにもピッタリだし」

「どういうこと？」

「情報が手に入らないのは仕方ないとして、私達はまず相手の立場に立って考えることから始めてるの」

「なるほど」

「本気でやろうとする場合他のクラスはどのような戦略を立ててくるだろうかというシミュレーションですね」

確かに分からない以上は常識の範囲で考えるしかないか。

専用機もなく初心者ではそうそう無茶苦茶なこともできないだろうし。

いや、代表候補生に関してはそうでもないかもしれない。実際どうなのか後で聞いてみよう。

「例えば今話に出た五組、実はスケジュール的にかなり厳しいの」
「厳しい？」

「リーグマッチは一日目午前午後、二日目午前午後、三日目午前と五回分の試合時間があつて、でも実際やるのは五クラス総当りでそれぞれ四試合だから、どこかで一回は休みの場がある」

「うん」

試合の組み分けは最初から決まっっていて、これは怪しいと思ったので俺は鷹月さん達に意味がありそうか考えてみてくれとお願いをしていた。

やはり大きな意味があったようだ。

「それでどこに休みが来るかっていうのは戦略上相当に重要な話なんだけど、五組は一番の貧乏くじを引いてしまっている」

「休みがどこに来ちゃったの？」

「最後、つまり三日目。だから五組の代表は実質二日間午前午後休みなしで模擬戦を続けなければならぬ」

「それはそんなにきついこと？」

一時間程度の試合だけでそこまで消耗するものなのだろうか。

「かなりきついと思う。訓練程度しかやってない私達が言えることではないけど、それでも大勢、きつと千人以上の人に見られているプレッシャーの中で模擬戦を続けていたら精神的に消耗していくのは十分に想像できる」

「わたくしも先の模擬戦では後々振り返れば地に足がついておりませんでしたわ。作戦に乗せられていたとはいえ、最初から気づくべき事柄に何も感じていなかったのですから」

「代表候補生でも？」

「恥ずかしながら、教官の方々や仲間に見られるのと一般の方に見られるのは全く別ですわ。あの時観戦に来た三年生の姿を見て、わたくしは明らかにいつもとは違う感覚を覚えました」

もしかしてこういうところでも先輩方は援護射撃をしてくれていたのだろうか、とふと思った。

自らが野次馬になることで、身内だけではない人前での模擬戦の雰囲気を出してくれたとか。

考え過ぎだろうか。だがどうも模擬戦が終わってからこうやって新たな発見をしまうことが多い。

先輩達は模擬戦に直接関わること以外は基本説明をしなかった。もちろん聞けば教えてくれたが、こちらが気づいて聞かない限りは永

遠に知ることができない。

織斑先生といい I S 学園は実に面倒な場所だ。

「そういうわけで五組の戦略としてはいかに消耗しないかが一番の焦点になってくると思う。具体的には短期決戦を狙ってくるでしょうね」

「なるほど、そういうシミュレーションなわけか」

「もちろん今の甲斐田君の話を聞く限りじゃ五組代表は間違いなくそこまで考えてないわ」

「ですがどこかのタイミングで気づく可能性は十分にあります」

「その場合初戦の相手になる一夏さんには確実に勝ちを計算してくるでしょうね」

今のところはナメていてくれているが、是が非でも勝つと考えを改めた時にはどう出てくるだろうか。

五組の連中は俺達が既に訓練を始めていることを知っている。

そして俺達の行動を洗い直したらその計画性に驚き、慢心を捨ててしまうかもしれない。

リーグマッチそのものに価値がある以上、安穩と構えてはいけなさそうだ。

「分かった。それじゃ今の僕の話も合わせて改めてシミュレートしてもらえるかな」

「それはもちろんね。対策の一環としてやっておくわ」

「よろしく。ちなみにうちのクラスについてはどうなの？」

「恵まれたとは言えない方ですね。会場の空気も分らないまま初日から連戦ですのぞ」

織斑先生ならうちの条件を一番悪くしそうだと思っていたので、ちよつと意外だった。

いや、そもそも一夏がクラス代表になることは織斑先生も想定していなかったのだろう。代表候補生のオルコットか、あるいは入試で実力があると思われた誰かを考えていただろうか。

つまりこの部分には十分考慮の余地がある。

「どういう風に戦うかは考えてる？」

「それはもちろん基本戦略として考えているわ。考えてはいるんだけど……」

「何か問題でも?」

「まだ織斑君自身が何も固まってないから、これだとは決めようがないわね」

「確かに」

相変わらず一夏は負け続けている。

もちろん一夏なりに進歩はしているが、近づけない攻撃を当てられないという根本がどうしようもないので、長引いても結局は同じ結末を迎えてしまうのだ。

「これは整備班、もう整備班とパイロット班に分離しちゃってるけど、そちら次第ね」

「みんないろいろ考えていてくれてはいるんだけどね」

整備班二十六人はさすがに多過ぎで、余る人間がかなり出て来てしまった。なので最近では機体について考えるチームと戦術について考えるチームに分かれている。

「後他にある?」

「鷹月さん、四組の方の情報がありますわ」

「ああ、そうだった。朗報、うちのクラスに四組代表の友達がいた」

「ほんとに?」

これは朗報どころではない。

やはり四十院さんの言った通りクラスメイトに確認をしておいてよかった。

「ええ、それで四組代表本人の口から直接聞いた話なんだけど、どうやら四組の代表は押し付けられたみたい」

「誰もやりたがらなかった?」

「そうらしいですね。日本の代表候補生だからということでも推薦されて決まっちゃったということですよ」

「不思議な話ですわね。みなさん自信がなかったのでしょうか。そのような状況であればわたくしなら間違いなく手を上げていましたわ。こういうのは日本人的精神なのだろうか。」

「もちろん四組の代表が優秀なのは間違いないけど、この押し付けられたっていうのが私達にとっては有利な話ね」

「四組はやる気がない?」

「むしろ引つ張る人間がないということね。たいてい一人は前に立たがりがあるものだけど、四組にはおそらくそういうタイプがない」

「四組の代表は?」

「かなり内向的な性格みたい。人前で自己主張をするようなタイプでは全くないそうよ」

「つまり四組の代表はクラスの協力が少ないってことか……」

もちろんリーグマッチの価値に気づいたらどうなるか分からないが、そこに一番近いのはクラス代表本人だ。

特典という餌で釣るにしても、まず本人が周囲を巻き込もうとしないければならない。

押し付けられたと自分の口から文句を言うような人間にそれができるか。もしできたとして、クラスをまとめることができるか。

俺もこのところ実感しているが、一人でやれることには限度がある。

まだ入学したてで実力がそう変わらない以上、どうしたって人数の多い方が有利なのだ。

「うん、今のところ情報において有利なのは分かった。でも今後どうなるかは分からないから、気にするようにはしておいてね」

「了解。四組は情報を手に入れやすいし、五組も気づいたら代表の性格からして派手に動きそうだからきつと分かると思う」

「よろしく。あと二組三組は?」

「ちらほらと集めてはいますが、情報とまではいかないレベルですね」

「外国籍の方はやはり知り合いがおりませんので……」

「それは仕方ないよ。ただ気になるのはクラスの雰囲気かな。気づいたら動くのは間違いない。そして僕らのことにもきつと気づく。そうするとそこからは同じ土俵の上だ」

「二応クラスの前を通る時はちらちらと見てるけど、今のところそう

いう雰囲気はないわね。それにうちのクラスのことにも気づかれてはいないみたい。うちのクラスは織斑君甲斐田君がいるから一番目立つんだけど、逆にそれが目くらましになっているのかもしれない」
確かに五組の連中は一夏のことを意識していた。

だが色眼鏡で見ている分真実には少しもかすっていない。

もしかしたら一夏や俺がカモフラージュ的な行動をするのはありかもしれない。

「甲斐田君？」

「ごめん、ちよつと考えごととしてた。まとまったら言うよ」

「何かを思いついたのですね。甲斐田さんのその顔はまたよからぬ事件を起こしそうな予感がしますわ」

どうも最近はおルコットまで失礼な発言をするようになってきた。

この女は一夏の側にいられるようになり調子に乗ってきているのかもしれない。

模擬戦前は不倶戴天の敵だったくせに、今では当たり前のように一夏の隣に座ろうとしている。

相川さん達もその変わり身の早さに唾然としていた。

「せめて行動に移す前に少なくとも私達には言っておね」

「楽しみですね」

胡散臭そうに俺を見る鷹月さん、傍観者のごとく上品に笑う四十院さん。

そこに最高責任者である俺への敬意はみじんも感じられなかった。いや、別に崇めろと言いたいわけではないが。

「とりあえず、僕らは確実に前へ進んでる。まだ焦る時間でもないし、一つ一つ進めていこう」

微妙な空気になってきたので、俺は強引に会議を打ち切った。

「見つけました！ 必殺技です!!」

興奮した岸原さんが俺にまくしたててきた。

実に怪しさ満点だ。

「おかしいと思ったんです！ 当たらないような武器がなぜ存在するのか。まして打鉄は他のISと比べても動きが遅い。これは変だろうとー！」

どうやら岸原さんの中では世紀の大発見をしたらしい。言っていることはもつともではあるけれど。今のところ。

「そしたらやっぱありました！ 打鉄のブレード・葵だつてそうすれば当たるようになるんです！」

「なるほど、よく分かったよ。で、それは何？」

「甲斐田くん、いつもながらせつかち過ぎ」

岸原さんは物事を筋道立てて説明しようとするのだが、俺が欲しいのはまず結論だ。

そのため俺はしばしば岸原さんの説明を途中で遮ることとなり、その度に岸原さんを涙目にさせてしまっていた。

そして周囲からの非難が俺に飛ばされるのが整備班会議のいつもの光景だ。

「ふふん、今日はその程度じゃ堪えません！ ならばお答えして見せましょう！ その名も、イグニツション・ブースト!!」

「はいみんな拍手！」

今日の岸原さんはやけに強気だ。相当嬉しかったのだろう。

鏡さんの音頭に合わせて拍手と歓声が湧き上がり、会議室は大盛り上がりになる。

中身を知らない俺はもちろん拍手などしない。

「それは打鉄に限らずISには基本ついている機能です。イグニツション・ブースト、日本語に意識して瞬時加速。つまり、この機能を使えばスピードが大幅に上がってあつという間に相手に近づけるんです！」

「なるほど」

今までで一番の得意げな顔で解説を始める岸原さん。

だがこれは確かに強気に出るだけはあるそうだ。

何しろ一瞬で距離を詰めることができれば、近づけないという最大の課題をクリアできる。

「これがあれば織斑君はもう距離を気にする必要などありません！
たとえどんなに離れていても一瞬で詰められるんです！　そして接
近戦になってしまえばそこからは織斑君の独壇場になるのです！」
「ふむ」

何か引つかかる。

便利なのは間違いないし、むしろ一夏にとっては必須とも言える機
能だが。

「どうしましたか甲斐田君？　何でも言ってください！　今日は負け
ませんよ！」

「別に勝負とかしてないから。　じゃあ……実際具体的にはどういう風
に使うの？」

「えっ？」

何でも聞いてくれと言っておきながら、実践的な話を振ると急に目
が弱気になった。

岸原さんは目を泳がせて、それから不安げに隣を見る。

「ここからはあたしが説明しよう」

そう言っ出て来たのは相川さんだ。

整備班は結局機体の性能を考える整備チームと、戦術を考えるパイ
ロットチームに分かれていた。

やはり自分の興味のある分野の方がやっけていても楽しいらしく、半
分以上が戦術側へと移動していた。

「イグニッション・ブーストは加速する技だね。　使う度に多少のエネ
ルギーを消費するんだけど、一瞬で加速できる。　相手からすればいき
なり目の前に織斑君が迫ってくる感じだろうね」

「加速するってことは真っ直ぐ突っ込む感じ？」

「そ」

そこまで便利じゃなさそうな気がしてきた。

「甲斐田君の言いたそうなことは分かるよ。　真っ直ぐ進むだけじゃ躲
されるじゃないかってことだよね？」

「うん。　それに真っ直ぐ突っ込むということは相手からも射線を合わ
せられるわけで、加速してたら実際狙われたときよけきれないんじゃない

ないの?」

「当然の疑問だね。その通りだよ。加速を止めないと方向は変えられない」

駄目じゃないか。

「馬鹿正直に突っ込んだら加速があろうとなかろうとよけられるのは当たり前だよ。要は使いようだって話。今までは織斑君がどんなに相手の隙を作っても、距離を詰める前に体勢を建て直されて逃げられていたんだ。でもイグニッション・ブーストがあればその隙を逃さずに済む。これで織斑君は対等とまではいかななくても十分戦えるようになると思うよ」

「うーん……」

理屈は分かる。間違いなく有用なものも分かる。

だがどうにも引つかかる。

「甲斐田君?」

「甲斐田、思っていることがあるのなら口に出せ。別にお前が解決できなくともここにいる人間が解答を出せるかもしれないのだぞ」

篠ノ之さんに促されて、確かに俺よりもクラスメイトの方が頭のいいことを思い出す。

それに別に隠すようなことでもない。

「うん、そんなに便利ならどうしてこの前の模擬戦では使わなかったんだろうとあって。あればだいぶ違っただろうに」

「……確かに」

俺は先輩達に勝つためにできることは何でもしたいと言った。

だが俺はイグニッション・ブーストの存在すら知らないままだった。

つまりイグニッション・ブーストがその時の模擬戦では有効でなかったということになる。

存在を知っていればそのときに聞けていただろうが、今となってはもう無理だろう。

つまり何らかの理由、おそらくは欠点のようなものがあるはずだ。「もちろんイグニッション・ブーストは万能ってわけじゃない。使

方間違えたら相手のカウンターになって自分の方が大ダメージって
こともありえるよ。そういうことじゃない?」

「リスクの方が大きいという話か。甲斐田、だから先輩方は採用しな
かったのではないのか?」

「そうすると今度は今の一夏にも有用なのかって話になる」

「それは……」

何かあるのは間違いない。こんなことならきちんと資料の全てに
目を通しておけばよかった。俺は先輩達から話に出された部分にし
か目が行っていなかった。もしかしたら先輩達は俺の理解度すら試
していたのかもしれない。

「まあ、やってみれば分かるんじゃない?」

「待った。ということはまだ誰も実際試していない?」

「うん、だって岸原さんが発見したの今日だし」

見えてきた。イグニッション・ブーストが有用なのに先輩達が採用
しなかった理由はそこだ。

「明日やってみたら分かると思うけど、多分それ相当に難しい」

「難しい?」

「おそらく加速するために制御か何かが必要なんだろうけど、それは
簡単にいかないと思う」

「なるほど、あの時の一夏では使いこなせるようにするだけの時間が
なかったということか」

篠ノ之さんも納得した。

急にスピードを上げると口にするのは簡単だが、そんなこととして本
人は平気なのかという話だ。

おそらく初心者がすぐ使えるようなものではきつとない。

「それなら特訓だ。大丈夫、時間はまだある」

「うん、でも特訓するのはいいけど、コツとか正解のやり方とか誰か
知ってるの?」

「へっ?」

少なくともそれを知っている先輩でも数日では会得できないと判
断するような代物だ。

何も知らない一夏が無闇矢鱈にやって果たしてできるようになるものだろうか。

「それは誰も知らないだろうけど試行錯誤してみれば……」

「まだ時間はあるけど、かといって無駄に使っていいわけじゃない。岸原さん、見つけた資料にはそのへん書いてあった？」

「えっ!? あ、ない……と思います……」

不意打ちで声をかけられて、岸原さんは驚きで飛び上がりっぱかりだった。

場にどうしたものかという空気が流れる。

「そんなのはやってから考えることだと思っよう」

沈黙を破ったのは意外にも布仏さんだった。

「だーれも知らないんだから、何がたいへんなのかも分かんないし。ほんとに難しいならどこがそうなんだらうって知るところからじゃないかな」

呑気な声で、だが実にもつともな意見だった。

確かに何も知らない人間が頭で考えたって結論を出せるはずもない。

「そうだね。まずはやってみよう」

「案外織斑君ならあっさりやってのけるかもしれないし」

「無理なら無理で次を考えればいいもんね」

それに固執する必要もないのだ。

駄目なら駄目でまた別の策を考えればいい。まだ考える時間はある。

「よし、全ては明日だ。じゃあまずはその機能をオンにして使ってみるところから。それはさすがに分かるよね？」

「当然です！ 知ったはいいいけどそれがどこにあるか分からないでは意味がありません！」

岸原さんも復活し、再び場はやる気全開の空気となった。

きつとみんな部屋に戻ったら全力で予習をするだろう。特にパイロット科志望の人達は自分も普通に使えるようになりたいだろうし。

「じゃあ特になければこれで」

「あつ！ 待つてください！ 大事なことが！」

「岸原さん何かある？」

もう完全に終了ムードだったのだが、流れに逆らって岸原さんが手を挙げた。

「はい、織斑君の機体の整備についてです」

「整備がどうかしたの？」

「試合で壊れたりしたら私達では修理ができません。本番中機体の整備ってどうなっているんでしょうか？」

「それはIS学園にいるプロの整備士さん達がやってくれるんじゃないの？」

IS学園には教師機訓練機など多数のISがあるが、それを整備するIS整備士も勤務しているそう。

IS学園の卒業生が多く、給料も相当にいいらしい。

「織斑君の機体は専用機です。一般の整備士さんでは触る資格がありません。だからきつと専門の人がいると思うんですけど、その人は本番中もきちんと待機していてくれるんでしょうか？」

「そうだと思うけど、倉持技研に確認しろって話だね」

「はい。それと初日は一戦目の後次の試合まで二時間くらいしかありません。もし故障がひどかった場合に一人で大丈夫なのかも確認して欲しいです」

「ごもっとも。明日一夏に確認してもらおう」

「お願いします。整備班と言いながら私達は織斑君の機体に触ることもできないんです」

倉持技研なら放っておいても全力出さそうだが、だからと言って確認もしない何も言わないというのは違うだろう。

今回は共に一夏をバックアップする仲間だし、一夏は今後も付き合いが続く。良好な関係を築いておくにこしたことはない。

ああ、そう。そういうえば倉持技研がいた。

「か、甲斐田君？」

「あ、ごめん。ちよつと考えごととしてた」

「また何か企んでる……」

「まさか私達のことじゃないよね……?」

「甲斐田! それを今すぐ吐け! 手遅れにならないうちに!」

「ここでも俺に対して失礼な連中だ。」

敬意が足りないどころではない。俺をなんだと思っているのか。

「よし、逃げよう」

「もうこの場においていいことないよね」

「もはや触らぬ神にんたとやらだな……」

「じゃあ甲斐田君お休み!」

なぜだろう、俺はクラスメイト達にそこまでひどい仕打ちをした覚えはないのだが。

せいぜいこの前の謝罪メールに対して返信が朝の四時に着信音付きで届くようにしたり、面と向かつての土下座を一度目はスルーしようとしたくらいで、でもそれは因果応報的な要素が大部分だ。

何もしない相手に対して俺はどうこうするつもりなどない。

「か、甲斐田君……私達は仲間だつて信じてるから……」

「かいだーはいつも愉快だなあ。おやすみ」

岸原さんと布仏さんまでいなくなり、会議室はまたも俺一人となる。

世の中とは実に理不尽で不条理なものであるということ俺は強く噛み締めた。

「二人つきりだね……」

「あ、嫌だった? それなら職員室行こうか。後ろの方なら話しても誰も文句言わないだろうし」

「すいませんでした!」

日に日に谷本さんの土下座までの動きが速くなっている。

もはやためらいなど欠片もない。本来土下座とはそんなに安いものではないと思うのだが、この女はファーストチョイスとして土下座から始める。

まず土下座して、それから顔を上げ俺の顔色を窺う。そして俺が大

して気にしていないのを確認してから、何事もなかったかのごとく会話に戻ろうとするようになった。

俺が一度突っ込んでしまったことによりどうやら自信をつけてしまったらしい。

涙目になるようなことも少なくなり、かと言って卑屈な態度を取るわけでもないのだが、未だ満足はしていないようだ。

今回はダメだったじゃあ次！　くらいの勢いで、実に前向きに成長している。

実際にはた迷惑な話だ。

「で、お話があるとか？」

「うん、ずっと谷本さんにはお願いすることが見つからなくて申し訳なかったんだけど」

「あつ！　それは全然問題なし！　私の頭の中には考えることがたくさんあってむしろ溢れるくらいだったから！　例えば今日私が考えてたのはやっぱり織斑君には勝利の決めポーズが必要かなと思って……」

「オーケー。それよりも優先順位を一番にして考えて欲しいことができたんだ」

「おっと、それは何でしょ？」

「本番中の一夏の疲労回復のことについて考えて欲しい」
「はあ……」

整備班に指摘されて気づいたのだが、初日の一戦目二戦目の間はたった二時間程度しかない。

だがその間に肉体的精神的疲労を回復させなければ二戦目のパフォーマンスに大きな影響を及ぼしてしまう。

もちろんここぞでの一夏の集中力は信じているが、一日に二度も山場を迎えるという事態はさすがに記憶がない。

せいぜいが中学時代の運動会程度で、それもはっきり言えばお遊びの延長でしかなかった。

一戦目を終えて気持ちの高ぶっている一夏を一度落ち着かせ、リラックスさせてから再び次の試合へと集中させる必要があるのだが、

そのための時間が少ないという話なのだ。

「あー、確かに。気持ち切り替えるのって意外と大変だよ。テンションが上がってたらこの気持ちもつと続けて思うし、下がってたらもう他のことかどうでもいいし」

「時間をかけられれば僕だつてどうにかできると思う。でも初日は本当に時間がないんだ。体の方は無理にでも休ませるとして、問題は心」

「ふむふむ、甲斐田君の言いたいことは分かったよ」

「それをお願いしたいんだけど、思いつきそうかな？」

「一番最初に思いつくのはおいしいもの食べることだよ。あと定番としては音楽。体が疲れてるならいつそ寝て頭と一緒にスッキリさせるのもいいかも」

「うん、そんな感じで。それで今のうちからいろいろ試してみて、どうするのが一番効果が高いのかを調べて欲しい。もちろん一夏とも相談しながら」

「了解了解。それくらいならラクショーでございます。だったらむしろ織斑君にとつての黄金パターンみたいなを作っていけばいいと思うかな」

普段の会話からは信じられないほどスムーズに話が進む。

やはり谷本さんはまともにしようとするればできるのだ。余計なことを考えるからややこしい事態になるのであって、普通にしてくれればいいのにと強く思う。

「なるほど。そういう安定感があると一夏も思い切りやれるかもしれない。そうやって一夏と相談していい方法を編み出してくれると助かる」

「お任せください！　じゃあ今日の訓練後にも織斑君と話してみるね。あとついでに他にも今私の思ってることを織斑君に相談してみようと思うんだけどいい？」

「別にいいよ。ただ一夏の意味を尊重して、無理はさせない方向で。今回は時間もあるし変なストレスは溜めたくないんだ」

「そりゃあそうですよ。織斑君に気持ちよく戦ってもらうのが我がたつ

た一人の衛生班の真の役割ですから！」

「その調子だ。じゃあそのへんよろしく」

「いよっしやあああ！」

「はい？」

谷本さんがガッツポーズまでして妙なはしやぎようだ。お願いをしたのは俺の方で、それを谷本さんが喜ぶというのはちよつと違う気がするのだが。

それともようやく仕事にありつけて嬉しかったのだろうか。

「そうと決まればこうしちやいられない。あれをしてこれをして……よし！　じゃあ甲斐田君、私はこれで！」

「あ、はい」

そう言つて谷本さんは疾走し去つていった。

俺は谷本さんのスイッチをどこかで押してしまつていたようだ。

まあなんであれ、やる気になってくれるのならとやかくは言うまい。

ふと空を見上げると、昼間だが月が見えていた。

そういえば昼を陽の下一人で食べるのは久しぶりだなと思った。

「なあ智希、こういうポーズはどうかな？」

指揮班会議が終わつて部屋に帰るなり、一夏が俺に聞いてきた。

見ると一夏は歌舞伎役者なんかやがりそうな不思議な姿勢になっている。

全く意味が分からなかった。

「やっぱりもうちよつとシンプルな方がいいかな？　あんまりひねり過ぎても伝わらなさそうか」

一夏は何をやっているのだろうか。

「さつきからいろいろやって考えてはいるんだけどさあ。いまいちどれもしつくりこなくて。智希はどういうのがいいと思う？」

「何の話？」

一夏は姉に倣つて柔軟を欠かさないこともあり、体が非常に柔らか

い。その上笑顔の練習の結果表情まで豊かになってきた。だから今では俳優でも目指せそうな体になっているのだが、何かに目覚めてしまったのだろうか。

「へっ？　だから、練習」

「何の？」

「さつきからいろいろやってるけど、今は勝利の決めポーズかな」

その瞬間俺は全てを理解した。あの女だ。谷本癒子だ。

確かに一夏と話をするとは言っていたが、何を一夏に植え付けている。

俺が頼んだのはそういうことでは全然ない。

「もしかして谷本さんとそういう話ばかりしてたの？」

「ん？　ああ、俺の疲労回復がどうのって話か？」

「そっちの方が僕にとつては重要なんだけど」

「それもいろいろ聞かれたぞ。好きな食べ物とか、普段どんな音楽聞いているのかとか、あと中学時代試験が終わった後何してたかなんて変な質問もあつたな。今後訓練の合間に試してみるらしいけど」

一応は俺が頼んだ仕事もしていたようだ。ということは余った時間でここぞとばかりに一夏を洗脳したか。

まさに油断も隙もあつたもんじゃない。

「俺全然気にしてなかったけど、本番の時つて全然時間に余裕がないんだな。二時間で次の試合とか、確かにうえーって思う」

「やっぱりきつそう？」

「だって要はセシリアとの模擬戦を一日に二回やるようなもんだろ？」

あれを連続で二回やれってちよつときつい、気持ち的に」

「オルコットさんの時一夏は無傷だったけど、精神的にくるものがあつた？」

「あん時は気力がガリガリ削られたぞ。一方的に逃げ回るだけだったし、訓練とは違う雰囲気っていうか、あの緊張感がな」

鷹月さんの言う通りだったようだ。

一夏は他人の目をあまり気にしないので、外からのプレッシャーにはそこまで弱くない。

だがそれでいてこの言いようだ。

やはりきちんとした対策を立てておく必要がある。

「だから谷本さんの話を聞いた時は目からウロコだったぜ。それで俺はこうやって勝利の決めポーズを考えようとか始めてるわけだ」

「ちよつと待った。僕にはどこをどうしたらそういう結論に達するのか全く理解できないんだけど」

「ん？ だから俺のストレス軽減とかそういう話だろ？」

意味が分からない。どうして勝利のポーズがストレスを減らしてくれるのだろうか。

「ごめん一夏、いまいちピンとこないから詳しく説明してもらえろ？」

「お前が考えたんじゃないのか？ 他人がやれることには限界があるから、そもそも俺本人がストレスを溜めたりやプレッシャーを感じないようにしようってことだろ？」

「谷本さんだね。僕もまだ細かいことは聞いてないから、今教えて」

「そうか。まあお前も千冬姉に捕まっていたり会議だ何だで忙しそうだもんな。要するに、俺がこのリーグマッチを楽しんでやれば、そもそも変に肩の力は入らないって話だ」

「楽しむ……」

「そうそう。みんなも楽しんでやってるみたいだし、俺は俺で楽しんでやろうってな」

やはり俺はあらゆることにおいて考えが浅かった。

現実に対しどう対処していくかにしか頭が行っていなかった。

「谷本さんに言われたんだけどさ、ここんとこの俺は無理してるんだと。クラス背負って責任感持つのはいいけど、それが足枷になって実力を発揮できなかつたら意味がないってはっきり言われたよ」

「谷本さんがそんなことを……」

「おう、前に智希には俺が焦ってるって言われたけど、ただ待ってるだけってのはやっぱ俺には合っていないわ。もちろんクラスのみんなは信じてるけど、だからって俺が何もしないでいいかっていうと、ちよつと違うよな」

「それで勝利の決めポーズ？」

「というか、俺は俺でこのリーグマッチを楽しむためには何したらいいかってことだ。人に見られるのは気にしないでもいいけど、どうせ見られるならこっちから何かしてもいいかなと思つてさ。そしたら谷本さんがいろいろ提案してくれたぞ。いやー、あの人おもしろいな！」

そういうことか。谷本さんは一夏をプラス方向に導き願いを叶えつつ、自分の願望をねじ込んできた。

待て、これは衛生科の先輩と同じ手口ではないか。

さては俺の話を聞いてそういう手段まで学んでしまったか。

昼間の喜びはきつとどきくさ紛れに提案の許可を得られたことによるものだったのだろう。

そして同時に確信した。あの衛生科の先輩達は絶対一夏に笑顔の練習をさせようが先にあつた。

「楽しむのはもちろん構わないけど、模擬戦の方が本題だからね。そっちに夢中になって訓練が疎かになったりしたらそれこそ本末転倒だよ」

「分かつてるつて。それにそっちの方も光が見えたしな。イグニッション・ブースト、やっぱりみんなを信じて正解だった」

「そうだ、それどうだったの？ 相当難しいんじゃないかと思つてるんだけど」

一夏の言い方からして、もしかして使えそうなのだろうか。

「いやー、難しいってもんじゃないわ。箒が言つてたけど先輩達が俺に教えようとしなかつたのも当然なくらいだ。ありやあきつと上級者向けの技だな。クラスのみんなも全然できてなかつたし」

「ということは無理そう？」

「だけど絶対リーグマッチまでにものにしてみせる。やつてみて分かつたけど、あれは間違いなく俺に必要な技だ。というかあれなしじゃ俺が勝てるイメージがまるで湧かない」

「なるほど」

予想通りではあつたが、それと同時にどうやってこの課題をクリアするかという問題が浮上した。

どこかに正解はきつとあるのだろうか、どこにあるのかさっぱり分からない。

一夏はこれから手探りで探していかなければならないのだろうか。「そんな顔すんなって。みんなも協力してくれるし、俺一人じゃないんだからさ」

「どこかに教えてくれる人がいればいいんだけど……」

「ああ、クラスの女子が千冬姉と山田先生に聞きに行ったけど、そんなものまだ早いと断られたって。それに今回先輩達は協力してくれないんだろ。じゃあ自分達でやるしかないし、実際やるぞ」

「だいぶ回り道することになりそうだね」

「そりゃあ仕方ない。でもラツキーなことに俺には専用機があるし、場所さえあればどこでも練習できる。それに訓練と違ってそこまでエネルギーが減らないから、エネルギー回復のために休む時間も少なくて済みそうだ」

前にも一夏に言ったが、確かにないものねだりしても仕方ない。

正解を探しながら、今はやれることをやっていくのかなさそうだ。

「ということはこれからしばらくはイグニッション・ブーストの練習？」

「ああ、みんなひと通りISには乗れたみたいだし、これからはパイロットチームと一緒にやっていくことになるのかな？ 自分達も使えるようになりたいって言ってたし、いいライバル的な感じか」

相川さん達はここでも抜け目なかった。さすがと言うべきか、最近成長して一石二鳥的な行動までするようになってきたというか。

篠ノ之さんもオルコットも、いつも側にいられるからと言って慢心している場合ではないと危機感を抱いて欲しいと思う。

「分かった。それじゃしばらくはその方向で。でもいつまでもってわけにはいかない。習得が無理そうなら諦めてもらうこともありえるから」

「うっ……ちなみに、それはどれくらいで？」

「そうだね……リーグマッチの一週間前、ゴールデンウィーク明けまでにかな」

「というところ……おいあと一週間しかねえぞ！」

「そこで目処が立たなければもう別の手段で行くしかない。正直最後の一週間は残った問題の洗い出しと調整だけに当てたいくらいだから」

「分かったよ。じゃあそれまでに絶対ものにしてやる」

自分で言つて、これは相当に厳しいなと思った。

今の正解の分からない状態では、きつと一週間での完全な習得は無理だ。

使えるとしてもおそらく限定的な使い方が、ここぞでの勝負時くらいにしか使えないだろう。

それでも一夏の引き出しが増えると思えばやる価値は十分にあるか。

「一応これはみんなにも伝えておこうかな。のんびりやられても困るし」

「あ、そうだ。今日の結果について後で智希にメールするって言つたぞ。きつとイグニッション・ブーストのことだろうけど、もう着てるんじゃないか？」

「そう？　じゃあちよつと見てみよう」

メールを確認すると、確かに来ていた。

中身を開くと長文で考察が書いてある。これは読むのに骨が折れそう。

ため息を一つ入れて、俺は無言になった一夏の様子を見てみた。

一夏は決めポーズの考察に戻っていて、怪しげな動きを繰り返している。

大事なことを思い出した。

そして俺は整備班の考察を読む前に、突然一夏が奇妙な行動を始めた詳細を説明せよ、と何も報告をしなかった谷本さんに対して脅しのメールを送信した。

15. 秘密というものは墓まで持って行くのが非常に難しい。

秘密というものは墓まで持って行くのが非常に難しい。

いつか発覚するからこそ秘密は秘密なのだ、とどこかの誰かが言ったとか。

俺にしたって断罪の時は来るのだろう。何しろ三年生の全員と一部の二年生にまで広がっている秘密だ。その上身を潜めるどころか俺は罪の拡大行為を繰り返していた。何かの拍子であっさりバレてしまいうんだろな、と既に覚悟は決めている。

だがこれはどこまでも俺個人の問題だ。今この瞬間バレて織斑先生にたとえ監禁されたところで、俺以外に困る人はいない。

今渦中のリーグマッチだって鷹月さんあたりが俺の役目を引き継げば問題なく進めることができるだろう。俺しかできないようなことは少しずつ減っていつているし、一夏のメンタルケアさえもこのまま行けば谷本さんが対応できるようになるはずだ。いや、これはちよつと願望込みかもしれないが。

ともあれ、元々織斑千冬第二秘書という多忙な立場もあって、俺はリーグマッチにおいて具体的なミッションを持っていない。

それはつまり比較的自由に動けるということを意味していた。

「というわけで、新聞部の取材を受けようと思う」

「何がというわけよ。脈絡なくいきなり言われても困るからさつさと詳細を言いなさい」

どうも日に日に鷹月さんの俺に対する扱いが雑になっていっていると思う。

きっかけは篠ノ之箒発火事件の際俺が鷹月消防士の上前を撥ねたことだが、それ以来俺に対する優しさがみじんも感じられない。一夏がクラス代表に決まる時はわざわざ一夏に助け舟を出してくれて、俺はこの人を優しい人だと思っていた。だがどうやら今の姿が本性な

ようだ。

「情報戦を仕掛けるのですね」

「情報戦ですか？」

やはり四十院さんが一番に気づいた。

指揮班会議をしていて思ったが、四十院さんはすぐく察しがいい。一を聞いて十を知るではないが、一を聞いたら三ぐらいは先のことを返ってきていた。地頭がいいというのはきつとこういう人を言うんだろうなと思う。ただし布仏さんほどではないが多少の天然が入っており、時折斜め上の返答を出してくることもあったが。

「やっぱりいつまでも隠し続けるのは無理があると思うんだ。このIS学園じゃどうしたって男子の一夏は目立つ。そしてその一夏が必死に訓練している理由を考えればきつとどこかで正解にはたどり着いてしまう」

「確かに五組は訓練のことを知っていたものね」

「今のところは大丈夫なようですが」

「だからと言って安心はできないということですよ」

結局のところ、相手が気づかないでいますようにと、いうのはどこまでも運任せだ。そしてそのような不確定要素をそのままにしておいていいはずがない。

ならばいつそこちから仕掛けて、相手を誤解の海に沈めてしまうというのもありだろう。

「藪をつつくという結果にならなければよいのですが」

「もちろんリスクは承知だ。だけど僕らは既に十日というアドバンテージを得られて、ようやく方向性も固まりつつある。たとえ失敗して相手に知られたとしても、このまま優位に進められると思う」

「ちよつと待って。でも織斑君にはまだイグニッション・ブーストを使いこなせる目処が立ってないのよ？　そういうのはまだ早いんじゃないの？」

「難しいところですね……」

俺に期限を切られて一夏も毎日一生懸命練習をしている。が、たった数日では使いこなせるはずもない。

だが目処が立つかどうかとも分からないものをただ座して待っているわけにはいかないのだ。

「甲斐田君、そういうのは休み明けの方がいいんじゃないの？ 残り一週間しかなければたとえ相手に知られたとしてもかえって相手に焦りが出てくると思うし、こちらに優位に働くかもしれないわよ？」

「わたくしもせめて一夏さんがイグニッション・ブーストをある程度は使えるようになってからの方がよいのではないかと……」

「うん、もちろんそういう考えもあると思う。だからまずは僕の話聞いてから判断して欲しい。僕としてはむしろ休み前の今やった方が時期的にいいと考えてる」

「今の方がですか？」

平日なら皆教室で顔を合わせるが、休み中はそうではない。つまり、一同に介して真偽を確認することができないということだ。そしてたとえ誰か一人が気づいたとしても、全員がすぐさま集まれるかという点、きつと無理だ。連休ともなれば各々部活をしていたり外出していたりで普通は予定があるだろう。

「休み中ならクラスで団結するのを遅らせられるということですね」

「うーん……クラス代表本人はともかく、他の人達はいきなり協力してとか言われても困るか」

「協力を求められたとしても、すぐには何をしたいかわからないでしょうね。実際わたくしたちがそうでした」

クラスの全員にメリットがあると言っても、実際やるのは代表による個人戦だ。協力すること自体に異議はなくとも、じゃあ代表以外のクラスメイト達は何をすればいいのかということから考えなければならぬ。

「最初に思いつくのはクラス代表の訓練相手になることかな？」

「そうするとすぐに壁にぶつかりますね。訓練機がすぐ手に入らないという」

「そう。予約は一週間先で、しかも抽選の当選確率が一割以下。きつとこの時点で頭を抱えると思う」

一組は人海戦術により毎日の訓練機を確保している。上級生の先

輩達はそれに気づいてここところは予約を入れる人が少なくなっているそうだ。あるいは俺達が求める機種とは違う方に予約を入れてくれるなどの配慮を見せてくれているらしい。

感謝を伝えたクラスメイトによると、リーグマッチの価値に早く気づいたことへの先輩からのご褒美だそうだ。三年指揮科の先輩も言っていたが、一年次のリーグマッチは後で振り返って相当にインパクトのあった行事のようだ。

とはいえ上級生は手助けをしないという話になっていたはずなのだが、たまたま予約を入れなかったり一年とは違う機体に入れただけという詭弁が成立するのでそのところは構わないそうだ。

それでいいのかと思うが、こちらにとって不都合もないので深くは突っ込まないことにした。

「つまり、今この時点で他のクラスが動けるのは実質休み明けになっているということね」

「正確には休みに入るまでの今日明日あさつてを乗り切れればいいと思う。だから一年の間に誤解を招く情報を流してそつちに気を取られてもらう」

「それで新聞部という話ですか」

「入学した時から取材させてくれて結構しつこいんだ。模擬戦だなんだで忙しかったから断ってたけど、受けると言えば即飛んでくるはずだ」

女しか使えないはずのISを動かす男子、それも二人。さらに一人はあの織斑千冬の弟。

こうやって世間から隔離されていなければ俺達はプライベートなどあったものではなかっただろう。

「内容は理解したわ。でも私としてはそこまでしなくてもいいんじゃないかと思う」

「あら、わたくしはいいと思いますわ」

「私も賛成です。おもしろそうなので」

余計なことをするなど反対する鷹月さんに対し、オルコットと四十四院さんが賛成に回った。四十四院さんは傍観者的な賛同だろうが、どう

やらオルコットは違う。

この女、目が輝いている。きつと一夏と並んで取材を受ける自分の姿を妄想しているのだろう。

なんだかんだでオルコットも目立ちたがりなようだ。

「三対一。決まりだね」

「そうきたか……悔しいわね」

「あら、でも詳細をこれから決めれば大丈夫だと思いますよ」

「その通りですわね。それなら取材時に一夏さんのフオローはこのセシリア・オルコットが努めますわ」

即自分を売り込もうとするのは見上げた根性だとしても言うべきか。それならこちらとしてもうまく使わせてもらおう。

「それじゃあ詳細を決めていこうか。まずコンセプトは、一年一組は織斑一夏に媚を売る女の集団」

「何よそれ!？」

反射的とも言える速度で鷹月さんが大声を出す。オルコットと四十院さんは揃って目を丸くし、手で隠すのも忘れて口を大きく開けた。

「ありがとう！ 本当にありがとう！ 取材を受けてもらえて本当に嬉しい！」

「そんな大げさな。いや、今まで忙しくて受けられなかったのは申し訳なかったですけど」

夜、新聞部の先輩はそれこそ飛んでくるとでも言うべき速さをもつてやって来た。

学園中が気になっている男子の情報だ。情報を司る人間としては何をおいても駆けつけるだろう。

無理しなくていいがせめて愛想だけはよくしろと言いかせた一夏も、今は落ち着いていて上々の始まりだ。

「でもいいの？ こんな人の目に付く場所？ 寮の会議室とかで全然構わないわよ？」

「別に隠すようなことなんて何もありませんから。なあみんな？」
「もつちろんでーす！」

場所は一番人目につく食堂。もちろん多くの一年生に見せるためだ。実際にたくさんのギャラリー達が遠目から眺めている。

配置は一夏を中央に、横をオルコットと相川さんで挟む。一夏の後ろにはもはや一夏派と言えるパイロット科志望の女子達を揃え、賑やかしとして布仏さんや谷本さんも置いて万全の体勢だ。目立ってはならない俺は華やかなオルコットの隣で大人しくしている。

ちなみに篠ノ之さんはプライドが邪魔して大根の域を抜けられなかったこともあり、俺が外した。

実に悔しそうな顔をしているが人には向き不向きがある。それに篠ノ之という苗字自体にインパクトもある。なので、今回は一夏を主役にするためにも大人しくしておいてくれと下手に出てお願いをし、今度必ず一夏と二人きりにしてあげるからと埋め合わせの約束までして下がってもらっている。

「このクラスは仲がいいみたいね。いいことだわ」

「そりやあもちろんですよ。何から何までみんなにしてもらって、もうまるで頭が上がらないというか」

「いやいや、織斑君あればこその一組ですから！ それはもうみんながんばりますよー！」

「それに一夏さんは望んでこのIS学園に来たのではなく、運命の悪戯によって今ここにいるのですわ。どうして無碍に扱うことなどできましようか」

よしよし。一夏には変に気取らず思ったままを喋ればいいと言っている。その方がかえって女子の心を掴めるからだ。

そして一夏は困ったらすぐ周りに振るように、振られたら周りは即座にフォローをするように、との取り決めをしている。

これには二重の効果があつて、一夏は無理しなくていい、そして周囲に頼ることでもいつも一組はこういう光景なのだということを新聞部の先輩や野次馬連中に印象付けられる。

「それじゃさっそく取材を始めさせてもらおうわね。やっぱり最初に聞

きたいのは初めてISを動かした時の気持ちなんだけれど、実際どうだった？」

「ああ、あの時は何が起こってるか分かんなかったですね。触ったとたんいきなり目の前のISが光り出して……」

和やかな雰囲気の中取材が進んでいく。

周囲はへーとかおととかうまいこと合いの手を入れていてくれる。多少わざとらしい気もするが、テレビなんかでもよくある光景だ。そこまで違和感もないだろう。

一夏の隣りに座るオルコットはこういう場に慣れていいのか、笑顔を絶やさず一夏の話の領きながら聞いている。

さわやかな笑顔で語る一夏、隣で上品に微笑むオルコット、反対側で盛り上がる相川さん達。今のところ順調にこの茶番劇は進行している。

途中テンションの上がった谷本さんが前に出て目立とうとするハプニングはあったが、すぐ鷹月さんに捕まって連れ去られて行き事なきを得た。その後隅の方で鷹月さんが説教していたが、谷本さんは頭を垂れるだけで土下座しないのは何か納得いかない気がした。

「そうそう。織斑君は専用機をもらえたのよね。とつても羨ましいわ」

「いやー、それが宝の持ち腐れというか、ほんと全然うまく扱えなくて。はつきり言ってクラスの誰にも勝てないくらいなんですよ」

「ああ、そういういえば毎日訓練してるそうね。まだ入学したばかりだし、そんなにがんばらなくてもいいと思うわよ？」

「でも仮にもクラスの代表ですからね。せめてみっともなく負けるようなことにはしたくないんです」

「さあここからが本番だ。どれだけ誤解を与えられる印象を出せるか。」

周囲も笑顔の奥で気合を入れなおしているようだ。ちよつと固くなっているかもしれない。

「それならわざわざクラスの代表にならなくてもよかったと思うんだけど？ 例えばオルコットさんはイギリスの代表候補生なんで

しよ。専用機まで持っていてISの操縦経験もあるだろうし、無理しなくてもオルコットさんに任せればよかったんじゃない？」

「何をおっしゃいますか。勝ち負けが全てではありませんわ。この一年一組の顔は一夏さんなのですから、クラスの代表になることは当然の話なのです」

「そうそう。それにあたし達はみんなまだ初心者なんだし、誰がなつても一緒ですよ。だったら織斑君に決まっていますって！」

俺としてはこういうところでギャラリーの反応を見たいのだが、変に怪しまれたくないので動きを最小限にしている。視界に入る限りだが一年生で怪しんでいるのはいなさそうだ。鷹月さんや四十院さんが周囲の様子を見てくれているので何かあれば後で分かると思うが、実際どうなのかすごく気になる。

「だからみんなして織斑君を鍛えようとしているのね」

「それが全然みんなの期待に応えられなくて。最近はまだISを動き方を一からやり直そうって感じで、むしろ退化してる気がするくらいです」

「そんなことないわよ。そうやって一步一步やっていくのが最終的には一番早いと思うわ。確かに動き方とか地味で楽しくないかもしれないけれど、初心者の織斑君にはとても大事なこと。焦らずにしっかりとやっていけばそれは確実に織斑君の血肉となるから」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

正直、一年生ではイグニッション・ブーストの存在など知るまい。だからその練習を基礎訓練として誤魔化してしまえという作戦である。幸いにして一夏の機体は専用機、ただ一夏が自分の機体を扱いきれていないだけだと思わせられれば勝ちなのだ。

実際イグニッション・ブーストの訓練を始めてから一夏の動きはひどいものになっている。制御できていないので当然なのだが、知らなければ見に来られてもこれはひどいと思うだけだろう。

「あたし達もこの際だからって一緒にやっってるんですけど、ISって本当に動かすの難しいですねー」

「普通に動かしている分には全く意識しないものですが、いざ細かな

部分を考えてみますとこれはどうなのだろうあれはどうなのだろうと疑問が尽きませんわ」

「うーん、みんなちよつと難しく考え過ぎかなって感じがするかな？今のうちはもう少しシンプルでいいと思うわよ？」

少しオルコットは言い過ぎかもしれない。それでは俺達が深いところまで考えてやってているように思われてしまう。

まあ一夏の口から出た言葉ではないので、そこまで気にすることでもないか。

「でもせつかくの機会なので、みんなに追いつくところまでは行きたいと思うんです。人前に出るんだし、クラスのみんなにみつともないところは見せたくないなって」

「いい心がけだと思うわ。そういうモチベーションは大事よね」

その後も取材は和やかに進んでいき、特に問題が生じることもなく終えることができた。

もつと意地悪な質問をされるかもしれないと思っていたので、相手が協力的だったのも幸いだった。まあ、初っ端から一夏の機嫌を損ねるような真似はしないか。

鷹月さんと四十院さんを見ると、鷹月さんが胸の前で丸を作って返してくれた。外の様子は大丈夫で問題もなかったようだ。あえて言うなら篠ノ之さんが不機嫌になって谷本さんが凹んでいるくらいか。

「甲斐田君、ちよつとだけいい？」

と思ったら新聞部の人から声をかけられた。

俺は終始大人しくしていたので特に問題もないはずだが。

「さつきは全然話が聞けなかったから少しだけいい？ あ、人目に付くの嫌だろうし隅っこでいいから」

「別に構いませんよ」

確かに相手からすればそうだ。時折話を振られても人前出るの苦手です的態度で適当な返事しかしなかった。

それならこの際俺も一夏を持ち上げるか。

「ありがとう。それで今日の出来はどうだった？ 一年一組の黒幕として」

「黒幕って何の話ですか？」

最後の最後で何ということだろう。まさかのバレバレだった。

「あつ、別に口で勝負しようとかそういうことじゃないから。三年指揮科の先輩達を口説くような人に口で勝とうとか全然思っていないし」
「ああ、そういうことですか」

そうだった。今の今まで俺は俺という存在がいることを忘れていた。

三年全員と一部の二年を巻き込んでいれば、俺のことを知っている人は知っている。まして目の前の人は他人に興味がごくある部類の人間だ。当然知らないはずがなかった。

「甲斐田君が何も喋らない時点でもう怪しくて怪しくて。途中から意図が掴めたのでよかったけど」

「それは本当にありがとうございます。わざわざ合わせてくれて」
俺達は完全に取材する人のことを失念していた。

周囲にどう見せるかばかり考えていて、取材する人がどういう人なのかを全く意識していなかった。

俺はただ大人しくしていればよいということでは全然なかったのだ。

この先輩が俺に反感を持っているような人だったらいいだろうなってしまっていたことか。

「人目のある場所でやったのが幸いしたわね。あの場で全部暴いたら私達完全にあなた達の敵になっちゃう。そうなったら今後取材どころじゃなくてもう最悪だから」

「つまり会議室とかだったら……」

「甲斐田君に根掘り葉掘り聞いたでしょうね」

密室でやらなくてよかった。そういう意見もあって、いつそこちからバラしてうまくいこと記事にしてもらおうという案もあった。だが上級生は協力できないことになっているので、おそらく断られるだろうという結論で却下されていた。

記事がどうなろうと最悪周囲に印象付けられればいいだろうと考えていたのだ。

「それじゃ、今日のことは……?」

「もちろんそのまま出すわよ。今の時期は変に擁護も否定もできないし」

「そのまま出したら擁護になりませんか?」

「正直なところ大丈夫かな。だって見る人が見ればすぐ分かるから」

確かに、三年の先輩達が見たらきつと笑うだろうが。

「上級生ならみんな分かるわよ。でも協力しないということになってるから、わざわざ一年生に伝えることまではしない。だけど一年生にしても、おかしいと思う人はきつと出てくるでしょうね」

「そんなにダメでしたか?」

「ダメと言う程ではないわよ。ただね、一つ嘘に気づかれたら全部がひっくり返るから、怪しまれて理由を探られたらアウトね」

「ああ」

昼に決めて夜の突貫工事では準備不足が過ぎた。

俺なりに考えて出したものではあるが、所詮俺の視界の範囲などその程度だったか。

「あ、別にこれは私の感想であって忠告とかじゃないからね。記事のせいでバレたとか後で苦情言われても困るから言っただけよ」

「別にそんなこと言いませんよ」

「いやいや、こういうのって私達にとって重要なもの。つい飛びついちゃったけどこの時期に取材とか他の人から文句言われるの確定だし、むしろ完璧な作戦持って来られなくて助かったと言うか、逆に上級生の娯楽になりそうだからよかったと言うか」

ちよつと釈然としないが、暴露されず変にねじ曲げられることもなくてこちらこそ助かったと言うべきなのだろう。

「先輩が困らないのならいいです。僕らとしては休みまでもてばいいかな程度なので」

「あら、そんなのでよかったの?」

「二週間、休みまで入れれば三週間稼げたので。もう他のクラスには僕らと同じことはできないし、こちらの目処もつきつつありますから」

「イグニッション・ブーストね。確かに織斑君には必須の技能だと思うわ」

やはり見る人が見れば分かるか。それに一年生と言えどじっくり観察されたら加速する練習だときつと気づくのだろう。たとえばイグニッション・ブーストのことは知らずとも。

どちらにしてもバレるのはもう時間の問題なようだ。

「それじゃもういいですか？　気を遣っていただいたことに感謝します」

「今度は甲斐田君の取材もさせてね。代わりについてわけではないけれど」

「別に僕にはおもしろいこと何もないですよ」

「何言ってるの。上級生の間じや甲斐田君の方が知られてるんだから。入学三日目にして三年指揮科の先輩のところへ一人で乗り込んで口説き落とすとか、男子でなくとも注目の的よ」

それは俺にとってあまりいい話ではない。

注目されるべきは一夏であつて、俺が目立つては何の意味もないのだ。

あの時は何もかも余裕がなかったが、今後は俺の振る舞い方についても考えていかなければならないだろう。

「あ、もしかして気になる？　自分が先輩達にどう思われてるか」

「いや、別に」

「またまた。そんな難しい顔して気にしてないとかないわ」

俺としては相手が敵対しなければそれで十分なのだが、今の思考を別な方に取りられてしまったようだ。

「三年生はその度胸を認めて概ね好意的ね。甲斐田君にはかなり期待してるみたい。それに対して、二年生の間では評価が真つ二つ。認める人と生意気に思ってる人で大分温度差があるわ。うちのたちちゃんをいじめてるでしょ？　そういうのもあるみたい」

「たっちゃん？」

「もしかして本当に名前覚えてないの？　我らがIS学園の生徒会長更識楯無ちゃんよ」

「ああ、楯無でたっちゃんですか」

あの熱き闘いを理解できる人間は少ないのか。いじめなど全く意味が分からない。そもそもいじめられる側が呼ばれてもいないのにわざわざ自分からいじめられに突っ込んで来るものか。もしいたとしたらそれはMな人間で、そうであればもはやいじめではなくSMPレイだ。

「ま、そういうわけだから、甲斐田君が喋ってない時点で一発で仕込みだつて分かるでしょうね」

「二夏への取材だったということをお願いします」

「ギャラリーもたくさんいたしそのまま書くわよ。その結果どうなるかは私個人としても楽しみね。ではまた次の機会に」

そう軽く笑って新聞部の先輩は帰っていった。

人とは他人の善意によって生かされているのだろうか、と何となく思う。

鷹月さんと四十院さんが俺に近づいてくる。話を聞いていたのだろう、二人とも苦笑いしていた。

最近、俺はあえて一人で行動をするようにしている。

理由は明確だ。ちよつかいをかけられるためである。

五組の代表に声をかけられた後考えたことだが、他クラスの情報を得られないなら俺自身をエサにして向こうからやって来るのを待たばよいのではないか、という話だ。つまりは二匹目のドジョウ狙い。

一夏には遠く及ばないが、男であるという一点においてこのIS学園では俺も目立つ。一夏には常に篠ノ之さんやオルコツトといったクラスの子が側についており、他のクラスの間がちよつかいを出すにはなかなか勇氣がある。さらにあの織斑先生の弟という立場もあって好意以外では近づきづらいことこの上ない。

だが俺には一夏の友人であること以外は何もない。その上IS適正はDランク、優秀でもないので怖さが全くない。とりあえず何か言いたい連中にはもってこいの相手のはずだ。

そう思っていたのだが、実際は意外と声をかけられることが少なかった。

見られてはいる。俺が通ると会話を切つてまで俺を見ている。その視線は様々なもので、好奇心から観察する目、女性上位主義者特有の苦々しい目、得体のしれない何かを見る目、怯えている目、十人十色だ。

三年生は俺を見るとよく挨拶してくる。時には織斑先生の写真を売ってくれという強者もいた。だが欲しいのは金じゃない情報だと俺が言うと、協定によりそれができない先輩は悲しそうに去つて行った。

「むしろかえって怪しく見えるんじゃないの」

「相手は人間ですので飛んで火に入るわけはないかと」

「たとえば甲斐田さんを言い負かしたとしても何か得るものがあるかと言いますと……」

指揮班の連中は俺のことを散々な言いようだった。

無駄なこととしても仕方ないからやめろと言わんばかりだ。やめさせたいなら俺の体や安全に気を遣つてとかそういう方向でやれと言いたい。

俺が体を張っているというのに、せめて言い方くらいは気にしろと思つた。

結局のところ、五組の代表も徒党を組まなければ俺に話しかけられなかつたんだろうな、と思う。

取るに足らない存在だと頭では思つていても、実物を見ると自分達より大きい相手だ。一夏は身長が百八十近くあるので頭一つ抜き出ているし、俺でさえそのへんの女子よりは大きい。身長の高い女子もいるが、並べば明らかに体つきが違う。

ISに乗ってしまえば関係ない差でも、普段の生身の体においてはずきりと見えてしまう。理性を働かせれば、目的もないのにわざわざ話しかけるようなメリットは何もない。罵つたとして、俺が切れて暴れたりしたらどうするという話だ。男という存在を野蛮な生き物と見ているなら、なおさら安全圏にいなければちよっかいはかけられ

ないのだろう。

実際、聞こえるか聞こえないかぐらいの陰口はたまに聞こえた。そうして俺は今日も成果のないまま釣り糸を垂らして歩き回っていたのだが、ちょうど事務室の前に来たところで、それを見つけてしまった。

すぐに向こうも俺に気づく。

「どうしてあんたがこんなところにいるのよ?」

「そっちこそどうしてここに?」

「この生徒だからに決まってるじゃない」

俺の目の前で、結局身長が百五十センチにも届かず止まってしまったらしきツインテールの女子が訝しげに俺を見ていた。

一夏にとつては唯一の女友達、俺にとつては一夏の番犬、その名を鳳鈴音と言う。

つまり、中学時代の知り合いだった。

「あんた、また背が伸びた?」

並んで歩きながら、鈴は憎々しげに俺を見上げる。

「三年前はあたしよりも小さかったくせに、絶対サギだわ」

中一の終わりにはもう鈴の身長など抜いていたので、実に今さらな話だ。

「毎日牛乳飲んでるのに不条理にも程がある。神様は絶対に間違ってる」

牛乳を飲み続けていれば少なくとも骨は強くなるだろう。健康的でいい話だ。

「言っておくけどまだ終わったわけじゃないからね。まだ少しだけど伸びてはいるんだから」

別に鈴の身長など心の底からどうでもいいが、あえて言うならその伸びはもはや微々たるものだろう。

「いい加減何か言いなさいよ」

「鈴って僕らと同一年じゃなかったっけ?」

「はあ？ やつと口開いたかと思えば何トチ狂ったこと言い出すの？」

相も変わらずこいつは口が悪い。俺などものの比ですらない。

鈴の中ではこの世には敵か味方かしかないのではなからうか。

「新入生なら他のクラスだったとしても今の今まで僕らが知らないわけがない。あ、もしかして実は飛び級とかでIS学園に入学してたとか？」

「ああ、そういうこと。その答えは簡単、あたしがこのIS学園に来たのは今日が初めてだから」

「今日？」

一ヶ月遅れの新入生などあるのだろうか。転校生にしては時期が中途半端過ぎる。

「あつ、智希あんた今あたしのことバカにしたでしょ。今まで入学させてもらえなかったとか補欠入学だとか不登校だとか」

「全く何も言っていないんだけど」

「目が言ってる目が。いい、あたしは入試じゃトップクラスの結果を出してるのよ。今までここに来られなかったのは深い事情があったの」

「じゃあその事情って何？」

「また大して興味もなさそうな言い方を……。まあそれは国家機密だから言えないけどね」

それなら最初から話を出さなくていいだろうに。一人相撲にも程がある。

「でもまさか智希までねえ……。一夏だけならまだ分かるんだけど」

「それは一夏が織斑先生の弟だから？」

「うわつ、あんた千冬さんのこと織斑先生とか呼んでるの？ 何かそれ変じゃない？」

そして会話が飛びに飛ぶ。

鈴と会話をしていると話の終着点がどこにあるのか分からなくなってしまう。

「一夏だつてここじゃ織斑先生って呼んでるよ。鈴も千冬さん呼びは

やめた方がいいと思う」

「あはは、何それ？ 千冬さんは千冬さんよ。織斑先生とかかえって変だって」

ならば後で聖剣シュツセキボの乱れ打ちでも存分に喰らうがよい。のたうち回るその姿を全力で一夏と共に笑ってやろう。

「で、本当にIS動かせるの？」

「誠に残念なことながら」

「ふーん。一夏もそうだけど、智希の人生も狂っちゃったわねえ……。弾あたりなら全力で喜んだだろうけど」

「弾と数馬はこの世の終わりみたいだな顔してたね。俺達が動かせないはずはないのにとか涙流して叫んでた」

「あははっ！ 分かる分かる！ すっごくその光景想像できる！」

旧知の仲というのはやはり思い出話に花が咲く。

俺と鈴は二年近く同じ場所で過ごした間柄だ。

一夏を輪の中心とした関係ではあるが、それでも同じものを見てきたというのは他とは違う何かがあるのだろう。

「あ、ここか」

「もしかして鈴は一組なの？」

「血の涙を流して言うけど違うわよ。その隣。一夏と一緒にのクラスにしてくれってあれほど言ったんだけどねえ……」

鈴は二組か。それは実にいい話だ。

ならば鈴を通じて二組の情報を筒抜けにできそうだ。一夏を引き合いにして鈴を一組のスパイとして仕立てあげてしまおう。

鈴も当然のごとく一夏に心奪われた一人だ。ただ鈴はその執念によつて一夏にとって唯一の女友達の座にまで上りつめた。そこが他の女子とは大きく違う。

なので恋愛には程遠いとしても、家族以外の他人としては一夏に一番距離が近い女子になるのだろう。

篠ノ之さんは家族カテゴリー、オルコットや相川さん達は未だクラスメイトの枠ではない。

であるから一夏の心に一番近い女子は誰だと問われれば、現状その

答えは鳳鈴音であるということになる。

まあ、俺は鈴を一夏の嫁とする気など毛頭ないのだけれど。

「一年ぶりだし一夏も喜ぶと思うよ。それじゃ……」

「ちよつと待った！ 深呼吸するから待って！」

そう言うとき鈴は本当に大きく深呼吸をし、身だしなみを確かめて、決意を込めた目が変わってそれから教室の扉を勢いよく開けた。

「一夏!!」

「えっ……鈴?」

鈴と向かい合う一夏の表情はたまに見せる間抜け面だ。注意しているのに相変わらず出してしまうのは実によくない。今度写真を撮ってどれほどみっともないか分からせる必要があるそうだ。

と、何となくそんなことを思っていたら、満面の笑顔になった鈴は一夏に向かって突進し、なんとそのまま一夏の胸へと飛び込んだ。

「会いたかった!」

「鈴!」

教室がざわめく。誰だこの女はと皆驚いているだろう。

そして俺も一夏もびっくりだ。鈴はそんな直接的な行動をできるような女子ではなかった。いや、そういうことをしないからこそ鈴は一夏の信頼を勝ち得ていったのだ。

それなのにこれはどうしたことか。一年会わずにいたせいで思い詰めてしまったのだろうか。だとしたら鈴も所詮はその程度だったということではない。

とりあえず教室の入り口で突っ立ったままというのも何なので、二人のところへ向かって歩く。そして近づいて気がついた。

鈴の耳が尋常じゃないほど赤い。

つまり、今この瞬間鈴は相当に無理をしている。つまり、これは鈴一世一代の演技だ。

きっと感動の再会のシチュエーションを妄想して、今の光景がその産物なのだろう。

ヘタレの鈴にしてはまあ思い切ったなどと言える行為ではある。一夏にそういう方面はまるで期待できない。だから鈴側がアクション

しなければ何も生まれないので、理に適っているとさえいえばそうなのかもしれないが。

「どうした鈴？ 久しぶりと思ったたら子供みたいだぞ。もう高校生なんだからそういうのは卒業しようぜ」

笑顔の一夏に軽く背中を叩かれて、失敗を悟った鈴の体から力が抜ける。

残念でした。一夏にはまるつきり通じませんでした。

施設でチビ共の相手をしていた一夏はしょっちゅう突撃を受けていた。

だからそういう行為は一夏の中では子供のやることでしかない。

たまに遊びに来ていた鈴も見えていただろうに、もしかしてチビ共が羨ましかったのだろうか。

そもそも世間一般と一夏の頭の中は乖離が激しいということを鈴は十分承知していたはずなのに、一夏と離れているうちに妄想に目が眩んでしまったか。

「甲斐田！ これはどういうことだ！」

「せ、説明を要求しますわ！」

「ちよつとちよつと！ 何なの!? あれ何なの!?!」

失意の余り固まってしまった鈴を哀れんでいると、なぜか俺が囲まれた。

そういうのは普通一夏本人に問い正すものではないだろうか。

「貴様という奴はいつもいつも！」

「いくらなんでもこれはあんまりですわ！ 人の心を弄んで！」

「鬼！ 悪魔！ サド！ ドS！」

いつの間にか俺が極悪人にされている。

たまたま出くわした鈴を連れてきただけなのに、風評被害も甚だししい。

「智希、あんたここで何やってるの？」

騒ぎに気づいた鈴が不思議そうに俺を見ている。

まず自分が原因だとは思わないのか。

「ああ、ありやあいつものことだ。あいつほんとひどいんだぜー」

一夏まで便乗してきた。

別に一夏に事態を收拾する期待などしていないが、まさかかき回す方に行くとは。

何が起こっているのか理解すらしていないだろうに。

「かいだーはあいかわらずモテモテだなあ」

「くっ、これが私の目指す先か！　だが全然羨ましくないのはなぜだ!？」

もうこのへんはどうでもいい。

「いい加減反省をしろ反省を！」

「わたくしは甲斐田さんを信じておりましたのに……」

「楽しい!?　そういうこととして楽しい!？」

悲痛に満ち溢れた顔で俺は責め立てられる。

実は一夏には最初から彼女がいて、でも俺はそれを知りながらクラスメイト達を一夏にけしかけていた、ということになっているようだ。連中の脳内では。

さてどうしたものか、と考える。

目の前の早とちり軍団は興奮していて人の話など聞きそうにない。

そうだ、こういう時こそ聖剣シュツセキボの出番だろう。英雄織斑千冬はきつとこの場に平和をもたらししてくれはずだ。

そう結論づけたちようどその時、織斑先生が山田先生と共にベストとも言えるタイミングで教室に入ってきた。

やはり英雄はそのへんの有象無象とは違う。

ここぞの場面で登場して見事な活躍を見せるからこそ英雄は英雄なのだ。

さあやってやれ。妄想に取り憑かれた連中に現実を見せてやれ。その手に持った聖剣で、世界に平和を届けるのだ。

そして俺は魔剣出席簿による最初の犠牲者となった。

次々と上がる悲鳴を耳にし、自身の痛みに耐えながら、絶対いつか織斑千冬に土下座させてやると俺は心に誓った。

16. 凰鈴音を初めて見た時、同級生の女子に右ストレートを叩き込んでいた。

凰鈴音を初めて見た時、同級生の女子に右ストレートを叩き込んでいた。

さすがにあの光景は忘れようにも忘れられない。

あの時の鈴は今より少し低い百四十五センチ程度で、対する相手は身長が鈴よりも十センチ以上あり、体格も細身の鈴とは段違いに強そうだった。

だが鈴は平手打ちしてきた相手に対し後ろへ一歩下がって軽く躲す。そしてそこでできた隙を逃さない。手が空を切って前のめりになってしまった相手の頬へ、全体重をかけた右手のグーを振り抜いた。

殴られた相手はその勢いで半回転し、そのまま地面へと倒れこんだ。

とんでもないところに来てしまった、と正直思った。

当時の俺は中一で身長百四十センチもなく、そこらの女子よりも小さく弱かった。

ただでさえ喧嘩でもしたら負ける状態なのに、ここには小さくともそれをものともしない女子までいる。

どう考えても俺に生き残るすべはない、そう恐怖したものだ。そして小さな怪物の顔がこちらへと向く。俺は思わず息を呑んだ。ところがその怪物は急に笑顔になり、両手を振っている。

意味が分からず混乱していると、隣にいた一夏が呆れたような声を出した。

「しょうがねえなあ。あいつまたやってるよ」

どうやらその笑顔は一夏に向けられたものようだった。

「どういう人かって、努力家だよ」

殺気立った雰囲気の中、俺はそう返答をした。

放課後、今日も主人に忠実な秘書としての勤めをこなした後、職員室を出てすぐに俺は女子に取り囲まれた。

これが他のクラスの一年生なら待ち望んだエサにかかった獲物なのだが、残念なことに目の前にいたのはよく見知ったクラスメイト達だった。

篠ノ之さんにオルコット、そして相川さん他一夏に落とされた女子多数。

話があるから来いと問答無用で連れて行かれ、今俺は寮の会議室にいた。

「努力家ですか？」

「確かに負けん気の強そうな顔をしていたが」

話題はもちろん鈴のことである。

あの後俺に対する理不尽な誤解はなんとか解けたのだが、別の疑念が残っていた。一夏と鈴の関係だ。

一夏は笑って小学校からの友達だと答えていたが、再会即抱きついてくるような相手だ。この連中が警戒をしないわけがない。

かくして鈴を連れてきた俺に詰問タイムが設けられることとなった。

「自身の努力を惜しまない人だよ。努力すればいつか願いは叶う。努力しない人間は何も手に入れることができない。だから自分は常に努力を続ける」

「まあ」

「殊勝な心がけではないか」

とはいえ何事にも限度はある。目的のために努力するのはいいが、努力すれば何でもかんでも願いが叶うかと言うと、俺はそうは思わない。

努力以前に人には向き不向きがある。そこそこで満足できるのな

らそれでもいいだろうが、どうしても達成できない事柄が出てきたとき、努力のみに責任を押し付けるのか。

一流を目指すのなら才能だって必要だろう。運も味方してくれないと困るだろう。それに何より、男がISを動かすことは努力以前の問題だった。

別に鈴が努力するのを否定するつもりはない。ただ努力で全てを解決できると信じている鈴のことを、俺は努力ジャンキーだと思っているだけだ。

「そうやって努力して織斑君の友達になったの？」

「そうだよ。一夏にとって唯一の女友達だね」

周囲が息を呑むのが分かった。これは強敵出現だと目に力も入っている。

「ま、待て。私は一夏の友ではないのか？」

「わ、わたくしはまだそこまで行くことさえできていないのでしょうか？」

「あー……」

篠ノ之さんとオルコットの声が震えている。やはり最近は一夏の側にいるのが当たり前になっていて安心しきっていたようだ。

対して相川さんはまだ自覚があるか。

「篠ノ之さんは小さい頃の幼馴染ではあっても友達かと言われるとちよつと違うかな。オルコットさんはどうだろう、正直壁は越えられてないだろうね。相川さんは自分でも分かっているみたいだけど、ようやく名前覚えてもらえたところだもんね。他の人は一夏から自分の名前呼んでもらったことある？」

冷水を浴びせかけられたように、全員が黙りこんで下を向いた。

鈴と自分との間にある圧倒的な差を感じているのだろう。

この程度で諦めるようならそれまでだ。篠ノ之さんやオルコットには多少のフォローくらいしてもいいが、簡単に心が折れるようなら俺が何かをするまでもなく自滅するに決まっている。

今後の一夏のこととも考えると自分の心くらい自分でどうにかしてもらいたい。

「つまり奴がまず私の目指すところになるのか……」

「いいえ、それはきつと違いますわ」

「どうして？ 差を縮めないことには何も始まらないよ」

「恒例の一夏対策会議が始まってしまった。」

攻略の糸口が全然見えないこともあるからか、最近はこの連中に協力姿勢が見られるようになっていた。

もちろん隙あらば抜け駆けしようという意思は全員にある。だがそれ以前に一夏の思考回路がまるで理解できないため、まずはお互いに情報交換して一夏の心を理解しようとしているらしい。

一夏の訓練に付き合っているうち、その合間などに一夏トークをして仲良くなってしまったようだ。

今や相川さんも篠ノ之さんと普通に会話をするまでになっている。

「友達では駄目なのです。そうなってしまったは一夏さんの中でおそらく甲斐田さんと同じ括りになってしまい、むしろ女としては遠ざかってしまうのですわ」

「なるほど、確かに奴は数年来一緒にいながら友の先へと進めていないようだ。同じ方向を目指しても二の舞いになるだけなのだな」

「思えば今日のあれも絶対失敗だったんだよね」

「女の子に抱きつかれて何も思わないとか、織斑君っていったい何なんだろう?」

俺そっちのけで相談が始まってしまった。

さすがにオルコットは以前俺がアドバイスしたこともあり、鈴が正しい方向に進んでいないことは理解しているようだ。

俺としても一夏の心を動かす方向性が全く見えないので、ぜひともこの連中にはがんばってもらいたいと思う。

「ということはあの人のことはそこまで警戒する必要もない?」

「いやー、あれはガンガン間に入ってくると思うよ。気が強そうだし」

「あー、むしろ邪魔してやるくらいの気持ちで向かってきそー」

「とうかさつきまささにそれだったじゃん」

たった一度鈴を見ただけなのに、クラスメイト達はかなり鈴の行動を理解していた。

鈴も勝ち取ったその座に安穩としていたわけではない。一夏に近づくと女子を追い払ってその立ち位置を維持してきたのだ。

そしてその姿に俺や弾といった男子がつけたあだ名が一夏の番犬である。

特に俺は一夏が興味をもつ女子を調べていろいろやっていたので、しばしば鈴とは対立していた。

「でもそんな人が織斑君の側に居続けられるのかなあ？」

「確かに。そういうの織斑君がすごく嫌がりそうだよな」

「うーん……そこんところなの甲斐田君？」

もう俺の存在など忘れてしまったのかと思っていたが、そうではなかったようだ。

言い方からしてどうも俺はアドバイザー的立ち位置にいるらしい。

「すごく嫌な言い方をすると、一夏にとって都合がいいから」

「またそれは本当に嫌な言い方をするな」

「甲斐田君、それどういうこと？」

鈴の口が非常に悪いこともあって、俺の方も鈴については言い回しに遠慮するつもりはない。

「一夏は基本女子の気持ち分からない」

「うん」

「そこに女心を教えてくれる人が現れたら？」

「えー」

つまりは女心のアドバイザーだった。

篠ノ之さんと一緒にいた頃はそうでもなかったようだが、小学校高学年ともなると一夏もその本領を發揮し始めていたらしい。

周囲の女子をもちろん無意識のうちに魅了し、数多のアタックを受けるようになっていたと、小学生から付き合いのある弾は言っていた。

だがそれと同時に、親やテレビなどの影響を受けて男である一夏に問答無用の敵意を向けるようになるものも出てくる。

かくして一夏の周囲は好意悪意が入り乱れて相当ややこしい状態になっていったそうなのだ。

ある日突然態度が変わってしまう同級生達に一夏も困惑し、その気持ちしが全く理解できないこともあってかなり精神的に参っていたと弾はしみじみと語った。

そういう状況で出て来たのが鈴である。鈴は男子に対する偏見を特に持っていなかった。そして筋の通らないことを許さないという正義感もあった。

その結果男子というだけで一夏を蔑む女子連中を文字通り叩きのめして回った。最初のうちは言葉を使っていたようだが、そのうち面倒になったらしい。文句があるならもう拳で決めようばかりに自分より体の大きい相手に対して向かって行った。そしてことごとく打ち倒してしまっていた。

「バトル漫画の主人公だね」

「ちよつとかつこいいかも」

「あのちっちゃな体で自分より大きな相手に向かっていくとかある意味燃える展開」

鈴自身の意識も自分が世界の中心だった。

だから俺は鈴が一夏の隣に立つことを認められない。主人公は一夏一人で十分だからだ。自分を物語の主人公とし、一夏を自分のヒロインにしようとするその所業は、到底俺にとって受け入れられるものではなかった。

「あれ？ それと女心との関係は？」

「一夏が鈴に感謝して、その笑顔にいつものごとく鈴がやられてしまったんだって」

「いつものごとくつてその言葉すぐおかしいよね？」

「私達も人のこと言えないけどね」

失笑が漏れる。今ここにいるのはそのいつものごとくにやられてしまった人間ばかりだ。

「そして一夏は鈴のことを何かと頼るようになる。特に女子の行動の意味とか聞いたり」

「うわっ、それ織斑君いいようにされてない？」

「凰さんにとって都合のいいことばかり吹きこまれたんじゃないの

？」

そこで好き勝手しなかったのが鈴の賢いところだ。弾によると初めのうちはそういう兆候もあったらしいが、すぐに改めたようだ。

一夏はその感覚でなんとなく相手の後ろめたさや嘘を感じ取ってしまう。だから俺も変に正面から嘘をつくようなことはせず、意識を別の方向に向けたりそもそも話題に出さなかったりとその感覚に引っかからないよう小細工をしている。嘘をつくときも堂々と目を見る。

鈴も当然それを理解し、むしろきちんと答えることで一夏の信頼を得る方向に持っていったようだ。そして実際に見事信頼を得て唯一の女友達の座を勝ち取るに至る。

だがそれと引き換えに、信頼を得たがゆえに、一夏に対してアプローチができなくなってしまっていた。

変に他の女子と同じ行動をして一夏に同類と見られてしまうのが怖いのだ。

「僕が知り合った時にはもう一夏の友達だったけど、かえってそれがブレーキになってるね」

「そういうことかー」

「ある意味八方塞がりだね」

もちろん鈴自身もそれはよく分かっている。

どうにかしなければと中学時代もいろいろ試みていたが、最後は怖くなってヘタレてしまうのが常だった。

そして半ば八つ当たりの一夏に寄ってくる女子を追い払ったりしていた。

そういう姿を見て俺は鈴のことを一夏の番犬と呼んでいる。

「邪魔はしてくるんだ」

「今まさにやられたしね」

「貴重な織斑君との訓練タイムだったのに」

「ああ、そういえば今日の訓練はどうしたの？」

そうだ、この連中は毎日放課後は一夏の訓練に付き合っているはず

だ。

それなのに今この時間に寮にいるということは、鈴に何かやられたか。

「甲斐田さんが織斑先生に強制連行された後風さんが教室にやってきたのですわ。一年ぶりの再会だから話をしたいと」

「なるほど。でも別に僕は連行されたわけじゃ」

「一夏さんには毎日の訓練がありますので、当然最初のうちは断ろうとされていたのですが」

「甲斐田の意を受けた鷹月が許可を出してしまったのだ」

「僕別に鷹月さんには何も言っていないんだけど」

「この際風をスパイに仕立て上げるなど、どうせ甲斐田の考えであろう?」

確かに放課後働かされているのは俺の意思ではないし、鈴をスパイにしようと思心の中では考えている。

だが別に俺は嫌がる中織斑先生に引きずられていつているわけではないし、鷹月さんに鈴のことは何も言っていない。

結論。これは著しい風評被害だ。

「ですから今日は整備班の方々に譲ってきたのですわ」

「武装の確認をさせて欲しいとは前々から言われていた。であるからちようどいいであろうという話だ」

俺が抗議の目を向けるも連中は何ら意に介する事なく会話を続けている。

もうオルコットも篠ノ之さんも完全に俺のことをナメきっている。どうも一夏から俺の中学時代の話を聞いているようで、たまに俺のことを優しい目で見えたり俺を見て残念そうにため息をついたりしていた。

どこまでも失礼な話だが、今この場で俺のことはどうでもいい。問題は鷹月さんがそこまで一夏に言ってしまったのは大きなミスであるという事実だ。

「まずいな、急いで一夏を探さない」と

「あら、何か問題でも?」

「凰鈴音がどうかしたのか？」

「相手をそそのかすとかそんな芸当一夏にできると思う？　もしできたとして、鈴がそれをはいはいと受け入れるような人間かみんな知ってるの？」

目の前の連中がハツとした。

そもそも一夏との出会いからして、鈴は強い正義感を持った人間だ。それなのに一年ぶりに再会した想い人からスパイの打診などされたらどんな反応を見せるのか。そんなのは恋心以前の問題だ。

ストレートに言うのではなく、結果としてスパイ行為になるように仕向けなければならなかったのだ。だから俺は数日かけて作戦を考えようと思い、まだ誰にも言っただけはなかった。

答えを聞くこともなく俺は会議室を飛び出す。

二人はどこで話をしているだろうか。鈴はまだIS学園の地理を知らない。つまり場所は一夏の行ったことがあるどこかだ。

一夏は基本適当な人間だ。そのへんでいいと言うだろう。だが鈴は昼の雪辱を果たそうとするはずだ。IS学園の地理を知らなくとも、場所の希望は述べるだろう。つまり雰囲気のある場所、屋内の密室ではない。そんな場所では鈴本人が緊張してしまう。

ならば景色のいい場所。屋上か、学園の外れで周囲が広く見渡せる場所。この一ヶ月一夏は部活見学ツアーくらいでIS学園の探検はしていない。そして深くも考えはしない一夏なら、まず屋上を選ぶ。そう結論づけて俺は寮を出て校舎へと向かって走る。後ろからクラスメイト達が追ってきているのが分かった。

そして俺の予想は正しかった。

ちようど校舎の前に着いた時、中から鈴が出て来た。

そして俺の危惧も正しかった。

「智希じゃない、ちようどいいわ。面貸しなさい」

鈴の表情は明確に怒りだった。

遅れて一夏も出てくる。痛そうな顔で頬に手を当てていた。きつと鈴に殴られたのだろう。鈴は平手打ちなどかわいいことはしない。攻撃する時は常に拳を握る。

これは難しい立場に追い込まれた、と俺はこれから始まるあれこれについて気が重くなった。

「で、智希はこのI S学園でいったい何を企んでるわけ?」

「何か僕が諸悪の根源みたいな言い方だね」

頬が赤く腫れて痛そうにしていた一夏をクラスメイト達に託し、俺は鈴と一対一で対峙した。

さすがに責任を感じた連中は残ろうとしていたが、迷わず俺は全員を帰した。多対一など鈴の神経を逆撫でする行為でしかないからだ。それにこれ以上余計な発言をされても困る。

もうここは俺が何とかして口先一つで乗り切るしかない。

「根源も何も、あんたしかいないでしょうが」

「それはとても心外だな。僕が一夏に対して鈴に殴られるような真似をさせるはずはないのに」

「また白々しいことを」

鈴が苦々しげに吐き捨てる。

内心はともかく、俺は表情だけは平然としてみせた。まだ鈴の口から何が起こったのかを聞いてはいないし、心当たりがあるような後ろめたさを出すわけには絶対にかかない。

「あたしにスパイになれとか、智希あんたふざけてんの? 一夏に何言わせてるの?」

「スパイ? 何の?」

「しらばっくれてんじゃないわよ。なんかクラス対抗の模擬戦があるんでしょ。あたしに二組の様子を探ってこいとかバカにしてんの?」

「そんなこと一夏が鈴に言ったんだ。確かにきつとうちのクラスの誰かだろうけど、分かった。一夏にそんなことをさせたのは誰だか聞いてみるよ」

「だから! その嘘くさい態度はやめてくれない? そんなこと言い出すの智希以外に誰がいるって言うのよ? もうほんとそういうのムカつくんだけど」

鈴は暖簾に腕押しな俺の態度に苛立ちを隠せない。

俺としても一歩も引いてはならないのだが、かといってこれ以上鈴を怒らせて実力行使されてはたまらない。

生身の体でも鈴に勝てるわけがないし、俺には基本言葉しかないのだ。

「あのさ、鈴こそ僕のこと馬鹿にしてない？　鈴は一夏に言われたら何でも言うこと聞くとか僕が考えてるとか思ってるの？」

「だから一夏に言わせたんじゃないの？」

「鈴って本当にそうなの？」

「そんなわけないじゃない」

「僕だってそれはよく知ってるよ。もしそうなら鈴はとつくの昔に一夏から他の女子と同じ扱いされて見向きもされなくなってる」

「それは……」

まずは鈴が一夏の特別であるということを思い出させる。一夏を全面肯定するでもなく全面否定するでもなく対等な友達という立場で横にいたのが凰鈴音だ。

「というかその程度なら俺は何より先にスパイになれと一夏にそそのかせていただろう。」

「そりゃあさ、今度のリーグマッチで勝ちたいよ？　でもそんな卑怯なことして勝っても意味がない。人前でやるんだから堂々とやらな」と

「そう？　智希なら喜んでそういうことしそうだけど？」

「いや、模擬戦をやるのは僕じゃなくて一夏だよ。だいたい一夏がそんなズルして勝って嬉しがると思う？　鈴にスパイのことを言った時も一夏は言いにくそうにしてなかった？」

「確かに……無理矢理口にした感はあるわね……」

我ながら嘘臭さ過ぎて危なかったが、一夏を引き合いに出して何とか事なきを得た。

一夏だって友達にそういう真似をさせるのは抵抗があるだろう。だから俺が裏でこっそりやろうと思っていた。

「そういうこと。その人は昼の鈴の姿を見て勝手に想像してたんだろ

うけど、鈴のことを知ってたらそんな鈴が絶対に怒るようなことなんて言えるわけがない」

「うっ、あれを引っ張るとかあんな鬼ね……」

思い出した鈴の顔が赤くなる。鈴が一夏に抱きつくだなんて運動会でのどさくさ紛れくらいしか記憶にない。

よし、怒りのボルテージは順調に下がってきている。

「確かにうちのクラスの人間が鈴を怒らせるようなことをしたのは申し訳なかった。後でその張本人を連れてきて鈴に謝らせる。それじゃ駄目？」

「それは……まあ本人が本当に反省したのなら受け入れないわけじゃないけど……」

「やっぱり嫉妬みたいなものはあるんだよ。一夏に抱きつける女子なんてこのIS学園には一人もないし、羨ましくて仕方ないんだろうね」

「そ、そうなの!？」

鷹月さんには悪いが今回は泥を被ってもらう。余計な勘ぐりを鈴にされても困るので、鈴に嫉妬したがゆえの暴走ということにした。

一夏にまるで惚れてもいない鷹月さんにはいい迷惑だろうが、勝手なことをした報いだ。きつとこれでまた俺への扱いがひどくなるんだらうけれど。

「うん、どうせ聞かれるだろうと思ってたけど、一夏は相変わらず女子に囲まれてるよ。今クラスの三分の二くらいは一夏に夢中になっているかな」

「ほんとデタラメな話ねえ……まああたしが言えた義理じゃないけど」

「でも一夏の態度も相変わらずだから、正直一年前と状況は変わっていないね。ただ周りにいる人間が変わっただけ」

「そ、そう？ それは正直助かった……。女しかいないIS学園とか、もう飢えた猛獣の檻の中に一夏を放り込むようなものだと思っただから」

「だから不安になってあんな思い切ったことをしたんだ？」

鈴は顔を真っ赤にして下を向いた。

それを一夏の前でやれないのが鈴の最大の弱点だと思う。

「あ、あんたこそどうなのよ？　一夏とまではいかなくてもここから智希にだっていろいろあるんじゃないの？」

顔を赤くしながら、鈴が俺に対して照れ隠しの反撃に出た。

言われて俺に寄ってくる女子について考えてみる。

そして、今や俺は周囲からぞんざいな扱いしかされていないことはつきりと悟ってしまった。

クラスの連中は言うまでもなく、織斑先生には要注意人物扱いでこき使われ、五組の代表には本題と何の関係もないところで馬鹿にされていた。

一人で歩いていても陰口ばかりで声をかけてくるような者もなく、救いは挨拶してくれる三年生と真摯に俺に挑んでくる生徒会長くらいではないか。

「と、智希……じよ、冗談だから、気にしないでね。そのうち智希のよさ？　に気づいてくれる人もいるだろうから、ね？」

俺はどんな顔をしていたのだろう。鈴があからさまにまずいこと言ってしまった的態度で俺を気遣う発言までしている。

基本他人に興味のない鈴にまで気を遣わせてしまうとは、俺も落ちてしまったものだ。

いや、別に俺の評判など本来どうでもいいことなのだが、かといって不当な扱いをされることについてはちよつと違うと思うってしまう。

だがそれならいつそ評判にふさわしい行動をしてやろうか。

今の俺ならもう何をしても下がりようなどない気がしてきた。

「と、智希、もういい時間だし一夏も一緒にご飯でも食べよつか？　お腹が空くからよくないことを考えちゃうのよ。そうだ、ここの学食つてすごいんでしょ？　あたし日本は久しぶりだし、日本食食べるの楽しみにしてたんだ」

誤魔化しきった。だから既に俺の目標は達成されている。

だがどこか釈然としないのはなぜなんだろうかと、挙動不審な態度で笑顔を作る鈴を眺めながら思った。

寮の食堂で夕食を一夏と鈴と三人で取った。

鈴のみならず一夏までが俺に優しくなっている。

一夏を呼びに行つたとき部屋の前で俺だけ待たされて、部屋の中で鈴と一夏が何事かを話していた。

そしてしばらくして部屋から出てきたとき、一夏はかなり気まずそうで無理矢理に笑おうとしていた。間違いなく鈴に説教されたのだろうが、どうも自分自身にも最近の俺の扱いについて思い当たる節が多々あつたらしい。

珍しく俺におかずをくれたり、デザートをおごってくれたりとかからさまにも程があつた。

もちろん俺はそんな不自然な態度に突つ込むような野暮な真似はせず、笑顔で素直に感謝を述べる。だが感謝の言葉を口にする度になぜだか一夏の表情に怯えの色が深まり、張り付いた笑顔の鈴が忙しく口を動かしてその場を取り繕おうとしていた。

やがて一夏にとつては悪夢のような夕食が終わりを告げ、その後鈴を部屋までエスコートする。

部屋の前に着いて、鈴はせっかくだから上がっていけどドアを勢いよく開けた。そんなルームメイトもいるだろうにと呆れていたら案の定、中では金髪の子がベッドの上で寝転がってスナック菓子を食べていた。

一夏だけならきつとここで着替えのシーンにでも出くわすのだろうが、まあ俺もいるしこんなものだろう。

ラフな格好をした金髪の子がぼんやりとした顔でこちらを見上げた。そしてみるみるうちにそばかすのついた頬が赤くなっていく。

「えええっ!?!」

「ただいまティナ。するまでもないだろうけど一応紹介しとくわ。織斑一夏に甲斐田智希。あたしの中学時代からの連れよ」

だが鈴は平然と、何も気にすることなく一夏と俺を順に手で示した。

まさかとは思ったがこれは明らかにルームメイトの羞恥心など眼中にない。

自分は小奇麗な格好をして一夏の前に立とうとするのに、他人のことはどうでもいいのか。

ルームメイトなんだから、せめてノックして伝えて服を着たり心の準備をする時間くらい用意してあげるべきだろう。

他人事ながら、鈴の無神経による被害を受けた目の前の女子に同情してしまう。

「ごつちは知らないだろうから紹介しなきゃね。あたしのルームメイト、ティナ・ハミルトンよ。カナダから来てるんだって」

「よ、よろしく……」

知らないどころではなかった。求めて止まなかったと言うと言いがあれだが、その名は正体を探ろうとしていた二組の代表だった。まさか鈴のルームメイトとは。

知り合いの少ない他国の留学生同士だから同室になったのだろうか。

「織斑一夏だ。鈴のことよろしくな。鈴と一緒に部屋だなんてこれからほんと大変だろうけど」

「何よ一夏その言い方は？」

笑顔で挨拶する一夏に文句を言いながらも、鈴は嬉しそうだ。

対する二組の代表はベッドから飛び降りて立ち上がったものの、真っ赤になっていてろくに顔も上げられていない。もちろん一夏の笑顔にやられたからとかそういうことではなく、自身の醜態を見られてしまったという恥ずかしさによるものだ。

Tシャツ短パンに裸足と別に部屋の中ならおかしくもない格好だろうが、完全にだらけた姿をあの織斑一夏に見せてしまうとは、まあご愁傷様としか言えない。もしオルコットがそれをやってしまったとしたら恥ずかしさの余り飛び降り自殺でもしてしまうかもしれない。

鈴や弾の妹蘭を見ているとつくづく思うが、女という生き物はオンとオフの差が著しく大きい。女子しかない場や俺や弾の前ではだ

らけているくせに、一夏が姿を見せると途端に背筋を伸ばして笑顔になる。化けの皮が剥がれた日には一夏からの株が大暴落してしまうと危機感を持つて、普段からきちんできないのかと常々思う。それでも弾が未だに女に対して夢を抱いているのは賞賛に値するが。

ちなみに一夏自身は家で姉のだらけた姿を見飽きているので、実はそういうのは全く気にしなかったりする。

「ほら智希、あんたもさつきと挨拶なさい」

「はいはい。甲斐田智希です。確かに鈴は無神経だけど、ある一点にさえ気をつければいい奴だから大丈夫だよ」

「なんだそれ？」

「何よそれ」

一夏の疑問と鈴の抗議には答えず相手を見る。

数秒して、二組の代表はハツとして顔を上げた。それから一夏を見、鈴を見、最後に俺の目を見て首を何度も縦に振った。

察しはいい。この場で怒り出さないあたり性格も悪くなさそうだ。

結局のところ、自分は一夏とこんなに仲がいいんだぞ、と鈴がルームメイトに自慢をしたいただけの話だ。

そして鈴は一夏が絡むと見境がなくなるとも理解してくれたようだ。

「じゃ、僕らも部屋に戻ろうか」

「え、もしかして今ので通じたのか？ 智希お前たまにすげーな。結局何なんだ？」

「そんなの暴力に決まってるじゃない」

「あつ……だよな！ ほんと気をつけろよ。俺もさつきやられたけどマジでいてーから」

「ちよつと二人とも何言ってるのよ」

俺達の会話を聞いていて、二組代表も俺達の関係性を理解したようだ。

ようやく平静さを取り戻して笑っている。

帰り道、鈴のルームメイトが一夏の対戦相手であることを教えるのと、一夏は本気で驚いて後ろを振り返った。

ようやくこれで騒がしかった一日も終わりかと思っていたが、まだあった。

部屋に戻ると、ドアの前に三人ほど立って俺を待っていた。

一夏を待っていたわけではないと分かるのはそれが指揮班の三人だったからだ。鷹月さん、四十院さんにオルコット。まあオルコットは普通なら一夏だろうが、今日に限ってはその態度から違うことが容易に分かった。

もちろん、鈴の件だ。三人共不安そうに申し訳なきように立っている。

「おっ、どうしたんだみんな？」

「一夏さん……」

「もちろん放課後のことです」

「……」

珍しく、鷹月さんが言葉も発せずしおらしい。

「放課後？」

「鈴のことだよ。殴られたの一夏だよ？」

「ああ、そういやそうだったな」

実害を受けておきながら他人事のような言い方だが、一夏的には悪いことをしようとして罰を受けた程度の認識でしかない。元々友達にスパイをさせることに乗り気でなく、鈴にも殴られた後説教されて納得してしまっている。自分がやるならまだしも、人にはやらせたくないと言うのが織斑一夏という人間だ。

また姉にしばしばやられていることもあり、一夏は自分への暴力に対する耐性が非常に高い。タフと言えば聞こえはいいかもしれないが、つまりは多少殴られたところで堪えないという話だ。

ただし自身についても暴力自体に抵抗が少ないので、本気で怒った時は男女の体格差など関係なく手を出す。三年間で一度しか見たことはないが、大人の女の顔を容赦なく殴って一撃で失神させてしまったこともあった。

とはいえ基本は寛容だし、相手が謝れば根に持たずすぐ許してしま
う甘い人間ではある。

「織斑君はそれでいいのですか……?」

「さすがは一夏さん、素晴らしく寛容な精神をお持ちですわ」

「それでも私のせいよね。本当にごめんなさい……」

「ああ、大丈夫大丈夫。もう痛みも引いたし、鈴も機嫌直ったし」

別に気遣いでもなんでもなく、一夏は本気で気にしていない。別に
鈴に殴られることも初めてではないし、鈴が理由もなしに殴るような
人間ではないことを一夏は理解している。

鷹月さんが顔を少し上げて不安そうに俺を見る。俺は軽く頷いて
一夏が嘘を言っていないことを伝えた。

尚も鷹月さんは信じきれていないようだったが、相手が許すと言っ
ている以上はありがたく受け入れる以外にない。

話を進めることにして、俺は鈴の怒りを収めたことを報告した。

「さすがですね」

「智希は散々やり合ってきてるから鈴のことはよく分かってる。俺的
にはいいタイミングで出てきてくれて助かったよ」

「僕いなかったらあの後一夏はどうなっただろうね?」

「やめろ。想像したくもない」

目の前の三人が相当に凹んでいることもあって、珍しく一夏までが
気を遣っている。

軽口を叩き合う俺達を見て三人の表情も少し緩んだ。

「まあそういうわけだから……あ、一夏、先に風呂入ってて。ちよつと
指揮班の話をするから」

「そうか? じゃあお先に」

軽く手を上げて、一夏が部屋の中に入っていった。

一夏がいると話せないことも言っておかなければならない。
とりあえず俺は鷹月さんへの罰を説明した。

鷹月さんが鈴への嫉妬の余り暴走したというストーリーを作った
ということだ。

「甲斐田さんは本当に人が悪いお方ですわ」

「最近増々進化しているようにさえ見えますね」

「本当に屈辱だわ……だけど、今の私は何も言える立場じゃない。甘んじて、その役割、受け入れさせてもらいます……」

あつさりと受け入れてしまった。

正直なところもつと嫌がるかと思っていたのだが。

少々物足りない気がしないでもないが、素直に聞いてくれるのならもう一言くらい言っておこうか。

「あとさ、一組二組とか置いておいて鈴の友達として言わせてもらうけど、再会した初日からそういうことを一夏に言わせるのはさすがにないよ。正直なところ僕も似たようなことは考えてたけど、今日そこまでするつもりはなかった」

「ごめんなさい……これはまたとない機会だから逃してはいけないと思つて……」

「むしろ事情を知らないうちに誤魔化してしまえばと……」

「一夏さんに会えて喜んでいて機嫌がいいなら受け入れやすいのではないかと……」

幸運の女神は前髪しかないからチャンスを逃すな、などと言ったりするが、これでは女神に飛びついたらその場で殴り返されたようなものだ。

せめて鈴の知り合いである俺に相談してからにして欲しかった。ひとまず送り出すだけ送り出しておいて、後から俺が邪魔にでも入れば何かはできただろう。

とはいえ後からたればを言つても、終わってしまったことはもはやどうしようもない。その場になかった時点で俺にできることはなかった。もしかしたら鈴は俺がいなくなったのを確認してから教室に入ってきていたかもしれないし。

結局のところ、俺が組織の統制を取れていない、手綱を握れていないということなのだ。

「うん、分かった。僕もその場にはいなかったし、もう終わったことをどうこう言つても始まらない。同じ過ちは繰り返さないということ。今後は焦らず無理せず四人で確認しながらやっつていこう。無事新

聞部の号外も出たし、僕らが有利なのは変わらないんだ」

「うん……」

「仰る通りです」

「肝に銘じますわ」

「それに完全に失敗に終わってしまったわけじゃない。新たに得られた情報だってある」

そして俺は二組の代表が鈴のルームメイトであることを説明した。鈴繋がりがある以上ある程度は二組やその代表の情報を得ることもできるだろう。さすがに味方させるのはもう無理だろうけれど。

「つまり私は余計なことをしただけじゃない……」

「こうなってしまうと本当に悔しいですね」

「なんと浅はかな行為をしてしまったのでしようか……」

希望を持たせるつもりが逆に凹ませてしまった。

こういうのは本当に難しい。

「でも二組の代表と面識を作れた。今後は僕が情報を取りに行けるから大丈夫だよ。一夏を鈴にあてがってにおいて、雑談交じりに二組の代表からいろいろ聞いてくる」

「それはそれでわたくし個人としては非常に憤りを感じますわ……！」

しまった、オルコットの前で言うことではなかった。

人間関係まで考慮しなければならぬとは本当に面倒だ。

「あ、言っておくけど僕は鈴のことは応援してないから。それに三年かけても何もできなかった人間が今さらどうにかできるとも思っていないし」

「そうなのですか？」

「意外。誰でもいいかと思ってた」

「興味本位だけではなかったのですね」

油断するとこの連中は俺に毒を吐く。

今の今まで凹んでいたくせに、現金にも程がある。

「そうだよ。一夏に合っていない人にどうこう言うほど僕も暇じゃない」

「まあ」

オルコットが嬉しそうに目を輝かせて、鷹月さんと四十院さんがオルコットの機嫌を取ったことを理解した。

「ねーねーねー、ちよつといい？」

振り返って、ついに来たと思った。

「君最近よく一人で歩いてるの見るんだけど、一人で怖くないのー？」
「どうして怖いって思うの？」

「そんなの当たり前よー。女子の群れの中に男子一人とか、肩身狭いってモンじゃないでしょ？」

俺に声をかけてきたのは日本人ではなかった。髪の色は茶髪、背が高く俺と同じくらい、ヨーロッパ系だ。クラスメイトではイギリス人のオルコットよりスペイン人のリアーデさんに近い。きっと北ではなく南の方だろう。あるいはヨーロッパ以外のどこか。

「別に何かされるわけでもないし。それどころか誰も話しかけてこないくらいだよ」

「だからってちよつと油断し過ぎじゃない？ 世にも珍しい男性IS操縦者なんだから、もつと自分のこと心配したら？」

「でもここはIS学園だし、変な人は入って来られないからむしろ安心なくらいだと思うけど」

話す内容に反して、目の前の女子は笑っている。別に俺のことを本気で心配しているわけではなく、話のつかかりというところなのだろう。

胸元のリボンは俺と同じ青色、一年生だ。

「ふーん。確かにそんなバカなことするようなのはここには合格できないんだらうけど、でも君あんまりいい目で見られてないよ」

「それはわざわざご忠告をありがとう。僕からしたら一人でいるのに何もしてこないって天国みたいなものだから。僕の方から余計なことをするつもりはないし、大丈夫だよ」

「男なのに度胸あるんだねー。もしかしてもう一人の方もそうなの

？」

「どうだろう。一夏はいつも女子に囲まれてるし、そもそも一人になる機会ってあんまりないんじゃないかな？」

予想通り、一夏の話振ってきた。

さてこれは一夏への個人的な興味か。それとも。

「ああー、いつもすごいよねー。人ばかりできてるからすぐ分かるし、いつ見ても女子に囲まれてるなあ。日本の男子ってみんなああいう感じなの？」

「僕を見ればそうじゃないって分かると思うけど。どこから来たの？」

「愛と情熱の国、イタリアよ。アニータ・ベッティ。一年の三組。よろしくね」

「二組の甲斐田智樹です。知ってると思うけどもちろん日本出身」

大物だ、大物が釣れた。

見たか指揮班の連中よ、散々俺のことを馬鹿にしてくれたが十分な成果は上がったぞ。

目の前にいるのは三組代表、イタリアの代表候補生だ。

「じゃあやっぱり織斑先生の弟だから？」

「姉が姉だし、それも無いとは言えないんじゃないかな」

自己紹介もそこそこに、三組代表はすぐ一夏の話に戻した。

俺に話しかけた目的は間違いなく一夏だ。

さあお前が気になることは何だ。

「ISを動かした男子がああ織斑先生の家族だなんて、きつと何かあるんだろなああって思っちゃうね。もしかして君も親戚とか？」

「残念だけど、一切血は繋がってないよ。それに僕はISを動かせると言っても本当に動かせるだけだし」

「それならIS開発者の方？ 一組にいるんだよね、篠ノ之博士の妹が？」

やけに詳しいな。もしかしてゴシップ好き系だろうか。

「確かに篠ノ之さんはクラスにいるけど、僕はそっちでもないよ。全くの赤の他人」

「そうなんだ。やっぱり不思議な話なのかな。自分でもどうしてISを動かせるか分からないんだよね?」

「うん」

このまま踏み込んでくるかと思いきや、そうでもなかった。

単純に昨日出た新聞部の記事を読んで興味を持った程度だったのだろうか。

にしては相手が相手なので気にかかるところでもあるが。

「うーん……初対面でこんなこと聞くと変な奴って思われるかもしれないけど、君大丈夫?」

「何が?」

「IS学園の新聞を読んだんだけど、もしかしてクラスに溶け込めてないんじゃないかなと思って」

まさかの俺に対するぼっち疑惑だった。

確かに記事では俺はほとんど喋っていないし、一夏がこれでもかというくらいに推されていたが。

「最近よく一人でいるみたいだし、放課後は毎日一人で職員室に行ってるそうだし、IS学園の生徒会長もよく様子を見に来てるって聞いたし」

「ああ、そういうこと。クラスから浮いているとか別にそういうことはないよ」

言うてから、別の意味で俺は浮いているんじゃないだろうかという考えに思い当たってしまった。

クラスメイト達は基本俺のことをぞんざいに扱うくせに、一方で俺の発言に怯えたりしている。

どうも整備班パイロット班の連中は個別会議初日にあつた俺からの制裁が相当に堪えたらしい。

大勢の前で辱めを受けたという俺の精神的苦痛を考えれば当然の処置だと思ったのだが。

「あつ、そんな顔をするってことはやっぱりそうなんだ。生徒会長もそうだけど三年生がよく君に声をかけて気を遣ってるって聞いて、もしかしたらそうじゃないかって思って」

「いや、それは全然違うことだと」

「いいよ、無理しなくても。上級生は今度のリーグマッチに一切協力を行わないって話知ってるよね？　きっと何か事件があつてそうになったんだろうけど、君と織斑先生の弟君との間でいざこざがあつて三年生が激怒したつてみんな言ってる。当たらずとも遠からずでしよ？」

遠からずどころではない。

もはや水平線の彼方までぶっ飛んでいつてしまっている。

俺と一夏の間不仲説まで出ているとは、もう三年生が聞いたら間違ひなく大爆笑だ。

「そして悪いのは向こうなんだよね？　だから三年生は怒つて一組の代表になつた織斑弟にリーグマッチで勝たせまいと声を上げた。でもそれで君はますます居場所がなくなつて、こうやって一人にいる」
「僕はもう何をどう言つていいか分からないよ……」

「辛かつたんだね。自分で選んだ場所じゃないし、馴染めないと本当に大変だよ。でもクラスだけが居場所じゃないよ。視野を狭くしてしまつて自分から不幸の道を歩むことはないから」

いや、むしろこれはある意味理想的な展開なのかもしれない。

俺と一夏の不仲説などというゴシップが出回つてその話題で占められれば、リーグマッチのことは関心を持たれず隅に追いやられてしまふだろう。

「だからさ、こうやって一人でいるくらいなら三組においで。あ、言い忘れたけど私は三組の代表、クラスのみんなには話をつけておくから。大丈夫、うちのクラスに君の敵なんていない」

「はあ……」

俺にとつて全く悪い話ではない。

向こうから来いと言つてくれるのなら喜んで三組の様子を探らせてもらおうと思う。

とはいえ今現在一夏が悪役にされているのは非常に気に喰わないので、三組の連中を使つてもう少しマイルドな、不幸な行き違いがあつた的な話に書き換えてしまわなければならない。

「それは一度うちのクラスに来てみれば分かるよ。と言っても明日から休みだった。じゃあ居場所なかったら私達と適当に遊ぼう。部屋にこもってじっとしてるよりは全然ましだと思うし」

「まあ、気が向いたら」

「それでいいよ。別に無理させたいわけじゃ全然ないし。でも休み中はいい天気みたいだし、外に出た方が気分は晴れると思うな」

「うん、ちよつと考えてみる」

即答はしない。

指揮班の連中に言った手前、俺も勝手な行動は控えようと思う。

今こうやってふらふら一人で出歩いているのはどうなんだという話ではあるけれど。

「それじゃ、明日の昼前にでも君の部屋までちよつと様子を見に行かせてもらおかな？ もちろん無理強いはしないよ」

「じゃあまたその時に」

「うん、また明日」

笑顔で手を振って、三組代表は歩いて行った。

どうやら二組代表に続いて三組の代表も俺が担当になるようだ。

とりあえずは指揮班の三人と話をして今後どうしていくか決めよう。

自分の考えを纏めながら、俺は自分の教室へと足を向けた。

教室まで戻って扉を開けて、中が重苦しい雰囲気に含まれているのが分かった。

いつもは実に騒がしいクラスだ。相川さん達が一夏を取り囲んで黄色い声を上げていたり、何かを思いついた谷本さんが突然大声を出して鷹月さんに説教されていたり、布仏さんが爆笑していたりと騒音には事欠かない。

だが今教室内を支配しているのは無音、とまでは行かなくとも、静音、くらいだろうか。

教室に入ってきた俺を見る目が事態の深刻さを物語っている。

さて今度は何があった。

「甲斐田君、扉閉めて」

言いながら、険しい顔をした鷹月さんが手招きして呼んでいる。クラスメイト達は会話も止めて俺を見ている。

俺は言われた通り扉を閉め、鷹月さんの前まで足を進めた。

「甲斐田君、ついにリーグマッチの価値に気づいたクラスが出た」

「なるほど。やっぱり新聞部の件は失敗だったね」

「それはもう分かってたし仕方ない。それで気づいたのはよりよつて一番情報のない三組よ」

「は?」

思わず聞き返してしまった。

「気づいたかもしれないじゃないやなくてももう確定よ。三組の人と部活が同じなうちのクラスの子がいろいろ聞かれたりとか、訓練機の予約の時間に出くわしたとか、アリーナで三組の集団が私達を観察してたとか、決定的なのはリーグマッチの詳細が書かれたあの紙を持ってる人がいた。偶然かもという希望的観測はもうできないわ」

「うん」

もう色々合点がいつてきた。

不思議でも何でもなかった。

「個人がばらばらに動いてるんじゃないやなくて、集団としてきちんと行動してる。私達と同じね」

「そうだね」

今で誰も話しかけてこなかったのに、急に話しかけてきたのが三組の代表だなんて、火を見るよりも明らかではないか。

五組の代表がああだったので、俺としてもどこか油断していたんだろう。

「このことから三組の代表はそれなりのリーダーシップを發揮していると思われるわ。私達が想定していた動きとかなりの部分がリンクしている。私達がきちんと考えた上で出した動きの話だから、行き当たりばったりでやったことでは決してない」

「だらうね」

人間考えるのは似たようなことなのだ。

俺が鈴のことをスパイにできそうだと考えたように、三組の代表だって俺をスパイにできないものかと考えるのだ。

外から見える俺の姿はさぞかし扱いやすいものに見えたことだろう。

「でも三組の代表本人が何をしているかはまだ分からないわ。そもそも訓練機が手に入らないでしょうし、周囲にブレーンがいるんじゃないかと自分の頭で考えて指示をしていくタイプなのかもしれない」

「どうだろうね」

三組の代表なら既に重要な役目を果たしている。

俺という誰も話しかけられないような危険な対象にたった一人で接触しているのだ。

度胸もかなりあるだろう。

「甲斐田君」

「なに？」

「どうしてさつきからそんなに嬉しそうな？」

指摘されて、俺は自分が笑っていたことに気づいた。

それは利用するつもりが利用されそうになっていたことへの自嘲からだろうか。それともクラスの中と外で俺の印象に大きなギャップがあることへのおかしさだろうか。

いや、きつとそういう次元のものではない。

「そうだね。いよいよ始まるんだなあと思って」

「何が？」

「もちろんリーグマッチのことだけど」

「は？ 本番まであと十日あるんだけど？」

「そういうことじゃなくて……ここからが本当の始まりってことかな」

俺達が相手をするのはプログラミングされた行動しかしないロボットではない。

自分の意思を持って行動する人間だ。そしてその人間の集団だ。

自分がアクションして、相手がリアクションして、また自分がその

リアクションをして、それが延々と続く。それはキャッチボールかもしれないし、豪速球の投げ合いかもしれない。

重要なのはどちらも意思、意図を持ってやっているということだ。利害がぶつかり合ったらお互いに相手を邪魔しようとするだろうし、自分の目的を達成しようとするだろう。

最終的にどちらが相手を上回れるのか。結局はそういう勝負だ。

「どういふこと?」

「別に悲観するようなことは何もないってこと。僕らは本番までやるべきことをやればいいし、邪魔してきたら排除すればいいし、たまにはこつちからちよっかいをかけてもいい。目的は最初からはつきりしてる。一夏が本番で勝つことだ。そして僕らは三組よりも二週間分も先を行っている。相手の想定だつてしてるし、怖がるようなことは何もない」

「またそれは楽観的というか、相手のこと何も分かってないのに適当な話ね……」

そうは口で言いながら、鷹月さんの表情が和らいだ。周囲の雰囲気飲まれていたクラスメイト達も、苦笑しつつさっきまでの深刻そうな顔はない。

前々から予想されていた事態で、そもそも深刻がるようは話では全くないのだ。

「バレたんならもういつそ余裕を見せつけていこうか。そんなことも知らないの? 的な話をして相手の焦りを誘ってみるとか」

「あのね、言っておくけどこつちだつてまだ織斑君はイグニッション・ブーストを使えてないんだからね。昨日は練習さえできてないんだし、油断は禁物よ」

「大丈夫、やると言ったからにはきつとやるよ。ねえ一夏?」

「俺!?! いや、それは確かに言つたけどさあ……」

急に振られて困った顔になる一夏を見て、誰かが笑い出した。

そして笑いが教室中に伝染していく。

深刻な顔をしていた方がいいならあのままでもいいが、この脳天気な連中にそんなのは全く似合わない。

それに谷本さんが一夏に言ったように、楽しんでやった方が精神的にもいいのだ。

問題はそこら中に転がっていて分からないことも山とある。

だが一発逆転の秘技がない以上は一つ一つ潰していくしかない。

ならば全部笑って蹴飛ばしてしまえ。

そうだ、今しがた俺にあつたことを話せばさらに雰囲気は和らぐだろう。

そう思つて三組代表との会話を話したところ、なぜかクラスメイト達は揃つて深いため息を吐いた。

17. このご時世に女が男へ求めるものは優しさと癒やしだ。

このご時世に女が男へ求めるものは優しさと癒やしだ。

笑顔で話を聞いてくれて、いたわってくれて、そのままの自分を受け入れてくれる。

テレビや雑誌のよるとそういう姿が女にとっての男の理想像だそうだ。

それならペットでも飼えばいいのではないかと思ったが、連中は世話をしたいのではなく自分の世話をしてもらいたいらしい。

結婚相手には家で家事をしてもらって仕事で疲れた自分の体を癒してもらうのが一番だ、とその手の本には書いてあった。

そこまでくるともはや男である必要すらないのではないかと思うし、実際に国によつては同性婚で同じような形態を作っている女もいる。何しろ男の数は女の三分の一しかないのだから、相手が男であることにこだわらないのであれば、勝手知ったる女の方がむしろやりやすいのだろう。

子供についても今や人工授精が半分以上の割合を占めているので、金があればどうにかできる。このあたりは男性不要論の論拠に出てくるところでもある。

だがやはり男と結婚をする方が女にとってはステータスになるようだ。自分が幸せになるのはもちろんだが、他人から認められ羨ましがられるような結婚生活でありたいとも思いうらしい。

かくしてテレビや雑誌やネットでは結婚とはどうあるべきかがいつも熱く語られている。

とはいえ、その対象となる肝心の男が女にとってそんな都合のいい存在であるかと言えば当然違う。そんな一方的に尽くせなどと言われてはさすがにちよつと待てと男の側も言うだろう。

そして数の関係からすれば一見男の意見の方が通りそうにも見える。なぜなら結婚が一对一の関係になる以上、選択肢は数の少ない側の側にあるはずだからだ。

だがそうはならなかった。いつだって数の多い方に主導権はある。女達が出した結論は、それなら男全体を根っこから教育してしまえばいい、だった。

「なんだ、話してみたら意外と普通だね」

しばらく当たり障りのない雑談をして、やがて一年三組の代表はそう感想をこぼした。

今俺は食堂で買った弁当を持って校舎の屋上にいる。俺の周囲には三組の女子が四人。

さすがに大勢で取り囲むと俺が萎縮するとでも思ったのだろう。少数精鋭、つまり男子に偏見を持っていないであろうクラスメイト達を引き連れて、三組の代表は俺の部屋にやってきた。

「そんなに普通じゃないように見えてた？」

「そういう意味じゃないよ。もつと精神的によくはない状態かもしれないと思ってたから、普通の状態でよかったって安心したってこと」

「だから普通も何も特に問題があるわけでもないんだけど」

「でも問題がなければ一人で出歩いたりしないでしょ？」

「こら、そういう言い方はないわよ。ごめんね、別に深い意味があるわけじゃないから。私達を警戒しちゃうのは当然だけど、みんな甲斐田君を心配して言ってるだけの話だからね」

腫れ物に触るようにとまではいかないが、相当な気の遣われようだ。

俺を油断させるためにそういう設定にしているのかもしれないとも思っていたが、どうも噂は噂として存在するらしい。

その元凶は間違いなく三年の先輩達だが、そこから憶測が憶測を呼んでおかしな方向に行ってしまったのだろう。

きつと先輩達は噂について聞かれても言葉を濁してどうとでも取れるような発言をしたのに違いない。かき回して外から眺めて楽し

むなど指揮科とは本当に性格の悪い集団だ。

協力をしないではなく一切指一本も介入をしないとでも約束しておけばよかった。

「それはもちろん分かってるよ。そうじゃなかったらここまでしてくれる人なんていないから。改めて言うけど僕なんかのためにわざわざありがとう」

「だめ、そういうのはよくないわよ。僕なんかとか言ったりして自分を価値のない人間みたいに言うのは」

「そうそう。マイナスな言葉は気分までそうさせちゃうからね。プラス思考プラス思考！」

「きちんと私達の気持ちを分かった上で感謝の言葉が口に出せるんだから、全然性格は悪くないというか、むしろかなりいいと思うな」

当然気を遣われての話ではあるが、性格がいいなどと言われたのはいつ以来だろうか。もしかしたら猫を被っていた中一の頃にまで遡る必要があるかもしれない。

もちろんのこと俺は別に自分の性格がいいとは少しも思っていない。だがこのところひどい扱いばかり受けていた俺としては、人間鞭ばかりでは気が滅入るものだなと一人しみじみとしてしまった。

「うん、ありがとう。そう言ってくれると嬉しいです」

「それぞれ！ その笑顔！ 辛気くさい顔をしてたらやっぱり話しかけづらかったりするの。いつも笑顔とまではいかないけど、もうちよつと表情は柔らかくしてた方がいいと思う」

「廊下を男子一人で歩くのは辛かったでしょ。顔が緊張してたし、何かあったんだろうなとは思ってもみんな踏み込むまではいけなかったんだ。ごめんね」

「そんなに変だった？」

「変ていうわけじゃないけど、ちよつと話しかけづらいのはあったかな。だからアニータも校内新聞を読んで間違いないと思うまでは声をかけられなかったわけだし」

もしかして誰にも話しかけられなかったのは俺の方にも問題があったのだろうかと思っただが、最後の発言を聞くに三組代表がいきな

り声をかけてきた理由付けにも見える。

俺が怪しまないようにと気を配っているのかもしれないが、まだ打算と気遣いの差が見えてこない。もう少し結論は出さず様子を見たほうがよさそうだ。

「だから教室の中にいるよりも外にいた方がまだマシなのかなって思ったんだけど、やっぱり教室は居づらい？」

「別に居づらいってほどでもないけど」

「でも外から見ると織斑君と甲斐田君の扱いに違いがあり過ぎると思うのよ。甲斐田君のクラスってみんな織斑君しか見てなくない？」

「アイドルみたいだね」

「にしてはいくらなんでもあからさまっていうか、あれはちよつとないなって思う」

なるほど、一夏のことを知らなければ不自然な光景に見えてしまうのかもしれない。

確かに不自然だと言われればその通りなのだが、それは織斑一夏が特別な人間だという確たる事実でもある。

「ああ、あれは僕がどうこうって話じゃないよ。一夏の周りは昔からいつもあんな感じだし、要するに女子にすごくモテるってこと」

「いや、それにしておかしくない？ だってあれクラスのほとんどの女子がそういう態度っていうか、そこまで？ って思うんだけど」

「織斑先生の弟だからっていうのとはまた違うよね？」

「確にかっこいいとは思うけど、テレビとか見ればもっとかっこいい人はいっぱいいるし」

他のクラスの女子が一夏の元へやってこないのはどうしてだろうと不思議だったが、外から見ただけではまだ無理してアタックしに行くところにまでいかないらしい。

てつきりクラスの女子が常に一夏を囲んでいるせいだと思っていたが、それ以前の話だったようだ。

中学時代は男同士でつるんでいたのと番犬鈴がいたせいで、一夏に近づくことからそれなりの勇気を必要としていた。だがそれでも一夏に寄ってこようとする女子は後を絶たなかった。

だからIS学園に入学してからはそれらが取っ払われ、きつとすごいことになるだろうと俺は予想していたのだが、実際はクラスの中でだけだった。

高校ともなれば分別が出てくるのか、IS学園の生徒ともなればそこまで勢い任せにはならないのか。

ただその代わりというわけではないのだろうが、その分クラスの中がかなりディープな状況になってしまっている。まさかライバル同士で共同戦線を組むとは思わなかった。

もちろん自分自身に抜け駆けする気はあるし、他人に抜け駆けさせても一氣に一夏を持っていかれることはないしと踏んでいるのだろう。だが一人の男を巡って争うはずの女達が揃って真剣に一夏対策会議をしているのを見ると、どこをどうしたらそういう結果になったんだろうかと首をひねって考えてもよく分からなかった。

「そうだね。もし一夏が三組にいたとしたら、少なくとも三組の半分は一夏に心奪われるんじゃないかな。きつとみんな話したことないから分からないんだろうけど、一緒にいたらそれは理解できると思う」

「そんなにすごい!?」

「じゃあ校内新聞に書かれてたこともあながち嘘じゃなかった?」

「まさかそんなのありえないよねってみんな話してたんだけど……」

そういうことだったか。

どうして俺達の嘘がバレたのかと疑問だったが、そもそも一夏の置かれている状況が信じられなかったからだったのか。

俺の存在から気づかれたのであれば、目の前の連中は今のような態度はまず取れない。もはや上級生には黒幕的存在の俺を弱者扱いするなど、無防備で火の中に突っ込むような自殺行為だ。

きつと三組は俺個人の作業ではなくクラス全体での行為だと怪しんで考えた結果、リーグマッチのことに辿り着いたのだろう。

そして自分達よりも先に気づいた一組を警戒し、ぼっち疑惑が出ていた俺に目をつけた、というところだろうか。

とはいえ、全てにおいて俺を上回っていて俺の思考さえも読み切っ

て全員が演技しているという可能性もなくはないので、まだ安心はできない。

「見てたのなら分かると思うけど、今やもう一組の三分の二は一夏の虜だよ。確かに信じられないことかもしれないけど、目の前に事実はあるから」

「それはまた凄まじい……」

「でも自分もそうなるかって言うと、あんまりそうは思えないのよね。直接話したことはないし校内新聞を読んだ限りだけど、そこまで頭良さそうでもないから」

「素直そうだし育てがいはあるっていうか、世間一般的な理想の男性になれる素質はあるんだろうけど、私自身はそういうのは求めてないしねえ」

疑ったくせに、この連中は意外と記事をそのまま鵜呑みにしている。

もちろん、取材のときは意図してそういう風に印象操作したつもりだ。何しろ普段の一夏の言動を本人から切り離して文字だけにしてしまうと、女子の支持はとでも得られないからだ。

かっこよくて優しく素直、最後の素直という部分が重要である。俺のようなひねくれ者は基本好かれない。

惚れているのを抜きにしても、クラスのみんなが助けたいと思えるような人間として一夏を見せたかった。

「一夏は性格も悪くないよ。一度話してみればそれは分かると思う」

「いや、そういうことじゃなくて、ただ単に私の好みじゃないってだけ。甲斐田君の言う通りなら大抵の女子は好きになれるんだと思うよ。実際そうみたいだし」

「だよね。そういう人が好まれるのは分かるけど、私が求めるのはもうちょっと知的な人というか、ただ頷いてるだけじゃなくてしっかり会話についてこられる人かな?」

「そうそう。優しさだけじゃやっぱ物足りないよね」

それを聞いて、今この場にいる三組のクラス代表以外の三人がどういう人間か理解した。おそらく一組において指揮班にあたる立場の

人間だ。

理由は明確だ。とても一夏には惚れそうもない連中だからだ。

入学して一ヶ月経って、一組は一夏に落とされる人間はだいたい落とされていた。パイロット科志望の連中は一緒に放課後の訓練を行つた結果、見事に例外なく落ちた。

そして一方落ちなかった人間は明確だった。指揮班の二人と整備班の半分だ。

勝つ望みがなさそうだから最初から諦めているのかと思つたが、それとなく聞いてみると完全に自分の好みの守備範囲外のようなのだ。そもそも男自体に興味がないのかとも思つたが、そういうわけではないらしい。将来男と結婚をしたいかと聞いたらできるものならしたいと全員が答えた。

中学時代男に興味のない女子は普通にいたので、このあたりはクラス編成自体に作為を感じる。まあ男子に反感を持つ人間がクラスにいない時点でまず確定だろう。ちなみに入学初日のオルコットは祖国を離れ気合が入り過ぎた結果虚勢を張つていただけだった。

そして一夏に興味ない連中の返答には頭の良さとか回転の速さとか知性などという単語が飛び交い、確かにそれは一夏には弱い要素ではあつた。

知性を求めるから惚れないと言つてしまうと一夏が馬鹿なように聞こえてしまうが、要するに相手に対する要求水準が非常に高いという話だ。まだサンプルは少ないが、目の前の連中も含めて体を動かすよりも頭を動かす方が好きな人間にはそういう傾向があるように見受けられた。

なお、布仏さんや谷本さんといった特殊な人間達は回答が理解不能で全く参考にならなかつたので、サンプルからは除外している。

「まあまあ、私達の好みなんてどうでもよくて、今は甲斐田君の話。つまり今出回っている噂は真実とは違うわけなんだね？ 別に織斑君が悪いわけではない？」

「それはもちろん。むしろ一夏は曲がつたことが嫌いな人間だから」「別に無理しなくてもいいよ。」

「僕のことをどこまで知ってるのか分からないけど、一夏とは中学のときから一緒だよ？　そういう人間ならとつくの昔に離れてる」

「ごめん、とても失礼なことを言っちゃったね」

これだけははつきりと言っておかなければならない。

俺はリーグマツチを一夏のIS学園デビュー戦として捉えている。

だから始まる前から一夏に悪評が立って最初からアウェー状態などそのままにしておけるものか。

一夏ならそれくらい簡単にひっくり返してくれるのかもしれないが、まだ確証もない状態でわざわざ博打を打つような場面ではない。

「つまり甲斐田君にも織斑君にも互いに悪い感情はない？」

「もちろん。中学時代はいつも一緒に行動してたし。それに今だって部屋が一緒なんだから毎日話はしてる」

「ということは……これはきつと一組の女子の仕業だね」

「は？」

「その人達は甲斐田君を織斑君から引き離そうとしている」

「それはどうして？」

「だって甲斐田君がいつも織斑君と一緒にいると邪魔だから。あ、気を悪くしないでね。大勢のライバルを出し抜く以前に織斑君の側には常に甲斐田君がいる。男子が二人しかいないんだからつるむのは当然と言えば当然なんだけど、それじゃ困ると思った一組の女子はまず共同して甲斐田君を遠ざけることから始めた」

俺としてはライバル達を出し抜けるものなら出し抜いてみろで、一組の女子達は共同戦線まで張っているのだが、さすがに実情を知らなければそこまで読むのは無理だろう。

むしろよくこの場で苦しくともその論理を組み上げたなと思う。

実のところ相手が悩むようなら俺は似たような話をするつもりだった。何しろ俺寄りの立場を取る以上三組の連中は俺を悪者にするきない。そして俺は一夏を悪者にするつもりはない。ならば誰を悪役にするかと言えばもう一組の女子連中しかないのだ。

リーグマツチの価値を知る者同士としてライバル関係にあるので、クラス同士は仲良くできない。

だから一組の女子を悪者にして俺に同情する立場を取り、気を許した俺から情報を吸い上げようとするのが手っ取り早いと考えるだろう、と俺は結論づけていた。

昨日の話からして、三組が一夏ごと一組を悪者にして俺を取り込もうとしているのは感じている。

だが俺としては一夏を悪者にしたくないし、かといって真実を話すつもりもないので、落とし所として一夏だけ切り離すことにしたのだ。

そして一夏は悪くないという俺の意思を察して向こうからそういう方向にしてくれたのは好都合だった。

なぜなら俺がこのまま馬鹿でいいからだ。

「そうかな？ クラスの人は僕に嫌な感情を出してきてるようには見えないし、一夏もみんなのことを悪く言ったりしないし、考え過ぎじゃないかな？」

「ううん、人を疑いたくない気持ちは分かるけど、きちんと自分の立場を考えてみようよ。最近教室の中にはいないのはどうして？」

「それは、なんかみんな最近忙しそうだし、邪魔だからいない方がいいかなって」

「忙しそう、ね。じゃあ放課後職員室に行ってるのは？」

「それは一夏の代わり。クラス代表の仕事みたいなんだけど、今一夏はリーグマッチに向けての訓練で忙しいから代わりにお願いってクラスの人に頼まれて」

きつと気になるであろうキーワードを出してみたら案の定、目の前の四人の目が光った。

突っ込んで聞きたくて仕方ないだろうが、この程度でお前らは俺の信頼を得たとは思っていないだろう？

果たしてまだ俺からの情報収集を始められる段階ではないと自重できるか。

「それって」

「まあまあ、甲斐田君、頼まれたからって素直にはいいって聞くことはないのよ？ 甲斐田君にだって都合はあるでしょうっ。」

「でも僕は別に部活とかやるつもりもないし、放課後は時間あるから。今みんなリーグマツチに向けていろいろやってみたいだし、クラスのために協力してって言われたら当然協力はすべきだよな?」

「そうだね。でも無理してまでやることではないからね」

一人危ないのがいたがすぐ代表が間に入ってかろうじてセーフというところだろうか。

それにしても三組の代表は俺の機嫌を損ねまいと徹底している。

俺から一組の情報を聞き出さたくて仕方ないだろうに、物事の順番を間違えるような愚かな真似はしないようだ。

餌が見えたら何も考えず全力で飛びつく一組の指揮班連中とは大違いだ。

「うん。嫌なときは嫌だっってはつきり言うことにするよ。ありがとう」

「どういたしました。今のところ甲斐田君自身は大丈夫みたいだね。外から見たらちよつとひどいなって思う環境だけだよ」

「そんなことないよ。みんないい人だよ。だって自分には何の得もないのに、一夏のために一生懸命がんばってくれてるんだ。きっと恋の力だろうけど、そういうのはとても悪く言えないよ」

「えっ!?!」

そんな優しい代表さんにプレゼント。

「どうかした?」

「甲斐田君……何も聞かされてないの?」

「聞かされてないって何が?」

「その……リーグマツチについて」

「クラス代表同士が模擬戦をやるんだよね? 一夏を代表にしてくれて、その上一夏が活躍できるように協力までしてくれるんだなんて、一夏もクラスのみんなには頭が上がりないって言ってたよ」

俺も一夏も何も聞かされておらず、ただ言われるがままになっていく。

一組の女子は悪役として十分魅力的ではないだろうか。

そうすることを話したところ、クラスメイト連中はものすごく嫌な

顔をした。

だが俺を納得させられる代案を出せなかったし、終わった後情報解禁となつて俺の存在が知らしめられると聞いて、全部俺のせいでできるということだからうじて受け入れた。

もちろんそれは俺がぞんざいな扱いをされていたことへの意趣返しなどという小さな個人的な理由によるものではない。噂をうまく利用し相手の目をそらすための最善の手段だからである。決して他人に理不尽な扱いをしたことへの因果応報だなどとは少しも思っていない。他人から嫌な目で見られるのがどういふことか身を持って思い知れなどとはみじんも考えてはいないのだ。

「そういうことだったんだ……」

「か、甲斐田君……もしかして三年生とのいざこざを起こしたのって、一組の女子？」

「ああ、なんかあつたみたいだね。詳しいことは僕も一夏も知らないけど、一夏をクラスの代表にするにあたつていろいろ協力してもらつたらしいよ。そのときに何かあつたらしいことは聞いたけど、まさか噂にまでなつてるなんてね」

「だから真実を知つてる三年生や生徒会長は甲斐田君達のことを気にかけていたんだ……」

三年生は聞いたら大爆笑だろうしデマを流して遊んでいくくらいだから文句は言わせない。協定のせいで最近見えない生徒会長は本意だろうが、それは終わった後謝ることにしよう。

「そんな、真実だなんて言い方はよくないよ。ちよつとした行き違い程度でそこまで大げさにするような話でもないから。別に僕も一夏も嫌な思いはしてないし、それどころか一夏はみんなに感謝してるくらいだ。だいたいもう二週間も一夏の訓練に付き合ってくれてるんだよ。いい加減な気持ちじゃとてもそんなことはできない」

「二週間!?!」

「そんなにやつてるの!?!」

「織斑君を中心にいろんな部活を見て回つて遊んでたつて聞いてたけど……」

部活見学ツアーまで知っているとはやっぱり詳しいな。

情報収集の技術については俺達より上なのかもしれない。もちろん一夏のいる一組は目立つというのはあるが、こちらは三組の情報を何も得られていないのだから。

ともあれ、目的の一つである一組が二週間先を行っていることは伝えられた。これで焦ってもらえれば言うことはない。

果たしてその後は三組の四人に落ち着きがなくなり、昼食を食べた後は挨拶もそこそこに帰っていった。

その後姿を見ながら俺は緒戦の勝利に満足していたが、しばらくして重大な事実に気づいてしまった。

一組のことばかり話していて、俺自身は三組の情報をほとんど得られていない。

とりあえず今何より俺が考えなければならぬのは、指揮班やクラスメイト達に対する釈明の言葉のようだった。

IS学園はその性質上、外からは隔離された施設だ。

敷地内の寮に住んでいる生徒や教師達は学園内のほとんどの場所を行き来できる。だがそれ以外の敷地内で働いている大人達はその立場によつて入ることのできるエリアが決まっているそうだ。事務室などにいる人達は校舎内は行き来できても整備室のような技術的エリアには入れないし、逆にIS整備の人達は校舎内には基本入れない。

まあ実際のところはそこまで厳しいことは言われないようだが、決まりとしては細かい規定があるとのことである。

一ヶ月もの間織斑千冬第二秘書として働くうち、俺はお使いまで務めるようになっていた。

事務室に書類を届けたり、整備室に荷物持ちとして連れて行かれたり、施設管理の人にカードキーを借りに行ったりしている。そうしてIS学園ではいろんな人が働いていることを知った。

傍目にはいいようにこき使われているし、実際そういう部分もあ

る。だがそうやっているうちに、ただそれだけではないのが俺にも分かるようになってきた。

千冬さん、織斑先生は俺を様々な場所へ行かせることで、IS学園にいる大人達に俺という存在を見せている。

一夏は世界で最初にISを動かした男ということで世界の誰もが知っている。そして世界一有名とも言える織斑先生の弟という事実がその立場を揺るぎないものとしている。

だが俺には何も無い。血を分けた家族もなく、織斑一夏の友人で、織斑姉弟と同じ施設で暮らしていた。これが俺に関する世間の知る全てだ。

はつきり言っているモルモットとしてどこかの誰かに拉致されてもおかしくない存在である。今俺が何事もなく生きていられるのはこの嚴重に隔離されたIS学園にいるからに他ならない。

だからこそ、このIS学園にいる間は平穩無事でいられるようにと、織斑先生は気を配ってくれているようだ。

遠くから見るだけの他人なら何とも思わないが、よく知っている相手なら情も湧く。

IS学園にいる多種多様な人々に会わせることで、見世物としての価値もない珍獣ではなく血の通った人間であると自分の力で示してみせろ、と織斑先生は俺に伝えてくれているのだろう。

もともと、機会だけ与えて後は自分でどうにかしろと丸投げなのは教師としてどうなんだ、と思わなくもないが。

「あら甲斐田君、君も来たの?」

「はい、僕も用があつて」

「へー、また何か企んでるみたいねー。噂聞いたよー。おもしろいことになってるみたいじゃない」

「それ大部分は僕じゃないんですけど、まあお楽しみにつてことで」
「リーグマッチで活躍、期待してるからね!」

「模擬戦やるのは僕じゃなくて一夏ですよ。で、どこですか?」

「あ、ごめんね。面会室の一番。もう来てるよ」

「ありがとうございます。ではまた」

警備の人に挨拶して、一夏と一緒に相手の待っている部屋へと向かう。

IS学園外部の人間が敷地内に入るには当然許可が必要で、その手続きは非常に面倒なそうなのだ。内部の人間でさえ事細かに決まっているのだから外部ともなればそれは本当に厳しいのだろう。

ただ面会室で会話する程度なら相手にもよるがそこまではないそうなので、電話ではなくて直接話をしたいという希望に応じて相手にはここまで来てもらっていた。

「おい智希、今の知り合い？」

「知り合いも何も、この警備の人だけだ」

「なんでお前普通に会話してんの？ あ、もしかして迷子になって助けてもらったとか？ 最近お前一人でフラフラ出歩いてるみたいだし」

「子供じゃあるまいし。前に織斑先生のお使いでここに来て、お茶をぐちそうになっただくらいだよ」

「それだけ？ にしてはけっこう親しげだったぞ？」

「それはあの人の性格が大部分だろうけど、警護対象最重要ランクの人間のことは知っておきたいんだって。そのときいろいろ聞かれて話をしたからかな」

「ああ、そういや俺達ってそうだったな。ここにいると忘れそうになるけど」

今世界でISを動かした男は四人、その内の半分がこのIS学園にいる。一か八かで俺達を狙って襲ってくる輩がいなくても限らない話だ。

もつとも、ここには世界最強と言われる織斑千冬がいる時点で一か八かにもならないとまで言われているけれど。

「さっきの人、モンド・グロツソ第一回大会の二回戦で織斑先生と戦ったことがあるんだって」

「マジか!? じゃあ俺絶対見てるな」

「瞬殺だったから絶対覚えてないだろうって言った」

「あー……。うん、そうだな」

俺達の間では笑い話だが、裏を返せば世界レベルの人間がIS学園の警備をしているという事実だ。

俺達がISを学園に入学することが決まった時、俺達の安全性を問われて織斑先生は平然と言い放った。

「そこらの軍隊程度では私の出る幕はないだろう。それ以前にIS学園を襲撃したければまず日本とIS委員会を落とすことから始めるのをお勧めしておく」

実際に、IS学園ではさつきの人クラスがゴロゴロしているらしく、君達の安全に関しては一切心配しないでいいよと笑顔で言われてしまった。

「でもそれならまあ三年間は安心だな。なんでそんな人がいるのかは知らないけど」

「織斑千冬信者なんだって。一緒の空気を吸えるだけで嬉しいって言ってた」

「そっちなか！ すごく納得した。あの手の人は千冬姉のためなら死ぬると本気で言い切るからなあ……。きつと千冬姉に俺達のこと頼まれて今幸せ絶頂なんだろうな」

さすがに姉のことだけあって一夏もよく分かっている。まさにその通りで、織斑先生に頭を下げて頼まれて感動の余り泣いたそうさ。

つまり俺に好意的なのは例の写真をお近づきにプレゼントしたからである。この程度でやる気になってくれるのであれば俺は定期的な織斑千冬成分を補給しようと思う。写真が尽きても知られざるエピソードはいろいろあるし、そういうのを織斑千冬信者が大喜びするのは既に分かっている。そしてあわよくばそれを一夏にスライドさせる。

「来た来た。やあ、久しぶり！」

「この前電話で話したばかりじゃないですか」

「直接面と向かって話すのはってことよ。うん、織斑君も元気そうぞ何より！」

相手は立ち上がって笑顔をで手を振ってきた。普通に化粧もしていて今日は徹夜明けとかではなさそうさ。

俺が一夏に頼んでわざわざ来てもらったのは、対オルコットの模擬戦の日の朝に専用機を持ってきた、倉持技研の技術者だった。

「いやいや、話題になってるよ」

「何がって一応聞いておきます」

「一応ってことは自分でも分かっているんだね。大活躍だそうじゃない」

「智希、お前今度は何したんだ？ お前少しは自分のこと考えた方がいいと思うぞ」

「さすがに自分からぼっちの噂なんて出さないし出したくもないんだけど」

「ぶつ。知ってますか？ こいつ今クラスからハブられてるなんて噂が流れてるんですよ。本当はそれどころかクラスを仕切ってる立場なのに」

確かに自分が大人しくハブられるような存在でないのは認めるが、そこは笑うところなのかと思う。

「もちろんもちろん。今をときめく男性IS操縦者の話だからね。誰もが知る織斑君はともかくその隣にいるのはどういう子だろうってみんな気にしてるから」

「よかったな智希。これでみんな同情して優しくしてくれるかもしれないぞ」

当然その程度で傷つくような玉ではないのを理解して、一夏は清々しい笑顔を俺に向けてきた。

基本的に口ではやり込められるのが多いこともあって、こういう時一夏はここぞとばかりに攻めてくる。

「でも同情の方向じゃないんですよね？」

「それどころか織斑君やクラスを裏で操る腹黒い黒幕って話だね」

「ははっ！ そりゃ残念だったな智希！」

鈴と一緒に食べた夕食の時に堪えて反省したと思っていたが、どうやら喉元を過ぎてしまったようだ。あえて触れずにいた俺の優しさ

に気がつかないとは、すべてを明白にして断罪の階段を登ってもらう
しかなさそうだ。

だいたいこのパターンはいつも自分が痛い目に遭う結末だと思
い至らないのか。調子に乗っては痛い目に遭うのを繰り返すのもまた
織斑一夏という人間だった。

「まあ僕のことはどうでもいいです。それでリーグマッチの話させ
てもらいたいんですが」

「電話で聞いたことなら全然問題ないわよ。期間中はうちの人間を張
り付かせるから」

「一試合目と二試合目の間が二時間しかないのも含めてですよね？」

「当然。というか毎年やってることだからみんな理解してるわよ」

「あ、俺が専用機だからみんな心配してるって話で」

「もちろん考慮してるわよ。専属で三人織斑君には付かせるから、た
とえ全壊しても次の試合までには間に合わせてみせるわ」

倉持の人は事もなげに言った。正直俺もその部分は心配していな
い。

「全壊してもって、そんな簡単に直るものなんですか？」

「あれ、自分の機体のことなのに聞いてないの？ コアのついたIS
には自己修復機能があるんだけど、特に織斑君の機体はその部分がと
ても優秀なの。これは倉持技研として世界に誇れるレベルなんだか
ら。この技術を今ある打鉄に 응용して継戦能力を更に上げようって
みんな日々頑張ってるのよ」

「へー。初めて聞いてないかもしれないけど初めて聞いた」

自分の技術のことになると饒舌になるのはどこも同じなようだ。

「だからうちの部分で足を引っ張るっていうのはまずないわ。そこは
責任もってやらせてもらうから一切心配はしなくて大丈夫」

「ありがとうございます。よし。まあ最初から心配はしてなかったけ
どお墨付きもしっかりもらえたな」

「うん」

「でも甲斐田君が聞きたいのはそういうことじゃないんだよね？」

当然。それならわざわざ来てもらったりしない。

「はい。もうちよつとリーグマッチに突っ込んで」「ストップ！ 聞かれる前に言っちゃうんだけど、これ以上は手助けができないの」

言いながら困り顔で両手を合わせる。

何となくそんな気はしていた。

「やりたいのは山々だし、織斑君には是非とも優勝してもらいたいとは思ってるんだけど、倉持技研の立場上一方に肩入れができないの」「どういうことですか？」

てつきり織斑先生に大目玉を食らった結果だと思っていたのだが。

「実はね、一年四組の代表の子もうちが見てるの。だから織斑君と対戦する以上はどちらか一方にだけとはいかないわけ」

「それなら平等に手助けすれば……」

「織斑君、そうすると四組の簪ちゃんにリーグマッチのことから全部話さないといけなくなるんだけど、それでいいの？」

「げっ！ そりやマズい……よな？」

「まずいね」

「甲斐田君が情報の部分でもいろいろやってるみたいだし、もう外野はちよつと手も口も出せない状態になってるわ。毎年余計な干渉をするなってお達しは来るんだけど、今年は裏でこっそりっていうのも無理そう。特にうちは今完全に見張られてるから」

渋い顔になる倉持の人。対オルコット戦の際に織斑先生の機嫌を損ねてしまったのが大いに響いているようだ。

「それってじゃあ今のこれとか大丈夫なんですか？」

「今日は協力できないことを伝えるためにつて申請してあるからそれは大丈夫なんだけど、織斑先生にいい顔されてないのもまた事実ね」「千冬姉も心狭いなあ」

「もちろん立場の上そうしなければならぬっていうのは私達も分かっているから」

こういうのも因果応報と言うのだろうか。

先を見る余裕がなかったとはいえ、あの時無理したことが今跳ね返ってきている。

今さえ良ければというのは将来を含めると決算マイナスになってしまうこともある、と考慮しておく必要はありそうだ。

「じゃあ生徒会長の妹さんはどういう人ですかって聞くのも駄目なんですね」

「やっぱり聞きたいよねそういうことは。織斑先生も分かかって、甲斐田君が間接的に聞き出そうとしてくるからさっさと終わらせて帰れって言われてるのよ」

「千冬姉すげえな」

俺の考えなどあつさり読まれていた。

協力の仕方などいくらでもあると思っていたのだが、想像以上に倉持の側がビビってしまっている。織斑千冬の機嫌を損ねるというのはかなりの大事なようだ。

提供する側にその意思がないのであれば、ロンダリング的に情報をもたらすことは難しい。無理強いするような行為がいつか自分の首を締めてしまうのは今身を持って体験している。

イグニッション・ブーストなど聞きたいことが山ほどあったのだが、これはもう諦めるしかなさそうだ。

「前の時に大口叩いておきながら本当に申し訳ないと思うんだけど、今回だけは許して。もちろん今回については足を引つ張るような真似は死んでもしないし、来月の個人戦とか二学期のタッグマッチでは織斑君と簪ちゃんに思いつきり肩入れするから！ あっちは今回みたいないないし」

「いや、俺は別にいいですけど、智希？」

「はい、了解しました。こちらこそ無理を言つてすみませんでした」

「ほんつとうにごめんなさい！」

これは相当に釘を差されたな。

最初に見せた笑顔はどうやら空元気だったようだ。

そして倉持の人は俺達の了解を取り付けるとそそくさと帰っていった。

気が変わらないうちにと思ったのか、それとも織斑先生の目が怖かったのか。

「あーあ、イグニツション・ブーストのこと聞けると思ってたのになあ」

「残念だったね」

「千冬姉は俺達に嫌がらせしてそんなに楽しいのか？」

「嫌がらせっていうか、ズルはするなってことじゃない？」

「ズルってやり方聞くぐらいはいいだろうに」

「今回は全部自分達だけでやれってことなんだろうね。問題の答えを見て解いた気になるなって感じかな」

倉持の人の態度を見るに過去はそうでもなかったようだが、今年はかなり徹底されてきている。この分では三年生も大目玉を食らっているのかもしれない。

織斑先生の意図は分かる。俺達に楽をさせないためだ。

谷底に落とすから這い上がった来いという言葉はまだ生きているのだろう。IS学園の合格水準に遠く及んでいないというのもあり、俺と一夏がまっとうな努力もせず楽しんで前に出ようとするのは認めないというわけだ。

大人しくしていればこうはならなかっただろうが、それは俺の望むところでもない。

「なあ、まだ練習してていいよな？」

一夏は相変わらずイグニツション・ブーストを使いこなせていない。

最初に設定したりリミットを越えるのは既に確定していた。鈴の邪魔があつたし、一夏や一夏と一緒に訓練したいパイロット連中の嘆願もあつてその期限を伸ばしている。

だがいつまでもというわけにはいかないし、そろそろ本番を視野に入れる必要がある。もう指揮班やパイロット班には今の状態で戦うことを想定して考えてもらってはいるが、シミュレーション的にあまり芳しくないのが現状だ。

クラスメイトや三組の連中に言ったほど、こちらに余裕があるわけではない。

「前にも言った通り休みの間はいいよ」

「よし！ 急いで戻って練習の続きだ！」

なんだかんだで一夏は完全にやる気になってくれている。

かつては全てそれに賭けていたが、今はもうそんな不確定な部分に頼りたくない。

勝つべくして勝てるよう十分な準備をして本番を迎えたいのだ。でもなかなかそううまくことが進んでくれないのは、果たして俺の問題なのだろうか。

最善を尽くすの最善とはいったい誰にとっての最善か。

俺にとつては最善でも、きつと外から見れば無駄の山なのだろう。

一夏はあつという間に俺を置いて消えてしまっている。

愚痴を言っても始まらない。俺は俺のできることをひとつひとつやっていくしかない。

それはどこまでも地味で、良くも悪くも結果がすぐ見えてくれない地道な作業だった。

18. 一人の男を巡って争う二人の女。 実に見苦しくて美しくない光景だ。

一人の男を巡って争う二人の女。 実に見苦しくて美しくない光景だ。

そしてその対象が一夏ではなく俺というのもまた華に欠ける話である。

今俺の目の前で、二人の女が笑顔でお互いに相手をけなしあっている。

「へー、そうやって三組は無理矢理コイツを引つ張り回してるんだ」

「無理矢理だなんて、最初にそういう発想が出てくる時点で人としてどうなんだって思っちゃうわね。 五組はそんな人を代表にしたりなんかして大丈夫なの？ ねえ、そうは思わない？」

実にどうでもいい。

一言で言うと、五組の代表が三組の代表に喧嘩を売った。

あれから二三度しか話はしていないのだが、五組の代表は俺のことを舎弟とか子分とかまあそういう存在として考えていたらしい。 噂を聞いて、どうやら俺のことを守ってやろうとしていたようなのだ。

だがその矢先に三組が颯爽と現れて、俺をかつさらっていったように見える。

かくして何余計なことをするんだと五組の代表は三組に対して因縁をつけにやってきていた。

もちろんのこと五組の代表は今日も徒党を組んでいる。 今十人くらいはいる。

相対する三組は代表含めて昨日と同じ四人。 数は相手の半分以下。

戦場は今日も天気の良い屋上。 晴れ晴れするような五月の青空の下で、二つの集団が火花を散らし合っていた。

「いきなり話しかけてきて守ってやるとか言う方がむしろ怪しき満点だと思っけどねえ」

「困っている人を助けてあげようと思うことが怪しいだなんて、あなた人として大事なものを失ってないかな？」

お互いに部下の躰は行き届いているようだ。

今この場には大勢の人間がいるのに、口を開いているのは代表だけである。

もつと数の暴力に任せて口撃するのかと思ったが、今のところ自分の代表の後ろに立って圧力をかける以上のことはしていない。

一ヶ月で自分のクラスを掌握しているあたり、彼女達にはやはりリーダーの資質があるのだろう。

一方の一組だが一夏は代表でもリーダーというわけではないし、俺に至ってはクラスの連中に好き勝手されてぞんざいに扱われている。

他人事ながらちよつと羨ましかった。

「人としてって、それは他人を利用するつもりの人間が吐いていい言葉なのかねえ？　なんか最近慌ただしく動いてるって話だけど？」

「無理矢理とか利用とか、本当にそういう発想しか出てこないのね。呆れるを通り越してもうかわいそうになってきたわ」

興味もないので聞き流すつもりだったが、今聞き捨てならない台詞が出てきてしまった。

もしかして五組までリーグマッチの真実に気づいてしまったのだろうか。

「そうやって誤魔化そうとしてもムダ。あんたらが怪しい動きしてるのは丸分かりなんだから。どうせ一組に先越されたって焦ってるんだらうけど、そんなにリーグマッチで勝ちたいわけ？」

「ああ、そういうこと」

三組代表とそのお供の空気が変わった。

これは俺をなじる鷹月さんと同じ雰囲気だ。

やっぱり俺に対する態度は作られたものだった。

「ま、一組ごときにビビってるようじゃ勝ち目なんてまるでないけどね。他のクラスは知らないけど、少なくともあたしの相手にはとても

ならなさそうね」

「あら、私一応はイタリアの代表候補生なんだけれど？」

「それはもちろん知ってるけど、本国にいない時点でたかが知れてると思うか、せいぜいがIS学園で有りもしない一発逆転を狙ってる程度にしか見えないね」

「代表候補生にさえなれない人にそう言ってもらえるだなんてとても光栄な話ね。でも私は無意味に相手を侮るような真似はしない。少なくとも二週間は先を行っている一組のことをバカにはできないと普通の人なら考えるでしょうね」

代表候補生にもいろいろあるようだ。オルコットは専用機まで用意してもらっているのだからそれなりに期待されていると思うが、一般的な話として、わざわざ遠い日本にまでやってくる代表候補生は同じ立場の人間と比べて優秀というわけではないのかもしれない。

織斑千冬がIS学園にいるのはここ二年の話だし、また教師としての評価は未知数な部分があるのだろう。

ミーハーが異常に増えたのは間違いないところであるけれど。「だから三組はその程度だって言ってるんだけど。一組はISのあも知らない初心者代表に据えたはいいけどあんまりにも役立たずで、今焦って訓練させてるだけ。一組の訓練をちよつとでも見たら分かりそうなものだけどねえ」

「その割には五組のあなたは自分の訓練をしてないみたいだけど、初心者の一組に勝てればそれで満足なんだ。残念だわ、IS学園に入学しておきながら向上心がないのね」

あの校内新聞が出た後五組の代表も俺に対して真実を聞いてきて、俺は三組代表に言うつもりだったことを説明した。受け取り方が違った結果ずれた部分も多いが、噂だし俺も詳細を知らないことになっっているのでまあ問題は無いはず。

「初心者や初心者にビビってるようなのに本気出したらかわいそうだっていう優しさは理解できないか」

「そうやってせつせと負けた時の言い訳を作っている時点でとても用意周到だと思うわ」

もはや俺そつちのけで罵り合いを始めてしまった。

俺をダシにしたかっただけなのは分かっているが、ここでさえ俺はそういう扱いなのか。

噂通りに受け取るのであれば確かに取るに足りない存在になるのかもしれないが、にしては俺を大義名分にするならもうちよつとマシな扱いをしてくれないんじやないかと抗議したくなってしまう。もちろんやらないが。

しばらくお互いの揚げ足取り合戦が続く。

格の違いを見せつけたかっただろう。どちらも一歩も譲らない展開だった。

だがやがてお互いに不毛さを悟ったか、それともただ単に疲れたか、リーグマッチでの勝利宣言をし合ってようやく終わった。

ところが、なんと五組の代表は俺に何かを言うどころか見ることさえせずに帰って行ってしまった。

完全に俺の存在を忘れている。取り巻きで気づいているのはいたが特に触れることもしない。ワンマンなのかこの連中にとつても俺はどうでもいいのか。

一組のことを侮っているのが分かったので別に損があるわけではないが、その眼中になさつぷりに啞然としてしまった。

「ごめんね。醜いところ見せちゃって」

「ううん、そんなことないよ」

百パーセント演技だと分かっているとはいえ、形だけでも気を遣っているのは全然マシだ。

他の三人に至ってはまだ怒り冷めやらぬという表情で、きっとその意識の中に俺の存在はない。

五組の言を信じるのであれば、三組の中で一組はライバルとしての格が下がるだろう。

だが五組も三組の動きからリーグマッチの価値に気づいてしまったようだ。

みんなが当事者である以上、誰かの行動がまた別の誰かへと余波が広がっていくこともあるのだ。そこまで読んで行動しなければなら

ないのか。

先輩達はなぜ噂を流したりしたのかと疑問だったが、もしかしたらこういう事態を引き起こすためなのかもしれない。俺からすれば余計なことしやがってでしかないが。

「甲斐田君、なんか変なことになっちゃってるけど、甲斐田君には関係のないことだから何も気にしないでね」

「いや、それは別に」

「ありがとう。でもこれ以上嫌な空気を見せるのもなんだから、今日はこれで」

「あ、うん」

そう言い残して三組の面々は帰って行った。

俺としてはダシに使われたが、同時におかげで五組の状況を知ることができた。こうなると残る二組や四組のことも気になってくる。俺にもやらなければならぬことがたくさんあるようだ。

そこまで思い当たって、俺は重大な目的を思い出してしまった。今日俺は三組の状況を探るためにここにいたのだ。

こうして俺はまたも三組の情報を得ることができず、再び鷹月さんに説教されるであろう結末を迎えてしまうこととなった。

「智希、あの連中なんなの」

指揮班に報告とかしたくないなと思いつつ察へと重い足取りを進めていると、寮の入り口で鈴が仁王立ちしていた。

今度は誰が何をした。

「せっかくあたしが教えてやろうって言うてるのに、いらんとか敵は近寄るなどか何？ たかだか同じクラスになった程度で何エラそうにしてんの？」

「それは仕方ないよ。だって鈴のルームメイトが一夏の対戦相手だし」

鈴の態度も十分偉そうではないかと思うが、どうせクラスメイト達にも同じような態度だったのだろうが、いちいち突っ込む不毛さも十

分承知しているのももちろん口にはしない。

「はあ？ 自分達がそうだからってあたしまでスパイするとか思われ
てるわけ？ あいつらってほんとバカね」

「そういうことじゃなくて、会話のはずみとかでポロツと言っちゃう
こととかあるかもしれないって話だよ。ハミルトンさんだっけ、その
人だつてやつぱり対戦する一夏のことは気になるだろうし」

「それは聞き捨てならないわね。言っとくけどティナはそういうこと
する奴じゃ全然ないから。むしろあたしと同じで相手が誰であろう
と関係ないって人間よ。スパイとかする暇があつたら自分の訓練で
もするって昨日言ってたわ」

俺は頭を抱えた。わざわざ自分から敵の俺に情報を与えてどうす
る。

間違いなく庇つたつもりなのだろうが、今自分の言ったことがハミ
ルトンの迷惑になるとは考えないのか。

さらに鈴をよく知っている俺からすればその発言でハミルトンが
どういう人間かまで分かってしまう。たった数日で鈴が気にいると
いうことはかなり人間ができていて、さらに個人主義だということろ
まで俺には理解できる。

女とは基本群れる生き物だが鈴は例外で、縛られることを嫌い一人
で行動するのが好む。何においても優秀で正義感があり姉御肌的な
ところもあるが、五組の代表のように子分を作ることにはしない。

弱いからこそ群れる、だから強い自分は群れる必要などない、が持
論だ。

「鈴がそう思うならきつとそうなんだろうけど、だからってうちのク
ラスの人達がそれをすぐ信じるかって言うて言うてまた別の話だよ。鈴
を知らない人間にいきなり信じると本人が言つて、それを信じてもら
えると思う？」

「それは……だつたら智希が言つてくれればいいじゃない。あたしが
そういう人間じゃないってことくらいは分かってるでしょ」

「何て言えばいいの？ 別に鈴は訓練にかこつけて一夏と一緒によ
うとしてるわけじゃないですって？」

鈴の頬が膨れる。

大義名分があるかないかの違いだけで、パイロット班連中と鈴の行動原理は同じだ。

もし鈴が俺達と同じクラスであれば、俺だって別に参加するのを咎めるつもりはない。ルームメイトでなければ、一夏と一緒にいたければしばらく代表には近づくなどでも俺は言うだろう。

「そういうわけだから、リーグマッチが終わるまでは我慢してて。はつきり言うけどその間に一夏が誰かに持つていかれるとかあり得ないから」

「……つまりあたしが一夏の側にいること自体にリスクがあるって話ね」

「その先はあんまり聞きたくないなあ」

「ならばそれ以上のメリットをあたしがもたらせばいいってことだわ！」

実にポジティブだ。気に入らない現実があれば自分の力でそれを変えてしまおうとするのが凰鈴音という人間だ。

その考え方自体は俺も嫌いではない。が、今この場でそれをやられるのは面倒事が増えて嫌だ。

「なんでか知らないけど模擬戦で勝ちたいんですよ。だったらあたしの力で勝たせてあげようじゃない！」

「また大した自信だね。鈴らしいと言えばそうだけど」

「智希の言いたいことは分かるわ。勝たせることができるという根拠を示せてことでしょ」

いいえ、むしろこれ以上余計なことをしないで大人しくしてくださいという切実な願いです。

「智希には言つてなかったと思うけど、あたしは中国の代表候補生なんだから。しかもそのへんの有象無象とはワケが違うわ。なんと自分の専用機まで持つてるのよ。誰が何を言うのも勝手だけど、勝ち得たこの事実に対してだけは文句は言わせない」

別に鈴がやった努力に文句をつけようなどとは思っていない。確かに鈴は中二までは俺達と同じ普通の学校で、ISとは何の関係もな

い世界にいた。だから中三の一年間だけでゼロから上り詰めたのだろう。そしてそれ相応の相当な努力をしたのだろう。

だがそれとこれとは別問題だ。

「それだけならうちのクラスにも同じ立場の人はいるよ。別の国だけと同じく代表候補生でかつ専用機持ち」

「えっ……」

「その人よりも鈴の方がいいという理由は何？」

残念だが、それだけなら既にオルコットがいる。しかも一夏との相性も悪くない。

一夏を好きになる人間は数あれど、一夏の感性まで理解し得るのはそうそういないのだ。たまに一夏とオルコットは感性のみで行われるふわふわな会話を始めて、周囲を置いて行ってしまふことがある。かろうじてそれについていけるのは篠ノ之さんくらいで、それも言っていることを理解するので精一杯という状態だ。鈴は間違いなくついていけないだろうし、そもそも鈴は基本自分のペースでしか物事を進められない。

どう考えても軍配はオルコットの方に上がる。

「あ、あたしの方が一夏のごことはよく分かってるし」

「そっち方面なら僕がいる」

「そ、その両方を持つてるのはあたししか……」

「それは鈴を迎え入れるリスクを補って余りあるもの？」

「……」

人手が多くて困ることはないので、手助けすると言う人間を無下にするつもりはない。

だが今鈴の置かれた立場は微妙過ぎる。しかも無意識に一夏の情報をこぼすだろうし、あの様子なら既に自慢ついでに一夏のことを二組の代表に語りまくっているに違いない。

「別に未来永劫一夏に近づくなとか言ってるわけじゃないからね。リーグマッチが終わるまで二週間、そこまで長い間ってわけでもないし、一夏のためだから、ね？」

「……二週間じゃないわ」

「え？ ああ、確かに本番始まったら別に構わないから一週間ちよいか」

「そういう意味じゃない。一年」

鈴は自信がなくなるにつれて顔の角度が下がっていったが、いきなり顔を上げて強い表情で俺を見上げた。

瞬間的に、まずい、と思った。

「あたしがどれだけ待ってたと思うの。あの日空港で別れてから一年、一夏に会うためだけにここまで努力してきたのよ。そしてようやくその時がやってきたって言うのに、どうして今さら邪魔されなきゃなんないのよ！」

「いや、それは……」

それはただの鈴の都合でしかない、というのはこの場において意味をなさない。

感情を爆発させようとしている人間には火に油を注ぐ行為ではない。

完全に俺の失態だ。鈴を追い詰めてしまっていた。

よく知っているがゆえに、いつも通りの会話をしてしまったがゆえに、今の鈴に対しては最悪の対応をしてしまった。

「智希、一年ぶりだって言うのにあんたはどうしてそんなに普通なの!?! どうして三日会ってなかった程度の扱いしかしてくれないの!?! 智希にとってあたしはいてもいなくてもいい程度の存在でしかないの!?!」

見た目も何もかも変わっていなかったというのもあり、俺も一夏も安心してた。鈴はいつだって鈴だと再会した日の夜に二人で笑い合った。

だが鈴はそうではない。俺達は鈴が変わってしまうことを望んでいなかったが、鈴は変わろうとしていた。何より、今思えば演技であろうと一夏に抱きついてみせたのはその決意の現れだったのだろう。

友人という関係性からすれば、時間など関係なく受け入れるという行為がそこまで間違っているとも思わない。が、かといって一年ぶりの再会に対しては対応がおざなり過ぎた。

おそらく一夏もそこは気にしていて、三人でゆっくり話をしたいと言っていた。だが俺はそれはリーグマッチが終わってからにしようと先延ばしにしていた。

そして鈴は一夏と話をしようにも、一夏が常にクラスの女子に囲まれていて近づき難い。拳句は別のクラスというだけで邪魔者扱い。

溜まりに溜まっていただけに、たった数日で鈴のフラストレーションは爆発寸前にまで高まっていたようだった。

「もういい。そもそも他人にどうにかしてもらおうとか甘いこと考えてたあたしが間違ってた」

「鈴！」

「あたしが誰と何をしようがあたしの勝手よ！ 邪魔するなら全部まとめて叩き潰してやる！」

とんでもないことを言い放ちながら、鈴は駆けて行った。最悪だ。

どこへ向かうのかと一瞬思ったがそんなのは一つしかない。

慌てて俺も一夏のいるアリーナへと走った。

通路を抜けてアリーナのグラウンド側へと入った時、まだ始まっていなかった。

正確にはまだ言い争いの状態だった。

それは既に始まっているだろうと普通は言いそうだが、鈴に関しては違う。

まだ鈴の實力行使が始まっていないという意味だ。

「智希！ これ何とかしてくれ！」

こういう時本当に一夏は俺を見つけてるのが早い。

一夏は鈴とクラスメイト達の間で板挟み状態となつてあたふたしていた。

残念ながら一夏には女の争いを収められるような技量はなく、またそれは自分でも分かっている。いや、かと言って俺にあるかと言われるても素直にうんとは領けないのだが、少なくとも一夏は俺が到着する

まで何とか持ちこたえよう以外のことは考えていないだろう。最悪自分が殴られてでもくらいは覚悟しているかもしれないが。

「もう智希とは会話済みよ。その上で今ここにいるんだから」

「智希！　またお前のせいか！」

「甲斐田！　貴様今度は何をやらかした！」

「甲斐田さんは毎回トラブルを起こすのが趣味なのですか!？」

なんか助けたくなくなってくる気がしないでもないが、今回に限っては火をつけてしまったのは俺だ。

気を取り直して間に入ることにする。

「ええと、鈴」

「あなたの話はもう聞かないわよ」

「ごめん、全面的に僕が悪かった」

「智希!？」

また大げさに一夏が驚いている。俺は頭を下げただけでまだ何も言っていないのだが。

「甲斐田君が謝るってどういうこと？」

「そりゃあよっぽどのことでしょ」

「だから嵐さんはあんなに怒ってるんだ……」

「あの甲斐田君がまずいと思うくらいだからきつと相当なことだよ
ね」

クラスの連中の中におかしな空気が流れている。

たった一言謝っただけなのになぜそこまで言われなければならないのだろうか。

「智希……あんた本当に信用ないのね」

「入学して一ヶ月であれだけやればむしろ当然だけだな。千冬姉とかもう完全に智希のことを見張ってるし」

「千冬さんまで!?!　それ何をしたらって普通は思うけど、でも智希が自重をやめたらそうなるんじゃないかって気は薄々してたわ」

いつの間にか鈴が冷静さを取り戻している。だからこれはとても喜ばしいことだ。喜ばしいことのはずだ。しかしどこかすごく納得いかない気がするのになぜだろうか。

「鈴、確かに鈴の言った通りだ。僕は鈴の気持ちをも全然分かってなかった。何もかも一年前と同じ感覚で鈴と話していて、一年も間が開いてたつてことを理解してなかった」

「智希？」

「甲斐田君がしおらしいだと……」

「これ逆に何かあるんじゃない？」

余計なことを言う輩に目を向けると、相手は慌てて目をそらした。空気を取り戻してくれたのには感謝するが、それ以上はやめてほしい。

「僕を信用できないのは十分理解できる。だから行動で示す。鈴、一夏にI Sの操縦を教えてあげてほしい」

「いいの!？」

道すがら、この問題を解決させる方法を考えた。鈴を蚊帳の外に置いておくのがベストだったが、もはやそれは無理だ。曖昧なままの立場にしておくことはできない。

ならば次善の策としては、敵として相対するか味方として引き入れるかになる。鈴は基本的に敵か味方かの二元論で物事を考えがちだというのもある。

そうすると選択肢はもう味方の一択しかない。味方として余計なことされるよりも敵に回ってしまう方が厄介だからだ。

鈴の持つ自信は伊達ではない。その実力に十分なほど裏付けされていて、慢心もしない。努力家であるがゆえに、自分よりも上の人間を見つけたら努力してあつという間に追い抜いてしまうほどだ。

だが何より一番重要なのは、鈴が一夏のことをよく知っているという事実だ。

ただでさえ一夏は手持ちの札が少ないのに、性格の類まで読まれてしまったら付け入る隙がなくなってしまう。もし敵に回った鈴が一夏の性格含めた情報をルームメイトの二組代表に教えたりすれば、相手は強敵どころか勝ちの難しい難敵にさえなり得る。

よって鈴を敵に回すのは愚の骨頂であり、こうなってはむしろ積極的に引き込むしかないというのが俺の結論である。

「一年でゼロから中国の代表候補生になって専用機までもらったというなら実力的に申し分ない。教え方がうまいのも分かってる。ただ他のクラスに一夏の情報を漏らさないと約束だけはしてほしい」

「そんなのあったりまえじゃない！ 一夏を勝たせるためにやるのにわざわざ敵に塩を送る真似なんてするわけないわよ」

「ありがとう。じゃあ今の一夏の状況を説明するからこっちにきて。一夏達はさっきまでの続きを」

「そうね。確かに今の一夏がどんなものかってあたしは知らないしね」

鈴の機嫌は完全に直った。どうせ無意識に一夏のことを二組で話しまくるだろうし、リーグマッチの情報まで漏らしてしまうという危険性はある。だがそれはもうリスクとして受け入れるしかない。厳重に口止めしておこうとは思うが。

「待って下さい！ それならわたくしがいるではありませんか！」

ようやく円満解決かと思いきや、抗議の声が上がってしまった。

確かに俺が独断で決めたことではあるし、文句を言う人間が出てくるかもしれないと思っていた。だから終わった後一夏と鈴を先に帰して理由を説明しようと考えていたのだが、よりによってオルコットが今この場にいたとは。

「誰？」

「うちのクラスのオルコットさん。イギリスの代表候補生で、専用機持ち。鈴と同じ立場の人がいるって言ったよね」

「ああ、あんたが」

「そうですね。わたくしがいるのですから、わざわざ他のクラスの間を加える必要はないのではないのでしょうか。むしろそれは余計なリスクを抱える行為ではないかと」

「さっき智希も同じこと言ってたわね。どうなの？」

鈴が俺の顔を見上げる。さすがに敵に回すよりはマシだからなどと言うつもりはないが、鈴オルコットが両方同時にいる場で聞かれるとは思っていなかった。

「その質問に答える前に、オルコットさん」

「はい」

「どうして今この場にいるの？」

「はい？」

「指揮班の方はどうしたの？」

鈴の出現で、安穩としていた篠ノ之さんもオルコットも危機感を持った。持ったままではよかったのだが、その結果オルコットはパイロット班の方を気にし始めて、しばしばこうやって一夏の訓練の場をやってくるようになっていた。

「そ、それは……」

「指揮班の方ってそんなに暇だったっけ？ それとも鷹月さんにもういららないとも言われた？ もしそうなら抗議してくるけど」

「そそっ、そのような事実はありませんわ。むしろこれは指揮班としての一環でして、シミュレーションをするあたって一夏さんの最新の状態を知る必要があるからで……」

オルコットは早口で俺にまくし立てている。

いきなり突っ込まれてしどろもどろにならないのはさすがと言うべきか。最初から指揮班を抜け出す言い訳は考えてあったのだろう。

だが残念ながら俺の目を見て言えない時点で失格だ。

「じゃあ今日のところはもういいよ。これから鈴と相談してどういうことをやるかって決めるのもあるし、オルコットさんがいなくても大丈夫だから」

「そうだぞ。指揮班の仕事は非常に重要であるし、無理をすることはないのだからな」

「くっ、……ぞとばかりに……」

頼んでもいないのに篠ノ之さんが入ってきた。

パイロット班は共同戦線を張ってはいるが、基本的にはライバル関係にある。ましてこの二人は常に一夏の両脇を固めていてお互いを一番のライバルだと認識しているようだった。

必要があれば笑顔で団結し、チャンスがあれば迷わず出し抜こうとし、蹴落とす機会があれば見逃さない。女とは実に恐ろしい生き物である。

「で、さっきの返答を言うと、オルコットさんには指揮班があるよね。指揮班の人数が少ないことを考えると、オルコットさんにはそっちの方をがんばってもらった方がいいからって話。戦術的な部分はパイロット班の人達に任せてあるし、指揮班の人達は戦略を考えてほしいなど」

「甲斐田の言う通りだな。適材適所、自分に課せられた役割をしつかり果たすことが組織では大事なことなのだぞ。不安があるのかもしれないが、こちらのことは全て我々に任せて安心するがいい」

「ぐぬぬ……」

得意げな篠ノ之さんに悔しそうなオルコット。

尻馬に乗っただけの篠ノ之さんが勝ち誇る意味が分からないが、二人は抜きつ抜かれつの関係にでもあるのだろうか。

「智希は前にも増して面倒なことをやってるのね」

そんな光景を目にして、鈴が呆れたようにつぶやいた。

「四組の代表の友達って誰？」

「どうしたのいきなり？」

「そういえば名前を聞いていなかったことを思い出して、俺は鷹月さんに尋ねた。」

「うん、ちよつと思っただけけど、向こうの情報を得るのはいいけど、こっちの情報も漏れてないかなって」

「ああ、そういうこと。大丈夫よ」

「言い切るね」

「だって今さらだし。そういう心配はしてたからきちんと言い聞かせであるわよ」

「それもそうか。ごめん、余計なこと言っちゃったね」

「気になるなら本人に聞いてみれば？ 自信を持って大丈夫だって言うとは思うけど」

「別に気になるってほどでもないよ。四組のことは全部任せきりだったし、一度本人の口から聞いてみたかったくらい」

「まあ正直一番の安牌だからね」

いろいろとやらかしてくるクラスが多い中、四組だけはずっと平穩だった。

クラスの中はリーグマッチなどまるで興味ないという空気で、代表本人も人付き合いのいいタイプではなく、機械をいじっている方が好きらしい。

一夏と同じ倉持技研の管轄で、専用機ではないが打鉄を自分用として持っているそうさ。

それだけなら機体持ちということでは危険度大なのだが、本人は訓練らしい訓練を全くしていなかった。

たまに動きの確認をしている程度で、基本はポータブルのPCを打鉄に繋いでカタカタやっているだけ。

生徒会長の妹で日本の代表候補生ということなのだからそれなりの技術は持っているのだろうが、リーグマッチに向けて本気に取り組むでもなく一人で自分の打鉄を改造して遊んでいる程度である。

それに打鉄であれば射撃主体でもないだろうし、一夏の脅威には到底なり得ないと俺達は判断していた。

「で、誰？」

「布仏さんよ」

それはかなり意外だった。

「ちよつといいい？」

「かいだー？」

「甲斐田君!?! 私今日はまだ何もしてないよ!」

つまり谷本さんはいつも俺に何かをしているという意識があるのか。まあ、かといって無意識でやられたらそれはそれで非常に迷惑だが。

「いや、谷本さんじゃなくて、用があるのは布仏さん」

「私？」

「そんな! 甲斐田君はもう私の体に飽きたって言うの!?!」

俺を後ろを振り向いて鷹月さんに合図を送った。鷹月さんが頷い

て立ち上がる。

すると谷本さんはそれを見るや脱兎のごとく教室から逃げ出した。

「連携プレイだねえ」

「毎回谷本さんの相手をしていればこれくらいすぐ身につくよ」

「じゃあ私もがんばる！」

布仏さんが何をがんばるのか分からないが、最近俺は鷹月さんが谷本さんの天敵であるという事実を発見した。

俺はスルーをするのだが、鷹月さんは容赦なく切り捨てる。それが谷本さんにとつてはとても堪えるらしい。

一度俺がやろうとしたら頼むから俺だけはそれをやらないでくれと涙ながらに懇願されてしまい、思わず頷いてしまった。だからそれ以降は鷹月さんにやってもらうことにしている。

雑談の中であれば俺も鷹月さんと呼ぶこともないが、真面目な話をするときには迷わず呼んで横で見張ってもらっていた。

「それで布仏さんにちよつと聞きたいことがあって」

「なに〜？」

「四組の代表の人のことなんだけど」

「かんちゃん？」

かんざしだからかんちゃんか。

この人にも命名規則があるらしく、男子の俺と一夏は苗字からかいだーとおりむー、クラスの女子はせっしーなど下の名前からあだ名が付けられていた。

どうでもいいことだが発音を伸ばすのが好きらしい。普段の発言も語尾がよく伸びて他人にのんびりとした印象を与えていて、実際本人の性格もそういう感じだった。

「そうそう。更識簪さん」

「かんちゃんがどうかした〜？」

「うん、最近どうかかなと思って。もちろんリーグマッチのことなんだけど、様子に変わりはない？」

「きのうもいつも通りだったよ〜」

昨日も会っているのか。

友達というからにはそれなりに仲が良かったりするのだろうか。

「そっか。三組も五組もやる気になり始めてて、本番まであと一週間だしそろそろ四組も来るかなって思ってたんだ。実際そういう感じはある?」

「大丈夫じゃないかな。クラスの人はあんまり仲良くしてないみたいだし、かんちゃんも自分の打鉄のことが一番みたいだし」

「それはリーグマッチと関係なく?」

「ずーっと前からだよ。春休みに入る前くらいからずーっと打鉄をいじってばつかりになっちゃってるんだ」

「なるほど。マイペースな人なんだね。布仏さんみたいに」

「むー。私はみんなのことちゃんと考えてるよー」

思わぬところで抗議されてしまった。

「どうやら布仏さんにとってマイペースは褒め言葉ではなかったらしい。」

別にマイペースだから他人のことを気にしない人間だとか言うつもりは一切ないが。

「いや、それはもちろん分かってるよ。布仏さんがクラスのためにがんばってくれてることは僕もみんなも知ってるから」

「うんうん。それならいいのです」

「それならまだ気にしないでいいかな。ありがとう」

「どういたしまして。かんちゃんとお話してみる?」

四組代表との会話か。

既に四組以外の代表とは会話済みで面識もある。これで四組代表と話をすればコンプリートだが、コレクションじゃあるまいしそれに何の意味があるというのか。

「んー、特に話したいことがあるわけでもないし、今は別にいいかな」

「そっか。ざんねん」

「残念? どうして?」

「かいだーとお話したらかんちゃんにもいいことあるかなって」

「いいこと?」

「うん、かいちよーみみたいに」

そうだ、四組代表は生徒会長の妹だ。そして布仏さんは四組代表の友達。

「布仏さんて、もしかして生徒会長のこと前から知ってた？」

「もちろん知ってるよ」

「ああ、だからか」

どうしてこの人は俺と生徒会長が会話していると爆笑するのかと不思議だったが、生徒会長の方をよく知っていたからか。

本人に天然も入ってはいるが、普段とのギャップがおかしくて仕方なかったのだろう。

ようやく腑に落ちた。

「かいだー？」

「ごめんごめん、僕と生徒会長が話してる時やけに笑ってるなと思ってたから。そういうことだったんだね」

「そういうこと？」

「別に気にしないで。じゃあもうしばらくよろしく……そうだ、忘れてた。こういうこととして大丈夫？」

「何が？」

「僕らとしてはありがたいけど、相手には内緒でやってるわけじゃない。その、友達関係的に」

俺が気になっていたのはそこだ。

知り合い程度ならまだしも、友達ともなれば騙すようなことをして気にならないのかという話だ。一夏もあまりいい顔はしていなかった。

終わった後全てが明らかになって、よくも騙してくれたな展開を俺に持ち込まれても困る。

俺自身は全部勝つための作戦だったと言い張るつもりだし、正直他人なので別に多少恨まれようと構わない。鈴は基本個人主義なのでクラスのことなどあまり気にしないだろうし、専用機持ちで実は特に害もないから大丈夫だ。

だが布仏さんは個人的な人間関係を使っている以上、後に引きずる可能性がある。

「かいだーはやさしいね〜」

「今さらだけど、終わった後友情にヒビが入ったぞどうしてくれるとか言われると困るので」

「それはないから大丈夫だよ。でも気にしてくれて嬉しいな〜」

ないと言いつつ。人の人間関係に深入りするつもりはないので、それ以上とやかくは言うまい。

「それならいいんだ。じゃああと一週間よろしく」

「おー！ 私がんばるよ〜！」

布仏さんから威勢のいい返事が返ってきた。

さすがに杞憂だった。まあ元々問題があれば鷹月さんから何かあっただろう。

四組代表の機体は打鉄だから打ち合えば必殺攻撃のある分一夏が有利だ。対策として打鉄の篠ノ之さんを相手にして慣れておけば十分いけると思う。

気になることは初日の二戦目なので一夏の体力気力だ。このへのペース配分に注意しなければならぬが、それは指揮班と、多少不安は残るが衛生班谷本の領域だ。

だがこれはあらかじめ詰めておける問題なので、準備した上でやる。大丈夫だ。

「お話終わりましたー？」

笑顔で両手を振る布仏さんに返して自分の席に戻ろうとすると、教室の扉が少し開いて、その間から谷本さんが首を出してこちらを見ていた。

普通に入ってくればいいのに、何自分の教室の外で覗きのような真似をしているのか。

「あつ、待って！ お客さんが！」

いつも通り流してそのまま戻ろうとすると、慌てた谷本さんの悲鳴が聞こえる。

振り返ると、こっちに来てと手招きをしていた。

お客さんとは誰だろうか。三組か、五組か。

「あ、こちらの方です」

扉を開けて廊下に出ると、谷本さんが手で示す。そのどちらでもなかった。

「あの……あたしのこと覚えてる?」

目の前に立っているのは金髪のそばかすだった。

「もちろん覚えてるよ。鈴のルームメイトで二組代表のハミルトンさん」

「この人が!」

望んでもいないオーバーリアクションをした芸人に目をやると、俺と全く同じ動きをして廊下の先を見つめていた。俺が見たのは谷本さんであってその先にある空間ではない。

「よかった。それで、どうしても話しておいた方がいいことがあって」
二組代表は谷本さんに構うほど心の余裕があるわけではないようだった。

存在すら無視されて、谷本さんが大きく肩を落とす。

「その、鈴のことなただけけど……」

その曇った表情から、どう考えてもろくでもないことに間違いはなかった。しかも鈴絡み。

もしかして鈴が暴れたのでお前どうにかしろとかそういう類の話だろうか。正直暴れ出した鈴はとても俺には止められない。一夏も嫌がるだろうし、その時はもう織斑先生でも呼んでくるしかない。

「朝起きたら、鈴が二組の代表を代わってくれって言ってきた」

「は?」

「いや、もちろんあたしは勝手に決められることじゃないって言ったんだけど、それならみんなにも聞いてみるって鈴が言って、実際にホームルームのときに言い出して」

なにをどうしたらそうなる。

「そしたらみんなはどうでもいいって感じで、結局はあたしがよければいいだろうって話になって」

「まさかうんって言っちゃった?」

「言ったというか言わされたというか、有無を言わせない状態だったというか……」

「なるほど、それはもうどうしようもないね」

「何何？ それは何がどうなったんです？」

真面目な会話をしているというのに茶々を入れるなど思うが、二組代表、いや、元二組代表は幸いにして冗談を冗談として理解できる状態ではなかった。

「鈴があたしに代わって二組の代表になったの」

「なんとということだ！」

何となく、どさくさ紛れで谷本さんに八つ当たりでもしようかと思つたが、谷本さんは既に俺から距離を取っていた。どうしてこういう時に限って察しいいいのか。

「ちなみに、代表になりたい理由は？」

「それは……どうしても叩き潰したい相手がいるからって……」

「それは誰のこと？」

「隣のクラスにいと……」

「どっち側？」

三組であつてほしい。三組の代表が鈴にちよつかいをかけて鈴が怒つたとかそういう展開であつてほしい。

俺は元二組代表が向こう側を指さすことを心から祈つた。

だが無常にも、さされた指は当然のごとくこちら側だった。

「だよね」

「昨日何があつたか知らない？」

「寝耳に水」

「そっか」

沈黙が流れる。

兆候でもあればとうに俺が乗り出している。

またも俺の知らないところで何かが起こつたのだろう。

今朝の一夏におかしい様子はなかった。だが一夏のことだ。自覚なしに何かやらかしている可能性は十分にある。というか絶対に何かやっている。

「分かつた。これから関係者に事情聴取して真相を探ってみる。鈴は人の話を聞けそうな状態？」

「今はちよつと無理かな」

「なるほど。じゃあまたそつちは様子見て話してみる」

「ありがとう。分かったらあたしにも教えてくれると嬉しいな。あたしも自分の国に説明する必要があつて。別に怒られるってほどじゃないけど」

鈴はいったい何をやっているのか。

周囲の状況を顧みることすらしないとは、相当に頭に血が上っている。

だが鈴のことは鈴の問題だ、後で存分に怒られるがいい。

今俺のすべきことは、事情を把握した上で学園に掛けあつて、鈴を代表の座から降ろすことだ。

模擬戦で一夏に鈴の相手をさせるなんて冗談ではない。専用機持ちで代表候補生で一夏をよく知っているなど、難敵を通り越してもはや天敵クラスだ。

戦つてどうにかするよりはもう最初から戦わないことを選択する方が絶対にいい。

「了解。あとはこちらで引きとるよ。必要があつたらまた」

「うん。それじゃがんばって」

来た時よりは少し元気になって、元二組の代表は自分のクラスに戻つて行つた。

さて、どこから手をつければいいか。

「か、甲斐田君……どうするの?」

「よし、じゃあ谷本さんは職員室行つて鈴の情報を盗んできて」

「了解ですつ!」

「えつ?」

そんなことできるかと言ふと思つたのに、あろうことか谷本さんは俺に敬礼して疾走して行つた。

「待つた! そんなことできるわけないつて普通思ふでしょ! といふかそれ以前に鈴の情報とか意味不明だし!」

慌てて俺は後を追ひ、初っ端から実に無駄な時間と体力を浪費する羽目となつてしまった。

19. 才能の一言で片付けられて嬉しい人間などそうそういないだろう。

才能の一言で片付けられて嬉しい人間などそうそういないだろう。

才能だけで何かをやって一番で居続けられる者などまずいない。あぐらをかいた瞬間にその座を狙っていた別の人間から引きずり降ろされるのが世の常だ。頂点にいる者は自分が一番の座にいるのは汗を流した数が一番だからだと誇り、実際に相応の努力をしてきている。

それなら逆に誰よりも努力をすれば一番になれるのかと言うと、もちろんそんなことはない。努力の質だ種類だ方向性だといろんな理由を述べてみても、同じ努力をしようがどうしても差というものが出てくる。ある者は壁と呼ばれる障害にぶち当たってつまづくが、別のある者は壁など最初からなかったかのように軽く飛び越えてしまう。それを外から見ている人間は才能の一言で片付けるのだ。

風鈴音は自分の目の前にある壁を力づくで叩き壊して前に進んでいた。そして、壁をやすやすと飛び越えてしまうような人間が大嫌いだった。

今俺の目の前で一夏が必死に悩んでいる。

どうやら自分は鈴の怒りを買ってしまったらしいと理解はしたが、どうしてそんなことになったのか思い当たる節がないからだ。

一夏の目には昨日の鈴の様子がいとも通りだったように見えていたようだ。

「織斑君に勝って力づくで自分のものにしようとしてるんじゃないの？」

相川さんはそう言っていた。つまり相川さんは一夏をものにでき

るのであればその手段も辞さないということなのだろう。

もちろん負けず嫌いの一夏にそんなことをすれば全くの逆効果になることくらいはさすがに理解していると思うけれど。

「いや、でもあいつすげー優しかったぞ。丁寧に教えてくれて、できたら褒めてくれて、全然悪い感じとかしなかったんだけど」

そうなのだ。ここ三日は順調過ぎるほどに順調だったのだ。

イグニツション・ブーストの存在は知らなかったが、鈴は一夏の動きを見て何が悪いのかをいろいろと指摘してくれた。

鈴はテスト前の一夏に勉強を教えていたりもしたので、一夏の扱いてもよく分かっている。口が悪くとも一夏を苛立たせやる気をなくさせるような言い方はしない。

そして一夏も言われたことは素直にきちんとやってのける。だから出来が悪いのならともかく、鈴が怒るような問題があったようには俺の目からも見えなかった。

「おかげでイグニツション・ブーストの目処がついたくらいだもんね」「それは俺的にはまだまだだというか、もうちよつとやらせて欲しかったっていうか……」

もう必殺技としてここぞで使うしかないと指揮班は諦め気味だったのだが、この三日で戦術になんとか組み込めるまでにはなっていた。一週間の積み重ねがあつた上でとはいえ、正直鈴のおかげとなる部分は相当に大きい。

そして昨日の成果を聞いて俺はイグニツション・ブーストの練習の終了を宣言し、今日からは本番に向けて相手を想定しながらの実践訓練を始めることになっていた。

残り四日、土日を含んでいるとはいえギリギリである。

「時間があればと思うのはみんな同じ。大事なのはその中でどこまでできるかということだから」

「分かってるよ。正直俺だってセシリアのときにやった相手の対策をしてないのは不安だったのもあるし。でもさ」

「なに？」

「だからって鈴とやりたかったっていうとあんまりそうは思わないんだ

よ」

これが一番の大問題である。一夏にとつても、俺にとつても。

一夏は一年ぶりに鈴に会えたことを素直に喜んでゐる。もちろん友達としてだが、学校の行事とはいえ再会早々に友達を敵として見なければならぬというのは嬉しくないのだ。それも相手が怒っているなどと聞いてはモチベーションも低い。

そして一方俺としては一夏の天敵を相手にするなど論外だという話である。

一夏の欠点まで指摘できるようなのを敵に回してどうすれば勝てるのか。

早々に舞台から引きずり降ろすしかない。

「それは僕だって同じだ。できることなら戦いたくない。鈴も感情的になつてるし、無理矢理奪い取った代表をやめてもらうのが一番なんだけど……」

「原因が分からないことにはどうしようもないか。最初はお前のせいかと思つたけどはつきり俺だつて鈴に言われたしなあ……。理由は言わないくせして」

「一夏に教え始めた時はすごく機嫌がよかつたのは間違いない。だからこの三日だね」

「外から見てる智希が分からないんじゃないや俺に想像つくわけないだろ。あー、こういうときに聞いたら教えてくれるのが鈴だつただけけど、その鈴が今怒ってるんだもんなあ……」

鈴は自分の中に溜め込むような人間ではない。文句があればためらうことなく口に出す。そしてそれが一夏のことであればまず本人か俺に言ってくる。

だから分からない。

実は今までも溜め込んでいたということだつたのだろうか。

「正直八方塞がりだ。一緒にいたクラスの誰に聞いてもピンときてないようだったし」

「じゃあ何なんだよ？　鈴の勘違いか？　だつたらそんなの知らねえよ」

一夏は鈴に理由を言ってもらえないことに苛立っている。自分に非があれば謝ることに躊躇などない。だが同時に自分が悪くなくても謝るというつもりもない。とりあえず謝ってその場を収めようなどという平和主義的解決は思考の外にある。

もちろん鈴にも一夏本人には言いたくない場合もあるのだが、その時は俺に言ってくる。俺に八つ当たりをしてくる。

そして俺が笑い飛ばして、鈴はものすごく悔しそうな顔になって帰って行く。それでも自分の力で立ち直って、また一夏の前にやってくる。もはや執念の域にあった。

「僕に言っただけでこなかったということはやっぱり鈴の信用を失ってみたいだね。確かにそれは仕方ないかなと思うけど」

「あれはお前も珍しくちゃんと謝っただろ。それに鈴の方も許さないならそういう態度してるからそれはない。俺にも智希にも言わないってことはまたあの訳分かんねえ女心的なやつか?」

珍しくがちゃんとかかかっていたのか謝ったにかかっていたのか是非とも確認しておきたいところではあるが、今はそんなことを言っている場合ではない。落ち着いた後に問い詰めることにしよう。

「それなら鈴方面はもうどうしようもないね。今すぐ思いつくのは千冬さんに強権発動してもらうしかないかな。一夏、千冬さんに頼んでもらえる? 鈴が暴走したから止めてくれって」

「俺? そういうのはお前の分野だろ?」

「僕が織斑先生にお願いして聞いてもらえるとと思う?」

「そうだった。むしろ余計不利なことになりそうだ」

「……まあそういうわけだから、教師にしてではなく姉に助けてもらうつもりで言っただけだし。千冬さんも鈴のことは知ってるし、鈴が勝てない相手だ。鈴がみんなに迷惑かけてるって言ったら無視はしないんじゃないかな。千冬さんに言われたら鈴だって逆らえない」

「なるほど。確かに手の付けられなくなった鈴を止められるのは千冬姉くらいしか思いつかないな。分かった、行ってくる!」

「よろしく」

こうすると決めた時の一夏の行動は早い。

あつという間に部屋を飛び出して行った。

千冬さんが今自分の部屋にいるかは分からないが、あの様子ならすぐに見つけ出すだろう。後は一夏が姉としての心をくすぐれるかどうかだ。

ああ見えて千冬さんは一夏には甘く、またこの一年間一夏に家事全般の面倒を見てもらっていたそうなので、プライベートでは意外と立場が弱い。

入学してここまで一夏は千冬さんに頼ってこなかった。ならば貯金の使いどきはここだ。

一方で俺にも何かやれることはあるだろうかと考える。やはり鈴の説得を試みるべきだろう。そろそろ頭が冷えてきているかもしれないし。

鈴には自分が抑えておけば丸く収まるなどという思考は存在しない。もし俺にも非があれば言わずにはいられないはずだ。

そう結論つけて俺も部屋を出ようとドアを開けると、なぜか篠ノ之さんが目の前に立っていた。

「一夏ならいないよ」

「いや、そういうことではないのだ。甲斐田、お前に話がある」

一夏と二人きりになると勇氣を出すも部屋の前まで来てへタレたかと思つたが、どうやらそういうわけではなさそうだ。

「何の話？ 一夏のこと？」

「それはそれで言いたいことが山とあるが、今はそうではない。その……凰鈴音の話だ」

まさか犯人は篠ノ之箒だったかとい瞬思ったが、目の前の相手にそういう後ろめたさはなかった。むしろ同情、哀れみの類だろうか、気の毒そうな顔をしている。

「分かった。それなら喜んで話を聞かせてほしい。じゃあ人に聞かれたくないだろうし会議室へ行こうか」

「え？」

だからといってどさくさ紛れに一夏の生活空間に入れると思うなど、甘い。

家探しを始める程度ならかわいいものだが、篠ノ之さんに限らずこの連中は油断すると何かと理由をつけて一夏の私物を持って行くこうとするのだった。

「よかった空いてた。空いてなかったら外にでも行くしなかったからね」

「そうだな」

ここに来る途中クラスメイト達ともすれ違ったが、声をかけてくる者は誰もいなかった。

理由は分かっている。俺がこれから篠ノ之さんに説教をして責め立てるのだろうと思われていたからだ。連中は謀ったかのように、篠ノ之さんに対して同情の視線を向けていた。

確かに俺が先頭を歩いて篠ノ之さんが神妙な顔をして後ろをついていつていたらそう見えるのかもしれないが、あの君子危うきに近寄らずを地で行く姿勢には少しイラッとくるものがあつた。谷本さんなどは目を閉じて両手を合わせ何事かをつぶやいていて、布仏さんまでそれを真似していた。元二組代表との件も含めるとそろそろ谷本さんには何かしらの制裁が必要なのかもしれない。

「甲斐田」

「なんでしよう」

「お前は一夏のことをどう思っている？ いや、一夏を見ていて、一緒にいてどう思う？」

「何を言いたいのかさっぱり分からないんだけど」

一夏の前にいて俺が邪魔だと思うのはよく分かるが、俺を恋敵などとまで考えてしまうのはもはや処置なしである。

「すまない、言い方が悪かった。甲斐田は一夏を見ていて恐ろしいと思うことはないのか？」

「恐ろしい？」

「そうだ、自分の中にある何もかもが一夏に吸収されてしまって、自分の存在価値などなくなってしまうのではないか、という恐れだ」

「ああ、そういうこと」

俺は篠ノ之さんの言いたいことをおそらく正確に理解できた。

「分かるのか！ そうだ、一夏にとって私など必要なくなるのではないかという恐怖だ。いや、別に今の自分が一夏に必要とされているなどと言うつもりはない。近い将来に、自分が、篠ノ之箒という一人の人間が、一夏にとって何の価値もない存在になってしまうのではないかと怖くなるだけなのだ」

「よく分かるよ」

俺にとつては実に今さらな話だが、篠ノ之さんは六年ぶりに再会しようやく一ヶ月だ。そろそろ目の前の織斑一夏という人間が見えてきたのだろう。

「そうか！ それなら教えてくれ！ どうしてお前はそうやって普通でいられるのだ!! 男だからなのか!! 男とはそのような感情を超越できるのか!?!」

「別にそういうのは男女関係なくて個人の問題だと思うけど、その前に言わせてもらおうと僕はそういう話を聞きにここまで来たんじゃないんだけど」

俺は答えることなく本題に入るよう促す。

いや、何となく言いたいことは読めてきたが、今は篠ノ之さんの話をしたいわけではない。

「す、すまなかった。まさか一発で理解されるとは想像していなかったので思わず興奮してしまった。風鈴音の話だ」

「うん。鈴に何があったの?」

「ここから先は全て私の想像だ。本人と話をしたわけではない。私がこの三日一夏の訓練を見ていて思ったことだ。だが私としてはきつとそうだろうと考えている」

「それで?」

「端的に言おうと、風鈴音は一夏の才能に嫉妬している」

言われてみればむしろ今までよく表面化しなかったとも言える問題だった。

「この三日で一夏は驚くべき成長を見せた。それまでの一週間試行錯

誤していた姿からは想像もできない速度だ。正解が見えた途端にこうなるとは、甲斐田、お前は分かっていたのだな。であるからあそこまで正解にこだわっていたのであろう」

「どうだろう」

「そうか。だがよくよく考えれば先だつての模擬戦の際もそうだ。入学初日は生身とはいえ私にかすることさえできなかったというのに、気がつけば模擬戦の前にはISに乗って私と打ち合うことができるまでになっていた。傲慢なことを言うつもりはないが私は剣道において中学日本一の称号を持っている。だから剣の打ち合いにおいてはそれなりの自負がある。それなのにだ」

「そうだった、この人は話しながらテンションのボルテージが上がっていく人だった。」

酔っているときまでは言わないが、一人で盛り上がってきている。

まあ気持ちは分かるけれど。

「もちろん今の一夏は穴だらけで、特に応用力が弱い。同時に複数の動きをするのは得意とするところではない。だが一つのことだけについては恐るべき集中力を見せる。そして凰もそのことは理解していたようで、一夏の行うべき行動を一つ一つに分解して説明し、順にやらせていた。そして一夏は全てをあつさりとやってのけた」

「それだけなら組み合わせるって応用ができないんじゃないの?」

「やはりお前は分かっているのだろうか? 確かに模擬戦の前もそのような状態だった。だが本番に入りその緊張感の中で一夏の集中力が高まっていき、ある時それら全てが一夏の中で一つに統合された。かくしてオルコットが何もできず、一撃を当てることさえできずに沈むという結果を産んだ」

なるほど、常々俺が感覚的に言っている一夏は本番に強いを言葉にするところということなのだろうか。

「でもその集中力はいつもってわけにはいかないけどね」

「もちろんそれは一夏の大きな課題だ。だが十分に克服できると思える課題でもある。そして先輩方は言っていた。一夏がどこまで成長するかとても想像がつかないと。私も剣の腕を褒められたが、同時に

既に方向性が固まっているとも指摘された。つまり私は順当にしか成長することができないのに対し、一夏はある日突然化けるという話だ」

最後の方はちよつと自嘲めいていた。自分の中で盛り上がったいることに変わりはないのだが、おかげでどんどん篠ノ之さん本人の方に話が偏っていつている。

「なるほどね、それを鈴は嫉妬したと」

「す、すまない。またも興奮してしまっていた。嵐のことだな。一緒にいた時間が長いだけあって、奴は一夏の特性を理解していただろう。だがおそらくこれまでは同じ土俵に立つことがなかった。立つたとしても、一夏の方に競うつもりがなかった」

「そして今ISという同じ舞台に立つてはつきりと感じてしまったと」

「そうだ。同時に一夏との差も理解しただろう。この速度で一夏が成長してはすぐに追い抜かれる程度の差だと」

「だから今なら勝てると思つて喧嘩を売つた？」

「馬鹿を言うな。そのような程度の低い話ではない」

確かにその程度なら鈴など大した相手ではない。

「自分の存在意義がかかっているからだ。最初に言つたように、根源は苦もなく自分を追い抜いていく才能に対する嫉妬だ。そして行動の意味は、これまで自分の積み上げたものを無意味にしてしまうことへの抵抗だ」

「まるで自分のことのように言うね。それなら将来篠ノ之さんも一夏の敵になりかねないのかな？」

「私は一夏に追い抜かれてしまうことなど恐れてはいない。私が怖いのはそのことによつて一夏が私から興味をなくしてしまうという未来だ。というかお前は最初から分かつていながら私の口から言わせようとしているな？」

と言つてもはつきりと言葉に出すのは大事なことだ。

俺は将来一夏の敵に回りかねない人間を一夏の側に置いておけるほどの度量はない。

「分かったつもりにならず人とコミュニケーションを取れと僕に言ったのは誰だったかな？ まあ僕は篠ノ之さんにもISの才能は十分にあると思うけどね」

「相変わらずの憎まれ口を。だが私にISの才能があるという発言ははつきりと否定させてもらうぞ。何しろ私のIS適正はCランク、AランクのオルコットどころかBランクの一夏にさえ及ばない。まさか自分より上は皆才能があるなどとは言えないな？」

「そもそもIS適正って何だって話だよ。織斑先生もあってないよ。うなものでって言ってたし」

「世界最強にしてIS適正Sランクの人間の言葉にどれほどの説得力があるのだろうか。私の意見としては学生の身分のうちには、という程度だ」

IS関係の世界にいる人間はIS適正というカースト制度に支配されている。

このIS学園はIS適正Dランク以下は受験さえ叶わず、Cランクでも特別な技能がなければ合格できない。Aランクは数が非常に少ないので、事実上Bランク同士の争いだ。

そういう意味では織斑先生の言葉は意味が通る。ほとんどがBランクなのだから確かにあってないようなものだ。

「そんなことないよ。なんたって篠ノ之さんは」

「そこまで私の口から言わせようとするのか。稀代の天才の妹だからこそ私は確信を持って自分に才能などないと言い切れるのだ」

目立ち過ぎる一夏や俺の存在でなんとなく隠されてはいるが、篠ノ之さんもIS学園の誰もが知っている人間である。もちろんISの生みの親にして天才篠ノ之束博士の実の妹として。

だが篠ノ之さんは自分の姉について一切口に出さない。もちろん立場上下手なことは言えないというのもあるが、それにしても全く口にしらない。篠ノ之という苗字を出さずに偽名を使っていれば誰一人気づかないだろうという次元で存在を匂わすことすらしない。

そこまで徹底されてはクラスメイト達もその意思を汲み取り、このクラスにおいて授業以外で篠ノ之束という人名が出てくることはな

かった。

天才の妹として見られるのは辛いことなんだろうなと、みんなは思っているのだろう。

一夏でさえ話題に出すことはなかった。もったもこちらは気を遣ってではなく自分が口にしたくないという風情だったが。

「それならわざわざI Sの世界に入ってもなくてもよかったのに。一夏にI Sを使えることが分かったのは受験の出願が終わった後の話だったよね？」

「……風の話をしていたのではなかったのか。とにかく、風は自分が苦労して会得したことを一夏が簡単にものにしていく光景に耐えられなかったのだらうと思う」

「それ一夏は何も悪くないよね」

そんなに自分の話をしたいのであればこの際させてやろうと思っただが、他人に踏み込まれるのは嫌なようだ。

「そうだ。だからこそ風にとって罪は重いとも言える。簡単に会得されては自分の苦労や努力を理解すらされないのだからな」

「それこそ知ったことではないというか、そもそも努力って他人に認められるためにやるものじゃないだらうに」

「言い方がよくなかったか。一夏が簡単にやってのけた事柄を自分は苦労しなければできなかったという事実を思い知らされるからだ」

「それで嫉妬に至ると」

俺は鈴が一夏と勝負をすることはないと思っていた。

勉強の類は一夏の方にやる気がないし、スポーツなどは同じ競技でも男子と女子で分かれている。現代は基本的に男と女を同じ土俵で競わせるようなことをしない。それどころか男が女の分野に口を出すことさえ嫌う。

鈴が勝ち誇るのには常に同性に対してであって、男という存在は一夏にしる俺にしる競うような存在ではなかった。男を見下しているというのではなく、優秀な自分を見せる対象として認識していた。そしてその最たる相手が織斑一夏だった。

「同情はする。一夏と競うことが前提にあれば、きっと私も認められ

ないという気持ちになったであろう」

「篠ノ之さんはそうじゃないんだね」

「私は最初から一夏と競うつもりなどない。それ以前に私は自分が一番であるべきだなどと考えたことは一度たりともない。剣道についてはあくまで結果的にというだけだ」

まあ、そのあたりが俺が篠ノ之さんを認めて鈴を認めない理由でもある。

本当は一夏にとっての一番にはなりたいのだろうけれど。

「うん、よく分かったよ」

「そうか。ではどうするつもりだ？ 現実を認めさせるのが本人にとってもいいとは思うが、現状では一夏にとって勝ち目の非常に薄い相手だ」

「そうだね。もちろん戦わないのが一番などころではあるんだけど」

「また口で丸め込むつもりか？ あれは悲痛なまでの意地であって他人から指摘されて変えられるようなものではないぞ？」

「本人に得があるって話でもないしね」

本当に、たとえ勝ったとしてもこの行動は鈴にとって何もいいことがない。

どんな事情か知らないが遅れて入学してきて最初にやったのが自分のクラスの代表を無理矢理奪うこと。その姿を見ていた鈴のクラスメイト達はどう思っただろうか。まあ優勝でもすれば結果論的に鈴に対する見方が和らぐのかもしれないが、優勝の特典は専用機持ちの鈴には特に必要もない。

それに何より肝心の一夏の機嫌まで損ねてしまっている。話を聞いて一夏はすぐさま二組へ駆け込んだが、鈴には聞く耳など一切なくけんもほろろに追い返されてしまった。俺とは口をきこうとさえしなかった。

「損得で行動していればそもそもこのようなことにはならない。そしてもう足を踏み出してしまった以上は戻れない」

「一応、今無理矢理引き戻せないかとは考えてる。具体的に言うとい一夏から千冬さん、織斑先生に頼んで」

「私の前では千冬さんで構わないぞ。だがそういうことか。一夏の友人ということでも元々面識があるのだな」

「鈴が苦手にしてるって感じかな。身長差もあるし、文字通り上から言われたら逆らえない」

そして鈴が最終目標にしている人間でもある。一夏を横に置き千冬さんを超えるのが鈴の人生の目標だそう。中二の終わりにやったお別れ会するとき鈴は俺に熱意を込めて語っていた。どうやって超えるつもりかと思っていたが、その時から鈴はISの世界に進むつもりだったのだろう。

「なるほど。だが甲斐田、千冬さんがそう都合よく動いてくれるとはあまり思えないのだが。その、今までの行動を鑑みるに」

「うん、もちろん理想通りにいくとは思ってないけど、だからといって鈴の行動をそのまま見逃していいかと言うとそういうわけでもないはずだ。毎日職員室行って感じたけど、千冬さんはただの一教員じゃない。一夏がいるから今年是一年一組の担任になったけど、本来はそういう立場とは違う。今やISの学園の顔だしもつと責任のある人だ」

そんな簡単に下克上していいのであれば代表とはいったい何なのだろうという話になる。例えばリーグマッチでクラスの代表として学園外の人間も観戦する模擬戦に出るなど、ただのクラス委員ではない。

コロコロ変わるのであればもう最初から決めずその時の成績優秀者でいいじゃないかとなるだろう。

そうだともう確信しているが千冬さんはリーグマッチのルールを決めたりとIS学園に深く関わっている。だから少なくとも何らかの動きは見せるはずだ。

「立場上看み過ぎ」せるはずがないという話か。それなら一夏ではなく甲斐田が千冬さんに言いに行けばよいのではなかったのか？ 甲斐田なら今の話で押し切ることもできるであろう。まあ少々クレーマーではあるが」

「それは絶対に駄目。僕が一夏と鈴を戦わせたくないと分かれば千冬さんは絶対にそうなるように仕向けてくる。あくまで今回の話は鈴

の暴走で、一夏はそれを心配してのことでなければならぬんだ」
「お前は本当に性格が悪いな」

篠ノ之さんは呆れたようにため息をついた。
「というか本当に俺は関わっていないのだから、横から出て行ってしまつてはむしろ怪しまれる。既に俺はオルコットの件の際に話を学園外にまで広げて大目玉を食らっている。鈴以外と接触してわざわざ千冬さんの機嫌を損ねるような真似はしない方がいいだろう。」

本当は鈴の所属する中国や元二組代表の所属するカナダのIS関係者を煽つたりしたいところではあるけれど。

「あとはそろそろ鈴の頭も冷えてくるだろうし、本人と話をして事態の深刻さを理解させようと思う。鈴も馬鹿じゃない。冷静に考えれば自分の行動がまずいことくらい分かるはずだ」

「相手を追い詰めて逆に激昂させるのではないぞ」

「それはもうやったから大丈夫」

「何が大丈夫だと言うのだ」

笑い合つて、俺達は会議室を後にした。

この後は鈴の部屋に行つてみようか。

と、篠ノ之さんと別れ鈴の部屋へ向かおうとした時、どこからともなくクラスメイト達が湧いて出て篠ノ之さんを連れて行ってしまった。

訳も分からずうろたえる篠ノ之さんに対し、連中は肩を優しく撫でたり声をかけたりして引つ張っていく。

まさか篠ノ之さんが俺にいじめられたとでも考えて、慰めようと待ち構えていたのだろうか。

誰一人としてこちらを見ようとはしない。なんだこの差は。

これでは俺はクラスを恐怖で支配する暴君で、連中は圧政に耐えながら肩を寄せ合う国民ではないか。

実態がそうならまだしも、俺は篠ノ之さんの自分語りまで聞いていたというのに、これは理不尽過ぎる。

呆然としてみると、誰かに後ろから頭を撫でられる。気配すら感じないなかつたので、俺は反射的に振り返り後ずさつた。

目の前には手を伸ばした布仏さんが笑顔で立っていた。

「みんな仲良しだね〜」

もしかして俺という共通の敵を作ることクラスは一つにまとまり仲良くなつたのだろうか。

別に文句があるならあるでもいいが、それならせめて事実に対してだけにしてくれと切に願いたい。

鈴の部屋へ行くとハミルトンが出てきて、鈴は呼び出されて出て行ったと答えた。

自分の部屋に戻ると満足気な一夏が出迎えて、自分の気持ちは千冬さんにしっかり伝わったと得意げに語った。

一応事態は進んでいるようだ。

「なあ智希、俺さつきから嫌な予感がしてるんだけど」

「いい話だって織斑先生は言ってたけどね」

「まさかお前は喜べなんて言葉を素直に信じてたりしないだろ？」

「ぜってーロクでもない話に決まってる」

「鈴のことだとは思うけど、わざわざ僕らだけ呼び出して言うことかかっていうと……」

「まあ個人的な話だからな。千冬姉も先生として言うわけじゃないんだろ」

放課後、俺と一夏は織斑先生から話があると職員室の側にある織斑先生の部屋まで呼び出されていた。いい話だから喜べと言っていたがもちろんその言葉を信じる者などいない。

「智希はいつもここで作業してるのか？」

「うん、ほとんどは書類の整理。去年の分が全然まとまってなくて」

「千冬姉はここでもそうなのか。全部頭に入ってるからいいとか言ってるけど、他の人間には分かんないんだからさ」

「頭の中にしかなかったら本人がいないと駄目だからね」

結局俺のやっている作業は織斑先生の頭の中を他人が分かるようにすることである。

書類を分類し、整理しながら、俺は織斑千冬がIS学園で相当な地位にしていることを知った。

「すまない、待たせたな」

「お茶入れてきましたよ、どうぞ。甲斐田君はもう飲み慣れていますがね」

「あ、ありがとうございます山田先生」

織斑先生への文句を言っていた俺達は慌てて背筋を正す。

いろいろやらされているがお茶入れだけは山田先生が譲らなかった。この人は織斑先生のお茶入れだけは自分の使命だとも考えているようだ。

「さて、話の内容だが喜べ。夏休みのカナダ旅行が決まったぞ」

「は？」

「よかったですね。普段はこのIS学園から出られませんから、この機会を楽しんでください」

また話が斜め上方向に飛んでいった。

「期日は八月の頭の一週間だ。行き帰り含めてであるから実質は四五日ほどだが、もちろん観光をする時間はある。普段とは違う景色を存分に眺めてくるといい」

「織斑先生質問いいですか」

「なんだ？」

「行くのは僕ら二人ですか？」

「それを伝えるためにわざわざここまで呼んだのだから当然だ。ああ、二組の凰鈴音も同行する」

「鈴が!? 千冬姉どういことだよ!?!」

カナダに鈴。もう確定だ。

「学園では織斑先生と呼べと何度言わせる。凰の起こした行動については織斑に言われる前から把握していた。必要もなく代表を変更するなど、当然本来は認められることではない。だがハミルトンを含めた二組の生徒全員が賛同している上、凰やハミルトンが自身の本国に報告しており国際的な問題にまでなりかけていた。よって簡単に否定して終わりというわけにはいかなくなっていた」

「お二人とも既に理解していると思いますが、自国から送り出した生徒が代表になれるのであれば喜んで応援しようとするのです」

風は限りなく悪い方向へと吹いている。

「かくして私達は落とすどころを探していたのだが、そんな折に織斑から大事な友人のことなので協力できることがあれば是非とも協力したいとの申し出があった。正直渡りに船だった」

「いや、そりゃ確かにできることがあればやるって言ったけどさあ……」

「お友達のために何かをしようというその気持ち、とてもすばらしいと思います」

今ここに山田先生までいるのはそういう理由か。

普段はどちらかと言うと俺の味方をしてくれる人だが、こういう理論を持ち出されてはなるほど迷わず織斑先生に賛同するだろう。

「結論として、風はリーグマッチに出場するがそれはあくまで代理としてであり、クラスの代表はこれまで通りハミルトンとすることで収まった」

「なんだそれ!？」

「対外的にはハミルトンにやむを得ない事情が発生したので、リーグマッチにおいて変わりに風が出場するという形になるな」

「だったらハミルトンさんが代表のままでもリーグマッチにも出ればいいんじゃないんですか」

「それができれば最初からそうしている。リーグマッチという自国の新型機のお披露目機会を作ることと中国と風には納得してもらった」
外から固められてしまった。何と言われようと俺は動くべきだったか。

「カナダの方はそれでいいんですか?」

「そこでお前達の出番だ。希少な男性操縦者と誼を通じることができるのであれば喜んでリーグマッチの機会を譲ってくれるとのことだ。三ヶ月先の話にはなるが、お前達がカナダを表敬訪問することで全て丸く収まった」

「きったねー!」

「もちろん観光の時間も用意してもらえようように言っておりありますから。普段はこのIS学園の中だけで過ごしていて外を見る機会もないと伝えてありますので、大歓迎を受けていろいろ見せてもらえらると思えますよ」

織斑先生が人の悪い笑顔を浮かべ、山田先生が慌てて取り繕うが、結局のところ俺と一夏がうまく利用されたことに変わりはない。確かに一夏のことだから本心で何でもやると言ったのだろうが、これではただの鈴の尻拭いではないか。

「もちろん中国に対しては貸し一つだ。お前達も今後中国に対して何か要求があれば聞こう。嵐についてはリーグマッチが終わった後話をするがいい」

「終わった後？」

「そうだ千冬姉」

「織斑先生だ」

「織斑先生、鈴、嵐さんがあんなことした理由はなんだ、何ですか？」
「そうか、お前達は知らないのだったな」

篠ノ之さんから聞いたことは誰にも話していない。また篠ノ之さんにも口止めしておいた。

理由は簡単だ。このIS学年の生徒には多かれ少なかれエリート意識がある。つまり程度の差はあれど鈴と同じ種類の感情を抱く人間がいるかもしれない。だからそういう感情を今この時期はわざわざぶつきたくないのだ。

「知ってるんですか？」

「本人から話を聞いたのももちろん知っている。が、それを今お前達に説明することはできない」

「なんでだよ千冬姉！」

「だから織斑先生だと何度言わせる」

ということとは鈴の感情を知った上でこの対応をしたのか。

篠ノ之さんの言った通りであるなら、織斑先生は鈴に対して理解を示したことになる。

あるいは全く別の理由があったか。

「二人ともそんな顔をするな。凰には終わった後きちんと説明をするように約束している。リーグマッチ終了後に三人で話せ」

「別に今聞かせてくれたって……」

「それは今説明するとリーグマッチに差し障りがあるからなんです
ね」

「……そうだな。全力でやり合うにはな」

「分かりました。終わった後聞くことにします」

「智希？」

「ほぼ間違いない。後は鈴本人を少しつつけばその反応で確定できる。」

織斑先生は俺が既に理由を理解していることが分かったのだろう。軽く笑った。

「織斑先生、あと一ついいですか？」

「どうした甲斐田」

「僕自身は何でもやるとは言った覚えがないんですが、どうして一夏とひとまとめにされているんでしょうか？」

「智希お前自分だけ裏切るのか!？」

別にそういうことではない。

もう俺にはひっくり返せそうもないので、せめて嫌味の一つでも言つて一矢くらい報いておきたいだけだ。

「何だ、甲斐田にはそういうつもりはないのか？」

「いいえ、でも僕は織斑先生に対して直接口にしたことはありません。そんな大事なことなのだから、僕にも一言聞いて意思を確認しておくべきではなかったでしょうか」

「お前自分だけずるいぞー!」

「別にやらないとか言つてないから」

猛烈に抗議する一夏を手で払いのけて、俺は織斑先生を真っ直ぐに見る。

するとそんな俺を見て織斑先生はおかしそうに笑った。これは珍しい。というか本気でそう思っている。

「ならば智希、忠告しておこう。情に訴えたいのであれば徹底しろ。」

昨夜お前は一夏と一緒に私のところに来るべきだった。本当に鈴音のことを思つての行動であると思つたのであればな」

「いやいや、だって智希も来たら千冬姉は言うこと聞いてくれないだろ!？」

「その計算してやった行動が間違つているということだ。今回に関しては智希に非がない。ならば堂々と乗り込んで来ていいはずだ。まして暴走した友人を思つてという大義名分まである。なぜそうしなかった？」

「それは……」

一言も喋つていないどころか顔さえ合わせていないのに、俺の考えは完全に見透かされていた。

「私に対して後ろめたさがあるからだ。もつと言えば、私に鈴音をどうにかして代表から降ろしてもらわなければ困るからだ。当事者の周囲を煽るような真似をしなかったのは学習したと褒めておこう。だがその方向で行くのなら利害など捨てて動いているように見せる必要がある。中途半端に計算が見える行動など害悪以外の何物でもない」

俺は唇を噛んで下を向いた。

きつと一夏と一緒に行ったら行ったでまた変に疑われて別の結末があつただろう。

結局のところ今回の俺は千冬さんと対決することを避けて逃げたという話だ。

自分では千冬さんを説得できないと諦めていたのではなく、面と向かつて話をしては自分の目的が看破されてしまうと怖がってしまったということなのだ。

「今回の智希の敗因は鈴音の暴走を止めることと鈴音を代表から降ろすことを同一に捉えてしまったことだ。鈴音の暴走を止めた結果、鈴音は代表から降りた、となるようにすればよかったのだ。カナダ旅行はそれを学んだ授業料だと思え」

「えっ、それじゃ俺は?」

「お前は自分で何でもやると言っただろうが。軽々しく口にするから

こういうことになる。もつと考えて発言をしろ」

「なんだそれ！」

はつきり負けと言われてしまった。もちろん全て見透かされてしまった上、最悪の結果になってしまったのだから言い返す言葉などない。

俺の目の前に座る山田先生は何が嬉しいのかにこにこしている。

まさか俺を笑ったのことはないだろうが、もちろんそういう人ではないのは分かっているが、そんな幸せそうな表情をされるとこちらはこういう顔をしていいのか分からなくなった。

俺と一夏が打ちひしがれて力なく廊下に出ると、隣の職員室の前にいた女生徒がこちらを向いた。

知った人間だろうかと顔を見るとクラスメイトだった。整備班のリーダー岸原さんと鏡さんだ。

しかし表情が非常にまずい。鈴よりは少し大きいくらいで小柄な岸原さんが、もう全身で泣きそうになっている。というかほとんど泣いている。

「甲斐田君!!」

叫ぶなり岸原さんが突進してきた。待て、俺は闘牛士ではないし赤い布も持っていない。

だが幸いにして岸原さんは俺の目の前で立ち止まってくれた。急ブレーキをかけられるだけの自制心は持っていたようだ。

「オルコットさんが！ オルコットさんが！」

「セシリアがどうかしたのか!?!」

今度はオルコットか。本当に気の休まる暇がない。

「オルコットさんが、嵐さんと言い争いになって、そのうちお互いに自分のI Sを展開し始めて！」

「I Sで喧嘩してるのか!?!」

もう目眩がしてきた。本当に自由な連中だ。

「二人とも専用機だし、誰も手が出せなくなつて、それで……!」

「二人はどうなってる!? まだやってるのか!」

「一夏、岸原さんをそんなに揺さぶったら答えられないから」

「あ、す、すまん……」

慌てて一夏が岸原さんの肩にかけた手を離す。

しかし鈴とオルコットがガチ喧嘩とは、確かに血の気の多い二人ではある。

鈴はすぐ拳で決着をつけようとするし、オルコットもプライドが高く一夏と煽り合って決闘などと言い出す輩だ。お互いにヒートアップすればまあ自然な展開としてそうなるだろう。

「それで、今は?」

「あつ、えつと、私は……」

「岸原さん?」

「理子は喧嘩が始まった時点ですぐ甲斐田くんを呼びに行ったからその後のことは知らないんだ。そして終わったから私が顛末を報告に来ただけど、同時になっちゃったみたいね」

動転していて挙動不信心岸原さんを見て鏡さんが横から補足してくれた。

ということは岸原さんはずっと職員室の前で俺達を待っていたのか。そしてその間に不安で押しつぶされそうになっていたと。緊急事態なのだから無理矢理押し入れればいいのに、律儀というか勇気が足りないというか。

「なるほど、もう終わった後なんだね」

「鈴は!? セシリアはどうなったんだ!?」

「え、いや、鳳さんは帰って行ったよ。どこに行ったかは知らないけど」

「セシリアは!?」

「それがオルコットさんは……」

鏡さんが言いよどむ。オルコットは負けたか。

「その場にいた人間で医務室に運んでる。気を失ってたけどISSには絶対防御があるし、体については大丈夫だと思う」

「医務室だな!」

言うなり一夏は全速力で疾走して行った。

鈴はオルコットが気絶するまで叩きのめしたか。それともオルコットが気を失うまで負けを認めずに食らい付いていたか。あるいはその両方か。

「甲斐田くん?」

「ごめん、それじゃ僕らも医務室に行こうか」

「そうね。行きながら経緯を説明するわ。理子?」

鏡さんにつられて振り返ると、安心したのか岸原さんが泣き出していた。右手に自分の眼鏡を持ち、左手で顔を押さえて涙を流している。廊下で一人待ちぼうけしている間にそこまで不安に支配されてしまっていたのか。

「岸原さん、わざわざ知らせてくれてありがとう」

とりあえず泣き止んでもらおうと声をかけてみた。

隣の鏡さんがありえないものを見るような目を俺に向けている。どいつもこいつも。

「甲斐田君!!」

岸原さんは俺の言葉に反応して顔を上げてくれたのはいいのだが、さらに顔をくしゃくしゃにして大泣きモードに入り、あろうことか床にへたり込んでしまった。

完全に失敗した。

「か、甲斐田くん。私先に行ってるね」

それを見るや鏡さんが逃げ出した。

待て、この状況を俺一人でどうにかしろと言うのか。岸原さんとよく一緒にいるの見るがお前達の仲はその程度だったのか。というか職員室前の廊下で座り込んで大泣きしている生徒に対して俺はどうすればいい。

「甲斐田、そんな場所で泣かれては迷惑であるから岸原をこちらに連れて来い」

「どうぞ、こっちなら大丈夫ですよ」

救いの声の主は仇敵織斑千冬だった。山田先生も笑顔で手招きしている。

今しがた敗れた相手に助けを乞うのはどうかと思ったが、背に腹は代えられない。

こうなったら織斑先生に岸原さんを押し付けて逃げ出そう。

「場所だけ貸してやる。岸原が落ち着いたら責任持って連れて帰れ。まさか置いて帰ろうなどとは考えるなよ」

だがそれすらもお見通しだった。俺は再度の敗北に思わず頭を垂れる。

こんなことをしている場合ではないのに。早く医務室に行って状況を確認しなければならぬのに。

俺は深い溜息を一つ吐いて、泣き続ける岸原さんの手を取って立ち上がらせる。

そしてそのまま手を引いて織斑先生の部屋へと歩みを進めた。

そういえば施設にいた頃はチビ共の手をこうやって引いていたなと思った。

20. 相手と仲良くするにはまず共通の敵を作れ。

相手と仲良くするにはまず共通の敵を作れ。

とはよく言ったものだ。

例えば俺を悪者にして俺に対する文句をみんなで言い合う。

そうすると何となく同じ悩みを持つ仲間意識のようなものが生まれる。

人の悪口を着にしやがってと思うが、クラスが一つにまとまるのを促進してくれたということもまた確かだ。

俺のいないところで何を言っているかまでは知らないし、別に知る気もない。だが連中は俺の目の前で俺を諸悪の根源であるかのように扱っている。三十人もいれば反応はいろいろ違っているだろうと普通は思うのだが、クラスメイト連中は皆揃って俺を同じようにぞんざいに扱う。どう考えても俺に対する共通認識がある。

例外は谷本、布仏、岸原くらいだろうか。まあこのへんはまた別の意味で面倒だが。

だが他のクラスの様子も見聞きするようになって、一年一組の団結度は他のクラスよりも明らかに高いと感じていた。

二組は相当にまとまりがない。なるほど他人に興味のない鈴が放り込まれるのももつともだという次元で、二組の人々は基本自分と自分に関わることが第一であり全てだそうだ。

鈴が部屋の相方ハミルトンから聞いた話なのでどこまで本当かは分からないが、自分に関係ないと思っっているリーグマツチは誰もまるで気にしていないとのことである。元代表ハミルトン自身も母国から言われて代表に立候補しただけであり、人前で晒し者になることをよく思っていないようだった。

そして四組も別の意味でまとまっていない。四組は二組ほど個人主義というわけではないが、数人のグループで固まっているそうであ

る。

こちらが俺が見たわけではなく四組代表が言っていたという布仏さん情報だが、狭く深くという感じらしい。いつも一緒に行動するグループ内では仲良くしているそうだが、グループ同士となると大して交流もないとのことだ。

ためにクラス全体という意識が希薄になっていて、二組と同じくリーグマッチには興味さえ示していない。

一方で三組五組はリーダーによって統制されていて、リーグマッチにも気づいて色気を出している。

両方を見比べた俺の感想だと、三組代表が大統領、五組代表が皇帝、というところだろうか。

どちらもリーダーシップを発揮しているが、そのやり方は違っていた。

三組代表は調整型で、自分を誇るような真似をしない。自らが前に出るという行動によってクラスの支持を得ているようだった、確かに一人で俺に話しかけてきたりしている。

だが五組代表は王様型で、常に取り巻きを引き連れている。本人の言によるとクラス内でのリーダー争いに勝って代表になったとのこと、文字通り力で勝ち取ったその座である。従えている、という表現がふさわしい振る舞いだった。

じゃあ我らが一組はどうなんだと聞かれると、自分がその中にいるというのもあるが正直よく分からない。

代表は一夏だがクラスをまとめる気持ちなど一ミリもない。俺もクラスメイト連中には好き勝手されていてとてもリーダーシップを発揮できているとは言えない。

だが不思議なことにクラス内は非常に仲がいい。一夏をめぐるライバルなはずなのに、一夏と関係ないところでは普通に話し友達のように笑っている。それどころか一夏対策会議で揃って頭を悩ませるというよく分からない光景まで広がっている。

入学当初は孤立するんじゃないかと危ぶんでいた篠ノ之さんですが、今や普通に馴染んでいる。最初の整備班会議では鏡さんと連携

して保身に走るといふ行為までやってのけていた。

まあ実は裏では陰湿な争いが繰り広げられているのかもしれないが、少なくとも今の雰囲気全員が大事にしようとしているのは俺にでも分かる。

その結果俺を極悪人扱いして小芝居まで始めるのは非常にいただけないが、一夏のために一つにまとまってくれるのは悪いことではない。

今の一組をあえて表現するなら全体主義とでも言えばいいだろうか。

そして今、クラスがさらに一つとなれる事件が起こっていた。すなわち、鳳鈴音という外敵の出現だ。

落ち着いたはいいが今度は挙動不審になってしまった岸原さんを連れて医務室に入ると、部屋の中は一色の空気に包まれていた。明確に喜怒哀楽の怒だ。

誰も彼もが怒った顔を見せている。なんと布仏さんまでが頬を膨らませている。まあ全く怖さは感じないが。

いや、怒った顔をしていないのが二人だけいた。一人は谷本さんだ。こんな場所でなぜか床に正座して鷹月さんの説教を受けている。目を閉じて眉間にしわを寄せ歯を食いしばり、嵐が通り過ぎるのをじっと耐えているようだった。

そしてもう一人はもちろん、この場の主役であるオルコットだ。ベッドの上で上体を起こし、申し訳なさそうな顔で周囲を見つめていた。

意識も戻り、周りの様子からして体の方も大丈夫なのだろう。

「おせーぞ智希、何やってたんだよ」

一夏の問いに答える前に、俺は周囲を見渡して鏡さんを見た。鏡さんは即目をそらした。

逃げた上に事情さえ説明していないというのか。

「ちよっといういろいろあつて。少し具体的に言うともまた織斑先生に捕

まっつた」

「そ、そうだったのか。それはすまん」

「それで、オルコットさんは大丈夫なの？」

「甲斐田さん……」

後ろにいる岸原さんが俺の腕を何度も引つ張っている。

自分のせいだと言いたいのだろうが、俺はもうそのへんはどうでもいい。

「というか俺の腕を引つ張らず口に出せと言いたい。」

「ああ、セシリアの体はなんともないそうさ。さすがはISの絶対防御ってところだな」

「念のため一日安静にと言われてるけど、校医の先生の言い方からして特に問題もなさそうよ」

オルコットの代わりに一夏が答え、鷹月さんが補足した。

視界の端で天敵から解放された谷本さんが胸に手を当て大きく安堵の息を吐いている。

「そう。よかったねオルコットさん」

「甲斐田さん……」

「鈴の奴マジふざけんだよな。あれだけ押し通してまだ何が気に入らないって言うんだよ」

鈴の気に入らない相手はもちろん今俺の目の前で憤っている男だ。

「甲斐田さん、その……」

「まあまあまあ、オルコットさんのやったことはまるつきり無駄ってわけじゃないわ。いや、それどころか相当に有用よ。だって織斑君の対戦相手の戦闘情報なんだから」

「鷹月さん？」

「今織斑君から聞いたわ。リーグマッチに凰さんが出てくるの決まりだそうね」

「ごめん」

「甲斐田君にどうにかできるようなことじゃないでしょ。というかそもそも今回に限ってだけど甲斐田君に責任はないし。それよりも決まったからには対策を考えないと」

相変わらず俺に一言多い気もするが、鷹月さんにしては珍しくポジティブだ。

ああ、視線からして同じ指揮班のオルコットを気遣ったの何か。オルコットが弱々しくも嬉しそうな顔を見せている。

「セシリア、カタキは俺が取る。決してお前のやったことを無駄にはしない」

「一夏さん……」

一夏に真剣な顔で見つめられて、オルコットが陶醉の表情に変わった。

鷹月さんが呆れ顔になり、一方周囲は羨ましそうに見ている。谷本さんがなぜか頷きながらメモを取っていた。

「あー、まあそういうわけだから、オルコットさんはさっきの模擬戦での凰さんの情報を私達に教えてほしい。嫌なことを思い出させて悪いとは思うんだけど、無駄にしないためにもちよつと我慢してお願いいい」

「いいえ、負けたのは全てわたくしの実力ですわ。それにこの経験が一夏さんのお役に立てるのであれば、喜んで」

「ありがとうセシリア、よろしく頼む」

場は一転して和やかな空気になる。

殺伐としたままであれば俺も言い方に気を遣おうと思ったが、鷹月さんがそれをやってくれた。

であれば今の俺の役割はこうだ。

「ではですね、まず……」

「ちよつと待った」

俺の発言に、周囲の視線が俺に向く。みんな不思議そうな顔だ。いや、ただ一人、鷹月さんだけが気づいたようで、口が小さく開いた。

「甲斐田さん？」

「オルコットさん、何勝手なことしてるの？」

一瞬で周囲から俺に鋭い視線が突き刺さる。

まあいい雰囲気をぶち壊しにするのだから当然と言えば当然の話だが。

「鈴に喧嘩売られて買っちゃった？ 鈴って基本他人に興味のない人間だから、こつちから何かをしないと喧嘩売ってくるまではしてこないと思うんだけど」

「そ、それは……」

周囲の視線が怒りに変わる。俺を鈴側の人間だと感じているのだろう。鈴に対する怒りの感情が俺に向いている。

「違うのかな。じゃあ全部作戦通り？ 鈴の戦闘情報を得るためにわざと鈴を煽って喧嘩したの？ だったら僕はそんなことするって聞いてないんだけど。この前何かをするときは指揮班だけでも合意を取ってやろうって決めたよね？」

「そのようなつもりはありませんでした……」

オルコットが下を向き、周囲も気づいたようで俺に対する視線が和らいだ。

要するに、俺はオルコットのスタンドプレーを責めている。

俺だって鈴の暴走対策についても一応指揮班に話と報告はしている。

有用無用を語る前に何やらかしてくれてるんだということだ。

「それならどうして？ 知り合って一週間、まだ面識あるかないかぐらいの関係だと思っただけで、喧嘩までするってよっほどのことだよね？」

「それはつい……」

オルコットの首が下へ下へと降りて行き、声もか細くなっていく。

「感情に任せてってこと？ それオルコットさんは二回目だね。つまり一夏のとくと同じことを繰り返したのか。それなら……」

「いい加減にしろよ」

突然、一夏に胸ぐらを掴まれた。至近距離にある一夏の目から怒りの感情が飛んでくる。

もちろん煽ったのは俺だ。

「どうしてセシリアが怒ったかって、そんなの決まってるだろ。許せなかったからだ」

「それは何に對して？ 自分を馬鹿にしたから？」

「お前絶対分かっててわざと言ってるだろ。自分じゃないからだ」
「じゃあ誰を？ オルコットさん」

水を向けられて、オルコットがハツとして顔を上げる。そして真っ直ぐに俺を見すえた。

「みなさんを、いえ、我らが一組をあざ笑われたからです。一組には弱い人間しかいない、だからこうやって醜く群れていると」

どこまでも予想通り過ぎてため息が出た。一夏が俺を掴んでいた手を離す。

お互い様なただの喧嘩なら、同情はあつてもこうまで一方的に鈴の方に敵意が向くことはない。だから鈴はオルコットごとその場にいる全員を罵つたのだらうと思つたが、案の定だった。

そしていかにも感情の高ぶつた鈴が言いそうな台詞だ。もちろん売り言葉に買い言葉な面はあつただろう。だがそこまで言われてはオルコットも引き下がれないし、周りも止めるどころか煽つたに違いない。

「なるほどね。そして見事にそれを証明してしまつたと」
「てめえ」

再び一夏が俺の胸ぐらをつかみ、オルコットは下を向いた。

俺が何をしてきているんだというのはそういうことだ。無為無策に突っ込んでわざわざ鈴の自論に根拠を与えてどうする。

「でも事實は事実だ。暴論を言つた鈴が勝つて、オルコットさんは負けた。これはもう覆すことができない。それだけはまず認めないといけない」

「だったら何だつてんだ。鈴の方が正しいとでも言いたいのか？」
「ここで諦めるならそうだね。でも僕らにはまだ挽回のチャンスがある」

俺の声と目を受けて、一夏の手の力が抜けた。

「そうか、そういうことか。俺が示せばいいんだな。俺がリーグマツチで鈴に勝つて、セシリアが、みんなが正しいってことを」

「個人の力だけで戦つたオルコットさんは負けたけど、クラスの助けを借りて戦つた一夏は勝つた。確かに一人一人の力は弱いかもしれ

ないけど、みんなの力を合わせれば強い個人以上のことができる。そしてそれは少しも醜い姿ではない。十分じゃないかな」

「甲斐田さん！」

オルコットの声とともに、歓声が上がった。

一夏はもちろん、周りのクラスメイト達も拳を握ってやる気を見せている。

どうこう言っても、鈴は口にするだけの實力を持っている。オルコットで負けるのだ、他の連中も自分は勝てるなどとは思わないだろう。

だが自分達の力で初心者の一夏を勝たせることによって、その程度の差など大したことではないと示すことができる。周囲の協力があれば埋められる程度のものだと。

実際には鈴も恐れる一夏の才能や、じゃあ鈴が周囲の協力を得たらどうなるのかという話があるのだが、当然俺はそんな水を差すようなことは言わない。

そして鈴への協力を封じるのがこれからの俺の役割だ。

「セシリア頼む、全部話してくれ」

「喜んで！」

「オルコットさん、あたし達も分析するのでちよつときついこと言うけど、別に悪意があるわけじゃないからね」

「もちろん分かっていますわ。むしろ不甲斐なかつたのはわたくし自身です。何でもおっしゃってください」

そして熱意溢れる鈴対策会議が始まった。

もうこの場で俺がやることはない。戦術を考えるのはパイロット連中の方が適している。

一番の目的は一夏のモチベーションだったがそれは十分に果たせた。

ならば次にやることは決まっている。

「行くのか」

と、そつと医務室から抜け出そうとすると入り口脇に篠ノ之さんが腕を組んで立っていた。そういえば一夏の側にいなかったが、珍しい

こともあるものだ。

「篠ノ之さんはあつちに加わらないの？」

「前にも言った通り、私は心情的に凰に近い。だからあそこまで熱を入れられない」

「ふーん。まあいいけど、それで一夏の隣を失わないようにね」

「茶化すな。それよりも一つ言っておきたいことがある」

特に興味もなく通り過ぎようとした俺を、篠ノ之さんの声が呼び止める。

「オルコットもまた一夏側の人間で、凰はそれを分かっていた。だからここまでの事態に発展した」

「そういうことか」

言いながら篠ノ之さんの視線はオルコットを向いていた。

なるほど、この二人はそういうところでもライバル関係にあったのか。

「どうやら専用機を乗りこなすというのはそう簡単なことではないらしい。想像だが凰の入学が遅れたのはおそらくそのせいだろう。凰の顔色が変わったのは一夏とオルコットと三人で専用機についての会話をした後だった」

「それだけで一ヶ月かかったわけじゃないだろうけど、にしても目の前の相手が三十分で乗りこなせたと知ったらそれは嫉妬するか」

初めて専用機に乗った日、オルコットの助言で一夏はあつという間に専用機を乗りこなせるようになった。

あの時俺はできるのならさっさとやれと思ったが、どうやらあつという間にできてしまうのは驚異的な出来事だったらしい。

オルコットも普通にしていたのでそれが当たり前だと思っていたが、オルコットもまた規格外の人間だったようだ。

動かす、動く、というのは俺も感覚として分かる。それは理詰めの技術というよりは感覚的な話だ。低次元な話で言えば自転車に乗れるようになることだろう。最初は二輪しかないのにどうやってバランスを取ればいいと思うが、一度分かっってしまうえば以後は意識することさえ必要ない。そしてそれは一瞬でできるようになるのもいれば、

なかなかできない者もいる。そういうことだ。

「オルコットもまた嵐にとって許すことのできない相手だったという話だな」

「だから熱が入って相手が気絶するまでやってしまったと。ありがとう。いい話を聞いた」

「お前のことだからそう言うと思ったぞ。まあ嵐の自分勝手な嫉妬だ。とぼつちりを受けたオルコットのためにもいいように使ってもらえ」

俺を見て笑った後篠ノ之さんはまたオルコットの方を向いた。鈴と違ってオルコットが才能ある憎い相手というわけではないようだ。稀代の天才が姉にいればまた違った光景が見えるのだろうか。

つられて俺も見ると、オルコットは熱心に語っている。時折挟まれる質問に答えながら、オルコットは理路整然と自分の体験を話していた。感性は似ていてもオルコットは一夏と違って論理性も持っている。そして自分の感性のみで話すと他人には伝わらないことを理解しているようで、普段はどちらかと言うと理屈優先な話し方をしていた。それだけに自分の感性を理解してくれる一夏に惹かれてしまったというのもあるのだろうか。

と、ふと視線を感じて目をやると、鷹月さんがこちらを見ていた。俺と目が合って、鷹月さんは慌てて目をそらす。

失礼な、と思う以前に、俺は鷹月さんの表情に疑問を持った。なぜなら鷹月さんが少し悔しそうな顔をしているように見えたからだ。

もしかして自分がクラスメイトを煽るつもりだったのに、俺に先を越されたなどと思っているのだろうか。俺としては以前の篠ノ之箒発火事件の際の埋め合わせで、憎まれ役を買って出たつもりだったのだが。

面倒な、と思ったが、まあ鷹月さんなら文句があれば迷うことなく俺に言ってくるだろう。何しろ俺に対する言動がクラス一敵しい人間だ。

つつかなくても藪の中から勝手に襲ってくると結論づけて、俺は医務室を後にする。

いつてらっしやい、という布仏さんの声が俺の背中に飛んできた。そして意気揚々と俺は鈴の部屋へと向かい、その途中で重大な事実がつかう。

すなわち、オルコットのスタンドプレーを責めた矢先に自分が同じことをしてどうするのかと。

これで失敗でもした日には白い目どころではない。

迷うことなく俺は即引き返して自分の部屋へと戻った。

「お前いつの間にか医務室から消えてたけどどこ行ってたんだ？」

しばらくして戻ってきた一夏に聞かれたが、俺は曖昧に笑って誤魔化した。

それから鈴は俺達から逃げ続けていた。

一夏はもちろん、俺が部屋に行っても居留守を使って会おうとしなかった。

応対するハミルトンの態度からして明らかに部屋の中にいる。

鈴に付き合うハミルトンも相当に人がいいと思うが、部屋にはいないどこへ行ったか分からないの一点張り、部屋の中へは入れてもらえなかった。

俺としてもハミルトンが本当に困った顔をしているので無理に押し入ることもためられ、やむなく引き返すしかなかった。今のところハミルトンはどちらかというところこちらに同情しているような様子なので、板挟みの余り鈴側に付かれては困るのだ。

そして一夏はもう完全に怒っている。

もちろん煽った俺のせいもあるが、そもそも一夏は是非を誤魔化する曖昧な態度を取られるのを大いに嫌う。

自分は悪くないでもはつきりと明言すればまだ違うのだが、何も言わないどころか会おうとさえしないというのが一夏にとって非常に気に入らない対応だった。

鈴が謝ってくるまでこちらからは話しかけないと、すっかりご立腹状態だ。

だが俺はそのままでもいいというわけにはいかない。

何しろリーグマッチで一夏と対戦することが確定してしまっている。何の策もなくそのままぶつかっては勝ち目の薄い相手なのだ。

オルコットの時と同様、相応の対策が必要だ。そしてもう先輩達がない以上、それは俺自身の手でやらなければならない。

戦術面はオルコットの暴走のおかげである程度対策を立てられる。つまり俺がすべきはそれ以外の部分だ。

しかし、まず逃げ続けている鈴を捕まえることからして難点だった。

そこで俺は一計を案じる。

いくら俺達から逃げようと鈴も授業には出なければならぬ。ならばそこを急襲すればいい。

なんだかんだ言っても、鈴もまた優等生だ。気分が乗らないからといって授業をサボるような真似はしたりしない。休み時間は教室から逃げられるので、朝一ホームルーム前を狙うことにする。

幸いにしてその日一組は一時間目の授業が別の教室だった。そういう時織斑先生はホームルームごとその教室でやる。すなわち俺の天敵が物理的に遠くにいるので、すぐ邪魔されることはない。俺は遅刻確定だが魔剣の一撃などこの際我慢する。

そして二組の担任の先生が教室へやってくるのを谷本さん布仏さんに邪魔してもらうことにした。二人ともお願いしたら二つ返事で快く承諾してくれた。クラスではフリーダムさで一二位を誇る彼女達だ。真面目に授業に出るよりもおもしろそうなことを優先するのにためらいはなかった。

織斑先生に読まれるかどうかも考えてみたが、二度目はなくとも一度きりならば使えろと判断した。

俺と同室の一夏だけにはあえてこれからやることを伝えず、気分が悪いから先に行ってくれと言っておいた。ついでに衛生班繋がりで谷本さんに様子を見てもらって今日の授業に出るか考えるという話にした。だから俺達が来なくても、疑念は持たれるかもしれないが、れっきとした理由がある以上織斑先生は即動けない。このIS学園

内で携帯は教師といえど使用禁止だし、PHSの類も決まった場所では使えないことを俺は書類整理のおかげで知っている。だから織斑先生はどちらにしても一度職員室に戻る必要があるのです、たとえばすぐバレたとしても時間はある程度稼げる。

どんなに疑わしくても、先に理由まで報告している以上谷本さん布仏さんがやってくるまで織斑先生は基本待つしかない。クラスメイト達にも口裏を合わせるように、そしてできる限り引き止めるように言っているし、織斑先生がしびれを切らすまでは俺の時間だ。

もちろんこれで俺に前科がつくので、二度目はないが。

それでも何もかも読まれているのではないかという一抹の恐怖を抱え、俺はまず自分の教室へと向かう。

そして幸いなことに、教室も廊下も無人だった。

谷本さん布仏さんも二組の担任の先生を抑えてくれているようだ。全部任せると言うのでどうやったかまでは知らないが。

だがこれで第一にして最大の関門は突破できた。もちろんこれだけが本番だが、俺も勝算があるからこそここまでの無茶をしている。

二組の教室の扉の前で一呼吸を入れて、俺は勢いよく扉を開けた。

教室中の視線が一斉に俺に注がれる。俺は鈴を見る。目が合って、鈴はすぐ俺から目をそらした。

この瞬間俺の中で勝負が決まった。

「やあ鈴、おはよう」

「……」

鈴は顔を背けたまま何も答えない。だがもう逃げられない。

「ようやく一夏のことを諦める気になったんだね」

「!!」

反射的とも言える速度で、鈴は俺に驚いた顔を見せる。俺は笑って返す。

「でもそれは仕方ないと思うよ。だって鈴は自分が一番でない和我慢できないからね。目の前にそれを邪魔する人間がいたら、たとえ一夏であろうと乗り越えないといけないのはよく分かるよ」

「あたしはそういうつもりじゃ……」

心外だ、という顔を一瞬見せるも、笑ったままの俺を見て語尾がすぼんでいく。俺が鈴の行動を理解しているのが分かったのだろう。

「僕は別に鈴のことを責めるつもりはないよ。鈴が一番を目指す限り絶対を起こったことだし。同じ土俵に立つ以上、これはどうしても避けられないことだ」

「どうして一夏はISを動かせたりしたのよ……」

下を向いて、鈴が本音を漏らす。

良くも悪くも鈴は自分に正直だ。自分の気持ちを押して殺して行動することができない。俺が責め立てれば理屈抜きで感情的に反発するのは分かりきっている。だから俺は鈴を否定しない。

「でも事實は事実だ。鈴もそれが分かったからこそ一夏と決別する気になったんだよね。それは仕方のないことだ」

「だからあたしはそんなつもりじゃ！」

今度は強い口調で、だが悲痛なまでの感情が俺に飛んできた。

「別にいいんじゃない。一夏でなくとも鈴なら好きになってくれる人はいらよ。ISなんて使えなくて鈴に優しい人が」

「違うー。あたしは一夏じゃなきゃダメなのよ！一夏がいるからあたしはがんばれるんだから！」

そして俺は鈴に気づかせる。一夏が側にいなくて上を目指す意味はあるのかと。

鈴が努力をするのは何のためか。全て自分のためであるのなら、極論他者は必要ない。他人など関係ない。

だが鈴が一番を目指す。そこには自分より下の人間がいて、自分を賞賛してくれる一夏の存在がある。

元々は違ったのかもしれない。だが何年もの年月をかけて、鈴の原動力は一夏に大きく依存するようになっていた。

「でもさ、それを選んだのは鈴だよ。一夏が鈴を見限ったんじゃない。鈴がもう自分とは相容れないと一夏を諦めることにしたんだから」

「あたしは諦めてなんか……」

否定しながらも、鈴の言葉は弱い。

感情的なことにしても、一夏を否定している自分がいるのは分かっている。

「じゃあ今回のことはちょうどいいね。リーグマッチで一夏を叩きのめして、新しい自分として出発できる。すっぱり吹っ切れていいと思うよ」

「そんな……」

俺は鈴に具体的な光景を想像させる。リーグマッチで一夏が倒れ伏している姿。そしてそれからの自分。そこに明るい未来はあるのかと。

「僕も鈴が遠くに行っちゃうのは寂しいけど、これからの鈴の活躍を見守ることにするよ。一夏もしばらくは怒ってるだろうけど、自分から離れていった人に対していつまでもどうこう言うような奴じゃないから大丈夫」

「……」

何が大丈夫だと言うのか。もちろん鈴がいなくても大丈夫という意味だ。俺も一夏も去る者は追わないという話だ。

そして鈴はそれを十分に分かっている。一夏は追ってきたりしてくれない。

「といってもこっちは簡単に負けるつもりはないけどね。一夏も鈴が相手とか関係なく全力で戦うから、負けたからって文句言わないでね」

「……もうどうしようもないの?」

もう全て終わったこととして軽く言った俺に対して、ようやく鈴の解決策が欲しいという感情が姿を見せた。

俺はこれを引っ張り出したかった。

「どうしようもないって、こんなことをしたのは鈴だよ?　じゃあ思ってたのと違うのならどうしたかったの?」

「それは……」

感情的な衝動で、それは意図されたものではない。意図してやろうとするのならその前に俺が兆候に気づいている。

表面上うまくいっていたので俺も見逃していたということはある

けれども。

「自分を取るか一夏を取るかって話でしょ。そして鈴は自分を選んだ。もしかして後悔したりしてる?」

「……」

さつきからずつと鈴は下を向きっぱなしだ。

だから俺は鈴の顔を上げてやることにする。

「じゃあ一夏に謝れば? きちんと誠実に謝れば一夏は許してくれるって鈴もよく知ってるよね?」

「……謝る?」

そういえば、でもそれで本当に大丈夫なのかという不安げな顔を見せた。

「僕は正直甘すぎると思うけど、でも一夏ってほんと謝られるとあっさり許しちゃうよね。まあ僕みたいに誤魔化すとネチネチしつついけど」

「そ、そうよね!」

鈴の目に希望の火が灯る。

鈴本人もよく一夏は甘いとこぼしているくらいだからはつきりと理解できている。

一夏は謝ればまず許してくれてしかも根に持たない。俺のように心にこもらない謝罪に対しては実にしつこいが、相手の気持ちが伝われば簡単に水に流す。俺ですらそれでいいのかとたまに思うくらいだが。

「うん。自分の気持ちを正直に伝えて謝れば一夏は間違いなく許してくれると思うよ。てつきり覚悟があつてやったのかと思つてたけど、そうじゃないのなら謝ればいいんじゃない?」

「あ……」

そして鈴は重大な選択を迫られたことに気づいて顔を歪める。

一夏に許してもらうためには自分の気持ちを正直に伝えなければならぬ。つまり嫉妬という醜い感情を一夏に対して吐き出さなければならぬということだ。

一夏に対して誤魔化しが絶対に通用しないのは鈴も分かっている。

それは今鈴の目の前にいる人間が中学時代散々失敗してきているのを見ている。

「そうだ。今謝るで思い出したけど一夏もリーグマッチで絶対鈴に勝って謝らせるって言ってたよ。今さら一夏に話しかけづらいならそれを利用して謝るのもありかな？」

「ほんとに？」

鈴の瞳が揺れる。きつとその心の中も揺れている。

とどのつまり俺が鈴に伝えたかったのはこれだ。リーグマッチで一夏に負ければ全て丸く収まるぞという誘惑だ。

もちろんこれは鈴のプライドを引き換えにすることなので、簡単に受け入れるわけがないのは分かっている。

だが確実に鈴の心に迷いを作ることができる。たとえ勝つつもりで一夏と相対したとしても、絶対に心の片隅には残る。

鈴が何もかも吹っ切って全力を出さないように、俺は鈴の心を縛る。

「本当だよ。でも鈴が強いのは知ってるからそううまくいくかは分からないけどね」

「と、智希、それならあんたが……」

「悪いけどそれはしない。だってこれは鈴の心の問題だから。覚悟を決めてやったのかと思ってたから宣戦布告に来ただけど、そうじゃないならまずは自分の気持ちをはっきりさせないとね。もう鈴の気持ちは固まってるの？」

「それは……」

「じゃあやつぱり駄目だ。曖昧な気持ちじゃ一夏は許してくれないしね。まずは自分の気持ちを整理して、それからだ」

鈴は俺にすがろうとするが、俺ははっきりと拒絶する。

もうほとんど傾いているので、多分このまま押せば自分の罪を認めるだろう。だがここまで来たら鈴にすっかりした気持ちでリーグマッチに向かわせるわけにはいかない。既に一夏と対戦することが決まっているので、元気になって一夏を鍛えてやる的な気持ちでポコポコにされても困るのだ。

「だめ？」

「あのさ、鈴ってまだ本当に謝る気ないよね。一夏が怒ってるのは昨日うちのクラスのおルコットさんにやってくれたことも含まれてるんだからね。そういうのも含めて自分の気持ちを整理できてる？」

「あ……」

今さらながら鈴は事の重大さに気づいて、顔が青ざめる。

今までは自分への言い訳で頭がいっぱいだったのだろうが、一度罪を認めてしまえば全てが自分へと押しかかってくる。

「まあ一夏への感情を同じタイプのオルコットさんにぶつけただけだったのは分かっているけどさ、だからってあそこまでやるっていうのはね」

「あんた、そこまで……」

呆然とした顔で、鈴は俺を見つめる。

篠ノ之さんに聞かなければきっと分からなかっただろうが、一度知ったことはもう常識になるのだ。

「だから中途半端な甘い気持ちで来られても僕としても協力する気にはなれないって話。まあ遅くてもリーグマッチで決着はつけられるから、それまでに気持ち固めといてね。じゃ」

「智希……」

鈴が決断できないのを百も承知で、俺は笑って鈴に手を振り背を向けた。

いや、本心で謝りたいと思っても鈴は一夏に話しかけられないだろう。頭の中で一夏なら許してくれると分かっているけど、一夏に拒絶されてしまうのが怖いからだ。

これまでも鈴は怖くて一步を踏み出せなかった。まして今回は鈴に対して一夏が怒っている。躊躇させてしまう恐怖が尋常ではないだろう。

そしてリーグマッチで負けてしまえば謝れるという甘い罠。つい先延ばしにしてしまうには十分な材料が揃っている。

鈴にはそのままモヤモヤした気持ちでリーグマッチに出てきてもらう。

「こちらは尻拭いで興味もないカナダ旅行までする羽目になったのだ。鈴にもそれなりの対価を支払ってもらおう。」

「甲斐田君」

二組の教室を出ると、ハミルトンが追ってきた。

「そういうわけだから、鈴のことは放っておいてね。薄情だと思うだろうけど」

「ううん、これは鈴の問題だから他人がとやかく言うことじゃないもの。それよりもお礼を言いたくて」

意外とハミルトンはドライだった。そこまでやっておいて放り出すのかと文句を言われると思っていたのだが。

やはり二組は個人主義で他人に干渉しないのが普通なのだろうか。

「別にお礼言われるようなことはしてないよ。こつちだって鈴に振り回されて頭にきてるつてのがあるし」

「そつちじゃなくて、中国とカナダの間に入ってくれたこと。甲斐田君が間に入ってくれたおかげで関係者みんな納得してあたしの国も手のひら返して喜んで」

「ああそれか。それ織斑先生で僕じゃないよ」

「えっ？ 織斑先生は甲斐田君達が自分から申し出てくれたつて言つてたけど」

確かに一夏が言質を取られてしまったのは事実だが、まさか美談にまでされてしまうとは。

その方が受けがいいのも分かるけれど。

「あー、まあそのへんはいろいろあつて。でも言い出したのは一夏だから」

「わざわざそんなこと言わなくてもあたしは分かってるよ。甲斐田君が綺麗に収めるために動いてくれたつて。鈴から聞いているけど甲斐田君はそういう立ち回りが得意なんだつてね。確かに今のも見てても交渉ごととか得意そう」

「は？」

また意味の分からないことを言われてしまった。

もし交渉ごとが得意だとしてその場に引き出されたら、俺はカナダ

旅行など全力で回避するのだが。

「大分先になるけどこのお礼はあたしの母国カナダでさせてもらおうから。ホスト国として恥ずかしくないおもてなしさせてもらおうね！」

「はあ……」

ハミルトンはご機嫌だった。きつと何勝手に代表を譲っているんだと母国に怒られていて、丸く収まってくれたのが嬉しいのだろう。「それから鈴も大丈夫だと思うよ。クラスのみんなも今ので事情が何となく分かっただろうし。あたしも聞かれたら補足しておくから、鈴の立場も変なことにはならないと思う」

「そのへんは鈴個人の事情だし、別に僕がとやかく言うつもりもないけどね」

最初に目を合わせた時そらされたことで、俺は鈴の後ろめたさを確信した。まあ逃げ回っている時点できつとそうだろうとは思っていたが、それならこのくらいで勘弁してやろうという程度だ。

「またまた。わざわざ鈴のためにクラスの前でやってくれたって分かってるから。あ、あたし知ってるよ。日本でそういうのってツンデレって言うんでしょ？ 自分の気持ちに素直になれないってやつ」

「いや、そういうつもりは一切ないなあ……」

いきなり何を言い出すのかこの女は。

正直なところ、もし最初に目を合わせた時鈴が睨み返してきたり勝ち誇ってきたりした場合、俺は容赦なく鈴を責め立てるつもりだった。

鈴の立場など知ったことではない。極悪人として断罪する予定だった。

鈴のクラスメイト達の前で、晒し者にさえするつもりだった。

そうならなかったのは鈴が一步踏み出したはいいがそのまま突き進めず、ヘタレてしまったからに過ぎない。

「うんうん、そうだね。鈴が甲斐田君のことを性格悪いって言ったけど、それは織斑君みたいに直接的じゃないってことなんだね。あたしは甲斐田君が優しい人だって理解してるから」

「いやー、それは全然分かってないと思うなあ……」

ぼつちでツンデレでクラスを支配する暴君。革命が起こって真っ先に首を落とされる役回りだ。というかどの称号についてもご免被りたい。

「鈴に勝てるといいね」

「やるのは僕じゃないけどね」

「でもさっきの見たらうちのクラスはわざわざ鈴に協力しようとは思わないだろうし、クラス一丸となってる一組の方が有利だと思うよ」
よしきた。これもまた俺の大きな目的だった。

負けた方がいいと思わせるのは何も鈴本人だけではない。鈴のクラスメイトにもそう感じさせる必要があった。

もちろん鈴に組織力を上乘せさせないためだ。削げる力ではできる限り削ぐ。

「まあ一夏も勝ちたがってるし、やれるだけはやってみるよ。それじゃまた」

「うん。またね」

笑顔で手を振って、ハミルトンは自分の教室へと戻って行った。

そして俺はやりたいことを全て成し遂げられたという満足感に身を包み、職員室へと向かって足を進める。二組の先生を足止めしている谷本さん布仏さんを拾うためだ。

しばらく歩くと向こうから人がやってきた。

二組の先生と谷本さん布仏さん、そしてその後ろに無表情の我が仇敵織斑先生だ。

谷本さんと布仏さんが何か変な歩き方をしているとなどよく見ると、後ろを歩く織斑先生に首根っこを掴まれていた、その姿は捕まった猫のようだ。

二人は俺に気づくと不安げな表情を浮かべた。目で結果はどうだったと聞いている。

俺は無言で右手を肩まで上げ、拳を握って親指を立てる。

自分のやったことが無駄ではなかったと分かり、二人は嬉しそうに顔を綻ばせた。

それを見て二組の先生の頭の上に大きなハテナマークが浮かび、織斑先生は苦笑した。

当然その後俺は魔剣出席簿による制裁を受けたが、心は全く痛くなかった。

21. どこまでやれば準備できたと言えるのだろうか。

どこまでやれば準備できたと言えるのだろうか。

時間さえあれば、というのはこういう場合の常套句だ。確かにかけられる時間が多ければ多いほど、できることは増えていく。ここまでやっておきたいと思えるところまでいけたのなら、それはきつと準備できたと言えるのかもしれない。

だがもちろんのこと、たいていは締め切りとか期限とかいう非情な剣で容赦なくぶった切られるのが常だ。それは誰に対しても平等にやってくるものだ。

完璧に準備できたなどというのはそもそもありえないことなのかもしれない。

「やれることは全部やったよ。だから大丈夫」

だけれども俺はそう声に出す。何の迷いもなく、笑顔で。

「そうか？ 結局計画通りいってないだろ？ もちろん俺が不甲斐なかったせいだけど」

「そういう意味なら計画通りいくはずがないってのが計画通りかな」

「なんだそれ」

俺の返答に対して一夏が笑顔を見せる。ただ珍しく緊張しているせいもあり、その笑顔はぎこちなかった。

「確かにそこまでいけたら理想だったけど、別に必須のことでもないって話。僕らの目的は模擬戦で勝つことであって、極論勝てれば計画通りとかどうでもいいんだよね」

「おいおい、それじゃなんのためにやったんだよ」

「それはもちろん勝つ確率を上げるため。計画通りなら百パーセントだったけど、それが九十五パーセントになったところでまあいいして

変わらないよね」

「あ、その程度のもんか」

確率など何も保証するものではないことを十分承知していながら、俺はあえて口に出す。

一夏に安心を与えるためだ。曖昧な言葉よりも数字を出す方が断然効くのは俺自身がよく知っている。

先輩達が俺の不安を払拭するためにしてくれたように、俺も一夏の漠然とした不安を取り除く。

「計画通りにいかなかったことの埋め合わせはみんながしてくれてるから。一夏一人でやるならそこまでしないと無理だったかもしれないけど、クラスのみんながいて、知恵を出して協力してくれたじゃない。少なくとも一夏程度が不安に思うようなことは全部クリアされてるよ」

「いや、そうかもしれないけど今から試合に向かう人間にそういう言い方はないだろ」

一夏がむつとした顔になり、同時に不安な表情が吹き飛んだ。

「甲斐田なりの励ました。それにいちいち甲斐田の発言に目くじらを立てていては時間の無駄だぞ」

「そうですね一夏さん、決して甲斐田さんに惑わされずご自分を信じてください」

「大丈夫大丈夫！ 甲斐田君の言うことが信じられなくてもあたし達が保証するから！」

フオローしているつもりなのかもしれないが、どうしてこの連中は俺を貶めずに発言ができないのか。

「ありがとうみんな。そうだった。これは俺だけのものじゃなかったな。うん、みんなのためにも必ず勝ってみせる」

一夏に綺麗な笑顔を返されて、篠ノ之オルコット相川の表情が一瞬で陶酔へと変わる。わざわざ待機室まで激励にやってきた甲斐があつたと言えるだろう。

「織斑君、そろそろ時間だけど準備はいい？」

「お、もうそんな時間か。オツケー、いつでも行ける」

「対戦相手のことも問題ないわね？」

「もちろん。全部頭に入ってる」

「それならいいわ。甲斐田君、何かある？」

一夏に確認した鷹月さんが俺に振ってくる。一夏の不安を断ち切れたので俺にやることはない。

「大丈夫。それじゃ一夏、がんばらなくてもいいから勝ってきてね」

「なんだよそれ。そこはがんばれって言うところだろ」

「楽して勝てればそれに越したことはないよ」

「そういう意味じゃなくてだな……」

一夏が頭に手を当てる。呆れた表情になるが、これは俺の本心だ。次の試合もあるし省エネで勝ってもらえるのが一番いい。

「一夏、お前の全力を見せてやれ」

「一夏さん、出し惜しみする必要などありませんわ」

「もったいぶらずにどーんとね！」

いや、今後の試合もあるしむしろ全力出さずに出し惜しみして、もったいぶった上で勝って欲しいのだが。

「ありがとう。それじゃ行ってくる」

だが一夏は俺に口を挟ませる隙もなく俺達に背を向け、颯爽と待機室から出て行った。

俺の意図は伝わったのかそうでないのか、きつと伝わってないだろうなと思いつつ、リーグマッチは始まった。

待機室のモニター越しに見ながら、アリーナは満員だった。

数千人は収容できるというIS学園で一番大きな建物だったが、その客席は全て人で埋め尽くされていた。

例年満員なのかどうかは知らないが、少なくとも今年に一番多くの観客が押し寄せたのは間違いないだろう。もちろん一夏、発見されたばかりの男性IS操縦者の存在があるからだ。

男なのにISを動かせることはもう間違いない。ではどの程度使えるのかという興味である。

俺に関するデータについては元締めの一S委員会が管理していて、関係組織や企業にある程度は開示されている。なので俺が一Sを動かせるだけの存在ということは知られている。

だが一夏についてはそうではない。全てを把握しているのは日本と倉持技研だけで、元締めの一S委員会すら全ては知らされていないそうなのだ。企業機密と男なら俺を管理してるからいいだろうと俺をダシにして情報開示を拒否しているとのことである。

これについては同様に男性操縦者を抱えるフランスドイツも同じで、この二国は名前さえ公表しない徹底ぶりである。まあそのせいで世間では存在から疑問視されてしまっているそうだが。

一方、一夏は名前どころかその血縁者の存在が非情に大きい。もちろん世界最強にして一S適正Sランク、ブリュンヒルデと呼ばれている実姉の織斑千冬だ。

一応、研究上の話では一S適正に遺伝的要素は関係ないということになっている。親子どころか一卵性双生児ですら適正に差があるそう。しかしあの織斑千冬の実弟である。期待するなという方が無理な話だろう。

そして今クラスの代表として人前に出てくるとあれば、関係者としてはが非でもこの目で確かめたいと思うのは間違いない。

数千人という満員の観客の内実は、ミーハーな理由で目を光らせている人々ばかりというわけではなかった。

「いっぱい人がいるねえ〜」

「いつか私もあんな大勢の人たちから拍手喝采を浴びたい……!」

いつの間にか俺の隣に座っていた布仏さん谷本さんがモニターを見ながら感想を述べている。見れば声を発していないが岸原さんもいた。膝の上にノートパソコンを乗せている。

このへんは整備班衛生班を理由にここ待機室に居座っていた。衛生班としての仕事がある谷本さんはともかく、倉持の人がいるのだから整備班はいらないと思うが、妙な責任感からかこの場にいたいらしい。指摘したら岸原さんに泣きそうな顔をされて周囲から俺が悪いことにされてしまった。

「剣道の全国大会などは別次元の規模だな」

「多くの方々に注目されているのはとてもすばらしいことだと思いますわ」

「えー、これきつとプレッシャーが半端ないと思うよー」

オルコットは一応所属が指揮班なのでまだこの場においてもおかしくない。だが篠ノ之さん相川さんはなぜここにいるのだろうか。激励した後客席に戻るのかと思っただけならそのまま居着いてしまっていた。激励だけでは飽きたらねぎらいの言葉までかけたのか。

「私達は本当にやるべきことをやったのだろうか？ もっとやっておくべきことがあったのでは……」

「どうであろうと結果は一つですよ」

鷹月さんは今になって不安が襲ってきたらしい。頭を抱えて悩んでしまっている。対して四十院さんはさっぱりしていた。

「しっかしここの人多いわね。客席で見た方が楽しいと思うんだけどなあ」

「いやー先輩、あの織斑君を見ちゃったら側にいたいって思うのはごく自然な感情つすよ」

「そうですよ。ていうか先輩はいつもこんないい思いをしてたんですね。自分だけずるいです」

後ろで倉持技研の整備士達がブツブツ言っている。話の内容はともかくとして、この待機室の人口密度に関しては大いに賛同したい。試合後のケアがある谷本さんと倉持の整備士以外は極論この場にいる必要性はないのだ。

手狭どころか窮屈だし、それならもういつそ自分が出ていくかと俺は立ち上がる。

「甲斐田、ここからのお前の役目は最後まで見届けることだ。いくら不安で押しつぶされそうであろうと決して逃げるな。目をそらすな」
「いや、別にそういうつもりは……」

「谷本さん、甲斐田さんを座らせてくださいませ」

「オルコットさん了解です！」

隣の谷本さんに肩を掴まれてパイプ椅子に座らされてしまった。

というか不安なのは自分の話ではないのか。さつきまでの陶醉の表情はどこへやら、篠ノ之さんもオルコットもまるで自分が模擬戦をやるかのような真剣な顔つきになっている。

「大丈夫。おりむーは必ず勝つからね」

布仏さんによしよしと頭を撫でられる。

そういう意味じゃないんだがと反論するのも面倒になり、仕方なく俺は再びモニターへと顔を上げた。

「よっ。よろしくな」

「軽いわねえ。この観衆に囲まれて何とも思わないの？」

「ああ、すげえ人だな。でもこれから模擬戦やるのはこの人達じゃないし、別に何人いようと一緒だろ」

「強がり言ってるんじゃないよ。本当は怖くて仕方ないくせに」

一夏がアリーナに登場した時、それはすさまじい歓声と拍手が鳴り響いた。オルコットとの模擬戦の比ではなかった。

だが一夏は全くひるむことなく、むしろ手を上げて歓声に応えながら堂々とアリーナの中央へと歩いて行った。

さすがというべきか、このあたりの度胸は本人の持つ資質だろう。

「怖い？ 俺別に今怖がるようなことは何もないけど」

「はっ。じゃあこの場であたし相手に強がれる程度の気力はあったってことにしておこうかね。どうせすぐメツキが剥がれる程度のもんだろうけど」

「お前何言ってるの？ 今日の前にいるのが千冬姉ならともかく、同じ一年生相手に怖がるのかありえないんだけど」

「はあ？ あんた本当に調子に乗っちゃってるわけ？ コネで専用機もらえたのがそんなに嬉しかった？ 猫に小判つてことわざ知ってる？」

「俺としちゃ俺が怖がるって考えてるお前の方が調子に乗ってると思うけどな」

開始の鐘が鳴らないせいか罵り合いが始まってしまった。鳴らな

いのは間違いなく織斑先生の仕業だ。

さてはオルコットとの時にやったので味をしめたな。

「よし、相手はラファールか。今持つてる武装や装甲を見ても予想の範疇だわ」

「近距離寄りの銃にブレードですね。甲斐田君の言った通り相手は強気に正面からやってくれそうです」

鷹月さんが両手を握りしめて食い入るようにモニターを見ている。そんなに力を入れなくてもと思うが、まあここで外したら指揮班の失敗だ。もちろんみんな納得した上での話だが、それでも読みを外してしまうというのは一番恐れていたことだっただろう。

「四十院さん、それはまず最悪は避けられたってことでいいよね？」

「はい、遠距離仕様のヒットアンドアウェイ戦法で来られるのが織斑くんにとつて一番厳しかったです。二戦目以降ならともかく、初戦から主導権を相手に取られてしまうのは織斑君の精神的に」

「まあ五組代表の性格的に消極的な戦い方はしないとあってたけど、それでも勝ちにだけこだわったらあり得なくもなかったしね」

「五組は連戦が続くというのもありますし、省エネを考えれば打ち合うような精神的に消耗するような行動を避けることも十分に考えられました」

四十院さんと始まる前の状況を確認する。

五組代表という相手を考える時、一番の問題はどういう戦い方をしてくるかということだった。

俺が直接話した上での感覚なら、相手は正面から来てくれる。なぜなら五組代表にはクラスの頂点に立っているというプライドがあるからだ。

五組代表は王者としての戦い方をしなければならない。本人が力強さを全面に出しているため、ヒットアンドアウェイのような戦い方はあまりそぐわない。むしろ正面から敵をねじ伏せるような力強さが求められる。

そしてそれは俺達にとつて都合なことだった。何しろ一夏にはブレード一本しかない。距離をとつて逃げ回られてはやりにくいの

だ。

また一夏には必殺技とも言えるエネルギー無効化攻撃があるので、打ち合ってくれるというのはこちらの土俵なので大歓迎でもある。

「まだ安心するのは早いわ。短期決戦で済まなかった時は確実に長期戦のやり方に変えてくる。連戦になるのは向こうも分かっているんだから」

「まあね」

鷹月さんの言う通り、事が単純に済まないのは五組の置かれた状況だった。

五組代表は休みなしで二日間連戦を続ける。つまり省エネが五組にとつて一番の課題だ。

それなら剣一本しか持っていない一組代表ごとき遠くから安全に射撃していれば楽に勝てる、と考えたとしてもなんら不思議ではない。

雑魚相手に本気など出すまでもないという話で、それは一夏が消耗するという点で俺達にとつて嬉しい話ではなかった。

「少なくとも両手足の装甲を削ってる。その分機動力を上げてるか、別の武装を隠してるのは間違いないわ」

「そうなんだ。よく見てるね」

モニターから少しも目を離さず、鷹月さんは俺達に注意を促す。

俺からすれば言われてみればそうなのかなという程度にしか見えないが。

「どつちだろう？ 機動力を上げて織斑君を圧倒するつもりか、それとも長期戦に備えて遠距離仕様の武器を用意しているか……」

「相手から見ても分かる装甲を削ったというのが気になりますね。普通に考えれば機動力ですが、長期戦を考慮すると装甲を削るのは得策とも思えませんし……」

「とするとやっぱり短期決戦を狙ってるだろうから、まずスピード重視ね。織斑君の武装が剣一本であることを考えれば、武装を増やさなくても今持っているブレードで十分相手はできる。専用機の方がスペック上なのはさすがに想像つくだろうし、その差を埋めることを優

先した」

「そうですね。当たらなければいいと考えて装甲を削るのは誰もが最初に考えることだと思います」

鷹月さんと四十院さんの分析が続き、周囲も視線をモニターに向けたままうんうんと頷いている。

そんなのは始まればすぐに分かることだし、合っていても一夏に伝えることができない以上どうであろうと一緒だと思うのだが。

「おりむーがんばれ〜！」

まだ始まったでもないのに、横から布仏さんの応援の声が聞こえた。

「は？ みんなのため？ 何言ってるの？ まさかあんたの口からそんな言葉が出てくるとは思わなかった」

「何言ってるのって言いたいのは俺の方だよ。初対面なのにお前俺のことなんだと思ってるの？」

開始の鐘が一向に鳴らず、罵り合いが今も続いている。

二人ともヒートアップするのはいいが、いい加減その会話が会場に流れていることに気づいて欲しい。五組代表はともかく一夏は先月同じ場所で模擬戦をやったのだから知っていて当然だと思うのだが。

しかしそれにしても、醜い罵り合いを数千人に聞かれてしまうなど大変な羞恥プレイだ。というか外部の人間に聞かれてIS学園にいいのか。他人を気にしない一夏はともかく、五組代表は終わった後恥ずかしくて出てこれないんじゃないかというどうでもいい心配までしてしまう。

「話したことなくても人の悪評ってすぐ噂になるの。まして自分の立場を考えれば一挙一動見られて当然だって理解してないわけ？」

「悪評ってなんだよ？ 俺が何したって言うんだよ？」

「そうねえ。例えば、友達だと思ってるのは自分だけとかね」

「はあ？」

瞬間、待機室の人間の視線が俺を向いた気がした。

「これやっぱり理解してないわ。友達だからって理由でいいように振り回して、あの子も本当に気の毒ね」

「ちよつと待て。もしかしてそれ智希の話か？ 振り回されてんのはむしろ俺の方なんだが」

向いた気がするではなかった。間違いなくこの場の人間の視線が俺へと向いている。俺自身は目をモニターから外していないが、俺に対して無数の何かが飛んできているのを感じる。やはり人間には五感を超えた何かがあるのだろう。

「あーあー。そうやって相手に責任をなすりつけて安心してるわけね。こいつほんとバカだわ」

「あつ、そういうことか。完全に騙されてちよつとかわいそうだなって気がしないでもないけど、でもお前がバカつてことに変わりはなさそうだな」

「なんだとー」

一気に五組代表のボルテージが上がる。これは始まりが近そうだな。だから今見るべきはモニターの向こうであつて、俺ではないと強く思う。

「もう鐘鳴ってないけど始めるか。いい加減お前と話すの疲れたわ」

「ほんとバカと会話して無駄にエネルギー使っちゃったわ。さつさと終わらせよう」

そしてその瞬間にようやく鐘が鳴る。もしかしてお互いに始める意思を見せる必要があつたのだろうか。今さらとはいえ後で改めてきちんとルールを確認する必要があるそうだな。

一夏も五組代表も武器を構えて対峙し、すぐに相手へと向かって動き出す。

そして会場は一瞬で静寂に包まれた。

何が起こつたか分からない、というのが試合を見ている観客の素直な感情だつただろう。

激しい轟音と衝撃の後、アリーナの中央に立っているのはブレード

を振り下ろした一夏の姿だけだった。

自分でもびっくりしたのか一夏本人も呆然としていて、振り下ろした姿勢のまま固まってしまっている。

そしてその一夏の視線のはるか先には、対戦相手がアリーナの壁に叩きつけられていた。

「えっ?」

俺の隣の谷本さんから声が漏れる。そしてまるでその声に反応したかのように、壁に叩きつけられていた五組代表の体が、ゆっくり地面へと倒れ伏した。

「そこまで!」

静寂の中、試合の終わりを告げる鐘の音と織斑先生の声がアリーナに鳴り響く。

そしてそれをきっかけとして会場が地響きのように揺れた。歓声と拍手とどよめきによるものだ。数千人が一斉に音を出すところまでのエネルギーが発生するらしい。

「おわっ……たの?」

鷹月さんが呆然とした声を発する。

きつと俺と同じで何が起きたか理解できていない。

「ああ、完璧なカウンターだ!」

「お見事ですわ!」

「すごいすごい!」

どうやらパイロット組は中身を分かっているようだ。一瞬の出来事だったし一撃で仕留めたであろうというのは俺でも想像つくが。

「篠ノ之さん、カウンター?」

「ああ、一夏の動きは見事だった。自分の力に加えて相手の勢いまで丸ごと跳ね返してみせた……!」

「それは相手が打ち合ってくれたからですか?」

「もちろんですわ。一夏さんに対して銃を使わず打ち合うなど愚策の極みですが、その上自らの力まで一夏さんに渡してしまうとは」

「それってエネルギー無効化攻撃のおかげ?」

「もちろんそれもあるけど、カウンターはむしろ全速イグニッション・

ブーストのおかげだね。向かってくる相手に対して綺麗に入ったよ」
鷹月さんと四十院さんがパイロット組に質問して試合内容の理解に努めている。

「どうやら五組代表は一夏と正面から剣で打ち合うという一番やってはならないことをしてしまったようだ。」

その上全速力のイグニッション・ブーストの勢いまでまともに受けてしまったらしい。

それはきつと一夏にとって持ちうる最大規模の攻撃だろう。

いや待て、最大規模だと？

「ちよつといい？ さっきのエネルギー無効化攻撃の強さは？」

「おそらくそれも全開だな。あれだけの力を開放させたのは私も初めて見たぞ」

「自身のエネルギー消費を考えますとなかなかあそこまでは出せませんものね」

「全力のエネルギー無効化攻撃に全速のイグニッション・ブースト。これが織斑君の最大火力だよ！」

パイロット組は自分のことのように大喜びしているが、俺にはあることが思い当たった。

そして鷹月さん四十院さんも同じ考えに至ったようで、微妙な顔をしている。

「甲斐田君」

「うん、それは後で」

とりあえず今話すことではない。

「どうした甲斐田、申し分のない勝利だぞ。一撃で決めたおかげで精神面はともかく肉体的な疲労を最小限に抑えることができた。これなら午後も万全な状態で戦える」

「そうですわ。次の試合まで休む時間も十分にありますし、精神面も問題ありませんわ」

「もしかしてあっさりし過ぎて拍子抜けしちゃったー？ 勝負なんて意外とこんなもんだよ」

オルコットは指揮班なのだから気づけと思うが、よく考えたら最近

はもう完全にパイロット班状態だった。こうやって見るとやはり立場によつて思考経路は違うのだろう。俺で気づくことをオルコットに分からないはずがないのだから。

「そうだね。あ、一夏も我に返つたみたいだ。あれが勝利のポーズ？」
「なるほど、結局織斑君は初心に帰つたか。昨日の夜まで迷つてたけどやっぱりシンプルイズベストだよね」

画面の向こうで一夏は手に持ったブレードを高く掲げて決めポーズを取っていた。

谷本さんが腕を組んで得意気にうんうんと頷いている。

昨日の夜一夏が何事かを悩んでいたがそれだったか。本当にどうでもいいことをと思つたが、リーグマッチに対して余計なことを考えないで済んだという点ではよかつたのかもしれない。

「そうそう。やっぱり英雄つていうのは大歓声を浴びても堂々としてなくちゃね」

「そうだ、あれこそが織斑一夏なのだ……」

「ああ、すばらしい姿ですわ……」

「くうー！ やっぱかっこいいー！」

ひと通り手を振って、一夏はゆっくりとこの待機室へと歩みを進めている。

パイロット連中はうつとりしているが、俺はなぜか得意げな谷本さんの発言になるほど思つた。

一夏は人前だろうが自然体でいられる人間なので、俺は大観衆の中にいるという部分を特に気にしていなかった。

だが一夏に人前での振る舞いというものを身につけさせれば、それは相当な存在感を發揮できそうだ。何しろただでさえ絵になる男なのだから。

「みんな、やったぞー！」

待機室に帰ってくるなり一夏は吠えた。叫ぶというより吠えた。

ここまで一夏のテンションが上がっているのはかなり珍しい。

数千人の歓声がここまで一夏を盛り上げたのだろうか。

「一夏、よくやったぞー！」

「一夏さん、お見事でしたわ！」

「織斑君、すごくよかったよ！」

真つ先にパイロット組が駆け寄る。この連中も一夏の熱を浴びて完全に興奮状態だ。

「ありがとう！ どうだ智希、これなら文句ねえだろ！」

俺に向かつてものすごいエネルギーが飛んできた。同じく興奮状態の一夏の体には相当な熱気が纏われている。それはもはや存在感などという次元ではなく、全ての熱源は一夏であり全ての中心は一夏であると錯覚させられそうになる熱量を持っていた。

今ここにいるのは織斑一夏とそれ以外の二種類だ、と何となく思った。

「別に勝てばどうだろうと文句なんて言わないよ」

「なんだそれ！ 自分で言うのもなんだけど完璧だろ！ 完璧過ぎて俺がびっくりだよ！」

平静に返したようで、俺は飲み込まれそうになっていた。

そうだった、これが織斑一夏だ。何もかもを飲み込んでしまう圧倒的な力。正確には相手に自分の全てが飲み込まれてもはや自分は一夏の一部だという意識にさせてしまう強大な圧力。

一夏と一緒に暮らしていた施設の人間は全員がそうだった。

「甲斐田君？」

「今水を指すようなことは言わなくていいよ」

「そういうことじゃなくて……まあいいけど」

鷹月さんが訝しげに俺を見る。

鷹月さんは一瞬俺の意識が飛んでいたのに気づいたようだが俺は誤魔化した。

「あーもう早く次の試合がしたい！ 鷹月さん次っていつ!？」

「十三時開始だから三時間以上あるわね」

「そんなにあるのか！ じゃあ体動かしてきていいか！ ちよつと外行ってくるー！」

「え？」

答えも聞かず、興奮したままの一夏は待機室を飛び出して行った。

間があつて、慌ててパイロット組が一夏の後を追いかけていく。

「谷本さん！」

「はいはい。すぐ行きまーす」

「一夏を捕まえて次の試合まで縛つといて」

「そんなことしません。持て余したエネルギーは溜めると爆発してしまふのです」

「いやいや、次の試合までに使い果たしちゃったら意味ないでしょ」

「それは私にお任せあれ。次の試合の時間にはいい状態にしておきましよう」

不安だ、ものすごく不安だ。

谷本さんは俺に答えながらてきぱきとバスケットに飲み物やタオルを詰め込んでいく。

そして準備が終わるとバスケット片手に笑顔で手を振って待機室を出て行った。

「あれ大丈夫なの？」

鷹月さんが不安げに俺を見る。

確かに普段の言動を考えれば不安しかないが。

「谷本さんも衛生班の仕事はきちんとやってるよ。ここ一週間一夏の訓練に張り付いて疲労回復のためにいろいろしてた。レポートも見たけど分析はしっかりしてる。一夏の信頼も得てるし、一夏の体については今一番よく分かってるから大丈夫」

「そう。甲斐田君が大丈夫だって言い切るなら信じるか」

本当は不安で仕方ないのだが、俺は言い切る。

一夏に余計なことを吹き込んだりもするが、衛生班としてはちゃんとやっているはずだ。

それに変な信頼があるのか一夏も谷本さんの言うことはわりと聞く。俺が言うよりも反発は少ないかもしれない。

俺としても体が空いていれば追いかけるのだが、俺にはまた別にやる必要がある。

「だから僕らは僕らのやるべきことをやろう。初戦を踏まえた上での二戦目を考えて、あと偵察」

「そうだった。こんなところでボーっとしてる場合じゃなかった。二組三組の試合は十一時からだから、それまでにこの試合の反省と次の対策を考えないと」

「はい。完勝のようで問題点も出てきました。あの試合を見ては今後の相手も私達の想定からかなりずれれてくるはずですよ」

鷹月さんと四十院さんの顔が引き締まる。

試合をするのは一夏だが、俺達はそれまでに準備を整えなければならぬ。考えるという部分について一夏は俺達に全てを委ねている。だから俺達は一夏が安心して試合を迎えられるようにしておかなければならないのだ。

「ああっ！　　というか私達が自分の仕事をしてないじゃない！」

「どうしたんですか先輩？」

「織斑君なら無傷だったじゃないですか。あたし達別にすることないっすよ」

「バカ！　　そんなこと言ってもし方が一故障でもあって試合で発覚した日には私達クビじゃ済まないわよ！」

「あ、そりやまずいってもんじゃない」

「急いで大丈夫だったことを確認しに行きましょう！」

倉持の人達が大騒ぎして待機室から飛び出して行った。

まあ大丈夫だとは思いますが、確かに万が一はあって欲しくない。

「甲斐田君、私たちも行きます！」

「またね」

やけに気合の入った岸原さんといつも通りの布仏さんが出て行く。

あの二人はいったいどこへ行くのだろうか。本番中整備班としての仕事は特にないというか、それならむしろ俺達の作戦会議の場でデータベース的にいてくれた方が俺としてはありがたかったのだが。

「甲斐田君、私達も」

「あ、うん。場所どこにする？」

「そうね、話の内容的にもあまり人に聞かれない場所がいいわね」

「それなら一度寮に戻るのがいいではないでしょうか。ここからなら教室へ行くよりは近いです」

「そうしよう。会議室なら人に聞かれることもないし」

そうして俺達も待機室を後にする。

確かに一夏は初戦に完勝したが、それで終わりというわけではない。後三試合もある。

そして完勝し過ぎたことよって、かえってこの後の試合が難しくなってしまった。

専用機があるとはいえ、一夏の実力が突出しているわけではない。

一夏の特徴を理解しているクラスメイト達は戦い方次第で一夏に勝てるし、剣を使った近接格闘戦でも篠ノ之さんなどは一夏をはるかに凌ぐ腕前を持っている。

この一ヶ月でだいぶ様になってきたとはいえ、まだまだクラス代表と互角に戦えるだけの力を持っているとは言い難いだろう。剣一本だけという同条件なら篠ノ之さん以外には勝てるようになってきたそうだが。

しかし複雑な戦術を遂行するなど遠い未来の話だし、そもそも剣一本しかないので戦術に深みを出すことすら厳しいのだ。

だからこそエネルギー無効化攻撃とイグニッション・ブーストが命綱で、この二つの柱を効果的に使わなければ勝ちを得ることは難しいと言える。

最終戦の鈴はともかく、もうまともに向かってこないであろう三組四組を相手にどう戦うか。

きつと今後は一夏にとって我慢の展開が続くんだろうなと思った。

足早に寮へと急ぎながら、誰も声を発さない。

俺も含めて頭の中で自分の考えをまとめているのだろう。

おそらく起死回生のアイデアなど出てこないし、試合中に一夏が突然覚醒するなんていう甘い期待などしてはならない。

今の一夏にできることの中で、相手にどう対応していくか。

相手が誰であろうと関係ないなどと言えるのは、自分のやり方を確立できた者だけだ。

一夏はまだまだ未知数で成長中なのだから、あれこれと試行錯誤を行っていくべきだろう。それを勝ちながらというのは本当に大変だ

が。

もつとも、そんな凡人の思惑など軽く飛び越えてしまうのもまた織
斑一夏という人間であるのだけれど。

2.2. 理想的な勝ち方とはどういうものを言うのだろうか。

理想的な勝ち方とはどういうものを言うのだろうか。

実力差があり相手を圧倒して勝った場合は理想的だろうか。それともギリギリの勝負を勝ち切った場合だろうか。もしくは実力差を跳ね返して逆転勝ちした場合はどうだろうか。

もちろん負けるのは論外だが、一回きりの勝負でない以上ただ勝てばいいというわけではなかった。

「とりあえず、織斑君は圧勝し過ぎた」

鷹月さんのこの言葉が俺達の今の心境だ。本当に、一夏は俺達の想像以上の光景を演出してくれた。

無傷で勝ったのはとてもありがたいことではあるのだけれども。

「あれを本番でいきなり出したのはすごいことだとは思いますが……」

「織斑君があんなのを毎回決めれるならそもそも頭を悩ます必要もないんだけどね……」

本番に強いとか運も実力だとかそういう次元の話をしているわけではない。はまった時の一夏は篠ノ之さんさえも圧倒出来るだけの力を見せてくれるのは既に分かっている。

だがさっきの試合のあれを狙ってやれと言われても、間違いなく今の一夏は二度とできない。最大速度のイグニッション・ブーストに加えて同時に最大出力のエネルギー無効化攻撃など、そもそも訓練でやっていたなどという話は一切聞いていない。指揮班として一夏にやらせていたのはひたすらその二本の柱をコントロールできるようにすることだった。そして一夏はいまだにある程度までしかコントロールできていない。

「イグニツション・ブーストは最大速度にしてもそこまでエネルギーを食わないと思うけど、エネルギー無効化攻撃って相当に自分のエネルギーを消費するんだよね？」

「ばんばん出せるなら最初からケチろうなんて言わないわよ。効果は凶悪だけど出せば出すほど自分の首も締まっていくという諸刃の剣で、扱いには本当に気をつけないといけないものなんだから」

「エネルギー無効化攻撃は自身のシールドエネルギーを消費するの
で、シールドエネルギーがなくなった瞬間に使えなくなるどころか機
体が紙装甲になってしまいますものね」

もう一点特化どころの話ではない。いったい誰がこんな機体にしたのかと文句を言いたくなる次元で、本当に攻撃をすることしか考えられていない。

チーム戦ならまだ味方に盾になってもらえるかもしれないが、一対一では欠点が全て降りかかってくる代物だ。

「一撃で仕留められたからよかったけど、あれ外してたら一気に不利になってたところだよね」

「相手も警戒して近寄らなくなるだろうし、その上シールドエネルギーを大量消費した状態だし、もう本当に一撃で終わって助かったわ」

「織斑君も最初が勝負どころだと理解してやったとは思いますが……」

「そこで訓練でもロクにやってないことをいきなりやるんだからほんと心臓に悪いわよ」

四十院さんと鷹月さんが揃ってため息を吐く。

俺や指揮班の二人の頭が追いつかなかったのは、いきなり一夏が指示どころか想定すらしていないことをやってくれたせい大きい。

そもそも俺達は一夏に最初に勝負をかけるなどとは一言も言っていない。いや、もちろん戦うのは一夏なので本人的にいける時があれば迷わずいけとは言っているが、初っ端から突撃しろとは一切言っていない。

むしろ最初は相手の出方を窺って、向こうが短期決戦か長期戦の構

えか見極めるように指示していた。そしてそれに合わせた戦い方を
するようという作戦だった。

指揮班の二人は相手がどうしようも対応できるようと、こと細か
に一夏の戦い方を考えていた。実際具体的にどう動いていくかを考
えるのはパイロット班の範疇だが、方向性や全体の流れについては指
揮班の二人が決めている。

二人ともここ数日は授業などそつちのけで考えていたようで、本番
前日の昨日は優等生揃いのIS学園でも優等生の部類に入る鷹月さ
んが魔剣出席簿の一撃を受けるといふ珍しい光景まで見られた。

「まあ結果オーライだったし終わったことをどうこう言ってもしよ
うがないよ。それよりも次のことを考えよう」

「そうね。というかそれが本題よね。ごめん、考えてるうちについ」
「では改めて四組の対策を考えましょう。今までの想定よりも難しく
なっていますし」

俺を含めた三人共愚痴の一つでも言わずにはいられない状態だっ
たが、さすがに次も迫っていることもあり頭を切り替える。

「そうだね。鷹月さんの言った通り一夏は圧勝し過ぎた。それによっ
て四組の代表は警戒してまず間違はなく向かって来ない」

「あんなものを見せられたらもうまともに戦おうとは絶対に思わない
わよね」

「それでなくとも四組の代表は積極的に前に出てくるタイプではなさ
そうですし」

話題は四組の代表へと移る。

この相手は布仏さんという情報源があり、またその情報によつて一
番やりやすいと考えられていた。

何よりこのリーグマッチに対してクラス自体にやる気がないとい
うのが大きい。

「まず四組というクラスのことだけど、ここ本番に至つてもリーグ
マッチの価値に気づいてすらいない。藪蛇になるから代表本人にま
では聞けてないけど、でも自分のクラスに協力さえ求めているとい
う事実から、代表本人も気づいていない可能性が高い」

「少なくともクラスの協力を得られていないのは間違いないです」

「うん。じゃあ鷹月さん、模擬戦をやるその代表本人については？」

鈴や三組五組の代表への対応もあって、俺自身は四組代表の対策についてノータツチだ。

そういえば面識どころか結局本人の顔さえ見ていない。まあ生徒会長の妹だそうだから、見ればすぐに分かると思うが。

「そうね、日本の代表候補生ということだから、ISの操縦技術については他のクラス代表と遜色ないと思う。さすがにまともにぶつかっても楽勝ということにはならないわね」

「ですが四組の代表は大きなハンディキャップを背負っています。この模擬戦において織斑君を相手にする上での話ですが」

「うん、四組代表は打鉄で戦わなければならないということだよ」

俺達が四組代表を他と比べてやりやすいと考えるのは、何よりこの一点だった。

「そう、打鉄という機体は銃を撃って逃げ回るような高機動型ではない。味方の盾となつて硬い装甲で相手の攻撃に耐え、ブレードで打ち合うのがそもそのコンセプトだから」

「ですがその硬い装甲も、織斑君のエネルギー無効化攻撃の前では意味をなしません。四組代表にとって織斑君はある意味天敵と言えるでしょう」

打ち合うのがメインの機体なのだから、一夏にとって一番相性のいい相手だといえるだろう。

それに打鉄も一夏専用機と同じ倉持技研の製作、スペックを見てもあらゆる点で専用機の方が上だ。

「でも四組の代表は改造とか好きでそればかりしてるみたいだし、その結果高機動型に変わつてるとかないよね？」

「あのね、いくら改造しようと打鉄は打鉄なんだからね。改造にも限度があるし、たとえ装甲の全てを機動の方に振り替えても高機動型のISより速くなるとかありえないから」

「整備班の方々の協力で打鉄の速度をどこまで速くできるかは把握できています。織斑君も認識できていますし、スピードの部分で問題と

なることはないでしょう」

「そういえば改造に限界があるからこそイグニツション・ブーストのような技術が生まれたって岸原さんが語ってたなあ」

オルコットとの模擬戦の際に先輩から聞いたが、ISを改造するとは別にパワーアップさせることではない。

改造とは機体の性能のバランスを変えることで、例えばオルコットとの模擬戦の際に一夏が乗った改造打鉄Kは、装甲を削って機動性を上げている。それはバーター的なもので、どこかを伸ばすためには別のどこかを削らなければならない。そしてそれにも限度があり、どこまでもできるというわけではないそうだ。

だから高機動性を求めるのであれば本当は最初からラファールやメールシユトロームを使うべきなのだが、四組の代表に限ってはそれができない。

「でも四組の代表は打鉄を使わなければならないと」

「日本の代表候補生で打鉄を持っている倉持技研の管轄だし、そもそも自分用に打鉄をもらってるからね。最初から選択肢すらない」

「岸原さんが調べてくれましたが、織斑君に専用機が作られることが決まった時、同時に今四組代表の更識簪さんへの打鉄の貸与も発表されています。更識さんに気を遣うっての話だと思いましたが、専用機でない時点で明らかに扱いに差がありますね」

もしかしたら一夏の機体は元々は四組代表に渡されるはずのものだったのかもしれない。

「それ実は打鉄とよく似た別のものでしたとかないよね？」

「不安になる気持ちは分かるけど大丈夫。それはIS学園で去年まで訓練機として使われてた機体だって。岸原さん心配性だからそこまで追いかけて調べたそうよ。IS学園の整備士さんに直接聞いた話だから間違いないわ」

「そういえば甲斐田さんはIS学園の整備士の方々とも面識があるのですか？ 岸原さんに限らず甲斐田さんの名前を出すと話がスムーズに進んだとよく聞きますが？」

「あー、織斑先生のお使いとかでいろんな人と顔を合わせてるせいか

な。それに一応僕も男でISを使えるんだから、知らない人もいないと思うよ」

「言われてみれば甲斐田君もそうだったわね。最近ISに乗ってるとこ全然見ないからすっかり忘れてた」

鷹月さんからナチュラルに失礼な発言が飛んできた。もしかしてこの連中の俺を貶める発言は意識さえせずに行われているのだろうか。

一応俺も週に一度はIS委員会のデータ取りのためISに乗ってはいるのだが。

「まあ僕のことはいいとして、じゃあ四組の代表は毎日何を改造してらんだらうか？」

「だからそれは前にも言った通り、もはや趣味の領域。あ、別に勝手に言ってるわけじゃなくて、IS学園の整備士さんの意見。四組代表は機体の整備も全部自分でやるって言い張ってるらしくて、ここ一ヶ月機体を誰にも触らせてすらいらないそうよ」

「正直なところ、あまり評判はよくないですね。頑なと言いますか意地になっていいますか、他人を拒絶するような行為が目立っています」

「だからわりと簡単に情報が入ったというのもあるけど、日頃の行いって大事よね」

機体の整備まで含めて何もかも自分一人でやっているようでは、案外余裕などないのかもしれない。

「それに改造するのはいいけど、その人ほとんど訓練してないのよ。たまに歩行とかの基礎的な練習をしてるくらいで、放課後はひたすら自分のISに繋いだパソコンとにらめっこ状態」

「改造してそれで終わりではありません。実際に動かしてみても自分の体でも確認をしなければ使いこなすことはできないのです。整備士さん方が趣味の世界だと言うのは、机上で数字をいじっているだけで全く実践が伴っていないからなのです」

「うーん、さすがに訓練してるところは隠しようがないか。打鉄に乗って訓練したら誰の目にも分かるし、クラスの人達も様子見てく

れてるし」

しかし俺など必要ないと言うだけあって、四組代表のことはよく調べられている。

しつかり裏まで取っているあたり俺がやるよりも精度は高そうだ。

「ということは話戻すけどいくら改造しようと思像の範囲内で収まるってことでいいよね？」

「もちろん。そしてその想定はしてあるし、織斑君も理屈だけじゃなくて訓練で感覚でも覚えさせているから、たとえ長引いてもこちらにとつてあまり不利にはならない」

「おそらく逃げ回るのであろう相手をどのように捕まえるかがこちらとしての焦点ですね」

やはり一番の問題はまともに向かつてこない相手に対してどうやって一夏は攻撃を当てるかになるだろう。

さっきの試合で明らかに普通ではない攻撃を見せてしまっているので、打鉄だからといって打ち合ってくれるような甘い期待はもうできない。

「そうするとやっぱりエネルギー無効化攻撃よりもイグニッション・ブースト？」

「エネルギー無効化攻撃を使う機会はあまりないと思う。打鉄で織斑君から逃げ回ろうと思ったら相当な部分をスピードの方に割り振るしかないから、ということとは装甲が極端に薄くなる」

「その場合はエネルギー無効化攻撃がなくともブレードだけで十分だと思います」

「なるほど。もし逆に装甲を厚くしてきた場合は捕まえるのが簡単になるから、今度はエネルギー無効化攻撃を使えばいいわけか」

相手は打鉄という制限をかけられている時点で一夏に対して最初から不利だ。

ラファールやメイシウトローム相手ならその硬い装甲を生かして持久戦に持ち込めばやりようはあるが、装甲を無意味なものにしてしまう一夏には打鉄の戦い方が通用しない。

だから機動性の弱い機体でも高機動型の戦い方をするしかないの

だが、そんな中途半端なことではブレード一本しかなくとも専用機持ちの一夏に勝つのは厳しいだろう。

「予想される試合の展開としては、まあ鬼ごっこになるでしょうね。こっちが剣一本しかないのに変わりはないから、向こうはできる限り距離を取って銃で削ってこようとするのは間違いない」

「そこでイグニッション・ブーストが活きると」

「ですがおそらくそれはなかなかうまくいかないと思います。なぜなら相手もイグニッション・ブーストを使ってくる可能性が大いにありますので」

そうだ、確かにイグニッション・ブーストはこちらだけの専売特許ではない。

岸原さんは打鉄の資料からイグニッション・ブーストの技術を発見している。日本の代表候補生であり打鉄を乗りこなしているであろう四組代表だつて使えていても全然おかしい話ではないのだ。

「だったらイグニッション・ブーストを使って高機動型な戦い方をしてくるんじゃないの？ スピードを上げられるってことじゃない」

「もちろんその可能性も考えたけど、それをやろうとすると今度は機体そのものと本人の精神がもたない。織斑君から本気で逃げ回ろうとするのなら常にイグニッション・ブーストを使い続けるくらいはしないといけないけど、それは機体にも本人にも相当な負担がかかるよ」

「制御が難しいというのはそういう面もあるのです。加速させるというのは結局機体に無理をかけている状態です。ですから常時そういう状態ではすぐに機体が悲鳴を上げてしまいますし、制御し続ける本人にも相当な精神的疲労が振りかかります」

聞けば聞くほどことごとく打鉄であることが足を引つ張っているように見える。

「ちなみにそれは根性とか操縦技術でどうにかできるもの？」

「多少はもたせられる時間を伸ばすことができるかもしれないけど、ジリ貧であることに変わりはないわ。そしてその間に一撃でも受けた日には終わり」

「パイロット班の方々には打鉄で織斑君に勝つ方法を考えていただきましたが、織斑君の機体が打鉄の上位互換的存在だというのもあって、もはや技術云々のレベルではなく相当に厳しいです。結論としては織斑君の特性を理解した上で篠ノ之さんのように肉薄するしかないという話になりました」

これはおもしろい。

基本的に打ち合うのはエネルギー無効化攻撃を持つ一夏に対して愚の骨頂なのだが、打鉄にはあえてそれをやるしか勝機がないというのか。

剣道日本一で剣に特化している篠ノ之さんはずっと打鉄を使い続けていて、エネルギー無効化攻撃なしでは一夏はまず勝てない。

だがエネルギー無効化攻撃を解禁しても、篠ノ之さんは一夏の攻撃をほとんど空振りさせてしまっていた。一度でも当たれば一気に形勢は逆転するのだが、当てられないまま篠ノ之さんの勝利に終わることの方が圧倒的に多かった。

とはいえ一度でも受けたら終わりというのは精神的にとてもきついようで、見た目は完勝でも篠ノ之さんに余裕があるというわけではないそうだ。

つまり誰にでもできることでは決してない。

「でも本気でそれをやろうと思ったら篠ノ之さん並みの剣の技術と度胸と勇氣が必要になるんだけど、四組代表にはどれも無いというのが私達の結論ね」

「それは一朝一夕に身につくものではありませんし、四組代表にはそのような経験がないことも分かっています。どんな天才でもいきなりやってできるものではありません」

また、訓練当初は相手の機体など関係なく一夏は負け続けていた。だがこの一ヶ月毎日地道に訓練を続けたことによって、一夏は勝てないにしてもクラスメイト達と渡り合えるようになっていた。

もちろんクラスメイト達も初心者に手が生えた程度でそこまで熟練した腕前というわけではないが、きつとそこには一夏の恐るべき成長速度があるのだろう。篠ノ之さんが驚愕し鈴が嫉妬したという事

実もある。

「もし万一覚悟を決めて向かってきたとしても、織斑君は篠ノ之さんと訓練しているから動じることもない。むしろ向かってきてくれるのは織斑君の性格的にも嬉しいでしょうね」

「その場合はおそらく先ほどの五組代表と同じことになるでしょうか」

話しているうちに鷹月さんと四十院さんには自信が戻ってきたようだ。

元々普通にやれば勝てる相手で、唯一勝ちが計算できると言っていたくらいだったが。

「なるほど、じゃあさっきの試合を踏まえた上での懸念点は？」

「だからそれは相手がまともに戦ってくれないこと。鬼ごっこをしているうちに織斑君の集中力が切れて、そこで畳み掛けられると敗北もないってわけじゃないのよ」

「勝ったのはもちろん嬉しいことですが。圧勝し過ぎたことで今後の相手に強い警戒心を与えてしまったのが難点ですね。加速しているのはきつと分かったでしょうし、エネルギー無効化攻撃についても何か特別な攻撃を持っているとは理解しただろうと思います」

無傷の完勝を素直に喜べないというのも難儀な話だ。

元々一夏には引き出しが少ないので、あまり対戦相手に手の内を見せたくなかった。だいぶ上達したとはいえ技術的にもまだ安定にはほど遠く、相手に手の内を飲み込んでかかれると対応しきれないことが多いのは訓練ではつきりしている。

こちらから攻めているうちはいいが、奇策などを使われて受けに回ると脆いのが一夏だ。訓練では鬼ごっこのようなジリジリとした展開が続くと頭が疲れて集中力が切れ、隙が多くなってそこを突かれることが多いことが多かった。

かといってうまくいっているうちは安心かと言うとそういうわけでもなく、調子に乗って無茶をして相手にひっくり返されることもまたよくある。うまくいったからよかったものの、さっきの試合などは勢いでやってしまった部類に入るのだろう。

性格による部分が大きいのが本当にムラがあり過ぎる。あの時先輩達が悩んでいたことが、今実感として俺に降りかかっていた。

「もちろん、四組との試合がそういう展開になることは織斑君も理解してる。だから予想外なことではないんだけど、さっきの試合を見た後じゃもう相手が徹底して逃げるのは間違いないでしょうね」

「敵は相手にあらず自分の中にあり。ラッキーヒットでも受けて織斑君が動揺でパニックになってしまわないか心配ですね」

「そのへんは改めてきちんと言い聞かせておこう。あと谷本さんにもケアをやってもらって」

もつと有効な対応策はないのかと思うが、ありきたりな考えしか浮かばなかった。

おそらくさっきの試合によって一夏は相手に普段よりも過大な評価をされてしまっている。だが警戒された相手にじっくりとやられて長引けば、実は穴だらけなのはすぐにバレてしまうだろう。そしてそれが相手に余裕と自信をもたらしてしまっただけは、一夏にとっていい展開にはなくなる。

問題は分かっているのに、今すぐ解消できないというのが実にもどかしい。

「あ、もうこんな時間だ。じゃあ二組と三組の試合を見に行こうか」

「そうね、しっかり偵察をしておかないと」

「四組や五組と違って予め実戦での動きを見ることが出来る相手です。十分に生かして織斑君に還元したいですね」

だがいつまでもひとつのことにこだわり続けるわけにもいかないのだ。たとえ四組に勝っても次の日の三組戦で負けては全く意味がないのだ。

出たところ勝負となつて一夏に全てを背負わせないためにも、これからはきちんと偵察しておかなければならない。

残っていた紙コップの水を一飲みして、俺達は寮から再びアリーナへと戻った。

モニター越しではなく客席から見るとアリーナはまだ熱気に包まれたままだった。

言うまでもなく、先ほどの一夏の影響だ。

発見された男性IS操縦者は鮮烈な印象を残すデビューを果たしていた。

ただISを動かすことができるだけでなく、たった一ヶ月で使いこなしてみせたのだ。

白く輝く専用機とも相まって、その姿は観客に一夏が特別な存在であることを印象づけただろう。

「おっ、遅かったな。何してたんだ？」

「次の試合に向けての作戦会議」

「あ、そっか。いつもありがとな」

当の本人は落ち着いてくれたようだ。一夏の後ろに座っている谷本さんが俺に向かって得意げな笑顔でピースしている。時間があれば何をしたか確認しておこう。

「いろんな人に握手してくれとか言われちゃったよ。なんか俺芸能人みたいだな」

のんきな顔の向こうで、篠ノ之さん達が危機感に顔を曇らせていた。

もちろん一夏が活躍するのは彼女たちにとっても誇らしいだろうが、それは同時に一夏の存在が世に広まってしまうということでもある。

これまではクラスの中でだけだったが、リーグマッチ後は学校中に一夏の魅力が広がっていくのだろう。そしてそれは俺の目論見通りだ。

「体は問題ない？」

「大丈夫に決まってるだろ。むしろ早く試合したい気持ちは今もぐーっとこらえてるくらいだ」

「次もさつきみたいにうまくいくとは思わないでね。相手はすごく警戒してくるから」

「分かってるって。四組の代表は元々そういう話だろ。我慢比べにな

るから先に切れないように、だったな」

「きちんと頭に入ってるならいいよ」

一夏も各クラスの代表対策訓練でクラスメイト達に口を酸っぱくして言われている。

一夏のメンタルが心配なのは俺や指揮班だけではない。むしろ毎日一緒に訓練をしているパイロット班連中の方が一番身にしてみて分かっているのだから、一番にして最大の不安要素を解消すべくあれこれ頭を悩ませていた。

訓練の外では谷本さんがうまくコントロールしてくれているようだが、始まってしまつては誰も助けることができない。だからせめて訓練ではということ、訓練において一夏がじれるシチュエーションを何度も行つて一夏を精神的にも鍛えようとしてくれていた。

「おつ、ようやく始まるな」

場内アナウンスが流れ、鈴の名前が呼ばれた。会場に拍手が湧き上がる。

そして専用機に乗つた鈴が出てきた。赤……というよりはピンクと黒の機体で、両肩の上には棘付きの装甲が浮いている。あれがオルコットの言っていたやつか。できればこの試合で見せてくれると嬉しいが。

「あいつ緊張してんのか？ 鈴らしくねえ顔だな」

確かに鈴はよく知る一夏や俺が疑問に思うような無表情だった。

普通、いつもの鈴であれば、こういう人前での場では笑顔を絶やさない。一夏に褒めてもらうのが一番だが、他人の賞賛も嫌いではない。手の一つくらい振つてもおかしくはなかったのだが、今日の鈴は何の感情も浮かんでいない無表情だった。それは篠ノ之さんがよくやる仏頂面とはまた別の種類で、俺には感情を押し殺して封じ込めているように思われた。

「なんかこれから試合するって顔じゃねえな。馬鹿らしくて本気出すまでもないってか？」

鈴に対して怒っているというのもあり、一夏の評価は厳しい。

一方俺はあの鈴の表情からまだ鈴が自分の感情を整理できていな

いと感じた。

どちらかの方向に振りきつてしまえば、鈴はわざわざその感情を隠すような真似をしない。

だがいまだにどっちつかずなままの状態であるので、せめて平静であろうと努めているのだろうと思った。

と、一夏の向こう側に座る篠ノ之さんと目が合う。篠ノ之さんの目はお前の仕業だなと言っていた。だが俺は何も答えず目をアリーナの中央へと戻した。

「三組代表はラファールか。まあそうよね」

隣の鷹月さんが鋭い目つきで分析を始めている。

続けて出てきた三組代表は笑顔で手を振りながらアリーナの中央へと向かって歩いていった。それは無表情の鈴とは対照的な姿だった。

「二年三組代表、アニータ・ベッティよ。よろしくね」

「ごたくはいいわ。さっさと始めるわよ」

「あら、もしかして緊張しちやってるの？ ダメよ、こういう機会なんだから、めいいつぱい楽しまなくちゃ」

「うっさいわね。余計なお世話」

取り付く島もない、という様相だった。話すことは何もないとばかりに鈴は自分の武器を右手に出す。それはブレードというよりは青龍刀という感じのごつい剣だった。中国産だし確かにヨーロッパ風の武器とは見た目から違っているのだろう。

「あらあら、せっかちさんね。心の余裕はきちんと持っておいた方がいいのにな」

笑顔で返しながら、三組代表も自分の武器を出す。こちらはフランス産のラファール、出てきた武器も西洋的なブレードだった。

そして三組代表もブレードを構え笑顔から真剣な表情に変わる。

それをきっかけとして始まりの鐘が鳴った。

「始まるの早っ！」

谷本さんのどうでもいい独り言が聞こえたが、確かにさっきの試合のように罵り合いが始まることはなかった。やはりお互いに始まる意思を見せなければならなかったのだろう。

まず鈴が青龍刀を振りかぶり相手へと突進する。それに対し三組代表は自分も突つ込むことはせず受けに回った。

もちろん三組は鈴の青龍刀をまともに受けるような真似はしない。ブレードで受けつつも体をそらし、相手の力を外に逃がして躲す。そしてその勢いで鈴に斬りかかった。

だが躲されるのは分かっていたのだろう、鈴も慌てることなくそれを青龍刀で受けて、むしろ力ではじき返した。

「鳳さんはやっぱりパワー型か……。最新の専用機ってこともあるし打ち合うのは骨が折れそうね」

「見た目通り一撃が相当に重たかったです。盾持ちの打鉄でない限りまともに受けて耐えようとは考えない方がいいでしょう」

実際に鈴の攻撃を食らったことのあるオルコットが補足する。と
「どうか青龍刀の見た目からしてあんなごついのをまともに受けたいなんて思う奴はいないだろう。」

しばらく近接での応酬が続く。積極的に仕掛けているのはむしろ三組代表だった。敏捷性を重視しているのか、細かく動いて鈴の隙を狙っている。対する鈴は一撃で仕留めようとしてか手数を多くするよりも重そうな攻撃がメインだ。当たらなくとも顔色一つ変えず、淡々と青龍刀を振っている。細かい攻撃が当たっている分一見は三組代表のペースのように思えた。

「鳳さんも今日は連戦だし省エネで通すつもりなのかしらね？」

「そうかー？ あいつすげーやる気なさそうに見えるんだけど」

「織斑君、やる気がなければあのように綺麗に躲すことはできませんよ。それに受けた攻撃もたいして効いていません。無駄に動いていない分鳳さんの計算通りだと思います」

四十院さんにたしなめられて、一夏が肩をすくめる。

オルコットに完勝しているという事実もあり、鷹月さん達は鈴の實力を相当上に見ている。確かにそれ相応の實力を持っているのは間違いないのだが、今回に限っては一夏の方が正しいと俺は思った。

ただ一夏も正解というわけではない。一夏がやる気ないと評したのは、鈴の消極的な動きにある。鈴の強気な性格からすれば普通は前

に出て積極的に仕掛けるはずだ。だが今のともすれば主導権を相手に渡してしまうようなやり方は、本来の鈴からはほど遠い戦い方になるだろう。だがきつと鈴はそうするしかなかったと俺は想像した。

「甲斐田、もしかして鳳はコンディションが悪いのか？」

「コンディションですか？」

やはり気づいたのは鈴を自分と同類だと思っている篠ノ之さんだった。

その正反対と目されるオルコットはもちろん気づかない。

「だから省エネでやらざるをえないんだろうね」

「甲斐田さん？」

「やはりか。鉛でも背負ったかのようだ。動きが重過ぎる」

「おい智希、それどういうことだよ？」

自分が怒っている相手のことだと言うのに、一夏は俺に憤慨の目を向けてくる。

「どうもこうも、鈴の体調がよくないってことだよ」

「またお前の作業か？」

「作業って、別に鈴の体調管理とかしているわけじゃないし、目の前の鈴がそうだって言ってるだけなんだけど」

「だからそれをお前がやったんじゃないだろうな？」

「もし僕がやるなら一夏との対戦の日にそうなるようにするだろうね」

おそらく鈴は悩んだ末の寝不足だろう。普段が非常に健康的であるがゆえに、鈴は体調のよくない状態にはあまり慣れていない。いつものように頭が働かない時、鈴は物事に対していい加減になる。

そして今の鈴の姿がまさにそうだ。傍からは多少の攻撃など気にしない豪胆さに見えるかもしれないが、きつと細かいことを考えるのが面倒なだけだろう。

「甲斐田君、それならあれは手を抜いているとかやる気がないとかいうわけではないの？」

「調子悪いからきつさと負けようとかは一切考えてないだろうね。今の自分の状態でどうやって勝つかを考えての話だと思う」

なおも一夏は俺を疑っているようだったが、察したのか鷹月さんが話を戻す。

一夏にはともかくとして、いくら体調が悪かろうと鈴が他の人間に負けていいなどと考えるはずはない。

「そういうことは、予め装甲を厚くして多少のダメージなど気にせず力で押し切るつもりでしょうか？」

「ううん、それなら押し切るよりは追い詰めるだと思ふ。ほら」

鷹月さんに言われて俺達もアリーナへと目を移す。

会話しつつも鷹月さんはアリーナから全く目を離さないでいた。

「さつきから、三組代表は全く距離を取れていない」

このままでは埒が明かないと悟ったのだろう。三組代表は近接戦をやめて銃で戦おうとしているようだった。なんとかして鈴から離れて距離を取ろうとしている。

だが鈴はその隙を与えない。ひたすらに張り付いて青竜刀を振り回す。イグニツション・ブーストでもあれば一気に逃げられるだろうが、三組代表は持つていないようだった。

思い切つて相手に背を向けて全速で逃げればもしかしたらいけるかもしれない。だがそんなことをしては今度は後ろから狙い撃ちされてしまうのが関の山だとも思っているのだろうか。結果相手に体を向けたまま距離を取ろうとするしかなかったが、自分以上のスベックを持つ鈴にすぐ詰められてしまう光景が繰り返された。

「ハイパーセンサーで全方位分かるんだから、信じて一目散に逃げればいいのに」

谷本さんがつぶやく。確かにハイパーセンサーは自分の視界外のことについても把握して教えてくれる。だが一瞬一秒を争う場で斬りかかってくる相手から目を離すなど普通は怖くてできない。言うだけなら簡単かもしれないが、実際その場でやれるかというところというのはそれなりの訓練をした上での話だろう。

「三組代表は早く覚悟を決めないで。ブレードでも銃でもどっちでもいいから」

「厳しいですね。あれでは考える余裕がありません。息つく暇もない

状況ですから、目の前の対応で精一杯だと思いますよ」

誰の目にも戦況は一変していた。鈴が三組代表をじわじわと追い詰めている。

一発も当たっていないというのに鈴は相変わらず冷静で、三組代表はもう完全に余裕のない険しい顔になっていた。

一撃でも当たったとき鈴が一気に勝負に来るであろうというのは明らかだ。だが対する三組代表にはいまだに決め手がない。

鈴の装甲は三組代表の想像以上に硬かったようで、何度か当てた攻撃も鈴のシールドエネルギーを削り切るには程遠い状況だった。

「鷹月さん、三組がここから逆転するには？」

「織斑君？ そうね、このままブレードでしつこく削り続けるか、一撃もらってでも銃に切り替えて距離を取って戦うか、まずどっちにするかを決めないと」

「三組は銃に切り替えたいんだよな？」

「そうだけど、もうリスクなしで銃に切り替えるのは無理ね。バスのロットから銃を出すにはほんのちよつと時間が必要んだけど、鳳さんは絶対にその隙を与えるつもりがない。ジリ貧でもブレードで叩き続けるか、覚悟決めて一撃もらうのと引き換えに銃に切り替えるかしないと」

「ですがその一撃から一気に畳み掛けられる可能性も高いので、決断も難しいのです」

「そうか、二人ともありがとう」

いつの間にか一夏は真剣な顔でアリーナを見つめている。

頭の中で鈴と戦っているのだろう。

「でもこのままブレードで削るのは無理でしょうね。あれ相当に硬いわ。それに銃を出すにしてもオルコットさんが持つてるようなレーザー系じゃないと、本体にまで届かなさそう」

「鳳さんに限らず打鉄のような硬い機体にはレーザー系の貫通攻撃がないと厳しいですね」

「えっ？ それってどういうことだ？」

「ああ、一夏は自分に剣しかないからって武装関係を全然勉強してな

いよね」

この際きちんと認識させておこうと俺は一夏に説明することにした。

ISとは元々宇宙空間での動きを想定しているというのもあり、搭乗者の体を守ることににおいては何重ものセーフティがかけられている。

まず装甲。基本的に機体に対する物理的な危害はここで防がれる。装甲とはただの金属ではなく、そこにはシールドバリアと呼ばれる防御膜がかかっている、その強度未満の攻撃に対しては一切を弾く。装甲が硬いというのはシールドバリアの強度が高いということだ。そしてその強度は改造である程度変えられるものでもある。

またシールドバリアはシールドエネルギーによって維持されていて、エネルギーが残っている限り続く。ただシールドエネルギーは無限のものではなく、シールドバリアが働けば働くほどシールドエネルギーは減っていく。またその強度以上の攻撃を受けると大幅に消費する。そしてシールドエネルギーがなくなってしまうえばシールドバリアは消え、ISは金属の塊になってしまう。この状態を俺達はよく紙装甲などと言ったりする。

だがそれは装甲がなくなっただけで、動かなくなるわけではない。本体にもエネルギーがあり、それがある限りISとして活動できる。またこの状態で外部から攻撃を受けても、本体のエネルギーを消費してダメージを吸収し搭乗者の安全を守る。シールドバリアのような強度はないのでぐんぐん減るそうだが、それでもエネルギーが残っている限り搭乗者の安全は保証される。

そして本体のエネルギーが尽きてしまえば動けなくなって終わるかということではない。

ISの最終防衛機構にして最大の目玉、絶対防衛だ。

それは文字通り、搭乗者に危害をもたらすあらゆる攻撃を防ぐ。しかもエネルギーのような消費する形態ではなく、ある一定の強さ未満に対しては半永久的に発動するとまで言われている。

この仕組みはいまだ説明されていないそうで、ISコアの開発者篠

ノ之博士にしか分からないとのことである。

だからIS搭乗者本人に危害を加えるためには、シールドエネルギーを削って本体のエネルギーをなくして動けなくした上で絶対防御を上回れる攻撃を行わなければならない。

しかし凶悪なことにシールドエネルギーも本体のエネルギーも時間が立てば自然に回復してしまうので、仕留め切れなければ半日も経たずに元通り、だそうだ。

「なあ、それ昔あった戦車とかで一気にポッコボコにすればISって負けるんじゃないか？」

「ああ、今のは対ISの話。ISからと認識されない攻撃についてはまず最初に絶対防御が発動するんだって。しかも核爆弾でも持つてこないと突破できない強度の絶対防御。そりゃあ戦車とかもういらないうってなつちやうよね」

「なんだそれ」

「正確にはISからの攻撃に対しては絶対防御が完全な形で発動しないというのが正しいかしら。だから後付けで開発されたシールドバリアによる装甲でISからの攻撃も防げるようになったって話ね」

「なるほど、順番が逆なわけか」

鷹月さんが横から補足してくれた。

どうやってISからの攻撃とそうでないものを見分けるのかと思うが、それを解明できなかったがゆえに戦車のような兵器が全く通用せず駆逐されてしまったらしい。絶対防御の理論といいISの技術にはブラックボックスが多過ぎて、使うことはできてもなぜそうなのかが全く追いついていないのがIS研究の現状だとのことである。

「だから私達がやっているような競技では本体のエネルギーを削るところまでね。絶対防御はあくまで搭乗者の命を守るための安全弁」

「誰も分かんないようなものはそっとしておくしかないよね」

「ふーん、じゃあ俺のエネルギー無効化攻撃って意外とすごいんだな」
意外とどころではない。ISからの攻撃を防ぐためのシールドバリアを無意味なものにしてしまうのだから、むしろ反則もいいところである。

「あ、じゃあISって基本的に装甲を厚くしとけばいいんじゃないか？ エネルギー無効化攻撃とか誰もが持つてるわけじゃないんだろ？ それなら今の鈴みたいにも多少の攻撃を喰らっても平気そうだし」
「まあ基本的にはそうなんだけど、シールドエネルギーも無限じゃないからね。弱い攻撃でも相手のシールドエネルギーを消費させることはできるし、レーザーのような貫通攻撃もあるから」

「ああ、そういえばさっき言ってたな。貫通攻撃？」

「こうやって話している間もアリーナでは打ち合いが続いている。」

三組代表はひとまず逃げようとする行動を諦めたようだ。

必死に鈴の攻撃を躲し、微々たる量といえども相手のシールドエネルギーを削ろうとしている。

一方で鈴は一貫して変りなく、感情も浮かべずに青竜刀を振り回していた。

「そう、ISにおける話だけどオルコットさんの持つてるようなレーザー攻撃は、シールドバリアを貫通して直接本体のエネルギーを削ることができるのよ」

「え!?! それってつまりエネルギー無効化攻撃のことじゃないの？」

「もう、織斑君は実技ばかり先行してて本当に理論の方を勉強してないわね。エネルギー無効化攻撃は文字通り装甲、シールドバリアをなにもものとしてそのままの威力で相手本体のエネルギーを減らすことができる。一方で貫通攻撃はシールドバリアを貫通できるんだけど、その際に威力の大きな減衰が発生するの。だから本体のエネルギーを削れると言っても、本来の威力の十分の一も届けばいい方かしらね」

「打鉄のような装甲の硬い相手には有効ですが、そこまででなければ先にシールドエネルギーを削った方が早い場合がほとんどですね。どちらかというときまだ開発途上の技術です」

オルコットの専用機は武装がレーザー攻撃ばかりだそう、先輩達曰くこの機体は間違いなく実験機だとのことである。それがわざわざ遠い日本のIS学園に送り込まれたのは、おそらく日本製で世界有

数の装甲を誇る打鉄にどの程度通用するかを測りたいのだろうかという話だった。

まあ模擬戦の時はレーザーだろうがなんだろうがあの時の一夏では喰らったら一緒だという話で、特にレーザーだからどうだということとはなかった。むしろ基本直線で飛んでくるので初心者の一夏的にはよけやすいだろうという程度だった。

「ふーん。じゃあ三組代表はやっぱり銃を出した方がいいんじゃないのか？　鈴の装甲は相当に硬そうだな」

「そもそもレーザー系の武装を用意しているかですね。もしないのであれば時間はかかりますが今のままでいく方がリスクが小さいです」「いや、その前にあいつもたないぞ。攻められ続けるのって相当にきついんだ。だからどこかで攻めに回って自分のペースにしないと、いつか気持ち切れる」

一夏はIS学園に入学してからほぼ毎日訓練を続けている。そしてその大半は受けに回って攻められてばかりで、それは楽しいものではないな。だから気持ちがよく分かるという話だ。

全然ISの勉強をしないので知識はないが、実技における経験量はそれなりに蓄積されているようだ。

「そうね、確かに始まってからずっと鳳さんは相手に休ませてないわね。もちろん自分も休んでないけど、どちらかというところルーチンワークで省エネしてるから相手ほど疲労はきてなさそう」

「そして一撃入れば途端にスイッチが入るのでしようね」

「俺ならマズいと分かってそのまま続けるつもりはないな」

果たして当の三組代表は、その表情に疲労の色が見え始めていた。一方の鈴は相変わらずの無表情で、少なくとも傍目には疲れているようには見えない。どちらが優勢かは誰の目にもはっきりしている。

そしてついに三組代表は決断した。鈴に背を向けて一気に近くの壁へと向かう。もちろん鈴も追いかける。三組代表は壁の側に着くと振り向いて背中を壁につけ、ブレードを持った右手を前に出して構える。ブレードで受けて一撃耐えて時間を作り、左手に銃を出すつもりだろう。

鈴はそんなことおかまいなしに右手に持った青龍刀を振り上げる。ここまで三組代表は鈴の攻撃をまともに受けてはいない。ブレードで受けるときもそのまま受け止めず動きながら力を外へと逃がしていた。

だが今は足を止めていて片手一本だ。同じことをしようとしても弾き飛ばされてしまうのがおちだろう。だから壁を背にして何とか受け止めて、その間に銃を出して反撃に移ろうという方向だ。

三組代表に向かって鈴の青龍刀が振り下ろされる。

「あ、ダメだー！」

何事かに気づいた一夏が叫ぶ。

壁を背にしたおかげか三組代表は鈴の一撃を受け止めきった。そして左手に銃を出した。

だがその時には鈴の空いていた左手にもう一本の青龍刀が握られていた。三組代表に銃を出せるだけの時間があれば、鈴にだって同じ時間はあったのだ。

そして鈴の左手は無防備となつている三組代表の横つ腹へと繰り出される。予想だにしない方向からの横薙ぎの一撃をまともに受けて、三組代表の体は綺麗に吹っ飛ばされた。

ここぞとばかり間髪入れずに鈴は追撃をかける。おそらく頭が追いついていないであろう三組代表は、体勢を立て直す暇もなく鈴の連続攻撃を浴びた。

鈴は二刀流になつているのでブレード一本では受け切れない。せっかく出せた銃も構えることすらできずに弾き飛ばされ、そのまま三組代表は鈴のめつた打ちをもらつてしまった。

だが一撃自体が重いのでそれはすぐに終わり、三組代表の体が崩れ落ちて織斑先生の終了宣言が響き渡る。

こうして二組と三組の試合は二組の勝利で終わった。

結局鈴は最小限の労力で勝利した。

勝つたこと自体に驚きはない。中国の代表候補生という肩書で裏

付けもされているし、一年見ていないとはいえ常日頃から努力して結果を出し続けた姿をよく知っている。

ただ、さっきの試合は俺の知っている鈴の姿とはだいぶ違っていた。

コンディションがよくないのは間違いない。まず間違いなく一夏のことで結論を出せずに悩み続けたせいで、鈴を思考の迷路に嵌めたのは他ならぬ俺だ。

以前であれば一夏に背中を押してもらい勇気を出してそこから抜け出せていただろう。

だが今回はそれをさせないようにしているので、今も鈴はもがき続けている。だからとても模擬戦に集中できる状態ではないだろうと俺は思っていた。

しかし今の鈴はそんな中でも自分をコントロールする技術を身につけていた。調子が悪くとも悪いなりに無理せず試合を戦ってきっちり勝利した。

基本的に鈴は感情のぶれ幅が大きいのでメンタルに左右される部分が非常に大きい。いい方に乘せてしまっただけなら誰の手にも負えなくなる。だから俺は一夏の試合で鈴がこの状態になってしまうのを一番恐れていた。しかし反面鈴は気分が落ち込むと投げやりになるので、その状態でリーグマッチには臨んでもらおうと俺は考えて行動したつもりだった。

「きちんと自分の実力を把握して、コンディションも考え今の自分に出ることとできないことをしっかり切り分けて、その上で全力も出さずに勝利する……。強敵だわ」

鷹月さんが待機室の中をぐるぐると歩き回っている。

鈴との試合までに俺から聞いていた鈴の姿よりも上方修正して考えなければならぬのだ。

メンタル的に最悪に近い状態でもそれに振り回されず勝って見せたのは、明らかに俺や一夏の想像を上回っている。

「結局あの特殊武装を使っています。つまりそこまでする必要がなかったという話で、私達はまだ凰さんの底が見えていない状態です」

一夏がエネルギー無効化攻撃を持っているように、専用機を持つ鈴にも固有の特殊武装がある。

それは初見でやられては相当に危険な代物だったが、幸いなことに鈴がオルコットと喧嘩した際に出してくれたおかげで、俺達は予め知った上で臨むことができる。

だから実際どういうものか一度は一夏に見せたかったのだが、三組代表はそこまで鈴を追い詰めることができなかった。この分では四組五組の代表にも無理かもしれない。

「二方で一夏はイグニッション・ブーストもエネルギー無効化攻撃も見せてしまっていると」

四十院さんが難しい顔をし、鷹月さんはしかめっ面になる。

実力以前に一夏はそもそも引き出しからして少ないというのに、今やそれが全て対戦相手にはバレてしまっている。

基本的に対戦相手達は実力的に一夏よりも上だ。だから意表をついたり搦手を使いたいところなのだが、今の一夏ではそれはとてもできない。

対戦相手の一夏対策は易しく、こちらの相手対策は難しい。

「まあ鳳さんについては後二試合見ることができると、突破口はその中で見つけていくしかないわ。それよりも目の前の試合にしっかりと勝っていかないと」

「そうですね、最終戦が消化試合になっては何の意味もありませんし」

「うん、まずはこれからの四組との試合だ。あ、そろそろ時間だし一夏も戻ってくるかな」

なんとなく待機室入り口の扉に目をやった。

今一夏は外でパイロット組と共に本番前のウォーミングアップをしている。

狭い待機室で手持ち無沙汰に待っているのはかえって緊張してしまうようなので、ギリギリに戻ってくるように言っていた。

「いいなあ、あんな青春の日々が欲しかった」

「グググ……そこに男子も混じっているだなんて本当に羨ましい……」

「二人ともまだ大丈夫よ、素直に羨ましいと思えるうちは。それが暖かい目になつたらもうダメだけど」

待機室の端で倉持の人達が好き勝手言っている。

目を向けると三人共慌てて目を逸らした。

「でもさ、やっぱり走つた方がかつこよくないか？ スピード感あつて」

「ちつちつち、ゆつくりと歩いた方がかえつて存在感出るんだつて」

一夏達が戻ってきた。

谷本さんとバカそうな会話をできているあたり一夏は大丈夫そうだ。

「おかえり。特に問題はないね？」

「お、そうだ智希にも聞こう。なあ、入場するとき俺走つて出て行つた方がいいと思う？ それともさつきみたいに歩いた方がいいかな？」

「何言つてんの？」

俺達の悩みとは壮絶に次元が違っている。

「一夏の入場の際の動きについてだ。私は疾走感を出した方が一夏らしくていいと思うのだが」

「ですから、先程のようにゆつくりと歩いて緊迫した場でも優雅さを見せるべきだと思うのです」

「あと三試合もあるんだし両方やってみようよー。絶対どつちもいってー！」

俺は真面目に答えるべきなのだろうか。

いや、一夏が本番前でもリラックスして自然体でいるのは喜ばしいことのはずだ。だから、くだらないことで悩んでないでさつきと準備しろ、などと心の狭いことを言うべきでは決してない。脳気な顔しやがつて、なんて思ってしまうのはきつと俺の自分勝手な感情だ。

「悩むくらいなら一度走つてみればいいんじゃないかな」

「確かにそうだな」

「だよね！ さっすが甲斐田君！」

「そんな！ 私の壮大なイメージ戦略が！」

一夏が納得し、谷本さんが大げさに頭を抱えて呻く。

正直俺としてはどうでもいいが、谷本さんが嘆いているのできつとこの選択は正しかったのだらうと思った。

「甲斐田さん、考え直してくださいませ！一夏さんはそちらの方向性とは違うのです！」

「諦めるオルコット。決まったことが全てだ」

なぜかオルコットが執拗に喰らいついてきた。一方篠ノ之さんはまた勝ち誇った顔をしている。別にどちらかに味方したつもりもないのだが。

「織斑君、もう時間だからすぐ準備して」

「おう、白式も問題ないしいつでもいけるぜ」

「水分補給等は大丈夫ですか？」

「あ、最後に一口飲んでこう」

鷹月さんと四十院さんは我関せずという風情だ。文句を言わないだけ大人になったと言うべきか。

「よし。じゃあ行くか」

「きちんと頭に入ってるよね？忘れてそうなことはない？」

「智希も心配症だな。バツチリだつて」

「それならいいよ」

「あ、そうだ。一つ忘れてた」

「え、何？」

一夏は何事かを思い出したようで、体をこちらに向き直ると、この場にいる人間にとってそれは最強の笑顔を見せた。

「みんな、いつもありがとな。必ず勝ってみせるから」

一夏はそれだけ言つて踵を返し、走つて待機室を出て行った。

さすがは織斑一夏、本当に恐ろしい男である。

振り返るとパイロット班の三人は完全にやられて腰砕けになっていた。

「織斑君つて本当に怖いわ。不覚にもドキツとしちゃった」

「普段の織斑君を知っていなければ非常に危険でしたな」

どうやら鷹月さん達にまで効くレベルの笑顔だったらしい。

岸原さんも顔に手を当てて真っ赤になっている。

だが谷本さんはぽかんと口を開けて呆けた顔になっていて、布仏さんはいつも通りの笑顔で手を振っていた。

相変わらずこの二人だけはよく分からないなと俺は思った。

23. うまくいきそうかどうか、始まる前から分かることもある。

うまくいきそうかどうか、始まる前から分かることもある。

まあ、そういうのはたいてい悪い方向だと相場が決まっている。

モニターに映った四組代表の目を見た瞬間、反射的に俺はまずいと思った。

前よりも増した大声援の中、一夏はアリーナに登場した。

そして言っていた通り走ってアリーナの中央へと向かう。

歩こうが走ろうが一夏が絵になることに変わりはなく、パイロット班の三人は床に座ったままうっとりモニターを見ていた。

「よっ。よろしくな」

「……」

向い合って挨拶をした一夏に対し、打鉄に乗った四組代表は下を向いたまま返すことさえしない。

四組代表は大観衆に囲まれて気後れしているのかのように見えた。

「ん？ おい、大丈夫か？」

「大丈夫とかあなたなんか言われたくない……！」

四組代表はようやく顔を上げ、一夏を睨む。

それを見て一夏は目を丸くした。

「感じ悪いわね」

「先ほどの凰さんもそうでしたが、人前であのような態度はよろしくないですね」

鷹月さん達が感想を漏らしているが、四組代表は発した言葉以上に全身で一夏を拒否する姿勢を見せていた。

「悪かった。始めようか」

「……」

察した一夏は笑顔をやめて真顔になり、ブレードを出して構える。四組代表は口で答えることもせず両手に銃を出した。

「あれ、織斑君ならあんなこと言われたら文句言うかと思ったんだけど」

「どうしたのでしょうかね」

鷹月さん達はピンときていないようだが、俺や一夏に限らず男はああい視線をたまに受けることがある。

それは会話どころか意思疎通さえ拒否する目だった。

女性上位主義者なんかによくある話で、話をするだけ無駄どころかむしろ悪化するため、即打ち切って逃げるのが最善だというのが俺達の中での結論だ。

しかし四組代表が男を嫌っているなどという話は全く聞いていないのだが。

「おい、始める準備はできたって宣言しないと始まらないからそれくらいは口にしてくれ」

「……分かった。いつでも始められるわ」

一夏に促されて、四組代表はしぶしぶ声を出す。

その声に合わせて始まりの鐘が鳴った。

そしてモニターに映った四組代表の目を見た瞬間、反射的に俺はまずいと思った。

今度の一夏は開始と同時に突撃することはなかった。

正確には、できなかった。

開始の鐘が鳴ると共に四組代表は両手の銃を一夏に向かって激しく乱射する。

一夏はためらいもなくすぐにイグニッション・ブーストを使い一気に離れて回避した。

「いきなりイグニッション・ブースト？」

またも頭がついていかなかった鷹月さんが疑問の声を上げる。

だが今度の俺は一夏の瞬時の判断が正しかったことを確信した。何が起こったかを理解しているわけではないが、四組代表が何かをしようとしていたのは分かった。

「危ないところだった」

「あれよけられるってさすがは織斑君だね」

「迷うことなく距離を取りましたわ」

パイロット組が我に返り立ち上がっている。さすがにこの連中には見えていた。

「どういうことですか？」

「一言で言うて畏。逃げようとした先々に銃弾が飛んでくる感じ。そして逃げきれずに蜂の巣」

「乱射のように見せかけて一夏の動きを誘導しようとしていたな」

「闇雲な乱射ではなく左右の銃を時間差までつけて使い分けています」

パイロット組が興奮した口調になっている。

「どうやら相当に危なかったらしい。」

「あつぶねえなあ。そうきたか」

「……」

四組代表に一切会話をするつもりはないらしい。

その場を動かずに無言で再び銃を一夏に向ける。

一方の一夏は旋回を始め、突撃するタイミングを窺っていた。

「どうやら火力を最も重視してきたようですね」

「一応その可能性も織斑君には伝えてあったけど、完全に外したわ。」

織斑君ごめん」

鷹月さんと四十院さんの顔が曇る。もちろん自分でも言った通り予想を外してしまったからだ。

可能性を考慮し皆を納得させた上での話ではあるが、そのことで自分を不甲斐ないと思ってしまうのは仕方ない。

「鷹月さん、相手が火力重視で来ないと判断した根拠はなんだっけ？」

「長期戦ができないから。対ISでは何よりシールドバリアーを突破するのが第一で、それには一発の威力より手数の方が重要。たいてい

の場合威力を上げて装甲強度以上の攻撃をするよりもチマチマと削ってシールドエネルギーを減らしてなくした方が早い。だからちよつと火力上げるくらいなら普通は機動か装甲に回す」

「火力で勝負するにはそちらへ大幅に回す必要があるのですが、そのためには他の何かをその分だけ犠牲にしなければならなくなるのです。とするとまず機動か装甲か、長期戦のために必要な要素を相当な部分失うことになります」

どうしても短期決戦仕様にならざるをえないのか。

「具体的な欠点は？」

「相手も回避したりするんだし、削りきれずに弾切れが最大のネック。そこまでに仕留められなかったら本気で勝ち目ゼロになるから、リスクが大き過ぎるの」

「ですから極論織斑君は弾切れまで逃げ回ればいいのですが、まさかそういう方向で来るとは……」

つまりそれまでに一夏を仕留めることができるといふ自信があるからなのだろうか。

やむを得ずとはいえ今一夏は四組代表から距離が開いてしまっている。

だから隙を見つけてイグニッション・ブーストで突撃する必要があるのだが、今のところは加速を始める前に銃弾が飛んでくる状況になっていて、全く近づけるような余裕はなかった。

「両手の武装は両方ともラファールの近距離系の銃ね。武装までは打鉄で縛らなかつたか」

「さすがにそれはそうでしょう。ただおそらく銃の威力も改造して上げてあると思います」

「まさかそこまで火力上げる？　そういうことしていると容量食い過ぎて本体へのしわ寄せがひどいわよ」

「打鉄では装甲も機動も犠牲にする必要があるでしょうね」

鷹月さん達も気を取り直して分析を始めた。

四組代表は射撃の技術に相当な自信を持っているのだろうか。一夏に一切近寄せず、かつ弾切れする前に落とせるといふ。

確かに今のところ一夏が何とか近づこうとしても銃弾の雨あられに晒される。上下左右に振って揺さぶろうとしてもしつかり銃弾が追いかけてくる。結局一夏は逃げ切れなくなりそうになって、イグニッション・ブーストで射程圏外に脱出するしかなかった。

「別の意味での我慢比べだな」

「危険は分かっているけど一夏さんは相手に撃ち切らせなければなりません」

「どっちが先に痺れを切らすかだね」

「でもさ、こういう展開ってある意味予想できてた話だよな？」

俺から見ても一夏のペースとはとても言えない状態だ。

だが相手が銃で距離を取ってくるであろうというのは、十分予想できて対策も立ててあるはずである。

「甲斐田君、相手が機動性で勝負してくる場合はね。最新型の専用機と渡り合えるだけの機動力と打ち合うためのブレードくらいは長期戦に備えて最低限用意してくるだろうと思ってた。そうすると自由にできる部分は限られてくるし、できることはたいして少ないの」

「ですが四組代表はあの様子から装甲どころか機動まで削って火力に注ぎ込んだようです。開始からほとんど動いていませんし、もはやISと言いつつ固定砲台ですね」

つまり四組代表は博打に出たということなのだろうか。

絶対に相手を近寄らせないという自信の元、火力を上げ弾数を増やしてそれ以外のものを全て削ってそちらに回したと。

五組も三組もそうだったが、普通は長期戦を考えて弾の必要ないブレードを用意し相手と渡り合うための機動力は最低限確保する。だが四組代表はそれさえも捨てて火力に費やし、圧倒的な火力で一夏を押し潰す作戦を選択したのか。

確かに今のところ一夏に付け入る隙がないように見えるので、その賭けはうまくいっているのかもしれない。

「じゃあこれって全くの想定外の話なの？」

「というわけでもないのよ。火力についても十分考えたけど、結局こういう場合は織斑君が被弾覚悟で特攻すればいいから」

「どんなに火力を上げようと、銃ではイグニッション・ブーストで突撃してくる織斑君が辿り着く前に落とすことはできません。そして近づかれてしまえば相手はもう逃げるどころか回避することすらできないのです」

「だからそんな勝算のない賭けはしないだろうと思ってたんだけど、まだ向こうには何かあるのかそれともただ単に思慮が足りないだけなのか……」

例えばイグニッション・ブーストの存在を計算に入れていなかったとか。

俺達は三十人で考えているが四組代表には頭が一つしかない。考えが及ばなかったという可能性もなくはないが、何か引つかかる気がした。鷹月さん達もきつと同じなのだろう。

「一夏もそれは分かっている？」

「もちろん。今織斑君が逃げ回っているのは様子見つともまず弾切れを待ったため。特攻しないのは私達と同じで警戒しているんだと思う」
「四組代表の考えが浅いだけであればそれはすぐに形になって出てきます。織斑君もそれを確信すればすぐさま特攻して一気に終わらせるでしょう」

傍目には一夏は無謀な突撃を繰り返しているように見える。

アリーナの中央に立っている四組代表の上をぐるぐると周り、時にフェイントをかけながら少しの間でもあれば突撃しようとして、その度に猛烈な射撃に晒されて大慌てで逃げる、という状況が続いている。

一夏が銃を持っていないのはさすがに丸分かりで、厳しくともこうするしかないんだろうな、という感じではあった。

「じゃあしばらくはこのまま我慢比べだとして、他に懸念点はある？」

「織斑君の集中力」

「一発の威力が大きくて一回あたりの弾数も多いですから、被弾した際のダメージが気になりますね。それなりの効果があるとなれば特攻できなくなるまで削られ続けてしまう可能性も十分にあります」

今のところ、一夏はまだ被弾していない。

その割り切りは見えていてもはつきりしていて、少しでも危ないとなったら一夏は迷うことなくイグニッション・ブーストを使って回避している。

そして射程の外に逃げられるのでほとんど動かない四組代表にはそれを捕まえることができない。

この状態がいつまで続くのか、ジリジリとした展開だ。

「厳しいな。弾切れが全く見えてこない」

「まだまだ向こうはケチってないね。これはしばらくかかりそうかな」

「一夏さんの集中力が心配ですわ。ああまでセーフティファーストになっっているのはもう余裕のない証拠です」

このままいけるのかと思ったらパイロット班連中が難しい顔つきになっている。

模擬戦の場となるアリーナは有限の空間なので、相手が逃げ回るのであれば追い詰めることが可能だ。この場合相手の方に動き回る必要があり、長引けば実は追い詰める側の方が肉体的精神的に有利になっっていくことが訓練で分かっている。

だが今四組代表は射撃だけに集中できていて、一方の一夏は動き回りがから突撃しようとしたり回避したりとかなり忙しい。

始まってからの疲労についてはどうやら一夏の方が大きいのは間違いないようだ。

「となるといよいよ特攻、特攻……。相手が対策してくるとすれば……」

「ああまで火力特化では他のことにつき込む余裕などないでしょうが、今この状況であえて探すならラファールの大砲系でしょうか」

「四十院さん、それどうなの？」

「イグニッション・ブースト対策という話ですが、自分に向かって来るのであれば小さな銃弾ではなく大きな鉄の塊をぶつけようという話です。うまくやればカウンター気味に織斑君に当たるかもしれないん」

「それをやってくる可能性は？」

「言っておいてなんですがまずないと思います。大砲系は基本的に曲射なので真っ直ぐ向かってくる織斑君に当てようとすれば、本当にぎりぎりの目の前で発射しなければなりません。織斑君の特攻を確認してから武装を出すことも考えれば、それはいくら技術に自信があろうとリスクが大き過ぎます」

「じゃあ射線が真っ直ぐのレーザー系は？」

「被弾覚悟の相手に対しては威力が減衰する分特別な効果も期待できないですね。大砲系の鉄の塊のように勢いを止めることもできません」

まあ今この場で思いつくようなものはとっくに対応策まで考えられているだろう。

イグニッション・ブーストのことを最初に聞いたときは真っ直ぐ突っ込むのでは狙い撃ちされるだけだと思っただが、実際はそのへんの銃では加速の勢いを止めることができないと判明していた。

もちろんまともに受けるので大いに削られるが、ブレードなど質量のあるものでなければダメージなどおかまいなしに突っ込んでくるのだ。反面横からの攻撃には非常に弱かったりするので高機動型には要注意だが。

「ということは固定砲台で一夏の攻撃を躲そうと思ったら……あ、イグニッション・ブーストを使って逃げる？」

「イグニッション・ブーストの加速速度計算値は機体の基本速度に対してのものなので、ある程度基本速度を持っていなければ意味がないのです。本来百のものを一時的に二百三百にする技術なので、元値が十では加速する効果などないに等しいですね」

聞けば聞くほど特攻すればあっさり終わりそうに思える。

打鉄という制限を受けた状態でさらに極端なバランス変更をしているのだ。大きな穴があるのは当然といえば当然の話ではあるけれど。

「だがもはやここまでくると罠だろうか」

「明らかに誘っていますわね」

「こつちがジリ貧になっているように見せた上でだから、絶対狙って

るよね。それが何かは分からないけど」

まあ、あまりにもあからさま過ぎて怪しいにも程がある。

ここまでの四組代表の戦いぶりからしても、甘い期待はとてでもできそうにない。

「じゃあ罨には乗らずこのまま続ける?」

「実のところはありだな。罨を張っているのであればその分他の何か犠牲になっている。であれば怪しいのはまず残り弾数だ。つまり弾切れになる前に一夏に特攻して欲しいのかもしれない」

「もちろん罨に見せかけたはつたりの場合もあるよ。このまま織斑君に躊躇させて特攻ができなくなるところまで削るって作戦かもしれないし」

「一夏さんと四組代表の駆け引きですが、相手の方にも余裕があるというわけではないでしょうね。本当にギリギリのところだと思いませんわ」

さて本当のところはどちらだろうか、と俺も考える。

可能性としてどちらもありえるのはみんなの言う通りなのだろう。

四組代表はどちらを選んだらうかという話だ。

モニターの向こうでは今も一夏が必死に戦っている。誘われていると感じつつも、これまで通り隙を見つけての接近を試みている。

一見オルコットとの模擬戦の時と同じような形に見えるが、あの時は全てブラフであり、またこちらの作戦通りに事は進んでいた。だが今の一夏に主導権はない。だからその表情も作った笑顔ではなく全神経を集中させた真剣なものであり、そこには少しづつ精神的疲労の色が見え始めていた。

そういえば四組代表の方はどうだろうかとモニターへとじっと目を凝らして見てみる。そして四組代表の顔が映った時、俺は最初に覚えてたはずという違和感の正体に気づいて愕然としてしまった。

「あ」

「どうしたの?」

それはやはり女性上位主義者が見せるような、怒りや憎しみを通り越して相手の存在から否定する目だった。そして何もかもお前のせ

いだと人間の原罪すら押し付けるような、かつて鏡の向こうに見た目だ。

「畏だ」

「え？」

そもそも四組代表とはいったいどういう人間か。人見知りで、無口で、引つ込み思案で、根暗で、気が弱くて、でも成績は非常に優秀で、運動神経も抜群で日本の代表候補生で、それらは全て人から聞いた話だ。

だが目の前の実物は事前に聞いていた姿とは全く違う。積極的で、好戦的で、感情を全開にしている、今一夏を正面からねじ伏せようとしている。

「甲斐田君？」

「甲斐田、何が分かったのだ？」

「甲斐田さん、いったい何が？」

男が嫌いなのか一夏が嫌いなのか、きつと一夏のこととは好きではないだろうと思っていた。一夏と同じ倉持技研の管轄だが、一夏が現れたことによつてかなり割り食っている。

その懸念を会議で口にしたとき、もちろん気に入らないという感情はあるだろうと言われた。そして同時に、だが四組代表の更識簪は日本の代表候補生なのでむしろ妬まれる立場にあるとも言われた。クルスの代表を押し付けられたのも周囲のそういう心理が働いているとのことだ。

国の代表候補生とはまず自らが望んでなるものであり、それは激しい競争の中に身を置くことを意味する。だから普通は競争相手でもない一夏に構っている場合ではなく、気に食わなければ関わろうとしない程度だろうという話だった。

また代表候補生の肩書があれば倉持技研でなくとも支援してくれる企業は必ずいるらしく、嫌なら自分から出て行く選択肢も十分あるとのことだ。その上今の倉持の扱いでは出て行かれてもおかしくないそう、現状の冷えた関係性からすればきつと近々そうなるだろうとクラスメイト達は予想していた。

そして今俺は、それらは全て一般論に過ぎなかったと確信した。

「甲斐田君」

「うわっ！」

背筋がぞつとして思わず俺は飛び上がる。

こともあろうに、隣の谷本さんが俺の耳に息を吹きかけてきた。

この野郎と違って横を見るとなぜか谷本さんが照れている。意味が分からない。

「甲斐田、思考に没頭する前に説明しろ。罨とは何だ？」

「おそらくそれは正しいと思いますわ。ですから教えて下さいませ」

「細かいことはこつちで補足するから、早く！」

パイロット組が詰め寄ってくる。

いや、俺は罨であることが分かっただけで、その正体まで見破ったわけではないのだが。

「えーと、ことごとく予想を外したこともそうだけど、僕らはそもそも前提から間違ってた。何よりもまず四組代表は最初から一夏を叩き潰すつもりだった」

「はっ」

「叩き潰すとは……それは凰さんのような？」

「そうだね、きつとそれは綺麗な感情ではない」

そう言つて、俺は二つ隣に座る布仏さんをじつと見る。すると布仏さんは驚いたように目を見開いて、それから嬉しそうな笑顔を返してきた。

「甲斐田、いまいち話が見えないのだが」

「甲斐田さん、それはなぜですか？ なぜ一夏さんはそこまで憎まれてしまったのですか？」

「というかそもそも面識すらないよね？」

パイロット連中が尚も詰め寄ってくる。

俺は布仏さんを横目に、きつとこの連中が余計に混乱するであろう一言を吐くことにした。

「一言で言うと、ただの八つ当たり」

自分向けの返答に、布仏さんは満足そうな笑顔で頷いていた。

かくしてこの空間をハテナマークで埋め尽くした俺だが、その説明をする時間はなかった。

こんな時でも空気を読まない谷本さんが、急に声を出してモニターを大きく指差したからだ。

つられて見ると、覚悟を決めたのか一夏がイグニッション・ブーストをかけて特攻している。

「まずいー」

もはや罠であることは百パーセント間違いない。

四組代表は一夏を叩きのめすのが一番の目的だ。はったりによる消極的な勝利など最初から目指していない。

だが待機室にいる俺の叫びなど当然一夏には届くはずもなく、一夏はこれで決めるとばかりに加速の度合いを強めていく。

そこに四組代表は両手に持つ銃でおそらく全力であろう射撃を叩き込む。一夏はそれを全身で受けながら、両手でブレードを握って前に出し攻撃態勢に入る。ブレードが光っていないのでエネルギー無効化攻撃は発動させていないようだ。そしてそのまま真っ直ぐ四組代表へと突き進む。

だが四組代表は尚も銃を撃ち続ける。段々と一夏が迫ってきて、実は隠していたなどというような武装を出すようなこともなく、ただひたすらに銃を撃つ。

もしかしてこのまま一夏が落とせるなんて考えてるんじゃないだろうなと思った頃、一夏が四組代表の目の前にまでやってくる。そして加速した勢いのまま両手で握ったブレードを相手の体に向かって振り下ろした。

しかし一夏のブレードは綺麗に空を切り、一夏の体は振った勢いで一回転してから地面へと突撃した。

「よけた!？」

一番最初に反応したのは相川さんだった。いや、声に出せたのはと
言うべきか。

だが俺でも罨の内容は理解できた。それは至ってシンプルで、実は一夏の加速攻撃を躲せるだけの機動力を隠し持っていたのだろう。ここまですべて動かなかったことで一夏や俺達にロクに動けないという誤解を与えていたのだ。

そして四組代表は当然この隙を逃すはずがない。地面に激突した一夏へ向けて先ほどにもまして激しい射撃が叩き込まれる。着地失敗した蛙のような一夏の背中に攻撃が浴びせられ、みるみるうちに一夏の装甲が削られていくのが分かった。

しかし本当に幸いなことに、一夏の意識ははつきりしていた。もしかしたら地面激突の際の衝撃で飛んでいて、攻撃を受けて気がついたのかもしれない。攻撃を受けるとすぐさま転がって立ち上がり、それから全速力のイグニッション・ブーストでその場を脱出した。

待機室に安堵のため息が流れる。大ダメージを受けたかもしれないが、すんでのところだ。窮地は出したようだ。

「ありえないー！」

鷹月さんが立ち上がって叫んだ。いきなり何を言い出すのか。

「あんなのありえないでしょ！ どこをどうすればあんな機動力まで持てるのよー！」

どうすればなどと言われても実際出したのだから、やられたものは仕方ないとしか言いようがないと思うが。

「おかしいです……。打鉄でここまでの火力と今の速度は絶対に両立しません。何をどうすれば……！」

と思っただけなら四十院さんまで頭を抱えて悩み始めた。さつき篠ノ之さんあたりが言っていたが弾数をこつそり削っていたとかでは済まないのか。

「ぎりぎりのところで計算してたんじゃないの？ 実際に出したし」

「それはありえないんです甲斐田君！」

「えっ？」

びっくりした。今まで一言も喋っていなかった岸原さんが急に大声を出した。

「あの段階まで火力を上げ弾倉も大幅に増やして、その上機動力まで

確保するなんてどうやっても物理的にありえないんです！ 打鉄どころかラファールにだって無理です！ 総容量をはるかにオーバーしてるんです！」

ノートパソコンを膝に置いたまま、俺にまたも泣きそうな顔を向けてきた。

ずっと無言でパソコンをカタカタやってるなと思ったら、そういう計算でもしていたのか。

「打鉄の総容量からすればあの火力とそれに応じた弾倉の時点でもうギリギリもいいところで、それ以上他の何かをできる余地は全くないんです！ そこに今の機動力をつけたら二割以上オーバーしてしまいます！」

そんな悲壮な顔をされても、技術的な部分で岸原さん達に解決できないことを俺にどうこうできるはずがない。

「でも実際みんなこの目で見たし、どこかで誤魔化してるんだと思うよ？ 例えば……あの火力は実は見た目だけでしたとか」

「さつきからそれはずっと計算し続けているんです！ もし罫があるならどの程度のもを出せるのかと思って、そのために割くことのできる容量をずーっと調べていたんです！」

「そしてそんな余力はないはずだったと」

「そうです！ あんなのは打鉄でもラファールでもメールシユトロームでも無理です！」

ああ、そういうことか。

俺にしては珍しく、一発で分かってしまった。

「岸原さん、自分で正解言ってるじゃない」

「はいっ..」

「だから、打鉄でもラファールでもメールシユトロームでも無理なんだよね？」

「はい」

「そういうことなんだと思うよ？」

「どういふことなんでしよう？」

岸原さんが真顔に戻って首を傾げる。

何の事はない。

「四組代表のISは、打鉄でもラファールでもメールシユトロームでもない。打鉄によく似た別のISだって話」

「ええっ!？」

打鉄では絶対に無理なことをやっているのだから打鉄ではない。それだけの話だ。

手法としてはオルコットとの模擬戦で先輩達がやったようなことだ。あの時はオルコットがギリギリ気づかないレベルでの改造をし、改造打鉄Kを無改造の打鉄だと思い込ませた。

四組代表の罫とはこちらに打鉄だと思込ませることだったのだ。「じゃあちようどこここに倉持技研の人達もいるしはつきりさせておこうか。ですよね? あれは打鉄に見せかけた別のISなんですよね?」

俺は振り返り、後ろの方に座っている倉持の人達に声をかける。

倉持の技術者三人は、なぜか立ち上がって呆然とした表情でモニターを見ていた。

俺の問いかけに返答が戻ってこない。

「あの、企業秘密とか言われても実際にあんなことやられると隠しようはないと思うんですけど。それに戦ってる一夏にも聞こえないですし、特に変な協力とかそういうのはもう大丈夫だと思いますよ?」しかし尚も返事はこない。

倉持の人は相変わらず呆然とした顔のまま弱々しく首を振るだけだった。

「あの……」

「違う……」

「はい?」

「あれはどこまで行ってももただの打鉄でしかないはずなのに……」

綺麗に解決したと思ったら、なんだか変なことを言い始めた。

だったら打鉄でなければいったい何なのだ。

「簪ちゃんにあげたのは確かに打鉄よ。それもここにあった打鉄。特別なことは何も無いのに……」

「あたしたち隣の格納庫から引っ張り出しましたよね!? 全台調べて、せめて一番綺麗なのをつて!」

「そうっすよ! 整備状態も確認して、しっかり拭いて、一番いい状態ではいどうぞつて!」

「ちよつと待つて。打鉄の総容量を一から考えるところで……」

なんとということか、倉持の人達まで混乱し始めた。

彼らの言を信じるのであれば、四組代表の手に渡った時は何の変哲もない打鉄だったらしい。

だがそれでは目の前の現実とは一致しない。

「総容量を増やせる技術とかないんですか?」

「それを人は新型機の開発に成功したつて言うの! そもそも総容量を増やすのが I S 開発の至上命題なんだから!」

「そ、そうですか……」

適当なことを言ったら怒られてしまった。

だが俺としてはもうそれっぽい結論でさっさと終わらせたい。別に四組代表本人に興味があるわけではないのだ。

「じゃあもう更識簪さんが神の啓示を受けて謎の技術を得たつてことで」

「甲斐田君、もしかして私達に喧嘩売つてる? 今なら喜んで買うわよ。」

「すみませんでした!」

「悪いけど簪ちゃんも整備については素人に毛が生えた程度の技術しか持つてないつすねえ」

「たつた一ヶ月半でここまでできるようになったのは相当がんばつたなつて思うけど」

我ながらもつと適當過ぎた。

というかこの人達は自分のところの管轄なのになぜ把握してないのか。

確かによくない関係だとは聞いていたが、にしても放置状態とは……いや、逆だ。これは四組代表の方が拒否している。

自分に当てはめてみれば簡単な話だった。この人達も四組代表に

とっては敵なのだ。

「そうですか。それじゃどうでもいいことは」

「どうでもいい!?!」

「……今結論の出せないことはひとまず置いておいて、一番大事なことを」

「大事なこと?」

「そう。高機動高火力の相手に対して、ここから一夏はどうやって逆転するか」

そうして俺はモニターを指差す。

今モニターの向こうでは鬼ごっこが行われていた。

ただしそれは俺達の想定したのではなく、四組代表の方が追いかける鬼だった。

「なんなの? あれなんなの?」

「最新型並みの高機動と高火力。いくらなんでもあんなものを隠し持っているとは……」

鷹月さんと四十院さんが帰ってこない。

ありえないことが起こっているというのは俺も理解したが、目の前にある以上はもうどうしようもないと思うのだが。

「まずい、本当にまずい。高機動型から超高火力の攻撃を受けるなどそこまでの訓練はやっていない……」

「完全に想定外の話ですからそもそも無理ですわ。わたくしのブルー・ティアーズの装甲分を全て回せば可能でしたがさすがにそこまでは……」

「今織斑君が逃げ続けられてるだけで御の字だね。イグニッション・ブーストさままだ」

かと言ってパイロット組の顔色もよくない。

今の一夏はほとんど常時イグニッション・ブーストを出している状態で、加速して逃げては方向を変え、また加速して別の方向に逃げることをひたすら繰り返している。

これまでに見た相手の射撃能力を考えれば一瞬の躊躇さえできそうもない状態で、少しでも止まったら蜂の巣にされてしまう。

そして四組代表もここで決めるつもりだ。やはり隠し持っていたイグニツション・ブーストを駆使して一夏を追いかける。それでも捕まらないのはきつと一夏の機動性の方がかろうじて上回っているおかげなのだろう。

だがイグニツション・ブーストが機体に無理をさせるのであれば、いつまでもこのままというわけにはいかない。

時間切れで詰む前に、どこかで一夏は勝負に出る必要がある。

「岸原さん、一夏のダメージジッて今どれぐらいだと思う?」

「えーと、シールドエネルギーは先程ので半分以上は持つて行かれています。下手をすれば七割くらいは。本体の方は三割まではいかないと思います」

「厳しいなあ。篠ノ之さん、ここから反転して被弾覚悟で特攻できる?」

「できなくはないが博打の要素が大き過ぎる。そもそも高機動型の相手に一夏が攻撃を当てるためには、まず相手の動き方に慣れなければならぬ。だが今の一夏では慣れるどころか回避するので手一杯だ」

「特攻して回避されては横から至近距離での攻撃を受けて一巻の終わりだと思えますわ」

「さすがに装甲はないに等しいと思うから当てれば一発逆転になるけど……いや、これも勝手な願望かな。ありえないことだからもう装甲まで持つてもおかしくないや」

プロの技術者でさえ理解できない現象が起きている以上、きつとこうに違いないというような考え方はしない方がいいだろう。

今見えている現実のみで考えるしかない。

「どうかそんなの持つてるなら最初から出せばいいじゃない。こっちの想定を上回っているのは自分でも分かっているでしょうに」

「装甲が全くないので安全に勝つことを選択したのかもしれませんが……。いえ、それなら最初から機体のバランスを考えた方が安全で確実ですね。そもそも最新型並みのスペックがあるのですから」

確かに、四組代表はわざわざ周りくどいことをしている。

鷹月さんと四十院さんの言う通り、機体の性能で一夏と同等以上であるのなら小細工をする必要は全くないのだ。操縦技術など全てにおいて一夏よりも上回っているのだから、普通にやれば十分勝てる。それに想像した通り一夏を叩きのめすのが目的なら、むしろ正面からやって潰した方が気持ち的にも満足できるはずだ。

俺が一夏がオルコットとの模擬戦でこれでもかと小細工をしたのは、そうしなければ勝てなかったからだ。それは弱者の戦い方で、四組代表は必要もないのに弱者の戦い方を選んだ。これはどういうことだろう。

勝てれば何でもいいのか。もしくは相手に敗北を思い知らさなければ満たされることはないという重要な事実を理解していないのか。

「篠ノ之さん、一夏さんが」

「ああ、一夏の集中力が切れかかっている。あれはもう投げやりになる一歩手前だ」

「でも無理もないよ。織斑君からしたら最初からずーつと訳分かんないことだらけで」

そして最悪の事態が近づいている。機体以前に一夏の問題がもたない。

本番における一夏の集中力は俺も信頼しているのだが、それにも限度はある。一夏からすれば事前に聞いていたこととはかけ離れている展開で、何一つうまく行っていない。それでもせめて何か指標があればそれを信じてやれるだろうが、今はそれすらない。経験が少ないので不測の事態で臨機応変に対応するなどとても無理な話で、まあそれは最初から期待していないが。だから訓練でいろんなパターンをやって体で覚えさせようとしていた。

だが今は俺達の想定をはるかに越えた状態で、外から見ている俺達ですら突破口を見い出させていない。まして回避で手一杯の一夏にそれをやれるかと言うと絶対に無理な話だ。

気持ち切れて考えるのも面倒になり、さっさと特攻してしまおうと思ってしまうのも仕方ない。

もういいかな、と一夏が切れかけているのが俺の目からも分かった。そういえば四組代表の方は今どうなのだろう。あと一息くらいに思っているだろうか。

「そうか」

「甲斐田君？」

しかしこんなときに限って、俺は道が見えてしまった。点と点が繋がってしまった。

違う、今余裕がないのはむしろ四組代表の方だ。

「一夏、今すぐ突っ込むんだ！ ダメージとかもう気にする必要ないから！」

「甲斐田!？」

一夏に届くはずもないのが分かっているけど、俺は立ち上がりモニターに向かって叫んでしまった。

精神が限界なのは、後一押しで落ちるのは四組代表の方なのだ。今四組代表は、一夏が怖くて仕方ない。

「ああそうか投げやりか。じゃあそれでいいや。もう何も考えなくていいからそのまま突っ込めばいい。相手はよけるどころか何もできないから。一発当てればそれで終わりだ」

「甲斐田、落ち着け！」

「甲斐田さん、何が見えたのですか!？」

「とりあえず抑えまーす！」

谷本さんに捕まって、パイプ椅子に座らされる。いけない、つい我を忘れてしまった。

だがもどかしい。勝ちが目の前に見えて、でも一夏がそれに全く気づいていないという事実が本当にもどかしい。

今すぐ一夏が反転して突っ込めば、四組代表は間違いなく恐怖に縛られて何もできなくなる。さっきから目と言っている。お願いだから早く終わってくれと。怒りの感情などもはやみじんもない。

きつと手が震えているのだろう、四組代表の視点で見れば射撃の精度がひどいという次元ではなかった。一夏が回避しているというよりはわざわざ外してくれているかのようだ。

今の四組代表は一夏の後を追うだけで精一杯な精神状態になっている。

「甲斐田君、だからどういうこと？」

「どうもこうもないよ。四組代表は接近戦もしくは一夏が怖かった。だからわざわざ近づかなくて済む戦い方を選んだ。でもさつき一夏にぎりぎりまで肉薄されて、かろうじて躲したけどもう恐怖で精神が限界に近い。今は一夏と向い合って、いや目が合っただけでも耐えられなくなるだろうね」

「すみません甲斐田さん、話が飛び過ぎてよく分からないのですが」

説明したのに分かってくれない四十院さんにまでもどかしさを感じてしまった。

今の俺は完全にはやる気持ちに支配されている。一から説明なんて面倒だしもう後でいいか。

それよりも今は目の前だ。こうなったら早く一夏の気持ちが切れて欲しい。足を止めて振り向くだけでいい。それだけで四組代表は固まってしまう。

そうすれば後は装甲があろうがなかろうが関係ない。一撃でも受ければ気持ちが完全に折れるから一方的に終わる。

「甲斐田？」

「今この場で理解できているのは甲斐田さんだけですか……」

「まあ織斑君が勝てそうだったのは分かったけど……」

そして一夏の集中がプチンと切れた。急に体の力が抜け、傍目にも切れた気持ちが伝わってくるくらいだった。

一夏は空中で立ち止まり、相手に対して無防備な姿を晒したまま振り返って、ブレードを両手で握る。そして四組代表に向かって全速力のイグニッション・ブーストで突撃した。

「危ないー！」

思わず叫んだであろう誰かの声は全くの杞憂だった。

俺が確信していた通り、四組代表の体は完全に恐怖に支配され固まってしまっていた。反撃するどころか一夏に銃を向けることすらできない。

そして空中で棒立ち状態の四組代表に一夏が突撃する。
勝った、と俺は思った。

「えっ!？」

だがあるうことか、そんな四組代表の姿に一夏が驚いてしまった。ヤケクソで突っ込んだら相手が呆然として銃も向けずに棒立ちしているのだ。思考を放棄したにせよ完全に一夏の理解の範疇を越えていたらしい。

驚いた一夏は反射的に加速を解除しようとする。だが最速イグニツション・ブースト中に急ブレーキをかけても、もはや四組代表との距離が近過ぎる。

かくして一夏は体ごと四組代表に突っ込んでしまった。

「愛の突進だ!」

相川さんが叫ぶ。

愛の突進。それはクラスのパイロット班を軒並み陥落させてしまった一夏の恐るべき必殺技である。

と聞くとなんだかさまじいことをしているようだが、ただ単にイグニツション・ブーストの制御に失敗しただけだ。

イグニツション・ブーストの練習中、一夏はしばしば制御に失敗して壁に激突していた。そしてそんな一夏の姿を見かねたクラスメイト達は、壁にぶつからずに済むようにと自分達の体で受け止めることを提案してやってくれた。またこれは一夏が距離感を掴むことにも役立つという二重の効果があつた。

と、建前はそういう話だったが、要するにこれは合法的に一夏に抱きついてもらおうというクラスメイト達の策略だ。一夏は勢いよく突っ込んできて、自分の体を激しく抱きしめてくれる。それは連中にとって天にも昇る心地らしい。事実これによってパイロット班全員が完全に落ちた。またそれを聞きつけたオルコットは以降パイロット班の方に入り浸りになってしまっていた。

「まさかこんなところで実物を見ることになるうとは」

鷹月さんが呆然とつぶやく。

一夏は四組代表の体を抱きしめた形で勢いよく壁に突っ込み、それ

から地面へと落下して転がった。

「……あー、またやっちゃまった。おい、大丈夫か？」

「えっ?」

そして今の状態は一夏が四組代表に覆いかぶさる形だ。

まあ一夏を見ているとよくある、女子を押し倒した姿である。

「い」

「え?」

「いやあああああつ!!」

四組代表の絶叫がアリーナに響き渡る。

一夏は慌てて飛び起きた。

「あ、これやべえ」

本能が危機を告げたのか、一夏は即イグニッション・ブーストをかけて飛び上がる。

そしてその行為は正しく、四組代表は叫びながら一夏に向かって銃を乱射した。

そんな四組代表の顔は綺麗に真っ赤だ。つまり男そのものに恐怖や嫌悪があるわけではないのかもしれない。

まあそんなのはどうでもいいことだし、逆恨みされている相手にまで顔を赤くさせるとはさすがは織斑一夏ということなのだろう。

「おい、悪かったから落ち着け!」

模擬戦の対戦相手に落ち着けと言うのもおかしい話だが、このパターンは一夏によくある話なので本人も自分が原因なのは分かっている。全力で逃げ回りつつも謝罪の言葉を口にはしているが、完全に我を忘れた四組代表の耳には全く届いていなかった。

「え……これなんなの?」

鷹月さんがさっきとは別の意味で呆然とした声を出す。

もはやこれまでの緊迫した空気は一切ない。傍目から見ればアリーナの二人の姿はカップルの痴話喧嘩のようだ。銃を乱射する恋人なんてどこの誰もがご免だろうけれど。

顔真っ赤の四組代表は完全に我を忘れていて、ついさっきまでの冷静さは欠片もない。一夏に向けて放つ銃も闇雲で、狙いや計算など何

もなかった。

だがそんな無秩序なことをしてはすぐに終わりが来る。しばらくというほどのこともなく、四組代表の銃弾が尽きた。

何度か空のまま撃とうとして、ようやく四組代表は我に返る。そして現実を思い出して青ざめた。いまだ、模擬戦の最中である。

その姿からブラフではないと一夏は判断し、だが一応は警戒してゆっくりと四組代表へと向かう。向かってくる一夏に対抗する手段が何もないことを自覚して、四組代表の体は敗北というさつきとは別種の恐怖に包まれ固まった。今度はその手から空となった銃が落ちた。

そして一夏は四組代表の前に立つ。もう四組代表にはその一言を口にする以外の選択肢は残されていなかった。

自分からは気が進まなかったのか一夏は相手から言ってもらおうと少し待った。だが一向に口を開く気配がないのを悟り、やむを得ずという感じでゆっくりとブレードを前に出して突きつける。

「終わりだ。降参してくれ」

その声に弾かれたように四組代表は一夏を見上げ、それから悔しそうな顔になって下を向いた。

「参り……ました……」

「そこまでー」

織斑先生の声と終了の鐘が鳴り響く。

それに続いて大きな拍手と歓声が沸き上がった。

そして四組代表は下を向いたまま走っていき、一夏も少しその姿を見てから自分の待機室へと向かって歩き始めた。

「本当に……心臓に悪い試合だったわ……」

脱力した鷹月さんの一言は、俺達全員の偽らざる本心だっただろう。

24. 勝てば勝ったで負ければ負けただで常に問題という厄介事はやってくる。

勝てば勝ったで負ければ負けただで常に問題という厄介事はやってくる。

待機室へと戻ってきた一夏の機嫌が非常に悪い。

かけられたねぎらいの言葉も遮って、苛立ちを隠せないでいる。

別に他人がどうだというわけではなく、自分に腹を立てていた。

「一夏、だからな……」

「いいから放つといってくれよ！ 俺の負けだつてのは自分が一番よく分かってるんだから！」

「いやいや、勝つたのは織斑君でしょ」

「あれ見て俺の勝ちだつて思う奴は一人もいねえよ！ 何もかも全部、どこを切り取っても俺が劣つてたつてのは俺でさえ分かるから！」

「一夏さん落ち着いてください。内実はどうあれ、勝利をしたのは一夏さんで間違いありませんわ」

「あんなのは向こうがくれただけだ。最後勝手にパニックって自爆しただけで、俺のマグレですらない。何がかっこつけて勝ってくるだ。みつともない真似して恥晒して、挙句がおこぼれにあずかつて、こんな勝つたなんてとても言えねえよ！」

周囲の聞く耳など一切ない。何はともあれ勝つたんだからそれでいいだろうという俺の理論などとうに一蹴されていた。

一夏は自分の不甲斐なさに腹を立てていた。何一つうまくいかず、最後にはどうしていいか分からなくなってしまった自分に情けなさを感じているようだった。

それを言い出すのであればそもそも作戦から間違っていたので、むしろ俺達の責任だ。だが一夏はそこまで説明をさせてくれないでい

た。

鷹月さんが謝りながら説明をしようとしても、変な慰めはいらないとはねのける。取り付く島もない。

「どうする甲斐田君？」

鷹月さんが困り果てた顔で俺を見る。他の連中もお前何とかしろという目を俺に向けていた。

一夏のことであるとはいえ、厄介な問題ほど俺に押し付けられているような気がする。

しかし完全に拗ねてしまっている以上今は何を言っても無駄だろう。

とりあえずは飯でも食わせて気持ちを落ち着かせようか。午後の試合だったので一夏は軽くしか食べていない。

俺は振り返って何か食べるものを持っているであろう谷本さんに目を向ける。さすがに栄養管理まではやっていないが、谷本さんはメシタルケアの部分で一夏の好きな食べ物飲み物を把握している。一夏の好物を出してくれるかもしれない。

俺の視線を受けて谷本さんは、任せろと自信ありげに親指を立てる。そしてそのまま何も持たずに俺の脇をすり抜けて一夏の側まで行き、膝を曲げた。

待て、別に俺は一夏を説得しろと言いたかったわけではないのだが。

「織斑君織斑君」

「もういいよ。だから放つといってくれよ」

「織斑君はさ、どうして勝ったの？」

「はあ？ だから勝ったんじゃないかって向こうがくれたんだよ」

「そうじゃなくて、どうして織斑君は相手に降参しろなんて言ったの？ 自分が負けたと思ってるのに」

「え？」

一夏が驚いてそれまで壁に向いていた顔を谷本さんの側に向ける。谷本さんは膝を曲げていて、椅子に座っている一夏と同じ視線だ。

「負けだと思ってたのならそこで素直に僕の負けですって言えばいい

んじゃないの？ どうしてそうしなかったの？」

「そ、それは……」

当然一夏は言いよどむ。

別に一夏も自分から負けたいわけではない。

「勝つことの方が大事だったんだよね？ いくらみつともなくても、自分含めたみんなが相手の勝ちだと思っただけでも、それでも一組の勝利を相手に渡したくなかったんだよね？」

「いや、それは……」

確信して言うが、一夏は絶対にそこまで考えてやっていない。流れのままに口にしただけで、そこに特別な意図はない。余計なことを考え始めたのは降参した四組代表の姿を見てからであることに間違いない。

そもそもそこまで考慮して行動できる人間であれば俺はこんなに苦労していただろう。

「だったら私達は織斑君にありがとうって言うよ。どんなに悔しくても勝ちを手放さずに持って帰ってきてくれた織斑君にありがとうって言うよ。織斑君の行動を間違ってるなんて言う人はこのクラスには誰もいないから」

「いや、その……」

今の谷本さんの姿は拗ねる弟を優しく諭すお姉さんだった。

過大評価を受けてしまったと感じているであろう一夏はかなりバツが悪そうだ。

「というか、やつぱり谷本さんは普通にできるじゃないか。ならばいつものあれはいったい何なのか。」

「そうだぞ一夏、私はお前を誇りに思えど恥とすることなど一切ない」

「一夏さん、誰が何と言おうとわたくしは一夏さんの味方ですわ」

「大事なことを言っただけだね。織斑君、ありがとう」

ここぞとばかりにパイロット組が乗ってきた。

その顔には谷本さんの言ったことは自分が言うべきだったという悔しさが見える。

そして谷本さんが俺に向かってどうだと得意げな顔を見せた。俺

はありがとうと目で返し、谷本さんはニツと笑った。

「ごめんみんな。だけど俺はそんな立派な人間じゃないんだ。今もそうだけど自分のことしか考えてない勝手な奴なんだ」

「そうだよね、一夏ってほんと勝手な人間だよね」

「そうそう……っつておい！」

自分で言っておきながら一夏は心外だとばかりに俺を見た。

谷本さんが道をこじ開けてくれたのだ。ここを逃す手はない。

「とうかさあ、勝ち負けを言う前に一夏って試合投げてたよね。最後突っ込んだ時もうどうでもいいやって感じに見えたんだけど」

「いや、それは、その……」

凶星を突かれて一夏がしどろもどろになる。

周囲からお前がどうでもいいから突っ込めと言ってたじゃないか何言ってるんだという視線が飛んできている。

今は一夏を平常心に戻すのが何より先決なのだ。

「やるからには勝敗以前に最後まで食らいついてほしいよね。そもそも一夏が相手を技術的に上回って美しく勝つとか誰も期待してないし。まあどんなにボロボロでみつともなくても、勝ちを拾って帰ってきてくれればそれだけでいいから」

「いや、そりやそうだけど、だからってそういう言い方はねえだろ。拾ったとはいえギリギリで勝って帰ってきたんだからさ、激闘お疲れとかお前はもうちょっと相手をねぎらう言葉を選んでだな……」

乗せられた一夏が立ち上がって俺に抗議する。それはいつもの一夏の姿だった。

「織斑君ごめん！　織斑君が苦戦したのは全部私達のせいだから！」

「へっっ？」

聞く耳があると分かれれば鷹月さんも躊躇はない。

一夏の前に立って深々と頭を下げた。少し離れて四十院さんも同じ動きをしている。

「織斑君が苦戦したのは、私達のリサーチと分析が不十分過ぎたから。悪いの全面的に私達なの」

「え？　でも火力で来る可能性は聞いてたし、特攻して外したのも俺

の問題だし」

「それが実はそうではないのです」

鷹月さんと四十院さんが一夏の隣りに座って説明を始めた。一夏も腰を下ろして真面目に話を聞いている。

よし、もう大丈夫だ。

安堵のため息を吐いて、俺は振り返る。

後ろで様子を見ていた倉持のリーダーの人が俺を見て頷いた。そして前に出てくる。

「織斑君、お話中悪いけど白式貸して。修理するから」

「あ、すみません。そうだ、こいつけっこうひどいことになってた」

「見た感じ修理すれば問題ないわ。今日はもう試合もないし」

「お願いします」

一夏が待機状態となった白式を外して渡す。あの大きなISが小さなガントレットに圧縮されてしまうのだから、本当にISの技術というものはよく分からない。同じく専用機持ちのオルコットなどは待機状態のISがイヤリングになってしまっている。専用化処理されたISでしかできないそうだが、待機状態になる時圧縮される様子はいっつ見ても不思議な光景だと思う。

「あーあー。けっこうやられちゃったわ」

「背中ほどのISでも弱いっすからねえ」

倉持の人は三人いたのに今一人いないなと思ったが、すぐに思い当たった。

一人は四組代表のところに行っただろう。触らせてもらえるかは分からないが、少なくとも技術者として謎をそのままにしておくわけはないだろうし。

俺としてはもう対戦も終わったのでどうであろうと構わないが。

「甲斐田君、今回私は自分の視野の狭さを思い知りました。今後はこのようなことのないように気を引き締めていきたいと思います」

「おー、がんばろー!」

岸原さんが決意に満ち溢れた強い目で俺を見てきた。一方布仏さんは相も変わらずいつも通りだ。

さて布仏さんについてはどうするかなどと考える。

最初は逆スパイだったかと思っただが、俺に対して嬉しそうな顔を見せたことで少なくとも単純なスパイなどではないだろうと感じた。それは四組代表の意を受けてというよりは、むしろ布仏さん個人の感情であるように見えた。分かってくれた、理解者を得られたという喜びだ。

おそらく四組代表は友人である布仏さんも信用しておらず、今回の布仏さんを一組のスパイだと見ていた。そして俺と同じ種類の人間であれば逆にそれを利用するのは間違いない。結果届いた情報は俺達を誤った方向に導くのに十分なものだった。

また布仏さんも自分が信用されていないのを感じていて、鷹月さん達に情報の信憑性について言っていたようだ。実際はそうではなかったが鷹月さんはきちんと裏も取ったと言っている。しかし四組代表は自分のクラスメイトすら蚊帳の外に置いていたので、本人が見せなければ誰にも分からない状態だった。情報の裏を取るにしても外から見た目でしか分からず、そして四組代表は俺達の目を意識して徹底的に隠していた。

「どうしたのかいだ〜?」

あの時布仏さんが嬉しそうだったのは、おそらく俺が四組代表の内側に向かった感情に気づいたからだ。四組代表と会わないかと言ってみたり、自分ではどうにもできない状態なのだろう。それはきつと純粋に友人としての心配で、普段は一夏よりも脳天気な顔だがそれなりに気苦労はあるのかもしれない。

「いや、布仏さんは何をがんばってたかなと思っただけ」

「むー! 私だっていっぱいがんばってるよー!」

「何てことを言うんですか甲斐田君! 本音さんは機体の情報集めでものごく貢献してくれているんです! あのイグニッション・ブーストだって本音さんが探してくれた資料から見つけたんですから!」

「あ、そうだったんだ。それは失礼」

一番怪しくない人間が犯人だというのはサスペンスものの定番だが、布仏さんがそうならあっさり俺にバラしてしまっただけは意味がな

い。それに三流以下の犯人なら俺が何かしなくとも勝手に自爆するだろう。

万一四組代表の手先だったとしても、リーグマッチにおいては対戦が終わっている以上今はそこまで気にするようなことでもない。一夏には基本クラスの連中が困っているので、そうそう変なことでもない。

今余計なことを言ってわざわざクラスの中に不協和音を作るのも何なので、ひとまず俺の中に留めておくことにする。怪しいようであればまた考えよう。

「かいだー！　ちゃんと反省しなさい！」

「そうですよ甲斐田君！　クラスのリーダーなんですから、みんなのことはきちんとしていてください！」

「ごめんごめん。ちよつとした冗談だった」

二人の抗議を笑って躲しながら、クラス代表でもない俺の立場はいったい何なんだろうなと思った。

「お待たせ。あれ、こんなにいるの？」

「わざわざすまないな甲斐田。自由時間だというのに」

「いや、それは別に全然いいけど、何かあったの？」

「いいえ、何か問題があるわけではありません。甲斐田さんにお聞きしたいことがあるだけですわ」

寮の会議室まで呼び出されたと思ったら、また面倒な予感がする。今日の一夏の試合は終わったということもあり、鈴と五組代表の試合が始まるまでは自由時間になっていた。気を張ってばかりいても仕方ないし、連戦という一つの山を越えたということもある。

「まあいいけど、一夏は？」

「クラスのみんなと食事中。谷本さんがついてるから変なことにはならないと思うし大丈夫よ」

鷹月さんの口から耳を疑う発言が飛び出してきた。

俺などは谷本さんを一夏と一緒にされるとむしろ不安なのだが、と

「うか谷本さんを一番信用していなかったのは他ならぬ鷹月さんだったのだが。」

「さっきのを見たらさすがに信用するわよ。きちんと織斑君をコントロールできてたし、むしろ私達がやるよりもいいって分かったわ」

「個人的に思うことはあるが、今日のところは信用することにした」

意外だと顔に出ていたらしい。鷹月さんが軽く笑って返してきた。

一方の篠ノ之さんはあまりおもしろくなくなさそうな顔だ。さつき谷本さんに持つて行かれたこともあるのに、わざわざ一夏との食事を外してまでとはいったい俺に何を聞くつもりか。

「私達が甲斐田さんに聞きたいのは二つです。先ほどの試合はいったいどういうことだったのか。そして甲斐田さんは何をもってそれを理解することができたのか」

四十院さんが真剣な目で俺を見てきた。

そうだった。この人達は揃って優等生だ。疑問があつたらきつちり解決しないと気が済まない人種だった。

「あの場で試合の中身を理解できていたのは甲斐田君だけだった。終わった後私達も話し合っただけで、断片的には理解できても全容が見えないの。だから教えてって話」

「なるほど、そういうことか。四十院さんには言った気がするけどあれじゃダメだった？」

「理解力が足りず申し訳ありません。どうしても文脈が繋がらず……」

「一夏が苦しむ原因を作ってしまったのは我々だ。二度とこのようなことがないように、しっかりと反省しておきたい」

一夏が荒れていたというのもあり、責任まで感じてしまっている。

篠ノ之さんに限らず本当に真面目な人達だと思う。

岸原さんなどは一言も聞き逃すまいとしているような気迫さえ感じる。

「えーと、じゃあどこから話そうか。そうだ、何よりも僕達は四組代表に完全に騙されていた。これはいいよね？」

「あんなもの持ち出されてしかもそれを知らなかったものね」

「もつと根本的な話。四組代表は一組が友人の布仏さんを使って自分の情報を集めようとしているのを分かってた。逆にそれを利用して布仏さんを騙して誤った情報を僕達に送っていた」
「えっ?」

布仏さんがこの場にいないのを確認して、俺は口に出した。

少なくとも四組代表が布仏さんを信用せず偽の情報を伝えていたのは間違いない。

「そうなのか鷹月?」

「ちよつと待って。さすがにその可能性は考えてて、きちんとその裏を、布仏さんじゃない別の人に取ってもらってるわよ。それで確実でない情報は削った上での話なんだけど」

「うん、外から見える行動に関する部分だね。確かに四組代表はこの一ヶ月ほとんど訓練らしい訓練をしていないし、趣味レベルで毎日自分のISをいじっていただけ、という話だった」

「じゃあ何が嘘なの?」

「訓練なんかしてないっていうのと、趣味が趣味じゃない」

「はい?」

四組代表のISが量産機ではなく専用機だと考えれば簡単に説明はつく。専用機なら待機状態にしてしまえばどこへでも運べるから、その状態で人に見られない場所へ行けばいい。趣味レベルのルーチンワークにも見えるIS改造もおそらくはひたすら改造バランスにおけるシミュレートだ。

スペックはどうあれあそこまで極端な改造をしたのだ。数字を変えるだけでは絶対に済まない。オルコットとの模擬戦の時先輩達は打鉄の改造をするのに相当な計算とシミュレートをしていた。四組代表だってそれ相応のことをしているはずなのだ。

「でも、布仏さんは四組の代表とかなり一緒にいたのよ。放課後一緒にいて寮に帰ってご飯食べて、相当な割合で一緒に生活してたんだけど」

「だからそれはいつも通りの毎日を送っていますという布仏さんへの嘘。実際はそれからこつそり訓練とかしてたんだろうね」

言いながら思ったが、もしかしたら動かないで戦うというのはそういう制限の中から生まれてきたものなのかもしれない。こつそりではどうしたって動きの訓練はあまりできていないだろう。

一夏はイグニッション・ブーストを含めた動きの訓練がかなりの割合を占めている。毎日放課後をフルに使っていた一夏よりも訓練の絶対量が少なくなってしまうのは間違いない。

精神的な部分もあっただろうが、動き始めてからの四組代表は明らかに精彩を欠いていたように感じる。

「この場に布仏さんがいなくてよかった……」

「だから別に布仏さんが悪いってわけじゃない。向こうの方が一枚上手だったって話」

布仏さんも信用されていないのは分かっていただろう。本当のことを言ってくれていないというのは感じていただろう。だがあの時の様子からして、普段通りと思っていた姿が嘘だとまでは疑っていなかったようだ。

俺が聞いた時、布仏さんは大丈夫だと言った。それは特別なこともなくいつも通りの日々を送っているから大丈夫という意味だった。

二人がどれくらいの間柄かは知らないが、今はもう四組代表の心が離れてしまっているのかもしれない。

もつとも、今の話は布仏さんが四組代表のスパイではないという前提だが。

「今布仏は？」

「本音さんは四組代表の方のところに行くと言っていました。悔しがついているだろうから慰めてくると」

「あんまり聞きたくないこと聞いちやったわね……」

「これは伝えない方がいいでしょうか……」

クラスメイト達は気まずそうに話している。

布仏さんにスパイの疑いをかけるような方向にしないためでもあったが、少し被害者方面に針を振り過ぎたかもしれない。

とりあえずは疑いがかかっているようなのではないでしょうか。

「甲斐田、お前は余計な真似をするなよ」

「何それ？」

「ストレートに言えばいいという話ではないということだ。お前は相手の心情を考えずに発言することが多いからな」

「そんなことしないよ」

俺だって本人がこの場にはいないのを確認してから口に出したというのに、俺を何だと思っているのか。

だが俺としては本当のところはどうなのかを一応本人の口から確認しておく必要がある。

感覚としてはスパイどころか俺を厄介事に巻き込もうとしていそうなので、正直に言えば気は進まないのだけれど。

「まあまあ。それで甲斐田君、私達が完全に騙されてたというのは分かったわ。でもそれはあんな極端な戦い方を隠すためにはやり過ぎというかおかしいと思うんだけど？」

「そうです。私達を油断させるために徹底したのは分かりますが、それならあのような戦術を取る必要性が全くありません。あれだけの操縦技術があれば、開始早々にありえないと思えるスペックを見せて、織斑君を圧倒することができたはずですよ」

「うん。それについてはみんなが調べてきてくれたことから答えは出でて、そもそも四組代表はどういう戦い方をしてくるだろうって話だった？」

「それは……性格的に強気な方じゃないし、ヒットアンドアウェイなんかのどちらかという逃げ回る消極的な戦い方？」

「ですが実際は火力重視で相当強気でしたが……」

確かに俺もあの目と火力で圧倒しようとしている姿を見て最初はそう思った。

だが四組代表のあの意思は目の前に恐怖に負ける程度のものであった。とすれば火力についても同様だ。

「あれってさ、強気に見せかけて超弱気な戦い方だよな。だって絶対に近づかせないじゃなくて、絶対に近づいて欲しくないだから」

「はい？」

「そういえば甲斐田さんは相手が怖がっているとか……」

「射撃の腕はすごかったけど多分接近戦がダメなんだろうね。ブレードも用意してなかったみたいだし、はなから打ち合う気なんてない。そして打ち合わずに済む方法を考えた結果があれだ」

一夏に対して個人的な負の感情を抱いているのは間違いない。そして自分が安全圏にいるうちはその感情を全開にできた。だがそれは俺が想像したほど重いものではなく、心の平静を失って以降は一気に恐怖で塗りつぶされてしまっていた。

「甲斐田さん、ですが特攻した一夏さんをあの方は綺麗に回避しましたわ。機動力も隠していましたし、むしろプランA、プランBのような形だったのではないのでしょうか？」

「ああ、超弱気な人間が保険かけないはずはないよね。もちろん頭の中ではプランB的な部分があったと思うよ。それに確実に来ると分かっていたら超弱気でも覚悟決めて回避できると考えて、実際にやってのけた。これは素直にすごいと思う」

「ということは四組代表は何が問題だったの？」

「訓練でやってないから実際そうだった時にパニックだった話。こっそり訓練してたとしてもそれはどこまでも一人だから、訓練相手に特攻してもらって回避する練習とかできない。さすがにシミュレートはしてただろうからかうじて回避だけはできたけど、その時の感情までは考慮に入ってたなかった。そして一気に精神の均衡が崩れたと」

「確かに、ISに限らず剣道でも至近距離で打ち合うと相当に精神を消耗するのはその通りだ。慣れや経験に加えて正面から打ち合うという覚悟が必要だな」

基本的に訓練などで練習していないことはいきなりできたりしない。たとえ本番で初めてできたことがあったとしても、それ以前の練習における失敗の蓄積があつてこそだ。初戦の一夏にしても要素は今までやってきたことの延長線上にある。

訓練と本番でさえ大きな違いがあつたりするのだから、予習なしのぶっつけ本番というのは経験の多い熟練者でもなければ厳しいだろう。

「ということとは……あの謎スペックについてはともかくとして、四組

代表がこの戦い方をしてくることはある程度予測しておかなければならなかった？」

「そうですね、ただこれはあの高スペックありきの話ですから、第一の選択肢として考えるのはやはり厳しいでしょう」

「あ、そっか。これ打鉄とかラフアールじゃ無理なものね」

まあ四組代表はそれを踏まえて相手の予想を外すことができるに分かってやっている。

二度目はないが今回はまんまとやられたという話だ。

リーグマッチに興味がなく一夏を叩き潰すことだけが目的ならそれで十分だった。

「結局僕らは見た目やデータに振り回されて視野が狭くなってたってことだ。ルールで縛られていること以外は何でもありなんだときちんと認識しておかないとね」

「そもそも専用機を使っていいんだからルール違反でもなんでもないのでよね。誘導されてたとはいえ思い込んでいたのは本当に反省すべきことだわ」

言いながら、これもまた先輩達に言われたことではないかと思っただ。あの時はこちらがルールの隙間を利用する側だったが、相手だっただけと同じことをしてきても全くおかしくはないのだ。

自分だけとは思った瞬間に落とし穴に嵌る。教訓が敗北と引き換えにならずに済んだのは本当に幸運だったとしか言いようがない。

「とりあえずこれで謎は解けたってことでいいかな？」

「えーっと、後でもう一度復習してみようとは思うけど、ひとまず全容は見えたわ」

「うん。じゃあ質問があったらまたその時ってことで」

そうやって俺は会議室を出ようとした。だがすぐに篠ノ之さんに肩を掴まれる。

「待て。まだ重要なことが残っている」

「あ、何か質問思いついた？」

「そうではない。四十院が最初に言ったであろう。お前は何をもってこの事実気づくことができたのかという話だ」

やっぱりダメか。

できれば有耶無耶にするつもりだった。

目を見て四組代表は俺と同じ種類の人間だと分かったからですな
どとはさすがに言いたくなかった。

「ああ、それね」

「そうですね。あの場で試合の流れを理解できていたのはこんなにも
いて甲斐田さんお一人だけでした。わたくし達が不甲斐なかつたの
はもちろんです。だからといってそのままにしておいていいなどと
は絶対に思えません。お願いですから教えて下さいませ」

オルコットがこれ以上ない真剣な表情で俺を見据える。入学時は
もつと傲慢な人間だと思っていた。だが今は全てにおいて自分を下
回っている俺程度の人間に教えるを請うことに躊躇もない。またそれ
でいて卑屈さなど一切感じさせないのだから、やはり別世界にいる上
流階級の人間というものは違うなと思った。

「いや、別にそんな大したことじゃなくて」

「それすら気づくことができなかつたのが我々だ」

「別に嫌味を言いたいわけじゃなくて、明らかにおかしかったんだ。
思い出してみて。四組代表が一夏の特攻を躲して動き始めた後のこ
とを」

そこで一度俺は言葉を切る。

最初四十院さんから嫌な質問が出てきた時点で俺も回答は考えて
いた。

「何かあつたっけ？」

「前半あれだけ一夏を圧倒する射撃を見せてたのに、動き出してから
は一発も当てられてないんだよ？　すぐ近くに一夏がいて、ほとんど
背を向けて逃げてるのを後ろから狙い撃つだけなのに」

「ああ……でもそれは織斑君がうまいこと逃げてたからじゃないの？

あたし達必要だと思つて逃げ回る訓練は相当にやってるから、織斑
君も回避についてはそれなりのものだと思うけど」

「私もそう思ったぞ。それに一夏の機動性は相手を明らかに上回つて
いた。イグニッション・ブーストを駆使した回避は初見ではそうそう

追いつけない。機体に負担も大きいがそれだけの価値があるものだ」
「わたくしもそこまでおかしいとは思えませんでしたが……」

いけると思っただけならなんとパイロット組全員に否定されてしまった。
とはいえ俺の見解はその後の結果によって裏付けられているので
間違いないはずなのだが。

「うーん、じゃあもう一度試合の映像を見直してみて。少なくとも僕の目からは手が震えてるんじゃないかってくらいひどい射撃に見えた。そしてそこから紐解いて四組代表は恐怖で胸がいつぱいになつてるといふ結論にたどり着いたんだ」

「そうか……。確かにその後茫然自失になった姿を見れば甲斐田の言うことが正しいのは間違いないが」

「ということはあの時のわたくし達の観察眼が曇っていたということになるのでしょうか……?」

「でも言い方悪いけど甲斐田君が分かるんならあたし達にも分からないといけないんじゃないかなあ……」

目の前で頭を捻られて気づいた。

順番が逆だった。俺は外から見える現象からではなく、四組代表の心情から今の話を構築してしまっている。

あの時俺が感じたこと自体は正しい。四組代表の精神は間違いない。ズタズタだった。

ひどい射撃だと思ったのは四組代表の心情を踏まえた上での話だ。完全に説明の仕方を間違えた。

「まあまあ、それなら実際に映像を見てみればいいじゃない」

「私達はそれ以前の話でしたので恥ずかしいことですが」

準備がいいなと思ったが、俺に説明させるつもりなら用意もしておくか。

鷹月さんが会議室のスクリーンにさっきの試合の映像を映し出す。最初の部分は早送りで、一夏の特攻が回避されたところから始まる。そして愛の突進まで進んで停止した。

「分かった?」

「うーむ……」

「相手そんなにひどいかなあ？」

「一発も当たっていないのは事実ですが……」

「ではもう一度見てみましょうか」

これはよくない。このままでは深いところまで突っ込まれる。

この連中は基本的に根掘り葉掘り聞かなければ気が済まない連中だ。なぜなぜを連発して俺の中にまで踏み込んでこられると厳しい。

うまい言い訳はないものかと考えるも、思いつく前にまた映像が愛の突進まで来てしまった。

「どう？」

「なるほどな」

「分かりましたか？」

「教えて教えて！」

「目だ」

「目？」

あ、これはますますよろしくない。

篠ノ之さんはスクリーンに写っている四組代表を指差した。

「四組代表はその前から覇気もなく完全に敗者の目になっている。あと一息で勝てるという顔ではとてもない」

「目ですか」

「ああ、状況は断然有利だというのに、間もなく自分は負けるという顔をしている。これは明らかにおかしい」

「そういうことかあ。甲斐田君はこの目を見て感情移入しちゃったんだ」

おや、勝手に風向きがよくなったかもしれない。

「理解できたぞ甲斐田、お前はこの目を見てから自分でも気がつかないうちに相手の視点になって見ていたのだ。手が震えていたなどというのはさすがに錯覚で、きつと自分をそこに重ねていたのだろうな」

「よく分かりましたわ。確かにわたくし達は一夏さんの視点でしか見ていませんでした。四組代表について考えるときも合理的判断以外の感情までは考慮していませんでしたね」

遠からず、いや、感情移入と言われればある意味その通りか。まあ納得して突っ込まれなければ何でもいい。

「ということはこのことについて私達反省する必要があるそうね。相手の心理状態の変化については完全に抜けていたんだから」

「織斑君に対しては考慮していましたが、片手落ちだったのは否認ません。事前の四組代表の情報からも、この弱気な性格は把握できていたというのに」

「一夏には相手は気迫で押せるということをもう少し認識させておくべきだったな。そうすれば少なくとも途中で投げてしまうことはなかったかもしれない」

「投げたおかげで勝てたのですから勝負とは本当に皮肉なものです」

「ほんと織斑君だから勝てたって感じ」

彼女達の間では疑問が解消されたく、反省を口にしつつも口調は軽い。

俺としても嫌なところまで突っ込まれずに済んでほっとしたが、この分ならどうであろうと深く突っ込まれることはなかったかもしれない。

俺は自分が過剰に反応して論理の組み方を間違えてしまったことを反省しよう。

「さてと、後はあの謎スペックだけど、これは打鉄に見せかけた別の専用機だったってことでF Aね。大方倉持技研とは別の企業が入ってるってところだわ」

「近々倉持技研から離れるだろうという予想もありましたし、そのあたりでしょうね。I Sの専用化技術は企業ごとの特許技術ですから、倉持技研の方々が知らなかったということは別の企業のものでしよう」

「まあ対戦も終わったしどうでもいいことだよ。あたし達には関係ないことだし」

内実はきつと違うだろうと思ったが、わざわざ口にするのはしない。

だが一夏に個人的な負の感情を抱いている以上、四組代表が今後も何かを仕掛けてくることはきつとあるだろう。とはいえクラスどころか友人すら跳ね除けている状況では、学内に味方が一人もいない。あえて言えば姉の生徒会長くらいか。しばらく見ていないが今度来た時に妹のことを聞いてみよう。

とりあえずリーグマッチの間は気にしなくてもいいだろう。

「じゃあそろそろ……あ」

「どうしたの……あー」

俺につられて壁の時計を見た鷹月さんがしまったという顔をする。

今はもう三時半。鈴の試合の開始時間は三時だった。

「既に始まってしまっているという次元ではなかったですね」

「今から行くか……着く頃には終わっていきそうだな」

「やってしまいましたわ」

「とりあえず行くだけ行こうか。さすがに織斑君達は行ってるだろうし」

完全に諦めたという風情で、走ることもせずそろそろと会議室を出て行く。

映像は鏡さんあたりが撮っていてくれているので、後で試合の内容を見ること自体はできる。

しかし今のが生で見るのを諦めてまでやらなければならなかったことかと言うと、全くそんなことはない。

本末転倒というか、一夏のこととは細かく気にかけていても自分のことを疎かにしてしまっているのはなんとも間抜けな話だ。

アリーナに行ってみたら案の定、鈴の試合は既に終わった後だった。

25. 素直に吐き出した方が気は楽になるが、そうしない方がいい場合もあると思う。

素直に吐き出した方が気は楽になるが、そうしない方がいい場合もあると思う。

「おう、会議お疲れ」

「あれ、言っちゃった？」

「クラスみんなに聞いた。というか揃っていないんだからそれしかないだろ？」

何の疑いも持っていない一夏が眩しい。きっと他の連中は一夏を直視できていないだろう。

俺達がアリーナの客席に着いた時、一夏は他のクラスメイトと共にちよと帰ろうとしているところだった。

「それもそうか。いるべきなところではないでごめん」

「何言ってるんだよ。こんなの見るより大事なのは次だろ。五組代表とはもう終わってるし、鈴も一度見てるし、次の対策を考えてくれた方が俺としても安心できるさ」

「そうだね。やるべきことをやっていくのが一番大事なものね」

実に耳に痛い言葉だ。

前の反省をしていたら見そびれましたなどはとても言えない。

「どうしたみんな？ そんな顔しなくても、別に誰も文句言ったりなんかしてないぞ？ むしろ文句とか言ったらバチが当たるといふか、気にすんなって」

「織斑君織斑君、さつき織斑君が機嫌悪かったからみんな責任感じちやってるんだよ。自分達のせいだって」

「あつ、そういうことか！ 谷本さんありがとう。みんなごめん！

ほんとさつきは悪かった。八つ当たりとかして俺ほんと最低だった。あれは向こうが上だっただけで、誰が悪いとか全然ないから」

一夏が笑顔でみんなの気を遣うという実に珍しい光景が今日の前

にある。

その横で谷本さんが、みんなのフォローするわたしかっこいい、とても言いたそうな得意げな顔だ。ちよつとイラツとした。

「気を遣わせちゃってごめん。それよりどうだった？」

「鈴のことなら圧勝だな。今度も剣だけで相手を圧倒してた」

「やっぱりダメか」

「ああ、その必殺技？　は使ってなかったな。使うまでもないって感じだ」

五組代表は一夏が一撃で沈めてしまったので、結局実力がどうだったのかは分からずじまいだ。

だから鈴と戦う姿を見ても鈴の実力を図る上でそこまで比較対象にはできないと思っていた。

しかしこの分であれば、五組代表の実力は三組代表とそう変わらないう程度なのだろう。

「なるほどね。明日四組代表相手に出してくれるかな？」

「俺の勝手な感覚でいいなら、ガチでやれば鈴と四組代表はいい試合すると思う」

「へえ」

リーグマッチでは当然のごとく一夏が一番の当事者だ。だから自分以外の試合を見るにしても俺達とは見方が違う。

午前中も自分をその場に当て嵌めて見ていたが、その感覚からすれば四組代表は鈴といい勝負ができるくらいなのか。

これはやはり今の試合は見ておくべきだった。

「ええと、鏡さん、今の試合って映像撮ってるよね？」

「当然バッチリよ。私達はちゃんと仕事してるから」

振り返った俺に対して鏡さんは、『私達は』の『は』を強調してきた。完全にバレている。

明らかに俺達がそんな大層な理由で遅刻したわけではないと分かっている。というかニヤケ顔だ。

どうもこの人は俺の弱点を見つけると強気に出て、自分の弱みを見られると即逃げる。

別に苦手意識はないが、油断ならないという意味で面倒な相手だ。負けん気が強いのは間違いないが、もしかして以前篠ノ之さんと保身に走った際一番罪を重くしたのを逆恨みでもしているのだろうか。

「完璧な仕事をありがとう。それじゃ僕らはまた寮の会議室に行ってそれを見ようかな」

「そうか。じゃあ俺はどうする？ 休むのが第一だとは分かっているけど、俺もう元気だぞ？」

「正直言おうと寮に帰って寝て休んで欲しいけど」

「無茶言うな。今から寝たら起きてもまだ真つ暗だ」

「だよ。どうしようかな……」

連戦の疲労を考えて、初日の夕方から夜は特にすべきことを設けていない。

何より一夏の精神と体力を回復させて明日に持ち越さないことが大事だったのだが、今の一夏はもう完全に元気そうに見える。

午前中の試合で全く消耗しなかったおかげもあるが、問題なく一夏が回復してくれたのは何よりありがたいことだ。

「それならちよつと体動かしてきていいか？ 軽くで済ませるからさ」

「そうだね、明日に持ち越さないという意味でも、今日のことは今日反省しておこうか。篠ノ之さん、オルコツトさん、相川さん、さつき話したことを一夏に伝えておいてもらえる？」

「わ、分かった」

「残りのパイロット班の人達で一夏の相手をして欲しいかな。期間中は予約なしでIS借りられるし今からでも大丈夫だと思う。あと整備班は……岸原さんをお願いしようか。さつき話したことをみんなに伝えた上で、さらに今日のこと踏まえて、明日試合する三組代表の予想される機体と整備状況、武装を見直しておいてもらえる？」

「了解です！」

「じゃあそんな感じで」

「私！ 私！」

「谷本さんは当然一夏にくっついて見張っててください。変なことを

させないように、あと自分もしないように」
「ぐっ……はい……」

この女今あからさまに嫌な顔をした。どさくさ紛れにまた何かやる気だったか。

本当にこの連中は油断ならないのばかりだ。

「それじゃまた夜に会議室で。解散」

「お〜」

布仏さんそこでそれは違うと思う。そして他の奴らも釣られるな。

「甲斐田君、行こうか」

「今日は寮の会議室とアリーナの往復ばかりですね」

指揮班の二人と俺はまた寮へと向かう。本当は指揮班にはもう一人いたはずなのだが、もはや見る影もない。

そんな元指揮班の金髪とパイロット班は一夏と共に運動場へと歩いて行った。あと衛生班の谷本さんも。

一方の整備班は俺達と同じく寮でやるつもりらしく、俺の後ろをぞろぞろと歩いている。

さつき俺に嫌味を言った鏡さんが輪の中心となってあれこれ話していた。

整備班のリーダーは一応岸原さんになっているが、実質まとめているのは鏡さんだ。また整備班は情報集めの実動部隊でもあり、俺達が作戦を考える上での情報や資料はこの人達が集めてきてくれていた。

だがそれは相当に地道で面倒な作業だったらしく、指示をする鷹月さんと実際にそれをやる鏡さんの間でしょっちゅう喧嘩になっていた。鷹月さん的には必要だからやってくれ、鏡さん的にはそんな簡単に言うな、ということらしい。

頼まれた作業は苦勞が多いものばかりで、また彼女達にはパイロット班にあつた愛の突進のような報酬的な何かもなく、それなりにフラストレーションが溜まっているようだった。だから文句を言われる前に何か報いるようなことをしておきたいと思っているが、俺も今のところどうすればいいか思いついていない。訓練用のISを調査という名目で改造しまくっていて、そうしているときは楽しそうな風で

はあったが。

整備班はまだそこまで一夏に熱もないので一夏関連を報酬にはできないし、またその姉の写真でも配ってみようか。

「何？ この期に及んでまた何か企んでるの？」

目の合った鏡さんが疑わしげに俺を警戒する。

その無遠慮な目にカチンときて、お前らへのご褒美は何かいいか考えてるんだよ、と言いつつそうになってしまった。

「ダークホースの出現ですっかり忘れてたけど、やっぱり凰さんが一番の難敵だわ」

「全てにおいて高レベルでは付け入る先がなかなか見つかりませんね」

鈴の試合の映像を見終わって、鷹月さんと四十院さんが深い溜息を吐いた。

鈴は五組代表に対しても危なげなく勝利していた。初戦と同様にあのごつい青龍刀でジワジワと追い詰めて、相手が息切れしたところで一気に決めた。

やり方としては実にシンプルだ。高威力の青龍刀、硬い装甲、量産機を上回る機動力にそれらを使いこなす操縦技術があるおかげか、むしろわざわざ難しいことをする必要がないという感じだった。言うなればこういうのが王者の戦い方になるのだろうか。

「織斑君にはないから関係ない話だけど、凰さんを相手にするなら中途半端な銃ならもうない方がましね。それこそ四組代表並に火力上げるか、完全に割りきってシールドエネルギーを消費させることだけ考えて弾倉を鬼のように積むか、それくらいはやらないと」

「五組代表は全てにおいて考えが浅かったですね。三組代表との試合を見たのであれば、平均的にバランスを取るよりもどこかに特化させないと厳しいというのは想像できたでしょうに」

「休んだからだろうけど鈴も体調が回復してたみたいだし、しっかりと頭も働いてたなあ」

映像の中の鈴は、顔色が少しよくなって表情もやわらいでいた。

少なくとも五組代表の挑発を鼻で笑える程度には余裕ができていたようだ。試合中も前よりは断然集中できていて、前の試合の半分投げやりよりはよほど真剣にやっていた。

そして結果として、鈴は両肩の特殊武装を使うどころか前の試合では使った二本目の青竜刀を出すことさえせずに勝利していた。

ただこれは五組代表が三組代表よりも弱かったからというわけではなく、今回の鈴は積極的に前に出て相手を追い詰めたというのが大きい。鈴が終始自分のペースで戦っていたので、五組代表にのしかかっていく疲労が激しかったようだ。どちらも連戦で体力的な有利不利はそこまでなかったから、やはり一夏の言っていた通り攻められ続けるというのは相当に精神を消耗するのだろう。

「まあ二戦見て分かったのは、四組代表みたいに奇襲とか奇策はまずしてこないってことね」

「もちろん絶対ということはありませんが、そのような勝ち方で満足できる性格でないのは最初から分かっています。それに織斑君を叩き潰すと公言もしていますし、ある程度は信用して考えていいと私は思います」

「この分だと一夏とも打ち合うつもりなのかな。その上で勝ってみせると」

こちらとしては基本打ち合いは大歓迎である。何しろ一夏にはエネルギー無効化攻撃があるのだ。当てれば装甲を無意味なものにできるというのは非常に大きい。

またそれは鈴の長所を一つ潰すことができるので、鈴との差を少しでも埋めることに繋げられる。

「まだ上限は出してないにしても二戦分のデータがあるし、それに明日の試合も考えると、機体の性能についてはある程度見えそうね」

「少なくとも最低限ここまでであるというところまでは織斑君に認識しておいてもらわなければなりません。新型の第三世代ということで総容量については同じ第三世代のオルコットさんとの比較ができます。今回のように全くの未知数だということにはならないでしょう

し、絶対にさせません」

「さすがに二度も同じ轍を踏むわけにはいかないよね」

一夏の機体も新型機なので、機体の性能だけならそこまで差はないだろう。違いは主に操縦技術と機体固有の特殊武装だ。お互いの特殊武装は使い方次第だが、操縦技術については一夏が比べようもなく劣っている。つまりこの差をどうやって埋めるかが俺達の課題だった。

「とりあえず今のところ方針を変える必要はなさそう。打ち合ってくればよし。青龍刀の他に銃と両肩の特殊武装があるのはオルコットさんのおかげで分かっているから、それはそれで対策もある。正面から来てくれる分には織斑君も十分に戦うことは可能と」

「ただ織斑君はエネルギー無効化攻撃を当てなければ勝てません。終始使うことができるのであれば話は別ですが、シールドエネルギーを消費してしまう以上使いどころを考える必要があります。一発逆転は可能ですが、長引けば長引くほど不利になるのはこちらでしようね」

「鈴はこつちの手の内を全部知ってるからなあ。イグニッション・ブーストもきつと使えるようになってるだろうし、奇襲とかは全く無理だね」

もし鈴が俺達の知らない人間であつたら、オルコットのときと比ではなく勝ち目が薄かっただろう。付け入る先が見当たらない。

だが俺も一夏も鈴の性格は熟知している。本人が生身の体で他人に喧嘩を売りまくっていたので、どういう戦い方を好んでするのかは何度も目の当たりにしている。

そしてその戦い方、いや戦う姿勢については五組代表との試合を見て確信した。鈴の根本的な部分は今も変わっていない。自分をコントロールする術を身に付けていたりと成長しているが、やっぱり鈴は鈴だ。正面から相手をねじ伏せる力強さ、それが鈴の自分自身に求めるものだった。

四組代表のことがあるのでカモフラージュしている可能性も考えてみたが、まずないと言い切れる。それは鈴が自分のアイデンティ

テイを放棄してしまうことになるからだ。

自分を捨ててまで勝つことを選択するには、それに見合うだけの別の何かが必要ならぬ。では今の鈴にそれがあるかと言うと、何もない。そもそもが感情的な衝動によるものだし、自分の存在意義を守るため戦うのに自分を捨ててしまつては本末転倒もいところである。鈴はただ勝てれば何でもいいというわけではないのだ。

「正面からの勝負となると、技術的な部分については今さらどうにもできないわね。篠ノ之さんと打ち合つてきて大分様にはなつていてということだけど、果たして本番ではどこまでがんばれるか」

「幸い篠ノ之さんのおかげで接近戦における精神面については早くから鍛えてきました。四組代表とのがあるので一抹の不安は残りますが、気持ちで負けてしまふという最悪な事態にはならないと思います」

「機体についても倉持の人達が来てある程度改造のバランスを考へることができるようになつたからね。もちろん標準の状態が一番バランスとれているそうだけど、相手に合わせてそれなりのことができる」

倉持の人も前は織斑先生に睨まれて怖がつていたが、俺の説得と一夏の懇願によりある程度は融通を利かせてくれるようになっていた。

そもそもこの人達は自分の会社が開発した新型機がコロツと負けてもらつては困るのだ。

織斑先生が怖いのは分かるけど自分の会社の未来も考えましようよ、という俺の悪魔の囁きは意外と効いたようだった。いざとなつたら俺のせいになしようと考えている節はありありと見えるが。

今は自分からこうした方がいいとは言わないが、俺達からこうして欲しいという希望には応えてくれている。専用機の持ち主である一夏からの強い要望だからと言い逃れできるようにしているつもりらしい。

「最終戦における機体のバランスについてはもうちよつと考えましよう。整備班の人達もいろいろ案を出してくれているけれど、まだこうするって決断はできないと思う」

「織斑君が改造された機体に慣れなければならぬので、早く固めてしまおうべきだとは思いますが」

「もう今から大幅な改造ができないのは変わらないし、できる要素も限られてる。どちらにしても三組代表との試合後になるのは一緒だし、それなら前決めた通り鈴と四組代表の試合を見てからにしよう」

そこまで差があるわけではないが、鷹月さんはどちらかという慎重論を唱え、四十院さんは積極策を推す。オルコットが指揮班にいたときはもう少し三人で相談をした上でという感じだったが、今は自分の意見を前に出すようになってきていた。

別に自己顕示欲がどうだという話ではない。決定権を俺に預けた上で、お互いが相手と反対の視点で物事を考えることにしているようだった。

そうすると特に決めたわけではなく、いつの間にかという感じだった。本来の自分の志向もあつただろう。

「分かったわ。明日の織斑君は午後には試合がないし、夕方から夜にかけてバランス変更された機体に慣れることに終始して大丈夫だと思う」

「ですが、凰さんの試合が終わった後から考え始めるのでは遅過ぎます。候補を予めいくつか確定させておいて、どれにするかを決めるだけの状態にしておくべきです」

「そうだね。整備班の人達には最終案の候補を午前中……まあ午後一くらいには出してもらおうか。そして僕らで出てきたものを鈴の試合が始まるまでに検討して最終候補を決めておく。鈴の試合が終わったら時間かけずにすぐ決めて、倉持の人に改造してもらおうと、そんな感じで」

このように鷹月さんが樂觀論を唱えることもあるし、四十院さんが修正案を出したりもする。意見が一致することも多く、二人とも思考経路はそう変わらないのでそこまで差があるわけではなかった。

「うん。じゃあ凰さんの話はひとまずこんなところで。それで明日の三組代表だけど、今日負けてやる気なくしてくれたりいいけどまあ無理よね」

「試合数自体が少ないので自力での一位はもう無理ですが、可能性はまだあります。残り全勝した上で鳳さんが一組か四組に負けてくれれば一敗で並ぶことができます。ルールでは勝敗が一緒であれば両者を一位の扱いにしてくれるので、一位の特典という当初の目的を達成することができるのです」

「直接対決の結果で順位決めるってわけじゃないんだよね」

「一回負けたくらいでやる気なくさせないためでしょ。五組は二敗しちやっただからもう一位は諦めるしかないけど」

現在二勝している一組と二組の対戦がまだ残っているのですが、どちらかは必ず三勝まで行く。だから最大二勝しかできない五組にもう一位の目はない。引き分けがあればまた話はややこしくなるのだが、今回は必ず決着がつくルールだ。残量エネルギーなど事細かに勝敗についての規定があつたが、これらを狙ってやるのは無理だという結論に俺達は達していた。

「とすると三組は何が何でも勝ちにくるわね。織斑君は全勝中だし、舐めてかかってくれとかそういう甘い考えはもう一切期待できない」

「加えて相手はこちらの二試合を見ています。織斑君の特徴は十分に理解した上で向かってくるでしょう」

「二試合目はともかくさつき苦戦した姿を見せちゃってるからなあ。そのまま同じことはできないけどアレンジして加えてくるだろうね」
全クラス登場して、ここから本当の勝負だと言えるだろう。

今後は各クラスが対戦相手を分かった上で舞台上に登ってくる。目の前の相手に合わせるか今までの自分を貫くか、本人なりの決断をして臨まなければならない。

結果に明暗が分かれたが鈴と五組代表は自分のやり方を何より最優先とした。俺達は都度都度相手に合わせて変えていくやり方を取っている。

だが三組と四組はまだ一試合のみなので、次どう出てくるかが分からない。まあ四組代表は一人でやっている上に機体が極端な改造バランスなので、ここから大きく変えることは難しいだろう。

対して三組は俺達と同じく組織で動いている。組織力については見ていてどうも俺達よりも上だ。

やり方についても俺達と同じで相手に合わせてくる可能性が高い。「今さら言っても仕方ないけど、できれば初戦で当たりたかった相手ね。手の内を知られてなければきつと押し切れたと思うけど、もう完全に研究されちゃってるわ」

「相手にとっては幸いなことに、一戦目で長所を、二戦目で短所を見せてしまっています。織斑君の長所を潰しこれでもかとはかりに短所を突いてくるでしょう」

「でもさ、それこそが僕らが最初に想定していた事態だよな？ そういう状況の中で一夏を勝たせるために僕らは今までやってきた」

俺の顔を見て二人は強気に笑う。

例えば担ぐ相手が鈴のように全方位に優秀であれば、俺達はここまでする必要もない。鈴に対して俺達の実力でやれることは、コンディションを整えモチベーションを上げ、対戦相手の情報を調べてくることくらいか。鈴本人に対してしてやれることはそうない。

俺としては楽できていいと思うが、目の前の二人にとっては鈴は物足りない相手だろう。自分のやれることが少ないという意味で。

「その通り。実力差をひっくり返してこそ私達の存在する意味がある。欲しいのは結果。いい試合をしても負けては無意味。では始めましょう。織斑君の勝利のために」

鷹月さんは自分を鼓舞するかのよう言い放ち、整備班が作ってくれた資料を取り出した。

なんだかんだで一番ノリノリになっているのはこの人かもしれないと思っただ。

どこにいいのかと思つたら、整備班の人達は寮の屋上にいた。

会議室にでも籠ってしまえば話は別だが、基本的に寮はIS学園の生徒全員が住んでいるので内緒話には向かない場所だ。

食堂や休憩室など大人数で話をできる場所はあるが、やはり周囲の

目や耳がある。今回のようにクラス対抗の状況では他人に聞こえてしまうような場所で話をするのはあまりよろしくない。

三組や五組と言った他クラスを意識している連中は、ここ数日寮の中で群れている姿をめつきり見なくなっていた。

「なるほどね。確かに屋上なら広くて声も届かないし、見通しもいいから他人に聞かれてないのが分かりやすいなあ」

「な、何？ いったい何しに来たの？ 私達甲斐田くんに何もしてないわよ……」

そんな大げさに怯えられるとかえって後ろめたいこと全開ですと言っているようなものだ。

まあ俺の悪口で盛り上がっていたとかその程度だろうが。

「別に僕から見えないところでやってくれる分には何を言おうと好きにすればいいと思うよ」

「えっ!? そ、そうなんだ。それは……」

俺は軽く言っただつもりだが鏡さんは余計に動揺してしまっている。もう俺に聞かれたくないようなことを肴にしていたのは間違いなさそうだ。

というか、本当に俺に向かって言ってくれるな。目の前でナチュラルに俺を貶める発言をしないでくれとクラスの連中には強く強く言いたい。

「まあいいや。ちよつと整備班のみんなに話したいことがあつて」

「ああ、とうとう来ちゃったわ」

「どうやら私達ごこまでのようね……」

「お母さん、今まで育ててくれてありがとう……!」

本気で言っているのかそういうノリなのか判別しかねる。

胸の前で手を合わせて空を見上げ、さわやかに今までの人生を振り返るかのような目をしないで欲しい。俺は死刑執行人か死神か。

と思っただらこの連中、揃って同じポーズを取っている。つまりこれは明らかに示し合せていて、俺へのおちよくり行為以外に他ならない。ならば俺としてもそれ相応の返答をしなければならぬだろう。

「そっか。みんなもう覚悟はできているんだね。じゃあ僕から言える

「ことは何も無い。これから順番に……」

「ジョーク！ 今の全部ジョークだから！」

「すみません調子に乗ってました！」

「甲斐田君に逆らおうとかまーったく思ってますからあ！」

ちよつと待て。どうして集団で俺をおちよくつておきながら即手のひらを返す。なぜ俺が乗ってくることを想定していない。

確かに俺は基本こういうのを相手にせずその場では流すが、言われっぱなしのまま放置しておくような人間ではないことをお前らも分かっているだろう。後で罪に応じた罰や労働を課されているのは十分に身にしてみても理解していると思っていたのだが。

「まあ冗談はさておき、整備班のみんなに今言っておきたいことがあつて」

「やっぱりバレたか。それって甲斐田くんが二組と五組の試合に遅刻した理由を織斑君に密告したことよね」

「あつ、ナギそれ違う！ あれだ！ 織斑君の試合中甲斐田君が待機室で興奮して暴れてたつて織斑君にチクったことだよ！」

「違う違う！ 自由時間に甲斐田君が鷹月さんとかを集めて脅していじめてたつて話だよ！ さつき織斑君に聞かれてつい口を滑らせちゃったけど、このタイミングならもうそれしかないつて！」

よーし、鏡に夜竹に田嶋。お前達の罪は俺の心のメモ帳にしつかりと記録された。

ここ最近やけに一夏が俺の動向に詳しいなと思つたら犯人はお前達だったか。曲解までして伝えてくれるとは実に優秀な連中だ。この件に関する報酬を楽しみにしているがいい。

しかしそれにしても、この分なら俺は将来名探偵になれるかもしれない。何しろ自分は何もしなくとも相手の方から勝手に罪を告白してくれるのだから。

「別にそんな今さらなこととは言わなくていいよ。今来たのは指揮班からのお願いを伝えにだから」

「くっ……何もかもお見通しつてわけね……」

「指揮班から？ どうして鷹月さんじゃなくて甲斐田君が？」

「そりやあ……あ、鷹月さんと違つて拒否権はないし文句も言わせないぞつてことか」

お前達の間で俺はどれだけ暴君なんだと言わざるをえない。

そこまで言うならお望み通り暗君としてクラスに君臨してやろうかとさえ思つてしまう。

とうにかさつきからこの連中は俺とコントをして遊びたいのか。俺としてはそんなのは谷本さん一人で十分過ぎる。

「別に今までの苦勞を無駄にしたいなら無視してもいいけど、僕としては後一日だからもうひと息がんばつてもらえませんかつて話。明日に向けてのお願い事項」

「くつ、それ言われるときついわね。いったい何をやらせようつて言うの?」

ようやく俺は本題を話すことができた。俺は指揮班会議で決めたことを説明する。

整備班の人達は初め本気でとんでもないことをさせられるかと思つていたのか怯え気味だったが、説明するにつれて安堵の表情が広がつて行つた。

「とまあこんな感じ。みんなには大変だろうけどそれをお願いしたい」

「……ほんとにそれだけ? 実は行間読んで裏の指令が隠されてるとかない?」

「ナギ、それ自分から墓穴掘つてる。そういうときはね……」

「あのさ、もう王様ごつことかいから真面目に答えて欲しいんだけど」

「あ……ごめんなさい」

少し苛立ちの感情を込めて言つてみたら素直に謝つた。背筋を伸ばして、本当にようやくながらではあるが真面目な顔になっている。やっぱりこの連中は遊んでいたのか。

構ってもらえて嬉しくてはしゃいでいる子供みたいだなと、何となく施設のチビ共を思い出した。

「それで、できる? 遅くとも午後一には欲しいんだけど」

「えつと、それだけでいいならできるといっつか、もうほほできてる。今までのパターンからしてどうせ修正版を要求されるだろうって思ってたから、ここまでの時間でみんなと相談はしてて」

「そうなんだ。みんなさすが仕事早いね。それは非常に助かるよ、ありがとう」

俺が言うのと目の前のクラスメイト達は一転して得意そうな顔になった。

そういえば俺はあまりクラスメイト達を褒めることをしていないような気がした。もちろん感謝の言葉くらいは言っているが、今思えばそれは形式的なものだったかもしれない。

もしかして俺が暴君扱いされてしまうのはそういうところにあつたりするのだろうか。

「じゃあ今すぐよこせとは言わないから、明日の三組との試合が終わった後にもらえると嬉しいかな」

「了解。他に何かある？」

「お願い事項はそれだけ。後はもう一日がんばってもらえるように癒しグッズでもみんなに配ろうかなって」

「癒し系!! 甲斐田くんが!」

驚くところがそこか。確かに俺は癒しという言葉から程遠い存在かもしれないが、別に俺自身が癒しをやるとかそういうわけではない。グッズとぼかしはしたが、いつもの写真のことである。

俺は写真の束が入った封筒を鏡さんに渡した。

「何が入ってるの? 黄金色のお菓子とかそういうのはちよつと……」

「いやいや、ただの写真だから」

「写真? いったい誰の? 織斑君のとか私達そこまで興味はないわよ。」

「織斑は織斑でもその姉の方だね。織斑先生が十五歳、僕らと同じ時の写真」

鏡さんは俺の言葉に一瞬固まり、それから荒々しく封筒を破って中身を取り出した。

数週間前、俺が自分を餌にして釣りをすべく校内を徘徊していた時、三年の先輩から声をかけられた。何の用かと聞けば織斑先生の写真を買って欲しいと言う。さらに高校三年生時の写真は無いのかとピンポイントな要求をしてきた。

理由を聞けば、今の自分と重ね合わせてがんばれる気がするからとのことだ。その言葉に俺はなるほどこれは使えると思った。

信者と言うだけあって、彼女達にとって織斑先生は神様のような存在だ。人間の原罪を一手に引き受けてくれる神様と違うのは、織斑先生が自らの力で上り詰めた人間であるという事実だ。最初から神様であったわけではなく、努力の末その座に立っている。俺などはそもそも才能あってこそその話だろうと思うが、当の織斑先生本人は何よりも努力を強調していた。インタビューなどでも一貫していて、自分は他の誰よりも努力したからこそ今ここにいると発言をしている。

それは上を目指す人間にとって絶対真理の言葉して受け止められていた。

「こ、これが……」

「そっか、織斑先生にもあたし達と同じ時代があつたんだよね……」

大騒ぎしてくれた三年の先輩達とは違って、目の前のクラスメイト達は食い入るように写真を見つめている。

雲の上だと思っていた存在が一気に自分の身近へと引き寄せられたのだ。クラスメイト達は否が応でも今の自分と比べて考えてしまおうだろう。

写真の向こうにいる俺達と同一年の織斑先生はまだあどけなさを残していて、凜とした今の姿よりも柔らかさを感じさせる。

「織斑先生にもこんな時があつたんだって考えると癒される気持ちになつて、よしがんばろうと思えるかなと思ってさ」

「何言ってるのよ。これが癒しになるわけないじゃない」

「あれ？」

なんとということか一瞬で否定されてしまった。絶対いけると思っていたのだが俺は何を間違えてしまったのだろうか。

「癒しなんかじゃない。これはエネルギーよ。こんなこととして遊んで

る場合じゃなかった。やるべきことをやらずして他人に文句ばかりなんて私は何をやってているのか！」

「ちよつと待ったナギ！ 焼き増し焼き増し！ 独り占めするな！」

「えっと、焼き増しってどこですればいいんだっけ？ あ、もう夜だから閉まってる？」

「そうだ、データとして取り込もう！ そうすればみんなで共有できる！」

なんだかクラスメイト達がおかしなテンションになってしまっている。もしかして俺はガソリンをぶっかけて火をつけてしまっていたのかもしれない。

「ちよつと待った。データ化してみんなにメールで送ってるので焦らなくても大丈夫だから。さすがに焼き増しとかは自分でやって欲しいけど」

「甲斐田君それ最初に言ってよ！」

「あ、ごめんなさい」

全員からユニゾンで言われて思わず反射的に謝ってしまったが、もちろん俺は何も悪くない。

だが目の前の連中はもう俺のことなど全く眼中にないようだ。さっきまで俺に対してあんなに怯えていたというのに。

「急いで部屋に戻らないと！」

「あつ、ナギその写真！」

「明日でいいでしょ！ この時間じゃ今から焼き増しとかできないし！」

「いやむしろ拡大印刷して壁に飾ろう！」

「それ頭いい！」

完全に俺を放置して、クラスメイト達は大騒ぎしながら駆けて行った。そして俺は一人屋上に取り残される。

なんだろう、この一人だけついていけなかったというアウェイ感
は。

結果としては目論見通りだ。いや、やる気に火をつけることまでできたというのはそれ以上の成果である。文句を言うようなことでは

決してないはずだ。

だから俺に対して感謝の言葉を口にしなかったことなど気にするべきではない。

そうして俺は今後整備班の連中を問答無用でこき使うことに決めた。

26. うまくいっているように見えたら見えたら見えたら不安に思ってしまう。

うまくいっているように見えたら見えたら不安に思ってしまう。

「いいぞ一夏、その調子だ！」

「一夏さん、焦らずに、決して焦らずに」

「それでいいんだ、もうすぐ相手は焦れてくる」

パイロット組もこのままがいいと言っている。

戦況の判断については俺よりもっかかりできる人達だ。危険要素を思いつけばすぐにでも言ってくるだろう。

そしてまだここまでそれはない。

「岸原さん、ダメージの状況はどうですか？」

「大丈夫です！ あれだけ受けていても強度以上の攻撃は一つもありません！ シールドエネルギーの減りもまだまだ想定未満です！」

「よし、いけるわ。もうすぐ、もうすぐ向こうが痺れを切らす」

今のところ、全てがうまくいっている。

当の一夏にしても、集中力に全く問題はない。

有耶無耶になったにせよ、本人は昨日の対四組戦での自分のふがいなさを自覚している。

二度とあんな真似はしないと、一夏は昨日の夜強い決意を示していた。

「もう！ こんなに硬いなんて聞いてないわよ！」

「おうおう！ どんどん撃ってこいよ！ 遠慮とか一切いらねえぞ！」

そして威勢もいい。確かに挑発しろとは言ったが、一夏がここまでノリノリになるとは思わなかった。

待機室を見回しても谷本さんや布仏さんも元気に応援している。

ところが、そんな中俺だけが乗り切れないでいた。

何が不安なのかって、こんなふうにうまくいってしまった方がいいのかという話だ。そう決めたのは俺なのに、自分の判断への自信がない。

ここに来て俺達は、方針の百八十度転換というある種の博打とも言える作戦を持って対三組戦に臨んでいた。

対三組戦では防御主体の持久戦を行うべきである、と書いてあったのは整備班から提出された資料だ。

一夏の機体の性能に対して真っ向から喧嘩を売るその提案に、俺と指揮班の二人は思わず言葉を失う。

機体の性能バランスをどうすべきか聞いたのにこの人達は何を言っているの、と鷹月さんは呆然と呟いた。

一夏の専用機は極端なまでの攻撃特化だと俺達は認識している。ブレード以外の装備を全て捨て、盾さえ持たない。そしてその代わりにエネルギー無効化攻撃という対ISでは凶悪とも言える必殺技を繰り出すことができる。

ただしそれは自身のシールドエネルギーを消費して行うという諸刃の刃で、エネルギーがなくなってしまうえば使うことができなくなり、その上装甲まで失うという最悪の状態にまで陥ってしまう。だから使いどころが限られていて文字通りの必殺技と言えた。

また一方の防御面については機動力を活かした回避が命だ。装甲もそれなりにあるとはいえ、持ち物がブレード一本だけではとても受けに回ることなどできない。そして攻撃にシールドエネルギーを使う以上長期戦もやりたくない。

つまり整備班の提案は弱点を前面に押し出すかのような自殺行為に見えた。

もちろん、整備班は適当に投げやりに言ったわけではない。

いきなりこう書いてきたのは俺達を驚かせてやろうと意地の悪いことを考えたのだろう。きっと俺が整備班に対して結論を最初に言えとしつこく言い続けたことへの意趣返しに違いない。

だが彼女達は機体の整備バランスという観点から論理を積み上げて、この一見とんでもなく見える結論に達していた。

「よし！ そのタイミングだぞ一夏！」

「幸先がいいですわ。そうです、一度で決めようとしなくていいのです」

「うん、確かにこういう相手ならこのくらいの威力で十分だね」

資料もとい提案書には最初に、織斑一夏の攻撃力はオーバーキル過ぎる、と書かれていた。

対五組戦で見せたように、一夏はエネルギー無効化攻撃を使えば一撃で相手を葬り去ることさえできる。またブレード自体も唯一の武装だけあって、打鉄やラファールのブレードとは格が違うとも言える威力を備えていた。

確かに一撃必殺一発逆転というロマンはあるかもしれないが、実際問題そこまでの威力を必要としているだろうか、と整備班は疑問を投げかける。一撃で倒せずとも十発で倒せば十分ではないか。そしてエネルギー無効化攻撃があれば十発もいらないうらう、と。

その上で三組代表に対して必要な威力はこれくらいだ、と整備班は俺達が驚くような低い数値を出してきた。それによって浮いた分を他の重要な要素に割り振るべきだと言う。

「何これ、この銃が全く効果ないとかありえないんだけど。通常よりも結構威力上げてあるのに、どれだけ硬くしたのよ」

「はっはっは、気合が全く足りないな。おい、もっと本気で来ていいぞ！」

「気合で威力が増したらとっても嬉しいんだけどね！」

その分が防御に割り振られた結果、一夏の全身の装甲が鬼のように硬くなった。具体的には今相手の銃を完全に無力化してしまっている。元々近接戦を想定しているため一夏の機体の装甲強度はそれなりに高いのだが、改造で上げることのできる分が相当にあったのだ。

もちろん攻撃を受ける以上シールドエネルギーは減ってしまうが、それも最小限だ。どれだけ弾倉を用意しているかは知らないが、向こうからすれば今の状態で一夏のシールドエネルギーを削り切るなど

気の遠くなる作業に思えるだろう。

「あつ、織斑君がまた当てたわ。岸原さん、今の攻撃での相手のダメージはどれくらい？」

「はい、やはり三組代表さんは機動力を上げている分装甲が犠牲になっていきます。大幅に威力を落とした雪片式型ですが、向こうも防御が相当に下がっているので十分な効果が出ていますね。えーと、先ほどの攻撃では直撃を避けられたにも関わらず三パーセントは削っていると思われませう」

「今のでそこまで出るのですか。確かに織斑君の速度に合わせるため三組代表は装甲を削らざるをえませんが、それにはこのような落とし穴があったのですね」

打鉄どころかラファールのブレードさえ下回ってしまうような威力で大丈夫なのかと不安になる俺達に対し、三組代表は装甲を大幅に下げてる、下げざるをえないから十分だ、と整備班は返してきた。

三組が対一夏戦において最初に考えなければならぬのは、新型機とのスペック差を埋めることである。その中でも特に機動性だけは同等以上を確保しなければならぬ。相手が高威力のブレードを持つ以上立ち回る必要があるのは間違いないからだ。それに一撃でISを沈めてしまうような高威力の武装を持つ相手なら多少の装甲などあつてないようなものだろう、と考えて真つ先に装甲を削る。

だがその考え方は甘い毒で、だったらもう少し攻撃に割り振っても、もう一息削っても……と深みに嵌る。実際に三組代表の機動力は整備班の想定以上で、それはつまりその分だけ装甲が余計に犠牲になっていることを示していた。

「さすがに機動性は下回ってるねー。しょうがないっちゃしょうがないんだけどさ」

「仕方ありませんわ。機動部分の数値を変えてしまつては一夏さんがいつもの感覚で戦うことができなくなりますので」

「もう少し早く機体の整備バランスのことに気づいていれば、訓練で一夏の体に馴染ませることができたな。残念だ」

一夏の機体は専用機だということで、俺達は勝手に量産機との間に

線を引いてしまっていた。普通に考えれば専用機だろうがISはISなのだから同じことができて当然なのに、一夏の機体を性能が固定されたものとして思い込んでいた。相手の機体については改造を考慮していたのに、自分の側についてはできないものと決めつけてしまっていたのだ。

もちろんそれには仕方がないという要素も多分にある。何しろ倉持技研の協力を得られたのは本番の三日前だ。また同じく専用機持ちで気づいてくれそうなオルコットは未だに自身の機体を使いこなすところまで行っておらず、整備バランスを考え始める前の段階にいる。改造に対する認識自体が薄かった。整備班も自分達が触ることができないという事実から最初から改造については考慮の外にあってたようだ。

だから改造については正直相手状態に合わせるための微調整程度なつもりだったのだが、一夏の機体が改造できることを聞きつけた整備班はやる気に火を付けてしまった。その結果連中は嬉々として改造案をいくつも出してきて、既に本番が始まっているというのに俺や指揮班の二人は頭を悩ませる事態に陥っている。

「大丈夫、あれくらいならまだ想定範囲内だから。それよりも今大事なのは三組代表が混乱してしまっていること。これは完全に相手の予想を上回っているわ。このまままで十分いける！」

「そろそろ三組代表もこちらの状況は理解したようですが、未だ対応策を考えるとところまで行っていませんね。織斑君の普通の攻撃に反応しきれないほどパニック状態で、まったく集中できていません」

だがいくら整備班が案を出そうが、決めるのは彼女達ではない。最後に合意は取るにしても、基本的に決定権は俺と指揮班にある。ただし除くオルコット。

初日については一夏へ変な影響を与えたくないということで改造案は全て却下していたのだが、対三組戦において指揮班の二人が整備班の出した改造案に乗ってしまった。『とりあえず』『試しにちよつと』とかいうような次元ではなく、完全に食いついてしまっている。

理由は明確で、この案なら完全に相手の裏をかけて、しかも安全に

勝つことができると判断したからである。

そして実際にこちらの作戦は三組の想定外なようで、傍目からも三組代表は完全に動揺してしまっている。何しろ鈴に負けた時と同じように、自分の攻撃が相手に全く通じていないのだ。焦ってしまうのも当然で、その表情を隠すことさえできないでいた。

「このっ！ このっ！」

「さつきからぜんっぜん効かねえな！ 蚊に刺された程にも感じないってきつとこういうのを言うんだらうなっ！」

さらに一夏も絶好調である。これまでは回避することが全てだったが、今はいくら攻撃を受けても平気という状況にまで変わっている。楽しくて仕方ないようだ。

とはいえ作戦上挑発しろ煽れと指示していたにしてもノリノリ過ぎる。これでは悪役っぽくて見栄え的によろしくない。俺的には、な話だけでも。

「いい感じに織斑君は挑発してるわね。さあどうする？ このままじゃあなたは勝てないわよ？」

「早く我に返ってください。そちらは午後も試合がある以上長期戦はよろしくないですよ。こちらは今日はこの試合だけなのでそれでも別に構わないのですけれど」

一夏は昨日のうちに午前午後の連戦を終えているが、三組はこれからだ。だから三組代表は午後のことも考えつつこの試合を戦わなければならぬ。昨日試合をして疲労については十分理解できているだろう。既に一敗している以上三組は連勝が絶対条件だ。そのためにはこの試合を長期戦に持ち込まれて消耗し、次に引きずってしまうわけにはいかない。

ならば、この後三組代表は銃よりは威力が高であろうブレードを持って前に出てくる。それはすなわちわざわざ一夏と打ち合ってくれるという話だ。

「岸原さん、相手のブレードの威力はどの程度だと予想できるでしょうか？ 敗北した二組戦で全く通じていなかったので前よりはあると思いますか？」

「そうですね……さすがに織斑君の装甲強度よりも上回ってくるとは思いますがどの程度かについては不確定要素がありますので、まだ何とも言えないです」

「不確定要素？」

「もう一つか二つは武装を隠しているという話です。イグニツション・ブースト対策をしてくるだろうという予想ですよ？」

「ああ、それか。確かにラファールの大砲系か盾くらいは用意してくるでしょうね。つまりその分を差し引いただけブレードの威力を上乗せできていると」

一夏は既に対四組戦でイグニツション・ブーストを見せてしまっている。だから当然三組代表はその対策をしてくるのは間違いないだろう。四組代表はイグニツション・ブーストを使うことができたが、三組代表はおそらく使えない。対鈴戦において絶対に使うべきところで使えていないという事実からそれは分かる。また三組の訓練を偵察した限りでも、使ってもいけないしその練習さえしていない。一朝一夕に身に付けられる技術ではないので、見ただけでいきなり使えるようになるということもまずない。うちのクラスでも二週間近くかけて習得できたと言えるのは一夏以外には篠ノ之さん他数名だけなのだから。

もちろん使ってきたら使ってきたで別に構わないのだが、使えない場合は別途対策を立ててくるだろうという予想だ。

「鷹月、おそらく三組代表は盾を用意していない。左手のブレードを盾代わりに使っている。そもそもイグニツション・ブースト以前に一夏の雪片式型を正面から受け止めるつもりがあれば、最初から盾は持っておくべきなのだ」

「鳳さんとの試合を見ても待つより自分から仕掛けるタイプみたいだし、機動力を活かしてうまくいって受け流そうって感じだよ」

「装甲を大幅に削っているくらいですので、今さら防御に気を遣うこととはしないと思いますわ」

「なるほど。とするとやっぱり大砲系もしくはぎりぎりまで引きつけてからの全速回避しかなさそうね」

三組代表は右手に近距離系の銃、左手にブレードを持っている。ここまでの戦い方からして基本は銃主体、一夏に近寄られたらブレードで対応する、というやり方のようだ。

対鈴戦の反省からおそらく攻撃の威力を上げ、さらに機動性も強化して十分に一夏と立ち回れるようにしている。だがその分だけ装甲を失っており、ほとんど防御方面については切り捨てた形だ。

昨日の一夏が相手なら確かにそれはうまく嵌っただろう。適度に距離を取りながらしつこく銃で削る。近づかれても対鈴戦の時のようにうまく受け流して、至近距離で銃を放つ。イグニッション・ブーストについては別途対策を取って封じる。またエネルギー無効化攻撃に対してはもう割り切って回避のみに全力を注ぐ。

もちろん俺達もそれは予想していて、一夏対策を取られた時にどう対応するかをずっと考えてきた。

そして今回採用したのが、相手の裏をかいて一夏対策を無意味なものにするという戦術だった。

「この調子ならレーザー系の貫通攻撃は持つてなさそうね。万が一で裏の裏をかかれるのが一番怖かったけど」

「織斑君の機体を打鉄の上位互換と考えた場合、絶対にはいとは言えない話でした。ただレーザー系は効率が悪いのも事実ですので、確信でもない限りわざわざ用意する必要はないですね」

もちろんその可能性も考えてはあった。

もしかしたら相手に全部読み切られているかもしれないという危惧を俺が口にする、指揮班の二人は少し考えてからそれはそれで問題なく戦えるという回答を出してきた。

三組に裏の裏をかかれた場合どうなるか。攻撃はレーザー主体、防御は一夏のブレード以上、これが一番困るパターンだ。

だがその場合はエネルギー無効化攻撃を使えばいいと鷹月さんは言う。三組代表が防御方面を残すのであればスペック上攻撃か機動のどちらかは両立が不可能だ。どうしても一夏の専用機と同等ということにはできない。攻撃の威力を落とすか、機動で下回ってしまうか、どちらかを受け入れなければならないのだ。

攻撃力が低ければ腹をくくって長期戦に持ち込みチマチマとしてこく叩く、機動が低ければ立ち回りで勝てるのでエネルギー無効化攻撃が大活躍できる。こちらは焦る必要もないのでじっくりやればよく、向こうは次の試合を考えればどこかで無理をする必要がある。連戦という一つの山場を乗り切った実りがはつきり出ていた。

「あとはイグニッション・ブーストを使えるかどうかだな」

「あら、この状況でしたらおそらく必要ありませんわ。相手の方から来てくれるでしょうから」

「あ、そっか。向こうはもう至近距離で打ち合うしかないもんね」

ともあれ、今のところ三組代表はこちらの術中だ。そして三組代表は自分の思い通りにいかない場合どう出てくるか。こちらはそのためにもちゃんと道を用意してあげているが。

「参ったわ。完全にやられた」

「お、やけに弱気だな。なんならそのまま降参してくれてもいいんだぞ?」

「まさか。でもこうなったら死中に活を求めるしかないわね。癪に障るけどお望み通り、君達の手のひらで踊ってあげようじゃない」

「まだまだ余裕はありそうだな。いいぜ、来いよ」

三組代表は銃をバズスロットにしまい、ブレードを右手に持ち替える。確かにこちらの望んでいた通り、打ち合いに来てくれるようだ。

さあここからは一夏の土俵、近接戦だ。篠ノ之さんやクラスメイト達と訓練してきた成果を見せる時だと言えるだろう。相手はイタリアの代表候補生、技術だけなら鈴とも互角に渡り合っていた。だがこの相手に勝てないようでは対鈴戦は非常に厳しくなると言わざるを得ない。

俺としてはこの近接戦次第で鈴に対する戦い方を考え直す必要さえあると思っている。

「あ、その前に質問」

「なんだよ。せっかくな感じだったのに」

「ごめんごめん。あのさ、この作戦を考えたのはまさかあの子じゃないわよね?」

「あの子?」

「甲斐田君」

「智希? うーん……きつとあいつじゃないだろうな。なんか不安そうな顔してたし」

「だろうね。あの子って純粹そうだから、きつとこういうのは嬉しくないだろうね」

「はあ!」

言うまでもなく、またも部屋中の視線が俺に突き刺さる。

だがそんなものについては今さらどうでもいい。問題は俺が一夏に不安な表情を見せていたという事実だ。

俺としてはそういうつもりは一切なかった。この作戦については整備班、指揮班、パイロット班の全員が賛同している。そしてそのことは自信を持ってやれるよう一夏にもきちんと伝えている。

それなのに一夏は俺から不安を読み取った。どういうことだろう。「あの子も希少な男性IS操縦者なんだから、大切に扱ってあげなきゃダメよ」

「いや、大切に扱って欲しいのはむしろ俺の方なんだけど」

「何事も自分主体で考えない。君と違ってあの子は周りが支えてあげないといけないんだからね」

「俺と違うのは分かるけど……支えて……?」

認識の違いによる咬み合わない会話などどうでもいい。相変わらず続くお前何か言えよ的な視線も特に気にするようなものではない。

どこで、一夏は俺の不安を見た? 何を、俺は不安に思った? 俺の危惧や指摘は全て解決されているはずだ。

今の俺が不安に思う何かがあるとすれば、うまく行き過ぎていることくらいだ。それは漠然としたもので、はつきり言ってしまうえば杞憂と同レベルにある。嫌な予感がするとか虫の知らせというような感覚的なものでもない。

この先に大きな落とし穴でも待ち受けているのだろうか。だが当の三組代表に穴を掘っているような形跡はない。自分でも口にしていたが完全に後手を踏んでしまっており、今俺をダシにして会話をす

ることによって精神的な落ち着きを取り戻そうとしているようにしか見えない。

とすれば穴とはいわゆる墓の穴か。

「あつ、お前もそういうことか！ 確かに俺も最初はそうだったし、無理もないっちゃその通りか。智希に本気でやられたら仕方ないよな」

「いきなり何の話よ？」

「そのうち分かるぞ。その時は智希を一発ぶん殴っていいぜ。俺が許す」

「はい？ 甲斐田君を殴っていいとか意味分かんないんだけど」

一夏によって俺は三組代表から殴られることになってしまった。俺はリーグマッチが終わった後三組五組にきちんと事情を説明するようクラスメイト達から約束をさせられているのだ。ということは五組代表にも殴られてしまうのだろうか。

一夏としては俺の行動にいい顔をしていなかったし、終わったら有耶無耶に誤魔化さずきっちりけじめをつけろ、と言うことなのだろう。一夏は時々俺がやらかしたと思うところやって間に入ってくる。そしていつの間にか収めてしまう。

しかし、姉からしてそうだが謝って一発殴って解決それで後腐れなし、など直球にも程がある。誰もが一夏のようにすっぱり割り切れるわけではないのだが。

「それで智希のことは勘弁してやってくれって話だ。それよりいい加減始めようぜ」

「なんかよく分かんないけど甲斐田君と話してみるしかなさそうね。いいわ、始めましょう」

三組代表は釈然としないながらも真剣な表情に切り替えてブレードを構える。一夏は律儀にそれを確認してから自分もブレードを構え、そして三組代表へと斬りかかった。

第二ラウンド、お互いにブレード一本だけを持った近接戦が始まる。

「互角……いや、やはり分は多少悪いか。一夏の攻撃が当たるよりも三組代表の攻撃の方が命中しているな」

「向こうは前の試合もそうだったけど、反応が早いね。こういうところをやっぱ適正Aランクなんだろうな」

「近接戦では反応速度が物を言うと言いますわ。三組代表は少しそれに頼り過ぎていようにも見えますが」

一般的にIS適正が高いほど自在にISを動かすことができると言われている。特に一瞬一秒を争う近接戦では自身の身体能力に加えてIS適正が大きく響いてくるとのことだ。

しかし、それなら適正Cランクで近接戦クラス最強の篠ノ之さんはいったいどれだけすごいのかという話になるのだが。

「大丈夫、これくらいは予想の範疇。そこまで大きな差はなさそう。そしてこのまま続けるとお互いに消耗戦になるから、どこかで三組代表は無理をしなければならなくなる。こちらとしてはそこが狙い目よ」

「岸原さん、三組代表のブレードの威力は分かりますか？ お互いのダメージ如何によつては戦い方も変わってくるのですが」

「そうですね……織斑君への直撃がないので正確なところまで分かりませんが、大雑把に言つて一撃当たりのダメージはこちらの方が多そうです。あ、こちらの与えるダメージの方が大きいってことです」

つまり、このまま進むとジリ貧なのは三組代表の方だという話か。

外から見る分には、三組代表の方が押しているように見える。対鈴戦でやったように、三組代表は一夏の周りを細かく動き周り隙を探しての攻撃を行っている。

それに対して一夏も相手の一つ一つの動きにきちんと反応はできている。ブレードで受けたり回避したりして、多少はもらいつつも完全な直撃は一発もない。

だがその分だけ受けに回ってしまったって、自分の攻撃にまで繋がられていない。うまく回避ができた場合はそのまま攻撃へと移行できているが、ブレードで受けてしまった時はそのまま相手の攻撃を受け続けてしまう。

いや待て、もしかしてそれだろうか。

「決して切れるな一夏、苦しいのは相手も同じだ」

「同じ条件において有利なのは一夏さんの方なのですわ。一夏さん、もうしばらくの辛抱を」

「このままの状態が続くわけないんだ。織斑君のターンはこの後なんだから」

前回のこともあって、パイロット班は一夏のメンタルを心配していた。だが俺は一夏の集中力については問題ないと思っている。少なくともこの試合と次の鈴戦においては集中が切れるということはないだろう。昨日一夏は自分の行為について強く深く反省をしていた。こうなれば喉元過ぎるまでは同じ轍を絶対に踏まないのが織斑一夏だ。

過ぎてしまえば何度でもやらかしてしまうのだけれども。

「向こうも往生際が悪いわね。このままじゃまずいつて自分でも分かってるんでしょ？」

「仕掛けるのが遅くなればなるほど形勢は悪くなりますのに、何をためらっているのでしょうか。前の試合のことがあるので慎重になっているのでしょうか？」

それを聞いて俺はようやく理解ができた。

三組代表は落とし穴を掘っていない。こちらは穴を掘った。だが、三組代表は落とし穴に気づかず素通りしてしまっている。

「まずい、このままじゃ負ける。早くこっちからどうにか手を打たないと」

「どうした甲斐田？」

「甲斐田君？ ずっと黙ってたけどいきなり口を開いたと思ったら何を言っているの？」

今ジリ貧になってしまっているのは一夏の方だ。

「甲斐田さん、また何かが見えたのですか？ ですが負けるとは……」

「あのさ、今の状態が続いたらまずいのはこっちだよ。明らかに不利な状況じゃないか」

「ちよつと落ち着きなよ。この状況がいつまでも続くわけじゃないん

だからさ」

「こつちが何もしなかつたらこの状況が続くから言ってるんだよ。このままやってくれば三組代表は勝てるのに、何を変える必要があるんだ」

「え?」

訓練の成果を出すどころではない。それどころか一夏は自分で自分を縛って苦しんでしまっている状態ではないか。

一方今の三組代表は完璧に集中できている。

「見てれば分かるけど一夏の攻撃はもう全然当たらなくなったよね。そして三組代表の攻撃は時々当たってる。一撃一撃のダメージは小さいかもしれないけど、このまま続いたら先にゼロになるのはこつちだ。だよね、岸原さん?」

「はい!? え、えつと……ですがそれには相当な時間がかかるかと……」

「甲斐田君落ち着いて。だからそれをやると消耗が激しいから続けられないって話でしょ」

「消耗以前に三組はここで負けたら終わりなんだ。勝ち目がそこにあると見れば腹をくくるよ。だって完全に裏をかかれて自分の作戦なんてもうあつてないようなものだし、自分でも死中に活を求められないって言うてたじゃないか」

全員が押し黙る。

実に単純な話で、三組代表は一夏に乘せられたと理解しつつも、近接戦を選択する時点で余計なことを考えるのを止めたのだ。要するに、開き直った。

もしかしたら対鈴戦において我慢しきれずに欲を出して負けてしまったことが念頭にあつたのかもしれない。

見る限り、今の三組代表には前の試合であつたような迷いのある動きは一切見られない。

「あたし達向こうを追い詰め過ぎちゃった……?」

「甲斐田さん、ですが一夏さんも今日まで近接戦の訓練は毎日続けてきましたわ。ここまで見ていて三組代表の方は篠ノ之さんほどの技

量は持つていないように見受けられます。ですからこのまま続けていけば一夏さんも相手に慣れて、本来の実力を発揮し同等の勝負に持ち込めるのではないのでしょうか」

「本来の実力なんてこのままじゃ絶対に出せない状態なんだよ。足を止めて相打ち覚悟の打ち合いなんて一夏の戦い方じゃない。動き回って隙を見つけて、必殺技含めた強力な一撃を叩き込むのが本来の一夏だよな?」

漠然としていた不定形がどんどんクリアになって具体的な形へと変わっていく。それは最初から存在していたものではなく、今まさに形作られていつている。

一夏はなぜ俺が不安を抱いていると思ったのか。それはきつと一夏に対して俺は『大丈夫か』『できるか』などと何度も確認をしたからだ。つまり、俺にとって今までやってきていないと思えることをやらせようとしたせいだ。

もちろん、それができると思える根拠はクラスメイト達が作ってくれていた。彼女達は今の一夏の実力から判断して、無理がないと思える範囲で作戦を立てていた。

ひとつひとつは基本的な技術で一夏にとっても特に難しいことではない。やらせればできることで、試合でも普通にできている。だから一見何も問題がないように見えた。

問題はそれが微細な変化ではなく、本質まで変えてしまっていたということだ。

「甲斐田君、でも織斑君にできないことをやらせたわけじゃないでしょ。本来がどうかかっていうのはさておき、今織斑君がやっていることは全て近接戦の基本よ。むしろ今までやってきたことよりも緩いくらいで」

「甲斐田さん、今回エネルギー無効化攻撃を使わないことによつて織斑君には余裕ができました。シールドエネルギーを節約する必要がないので、今までのように全回避を目標としなくていいのです。代わりに攻撃の威力は低下しましたが、それについても無理に一撃で決めようとしなくてよくなりました。機動部分は変えていないのでこれ

までと同じ感覚で戦うことができます。ですから制限を取り払っているのかえって実力を発揮しやすい環境にあるのではないでしようか」

「操縦技術のことを実力と言うのならその通りだろうね。それなら今僕らの目の前にある光景が答えだ。お互いに実力を発揮し合った結果、三組代表の方が一夏よりも上だった。そして時間が経てば経つほどその差ははつきりとしてきてる」

モニターの向こうでは、一夏が輪の中心にあつて三組代表は一夏の周りを動き続けている。

高速に動いて細かく攻撃を加え一夏の装甲を削ることに集中し、また自身はできるだけ直撃をもらわないように立ち回る。むしろ三組代表がいつもの一夏の戦い方をやっているようだ。

「じゃあ甲斐田君の言う実力って何よ？」

「専用機とか武器とか戦術とか全部ひつくるめた試合に勝つための総合力。そうだ、オルコツトさんだつて自分の実力を言われたら自分の専用機と武装も込みで考えるよね？」

「え、ええ……専用化処理された機体に乗っている以上わたくしは量産機には乗ることができませんので……」

「一夏だつて同じことだ。そして篠ノ之さん、今の一夏が相手なら百回やつて百回全勝できるよね？」

「……そうかもしれないが、今の一夏は相手に合わせた状態だ。私とやる時はまた私に合わせるだろうから全く別の話だぞ」

「じゃあいつもの状態で一夏に負けることがある要因って何？」

「要因？」

質問の意図が読めなかったようで、篠ノ之さんは首を傾げる。

「エネルギー無効化攻撃と高威力のブレードだ。同じ条件なら全敗の相手にでも、これによつて一夏は勝利の可能性を得ることができる。それは相手にとつて大きな脅威だからだ」

「……そういうことか。今の一夏には怖さが全くないということなのだな」

「一発逆転がない以上、時間はかかっても普通にやればそのうち

勝てる相手だよね」

「甲斐田さんの言う実力とはそういうことなのですね」

三組代表からすれば、今の一夏はちょっと機動性の高い打鉄に乗っているようなものだ。そして機動性でも操縦技術でも自分が相手を上回っていると考えれば、打鉄向けのセオリー通りな戦い方をすればいい。

むしろ変化をつけて違うことをしなければならぬのはこちらの方である。

「じゃ、じゃあこのままじゃ織斑君は負けちゃうってこと？」

「待って。……甲斐田君、時間が経てば相手も疲れてくるから、織斑君も攻撃を当てられるようにならない？ 一発当たりのダメージはこちらの方が大きいことを考えると、先に相手のエネルギーを削り切ることもできなくはないわよね？」

「可能性としてならね。一夏が腹をくくってしばらくは防御に徹したらその確率は上がるかもしれない」

「で、では一夏さんがその手段を選択することは……？」

「ゼロ。なぜなら一夏は打鉄のオーソドックスな戦い方の訓練なんてしてきてないから」

IS学園に入学してからこのかた、一夏は自分専用の戦い方しかやってきていない。

打鉄に乗っていた時も先輩達は一夏に専用機と同じ戦い方をさせていた。オルコットとの模擬戦の日に間に合えば乗り換える予定だったというのもあるし、一夏に打鉄のやり方は性格的に向いていないと言っていた。

そうだ、先輩達は最初から言っていたのだ。俺は今の今まで結びつけることができなかつたという事実に一人愕然としてしまった。

「私達、織斑君が自由に戦えるようにしようとして、逆に縛ってしまっていた……」

「元々その性能から打鉄の戦い方をベースにしようとしていました。特殊性は考慮していたつもりですが、量産機の考え方を無理に当てはめた結果中途半端なものにしてしまっていたようです……」

「そんなこと今はどうでもいいよ！　このままだと織斑君が負けちゃうんならどうにかできないの!?!」

相川さんが苛立たしげにモニターを指差して大声を上げる。もちろんここから一夏にアドバイスを送ることはできないし、案があつたとしても一夏がそれに気づいてくれるかも分からない。

だがこの状況で一夏に何ができるだろうか。

距離が近いためイグニッション・ブーストは意味をなさず、相手の装甲が薄いのでエネルギー無効化攻撃も大して効果がない。

「いつそ距離を取ってイグニッション・ブーストを使つたいつもりの方に戻すか……?」

「駄目ですわ。こちらから近接戦に持ち込んでおきながら翻すのは、失敗したと相手に教えるようなものです。相手に心の余裕まで与えてしまうことになりませう」

「でも実際失敗なんだからもうしようがないんじゃない？　今までのことに変にこだわるよりはすっぱり仕切り直すつもりで」

「このままこれが続けるとして、可能性としては……」

「甲斐田さん、何か」

四十院さんがすがるような目を俺に向けてきた。釣られたのか他の連中まで俺を見る。今度は全く別の感情がこもった視線だ。

そんなこと急に言われても困るのだが。それにたとえ俺が何かを思いついたとしても、一夏がそれをやってくれるとは限らない。

ならばせめて一夏の思考をトレースして考えてみるか。

俺は答えずモニターに目を凝らす。

「急にだんまりになったな！　もつと喋ってくれていいんだぞ！」

「おしゃべりはもうおしまい。ここからは真剣勝負よ」

三組代表のことを一夏はどう見るか。いい加減しつこいなとうんざりしているだろう。それと同時に踏んだり蹴つたりの状況の中痺れを切らさず集中し続けていることに感心する。そして自分も負けていられないと気合を入れ直す。だから対四組戦のようにはならなさそうだ。

「なあなあ、そんなに飛ばしてたらもたないぞ。お互い時間がかかり

そうだし、もつとのんびりやろうぜー」

「じゃあその間に勝つことにするから、遠慮なくのんびりしてていいわよ」

三組代表は鈴のように相手のことを一切無視するというわけではない。だが集中しつつ動きながらも会話までこなしている。

一夏としては自分にはとても真似できないと思うだろう。一夏はせいぜい相手が息を整えるために少し離れてくれた時くらいしか声を出すことができていない。そしてこの状況はあまりよくないとはつきり意識する。

「一夏……それではただの三下だ……」

「そのような行為は一夏さんには全くふさわしくありませんわ……」

「これやっばい。こういうのって負けフラグじゃん」

まずいのであれば一夏はそのままにはしない。ならば今の自分には何ができるか。一夏は天才型だが、無から何かを生み出すタイプではない。まず最初に自分の中にある引き出しを開ける。

今この場で何ができる。そしてその結果どうなればいい。

「エネルギー無効化攻撃だ」

「え?」

俺が口にしたのとはほぼ同時に、一夏のブレードが光る。

一夏はそのまま三組代表に向かって斬りかかり、相手は大慌てで回避した。

「嘘!? それ使えたの!」

「使えないって誰が言ったよ?」

一夏が朗らかに笑った。

そうだ、それしかない。

「えっ? えっ?」

「甲斐田さん、これは……?」

「ちよっと黙ってて」

この後でどつちに転ぶかが決まる。

「どうして今になってそんな……」

「そろそろお前も疲れてきたろ? ようやく当たってくれそうだから

や」

「そんな!!」

三組代表は誰の目から見ても青ざめた。

よし、と俺は拳を握る。一夏も心の中で万々歳だろう。

やはり三組代表はエネルギー無効化攻撃のことを正確に理解していない。

「甲斐田、これはどういうことだ!?!」

「この試合でエネルギー無効化攻撃とか意味ないよね!?!」

「多少はダメージが増えるかもしれませんが、こちら事実上装甲を削られているのと一緒にですわ。一夏さんはなぜわざわざあのような……」

パイロット組が俺に詰め寄ってくる。

少しは自分で考えろと一瞬思ったが、俺自身が口にしてしまっていた以上解説を求められるのはある意味当然か。

「俺としちゃもう少し粘って疲れてもらいたかったんだけどさ、まだまだやる気ありそうだしこのへんでいいかなと思ったわけだ」

「嘘でしょ!?! 今までの全部ひっくるめてそっちの思い通り!?!」

「変に期待させて悪かったなとは思うけど、がんばってもらわないと疲れてくれないし」

一夏が攻撃する姿勢を見せていないとはいえ、三組代表は棒立ちしたまま呆然と一夏を見る。

それに対して一夏は実にさわやかな笑顔だ。

「甲斐田!」

「甲斐田さん!」

「なんなの!?!」

俺は安堵のため息を吐いて、それから三人へと向き直る。

一夏がここまでやってきていて、今すぐに行けること。

それは。

「はったりだよ」

正直なところ鼻で笑われて終わりの可能性もあった。三組代表が正しくエネルギー無効化攻撃のことを理解していた場合は。

だから賭けといえど賭けだ。だがかなり勝算のある賭けだった。

そもそも一夏のエネルギー無効化攻撃は、自分で受けてみなければ何が本当に凶悪なのか分からない。

傍目から見れば、一撃で五組代表を葬ってしまう程超強力なオーバークイルの必殺技だ。ブレードの刀身が輝き、いかにも反則的な威力を持っているように外からは見える。

しかしその光はシールドエネルギーを無効化してゼロ扱いにする働きをしているだけで、光そのものにダメージを与えるような威力はない。

だから装甲自体が薄い三組代表に対して使う意味はあまりなく、また作戦からしてその予定もなかった。

「あれ、おっかしいなあ？ そろそろ当たると思ってたんだけど」

「あんなこと言われてもらうバカはいないわよ！」

余裕綽々に見える笑顔を相手に放ちながら、一夏は首を傾げる。もちろんのこと対オルコットの模擬戦で培った演技である。

時折エネルギー無効化攻撃を出しながらも、はなから一夏は相手に一発も当てるつもりはない。当たったらはったりがバレるからだ。

だが三組代表の方は全力で回避しようとしている。ついさっきまで、三組代表は自身の反撃も見据えてギリギリで躲そうとしていた。ところが今ではかすることさえ恐れているように見える。一撃でISの全エネルギーを削ってしまうような攻撃なのだから、かすっても危険だと想像してしまっているのだろう。

「三組代表の動きが急に消極的になった……」

「弱気……いえ、あれは臆病とも言えるような……」

「そっか。喰らったことないからこそあそこまで怖がっちゃうんだ……」

ほんの少し前まで、三組代表の意識はまず攻撃することだった。全ては次の自分の攻撃のために動いているかのようだった。

だが今は回避が第一だ。正確にはまず何よりも一夏のエネルギー

無効化攻撃を回避することが大事だ。

なぜなら三組代表からすればあれをもらってしまつたら終わりだからだ。目の前で五組代表がやられている。それに一組の訓練を偵察していて、優勢だったはずの対戦相手が光の一撃でひっくり返される様を何度も見ている。

どうしてそこまで怖がるのか。そもそも三組は一夏対策の情報源が俺だった。つまり俺に頼ったが故に正確なところを理解していないからだ。嘘を言うたバレた時が怖いので、なんかよくわかんないけど一夏はすごい、と俺は言い続けた。よく分からないというのは大きな不安要素だ。幽霊を怖いと感じるのはそれが得体の知れない存在だからだ。

また偵察しているのも知っていたので、むしろそれに気を取られている隙に足元を引つ掛けてやろうと俺達は考えていた。元々三組代表への対策ではエネルギー無効化攻撃を警戒させてフェイント的に使おうというのが主眼でさえあった。

初戦の対五組戦で一夏がやり過ぎてしまい、この作戦はもう使えなくなつたと俺達は半分捨てていた。だが一夏はここにきてはつたりとエネルギー無効化攻撃によるフェイントをうまく組み合わせて、形勢を再度ひっくり返したのだ。

「腰が引けている、とでも言うべきでしょうか。全てにおいて攻撃が浅いです。回避することが第一であれば深く踏み込めないのは仕方ないのかもしれませんが……」

「同じ人が、たった一瞬の出来事でこうまで変わってしまうの？」

さつきまではあんなに積極的だったじゃない」

鷹月さんが理解できないという顔を俺に向ける。

プロのスポーツだってメンタルは重要な要素で、それが勝負に直結することさえある。いくら優秀と言つても高校入りたての十五六歳ではそうそう立て直しはできないのだ。まして一度開き直つてからの叩き落とされようだ。心を完全に折られずに今も動いているだけで賞賛に値すると思う。

「クソッ！ 全然当たんねーじゃねーか！ こっちが当たつたって意

味ないんだよ！」

「それはおあいにくさまね。でもお望み通りなのんびり持久戦になってきたんじゃないかしら？」

ところが一夏は三組代表の精神に救いの手を差し伸べる、わけは当然ない。

はったりなのだから、通常の攻撃の方が当たって欲しいのだ。当てる気のない、いや当たって欲しくないエネルギー無効化攻撃を全力で回避してもらって、本命の通常打撃を受けてもらう。

三組代表もあつちに当たるくらいなら……と考えて通常の攻撃に対する対応が甘くなった。それどころか次第に、こちらの方が逆に安全だと錯覚しているような感じになってきている。たとえ回避しきれなくとも通常攻撃の間なら自分も攻撃ができると、ほとんど相打ち狙いの様を呈してきたようだ。

そしてそれは当初の狙い通りの展開だった。

「当たんねえー！ 全然当たんねえー！」

「全然当たってるわよー。どうでもいい攻撃だけが」

一見焦っているのは一夏で、三組代表が平常心を取り戻したかのようだ。

だが実際は相打ちの繰り返しで、三組代表の方が大きく削られている。

目の前の都合のいい現実だけを見ている三組代表に勝利の女神が微笑むことはもうない。

「一夏さんが、一夏さんが、先程から全く美しくありませんわ……」

「落ち着けオルコット。あれが一夏の本心から出たものではないことくらいすぐに分かるだろう？ そこにふんぞり返っているではないか。一夏を悪の道に誘い込む元凶が」

「なんか思考もシンクロしてたし、それに甲斐田君っぽいやらしさだよ。いい夢から覚めたら悪夢のような現実が待ってるだなんて」
戦況を一番よく理解しているのはパイロット班連中だ。だから今の会話は連中が勝利を確信し心に余裕を取り戻したが故の軽口だろう。

さつきまでは慌てふためいていたというのに、本当に現金な連中である。

そして俺はもうこの連中は俺に嫉妬しているから悪口を言うのだと決め付けることにした。

そもそも一夏が今やっているはったりによる精神への揺さぶりは、対オルコットの模擬戦でやろうとしていたことである。あの時は使う前に終わってしまったが。

一夏のこの手の言動はオルコットの精神を揺さぶるために準備していた諸々の一つで、全ては先輩達の指令であり俺に責任は一切ない。持ち上げてから叩き落とすとダメージ大きいですよねという俺の発言に宮崎先輩は笑って何も言わなかった。だから俺の意見は却下されたのであり、オルコットの心を叩き折るため一番最後に使う手段として用意されていたこととは何も関係ないはずだ。

「三組代表さんのエネルギーはおそらく一割を切りました。この調子ではあと数分で終わると思われまます」

「そう」

「今も自分の残量エネルギーに気づいていないようですね……」

岸原さんは努めて平静に喋っているつもりなようだが、嬉しさを隠しきれず声が軽くなっている。

一方鷹月さんと四十院さんはぼんやりと、気の抜けたような顔になっていた。

「鷹月さんに四十院さん、まだ何か懸念点でも？」

「えっ？ ああ、見ての通りよ。もう勝利へのカウントダウンが始まってる」

「三組代表にとっては目覚まし時計が鳴る寸前とも言えますね」

どうしたのだろう。勝利に近いのに少しも嬉しそうに見えない。

多少トラブルはあったにせよ結果を見れば計画通りに行っただと言えるのだが。最後に三組代表は落とし穴に落ちた。正確には一夏が無理矢理落とした。

この二人は変に三組代表の方に感情移入でもしてしまったのだろうか。

だが明日の試合まで丸一日あるとはいえ、最後は最大の難敵鈴だ。まだまだ二人には考えてもらうことがある。この試合がうまくいったからといってやりきったと満足してもらっては困るのだ。

「二人とも疲れた？ 確かに今が疲れのピークかもしれないけど、次の鈴が最大の難所だ。みんなの力を総結集しないと絶対に勝てない。それにリーグマッチの集大成とも言えるし、終わったら切り替えてもう一息がんばろうよ」

「切り替えて……そうだった」

「そうです、まだ私達のリーグマッチは終わっていません」

二人は何かに気づいたかのようにはつとした表情になり、お互いに顔を見合わせ強く頷いている。

危ないところだった。まさか本当に気持ちが悪れかけているとは。

もしかしたらこの人達はむしろうまくいかない方がリベンジ気分でやる気になれるのかもしれない。

「そこまでー」

「えっ？」

「終わりだ」

「えっ、どういうこと？」

「お前もう動けないだろ」

「あれ？」

織斑先生の声が鳴り響き、三組代表の時間が動き始める。

三組代表は一夏に言われて自分がへたり込んでいることに気づいた。

だがまだ理解の方は追いつかないようだ。

「俺もこの試合で大事なことが分かったよ。こういう言い方していいのかわからないけど、ありがとう」

「えっ？ えっ？」

そのまま一夏は回れ右して自分の待機室へと歩みを進める。

大歓声と拍手が一夏に向かって降り注いだ。

「智希、悪いけどこの戦い方は俺には合っていないわ」

待機室へと戻ってきて、一夏が軽く笑って俺に言う。

「だね。ごめん」

「お前が謝ることじゃないだろ」

どう考えても謝るべきは俺なのだが、悪いのはできなかった自分だと一夏は言いたいのかもしれない。

だが結局のところ、ここまで勝ってこられたのは全て一夏の力によるものだ。

果たして俺自身はここまで一夏のために何かをできていただろうか。本番が始まってから俺は肝心なところで力になれていない。

同じ勝つならもう少し楽に勝たせてあげたいのに、そのもう少しさえ出せない自分は不甲斐ないと言う他なかった。

27. 有名税を払わなかったらその資格は剥奪されてしまうのだろうか。

有名税を払わなかったらその資格は剥奪されてしまうのだろうか。

一夏と共に全速力で逃げながら、なんとなく俺は思った。

芸能人や政治家といった人気商売ならそういうことはあるかもしれない。対応をおざなりにした結果、自身の名声を失う。そうなってしまうえば過去の人なり有名税を支払う必要もなくなりそうだ。いや、今度は悪評という新たな分野で有名になってしまいかもしれないか。「おい智希、いったいどこまで逃げるんだよ？ このままじゃIS学園の外に出ちまうぞ？ いやもう落ち着けるならどこでもいいけどさ」

「何言ってるの。生徒が、特に僕らがここから勝手に出られるわけないじゃない」

俺のどうでもいい思考は一夏の切実な発言によって断ち切られる。

俺としても少し現実逃避気味だったかもしれない。

「じゃあもしかして強行突破するのか？ でもそんなことしたらむしろ追っかけてくる人が増えるぞ？」

「安全を求めて自らを危険に晒すとか本末転倒もいいところだよ。一般の人が入って来られない場所に匿ってもらう」

「どこだよそれ？ あと誰が匿ってくれるんだよ？」

「もうすぐそこだ。そしてそこにいるのは僕らが強行突破した場合に追いかけてくる人達」

走りながら俺は目の前に見えてきた建物を指差す。

どうやら後ろから追いかけてくる肉食獣の群れから逃げ切れそうだ。

目的地のIS学園警備室まであと少しだった。

「はー。それは大変だったね」

「いやもうほんと、別に名前書くくらいいいかなと思って立ち止まったのは失敗だった」

「あの数に対応してたら日が暮れてたね」

アリーナを出た途端、俺達の周りに人だかりができた。もちろんお目当ては我らが織斑一夏だ。

IS学園の生徒もいたが、そのほとんどは服装から外の人達のようなようだった。目的は一夏のサインと握手、そしてあわよくば一緒に映った写真である。

最初は一夏もその勢いに押されていたが、すぐにこれは危険だと気づく。そしてほとんど茂みをかき分けるかのようにその場から脱出して俺達は逃げた。

なおその際衛生班の役割から一夏についてきていた谷本さんが犠牲となったので、後で黙祷を捧げておこうと思う。

「うーん、でもこの期間は一般の人もいるんだし、正面から出てきちゃダメだよ。きっちり隔離されてるんだから生徒用の方を使えって説明あったでしょ?」

「それはすみませんでした。一夏があっちから行ってみようと言うのでつい」

「はあ!? お前だって近道になるしいいかって言ってたじゃねえか!」

そして俺達は互いに罪のなすりつけ合いを始める。

確かに織斑先生から特に俺達は期間中注意して行動するようにと何度も言われていた。だがアリーナの中を真っ直ぐ突っ切って正面から出れば寮までの距離が近いということもあり、つい俺は横着してしまった。一夏も久しぶりにクラスの女子に囲まれていないということ、開放感に浸っていたようだ。

「はいはい、どっちもどっちなわけね。後で千冬様に思う存分怒られなさい。……いや待て……それってむしろ褒美じゃない!」

「ご褒美なのはあなただけです」

「俺達としちやいい加減うんざりなんだけどな」

言うまでもなくこの警備の人は織斑千冬信者である。だがこの人が織斑先生の怒りの対象だった場合、そのままクビになってしまう恐れがあるのではないだろうか。

「おつといけないいけない。ついいつもの妄想が」

「おい智希この人大丈夫か？」

「僕らの安全という意味においては大丈夫なんじゃないかな？」

「はっ！」

大慌てで目の前の人はよだれでもたらしそうな緩んだ表情を取り繕った。

嗜好は人それぞれだ。俺達へ被害が及ばない範囲については特にどうこう言うまい。

「そ、それよりも、どうしてこんな時に限って二人で行動したりしてるのかな？」

「ごまかした。この人今思いつきりごまかした」

「それが女子だけで緊急会議をするからと追い出されて」

相変わらず空気を読まない一夏だったが、もちろん俺は乗ったりしない。

というか別にこの人の性癖など全く興味もない。

「緊急会議？ 君達を外していったい何を？」

「それがよく分からないんですよ。なんか今後のこととか言ってますけど、リーグマッチのことで今さら僕が外されるっていうのが」

「だよな。みんながいくら考えてもお前がダメって言えば全部ひっくり返るんだから、こっそり勝手なこととはできないよな」

「何それ」

整備班が自白したが、連中は一夏に俺のことをいろいろ話している。その後の調べではどうも一夏の方から聞いているようで、一夏は一夏なりに俺を心配していたらしい。今まではいつも一緒だったのにこここのところ別行動が多いせいもあって、知らぬ間に俺がとんでもないことをしでかして危ない事態に陥らないかと不安なようだった。

だが報告から上がってくるのは、クラスメイト達のフィルターを通した権力者像。元々俺が人に振り回されるよりも逆のタイプであることは自分がよく分かっている。今はもうそこまで心配はしていないようだ。

また三組代表にああいうことを言ったのも、一夏にとって家族カテゴリに入る俺に対して保護者気分的なものがあるのだろう。一夏は時々ああやって俺の保護者面をする。もちろん俺としては全く逆だと言いたい。

「まあまあ。でもここにきて女の子だけでの緊急会議ねえ……。となれば、きつとあれかな?」

「分かるんですか?」

「そうだねー。きつとすぐ分かるだろうけど、甲斐田君に本気出させるにはどうしたらいいかってことかな」

「智希に?」

「一夏ではなく?」

どこの神に誓ってもいいが、俺は手を抜いたなど一切ない。ここまですべて俺は自分の立場でやれることを全部やってきているつもりだ。

能力不足については正面から認めるが、やる気云々については非常に心外だ。

「お姉さんさ、悪いけどそれだけは訂正してくれ。智希は今までもと真剣にやってる。はつきり言って俺がここまで来られたのは智希の力が一番大きいんだ。本番の試合でうまくいかなかったことは全部俺の力が足りないせいではない。智希のことを言うならその前にまず俺について言っただけいい」

「ごめんね。別に甲斐田君を腐したいとかそういうことじゃないから。外から試合を見るとね、きつと甲斐田君は周りの人達に遠慮しているんだらうなって思えるの」

「遠慮なんか全然してませんよ」

「だよな。むしろこれでもかかってくらい好き勝手してるよな」

一夏の言い方が引つかかるが、その前に俺を庇ってくれたのでちよつと文句は言いつらい。

どちらも一夏の本心だとは分かるのだが。

「そうかな。ここまで織斑君の試合を全部見させてもらったけど、甲斐田君の姿は全く見えないよ。今の試合の最後でちよつと見えたくらいだね」

「僕の姿？」

「あー、それはきつと智希ならどうするだろうかって考えた結果だからだな。やっぱり分かるもんなんだ」

俺には意味が分からなかったが一夏には通じたようだ。

おそらくは一夏の後ろに俺が透けて見えるとかそういうことなのだろうけれど。

「ということはそれも織斑君のアドリブかあ。もしかして甲斐田君の仕事ってリーグマツチが始まるまでだったの？」

「それ僕が始まってから何もしてないって言ってます？」

「ああ、遠慮してるってそういうことか。意味分かった」

あからさまに挑発されたと思ったら一夏が納得してしまった。

ここまでの試合においてこうすると決定を出したのは俺だ。それが何もしていないように見えるということは、つまり俺には能力がないということに他ならない。

確かに今まで勝ってこられたのは一夏の機転や幸運によるところが大きい。なるほど、外から見れば何も役割を果たしていないもののその通りだ。

「あつ、違う違う！ 今甲斐田君が思ってることは全然違うからー」

「落ち着け智希。この人は別にお前がダメだったとかそういうことを言いたいわけじゃないって」

何が違うというのか。

一夏が勝ってくれたからこそ今も俺はふんぞり返っていられるだけで、もしどこかで負けていれば即更迭アンド断頭台行きだった。

「言い方悪かったから気を静めて。あたしが言いたいのは、甲斐田君はクラスの人達に気を遣い過ぎだから、もっと自由にやっていいのよってこと」

「全く意味が分かりません。自分で言うのもなんですけど、僕はわり

と自由をやっていると思います」

「そういうことじゃなくてだな、いや、もちろん好き勝手やってるのはその通りなんだけど、みんなが言ってるからって自分の意見を引つ込めなくてもいいって話だ」

ますます意味が分からない。

確かに俺はクラスメイト連中に好き勝手言われているかもしれないが、それに対しては後でそれ相応の罰を落としている。言われっぱなしのまままで済ませるつもりなど最初からない。

「やつぱりそうだったんだ」

「なあ智希、さっきの試合だけどき、他のみんなとは違ってお前だけはあのやり方に反対だったんだろ？俺に合ってないからって。実際その通りだったし」

「買い被り過ぎだよ。僕はあのやり方でも勝てると思ったからゴーを出したんだ。自分のせいじゃないとかそういうことを言うつもりなんて一切ない」

『あのやり方でも勝てる』ってことは甲斐田君の考えは別なんだね」
だからどうしたと言うのだ。勝てそうなら採用するしそうでなければ却下するだけの話だ。

「智希、みんなが苦労してがんばってるから報われるようにしてやりたいって思ってるんだらうけど、言うべきことはきちんと言うべきだと思っぞ」

「甲斐田君、それってむしろ負けた場合の責任をみんなに押し付ける失礼な行為だとは思わない？」

「責任は全部僕にあります。誰かに押し付けようなんて最初から思っ
ていません」

なぜだかイライラする。俺は自分が手を抜いてきたとは今も思っ
ていない。

確かにもつといいやり方はあったのだろうが、その時その時では自
分がベストだと思える選択をしてきたはずだ。

「そうだ、四組代表のときなんかまさにそうだ。こいつのことは任せ
ろってみんなが言うからお前は口出ししなかっただろ。だけど実際

の試合はあの通りで、しかもお前だけが試合中に分かってたそうじゃないか。甲斐田智希が遠慮せずに加わっていたらあんなことにはならなかったってクラスのみんなは言ってるぞ」

「そうだったの。甲斐田君が同級生相手にあそこまで裏をかかれるとありえないよねって警備のみんなで話してたんだ。今すぐ納得した」

「それこそ買い被りというか、結果論にも程があるよ。僕はあの時だって特に疑問もなかった。だから僕がいよいよとしまいと起こったことは一緒だ」

イライラの原因が分かった。一夏も、警備の人も、俺のことを過大評価している。

第一 I S 同士の模擬戦において俺に何ができると言うのだ。 I S 学園に合格すべく努力してきた人の方が俺より上なのは誰の目にもはっきりしているだろうが。

俺にできることと言えば屁理屈をこねて他人を惑わすくらいだ。事前の仕込みにおいては確かにうまくやれた。だが本番において具体的にどうするかなどという話はどう考えても俺の範疇ではない。事実俺はクラスメイト達の案に納得して決断をした。それ以外の、ましてそれ以上の案など俺の中にはなかった。

「智希って普段は自信満々な顔してるくせにミヨーなところで尻込みするよな」

「はあ?」

「甲斐田君は結果さえよければ途中経過はどうでもいいんだろ? だから自分の考えにはこだわらないと」

何を当たり前なことを。

今までの試合で見た通り優勢は勝ちと全く違う。九分九厘勝つ寸前だったとしても最後の最後でひっくり返されては意味がないだろう。それに自分のやり方とやりに固執していいのはそれが許される立場の人間だけだ。

そもそも俺の目的はまず何より勝つことであって、また勝利によって一夏の存在を世に知らしめたい。いい試合をしたとしても負けて

はIS関係者から外へは広がらない。勝ったという事実だけが世に広がっていく。ある意味みつともなかった四組代表との試合も、時間が経てば一夏は日本の代表候補生にも勝ったという事実しか残らないだろう。

だからこそ俺は手段を問わず勝利を目指す。中身など追っかけてくっつけていけばいい。

「ま、なんでもいいから次で見せてくれよな」

「だから何をささ？」

「お前の本気？ 実力？ とにかく出し惜しみはするなよってことだ」

「だから最初から出し惜しみなんかしてないって……。というかそもそもクラスの女子が今何を話し合ってるのかって話で、そこから先は全部想像だよな」

「今こうやって会話しててきつとそういうことだと思っただよー」

他人事だと思っ、この人も適当な事を言う。

だがクラスの女子のことはすぐに分かる話だ。俺としても話の種類に出した程度で、別に真剣に答えを探そうとかいうつもりもない。

多少予定がずれたがそろそろ戻って鈴対策の会議を始めなければ。整備班も案は作っていると行っていたし。

「一夏、そんなことよりもう終わってそうだし戻ろうか。いい加減明日のことを固めてしまいたいんだ」

「おっ、もうこんな時間か。じゃあ俺も昼飯前にもう一汗かくかな」

「それならそんな君達に朗報だ。警備の車でアリーナの裏まで送ってあげようじゃないか！」

「マジ!? これからまた走るつもりだったからそれはすげー嬉しい！」

「ということはまだ外に？」

「うん。出待ちっぽい感じで見たいだねー」

実は俺一人なら簡単に抜け出せるんじゃないだろうかと思ったが、すぐ一夏に肩を掴まれる。

本当にこういう時だけは察しのいい奴だ。

「さあ智希、一緒に行こうじゃないか！」

「はいはい」

「ご主人様方、お車はこちらでございまーす！」

どんなプレイだと思いながら、俺は一夏と共に警備の人についていった。

「よかった！二人とも無事だったんだ！」

「谷本さんこそ、大丈夫それでよかったな！」

「あ、生きてたんだ」

「甲斐田君ひどい！」

意固地になっていたあの頃と較べて俺も成長したものだ。やはり振ってきたならきちんと応えてあげるのが正しいやり方だろう。

事実谷本さんも喜んで……いや涙目か。

「ともき〜」

「でもさ、『ここは私に任せて先に行け！』とか言われたら普通は今生の別れだよ。それなのにそんな当たり前のように出てこられても特に感動はないというか」

「なるほど！つまり私は感動の再会を演出するべきだったんだね！」

ありがとう甲斐田君！私はまた一つ賢くなった！」

俺はまた一つ余計なことをしてしまった。

「はいはい、つまらない漫才とか誰も興味ないから。みんな待ってるんだし早く入って」

鷹月さんに一瞬で断罪され谷本さんはショックの余り固まった。実に感情の変動幅が大きい人だ。

促されて入った部屋はアリーナの機材置き場のようだった。壁沿いによく分からない機械が置かれている。クラス全員が入れるくらいの広さはあるが、会議室ではないので机や椅子などない。さすがにここでいつもの会議はしたくないなと思った。

「お、みんないるな。話し合いはもう終わったのか？」

「ええ、全員一致で結論は出たわ」

全員一致とはまた怖いことを言う。

もしかして俺の解任決議が採択されてしまったのだろうか。

「そうか。で、何を話してたんだ？ やっぱ智希のことか？」

「さすがに織斑君は分かっているわね。できれば織斑君にもここにいて欲しかったわ。でも甲斐田君を一人にすると何が起こるか分からないから、やむを得ず織斑君には一緒にいてもらったの」

「今のところIS学園で甲斐田さんを止めることができるのは織斑姉弟しかいませんので」

この連中は相変わらずの毒舌っぷりだ。

だがクラス全員の前という状況でそれをやるとはそれなりの覚悟はあるのだろうか。

「智希は普段ひねくれてるくせにミョーなところで素直だよな」

「何の話？」

「そりゃあ……いやなんでもない、忘れてくれ」

一夏が何かを言いかけて慌てて自分で止める。

どうやら周囲からお前余計なことを言うな視線を感じた結果のようだ。

いくら空気を読まないと言っても、さすがに自分から見て数十人から返されたなら理解もできる。

とはいえ俺には一夏が何を言おうとしていたのかは分からなかった。

どうせ言わない方がましの碌でもないことなのだろうけれど。

「それで僕のことって何？ 別にお役御免ってならそれはそれでいいけど」

「はい？ この状況でどうしたらそんなことになるの？」

「あ、智希はさつきちよつとあつてな。平たく言うと昨日今日俺が苦戦したのは自分のせいだと思ってるみたいで」

「それ普段なら嫌味言われてるかって疑うところだけど、その顔じゃ本気で思ってるみたいね」

「素でそう思われてしまうということは、いかに私達が情けないのかという話ですね」

指揮班の二人はそのまま口からため息でも漏れてきそうな顔になっっている。

だがようやく俺も察することができた。この連中はまたも余計な責任感と生真面目さを発揮しているのだろう。

「鷹月、埒が明かぬからさっさと先に進めてしまえ。このままでは自分自身に腹が立つばかりだ」

「ごめん、本当にその通りだわ。甲斐田君、周りくどいのは好きじゃないみたいだから結論から言うけど、次の対二組戦、甲斐田君が作戦の骨格を考えて欲しい」

カチンとくるではない。俺にとってプチンと切れたくなる次元の暴言だった。

はつきり俺は怒った。この期に及んで責任放棄などあり得ないと。

多少の失敗があったからといってその程度で諦めてしまうとかどれだけ打たれ弱いのか。

むしろ俺達の失敗を乗り越えてくれた一夏に感謝し、次こそは報いてみせると努力すべきだろう。

普通なら失敗があった時点でアウトでもおかしくない。だが実に幸運なことに俺達はまだチャレンジをすることができる。ならば次こそは挽回してみせると脳をフル回転させるべきだ。本番は一夏に全てを託すしかないが、それまでのお膳立てを整えるのが俺達の役割。やれることはまだまだたくさんある。

俺はそういうことを目の前のクラスメイト達に向かって飛ばした。「今甲斐田君が言ったことは全部かかってる。その上で、次の試合に勝つために最善を尽くそうと考えた結果がこれなんだから」

しばらく無音になった後、鷹月さんが搾り出すような声を出した。声を張りあげたいのを必死で抑えているような、一言一言に力のことまった声だった。

「他人に全部ぶん投げるのが最善？」

「他人じゃないし、投げるつもりもないわ」

「甲斐田さん、今までやってきた通りに進めても、鳳さんとそれなりの試合にはできると思えます。ですがそこから先は織斑君個人でどうにかしてもらえないのが現状です。機体その他、あらゆる面において織斑君には優位性がありません」

「エネルギー無効化攻撃があるじゃないか」

「そうですね、それはつまり今の時点ではエネルギー無効化攻撃のラッキーヒットに頼るしかないということになります」

そんなことは俺が一番よく分かっている。だからこそクラス三十人の脳みそを使って突破口を見出そうとしていたはずなのだが。

「整備班の人達はいろいろ案を持つてるよね。それは検討しないの？」

「既にやりました。ですがやはりこれといったものはありませんでした。そもそも鳳さんは基本的に穴のない相手なので、弱点を突くような戦い方ができません。奇襲の類も外した時のリスクが大き過ぎてとても採用できるようなものはありません。もちろん一つの策として持つておくのはいいでしょうが、それを本命としてしまつては通用しなかった場合に打つ手がなくなつてしまいます」

すらすらと四十院さんは用意していたであろう答えを口にする。

自分達ではどうしようもないから俺にどうにかしろか。実に楽な身分だ。

「でもね、私達は一つだけ見つけることができたの。鳳さんに勝てると思える唯一の要素」

「へえ、それは？」

「甲斐田君。甲斐田君なら、鳳さんを上回ることができる」

「実際に甲斐田さんが鳳さんをやりこめている姿を私達は見てきています。見る限り、聞く限り、鳳さんにとって甲斐田さんは非常に苦手な相手だと言えるでしょう。織斑君？」

「ん？ ああ、だいたい鈴は口じゃ負けてるな。かと言って手を出したらもつと負けだし」

それをやれるのが、理屈などぶつ飛ばして力づくで押し通してしまえるのが、今やっているISによる模擬戦ではないだろうか。

「だからっていきなり作戦を考えろとか無茶だよ」

「そうね、確かに十分無茶な話だと思う。でも今の状態で凰さんに勝とうと考えたら、この状況をひっくり返すことができそうなのは甲斐田君しかないの」

「みんな僕のことを買い被り過ぎだ。そんな都合のいいものがあつたら最初から出してる。ないからこそ僕はみんなの力を借りようとしてるんだ」

「甲斐田、私達はお前が誰よりも勝ちたがっているのは知っている」

と、いきなり篠ノ之さんが前に出てきた。

表情からして話の腰を折りに来たわけではなさそうだ。

「餌で釣ったにせよクラス全員を巻き込んだ手腕は見事だったと言えるだろう。だが本当に驚くべきはその速度だそうだ。この数年ここまで早くリーグマツチのための行動を始めたクラスはなかったとのことだからな。確かに他のクラスを見渡しても準備において私達は抜きん出ていた」

「ちよつと待った篠ノ之さん。その言い方は三年の先輩と話をした？ 上級生は協力しないことになってるんだからあまりそういう行動はして欲しくないんだけど」

「別にアドバイスをもらったわけではない。以前宮崎先輩に甲斐田のことを頼まれた際軽く言われた程度だ」

「僕のことを頼まれた？」

「そうだ。甲斐田のやる気に応えてあげてくれと宮崎先輩から頭を下げられたのだ」

わざわざ頭まで下げるくらいなら素直に手伝ってもらえばそれでよかったのと思わざるをえない。やる気も何も別に俺は自分の力でがんばりたいわけではなく、結果が欲しいだけなのだから。

「どうしてそこまで勝ちたいのかは分からない。お前が何も言わないからな。だが、甲斐田や一夏が男性であるという事実からなんとなく想像することくらいはできる」

「それが何か関係あるの？」

「甲斐田と私達の出発点は違うという話だ。そしてそれがつきりと

出てしまった結果今の状態になってしまっている」

「モチベーションの違いなんて人それぞれだと思うけど」

クラスメイト達にやる気がなかったとは全く思わない。特に整備班などは終盤俺よりも忙しくしていた。不満もあっただろうが嫌々という感じでは全くなかった。

思い通りに進まなかった原因をやる気に求めるのはさすがに違うだろう。

「大仰な言い方をすれば私達には覚悟が足りなかった。全てにおいて甘かった。それは本番の試合において顕著に現れている」

「反省は全部終わってからでいいよ。もう一試合残ってるし、今までがよくなかったとしても十分に挽回のチャンスはある。まだまだ手遅れなんかじゃ全然ない」

「ああ、そうだな。だからこそ手遅れとなる前に私達は素直に認めることにした。今の私達では甲斐田の期待に応えることは正直厳しい」

まさかの敗北宣言が出てしまった。まだ終わってもいないのに。諦めてしまつたらそこで可能性はゼロだ。それに絶望的な状況ならまだしも、今はもう十分鈴と渡り合えるだろうというところまで来ている。今足りないのは決め手であり、そこを突破できれば勝ちの目が見えてくる。

こんなことを絶対に認めるわけにはいかない。

「待って！ 私達は何も勝つことを諦めたわけじゃない」

「どこからどう見ても諦めていると僕は思うよ」

「そうじゃなくて、勝つことを何より第一に考えるのであれば、今の私達は余計な口を出すべきではない、ということ」

「勝ち負けが問題でなければこのようなことは言いません。泣き言など言わず自分達にできる最善を尽くします。ですが、今甲斐田さんが勝ち負けが全てだと言うのであれば、私達に対して気を配っている場合ではないのです」

なるほどモチベーションの問題とはそういうことか。

彼女達はたとえ負けたとしても一位の特典を諦める程度で済むが、別の動機を持っているであろう俺はどうなんだという話だ。

どうしても勝ちたければ今の自分達では足手まといだから遠慮なく切り捨てろと言いたいのか。プライドの高い彼女達にとって自らを能なしに落とすなど苦渋の選択でしかないだろうに。

「そういうことね。言いたいことは分かった」

「さつきも言ったけど、そもそも次の試合についてだけは甲斐田君よりも適した人なんていないの。思考の対象が織斑君であり、対戦相手も凰さんで、どちらも甲斐田君がよく理解している相手。私達がやるよりも深く踏み込むことができる」

「こと次の試合に関しては、私達が一般論で余計な口出しをする方がむしろマイナスの効果となってしまうのです」

きつとそれが彼女達に苦渋の決断をさせてしまった大きな要因なのだろう。

普通ならこうだろう、一般論ならあだだろうと考えた結果これまで失敗してしまっていた。だったらもういつそ汎用性など一切気にせずとことん突き詰めて、鈴にしか通用しないやり方でいい。そしてそれには誰よりも俺が適任だろうという話だ。

「うん、気持ちは分かる。だけど、それでも言わせてもらうと、今まで出てこなかったものがいきなり出てくると考えるのはさすがに都合が良すぎると思う」

「そうね、甲斐田君が今まで本気で考えてきたのならね」

「むしろどうして今まで何も出してこなかったのだろうかと私達は不思議に思っています」

まただ。また同じ単語が飛んできた。

一夏と同じように、この連中まで俺のことを過大に見てしまっている。

「どうしても何も最初からないんだから出しようがないじゃないか」

「別に完璧なものでなくとも、稚拙でよければ案を出すこと自体は誰でもできます。私と鷹月さんは一瞬で却下されるような案でも叩き台になればと思っ出てきています」

「最近を整備班の人達まで頼まれてもないのに口を突っ込んでくるじゃない。悪だくみ大好きなくせにどうしてこの方面には一切手

を触れないのよ?」

そんなもの、自分が考えるよりクラスメイト達の出した案の方がましだからに決まっている。

「人間誰でも得意不得意はあるよね? 時間も限られてるし適材適所でいいと思うんだけど」

「誰がどう見ても甲斐田君の得意分野じゃない」

「他人の案を批評してその場で問題点を指摘し解決策まで示すことができるのに、何も考えつかないというのはむしろ不自然です」

ここにきて俺はようやく事態を理解できた。

俺は自分の役割は全体の統括であり何かの案を考えることは自分の仕事ではないと思っている。彼女達はやるべきことでかつやれることをやらないのはおかしいと言う。

もちろん俺には俺なりにやることがあり、一つの問題だけに引つかかっているわけにはいかない。だがうまくいっていない事柄に対して、全体を見る立場でありながらお前は何をしたかと問われると、確かに他人に期待するだけで流れに身を任せていただけでしかなかった。

「もちろん、甲斐田君には他にもやることがあるのは分かってる。だから一時的にそれ以外のことは全て指揮班で引き受けるわ」

「幸いにして指揮班にはもう一人います。それに残り一試合ですし何かが滞ることにはならないでしょう」

「甲斐田さん、これまでのことについての反省は行動で示させていただけますし、また終わりました後しっかり謝罪をさせていただきます。ですから甲斐田さんは今はご自分のことだけを考えていてくださいませ」

俺には他にやることがあるから無理だという言い訳まで使えなくなってしまう。

指揮班にオルコットを復帰させるとは、これはもう完全に外堀を埋めにかかっている。

いったい何を緊急会議していたのかと思えば、俺の反対意見を全部潰すためだったのだ。この分ではおそらく俺の逃げ場はどこもかし

こも塞がれているのだろう。

だが、これだけは言っておかなければならない

「でもさ、もう勝手に決めてくれたとか今さらどうでもいいけど、一番肝心なことが残ってる。もし僕が何も思いつかなかつたら、その後はいったいどうするつもり？」

「別に思いつかなくてもそれはそれで構わないわよ」

鷹月さんはそれが当たり前前のことのように言った。

「その場合は今までやってきたことに戻るだけ。これから甲斐田君が抜けても戻ってきた時支障がないようにはしておくわ」

「元より甲斐田さんに無茶を言っているのもまた十分承知していません。そして私達も甲斐田さんに全てを任せて何もしないというわけではありません。もちろん自身の役割は果たしますし、自分達でも何かないか考えますので」

そうは言っても俺が抜けて本当に大丈夫なのだろうか。自分で言うのもなんだが。

このクラスメイト達は基本的に全員我が強い。だからしばしば、特にここ最近をよく衝突を繰り返している。

鷹月さんはあれをやれこれをやれと他人に押し付けるので反発をよく喰らう。特に整備班の鏡さんとはしょっちゅう言い合いをしていた。四十院さんは傍観者の的に突き放した物言いをするのでパイロット班からは受けがよくない。

また整備班も改造の味を知ってからは自分達にもISを使わせろと要求するようになり、実技訓練が何より第一だとするパイロット班との間で訓練機の奪い合いが始まっている。

別に仲が悪い訳ではない。むしろこの一ヶ月半で仲良くなった結果、遠慮などどこかへ吹き飛んでしまったというわけだ。意見が対立してもそれを日常にまで持ち込まないあたり分別はきちんとしている。

それでも心配になって一度聞いて回ったが、自分も相手も真剣にやっている結果の衝突だと理解していた。ただ自分が最善を尽くすためには簡単に譲りたくないというだけで。

「そんな顔しなくても、たった一日くらいみんなうまくやるわ。甲斐田君がいなくても平気よ」

「大丈夫！　なぜならみんな仲良しだから！」

谷本さんに太鼓判を押されても正直あまり信用ならない。というかそれ以前にここまで厄介事ばかり俺のところへ持ち込んでくれたのは紛れもなく今日の前にいる連中だ。

揉め事が発生するのであれば今度は仲裁役が必要になる。時間もリソースも限られているのだから、どこかで折り合いをつけなければならぬ。

そして誰がそれをやるのかと言えば当然俺だ。揉めている間は当然停滞してしまうので、責任者としてはさっさと決めて先に進ませなければならぬ。自分の意見を通したければもつと言い方に気を遣えと何度も言ったが、この連中は口論するのを楽しんでいるのではなにかという次元で一步も引こうとしなかった。

だが一方で、俺自身も立場的に第三者的な公平な位置にはいない。間違いなく指揮班側の人間なので、結果としてパイロット班や整備班を説得したり言うことを聞かせたりする場合はほとんどだ。時には強権を発動したりもするので、連中からすれば確かに俺は権力者的な存在に見えるのだろう。

だから俺も申し訳程度でも気を遣って一夏にサービスをさせたり、写真をあげたりしていた。

「フツーに大丈夫だよ。だって甲斐田君いなかったら喧嘩になってこじれるだけってみんな分かっているし」

「そうそう。それにどうせ結果は同じなんだから争うこと自体が時間の無駄だよ」

ちよつと待て。相川さんの言い方ではまるで最後俺に押し付けられればいいから思う存分やり合っているようではないか。そして時間の無駄だと分かっているなら鏡さんはなぜいちいち文句をつけなければ気が済まないのか。

「そういうわけだから、甲斐田君は午前中考えることだけに集中して。それも具体的などころまで落とさなくていいから。何かしらのアイ

デアでも方向性だけでもいい」

「そこから先具体化して実現させるのは私達の方でやります。いえ、せめてそれくらいはやらせてください」

どちらにせよ、もはや俺には缶詰になるのを受け入れる以外の選択肢は残っていないかった。

本当に困った事態になってしまった。

勝手に期待されるのは百歩譲ったとしても、この二時間程度で何かを思いつくような自信など全くない。

いや、後一時間半くらいか。この二三十分ほど、どうしてこんなことになってしまったのかと自問自答を繰り返して時間を食った。

結論としては自業自得だ。出し惜しみするなという一夏の言葉を思い出して気づいたが、俺は戦術案などを考えることを周囲に任せきりにしていた。適当に案の一つも出して自分の力量を分らせておけばよかったのだが、それを怠ったがゆえクラスメイト達に『もしかしたら』という期待を抱かせてしまう羽目になってしまったのだ。

対四組戦や対三組戦でたまたま気づいてしまったこともそれに拍車をかけてしまったのだろう。四組代表のことは本当にたまたまだし、三組代表の時に至っては何となくでしかない。

それに俺だって自分以外の人間が同じことをやったとしたらこいつに考えさせようと思う。何より突破口が必要な状態で、可能性が見えればそれに賭けてみたくなるのは当然だ。

まして自信を失いかけている彼女達からすれば迷わず飛びつきたくなるのも無理はなかった。

だがしかし、何より問題なのは掛ける対象が俺であり、さらに俺の頭では到底思いつきそうにないことである。

もちろん俺だって出せるものなら出したい。しかしIS関係においてクラスメイト達ですらできないことをどうして俺にできようか。

できないと分かっているからこそ俺は先輩達に頼んだのであり、クラスメイト達を巻き込んだのだから。

「岸原さん今何時？」

「十時五十五分です！」

もうそんな時間か。ますます時間を無駄にしている。

顔を上げると俺から少し離れた先、威勢のいい声を出した岸原さんの横で、布仏さんが両手を振っていた。もちろんいつもの笑顔を添えて。

缶詰と言いつつ、部屋には俺一人ではない。岸原さんと布仏さんも同じ場所にいる。

一緒にいる理由は監視というのもあるのだろうが、俺が何かを考える際に情報が必要なら聞けという話だ。岸原さんは床に座って膝の上にいつものノートPCを乗せている。

布仏さんがいる意味はよく分からないが、この二人は仲もいいし付き添いとかその程度だろう。俺と二人きりなどビビリの岸原さんには耐えられなさそうだし。

事実岸原さんは布仏さんが横にいるおかげでそこまで緊張はしていないようだ。俺の邪魔をしてはいけないと、手を振っている布仏さんをたしなめている。

「あつ、すみません！何かありますか？」

「いや別に。時間知りたかっただけだから」

「そうですか。何か知りたかったらすぐ言ってください！」

岸原さんは元々硬い人だが俺と話す時はいつも力が入る。そんなに俺は怖い相手だろうか。確かに整備班会議で何度も突っ込みを入れて毎回涙目にさせてしまっていたけれど。

いけない、また現実逃避をしてしまっている。早く案の一つでも考えなければ。

もちろん勝手な真似をされたことへの反発はあるのだが、それ以上に鈴をどうにかしなければならぬのもまた事実だ。俺でも誰でもいいから思いついてここから何かを上乗せしなければ鈴には勝てない。

クラスメイト連中が俺に期待しているのは、鈴をよく知ることから攻略の糸口だ。確かにISと関係ないところなら俺にとって鈴

は扱いやすい相手だ。後先を考えなければ鈴を騙すことくらい容易い。

しかし同時に俺は鈴の努力ジャンキーさや目標に対する執念も知っている。その上実際の成果をまざまざと見せつけられては、かえって他の連中よりも無理に思えてきってしまうのだ。

自分に対して妥協しないが故に、なおさら隙がないことも理解できる。俺が一番適しているどころではなく、むしろ一番不適當だと言えるのではないだろうか。

入学は遅れたが試験でもトップクラスの成績だと本人は言っていた。本当に全方位で優秀だ。欠点といえばその口の悪さとすぐ手が出ること、あとはいつまで経っても成長しない体型くらいか。だがISの模擬戦においては全く欠点とならない。

最初から思っていたが、俺は鈴を敵にしたくなかった。

本当に、鈴が一組であればよかったのに。それならば何が起ころうと、少なくとも敵に回らずに済んだ。

一夏も俺も知る相手なのだから、織斑先生の立場からしても鈴は一組でよかっただろう。ISを一から学ばなければならぬ一夏の立場としても鈴は心強い存在になれる。それなのに鈴を二組にしてしまふとは、まさか篠ノ之さんと鈴を一緒にしたら修羅場になってしまうなどと心配したのではないだろうな。だとすれば織斑先生は親友篠ノ之束博士の妹推しか。うん、どうでもいい。

だが鈴も鈴だ。早く一夏に会いたいのならどうして一緒に入学してこない。篠ノ之さんの予想ではもらった専用機をうまく扱えなかったからだそうだが、そんな訓練などIS学園で一夏と一緒にやればいいだろう。専用機の練習という一緒に行動できる大義名分までついてくるというのに。

それにすぐ爆発させてしまう程のフラストレーションを溜めていたくせに、どうしてそこで自分のプライドを優先させるのか。いくら一夏にみつももないところを見せたくなかったからといっても、そもそもIS学園に入学した時点では一年生はほとんどが初心者だ。その中で鈴は経験者ということだけでそれだけで上位に入る。オルコット

や三組四組代表など同じ対場の人間が他にいるにしても、ここでもトップクラスであることに変わりはない。

鈴は一番を目指すが最初から自分が一番でなければならぬとは思っていない。むしろ一番とは奪い取るものだと考えている。専用機をもらえること自体が相当なステータスなのだし、別に多少扱いが拙かったとしても情けないことではないだろう。それとも目も当てられない程ひどかったのだろうか。

と、そこまで考えて俺は何かがおかしいと感じた。

今考えたことの内容自体はただの俺の現実逃避でしかないが、俺の中で咬み合わない。俺の中における鈴像と一致しない。

もちろん一年間の空白期があるので、鈴の方が変わったということもあるだろう。しかも外国という全く違う環境に鈴はいた。環境に合わせて考え方も変化したということは十分にあり得る。

だが再会して以降の鈴は、俺の中でもよく知っている鈴だった。俺だけでなく一夏にとってもそうだった。このあたりの感覚において一夏は俺の何倍も優れている。少しでも違うと思えば口に出さずにはいられなかっただろう。だが一夏は鈴が全く変わらないことに安心していた。

つまり、鈴はやはり鈴だったが俺の違うと思った鈴は鈴ではない。別に鈴が新たな人格を生み出したとかそういうことではない。もっと物理的な話だ。

そうだ、よくよく考えてみれば最初からここまでおかしなことだらけではないか。俺は誰かしらに説明を聞いたことで何となく分かったような気になって流してしまっている。

確かに篠ノ之さんの言葉を聞き鈴の反応を見て、俺は納得していた。鈴の様子から篠ノ之さんの言ったこと自体は間違いではない。だがそれが全てではなく、きつと一つの側面でしかなかったのだ。

であればどうなる。最初は？ あの時は？ あの事件は？ どうして鈴はあんなことをした？ なぜこうまで一直線に転がっている？

一つ見えればそこから先は芋づる式だ。どうして千冬さんは鈴の

言い分を認めたのか。なぜ暴拳と理解していながらそれを通してしまったのか。

鈴は群れない。自ら望んで一人になろうとする。だから俺や一夏と違って周囲と正しさを確認することができない。安心することができない。努力とそれによる成果をもつてしか自らを確かめることができない。

それなら努力の過程でどうやって方向性を確認する？ 鈴にとって成果や結果はどのように決まる？

「岸原さん！」

「はいっ！」

「鈴の試合の映像見せて！」

「え、えっと、この画面でよければ」

「画質がよければ何でもいいよ」

「はい！」

岸原さんがノートPCを持って駆け寄ってくる。その後ろから布仏さんがまたしてもわくわくした顔をしてついてきている。

「最初の試合でいいですか？」

「うん」

「えっと……どうぞ」

試合の映像が始まりパソコンの画面に鈴の顔が移る。見ているうちに俺はおかしくなってしまう。

「ははっ」

「甲斐田君？」

そう言えばそうだ、確かに俺達だけの専売特許ではない。実に当たり前の話だ。

「かいだー？」

「そうだよね、そうするしかないよね。なんだ、とても簡単なことじゃないか」

「甲斐田君！ 何か分かったのですか!？」

その通り、理解はできた。じゃあ次はどうするかだ。方向性はもう見えている。あとはどう落とし込むか。

「智希―」

「か、甲斐田君、どう……かな?」

鈴の試合の映像を見ながら考えていると、一夏と鷹月さん達が部屋に入ってきた。もう昼なのか。

「どうだ……って見つかったみたいだな」

「ほ、本当に!」

人を缶詰の中に押し込んでおきながら今さら何を言うかという話だが、この連中にしても人に無理難題を吹っかけたという自覚はあるのだろう。

そうだ、確かにこのまま俺一人でやっていては時間的に厳しい。この後鈴の試合もあるし、それなりに準備が必要だというのもある。やると言ったしこの連中にもやらせよう。

「そうだね。でも勝つだけじゃ不十分だ。もうひと乗せしておかないと」

「はい!」

「不十分も何も勝つことができればそれでいいのでは……?」

「それがいろいろあるんだよ」

さてこの連中にはどこまで説明をすべきだろうか。

やはりやってもらう以上は全開示すべきか。とはいえクラスメイトがボコられて鈴憎し状態の輩はどれだけ冷静に聞けるだろう。

まあいい、今回の俺は何かを決める立場にはない。そして全ての俺の想像で客観的な証拠など何もない中決断をしなければならぬというのとは相当なプレッシャーだろう。

俺のことを権力者だと揶揄するのであれば、権力者の特権である『何かを決断する』という恐ろしさを存分に味わってもらおう。

「とりあえず説明はするからみんなを呼んできて。あ、ここってまだ使っているの?」

「う、うん……」

「分かりました!」

珍しく四十院さんがアクティブに勢いよく飛び出して行った。

「智希」

「何？」

「やっぱりお前ってそういう悪だくみしてる時が一番楽しそうだな」
「失礼な」

まったく、悪だくみをしているのは俺の方ではないというのに。

28. 何かを決断するというのはそれ以外の可能性をゼロにするということだ。

何かを決断するというのはそれ以外の可能性をゼロにするということだ。

なぜなら一度決めてしまつたら普通はもう戻れない。

まずいならすぐ変えようという朝令暮改ではまともな結果を生み出すことなど難しいだろう。

また臨機応変や柔軟な対応という一見便利そうな言葉は何も決めていない。とどのつまり出たとこ勝負だ。そしてそれは蓄積された経験を持つ人間にしかできない。だからこそ世の中の人は誰にでもできるようマニュアルを作るわけで。

物事というのは何かを決めなければ次の段階へは進めない。なりで、流れでやっていったつもりでも、どこかで何かを決めて前に進んでいる。その場合は決断がなんとなくになるだけの話だ。

本来決断するという行為は恐ろしい。その影響範囲を考えるとなおさら。

「とまあそんな感じ。さすがにこの時間じゃ具体的に詰めることはできなかつたけど、何をやりたいかは決まってる。だからみんなで協力して一つずつ詰めていけばいい」

俺は一通り説明を終えて周りを見る。

誰も声を出さない。

当然だ。いきなりこんなことを言われてすぐはいそうですかとは言えないだろう。

「最初に言つたけど、僕の考えに一切証拠はない。時間があつたら少しは裏が取れたかもしれないけど、今日の今日じゃそれは無理だ。だ

から一見説明がつくように見える僕の想像を今みんながどう思うかだ」

数時間前までと較べて今の俺は実に気楽だ。

無理難題をクリアして逆王手をかけているのだから。

「か、甲斐田君。そう考えた根拠くらいは……」

「だから全部想像だよ。今まで起こった出来事を一つ一つ紐解いて、その理由を考え直した結果だ。僕の中でそう考えると一番しっくりくるっただけだね」

そして俺はさっきの腹いせに意地悪を始める。

これまで俺は何かを決める際は努めて安心感を出すようにしてきたのだが、ここで俺は逆に不安感を煽った。

「鳳さんの弱点を見つけたのかと思えばまさかこんな……」

「いやいや、これ以上ない弱点だと思うよ？」

「弱点どころかももう何もかも全部ひっくり返してしまいましたね……」

鷹月さんが、四十院さんが、これ以上ないくらいに困惑している。

確かにこの二人が一番よく俺の意図を感じているだろう。こんな土台があるのか分らないような不確かさの中で物事を進めるなど今までなかった。

二人の横にいるオルコットも反応は遅れたがすぐに気づいたようだ。やはり人間立場が変わると見え方も変わるらしい。

「もうなんだっていいよ。甲斐田君はそれで行くって決めたんではない？」

「え？ 別に何も決まってないよ。今回のことについて決めるのは僕じゃない。みんなだ」

「は？」

「だって今僕は何の権限も持ってないし。ただ一つの作戦を提示しただけ。別に信じられないから却下でも全然いいよ」

「どういふこと？」

鷹月さんと四十院さん、それにオルコットを除いて理解できていないか。

顔色が変わったのは指揮班の三人だけだった。

そうだ、俺は決断の重圧を押し付けようとしている。

「みんなが作戦を出せって言うから出しただけだよ。それを採用するかどうかを決めるのはみんな。今の僕は責任者じゃないからね。どうするかはみんなで話し合って決めて」

「甲斐田、何を拗ねている。確かに無理を言ったのは悪かった。だが今お前はこうしてしっかりと答えを出したではないか。出したからには四の五の言わず黙って自分についてこいでいいだろう」

「だから今の僕にはそんなこと言う権利とかないし」

相変わらず篠ノ之さんだけは考え方が他の連中と一線を画している。

だが今の俺としてはせめて悩んだ末に決断しろと言いたい。

「はいはい。じゃあさっさと決めちゃえばいいわけね。はい甲斐田君の作戦に賛成な人ー？」

「えっ!？」

とんでもないことに相川さんがいきなり決を取ってしまった。

見れば迷う様子もなくクラス全員が手を上げている。正確には指揮班の三人だけはおそろおそろといった感じだが。

しかし待て。議論はどこへ行った。それどころか俺への質疑応答すらないぞ。

というかそれ以前にどうしてパイロット班の相川さんがそういうことをする。

「反対の人ー……はいないね。はい全員賛成で決まりましたー」

「ちよつと待った! みんなもつと真剣に考えようよ。これって相当に重要な問題なんだから」

「だってこれで勝てるんでしょ? 甲斐田君はそのつもりで出したんだよね?」

「そうだけど、それをみんながどう思うかって話はまた別だよ。きちんと議論をしてみんな納得した上で決めてもらわないと」

「もうそんなことしてる時間とかないじゃん。それに他にいい作戦もないんだし、これで行くしかないって」

「ええっ!？」

なんだこの軽過ぎるノリは。そんな簡単に決めることではないだろうが。

確かに時間も無いし結局はこの案にするしかないかもしれないが、だからってそんな悩むことすらないというのはどう考えてもおかしい。

これでは連中が食後のデザートに何を食べるか悩む時間の方が断然長いぞ。

「何？ 甲斐田くんは自信ないの？ それどころかもしかして嘘ついて私達を騙そうとか考えてる？」

「は？ そんなことあるわけないじゃないか。証拠がないだけで、全部正解を当てている自信くらいある」

「じゃあ何も問題ないね。はい甲斐田くんの案で決まり！」
しまった。迂闊どころの騒ぎではない。

鏡さんのあからさまにも程がある挑発に乗ってしまった。
あり得ない展開に俺の思考回路がショートしてしまっている。

「智希、そんな顔すんなって。別にお前が騙そうとしてるとか誰も疑っちゃいないから。それどころかみんなはお前のことを信じてるって話だよ」

「信じるって今の嘘臭い話を？」

「違う。お前をだ。甲斐田智希が勝つために必死で考えて出てきたんだから信じるってことだ」

「それなら中身は関係ないじゃないか」

「いや、少なくとも俺は十分納得したぞ。確かに鈴が自分からあんなことをするわけがない。全部お前の言う通りだと思う」

確かに一夏だけはすぐ納得してくれるだろうと思っていた。鈴をよく知っているのだから。

だが他の連中は何だ。俺の言った内容に納得しているわけではなく、俺が考えたことだからと何も疑うことなく無条件に受け入れてしまっている。

いや、確かに俺を無理矢理缶詰にして後ろめたくて反対しづらいの

かもしれないが、だからって吟味することさえしないのはどうなんだ。自分で言っておいてなんだが知らない人間からすれば相当に荒唐無稽な話だぞ。

「甲斐田さん、わたくしもあなたのことを信じます。そしてお話の自身についても、事件の当事者としておっしゃる通りだと感じました」
「甲斐田、どうやら私はまたしてもお前に余計なことを言い惑わせていたようだ。自分に当てはめて分かった気になり知った顔をしてしまった。本当に申し訳ない」

オルコツトが、篠ノ之さんが、俺に向かって真剣な眼差しを向けてくる。

だが今回において悪いのは自分の頭で考えることをしなかった俺だ。そこら中にヒントが転がっていたというのに、意味を考えなかったがゆえに俺は気づくことがなかった。

この問題は鈴のことを知っていなければおかしいと思える部分に深く踏み込めない。だからクラスメイト達に期待するべきことではなく、真実に近づくことができるのは実質俺と一夏くらいしかないなかつただろう。

しかし、かといって一夏に今回のことを気がつけとというのも厳しい。基本的に素直だし、人を信じることから始める男であるので、たとえおかしいと感じても表面的な理由にすぐ納得してしまつてそこから先へは進めない。

だからこそ俺が真つ先に気づかなければならなかつた事柄だ。

「甲斐田君、みんな納得したし時間もないから話を進めましょう」

「甲斐田さんの構想を具体化して実現するには考えること決めることがたくさんありますので」

「そうだね、もうみんながいいって言うならいいや。じゃあこれから……」

「待つてください！ もう十二時半を過ぎています！ 凰さんの試合がすぐです！」

岸原さんに遮られる。鈴と四組代表の試合か。

もう全員で観戦するような余裕はない。一夏と、あとは映像係だけ

行かせて残りはどこかに移動して内容を詰めるか。

それに全員で全てを相談する時間もないだろう。全体をいくつかに分けて、それぞれを数人で担当させて形にしていこう。それを俺と指揮班で組み上げていけばいい。

「よし、それじゃとりあえず試合の方へ行く人だけど、一夏に映像係の人だけでいいと思うからすぐに向かつて欲しい」

「待って。甲斐田君も行って」

「え？ でもこれから急いで話し合いをしないと」

「それは私達でやっておくわ。試合が終わって戻ってくる前にできるだけ形にしておくから、甲斐田君はできたものを吟味して修正を加えて欲しい」

「いやいや、こればかりはさすがに僕がいないと」

「織斑君と一緒に見て、二人のイメージを共有化していて欲しいの。いくら作戦ができてでもそれが織斑君の中で消化されなければ意味がない。でも体で覚えてもらう時間がないから、せめて頭の中にだけでもすぐ伝えられるように」

作戦ができあがるのはどうしたって夕方以降。改造要素が出てくればもつとかかる。

確かに一夏が動きの確認をするだけで今日は終わってしまうだろう。

だが作戦を決めるのが遅くなればそれだけ後ろにずれてしまう。どう考えても俺がいた方が効率がいいのは間違いない。

「でも」

「甲斐田さん、先ほど私は言いました。具体化することくらいはやらせてほしいと。甲斐田さんも私達のことを信じてもらえませんか？」

「智希、ここから先はみんなの番だってさ」

一夏が笑って俺に要約する。

そういうことか。確かにイメージの共有化など極論俺でなくても構わない。

俺がやってみせた以上は自分達も口だけではなく行動で示してみせると。

相変わらず律儀というか、生真面目な責任感だ。

「分かった。じゃあよろしく。鏡さん、映像は誰が？」

「さゆか！」

「はいはいっ！ 映像のスペシャリスト夜竹さゆかっ！ 全体像から鳳さんの黒子の位置までっ！ 余すところなく記録に収めて見せましょうっ！」

「あ、そう。それじゃ一夏、行こうか」

「おう」

「あれっ？」

「みんな後は任せた」

谷本さん系の香りがしたので俺は何事もなかったかのように流し、アリーナの客席へと向かった。

「これでよしっ」と

「カメラ二つ？」

「うん。一つは引きで全体を撮って、もひとつで鳳さんを追っかける」

「それ実は二人いるんじゃないの？」

「ひ、引きの方は固定で十分だし！」

さつきからどうにも夜竹さんのキャラが安定しない。

俺の中では一夏に密告していた以上の印象はない人だが、谷本さんばりのハイテンションから篠ノ之さんのようなツンデレへの移行はさすがに無理があった。

そして今やもうよく分からない事態に陥っている。

「夜竹さん」

「な、なんすか」

「そんな無理してキャラを作ろうとしなくていいよ」

「ええーっ!?!」

「あれ、そうだったのか？ 性格がコロコロ変わるおかしな人だなあ
と思っただけど」

痛いを通り越してかわいそうになってきたので俺も止めに入った

が、指摘されて夜竹さんは全て望みは絶たれたとばかりの悲痛な表情を見せる。そして間髪入れずに一夏がとどめを刺した。

「ううつ……これ以上ない機会だから人生で一番がんばろうと思ったのに……」

「いや、がんばるべき場所はもつと別のところだと思うぞ？ 佐竹さん」

「織斑君にはいまだに名前間違えられるしもうおしまいだ……」

「え、マジ!？」

「佐竹さんじゃなくて夜竹さん。いまだに……ことは完全に間違えて覚えちゃったってことだろうね」

「さたけ……やたけ……そういうことか!」

「うわーん!」

よかったよかった。これで夜竹さんは一夏に名前を覚えてもらうことができた。

でもこの人は整備班だし特別一夏にどうのこうのもなかったと記憶しているが。

「あのね! これは女の子にとって夢のシチュエーションなんだから!」

「はあ」

「見なさいこの状況を! 分かる!？」

夜竹さんが真顔で手を広げる。

まだキャラ作り継続中なのかと思いつつ見渡すと、俺達の周囲は空席だった。俺達以外のクラスメイトは寮で会議中なのだからいいのは当然だ。

「男子二人に女の子一人! 誰もが一度は夢見る憧れるでも滅多にならぬこの状況! 偶然ながらもあたしはついに叶えてしまった!」

「滅多にないようなことなのか?」

「男の方が数は断然少ないから、なかなかないのは確かだろうね」

「だからあたしは間違っていない!」

言いながら俺を睨み、犯人はお前だとばかりに力強く指差す。

「つい舞い上がっちゃって自分でも何やってるかわけわかんないこと

になつてゐるのは仕方のないことなんだ！」

「ただの逆ギレじゃねえか！」

「よかつたね夜竹さん。キャラできたよ。理不尽系超逆切れ女」

実にふさわしい称号を俺から授与され、夜竹さんは感動のあまり愕然と口を開け固まつた。

一方一夏は機嫌が良さそうだ。今自分はキレのある突っ込みができたところ満悦か。

夜竹さんに限らず整備班の人達は変にアピールをしようとかがない分、一夏と普通に会話をできる。

今まではお互いに興味ないという感じで接点もなかったのだが、俺の様子を一夏が聞きに行つたことで会話するようになったようだ。

この感じでは一夏としても普通にバカな会話をできるといふのがとても楽しいことなのだろう。

側へ行きたいと思う者ほど近づけず、どうでもいいと思つてゐる者ほど楽しく会話が出来る。世の中とはえてしてそういうものなのだろうか。

バカトークをしつつも谷本さんが用意してくれた大量のサンドイッチを腹に押し込み、俺の観戦準備は万全だ。

俺を観戦に行かせたのは食事休憩をくれる意味合いもあつたのだろう。腹も膨れたし頭の方も夜竹さんが無駄に体を張つてくれたおかげですつきり切り替えられた。腹は少々膨れ過ぎたかもしれないが。

「おお、食いきつたな」

「量はともかく途中で飽きた」

「谷本さんていつもそうなんだよなあ。とりあえず量を食わせとけばいいって絶対考へてる。別に否定はしないけどせめて味に工夫してくれよな」

「まさかここまで同じ味が続くとは思わなかつた。途中からはほとんど口に押しこむだけの作業だし」

「あたしとしちや織斑君の分も含めて二人分かと思つたら一人の腹の

中に流れ込んだことの方が恐怖ですよ」

俺達男子としては女子があれだけの量で日々活動できていることの方が不思議だ。一夏がオルコットとの模擬戦の前女子と同じ食事内容だったときは半日ももたなかったというのに。

「そうだ、さ、夜竹さんは大食いキャラを目指すのはどうだ？」

「それは絶対にイヤ……って、さ!？」

「智希、そろそろ始まるぞ」

「織斑君！ それだけはやっちゃいけない！ 今のはまるで甲斐田君じゃないか！」

「ごめん夜竹さん、俺が間違ってた」

もしかしたら一夏には気楽に話せる人がいるといいのかもしれない。篠ノ之さんにしろオルコットにしろ鈴にしろ、一夏を意識している分どうしてもどこかしら構えてしまっている。

「おい智希、なんか言ってくれよ」

「今あたし谷本さんの気持ちの底から分かったかもしれない」

「いやあの人は別格だぞ。智希にあそこまでやられたら俺ならとつくに首吊ってる」

「それ言うとは生徒会長の人のタフさ加減も化け物クラスだよー」

だがこの路線では恋愛感情などとても無理だろうと思う。気安い関係かもしれないが、これでは男の友人である弾や数馬と何も変わらない。

あんなのと言ってしまっても全然失礼ではない男二人も、一夏の精神安定に一役買っただけだよ。

とはいえ一夏が女子と楽しく会話している姿を見れば篠ノ之さん達は大いに嫉妬してしまうだろう。

ないものねだりだと分かっているが、もう一人くらい男でISを動かせる人間が出てきてくれたりはしないだろうか。

「悪かったから！ 俺が悪かったから智希！」

「ごめんなさい、センスもないのにつまんないこと言ってほんとごめんなさい……」

「何言ってるの二人とも。ほら、始まるよ」

俺の両隣が泣きそうな顔になっている中、鈴と四組代表の模擬戦は始まった。

ここまでの試合で一番のベストゲームだった、と観戦した人間は興奮しながら言うだろう。

それくらい鈴と四組代表は白熱した試合を見せた。

午前中の試合を見ていないのでそちらはどうだったか分からないが、四組代表は一夏の試合で見せた高機動超高火力のスタイルで最初鈴を圧倒した。

青龍刀一本のみを持った鈴は四組代表に迫ろうとするも、相手にイグニッション・ブーストまで駆使されてはなかなか捕まえることができない。

自分でも同じくイグニッション・ブーストを発動させて追いかけるが、機動力に関しては四組代表の方が上だった。

お互いが専用機なのでスペック的にはおそらく互角だろう。ただ機体の性能は鈴が装甲寄り、四組代表が機動寄りになっていて、火力に関しては一撃の強さなら鈴、銃による手数込みだと四組代表という感じか。

ヒットアンドアウェイ、というよりは常に高速移動をしつつ四組代表はその両手に持った銃で鈴を狙う。対して鈴は基本速度で劣っているため追いかけて勝てないが、アリーナの中は閉じられた有限の空間だ。隅に追い詰めるように効率的に動いて相手を追い込もうとした。

だが鈴の青龍刀は他の機体のブレードよりも大きさがあり、ために振り回すとどうしてもモーションが大きくなる。追い込まれた四組代表はその隙をギリギリで見つけて、ほとんど前に突っ込み鈴の脇を抜けて回避するという勇氣ある姿勢で鈴の攻撃を躲した。このあたりは鈴のこれまでの試合から付け入ることができるとクラスメイト達も指摘している部分だ。

といっても四組代表にとってその行動は相当精神的に消耗する行

為なようで、四組代表といえど回避に手一杯で即反撃とまではいかないようだった。何しろ専用機とはいえ火力と機動に大きく傾けた分装甲が犠牲になっている。鈴の一撃の威力を考えれば一撃でももらった日には一気に形勢が逆転してしまう。以後も追い込まれた時は余計な色気など出さず迷わず回避に専念していた。

しばらくその状態が続き、埒が明かないと悟ったであろう鈴の方が動きを見せる。

空いていた左手にもう一本の青龍刀ではなく銃を出した。

これは攻撃用というよりはむしろ牽制用で、四組代表の移動する先に向かって放ちその動きを制限するためだ。

何しろ四組代表は自身の長所の反動として装甲が非常に薄い。鈴の銃の威力はそこまででもないが、それでも装甲の薄い四組代表には十分な脅威となってしまう。実際にたまたま当たった最初の数発でそれを実感したのだろう。牽制だと分かっているながらもそれをもらうわけにはいかず、四組代表はその高機動性に制限をかけられてしまった。

しかしそれでも四組代表の方に動揺はない。高速移動を続けながら今度は以前にも増して細かく動いて鈴の誘導射撃を外す。

鈴の意図は最初からはつきりしていて、相手を隅に追い込んで逃げ場をなくすことだ。であるからそれを意識してしまえばある程度鈴の動きが予想できたようで、相手を見てからではなく予想して先に動いている。それでも追い込まれた時はイグニッション・ブーストによって脱出していた。

力の鈴、技の四組代表。追いかける鈴、逃げる四組代表。

観客の目から見てこの構図ははつきりしていた。そして優勢の天秤は時間が経つにつれ四組代表の方に傾いている。

四組代表が高速移動で回避し続けているため、鈴はほとんど攻撃を当てられていない。青龍刀は言うに及ばず、銃の方の牽制が主目的なため、出した直後にたまたま数発当たった程度だ。

一方の四組代表も回避を優先しているため攻撃に力を注いでいないが、それでも鈴の死角から攻撃して何度か当てている。またおそら

く一夏の時ほどではないにせよ、銃の威力が相当にあるので鈴の装甲を十分に突破できているようだ。

このまま進めば四組代表、ただ鈴も何度か相手を追い詰めている。その時に青龍刀を当てた日にはこれまでの試合のように一気に試合は動くだろう。四組代表としても回避を何よりも優先させなければならぬ状況で、とても余裕があるようには見えない。

目を離れた隙に勝負が決まってしまうような展開だった。そして試合がついに動く。

何度目か分からないが鈴が四組代表を隅に追い詰め、四組代表がイグニッション・ブーストで緊急回避をする。

その時移動中の四組代表の体が不自然に吹っ飛ばされた。

観客は何が起こったか分からなかっただろう。だが俺達は知っている。隣で鈴を撮影中の夜竹さんを見ると、視線はこちらに向けなかったが大きく頷いた。一夏はこれかと呟いた。鈴の固有武装、両肩に浮いている装甲から繰り出される目には見えない砲撃である。オルコットは鈴と喧嘩した際このおそらく衝撃砲と呼ばれる砲撃によって形勢をひっくり返され負けてしまっていた。

受けた本人にも理解不能なようで、だが四組代表は驚愕の表情を浮かべながらも何とか体勢を整えようとする。もちろんこの機会を窺っていた鈴がそんな暇を与えてくるはずがない。イグニッション・ブーストで一気に肉薄し、右手の青龍刀を思い切り振り下ろす。四組代表は回避しようとするも体勢の崩れた状態ではままならず、直撃こそ避けたが初めて青龍刀の一撃をもらってしまった。

ついに鈴のターンがやってきた、と誰もが思っただろう。

本人もここで勝負を決めるとばかりに逃げる四組代表を追う。

そして今に鈴が迫るといふその時、何を思ったか四組代表は右手に持った銃を鈴の顔に向かって投げつけた。

至近距離というわけでもなかったので投げられた銃は鈴の青龍刀で軽く払い飛ばされるが、それは同時に鈴の意識と隙を一瞬にしても奪っていた。

鈴もすぐに気づくもその時には四組代表はイグニッション・ブース

トで飛び上がり、窮地を脱してしまっていた。

こうして鈴は仕留め切れず、四組代表は大ダメージと銃を一つ失う痛み分けとなったが、もちろんまだ試合は続いている。

銃を一つ失った四組代表は完全に安全重視に切り替える。撃っては動き、動いては撃つというヒットアンドアウェイで鈴を削り切る方針にしたようだ。無駄弾を撃てなくなったというのもあるだろう。

鈴の方はといえば、さっきの場は痛み分けとはいえ得たものも多い。ついに当てたことよって四組代表の装甲を理解しただろうし、相手の攻撃力が半減している。そして何より重要なのは自身の衝撃砲によつて相手が完全に恐れを抱いているということだ。

四組代表も動きながら考えて、怪しいのは両肩だと予想はつけているだろう。だが何が起こったか分からない以上、鈴から目を離すことができなくなった。イグニッション・ブースト中にやられてしまったので、一気に距離を取ろうとするのは逆に的になってしまふということを意味する。それはつまり至近距離での緊急脱出を事実上封じられたことになった。

こうなると精神的な優位性は鈴にある。

一見四組代表が安全第一になっていいるため再び膠着しそうだが、もう四組代表は追い込まれることさえ許されない。

そして鈴は試合開始から一貫して愚直とも言えるほど相手を追い詰めることに終始していて、時間が経てば経つほど相手の動きに慣れ効果が上がっていつている。もはや一度でも追い込まれてしまったら勝負がつくと思えるところまできていた。

だが四組代表も諦めたわけではない。一夏との試合でパニックを起こして勝ちを失ったという自覚があるのだろう。この試合の四組代表は終始集中力を切らせることはなかった。

だが後から考えれば四組代表はその代わりに自身の感情を無視してしまっていたと言えそうだ。

そこから先、傍目には再び四組代表がペースを握ったようだった。ヒットアンドアウェイに切り替えて確実な射撃を行った結果、鈴に対して攻撃が当たるようになり始める。

対する鈴は相手が安全重視になっているため攻撃が全く当たらない。それどころか追い込むことすらままならないように見えた。

観客からすればハラハラドキドキ手に汗握る試合だったことだろう。形勢が二転三転する白熱した展開に、どちらかを応援するというわけでもなく純粋に試合そのものを楽しんで見ているようだった。

IS学園の生徒的には自分の戦闘スタイルに近い方へ気持ちを見せて見ているようで、声を聞く限りクラスなど関係なく歓声や悲鳴が上がっている。

だが俺達だけは違う。あれだけ騒いでいた夜竹さんは声を一切発することなく撮影に集中していたし、一夏も何も言わず真剣な顔でじっと鈴を眺めている。もちろん俺もそうだ。

これまでの試合はスポーツ観戦をするように喋りながら観ていたものだが、今回に限ってはそれがなかった。別に人数がいなかったからではなく、そうする必要がなかったからだ。

俺達はある一定の視点から鈴を見ていて、試合が進むに連れてそれが正しいことを確認していた。

そして試合は唐突に終わる。

四組代表がいつものように攻撃をしようとした時、またも不自然に吹っ飛ばされたのだ。

今度の鈴は考える隙さえ与えないとばかりに即イグニッション・ブーストで迫り、青龍刀のめった打ちを浴びせる。それで装甲の薄い四組代表は地面に落ちあっけなく沈んだ。

観客が悲鳴や歓声を上げる暇もない一瞬の出来事だった。

「終わったか」

一夏が一言発した間はずいぶん観客が我に返るのと同じくらいだったのだろう。すぐに地を揺るがすような拍手と歓声が湧き上がる。

それは一夏に向けられたような黄色いものではなく、すばらしい試合を見せてもらったという鈴と四組代表への賞賛だった。

そして鈴にもそれは伝わったようで、鈴は少しだけ顔を崩し、軽く手を振って待機室へと戻って行った。

「ねえねえ甲斐田君、最後のあれは四組の人が罠に嵌ったってことでもいいの?」

「そうだね。今までなかなか当たらなかった攻撃が急に当たり始めるようになったんだ。鈴は自分を的にして四組代表の動きを自分の衝撃砲が当たるところに誘導してたんだろうね」

「午前中の三組の人といい、うまくいったと思ったら落とし穴とか最悪だ」

「でもおかげで一番の不安要素をこの目で見る事ができた。しかも二回もだ。ねえ一夏?」

「うーん……別にすごくないとは言わないけど……やっぱり智希の言う通りなんだろうな」

一夏に対して初見殺しをやるうとした四組代表が同じことをやられてしまうというのは実に皮肉な話だ。そして四組代表は自分がやられた場合の対処方法を考慮していなかった。せつかく初見の際はかろうじてでも回避することができたというのに、その後もこれまでと同じ感覚で戦ってしまっただけではやられても仕方がないと言えるだろう。手持ちのカードが増えたのならそれに合わせて戦術も変わってくるのだ。イグニッション・ブーストを使わなければそれで大丈夫ということではない。

「でも大収穫だ。鈴の衝撃砲を見られたどころかヒント満載の試合だった」

「ねえ織斑君、あたしは甲斐田君の説明を聞いてなかったら絶望的な気持ちになるところだったんだけど、やっぱりそんな感じ?」

「んー、どっちかって言うとうち安心したかな」

「安心して、甲斐田君の言うことが合ってたから?」

「それは最初から信じてたから安心するも何もないけど、俺としては鈴がやっぱり鈴だったことへの安心だな」

「君らってそればっかだね」

確かに俺としても鈴はやはり鈴だったを多用し過ぎていたかもしれない。

29. 世の中には人の邪魔をすることが生きがいの神様が絶対にいると思う。

世の中には人の邪魔をすることが生きがいの神様が絶対にいると思う。

寮に戻ってクラスメイト達と合流しようとアリーナを出たところで、俺の名前を呼ぶ声がした。

今度は何だと思いい声のした方向を見れば、手を振りながら金髪の女生徒が駆け寄ってくる。誰かと思えばそばかす顔のハミルトン、二組の代表にして鈴のルームメイトだ。

「よかった！ 間に合った……」

「どうしたのハミルトンさん？」

「うん、甲斐田君にちよつと用があつて」

間違ひなく鈴絡みだろうが、一夏ではなく俺か。

「いいけど何？」

「えつと、ここじゃなくて別のところまで来て欲しくて……」

「なるほど、じゃあ行こうか一夏」

「あつ、甲斐田君だけで」

「僕だけ？」

「となるともう答えは一つしかない。

「ふーん、じゃあ先に帰ってるぞ」

「僕もすぐに戻るって伝えておいて」

「了解」

「ちよつと待った！ それはダメだ！」

よく分からないところで夜竹さんが割って入ってきた。

「甲斐田君が行っちゃたらあたし織斑君と二人きりになるじゃないか！ あたしはまだ命が惜しいんだ！」

「おい俺は殺人鬼か！」

「そうじゃなくて、戻った時に命がないって言ってるの！ ただでさえ今さっきのでレポート提出が義務づけられてるのに、二人で歩いて戻ったりしたら確実に命の保証がない！」

「何それ怖いんだけど」

篠ノ之さん達か。

確かにあっさり夜竹さん一人で行かせるのを許したなど思ったが、裏でそんな取り決めをしていたとは。

この分ではレポートを読んだ上で俺から裏付けまで取る気だろう。最近になって連中は一夏と離れて行動できるところまで成長したのかと思っていたが、どうやら別な方向に進化してしまっているようだ。裏では恐怖政治が敷かれている。

まさか俺の独裁政権であるかのように見せかけて、実は一部の特権階級による寡頭体制だったというオチではあるまいな。

「夜竹さん、僕からもきちんと言っておくよ」

「やだよ！ あたしは行かないよ！ どうせ金髪にネチネチ言われた挙句ポニーテールからぶった切られるだけなんだし！」

「それ全然伏せてないから」

参った。夜竹さんが完全に拗ねてしまった。

撮影機材を抱えたまま地面に座り込みそうな勢いだ。ちなみにこの人は俺達が持とうかと言っても素人は触るなど自分で持っていた。

「か、甲斐田君……」

「困ったな」

「それなら俺一人で行けばいいのか？」

「それはそれで今度は一夏の身に危険がある。一般の人が乗り越えて突っ込んで来るかもしれないし、一夏が一人で行動するとか今までなかったから何が起こるか分からない」

「え、俺そこまで信用ないの？」

「一夏じゃなくて、一夏の周囲がって話だよ。仕方ない、少しの間一夏達はここで待ってもらおうか。そんなにかからないよね？」

「た、多分。一言だけ言って言ってたから」

「オーケー。じゃあちよつと行ってくる」

「どうやらお困りのようだね!」

夜竹さんがこの状況も実は一夏と二人きりであることに気づく前に行ってしまおうとしたら、後ろからよく分からない声がかかった。

振り返ると、よく見知ったというかさつき助けてもらった警備の人が、得意げな顔で腕を組んで仁王立ちしている。

「えっ、あたし逮捕されちゃうの!? まだ何もしてないのに!」

「あら、逮捕されたい?」

「滅相もございません!」

「あの、これ以上ややこしいことはご免被りたいんですが」

「あ、そんなこと言っちゃやう? せっかく織斑君を車で寮まで送ってあげようと思ったのに」

「マジで!」

「まじまじ」

それは非常に助かる。一夏も夜竹さんも身の安全が保証される。

「よかったね夜竹さん。さすがにこれなら文句は言われなと思うよ」

「だ、大丈夫かな?」

「別に一人で歩いて帰ってもいいけど」

「……乗る。機材を後ろに置いて助手席ならきつと大丈夫に違いない。大丈夫であって欲しい」

最後が少し弱気だが、とりあえず問題はクリアされた。

これで俺も心置きなく鈴と会話をできる。

「あ、俺はいいとしても智希はどうなんだ? この後智希一人で歩いて大丈夫なのか?」

「だって甲斐田君だよ? 試合に出てるわけでもないし、寄ってくる人なんかいないって」

「いや、そういうことじゃない。智希を一人にしたら何やらかすか分からないだろ。見張つとかないと」

「確かにそれもそうだね」

「何この人達納得してるの」

「嘘嘘。ちゃんと甲斐田君にはあたしがついてるから。車が戻ってきたら甲斐田君も寮まで送ってあげるよ」

一夏とノリを合わせて俺をからかったのは気に食わないが、どうやら俺と一夏を期間中は警護することに決まったのだろう。

今さらという気がしないでもないが、俺や一夏が自分から危険に突っ込んでいくようではそうせざるを得ないというところか。一夏のこととはともかく俺としては行動の自由を奪われたようであり嬉しくない。さすがにさつきは自分でも軽率だったと反省しよう。

「ごめん、だいぶ待たせたね。行こうか」

「ううん。こっちよ」

一夏達が警備の車に乗るのを確認して、俺はハミルトンと歩き出した。

警備の人は中まではついてこず、出口で待っていてくれるようだ。

「智希、明日の試合が終わったら一夏にきちんと謝るわ」

開口一番、鈴はそう言った。

真っ直ぐに俺を見て、何の迷いもない目だ。鈴は自分の中で気持ちの整理をつけることができたのだろうか。

「ふーん」

「……もちろん一夏だけじゃないわ。一組のイギリスの代表候補生にも謝るし、クラスの人とか千冬さんとか迷惑かけた人達にちゃんと謝って回る」

自分が何をしたかは俺が煽った時点ではつきり自覚している。その時はとても受け止められないという感じだったが、ここに来て自分の力でそれができたのか。はたまた。

「それは鈴の問題だよ。鈴がそう決めたのなら僕がどうこう言うことじゃない」

「そうじゃなくて、智希にあたしの気持ちを伝えておきたかったの。わざわざあそこまでして言ってくれたんだから、こっちもちゃんと返しておくべきだと思った」

「あそこまでって僕何したっけ?」

「先生に聞いたわよ。千冬さんまで騙してあたしのところに来たそうじゃない。あたしが逃げて会わないからってそこまでされたら、さすがにあたしだって大人気なかったって反省するし感謝もするわよ」
煽りに行ったのに感謝されるとはこれいかに。

もちろん鈴が真っ直ぐな人間だという証である。

「別に僕は鈴に感謝されようとか思ってないし、何かを要求するつもりもないけどね」

「あたしがしたいからしてるだけよ。まず何より最初に智希に言うべきだと思った。それだけ」

この前の不安そうな表情はどこへやら、今の鈴は完全に元通りだ。試合で三連勝して自信を取り戻したか。

人間心に余裕ができればきちんと考えて自分と向き合うことができるのだろう。

「別に僕自身は何かされたってわけでもないし、鈴を恨んでるとか特別何かを思うことはないよ」

「そ、そう。それはよかった」

本当は思い切り恨んでいるが。専用機持ちどころか代表候補生でもないハミルトンなら普通に勝てたのに余計なことをしてくれたと。

だが恨み事は言わない。別に鈴のためを思っただけではなく、今後のためだ。戦後処理を考えると、ここで俺自身が余計な波風を立ててしまうのは愚策もいところである。

それは今このタイミングで鈴が俺のところに来たという事実からもはつきりしている。

「そうだね、それなら今僕から言えることがあるとすれば、気持ちが悪かったのなら今すぐにも一夏のところを謝りに行けばってことくらいかな」

「はあ!? そ、そんなことできるわけじゃない! 明日の試合もあるって言うのに!」

「どうして? 謝るだけなら一瞬だよ? さすがに一夏だってそれくらいの時間は割いてくれるよ」

「そ、そうかもしれないけど……でも……」

振ってみたら案の定、鈴は動揺し始めた。明らかに今俺に言われて初めて気づいたという様子だ。これはもう間違いないだろう。俺や一夏の知っている鈴であれば気がつかないはずはないし、一度こうと決めたら迷うこともない。

「何言ってるんだ。今謝っちゃえば心置きなく明日の試合をやれるじゃない。このままの状態は鈴だって嫌でしょ？　もう気持ちははつきりしてるんだから後は行動するのみだ。そしてそれは鈴の十八番だと僕は思ってるけど」

「で、でも、明日の試合があるのにあんなこと言っちゃったらおかしくなるというか……そうだ！　智希はあたしの気持ち分かってるんですよ！　だったらこういうのは試合の後にすべきだって理解できるわよね!」

「ああ、もしかして鈴は明日の試合で一夏に勝てると思ってるの?」

完全に思考の外にあるという風情で、鈴は俺に向かってぽかんと口を開けた。

「え?」

「別に鈴の思ったことが現実になるだけなんだから、今謝るのも後で謝るのも一緒じゃないかな」

「智希……あたしあんたの言ってることの意味が分かんない」

「意味も何もそのままだよ。鈴の危機感は合ってたってこと。いや、むしろ今謝っておいた方が試合はチャレンジャー精神でやる気出るんじゃない?」

「智希ごめん……本当に意味分かんない……」

鈴は呆然とした表情で俺を見る。

視界の端でハミルトンまでが理解できないという顔をしていた。

「鈴の試合は全部見たけどさ、勝ったとはいえあれで自信つけちゃった?　だとしたらきつとそれは過信だね」

「それはどこをどう考えてもこっちのセリフなんだけど。あんなお笑いみたいな試合ばつかで、どうやったらあたしに勝てるか思えるの?　確かに一夏らしいとは思うけど、実力差があり過ぎる相手には

ちよつとしたラッキーごときじゃ勝てるわけないのよ？ それにあ
たしがそれを許すと思うの？」

「なるほど、確かに今なら一夏に勝てると思つて喧嘩を売つたんだか
ら、勝てると思つてるのは当然の話か」

「はあ!？」

一気に鈴のボルテージが上昇する。

精神的に優位だという気持ちがあるからだろう。織斑先生ほどは
怖くない。やはり俺はあの天敵に対して苦手意識を持っているよう
だ。

「違うの？ だから喧嘩を売つたんでしょ？」

「そんなわけないじゃない！ あんた、あたしの気持ちがあつてる
んじゃないの!？」

「嫉妬だよ」

「……そうよ！ 一夏の反則レベルの才能に対してよ！ 何よあれ！

あんなのありえないんだけどー」

そしてついに鈴は本心を吐き出した。ハミルトンが驚愕の表情を
浮かべている。

「じゃあどうしてその機会を二週間後のリーグマッチにしたの？ ど
うしてその場で喧嘩を売らなかつたの？ オルコットさんの時みた
いに、一夏にちよつと面貸せよつて言えればいいじゃないか。一夏だつ
て専用機持ちだ。場所さえあれば勝負はできるんだから」

「え?？」

鈴が固まる。

「大勢の人の前で倒してみせるといふ見せしめ？ 自分だけじゃなく
て他人にも認めさせたいつていう虚栄心？ それともせめて準備期
間ぐらいは与えてやろうといふ哀れみ?？」

「え?？ え?？」

鈴が頭を抱えて混乱を始める。

今の今まで考えたこともない俺の言葉が鈴の頭の中を蹂躪してい
る。

何しろ鈴は自分の行動を衝動による合理性のないものだと考えて

いただろうから。

「か、甲斐田君……」

「そういえばハミルトンさんも関係者だね。だったら分かるんじゃない？ あつという間に国際問題とか、いくらなんでも早過ぎると思わなかった？」

思い当たることがあつたであろうハミルトンが息を呑む。

あれは俺が工作する暇もないほどのスピードだった。

「と、智希……教えて。どういうこと？ あたしのこの気持ちは何なの？」

「外野が余計なことをしたつてだけで、鈴の気持ちは本物だよ。一夏に嫉妬の気持ちを抱いたのも、耐えられないから喧嘩を売ろうと思つたのも、それは鈴の本心だ」

「じゃあ智希の言つたことは何なの？」

「鈴の気持ちから出た行動は、全部レールの上に乗つたものだったという事。意味分かるよね？」

「……そういうこと」

鈴は下を向いて数秒考えた後、顔を挙げて俺を見た。その瞳には強い怒りが込められている。

「ごめん智希！ この話はまた後で！」

「鈴、間違えるな」

駆け出そうとして、鈴はこちらを振り返る。

「これは全部、鈴の気持ちに則つた話だ。起こつたことはどうあれ、鈴の気持ちに変わりはない。そしてそれはきつとけじめをつけなければならぬことだ」

「……そうね。智希の言う通りだと思うわ。どのみちあたしは一夏に伝えなければならぬ。だけどね」

そこで鈴は一度言葉を切る。

目を閉じて上を向き、きつと何事かを想像して、それから俺を見る。

「それでも、今のあたしが一夏に負けるとは全然思わない」

鈴は強烈な意志を俺に残して走って行つた。

「甲斐田君、お願いがあるんだけど、いい？」

「何？」

「リーグマッチが終わったら、あたしの国の人と会ってもらえないかな？」

「いいよ。どのみち一度は話しておく必要があるし」

「ありがとう」

俺の視線を受けて、ハミルトンが嬉しそうに微笑んだ。

早くてもリーグマッチが終わった後だろう、と考えていたらそれはすぐにやって来た。

天井にあるスピーカーから織斑先生の声が聞こえる。声の主は俺の名前を呼んでいた。とうに日も暮れた時間なのに来客だと。

「甲斐田君……まだ何かやってたの？」

「いったいどこまで手を広げるつもりですか？」

「もうわたくしごときの頭では把握しきれないスケールですわ……」

鷹月さんが、四十院さんが、オルコットまで、恒例の信じられないものを見るような目になっている。

俺としても自分から踏み込んでしまった以上は仕方ない。

試合前にやるか試合後にやるか迷ったのだが、結果が出た後では有耶無耶にされてしまうかもしれないと思い試合前に動くことを俺は選んだ。

鈴の方からやって来たという事実は向こうは既に勝利を確信し、次を見ているということの意味する。そして俺はそこに対話の可能性を見たという話だ。

「勝てるならこの際一気に片を付けたいと思うのは贅沢かな？」

「お気持ちには分らないでもありませんが……」

「それは今しなければならぬことかって話よね。何したのかは知らないけれど」

「私としてはまず何より勝利を得ることが肝要だと思いますが……」

それは俺も思った。勝つてもいないうちから先へ先へと考えていては、鬼が笑いながら狸の皮を剥ぎ取って持って行ってしまいかもし

れない。

それでも向こうからやって来て、しかもそれが俺達にとって悪い未来を示していないとあれば、泥沼に突っ込むよりも今のうちに手打ちをしておきたいと考えてしまうのもまた人情だ。

戦争をするメリットはややこしい問題を一気に片付けられることだと言ったのは誰だったか。

「ま、やっちゃったものは仕方ない。しばらく抜けるね」

「やっちゃったんだ……」

「もう少し熟慮してから行動を……」

「甲斐田さんは意識して慎重さを持った方がよいのではないかと……」

恨みがましい指揮班の声を背にしながら、俺は寮の会議室を後にした。

ロビーに出ると織斑先生が待っていた。

そして隣にもう一人、目つきの鋭い女性が立っている。スーツではあるがその綺麗な立ち姿から軍人系の人だろう。

「来たか。紹介しよう。中国の候補生管理官、楊麗々（ヤン レイレイ）だ」

「甲斐田智希です」

「初めまして。楊麗々です。こんな時間に押しかけて申し訳ありません」

その切れ味鋭そうな見た目に反して、意外と声は柔らかかった。手を差し出してきたので握り返すと、変な力はこもっていない。敵意がないことでも示したいのだろうか。

「では奥の個室で話してもらおうとしようか」

「寮に個室なんかあったんですね」

「通称説教部屋とも言う」

「もしかして僕がその対象ですか？」

「お前が望むならこの後特別に時間を設けよう。何しろ罪には事欠かないからな」

「謹んで遠慮させていただきます」

危うい会話をしながらも俺は織斑先生の後をついていく。

しかし話をしてもらうか。

当事者同士で話せということなのだろうが、俺としては変に介入されるよりはありがたい。

その説教部屋は寮一階の奥にあった。

今まで知らなかったのも当然だ。この近くに宿直の先生の部屋があるので、俺としても用もないのに近寄りたくはない。何しろ織斑先生が高い確率で存在しているのだから。

部屋の中は説教部屋と呼ばれるだけあって殺風景だった。机一つに椅子二つ。説教部屋と言うよりは取調室だろうか。

「では今から三十分だ。悪いが不意のしかも非常識な時間の来客に対して茶を出すつもりはない」

「お構いなく」

無表情に中国の管理官を見て、織斑先生は部屋を出て行った。

意外と俺に気を遣ってくれているのだろうか。わざわざ力関係を見せていくとは。

「さて、時間もないので始めさせてもらおう。改めて、この忙しい中夜の急な訪問に伝えてくれたことに感謝する」

「いえ、そのうち来るだろうなと思っていたので。ただ今日の今日とは思いませんでした」

「ふむ、聞いていた通り話はできそうだな。やはり凰鈴音を通じたこちらへのメッセージという話でいいのだな？」

「はい。僕としても昼に鈴が来てくれたことで穩便に済ませることができそうだと感じたので」

まずお互いに友好的であろうという姿勢を見せたことで部屋の空気が弛緩する。

もちろんお互いの言い分はあるのだろうけれど。

「そうか。ではまずこちらから要望を述べさせてもらおう。明日の試合で凰に勝たせてもらうことはできないだろうか」

「八百長を持ちかけられるとはさすがにびっくりです。でもわざわざ

そんなことを言う必要はあるんですか？ 誰の目にも実力差は歴然としていると思いませんか？」

「君が親切心を発揮していなければ今も私はそう考えていただろう。だからこそ今後を見据えて凰を君のところへ送ったのだからな。しかし黙っていればいいのにそれこそわざわざこちらへ教えてくれた以上は、楽観的に考えるようなことなどもうない」

なるほど親切心か。確かに向こうからすれば何も知らずに本番で目論見が全部ひっくり返るところだったのだから、相当な冷や汗をかいたのかもしれない。

「そうですね。では返答として当然お断りさせていただきます。こちらとしても勝つつもりでここまで準備を進めてきましたし、そもそも貸しのある相手に対して譲歩する理由がありません」

「そうか。了解した」
「あっさりですね」

「駄目もとの話だ。こちらに対して何か対価となる要求でもあればと思ったが、ないのであれば仕方ない。時間もないので不毛な交渉を続けるつもりはない」

確かに無駄に引つ張られても困る話だ。俺も相手も話したいのはそういうことではないし。

「それならば本題、今後の話をしたいですか？」
「勿論だ」

「ではお聞きします。あなたは、いや中国は今後僕や一夏に対して敵対する意思を持つつもりがあるのでしょうか？」

「そのようなことは一切ない。むしろ友好的に接してもらいたいと考えている」

「じゃあなんでこんなことしたんですか？」

鈴を本人が気がつかないまま煽つて、無理矢理割り込んで来て一夏に喧嘩を売るなど何か恨みでもあるのかと普通は思う。あるいは俺達男自体が気に入らない女性上位主義者か。

「凰のためにはやむを得なかった」

「そう言うと思ってました。一夏への依存心が酷すぎるからよくな

「いって話でいいですか？」

「ほう、一から説明する必要がないというのは楽でいいな。君の言う通りだ。知つての通り鳳は自身の動機をほとんど織斑君へと傾けている。もはや執念の域にある」

「離れてくれれば少しは薄れるかと思つたんですけどね」

「むしろ距離が離れたことによつてより強固なものになつたのだろうと私は考えている」

やはり俺に限らずあれはどう考えても普通じゃないと思うのだろう。

「だが織斑君が一般人ならそれでもよかつた。何しろあの織斑千冬の実弟だ。我々としても快く日本へと送り出し、見事捕まえて帰つてきてくれることを期待していた」

「やつぱり狂つちやいましたか。鈴の人生が」

「その通りだ。ISを起動させた男性が織斑千冬の実弟だと分かつた時点で、鳳が今のようになつてしまうことは予想していた。織斑千冬を見てきた我々からすれば、鳳が感じたことはごく自然な感情なのだ」

「ああ、なるほど。どうして一夏の実力を知る前から動いていたんだろうか？ 疑問だつたんですが、千冬さんと重ねて考えていたんですね」

「……やはり君は本当に目ざといな。であれば包み隠さず話そう。織斑君の存在が発覚した時点で、我々は鳳を日本へと送るのを中止しようとして最初は考えた。鳳は同年代の中でもその実力は抜きん出ている。潰れると分かつていてみすみす見過ごすような真似はできないからな。しかし本人の懇願もあり当初の予定通り鳳を日本のIS学園へと進ませることに決定したのだ」

聞きながら、建前でも綺麗な会話というのはできるものだなと俺は感心した。いや建前だからこそか。

包み隠さずも何も鈴を日本へ送らないとかそんなことあるわけがない。

男性IS操縦者二人と友人関係など、どう考えてもフル活用したく

なる人材だ。中国はいかに鈴を有効活用すべきか一生懸命考えたに決まっている。

「だからせめて専用機をあげて入学を遅らせてまで特訓させたというわけですか」

「正確には凰に箔をつけてやりたかった。織斑一夏君の隣に立つにふさわしい人間として送り出してあげたかったのだ。だが君も知つての通り逆にそれが凰を刺激してしまったのだから、我々としても完全な失敗であり凰には本当に申し訳ないと思っている」

確かに鈴に専用機を与えていなければ一夏には今よりも勝ち目がなかったのだから、中国は大失敗をしたと言えるだろう。

またこの際新型機のお披露目をしようなどと色気を出し過ぎた結果とも言えそうだ。

「それについては僕も謝らなければなりません。そんなあつという間に鈴が爆発するとは夢にも思っていなかったんですから。たった三日間とはいえ表面上はうまく行っていたので、僕は完全に油断していました」

「君が気に病むことは何もない。何しろ我々も予想していなかった急な速さだったのだからな。むしろその際にリーグマツチのことを口にしてしまい凰の意識をそこに向けてしまったのはこちらだ。責められるべき非は我々にある」

俺語訳。

(とうにかさあ、俺が気づかないうちにやるとかお前ら一晩で一気に入煽つたろ。やるならもうちよつと自然にやれよ)

(わりーわりー。ちよつと火をつけたら大爆発しちゃった)

白々しい会話万歳。

「でもだからってその感情を爆発させる機会はリーグマツチでなくともいいんじゃないですか？　いくら鈴の視界が狭くなっていたからと言って」

「それについては我々が欲をかいってしまったと素直に非を認め謝罪する。凰の入学が間に合わなかった為リーグマツチの事は諦めていたのだが、思わぬところで転がってきたためつい飛びついてしまった。

君がどこまで理解しているかは分からないが、リーグマッチの価値を考えれば参加できるとなれば少々無理をしてもと思うのは当然のことなのだ。別にこれは我々の国に限ったことではない」

この言い回しは実に参考になる。

俺の中では、中国は鈴の態度を見て今でなければ一夏には勝てないと判断し無理矢理割って入ったとしか思えない。

だがこの人は自らの罪を認めているようで、実は偶然だったと強調している。さらに一般論へと話を拡大し焦点をぼやけさせようとしている。

相手をけむに巻く手段として今度俺も使ってみよう。

「うーん、どのみち鈴が一夏に喧嘩を売るのは間違いないことですし、起こってしまった以上はもうどうしようもありませんね」

「そうだな。遅かれ早かれいずれ起きた出来事だ。大切なのはどう対処し、これからどうしていくかだと私は思う」

ようやく公的な認識の合意を取ることができた。

そして次からがお互い一番気にしていること。

「分かりました。多少の疑問は残りますが時間もないのでもういいです。それよりも大事なのは鈴のことです。まだ友人としてですが、一夏は鈴のことをとても心配しています。僕だってもちろんそうです。大切な友人ですから。リーグマッチが終わったら一夏も交えてきちんと話をしようと思いますが、あなた方も鈴の心のケアをしていただけませんか？」

「それは君に言われるまでもない話だな。鳳はわが国の未来を担う非常に優秀な人材だ。こんなことで失ってしまうなど絶対にあってはならない。わが祖国の名誉にかけて、これからも全力で鳳を支えて行くことははつきりと明言しておきたい」

よかったな鈴、今後も期待してくれるそうだな。

「それを聞いて安心しました。では未来の話として、明日の結果がどうあれ中国は鈴を通じて僕達と友好的な関係を築いて行ってもらえるということでもいいでしょうか？」

「それは願ってもない話だ。今回の件で我々は君達の心証が悪くなる

ことを覚悟していた。是非ともその方向でいてもらえると嬉しい」

結局のところ、俺が言いたかったのはこの一言である。

中国側にとって、これは最悪の事態がなくなったことを意味する。最悪の事態とは鈴が負けた上全てを明らかにされて世界から非難され、また鈴ではなく自分達が俺と一夏の恨みを買うことだ。そのため彼らは決して表に出ようとせず、全て鈴個人の問題として通そうとしてきた。

だが俺は黒幕としての中国の存在を看破してしまっている。その上鈴に勝つ算段まで立てているとあれば、気がつかないうちに俺に好き勝手されてしまう可能性があった。

それを親切にもわざわざ教えて手を差し伸べるところまでしたのだから、感謝してこれ以上余計なこととはするなよと俺は釘を差したというわけだ。

おそらく、中国はここまで何もかもうまく行っていなかった。

鈴が俺達の友人であることを把握したときから計画は始まっていたのだろう。やってきたことを見るに、鈴は俺や一夏のISにおける指導的役割を期待されていたようだ。そしてそこから影響力を行使するつもりだったに違いない。ただ一夏と同じクラスでは本人は嬉しいだろうが、中国としては鈴が織斑姉弟の影に埋もれてしまうのでよろしくない。だからあえて別のクラスに入れてもらい、鈴は鈴でIS学園内での立場を確立させようとした。クラス代表となりリーグマッチにおいて内外に鈴の実力を見せつけ、もし一夏が出てくるようならついでに力関係を明確にしておくつもりだったのだろう。

ところが機体の問題か鈴の問題か新型機が間に合わず、せつかく鈴を二組に入れたものの入学自体が遅れてリーグマッチの機会を失う。やっと送り出せたと思えば今度は一夏が規格外の才能を発揮しそうで、鈴がフラストレーションとも相まってパニックを起こしかけている。

六月の個人戦まで待っていては一夏の才能が花開いて何もかも手遅れになると恐れを抱き、今しかないと強引な手段に出たというところだろうか。

しかしリスクを冒した成果は上々で、鈴は自信を取り戻し、新型機のお披露目もできた。一夏の試合を見てこれなら勝てると確信し、ならば先を見てまずは俺の機嫌でも取っておこうと鈴を俺のところへ送った。

ところが俺が、全部分かつてますよははは、あと鈴にも勝つんで残念でしたね、とメッセージを送ったものだから、大慌てでここまでやってきたのだろう。アポイント無しで夜に寮まで押しかけるというのはどう考えても余裕のある行動ではない。

そして一方俺は中国の責任を一切追求せず、あくまで鈴個人の問題だということを通して理解を示してみせた。

これでもし甲斐田は実は理解していないとか弱気だなどと勘違いをして調子に乗るようなら俺も容赦はしない。織斑先生や今回の被害者ハミルトンとカナダを巻き込んで、それから鈴も煽って全部表に引っ張り出してやる。

ここまで俺が向こうの矛盾や弱みを一切追求しなかった意味が分からないようであれば、それはもう話にならない。

そうだ、話が終わったら織斑先生に一言伝えてその方向からも釘を差しておいてもらおう。

「あ、でもそちらに対して貸し一つっていうのは変わりませんからね。何かあって困ったら遠慮なく引っ張り出させてもらいますので」

「これは手厳しいな。なんでもとは言えないが、可能な範囲においてはできる限り協力させてもらおう。何かある時は風を通して言ってもらえればいい」

俺達は立ち上がり、笑顔で握手を交わす。

果たしてこの人にとって俺は友好関係を築いてもいいと思えるような利用価値のある相手だろうか、それともただの世間知らずな学生だろうか。

世間的な話として、俺自身にISを動かせる男以上の意味はない。今のところ。

価値があるのは一夏であり、これから一夏が成し遂げていくであろう事柄だ。

「そう言えば男性IS操縦士四人のうち君だけ所属国が決まってい
いな。我が国はどうだろう。凰という友人もいるし悪くない話だ
と思うが」

「それは僕が決めることではないので。それにデータが欲しいだけ
あればIS委員会のもので十分じゃないでしょうか。調査内容につ
いても口を出せるみたいですし」

「そういう意味ではない。他の国はどうだか知らないが、我が国は自
分の価値を自分で創造することのできる人間が求められている。君
にはいい環境だと個人的には思う」

「外から見ると中国って実力主義はいいんですけどそれが極端とい
うか、自信のない人間にはちよつと尻込みする国ですね」

「それは我が国の一面ではあるが全てではない。できれば一度その目
で見てもらいたものだな」

「そうですね、生きているうちには行くこともあるでしょう」

お世辞をもらえるようであれば最初としては上出来か。

「やはり自分の生まれた国の方がいいものか？」

「日本は一夏が所属しているのもうないでしょうけどね」

「君の生まれはアメリカだと聞いているぞ。いや、君にとっての祖国
は日本なのかもしれないが」

「ああ、生まれつてことです。小学生までの話ですし、友人関係なん
かを考えても気持ち的には日本ですね」

「そうか。これは個人的な感情だが、過去の大国よりも我が国の方が
あらゆる面で優っていると断言しておきたい。ことIS関係において
は特にだ。それにあの国は今や男性が暮らすには厳しい国だろう。
まして君のような自我の強い人間にとってはなおさらだ」

「そういうのはIS委員会に言ってください。僕はどの国がいいかと
聞かれたことすらないんですから」

「それは自己主張していくべき事柄ではないだろうか」

「いやー、あの人達絶対決める気ないですよ」

話しながら部屋を出ると、織斑先生が宿直室から出てきた。

相変わず何を考えているか読めない無表情で俺と中国の管理官

を見る。

「終わったようだな。次は絶対にならないと思え」

「心得ております」

「ならいい。帰れ」

「はい。甲斐田君、今日はありがとう」

「こちらこそ」

一礼して、中国の管理官は颯爽と帰って行った。

「さて智希」

「ここで名前呼びですか」

「正直お前が気づくとは思わなかった。なぜ分かった？」

「だって鈴らしくないじゃないですか」

「なるほどな」

無表情が崩れて、人間らしい笑顔が出てくる。

周囲に生徒がいないこともあり、今は織斑先生ではなく千冬さんか。

「どうやらお前もあの場所で人間らしい心を得ることができたようだな」

「それは千冬さんにだけは言われなくなかった」

どうして人間気が緩むとつい失言をしてしまうのだろう。

間髪入れず俺の頭に衝撃が響き渡る。

出席簿より痛みが頭の芯に來なくてよかったと思ってしまったのはどう考えても間違っていた。

30. 何かを変えらるゝというのはそれだけで難しい。

何かを変えらるゝというのはそれだけで難しい。

よく今までのやり方にこだわりすぎて失敗した、などと言ったりする。何かを変えらるゝことを嫌だと思ふ気持ちはどこから出てくるのか。今うまく行つてゐるのだからわざわざ変えらるゝ必要はない、変えらるゝからといつてうまく行くとはいへない、困るからこそ変化がある。なるほどもつともだ。

変化とはこれから進む方向のベクトルを動かすことであり、今まで歩いてきた道はよくなかつた、誤つていたとどうしても否定的な要素を持つてゐる。変化に抵抗感を覚えてしまふのは今までの自分は丸ごと無駄だつたと否定されてしまつた気分になつてしまふから、というのもありそんな気がする。

よりよく、だけでは人の腰はなかなか上がらないのかもしれない。そういう意味では、今回の俺達は変化を必要としてゐた。だからこそ知らない人間からすれば博打以前の案にも乗ることができたわけだが、その前にクラスメイト達は現状から変化させることを決断してゐた。決断する前でもいいところまでは来てゐたのに。一夏は鈴とそれなりの試合をできるだろうと俺だつて考えてゐたのだ。

しかし彼女達は勝つたためにはどうしても決定的な要素が足りないと思ふし、今の自分達の力では厳しいと否定までしてみせた。諦めが早過ぎる、失敗続きで弱気になつてゐる、と最初に俺は思つた。だがその後作戦を立てながらいろいろ話をしていると、数週間考えても出てこなかつたのだから今の自分達の知識と経験だけではひねり出すことができないという結論に達してしまつてゐたそうだ。特に鈴に聞かしてはそれ以前から手詰まり感がずっと続いてゐたらしい。ところが俺が特に深刻な顔をしてゐなかつたこともあり、何とかなるんじゃないか的な空気でするする来てしまつたようだ。

なんのことはない。なあなあにしてしまつてゐたのは他ならぬ俺

自身だった。一夏が訓練を続け、クラスメイト達がああだこうだと試行錯誤をする。それで俺は順調ではないかもしれないが少しづつ積み上がっていつていると安心してしまっていた。他のクラスよりも時間があるのだから積み上がる分だつて多い。だからそれをもって絶対量で追い抜いてしまえばいいなどと今思えば全く意味のない感覚でいた。

勝とうと必死なのは俺ではなくクラスメイト達の方だった。

「よお鈴、こうやって話すのは久しぶりだな。と言つてもその前が一年空いてたけどさ」

「一夏……」

完全に鈴への信頼を取り戻し、一夏はすっかり笑顔だ。

当然のごとく俺は一夏に対して脚色して話している。いや、クラスメイト達もその場にいたので全員にか。

嫉妬云々については鈴の口から話させた方がいいだろうということで濁したが、一夏も察したようだ。それに元々試合が終わったらきちんと話すという取り決めもあるし、鈴が話す意思を持っていると分かればあえて追求もしてこなかった。

「おいおい、今から試合する奴の顔じゃねえぞ。もつと気合入れた方がいいんじゃないか？」

「そつ、それを言うならアンタの方がもつとじゃない。何ヘラヘラしてんのよ！」

「なんかそれ前にも言われた気がする。俺としちやかなりいい状態だと思ってるんだけどなあ。そんなにムカつくか？」

「かーなりムカつくわね。今すぐその顔面にパンチ叩き込んでやりたくなるくらい」

「……やべつ、今リアルに想像しちまった。それだけはちよつと勘弁して欲しい」

「バツカじゃないの」

いつも通りの一夏の姿に、鈴の肩に入った力が緩んでいく。

どうして敵に塩を送るのかといつもであれば思うところだが、今回に限っては違う。鈴にはむしろガチガチで来られない方がいい。

今鈴は悪態をつきながらも内心では尻尾を全開で振っていることだろう。一夏にいつも通りに迎えてもらえるなんて嬉しくて仕方ないはずだ。

「よし、ちよつとはやる気出たみたいだな」

「は？ 一夏、あんたもしかしてあたしに気を遣ったとでも言いたいのか？ 何それ余裕じゃない」

「余裕か……そうだな、心の余裕だけはバツチリだな」

「そういう意味じゃなくて……」

こういう噛み合わなさもまた俺達の日常だった。

「ま、なんでもいい。じゃあいい加減始めるぞ。これから鈴には教えなきゃいけないことがたくさんあるんだ」

「は？ 教える？ 一夏があたしに教える？ 何をよ？」

「いろいろだよ」

「いろいろって何よ？」

「やれば分かるさ」

笑顔のまま、一夏は自分のブレードを構える。それは対オルコットの時のような作ったものではない。中学時代悪友たちに囲まれている時の自然な、鈴が惚れてしまった笑顔だった。

そういうえば、IS学園に入学してからここまでリラックスできている一夏を俺は見えていない。

釈然としないながらも鈴も自身の青竜刀を構え、いつもの織斑先生の号令が響き渡った。

まず鈴が一夏に襲いかかる。

真っ直ぐに突っ込み、これまで通り一夏に向かって青竜刀を振り回した。

それに対して一夏は避けることに集中する。受けるでもなく、いなすでもなく、何より回避行動を再優先とした。攻撃を繰り返すように

ない一夏は今最大限の慎重さを持っている。

しかしかといって逃げるわけではない。鈴はガンガン前に出てきているが、それに対して距離を取ろうとしたりはしない。あくまで至近距離での回避だ。ただ攻撃行動を行っていないというだけで。

「何よ。偉そうなこと言った割に避けるだけ？ そんなんであたしに何を教えられるって言うのよ？」

「いやいや。ちよつとどんなもんか確かめてるだけだ。それにこのくらいよけられなかったらクラスみんなを代表する意味なんてないからな」

「逃げるだけのくせに余裕じゃない。そういうのはまずあたしに一発当ててから言いなさい！」

「別に逃げてるつもりもないけど」

一夏の言い分ではないが、この回避については俺の作戦など関係なくこれくらいという程度の話でしかない。

一夏が今までやってきたことのほとんどは回避行動の練習だ。剣一本の武装に特殊な必殺技という極端な攻撃偏重のため、基本的に一夏は攻撃をもらうことが許されない。何しろ本来は防御のために使うべきシールドエネルギーを攻撃で使って消費するのだから。打鉄と似ているようにその本質は正反対のベクトルにある。

だからこそ一夏は最初から回避についてだけは徹底的に鍛えられている。ほんの数日間とはいえ先輩達は一夏に回避行動の基礎を叩き込んでいた。見てから考えて逃げるようでは全く間に合わない世界だ。体で覚える必要がある。先輩達が抜けてからはクラスメイト達がその任務を継続した。

また一組には得意分野においては鈴と同等以上の人間がいる。近接なら篠ノ之さん、射撃ならオルコット、その上技術はそこまでなくともパイロット班十数人による多彩な攻撃を一夏は相手にしてきた。

その経験値からすれば、ただ避けるだけなら鈴の一本調子な攻撃など本来は造作もないことなのだ。クラスメイト達が鈴に勝てる気がしないと脅威を抱いてしまったのはもつと別の要因によるものだった。

「だったらせめて攻撃するフリくらいしなさいよ！」

「別にフリなんて必要ないぞ」

言いながら、一夏は自分に向かって振り下ろされた青龍刀を綺麗に躲し、そのまま流れるような動きで鈴の脇腹にブレードを軽く当てた。

ダメージを与えるつもりではなかったので鈴が吹っ飛ばされるようなことはなかったが、その代わりに鈴の目と口が大きく開いた。

「えっ？」

「やっぱお前これは穴だ。鈴と対戦した相手はみんなここを狙ってるじゃないか」

「は？」

専用機に乗った鈴の技術は決してそこまで突出していない。それはここまでの試合を見ても明らかだ。

三組代表も四組代表も五組代表も、鈴に攻撃を当てることはできていない。威力が足りなかったりして十分な効果を上げることができなかったが、それでも鈴の攻撃を躲した上で当てているのだ。

まして最初から穴だと分かっていたら一夏にでもできることだった。

「鈴はちよつと自分の装甲に頼り過ぎてると思う。最初から耐えるつもりならいいかもしれないけど、避けるつもりまで喰らってたらいけないな。反応しきれてない」

「い、一夏……？ さっきから何言ってるの……？」

一夏が攻撃する姿勢を見せていないというのもあるのだろう。鈴は一夏から少し距離を取って呆然とつぶやくような小さな声を発した。

「何って鈴の問題点の指摘。教えるって言ったろ？」

「そういうことじゃなくて……一夏は試合なのになんでそんなに普通なの？ どうしてそんなに余裕そうなの……？」

「だって俺他の奴らとは違って鈴のこと全然怖くないし」

周囲含めた相手に与える強烈なプレッシャー。これが鈴個人の持つ最大の力だった。

鈴の試合を見た時、誰もが感じるのが、こいつは強い、だ。

特別なことは何もしていない、基礎技術がしっかりしている、ぶれない。だいたいはそういう評価だ。俺が知るその精神とは正反対に、鈴の戦い方は常に安定している。

正攻法で来て相手の対策など正面から叩き潰すため、小細工などでも通用しないように見える。正攻法で来るので合わせようにも正面からぶつかるとはならない。そしてぶつかったとしても最初はよくとも次第に追い詰められ、いつの間にか鈴のペースにさせられてしまつて負ける。自分のやり方を確立しているとはこういうことを言うのだらう、という感じだった。

そしてそれを支えている最大の要因が、鈴の体から発せられる圧力だ。相手を押し潰さんばかりのプレッシャーは自然と相手を風下へと送る。離れて外から見ていてさえそう思えるのだ。実際目の前にした場合はいかほどのものだろう。

青竜刀やISの見た目も一役買っているだろうが、対戦相手は打ち合い以前にまず鈴の気迫を受けなければならぬ。しかもそれが試合中ずっと続くのだから、精神的な重圧が相当なものになるのは間違いない。

外から見えていたクラスメイト達は俺も含めて、鈴を対戦相手として見てしまいその圧力に飲まれてしまっていた。

何をやっても通用しない気がする、じわじわと押し潰されてしまう気がする、そういう気持ちにさせられてしまうのは、鈴が何事においても動じず、弱点が全く弱点に見えないからだ。

「ふざけるなっ！」

「おっと、先に言っておくけど鈴、それを繰り返していつか当たればいいなんて思うなよ？俺は日が暮れるまでお前の相手をする覚悟くらいしてきているからな」

「その前にISのエネルギーが持つわけないでしょ！」

「どうだろ。ISって休んでれば回復するじゃないか。だったら休み

休みやっつてればいつまでも続けられるってことだ」

「休み休みなんか誰がやらせるかつ！」

鈴はいつもにも増して激しい攻撃を一夏に浴びせる。いつもの大振りではなくキレのある鋭い連続攻撃だ。やはり鈴はこういう技術も持っている。

単純に攻撃手段として見た場合それはいつもよりも脅威だろう。だがそうする意味を考えると、今の一夏に対してそこまで圧力にはならない。今この場をしのげばそれで済む話だからだ。

未来永劫続くかのように思わせる安定感こそが鈴の本質だ。勢いに任せたその場限りの攻撃など鈴の本質からはほど遠い。終わりのない恐怖だからこそ相手は自ら焦りを生み出し、拳句は自爆してしまうのだ。

「なんでだろう、普通は凌げるか分からないくらいの厳しい攻撃なのに、全然怖くない」

「いや、これなら無理などせず相手が切れるまで凌ぎきればいいと思えてしまうな」

「わたくしならこの攻撃中に次の展開を組み上げておこうと考えますわ」

観客は大喜びしている。余裕綽々の一夏に対して鈴がとどめ以外でこれまでにしなかった激しい攻撃を行っているのだ。

それは知らない人間からすれば鈴の新たな一面を見られたと、きつと興奮させられる出来事になるのだろう。

「織斑君に対して今それをやっちゃ駄目だわ。今のは後に取っておくべきだった」

「自ら相手の言い分を認めた拳句に疲労とは、自分から泥沼に突っ込んで行っていますね」

だが俺達は鈴から距離を取ってしまったがゆえに、鈴のことがよく見えるようになった。

今鈴は自分の領域に相手を引き込むのではなく、一夏の大きな腕の中に取り込まれようとしている。

「くっ……！」

「お、ようやく息切れしてくれただか。やっぱお前すごいわ。俺にはちよつとそこまで続けられる気がしない」

「よっ……余裕じゃない……。全部……見切ってたって言うの……？」

「別にそんな焦らなくても息整うまで待つぞ。でもそうだな、鈴ほどの長さはなかったけど、怖いだけなら箒の方がよっぽどだ。あいつ本気で俺のこと殺す気じゃないかってたまに思うし」

「何よそれ……怖いって何よ……」

途端に篠ノ之さんが頭を抱えて悩み始めた。褒められたのかけなされたのか判断がつかなかったらしい。

それに対してオルコットが十分褒められているから安心しろと優しく上から諭していた。

「あ、でも怖いって言ったらセシリアもそうだな。殺気もなんにもないところからいきなり撃ってくるし。ほんと油断ならないっていうのはああいうことなんだろうな」

「……」

今度はオルコットが怯え始めた。これは遠回しな拒絶ではないかと両手を頬に当てて震えている。

その姿を見た篠ノ之さんが立ち直り、オルコットに対してそれは認められている証だと上機嫌に上からフォローした。

「それにクラスメイトのみんなには散々驚かされたな。そこでそういうことしてくるのかって何度もびっくりしたし。でもそういうのが積み重なってくると大抵のことはまあそういうこともあるかなって気にさせられるぞ」

「もういいわよ。十分に息は整ったから」

あちやーまだ名前出してもらえないかと、相川さんが額に手を当てて天を仰ぐ。

それに対しては努力すればいつか報われると、完全に立ち直った二人が満面の笑顔で無責任に声をかけていた。

俺は言いたい。下を見てないで上を見ると。

息が整った鈴は頭の方も熱が引いたようだ。

これは自分のやり方ではないとさすがに悟った。

そして最初からやり直しだとばかりに、改めていつもの攻撃を繰り出してくる。

「おいおい鈴、まだそれをやる気か？　いくらやってもそれじゃ変わんないぞ」

「何が変わらないって言うのよ！」

「いつまで経つてもお前のペースにはなんないぞってことだ。それが通用しなかった時、お前はとうするつもりだったんだ？」

「え？」

いつもの攻撃については一夏はもう覚えてしまっている。だからこうやって声をかける余裕さえあるのだが、鈴は一夏の言葉に対してあっさり反応してしまった。

普通なら挑発とも思えるような発言なのに、鈴はそのまま受け止めてしまっている。やはり鈴は一夏の前では普通になれない。

「俺を叩き潰すんじゃないのか？」

「言われなくても！」

今度こそ挑発だと理解したのだろう。鈴は少し後ろに下がって、左手にもう一本の青竜刀を出す。そうして二刀流となって武器を構えた。

「だよな」

「何が分かってるって言うのよ！」

今度は二本の剣で一夏に襲いかかる。

普通のISなら一本で十分なブレードをわざわざ二本用意したと言うのは、もしかしたら本来の鈴はそれを得意としていたのかもしれない。

だが今の鈴は専用機に乗った鈴だ。どうしても同じようにはいかない。

そして最初から一本しかないブレードで受ける気などさらさらない一夏にとっては、回避の対象が一つ増えた程度にしかならなかつ

た。

何しろ一夏はオルコットによるビットの複数同時攻撃を何度も受けている。回避対象を複数意識するのは既にできることなのだ。それが高度に連携された攻撃だったらまた話は別だったかもしれないが、鈴の二振りの青龍刀は息が合っていないかった。これもまたきつと感覚が追いつかないことによるものだろう。

おそらく一夏にとってはその前の連続攻撃の方が脅威だったに違いない。

「昨日から疑問だったんだけどさ、お前どうして最初から二本出しておかないんだ？」

「はあ!？」

「そつちの方が得意なら途中から出すことないじゃないか。実は二本持ってましたとか言えるのは一回きりだぞ。それだけのためにわざわざ最初を一本にするとかおかしくないか？」

「何が言いたいのか!? あたしがどういう戦い方しようが勝手じゃない!？」

「お前がどつちがいいんだよ? 一つを極めたいのか? それともなんでもできるようになりたいのか? 選べるって幸せなことだと俺思う」

選択肢すらなかった一夏が言う身につまされる話かもしれない。

「それがどうしたって言うのよ!？」

「やってることが中途半端なんだよ。さあ二刀流は俺には通じなかったぞ? 次はどうすんだ?」

「あたしはいっただって全力だ!」

一夏がわざわざ距離を取ってくれたこともあり、鈴は左手の青龍刀をバースロットにしまつて銃を出した。そして一夏に向かって激しく乱射する。

「おっと、出したからには俺に当ててくれるんだろうな? 言つとくけど俺は昨日の四組代表より当たらないからな」

「当てつやるわよー!」

だが悲しいかな、鈴の射撃の腕は四組代表には遠く及ばない。昨日

の四組代表との試合では牽制に使うことしかできなかった。最初からそのつもりだったということは、自分ですらその技術を信頼していないことに他ならない。

一方一夏は四組代表による超高火力な銃二丁の激しい攻撃を回避してきている。しかもあの銃達は息の合った連携さえ見せていた。威力はそれなりにあるのかもしれないが、それだけでは絶賛回避特化中の一夏を追い込むことなどできない。

「まだ続けるか？ いいぜ。今日俺はとことんまで鈴に付き合うって決めているからな！」

「うるさい！ うるさいうるさいうるさいっ!!」

そしてついに鈴の奥の手、衝撃砲が発せられる。

鈴の両肩から見えない砲撃が一夏に向かって放たれたようだ。

だが一夏はイグニッション・ブーストで軽く回避した。

「嘘……!」

「おいおい、二度も目の前で見せといてまさかタネが割れてないとか考えるなよな。見えないと言っても静止しなきゃいけない上に溜めが必要なんて、知ってたら俺でなくても避けられるぞ」

今度こそ鈴が青ざめる。

夜竹さんはあのバカさ加減はいったい何だったのかと言うくらい、しつかり鈴の姿を鮮明に撮影していた。

そしてその映像をクラスメイト達が見たところ、あっさりと不自然さの原因に気づいたとのことである。

鈴の問題か機体の問題か、鈴の衝撃砲はすごそうであればんばん連発できるものではなかったのだ。

俺だったらそんな武装を一夏が持っていたら真っ先にその訓練させている。だが鈴はそれをしなかった。いや、そこまでできなかった。

「何よ……やっぱり智希の言う通りだったって言うの……?」

「またあいつなんか言ったのか?」

「あたしは一夏には勝てないって……」

「あのなあ、勝てないも何もまだお互い何もしてねえぞ。俺も鈴も工

ネルギー満タンじゃないか」

「で、でも……あたしにはもう何も……」

「たった一発外した程度で何言ってるんだ。だいたい俺が全然攻撃をしなかったのはどうしてだか分かるか？」

ああ、やっぱり言ってしまった。

俺はそのまま鈴を失意の底に落としてしまえばいいと言ったのに、一夏は頑として譲らなかったのだ。

「え？」

「避けるのに必死だったからに決まってるだろ。あんなメチャクチャに突っ込んでこられて、それを躲しながら攻撃するとか絶対にムリ」
「は？」

さも当然のよう言われて鈴が困惑する。分かつてはいたが俺もあまりのもつたいなさに天を仰いだ。

このまま鈴を沈めていたら一夏はものすごい評価を得られていただろうに。

「どうかさ、お前俺がここまで言ったこと全部俺が考えたかと思うか？ 我ながらエラソーらなって思いながら言ってたけど、鈴にとつて俺ってそういうキャラか？」

「言われてみれば……」

「たった二回見ただけで何もかも分かるとかないわ。どんな天才だよ」

忸怩たる思いはあるが、実のところこれはこれでありだと俺は考えている。

もはや俺の得意技たるハツタリによる勘違い作戦は、作戦を行う当人によってそこまでやる必要はないと否定されてしまっていた。

だが一夏のやりたいことを実現させるためには、何よりもまず鈴に聞く耳を持たせなければならぬ。

だからまずは鈴の戦意を削がなければならぬと一夏を説得し、試合の前半はこういう方向性となった。

そしてここからは後半戦、一夏ワールドの到来だ。鈴は既に半分以

上飲み込まれている。

「で、でも実際に理解してるじゃない」

「それは二回じゃなくて三十回だからだ。いや、実際はそれ以上だろうけどな。クラスみんなが必死になって見てようやく発見してくれたことだ。俺は言われなきや絶対に分かんなかった」

「一夏……？」

三十回という数え方はさておき、まだ鈴には一夏の言いたいことは分からないだろう。

一方それを理解しているクラスメイト達は、今食い入るようにモニターを見つめている。さつきまでは脳天気遊んでいたというのに、切り替えが早いと言うか現金と言うか。

「ここまで来たらもうぶつちやけるぞ。さつき俺お前に穴とか言つて弱点教えたけど、あれ実はほんとギリギリだった。軽く当てるので精一杯って言うか、あと少しでも踏み込んでたら鈴の次の攻撃もらつたな」

「一夏!？」

「そもそも俺って攻撃については全然自信ないんだよなあ。当たらないのが当然と思えとか最初先輩に言われた時はムカついたけどさ、実際やってみたらほんとその通りで」

「一夏落ち着いて。ただの愚痴になつてる」

鈴が模擬戦の対戦相手を心配するというよく分からない事態になつてきた。

これぞ織斑一夏の独壇場と言える。

「わりーわりー。つまりさ、散々攻撃躲されてお前は俺のことすごいと思つたかもしれないけど、すごいのは実は俺じゃなくてクラスのみんななんだよ」

「一夏……」

鈴は一夏の綺麗な笑顔に吸い込まれる。待機室に漂うのはうっとりとしたピンク色の空気だ。

「みんなは本当にすごかったぞ。この動きはこういう意味だ。この場合鈴はこう動く、だからこう躲せつて、何から何まで教えてくれた。

俺はその通りにやっただけだ。鈴がすごいと思ったのは俺じゃない」「それは……」

頭で理解したとしてもそれを本番で完璧にやってしまえるというのはとてもすごいことだと俺は思う。しかも試合という真剣勝負の中で。

ましてそれをISでもなれば、鈴はいずれ別の意味でその凄さを知ってしまうのだろう。

「鈴の戦い方にしたってそうだ。鈴はこんな武器を持っている。こういう使い方をしてくる。これはこういう狙いを持ってやっている。全部分析してくれた。だから後は俺がそれを実際にやれるかどうかだった。そしてそれはできなかった」

「できなかったって、今思いつきりやってみせたじゃない」

「やってないぞ。避けるだけで精一杯で、とても攻撃まではできなかった。智希はできると思って作戦を作ってくれたけど、俺の方に実力が足りなかった。本当はもうちょっとやれるつもりだったけど、ちよつと当てるだけで限界だ」

時間があればできたのは間違いない。残念ながら半日では一夏の頭の中に詰め込むので精一杯だった。

何が悪いと言えば俺が気づくのが遅れたのが悪い。気づいただけまだマシという程度で。

「ま、今日はできなかったけど、訓練してそのうち見せてやるよ。来月から再来月か二学期になるかは分かんないけどさ。でも鈴、それはお前も同じだぞ」

「あたし？」

「だってお前、自分の専用機を全然使いこなせてないだろ。武器どころか自分の思うように動けてさえいないんだろう？」

「……！」

俺が鈴の事情に気づいて、そして勝てると思った要因はこれだ。

鈴もまた時間がなさ過ぎて、専用機を自分のものにできていない。一夏と戦った時専用機に乗って三ヶ月だったオルコットでさえできていなかったのだ。下手をすればその半分しかない鈴ではどうし

たつて時間が足りない。

その上一夏達は困らなかつた専用機の感覚を掴むことにまで時間がかかっている。それまでに培つたISの操縦技術で無理矢理どうにかしているようだが、やはり自分のイメージからはほど遠いのだろう。あつという間に余裕がなくなつてしまつたのもきつとそういうのはがゆい感情が働いていたと俺は想像している。

「あ、これも俺が気づいたんじゃないからな。これは智希だぞ。鈴なんて実は全然怖くないって智希が言つたんだ。クラスみんなは鈴には勝てる気がしないって言つてたのにさ」

「やっぱりあいつか……」

「待て待て、智希はお前の心配だつてしてくれてるから。昨日いろいろあつたんだろ？」

「智希に対して感謝しておけつて思いつきり言われたわよ」

「だろ？ あんな感じだけど、あいつはきちんと考えてる。少なくとも俺達以上に考えて、答えを出してくれてる。そして今俺達はもう何も考えずにこうやつて勝負するだけいいんだ」

「いやいや、考えろ。そして勝つてもらわないと今まで俺のやつてきたことが台無しだ。」

ただ鈴のフラストレーションを解放しただけでは何も意味がない。

「一夏……」

「さあ鈴、構えろ。お前も剣一本だけならまだどうにかできるんだろ？ 俺だつて同じだ。未熟者同士勝負するにはもつてこいじゃないか」

「言うじゃない。いいわ。それでもあたしは一夏に勝てるつてことを証明してあげる」

一夏が笑いながらブレードを構え、鈴も強気に返して自分の銃をしまう。

よかつた。これだけは俺が絶対に譲れないと一夏に約束させた条件だつた。やり合うときはブレード一本だけの勝負にする。

最後の作戦会議で俺はこの際鈴を徹底的に叩きのめすべきだと主張したが、一夏はそこまでする必要はないしやりたくない拒否し

た。

また一方で一夏は、どうしても鈴に自分の考えを伝えたいから協力して欲しいと珍しく要望を口にする。

久しぶりに俺達の間で意見が対立することとなったが、試合をするのは俺ではなく一夏だ。納得されないまま強行して中途半端なことをされるよりは俺は譲歩し、またクラスメイト達も間に入ってくれて作戦は組み直された。

ただ俺にとって何より勝利は絶対条件だ。そのために最後勝負を持ちかける時はブレード一本同士でやれと、それだけは一夏に条件をつける。一夏もそれは別に構わないと軽く受けた。

テンション上がりすぎて言うのを忘れてしまいたらしく不安だったが、一夏はしつかり覚えていたようだ。

「悪いな。でも勝つのは俺だ。別に智希に言われたからってわけじゃない」

「それはすぐに分かることよ！」

鈴が一夏に向かって飛びかかり、ブレード一本同士の打ち合いが始まった。

「よっしゃ！ ほら見る俺にだって普通に当てられるだろ！」

「こんなのかすっただけよ！」

鈴は大したことではないかのように言うが、それはかろうじて完全な直撃を避けられただけだ。

「危ねっ！ 今のはやばかった」

「思いつきもらっつって何でもなかったかのように言うんじゃない！」

一発で済んで助かった。

「さつきから思ってたけどお前、そんな休みなしにやってたら余計に疲れるだろ。もうちよつと余裕を持ってやった方がいいんじゃないか？」

「それを言うならあんたこそ、ほんと単発攻撃しかしてこないわね。」

もしかして一夏ってチキンなの？」

「単発ですら喰らってる奴に言われたくないな。ぶんぶん振り回してやっと一発当てるよよりはよっぽどマシだ。無駄に振り回してご苦労さま！」

「はあ!? あんたほんとに攻撃の何たるかが分かってないわね！」

一撃必殺が一夏の基本スタイルなため、休みなく攻撃を仕掛けるような連撃についてはあまり練習していない。鈴のようにここぞで畳み掛けるまでもなくその前に相手を沈めてしまうということもある。

そしてその大きな要因たるエネルギー無効化攻撃を使っていれば、この試合だってとうに終わっているはずだった。だがどうやら一夏は自らそれを封印してしまっているようだ。鈴が衝撃砲を使わないのだから自分も使わないということなのだろう。最後の最後で失敗してしまった。きちんとそこまで言い聞かせておくべきだった。

「織斑君はここにきて相打ち作戦なんか覚えちゃったの？ 確かにそれならこっちの攻撃を当てられるかもしれないけど」

「昨日の試合ですね。エネルギー無効化攻撃を使うつもりがないのであればいいかもしれませんが、自分で合わないと言っていたのにわざわざ使うとは……」

「そんな作戦なんて上等なもんじゃないよ。単に避けきれてないだけだ。今の一夏は攻撃に意識が向き過ぎてる。ちゃんと回避を意識すればできるのに、そのあたりのバランスを取れないのが本当に一夏の悪いところだなあ」

一つのことだけなら完璧にできても複数同時に何かをやらせると途端にできなくなるのが一夏の短所だ。

回避だけを意識すれば鈴の攻撃などもう当たらないのは分かっている。だがそこに攻撃という要素を加えてみるとご覧の様だ。

こういうことがあるから、一夏は鈴とそれなりには戦える、ということから俺達はなかなか先に進むことができないでいた。

「織斑君は自信満々だったけど、これで大丈夫なの？ 岸原さん、事実上の相打ち状態で、三組代表の時のように勝てそう？」

「は、はい。それが……このまま進むとよくないと思っていたのです

が、先程から織斑君の回避精度が上がってきていて……」
「え？」

モニターを見れば一夏は相変わらず元気な顔をしているが、鈴の方が息切れし始めていた。この光景はどこかで見たことがある。

「篠ノ之さん」

「ああ、これは私が一夏にエネルギー無効化攻撃なしで負けてしまうパターンだな」

「えっ、それってパターンも何も今まで二三回くらいしかなかったよね？」

「まさか一夏さんはこの場でそれをやってのけようとしているのですか!？」

全てが噛み合った一夏は時に篠ノ之さんさえも完封してしまうことがある。だが今の一夏はとてもそういう状態ではない。明らかに攻撃に意識が傾いていて、誰の目にも完璧だと思えるような動きなど全くしていない。

「でも今の一夏は」

「別に完璧である必要などないだろう。要は私に勝った時と同じ道をたどればいいだけの話だ」

「それを一夏は今意識してやっている？」

「その場の思いつきでやっている……:~:~といつもであれば思うところだが、一夏は最初からそのつもりだったのだろうか。試行錯誤どころか迷いさえ見られない」

打ち合いなら一夏の方に分があるというのは、何よりエネルギー無効化攻撃あつての話だ。最後鈴と打ち合いの勝負をしたいと言った一夏に対して俺達はそれ込みで許可を与えたつもりだった。

だがはつきりさせていなかったがゆえに、俺達と一夏の間で齟齬ができていた。一夏はブレード一本を同じ条件で戦うと捉え、エネルギー無効化攻撃は使わないものだど判断してしまっていた。

ではどうやって最後鈴に勝つのかという話になるのだが、一夏は自分でその手段を用意している。しかもその場で思いついたわけでもなさそうだ。さては自分で考えついたものだからあえて指摘をしな

かったな。

とりあえずは終わったなら全員の前で正座させて説教タイムだ。

「どうした鈴？　また待った方がいいか？」

「ふぎけ……やっぱりこうなっちゃうのか……。同じ条件でやられたらもう言い訳すらできないわね」

「同じ条件？　全然違うだろ。俺と鈴は全然違う」

「え？　それってどういう……ま、まさか……」

鈴の目が震える。一夏の口から一番聞きたくない単語が出てくるかもしれないからだ。

もし才能という単語が飛び出してきてしまったら間違いなく鈴の心は折れる。他人ならまだしもそれを当人に言われてしまったては。

「鈴は一人だけど、俺は三十二人だ。それが俺と鈴の大きな違い」

「えっ？」

待機室の中にいるクラスメイト達が揃って息を呑んだ。

「あ、別に鈴には味方がいないってことじゃないぞ。お前にだって整備士さんとか他にもアドバイスをしてってくれる人はいるだろうし」

「な、何の話？」

「鈴は自分以外の気持ちは背負ってなくて、俺は自分含めてクラス三十二人分の気持ちを背負ってる。それが違いだ」

「ここから続く一夏の言葉を聞いて、俺は自説を譲歩した。」

「自分以外ってそんなの……」

「重いか？　嫌か？　俺は嬉しいって思うな」

「そんなわけ……」

「あるぞ。みんなが俺のことを信じて託してくれてるんだ。こんなに嬉しいことはないじゃないか」

気負うでもなく本心で平然と言っただけのだから本当に一夏は恐ろしい。

心の底からクラスメイト達を、そして自分を信じきっている。

織斑一夏は自分が仲間から期待されることを素直に喜べる人間だった。

「なんで嬉しいとか思えるのよ……っ？」

「だって俺自身が認めてもらえただってことだろう。こいつはダメだと思っただけにそんな奴のためにあそこまで一生懸命にはなれない。さっさと代表降ろされて終わりだったろうな。それに箒だつてセシリアだつてもっとできる人はいた。でも俺を信じて全部託してくれたんだから、そりや嬉しいよ」

正確に言う俺がそうさせないように動いたというのもあるが、それでもクラスメイト達は整備班といえど今や一夏の実力を完全に認めている。自分達の期待に応えて、さらにその上を行ったからだ。

「で、でも、だからってそれで何かが変わるとはあたし思えない……」
「全然違うぞ。だって俺は鈴と一人で戦ってない。いつだって俺はみんなと一緒に戦ってる。後ろから気持ちって言うか声が聞こえてくる」

会議で一夏がこれを言った時クラスメイト達は泣き出した。パイロット班は言うに及ばず、それ以外の指揮班や整備班の連中までだ。

今は二度目なのでさすがに泣いてまではいないが、ほとんど泣きそうな顔で必死に堪えているようだった。

「嘘……」

「幻覚とか言うなよ。今まで言われてきたことが浮かんでくるって話だ。ここはこうしろ、次はああしろって考えるまでもなく聞こえてくるんだ。そりやあ鈴もすごいって思っちゃうよな。なにせ三十二人と戦ってるんだから」

あ、岸原さんが泣き出した。

「鈴、気持ちを負うってそういうことだ。やらかして気づいたけどみつともない真似なんて絶対にできないと思うし、確実に自分の力になる。そういう意味で、俺は一人で戦ってる鈴には負ける気がしなかった」

「そういうこと……。だからあたしは一夏には勝てないんだ……」

続いて谷本さんがもらい泣き。その隣の布仏さんは珍しく真剣な表情だ。

「と言ったって別にこれは俺しかできないことでもないぞ。鈴だつてやればいいじゃないか」

「あたしが……？ で、できるわけないでしょ！ そもそもどうやってやればいいかも分かんないし……」

「そんなの簡単だ。助けてって周りに言えばいい」

これだけは絶対に言わせてくれと、一夏は俺達に向かって手を合わせて頼んだ。

それは模擬戦中でないと駄目なのかという俺の問いに対しては、鈴が絶対に逃げられない場所だからとのことである。今思いついたことではなく昔からそう考えていたようで、話をしようとしても鈴はすぐに話を逸らして逃げてしまっていたそうだ。

必ず勝つからやらせてくれと、最後一夏は土下座せんばかりだった。俺の中で土下座の価値が急激に下がってしまったのでしようがしまいが答えは変わらないのだが、勝利が前提にあるのであれば俺にとってもそこまで悪い話ではない。どこかで鈴の意識については何とかしなければならなかった。本人以前に一夏にとっても害悪だからだ。

「それって……」

「自分でどうにかできないならどうにかしないでいいじゃないか。答えを持っていく人か、一緒に考えてくれる人に助けてもらおうぜ」

「そんな、人に頼るとか……」

「鈴はどうしてそれをイヤだっと思うんだ？ 頼っても頼らなくても出てきたものは周りからすれば一緒だぞ。さっき鈴が俺に対してすごいと思ったことは全部俺が考えたことじゃないけど分からなかったろ？」

「そうじゃなくて……あたしの気持ち……」

今鈴は駄々をこねているようで、一夏から答えをもらおうとしている。

たとえば後で本心を伝えて謝ったとしても、事実が変わらない。自分の才能が一夏よりも圧倒的に劣っていると思ってしまう劣等感は鈴の中には残ったままだ。

そこに光明が見えてくるともあれば、鈴は是が非でも聞かずにはいられない。

「別に助けることって上の人間が下に向かってすることじゃないぞ。そもそも人間には得意不得意があるだろ」

「でも……」

「他の何もかもが劣っていたとしても、その人だけが分かっていることもある。俺はISのことをいろいろ鈴に教わったけど、それでも少なくとも一つ鈴に教えられることがある」

「な、何よ……?」

「専用機に乗るときの感覚だよ」

鈴が目を見開く。

それこそが鈴の一夏に対する嫉妬の原点だっただろう。

「きつと鈴はいまだに自分の専用機を量産機に乗るときの感覚で無理矢理動かしてるんだろ。それをやれてるだけで俺には尊敬ものだけど、専用機は専用機のやり方で動かした方がいいに決まってる。そして俺はそれを鈴に伝えることくらいはできるんだ」

「い、いいの……?」

「なんでいけないって思うんだよ? 人に教えてもらったら何か違うのか? 別に自分の力だけで掴まなきゃいけないってこともないだろ」

「そ、それは……」

最後に残るのは鈴のプライドだ。

これを貫いた場合、自分の中ではこだわり、他人からすれば意固地となる。

「俺は今の鈴には勝てると思うけど、専用機のを掴んだ鈴には分かんないな。だって自分の思い通りに動けるんだぞ?」

「……!」

上を目指す人間なら最初から選択肢などないはずなのだ。

もちろん結果よりも過程にこだわるのであればまた話は別だ。いくら時間がかかろうと自分の力で乗り越えることが何より大切になる。

だが上を目指し結果を求めるのであれば、そんなプライドなど小さなものとして投げ捨ててしまわなければならない。感覚とはいえ極端な話知っ

ているか知らないかだけのことなのだから、さっさと教わって知ってしまえばいい。

結局鈴にとつての才能とは自分の力だけでできるかどうかではない。ならば相手よりも劣っていようが、他人の力を借りてでも結果で上回ればそれは鈴にとつて勝利になるはずだ。

「な、鈴。そうしようぜ?」

「ふふっ……本当に一夏には敵わないわ」

「お、もしかしてまた俺のことすごいと思ったか? 残念、これもまた智希でした。あいつ鈴のことは全部お見通しみたいだぞ」

「結局は智希か……。ていうか一夏の口から言わせるとかあいつってほんとイヤな奴ね」

一夏と鈴が俺を肴に笑い合う。

それはいいが鈴はさっさと降参してくれ。すつかり一夏に乗せられているが今は模擬戦の最中なのだから。

このまま戦わずに会話ばかりだといきなり織斑先生が両者負けとか言い出しそうで怖い。

一応俺的には観衆にも配慮してエンターテイメント性を加えてみたつもりで、数千人もいる観衆は野次を飛ばすようなこともなく一夏と鈴の会話を聞いてくれている。たまたまそうなたという部分も多々あるが、学生のやる会話としては上々だというのもあるだろう。また役者二人が俺の策など知らずに本気でやり合っているのでもうまで嘘臭いようなこともない。

鈴を叩きのめせないならせめて一夏アピールをしようという苦肉の策だが、果たして。

「さてと、じゃあ一夏、いい加減決着をつけるわよ」

「え、まだやんの!?!」

「当たり前よ。あたしははじめをつけないといけないんだから」

晴れ晴れとした笑顔で、鈴は自身の青竜刀を構える。

一夏も鈴の顔を見て理解したのだろう。おかしそうに笑って、それからブレードを構えた。

「お前ってほんとめんどくさい奴だな」

「そうよ、あたしはめんどくさい女なのよ。だからこうする必要がある！」

言い終わるか終わらないかぐらいで鈴は青竜刀を大きく振りかぶって一夏へと突進する。

その何の変哲もないただの突撃を一夏は軽く躲し、そのまま流れで鈴の体へと光り輝くブレードを叩き込んだ。

完全な直撃を受けて鈴の体は大きく吹っ飛ばされる。やがて地面へと落ち、しばらく転がって止まった。

「やべっ、もしかしてやり過ぎたか!？」

「ちよっと一夏！」

「すまん！」

「すまんじゃない！ あたしにあそこまでやらせといてどうして一撃で終わらせないのよ！ あたしまだエネルギー残ってるじゃない！」

「そっちかよー！」

一夏らしい。実に一夏らしい。

だが、鈴の言う通りそこは綺麗に決めて欲しかった。

せつかくこの上ない終幕を迎えることができそうだったのに、血の涙を流したくなるくらい残念だ。

「まったく……」

「そんなこと言われても……そもそも一撃で倒せとかそっちの方が無茶だし……」

「はいはい。もういいわ。降参！ あたしの負け！」

「鈴」

降参と言いながら、鈴は腰に手を当てて勝ったかのように笑顔だった。

会場から拍手が湧き上がる。歓声ではなく、拍手によってアリーナは包まれた。

「鈴、これからがんばろうな」

「何よ、やっぱり余裕じゃない」

近寄って来た一夏に手を差し出されて、鈴は強く握り返す。

「でも、次は負けないからねっ！」

涙をこぼしながらも、鈴の表情は晴れやかだった。

31. きつと、俺の中には予感があつたのだろうと思う。

きつと、俺の中には予感があつたのだろうと思う。

だからこそ、俺は誰よりも早く行動をすることができた。

だからこそ、俺はギリギリのタイミングでクラスメイト達をアリーナの中に送り込むことができた。

「岸原と布仏は？」

「足手まといになるから待つてゐるって」

「そうか、ならばこれが現状の戦力か」

アリーナの中に入ることができたのは篠ノ之、オルコット、相川、鷹月、四十院、谷本、そして俺。

一方の相手は四機。かろうじて数だけは上回っているが。

「おい俺を忘れるなよ」

「あたしも……と言いたいところだけど、ごめん。シールドエネルギーはともかく本体の方がほとんどないの。智希が期待する動きはできそうにないかも」

鈴は一夏にエネルギー無効化攻撃で思いきりぶっ飛ばされたので、シールドエネルギーはあるが本体のエネルギーがないという非常に不安定な状態だ。はつきり言つて装甲を抜けられた瞬間に落ちる。

「厳しいね。一夏はどれだけエネルギー残ってる？」

「俺はやれるぞ」

「そういうことじゃなくて、残りは？」

「う……本体はまだまだある」

「シールドエネルギーは？」

「さっきのでもうあんまり残ってない……」

エネルギー無効化攻撃を出せない紙装甲状態か。これもまた厳し

い。

「でも智希、あんたがやれって言うならあたしはやるわよ」

「俺は言われなくてもやるぞ。エネルギー無効化攻撃を使わなくたってやれることは十分ある」

鈴はともかく一夏は紙装甲の分際で何を言うかという話だが、経験値だけなら一夏はこの中で群を抜いている。

ひよっこだらけのこの状況ではそれでも頼りたくなってしまいう存在だ。

「甲斐田、向こうの大きい一体はおそらくこちらへ向かって来ないと思う。その前にいる三機が守るような形だ」

「乱入しておきながらすぐに攻めて来ないってのはそういうことなのかな」

「あの一番大きなISは何か別の役割がありそうですわ。先程から左右に首を振っていますし、誰もこの場に入れないどころか音まで遮断するバリアを維持しているということもありそうです」

ならば現状気にすべきは三機か。一番後ろにいる一回り大きな親分機が何か目的を持っていて、前にいる子分三機がその護衛。攻めてこないのはこちらが攻める姿勢を取っていないから。

それならいつそ一夏達が回復するか外にいる警備の人達がこのバリアを突破するまで待つかと思っただが、しびれを切らしたかのように子分機が動く姿勢を見せる。

駄目だ、これ以上考える時間はもらえないようだ。

「よし、一夏と鈴は後ろに下がってエネルギーの回復に努めて。まず僕らで前にいる子分機を何とかしよう」

「なんだそれ!」

「智希がそう言うなら従うわ」

俺はあえて二人を外すことに決めた。

それらはいきなりやって来た。

数千人から見られていたことを今さら思い出した鈴がひとしきり

悶えた後だった。

モニターの向こうが急に明るくなる。何だと思えばアリーナ全体を覆っていた安全のためのバリアが解除されてしまったようだ。そして空に四体の異様なISが浮かんでいた。

「みんな来て！　一夏達を守る！」

「甲斐田君!？」

俺は返事も聞かずに待機室を飛び出し、隣の格納庫へと駆け込む。

ここには専用機を持たないクラス代表用の量産機が置かれていた。

「甲斐田！　どういうことだ!？」

「なんでもいいからISに乗ってすぐ外に出て！」

「外ですか!？」

「そうだ！　一夏達が危ない！」

「な、なんかよく分かんないけど分かった」

やはりすぐ俺に反応できたのはパイロット組だった。

有無を言わせない俺の剣幕に、首を傾げながらも近くにあるISに乗る。オルコットは自分の専用機を展開させた。

「周りのことはいいから急いで！　出たらすぐ一夏達のところへ！」

「分かりましたわ！」

専用機のオルコットが扉を開けて出て行く。閉じられる前に何人送り込めるか。

「甲斐田君!？」

「何が起こっているのですか!？」

「いいからIS着て武器持って外！」

「もしかして私の見せ場到来!？」

遅れて指揮班と衛生班が入ってくるが俺はただ同じ命令をするだけだ。同時に俺も自分が乗るISを探す。隅にあつた打鉄が目についたのでそれにする。

「甲斐田、先に行くぞ！」

「行っきまーす！」

篠ノ之さんと相川さんが出て行く。二人とも打鉄だ。篠ノ之さんはそれしかないが相川さんもこの中での自分の役割を理解してくれ

ているようだ。この二人が前衛になるのははつきりしている。

「甲斐田君！」

「急いで！」

「すみません！ 私達は足手まといにしかならないので残ります！」

「かいだー、ごめんなさい！」

俺を横目に鷹月さん四十院さん谷本さんが出て行く。鷹月さんがラファール、四十院さんがメルシュトローム、谷本さんが打鉄か。三人の言いたいことは分かった。

「分かった。じゃあクラスのみんなと合流しておいて」

「はい！ すみません！」

「かいだー、がんばって」

二人ともいつも通りの表情だ。岸原さんが泣きそうで、布仏さんは笑顔。非日常な光景の中なのにいつもの顔を見られるとはなんか変だなと思った。

「それで、どうやって戦うの？」

「七対三と考えれば二対一を作るのがセオリーでしょうか」

「ごめん、議論してる暇はない。悪いけど僕が決める」

反論はない、というかこの場でさせるつもりもない。

この状況で考えながら行動しろとか絶対に無理だ。ならば一番役に立たない俺が考えることは全部引き受けるしかない。

「篠ノ之さん、悪いけど西側の、仮に子分機Aとするけどそれを一人でお願い」

「甲斐田君!？」

「了解した」

「倒せとは言わない。持ちこたえてくれるだけでいい。その間に他を落として助けに行く。ただしそれは最後だけ」

「今は期待の現れだと素直に受け取っておこう」

俺はあえてこの場の最強戦力を一対一でぶつけることにした。他が心もとない以上任せられる分は任せたい。

「一番東の子分Cは相川さんをお願いする。これも倒そうとか考えなくていい。まず回避、どうしても無理なときは防御。攻撃は一切考えなくていい」

「それだけでいいならやってみせる」

「相川さんのサポートに鷹月さん。攻撃じゃなくて牽制だけ考えて。相川さんを後ろから守ることを第一に」

「わ、分かった」

相川さんもそれなりにはやってくれると思うが、いかんせん向こうの実力が分からない。もちろん篠ノ之さんで持ちこたえられないようならもう俺達に勝ち目は無い。だがそれが可能ならサポートをつければ相川さんなら何とかできるだろう。

「最後に真ん中にいる子分Bを残りのみんなで。谷本さん、きついでろうけど前に出て。相手の攻撃を回避すること以外は何も考えなくていいから」

「まっかせて！ ヨユーヨユー！」

「四十院さんはそのサポート。危ないと思ったら自分に引きつけるくらいの気持ちで。距離は取っていいから」

「了解しました」

「そしてオルコットさん、出来る限り早く真ん中の子分Bを落として。後先は考えなくていい。攻撃だけを意識して」

「そういうことですか。十分理解できましたわ」

矢継ぎ早に俺は指示を出す。連携なんてどう考えたってできるわけがない。ならば全員一つのことだけに集中させよう。一夏ではないが、余計なことなど気にせずそれだけを考えていればこの人達ならそれなりにできるはずだ。

「気にするのは自分の目の前だけでいい。何かあるときは僕が指示を出す。そして無理なら無理でいいから声を出して。無理された挙句やられる方が困るから」

「始まる前から心配するな。必ずやり遂げてみせよう」

「うん。いざとなったら一夏と鈴を前に出す。だからみんな、まずは自分のやるべきことだけに集中して。さあ行こう！」

ほとんど相手も動き始めていたのでギリギリだった。

俺の掛け声に合わせて全員が散開する。

まず何より前衛が持ちこたえられるか。これができないようであればもう親分機を速攻で一夏と鈴に落とさせざるしかない。

「来い！ お前の相手は私だ！」

来いと言いながら篠ノ之さんが西の子分Aに向かってイグニツシヨン・ブーストで突っ込む。

相対する子分Aは切りかかってくる篠ノ之さんをその長い腕で払いのけようとする。そう、この異様なIS達は武器を持っていない。見るからに体と一体化していた。

そもそもISは顔を出さなければならぬという規定があるのに、隠している時点でこのIS達は普通の存在ではない。そして顔どころか全身を物理的な装甲で固めて、相当に硬そうだ。打鉄と同等以上で考えて間違いない。一方武装は長い腕の先に爪のような形の大きな刃が付いている。親分機の護衛ということからも近接系と考えるといいだろう。爪の二刀流、そして威力は見るからにあるという感じか。後は銃が内蔵されているかどうか。

「甘いなっ！」

長い腕を振り回した子分Aに対し、篠ノ之さんは直前でイグニツシヨン・ブーストを解除してタイミングをずらした。そして空を切つて無防備となった子分Aの胴体にブレードを叩きつける。それは完全な直撃となって子分Aをふっ飛ばした。

「これは意外といけるか？」

何も言わなかったのに、篠ノ之さんは俺の意図を正しく理解していた。

こちらが連携をできないのは仕方ないとして、問題は相手の方に連携されてしまうことだ。だからそうさせないように、相手の三体をそれぞれ仲間から引き離す必要があった。

俺は様子を見て左右を中央から少しづつ離れるよう指示するつもりだったのだが、篠ノ之さんはまずそれを最初にやった。逃げ回りながらではなく攻撃によって行ったのは性格的なものか。

まったく、攻撃は考えなくていいと言ったのに。きつと一人で大丈夫だということを俺に示したかったのだろうけれど。

「となると次は東……」

さすがに相川さんは篠ノ之さんのようにはいかないようだ。回避するだけで手一杯か。

だが鷹月さんのサポートがあるのでそこまで危ない事態ではなさそう。ラファールに乗った鷹月さんはその手に持った銃でひたすら子分Cの腕を狙っている。全く効いてはいないが、子分Cの煩わしそうな様子を見るに十分邪魔はできている。

「相川さん！ 逃げるときはできるだけ外に！」

「はいよー」

時間稼ぎだけなら問題ないと判断して俺は指示を出し、最重要な中央を見る。ここをいかに早く落とすかも大事なのだが、何より気になるのは前衛の谷本さんだ。一夏にかかりきりで自分の訓練など口クにできていないので、果たしてどこまでやれるか。打鉄を選んで本人もやる気だったので任せることにしたが、正直一番不安な場所だ。

「はっはっは！ その程度で私を倒そうなど百年早い！」

全然余裕そうだった。

谷本さんはクネクネした変態的とも言えそうな動作で、ぬるぬると動いて子分Bの攻撃を回避している。

打鉄とはあんなおかしな動きをするISだったのだろうか、どうでもいい疑問が浮かんだ。

ともあれ、まず戦線を安定させるという俺の最初の目標は達成できた。

相手の戦力はどの程度かと、こちらがどこまでできるかという事実だけは把握しておかなければ先へは進めない。

そしてこの間に俺は次の展開や突破口を見出しておかなければ。

「おい智希、そろそろ出ちやダメか？」

「何バカ言ってるのよ。あたし達が必要になったら智希が呼ぶから、

それまでは体を休めてエネルギーを回復させる！」

「そんなの分かってるけどさ、でも目の前でみんなが必死になつてるのに指咥えて見てるとか嫌に決まつてるだろ。じつとしてられないって言うか……」

だと言うのに、後ろが騒いで俺の思考を邪魔する。

しかしこれはそのままにしておけない。放っておいたら一夏は我慢できずに飛び出してしまふ。

「鈴、一夏を捕まえて動けないようにしておいて」

「えっ!？」

「おい何言い出すんだよ!」

「ガシツと全身で捕まえて、僕が言うか鈴が我慢できなくなるまで動かないように」

「わ、分かった!」

「あっ!・ ちよつとおい鈴!」

見えないが、鈴は一夏を後ろから抱きしめる形で動けないようにしたのだろう。

鈴よ感謝しろ。さっきのご褒美だ。

「おい智希! お前は平気なのかよ!」

「平気も何も僕は役に立たないからむしろ前に出る方が邪魔なもの」

「んなことねえよ! 離れて銃を撃つとかできることはあるだろ!」

「まず無理。なぜならこの打鉄はどうも故障機みたいだから」

「はあ!？」

「乗る前に機体の整備状態を確認するのは基本中の基本でしょ! あんたこんなときに何やってんのよ!」

まったく鈴の言う通りだ。

格納庫の隅にぽつんとあったのだが、きつとそれは故障中だからと離してあったのだろう。乗つてすぐエラー表示に気づいたが、時間もないしどうせ自分は戦力にならないからいいかと思つてそのままにしてみました。

だが動かすのにいちいち重くて仕方がないので、これは完全に失敗だったと言える。

「智希、お前これ終わったら特訓な」

「そういえばこいつISに乗れるくせに全然訓練とかしてないわね。いいわ、あたしがゼロから鍛えてあげようじゃない」

後ろでどうでもいい会話が繰り広げられているが、とりあえず一夏の意識をそらすことには成功した。

できれば一夏はこのまま休ませて奥にいる親分機を落とさせたい。見るからに超硬そうな相手なのでエネルギー無効化攻撃は必須だし、親玉を一夏が倒すというのは絵的にとてもいいからだ。

そのためにも子分機は今ある戦力でどうにかしたい。改めて、戦況を確認してみる。

西側の篠ノ之さんは攻撃をしたのは最初だけで、それからは完全に守勢に回っている。

もちろん俺の指示というのものもあるが、どうしても意識が防御に傾いている分攻撃までは手が回らないのかもしれない。

もしかしたらもう少し思い切って無理をすればいけるのかもしれないが、今の篠ノ之さんの役割は耐えて相手を引きつけておくことだ。相手を倒すことよりも自分が倒されないことの方が重要なのはしっかり理解している。おかげで防御面については全く問題なさそうだ。

一方東の相川さん達はそこまで余裕を持っていない。

相川さんは満遍なくやれる万能型だが近接をそこまで得意としていない。鷹月さんは指揮班だったので訓練の絶対量が少ない。

安全第一でやっている今はまだ問題ないが、そのうち疲れてくると体の方が追いつかなくなってしまうかもしれない。

やはり早く中央を潰して援護する必要がある。

そして重要な中央。こちらは残念ながら攻撃の方がうまく行っていない。

防御についてはまず問題ない。谷本さんが想像以上に動いてくれているというのもあるし、ここは三対一だ。

サポート役の四十院さんは自分もまた的になるとばかりに子分Bの視界にわざわざ入って引きつけようとしている。支援型のメイ

シュトロームを選んだ時点でてつきり前に出るつもりはないのかと思っただが、積極的に前に出て相手を攪乱しようとしていた。おかげで子分Bは攻撃対象が二つできてしまいどちらかを集中して攻撃できていないようだ。

それなら後はオルコットのレーザー攻撃……だったのだが、これがなかなかうまく当てられない。

一番の問題は味方の連携が取れていないことだ。オルコットは谷本さんと四十院さんの合間をぬって攻撃するしかないのだが、それでは味方が邪魔になって得意とするビットによる複数同時攻撃が行えない。オルコットも最初はビットを出しての攻撃を試みていたのだが、そのうち諦めてビットをしまい自身の持つ大型レーザー銃のみで狙うことに切り替えた。

だがそれだけでは子分Bの方も反応できて回避を試みてしまうという状況だ。

要するに、攻撃の手数が足りない。

俺がオルコットに期待していたのはその攻撃力だ。特にレーザーによる貫通攻撃は装甲の硬い相手に対して相性がいい。だからオルコットに全力で攻撃をさせれば一体くらいなら落とせるだろうと算盤を弾いていた。

だがそうそう思い通りにはいかないというのが世の常だ。もちろんオルコットもがんばってはいるが、どうしても攻撃力が半減した状態だ。そのうち倒せるかもしれないが、手数の減った分時間がかかってしまうだろう。そしてその前に相川さん達が落ちてしまつてはそれどころではなくなってしまう。

やはり俺が状況を動かさなければならぬ。

ならば、四十院さんも攻撃に回すか。想像以上に谷本さんがよくやってくれているので、それなりにうまくいくかもしれない。四十院さんを少し後ろに下げればオルコットの自由も広がる。子分Bは攻撃に対しておそらくハイパーセンサーで感じ取って回避をしようとしているから、四十院さんに攻撃をさせてもそれなりの牽制にはなりそう。

一番の問題はここから唯一の的となってしまう谷本さんがどこまで耐えられるか。今のところ問題はなさそうだが、どうしても集中力に限界はある。経験がないのでペース配分などとても考えられないだろう。もし短期で落とせなかった場合は一気に不利な方向へと針が傾いてしまう。

攻撃と安定のどちらを取るべきか。

「智希、一つだけ聞かせてくれ。このままでいいのか、いけないのか」「一夏?」

「その通りだね、やるしかない。四十院さん! 距離取って! ここからは牽制じゃなくて攻撃を!」

「了解です! レーザー銃は用意してあります!」

「谷本さん! ここからは一人だ! 集中して!」

「はいはい! 万事お任せあれ!」

そんな軽く返されると本当に大丈夫かと不安になってしまいが、言い切る以上は信じるしかない。

そして四十院さんがレーザー攻撃を持っていたのは僥倖だ。攻撃をするならそっちの方がいい。

「オルコットさん! 全力で!」

「ありがとうございます!」

四十院さんが離れると同時にオルコットはビットを展開し、子分Bに向かってレーザーの雨を降らせる。よく見ればビットの数が五つに増えていた。谷本さんが大慌てでそこから離れようとし、子分Bは谷本さんを追って攻撃するか回避するかの判断が遅れる。そして躊躇した結果、子分Bは回避しきれずにレーザーの雨を浴びることとなった。

「よっしゃ!」

「こら一夏! ISに乗ったまま自分の手を叩くとか殴るとかしない。生身の体じゃないんだから、そういうのでもシールドエネルギーは減っちゃうのよ!」

「そうだっけ、確かにそりやよくないな。気をつける!」

その瞬間、俺の中に違和感が走った。

これもまたおかしい。明らかに矛盾している。
なぜわざわざそういうことをする。

「あれ、そうするとおかしくないか？」

「何がよ？」

「あのISって武器が体にくっついてるけど、あれで攻撃したら自分を傷つけるようなもんじゃないのか？」

「そういえば……」

人間拳で壁を殴ったら痛い。つまり自分もダメージを受ける。だから人は道具を使う。ISだって同じだ。攻撃したのに自分のシールドエネルギーを減らしてしまつては本末転倒だから、ブレードを用意する。一夏のエネルギー無効化攻撃とは全く話が別だ。

それなのにあのIS達はわざわざ武装を体と一体化させてしまつている。そうするメリットは何だ。それともそうしなければならなかったのか。

「智希、分かるか？」

「今考えてる」

「そ、そうか」

「確かに変ね。装甲を売りにするような機体なのに、自分の攻撃が当たったらシールドエネルギーが減つてしまう……。どういうことだろう？」

攻撃すればするほど弱くなつてしまふISなど聞いたことがない。というより存在する意味がない。一夏の場合は強大な効果を発揮させるための対価だ。つまりあのIS達も同じ理由だろうか。

それ自体にメリットもなさそうなので、何かの対価としてあの状態が生まれている。ではそれは何だ。

「でもこっちに不利じゃないならいいことだろ。むしろそれならみんなが疲れる前に一気に畳み掛けたほうがよくないか？」

「それ要するにあんたが出たことによってしょ」

「いや、それが言わないけど、でもあいつらそこまで強くないぞ。攻撃が雑だからみんな避けられてるし、そもそも反応がよくないっていうか遅い」

「そうね、クラス代表ぐらいの力があれば一対一なら勝てない相手じゃないかもね」

万全の一夏や鈴であれば一対一で勝てる相手か。

確かに、篠ノ之さんは例外にしても相川さんや谷本さんといった初心者とそこまで変わらないレベルでもそこそこやれているというのはれっきとした事実だ。

ここにあのIS達を送り込んだ人間はそれは理解していたか。もちろんそうだろう。つまりリーグマッチの出場者ならこのISでも勝負になると考えた。蹂躪をしに来たわけではない。ならば答えはそういうことか。

「一夏に鈴、そこまで言うからには実際にやってくれるんだろうね?」

「お、もしかしてようやく出番か!」

「落ち着きなさい一夏。智希、でもあたし達さすがにこの時間じゃそこまで回復はしてないわよ。それは理解してる?」

「もちろん。その上でだ」

「分かった。じゃあ何をすればいいの?」

一夏は紙装甲、鈴はエネルギーなし。この状態だからこそ俺は二人を出すのを躊躇っていた。だが本人達はその目で見ていけると思うのであれば話は別だ。

一試合終えた後だったので精神的な疲れも心配だったが、この分なから要求もできる。

「一夏は相川さんと交代して。ただし全回避が条件だ。攻撃しなくていいから一発ももらわないこと。できる?」

「さつき鈴相手にやったことだろ。やってみせる」

「あたしは?」

「鈴にはかなり難しいことを……しまった!」

ギリギリで遅かった。ついに相川さんが捕まってしまった。連撃を回避しきれず二発目を腹にもらってふっ飛ばされた。

一番気をつけていたはずなのに、思考に嵌って観察が疎かになってしまった。

「一夏!」

「任せろ！」

間髪入れず、一夏がイグニッション・ブーストで子分Cに向かって突進する。

そして相川さんにとどめを刺そうとしていた子分Cに斬りかかり、打ち合いが始まってその間に相川さんはかろうじて脱出した。

「相川さん！ 下がって！」

「でも！」

「後は一夏がやる！ 今は下がって呼吸を整えて！」

「……うん」

「鷹月さんも下がる！ 一夏に任せて大丈夫だ！」

「でも私はまだ……分かった」

不満そうだがそれでも二人を下がらせる。

完全に俺のミスだ。俺の目にはもう少し行けそうに見えていたのだが、既にギリギリだったのだ。もっと余裕のあるうちに交代させるべきだった。あるいは最初から一夏を出しておくか。

だが反省は後だ。今は戦線が壊れなかったことでよしとするしかない。

「智希、今ので変更ある？」

「ない。というかむしろ早める。鈴は真ん中を相手にしてる打鉄の谷本さんと交代して。ただし条件をつける」

「何よ？」

「回避じゃなくて受けて。青龍刀の二刀流で、子分Bの攻撃を受け止めて欲しい。でも自分の体でもらうことは許さない。そうしたら自分が終わりなのは分かるよね？」

「そういうこと。攻撃を受け止めればそれで相手の装甲を削れるってことね。いいわ、完璧にこなしてみせる」

もちろん完璧にこなさなければ自分が沈むだけなのだが、鈴はあえてそれを口にする。

やれるという自信があるのだろう。

「じゃあ鈴！」

「任せて！」

「谷本さん！ 鈴と交代！」

「まだまだできますって！」

「駄目！ 代わる！」

「えー……」

あからさまに不満そうながらも、谷本さんは鈴と入れ替わった。

しかしあれだけ動いてまだやれるとは意外とやるな。

「もう、ここからが私の見せ場だったのに……あれ？」

「あ、鷹月さんあれを回収！」

「えっ!? うん……」

前線から離れた途端、谷本さんの膝が崩れた。集中が切れてすぐそうなるとは、やはり谷本さんも限界だったのだ。

残念ながら俺にそこまで見分ける目はなかった。

「篠ノ之さん！ 悪いけどもうしばらくかかる！ 無理なら言っ
て！」

「馬鹿を言うな！ この程度でくたびれてしまうような鍛え方はして
いない！」

実を言えば無理だと言われてしまったら非常に困ってしまうので、
今はその言葉を信用するしかない。

もっとも救援が最後になることは伝えてあったので、持久戦の覚悟
と準備はしてくれていただろう。攻撃を捨てて省エネに徹している
ようだし、もう少し持ちこたえてくれると目を瞑るしかない。

「甲斐田君、この二人は？」

「相川さんも谷本さんもお疲れ。と言いたいけど、今は自分の体力を
回復させることだけ考えて。できれば親分機をやるときに復活して
くれると嬉しい」

「うん……」

「はい……」

二人とも気持ち的に落ちてしまっているか。役割をこなせなかつ
たと自分自身に対して落胆してしまっているのだろう。

それを言えば俺の見積もりが甘かっただけでしかないのだが、二人に謝るのは終わってからだ。

反省をするのはここを切り抜けてからでいい。

「甲斐田君、それでどうするの？ このまま続けて大丈夫？」

鷹月さんの言葉が俺を現実へと引き戻す。

ついに一夏と鈴まで投入してしまった。二人抜きで子分機をどうにかするどころではない。最初の一体すらまだ落とせていない状況なのだ。

それでもはやる気持ちを抑え、ひとまずは鷹月さんに現状を伝えて認識させる。

「とまあ今はこんな感じ。だからオルコットさんと四十院さんに早く落として欲しいんだけど……」

「地道に装甲を削っていくよりは断然早いと思うけど、それでも装甲の硬い相手に対して時間がかかるのは仕方のないことよ」

「鈴に攻撃を受け止めさせて装甲も削ってるからもう少し早まると思う」

「それなら私も出ようか？ 気持ち程度にしかならないとしても」

今中央の子分Bに対する状況としては悪くない。鈴がその場から動かずに攻撃を受け止めてくれることで、子分Bもその場に留まっている。だからオルコット達も狙いやすくなっている状態だ。さつきよりは断然攻撃を命中させている。

「いや、どうせ出るなら装甲が全部削られてからでいいよ。そうなれば全員で集中攻撃して一気に沈める」

「そう、分かった。ひとまず織斑君も篠ノ之さんも問題はなさそうね。今は待つしかないか」

「鷹月さんは状況の変化を見ておいて。さつき相川さん達に気づけなかったのは僕のミスだ。この間に僕は次を考える」

「そういうこと。了解」

そのまま一夏のフォローをさせず鷹月さんを下げたのはこのためだ。俺の相談役に加えて周囲を観察する目をやってもらう。

安全圏にいるというのに俺もまた思考と観察のバランスが取れて

いない。思考に没頭しかけてこの事態を招いてしまった。だから今は考えることだけに集中したい。

紙装甲といえど一夏も相川さんでやれる相手なら全回避を要求しても問題ないだろう。

「現状前衛に問題はなし。篠ノ之さんはまだ息も切らしてない。織斑君はかなり余裕。凰さんは完全に相手の攻撃を見切ってる」

それならこの後は予定を変えて篠ノ之さんの方を救援しよう。放っておくなら防御に専念する篠ノ之さんよりも回避特化の一夏の方が信頼性は高い。むしろ篠ノ之さんには攻撃を担ってもらいたい。相手が硬い以上高威力のブレードでぶっ叩くのもまた有効だ。それに一撃でももらったらアウトの鈴を前に出し続けるのもまた怖い。専用機の鈴はそこまで回避ができないのだし。

「攻撃の方も問題があるってことはないわね。被弾した時の反応から子分機Bは確実にダメージを受けている。無理に何かをしなくてもこのままやっていけば落ちると思う。そもそもあのISって私達みたいに目の前しか気にしてないみたいだし」

確かにそれは本当に助かった。向こうもまた初心者レベルであつてくれていたがゆえに、俺達はここまでやれている。

一夏などは今や完全に相手を格下扱いしている。バランスが崩れると怖いのでやらせないが、この分なら攻撃までさせてもそれなりにやってしまうのではないかとさえ思う。

三体送って一夏と鈴の相手をさせようとしていたくらいだ。一対一なら確かにこちらの方が分があるのだろう。

と、俺の中に疑問が浮かぶ。

それならあのISに乗っているのはいったい誰だ。

初心者程度の腕しかないのに難攻不落とも言えるIS学園に乱入までしている。入る手段は用意されていたとしても、この後どうするつもりだ。俺達を人質にでも取るつもりか。いや、それすらできない程度ではないか。

乱入するときには不意をついたのでいいかもしれないが、逃げる場合はそうもいかない。それに顔を隠してIS学園に乱入など全世界に

指名手配されてしまう次元の話だ。普通に考えて逃げきれんはずがない。

ここにあのISを送り込んだ側の意図はおおよそ想像がついている。何かの実験か、パフォーマンスか、一夏の実力を測りたいか、もしくはその全部だ。では送り込まれた側としてはどうなる。最初から逃げるつもりがないのか、それとも逃げる必要がないのか。

「鷹月さん、ちよつと実験をお願いしたいんですけど」

「実験!? 今のこの場で何を言ってるの!？」

「もちろん自分でやればよかつたんだけど、僕が乗ってる打鉄は故障してるみたいなんだ。だから五体満足な鷹月さんにお願したい」「待って、そういう話じゃなくて、実験なんて今やってる場合なの!」「確認が欲しいんだ。別に難しいことをやれって話じゃない。やって欲しいことは一つだけ。ここから奥にいる親分機に向かって攻撃を仕掛けて欲しい」

「ちよつと待って。だから何がやりたいのかさっぱり分からないんだけど」

「ごめん。一から説明してる時間が惜しい。後で説明はするからやるだけやってもらえない?」

本当に、故障機を引いてしまったのは失敗だった。

思ったことをすぐさま実行できないのがこんなにもどかしいとは。

「銃を構えるくらいなら自分でもできるんじゃない?」

「それがさ、多分それやると一番近くにいる子分機が襲ってくると思う。だからまともに動けない僕だと逃げられない」

「何それ……って言いたいけど、もう今はいいわ。詳細は後で聞くとして、それなら甲斐田君からも離れるわね」

「あ、そうだった。近くにいたらついでにやられる可能性があった。じゃあ篠ノ之さん側に寄って。一夏よりも不測の事態に対処できそうだから」

「了解。というかそれだと私も全速で逃げないといけないわね」

文句を言いながらも鷹月さんは西側へと移動する。そして子分Aからある程度の距離を取った上で、自分の銃を親分機に向かって構え

た。

「なんだ!？」

途端に子分Aが目の前の子分Aの無視して鷹月さんに襲いかかる。それを見て鷹月さんはすぐさま攻撃態勢を解き大慌てで逃げ出した。

「よし！ 予想通りだ！ 篠ノ之さんごめん！ それよろしく！」

「甲斐田！ 今度は何をした！」

「実験成功と今後の方針が見えた！」

「そういうのはやる前に言え！」

「ごもつとも。」

篠ノ之さんはすぐさまイグニッション・ブーストで突っ込んで後ろから子分Aに斬りかかり、なんとそのまま無防備な背中へとブレードを叩きつける。子分Aはふっ飛ばされるもすぐに立ち上がり、鷹月さんのことなど忘れたかのように再び篠ノ之さんと相対した。

これは思わぬ副産物だ。

「あー……怖かった。甲斐田君、どういうこと？」

「一言で言うと、あのISはバカだったこと」

「バカ!？」

命令されたこと以外何もしないというのはバカだと言っているらしいだろう。

しかも最優先の命令がされるとそれしかできなくなるなら視野狭窄もいいところだ。

「あの子分機を動かしてるのは人間じゃない。あのISは要するに口ポットだ。そしてそいつらに命令をしているのが奥にいる親分機なんだ」

親分機は自分が攻撃されそうになったら子分機に守らせようとするだろうと思ったが案の定だ。

ISは何より搭乗者を守るという特性から、自身に対する攻撃行動をすぐ感じ取って搭乗者に教えてくれる。そして親分機は全く届かない距離だというのに攻撃されようとしているというだけで過剰とも言える反応を見せてくれた。そのまま放っておいてはいつか攻撃

されてしまうと判断したのだろうけれど。

この分ならあの親分機は複雑なことなどともできない。今も三分三機に命令するだけで手一杯だ。そして自身は攻撃どころか自衛の手段さえ持っていないだろう。ここまで見ていても乱入しておきながらいくらなんでも無防備過ぎる。

親分機は始まってからずっと、その場から動かずに突っ立って首を右に左にと振るだけだった。

ISは人間、それも女性でないと動かせない。

これはISが開発されてから全く変わらない事実だった。

IS研究者どころか開発者たる篠ノ之東博士にさえどうにもできないことで、そもそもどうにかする以前になぜそうなのかが分からないという有様だ。

たとえスーパーコンピュータを使って擬似的な人格を作っても、ISは起動しかけてもすぐに止まってしまおうという現象が繰り返された。

ISを動かすには心が、それも女性という優れた心でなければならぬのだと、女性上位主義者達は鼻高々に喧伝していた。

「ここにあのISを送り込んだ人は、ISを動かすには男性どころか女性どころか人間である必要さえないって言いたいんだろうね」

「だから男性である織斑君が優勝を決めたタイミングで乱入してきたと……」

武器を扱うことさえできないレベルであるとはいえ、操縦技術的にどうかというのは全く問題ではない。人でなくてもできるかできないかだけの話なのだから。

そしてできてしまった以上は、もはや男がISを動かせることに何の意味があるのかという方向へと発展していくのだろう。

「まあ外野の話はどうでもいい。今大事なのはこれで完全に勝ちの道筋が見えたってこと。脊髄反射的な行動をするのならそれを利用するだけだ」

「今私がやったこと？」

「そう。しかもその間は完全に無防備になるみたいだ。こんなおいしい手を見逃すわけはないよね」

「となると……真ん中が落ちて人に余裕ができた時から勝負ね」

さすがに鷹月さんも自分でやったからにはよく分かっている。

囧を一人置いてその人が狙われているうちに後ろから全力攻撃を浴びせればいい。何しろ親分機を守ろうと脇目も振らずに突っ込んでくるのだから。

「囧となる前衛は誰がいいかしら？」

「回避よりも受けてくれた方がいいね。万全なら鈴だけど、今は篠ノ之さんかな」

「なら真ん中が落ちたら次は西ね」

やはり一人で考えるよりは会話した方がスムーズでいい。変な方向に流れなくて済むし、何より判断の正しさを確認できる。

時間がなかったとはいえ、一夏と鈴を温存する判断も鷹月さん達と会話をしていたらまた別だったかもしれない。

「いや、ただこのまま待っているくらいなら真ん中の子分Bにもやってしまおう。四十院さんに一回だけ囧をやってもらって、集中攻撃してもう一気に沈めようか。事前に分かっていたら心の準備もできるだろうし、無防備な相手なら後ろから鈴の青龍刀も当てられる」

「なるほど、私でもできたし確かに距離があれば大丈夫そうね。それならみんなに一度説明をして……あっ！」

「鈴！」

突然鈴の体が上空に投げ出された。アッパーのような下からの攻撃をもらってしまったか。

そうか、二刀流の鈴はクラス代表レベルまではなかったのか。だから立ち止まって何十発も受け続けてはいつかもらってしまうこともあり得たのだ。

しかしまずい。今この瞬間前衛が足りない。戦列を離れて気持ちいが切れた相川さんと谷本さんはおそらくもう戦力にはならないだろう。

「させません！」

鈴に追撃をしようと飛び上がった子分Bに対して四十院さんが銃撃を打ち込む。装甲がもうなくなっているのだろう、子分Bはそれだけでよろけて体勢を崩した。

つまりもう一息で落とせる。ならば。

「僕が引きつける！ みんなは全力で攻撃を！」

重い体を前に出し、俺は奥の親分機に向かって銃を構える。すると思い通り、子分Bは俺に向かって突っ込んできた。

どうせ戦力外の身だ。一撃くらいもらっても何も変わらない。

「何してる！ 早く！」

だがオルコット達の方が反応できていない。先に説明をしておけばよかった。

子分Bが迫ってくる。形だけでも回避行動を取るか。いや、やるだけ無駄だろうし俺に攻撃しようとしているうちはこいつは回避しようと思えない。このまま喰らってやろう。

俺のもう目の前に来たところで、ようやくオルコット達の攻撃が子分Bの背中へと叩き込まれる。だが子分Bは明らかにダメージを受けながらも構わず俺の対してその左腕を振り抜く。

「甲斐田君！」

衝撃を感じると共に俺の体は勢いよく飛ばされた。自分の体が地面をものすごい速度で転がっているのが分かる。

だがさすがはIS、全く痛みを感じない。ISに乗っているというのは超分厚いクッションに包まれているようなもので、攻撃を受けたという感覚はあっても痛みにまでは至らない。

搭乗者の安全を守ることにかけては何より優秀だと言われているだけはある。

「甲斐田君！」

鷹月さんの声で我に返る。そして勢いが弱まったところで踏ん張って止まった。

顔を上げると泣きそうな顔になっている鷹月さんがいた。確かに目の前であんな光景を見せられたら心配にもなるか。

「大丈夫!？」

「うん、なんとか。それより子分Bは?」

鷹月さんが向いた方向を見やると、子分BらしきISが地面に倒れ伏している。そして必死な顔でこっちに向かってくる鈴がいた。とどめを刺したのは鈴か。というか大丈夫だったか。

「智希!」

「なんだ、鈴は大丈夫だったんだね」

「それはこっちのセリフよ! あんた故障機のくせして何やってんのよ!」

何をするも何も鈴がぶっ飛ばされたのでその尻拭いをしたとしか言いようがないが。

ただそういう正論は鈴の感情を逆撫でするだけだということを知っている。口にはしない。

「よし、ようやく」機落とせたね。鈴はまだやれるの?」

「あんたねえ……まあいいわ。装甲はあったし、それに最初休んで回復したおかげでギリギリ残ったわよ。もう一発ももらえないのは事実だけど、動く分には問題ないわ」

「それなら鈴は後はもう攻撃のことだけ考えよう。無防備な背中に向かって青龍刀で叩くだけだ」

「何よそれ?」

「次からは篠ノ之さんを囮にして……あ、今どうなってる?」

俺は西側、篠ノ之さんのいる方に飛ばされていたようだ。

だが近くにいる篠ノ之さんは相変わらず一人で戦っている。オルコットと四十院さんは一夏に加勢していた。

そうか、篠ノ之さんは最後に言ったからそれに従ったか。

「鷹月さん、さっき話した通りにするから、オルコットさんと四十院さんに説明してこっちにきてもらって。あと一夏にはもうちよつと一人がんばれって」

「う、うん……」

「鈴には僕が説明しておくから」

「そうよ、さっきのはどういこと?」

俺は立ち上がって篠ノ之さんの方に近寄りつつ鈴に説明をする。

話しながら中央に座ったままの相川さんと谷本さんを見ると、こちらを見て心配そうにしていた。

あの様子ではやはり戦列に戻すのは難しいか。最後親分機を集団でボコる時に出てきてもらおうことにしよう。

「そういうこと。まあ実際そうなんだからそうなんでしょうね」

「後は同じことを繰り返すだけだ。それで鈴、篠ノ之さんにも説明するからしばらく代わってもらえる？　もう全部受けろとは言わないから」

「まだやらせてくれるんだ。いいわ。やってあげる」

「お願い。篠ノ之さん！　鈴と代わって！」

「ふざけるな！　私はまだまだやれる！」

「そういう意味じゃないって！　次の作戦を伝えたいから！」

「わ、分かった」

鈴が突っ込んで行き、篠ノ之さんに入れ替わる。

しかし改めてこの人はすごいと思う。最初からここまで一人だけでやりきった。

他が不安定な中終始安定してくれていたおかげで俺は非常に助かったと言える。

さすがは篠ノ之束博士の妹などと言ったら間違いなく怒られるのだろうけれど。

「お疲れ」

「まだ終わってないね。さつきと作戦とやらを言え」

「集中は切れてないね。さつき実験と言ってやったことなんだけれど……」

全員の中で一番疲労度は高いはずなのだが、言葉通り鍛え方が違うのだろうか。

打鉄でこれなのだから専用機を手にした日には間違いなく学年最強となるだろう。そしてそれは彼女の立場からもきつとやってくる未来だ。

「とまあそんな感じ」

「本当にお前は私をとことんまでこき使うつもりだな」

「無理なら一夏にやらせるけど」

「誰もやらないとは言っていない。宮崎先輩との約束だ。今回に限っては全面的に甲斐田に従う」

「やってくれるならなんでもいいよ。あ、オルコットさん達も来たね。じゃあ始めようか」

オルコットと四十院さんが近づいてきて俺を心配するような表情で見ている。

そういえばと一夏の方を見やると、問題なく子分Cの攻撃を回避し続けていた。一人だけぽつんでは寂しいのだろうか、だいぶ中央に寄って来ている。

「よし、みんな揃ったね。それじゃここからは一方的にやろう。基本は篠ノ之さんが囷になって、無防備な相手の背中に他のみんなで攻撃を叩き込む」

「私はどう動けばいい?」

「親分機に向かっていけば勝手に反応してくれるから、囷としての行動をするときはそれを意識して。近づかれたらできればそのまま受けてくれると嬉しい。おまけで装甲も削れるから」

「了解した」

「その後は鈴とうまく入れ替わって、また距離を取って囷行動だ。これの繰り返し」

「なるほどな。相手が馬鹿だからこそできる話か」

「人間相手じゃもちろんこうはいかない。じゃあもう一息、辛抱強くやろう」

篠ノ之さんが俺達から離れる。そして中央側へと進む。

理想は子分Aが篠ノ之さんを追いかける時俺達に背中を見せてくれるような位置関係だ。篠ノ之さんもそれは分かって移動している。そして一度止まった。俺の合図待ちか。

この動きだけでも相当重いと思いつつも俺は手を上げた。篠ノ之さんが囷らしくブレードを掲げて親分機へと動き出す。よし、子分Aが食いついた。

「あ、箒！」

一夏の方を見ると、なんと子分Cまでが反応してしまっている。一夏が中央側に寄ってきたことにより、子分Cまでが反応する範囲に入ってきてしまったのか。

篠ノ之さんは気づくも囮行動をやめない。まさか一人で両方相手にするつもりか。

オルコット達が慌てて子分Aに攻撃をしかけるも、子分Aはまだほとんど無傷だ。ダメージは受けているだろうが動きが止まらない。向こう側の一夏は完全に虚を突かれて反応が遅れてしまっている。

「篠ノ之さん！　一夏側のやつを受けて！」

「分かった！」

篠ノ之さんがようやく囮行動を止めて子分Cに向き直る。

そして俺は重い体を前に出し、再び銃を親分機に向かって構えた。

「甲斐田君!？」

幸い距離の近い子分Aだけが反応してくれた。まあ子分Cは距離もあるし篠ノ之さんを挟んでいるので、たとえ反応されても食い止めもらえるだろうが。

これは仕方ない。俺が浅はかだったただけだ。自分で撒いた種は自分で刈り取ろう。

「このっ！　智希こいつ止まらない！」

俺が攻撃姿勢を取ったままなので当然だ。だから俺が一発もらう間に思いきり攻撃してくれ。

しかしこの故障機、打鉄のくせして盾どころかブレードさえついていない。あつたのは銃が二丁だけで、一丁はさつき弾き飛ばされてしまった。ダメージでもそうだがこれで俺はもう囮役にはなれないだろう。

「甲斐田君！　銃下げて！」

どうして下げる必要がある。この間子分Aは無防備なのだから思う存分攻撃できるだろうが。ああ、俺のエネルギー残量か。既に半分を切っているからこれでもう動けなくなるか。というかこの故障機、なぜ打鉄なのに装甲がほとんどない。いくらなんでも二発もらった

だけでアウトとか故障機とはいえ酷過ぎる。

そんなどうでもいいことを考えているうちに、俺はまたも思いきりぶっ飛ばされた。

「このバカ野郎！ 何ガラでもないことやってんだよ！」

いつの間にか、一夏が俺の側に来ていた。

俺はもう動けないので鷹月さんに上半身を起こしてもらおう。完全に介護老人だ。

「智希は後ろでふんぞり返って俺達に命令してればいいんだよ！ 前に出てくんな！」

「元々戦力外だからむしろうまく役に立ったと思うんだけど」

「だからそういうのは命令して他の誰かにやらせればいいだろうが！」

お前がやる必要なんて全然ない！」

これぞ資源の有効活用だと俺は思うのだが。

二度目は自業自得としても最初は鈴の尻拭いで我ながらうまくやったと思う。

というか一夏は何をヒステリックに怒っているのか。

「そういうのは俺の役目だ。もう動けないみたいだし後はそこで座って見てろ」

言い終わると一夏は踵を返す。

そういえば状況はと思い見渡すと、どっちがどっちか分からなくなつたがおそらく子分Aを鈴が、子分Cを篠ノ之さんが相手している。オルコットと四十院さんは子分Aの方に攻撃を加えていた。

「甲斐田君、一つだけ聞かせて」

「何？」

「怖くないの？」

鷹月さんの不安そうな表情を見て、俺はようやく理解した。

「別に。この通りだし、そもそもISには絶対防御があるからね」

「そういう意味じゃなくて……目の前であんな攻撃を見せられたら普通は怖いと思うんだけど」

「そうかな。ISが全部肩代わりしてくれるんだから、別に怖いとか感じる必要ないよね」

「そうなんだ……」

納得してもらえないだろうなと思いつつも俺は返す。

だが実際そうだ。精神的なものはまた別の話だが、物理的なことについては痛みもないのに怖がる必要などない。三組代表のように気がつかなければエネルギーがなくなるまで普通に動いてしまうのがISだ。痛みがあるとどんどん動けなくなってしまう人間とは違う。

俺からすれば空振っただけで怯えてしまう四組代表などその程度かと思えない。

きっと痛くないという事実がどれだけ幸せなことか分からないのだろうけれど。

「みんな！ 後は俺がやる！ 頼むぞ！」

「一夏！ 分かった！」

「一夏さん！」

「任せなさい！」

一夏が囃役をするつもりのようなのだ。

もう俺の作戦などどこかへ行ってしまった。

一夏は子分AとCのおよそ中間地点まで来て立ち止まる。まさか二体同時に引きつけるつもりか。

そして一夏はブレードを掲げて攻撃する構えを取り、ゆっくりと親分機に向かって歩き始める。途端に子分AとCが反応して一夏に襲いかかった。

「後ろからじゃ止められない……！」

俺は一夏の意図が読めず驚愕するも、ここで初めて連携が生まれる。

篠ノ之さんと鈴はイグニッション・ブーストで自分の目の前の子分機を追い越す。そのまま一夏の前を交差して通り過ぎ、一夏に向かって来る反対側の相手を受け止めた。

会話もしていないのにアイコンタクト一発でそれをやってのけるのか。

「私を抜かない限り一夏に触れると思うな！」

「さつきは不覚取ったけど二度目はもうないからね！」

オルコットと四十院さんは子分Aの背中に全力射撃を叩き込む。相手が回避も何もしていないというのもあって、それらは全てダメージとして蓄積されていく。

「あ、私も行かなきゃ」

鷹月さんが子分Cの方へと向かっていく。その先にはなんと、相川さんと谷本さんが子分Cに対して攻撃を行っていた。

相川さんは銃で、谷本さんはブレードで子分Cの背中に攻撃を加えている。谷本さんは泣きながらブレードでばしばしと叩いていた。駄々っ子か。

そしてそこに鷹月さんが加わり激しい射撃を浴びせる。もう後先など気にすることはない。この二体を落としてしまえば事実上の勝利だ。この期に及んで何もしてこない親分機は間違いなく何も持っていない。

「参ったな。一夏は一切横を気にしてないや」

俺の側には誰もいないのに、思わず感じたことが口について出た。

一夏はゆっくりと歩きながら、その意識を全て親分機へと向けている。だからこそ子分機は一夏だけを執拗に攻撃しようとしていて、それは後ろから攻撃を浴びせているクラスメイト達の安全を意味していた。

自分の安全については篠ノ之さんと鈴に全部任せるという感じで、横をチラ見することさえしない。託された二人は完璧に弾き返し、それどころか攻撃まで加えていた。もう体力温存など必要ないとばかりに全力だ。

そうやって一方的な戦闘が続き、一体目を落とした時よりもはるかに短い時間でまず西側の子分Aが沈む。そしてオルコット達が子分Cに寄って集中攻撃を浴びせ、間もなく子分Cも崩れ落ちた。

「一夏ー！」

「後は任せろー！」

篠ノ之さんの声を聞くと一夏は走り出す。そのまま親分機に近づ

き、側まで来て高く飛び上がる。

空中で大きくブレードを振りかぶり、ブレードの刀身が白く輝く。

「これで終わりだああああ！」

親分機はただ一夏を見つめるだけで、振り下ろされたブレードをそのまま受ける。

そしてゆっくりと仰向けに倒れた。

「全機、全速で入れ！」

急に織斑先生の叫び声が聞こえた。そして轟くような大歓声が響く。

親分機が倒れたことでアリーナに張ってあったバリアが解除されたようだ。警備のISが続々とアリーナに入ってくる。

もう大丈夫だ。

俺はゴミと化したISを脱ぎ捨て、アリーナの地面に寝転がった。

目の前には雲一つない五月の青空が広がっている。

ああ、いい天気じゃないか。

3.2. 逃げられないというのは本当に気が滅入る。

逃げられないというのは本当に気が滅入る。

医務室に放り込まれた俺は安静を言い渡され、行動の自由を失った。

体はISのおかげで傷一つないというのに、医務室の先生というか医者は俺に対して一日は安静にしておくべきだと一歩も譲ってくれないのだ。

どうも俺が二度もぶっ飛ばされたことは傍目には誰もが青ざめるような事態だったらしい。

親分機が倒された後、速攻とばかりに警備のISが俺のところへ飛んできた。やってきた顔見知りの警備の人は重症患者を迎えるかのように必死な形相で、思わず笑ってしまう程だった。

その後は大丈夫だと言うのに立たせてさえもらえず、担架に乗せられて俺はアリーナから退場した。

そしてよく分からない検査をさせられ、だいぶ前に終わったというのに、まだ俺はベッドの上だ。

どこのVIPだと思うが、よく考えたら俺は世界に四人しかいない男性IS操縦者の一人だった。そんな簡単に死なれては困るということなのだろう。

「そういうえば他の人達は大丈夫だったんですか？ 直撃もらったものもいましたけど」

「それは全然問題ないわ。直撃といっても装甲越しだから。本体のエネルギーが削られただけで搭乗者には何の害もない。もちろん検査もしてあるけど、全員平気よ」

「じゃあ僕だってそうじゃないんですか？」

「まだ言うか。だから、君は装甲なしどころかエネルギーを全部持つて行かれて絶対防御まで発動してるんだから。絶対防御の強度以上

の威力だったらそのまま君の体に悪影響を及ぼしてしまうのよ。医者としては少なくとも二十四時間は様子見ないと安心できません」

これも駄目か。さっきからどうにか言いくるめられないかと試みているのだが、結局は同じ論調でシャットアウトされてしまう。

別に違和感の一つでもあれば隠すつもりもないのに、何をそんなに心配しているのかよく分からない。俺だってこれから暴れようなどと考えているわけではない。

あまりに退屈なので寝てしまおうかとも思わないでもないが、今寝ては夜に眠れなくなってしまう。たとえ寮に帰れたとしても部屋にはテレビもないし深夜ではやれることが何も無い。

結果俺を見張っているかのような医務の先生とエンドレスな言い合いをするくらいしかやることがなかった。

「失礼します」

「智希ー、ヒマしてるかー?」

と思っただらようやく救いの声が。

篠ノ之さんと一夏が入ってきた。

「一夏、お前は何を言っている。甲斐田は危ないところだったのだぞ」
「でも大丈夫じゃないか。あの時もあるからに平気そうだったし、実際に何もなかったんだからさ」

「そういう意味ではない。いいか、甲斐田は……」

「あーはいはい。智希、お前しばらくここにいるのか?」

「今日はもう寮に帰らせてもらえないかも」

「マジかよ。今日のこといろいろ話したかったんだけど」

説教を無視されて篠ノ之さんはかなり憤慨した様子だが、まるで気にしない一夏はさすがだと言えよう。

「僕は暇を持て余してるから今でいいけど、一夏は忙しいの?」

「忙しいって言うか、ほらリーグマッチだからお偉いさんがたくさん来てるだろ? なんか挨拶させてくれとかでひっきりなしに来るんだよ。挨拶とかしてどうしたいんだろうな?」

「一夏の立場を考えれば当然の話だ。誼を作っておきたいのだ」

「よしみ?」

「仲良くしたいってこと」

「ああ。でも俺次会つても分かんねえぞ。誰一人顔とか覚えてないし」

堂々と言い切る一夏もどうかと思うが、まあ向こうもさすがに一度だけでどうのとは考えていないだろう。

「それで、甲斐田は本当に大丈夫なのだな？」

「見ての通りって言うか今暇で暇でしょうがない」

「そうか。クラスの皆が心配している。問題ないことは伝えておこう」

「あ、それならむしろ来客大歓迎って言うておいて。することなくて本当に暇で死にそうなんだ」

「分かった。それも伝えておこう」

俺自身が動かなければ向こうからやつてくる分にはいいだろう。というかそれくらいは許容されてしかるべきだ。

医務の先生を見るとそれくらいならという顔で頷いた。

「そうだ、大丈夫だとは聞いたけど、相川さんも鈴も元気だよね？」

「二人ともピンピンしてるぞ。鈴はすぐ中国の人に連れて行かれたけどな」

「相川は精神的には凹んでいるが体の方は問題ない」

「やつぱりそうか。来たら謝っておこう」

「ほう、分かっていたのか」

「そりゃあね。それなら谷本さんも？」

「いや、谷本はいつも通りだ。自ら得意気に武勇伝を語っていたので取り立てて問題はないだろう。ただ多少の誇張はあるようだったが」

「それむしろ釘を刺す必要があるかも」

さすがと言うべきかおかしきと言うべきか。

さては音が外に届かなかったのをいいことに話を作っているな。

「さあ一夏、戻るぞ。甲斐田の顔は見られただろう」

「えっ、もうかよ。まだ来たばっかじゃねえか」

「落ち着けばいくらでも話はできる。今は目の前をこなすべきだ」

「こなすって、何かあるの？ 今日午後は休みのはずだったけど」

「言つたら、お偉いさんの相手だよ」

「篠ノ之さんも？ ああ、そういうことか」

「私がどう思おうと事實は変わらない。ならば一夏と一緒に受けた方が二度手間にならなくていいという話だ」

「いやほんと、箒が隣にいてくれて助かった。俺一人だったら完全に気が滅入ってたぜ」

「そういうことか。篠ノ之さんはある意味自らの立場を利用して一夏と二人で行動する権利を得たようだ。」

「IS 開発者の妹扱いされるのをものすごく嫌がっていたくせに、割り切ったのか、それともただ現金なだけなのか。」

「では甲斐田、また落ち着いたら話をしよう。別に入院というわけではないのだろうか？」

「二日様子見て何もなければ解放してくれるって」

「そうか。今回のことは私にとっての上なくいい経験となった。感謝する」

「どういたしまして」

「ほら一夏、行くぞ」

「もうかよ。あーあ。っと、智希、じゃあまたな」

ぶつくさ言いながらも一夏は手を振り、篠ノ之さんに続いて出て行った。篠ノ之さんがあの様子ならそれなりに無難にこなすのだから。

しかし俺もこうしていなければあの立場か。興味もない大人の相手をするのところが暇しているのとどちらがマシだろう。

もしかしたら気を煩わせないようにと俺は氣遣われてここに放り込まれたのかもしれない。あるいは余計な真似をしないようにと警戒されて。

部屋の隅では医務の先生がカタカタと、パソコン相手に仕事をしているようだった。

次の来客はクラスメイト達ではなかった。

一夏達が出て行つてすぐで、いくらなんでも早いだろうと思いつつ入り口を見ると、一人の女生徒が恐る恐る入ってきた。

誰かと思えば顔を見るのもしばらくぶりな生徒会長だ。

「や、やあ……」

「久しぶりですね。どうしたんですか?」

「も、もちろん君のことが心配で……」

やけに齒切れが悪い。

いつも俺のところによつて来る時のような覇気がない。

これでは俺の言葉に打ちのめされて帰る間際の弱々しさだ。

「それなら見ての通り全然元気ですよ。今はただ大事を取らされているだけで」

「ううん、それは分かっているの。だって扉に耳つけてさっきの会話を聞いてたから。それよりもどうしても気になることがあつて……」

今さらりととんでもないことを言われたような気がするが、これは指摘すべきなのだろうか。というか会話の文脈からして滅茶苦茶だ。

だが当の本人は心が別のところにあるという感じだ。俺の体調以外で何か不安要素を抱えているように見える。

「ああ、気になるといえば妹さんは残念でしたね。そちらは体の方は大丈夫でしたか?」

「ええっ!?!」

試しに別のところから突くかと無理矢理話題を変えてみると、あからさまにビクついた。

そこまでやられるとかえつて嘘臭く見えてしまう。

「ど、どうして私に妹がいることを!?!」

「あれ、四組の代表の人って違いました? 苗字が同じですし見た目的にも姉妹だろうなって思ってたんですが」

「あ、ああ、そういうこと。そうよね。それは分かるわよね」

「一夏のとときはともかく昨日鈴にけっこうやられてましたからね。あれは大丈夫だったのかなって」

「そ、そんなに心配なの……?」

「そんなにというか、まあ普通に」

「嘘……」

この女さすがにクラスメイト達ですら言わないような暴言を吐いた。俺が他人の心配をするという行為はあり得ないことだとも言うたいのか。

と思ったが、よく考えたら最近誰かに同じことを言われたような気もした。誰だったか。ああ、きつと鏡さんだ。よし、腹いせに今度八つ当たりしてやろう。

「そんな……だって二人はまだ出会ってもいないのよ。モニター越しでお互いの姿を見ただけなのに、お互いが相手のことを気にするなんてとてもあり得ない……」

あり得ないの方向性が全然違った。

「妹さんがどうかしたんですか？」

「あの子が見知らぬ他人のことを気にして口にまでするなんて、今まで一度もなかったのに。本音ちゃんにも聞いてたし、何が、いったい何が起こったって言うの……？ ハッ！ まさか、これが伝説の一目惚れ!? いや、一方的ならまだしもお互いにだなんて、そんなことあり得るわけがない！」

生徒会長は俺のことなどお構いなしに一人芝居を始めてしまった。

このあたりは一人で勝手に盛り上がっていく篠ノ之さんと似ている。

「あの一……」

「み、認めないわよ！ そんな簡単に認められるわけないんだから！」

「はい？」

段々俺にも読めてきた。

この人も意外と論理の飛躍が激しいな。

「妹の幸せを誰よりも願う姉として、なんとなくだなんてそんないい加減な理由を通すわけにはいかないわ。本気ならそれ相応の覚悟を見せてみなさい！」

「何ですかそれ？」

「つまり、私を倒してから行けつてことよ！」

生徒会長は仁王立ちして、左手に持った扇子を胸の前で開く。そこ

には『妹命』と書かれていた。

これが世にシスコンと呼ばれる人種か。しかもその愛を受ける側にとつてすごく迷惑そうなレベルに達しているようにも見える。

「覚えておきなさい。私は妹のためなら全世界を敵に回す覚悟さえあるということ……」

不敵な笑みを浮かべながら、生徒会長は去って行った。

そして俺は確信した。この人今自分は最高に決まったと思っっている。外の廊下でガッツポーズくらい取っているかもしれない。

ふと横を見ると、部屋の隅で医務の先生が声を殺して笑っていた。

しかし残念ながら、あそこまで体を張ってくれた生徒会長には本当に申し訳ないのだが、その想像は何もかも的外れである。

四組代表が俺のことを気にするとしたら一つしかない。モニター越しでも俺が四組代表のことを気づいたように、四組代表もまた俺に気づいたのだ。思わぬところで見たくもないものを見てしまったらそれは気になるだろう。

また気になるだけで済まなかった理由は、俺と四組代表の間にある差だ。俺は四組代表のことはその程度かと思わなかったが、向こうは俺が平気でぶっ飛ばされる様子を見て自分との差を理解したのだろう。あれは何だと疑問に思ったところに布仏さんや生徒会長と言った俺を知る人間がいればそれは聞いてしまう。

そして生徒会長はそれを明後日の方向に解釈したと。証明終了Q・E・D。

まったく、俺にとつても四組代表にとつてもはた迷惑な話だ。

そもそも生徒会長が想像する方向から俺達はほど遠い。誰が分かっていて自分と同じ種類の人間を側に置きたいと思うだろうか。

近くには意識せずとも見たくもないものを見せられて思い出してしまうのだ。むしろできる限り近寄りたくない。

だが一方でこれは朗報とも言える。四組代表は一夏に対して個人的な負の感情があるようだが、一夏の隣には俺がいるということは今回理解したはずだ。

このIS学園で一夏に何かをしようとするれば必然的に俺も関わってくる。近寄ってくるのも嫌だが敵に回すのも面倒だと普通は考えるだろう。つまり、俺の存在が四組代表への抑止力になる。

俺を関わらせようとしていそうな布仏さんには悪いが、今後は四組代表に対して適度に距離を取らせてもらおう。さつきまでは後で事情聴取して背景を理解しておこうと思っていたのだが、この分では首を突っ込んでしまうとかえって向こうを刺激してしまう。自分の経験からして開き直っててやぶれかぶれになられてしまうのが一番怖いので、できる限り関わらないようにするのが一番だ。布仏さんに対しては全く興味ないというスタンスでいて、そのうち諦めてくれるのを期待することにする。

とそこまで考えて顔を上げたところ、視線を感じた。横を向けば医務の先生が俺を見ている。そして俺が生徒会長に全く乗っていないことを理解したらしく、つまらなさそうな顔になってパソコンの方に目を戻す。たった数時間の付き合いたが、たいがいこの人もいい性格をしているなど俺は呆れるしかなかった。

クラスメイト達がやってくると、医務室は一気に騒がしくなった。

「本当に大丈夫だったの？」

「あ、よかった、平気そうだね」

「びっくりしたよー」

「甲斐田君ってそんな度胸あったんだねー」

「そ、その程度で心配したりなんかしないんだからねっ！」

流すべきか、俺は一瞬悩む。だが放っておくと間違いなく悪化するだろうと思い、救いの手を差し伸べることにした。

「夜竹さん、そのキャラ違う」

「あれ、あたし甲斐田君の前でどんなキャラだったっけ？」

「よく分からないけど、確か理不尽系超逆切れ女じゃなかったかな」

「それは違う！ あ……」

急に夜竹さんが青ざめる。見れば後ろにいる笑顔の鏡さんから肩

を掴まれていた。

「さゆか、やっぱりあんた私達にまで適当なこと言ってたわね」

「ち、違うよ！　これはちよつとした雑談というか……」

「それならその雑談の内容を聞かせてもらおうか」

「もう勘弁してよ！　昨日あたしが散々あの二人にいじめられてたの
見てるでしょー！」

「それはあんたが適当なこと言つて誤魔化そうとするから篠ノ之さん
とオルコットさんが怒つたの。それなのにまだ隠してたか」

「それは自分の身を守るためであつて……」

「はいはい、全然守れてないから。ここだと邪魔だからこつち来なさい」

「お許しをー！」

開始早々、夜竹さんは鏡さんに引きずられて退場した。

俺は救いの手を差し伸べたつもりだったが、むしろ穴に蹴落と
していたようだ。だがその穴は自ら掘った墓の穴だったようなので、
俺は特に気にしないことにした。

「そういえば一夏達はともかくオルコットさんとかもないね」

「オルコットさんとリアーデさんは自分の国の人が来てるから今日は
その相手だつて。あと四十院さんはお母さんが日本の I S 関連企業
の社長らしくてそつちに行くとか」

「へー。やっぱりリーグマッチつてそういう機会でもあるんだね」

「それはそうでしょ。というか甲斐田君に教えてもらわなかったらむ
しろそのための行事だと思つてたわ」

基本的に I S 学園とは外から隔離された施設だ。

だから外に対して何かを公開する行事があれば関係者はここぞと
ばかりに押し寄せる。一学期は一年のクラス代表によるリーグマツ
チ、夏休みにある三年の集団模擬戦、三学期は二年の個人戦、後は二
学期始めのお遊びでやる学園祭くらいだろうか。ああ、あと夏休み前
に中学生向けのオープンスクールがあった。これはきつと俺達も駆
り出されるのだろうか。

「家族の人は今回入れないんだっけ？」

「一般の人が入れるのは学園祭くらいね。あとは中学三年生限定でオープンスクール？ でもあれは事実上IS適正Aランク向けらしいから、果たして一般と言つていいかは分からないけれど」

こんなところにもIS適正というカースト制度が機能していた。

とはいえ適正Aランクは数が少ないそうだから、IS学園としてもできる限り引き込みたいのだろう。

「なるほど。おっと、脱線しちゃったね。それで話では聞いてたけど、アリーナの中に入った人達はみんな大丈夫でいいんだよね？」

「もちろんよ。というかダメージを受けたのは甲斐田君以外は相川さんと凰さんくらいだから。凰さんにはいないけど、全然元気そうよ」

「相川さんは？」

鷹月さんが難しい顔になって後ろを向く。

そして押し出されるようにして相川さんが出てきた。下を向いていて、明らかにさつきまで泣いていたという顔だ。完全に気持ちが落ちている。

「相川さん、体調よくないの？」

「全然平気」

「とてもそうは見えないんだけど」

「甲斐田君と違って一発ももらっただけでしかも装甲越しなんだから問題とかあるわけないし」

「じゃあどうしてそんな顔してるの？」

俺の言葉を聞いた途端、相川さんは涙を溢れさせた。

そして涙を流しながら顔を上げて俺を見る。

「ごめん！ あたし全然役に立たなかった！ 任された役割を全然できなかつた！ 逃げ回って時間を稼ぐだけだったのに、一番最初にやられちゃった！ 甲斐田君の期待に全く応えられなかった！」

「時間なら十分稼いだよ。期待を言うなら僕の想像の範囲内ではあるね」

「嘘だ！ あれで甲斐田君の予定が崩れたよ！ あたしの代わりに織斑君を出すしかなくて、甲斐田君の計画が大幅に狂ったの分かってる

！ 最後は甲斐田君自身まで前に出るしかなかったのも元はといえ
ばあたしのせいだ！」

慟哭と言う言葉はきつとこういう状態を指すのだろう。

相川さんの自分に対する怒りが痛いくらい飛んでくる。

相川さんのもつと子狡くて適当な人だと俺は思っていたのだが、人
並み以上の責任感も持ち合わせているようだ。

このクラスは全員にその傾向があるとは思っていたけれど。

「なるほどね。じゃあ相川さん、僕の考えを言うからとりあえず聞いて。きついことも言うけど反論は後で聞くから。まず僕の予定云々
だけど、相川さんが最後までもたないと言うのは最初から織り込み済
みだった。もちろんできるだけ長くもって欲しいなどは思ってたけ
ど、経験もないのにいきなりやらされて完璧にこなすとか最初から期
待してないしするべきことでもない。だから相川さんがやられてし
まうことも想定はしていた」

「そうなの……?」

さあ後付け論の開始だ。別に俺の作戦が間違っていたでいいのだ
が、それでは相川さんは俺が庇ったと思って間違いなく納得してくれ
ない。

それならもういつそ想定通りだったということにしてしまえと言
う話だ。

「時間なかったから言わなかったけど、僕が相川さんと、あと谷本さん
に期待していたことは一つだ。相川さんには一夏がエネルギー無効
化攻撃を出せるくらいまで回復する時間、谷本さんには鈴が一発くら
いもらっても大丈夫なほどには回復する時間、それを稼ぐこと。そう
いう意味では二人とも僕の期待は越えてくれている。実際そうだっ
たからね」

「ほんとですかー!?!」

大声がして、谷本さんが勢いよく前に出てきた。その目には涙が、
というよりは大泣き状態だ。もしかして後ろで声も出さずに泣いて
いたのだろうか。

「そうだよ。だって一夏は最後エネルギー無効化攻撃を出せたし、鈴

も一発もらったけど平気だったじゃないか。二人を最初から出してたら鈴がやられて最後はギリ貧で負けてたろうね。二人が回復する時間を作るというのをきっちりやってくれたんだから、僕は感謝しても文句を言う気になんかとてもならないよ」

「本当に……？」

「よかった、無駄じゃなかった……」

理由はともかく二人に文句を言うつもりなどないのは事実だ。

どちらかなどと言うまでもなく、あり得ると分かっているながら相川さんの状態に気づかなかった俺が悪い。

ただ一夏に説明を終えていたというくらいには運があつたという話で。

「あの時一夏がすぐ入ってきたでしょ？ あれって要するにもう一夏のスタンバイはできてたつてこと。うまくいったから正直に言うけど、あれは僕が欲張ってもうちよつといけるかなーって引っ張りすぎたせいだ。だからその後やり過ぎたと思つて慌ててすぐに谷本さんを問答無用で交代させたんだ。そういう意味じゃむしろ怒られるべきは僕かな。二人に無理をさせ過ぎだつて」

「そんなことない……そんなことない……」

「よかった、役立たずじゃなかった……」

この二人にとつて、俺の作戦がどうだったかというのはあまり関係ない。気にしているのは俺の期待に応えられなかったのでは、そして役に立たなかったのではないかということだ。

だから俺は期待通りだし十分役に立ったと言えるばい。なんだからで勝利という最良の結果が出ているのだ。終わつてしまえば何とでも言いようはある。

「もちろん、相川さんが一夏並にやってくれるならまた要求は変わってくるよ。だけどそういうのって言い始めたらきりないし、分不相応なことは相手に求めるべきじゃない。だから僕らは今の自分達ができることを最大限にやってみ事勝利した。これでいいと思うし、実際そうだ」

「うん……うん……」

「はいいいい……！」

相川さんは落ち着いてきたのか笑顔まで出してまだ綺麗な泣き方だが、谷本さんがひどい。顔をくしゃくしゃにして涙流して鼻水まで垂らして、恥も外聞もないという有様だ。元々そういう方面は気にしない性格でもあるけれど。

周りのクラスメイト達はもらい泣きをしているのがわりといる。後ろにいるのかぱっと見姿は見えないが、岸原さんなどはきつと堪えられていないだろう。皆がやってくるまでに突貫で構築した論理はうまく通つたと言えそうだ。

「二人についてはこんなところで。鷹月さん、みんなにさっきの中身については説明してある？ 音が遮断されてたから外から見えた人は何が起こつたかくらいしか分からなかったと思うけど」

「う、うん。私達は一通り検査を受けた後解放されて、みんなと合流したからその時に」

「なるほど。あ、そういえばあの後リーグマッチ自体はどうなったの？ 一応三組と四組の試合が残つてたはずだけど」

「それはもちろん中止。あんなことがあったのに続けるとかないわよ。ただあの事態について会場に来た人にどう説明したのかは知らないけど」

「あの変なISは？」

「警備のISに運ばれていったわ。見てて人が乗ってるって感じの扱いはなかったし、甲斐田君の言った通りだと思う」

リーグマッチは中止か。

これはおそらく確認してやっておかなければならないことができた。

「ふーん。ま、真相究明は僕らの仕事じゃない。それに本当はどうだったのかって教えてもらえらるとも限らないしね。それよりも僕は外からはどういう風に見えたのか知りたいな。いきなり変なISがやってきて僕らがアリーナに入ってきて戦闘が始まるとか訳分かんなかったんじゃない？」

「そうそう！ ほんとびびくりしたよー！」

「そんな予定聞いてないよって感じで、最初隠してるなんてずるいつて思った」

「あれ、岸原さんと布仏さんが来なかった？」

「来た来た。それでトラブルなんだって分かってもうどうなるんだろうってハラハラしながら見てた」

「だよね。それで岸原さんと布仏さんは……どうしたの？」

「は、はい……」

「かいだー……」

見渡すと整備班の人達が道を開けるように体をずらした。そして開いたその奥、隅の方で二人が申し訳なさそうに立っている。まさかこっちもか。

「あー、あのさ、残るというのも一つの選択だよ。訳が分からないまま流された挙句みんなの足を引っ張るんじゃないかって、きちんと今の自分について考えて決断した。それはあの状況で冷静な判断だったと思うし、実際僕らに岸原さんと布仏さんを守りながら何かをする余裕はなかった。だから僕は残ると言われたら無理を言わなかったでしょう？ できることできないことをきちんとわきまえておくのはとても大事なことだ」

「甲斐田君……」

「かいだー……」

終わり良ければ全て良しなどと言ったのは誰だ。

綺麗に終わったはずなのに後始末だらけではないか。

「やって欲しいことがあったら無理にでも入れてた。それに僕にはこれ以上の人数を見ることもできなかった。実際あの人数でも見きれなくて、僕は後半から鷹月さんに頼ってたくらいだ。もし二人が入ってたら僕はパンクしてたかもしれない。篠ノ之さん並に放っておいていいのなら大歓迎だけど、そうじゃないんだから踏みとどまってくれたのは結果的には助かった。むしろそこにいたのが岸原さんと布仏さんでよかったよ」

「そんな……」

「ほんとに……？」

もう終わったというのに、どうして俺はここまでやらなければならぬのか。

指揮官とは部下の心のアフターケアまで求められるものなのだろうか。

だが目の前にいる以上、そして求められている以上、もう少し俺は俺の役割を果たす必要があると思う。

確かにリーグマッチとおまけのエキシビジョンマッチは終了したが、他にもまだ俺は自分の役割を終えていない。

クラスメイト達が場所を構わず騒いでついに怒った医務の先生から叩き出された後、俺のところには立て続けに客がやってきた。

どうやら一夏が俺のことを聞かれた際に今甲斐田は暇していると行って回っているらしい。

別にそこまでやれと言ったつもりはなかったのだが、一夏は何も考えていないのか、それとも自分と同じ目に遭わせてやろうとでもしていたのか。

だがそういうわけで、俺のいる医務室には一夏から話を聞いた各国のIS関係者達がやって来た。

「故障機とはいえたった二発でK.O.とか情けないわねえ。あたしが一から鍛え直してあげるから感謝しなさい」

最初にやってきたの鈴だった。

相変わらずの憎まれ口で、本人も元気そう。

一緒に中国の管理官もいて、笑顔で鈴との仲直りアピールに余念がなかった。ただ鈴も嫌そうな感じでは全くなかった。相応の信頼関係は元々あったのだろう。

「あの時はもう心臓止まるかと思っちゃったよ。本当に大丈夫なんだよね？」

鈴が帰った後は二組代表のハミルトンがやって来た。もちろんカナダのIS関係者と一緒だ。

夏休みにカナダを訪問することも決まっているので、とりあえずハ

ミルトンを持ち上げて愛想よくしておく。

「初陣とはとても思えない指揮だったと思いますわ」

と逆に俺を持ち上げたのはオルコットだ。

本国の人間をこちらには引き連れているという感じで、やはり貴族という人種はそういう姿が似合うものだ。俺は意味もなく感心した。

その後四十院さんがIS関連企業の社長だという母親を連れてきたり、三組代表が心配そうな顔で俺の様子を見に来たり、リアーデさんが自国の勝利の歌を歌い出して医務の先生がキレたりしたが、いい感じに俺は暇を潰すことができて夜になる。

「お腹空きました。あと話をしておきたい人がいるんですけど」

「食事はいいとして、誰と話したいの？」

「織斑先生です。さすがに顔くらい見せておこうかなと」

「なるほどねえ……そろそろ職員室に戻ってるかな？」

「忙しいとか会いたくないって言うなら別にいいですけど」

「会いたくないって……とりあえず聞いてみるけど」

医務の先生は部屋の電話をかけて二言三言やり取りをする。顔からして大丈夫そうだ。

「顔見せるくらいならいいって」

「じゃあ行きます。ちなみにご飯はここですか？」

「さすがにそれは寮にしましょう。それとも一人で食べたい？」

「別にどこでもいいです。職員室行った後そのまま向かっていいですよね」

「そうね。それじゃ準備するからちよつと待つて」

「はい。ちなみにそこで僕は解放ですか？」

「残念だけど一晩は解放できないわね。今夜は私の監視の下寮の一階で寝てもらおうわ。場所は用意してあるから。あ、添い寝くらいはしてあげてもいいわよっ。」

「小学生じゃないんだから結構です」

プライドでも傷つけられたのか、医務の先生は露骨に懨然とした表情になった。

職員室に入った時、俺の方へと一斉に先生達の顔が向く。

後処理に追われていたのだろう、ほとんどの先生がまだ残っているようだった。

これは俺にとって好都合だ。万一失敗した日には目も当てられないことになってしまいかもしれないけれど。

「来たか。こちらだ」

「どうぞ、今お茶を用意しますね」

織斑先生は奥のテーブル席にいた。向かいに座っていた山田先生が立ち上がる。

壁に貼ってあるスクリーンに例のISが映っていたが、すぐに消された。

「あ、お茶はいいです。すぐ寮に戻るので」
「そうですか」

山田先生を手で制して、俺は目立つように職員室の真ん中を突っ切る。後ろから医務の先生もついて来ていた。

「お前の体調についてはあの程度で気にするようなことは何もない。

一応は大事を取ったが、それはむしろ対外的な要素の方が大きい。窮屈だろうが一晩くらい我慢しろ」

「やっぱりそうですよね。あんなのでいちいち安静にさせられてたらIS競技とかできないはずだし」

言いながら俺は後ろを見る。医務の先生がそういう指示なんだから仕方ないだろとでも言いたそうな顔を俺に返してきた。

「もちろんそれは時と場合によるとしか言えないが、少なくとも今のお前については特に心配するようなことはない。分かったらさっさと帰って寝ろ」

「そうですか。それは別に心配もしてなかったのでいいんですけど、一つ確認させてください」

「例のISについては調査中だ。今言えるようなことは何もない」

「そっちはどうでもいいんです。リーグマッチは結局どうなったんですか？」

「聞いていないのか？ もちろんあの後中止になった」

「そうですね。ちなみに、当然優勝の特典は僕らにももらえるんですよ？」

これがリーグマッチにおける俺の最後の仕事だ。

「リーグマッチは中止になったと今言ったはずだが」

「中止になる前に一組の優勝は確定しています。次の三組四組の試合の結果に関係なく。だから優勝の特典をもらう権利はあるはずです」

「行事そのものが中止になったのだから権利も何もないのではないかな？」

「それってつまり全部なかったことにするつもりですか？　じゃあ僕らの努力は全部無駄だったってことですか？」

「無駄なことなど何も無い。貴重な経験は得られただろう」

「もらえるはずのものをももらえなかったらそれはやったことが無駄になったって話じゃないですか」

中止の時点でそういうことになるだろうとは思っていたが、それでも俺は抗議しなければならぬ。

俺は最初にクラスメイト達を餌で釣っているのだ。

「人生とは往々にしてそういうこともある。だが得られた経験は必ず糧となる」

「なるほどそれはそうかもしれませんが。それならIS学園はそういう場所なんですね。努力しても全部無駄になるかもしれないけど目に見えない経験のために努力しろと。努力を続けていても目に見える形で報われないかもしれないけどがんばれって」

俺に皮肉表現に対して織斑先生が絶対零度の視線で睨む。正直滅茶苦茶怖い。

あのISの攻撃はまるで怖くなかったのに、視線だけで恐怖を感じてしまうのはいったいどういうことだろうか。

「お前は目に見えるものに囚われ過ぎているな」

「目に見えるもので釣っておいて何を言ってるんですか。それなら最初からそんなものは用意すべきじゃなかった。でも用意したということはその一年生にはモチベーションとして有効であることも分

かっていたからだ。実際一組に限らず特典に気づいたクラスは目の色変えています」

俺はそのモチベーションを利用した形ではあるけれど。

「だがその努力の過程で皆多くの経験を得られたはずだ。確かに最初は特典が目的だったかもしれないが、今となってはもうそのようなものなど必要ないだろう」

「あつてはいけないものでないのならください。むしろない方が僕らには、一年一組にとってはよくないです」

「ほう、その理由は？」

「IS学園を自分達が努力して出した結果を認めない場所に思えるからです。アクションを理由になかったことにされては、ここは何かと理由をつけてなかったことにする場所なんだと感じてしまいます。それとも本当にここは目に見えない貴重な経験なんかを前面に押し出して目に見える結果や評価を全て切り捨てる場所なんですか？」

「それは違う」

「それならください。僕らの努力の結果を認めてください」

織斑先生が怪訝そうな顔をする。

それはそうだろう。俺がそんな青臭いとも言えるような意見を心の底から思っている人間ではないのを織斑先生は知っている。

俺の真意は何だと考えているだろう。

「これは認めるか認めないかだけの話ですよ？ 元々用意されていたものだから、それ自体に問題は何もありません。そしてアクションがあるうがなかりうが、僕らはそれに値する結果を出している。それとも認めることによつて何か困ることがありますか？」

「なるほどな、そういうことか」

理解した織斑先生が苦笑する。

俺は密室ではなく人前で、他の先生達が見ている中正論で突っ込んだ。

前に敗北した際教えられた通り、徹底したのだ。

徹頭徹尾、クラスの代表ではないがリーダーとして、正面から切り込んだ。

弱みを突くでもなくひっくり返そうとするでもなく、一人の学生として先生に直訴をした。

認めてくださいなのだから完全に弱者の立場だ。相手の胸先三寸だ。

だが姑息なことは何も無い。交換条件というような取引でもなく、認めないと後で後悔するぞというような脅しでもなく、純粹にそれだけをくれという要求、いや下からのお願いだ。

「どうかお願いします」

そして俺は最後に頭を下げる。

これ以上は何もないということを示すためだ。

織斑先生から返答はない。きつとどちらにする方がいいか考えているのだろう。

却下するのは簡単だ。何しろリーグマッチは途中で中止になってしまったのだから。

しかしここにきて認めるという選択肢が浮かび上がってきている。俺の言った通り別に認めたところで特に困ることはないのだ。例年そういう話なのだから。

案外俺ではなく別の生徒に言われていればすんなりと認めていたかもしれない。

つまり織斑先生にとって引つかかるのは、言ったのが他でもない甲斐田智希であったという事実だろう。

「分かりました！ 全部甲斐田君の言う通りです！」

「えっ？」

しかし沈黙を破ったのは俺でも織斑先生でもなかった。

「そうですね！ みんなあんなにがんばって、しっかり結果も出したのに、全部なかったことにされたら絶対に嫌ですよね！」

「や、山田先生……？」

俺の右側、織斑先生の向かいで、山田先生が泣いていた。というより涙を思いきり流して大泣きだ。

俺はあの織斑千冬が思わず慌ててしまうという超貴重な光景を見ることができた。

「甲斐田君が心配するようなことは何もありません！　IS学園は生徒の努力もその結果もすっかりと見ています！　結果を出したのに報われないなんてそんなことあるわけありません！」

「は、はい……」

これは予想外だった。

俺の青臭いとも言える論理は山田先生の方にクリーンヒットしてしまっていたようだ。

いや、確かに織斑先生が認めやすい空気にしようとは思っていた。他の先生達が見ている前でやったのはそういう意味もある。たとえば織斑先生から俺のことを聞かされていても、実物の印象が違ったら一方的な見方はしないだろうと俺なりに考えて行動したつもりだ。

だがまさか山田先生が織斑先生を押しつけて前に出てくるとは夢にも思わなかった。

「織斑先生！　明日の職員会議にかけましょう！　甲斐田君の気持ちは教師として認めてあげるべきことです！」

「そ、そうだな……」

「ありがとうございます。よろしく願います」

すかさず俺に頭を下げられ、織斑先生は一瞬しまったという表情を見せる。

この瞬間から、少なくともこの件について織斑先生は俺の味方をしなければならなくなったのだ。

そして職員会議の出席者たる先生方はほとんどが今起こったやり取りを見ている。誰がわざわざ反対するだろうか。例年そういう話で、別に認めたところで問題が生じるようなことでもないのだから。

「思い切って言いに来てよかったです。よろしく願います」

「任せて下さい！　IS学園は生徒のみなさんのことをきちんと見ていますから！」

笑顔で挨拶して、俺は振り返り来た道を戻る。医務の先生がぽかんと口を開けていたが、特に声もかけず職員室から出た。

結局は全部相手に委ねる形なのだが、正直俺としては結果はどうでもいい。たとえ却下されたとしてもクラスの連中にそのまま伝える

だけだ。掛け合ったけど駄目だったと。

無責任なようだが、これで俺の役割は完遂だ。責任を全部上に押し付けてしまったので、後は文句があるなら先生に言ってくれだ。もちろん無能云々は好きに言えばいいが、俺としてはやれることはやったと開き直れる。

もともとクラスメイト達も途中からは特典のことなど全く気にしていなかったようなので、中止で特典もなくなったと言われたら仕方ないねで済ますのかもしれないけれど。

校舎の外に出ようとしたところで、ようやく我に返ったであろう医務の先生が走ってきた。

寮の食堂で食事を取った後、俺は着替えるため自分の部屋に戻った。

だが一夏は不在だ。どこへ行ったのだろうか。

部屋の中に入り、壁にかかった時計を見て気づく。一夏は今大浴場だ。そういえば、今日はリーグマツチお疲れということわざわぎ一夏のために大浴場を一時間だけ予約していた。

俺が寮に戻って来られないかもしれないと聞いていたので、時間も決まっているし一夏は一人で行ったのだろう。

時間的には俺もまだ間に合わなくはない。ゆったりはできなさそうだが。

どうしようかと少し考えて、ふと、この時間だけは俺は部屋に一人であることに気づく。

ドアの前に行き、鍵を閉める。なんとなく、そうしなければならぬような気がした。

それから窓側に行き、カーテンを閉める。なんとなく、そうしなければならぬような気がした。

そして自分のベッドの端に座る。するとそれを待っていたかのようになり、壁をスクリーンにして映像が映し出された。

俺は部屋の明かりを暗くする。壁に映った先には、よく見知った人

間が立っている。

「やあやあやあ！　いっくんハーレムだなんて独りよがりで自分勝手なお節介はいい加減諦めたかな！」

そこにはウサ耳つけた純愛主義者『篠ノ之束』が、笑顔で両手を振っていた。

二巻 余波と転入生とタツグマツチ

1. IS発明者篠ノ之束

「お久しぶりですね」

と最初に俺は返事を返した。

「よく分かったね。束さんがスタンバってるって」

「なんとなくです。僕が一人になるのを見つけて出てくるんじゃないかと」

「へえへえ。束さんに会えなくてそんなに寂しかったんだ」

「冗談はそのふざけた頭だけにしてください」

「むむむ！ こんな綺麗で賢い女の人に向かって何を言うのかな！」

ぶんぶん、と漫画的擬音が飛んできそうな芝居がかった仕草で、博士は口だけ憤慨してみせた。

「はいはい。それよりこれはどうしたんですか？ IS学園のネットワークには侵入できないって言ってましたよね？」

「それは違いまーす！ 侵入できないんじゃないやなくて、侵入したらちーちゃんにバレて怒られるからやらなかっただけなんでーす！」

「じゃあ今は？」

「バレなければ怒られることもないのだ！」

えっへん、と相変わらずな調子で博士は芝居じみた動作を続ける。

「つまり千冬さんにバレない方法でも編み出したと」

「ちつちつち、ちーちゃんはすごくしつこいから何かしたら絶対に見つけちゃうんだ。だからこの天才束さんは発想を二百七十度くらい変えることにした！」

「へえ、それで？」

「もう、すごく久しぶりだって言うのに適当だなあ。侵入したらバレるのなら最初から侵入しなければいい！」

「いい加減相槌打つのも面倒なんで結論からお願いします」

「ちよつと！ 今東さんすごく悲しいんだけど！ 威勢よく出てきたつもりなのに何このダダ滑り感！」

「あ、今自分は滑ってるって感じられるようになったんですね。それはすごい成長じゃないですか。また一つ人間に近づけましたよ。おめでとうございます」

「ええええ!？」

「がーん、とでもヒビ割れてきそうな頭を抱えた衝撃のポーズ。

「で、IS学園のネットワークを使わずに今どうやってるんですか?」「もういいよ……。既存のネットワークで何かしたらどうしてもちーちゃんにはバレそうな痕跡が残るから、いつそIS学園内に東さんネットワークを作っちゃえって思ったの」

「そっちの方が思いつきりバレそうな気がするんですが」

人はよく言う。バカとキチガイは紙一重だと。違った、天才とキチガイだった。だがこの場合は同義か。

「もう完全に溶けこませたから平気。今やもう最初からあったのと同じだね」

「またつまんないことに力入れますね。この四ヶ月はそんなことしてたんですか?」

「違うよ! そんなのは一ヶ月かそこらでできたけど、待ってたんだよ。今日というこの日を!」

「今日?」

「ちーちゃんの意識がIS学園の外へ向かって、中に対しては疎かになる日」

「いたずらをし終えたかのような博士の顔を見て、ようやく俺は合点がいった。」

「もしかして、あの変なISは千冬さんの意識を引きつけるための罠ですか?」

「ぴんぽーん! ま、それが全てじゃないけど、おかげで東さんはその間にいい汗かいたよ。あの時間じゃ細かいところまで全部ってわけにはいかなかったけど、東さんネットワークはIS学園内に張り巡らされたのだ!」

「盗撮魔篠ノ之束の誕生か」

「お気に入りの子の女の子いたらお風呂動画くらいは撮ってあげるよ?」

「僕はまだ人の心くらいはあるつもりなのでやめておきます」

「えっ、いるの!?!」

「まさか」

「えー、あんなに女の子に囲まれて楽しそうにしてたのにー」

散々人に振り回され続けたこの一ヶ月半をどう見たら楽しいと思えるのか。

「というかネットワークなどなくても外から覗いているではないか。どこがですか。それで話戻しますけどそれならあのISを送ったのが博士だつてことは千冬さんは分かってる?」

「あ、そらしたね。まあいいけど、トーゼンだよ。あれはあれで意味のあることだし、束さんから親愛なるちーちゃんへのプレゼント?」

「気持ち的にはお詫びの品かな」

「そんなのはなんでもいいよ。あれでちーちゃんはゴーレムが束さんの目的だつたと考えるんだ」

「ゴーレム?」

「人の力を必要としないIS。ISはまた次のステージへと進むのさ」

正確には進まざるをえない、だろうが、俺としてもそうだろうなと思う。

例えば戦車にISの技術を使えたらとんでもないものができあがるのは俺にでも分かる。

「ふーん。でもその割にはあれってポンコツでしたけど」

「技術つてのは一度できてしまえばあとは加速度的に転がっていくものなんだ。それよりゼロが一になる瞬間こそ尊いと束さんは思うよ」

科学者と言うよりは発明家の思考だ。

別に使う側の人間としては便利であれば何でもいいのだが。

「だから現物渡して後はIS委員会でもなんでもいいから勝手に作れますか。でもあんなバカなことしかできないんじゃないや先は相当に遠そうですね」

「束さんにはやりたいことが山ほどあるのだよ。あんなのは自分じゃ何も生み出せないような連中がやってればいいのさ」

発明家というのとはできあがったものに対しては興味を失ってしまいう人種なのだろうか。

「ま、僕には関係ない話です。あのゴーレム？　がバカだったおかげで一夏が輝けてよかったくらいで」

「あー、あのいっくんはよかったね。最後の一撃はもう痺れるって言うか……あ！　そうだ！　どうして箒ちゃんをあんなつまんない使い方するの！　あれじゃ箒ちゃんはその他大勢の一人じゃないか！」

「どうしても何もそれは当然のことですし」

勝利に終わった以上当たり前のごとくのように俺は言うが、もちろん余計なことを考える余裕がなかったただけだ。

後から考えれば実力的に篠ノ之さんには一体倒してもらってよかった。

「ギギギ……箒ちゃんはあんなもんじゃない、あんなもんじゃないのに……」

「前に出過ぎてあんまり調子に乗られても困りますからね。今回は一夏を守る盾となつていい役割を果たしてくれたと思います。僕的には今のところ順調という感じでしようか」

俺の本心としては一人で戦線を支えてくれて篠ノ之さんには感謝の言葉しかないのだが、そんなことを目の前で悔しがら純愛主義者の前で間違つても口走るわけにはいかない。

「箒ちゃんは、箒ちゃんは、もっともつとできる子なんだから……！」

「ええ、俺も別に一夏に近づくなつて言うつもりはないですし、できるのなら十分に一夏の役に立つてもらおうつもりです。あとついでに言わせてもらいますけど、それなら今回みたいなことはもうやめてもらえますか。陽動ならあの場じゃなくてもよかったですでしょう？」

「ごめん、私はその頼みを聞くことはできない」

と、俺達はお互いにモードを切り替える。

「今回についても私は一つのことだけを目的にしているわけじゃない。智希君の気持ちは聞いてるからそれに対して今さらどうこう言うつもりもないけど、私にだっていつくんにはやってもらわなければならぬことがある。私は私でやるって四ヶ月前に話をしたよね」

「やっぱりそうですか。だめもとだったので別にそれは仕方ないですけど、ちなみに今回俺のやったことは邪魔でした?」

「おもいつきりね。これ以上ない機会だったのに完全に逃しちやったよ。正直言うと間に合わなかったからだけど、やっぱりもう一体は出しておくべきだった。今のうちでなきやダメなのに」

「それは違うと思いますけどね」

「私の目の前にその確かな事例があるんだけど?」

「偶然です。俺がISを動かせるようになったのは偶然でしかない」

本当に偶然に、俺はISを動かすことができた。だがそれを目の前で見てしまったIS開発者は、その偶然の現象に今も取り憑かれてしまっている。

「偶然なんかじゃ全然ないよ。むしろそれでようやく理解できたんだから。だからこれらは全て必要なことだ」

「一夏を危険な目に遭わせることも?」

「そうだよ。無駄なことなんて何も無い」

「それなら俺としては一夏にそんなものは必要ないと言うしかない」

こうして俺達の会話はいつも同じ場所に終着する。

「ま、いつも通りの結末だね」

「お互いに変わってないと言う確認だからいいんじゃないですか」

「そうだね」

「じゃあそろそろいいですか。一夏も戻ってきそうですし」

「あ、その前に一つだけ。さすがにこれは伝えておかないといけない」

「何でしょう?」

「さつき智希君が乗ってたIS、故障機とか言ってたけど、あれ専用機だよ」

「は!?!」

なぜそんなものがアリーナの格納庫に置いてある。

「打鉄と思ってたんだろうけど、ほら、二試合目だっけ、いっくんを追い詰めておきながら無様な負け方したのがいたよね」

「四組代表か……」

「いやー、実はさ、あれに専用化技術を教えてあげたの束さんなんだよね。紙につらつらつと書いて目の前にポトツと落としただけなんだけど」

「なんでそんなことするんですか!」

「なんか白式見て喜んでるいっくんを睨んでだからちようどいいな!」
「思って」

「ちようどいいって……ああ、そういうことか。そこまでして一夏を負けさせたいんですか?」

「今のいっくんには必要なことなのだよ」

「だから必要ないって……まあいいや。でもなんでそんなものを放置してるんだ……」

「周りから隠してたみたいだよ。どんなボンクラでも整備士に素直に渡しておけば今のいっくんくらい楽勝だったのに、素人が一人で全部やろうとするとか頭沸いてるかと思っただよ」

「あれはですね、博士に会った頃くらいの僕なんですよ。そんなもの見つけて他人に渡すとかするわけない」

「あ、そういうこと!　なんか今すぐ納得したよ。だから束さんはちよっかいかけける気になったんだね」

目の前で勝手に納得してくれているが、俺としては非常によろしくない。

よりによつて四組代表に知られてしまった。

「参ったな……」

「ま、別に知られたっていいんじゃない?　だつて文字通り動かせるだけなんだし」

「動かせはするけど個体側で拒否反応が出て稼働率九割減ですからね。量産機に乗った方が百パーセントマシって言う……」

「そうそう。だから動かさせたから何だつて話」

専用機とは言葉通り登録されたその人専用だ。他人が動かさせては

とても専用と言えない。

だが俺はあらゆるISを動かすことだけならできる。本当に動かせるだけだが。

博士によれば俺はISを動かすためのマスター権限を持っているそうだ。ただしそれは動かすためだけのものではなく、専用化処理された機体は登録者しか受け付けないので俺に対して拒否反応を示す。だから嫌がっているところを無理矢理動かすという形になるそうだ。

ちなみにこの権限はブリュンヒルデ織斑千冬にもあるとのこと、だから博士にはすぐ分かったようだ。

そしてどうしてそれが発覚したのかと言えば、俺が最初に動かしたISが篠ノ之束専用機だったという話である。

「他人の専用機に乗せようとかまず誰も考えないだろうから、まさかこんなことになるとは思わなかった……」

「まあそうだね。でも別に何も変わらないと思うよ。甲斐田智希はISに乗って何かを成すことはできない、という事実にも何も変わりはない」

本当に、誰も得をしない。俺という個人がたまたまその権限を得てISに乗れるようになったというだけなので、ISに乗りたい男への希望にすらならない。喜ぶとしたらIS基礎研究者くらいだろうか。「うーん、これは色々考え直さないと。あ、教えてくれたことには一応感謝しておきます」

「お詫びってわけじゃないけどそいつ潰しとく？　いつくんの役に立たないどころか噛ませ犬にすらならなかったし、束さん的にはもうどうでもいいよ？」

「別に脅威というわけでもないのでもそこまでしなくていいです。お互いにとって邪魔になるようならまた考えましょう」

「そっか。じゃあ束さんはそいつにはもう関知しないってことで。時間のムダだから」

「了解です。まあ四組代表が一夏じゃなくて僕を気にしてくれるならそれはそれでいい」

「ほんとに君はいつくんが大好きだね。やっぱり東さんにとってのちーちゃんなのかな？」

確かに、親友のためと言いつつその相手を思いきり騙している姿は俺も似たようなものだ。

「どうでしょうね。じゃあまた」

「うん、ばいばい」

「ちよっと待つてくださいー！」

「あー！」

しまったと言う顔で、俺と博士は顔を見合わせる。

久しぶりに会話をしたというのもあって、俺達はやってはならないことをしてしまった。

「どうして私を呼んでくれないんですか！ どうしていつになっても私の話題を出してくれないんですか！」

「ご、ごめんよくーちゃん……」

「いや、時間がなくて仕方なく……」

「二人ともひどいです！」

四ヶ月ぶりに見た小柄な銀髪の少女は、怒り心頭に発するとでも言うべき様子で画面の中に入ってきた。

よかった、これが画面の向こうの出来事で。

「ごめんくーちゃん！ 東さんが悪かったよ！ で、でもさ、ほら、すっごく久しぶりなんだから、そんな怒った顔してないで、ね？」

「あ……」

博士に手を向けられて、怒りの少女は画面の向こうにいる俺を意識する。そして慌てて佇まいを正し、俺の方に向き直った。

「お久しぶりですお兄様。お元気そうで何よりです」

俺にとって血の繋がらない年上の妹であるクロエ・クロニクルは、相変わらずな笑顔を見せてくれた。

「あれ智希、帰ってたのか」

「うん。一夏は大浴場？」

「おう。お前が寮に帰って来れないとか言ってたから悪いけど一人でな。でも戻って来たなら来ればよかったのに」

「もう時間なかったし無理かなと思って」

「そうか。智希、あれは絶対時間見つけて入るべきだ。すっげー気持ちよかったぞ。やっぱ日本人は風呂だよ。いつものシャワーとはもう全然違った」

「でも大浴場を予約しようとするとき嫌がられるんだよね」

「なるほど。かなり混んでたしみんなも入りたいんだろうな。俺達は貸し切りだけどみんなはそうじゃないから、横から入るな早く出て行って感じか」

混んでいたのはきつと一夏の入浴時間前後だからだと思いが、もちろん俺は口にすることなどしない。

別にクラスメイト連中の名誉を守るといような話では全然なく、それを知ったことによつて一夏が女性不信に陥ってしまったわかない心配だからだ。

「篠ノ之さんとかオルコットさんとかいた？」

「いたいた。早く入りたくて我慢できなかったんだろうな。俺が出たらすぐに入つていったぞ」

「そうだね」

何をやっているのかあの連中は。

というかそれは時間的にもフライングだろうが。

「それより智希、パーティやるぞパーティ。協力してくれ」

「パーティ？ 何かのお祝い？」

「そんなのリーグマッチの優勝記念に決まってるだろ」

「みんながやろうって言ったの？ でもリーグマッチは中止だよ？」

「えーと、そうだ、話す順番間違えた。いや、今さっき下で山田先生に会ったんだけどさ、リーグマッチは俺達一組が優勝でいらしいぞ。職員会議で決まったって。山田先生が智希に伝えなきゃって息切らしてたけど、まだ聞いてないか」

明日どころか今日のうちに決めてしまったようだ。

俺としてはポーズが取れただけで十分で、そこまで求めたつもりは

全くなかったのだが。

「入れ違いだね。僕は今ここにいるんだし」

「そうか。山田先生がすごく嬉しそうだったし、あれは早く行った方がいいな。上がってこないってことは下で待ってると思う」

「ああ、今日僕は一階で寝るからだろうね」

「そうなのか？」

「一晩医者が側につきつきり様子を見ましたという事実が欲しいらしい」

「なんだそれ？」

大人の事情とはこういう時使う言葉だろうか。

「別に僕自身はどうってことないからいいよ。じゃあ明日クラスのみんなと話をして……」

「違う違う。準備をするのは俺達二人だけだ。だってそういう場なんだからな」

「は？　そういう場ってどういう場？」

「何言ってるんだ。俺がクラスのみんなに感謝する場に決まってるだろ」

何が決まっているのか俺には全く分からない。

感謝すべきは俺含めたクラスメイト全員で、感謝されるべきは見事全勝してくれた一夏。それ以外に何かあると言うのか。

「あ、分かっている。智希に一番感謝をするべきだって言うのは俺だつてよく分かっている。でも俺一人でパーティの準備をするとか絶対に無理なんだよ。だから助けてくれ。もちろん、お前にはまた別にお礼はするからさ。頼む！」

「別にみんなで一緒に準備してやればいいんじゃないの？　お互いがお互いに感謝するで」

「そうじゃないんだよ。この一ヶ月俺のためだけにみんなあそこまでやってくれたじゃないか。まずありがとうって言うべきなのはどうか考えても俺だろ？」

どう考えてもそれは逆だと思う。

とはいえこうと決めてしまった一夏はもう止まらないだろう。

一夏がそこまでクラスメイト達に恩義を感じているとは思わなかった。

「分かったよ。で、パーティーって一言で言うけど一夏は何をしたいの？」

「いや、上がってくる時にちよつと考えてみたんだけどさ、そもそもパーティーって何をするんだ？」

「は？」

自分から言い出しておいてその意味を問いかけるとはもつと思わなかった。

「も、もちろんありがとうって言うだけじゃ味気ないのは俺にでも分かるぞ？ でも実際何をしたらいいかって言われるとなあ……。やっぱりお祝いパーティーだからお菓子とかジュースでも買って置いとけばいいのかな？」

「オーケー。一夏はクラスのみんなに感謝の気持ちを伝えたい。それでいい？」

「もちろんだ」

「じゃあ一夏にできることと言ったら一つだ」

「何だよ？」

「料理に決まってるじゃない」

「それだ！」

世紀の大発見をしたかのように、一夏は俺を指差した。

施設にいた頃も主な料理担当は一夏だった。その腕は俺もよく知っているし、おそらく主夫として一流のレベルにいるだろう。大人数向けの料理であろうと全く問題ない。

もつとも、一夏が感謝の気持ちを込めて作ったというだけでクラスメイト連中は涙で味など分からなくなるだろうけれど。

「あさっては土曜だし半日で終わりだ。だから午後いっぱい使って準備すればいいんじゃない？ 夜に食堂なら多少騒いでも怒られないと思うし」

「なるほど。確かにそれなら適当なものじゃなくてしっかり作れるからいいな。あ、でも材料とかどうしよう？」

「明日の朝食堂の人に頼むしかないだろうね。急に言われても無理だつて言われたらさすがに日を改めるしかないかな。来週くらいに」
「延期するのは嫌だな。智希、それどうにかできないか?」

自分から何かをやるうと言い出すまではよいが、そこから先は俺に全部丸投げか。

まあ料理を言い出したのは俺であるし、見通しもなしに言ったわけではない。

「そのへんは明日の交渉次第だね。なんならIS学園に出入りしてる業者の連絡先聞いて直接話してみてもいいし、食堂の人に何ができそうか相談してみるよ」

「え、智希つてもしかして食堂の人まで知ってるのか?」

「千冬さんにこき使われてる最中お使いで何度かね」

「お前つて警備の人とか整備の人とかよく知ってるなあ」

正直、一夏が料理をする機会はどこかで必ずあると思っていた。何しろ一夏の唯一と言っているいい趣味だ。

だから俺としても一夏が料理をしたいと言い出した時のために、何をどうすればいいかくらいの算段は立てていた。

そしてあの織斑千冬の弟にして男性IS操縦者の織斑一夏が望んだとなれば、大抵の人間は喜んで乗ってくれるであろうという事はもう十分に分かっている。

どうしても実現不可能でなければ、多少の無理くらいであれば、通すことはまずできるはずだ。

「じゃあ明日の朝寮を出る前に少し話してみるよ。何を作れるかはそれからかな」

「待って待て。寮出る前じゃ全然遅いだろ。食堂が開くのは六時なんだから……四時だな」

「なんでそんな早く!?!」

「バカ、食堂の人達にも朝の準備があるだろ。邪魔しちゃ悪いに決まってるじゃないか。だから来たらすぐ話ができるように待ち伏せてだな……」

「うん分かった。それなら早起きするから。どうせ今夜は監視付きだ

からさつきと寝るしかないし」

「そうなのか？ 別に俺が起こしに行くからそれまで寝てていいぞ」

「一夏も来る気!？」 というかなんでそこまでやる気!？」

「何言ってるんだ。これができるかどうかで全然違ってくるんだぞ。そりゃあ全力を尽くすに決まってる」

一夏のやる気に火をつけたところではなかった。

今の一夏は闘志が燃えたぎっている。

「じゃ、じゃあ僕は戻るね。一階の宿直室で寝てるから」

「そうか、また明日な。何作ろつかなあ……」

「考えこんで夜更かしして寝坊とかやめてよ」

「大丈夫大丈夫。でも食堂のメニューからすると作れるのは……」

なんとなく、結末が読めた気がした。

そして案の定、とても残念なことに、一日で二試合連戦してお偉いさんの相手をしてその上夜更かしまでした結果、一夏は見事に寝坊してくれた。

「甲斐田!」

「甲斐田さん!」

俺に同行を断られた一夏が一人でトイレに行こうと教室から出た瞬間、篠ノ之さんとオルコットが俺のところへ飛んできた。きつと来るだろうとは思っていた。

だが実際やって来て俺が最初に感じたのは、一人足りないだ。相川さんが来ていない。当人の席を見ても不在だ。まさか一夏のトイレについて行ったのではあるまいな。

この三人はリーグマツチまでの一ヶ月で仲良くなり、今や三人でセットだと言われるくらい一緒に行動していたのだが。

「どこを見ている。話があるのは私達だ」

「甲斐田さん、これはどういうことでしょうか!」

しかし二人は俺の視線などお構いなしに抗議の目を向けてくる。

「甲斐田、どこをどうすれば一夏が皆に料理を振る舞うという事態へ発展するのだ！」

「どうして一夏さんがわたくし達に感謝をするという方向なのですか!? まったくの逆ではありませんか！」

そんなことは本人に聞けとしか言いようがないが、まあ実際に聞いた上での話なのだろう。

しかしこの二人と言えどまだこの段階にいるのか。まだ一夏の言葉信じられないのか。

「それがどうかしたの? よかったね、一夏の手料理が食べられるよ」「確かにそれは……いや、そういう問題ではない！」

「そ、その通りですわ! 感謝すべきはどこまでもわたくし達であつて、一夏さんではありません!」

と思つたが少し違うようだ。

なるほど、彼女達は俺の口から望む言葉を聞きたいのだ。

「嬉しくないの?」

「は?」

「一夏に感謝されて、どうして素直に喜ばないの?」

「う、嬉しくないわけないだろう。ただ私達はそれに値しないという話だ」

「そ、そうです。役に立つどころか迷惑をかけてばかりでしたのに、とても一夏さんに感謝される資格などありませんわ」

値しない、資格がない。

自分達にはそう思えてしまうので、そんなことはないと俺に否定して欲しいのだ。

「感謝に値しなかったら一夏がありがとうなんて言うわけないよ。別に篠ノ之さん達にとってどうかじゃない。一夏にとってどうかのかつて話だよね」

「そ、そうか! 一夏にとっては感謝に値するのだな! だ、だが……」

「い、一夏さんはわたくし達の何に対して感謝をしてくれたのでしようか……?」

それこそ本人に聞けだが、もちろん聞いたのだろう。
そして答えなど聞かないでも分かる。

「みんなの気持ちに決まってるじゃない。名目は優勝記念パーティーだけど、別に一夏は優勝しようとしまいと同じことをしたと思うよ。結果は結果で、一夏の中じゃみんなにやってもらったことの価値は変わらない」

「そうか！ やはり一夏はそうなのだな！」

「そうですわ！ それだからこそ一夏さんは一夏さんなのです！」
途端に二人は上機嫌になる。

分かっているなら最初から一夏を信じろとしか言いようがない話だ。

「それで、二人はどうするの？」

「は？」

「どういうことですか？」

「一夏に感謝されて一夏の手料理を食べて喜んで、それでおしまい？」
急転直下、二人はあつという間に青ざめる。

俺としてはそんなところで思考が止まってもらっては困るのだ。

「そうです！ 私達は織斑君に対してまだ何も報いていません！」

いきなり声を上げたのは俺の斜め後ろに座る岸原さんだった。いや、今は立ち上がっているが。

席もすぐ側なので話を盗み聞きしていたのだろう。

「そうだよ。まだなんにもしてないよ……」

「あたし織斑君におめでとうって言ったただけだった……」

「ありがとうって……この場合自分のことしか考えてない言葉じゃない……」

教室内が一気に騒然とする。

今朝のホームルームで山田先生が一組の優勝を誇らしげに語り、さらに一夏の優勝記念パーティーしよう料理作るから宣言でクラスはものすごく盛り上がっていた。

その浮かれた空気に俺は思いきり冷水を浴びせかけたという形だ。

「か、甲斐田……」

「甲斐田さん……わたくし達はいったい何をすれば……」

「それは自分で考えようよ。自分の感謝の気持ちはどう形にするかとか他人がどうこう言うような話じゃないよね」

さすがに俺もそこまで面倒見きれない。

というかこれこそが一夏への絶好のアピールチャンスだろう。

「何かの贈り物か……?」

「いいえ、一夏さんは物品への執着が全くありませんわ。受け取ってはいただけるでしょうが、それで気持ち伝わるかと言えば……」

「甲斐田君……何がいいんでしょうか……?」

恒例の涙目となった岸原さんを見て、またかと俺は思った。

もちろん涙目に対してではない。いちいち俺の方を向くなどという話だ。そんなものは自分が思いついたことがベストでいいだろう。

他人と比較してよりよいものなどと考え出すからおかしなことになってしまうのだ。

「別に難しいことする必要はないと思うよ。一夏と同じように考えればいいんじゃない?」

「織斑君と同じ……? まさか料理ですか!? む、無理です!」

「い、一夏の料理の技術は素晴らしいものなのだろう? とても比べられるようなものは……」

「なるほど、確かに料理はいいかもしれませんわね。わたくしも久しぶりに……」

「すごい勢いで食べてくれたからあのサンドイッチならいけるか……?」

「いいえ、それはよろしくないでしょう。織斑君がわざわざ料理を作るとのことですから、そこに割り込む行為は失礼にあたるかと」

「おりむーのご飯楽しみ〜」

俺の周りにわらわらとクラスメイト達が寄ってきた。

とりあえず谷本さん作どこまでも味の変わらないサンドイッチだけは絶対に違うと言わざるをえない。

「別に料理しろってことじゃないよ。同じようについて言うのは自分ができることをやればいいんじゃないのって話。一夏はクラスのみん

なに感謝の気持ち伝えるためにはどうすればいいかって考えて、自分には料理があるって答えを出したということ」

「何をすべきかではなく何ができるか、か」

「そうそう。気持ちが伝わればなんだっていいんだよ。別にありがとうの一言でも一夏は喜んでくれると思うよ？　正しくその意味を伝えられればの話だけどね」

「簡単なようでいて、とても難しい注文ですわ……」

その通り、俺は彼女達にある意味難題を押し付けた。

一夏をどうとも思っていない整備班連中なら適当に済ませるだろうが、一夏に対して特別な感情を抱いている輩はそうはいかない。

感謝の言葉を述べつつ、自分がどういう人間であるかを一夏に説明しなければならぬのだ。

もちろん大いなるアピールタイムでもあるのだが、果たしてそれがどんな答えを出すだろうか。

俺は周囲を見回す。クラス中がそれぞれ考え込んでいるようだ。

と、鷹月さんと目が合つてすぐにそらされる。そういえばこれは前もあつた。

俺に見られて目を外す人間というのはだいたい俺に対して後ろめたさを抱いているのだが、鷹月さんだけは何か違う。どうも俺個人に対して含むものがあるようだ。

まさか四組代表のようなことはないと思うが、何も言つてこない以上はひとまず放っておくしかないか。

あまり俺自身のことと時間は取られたくないのだが、俺は俺で特殊な立場にいることもまた事実だということを感じ出した。

トイレから戻ってきた一夏は、一変して真剣な表情になっていた。

明日のパーティについて思い悩んでいる様子など一切ない。

俺に声をかけるようなこともなく、無言で席について授業の準備を始める。

いつもとはまったく違う雰囲気、誰も声をかけられないようだった。

だが俺はこの顔になっている一夏をよく知っている。確かにIS学園に入ってから初めてだが、それまではよくあった。

とすればと思い俺は教室の前後の入り口を見る。すると一夏とタイミングをずらしてだろう、相川さんが後ろ側から教室に入ってきた。

相川さんはそのまま席につき、ふと思い出したかのように顔を上げ、俺の方を見る。そして俺と目が合い、すっきりとした顔で笑ってみせた。

それで俺は全て理解できた。

二時間目の授業が終わって、俺はトイレに行くと一人で教室を出た。

すると俺を追ってくる足音がする。俺は振り返ることもなくそのまま進み、やがて廊下の隅、人気のないところで足を止めた。

「甲斐田君て歩くの早いね。本当にトイレ行きたいのなら待ってるけど」

「別にそういうことじゃないよ。で、何？」

振り返ると、当然のごとく相川さんが立っている。

「何ってほどでもないけど、報告。お察しの通り、織斑君に振ってもらってきました！」

相川さんは、相川清香は、織斑一夏から『卒業』したようだ。

憑き物が落ちたかのようなすっきりした笑顔で、そしてその瞳に恋の色は全く見えなくなっていた。

2. 外部への影響

「織斑君に振ってもらってきました！」

と、相川さんは笑った。

「はじめはついた？」

「あ、やっぱり分かるんだ。今までもこういうことはあったの？」

「まあ、それなりに」

「そっか。じゃあ特に説明することもないね」

織斑一夏はモテる。ものすごくモテる。

だからこれまでも幾度となく女子に告白されてきた。

そしてその全てをすっぱりと断っている。

「話したいのなら聞くけど」

「お、分かっているね。こういうのは一抜けしたみたいでみんなには言いつらいなあと思ってたんだよ」

「一抜けって、整備班の人達とかいるじゃない」

「そういうことじゃないよ。思い出したんだけどね、あたしは恋愛しにI S学園に入学したわけじゃないなあって」

「ああ、一抜けってそういうこと」

確かに、整備班連中も恋愛に興味がないわけではない。ただ一夏が好みでないというだけで。

「普通に恋愛したければ最初から共学の高校行くよね。あ、言っとくけどあたし中学じゃモテてたんだから。男子に告白されたこともあったし！」

「相川さんはあんまり男子に抵抗ないよね」

「そんなの当たり前だって。何もしなかったら女の方が余るのは分かりきってるわけだし」

俺達の世代は男一人に対して女が三人から四人だ。上の世代ならもう少し男の数は増えるようだが、ここ十年ほどで男の出生率は下げ止まりとなってそれくらいで安定している。

「クラスで一番積極的だったのは間違いない相川さんだったと思うよ」

「だよ。躊躇するくらいなら前に出るがあたしのモットーだから」

「そして一番最初に足抜けをするよ」

「まあね。それは甲斐田君のせい、じゃなかった、おかげなんだけど」
「僕？」

はて、俺は何か失言をしていただろうか。

思い当たることと言えば昨日の一連の出来事しかないが。

「昨日甲斐田君になぐさめてもらって、後で気づいちゃったんだよね。あたしは甲斐田君に全く期待されてなかったんだって」

「だからそれは」

「あ、そういうことじゃなくて、期待の程度。織斑君は別だとしても、同じ立場なはずの篠ノ之さんやオルコットさんとは全然違った」

「それはスタート地点が違うんだから仕方ない話で」

「そう、確かにそれは事実。でも、少なくともあたしはそれを仕方ないと言っちゃいけないよね」

相川さんもやはり多分に漏れず優等生だった。

自分で問題点を見つけ出して反省までしている。

「一夏に構ってなかったらもつとできた？」

「そうでなくてもできてなきやいけなかった。夜竹さんが映像撮ってくれたから見たんだけど、あんなんじゃあたしダメだ。あれくらいなら十分にこなさなきやいけなかった」

「ぶつつけ本番とか心の準備なしとかいくらでもどうしようもないと思える要素はあると思うけど」

「そういうのを認めてしまうと自分が成長できなくなるって分かるよね？」

鈴並とまでは言わないが、本当に自分に妥協しない人だ。

「だから恋愛なんてしている暇はないよ」

「そっちも正直周回遅れになってるしね。あの二人が別格過ぎて、一発逆転な何かがないととても一番にはなれなさそう」

「なるほど、やっぱり女子って現実的だね」

俺としては一番でなくてもいいと受け入れて欲しかったのだが、それが難しいことなのも分かっている。

いきなり言って変えられるようなものではない。意識改革がとても難しいことなのは俺自身が一番よく分かっているつもりだ。

「女の子は夢見がちで、そして現実的な生き物なんだよ」

「どっちかにして欲しいなあって僕は思う」

「残念でした。女は男にとってそんな都合のいい存在じゃないんです」

本当に、男には永遠に理解できない存在なのかもしれない。

「だからごめんね」

「別に謝ることじゃないよ」

「甲斐田君の期待に応えられなくてごめんね」

「期待？」

「ある意味篠ノ之さんやオルコットさんよりも期待してくれてたのは分かってたよ。織斑君の意識を変えろという意味で」

「それ言われちゃうとものすごく残念だなあ。その部分はあの二人には最初から期待してなかったし」

「二人ともちよっとお子様なところあるもんね」

「そこまで理解していたとは、俺の中で相川さんの存在が急速に惜しくなってきた。」

「こんなことならもう少し鼻負しておけばよかった。」

「返す返すも残念だよ。それじゃこれからは自分のことをがんばってね」

「おっと、それならここで宣言しよう。あたしは甲斐田君を見返してみせるとー！」

「見返すって別に……」

「IS乗りとして頼りにされるようになってみせるってこと。そうだね、二年になったら集団での模擬戦をやるらしいから、そこで甲斐田君のチームに選んでもらえるくらいにね」

「僕のチーム？」

「指揮科の人がそれぞれ中心になってチームを作るって聞いたよ。だ

からそのメンバーとして選んでもらえるようになってことだけだ」

「別に僕は指揮科に進むって決まったわけじゃ……」

「何言ってるの。甲斐田君が行かなくて誰が行くの？」

「ごく当たり前のことのように、相川さんは言った。」

だが俺にそんな未来などあるわけないだろう。俺の立場は特殊過ぎる。

それに成績その他を考えてみても、たとえ一般の生徒と同じ立場だったとしてもとても無理な話だ。

そもそも俺は三年間IS学園にいるかどうかさえ分からないのに。

「じゃ、そういうわけで。甲斐田君の健闘を祈る！」

笑顔で左手を上げて、相川さんは颯爽と帰って行った。

しかし、一夏から『卒業』していくのはこれで何人目だろうか。

この手の人達は自分の力で恋する気持ちと別な方向へと昇華してしまい、一夏のことを糧として通り過ぎて行く。

俺としてはそういう人達こそ一夏の側にいて欲しいのだが、なかなかうまくいかないものだとつくづく思った。

「なあ、俺のサインなんかもらって何が嬉しいんだ？」

殴り書きによってそれっぽくなったサインを十枚ほど渡した後、一

夏は俺に聞いてくる。

「食堂では大勢の生徒達が色紙を持って一夏を待ち構えていた。」

「千冬姉のサインをもらってきてくれならまだ分かるけど、俺は芸能人でも何でもないぞ？」

「あれだけ目立つことしたんだから、そういうこともあると思うよ」

当たり前の話というかそうでなくてはならないので、俺は普通に答える。

周囲の反応を見るに、一夏デビューという俺の目論見はこの上なく達成できたようだ。

「いや、考えたらその前からだ。ほら、お前と一緒に警備室に逃げたとかあつたじゃないか」

「ああ、そう言えばそうだね。でもあの時は一般の人達だったし、あれは単に一夏が珍しかっただけだと思うよ」

「だったらお前の方にも行ってくれないと思うんだけどなあ……」

「僕は模擬戦出てないし」

「そうだけどさあ……」

なおも一夏は納得がいかないようで、ブツブツ言いながら日替わり定食を食べ始めた。

一夏を見てしまったら他など見えなくなるのは当然の話なのだ。

「バカね。ISパイロットにはアイドル的な要素もあるのよ。特に国の代表ともなればその国の顔とも言えるくらいなんだから」

「なんだそれ？　そういうのはちよつと勘弁して欲しいんだけど」

「いつまでもグダグダと言うな。あれだけのことをした以上注目されるのは当然の話だ。むしろ常に見られているという意識を持つてだな……」

食い下がろうとする生徒らを追い払った鈴達が席につき、篠ノ之さんは恒例の説教を始める。

しかし鈴は一夏の番犬をやっていただけあって、相変わらず一夏に寄ってくる女子のあしらい方が手馴れている。

「まあまあ箒さん、いきなり注目されては戸惑ってしまうのも仕方のないことですわ」

「だよな。やっぱりああいうのはどうかと思うぞ」

「ですが一夏さん、これは当たり前前のこととして受け入れるべき事柄です。慣れるまでは煩わしく思えるかもしれませんが、じきにかい、いえ、平気になりますわ」

「マジかよ」

味方してくれるかと思ったオルコットに手のひらを返され、一夏は顔をしかめる。

どうやらいちいち俺がフォローしなくてもよくなってきたようだ。リーグマッチ中に別行動をしていた甲斐があったと言えるのかもしれない。

「セシリア、あまり一夏を甘やかすものではない」

「あら、箒さんこそ一夏さんに対して少々厳しいのではないかと思えますわ」

「俺からしたらどっちも一緒なんだけど」

「そういえば、いつの間にか篠ノ之さんとオルコットがお互いを当たり前のように名前呼びしている。」

「確かにここ最近は二人が一夏の両脇を固めていたので、常に一緒だったということもあるが。」

「お食事中ごめんね。少しだけいいかな?」

「はい?」

「誰だと思つて顔を上げると、前に取材をされた新聞部の先輩だった。」

「篠ノ之さんとオルコットが言い合いを始めたらすぐにやつてくるとは、きつとタイミングを見計らっていたのだろう。」

「あ、二年で新聞部の黛よ。覚えてる?」

「それはもちろん」

「ちよつと君達の耳に入れておきたいことがあつて」

「君達というのはつまり俺と一夏のことだろうか。」

「何でしよう?」

「昨日の変なISとの模擬戦? なんだけどね、あの時の映像がどうもネットで世界中に流れてるみたいなの」

「え?」

「なんだそれ!?!」

「この瞬間、俺には犯人が分かった。」

「すぐ消されてはいるみたいだけど、もう完全に世界中に広まっちゃつてるわ。織斑君達のあの姿が」

「なんでだよ!」

「あの場にいたのは関係者だけですわ。まさか!」

「映像と言えば夜竹か!」

「篠ノ之さんとオルコットは憤然とした表情で立ち上がる。」

「そして夜竹さんを取り押さえるとはかりに猛然と探し始めた。」

「これはなんとという風評被害だろうか。」

「あれ、もしかして心当たりでもあったの？」

「いや、さすがに俺は違うと思うけど……」

「うん、私も違うと思う」

「あ、あの、それってもしかしてあたしと一夏の試合ですか？」

「恐る恐るという感じで、鈴が質問する。」

確かに一夏と鈴の試合の映像を全世界にばらまかれたら、鈴はもうIS学園の外には出たくなるだろう。

「それは大丈夫。あの変なISが入ってきたところからだから」

「よかった。本当によかった……」

ほとんど泣きそうになっていた鈴が心から安心したとばかりに胸をなで下ろした。

「幸運と言うべきか、それとも不運だったと言うべきか。」

「違うって！ だからあたしじゃないって！」

「いいから黙れ！」

「釈明なら一夏さんの前で行ってください！」

そして夜竹さんが引きずられてきた。

もう完全に涙目になっている。

「織斑君助けて！ あたしは無実だ！」

「お、おう。別に俺が疑ってるわけじゃないから」

「だいたい内部の人間にそんなことできるわけないんだから！」

「どういうことだ？」

「そもそもIS学園のパソコンにはフィルターがかかっているからそういうサイトは見れないの！ まして動画のアップロードとかできるわけない！」

「そ、そうでしたか……」

一転して、篠ノ之さんとオルコットが顔を見合わせて気まずい表情になる。

無実の罪を着せるところだったのだ。さすがにやり過ぎたことくらいは理解しているだろう。

もちろん俺はそこで余計なことを口にするような真似はしない。

「へー、よく知ってんなー。やっぱ夜竹さんってそういうの詳しいな」
「実はそうなんだよ。無理矢理アップロードとかしようとしてもしっ
かり弾かれる仕組みになってて、どうやっても絶対できないようにな
ってるわけ」

だと言うのに、一夏が天然でそれをやってしまった。

そして夜竹さんもどうして当たり前のように乗るのか。

「ちよつと待て。夜竹、なぜ貴様はそこまで把握している」

「へ？」

「さては以前にやろうとしましたわね」

「そ、そんなことは……」

駄目だ。完全に目が泳いでいる。

どうしてこの人はことごとく自爆行動しか起こさないのか。

そして篠ノ之さんとオルコツトは笑顔になって夜竹さんへと向き
直る。

「夜竹、疑ってすまなかった。本当に申し訳ない」

「あまりにも短絡的過ぎました。恥ずかしい限りですわ」

「そ、そう？ ま、分かればいいんだよ、分かれば」

なぜそこで調子に乗る。

この二人が笑顔で謝るなど、どう考えても嵐の前の静けさではない
か。

「それはよかった。ところで夜竹、今の話とは別件で聞きたいことが
あるのだが」

「とても大事な話ですわ。ここでは何ですからあちらへ参りませう
か」

「え？ 何の話？ というかどうして腕掴むの？」

とうとう理解しないまま、容疑者夜竹さゆかは連行されて行った。

特に冥福を祈る必要はないだろう。

「何あれ？」

「夜竹さんか？ あの映像とか写真とかが好きらしいぞ。今のはよ
く分かんないけど」

「へー……。ん？ 映像とか写真？」

「ああ、自前で撮影器具とか持ってたから結構本格的だと思う」

「なるほど。ごめん一夏、ちよつと席外すわ」

「鈴?」

食事の手を止めて、鈴が立ち上がる。

そして篠ノ之さん達が消えた方向へと歩いて行った。

「なんなんだ?」

「さあ」

と言いつつ、俺には分かった。

おそらく鈴は夜竹さんが一夏の写真や映像を持っていないか確認しに行ったのだ。

相変わらず目ざといなと思ったところで、俺はこの上なく重大な事実に気づく。

映像や写真とは、まさに俺の商売敵ではないか。

これはいけない。絶対に放っておくべき事柄ではない。俺は一夏の写真や映像を有効活用するつもりで溜め続けている。別に金の問題ではない。織斑千冬写真が絶大な効果を発揮したように、今後一夏でも同じことをする予定なのだ。

既に夜竹さんが怪しい動きをし始めている以上、早急な対処をしなければならぬと心に誓った。

「えーと、話戻していい?」

「あ、ごめんなさい。お見苦しいところを」

「いやいや、むしろ有望株を紹介してくれてありがとうって感じだから。でもまあそれはいいとして、動画に対する反響なんだけど」

「ああ、そうだ。どうなんですか?」

新聞部の黛先輩はニヤツと笑った。

「すごいよ。織斑君に対する賞賛の嵐。映像が織斑君中心にできてたみたいで、特に後半の姿はすごくかっこいいって評判らしいよ」

「マジかよ」

「みたいってことは先輩は実際に見てないんですね」

「うん。さすがにそういう系のやり取りはここじゃ禁止されてるか

ら。あ、私姉がいてね、動画を見た姉から聞いたの」

「そうですか。できれば一度見ておきたいところですけど、変なことになってなければいいです」

「え、それだけ?」

黛先輩に素で返されてしまった。

それだけでも何も、それ以外に何があると言うのか。

「と言っても、外に対して僕らができることは何もないですし」

「そういうことじゃなくて、当然気になるでしょ? 自分への反応はどうだったかって?」

そういえば、この人はそういう人だった。

「特には」

「またまた。甲斐田君に対する評価。これはまたも真つ二つよ。『情けない』っていうのと『健気』っていうので両極端ね」

「けなげ?」

「そりやそうよ。故障機にも関わらず自ら前に出て囿になろうとする姿を見たら、この子は健気だって普通は思うわよ。特に年上受けがいらいしいわ」

「それはどうなんだろう」

「もちろんあつさりやられたのを見て情けないという声もあるんだけどね。だから両極端な評価」

情けない一色の方がよかった。俺へと矛先が向いてしまうのはいろんな意味でよろしくない。

故障機ということが共通認識になってそうなのはいいが、やはり俺は無意識に健気とかそういう方向の行動をしてしまうことが染み付いてしまっているのか。

とりあえず横で一夏が笑いをこらえているようなので、すねを蹴飛ばしておく。

「まあまあ。それはあくまで何も知らない一般人の声だから。甲斐田君が指揮をしてたっていうのは見る人が見れば分かってるわよ」

黛先輩はそこで声を切り、笑顔のまま俺の目を覗き込む。

きつと今度は俺が指揮官としてどう評価されたのかを気にしてい

ると思っっているのだろう。

「大丈夫。見事勝利に導いたという事実が示してる。初心者でしかもぶっつけ本番だったんでしょ？ それであれだけやれたら大したもののよ」

「そうですか。それは何よりです」

「あら、そんなそっけない態度取って、もしかして照れてる？ これは本当に本当だから。二年の指揮科の人に聞いたんだけどね、入学したてであそこまでやるのはって相当に危機感を抱いてたわ。もちろん細かいところについては色々言ってたけど、やっていたことの意味は明確で一貫していたって」

俺の機嫌でも取りたいのか、やたらと先輩は俺を持ち上げる。

さすがに俺としては一体倒したところで戦線離脱しておいてよくやったとは言いたくない。

もちろん、『初心者としては』という枕詞がついての話ではあるが、素直にそのまま受け入れろというのは無理があるだろう。

「ふむふむ、どうやら勝っただけでは満足できていないようだね。これはもう取材させてもらうしかないなあ」

「結局はそれですか。さすがに今は勘弁して欲しいんですが」

「もちろんもちろん。あ、そうだ、明日の夜優勝記念パーティやるんだって？ そこで聞かせてもらおうっていうのはどうかな？」

「むしろ最初からそれが目的ですか。というかよく知ってますね。今朝決まったことなのに、うちのクラスに知り合いでもいるんですか？」

「ふふふ、私の、新聞部の取材能力をなめてもらっちゃ困るな。ここは隔離された狭い空間だからね、みんなニュースには飢えているんだよ」

噂話が大好きなのは人の常か。

この分では隠していないことについては一瞬で広まってしまおうだろう。

だが織斑先生の写真の件が未だ公になっていないあたり、何でもかんでもというわけではなさそうだ。本人にバレたら最後、写真狩りが

始まってしまおうであろうことを関係者は十分に理解している。

「一夏、また取材したいって」

「別にいいんじゃないか？ もう隠すようなことは何もないし」

「そういう言い方はやめて欲しいんだけど」

「だって実際そうだろ。そうだ、そういうえば智希、お前ちゃんとのク
ラスに事情を説明して謝って来いよ」

「分かってるよ」

「大丈夫だって。もし揉めるようなら俺も一緒に謝るからさ。あ、で
もそれなら最初から一緒に行った方がいいか」

「いいよ一人で。自分のことくらい自分でどうにかするから」

「そうか。まあ全部終わったんだし、きっちりけじめはつけておこう
ぜ。嘘に嘘を重ねるとややこしいことになるのはお前が一番よく分
かっているだろ」

「そうだね」

「またも保護者面をする一夏から顔を背けると、黛先輩がおもしろそ
うな顔で見ている。」

「きつとまた余計な想像をしているのだろうなと、俺は心の中でため
息をついた。」

「で、どうしてあんなことしたんですか？」

「開口一番、俺はそう問いかけた。」

「うーむ、何の話か分かんないなあ。何しろ心当たりが多過ぎて」

「そっちなですか」

「夜、一夏が明日の準備で食堂へと下りて行ったので、折よく俺は部
屋で博士と話をすることができた。」

「食堂の人達は一夏の気持ちに感動してしまい、全力で支援をしてく
れてその日のうちに料理のための材料まで揃えてくれた。」

「またおかげで俺は手伝わなくてもよくなり、正直助かった。」

「ゴーレムとの戦闘に決まっていますよ。あの映像を全世界にばらまく
とか何考えてるんですか」

「ああ、それ。そんなの当たり前じゃないか。だっていつくんの勇姿をその場にいた人しか見られないなんてもつたいないよ」

「それはそうですね、隠されたものじゃないんだしIS関係者ならそのうち全員見ますよ。わざわざ関係のないところにまで広めなくたって」

「相変わらず甘いなあ。むしろ世界中の誰もが知ってなきやいけないことなんだよ」

博士は得意気に笑う。

確かに最終的な話であれば俺も否定するつもりはないが、今の一夏を世界に出したいかと言えはつきりと否だ。

「それにね、なかったことにされるのが一番よくない」

と、一転して博士は真剣な表情へと変わる。

ああ、それが本音か。自分自身がそうされてきたからこそ、許せないのか。

「いつくんのことはまだこれからどうにでもできるけど、ゴーレムをなかったことにさせるわけにはいかない。あのゴミ共ならやりかねないし」

「そんなことしますかね？　むしろISを博士の手から離せるんで喜んで研究するんじゃないですか？」

「研究しなかったら全く話にならないよ。問題はそれを隠れてこっそりやるんじゃないかってこと」

「独占って話ですか？　今も半分そううちやそうですけど」

「それもある」

臍気ながら俺にも見えてきた。

博士は発明をすることはできるが、発明したものを大量に生産することまではできない。

昨日間に合わなかったという言い方をしていたから、せいぜいが一ヶ月に一体くらいしか作れないのだろう。

かといってそのためにどこかの国と手を結ぶというような行為もできない。事実上IS委員会に喧嘩どころか戦争を仕掛けるようなものだから。

それに下手にどこかの国に近寄ってはクロエのような悲劇まで起こりうる。

「ああ、だから千冬さんなんですね」

「そう。あらゆる意味で信じられるのはちーちゃんしかいない。だからちーちゃんにあげたんだ」

「じゃあ別にそれでいいじゃないですか。わざわざ世界中に映像をばらまくまでしなくたって」

「ちーちゃんの立場を考えてみなよ。あんなにがんじがらめにされちゃあできることだつてできなくなるかもしれないんだから。ま、世界から監視の目を向けてもらおうっていう束さんの援護射撃だね」
「本人からしたらこれ以上ない迷惑行為ですけどね」

あのバカは何余計なことをしてくれるのかと、今頃千冬さんは頭を抱えているだろう。

「いつかちーちゃんも分かってくれるって束さんは信じてるから」

「千冬さんの寿命が尽きるのとどっちが早いかってレベルですね」

「失礼な！」

博士は憤慨するが、伝えることはきつと伝わらない。

いくら以心伝心のつもりでも、分かってももらえらと思うだけでは駄目だ。

そして伝えたくないことは伝えなければいいのだ。

「でもあんなのを世に送り出すつてことは、いよいよ諦めたつてことではないんですか？」

「諦めてないよ。諦めるわけなんてない。でもこのまま停滞したままでもいいかと言うとそうじゃない」

「一夏を表舞台に出してしまった以上はもう時間切れだつて話ですね」

俺がISを動かせる男なら、篠ノ之束はISを動かせない女だ。

博士はある日突然ISの要たるコアを作ることができなくなり、ISを動かすことすら不可能となった。

神はその地位を追われて人に堕ちたとも言えはいいだろうか。

世に言われる一般的な話として、篠ノ之束は自分がいいように使われ、最後はほとんど軟禁状態にまでされて精神的に病んだ挙句失踪した、ということになっている。

だが本人によれば実際はそうではなかったらしい。

それまでの、煩わしいことに囚われず何も考えずにただ研究だけをしていればいいという環境に、特別不満はなかったようなのだ。

何を苦にしてかと言えば、ある日突然 I S が自分に反応しなくなってしまったことに対してだそうである。

本当に原因不明で、ほとんど発狂しかけたと本人は言っていたが、研究の場から逃亡したのは衝動的なものだったという話だ。

そして I S の開発者が失踪したとなれば当然世界は天を揺るがす大騒ぎとなり、I S 委員会が諸悪の根源として非難されつつも世界中で博士の搜索活動が行われた。

しかしどうしても博士を見つけることができず、今に至ってもなお博士は世界から行方不明のままになっている。

一方の博士は逃亡以降世界中を旅していたということと、その過程で当時アメリカにいた俺とクロエはある意味博士に拾われたと言えるだろう。

I S を動かせなくなった博士がどうやって逃亡生活を可能にしていたのか、今となっては甚だ疑問だが、I S 開発者ともなればこっそり支援してくれる個人や組織はあるに違いない。

事実俺や一夏のいた施設の前所長はきつとその手の類だったのだろうかと思う。

「でも動き始めた以上もう止まるつもりはないからね」

「分かりました。まあ一夏は I S 学園にある意味守られてるので、外野もそう簡単にどうこうはできないでしょう。それに僕は僕でやらせてもらいます」

「もちろん、これは束さんがやるべきことだから智希君に何かをしるなんて言うつもりはないよ。でもいつくんハーレムだけは認めないけど」

「別に認めなくていいですよ。一夏が自分でそれを選ぶんですから」
「ムリムリ。いっくんは小さい頃から一緒だった筈ちゃんと相思相愛
なんだから」

「今の一夏を見てそう思えるならおめでたいにも程がありますね」
そうして俺達はお互いをけなし合う。

博士が何をしようが勝手だが、このために俺はISを動かせること
を世間に明らかにしたのだ。一夏と一緒にIS学園に入学をすべく。
「分かってないなあ。智希君は何も分かってない。何をしてもムダな
んだから時間がもつたいたいとは思わない?」

「そう思うんならせいぜい指咥えて見てればいいと思いますよ。一夏
のハーレムがどんどん拡大していく様子を歯ぎしりしながら指咥え
て見てればね」

「ふん、人が愛することができるのはたった一人だけなんだよ。ねえ
くーちゃん?」

「はい!」
さすがに今日は忘れなかったようだ。クロエが待つてましたとば
かりに画面の中に入ってきた。

「くーちゃん、今はあんなことになっちゃってるけど、智希君もいつか
真実の愛を見つけるんだから心配しないでね」

「大丈夫です! 私はお兄様を信じていますから!」

悲しいことに、今やクロエは完全に毒されてしまった。

俺と一緒に施設に入ることが不可能だったとはいえ、これだけは悔
やんでも悔やみきれない。

「クロエ、昨日はほとんど話せなかったけど、その様子なら変わりなさ
そうだね」

「はい! 私はずっと元気です!」

「なんか昨日からテンション高くない?」

「それはもう! だって久しぶりにお話できるんですから!」

「そ、そう。別に普通でいいけど」

鈴は一年待ったと言っていたが、四ヶ月でもそれなりにフラスト
レーションは溜まってしまおうのだろうか。

「大丈夫です！ それよりも、お兄様にお聞きしたいことが」

「何が大丈夫なのか分からないけど、何？」

クロエは博士が見えなくなるくらい画面の前に出てきた。

これは相当に嫌な予感がする。

「そちらで、お兄様のお目に叶った女性はどなたですか？」

一夏にとつてではなく、俺自身の話か。

クロエの興味津々な目を見て、完全に染まってしまったことを改めて悟る。

「どうでもいいと答えても納得しないだろうなと思い、ふとクラスメイト達が俺に対してその手の話題を全く振らないことに気づいた。

閑話・ある女生徒の話

「男ってほんと弱いしダメな生き物だよな」

と中学時代のクラスメイト達は笑っていた。

今思えば彼女達は男子を無理矢理下に置くことで安心したかったんだろう。

成長期を迎えて自分達よりも大きくなってしまった存在を恐れて。

小学校の頃は、なんだかんだ言っても実力勝負だったと思う。

かけっこでも何でも運動で男子に負けた記憶はない。

だから純粹に自分の方が上なんだと思うことができた。

でも中学に入つて、体育が男子と女子は別になった。

どうしてわざわざそんなことをするんだろう、と聞いた時は疑問に思っていた。

そして成長期に入つてあつという間に大きくなっていく男子の姿を見て、そういうことなんだと気づいた。

一緒にやったら男子の方が強いことがはつきりしてしまうからなんだと。

その時初めて矛盾を感じたんだと思う。

中二の時、廊下を走っていて男子にぶつかった。そして弾き飛ばされてしまった。

もう名前も覚えていないその男子は青ざめていて平謝り状態だったけど、それどころではなかった。

ぶつかっていったのはこつちなのに、簡単に跳ね返されてしまったからだ。

自分よりも二回りは大きそうな男子が泣きそうな顔になっている中、呆然としていたらしい。

その男子に非難の声が飛んでいるのが聞こえて、ようやく我に返った。慌てて謝った。

中三の時、階段でよろめいて、クラスの男子に助けてもらった。

一段目ですまづいただけなので、助けがなくてもせいぜい尻もちを

ついたくらいで済んだだろうけど、たまたま隣にいたその男子は片手で背中を支えてくれたのだ。

すっかりと支えられて、最初壁があつたような錯覚がした。でも振り向くとそれは一本の腕だった。

感謝をしながらも、こんなにも違うのかとその差をはつきりと実感してしまった。

それがきつかけだったのかは分からないけれど、しばらくしてその男子に告白された。

だけどIS学園を受験するつもりだから付き合うのは無理だと断った。

正直に言えば嬉しかった。でもそれは男子から告白をされたという事実に対してであつて、その男子に対しては特に何の感情もなかった。

それに、あの頃の自分は選ぶ側であつて選ばれる側じゃないと思つていた。

ところが、その男子が告白して振られたことがあつという間に学校に広まつた。

誰にもしゃべつていないのに、なぜだかみんなが知つていた。

それからその男子は卒業まで肩身を狭くしていたようだ。そして自分は男子から声をかけられることがほとんどなくなった。

クラスの女子は当然だとその男子を笑つていたけれど、周りで起こつた変化によつてある事実を知つた。男子は女子を二種類に分けていると。

もちろんほとんどは男子を下に見ている人達だ。それは言動や態度ですぐ分かる。だから男子もあまり近づこうとしていない。

そして一方数は少ないけれど、男子と普通に接している女子もいる。大多数は違うからおおっぴらにというわけではなかったけれど、話しかければ普通に返すし、必要があれば自分からも話しかけていた。

それまでは後者だった。でもその時を境に男子からは大多数の女子と同じ括りにされてしまつていた。

理不尽だ、と最初は思った。

その男子のことは一言もしゃべっていない。当たり前だ。それなのに、クラスどころか学年の男子達はこっちがやったと決めつけているようだった。

それは違うと言おうにも、向こうからは話しかけてきてくれない。こちらから言おうとしても、完全に警戒されてよそよそしくなってしまうている。

もうどうすることもできなかった。

真実は卒業前に分かった。

IS学園の合格を先生が教えてくれて、教室で喜んでいた時だった。

クラスメイト達も一緒に喜んでいてくれたのだけれど、その中の一人がポロツと漏らした一言だ。

「やっぱり男子なんかには構わなくなったおかげだね」

何か違和感を覚えてどういふことかと聞いたら、告白した男子のことを広めたのはクラスの女子だったという話だ。

一瞬、この人達にも嫉妬されていたのかと思った。三年間学年一位を守り続けたこともあって、そういう人がいるのは知っていた。

でも目の前のクラスメイト達は心の底から合格を喜んでくれていたようで、嫉妬のような悔しさなんて全然見えなかった。

「えっ、そんなにひどかったかって？ そりゃそうだよ。相手にすることないのにわざわざ話まで聞いてあげて、ほんとムダなことしてるなあってみんな思ってたよ」

目眩がした。

クラスメイト達はよかれと思ってやっていた。

その場で怒りの感情を撒き散らし、そのまま家に帰った。そして以後卒業式まで学校には行かなかった。

卒業式の日も答辞だけ笑顔でやって、クラスメイト達は全員無視した。もう何を言われようが気にならなかった。

確かに、そういうことを言う人達がいるのは知っていた。

テレビで、新聞で、ネットで、過激なことを言う人があるのも知っ

ていたけれど、きつと目立ちたくてわざと言っているんだろうと思っ
ていた。

でも目の前で当たり前のように口にされて、そうじゃなかったこと
が思い知らされた。そういう空気に乗せられてではなく、周りに合わ
せてでもなく、心の底からそう思っている。

今まで自分はそのままで言わなくても思ったし、実際そう言っ
たけれど、その人達にとっては当然のことだったのだ。

でもそれは絶対に違う。

だからこそIS学園から届いたアンケートにはつきりと書いた。

ちやうどその頃織斑君に続いて甲斐田君の存在が明らかになり、世
の中はどこを見ても男性IS操縦者の話題で持ちきりだった。

男子生徒がIS学園に入学することについてのアンケートに対し
て、自分の意見をこれでもかとしつかり書いた。

男子だからって女子とは全く別の存在として扱うべきではない。
もちろん女子と違う部分は考慮しなければならいけれど、同じこと
を学ぶのだから可能な限り同じように扱うべきだ。男だ女だとい
うのは全く関係ない、などなど。

しばらくしてIS学園から入学案内が届き、自分の寮の部屋の番号
や相手の名前と共に、クラスの名簿まで入っていた。

そこには一年一組相川清香と、織斑君甲斐田君と同じクラスになっ
た自分の名前が書かれていた。

ところが、あれほどまでに決意してIS学園に入学したつもりだっ
たのに、入学式が終わった頃には中学時代に思ったことなんて綺麗
さっぱり消し飛んでいた。

理由はもちろん織斑君だ。

入学式で初めて見たその姿はどこの誰よりも存在感を發揮してい
て、誰よりも輝いて見えた。

もちろんテレビでその顔は知っていたけれど、実物は全然違った。
よく芸能人を見た時に言われるようなオーラとはこういうものだっ

たのかと感心してしまつたくらいだ。

相川という苗字のおかげで女子の一番前にして最前列に立つ織斑君の後ろだったこともあり、あたしは式の間中ひたすら織斑君の背中を見つけていた。

挨拶のために織斑君が壇上へ上がった時もただただ織斑君に見とれていた。隣に立っていたであろう甲斐田君なんて目にも入っていなかった。

おそらくこの先織斑君以上の男の人に出会うことはないだろう、とあたしは根拠もなく確信を抱いて、織斑君を未来の夫とするべきだと強く決意した。

最初の授業で、織斑君はあまり頭がよくないことが分かった。

ISに対する知識が皆無で、しかも勉強した形跡さえなかった。織斑君の隣に座る甲斐田君はそれなりにやっていたようで、しばしば織斑君をフォローしていた。

それを見てクラスメイトの何人かは失望していたようだった。きつと頭のよくない男子が好みではなかったんだろう。

でもあたしにとっては全然問題のあることじゃなかった。そんなものは織斑君の隣に立つあたしが全部引き受ければいい。

大事なものは性格であつて、気持ちであつて、小賢しいくらいの頭脳ならぬ方がいい。むしろ織斑君に足りない部分を自分が補えるのだから、あたしは織斑君にとってふさわしい相手だとさえ思っていた。

その後休み時間になつて、さつそくオルコットさんが織斑君につつかかった。

やっぱり来たか、と思つた。

男子というだけで理不尽に織斑君をけなす生徒は絶対に出てくるだろうと最初から思っていたのだ。

ようやく中学時代を思い出して、絶対にあんな環境にはさせないと意気込んだものの、二人の会話で織斑君は入試で教官を倒せるほどの腕前であることを知った。

そういえば織斑君はあの織斑千冬先生の弟だったのだ。

一応遺伝は関係ないということになっているけれど、そうは言っても対象はあの織斑千冬先生だ。

ごく自然に納得させられ、未来の夫はそんなにすごいのかと、あなたは勝手に誇らしくなってしまうた。

ならば人前に出たって全然問題ないしむしろふさわしいと思って、あたしはすぐクラス代表に織斑君を推薦した。ついでに周りの様子を窺ってみると、やはり大多数はあたしと同じ気持ちになっているようだ。分かっていたことだけれど、ライバルは多い。

間髪入れず休み時間の続きだとばかりにオルコツトさんが入ってきて、投票では二人が綺麗に並んでしまった。

そしてどうすれば織斑君をクラス代表にできるかと悩んでいたのだけれど、そこであたしは初めて甲斐田君の存在を意識した。

二人目の男性 I S 操縦者、甲斐田智希。

最初にテレビで二人目の男性操縦者現るというニュースを見た時、これは怪しいにも程があると啞然としてしまった。

孤児で、織斑君と一緒に施設で過ごしていたなんて、絶対に仕組まれていると誰もが思った。

すぐにその施設はかつてあの織斑千冬先生もいたところだということが分かり、間違いなく織斑千冬先生はこのことを知っていて甲斐田君をそこに保護していたんだろうと噂された。本人は否定していたけれど。

でもそれは考えてみればごく当然の話で、身寄りのない男子に I S が動かせたとなればその人は今後どうなってしまうか分からない。

だからこそ織斑千冬先生は自分のいた施設に送って織斑君と一緒にし、自分が後ろ盾になることを世界中の人に示したかったんだろうと思った。

テレビや新聞でもそういう結論に落ち着いたようだ。ぎりぎりまで隠して、二人の高校入学直前でばらす。そしてそのまま I S 学園に放り込む。そうすれば二人は I S 学園に隔離されて身の安全を保証できる。

よくできたシナリオだと、誰もが言っていた。

以後甲斐田君のことはそこまで話題にはならなくなった。

当時は次々と男性操縦者が出てくるだろうと思われていたし、織斑君程のインパクトもなかったから。

そして何よりIS適正がDランクだったと発表された時点で、世間の興味が急速に失われていったような感じがした。適正DランクとはIS学園の受験資格さえない。

つまり、ただISを動かせるだけではないとはつきりしたのだ。

日本政府は次を必死に探していて話題にもしなくなったし、あたしなどはできない人ができる人の中で三年間過ごすのは大変だろうなと勝手に同情していた。

また、だからと言っていじめなんて絶対にさせないと一人心に誓っていたりもした。

でも実際の甲斐田君は想像していた姿とは全然違った。

弱々しそうとか卑屈そうといったあたしの予想は的外れもいいところで、何を考えているのか分からないという感じで、どこか超然としていた。

そして二人の性格などお見通しだとばかりに織斑君とオルコットさんを煽って、クラス代表を決める勝負をISでの模擬戦に持ち込んでしまった。

あたしはその様子をぽかんと見ていたのだけれど、すぐにそれは無茶だと思った。何しろオルコットさんはイギリスの代表候補生、しかも専用機持ち。

どう考えても織斑君に勝ち目はない。

どうしてわざわざ負ける勝負を挑むのかと、甲斐田君の意図が全く理解できなかった。

手伝おうかとそれとなく言ってみても何とかするから大丈夫だと断られて、もしかしてこの人は何も分かっているのだからかと思つてさえいた。

もちろん甲斐田君は全部分かってやっていたのだ。

三年生のところにたった一人で乗り込んで、なんと三年生百人全員を味方につけてしまった。

どうやって説得したのかは分からない。織斑君を連れて行ったら一発だと思ふのに、なぜか一人だけで行つたそうだ。三年生にとって甲斐田君そのものに価値があるとは思えないから、その後の甲斐田君を考えてみるにきつと口先一つだけでやったんだろう。

それでもたつた数日ではさすがに無理だろうと思つていたら、当日量産機の織斑君は専用機のオルコットさんに対して無傷で完勝してしまつた。

あの時あたしは興奮して大声で歓声を送つていただけけれど、終つた後でその時の作戦を聞いて寒気がした。

それは作戦に対してではなく、それを考えた三年生に対してではなく、この事態を一人で作り上げた甲斐田君に対してだ。

織斑君と一緒にするには、まず何より甲斐田君を突破しなければならぬと理解した。

織斑君がクラス代表になつて、あたしは本格的にアピールを始めることにした。

ライバルとして何より警戒すべきは当然篠ノ之箒さんだ。あの天才篠ノ之東博士の妹だということでクラスの中では頭一つどころではなく飛び抜けている。その上織斑君の幼馴染。普通だったらまず勝ち目のないと思える相手だ。

でもあたしの目からはその立場がなければ話にもならないと思へる程度でしかなかつた。

感情表現が幼稚、すぐに怒つてごまかす、説教しては織斑君にうざがられる。女としても見てもらえていないし、これは絶対に勝てると思つた。

じゃあ何が問題かと言えば甲斐田君の存在だ。甲斐田君は織斑君と篠ノ之さんの間に入ってフォローしていた。つまり篠ノ之さんのことを認めていたのだ。

元々知り合いというわけでもなさそうだったし、あんな態度の人間にどうして肩入れをするのかさっぱり分からなかつたけれど、事実上は事実だ。

きつと篠ノ之さんを貶めるような行動は甲斐田君にとってマイナ

スになる。そういう感情を見せ始めていた他の女子を見て、あたしは自分がライバル達よりも先に行けていると感じた。

そして考え出したのが部活見学ツアーだ。

篠ノ之さんを貶めるわけにはいかないけれど、かといって後押しなんてしたくもない。

うまく篠ノ之さんを引き離せないかと考えてひねり出したのが部活見学ツアーだった。

何しろ篠ノ之さんは既に剣道部に入っている。だからわざわざ部活を見学する必要なんてない。

篠ノ之さんは悔しそうにはしていても文句を言わなかった。もしかして感情を爆発させたりするかなと思っていたけれど、さすがに自重したようだ。そこまで子供じゃなかった。

織斑君はすぐ乗り気だったし、肝心の甲斐田君も何も言わずに傍観していた。横目で見た感じでは感心しているようだったし、合格だったのだろうと思う。

それを裏付けるかようにその後、甲斐田君の篠ノ之さんに対するフォロワーが明らかに減った。見捨てたわけではなさそうだったけれど、それぐらい自分で何とかしろと言わんばかりに無視していたりした。

また一方で、甲斐田君はあたし達のやることに対しても何も言っていなかった。むしろどこまでやれるかやってみろ的な余裕さえ感じられた。じゃあやってやろうじゃんとかあたしは俄然やる気になった。

でも今ならそうなってしまったのはよく分かる。甲斐田君の最大の特徴はモチベーターであることだ。とにかく人をその気にさせるのがうまい。

きつと三年生もそうだったろうし、あたし達もリーグマッチではそうだった。甲斐田君は広い視野で周囲を見ているから、全てが見えるんだろう。

自分でどうにかするのではなく、そういう状況を作る。リーグマッチで起こったことは大抵のことが織り込み済みだったろうし、どうにもならないとなったら自分でどうにかしてしまっていた。

だけれども、部活見学ツアーはあたしにとって順風満帆にはいかなかった。

今度の問題はオルコットさんだ。

この人は入学式初日の態度はいつたい何だったのかというくらい、織斑君べつたりになつてしまった。

最初はもしかして織斑君を油断させてどこかで寝首でもかくつもりかと思つただけけれど、誰が見ても織斑君に対してべた惚れな姿だった。

そしてさすがは外国の人らしく、スキンシップがうまい。自然な形で織斑君の手を取ったり腕を掴んだり、あたし達が唾然としている間に織斑君との距離を近づけてしまった。

日本人のあたし達がやろうにもやれなかつたことをいとも簡単にやつてしまつていたのだ。あたしは慌てて反対側の腕に取り付こうとしたけど、二番煎じのへっぴり腰では効果もない。

リーグマツチの準備が始まつて篠ノ之さんが戻ってきたら、あつという間にその場所を奪われてしまった。

とはいえ部活見学ツアーで収穫もあつた。

何より一緒にいて織斑君のことがよく分かつた。

彼は主夫としての適正が半端なく高かつた。炊事洗濯は言うに及ばず、一通りのことは何でも高いレベルでできると感じる。

その上かつこいいし、夫としてある意味理想的な存在だ。

だからISを動かせる必要なんて全然なかつただろう。織斑君はどこへ行つても引つ張りだこになるのは間違いない。しかもあの織斑千冬先生の弟なのだから、どこかの国王の娘とか大統領の娘に求婚されたつておかしくないくらいだ。

つまり一般人のあたしにとってはIS学園にいる間勝負だと心に誓つた。

そしてリーグマツチ。

当然ながらあたしは織斑君を全力で助けるつもりだった。織斑君

に好意を持っているクラスの女子は半分くらいいたし、全員でなくてもそれだけいけば十分だろうと思っていた。

ところが甲斐田君はあっさりクラスの全員を巻き込んでしまった。確かに優勝の特典はすごく魅力的なものだったけれど、甲斐田君は自分でそれを探してきて披露して、あたし達をやる気にまでさせてくれた。

そんなことしなくても手伝ったのにと言ったら、たくさんの人に手伝ってもらえればそれだけいい準備ができるからと軽く笑って、確かに実際そうだった。指揮班の二人がいなければああは纏まらなかっただろうし、イグニツション・ブーストを見つけてきたのは整備班の岸原さんだ。

きつと入学初日に織斑君をクラス代表に推した時から、甲斐田君は先を見て計画していたんだと思う。

さらに甲斐田君は本気で優勝するつもりのようなうだった。

みんなを巻き込んだその日のうちに、なんと一週間分の訓練機の予約を確保していた。しかもIS学園にある三種類の訓練機全部を揃えて。織斑君には既に専用機があったので、つまり訓練の相手役となるあたし達のためのものだ。

それは自分が乗りたいからではなく、全て織斑君のためだった。

口だけではなかったその真剣な姿勢に、これはあたし達も全力でやらなければならないと心を一つにした。

そしてあたし達はそれぞれ班に分かれて、自分にできることは何だと考えながら織斑君を優勝させるべくリーグマッチに向けての準備を始めた。

それから一ヶ月間、正直すごく楽しかった。

これはあたしだけじゃなくて、みんながそう言っていた。

一つの目標に向かってみんなで全力でやるというのは、とても楽しいことだ。

それまで学校の行事なんてやる気のある人はせいぜいが半分くらいだった。だから教室の中でも温度差があったりしたのだけれど、この一年一組はみんながやる気になっていた。

自分の口にしたことに対してみんなが真剣に答えてくれる。他の人が言ったことに意見してもきちんと反応が返ってくる。斜に構えて冷めたことを言う人なんて誰もいない。

この一ヶ月でみんな仲良くなって、お互いがお互いのことを知ったと思う。

あたしは特に篠ノ之さんオルコツトさんと仲良くなった。

それまではまさかこの人達とこんなに普通に話すことはないだろうと思っていたので、正直びつくりだ。

篠ノ之さんのことは子供だと思っていたけれど、それは織斑君が絡んだ場合に限る話で、普段はとても分別があつて織斑先生を学生にしたような人だった。

姉であるIS開発者篠ノ之東博士のことは一切口にしようとはしなかつたけれど、話しづらいようなことは全くなく、織斑君が絡まなければ非常に理性的だ。

ただ何かにつけて説教したがるのが玉に瑕かなとは思つた。

オルコツトさんはその見た目通り、貴族っぽい感じで何をしても仕草が優雅で上品だ。

性格は基本的には穏やかで落ち着いている。時々取り乱すこともあつたけれど。

入学初日に織斑君につつかかつていったのはどうしてかと聞いたら、頭を抱えて悶えてしまった。どうやらオルコツトさんの中では黒歴史化してしまっているみたいだ。

若気の至りです、と消え入りそうな声がかろうじて聞こえた。

いつも一緒にいて、仲良くなればいろんなことを話す。

そのうち自然と織斑君のことも話すようになった。

もちろんお互いがライバルなんだけれど、あまりの織斑君の脈なさっぷりに、いつしか同じ悩みを抱える同士のような感覚が生まれていた。

その結果他のみんなとも一緒に織斑君についてあれこれ攻略方法を相談するようになった。

そして甲斐田君はそんなあたし達の姿を呆れた顔で見ている。

もちろんリーグマッチの準備についてもみんな全力だ。

ただみんなが仲良くなるにつれて、意見の衝突が起こるようになっていった。

一言で言えばみんな遠慮しなくなったのだ。

パイロット班整備班指揮班と、立場が違えばやりたいことも違ってくる。決まった正解があるわけでもないし、自分が最善を尽くそうと思ったらどうしてもぶつかってしまうことは出てくる。

でも自分からは譲りたくないと言い合いをしていると、すぐに甲斐田君が飛んできた。

またかという顔をしながら、相手を説得したかったら言い方を考えろと文句を言いつつ、都度都度裁定を下していった。

最初あたし達は途中で切られるのが不満だったけれど、そのうち慣れた。そしてむしろ甲斐田君がやって来るまでが勝負だ的なゲーム感覚になっていった。

あたしは特に整備班を纏めていた鏡さんとやり合った。整備班は訓練機で改造をしたくてたまらないらしく、しょっちゅう訓練機を使わせるとあたし達に文句を言ってきた。でもあたし達パイロット班からすれば織斑君の相手をするのが何より第一だ。そんなことは受け入れられないと突っぱねて、毎回ああこうだと言い合った。

その度に甲斐田君はやってきて、裁定をしながらもいい加減仲良くしてくれと言ってきた。あたしと鏡さんは肩を組んで、仲良しですと笑って見せた。カチンとききたらしき甲斐田君は次の日あたしと鏡さんに罰だとばかりに仕事を言いつけた。

鏡さんと一緒に甲斐田君の文句を言いながらも、楽しかった。

一方甲斐田君は甲斐田君で自由自在に動き回っていた。

新聞部の先輩を呼んできて食堂で取材の形を取った他クラスへの心理戦を始めたり、一人で歩き回って三組五組に入り込んでスパイ活動をしていたりした。

本当に好き放題やっているなという感じで、怖いものなんて何も無いように見えた。

男子一人で学園内を歩き回るとか、あたしが甲斐田君の立場だった

ら怖くて絶対にできない。

きつとリーグマッチは甲斐田君の思い通りに進んでいるんだろうなと思った。

ただ他のクラスから甲斐田君に対するぼっち疑惑が出ているのはさすがに予想外だったようで、あたし達は大笑してしまい甲斐田君はすごく嫌そうな顔をしていた。

もちろん次の日に笑った罰だとばかりに仕事が言い渡され、この人は本当に負けず嫌いというか仕返しせずにはいられない人だと思っただ。

でも甲斐田君でさえも順風満帆とはいかず、誰も想定していなかった事態が起きた。

織斑君甲斐田君の中学時代の友達、風さんの出現だ。

この人は台風のような人で、あつという間に一組をかき回して、拳の果ては敵になってしまった。

またその際にオルコットさんとISで喧嘩して気絶にまで追い込んで、あたしは絶対に許せないと怒った。みんなも同じ気持ちになったみたいで、いつそうクラスの団結が強まった。

でも篠ノ之さんだけは浮かない顔になっていて、どうしたのかと聞いたら風さんの気持ちがかかってしまったのでそこまで怒れないと言う。

怒り心頭だったあたしがどういふことかと問い詰めると、風さんはきつと織斑君に対して嫉妬していると答えを返してきた。

その時あたしの胸に少しざわつきが起こったけれど、それはすぐに怒りでかき消されてしまった。

篠ノ之さんに対して、でもだからってやったことは許されることじゃない、と言ったら、そうだな、と珍しく力のない返事をした。

そして甲斐田君は珍しく頭を抱えていた。

織斑君も風さんに対して怒っていて、絶対に勝つと意気込んでいたのだけれど、甲斐田君だけは温度が違った。

最初は友達のことだから悩んでいるのかなと思ったけれど、それは主にリーグマッチに対してだった。

続いて指揮班の人達の顔も曇ってきて、相談を持ちかけられて理解した。鳳さんはイギリスの代表候補生であるオルコットさんを倒してしまうほどの腕前の持ち主だという事実には。

織斑君は鳳さんに教えてもらってようやくイグニッション・ブーストを使えるようになっていた。教え方も手馴れていたし、明らかに織斑君よりも上の位置にいる。

強敵出現どころの話じゃなかった。

みんな鳳さんだけには負けたくないという気持ちもあって、必死に考えた。でも考えれば考えるほど鳳さんの強大さだけが見えてきて、これと言ったものは出てこなかった。

ただ甲斐田君だけは平然としていたので、みんな何とかなるだろうという気持ちにはなっていたと思う。

今だから言えるけど、きっと甲斐田君は既に答えを見つけていて、いざとなったら自分が出ればいいと思っていたのだ。あたし達が答えを出せるか見ていたのだ。本当に性格が悪いと思う。

でも結局あたし達はその答えを出せなかったのだから誰も何も言えないけれど。

リーグマツチが始まった。

初戦の織斑君はすごかった。

たった一撃で五組の代表を倒してしまったのだ。

あたしは興奮して待機室で大騒ぎした。篠ノ之さんもオルコットさんも同じようにはしゃいでいた。

そして戻ってきた織斑君はものすごいエネルギーに溢れていて、あたしはこのまま織斑君に取り込まれてしまおうんじゃないかと思えるような錯覚を抱いたりした。

でも甲斐田君や指揮班の人達はなぜか冷静で、むしろ難しい顔をしていた。あたしはどうして素直に喜ばないのかと不思議だったけれど、今考えればこの人達は次以降の苦戦を分かっていたんだろう。

実際に次の試合で織斑君は危うく負けるところだった。

四組代表との試合では完全に裏をかかれて、一時はこれはもう負けるとさえ思った。

勝ったのは半分偶然みたいな部分もあった。

でもそんな中甲斐田君だけは一人試合を読み切っていた。四組代表の心理状態を完全に当てていて、そこまで分かっていたのならどうしてこんなことになったのかと思ったけど、終わった後鷹月さんの悔しそうな顔を見て理解した。

そういえば、四組に対しては一番楽に勝てそうだからと甲斐田君は関与していなかったのだ。

正確には、鷹月さんがこの相手については自分達が考えると言っていた。

もちろん甲斐田君には三君や五組に凰さんのことがあったけれど、こうなってしまうては差がはつきり見えてしまう。

最初から甲斐田君に頼ればよかったんじゃないや、とパイロット班のみんなは言っていた。

そして次の三組戦、鷹月さんは挽回しようと思死だったようだ。

整備班から出された作戦を急遽採用して、やり方をまるつきり変えた。

でもあたしもこの作戦はすごいと思った。こんなのは絶対に読めない。

そして当の三組代表も完全に混乱していて、終盤までは順調でこれならいけると思っていた。

だけど今度は三組代表が追い詰められ過ぎて、最後開き直ってしまったのが大きな誤算だった。それで思わず冷や汗をかいたけれど、そこは織斑君の機転で何とかなつて勝利できた。

鷹月さんの気持ちに配慮したのか甲斐田君はまたしても口を出さなかつたみたいで、でもまたしても試合中に一人読み切っていた。

それで負けていたらどうするつもりなのかと思つたけど、きつと織斑君に対して絶対的な信頼があるんだろう。織斑君の行動を完璧に分かつていたし、形はどうあれ最終的に織斑君が勝つことは確信していたに違いない。

「やつぱり落とし穴つていうのはただ掘って誘導するだけじゃダメで、きちんと蹴落とさないといけないな」

と、終わった後甲斐田君は一人怖いことを言っていた。

そしてこの結果を受けて、鷹月さんが白旗を上げた。

クラスの女子を集めて、このままじゃ嵐さんに勝てないからもう甲斐田君に任せようと言いだした。

もちろんみんな異存はない。整備班の人達も仕方ないという顔をしていた。

そもそも嵐さんのことは甲斐田君がよく知っているのだから、むしろ甲斐田君に任せるべきことだろう。

あたしがそう言うのと、四十院さんが頷いて、でも甲斐田君が素直に引き受けてくれるとは思わない、と返事をしてきた。

確かに、甲斐田君は相当なひねくれ者だ。あたし達が言ったことを素直に受け取らないで、勝手に変な方向に解釈し始めて怒り出すとかよくある。

任せたなんて言ったら責任放棄だとか言って怒りそうだな。

「ですから、甲斐田さんの言いそうなことを予め予想して先に反論を潰してしましましょう」

そう四十院さんは真剣な顔で言った。

そこであたしは気づいた。これは今まで散々やられたことへの仕返しができる。

もはやこのクラスの人達は口では誰も甲斐田君に勝てない。例えばあたしを含めたパイロット班のみんなは、反対していたはずなのにいつの間にか言いくるめられ、むしろ甲斐田君の望む方向に対してやる気にさせられたりしていた。

だから時々悪態をついてせめてもの抵抗をしたりするのだけれど、甲斐田君はそれに対しても容赦なくあたし達に罰の仕事を言いつけてさえた。

これは仕返しするチャンスだ、とあたしが言うと、みんなは口々に賛同してくれた。特に鏡さんは甲斐田君に対して鬱憤が溜まっていたらしい。ものすごくやる気になって目が輝いていた。いつたい甲

斐田君は鏡さんに何をしたのかとちよつと引いた。

四十院さんはそのつもりではなかったらしくてすごく慌てていたけれど、あたし達は一泡吹かせてやるとばかりに意気込んで話し合いを始めた。

そしてその努力は実り、甲斐田君は完全に不意を付かれたという感じで、最初は怒っていたけれど段々困ったという顔になっていく。

逃げ道を塞がれて、思いつかなかつたらどうするんだなどと弱気な言葉で抵抗していたけれど、そのうち諦めて受け入れざるをえなかつたようだった。

あたし達は久しぶりに甲斐田君に勝つたと喜んだ。甲斐田君が何も案を持っていないだなんて誰も信じていない。どうせあたし達が無理な案を出さなかつた以上は何かしら用意しているだろうし、もしなかつたとしてもその場で適当に作ってしまうくらいはやってしまう人だ。

案の定、二時間後に甲斐田君はとんでもない案を出してきた。

こんなものを隠していただなんて本当に性格が悪いと、その後みんなで言い合った。

次の日の鳳さんとの試合は当然のように織斑君が勝った。

前日に織斑君が鳳さんのためにと言い出さなければ、きっと完璧な形で勝っていたと思う。

でも織斑君のものすごくかっこいい姿が見られたのであたしは満足だ。

ついでに優勝も決まり、よかったよかったと待機室でみんなと喜んだ。

だけど、それで終わりじゃなかった。

その後は、あたしの中であつという間の出来事だった。

変なISが飛んで来て、甲斐田君が叫んで、隣の部屋で打鉄に乗って、アリーナでそのISと戦って、やられて、銃で攻撃して、気がついたら終わっていた。

体の検査が終わってクラスメイト達に囲まれて心配されて、ようや

く我に返ったと思う。

それから客席にいたクラスメイト達に今のはどういうことだったのかと聞かれて、説明しているうちに気づいてしまった。

この集団での模擬戦、あたしは一番の役立たずだった。

途端に情けなさで涙が溢れてきた。あたしがやられてしまったことで甲斐田君の作戦は完全に狂ってしまったている。耐えるべき前線の一角が崩れてしまったせいできりぎりの勝負になってしまい、甲斐田君は自分自身を囮にする必要さえあったのだ。

他の人達はきちんと自分の役割をこなしていたというのに、あたしだけができていなかった。

あたしは今までの人生で自分だけができたことはあっても、自分だけができなかったなんてことなんて一度もなかった。甲斐田君のことをIS適正が低いからできない人などと思って同情していたころではない。IS学園であたしはできない方にいたのだ。

あたしは生まれて初めて劣等感という感情を知った。

だけど、そんなことも甲斐田君はお見通しだったようだ。

顔を合わせるのも怖くて仕方なかったあたしに対して、平然とした顔で全部織り込み済みだし全然役立たずなんかじゃないと言ってくれた。

もちろん慰めてくれているのは分かっていたけど、今できることを最大限にやった、という言葉に救われた気がした。

その後騒ぎ過ぎて甲斐田君のいた医務室から追い出されて、誰かがさっきの集団模擬戦をみんなで見ようと言い出した。

どういうことかと聞けば夜竹さんが自分の映像機材で撮っていてくれたらしい。

気持ちも落ち着いたし、反省するためにも見たいとあたしも賛成して、みんなと寮の会議室で見ることにした。

音が外に届いていなかったので解説を鷹月さんがやっていたのだけれど、あたしはもちろん自分の姿だけを見ていた。

それでなぜやられてしまったかを考えていたら、鏡さんがぽつりと口にした。

「相川さんはさ、避けよう避けようって無理してたね。打鉄なんだから別に無理に避けようとしなくてよくて、ブレードで受けてればもうちよつといけたんじゃない？」

あたしはできることさえやっていなかった。

そうだ、打鉄は回避がメインの機体じゃない。ブレードや盾で受けて、耐える機体だ。

それなのに、あたしはひたすら逃げ回っている。織斑君がやっていったように。

まさかと思つて谷本さんの動きを見る。なんかクネクネしてこれはどう考えても打鉄の動きじゃないと思つた。

でも谷本さんは衛生班だしまともに訓練をしていないからと気を取り直して、篠ノ之さんを見るとそれは基本に忠実な打鉄の動きだった。

篠ノ之さんはブレード一本で盾は持つていなかったけれど、誰もがイメージする打鉄の動き方をしていた。

常に相手の正面にいて攻撃対象となり、間違つても相手の意識を周囲に飛ばさせないようにしている。両腕を振り回す攻撃に対しては片方は避け、もう片方をブレードで弾き返すという基本形で防御し、省エネに徹して全く無理をしようとしていない。

自分への救援は最後になると分かっていたこともあるだろうけれど、無理に回避しようとしなくて両方を弾き返したりして動きを最小限にして、体力の温存に努めている。そしてとうとう最後まで一人だけでやりきってしまった。

一方のあたしは鷹月さんにフォローをもらつて、危ない時は鷹月さんに相手を引きつけてもらつていたというのに。

ふと、攻撃役だったオルコットさんを見る。

するとオルコットさんは自身のレーザー銃に加えて、ビット五つで攻撃していた。五つ。

織斑君とやったとき、オルコットさんはビットを四つしか出せなかったはずだ。だけど一ヶ月経つてビットを五つ使いこなせるようになってる。

慌てて、篠ノ之さんの方を見直す。思い出してみると、一ヶ月前の篠ノ之さんは攻撃が最大の防御的な人だった。打鉄のくせにやたらと動き回って攻撃的だったことを覚えている。

でも映像の向こうの篠ノ之さんは、これでもかというくらいに防御主体な打鉄だった。つまり篠ノ之さんは打鉄の動き方を身に付けていた。

二人ともリーグマッチのための仕事をこなしながら、自分のやるべきこともしつかりとやっていた。

専用機なんて関係ない。同じだけあつた時間をどう使ってきたかだ。

あたしはこの一ヶ月間自分のためにいったい何を努力したか。スタート地点が違う上に今ではその差を引き離されてしまっている。

そして織斑君のことについてまで、この二人はあたしのはるか先を走っていた。

二人と仲良くなつて今自分は三番目だとか喜んでいる場合じゃない。何もかも負けてしまっている。

自分の中に強烈な焦りの感情が浮かび上がってきた。

それから部屋に戻って考えた。あたしは今後どうすべきか。

このままでいいなんてことは絶対はない。

今の状態じゃ何もかもが中途半端なことになってしまう。

これから何をすべきかきちんと考えようと思った。

そしてそう思った途端、答えはすぐに出た。

あたしはISパイロットになりたくてここまで来たのだ。

そのために他の同級生達とは違う道を歩んできたのだ。遊ぶのを最小限にして、恋もせず、勉強をしてきたんだ。

ようやくIS学園に入学できたというのに、道半ばにして何寄り道をしてしまっているのか。

入学はゴールなんかじゃ全然ない。

織斑君の顔が浮かんだ。

もし万が一織斑君を恋人にすることができたら、あたしはきつとそ

れで満足してしまうだろう。

織斑君にはそれくらい価値が十分にある。

でも、その場合あたしは織斑君のための人生を選ぶことになってしまふと思う。主役は織斑君だ。

もちろんそれはそれで幸せな人生かもしれないけれど、あたしはそのためにここまで努力してきたのかと言うと、多分違う。

あたしはあたしのためにここまでやってきたのだ。

ならばこれからやっていくことなんて決まっている。

まずは今までのけじめをつけよう、と思った。

織斑君に振ってもらって、そっちの方向を遮断する。

甲斐田君は言っていた。織斑君は綺麗に振ってくれると。

ならばそうさせてもらおう。

面と向かい合った織斑君は今まで見たこともないような真剣な表情だった。

こんな顔もできるんだ、と思った。

本当に惜しいなと思いつつあたしは告白し、織斑君はたった一言ごめんと頭を下げた。

あたしは振ってくれてありがとうとだけ言って背を向けたら、織斑君は、がんばれよ、と優しい声をかけてくれた。

ほとんど振り返りそうになって、ぎりぎりで踏みとどまった。

織斑君は分かっていたのだ。あたしがこうやってけじめをつけて歩き出そうとしていることを。

十分だ。最後にあたしの気持ちは織斑君に正しく伝わった。

振られたというのに、あたしの胸は暖かい気持ちでいっぱいになった。

教室に戻ったら、甲斐田君はひと目で全てを理解したようだ。

どうしてだろうとは思わなかった。やっぱり甲斐田君には何もかも見えるんだろう。

そして次の休み時間、甲斐田君に対してあたしは思いっきり見栄を張り、精一杯かっこつけた。

甲斐田君は感心した顔をしてくれたけど、全部分かっているのかも

しれない。

昨日まで恋愛脳だったくせにと内心笑っているかもしれない。それでもいい。大事なのは甲斐田君に対して宣言したということだ。

口に出してしまった以上、もうあたしは引き返せない。

宣言した通りに努力し続けなければならない。

入学初日のように感情に振り回されないよう、これからあたしは甲斐田君が見ていると意識して行動するのだ。

甲斐田君はあたしのことなんてこれっぽっちも興味を持ってないけど、それでもみんなのことを見ている。

その目がある限り、きつとあたしは自分を見失わない。

ふと、どれくらいになれば甲斐田君のチームに入れるかなと思った時、そういえば甲斐田君は自分自身の未来については何も考えてなかったと思い出した。

クラスの誰もが甲斐田君は指揮科に進むと思っているけれど、当の本人は自分のことを何も考えていないみたいだ。

あんなにも先を見て広い視野を持って行動できるのに、自分のことには五里霧中だなんて本当におかしな話だ。

篠ノ之さんによれば甲斐田君は男性の地位を向上させようとしているらしくて、そのために自分の人生を織斑君に捧げるつもりだろう、なんて大げさなことを言っていた。でも案外それに近いことを考えていたりするのかもしれない。

だってここまで甲斐田君は何もかも織斑君のためだけに行動しているのだから。

だけど今一年一組の中心にいるのは甲斐田君だ。織斑君じゃあない。

外から見れば間違いなく織斑君のクラスに見えるんだろうけど、内側では何かあるとクラスのみんなはまず甲斐田君を見る。

ここまでクラスを引っ張ってきたのは他の誰でもなく甲斐田君だからだ。

この一ヶ月半で甲斐田君はそれくらいの信頼を得ている。

だから甲斐田君に何か目的があったとして、それを言ってくれればクラスのみんなはきつと喜んで協力してくれると思う。

でも残念なことに、甲斐田君はまだあたし達のことを信じてくれないみたいだ。

織斑君以外は、いや時には織斑君さえも信じていないような気さえする。

前に織斑君に甲斐田君のことを聞いた時、あいつにもきつといろいろあるんだよ、と返ってきた。織斑君でさえも知らないことがあるらしい。

甲斐田君は織斑君のいた施設に中一の時入ってきたそうさ。つまりそれまでは家族がいたという話で、施設に入ったというのはきつとそういうことだ。

さすがにそれはあたしには重過ぎる。でも織斑君は話してくれる日をいつまでも待っていると云っていた。

こういうのが男の友情と言うんだろうか。

果たして甲斐田君の心を溶かすのは織斑君なのか、それともまた別の誰かなのか。

案外クラスの誰かなのかもしれない。

織斑君と違って甲斐田君は暗黙のうちに恋愛対象外にされているけれど、甲斐田君に対して特別な感情を持っていそうな人はいる。

その中の誰かが甲斐田君の心の中に踏み込んで、凍ってしまった甲斐田君の心を暖かく溶かす。

そうなったらとても素敵だな、とあたしは一人夢を見ている。

3. 内部への影響

「お兄様のお目に叶った女性はどなたですか？」

と、クロエは画面向こうの俺に向かって興味津々に聞いてきた。

「特に誰も」

「お兄様、女性に対する要求水準が高過ぎるのではありませんか？」

あの場にいる方々は日本でも優れた女性なのですよ」

「だから特に興味自体が……」

「まだ十五歳、完璧な人間なんてどこにもいません。欠点が見えたからと言って減点で評価をするのではなく、まずよいところを見てあげてください」

「内申書つけるんじゃないんだから」

食い下がってくるのは分かっていたが、説教から始めたか。

千冬さんといい篠ノ之さんといい、どうして俺の周囲には説教したがる人間ばかりなのだろうか。

「想像です。恋愛は想像から始まるんです。興味ないなんて言わず、まずは想像をしてみてください」

「何をさ？」

「もちろんその方と一緒にいる光景をです。そうですね、例えば鷹月様でしたら横に並んでお互いに遠慮のない対等な関係を築くことができるでしょう。四十院様なら一步下がって後ろからお兄様を支えてくれると思います。いつも笑顔の布仏様はどんな時でもお兄様を暖かく癒してくれるでしょう。もし誰かを守りたいと思うのであれば岸原様です。あの一生懸命な姿は後ろから抱きしめてあげたいと思うには十分ではないかと。あとは……ああ、谷本様は……お兄様がよければいいんじゃないでしょうか」

「最後思いつきり投げやりだね」

クロエの輝いていた目が一気によどんだ。

谷本さんはクロエ的に駄目なのか。

本当にどうでもいいが。

「あつ、もちろんお兄様の決めることですから、私がどうこう言うことではないです。未来のお姉様になるのですし、私もお兄様が選ばれたお相手に文句をつけることなどありません。私もその方に気に入っていただけのような努力したいと思います」

「いや、そこまで気合入れることないと思うけど、今谷本さんは駄目だって文句つけてない?」

「お兄様はあのようなタイプがお好みなのですか!?!」

面倒臭いな。

「全然。でもクロエ的に何が駄目なの?」

「駄目ではないですよ。お兄様にふさわしくないなんて言うつもりは全くありません。ただ、やはり女性として男性の前に立つ以上それを意識した振る舞いは必要だと思うのです。つい出てしまったとか、それなりの関係になってから見せるのならともかく、普段から女性らしからぬ振る舞いをされるのはあまりよろしくはないかと……」

鈴や蘭のようなことを言い始めた。

一夏の前に来ると途端に背筋を伸ばすのは女子にとっては当たり前の行動なのか。

「じゃあ夜竹さんとか最悪だね」

「お兄様、撤回します。一つだけ注文をさせてください。夜竹様は、夜竹様だけはやめていただけませんか。あの自分すら幸せになれないような後先考えない行動では、一緒にいてお兄様が幸せになれるとは到底思えません」

谷本さんよりもっと上がった。

哀れ夜竹さんはクロエから名指しで全否定されてしまった。

面識もない人間からボロクソ言われてかわいそうに。

まあ、クロエの言いたいことも分からないではないけれど。

「というか名前とか完璧に抑えてるしそこまで見てたなら今さらネットワークとか必要くない?」

「いいえ、名前などの情報だけなら外でも手に入りますし。それに今までは外から見えた範囲だけですよ」

「ということとは……」

「はい！ これからは自分がI S学園にいるかのようにお兄様を見守ることができると思えます！」

誕生したのは盗撮魔篠ノ之束ではなかった。ストーカー、クロエ・クロニクルだ。

「クロエ、ストーカーって知ってる？」

「ええ、特定の対象をつけ回すような人のことですよ？」

「今クロエが僕に対してやってることってそうだよ？」

「違いますよ？ 私はただ見守っているだけです、そもそも手出しは一切できませんけれど？」

「そうだね、そういう人達ってみんな自分は違うって思ってるんだよね」

思わず俺は頭を抱える。

一般的な話であれば警察に行くなりなんなり対処のしようはあるのだが、この相手に対しては俺どころか誰からも手出しができない。

そしてI S学園中に張り巡らされたというネットワークとやらを潰して回ることも不可能だ。

結論、もはや俺にはどうしようもない。

「まあまあ、くーちゃんは智希君のことが本当に心配なんだよ」

「心配から出る行動の方向性が間違っていると思います」

「そんなこと言わない。だから何かが変わるってわけでもないんだし。別に人に見られることくらい慣れてるよね？」

「いやー、四六時中見張られてるとかはないですね」

「別に常時張り付いて監視してるとかそういうことはないよ。こつちだって忙しいんだから」

「それはそうでしょうけど……まあある意味今までと変わりないってことか」

「そうそう。今までだって衛星から見られてたわけだしね。というかこれから三年間一切話をできないとかむしろそっちの方があり得ない」

「いや、だからって部屋の中まで入ってくるのはまた別の話だと思

ますけど」

「だってIS学園の中で安全な場所ってここしかないじゃないか」

確かに、一人きりになれてしかも誰からも見られない場所などIS学園内にはそうそうない。

ならばこれは必要なこととして受け入れるしかないか。

「うーん……仕方ないか」

「大丈夫、ちゃんと配慮はするから。電気消してたら話しかけないから女の子連れ込んでも平気だよ」

「クロエの前で何てこと言うんですか。というか部屋には一夏もいるし」

途端にクロエの顔がぱつと赤くなった。

色白なので赤くなるとよく分かる。

「クロエ、もちろん博士の冗談だから」

「は、はい……。いえ、別にお兄様に対してどうこう言うつもりは……」

よし、部屋では寝る時以外は基本電気を消さないようにしよう。

博士は話しかけないと言ったが、見ないとは言っていない。

「まったく、博士もクロエのためにここまで……あ、別にクロエのためをやったわけじゃないか」

「いやいや、ここまで細かくやったのはもちろんクーちゃんのためでもあるよ。クーちゃんに日本の学校生活がどんなものか見せてあげたかったんだ。ね、楽しそうでしょ?」

「はい! とってもわくわくします!」

ああ、そういうことか。

クロエはその立場的にも学校へ通うことなど許されない。

だからせめてその光景を見せるくらいはという話だ。

それに興味もない他人の姿など見せられても面白くもなんともないが、俺という知った人間がいれば全然違って見えるということなのだろう。

以前はそれどころではなかったが、ようやく落ち着いた今だからこそこんな余裕も出てきたのか。

「だからさ、智希君にはIS学園で思いっきり青春を楽しんでもらいたいのだよ」

「そういう理屈に持っていきますか。当然お断りですね」

「そんな！ お兄様！」

「別に遊びたいからここに来たわけじゃないし。博士、分かっていると違いますけど僕は別に自分のことはどうでもいいんです」

「まあまあ、リーグマッチを楽しそうにやってたじゃないか」

「どこがですか。あれはもちろん一夏のためです。余計なことされてほんと冷や汗ものでしたよ」

博士がニヤニヤ、クロエがニコニコ。

なぜだかイラツとした。

「クロエ、別に僕のことを見るなどは言わないけど、インドア趣味もほどほどにね」

「運動なら毎日しっかりやっています！ IS乗りとして当然です！」

「全然大丈夫だよ。智希君はもう見てないから知らないだろうけど、そこんじよそこらの連中なんてくーちゃんの足元にも及ばないから。束さんの護衛として申し分ありません！」

「ありがとうございます！」

博士がISを動かせない以上、どうしても護衛は必要になる。それがクロエだ。

博士を『保護』しようとして襲ってくる多数のISに対してクロエは一人で立ち向かわなければならぬ。しかも博士を守りながら。

この数年間しつかりとそれをやってきたのだから、クロエの実力を疑うことなどあるわけがない。

まあ、そもそも俺よりも年上だし。言うて怒るので言わないが。

「おっと、いつくんが戻ってきたきそうだね。じゃ、今日はこれで」

「了解です。聞きたいことは聞けたので、とりあえずはよしとします」
「お兄様、お休みなさいー」

画面が消えて、俺はそのままベッドの上に倒れる。

やりたいことをやれる立場にいる俺はきつと十分幸せなのだろう、

と思った。

「あら珍しい。こっちから呼びに行かなくても来るなんて」

三組代表であるベツティは俺が教室の扉を開けるや寄ってきた。

「ええと、お話がありました」

「何何？ おとといの話？」

「おとといというか、リーグマッチのことで」

危うく一夏がついてくるところだったが、俺は事情を説明するため三組の教室に一人でやって来ていた。

「ああ、そういえば一組が優勝扱いになったんだって？ おめでとう」

「よく知ってますね」

「昨日先生が言ってたから。正当な結果なんだから文句とか絶対に言わなくて。確かにリーグマッチは中止になったし私も最後の試合をやれてないけど、でも一組が全勝したのは事実だからね。わざわざ事情を説明しに来なくても怒鳴り込んだりしないよ」

「いや、そういうことじゃなくて」

俺が職員室でやったというのものもあるだろうが、どうやら山田先生は相当にがんばったらしい。

しっかりと他のクラスに根回しまでしている。

「あれ、違った？ 最後の試合をできなかった三組も四組もその前までに二敗してるから、優勝の特典をよこせとか口が裂けても言えないんだけど？」

「そうじゃなくてですね、ほら、一夏との試合中に一夏が変なこと言ってたじゃないですか」

「別に今さら敬語とか使わなくていいよ。でもなんだっけ……ああ、そういうえば甲斐田君を殴っていいとかよく分かんないこと言ってたね」

「まさにそれ。つまり、僕はこのクラスに対してスパイ行為をしていたという話で」

教室内がざわめいた。

正直なところ試合中に一夏が言わなければ有耶無耶にしてしまうつもりだったのだが、人前でああ言われてしまった以上は仕方ない。ここ二日間一夏もしつこいし。

それにあの感じなら一夏に矛先が向くこともないだろうし、俺に向かってくる分には別に全然構わないのだから。

「ああ！ そういうこと！」

「だからそちらとの試合に勝てたのはそういう状態だったからという話です」

「うん、今すぐく納得がいった。完璧に読み切られて裏をかかれてもう完敗だと思ったもん」

「その裏事情はこういうことだったんです。そちらの情報はこちらに筒抜けで、こちらの情報は僕で遮断されていたと」

「なるほどねえ……。情報戦の時点で負けてるんだからそりゃあ勝てるわけないか」

少なくとも一夏のエネルギー無効化攻撃の詳細を三組代表ベツティが知らなかったのは事実だ。

一組よりも優れた情報収集能力を持っていたし、俺に頼らなければきっと掴んでいたと思う。

「というわけでその謝罪を」

「なるほど理解。でも謝る必要とか全然ないよ」

「いや、さすがに騙していたのは事実なわけだし」

「何言ってるの。それならこっちだって甲斐田君に同じことしようとしてたのは分かってるでしょ？ むしろこっちが謝りに行かないきゃってみんなで話してたんだから。こんな健気な子を騙して本当に後ろめたいって」

「けなげ？」

どこかで聞いた言葉が飛び出してきた。

まさか。

「おとといの甲斐田君。あれを健気と言わずして何と言うかって話。明らかに動きがおかしかったし、あれ故障してたんでしょ？ それなのに仲間のために前に出て囨になろうとするだなんて、久々に心打た

れたよ」

「いや、さすがにそれは全然違うかと。スパイ行為をやったのは僕自身の意志なわけで、健気という言葉からは程遠くて」

そうだった。この人達もまた、ゴーレムと戦う俺達を見ていたのだ。しかも目の前で。

「うんうん、謙虚でよろしい。でもだいたいスパイと言ったって最初に話しかけたのはこっちだよ？ どうせクラスの人達にそれなら逆スパイをしてこいって言われたんでしょ？ 大丈夫、分かっているから」

全然大丈夫じゃないし、何も分かっていないのだが。

「いやいや、そうじゃなくて、そもそも話しかけてもらうところから始まってたという話で」

「えっ？ まさかそんなことまでさせられてたの!? 甲斐田君に学園内を一人で歩き回らせて餌にして、見かねた他のクラスに話しかけさせようとしてただなんて……」

教室内がまたざわめいた。

ただし今度は戸惑いではなく怒りの空気になっている。

これはまずい。

「違う違う！ 全部僕が考えたことだから！」

「いいよ、無理しなくていいから。わざわざ謝りに来たのはクラスの人に言われたからではなくて、甲斐田君の意思なんだってよく分かった。お互い様なんだからそんなことする必要ないのにな」

「いやいやいや、一夏が思いきり言ってたじゃない」

「そうか、ということとは織斑君も真実を知らないわけね。織斑君は甲斐田君が自分の意思でやったと思ってるのか。学園内を男子が一人で歩くなんて普通あり得ないって分かるでしょうに」

駄目だ、全く話を通じない。

どうして目の前の女はどこまでも頑ななのだろうかと考えて、気づいた。

そういえば俺は、最初に一組のクラスメイト達を悪者にしていた。つまり三組の代表含めた全員は、一夏にではなくクラスメイト達に

その矛先を向け続けていたのだ。

ここまで俺は一夏を悪者にさせないことしか考えていなかった。というかそもそも事情を説明しなければならぬのは、クラスメイト達が悪者にされているという誤解を解くためだった。

しまった。またも説明の順番を間違えた。

「えっと、ベッティさんは完全に勘違いをしてるんだけど、何もかも僕が考えた作戦で、全部僕が自分でやったんだ」

「うん？ やらされてたじゃなくて？」

「そう。ほら、おとといのを見たなら僕が指揮してたって分かるでしょ？ つまりそういうことなんだよ」

「指揮？ そんなことしてた？」

おかしい。指揮で通じない。

新聞部の黛先輩は当たり前のように分かってくれていたのだが。

「いや、見てたなら分かると思うんだけど」

「分かるも何も、故障してたし後ろで守ってもらってたただけだよな？」

途中で見かねて前に出て囮になってやられただけなんじゃ？」

「いやいや、指示を送ってたの見えなかった？」

「と言われても声とか音が遮断されてたし……。みんな、そうなの？」

「なんか声出して何か言ってるなどは思ったけど」

「それってがんばって応援してただけじゃないの？」

「自分から囮になってやられちゃう指揮官とか聞いたことないけど。それって指揮を放棄しちゃってるし」

「というか故障機に乗って出てくるような人が指揮をしてるとか普通は思えないかな……」

素人が言うならまだ分かる。

普段ISとは縁のない人がたまたま見て印象で語ってしまっただけ、というなら分からないでもない。

だが目の前にいるのは俺達と同じ立場の人間だ。技術的には素人に毛が生えた程度でしかなくても、ISをごく身近なものとして考えてきた人達だ。

確かに俺は故障機に見えるような機体で出てきたり、たった二発で

あつさりやられてしまったりしているが、それはそれとして目の前で起こったことを正しく認識できていないのだろうか。

「みんな後から映像とか見てもそう思わなかった？」

「映像？ そんなのあるの？」

「学園からはリーグマッチの試合以外の公式映像は出てないけど」

「一試合終わった後すぐに連戦させるとかあり得ないし、あれって段取り間違えて滅茶苦茶なことになっちゃったってだけじゃないの？」
分かった。この人達は一度だけしか見ていないのか。それも訳の分からないままに見ただけで。

リーグマッチの試合は学園が撮った公式映像が学園のサイトから配信されている。だがさすがにあのゴーレムのような怪しいISの映像を簡単に流すわけがない。泣きついたのか鈴の流さないでもらえたようだが。

博士が全世界にばら撒いたので外の人達はネットで何度も見ることができているが、中にいる生徒達はそうはいかないのだ。

消されていると黛先輩が言っていたので、おそらくIS委員会から報道規制がかかっている。きっとIS学園の生徒が見られるようなサイトには載っていない。

また調査中だということでも学園側から生徒達に説明もない。だから俺以外の生徒からすれば、手違いでよく分からない集団模擬戦が行われた、という程度の認識でしかないのだろう。

しかも当事者であった一組とは違って他人事でしかない。

もちろんその内知るのだろうけれど、一日二日では黛先輩のように伝手でもなければ全容など理解できないわけか。

「うーん、がんばって考えたんだらうけど、それで私達を納得させるのは無理かな」

「いやいや、でも事実は事実だから。そうだ、うちのクラスはたまたま映像を撮ってるからそれを見てもらえれば」

「別にそこまでしなくていいよ。よし、分かった。私達は甲斐田君の言うことを信じることにする！」

「ことにするって……」

「そうしないと甲斐田君が困るんだよね？ クラス内での立場的にも」

「いや、立場的にと言うか……」

確かにクラスメイト達とも約束をしているので、こうやって真相を説明して回ることは義務ではあるが。

「アニータ、そういうのはよくないよ。だってそれって全部甲斐田君のせいにするってことだよな？」

「だからまさにその通りなわけで」

「まあまあ、表向きはってだけだから。それにもし私達が揃って一組に抗議しに行ったりしたら、今度は甲斐田君が間に挟まれて迷惑かけるだけだし」

「ああ、それはよくないか」

「クラスが違う以上は迂闊なことできないね」

悪い人達ではない。

こうやって本気で俺のことを心配などしている様子を見ると、隙あらば悪態をついてくるようなクラスメイト連中よりもよほど性格がいいとさえ思える。

ただ、この人達の中で俺は弱者だ。

自分でそう振る舞ってきたので全部自業自得の話なのだけけれど。

「もちろん、これはひどいと思ったら躊躇なく特攻する。でもわざわざ余計なことをして甲斐田君の立場を難しくするようなことはしない。どう？」

「うん。アニータの言う通りだ」

「大丈夫、甲斐田君のことはクラスみんなで守るから」

「ここを自分の居場所だと思ってってくれていいよ」

この人達にとって俺は、いや男は守るべき存在であるということだ。

思えば一組のクラスメイト達にも当初そういう空気はあった。

すぐに俺も一夏も守るべきという言葉からは程遠い人間であると理解してくれたというだけで。

「甲斐田君、安心して。別に一組の人達と喧嘩しようとか考えてない

から。甲斐田君の迷惑になるようなことは絶対にしない」

「ありがとう」

そして俺は諦めた。

今俺が何を言っても理解されることはない。

俺に対するイメージが完全に固まっていて、対ゴーレム戦を見ても変わらないのだから。

『あり得ない』とか『普通は』と連呼しているので、きつとフィルターをかけて見ているのだろう。

頭でっかちは言葉で説得できない。それは自分が一番よく分かっている。

「じゃあ今日のところはこれで」

「もう帰っちゃおうの？」

「いや、これから五組にも同じことを」

「え、それは……やめておいた方がいいと思う」

「それはどうして？」

「だって五組は……代表だった佐藤がクラス代表から降ろされたって。だから五組は今ごちゃごちゃしてると思う」

力でのし上がったという五組代表はリーグマッチで負けたことによつて信用を失ったか。

五組代表は初日一夏と鈴に負け、二日目は三組にも四組にも負けて全敗で終わっていた。

三組代表ベツティは宿敵五組に勝てたのでかろうじて面目は立ったようだが、五組代表の方は駄目だったようだ。

「そうなんだ。でもまあちよつと話をしてくるくらいだし」

「それは……そうだ、一緒に行こう」

「いやいや、その方がかえつて変なことになるよ。わざわざ喧嘩を売りに来たの catt」

「う……それもそうか」

「危なそうならすぐ逃げることにするから大丈夫」

心配そうな顔をしているベツティが余計なことを言い出さないうちに、俺は笑つて教室を後にした。

そして教室を出たところで、ちょうど向こうから四組代表が歩いてきた。

四組代表更識妹は俺を見るやあからさまに挙動不審な動きになって目をそらし、そそくさと自分の教室へと入っていく。

ちゃんと隠せと思いつつも、そういえばそつちの問題も考えなければど、俺は改めて更識妹に対する難問を意識した。

「何呼ばれてもいないくせに男が来てんの？」

五組の教室の扉を開けた途端、知らない顔に絡まれた。

だがここまで敵意むき出しだとかえってやりやすい。

「申し訳ありません。一組の甲斐田ですが、五組代表の佐藤さんにお話がありました」

「はっ。ああ、あんたはどこにも居場所がなくてあの負け犬に守ってもらおうとしてたわね。残念、あの負け犬にそんな力はもうありません」

「どういうことでしょうか」

「クラス代表でもない奴に何ができるって話よ」

「佐藤さんはクラスの代表を降りたということですか？」

「あんな恥晒しをそのまましておくとかあり得ないから。まあ最初から代表にしたこと自体が間違いなんだけどね。三組代表のような雑魚にすら勝てないとか、クラスにとってほんと大迷惑」

元五組代表となった佐藤に対してひどい言いようだ。

お前がその負け犬呼ばわりしている相手に勝ったわけではなからうに。

「そうですか。もちろんこちらのクラスの事情に対してどうこう言える立場ではないですが、佐藤さんと話をさせてもらってもいいでしょうか」

「負け犬同士で傷の舐め合いとか辛気臭くてたまらないからやめて欲しいんだけど」

「……」

「廊下でやって。後勝手に人の教室に入るとかもなし。佐藤！」

目の前のおそらく新しい五組代表であろう女生徒は、振り返って大声で怒鳴った。

視線の先にいた元五組代表佐藤は無言で立ち上がり、真顔で俺を見てから歩いて教室の外へと出て行く。

もちろんその後に続く取り巻きなどいなかった。

「ほら、さっさと行く」

「ありがとうございます。最後にお名前聞かせてもらっていいですか？」

「……まあそれくらいならいいわ。杉山敦子」

「ありがとうございます。では」

頭を下げて、俺は教室の外に出た。

こういう輩など別に珍しくもないが、あれはまあパフォーマンスの類だろう。

新しい代表として前とは違うと示したいというところか。

「派手にぶっ飛ばされてみたいだけ大丈夫そうだね」

「ISに乗っていればああいうこともあります。それよりもなんか大変なことになってるみたいですけど」

ところが元五組代表佐藤は平気そうに鼻で笑った。

「あたしを追い落としてあいつは今得意の絶頂だからね。それにあたしを非難した手前ああするしかないのさ」

「それってもしかして僕が関係してます？」

「いやいや、リーグマッチ前にあのバカはあんたをスパイに仕立て上げるとか言ってただけ。あたしが一組に負けたのはそれをしなかったせいだつてさ」

「はあ……」

困った。これではものすごく言いづらい。

「別にあんたが気にするようなことじゃない。あんな反則技を持ってちやあ多少の小細工をしたところで大して結果は変わらないんだから」

「それは……」

「その後の試合も見たしクラス代表全員と戦ったから言えることだけど、単純にあたしの実力不足だったってことだ。別に機体がどうか戦術がどうかとかじゃない。順当に負けるべくして負けたというところだね」

「潔いんですね」

「事實は事實だ。今のあたしじや三組のバカになら勝てなくもないけど、他の連中にはまたやっても同じ結果だろうね。全てにおいて足りてない」

元五組代表は清々しい顔をしている。

これは完敗したが故なのか。

とはいえ三組代表ベツティには勝てると言うあたりまだ意地も残っているようだが。

「でも佐藤さんこれから大変そうですね」

「そんなのは一ヶ月程度の話だよ。来月の個人戦で何もかもはつきりするんだから。杉山のバカはあたしを追い落とししたつもりだろうけど、あたし自身に勝ったわけじゃない。それどころか先月あたしに散々叩きのめされたのに。今は完全に勘違いしてるけどね」

これは全然平気そうだ。

確かに佐藤自身は他のクラス代表に負けたのであって、新しく五組代表となった杉山なんちゃらに負けたわけではない。

「でも一ヶ月といっても大変だと思えますし、今からでも勝負を挑んだ方がいいんじゃないですか？」

「それも考えたけどね、いい機会だから自分に足りないところを鍛え直そうと思ってる。クラスの低レベルな連中の面倒見るよりはだいぶ有意義そうだ」

「低レベルって言っちゃいますか」

「正直 I S に乗れて満足してるようなのが大半だからねえ。確かに I S 学園に入って人生保証されたつもりかもしれないけど、向上心すらないのはどうかと思うわ。あたしが言わないと何もしようとしないうような奴らは低レベルで十分。あんたんどこも大半はそうだろう？」

「うーん……どうだろう？」

これは意外だった。

IS学園に合格した生徒など向上心の塊だと思っていたのだが。一組のクラスメイト連中なんて揃ってそうだったし。

だがIS学園をゴールとしてしまうのもそれなりにいるのか。

「ま、そういう奴らは六月の全員参加な個人戦と学期末の試験で自分の立ち位置を思い知るのさ。それでやる気になるかやる気なくすかは知らないけどね」

「意外とドライですね。もうちよつと親分肌というか面倒見のいい人だと思ってましたけど」

「自分のことすら自分でどうにかしないようなのに何かしてやるほどあたしもヒマじゃない。もちろんあたしのために何かしてくれただら返してやろうとは思うけどさ」

「なるほど」

クラスメイト達がよく愚痴っているが、IS学園は生徒達に対して相当にドライだ。

ここは自分から行動しないと何も見えてこない場所らしい。

結局リーグマッチの特典に最後まで気づかなかったであろう二組や四組は終始のんびりしていたようだ。リーグマッチ最後の方で鷹月さんが呆れ返っていた。

これは気づいたか気づかないかの問題なのか、それとも個人個人の問題なのか。

「まあそういうわけだからさ、あたしもあんたに構ってあげられる余裕がない。クラスもあんなだし、しばらくは距離を置いておきな」

「そうですね、確かに行つても何もいいことなさそうだ」

「あんたも自分のことは自分でどうにかするんだね。まあぼっちが寂しいってんなら三組のあのバカなら受け入れてくれるだろうし」

「考えてみます」

自分でどうにかしろと言いつつ三組に行けと言ふあたり、素直じゃない系か。

しかし三組のベツティのことを肯定的に言うとは、殴り合つてお互いに何か通じ合つたりしたのだろうか。

クラスメイト達によれば三組ベッティ対五組佐藤の試合は相当な激戦だったそうだが。

「じゃ、またね。元気だな」

「そちらこそ」

クラス代表から追い落とされたという敗者の顔など一切なく、五組の佐藤は平然と教室に戻って行った。

クラスによつて色々事情が違うのだなと思い、そして重大な事実に気づく。

俺はまたも自分のことを話しそびれてしまっている。

どうやら俺は下手に出た時相手のペースに飲まれてしまいがちなようだ。

だが、今から五組の教室に突っ込むなど絶対にやりたくない。

どうしようかと考えて、五組は今権力闘争中でそれどころじゃなかったと言い訳することに決めた。

「で、どうして鈴がいるの?」

「いちや悪い?」

「悪いも何も、これは一組のパーティーなんだけど」

「知ってるわよ。一夏のリーグマッチ優勝記念パーティーでしょ」

「だからそこにどうして二組の鈴がいるわけ?」

ごく当然のように居座っている鈴と所在なさ気なハミルトンを見て、さすがに俺も呆れてしまった。

鷹月さんが困った顔で手招きしているので何かと思えば。

「そんなの一夏におめでどうって言いに来たからに決まってるじゃない」

「それなら別に今じゃなくてもいいよね」

「はあ? 一夏の手料理を食べられるなんて今しかないわよ」

話が噛み合わない。

俺が言いたいのはそういうことではない。

「じゃあ言わせてもらおうと鈴の分とか用意されてないんだけど」

「どうせ一夏のことだから自分基準で量を作ってるでしょ。だったら大量に余るだろうし、あたしが食べてあげるわよ」

「別に鈴に食べてもらわなくていいんだけど」

なまじ一夏のことをよく分かってるだけに始末が悪い。

そういえば俺は一夏にそのへんの注意をするのを忘れていた。

確かに一夏が足りなくならないようにと多めに作っているのは間違いない。

主夫思考で、余ったら自分で処理すればいいと考えているだろうか。

「細かいことをごちゃごちゃうるさい奴ねえ。別に一人二人増えたところで大して変わんないでしょ」

「いやいや、そういう問題じゃないから。だいたい鈴は敵なんだし、この場にいる資格がない」

「は？ バツカじゃないの。リーグマッチは終わったんだし、もう敵とか味方とかないわよ」

「まあまあ、わざわざお祝いに来てくれたんだし、それくらいはいいじゃないか」

余計なことを言う馬鹿は誰だと振り返れば相川さんだ。

この女、恋愛戦線を離脱して思考が完全に自由になってしまっている。

以前であれば全力で阻止しようとしただろうに。

そんな思いの俺を知ってか知らずか、相川さんは笑いながら通り過ぎて行った。

「ほら、話分かる奴もいるじゃない。いい智希、あんたもこういう風に柔軟な思考ってやつを身に付けなさいよ」

「それを言うなら鈴はまず常識を身に付けるべきだね」

「はあ!?!」

鈴が憤慨して立ち上がり、ハミルトンがオロオロしている。

いっそ叩き出してやろうかと思っただが、よく考えたら喧嘩したら負けるのは俺の方だという明白な事実に気づいてしまった。

「甲斐田君も落ち着きなさい。料理が足りてるなら別にいいと思う

わ

「織斑君は自分基準で三十一人分だと言っていました。間違いなく余り過ぎると思いますので、むしろ消費していただけるのはありがたいのではないのでしょうか」

見かねたのか鷹月さんと四十院さんが入ってきた。

この二人は騒ぎにならない方を選ぶか。

「分かったよ。じゃあ鈴は残飯処理係として特別にこの場においていいよ」

「甲斐田君」

「相変わらず一言多い奴ねえ。嫌味な男は女の子に嫌われるって覚えておきなさい」

「それはどうも」

鈴は二度目の挑発には乗らなかった。

昔の鈴なら『じゃあもういい』などと言っていただろうが、少しは自分を抑えることができるようになったらしい。

「ハミルトンさんごめんね。鈴に無理やり引っ張られてきたんでしょ？ お詫びってわけじゃないけど一夏の料理はおいしいから、ゆつくり食べていって」

「ううん、むしろ押しかけちゃってごめんと言うか……」

ハミルトンがずっと申し訳なさそうにしているので、俺は普通に声をかける。

作戦変更。俺はハミルトンを持ち上げることによって相対的に鈴を落とすことにした。

「いやいや、どうせ料理は余るんだし、食べてもらった方が一夏も喜ぶよ」

「う、うん」

「はあ？」

「やれやれ。じゃあ後よろしくね。行こうか」

「は、はい」

呆れた顔して鷹月さんが離れて行った。四十院さんもチラチラとこちらを見ながら行って行く。

「そういえばハミルトンさんって僕と一夏以外に一組に知り合いとかいないでしょ。居づらいだろうし食べるだけ食べたら鈴は置いて帰っていいと思うよ」

「それはさすがに……」

「それなら智希、あんたが相手してやりなさい。今後もうやつて来ることあるだろうし、一組の連中にティナを紹介してあげなさいよ」
「鈴」

「ていうか今後も他クラスのイベントに来るつもりなんだ……」

「当たり前でしょ」

何が当たり前なのか俺にはよく分からないが。

「で、一夏の料理はいつできるの？」

「来るのが早過ぎだよ。というか今日のこと誰から聞いたの？」

「えっ？ そ、それは……こ、小耳に挟んだのよ！ ねえティナ！」

「う、うん」

鈴とハミルトンが顔を見合わせて挙動不審に笑う。

そういえば鈴達にこのことを教えたのは誰だ。黛先輩がいた時は……そうだ、鈴はちようど席を外していた。

篠ノ之さんやパイロット班連中がわざわざライバルに伝えるとも思えないし、いったい誰だろう。相川さんあたりが面白がつてやったというところなのだろうか。いや、さっきの感じでは知り合いという様子でもなかった。

それなら普通に考えて、黛先輩が何かの拍子に漏らしたとかそのへんだろうか。

「ま、まあそんなことはどうでもいいわよ。それよりも、時間あるならあの変なISの話でもしようじゃない。ティナがいろいろ聞きたいことあるそうだし、あたしもあれから智希とちゃんと話をしてなかったでしょ」

「そうだったっけ？ でも鈴はあの場にいたんだし全部分かってると思うけど」

「それは……そうだ、あんたは指揮をしてたわけじゃない。そのことについてとかさあ」

「なんで今思いついたような言い方するわけ？」

「いちいち突っ込まなくていいから。ほらティナ、智希にいろいろ聞きたいんですよ？」

「う、うん。甲斐田君って指揮の勉強とかしてたの？ 鈴に聞いた感じだとあの場でしつかり指揮をやってたって……」

「全然。というか鈴、ハミルトンさんにどういう言い方したわけ？」

「あんたが話をしてるのはティナでしょ。あたしに聞くな」
「何それ」

どうやら鈴は俺に対して相当にやましいことがあるようだ。

おそらくそれはこのパーティの情報の出所のことには違いない。

さては盗み聞きでもしたか、クラスの誰かを脅したりして無理やり聞き出したか、まあそのあたりだろう。

「え、えっと、あの時最初に鈴と織斑君を出さなかったのはやっぱり温存？」

「それ？ ええと、あの時は一夏も鈴も戦える状態か怪しかったからね。何しろ一戦終えたばかりだったし、ダメージもひどかったし」

「そうなんだ。確かに鈴はエネルギー切れ一歩手前だったみたいだものね。でも織斑君の方は？」

「鈴から聞いてない？ 一夏のエネルギー無効化攻撃、ほらブレードが光ってた攻撃だけど、あれを使うとシールドエネルギーが消費されちゃうんだよ。だからあの時の一夏は実質紙装甲状態で……」

かわいそうに、哀れハミルトンは鈴からパーティが始まるまでの時間稼ぎを丸投げされてしまった。

前から人がいいのは知っていたが、ハミルトンも必死に言葉を繋いでその役目をこなそうとしている。

それならハミルトンの心意気に免じて、この場くらいは付き合っただけでやることにしようか。

もちろん、後できっちり真相究明をするつもりだけれど。

やがて時間となり、食堂にはクラスメイト達が揃った。

みんな一夏の料理に相当期待しているようだ。半分以上がこのために昼を抜いたらしい。

「ううっ……あと少し、あと少しだったのに……」

いつの間にか俺の隣に来ていた谷本さんが悲しそうに頭を垂れている。

すごく言いたそうにしていたのでやむなく聞いたら、決意して朝を抜いて昼も抜いたら腹が減りすぎてしまい、夕方に我慢できなくなって食べてしまったそうだ。

こんなんじゃないっけり食べられない、と自業自得な自分を呪っていた。

「みんな！ よく来てくれた！ まずは腹いっぱい食べてくれ！」

食堂の奥からコック姿の一夏が両手に皿を持って現れた。続いて手伝ってくれた食堂の人達も出てくる。

食堂に拍手と歓声が湧き上がった。

「あれ、挨拶とかなし？」

「だって初っ端から一夏に感謝の言葉とか言われたらみんな泣いちゃって食べられないでしょ？ だから最後にさせた」

「あー、確かに」

一夏は珍しく挨拶文を考えていたらしく、昨日の夜部屋で練習までしていた。

だが俺はそれを見てこれはまずいと思い、挨拶は最後にしよう説得したという話である。

いつ考えたのか一夏の中でストーリーがあつたらしく、最初は愚図っていたのだが、さすがに大量に余らせるわけにはいかないので俺もしつこく説得したのだ。

「みんなそんなにながつつかなくてもたくさんあるから心配しないでいぞ。すぐ持ってくる」

忙しく動き回りながらも一夏は笑顔で、本当に楽しそうだ。

そういえば人をもてなすのも好きな男だった。

それにあんなにおいしそうに食べてもらえたら、作った方としても嬉しいだろう。

「甲斐田君は食べないの？」

「どうせ残るし、きつと数日はあの残りが僕と一夏の主食になるからね。まあある程度落ち着いてから。谷本さんもあったかいうちならまだ入ると思うから今行った方がいいよ」

「な、なるほど……よし、行つてきます」

腹を触つて状態を確認し、谷本さんはフラフラと輪の中に入つて行つた。

「かいだー！ こつちこつち！ これこれ！」

「甲斐田君！ これすごいですよ！ 見てください！」

布仏さんと岸原さんが手招きする。

相当に興奮しているようだ。

俺は苦笑しつつも、一夏は本当に幸せ者だなと思ひながら二人の元に足を進めた。

それからしばらくして新聞部の黛先輩達がやってきて、そのまま皿の方に食いついてしまった。

何これ何これと驚きながら取材など忘れてしまったかのように食事の方に全神経を集中させている。

またいつの間にか遠巻きに見ていた他のクラスの生徒や上級生達も入つて来てすごい勢いで食べていた。一夏というよりは食堂の人達が大量に余りそうだからと引き込んだらしい。

一方クラスメイト達は最初にこれでもかと詰め込んで、今は少し離れて椅子やソファアに座り幸せそうな表情を浮かべている。

一夏がデザートまで用意していると聞いて、最後腹の中に入れられるようにとじつとして消化活動を行っているつもりのようだ。

「甲斐田君」

振り返ると、鷹月さんと四十院さんが笑顔で立っていた。

そしてもう一人。

「お久しぶり。リーグマッチ優勝おめでとう」

「宮崎先輩」

一ヶ月ぶりくらいだろうか、久しぶりに宮崎先輩の顔を見た気がする

る。

「お祝いしてるって聞いたから来ちゃった」

「そうですか、じゃあ一夏の作った料理を食べてってください。かなり余りそうで今はもう誰でもいいから食べてくれって感じなので」

「ありがとう。ちよつといただいたわ」

「ちよつとなんて言わず存分に」

「ううん、夜食べてたからそこまで入らないわ」

「それは残念です」

「いえいえ、それより甲斐田君、今時間ある？」

「ええ、特に何かをしてるわけでもないの」

「そう、それはよかった」

と、宮崎先輩は笑った。

その笑顔になぜだか俺は背筋が冷やりとした。

「じゃあ、反省会を始めましょうか」

4. 反省会

「反省会を始めましょうか」
と宮崎先輩は俺に笑いかけた。

「こんな場所があったんだ」

「さすがにこのあたりはあまり来る場所でもないですしね」

「まさかの説教部屋か……」

宮崎先輩の後について行った先は、数日前中国の管理官と話をした場所だった。

「説教部屋!？」

「さすがは甲斐田さん、既に榮譽ある一年生第一号の座を獲得していたのですね」

「へえ、もう知ってるとはやるじゃない。ここはそれなりのことがないと使われない場所なんだけど」

宮崎先輩がどこからかパイプ椅子を持って来た。

前に来た時もそうだったが、ここには机一つと椅子二つしかない。

宮崎先輩は鷹月さんと四十院さんにパイプ椅子を渡し、自分は奥側の椅子に腰掛ける。

「甲斐田君も座って」

「あ、はい」

「さてと、まず話の前に、最後に乱入してきたあの特殊なIS、あれは何だったか理解してる？ 見た感じじゃ分かってそうだったけど」

「人が乗ってないってことですよね？」

「うん、その通りだ。じゃあそれらを送り込んできたのはいったい誰だと思う？」

「僕はIS学園もしくはIS委員会だと思っています」

もちろん犯人は言うまでもなくあのいい年したウサ耳コスプレ女なのだが、普通に考えるとそうなると思われる答えを俺は口にした。

「そうなの!？」

「どうしてそう思われるのですか？」

「ええと」

「いいよ、続けて」

「ごく単純な話で、IS学園に乱入してくるような国とか組織とかないから。軍隊でも怖気づくような場所に突っ込んでくるだなんて、つまり内部の犯行としか考えられないよね」

「ああ」

「そういうことですか」

「うん、いい答えだ。常識的で模範的な回答だね」

宮崎先輩は笑顔で頷いた。

それはつまり宮崎先輩は既に分かっているということである。

「ということは違うんですか？」

「えっ？」

「IS学園でもIS委員会でもないね。君達はそれどころじゃなかっただろうけど、アリーナの外側では学園にあるIS全機で張られたバリアを突破しようとしてたんだから。専用機持ちはもちろん、訓練機先生機警備機全部出てたんだよ。織斑先生も今まで聞いたことないような厳しい声で指揮をとってたし、まずIS学園は何も知らされていなかった」

なるほど、終わった後すぐに警備のISも入って来たし、きつとてんやわんやの騒ぎだったのだろう。

「織斑先生とかごく一部の人間だけは知っていたという可能性があるんじゃない？」

「そうだね、甲斐田君ならまずそこを疑うよね。だけどそれもない。だってはつきり言ってあの織斑先生ですら最初は取り乱してたんだから。そして誰もあのバリアを突破できないと分かって、織斑先生が自ら打鉄で出るところだった」

「でも結局出てないですよね？」

「それはね、戦況報告を聞いて冷静になったみたい。相手のISが大したことないというのと、君達が勝てそうだというところで全機に待機命令を出したわ。そしてその上で自分でバリアを破っていつでも助けに入れる状態を作っていた」

「さっさと入ってくればよかったのに」

「私達もまさかそこでそういう判断をするとは思わなかったけど、織斑先生が言ったの。今後のためにもこの場は自分の力で乗り切らせる必要があると」

「どういうことだろう。博士と千冬さんは示し合せてなどいないはずだ。それとも博士が俺に嘘をついていたのだろうか。」

「どういうことでしょうか」

「その理由はあのISを送って来た犯人が誰かということに関わってくるから、後にさせてもらうね。だからまずIS学園はこの事件に関与していない」

「じゃあIS委員会は？」

「それがねえ……アリーナのVIPルームにいたIS委員会の人達、乱入があつた後全員その場から逃げ出したの。まるで狙われているのは自分達であるかのようにね」

「それも演技なんじゃないかって思いますけど」

「もちろん、可能性だけならゼロじゃないわ。でもね、そもそもIS委員会にはわざわざあんなことをする理由がない」

なるほど、IS委員会の方も犯人が誰かすぐに分かったのか。

「でも理由なんて本人に聞かないことには……」

「わざわざアクシデントの形になんてする必要がないということ。集団模擬戦をやらせたかったらやれって言えば済む話なんだから。そしてイデオロギー的な可能性も薄い。人前で不意打ちして疲労状態の織斑君をボコボコにしようとするとか、姉のブリュンヒルデ織斑先生の機嫌を損ねるような真似をして何の得があるか。織斑先生といえどそういう人達の象徴だし、今まで散々ごまをすつてご機嫌取りをしておきながらね」

「じゃあやっぱり織斑先生もグルなんじゃないですか」

「甲斐田君は散々やられている分織斑先生に対して見方が厳しいわね。でもこの人が犯人だと考えた方が誰もが納得いくし、辻褁も合うのよ」

「この人？」

もちろん俺はそれが誰かだ分らないという顔をする。

「篠ノ之束博士。ご存知の通り今行方不明となっている I S の開発者よ」

「えっ!？」

と俺は驚いてみせるしかない。

「I S 学園のバリアを解除して、それ以上の強度のバリアを張る。そもそもこれだけで犯人は限られてくる。だいたい I S 学園のバリアなんて技術的には最先端なんだからね。そして極めつけが人の乗っていない I S。そんな技術は今のところ世界のどこにも存在しない。つまり新しく発明されただろうけど、それらを両立できるだなんてもう篠ノ之博士以外にはあり得ないのよ」

「どこかの国とか研究所がこっそりやってたとか……」

「どこの誰が自分の研究成果を現物で他人にあげたりする？ 特許も取らずにさあどうぞ好きに調べてくださいだなんて、今までの自分の努力をドブに捨てるようなものよ」

確かに、普通の科学者なら絶対にやらないことではあるだろう。

「従って私達としては今回のことは篠ノ之博士のパフォーマンスだと思ってる。I S を動かすにはもはや人である必要性さえない。男だ女だというのは些細な事だというメッセージね。織斑先生も否定はしなかった」

「犯人が誰かはともかくそんなことかなとは思ってました」

「うん。現物をほいっとあげたりしたのはいつもの自己顕示欲の現れでしょうね。何しろ身内にしか興味なくてそれ以外の他人は全部ゴミ扱いだし、きつと世界の I S 研究者達に自分の卓越した技術を見せつけたいというところかしら」

何もかも自業自得の話なのだが、今の博士は何をしても色眼鏡で見られてしまう。それこそ親友と称される千冬さんにでさえ。

といっても、考えを百八十度改めたと本人は言っているのだが、そもそも博士には他人に言葉で自分の気持ちを伝えようとする意思がないのも事実だ。

行動で示して見せると言っているし実際にそのつもりだろうが、そ

れでも十年かけてできあがってしまったている偏見を崩すのは非常に難しいことだろう。

それにたとえそういうことだろうなと想像できても、人は言葉を聞かなければ安心まではしてくれないのだ。

「そうですか。まあ終わったことですし僕からしたらどうでもいいです」

「何言ってるの。これは終わりじゃなくて始まりよ」

「え？」

宮崎先輩は厳しい顔になって俺を見据える。

「今篠ノ之博士は身内にしか興味ないと言ったわよね。そして今ISIS学園には篠ノ之博士にとって身内となる織斑姉弟に自分の妹がいるのよ。間違いなく、これからもちよつかいをかけてくるわ」

「はあ……」

「甲斐田君にとっても他人事じゃないのよ。織斑君と一緒にいたら巻き込まれるって話だから」

「まあ、そうでしょうね」

「うーん、いまいち現実感ないかな？ で話戻すと、織斑先生が入ってこなかったのは、今後もこういうことがある程度は自分の力でもちこたえられるように、という理由ね」

「そういうことですか」

「こういうのも織斑先生の谷底に突き落とすという課程の一つなのだろうか。」

「理解してもらえたようね。前置きが長くなっちゃったけど、今の話を前提として、今回のリーグマッチについて甲斐田君の採点をさせてもらうわ」

「え？」

「リーグマッチを通して、甲斐田君はまるで織斑君をコントロールできていない。それどころか織斑君の邪魔しかしていない」

いきなり俺は真つ二つにされてしまった。

「初戦、織斑君が全速で飛び出した時点で全く駄目だと思ったわ。織斑君をコントロールするどころか織斑君の感情さえ理解できていない。まさかあれを作戦だなんて言わないわよね？」

「はい……」

「初戦なんて一番メンタル的に細心の注意を払うべきなのに、完全に緊張状態のまま織斑君を送り出してしまっている。一ヶ月前に衛生科の人達が何をしていたかまったく理解してないね。もしかして担当の人がいなかった？」

「いました」

「いたんだ。いてあれか。つまり甲斐田君はその人達にも何も任せず自分は何もしなかったってことね。もちろんその人達は一生懸命やったんでしようけど、一番理解できているはずの君が道を示してあげなければその人達は全部手探りでやるしかないのよ？ はつきり言って織斑君をケアできていないことがその後全部響いているから」

いや、俺は谷本さんに対して方向性をきちんと示したはずだ。

確かにそこから先は谷本さんに任せただけ、谷本さんはきちんと一夏をコントロールしていたはずだ。

「やったって顔してるわね。でもそれは表面を取り繕っただけ。二試合目、君は織斑君を叱って、織斑君も初戦の自分を反省していた。だけどその結果、織斑君は自分で考えることを止めてしまった。そして想定外の事態になったとき、織斑君はどうしていいか分からなくなってしまう」

「それは……」

「待って下さい！ それは私が！」

「今は甲斐田君に話してるんだから口挟まないで。まず指揮側として、裏をかかれた時点でアウト。だからその時点でもう織斑君に全て任せるしかないんだけど、織斑君は前の試合のことが頭にあって君に言われた範囲内だけで行動しようとしていた。思考が完全に縛られていた。拳句の果てはどうにもならなくなつて、やぶれかぶれの特攻。勝てたのは完全に偶然でしかないわね」

宮崎先輩は手を休まず俺を切り裂く。

誰がそれを考えたかというのは問題ではない。俺は指摘をできなかった時点で全く駄目なのだ。

「これで織斑君は甲斐田君に不信感を持った」

「え？」

「甲斐田君の言うことを聞いていては勝てないんじゃないかという不安ね。もちろん君はその場で謝っただろうし、織斑くんも文句を言うようなことはしない。だけどこの時点でもうズレが生じ始めている」「ズレ？」

「意識のズレね。きちんとコミュニケーションができていないから、お互いに何となくで終わらせてしまう。次の日まで時間はあったのに、見た感じじゃ何も改善されてなかったわ」

勝ってしまったが故だろうか。

あの時一夏は自分自身に対して不甲斐ないと怒っていた。谷本さんのおかげで機嫌を直すことができたが、本当はもっと突き詰めておかなければならなかったということなのだろうか。

「むしろそれどころか悪化させている。日が変わって三戦目。ここがリーグマツチにおける最大の愚策ね。わざわざ織斑君の長所を全部消すとか何を考えているのかとしか言いようがない。いくらその前に裏をかかれたからって、相手の裏をかくためだけに今までやってきたことの全否定とか何をやってるの。私達は君に必要な博打をやれなんて一度でも言った？」

「言ってません……」

「一見うまくいったように見えるけど、最後のあれは織斑君の機転よね。長所を潰した時点でエネルギー無効化攻撃はもはや意味をなさない。けどはったりにしる結局はそれに頼ってしまっている。つまりやろうとしたことの徹底すらできていない」

きつとそれは俺の漠然とした不安が一夏に移ったせいだろう。二戦目と違って三戦目の一夏は思考停止していなかった。

それはまさに指揮側に対する不信だ。

「これで織斑君の不信は確定的なものになり、自分を押し通す決意を

させてしまった。四戦目、これはもう完全に織斑君のものね。前半見る限りきちんと勝てる作戦を持っていたのに、織斑君が従わなかったんでしょ？ 君にはもう負い目があり過ぎて織斑君の主張を退けることができない。最後の茶番以外エネルギー無効化攻撃を使わなかったあたり、織斑君は全部自分で動いていて君の手綱なんて引きちぎっていた」

「い、一夏は言わなかっただけでそう考えていたんですか？」

「もちろん織斑君の中じゃ全部なんとなくよ。むしろ考えてやっていないからたちが悪い。さすがに分かっていると思うけど、そもそも織斑君は頭の中を言語化せずそのままの感覚で動く人間。だからここからから歩み寄って織斑君の感覚をきちんと言語化してクリアにしていかなければならないのに、君はそれを一切やっていない。やっているのはお互いに一方的なコミュニケーションで全てが何となく。日常ならそれでいいだろうけど、こういう場では全部が悪い方向に出てくるわね」

一夏は鈴とブレード一本の勝負になった時、エネルギー無効化攻撃を使わなかった。そしてそのことを俺達は把握できていなかった。

鈴との試合の作戦は一夏がやりたいと言ったことに基づいている。それはまさしく一夏によって作られた試合であり、俺達は一夏の中で足りなかった部分を補ったに過ぎない。

つまり、無意識にしろ一夏の中で俺達の比重はその程度でしかなかった。

「結局、全試合においてどうにかしたのは何もかも織斑君自身の力で、君がやっていたのは織斑君の足を引っ張ることだけ。あ、まあ本番が始まるまでは役に立てたかもね。イグニッション・ブーラストを見つけてきて習得させたことくらいはよかったんじゃないかしら」

「……」

何かを言うべきだと分かっているのだが、形にならず声にもならない。

宮崎先輩の言ったことはあくまで外から見た話であり、内部には内部の事情があったのだ。

だが、実際に勝つことができたのは確かに一夏の機転と強運によってだ。俺達が勝たせたわけではなく、一夏は自分の力で勝っていた。

「でもまあ、甲斐田君にはエンターテイナーとしての素質はあると思うわ。何しろ人の乗っていない無人機との集団戦で、楽勝の勝負を互角の白熱した戦いに変えたりできるんだから」

「え」

そして俺に向かって強烈な皮肉が飛んでくる。

宮崎先輩には全く手を緩めるつもりがない。

「織斑君と鳳さんの温存。一見疲れを考慮した安全策に見えて、これ以上ない大愚策。織斑君が甲斐田君を信用していなかったように、甲斐田君もまた織斑君を信用してないわけね」

「そんなことは！」

「もらったダメージだけに目が行って、疲労状態を全く考慮していない。息を切らせていた鳳さんともかく、織斑君は十分に元気だったじゃない。あの場で一番計算も信用もできる最大の戦力なんだから、まず最初に出すべきでしょう。まして正体不明の相手ともなれば多少の無理を押ししてでもやらせない」と

「紙装甲状態の一夏を？」

「それが織斑君を信用してないってこと。素人同然のクラスメイトと紙装甲状態の織斑君、どちらが信用に値するか。織斑君が回避できないような相手ならクラスメイトなんて時間稼ぎにすらならない。そして相手の実力を測る上でも織斑君という基準点は必要」

違う。俺は信用していなかったのではなく、出し渋っただけだった。

親分機を一夏に倒させるべく温存をしたのだ。

クラスメイト達と比較すらしていなかった。

「鳳さんについては装甲ありエネルギーなしという非常に特殊な状態だったから、出しづらかったのは分からなくもないわ。でもあの場にあった面子を考えると出し惜しみできるような余裕なんてあるわけが

ない。はつきり言えば使い潰すつもりでも出すべきだった。打鉄に乗ったクラスメイト達をそのつもりで送り出しておいて、どうして凰さんにはそうしないの？」

「それは違います。僕は前衛の二人を使い潰すつもりなんてなかった」

宮崎先輩の言葉を借りるなら、俺は相川さんと谷本さんを前衛として信用して送り出している。

願望込みではあるにしても、一体倒すまでは粘ってもらうつもりだった。

「頃合を見て休ませた織斑君と凰さんをスタンバイさせておいて、その言い草は通用しないわ。篠ノ之さんとの扱いにはつきり差をつけておいて、何が信用よ。どう見ても打鉄の二人は織斑君と凰さんが回復するまでの時間稼ぎでしかない」

「そんなつもりじゃ……」

あの時俺はこのままでは埒が明かないと思ってフォーメーションを変えようとしていた。

短期決戦を止めて腰を据えてやろうと、まず一夏と鈴を投入して持ちこたえさせ、相川さんと谷本さんには安全圏から真ん中の子分Bを攻撃してもらおうと思っていた。

だが実際は相川さんも谷本さんも既に限界で、入れ替わったという形にたまたまなっただけだった。

「そもそもが持久戦をやりたいのか短期で勝負をつけたいのかさえはつきりしていない。織斑君達が回復するまで待つ、あるいは外から救援が来るのを待つつもりなら、それ相応の防御主体な布陣にするべきでしょう。攻撃重視で早く決めるつもりなら戦力の集中をさせるべき。なのに君は本当にどっちつかずの配置を行っている。最初何がしたいのか分からなかったわよ」

「いや、だからそれは先に真ん中を潰そうと……」

「それなら篠ノ之さんのところに戦力を寄せるべきだわ。篠ノ之さん放置は完全なる篠ノ之さんの無駄遣いね。まあ織斑君でさえ信用していないんだから、篠ノ之さんなんてもつと信用できないでしょうけ

どね」

「え？」

そんなはずはない。

あの中なら、俺は篠ノ之さんを誰よりも信用していた。

だからこそ一人で相手をしてくれと送り出したのだから。

「まさか完全放置が信頼の証だなんて思ってたじゃないでしょうね。様子見で最初を防御主体でやらせたのはまだ分かるとしても、その後何も指示を送らないのはどういうこと？ ある程度やって相手が全然大したことないのはさすがに分かったでしょう。だったら篠ノ之さんの技量をきちんと把握していれば、完全な接近戦である以上一人で倒すことはできると十分に判断できた」

「それは……後で思いました……」

はつきり言えば、俺には篠ノ之さんの方をどうするか考える余裕がなく、持ちこたえてくれればそれでいい以上のことは何も思わなかった。

「それで理解できたんだけど、結局君がやっていたのは戦線の維持に腐心することだけ。持ちこたえていればそのうち何とかなるだろう、くらいしか考えてないわね。ここでも君の性質が出てるわ。全てがなんとなく」

「……」

俺は自分のできる最善を尽くせていないのだろうか。それとも尽くした上でこれなのだろうか。

「そして最後に君の悪癖。思いつきに何も考えずすぐ飛びつく。人が乗っていないと気づいて、人を使って試したところまではよかった。なのにどうしてそこで自分を相手の的にするの？」

「あれはとっさのことだったので……」

「人にやらせないで自分がやることがおかしい。指揮権限も渡さず指揮官が倒されに行くとか、あの時味方がどれだけ動揺したか理解できてる？ はつきり言って織斑君が立たなければあの後全部壊れてしまってもおかしくなかったのよ？」

「戦力外の僕がやられたくらいでそんな……」

「その考え方がそもそも間違ってる。指揮官が倒れるのは最後であるべきで、それまでは全員の精神的支柱でなければならぬ。そしてあの場では全員が甲斐田君の存在を支えにしてたんだから」

思いつきをそのままやってしまったことについては弁解のしようもない。

だがあの場には一夏という軸があり、後はもう囀作戦を繰り返せばよかったし、そこまで俺の存在は重要でなくなっていたと思うのだが。

実際俺がやられた後一夏が引き継いで、綺麗に終わらせることができたのだから。

「納得いかないって顔してるわね。それなら、自分のことを取るに足らない人間だと思ってるのなら、もう指揮ごっこなんかやめなさい。自分がどうのじゃなくて織斑君に迷惑。さつき言った通り今後織斑君は篠ノ之博士のちよっかいを受けることになるだろうから、そこに役立たずで足手まといの人間に余計なことをされると織斑君が被害を受けるわ。今回は織斑君が自分の力でどうにかできたけど、次は篠ノ之博士も甲斐田君の存在に気づいただろうし同じようにはいかない。むしろ積極的に甲斐田君に足を引っ張らせようとするでしょうね。何しろ篠ノ之博士にとって身内以外はゴミ同然なんだから、甲斐田君がそれでどうなろうと欠片も気にかけないわ」

「……」
もちろん俺は博士が今後も色々やってくるのは分かっている。そしてそれが一夏にとって迷惑になることも知っている。

だが、俺の存在自体がネックになってしまうことまでは考慮していなかった。

「一番害悪なのは織斑君自身が甲斐田君を信頼していること。甲斐田君がこうした方がいいと言ったら織斑君は何も考えずにそうするでしょうね。たとえばそれが誤っていたとしても。もちろんそのうちにそれじゃ駄目だって気づくでしょうけど、篠ノ之博士のエスカレートしていく介入には間に合わない可能性がある。だからそうなる前に忠告させてもらうわ」

「自分の身が惜しければ大人しくしておけっことですか」

「いいえ。能力のない人間に出しゃばられると誰もが迷惑するから引っ込んでなさいって話よ。自分には何ができて何ができないかさえ理解せず、全てがなんとなくで行動する人間なんて邪魔以外の何物でもない。自分のことを取るに足らない人間だと思ふのならそれ相応に態度をわきまえなさい」

俺は目を瞑る。

一夏には足りないところがかなりある。だから一夏ハーレムができるまでは俺がその部分を担っていくつもりだった。

もちろん俺自身の能力が低いことくらい百も承知だ。だがいないよりはマシだろうと思っていた。そして一夏ハーレムメンバーに順次引き継いでいけばいいと考えていた。

しかし今俺は、いない方がマシだと言われてしまっている。

その上、リーグマッチで実際にそうであったことまではつきりしていた。

「甲斐田君、自分の立場をきちんと思ひ出して。君は希少な男性IS操縦者。厄介事に自分から首を突っ込む必要なんて全然ない。そして心配しなくても織斑君は苦難を乗り越えられるだけの資質を十分に見せている。経験ゼロの素人からたった一ヶ月で学年でもトップクラスの実力を身に付けたんだから。専用機もあるし、このまま順当に成長すれば一流のIS乗りになれるわ。君が何かをしてあげる必要なんてない」

「……」

「何かあつてからじゃ遅いんだから、早く決めなさい。篠ノ之博士が次に何かをしてくるとしたら怪しいのは来月の個人戦ね。遅くともそれまでには自分の立ち位置をはつきりさせておくこと」

「……」

「返事は」

「はい」

「よろしい。じゃあこんなどころで。あ、椅子はそのままにしておいていいわよ」

俺をズタズタに切り裂いて、宮崎先輩は部屋から出て行った。

部屋が重苦しい沈黙に包まれる。

もちろん俺としても俺なりの目的を持って動いているのだが、それにしては行動範囲を広げすぎてしまっただろうか。

確かに先輩の言う通り、俺はISに関してクラスメイト達に及ぶべくもない。だからこそ俺はできるだけクラスメイト達に任せようとしてきたのだが、結局は口を出し過ぎてしまっていた。

本来はせいぜい俺にしかできなかったであろう鈴対策のみを考えていればよかったのに、リーダーという立場もあいまって色々と余計な口出しをしてしまったように思う。

取材は失敗して他のクラスに気づかせてしまったし、スパイ活動もうまく行ったかというところ正直怪しい。

俺は自分の技量を考えずできないことにまで手を伸ばして、はつきり言って調子に乗っていたのではないだろうか。

「甲斐田君、まさかあなたは今ので凹んで諦めようとか考えてないでしょうね」

「え？」

「ふざけるな！」

大声に驚いて振り返ると、鷹月さんが泣いていた。

「宮崎先輩があなたにどれだけ期待して、どれだけ心配してるか分かってるの!? 戦力の把握とか信用とか作戦とか、指揮をかじったどころか一ミリも学んでない人間に言うことじゃないわよ！」

「いや、それは……」

「先輩から学んだって、それってたった数日の話でしょ！ しかも先輩達がやっていたのを横から見ていただけなのに、それだけでできて当然だって普通思う!？」

確かに俺に対する要求としては十分過大だろうが、でもIS学園の指揮科に行くような生徒としてはできていなければならぬことではないのだろうか。

「私達は指揮どころかまだ模擬戦すら初めてやったところなのよ。でも甲斐田君に対して先輩はもう指揮まで要求している。意味分かってる!？」

「意味って……」

「要求していいレベルだと思われてるのよ。それだけ期待されてるってことよ。私達なんて褒められたんだからね。よくがんばったって。甲斐田君とは雲泥の差じゃない!？」

「え?」

意味がよく分からない。

鷹月さんと四十院さんが宮崎先輩に褒められたというのは、つまり自分の役割をしつかりこなせていたということだろうか。

「私達は期待すらされてないってことよ! 中身には何も触れずに、何もかも手探りの中でよくがんばったって、笑顔で言われたわ。先輩は私達のことなんて視界にすら入ってない!」

「それは……」

「分かってるわよ! 甲斐田君と私の間には大きな差があることくらい十分に分かっているわよ! 先輩がそう思うのも当然だって理解できてるわよ!」

「差ってそんな……」

「同じことを言ってるのに、みんなは甲斐田君の言うことなら素直に聞くじゃない。私が言っても反論してくるだけなのに。作戦にしてもそう。私が必死で組み上げたのは全部うまく行かなくて、みんなは甲斐田君に任せれば余裕だったって言ってたわ。何もかもよ」

「それは結果論であって……」

「いいえ、凰さんに対する作戦。あれを甲斐田君はたった一時間かそこらで組み上げた。パイロット班の人達は最初から持ってたなんて言ってたけど、それまでは持ってなかったことくらい分かっている。だけど甲斐田君はいきなり無理難題を吹っかけられてもあっさりと答えを出してしまった。その場にいた岸原さんに聞いたけど三十分で思いついたそうね。つまり私の二週間は甲斐田君の三十分未満だった。これが差よ」

さすがに二週間全部鈴のことを考えていたわけではないだろうが、ここでそういう茶々を入れてもかえって激情させるだけか。

だが鈴の問題についてはそもそも前提から違う。

あれは俺が一夏くらいしか気づけない事柄であって、鷹月さんに思いつけと言う方がそれこそ無茶だ。

「それなのに自分は取るに足りない人間？　ふざけないで。甲斐田君でそれなら私は人ですらないわ。あそこまで期待されて諦めるなんて選択肢は存在するわけない」

「いや、それは別に僕が言ったわけじゃ……」

「今まで私甲斐田君は男子だからとか特別だから言い訳してた。でも今ので目が覚めたわ。純粹に負けたくない。勝ち逃げなんて絶対に許さないから！」

言うだけ言つて、鷹月さんは部屋から飛び出して行った。

勝ち逃げも何も俺は最初から勝負などしていかないのだが。

「というか、これ全部先輩の策略だ……」

「ええ、その通りだと思います」

「そういえば、もう一人いた。」

鷹月さんとは対照的に、四十院さんは笑顔だった。

「宮崎先輩は絶対に煽ってるよね」

「はい、甲斐田君と私達の扱いに差をつけることで嫉妬、いえ、競争心を煽っていますね」

「ということとは四十院さんも？」

「途中までは。でも幸い鷹月さんに気がついてからは冷静になれました」

「ああ、感情的になってる人を見ると冷静になれるってあるよね」

「よかった。連続で四十院さんにまで同じことを言われては完全に気が滅入ってしまうところだった。」

「甲斐田さん、宮崎先輩がああまで言ったのは甲斐田さんの身の安全を心配してのことです。危ないと言つても甲斐田さんは絶対に身を引かないでしょう。ですが、織斑君の邪魔になつてしまふと言われては考えると思います」

「宮崎先輩的に僕は一夏の側にいるなってことか」

「いいえ、覚悟を決めた上で一緒にいるべきだということです。わざわざ選択肢を与えてくれたのはそういうことでしょう。本気で引き離すつもりなら最初からそう言うはずですから」

「覚悟って？」

「織斑君と共に全力で苦難を乗り越えて行くこうとする覚悟です」

四十院さんは真っ直ぐに俺を見据えた。

だが、それができそうにないから俺は困ってるのだが。

「大丈夫です。甲斐田さんは一人ではありません。甲斐田さんの周りにはクラスの人達がいます。そして私も甲斐田さんの背中を支えていくことに躊躇などありません」

「え？」

四十院さんは言いながら前のめりになって、真剣な表情で俺を見る。

と言われてもクラスメイト達にだってそれぞれ言い分はあるだろう。

今回のリーグマッチは特典という餌で釣ったのだし、一夏に対して個人的な感情を抱いていない人にとっては迷惑以外の何物でもない。

四十院さんはしばらく俺を見て、それから目を瞑り、姿勢を戻して笑顔になった。

「やはり私は甲斐田さんの視界に入っていないようですね。残念です」

「視界って……」

「でもまだ入学して一ヶ月ですし、これから精進していくことにします」

「それはつまり鷹月さんが言ったようなことでいいの？」

「もちろんそれも大事なことです。それ以上の話ですね」

「それ以上……？」

俺に勝つだけでは飽き足らないとは他に何かあるのか。

というかそもそも俺はIS学園の合格基準に遠く及んでいないレベルでしかない。

だから勝つも何も全ての面において四十院さんの方が上なのだが、ああ、鷹月さんと同じか。

そうだ、この人達は俺のことを過大評価しているのだった。

「はい、私の人生を左右するとても大事なことです」

「そこまで大げさに言うようなことでもないだろうけど、まあすぐに幻滅して目が覚めるとは言っておいた方がよさそうだね」

「いいえ、むしろ知れば知るほどという感じですね」

三組の人達が俺のことを下に見ているように、鷹月さんや四十院さんは俺を上に見ている。

同じようにこれは言葉だけで説得できることではない。

はつきりとした現実を目の当たりにさせるしかないのだろう。

「それはどうかな。数値化すればすぐにはつきりすると思うよ」

「え？」

四十院さんは一瞬きよとした顔になり、それから合点が行ったようで納得した顔で頷いた。

「なるほど、男子とはそういうものなんですね」

「男子？」

「安心しました。では」

再び笑顔になって立ち上がり、四十院さんは部屋から出て行った。

どうということだろう。男子とはこのIS学園において俺と一夏のことを指す。

つまり今四十院さんは俺と一夏に共通項を見出したということになる。

正直俺と一夏はベクトルが逆方向を向いていると思うのだが、四十院さんによれば同じ部分があるらしい。

だが感覚派の一夏が数値化するという発想をするとは思わないし、何のことを言っているのだろうか。

考え込みそうになって、そもそも四十院さんは俺に対して誤解をしているから俺の思考では正解にたどり着くことなどできないことに気づいた。

「おい智希！ いったい何があつたんだ!？」

食堂に戻るなり、すごい勢いで一夏が俺に向かってきた。

「いや、宮崎先輩が来てて、ちよつと話を」

「それは分かつてる。何言われたんだ？ 相当やばいことになつてたみたいだけど」

「やばいって、リーグマッチのダメ出しだけど、それがどうかした？」

「宮崎先輩がすごいきつそうな顔してたぞ。智希にひどいこと言つたつて、相当つらそうだったんだけど」

「つらそう?」

つらいを言うのなら言われた俺の方なのだが。

散々ぶつた切られて今も現実逃避をしているくらいには。

「そうだ。自分のことを恨んでくれていいとか意味分かんないこと言っていないくなるし、そしたら今度は鷹月さんが泣きながらすごい勢いで走って行くし、今さつき四十院さんが下向いて顔を抑えながら通り抜けていくし、いったい何があつたんだ!？」

「あー……」

建物の構造上食堂を通り抜けるしかないのだが、鷹月さんはあの勢いのまま突っ込んで行ったのか。

「いや、お前が全部やったつて言うならまだ分かるんだけどさ、先輩の感じからしてそうじゃないんだろ？ 先輩にいろいろ言われて、その後三人で喧嘩したとかそんな感じか？」

「うーん……」

当たらずとも遠からずだろうか。

喧嘩と言うよりは全てが一方的だったというところで。

「でも四十院さん顔赤かったよ」

「そうなのか？ でもそうするともつと意味分かんないんだけど」

相川さんが横から口を出し、笑顔で俺を見ている。

そして俺を探るようなその目で気づいた。これは野次馬根性か。

さてはこの女、昼ドラ的修羅場を期待しているな。

入学してからなかったので安心しきっていたが、そういえば女とは

そういうのを勝手に想像しては盛り上がる人種だった。

「相当きついことを言われたのはその通りなんだけど……」

「けど？」

遠巻きに見ていたクラスメイト達がわらわらと寄ってくる。

やはり大半は好奇心の目だ。

ただ、何人かは心配そうな顔をしている。真面目系の岸原さんとはともかく布仏さんまでがそうなのは意外だった。

「うーん……正直よく分かんない」

と、俺は野次馬共の期待を裏切ってしらばっくれることにした。

5. 逃亡

「正直よく分かんない」

と、俺は野次馬共の期待に応えるような真似をせずしらばっくれる。

「そうか。まあ俺も時々そういうことはあるしな」

「えー」

「今に対してそれはないよー」

「いやいや、よく考えてみてよ。今起こったのはどういうことだったのかって」

なおも野次馬共は食い下がる。相川さんなどは何を他人のことにそこまで必死になるのかという勢いだ。

さて、どうすればこの連中は納得して引き下がるか。

宮崎先輩はまあ問題ない。一夏があそこまで言うからには相当に深刻な表情をしていたのだろう。今思えば明らかに言い過ぎだったと思うし、つまりは良心が咎めたというようなことか。

鷹月さんについては自爆というか全部が一方的だったので、特に俺がどうにかするようなことでもない。それこそ一方的に怒られてよく分からないでいい。

となると四十院さんか。なるほど、赤い顔で走り去ったのが誤解を招いている要因に違いない。部屋から出て行く時は笑顔だったのだから、つまり廊下に出た途端我に返ったということなのだろう。

それならば答えは一つしかない。

「なるほど、そういうことか」

「なにになに?」

「やっぱり人間触れられたくない過去ってあるよね」

「は?」

俺は真剣な表情を作り、俺に詰め寄っていた相川さんは理解できず目を細める。

「ねえオルコットさん、たとえばみんな分かっていたとしても触れて欲

しくないことってあるよね？」

「えっ!? それは……あっ！」

いきなり振られたオルコットは驚き、だがすぐに気づく。

そう、身に覚えがあればごく当然の話なのだ。

「とてもじゃないけど野次馬根性で突っ込むようなことじゃないよね」

「その通りですわ! 他人の失敗をあげつらうなど、とても人として美しい行為ではありません！」

「だよ、その人に対する思いやりが少しでもあれば、そっとしておいてあげるのが優しさだよ」

「まったくもってその通りですわ!」

オルコットが強い表情で何度も頷く。

それはそうだ。オルコットは入学初日一夏に対して意味もなく突っかかるというとても恥ずかしい黒歴史を作成してしまったている。

クラスメイト連中も仲良くなる前は自重していたのだが、仲良くなった後誰かが冗談混じりに口にしたところ、オルコットは頭を抱えて悶え始め、やがて涙目で震えてしまった。

その弱々しく震える姿があまりに哀れだったこともあり、それ以来何となく口にはいけけない空気ができあがっている。

「そういうことか……」

「あー、黒歴史作っちゃったか……」

「それなら仕方ないね」

「えっ? いやあれはそんなんじや……」

なおも相川さんだけは諦めきれていないようだが、概ねほとんどは納得してくれた。

今思い返せばさっきの四十院さんは恥ずかしくなるような台詞を連発していた気がする。

本人が自覚してしまった以上、俺も一切をなかったことにしてあげるのが優しさというやつだろう。

「あつ、そういうことか! 大丈夫だよオルコットさん! 入学した日のことなんて今はもう誰も気にしてないから!」

時が止まった。

穢れない笑顔の夜竹さんを除いて。

「だから心配しあがつー！」

だが幸いなことに、みなまで言い終わることもなく夜竹さんは腹を押さえて膝をつく。

彼女の目の前には拳を握った篠ノ之さんが立っていた。目から生氣の消えた、無表情で。

「どうした夜竹？ 食べ過ぎで具合でも悪いのか？ それはいけないな。あちらへ行こうか」

「あれ、一人で立ち上がれない？ じゃああたしも肩を貸してあげるよ」

「な、なにが……」

急に笑顔に変わった篠ノ之さんと相川さんに抱えられ、苦しそうな夜竹さんは退場していった。

後に残されるは涙目で震えるオルコット。

「セシリア？」

「い、一夏さくん！」

「あー！」

ところがピンチはチャンスとばかりに、オルコットが一夏の胸に飛び込む。

当然周囲からは抗議の声が上がった。

「おいおいセシリア、みんなの前でそんな子供みたいな真似したらまたからかわれるだけだぞ」

笑顔で一夏に背中を叩かれ、オルコットが凍りつく。

それは以前鈴がやって失敗したのに、学習していなかったか。

そして一方俺は地雷があったらまず夜竹さんに踏ませればいいという有用な作戦を学習した。

「よかった」

「えっ？」

「かいだー、ちよつと元気になった」

左を見れば、いつの間にか側に来ていた布仏さんがいつもの笑顔を

俺に向けている。

やはり態度に出てしまっていたか。

「あの拳の動きはすごかった。あれはぜひ見習わないと」

反対側ではやはりいつの間にかいた谷本さんが訳知り顔で頷いている。

もちろん俺は谷本さんを甘やかすような真似などしない。完全にスルーされて、谷本さんの目にはやがてじわじわと涙を浮かんでいった。

「いやー、愛されてるねえ」

「何ですかそれは」

博士が満足気に頷いている。

「何なんですかあの人は！　いくらなんでも酷すぎます！」

「いやそこまで怒らなくても」

一方クロエは憤慨している。

「くーちゃん、あれこそが愛のなせる技なんだよ」

「どういことですか！　あんなのが愛だなんてとても認められません！」

「いいかいくーちゃん、褒めるだけが愛ではないのだよ」

したり顔の博士がこの上なくうざい。

俺が部屋に戻った途端待っていましたかのように出てきた。

その時から今も語りたくして仕方ないオーラが蔓延している。

「どういうことでしょうか？」

「あの先輩はね、智希君に嫌われてでも智希君の命を守ろうとしたんだよ」

「命!?!」

「何を大げさな」

「いやいやいや、だって智希君はあの篠ノ之束さんに目をつけられちゃったんだよ。次にあんなことがあったら智希君は間違いなくゴミのように潰されてしまう。だったらもういつそ三年間安全な場所

でじつとさせてよう！　って話だよ」

腕を組み、満足気な顔で博士は頷く。

宮崎先輩の脳内ではということだろうが、また極端な。

「あの人がそう思っているということでしょうか？」

「そうそう。もう完全にビビっちゃってるわけだ。でも分からなくはないでしょ？　だってIS学園に突っ込もうと思ってるわけだ。命に勝るものは何もない、くらいの勢いだね」

「なるほど……あ、でも、それなら最初からそう言えばいいのでは？」

「智希君が素直に人の言うことなんて聞くとと思う？」

「あー……あつー！」

クロエは納得しかけてすぐ俺の存在に気づいた。

ほう、クロエまでが俺のことをそういう風に見ているのか。

「ち、違います！　そういうことじゃありません！」

「へー、何が違うの？」

「そ、それは……」

「まあまあ、でも実際そうでしょ？　だって智希君だけは命の危険なんでないことが分かってるわけだし」

それとこれとは全く話が別なのだが、クロエが本気で涙目になって震えているのでここは流してやることにする。

「だからまず僕の心を折ろうとしたわけですか。やっぱり調子に乗ってるように見えたのかな？」

「智希君の行動を見てたらまるで怖いもの知らずだからね。話半分を受け止められて中途半端なことになるくらいなら全力で叩き折る、ってことだと思うよ」

「まあ正直効きました」

「いいところを突いたと思うよ。いつくんの邪魔になるだなんて智希君には一番効くよね」

悔しいが、宮崎先輩にはよく見られている。

確かに俺の身が危ないでは、俺からすれば鼻で笑って終わりだ。たとえ博士云々を抜きにしても。

だが一夏の邪魔になつてしまふと言われては考えざるをえない。なるほど危険に見える俺の行動を問答無用で封じるには、まず俺の心を叩き折るのが一番の近道だ。

そしてきつと明日にでも三年の衛生科の先輩が俺の心のケアに来るのだろう。

あえて一人で来たあたり、役割分担までされているに違いない。

「博士、ちなみになんですけど、もし博士が僕のことを知らなかったとしたら全力で潰しに来ますか？」

「そうだねー。昔の束さんなら二度三度同じことがあつたらロックオンだね。そしてその次で智希君を潰すために何かしてたかな。だからあの先輩の心配はあながち間違つてもいないと思うよ」

「なるほど、そこまでヒステリックな反応というわけでもないのか」

「ただ場所が場所だからねー。どんどん警戒が厳しくなるだろうし、智希君ばかりに構つても本末転倒になるから、どこまで智希君が邪魔をしてくるかによると思うよ。それにいつくんがどう反応するかも智希君の扱いは変わってくるだろうし」

まあ、博士ありきで俺が今この場所にいる以上、そういった仮定は意味をなさない。

そもそも博士の存在が念頭になれば、俺はあの場で飛び出させてさえないだろう。

「あつ、でもそれならどうして選べなんて言つたんでしよう？ 大人しくしておけだけでいいのでは？」

「そ、れ、こ、そ、が、愛、なんだよ。もちろん命は大事だ。だけど、甲斐田智希はどんな苦難や逆境があろうとそれを乗り越えていける才能ある人間だ。だから彼を奮起させるためにも私は鬼になる！ つて感じだね」

「なるほど！ つまりお兄様のことをとても期待しているんですね！ そのために自分を犠牲にしようとするなんてすばらしい人です！」

博士が下手くそな演技で滔々と語り、クロエが手のひらを返して目を輝かせる。

二人のことはどうでもいいとして、じゃあ宮崎先輩の意図はいつた

いどちらなのかと言わざるをえない。

大人しくしておけなのか全力で前に出て来いなのか、はつきりして欲しかった。

「あ、いっくんが戻ってくる。じゃあ楽しみにしてるよー」

「ああ、宮崎様のことは全く意識にありませんでした。これからはチエツクをしていかないと……」

映像が消える前に俺は無言で部屋を明るくした。

片付けを終えて部屋に戻ってきた一夏は、ラッピングされた小さな箱を持っていた。

上機嫌でかなり嬉しそうな顔をしている。

「プレゼントだ」

「誰から？」

「そんなのクラスのみんなに決まってるだろ。鉢植えだつてさ」

最大のアピールチャンスだったのに、クラスメイト連中は日和ったか。

一夏への感謝の気持ちをそれぞれが示せと言ったのに、結局は横並びになることを選んでしまうとは情けない。

「へー」

「この部屋には緑が足りないと思ってたし、ちょうどよかった。今は苗木だけど、そのうち育って綺麗な花が咲くからな」

本当に優秀な主夫思考だ。女が泣いて喜ぶような。

「ふーん」

「あ、もちろんこれは俺にじゃないぞ。みんなから、智希と俺にだ」

「僕？ なんでまた？」

「みんなの感謝の気持ちなんだからむしろ当然だろ」

「さつき一夏からみんなに感謝して、そのお返しにみんなからってわけじゃないの、ってことなんだけど」

「まあそれもなくはないだろうけど、みんながまず感謝をするのは智希に決まってるだろうが」

そんな当たり前のように言われても困る。

「僕なんかしたっけ？」

「おいおい、ここまでみんなを引つ張ってきたのは他の誰でもなくお前だろ？　最後にきっちり後始末までつけて、誰も文句のつけようがないぞ」

「後始末？」

「お前千冬姉のところに行つて、優勝の特典をよこせつて交渉したそうじゃないか。あの日はみんなあの乱入でそれどころじゃなかったのに、お前は一人冷静に行動してたわけだ。本当に頭が下がるぜ」

「なんでそれを……」

「昨日の放課後お前が千冬姉に連れて行かれた後、山田先生が教えてくれた。みんな智希のことをすごいって言つてたぞ。確かに途中で中止になったんだから全部なして言われてもおかしくないのに、お前はその日のうちに動いてたんだからな」

どちらかと言うと俺の行動は責任回避の意味合いの方が大きい。

クラスメイト達に後でつつかれるのは分かりきつていたことでもあるし、さつきとけりをつけておこう程度のことではしかない。それに結果などどうでもよかった。

しかし山田先生も余計なことをしてくれる。

俺が目立つても何の意味もないと言うのに。

「別に僕が言おうが言うまいが同じことだったけど」

「山田先生はお前が千冬姉を説得したつて言つてたぞ。嘘つくような人じゃないし、謙遜するなよ。お前らしくないぞ」

おかしい。山田先生の脳内で事実がねじ曲がつてしまっている。

どう考えても山田先生が押し切つただけの話なのだが。

それに俺は謙遜をしない人間だと思われているのか。

「ま、そういうわけでもまず智希に感謝しなきゃつて話になつたんだ。何をしたらいいかつていうのはすぐ決まつたんだけど、それはそれとして何か形にもしたいつてことになつてな。その結果この鉢植えになつたわけだ」

「はー、なるほど」

そう言つて一夏は得意気に手に持った小さな箱を前に出す。

だがそれではメインが俺になってしまふではないか。

「あ、別に世話とか気にしなくていいぞ。どうせお前が何もしないことくらい分かつてる。だから俺へのプレゼントつてことにもなつて
るから」

「それじゃ一夏はおまけじゃないか」

唾然とする俺に、一夏は何を当然などでも言いたげな顔を返す。

「そりゃこれを世話するための口実だからな。智希、俺も含めてみんな本当に智希に感謝してるんだ。この一ヶ月間みんなをまとめて、引つ張つて、いつも道を示してくれた。みんなすごく仲良くなつたし、ためになつたし、楽しかった。本番も色々あつたけど、鈴にも言つた通り俺は全然負ける気がしなかつた。いつも最後はお前がどうかしてくれたいな。誰かが言つてたけど、智希は安心と高揚感を与えてくれるリーダーなんだと」

「いきなり褒められたりすると気持ち悪いな」

「茶化すなよ。分かつてると思うけど俺は真面目だ。本当はさつきみんなのいるときに言うつもりだったけど、鷹月さんとかいなくなるしあの場も変な感じになつてたししょうがないから今こうやつて言つてるんだ。でも智希、お前は誰も文句のつけようがないくらいによくやつてくれた。はつきり結果も出てるし、クラスの全員がそう思つてる。そして何より一番感謝してるのは俺だ。ありがとう。智希のおかげで俺は入学前じゃ想像できないくらい毎日を楽しくやれてる」

一夏が深々と頭を下げる。

確かに一夏はそういう人間だ。クラスメイト達にあれだけ義理深いのだから、必然的に俺にもそうなつてしまふのだろう。

本当はただ俺が一夏の意味も聞かず無理矢理引つ張り回しただけなのだが。

「どういたしました」

「うん。そして今度は俺の番だ」

「はっ」

「今度は俺が智希に何かをしてあげる番だつて話だ」

いきなり雲行きが怪しくなってきた。

いったい一夏は何を言い出すのか。

「智希、おととい乱入してきた人の乗ってないIS、あれを送ってきた犯人は誰だか分かってるか？」

「えっ?」

「まあお前ならもう分かっていると思うけど、あれは東さんだ」

「それって……」

「ああ、箒のお姉さんで、ISの開発者だ」

「ど、どうしてそれが分かったの?」

「勘だ」

「は?」

「こんなことをしそうなのは東さんだってなんとなく思ったただけだ。でも千冬姉に聞いてみても否定しなかったし、あの感じじやまず間違いないな」

真剣な表情のまま一夏はベッドに腰掛ける。

正直驚いた。まさか一夏の口から博士の名前が出てくるとは。

「狙われたのは俺だ。正直言うところにも来たかって感じだよ。あの人昔から俺に変なちよっかいかけてくるし、IS学園なら安心かなって思ってたけど、やっぱり甘かったな」

「ちよっかいって、何されたの?」

「あ、別に嫌われてるとかそういうことじゃないと思う。むしろ好かれてるんだらうなって思うんだけど」

「思うんだけど?」

「何がしたいのかさっぱり分からない。いきなり現れて意味不明な話をしてすごいなくなるし、だいたい行方不明になってるはずなのにわざわざ俺に会いに来る意味が分からない。親友の千冬姉じゃなくて俺なんだぜ。まあ何かを企んでるんだらうけどさ」

一夏は基本的に博士のことを口にしない。それは篠ノ之さんもそうだが、一夏の場合は口にしたくないという感じで話題に出てもすぐ話をそらそうとしていた。

基本的に一夏は人を嫌うような真似をしないので、そういう態度を

取られれば周囲もすぐ気づく。

篠ノ之さんの存在もあつて、結果一組内では博士のことについて話がされることはなかった。

「ふーん」

「何て言ったらいいかな……そうだ、お前みたい人なんだ」

「はあ!？」

思わず俺は一夏に詰め寄る。

それだけは聞き捨てならない。

「す、すまん。そこまで怒るとは思わなかった。えっと……そう、何をしてくるか分からないというか、その場その場の気分で動いてるとい
うか、好奇心を燃やして生きてるといいうか、なんかそんな感じ?」

「ああ、そういうこと」

理解して俺は自分のベッドに座る。

要するに行動原理が読めないという類の括りか。確かに俺も博士も他人に腹の中を見せていない以上、そういう風に取りられてしまうのは仕方ない。

「智希すまん。よく考えたら東さんに似てるとかすごく嫌だよな。悪かった」

「いや、こつちこそごめん。それで篠ノ之博士がどうかしたの?」

「ああ、つまり俺は東さんに目をつけられてるってことなんだ。今までは特に害もなかったし、変に心配かけたくなかったから千冬姉にしか言つてなかったけど、こうなったら智希にも知っておいて欲しい」

「別に僕が知ったところで何も変わらないと思うけど」

「そうじゃない。俺の側にいるとお前も巻き込まれるって話だ。東さんのことだからあれで終わりってことは絶対じゃない。おとといはお前のおかげで助かったけど、また今後もあることが起きると思う」

当の一夏にまで警戒されてしまうとは、やはり博士のやったことはやり過ぎだったのだろう。

まあ絶対安全だと思われていたIS学園に風穴を開けてしまったのだ。それ相応の影響はどうしても出てくる。

俺からしたら博士の邪魔立てが困難になってくるので、この状況は大歓迎だが。

「ま、そうだろうね。分かった」

「いやいやいや、そんな軽く言うな。お前の話なんだぞ。智希が巻き込まれるって話なんだからな」

「その時はさっさと逃げるよ」

「何言ってるんだ。そんなことがあったらお前は真っ先に突っ込んで行くだろうが。おとといみたいにさ。あ、俺はすごく嬉しかったし、その気持ちを否定するつもりなんてない。それに智希が後ろにいてくれたからこそ俺は何の迷いもなく全力でやれたと思う」

嫌な予感がする。

そしてこういふとき大抵その感覚は正しい。

「あの場で智希は誰よりも頭を使って動いてた。だけど、お前には明らかに足りないものがあつた」

「まさか……」

「ISの操縦技術だよ。見てて思ったけど実技訓練の経験が全然足りない。故障機だとしてもだ。智希、お前入学してからロクに訓練とかしてねえだろ。その結果があれだ」

「それはいろいろ忙しかったからで……」

「そりゃ忙しかったのもあるだろうけど、箒とかセシリアとかちやんと自分のこともやってたぞ。それに鷹月さんとか四十院さんも時々IS乗りに来てたし。でもお前って最後までまるで興味なしだったよな?」

場の空気が一転する。

そもそも俺をIS学園の生徒達と比べること自体が間違っているのだが、今の一夏にその論理は通用しそうもない。

「だいたい故障機に乗って出てくるところからおかしておかしい。智希、俺あの時言ったよな。これ終わったら特訓だつて」

「え!?!」

「別に意地悪しようとして言ってるわけじゃないからな。これからのお前に絶対必要だけど、お前自身にやる気がなさそうだから言ってる

んだ」

「いや、そんなのはIS学園のカリキュラムに沿ってやっていけばいい話だし……」

冗談ではない。

俺は自主的に何かをやるような熱心な生徒ではないのだ。

「そんなこと言ったられないんだよ。これからは東さんのちよっかがやって来るんだから、普通にやってちゃダメなんだ。最低でも自分の身を守るくらいにはなっていないと」

「それなら一夏はまず自分の心配をすべきでしょ？」

「もちろん俺は俺でやるつもりだぞ。でも俺はこの一ヶ月である程度動けるようになったし、智希は何もやってないだろ。だから最優先の話としてまず智希が自分で自分の身を守るくらいのレベルにまで引き上げないと」

「はあ!？」

何を言い出すのかこの男は。

他人に構っている暇があったらまず自分の心配をすべきだろうに。

「心配すんなって。別にスパルタしようって話じゃないし、お前のできるペースでやっていけばいいんだからさ。クラスの間みんなも協力してくれるし」

「みんな？」

「おう。智希への感謝はどうしようかって話になって、今の俺達が智希にしてあげられるのはこれだったな」

「はい？」

「あ、あと鈴も協力してくれるって。あいつも智希には感謝してたかな。かなり張り切ってた。明日は日曜だし一日やるぞ!」

もうため息しか出てこない。

全く邪心のない笑顔の一夏が、今はこの上なく憎らしかった。

「あの野郎! どこ行きやがった!」

「セシリア、そちらは!？」

「おりません！ これはもう寮の外かもしれませんわ！」
「智希！ 隠れてないで出てきなさい！」

出てこいと言われてのこのこ出て行く馬鹿はいない。
当然のごとく、俺は逃げた。

「なんかすごいことになっちゃってるね」

「すいませんいきなり押しかけて」

「そんなの全然気にしない。あと敬語も使わない」

「ありがとうベツティさん」

俺は三組代表ベツティの部屋に逃げ込んだ。

クラスメイト連中は絶対にここは突き止められないだろう。

「クラス全員で甲斐田君を鍛えてあげるねえ……。完全にいじめじゃない」

「いや、みんな別に悪気があるわけじゃないんだけど」

「でも本人が嫌がるようなことしちゃダメでしょ。少なくとも甲斐田君の意思を無視したものであることには間違いない」

「まあそうだね」

もうなりふりなど構ってられない。

上級生のところに逃げ込むことも考えたがそちらは一夏達にも面識があり、喜んで差し出されてしまう可能性がある。

それに宮崎先輩の意思がどこにあるのか分からない以上、すぐ思い浮かぶのは三組代表のベツティくらいしかいなかった。

スパイ活動の一環でここには何度か来たことがあったのが幸いした。

「アニータ、一組の人達は寮の外に出てったよ」

「お、ありがとう」

「まあ二組の人もいたし全員じゃないかもしれないけど」

「じゃあもうちよつとこのまま隠れてようか」

「うん」

とりあえずの危機は去ったようだ。

IS学園はそれなりに広い。ざっと探すだけでも骨だろうし、俺が隠れていそうな場所はたくさんあるのだ。

何しろ俺は織斑先生のお使いでIS学園のいろんな場所を訪ねた。だから一般の生徒達があまり行かないような場所まで知っているし、いざとなればそこに逃げられる。

そしてそれを一夏も理解している。

「でも今はいいけどさ、これからどうするの?」

「んー、昼を早めに食べて、後は適当に」

「そうじゃなくて、今後の話。これで諦めてもらえるの?」

「それは……ないな……」

確かに、これくらいで諦めてくれるような物分りのいい連中ではない。

鈴などは俺がやる気ないと言っても必要だと押し切って無理矢理やらせようとするだろう。

「相手が諦めるまで毎日鬼ごっこする?」

「それはあんまりやりたくないな……」

「じゃあ一度きちんと話をしないとね」

「話か……」

どうすれば連中は諦めてくれるか。

もちろん最終的には俺は嫌だと押し通すしかないのだが、連中は好意と義務感で言っているから始末が悪い。

受け止め方の違いはあるにせよ博士の脅威というものが存在している以上、そこに対して何かしらの回答を示さなければやはり納得はさせられないだろうか。

「私達が間に入ろうか? 別にそれくらいやるよ?」

「いや、それはさすがに迷惑だし」

「それは言わない。迷惑に思うくらいなら言い出したりしないし、そもそもこうやって君を匿ったりしない」

「そうだよ。水臭いこと言わないで」

「ごめん。でも正直そこまですることとも思えないし」

「甲斐田君が嫌がってるならそこまですることだよ。だいたいどうして甲斐田君を鍛えなきゃいけないの?」

「それは……まあいろいろ事情があるみたいで」

さすがに博士のことは公の話ではないので言えない。

いや、むしろ言ってしまった方がいいのだろうか。どうせ公然の秘密になりそうだし。

「ずっと思ってたけど一組の人達って甲斐田君のことを何だと思ってるんだろかね。織斑君がああだから何か変な勘違いしてそうな気がするんだ」

「どういうこと?」

「ほら、身近で見えてたら分かると思うけど織斑君って要は天才じゃない。ねえアニータ?」

「たった一ヶ月でゼロからあそこまでやれちゃうんだし、さすがは織斑先生と同じ血が流れてる弟って感じ」

「だから甲斐田君も鍛えればあなれる的な幻想を抱いてそうな気がするんだよね。男子ってだけで一括りにしてさ」

「それは違うよねー。というか甲斐田君は適正Dランクなんだし、そういうのを求められてここにいるわけじゃないんだから」

ベツティのブレーン達が口々に意見を言う。

「だが言われてみればそうさ。確かに俺に求めるようなことではない。」

となればこれが俺にとっての突破口だろうか。

「よし」

「どうするの?」

「まずは自分で言ってみる。やっぱり最初から出てきてもらうのも何だし」

「そんなことないよ」

「そうじゃなくて、むしろ揉めた場合に出てきて欲しい。僕側に付くというよりは第三者的な立場で仲裁役として。それならまだ変な軋轢とか生まなくて済むし」

正直なところ、余計な対立構造など作りたくない。

元々三組と五組は仲が悪い。そして今五組は新しい代表の下不穏な空気を醸し出している。近々俺が一夏に対して何かしらのアクションを見せてくるだろう。

そこに一組と三組がぶつかってしまつたら、もう完全に三つ巴だ。俺が間に挟まつた三国志など本気で冗談ではない。

「自分が我慢すればいいって考え方、私一番嫌いなんだけど」

「我慢はしないよ。自分でできることは自分でやるってだけ。そして無理なら助けて欲しいという話」

「その考え方ならまだ分かるけど……こじれると分かっているのに何もせずただ見てるだけって言うのも……」

「みんな悪気があつて言ってるわけじゃないんだ。きちんと話せば分かってくれるよ」

実際に悪気など一切ないから困るといふやつなのだが、三組の人達はクラスメイト達を誤解していて、反感まで持つてしまっている。

今出てきてもらつては売り言葉に買い言葉で戦争が始まつてしまふ可能性が非常に高い。その場に鈴がいた場合など最悪だ。

だからまずは俺が言葉で説得したという姿を見せて、ちゃんと話せば分かる人達だということを示すことから始めなければならぬだろう。

本当に一夏の言つた通りになつてしまつた。さつきと決着をつけなかつたが故にややこしい事態に発展しそうになつてしまつている。

「でも……本当に納得してもらえるの？ 大丈夫？」

「うん。今ここでみんなと話してて大丈夫だつてはつきりしたから。ありがとう」

「そう。うーん、でもなあ……」

昨日からここまで俺は説得のための言葉を持っていなかったが、既に作戦は頭の中に浮かんだ。

なし崩されるのだけはまずいと拒否の姿勢を貫いて逃げ出したが、冷静に考える時間を作れたのはよかった。

多少の手間がかかるがこれならいけるだろう。

「駄目なら駄目で助けてつて言うから。嘘ついても様子を見てればすぐ分かることだし、結果はちゃんと報告する」

「うーん……」

「そうだ甲斐田君、担任の織斑先生に相談してみたら？ 織斑先生の

言うことだったらみんな聞くと思うよ?」

それこそ論外だ。

織斑先生に裁定などさせては間違いなく俺が困る方向へと持って行ってしまおうだろう。

そういえば、この人達は俺が入学一週間も経たずブラックリストに載ってしまったてことを知らないのだった。

「そうだね、それも考えてみる。でも大丈夫。嫌だつてはつきり言つて分かつてもらうつてそれだけの話だから」

「それはそうだけど……やっぱり心配だなあ」

「まあまあアニータ、甲斐田君がやるつて言つてるんだからまずはやらせてみようよ」

「無理なら無理で私達が出て行けばいい話だしね」

「甲斐田君も駄目なら駄目でちゃんと助けてつて言うんだよ?」

「う、うん」

「うーん……まあ自分でやると言つてる以上は仕方ないか」

意外とあつさり引き下がつたなど思ったが、すぐにこの人達は俺ではうまくいかないと思つて言つていることに気づいた。

日曜の廊下は意外と静かだった。

ここ一ヶ月はリーグマッチだなんだで毎日忙しくしていたこともあり、あまり周囲に意識を払っていなかったように思う。

俺を取り巻くややこしい環境など全く関係ないという感じで、今の寮内には穏やかな空気が流れていた。

まあ日曜の午前中でもあるし、生徒達は勉強しているか、体を動かしたい人間は外に出ているのだろう。

それに今はリーグマッチが終わつて一息ついたところで、来月の個人戦まではまだ一ヶ月以上も時間がある。

エアポケットの時間という感じで、本来はのんびりと気を休める時間なのかもしれない。

しかし、そんなことは今の俺には許されていないようだった。

どうやら俺の後をつけてくる人間がいるようだ。

それは尾行と呼ぶにはあまりにお粗末で、気配を消すどころか足音さえ消せていないことがある有様だ。ドラマなどでよく素人の尾行シーンがあつたりするが、なるほどこれでは確かにバレて当然だ。

じゃあその間抜けは一体誰だということになるが、まずクラスメイトではない。連中であれば遠慮など何もなく問答無用で俺を捕獲しようとするだろう。

おそらく面識のある人間ではない。俺と会話をしたことのある人間であれば、話しかけるに躊躇などしない。上級生であろうと、他クラスの生徒であろうと、俺のことを知っていれば俺自身など別に怖い存在でもない。

となれば犯人など限られてくる。三組代表のベツティが俺に尾行をつけたか、あるいは四組代表の更識妹だ。

ベツティは俺のことを心配しているようだったし、更識妹は間違いなく俺に目をつけている。

どちらにしてもこのままついてこられるのは困るので、俺は目的地にそのまま行くのを取りやめて、屋上へと向かうことにした。

尾行自体は俺が気づいたそぶりでも見せればすぐ逃げていくだろうが、それでは今後も同じことが起こりうる。

三組の人であれば注意しておく必要があるし、更識妹には一度こちらもお前の存在に気づいているということを示しておいた方がよさそうだ。

寮の屋上は開放されていて、ここはすごく眺めがいい。

先輩曰く煮詰まった時には最適な場所だとのことで、勉強疲れや落ち込んだ時に来るとすつきりできるそうだ。

そういうえば整備班の連中はここでたむろって俺への文句を言い合っていた。

と、尾行者が屋上に足を踏み入れたのを確認して、いきなり俺は振り返る。

あれで気づかれていないかと思っていたのはどうかと思うが、間抜けな尾行者は完全に虚を突かれて固まってしまった。

「えっ!？」

そして目が合い、俺の方が驚いた。

俺の後をつけていたのは三組でも四組でもなく、二組の代表ハミルトンだった。

「どうして後をつけたりしたの？ 普通に話しかけてくれればよかったのに」

「だって……そんなことしたら甲斐田君が逃げちゃうと思ったから……」

逃げるようなこともなく観念して寄ってきたハミルトンは申し訳なさげな顔だ。

確かに、鈴のルームメイトであるハミルトンが声をかけてきたら俺は間違いなく逃げる。

うかうかしては近くにいなそうな鈴が襲ってくるかもしれないからだ。

「なるほど、それはそうだ。でもだからって後をつけるの？ 鈴に言われて？」

「あ、別に鈴に何かを言われたわけじゃないから。鈴も一組の人達も甲斐田君が三組の人のところに逃げ込んだのは知らないよ」

「ということハミルトンさんはそれを知ってるわけだ」

そこまで見られていたということは、つまり俺はハミルトンに見逃してもらったということに他ならない。

どういうことだろう。俺は何かハミルトンに貸してもあったか。

ああ、前に鈴が暴走した際の後始末の話か。あれは織斑先生に全部持って行かれてしまっただけなのだが、ハミルトンは俺のおかげだと勘違いをしているのだった。

表向きは俺と一夏が中国とカナダの間に入って仲裁したことになるって聞いた。

「あつ、それは食堂で甲斐田君がそっと抜け出したのを見て、いったいどこへ行くのかなって……」

「そこから見てたんだ……」

要するに初っ端から全部見られていたという話である。

食堂でクラスメイト連中が恒例の騒ぎを起こしてくれたので、その隙に綺麗に抜けられたと思っていたのだが。

一応はベッティの部屋に入る前に周囲に注意を払ったつもりだったが、甘かったかそれともタイミングが悪かったか。

「で、でも誰にも言っていないから。鈴に聞かれても知らないって答えだし、一組の人達も怪しんでなかったから大丈夫だよ」

「ちよつと待って。それってもしかして廊下で見張っててくれたってこと?」

「見張ってというか、甲斐田君的には入って来られたら困るんだよね?」

「それはもちろんそうだけど……」

「じゃあ別にまずくはなかったと思うんだけど……もしかしてダメだった?」

「いや、そんなことは全然ないよ。むしろすごく助かったし」

「よかった」

ハミルトンは嬉しそうに笑うも、俺としてはそこまでしてもらおう意味が分からない。

性格がいいのは分かっていたが、それはさすがに聖人過ぎはしないだろうか。

それとも一夏並に義理堅いのか、あるいは実はあの時ハミルトンは相当に困っていて、俺に対して大感謝状態になっているのか。

「ま、まあ鈴の味方じゃないならいいんだ。合図で鈴が飛び込んでくるかもって警戒してたけど、そうじゃないのなら全然」

「大丈夫だよ。甲斐田君と鈴のどっちにつくかって言われたら迷わず甲斐田君の味方するから」

「それはそれですごくドライだね」

ハミルトンに対しては前も同じようなことを思った気がする。

いい人なのは間違いないが、時折すっぱりとした割り切り感を見せられるというか、最後は自分が一番的な感覚というか。

まあ、よくよく考えればハミルトンは鈴と出会ってからせいぜい半

月程度なのだし、そこまで鈴には義理も何もないか。むしろ余計なき回しをされて、ある意味マイナスかもしれない。

「そうかな？　普通だと思うよ。それにだいたいこういう場合は甲斐田君の方が正しいんだって分かってるし」

「正しい？」

「鈴に聞いた程度のことしか知らないけど、甲斐田君は鈴の言ってるような次元でものを考えてるわけじゃないんだと思うし。でしょ？」

「それは……そういえばそうだね」

「やつぱり。目先のことだけじゃなくて先まで見てるんだよね。それなら絶対甲斐田君の方が正しいよ」

正確にはそういう次元で話をしないと連中を納得させられないという話で。

しかし、それにしてもハミルトンは俺に対して相当な過大評価をしている。

鈴のあれこれをその場で見ていたというのが大きかったか。

俺を下に見ている三組の人達とは完全に逆方向のベクトルだ。

「まあ何をもって正しいとするかって話だけど、少なくとも僕は自分のやりたいようにやるだけかな」

「うん、それでいいと思うよ。じゃ、じゃあ……あたしにも何か手伝えることってある？」

「ハミルトンさんが？」

「あつ、別に無理にとかそういうことじゃ全然なくて、何かあればってだけなんだけど」

ここまで来ればさすがに俺にも読めてきた。

要するに、ハミルトンは母国から言われているのだ。男性IS操縦者である俺や一夏と仲良くしろと。

夏休み俺と一夏はカナダに行くことが決まっている。だからそれまでにできる限りの友好関係を築いておけということなのだろう。

道理で俺に対して友好的過ぎると思った。そういえばおとといカナダのIS関係者達と一緒に医務室に来た時もそういう空気があった気がする。

だが別に俺としても異存はない。わざわざ敵対関係を作るなどあり得ないし、仲良くしたいと言ってきているのだから喜んで応じるべきだろう。

「あ」

「何！」

「いや、お願いとかじゃなくて、質問。昨日どうして一組がパーティをやること知ってたの？ 特に告知とかしてないはずなんだけど」

「そ、それは……」

期待に満ち溢れた目から一転、ハミルトンが困ったという顔になり言いよどむ。

これはどのみち聞こうと思っていたことだ。まあ鈴に誘導尋問をかけるつもりだったのだが、ハミルトンが答えてくれるのであればそれでもいい。

「別に言いたくなければいいよ」

「あつ、そういうことじゃなくて……その……一組の人に聞いて……」
「うちのクラス？ 誰だろう？」

はて、一組にそんな親切な人間などいたか。

鈴はリーグマツチ前にオルコットをボコボコにしたので、クラスメイト連中からは嫌われていたはずだ。

一応仲直りをしたとは言っていたが、だからといってそこまで親切なことをしてやる義理などないだろう。ましてパイロット班連中にとっては恋敵にもなるのだから。

そしてハミルトンの知り合いがクラスにいないことはリーグマツチ初期の段階で分かっている。

余計なことをした馬鹿はいったい誰だ。

「その……夜竹さんという人に……」

「夜竹さん……写真か！」

俺の言葉にハミルトンがビクツと震え、みるみるうちにそばかす顔が赤くなっていく。

これは間違いない。

そういえば昨日鈴が夜竹さんに接触していた。おそらくその際に

取引が成立し、気分をよくした夜竹さんが口を滑らせたとかそういうことなのだろう。

しかし、そんなことはもうどうでもいい。

既に夜竹さんは一夏の写真を売り捌いている。これは俺にとって由々しき事態だ。早急に叩き潰さなければならぬ。

「ご、ごめんなさい……」

「ハミルトンさんも写真を買ったんだ」

「……はい……」

ハミルトンは顔を真っ赤にしたままうつむき、消え入りそうな声で返事をした。

そうか、いつの間にかハミルトンも一夏推しになっていったのか。

以前はそういう感じでもなかったのだが、やはりリーグマツチで一夏の姿は相当に効果があったということなのだろう。

今後はクラスの外にも目を向けていくつもりだったので、これは好材料だ。

「あ、別にハミルトンさんを責めてるわけじゃないから。僕が怒ってるのは夜竹さんが勝手に商売を始めることに対して」

「そ、そうだよ。知らないところでそういうことされてたら嫌だよ。ね」

「それはそうでしょ。夜竹さんには僕から言っておくけど、もう夜竹さんから一夏の写真を買うとかやめてね」

「えっ?」

「あ、別に買っちゃったものを捨てるとか寄こせとは言わないからさ。それに一夏の写真が欲しかったら僕も持つてるし」

「あっ……うん……」

ハミルトンは驚きの顔を見せた後、一気に気持ちが落ちた様子で返答した後うつむいた。

どうしたかと思って、すぐに気づく。

しまった。これでは商売敵から買わずに俺から買えと言っているだけでしかない。

「あ、僕から買えって言ってるわけじゃないからね。そういうのでお

金のやり取りをするのはどうなんだって話で」

「うん……」

「だ、だから別にお金なんて出さなくても僕に言ってもらえれば」
「別にいい。それじゃ」

もう俺とは話したくないという感じで無理矢理切って、ハミルトンは走って行った。

やってしまった。急に変わった態度からしてハミルトンを失望させてしまったようだ。

元々俺に対して過大評価を抱いていたのもあって、あまりに落差が激し過ぎたか。

まあそれが俺への適正な評価である以上は仕方のない話なのだが、もう少し言い方に気を払うべきだったのは間違いない。

本音を言えば自分も買っておいて何を言うかという気がしないでもないのだが、こういう時自分を棚に上げるのは世の常だ。俺が言っても喧嘩を売る行為でしかない。

と言っても俺との関係を悪化させるわけにはいかないだろうし、カナダ本国の人から諭されて頭を冷やすことを期待するか。いや、一夏に対する便宜を図って機嫌を直す方が早いかもしれない。クラスメイト連中を見る限り、そのへん女子は意外と現金だから。

とりあえずはどこかで話す機会を作って、きちんと謝っておこう。と、またも異質な視線を感じて屋上の入り口へ振り向くと、慌てて誰かが隠れたのが分かった。

もう一人、尾行者の後ろに尾行者がいたのか。

全速で走って追いかける。

階段を降りて廊下を見ると、ちょうど廊下の向こう側の階段を降りていこうとする姿が一瞬だけ見えた。

言うまでもなく、四組代表の更識妹だった。

ハミルトンと同じく食堂にいたか、あるいは一夏達が大騒ぎしたので気づいたか、どちらにしても俺を見つけて追ってきていたようだ。

俺を尾行したところでどうなるものでもないと思うが、更識妹からすれば得体の知れないものに対してまず観察から入っていくという

ところなのだろう。

おそらく更識妹は自分について俺について自分だけが知っているという優越感を持っている。俺がそうだったからよく分かる。

だがそんなものは幻想であるし、自分の足を引っ張ってしまいうような傲慢でしかない。

更識妹はむしろ知っているからこそ自分の危うさに細心の注意を払うべきなのだが、今はひたすら墓穴を掘り続けている。

放っておいてもらえないかと淡い期待を抱いていたのだが、やはり俺としてもきちんと対処をしなければならぬようだ。

正直なところ更識妹は何が不満なのかと思えるような恵まれた立場だが、人にはそれぞれ悩みがあるのだろう。上を見ても下を見てもきりはない。

まあ行動からして、結局自分が何をしたいかも分かっていないのだろうな、と思った。

三年生達の住む寮の別棟に入った途端、あつという間に取り囲まれた。

とはいえ殺気立つような空気とは真逆で、深刻そうな、明らかに俺を心配している顔だった。

きつと俺が逃げ出したと聞いて自分達の責任だと感じているのだろう。

宮崎先輩に話があると伝えると、すぐ呼んでくるからと一人が走って行った。

そして近くのソファアに座らされ、お客様扱いでお茶まで持ってきてくれた。

IS学園は元々一学年の定員が百人だったのだが、織斑先生が来たことによつて飛躍的に受験希望者が増え、定員が年々増やされている。

それ以前に入学した今の三年生は百人だが、二年生は百二十人、今年は一気に百五十人にまで増えている。

だから三年間住むべき寮も増築されて、今年から三年生は新しく建てられた別棟に移ったそうだ。

だが食堂などは共用で、去年までとは明らかに混み具合が違くと先輩達はぼやいていた。

「ごめん待たせちゃって」

「いえいえ、こちらこそいきなり押しかけて」

走ってやって来た宮崎先輩の顔はひどいどころではなかった。

目には深い隈ができていて、その顔は相当にやつれている。

これは明らかに寝ていない。

「あ、ごめんねひどい顔で。ちよつといろいろ忙しくて。別に甲斐田君は何も関係ないから」

「そうですね。そんな時に押しかけてすみません。どうしても話しておきたいことがあったので」

「そんなの全然構わないけど、話って……」

「もちろん昨日のことです。何よりもまず誤解を解いておかないことは始まらないなどと思って」

「誤解？」

「はい。昨日先輩は篠ノ之博士の出現によってIS学園はもう安全ではなくなったかのように言いました。それでいいですか？」

「え、ええ……」

やはり、先輩はピンと来ていない。

宮崎先輩ですら分かっていないことなのか。

「僕と一夏はですね、IS学園が安全な場所だなんて最初から考えてないですよ」

「えっ？」

理解できず、寝不足の宮崎先輩はフリーズする。

「みんな外から隔離されて安全だみたいな言い方してますけど、僕らからしたら逃げ場のない場所ですから」

ようやくその意味を理解して、宮崎先輩のみならず周囲に立つ先輩達も息を呑むのが分かった。

「I S学園に男二人だけで乗り込む時の気持ち、想像できますか？」

6. 反発

「IS学園は最初から安全な場所なんかじゃないです」と、俺は三年の先輩達相手に挑む。

「みんな外から隔離されて安全だみたいな言い方してますけど、僕らからしたら逃げ場のない場所ですから」

言葉の意味を理解して、俺の周囲にいる先輩達が息を呑むのが分かった。

まずは俺のフィールドに入ってくれたようだ。

「IS学園に男二人だけで乗り込む時の気持ち、想像できますか？」
何もかも、あらゆる面において俺よりも格上な人達だ。

普通に話をしてはいいように転がされてしまうのは間違いない。
事実昨日の夜はそうだった。

是が非でも全て俺の土俵内で話を進めなければならぬ。

「そ、それはもちろん、相当に心細かっただろうという想像くらいはできるわ。男子に対して快く思っていない人達の集団に入っていくつもりだったってことも」

「そうですね、そうですね。やっぱり死地に赴くも同然だとまでは思っていないですよ」

「そこまで……いいえ、本人が言うならそうなんでしょうね。でも、そういう不安な気持ちはすぐに解消されたはずじゃ？」

「すぐ？ 初日からオルコットさんに絡まれましたし、安心なんてできるわけないじゃないですか。少なくとも三日くらいじゃとても」

やつれ顔の宮崎先輩が目を丸くする。

入学して三日とはすなわち、俺が先輩達に会いに行った日のことである。

「先輩達のところへ行ったり一人で学園内を歩き回ったりしたのを、僕が怖いもの知らずだからなんて思ってますか？ いったって怖いに決まってるじゃないですか。でも僕はここでまず見分けなければならぬんです、敵と味方を」

「敵と味方……」

「はつきりさせないまま後ろからズブリとかご免なので。敵なら敵ではつきりしていてくれた方がありがたいんです」

もちろんのこと俺は入学してからこのかた、そこまで深刻に考えてなどいない。

多少は構えていたが、入学初日からクラスメイト達が友好的過ぎて正直拍子抜けした。また味方を作るつもりでもあったが、そんなものは一夏に寄ってくる女子で形成すればいいだけなので取り立てて深刻な話でもない。

そして先輩達のところへ行ったのはオルコットに勝つためだし、一人で歩き回ったのは自分を餌にして他クラスの生徒を釣り上げるためだ。

だが俺は、あえて深刻な話として全てを作り変える。

「どうして僕がまず負けると思えるような勝負をする気になったと思いますか？　ちょうどよかったですよ。クラス内での敵味方はつきりするだろうって。どうして僕が先輩達に助けを求めたと思いますか？　上級生の人達は僕らに対してどういう態度を取るか知りたかったんです。今だから言いますが、正直なところあの時僕の中で勝敗は二の次でした」

「え!？」

とにかく勝ちにこだわっている、と俺は周囲から思われているようで、しばしばそういう言い方をされる。

もちろんそれはその通りなのだが、ここで実はそうではないと言うことでかえって真実味が出てくる。

何しろ俺は自分のことでもないのにどうして勝ちたがっているのかを疑問に思われていた。

甲斐田はいったい何がしたいのか、俺が何も言わないのでクラスメイト達はそれぞれ勝手に想像しているようだ。

そして勝ちたいの裏に本当の目的があったという話にしてしまうわけである。

「もちろん勝つに越したことはなかったですけど、一方で負けること

も考えていました。人間負けるのを見た時が一番手のひらを返しやすいですからね。潜在的な敵なら最初に顕在化してもらえれば後で実は……なんてこともないです。クラスの人達に変な空気はなかったですけど、一夏が負けた後どうなるだろうかとは思っていません」

「私達についても見極めようとしていた？」

「気を悪くされるのは当然だと思いますがそういうことです。最初に言いましたがIS学園は僕らにとって逃げ場のない場所なんです。だからここでどういう立場になるかというのが今後の三年間を生き抜いていく上で僕にとって死活問題です。少なくとも上級生の空気を知ることが僕にとって必須事項でした」

話している間にも俺の周囲には人が増え続けている。

おそらく俺を探しに行ったであろう人達が戻ってきたり、騒ぎに気づいて降りてきたりと、見えなくても今いるラウンジの人口密度が加算的に上がって行くのが分かった。

「それなら……結論は……」

「そんな顔しなくてもここに来てこうやって話をしてることが答えです。ここが僕にとって安全でない敵地だったら自分一人で突っ込んで行こうとか絶対にしませんよ」

「そ、そう。それはよかった……」

笑顔でそう言って俺は空気を和らげる。

IS学園は安全でなくても、三年生のいるここは安全だと俺は信じていると伝えたわけだ。

まさか三年生百人が百人俺に対して好意的だなどは夢にも思っていないが、少なくともこの人達は俺に対して男だからどのようのような態度を見せないだけの分別は持っている。

二年の黛先輩がどれだけ聞き込みをしたのかは分からないが、三年生は概ね俺達に対して好意的であるそう。百人もいれば十人十色どころではないだろうに、明らかに意思の統一がなされている。

つまり全体として統制が取れているという話で、それは宮崎先輩他指揮科の人達の仕業であることは疑いようもない。

「だから少なくとも先輩達のいるこの一年間はどうかになると思ったので、その間に立場を確立させおこうと考えていました。リーグマッチに目をつけたのはそういう理由なんです。別に特典がどうのとかいうような話じゃ全然なかったんです」

「そういうことだったの……」

「模擬戦で勝って一夏ならやれると思ったのもありますけれど」

宮崎先輩は、いや周囲の先輩達も、なるほどという顔で頷いている。俺がそう思っている、なのだから否定のしようもない話だ。

その上俺と一夏がサンプル第一号なのだから、比較対象さえない。

「リーグマッチで一夏が結果を出せばもう男だからどうのという理由は使えなくなりますからね。実際に期待通りやってくれましたし」「それは……どうかな。織斑君についてはあの織斑先生の弟だから特別だと思われているし、実際そう言われているわよ」

「それはそれでいいんです。『特別な存在』になったのなら一夏は少なくともIS学園の内側に対して気に病むことがなくなるわけで、外側だけに集中できるようになります」

「ちよつと待って。今は織斑君じゃなくて甲斐田君の話をしてるんだから。それじゃ全部が甲斐田君の方に向かってしまうじゃない」

「それなんですけど、もちろん僕のことを心配して言ってくれるのはとてもありがたいことなんです。先輩に限らずみんな何を優先すべきかを間違ってるんですよ」

「何言ってるの！ 自分の命を優先するべきではないとかそれこそ間違ってる！」

やはり宮崎先輩は怒った。

鷹月さんや博士の言った通り先輩は俺の安全を心配して言っていたようだ。

ならば俺がでつち上げた論理は通用するはずだ。

「みんな全てをこっちゃんにしているみたいですけど、今一番危険なのは一夏ですよ。何しろあの篠ノ之博士にロックオンされてるんですから」

俺は前提からひっくり返すことにした。

そもそもは元々からしてそういう話だ。

全ては博士が余計なちよっかいをかけてきたことから始まっている。

だから決して俺が訓練などやりたくない一心から言っているわけではないのだ。

「篠ノ之博士の目的……なんてものは誰にも分からないでしょうけど、はつきりしていることが一つだけあります。篠ノ之博士のターゲットは一夏であるということですよ」

「どうしてはつきりしているだなんて断言できるの？」

「一夏本人がそう言っているからです。どうも一夏は前々から目をつけられていたみたいで」

俺は昨日の夜一夏が話したことを説明した。

一夏は博士が犯人であり自分が狙われていると気づいていて、今後もあるあいうことが起こり得ると警戒していると。

「そういうこと」

「一夏も巻き込まれそうな僕の身を心配しています。だから僕を訓練で鍛えようとして今日の騒ぎですよ」

「それはとてもありがたいことじゃない」

「いいえ、一夏は何よりまず自分のことを心配すべきであって、他人を気にしている場合じゃないんです。だって狙われているのは自分なんですから」

もちろん、そんなことを先輩達が分かっているはずはない。

それを踏まえた上で俺に対して言ってきた。

「なるほど、甲斐田君の言い分はよく分かったわ。でも、私達としては織斑君はそこまで危険だとは考えていない。狙われているにしても、織斑君は篠ノ之博士にとって身内だから」

「一夏本人も同じですね。どこかで自分は大丈夫だと思っています。でも僕はあのISの乱入を見て安全だなんてとても思えません」

博士の極端な身内最良は本人の破天荒な性格もあってよく知られ

ている。

織斑姉弟と自分の妹しか人間と認識していないのではないかと言われるくらいだ。

だから先輩達も、一夏でさえも信じてしまっているのはある意味仕方のないことではあるだろう。

だが、今の博士は先輩達が知っている篠ノ之東ではない。

「どうして安全じゃないと思えるの？ あの時は織斑先生ですら大丈夫だと介入しなかったくらいなのよ？」

「後から入って来た僕達の存在を抜きにして考えてみてください。あの時一夏は茶番とはいえ一試合を終えて疲労状態だったんですよ。ほとんど紙装甲だったし、鈴の存在はたまたま紙一重でエネルギーが残っていたという偶然です。そこに四機、まあ実質三機でしたけど篠ノ之博士はそのタイミングで乱入をさせましたんです。そんな状況でどうして大丈夫だなんて言えるでしょうか」

宮崎先輩が顎に手を当てて考え始める。

本来の博士の意図では、一夏は疲労状態に加えて一対三になるはずだった。

本人が言っていたので間違いないが、俺がクラスメイト達を引き連れて入って来たことは見逃されたとしても完全にイレギュラーだ。その上偶然にも鈴まで生き残っていた。

「一夏を引き立たせるのが目的なら乱入するタイミングもISの数もおかしいです。一夏を叩きのめすためだとまず考えるべきじゃないでしょうか。先輩達は一夏がエネルギー無効化攻撃も撃てない紙装甲疲労状態で一人きりだったとしたら、一対三で勝てると思いますか？」

俺は周囲を見回す。

子分機の四体目は間に合わなかったそうだが、それでも博士は三体でいけると踏んでいた。一夏が疲労状態で一人きりという前提であれば。

試合が終わってから乱入したのは鈴に助太刀をさせないためだ。もちろん一夏が勝ち鈴が負ける上での話だが、一夏にはエネルギー無

効化攻撃があるので鈴が負ける場合はまずエネルギーゼロの状態になる。あの時の鈴はたまたま降参をしたから残っていただけで。

また一夏が鈴なり更識妹なりに負ける場合はそれはそれでいいのだ。その後乱入して更なる蹂躪を加えるだけの話である。

「美郷、パイロット的に織斑君はその状態で一对三を戦える？」

「相当厳しい。一对一なら多分勝てるだろうけど、二どころか三じゃ織斑君の頭が追いつかない。織斑君の潜在能力を最大限考慮したとしても、やってないことはできない子だから知らない対複数のやり方はまずできない。逃げ回るので精一杯だと思う。織斑先生が入ってくるまでの時間を持ちこたえられるかは……とても間に合わないかな」

「椎葉、整備科的には？」

「あの無人ISは結局自爆攻撃しかしてないから、織斑君がそれに気づけばまだやりようはあるかも」

「でもそれってブレード一本で一撃ももらわずに三機と打ち合えてことだから、精神的にすり減るつてもんじゃないね。向こうは生きてないから休む間とか与えてくれないだろうし、多分息切れした時が終わり」

最後突っ込みを入れたのは俺と一夏に笑顔の練習をさせたあの憎らしき衛生科の先輩だ。

横から入って来てそのまま宮崎先輩の隣に座った。

谷本さんも将来はああなってしまうのだろうか。今にしてその徴候が見受けられるし。

「そうか……。甲斐田君は篠ノ之博士だから身内の織斑君に対しては大丈夫、だとはとても思えないわけね？」

「そうですね。目的が誰の目からもはつきりしているのならまだしも、何を考えているのか分からない人だそうじゃないですか。一夏を完膚なきまでに叩きのめすのが目的なのかもしれません」

「さすがに命の危険まではないと思うけど……」

「そういう風に考えてしまう前提がいけないと思います。例えば篠ノ之博士が一夏に対して姉の織斑先生並みであるという期待をしてい

てあんなことをしたとしたり、一夏がその期待に応えられなかった時失望して身内のカテゴリから弾き出されてしまおうとかあり得ないと言いつつ切れますか？」

「それはまた極端な話だけど、言いたいことは分かるわ」

だがそれはおそらく極端な話ではない。

博士はある意味千冬さん以上のものを一夏に対して求めている。

一夏がISを動かせることを博士は最初から知っていた。だが俺という実物を見てISに対する種の可能性を見出してしまい、それを一夏に当てはめようとしている。

あらゆる意味で特別な一夏なら千冬さんの先にも進めると勝手に思っているのだ。

「僕の話は杞憂だとして一笑に付されてしまうようなことですか？」

「一考に値する話だとは思わう。どちらにしても今後も篠ノ之博士の介入がありそうなのは間違いないし」

「それならまずは当事者である一夏をケアすべきだと思います」

「うん。甲斐田君は私達に対してそれを求めるわけね」

「そうです。もちろんIS学園の警備の人達も二度目はやらせないと思っっているでしょうけど、相手が相手です。何かあっても対応できるように一夏を鍛えて欲しいです」

これが俺の考えた一石三鳥となる方法だ。

先輩達やクラスメイト達の目を一夏へと向けさせ、一夏には自分の心配をさせる。

博士や鷹月さん四十院さんの言う通り先輩が俺に対して余計な期待をかけているのであれば、そんな時間の無駄なものはさっさと捨て去ってもらわなければならない。

一夏というこの上なく期待に応えてくれる人材がいるのだから、同じ労力をかけるのであれば一夏に向けるべきなのは誰の目にも明らかだろう。

そしてメリットの三つ目は一夏が先輩達に鍛えられることよって博士の目論見が達成しづらくなることだ。

俺にとっていいことだらけである。決してこれで訓練をしなくて

済むという邪な思いなど一切ないのだ。

「なるほどね。甲斐田君のお願いは理解した」

「聞いてもらうにはあと何が必要ですか？」

「対価がない、とはこっちから余計なことを言い出した身だし言わないけど、少なくとも織斑君本人のいないところで決める話ではないわよね」

「一夏なら説得します」

「篠ノ之博士が絡んでくるとなると当然織斑先生も当事者になる」

「それは織斑先生なら篠ノ之博士に対して何かできるといふことでしょうか？」

「そういうことじゃなくて、私達は今仮定だけで話をしている状態なわけで、全くの見当違いかもしれないわ。もちろん篠ノ之博士の真意なんて誰も分からないでしょうけど、それでも篠ノ之博士を一番よく知っているのは親友である織斑先生。私はなるほどと思ったけど、織斑先生はそうは思わないかもしれない」

「分かりました。それなら織斑先生とも話をしてきます」

「あ、それには及ばないわ。話ならこっちでやるから。甲斐田君だときっと喧嘩腰になりそうだし」

「そこまで言わなくても一瞬思ったが、俺と織斑先生の関係を外から見れば対立しかしていないように見えるか。」

「俺からすれば何をしようとしてもことごとく邪魔をしてくる人なわけで。」

「じゃあお願いします」

「織斑君ともよく話し合ってみて。説得するんじゃないわ。織斑君も篠ノ之博士のことを理解した上でそう言っているのかもしれないから」

「それは……どうでしょうね。意味が分からないって言ってましたし」

「それを言うのであれば直で話をしている俺が一番よく分かっている。」

博士本人は先輩達が想像しているかっつての篠ノ之束像とはもう違

うのだ。

今こうやって話をしているようやく気づいたことだが、博士は本気で一夏を潰す勢いで追い込もうとしている。

あの時博士がこの上ない機会だったのにと残念がったのは、千冬さんや一夏どころか俺でさえそこまでしないだろうと安心しきっていた状態だったからだ。

「ま、でも警備の人達もこれからは嚴重に警戒するそうだし、そうそう同じような事態にはさせないわ。ああいう不意打ちは基本最初の一度しか使えないもの」

「そうですね。それにあのISからして僕らで対処できる程度でしたし」

「囮作戦ができたのは数で大きく上回っていたからこそね。織斑君一人だったら囮も何もないわけだし、篠ノ之博士もそこまでは気にしていなかったんでしよう」

つまり俺によって博士の目論見は台無しにされたわけなのだが、当の博士は残念がってはいても俺に対して怒っているようには見えなかった。

俺が邪魔をしてくるのは織り込み済みだったのか、それとも俺達が出てきた時点で諦めていたのか。

だが確かにこれでは先輩達からすれば俺は博士に目をつけられてもおかしくない。

「分かりました。じゃあ一夏と話をしてきます」

「待って。話をそらして誤魔化したつもりだろうけど、そうはいかない。まだ一番大事な話が残ってるわ」

やはり無理か。

うまく一夏の話に乗ってくれたと思ったのだが。

「あれ、まだ何かありましたか？」

「もちろん、君の話。織斑君以前に、甲斐田君はどうするつもりなの？」

「ああ、そんなことですか。特に言うまでもない話ですよ。危険があるならそこに近づかなければいいんですから」

予想外だったのだろう、宮崎先輩は目を丸くした。

ならば、本当に先輩が俺に対して期待などしているのであれば、そんなものはこの場で捨て去ってもらおう。

「足手まといになるのなら素直に一夏から離れてますよ。少なくともISの授業とか行事の時は。そうしておけば問題ないですよね?」

あつ、と宮崎先輩の口が開き、隣に座っている衛生科の先輩の顔が青ざめる。

そう、俺はまだ言われっぱなしのまま、フォローを受けてはいないのだ。

話の途中で衛生科の先輩が入って来たのはまず間違いなくそのためだったのだろうか。

「別に僕は自分の身が惜しくないとか言いませんよ。一夏を立ててきたのもある意味自分の身を守るためでもありますし。そして今僕の存在が一夏の足を引っ張るのであれば、当然出しゃばるべきではないですよ。僕自身の身からして危ないですし」

「それは……」

想定していたであろう手順をふっ飛ばされて、宮崎先輩は言いよどむ。

俺が凹んだ挙句そういうことを言い出す可能性は考えていただろうが、この場合はそうではないのだ。

俺は自分がどうこうではなく、一夏の安全を前面に押し出した。そして一方で元々自分の安全に気を遣っていたと言い、向こう見ずな行動を取るつもりはないと示す。

俺に対する人物像がひっくり返ってしまった以上、先輩達の論理はもう通らない。

「待った! 綾が甲斐田君に言ったのはそういう意味じゃなくて!」

「いえ、別に僕のこととは問題じゃないんです。今一番の問題は一夏の身の安全で、僕は危険だと思っっているという話です。あの乱入を見て一夏は篠ノ之博士にとって身内だから大丈夫だなんて少なくとも僕は思えないことです。だから一夏を守ってくださいと、一夏が自分で自分の身を守るようにしてくださいとお願いをしに来たんで

す」

「うん、それはそれで大事な話だけど、甲斐田君自身のことだつてあるよね?」

「僕ですか? 今後篠ノ之博士の介入があるのなら、僕にとっては危険じゃないですよ。向こうからすれば僕とかゴミ同然でしょうし、いや、もしかしたらそれ以下で篠ノ之博士にとっては一夏以外に男でISを動かすとか気に食わない存在かもしれません。だったらわざわざ自分から命の危険がある場所に突っ込んでいく理由はないです」

「そんなこと言つて、実際突っ込んで行つたじゃないか!」

「あれは犯人がIS学園かIS委員会だと思つてたからです。それなら命の危険まではないだろうと高をくくつてたからできた話で、そうじゃないのなら今後はもう躊躇してしまふでしょうね」

「それは……」

衛生科の先輩が食い下がるが、俺が前提からひっくり返してしまつた以上もう議論にはならない。

元々俺が危険な行動を取ると思われたことから始まつた話なので、大人しくしていますと言われれば先輩達はそれ以上何も言えないのだ。

「じゃあそういうことで、織斑先生の方はよろしくお願いします」

「あつ……綾?」

宮崎先輩が途中から下を向いたままなので、もうこれ以上はなさそうだと俺は立ち上がる。

先輩は一瞬だけ顔を上げたが、何も言うことなくすぐに下ろす。

その目は俺がこれまで見ていた姿からは想像できないほど弱々しかった。

「どうやら今日の俺はすんなりと目的地に向かうことができないよ。うだ。」

そのまま自分の部屋に戻ろうと思つたのに、またも寄り道をする羽目になつてしまった。

「それでお話って何でしょう?」

「すごく簡単な話だよ。いつになっても自分の立場を全く理解しないようだから、わざわざ教えてあげようってこと」

絡んできたのは新・五組代表の杉山なんちゃらだった。

当然のごとく、集団で。

「立場ですか?」

「あのさ、もしかして自分の立場を私達と同じだとか考えてたりする? 言っておくけど一緒にされると困るんだけど」

「はあ……」

自分の部屋に戻ろうとしたところ、階段に壁があって俺は進めなかった。もちろんのこと人の壁だ。

自分を従えて、新五組代表はふんぞり返っていた。

そしてそのまま食堂へと連れて行かれてこの状況だ。

「やっぱり理解してないか。いい、あんたらはモルモットであってI S学園の生徒とは違うんだからね。形式上生徒として扱われてるから勘違いしてるんだろうけど、本来はここにいていいような身分じゃないわけ。特にDランクのあんたは合格するどころか受験資格さえないの」

「はあ……」

こいつは今さら何を言っているのだろうか。

喧嘩したいのなら三組とでもやればいいのに、わざわざ俺を待ちぶせまでして。

あれか、ただ単に誰かをなじりたいだけか。

「ダメだ、こいつなんにも分かってない」

「やっぱ周りが気を遣った結果勘違いしてるか」

「身の程知らずってこういうのを言うんだろうね」

そして取り巻きが口々に俺をなじってくる。

この連中の顔には見覚えがある。前の五組代表の周りにもいた。

まあボスが変わったのでそのままスライドしてきたのだろうか、前の代表の時はそこまで口を出していた記憶がない。

前の代表の時は後ろから無言で圧力をかけてくる感じだったと思

うが、やはりリーダーが変われば役割も変わってくるのだろうか。

「ま、自分で理解できる頭があればこんなことにはなっていないか」

「よく分かりませんが僕の行動で何かまずいことはありませんか?」

とりあえず新五組代表が俺の何にケチをつけたのか聞いてみる。

すると五組代表杉山は笑い出し、取り巻き達も続いた。

「ああ、ごめんごめん。分かるわけないか。クラスでなじめなくて自分の居場所探して必死にあっちこっちフラフラしてるくらいだから、周りなんて何も見えてないんだしね」

「別にそういうつもりはありませんが、知らないうちに何かしてましたか?」

どうして一人で行動するイコールぼっち扱いになってしまうのか。

IS学園の中を一人で歩くことはそこまでありえない話なのだろうか。

だが基本的に女が群れる生き物だからといって、そうでない女だって普通にいるだろう。

聞いた話程度だが二組には一人でいる方が好きなのが集まってるそうだし。

「見ててほんと見苦しいって話。三組に相手してもらえなくて、今度は三年生? そして今軽くあしらわれて追い払われてきた。あのさあ、いい加減気づかないの? そもそもモルモットが私達と同じ扱いをされること自体が間違ってるのをさ」

「一夏は普通にクラスになじんでますけど」

「はっ。やっぱりそれがあんたの心の拠り所か」

この連中こそクラスの外に繋がりを持っていないのだろうか。

IS学園にも部活はあるが、真剣に学校生活を費やすようなものではないそうだ。

一夏から部活見学ツアーの感想で聞いた話だが、そもそもIS学園と言うだけあって学校自体のメインがIS関連のあれこれだ。つまり生徒全員がISという人生をかける部活をやっているようなものなので、それに加えて別の何かをやるというのはいろんな意味で厳しいらしい。

だからやつても趣味程度の文化系、運動部もあるが特に大会に出るようなこともなく、体を動かしてないと気のすまない連中が半分息抜きでやっているというくらいらしい。

すぐにリーグマッチの準備が始まったこともあり結局一夏はどこにも入らなかつたし、生徒の半分以上は何もやらないそうだ。

またIS学園に入ってくる生徒は全国から集まって来ているので、入学時は知り合い自体が少ない。

その結果として、こうやって自分のクラスが世界の全てになつてしまふのかもしれない。IS学園入学がゴールなのだとしたら。

「織斑一夏こそ勘違いの筆頭だね。ただ七光で専用機をもらっただけで、自分ではできるとかおかしな勘違いしてる」

「リーグマッチで優勝したんですが」

「ははっ。あいつつて全部周りにお膳立てしてもらっただけで、自己じゃ何もしてないじゃない。周りの言う通りにやって専用機の力で勝っただけ」

「いや、試合を見たのなら全部一夏が自分の勝ったことは分かると思うんですが」

「あー、やっぱ分かんないか。じゃあ説明してあげよう。初戦はただの不意打ちで間抜けな佐藤が引つかっただけ。二戦目とか作戦負けして見苦しい姿を見せて、それこそ勝ちを拾った程度。三戦目は単に作戦の勝利。最後の試合は勝てそうにないからってお涙頂戴の茶番劇。ほら、織斑自身は全部言われた通りにやっただけじゃない。実力がないから周りが誤魔化そうとした以外に何がある？」

結論ありきでフィルターをかけるとそういう見方ができてしまうのか。

正直ちよつと感心してしまった。

内実は全て最後は一夏自身の力で何とかしてもらったくらいなのだ。

「二組の連中はうまく誤魔化したと思うよ。うちのクラスでも騙されてるのがいたくらいだし。ま、IS学園で色恋沙汰に夢中とか自分の首を絞めてるだけだけどね」

「なるほど。ちなみに最後の試合の後のあれについては?」

興味が湧いてきたのでついにて聞いてみる。

音声なしで一度しか見ていなかったとはいえ、三組も理解はできていなかった。

IS学園の外では篠ノ之束編集によって一夏がヒーローになっている。

「ああ、なんというかIS委員会も手の込んだことをするわ。そこまですて織斑を印象づけたのかって。どうせあんたがやられたのもシナリオ通りなんですよ。何の役にも立たないからせめて健気なところでも見せてあげようって心遣いがあったの、当然分かってないわよね?」

「それは初耳ですね」

「プツ。自分の役割すら理解してない大根役者か。まあ知らせたりしたらかえってぎこちなくなるだろうから、教えてすらもらえなかったんだろうけどね」

物の見方によつてこうまで事実が変わってしまうものなのだろうか。

この連中にしても訳の分からないまま一度見ただけでしかないとはいえ。

三組にしても五組にしても、俺のことを何もできない人間として見た結果、俺がやった指揮などなかったことになってしまっていた。

ただ、外に流れている映像については博士によって恣意的な編集がかかっている。

それは間違いなく一夏がクローズアップされていて、おそらく俺については極力削られているはずだ。博士にとつても俺が前に出てくることは好ましいことではない。

多分先輩の姉は、ウサ耳女編集済みの映像を見た時俺が指揮をしていたとは思っていなかっただろう。

「分かった? あんたの心の拠り所な織斑でさえこの程度。ましてあんたは男なのにISを動かせるつてだけで、本当に何もできない存在。まだモルモットとして解剖されてない幸運に感謝して、身の程わ

きまえて隅っこで大人しくして当然だって理解できた？」

「目障りとかそういう精神的な方面はともかくとして、何か実害つてありますか？」

「存在自体が害悪だってまだ分かんないかなあ？ あんたらがISでも何でもIS学園のリソースを何か使う度に本来使うべき私達生徒が割を食うじゃない。それにあんたらのせいで私達の代は話題を全部そっちに持つてかれて、本来評価を受けるべき私達生徒がないがしろにされるんだから。実際リーグマッチでもうそういう徴候がはじめるし、ちよつとこれは見逃せないわ」

「ようやく何にケチをつけたのか理解できた。」

要するに、新五組代表杉山はリーグマッチで一夏が目立ったことが気に入らないらしい。

「ゴレム戦についてもIS委員会が一夏を引き立てるための茶番だったと判断しているようだ。」

「一夏を前に押し出すと決めた時点でこういう輩が出てくるのは分かりきっていたが。」

「なるほど、言いたいことは理解できました」

「分かった？ じゃあこれからはちゃんと身の程をわきまえて……」

「返答としては、あなた個人の自分勝手な都合など知りません、ですね」

「は？？」

「五組代表杉山は俺が反論してくることにすら予想していなかったよ。うで、バカみたいに口を大きく開けた。」

「一緒にするな？ 何言ってるんですか。僕と一夏が一般生徒と同じ扱いにされているのは、むしろあなた達のためなんですから」

「はあ!？」

「まあ、分かるわけないだろうなと思う。」

「IS学園という枠の中が世界の全てなら。」

「モルモットですか。なるほど、確かに研究対象ではありませんね。でもそのモルモットって世界に四人しかいないんですよ。これが絶滅寸前の動物だったら即刻手厚く保護されてしかるべきですよね」

「それがなんだって……!」

「分かりませんか？ 僕とあなたのどちらに価値があるか。世界に四人しかない人間の一人と、クラスの代表にすらなれなかったあなた。誰に聞いても同じだと思えますけど」

「わ、私はクラスの代表だ!」

「リーグマッチにも出られていないくせに何言ってるんですか。失敗した人を引きずり下ろしただけで、あなた自身は何かを成し遂げたわけじゃない。クラスという小さな単位に認められた以上の価値があなたにあるんですか？」

「なんだと!」

五組代表は激昂して俺を睨む。

IS学園の生徒として見れば、俺に価値など一切ない。

IS学園内では極端な話ISをどれだけ操れるかだから、確かに動かせるだけの俺はこの中の誰にも勝てないだろう。

俺の中にある価値とは男でISを動かせるというただ一点においてである。

そして世界に四人だけという希少性まで考慮してしまうと、簡単に替えが効くような一般生徒などとは比べようもない。

この連中が俺に対して優位性を保てるのは、あくまで同じIS学園の生徒としてでしかないのだ。

「本当に僕らを一般生徒と同じ扱いにしないとしたら、それこそ僕らは特別扱いになりますよ。まあ一夏には専用機がありますけど、僕にも常に訓練機が貸与されるくらい。訓練機がひとつ減るって結構大きな影響あると思いますけど、そっちの方がいいんですか？」

「そ、そんなことあるわけが……!」

実際織斑先生が横槍を入れなければ本当にそうなっていたとのことである。

IS委員会の研究者達が悔しがっていた。

「本当に同じ扱いにされたくないのならそう直訴でもすればいいんじゃないでしょうか。僕にとっても迷惑でIS委員会の人以外は誰も喜ばない結果になるだけですけど。あと今一夏のこと馬鹿にしま

したけど、一対一ならあなた達の誰一人として一夏に勝てませんよ。百回やって百回全て一夏の完勝ですね」

「はあ!？」

勢いのまま俺は一夏についても言及する。

この連中の実力など知らないが、前五組代表の佐藤に鼻で笑われる程度だし大したものではないだろう。

「まさか僕にまで負けるとは思いませんが、少なくともリーグマッチを見て一夏の実力が理解できないようなら高が知れてますから」

「何言ってるのこいつ?」

「こつちこそこの人何言ってるんだろうって感じですね。まあ別に信じなくてもいいですけど、来月の個人戦で自分に対する残酷な現実を思い知ればいいんじゃないでしょうか」

「はっ。言ったね」

「ええ、言いました。あ、ちなみに僕ら一組はリーグマッチ勝者の権利として全員が個人戦のシード権を持つてるので、何回か勝たないと当たりませんからね。せめてそれくらいは勝ち上がってください。一夏と当たる前にあっさり負けるとかみつともないにも程があると思うので」

こうして俺は話をすり替える。

言ってしまったとはいえその前の俺の発言はIS学園において非常に危険なものなので、できれば有耶無耶にしたい。

はつきり言ってる俺はお前らよりも上だとIS学園内で言ってしまうのは、生徒全員を敵にも回しかねない行為だ。

だがおそらくは尾ひれがついて、敵を作ってしまうだろう。

目の前の馬鹿のような分かりやすい敵であればむしろ大歓迎だ。「ふん。自分を棚に上げる方がよっぽどみつともないわ」

「僕に勝ったところで何の自慢にもなりませんし。一夏が大したことないとか頭悪いこと言ってるので訂正してあげただけですよ」

「はあ!？」

「そこまで!」

俺と五組代表が再び火花を散らしかけたその時、どこからか制止す

る声が入った。

声のした方を見やれば、いた。

「IS学園を守る生徒会長として、そんな醜い諍いを許すわけにはいかないわ！ 双方、それまでよ！」

どうしてこの手の連中は高い場所を好むのだろう。

この生徒会長、こともあろうに食堂のテーブルの上に立っていた。仁王立ちで、『参上！』と書かれた扇子を手に持つて。

あ、すっかり上履きは脱いでいる。よく見れば靴下姿で立っていた。気を遣っているのかいないのか。

「ここにいる私達は皆IS学園の生徒、それ以上でも以下でもないわ。悲しいことを言わないで」

「くっ、どうして生徒会長が……！」

何をやっているのかと俺が呆れる一方、なぜか五組代表が動揺していた。

もしかしてこの女はこういう権威的なものに弱いのだろうか。自分自身がそういう形を作っているし。

「入学式の日、私は言ったでしょう。男子だとか女子だとか以前に、私達は同じ場所で一緒に学び合う仲間なのだ」と

「じゃあそういうことで。もう行っていいですよ」

「あ、ああ……」

「あれっ？」

動揺していた五組代表達は、俺が切ったのを幸いとばかりに駆けて行った。

後に残されるは俺と、啞然とした顔の生徒会長。

「ふう」

「や、やあ……」

曖昧に笑いぎこちなく挨拶をしながら、生徒会長はテーブルから降りて上履きを履き、俺の方に寄ってきた。

「どうも」

「だ、大丈夫だった？ 甲斐田君が集団に絡まれてるって聞いて」

「まあ見ての通りなんですけど」

「ど、どうかした？」

「あのですね、入ってくるならもうちよつと早く入って来てくださいよ。終わりがけの頃に介入されても全然ありがたくも何ともないんですけど」

「ええっ!？」

本当に、いたのならさっさと入って来いという話である。

生徒会長の発言からして、俺達の会話内容を理解している。

つまり、この女は入るタイミングを見計らっていた。

「ずっとこの場にいたんですよね？ 僕らがどういう会話をしてたのか理解してるってことは。それならどうして入ってこないんですか？」

「待って。違う、違うの!」

「何が違うんですか。別に最初からいたとは言いませんけど、気づいたならすぐ入って来るべきですよ？ どうしてそうしなかったんですか？ そんなに自分の見せ場が欲しかったんですか？」

「そ、そうじゃなくて、そういうことじゃなくて……!」

「どうかどうしてテーブルの上に乗ってたりしたんですか？ 仲裁に入るのにその必要ありますか？ テーブルはご飯を乗せる場所だつて理解した上でやったんですか？」

「そ、それは……」

本当に、この生徒会長は完全受け身に回ってしまうと弱い。

俺のいないところでは一夏達を自分のペースで振り回しているよ
うだが、俺を見ると途端に腰が引けてくる。

まあ俺が初対面から一貫して聞く耳を持たず一方的にやっている
というのもあるが、もはや俺は生徒会長にとって完全に天敵状態だ。

だが、それでも俺から逃げようとせず立ち向かおうとする根性につ
いては認めざるをえない。そしてこうやって苦手な俺に対しても助
けようとする責任感はずばらしいと思う。

それはきつと俺が織斑先生に対して抱いているような感情なのだ

ろう。

だからこそ俺は手を緩めるなどあり得ないし、今の利己的な行動を許すわけにはいかないのだ。

「そのくらいにしておいてあげてください。楯無さまは連絡を受けて全速力でここまで走って来たのですから」

俺のいる場で生徒会長にフォローが入るとは珍しいなと思い振り向くと、穏やかな顔をした眼鏡の女生徒が立っていた。

どこかで見た顔だが、生憎生徒会長を『楯無さま』などと呼ぶ生徒に覚えはない。

「初対面ではないのですが名乗ったこともないので自己紹介させていただきますね。三年整備科の布仏虚（うつほ）と申します」

「布仏ってことは……」

「はい、いつも妹の本音がお世話になってます」

謎が解けた。

確かに布仏さんと顔立ちが似ているし、三年生なら俺も会ったことがある相手だ。

「もしかしてさっきラウンジにいました？」

「はい、隅の方でしたが」

「その後つけてました？」

「いいえ、絡まれている甲斐田君を見つけたのはたまたまです」

穏やかな雰囲気のまま、布仏姉は笑う。

妹と顔の作りが似ているが、空気は大分違うなと感じた。

落ち着いた姉に賑やかな妹。静と動。姉にも天然が入っているかはまだ分からない。

「虚？ 何の話？」

「あつ、その連絡をする前に絡まれている甲斐田君を見つけたのでお伝えしていませんでした。後でまた」

「そう」

「姉妹経由で僕らのことは筒抜けですか」

「甲斐田君と織斑君の動向は今のIS学園において最重要事項ですから。IS学園のトップに立つ楯無さまが知らないでは済まされな

ことなのです」

「どうやら目の前の二人は主従関係にあるようだ。

生徒会長の立ち振る舞いを見ていいところのお嬢様だろうと想像していたが、IS学園内にまでお付きの人間がいるとはかなりのものなのだろう。

「ということとはきつと姉同士、妹同士の主従関係か。

なるほど、縦関係であるがゆえに布仏さんは踏み込めないのだ。更識妹に対して。」

「どうかされましたか?」

「えっ? あ、いや全速力で走って来てすぐだったのならどうして僕らの会話内容を理解していたのかなと思って」

「ああ、それはですね、私がリアルタイムで楯無さまにお伝えしていたからです」

「リアルタイム?」

「はい、生徒会役員は特別に携帯電話の所持が許可されているので」

「言いながら、布仏姉は携帯を取り出して俺に見せた。」

隣で生徒会長がそうなのだと言を激しく上下させている。

「なるほど、そういうことでしたか」

「はい、ですから楯無さまに罪はないのです」

「分かった!? 私は君のために全力でここまで走ってきたんだから!」

「ええ、よく分かりました。つまり罪は布仏先輩にあったんですね」

「えっ?」

何を言われたのか理解できないという顔で、布仏姉が目丸くした。

「何言ってるの甲斐田君!」

「布仏先輩、だったらあなたが止めてくれればいいじゃないですか。携帯で生徒会長に連絡とかしてる暇があったら」

「でもすぐ私が入っては甲斐田君は言われっぱなしのまままで終わってしまいますよ?」

「えっ?」

その何が悪いというかそれなら俺はただの被害者で済むのだが。

「いや、僕は絡まれて困ってたんですけど」

「と言われましても、あまりにも余裕そうでしたので。そもそも入学したばかりで何も分かっていない一年生では甲斐田君の相手にもならないでしょうし、心配なのはむしろ甲斐田君に容赦なく心折られてしまうかもしれない一年生の方ですよ？　ですからこうやって楯無さまに来ていただきました」

「いやいやいや、見てたのなら分かると思いますけど、そういう感じじゃ全然なかったですよね!？」

「ええ、さすがですね。個人戦を持ち出して煽ることで相手に闘争心を燃やさせる。相手の負の感情を別な方向へと昇華させてしまうとはなかなかできることではないです」

「あれ？　私って甲斐田君を守りに来たんじゃないの？」

それは俺に言われても困る。

「ええと、それならなおさら最初に入って来てくれていいのでは？　五組の人達の方が心配なら僕が何かを言い出す前に止めた方がよくありません？」

「そうすると今度は甲斐田君の方にフラストレーションが溜まってしまいますよ？　さすがに言いがかりにも程がある話ですし、甲斐田君にも反論する権利は十分あります」

どこか納得させられそうな気になってしまいが、何かがおかしい。ただ間違いないと言えるのは、俺はこの人に一ミリも心配されていなかった。

「虚?」

「楯無さま、入って来たタイミングは終わらせるにベストでした。それはさすがです」

「そ、そお?」

「ですが、今の言い方からしてこれで甲斐田君に貸しを作れるという意識になっていましたね。それは違いますよね?」

「うつ……」

「もちろん甲斐田君達は特別ですが、一般の生徒達もいるのです。特

にこの時期の一年生はIS学園に入学できたことで増長しています。トラブルが多いと申し上げましたし、実際こうやって起こっています。常にフラットな姿勢でいてください」

「はい……」

いつの間にか俺の目の前で生徒会長教育が行われている。

そういえば、この生徒会長は俺達が入学した時には既にその座にいた。

「ああ、楯無さまは生徒会長となって二ヶ月、実質は一ヶ月程度なのです。パイロット科から初めて出た生徒会長ということもあって、こうやって力が入りがちになっているんですよ」

「はあ」

「ちよつと虚！ 何余計なこと言ってるのよ！」

なるほど、新米であるがゆえに空回り気味だったのか。

いつも一生懸命であることは誰もが言っていたが。

「それはもちろん勧誘のためです。甲斐田君、生徒会に興味はありますか？」

「いきなり何言ってるんですか」

「いきなり何言ってるのよ！」

自己紹介されたその場で勧誘を受けてしまった。もしかしてこれは宗教だろうか。

「リーグマッチでのクラスのまとめぶりを見ていてこれは欲しい人材だと思いませんか」

「虚は私から安息の場を奪って地獄の中で仕事しろって言うの!?!」

またそれはひどい言われようだ。

というか本人の前で言うな。

「これから生徒会をアピールしていこうと思いますのでよろしくお願ひします」

「それはどうなんでしょう」

「男子の生徒会長。IS学園の歴史に名前が残りますね」

「いやいや、甲斐田君なら普通に歴史の教科書に名前載るでしょ」

天然とはまた違うかもしれないが、この人はこの人でまた独特な何

かを持っている。

気がついたらがんじがらめにされていそうな怖さだろうか。

「では今日はこんなところで。先程の人達には生徒会から注意を与えておきます。初犯ですし、理解しなければ謝罪もできませんので」

「それは……じゃあお願いします」

「はい。楯無さま、何かありますか？」

「えっ？ ええと……甲斐田君は大丈夫だよね？」

「五組の人達のことなら特に何も気にしてないです」

「あれ、それ以外で何かあるの？」

「楯無さま、それはまた後で」

「そう？ じゃあまた」

「あ、最後に個人的な話をいいでしょうか？」

「どうかしました？」

終始穏やかな顔をしていた布仏姉が、急に真剣な表情に変わった。

「甲斐田君、綾の、宮崎綾の気持ちをまず理解して欲しいです」

「宮崎先輩？」

「はい。理解した上でそう振る舞うのならまだしも、先程のように無自覚でやってしまうのはできればもうしないでもらえませんか」

「え……？ ごめんなさい、どういうことでしょうか？」

「考えてください。綾が、甲斐田君に対してどういう気持ちでああ言ったのかを。別に肯定しろとは言いません。理解をした上で次は来てもらいたいです」

「それは……」

「もちろん私の個人的な願望です。強制されるようなことはありません」

自分で考えろか。

フオローしようとしてくれていた先輩達を手を振り払って、三年生の俺に対する評価はだだ下がりになっている。

別にそれ自体は目論見通りでどうということもないが、まだ一夏への支援を取り付けてはいない。

そこまでやってから俺への評価を下げるべきだった。

やむを得ない。もう少し引つ張るか。

「分かりました。理解できるかどうかはともかく、考えてみます」

「ありがとう」

布仏姉の表情が戻った。

「な、何？ この重い空気？ もしかして今私思いつきり場違い？」

事情を知らずついていけていない生徒会長が、オロオロと俺と布仏姉の顔を交互に見ている。

そうだ、生徒会長に対して重要なことを言っていないなかった。

「あ、すいません。大事なことを一つ言っただけです」

「私!」

生徒会長が後ずさり、布仏姉がどうしたという顔で俺を見る。

俺はある一点を指差した。

「さつき乗ってたテーブル、ちゃんと拭いておいてくださいね」

ようやく自分の部屋に戻れた、と思ったら、今度は待ち人がいた。ルームメイトの一夏ではなく、クラスメイト達でもなく、壁の向こうに。

「お兄様」

クロエは怒っていた。

目には涙の乾いた跡がある。

「敵意や悪意を持った相手にそうしろとは言いません」

俺が声をかけるのも待たず、クロエは話し始めた。

「ですが、お兄様のために心砕いてくれた方々に対して、そんなものは始めからなかったかのように振る舞うのは違うと思います」

クロエは真っ直ぐに俺の目を見据えている。俺に瞬きすらさせないとはばかりに。

「お兄様、なかったことにしないでください。たとえ肯定できなくても、宮崎様のお気持ちの存在を認めてあげてください」

クロエは両手を胸の前で合わせ、俺に懇願してきた。

「宮崎様は、心の底からお兄様を心配しているんです」

7. 解決への道すじ

「お兄様、なかったことにしないでください」

と、クロエが懇願してきた。

「たとえば肯定できなくても、宮崎様のお気持ちの存在を認めてあげてください。宮崎様は、心の底からお兄様を心配しているんです」

「心配か」

「そうです。宮崎様はいつもお兄様のために心砕いているんです」

それくらいは分かっていることだ。

さすがに俺も先輩が自分のためにやったなどは考えていない。

「それならもう心配なんてしてないだろうから、なかったことにするまでもなくないんじゃない」

「そんなことはありません！　今も宮崎様はお兄様のことを心配しているんです！」

「なんでそれが分かる、つてまあ見てるわけね」

「宮崎様は逆効果になってしまったと本当に後悔しています。完全にやり方を間違えてしまったと」

もはや先輩のプライベートも何もあったものではないが、先輩の望み通りの方向に進まなかったのだから確かに先輩にとってはやり方を間違えたと言えるだろう。

だがそれはそもそも前提から間違えた必然の結果であって、やり方がどうあれ先輩の望んだ未来がやってくることはどう考えてもあり得ない話だ。

俺に対してありもしない能力を要求すること自体がおかしいのだから。

「別に心配してるだけならもう大丈夫なはずんだけど。僕の身が危険だって言うから、じゃあもう危険には近づきませんって言ったわけだし」

「そういうことじゃありません！」

「だからそういうことでしょ？　あ、もしかして信じてもらえてな

いってことかな。全部口だけで言うことを聞く気なんかなさそうだと思われたか。それはあるかも」

「そうじゃないんです！　そういうことじゃないんです！」
クロエが駄々っ子のように首を激しく振る。

だが確かに言い方がよくなかったかもしれない。さつき俺はあてつけのような言い方をしてしまった。

先輩のダメ出し説教を後で思い返して理不尽過ぎると腹が立ったので、きつと面と向かった時感情的になっていた部分があったのだろう。

理屈としては勝手に期待しているようなのでこの際ついでに失望してもらおうという意識だったが、それはそれとして別にやるべきだったか。

いっぺんに何もかもやろうとした結果俺の言葉自体に信用がなくなってしまったのであれば、俺の方こそやり方を間違えたと言わざるをえない。

となるとこの分では一夏への危険性についてまで話半分になってしまっているかもしれない。

それはかなりよろしくない話だ。

「うーん……」

「お兄様、身の危険ももちろんですが、宮崎様はそれ以上にお兄さまの心を心配しているんです」

「心？」

「そうです。今お兄様が傷ついて自棄になっているのではないかと」

そういうことか。ようやく腑に落ちた。

先輩的には俺を叩き落としたわけで、でもその後に行われるべきだったフォローが俺によつて断ち切られてしまっている。

要するに、今の先輩は一方的なまま終わってしまったという罪悪感に囚われてしまっているわけだ。

「ありがとうクロエ、よく分かったよ」

「本当ですか！」

「うん。確かにこのままじゃ先輩に対して申し訳ないね」

「そうです！　ぜひその気持ちを宮崎様にお伝え下さい！」
「そうだね」

結局は先輩の一人相撲だったわけだが、先輩にはオルコットとの模擬戦で世話になった。

お返しという程でもないが、先輩を罪悪感から解放するくらいはやっていいだろう。

もちろんこれ以上俺に干渉しない上での話だが、先輩がどうでもいいことで俺に囚われてIS学園で俺の存在がクローズアップされても困る。

「さあお兄様！　今すぐ宮崎様の元へ！」

「そんな急かさなくても」

「いいえ！　思い立ったが吉日です！」

「分かった分かった。でもせめてどう言うか考えてからね」

「そんな、どう言うかだなんて今のお兄様の気持ちをそのまま口にするればいいんです！」

クロエが満面の笑顔で俺を急かすが、事はそんな単純な問題ではない。

人間持ち上げられてから叩き落とされるとダメージが大きいが、逆のケースもまたある。

失意のどん底で手を差し伸べられたら迷わずすがりついてしまうだろう。だがこの場合それは蜘蛛の糸なのだから、やり方を間違えては再び叩き落とすことになってしまう。

しかし、だからと言って先輩の望んでいたように振る舞ってしまえば今度は俺への期待まで復活してしまうかもしれない。

慎重に言葉を選ぶ必要がある。

そして一夏への支援も取り付けなければならぬのだから、これは相当な綱渡りだ。

「うん。でもちよつと考えさせて」

「不安に思わなくても大丈夫です！　宮崎様には間違いなく理解していただけますから！」

「それでもね」

「まさかやつぱり行かないとかないですよね？　ずるずる行かないとかもなしですよ」

「分かってるって。ちょっと考えをまとめたいただけ」

クロエが不満そうに口を尖らせるが、俺は無視する。

結局博士は出てこなかった。

「帰ってたのか」

「うん」

考えがまとまらないうちに一夏が戻ってきてしまった。

だがその表情に怒りの色はない。

俺を探し回っている時はかなり怒っているようだったが、探し疲れて収まったのだろうか。

「智希」

「何」

「悪かった」

それどころか、頭を下げてきた。顔も深刻そうだ。

これは何かあったか。

「嫌なことを無理強いしようとして本当に悪かった。すまん」

「誰かに言われた？」

「誰かに……そうだよな、俺に分かるわけないって思ったから逃げたんだもんな」

「どうしたの？」

しおらしいどころか自虐まで入っている。これは珍しい。

誰かに相当強く言われたようだ。

「寝坊してあとから来た谷本さんが怒ったんだ。智希をみんなと一緒にしちやいけないうって」

「谷本さん？　怒った？」

もしかして三組代表あたりが出てきたかと思ったが、谷本さんとはさすがに予想外だ。

「ああ。智希は望んでここにいるわけじゃないって。それなのにどう

して追い詰めるような真似をするのかって」

「谷本さんが？　そういうこと言う人だっけ？」

「おいおい、四組との試合の後俺を慰めてくれたじゃないか。お前だって見てただろ」

「ああ、そういうえば」

「リーグマッチの時ずっと一緒にいて分かったんだけど、あの人は相当よく見てるぞ。いつのまになってくらい全体を把握してる」

確かに谷本さんが真面目にやればできるといふのは俺も知っている。

一夏についてのレポートは本人が書いたのかと思うくらいきちんとしていたし、一夏をうまくコントロールしていた。

だからこそ普段はいつたい何なのかと思っっているわけだが。

「分かった。谷本さんについてはとりあえず置いておくとして、でもそれを言うなら一夏だって同じでしょ？」

「そう思い込んでいたのが俺の間違いだって言うんだ。俺は専用機もらって、みんなによくしてもらって、リーグマッチもうまくいった。でも智希はそうじゃないだろって」

「いやいや、一緒にするなってそういうことじゃないから」

「ええと、つまり俺は智希もＩＳの訓練をすれば楽しさに目覚めると思ってたってことなんだ。俺も最初はＩＳに興味とかなかったけど、やってるうちに楽しくなったからさ。だから智希もきつとそうだろうって」

「そういうことだろうなとは思ってたけど」

昨日の夜の一夏は俺の意思など無視してゴリ押ししていた。

これはきつと一夏の中に確信があるんだろうなと俺は思い、説得は無理だと実力行使に出たという話でもある。

「だよな。谷本さんに怒られて初めて理解したつてのも情けない話だけど、そもそもお前はＩＳに全く興味なかったもんな。授業じゃ千冬姉がやる気ない奴は放っておけだし、智希がＩＳに乗るのってあの学者連中の前だけだよな。きつと興味ないよりもむしろ嫌なことに入るんだろう？」

「それは……まあそうだね」

「やっぱりそうか」

がっくりと一夏が肩を落とす。

正直助かった。俺に対して怒る一夏をどうなだめるかという問題があつたので、何もしなくて済んだのは非常にありがたい。

もう一夏の身の方が危ないのだからと半分勢いで押し切るつもりだったので、勝手に折れてくれたのはこの後の話が非常にやりやすいだろう。

よし、谷本さんはもう少し構ってあげることになろう。

「しかもお前って今それどころじゃない問題を抱えてるんだろ。そんな時に俺から嫌なこと押し付けられそうになって、もうふざけんなって感じだよな」

「問題って何の話？」

「もしかしてお前まだ他にあるのか!? あ、きつと五組の話だな。大丈夫だ。それはさつき俺が喧嘩売り返しといたから」

「何やってんの!?!」

親指を立てて満面の笑みを浮かべる一夏にもう嫌な予感しかしないが、まず間違いない現五組代表杉山の話だろう。

あの後連中は一夏とぶつかってしまったのか。

「いや、鈴と同部屋の……」

「ハミルトンさん？」

「そうそう。智希が見つからなくて寮に戻ろうとしてたらその人が走ってきてさ、智希が集団に絡まれてるって言うから急いで行ったんだよ。そしたらその連中が向こうからやってきてな」

「それで言い合いになった？」

「あ、言っとくけど因縁つけてきたのは向こうだぞ。でもなんだこいつらと思つてたら智希が喧嘩売ってきたとか言うからさ、じゃあISの勝負でいいなら俺が買ってやるよって話になって」

「また模擬戦でもやるの？」

「ん？ だからそれは来月の個人戦でって話だろ？ とりあえず今は首洗って待つてろって感じか」

「オーケー、よく分かったよ」

頭が痛い。

いや、確かに喧嘩を売ったのは俺ではあるが、俺の知らないところで火が燃えあがってしまったている。

「大変だったんだぜー。鈴とかもうぶつ殺してやるモードになって、そのハミルトンさん？ に全力で羽交い締めされてたし」

「それむしろよく鈴が自重できたね」

「なんだかんだであいつも大人になったってことだろ。それに機会はちやんとあるわけだしな」

「そうだね」

その場にいたせいで鈴まで入って来てしまった。

俺が何かをするまでもなく戦火が拡大している。

「だからさ、智希は外野のことなんて気にしないでいいから自分の問題に向き合ってくれ」

「自分の問題？」

「四十院さんに聞いた。宮崎先輩から本当にきついこと言われたんだな。どうしてそういう言い方をしたのかは分かったけど、でもそういうことじゃないよな。いや、俺も谷本さんに怒られて気づいたからこそ言えるんだけど、少なくともそれは智希に対して言う言葉じゃない。せつかくお前がここで見つけた楽しみを奪うような言葉なんだから」

「楽しみ？」

「ああそうか。お前はまだ気持ちが悪く整理できてないんだよな。もちろん指揮の話だ。俺はリーグマッチで智希のやったことがダメだったなんてこれっぽっちも思っていない。クラスのみんなだってそうだ。しつかり結果も出てるしな。そして宮崎先輩だって間違いなくそう思ってる。だから智希は自分はダメだなんて思う必要は全くない」

「それは……」

「あ、五組の奴が何か言ったんだろうけど、ダメなのはむしろあいつらの方だからな。だいたいあいつらって智希が指揮してたことも分かってないくらいバカだ。お前らIS学園に入れたくせにその程

度かよって思わず言っちゃったぜ」

「それはそれでまた事情があつて」

オルコットの時の例を引くまでもなく、喧嘩を売られれば一夏はま
ず買う。

だから五組代表の性格を考えるに特に俺が何かをするまでもなく
この状況にはなったのだろうが、引き金を引いたのは間違いなく俺
だ。だがそれは口が滑ってしまったことへのごまかしであつて、最初
から意図してやったことではなかった。

売り言葉に買い言葉的な要素も多分にあつたと思う。

「宮崎先輩の方も心配すんな。きつと智希じゃ喧嘩になるだろうし
こつちで話をしてるからさ」

「話？　というかしてる？」

「ああ。あの後谷本さんと四十院さんが先輩のところに向かつた。今
ごろ話をしてくれてると思う。あ、あと布仏さんと岸原さんのちびっ
子コンビも行ってるかな？　でもあの二人がいて何になるのかって
気もするけど」

「何やってんの!?!」

まさか宮崎先輩のところに抗議をしに行ったというのか。

四十院さんはあの場にいたのでまだ分からなくもないが、谷本さん
が出てくる意味が分からない。

前もあつた気がするが、谷本さんの中にあるスイッチが押されてし
まったのだろうか。

「いや、俺も行くつもりだつたんだけど四十院さんに来ないでくれつ
て言われちゃつたんだよ。とてもデリケートな話をするとかなん
かで、俺に来られるとむしろ困るらしい」

「そういうことじゃなくて、何僕の知らないところで勝手なことして
くれているの!?!」

「勝手なことつて……だつて今の智希は凹んだ上になんか荒れてる
じゃないか。お前が因縁つけられたその場で自分から喧嘩売るって
相当なことだぞ。普段のお前はそういう奴じゃないだろ？」

「喧嘩くらい普通に売つてたと思うけど」

「普段のお前は喧嘩売るのも計画的じゃねえか。それに自分が喧嘩売っておきながら全部俺に振るってどういうことだよ？ やってること滅茶苦茶だぞ」

「それは……」

確かに失言をごまかすため無理矢理一夏に繋げた感はある。

元々一夏に振るつもりであつたとはいえ、少々強引過ぎたか。

「ああ、別にそれ自体はいい。お前がムカつくのも分かるし、前から俺もああいうのが出てきたら一発ぶん殴ってやろうと思つてた。でもな、智希、今のお前は冷静じゃないし、全然自制できてない。五組も三組も昔の俺もそうだったけど、お前が本気になれば騙せない奴はいないんだ。だからわざわざ自分から喧嘩を売る必要とかなくて、いつものお前なら今回も適当にあしらつてたはずだ」

「外から見てそんなにおかしかった？」

「智希って何があつてもいつもと変わらないように見えるからややこしいんだよな。今回のことは俺も鈴も何かおかしいと思つたけど、多分事情を知らなかつたら流してた程度だ」

「その割には鈴はいつも通りだったみたいだけど」

「それは鈴の智希への感謝の気持ちの表れだろ。あのバカ共をボコつとけば智希の気持ちが少しは収まるだろうっていう」

「それは根本的に方向性を間違つてると言わざるをえないなあ」

物事を黒か白でしか考えない戦闘民族のことはもう置いておくとして、どうやら俺が冷静でなかつたのは事実なようだ。

リーグマツチのとき鈴が普通ではないと俺が気づいたように、一夏や鈴も俺が普通ではないと気づいたのだ。

もちろんやったこと自体は元々そうするつもりだったし、そうなるだろうと思つていた事柄だ。

だがやり方が多分いつもの俺ではなかつた。いつもの俺であればまず一夏もいる場でやったはずだ。

そして無茶ぶりをするのではなく、直接一夏が喧嘩をするように仕向けただろう。それこそ入学初日のオルコットの時のように。

そしてどうしてそうしてしまったのかも分かつた。俺はリーグ

マッチにおいて代表ではないにしてもリーダーをやったことよつて、自分が前に出る手つ取り早さを知ってしまったからだ。

前に出ると当然矛先が俺に向くので、これまで俺は出来る限り前に出ることをしてこなかった。だが自分から前に出れば、根回しして人の感情を誘導するなどという七面倒臭いことをしなくても簡単に望んだ事態を作ることができる。

しかしその結果がこれだ。確かに五組のことは想定通りだが、その代償として今全ての矛先が俺の方に向けてしまっている。

「智希、鈴との試合のときに言ったことだけど、俺を、俺達を頼ってくれよ。自分だけでどうにかする必要はないって一番考えてるのは他でもなく智希だろ。そりゃ確かに勝手なことするなって思うだろうし、智希が自分でやった方がいいなら俺達だつてきつと手を出したりしない。でも人に喧嘩売つてるような今のお前の状態だと、先輩との仲もこじれるだけって思わないか?」

「それで谷本さんと四十院さんかあ……。こじれるとは別にややこしいことになりそうだね」

「大丈夫だつて。あの真面目モードの谷本さんはすっげー頼りになるぞ。あと四十院さんもかなり気合入って張り切ってた。事情を分かっているってのもあるんだろうけどさ」

「ということは今頃喧嘩中かな」
「え?」

「一言言っておくけど、宮崎先輩とはもう会話済みだよ」

「はあ!?!」

「五組の代表に絡まれた時にはもう会話は終わってたんだよね」

「それは……」

「かなりあてつけたからなあ。失望してるか怒ってるか、少なくとも僕に対していい感情はもう持ってないと思うよ」

一夏が唾然とした表情のまま固まってしまった。

勝手なことをするなというのは俺を飛ばしてやるなという話である。

だいたい俺が凹まされて言われっぱなしのままにいるような人間

でないことくらい分かっているはずだ。一夏にしても、クラスメイト連中にしても。

「別に谷本さん達がダメだとは言わないけど、宮崎先輩というか三年生達にはまず勝てないだろうね。僕だって正面から相手にしたいとは思わないし。ああ、僕らが鈴と正面切って殴り合うイメージかな？」

「そ、それは……」

喧嘩慣れしているという意味で、生身の体でもおそらく俺達は鈴に勝てない。

もちろん本気でやることなどないが、何をどうすればいいか知り尽くしている鈴と喧嘩などしようとしてこなかった俺達では経験値に雲泥の差がある。

三年生達も同じだ。お互いに俺の味方であるという前提であればまた話は違っただろうが、もう三年生達は俺個人に対してそういう空気ではないだろう。

だからまともなぶつかれば経験の差でコテンパンというところだろうか。

「さてさてどうしたもんかなあ……」

「と、智希……」

「個人的にはもう放っておきたいところなんだけどなあ」

「そんな……」

もちろん放っておくつもりなど一切ないが、勝手なことをしてくれただお礼も込めて俺は意地悪な言い方をする。

これから三年生に対して一夏への支援を取り付けなければならぬ。そしてそのためにまず一夏を説得する必要がある。

つまり一夏に言うことを聞かせやすくするためだ。

何より一夏のごとは俺の問題からうまく切り離さなければならぬ。

「まあさすがに僕の問題だし、まずは谷本さん達に結果どうなったかを聞くところからかな。それよりも一夏は一夏で自分の問題もあるんだからね」

「俺？」

「そう。自分でも分かってると思うけど」

とその時、部屋の扉が激しくノックされた。

さては谷本さん達か、もしくは三年衛生科の先輩あたりか。

「もしかして谷本さんか！」

待ちわびたという感じで一夏が飛んで行く。

そして勢いよく扉を開けた。

「甲斐田君いる？ いるなら貸して欲しいんだけど」

「鷹月さん!？」

だがどちらでもなく、やって来たのは怖い顔をした鷹月さんだった。

「篠ノ之さんから聞いたわ。相当ややこしいことになってるようね」

「僕も今一夏から聞いたところだよ」

俺は定番の寮の会議室に連れて来られていた。

途中クラスメイト達の顔もあったが、怖い顔をしたままの鷹月さんを恐れてか誰も声をかけてくることはなかった。

いや、例外としていつも空気を読もうとしない夜竹さんが笑顔で手を上げて声をかけようとしたが、無言の鷹月さんに一瞬で肉薄されて腹に一撃をもらいそのまま沈んだ。そして死体は鏡さんによって引きずられていった。

「まさか谷本さんが出てくるとは思わなかったけど、言い分を聞いて理解したわ。確かに彼女ならそう思うでしょうね」

「どういうこと？」

「谷本さんらしいってことよ。そしてタイミングとしてもたまたまだけど最良だわ」

「らしい？ タイミング？」

俺などはむしろらしくないと思ってしまっただが、鷹月さんからはまた別のものが見えているのだろうか。

鷹月さんはクラス一谷本さんに対して厳しい人だが。

「谷本さんのことは言葉通りで、タイミングって言うのは物事を解決するにいいタイミングだったってことよ。どうせ甲斐田君のことだから、もう先輩達には喧嘩売ってきたんでしよう?」

「なぜそれを!?!」

「やっぱりね。誰であろうと甲斐田君が仕返しをしないわけがない。織斑先生に対してさえ虎視眈々と狙ってるくらいだし、三年生といえどI S学園の生徒相手なら朝一で突っ込むくらいはすると思っただわ。篠ノ之さんが大騒ぎして甲斐田君を探してたけど、甲斐田君にとってはそっちの方が重要だものね」

鷹月さんは織斑先生並に俺の行動を読んでいる。

そんな俺は分かりやすいのだろうか。

「でもややこしいことになってるように見えるけど、問題の解決はもうすぐそこよ。出来事の順番が綺麗にはまったおかげでね」

「だからそれはどういうこと? 僕としてはむしろさらにややこしくなったと思ってるんだけど。谷本さん達が先輩達と口論になったとかで」

「ああ、甲斐田君ならそう思うか。大丈夫よ。もうすぐ三年生の人達が甲斐田君のところに来るだろうから。それに対して甲斐田君がうんと言えればそれで終わり」

「えっ?」

それは先輩達が谷本さん達に言い負かされるということなのだろうか。

さすがにそれは薄い可能性の話だと思うが。

「あのね、先輩達もそこまで子供じゃないわよ。甲斐田君が拗ねてへそを曲げただけってことくらいさすがにもう理解してるわ。そしてちよūdいタイミングで理由まで持ってきてもらったんだから、これ幸いとばかりに飛びつくわよ。それに間違ってもいない話だし」

「拗ねてへそ曲げたって……」

「喧嘩を売ったというよりはむしろあてつけたんでしょ? まさにそのままの行動じゃない」

「それは……」

確かに、理論武装したとはいえ要素だけを抜き取ればそう言われてしまうか。

やはり俺は一夏の言った通り感情を制御できていないのだろうか。「でもそもそも宮崎先輩のやり方が間違えてたからね。あれはIS学園の生徒に対してはこれ以上ないやり方だけど、こと甲斐田君に対しては全くの逆効果だから。だから別に甲斐田が悪いってわけじゃないわよ」

「それは谷本さんが言ってたような意味で？」

「もちろんその意味もまた一つの要素としてあるけど、今私が言っていることは違うわ。そもそも甲斐田君はIS学園の生徒じゃないから、IS学園の論理は通用しないという話」

「いや、一応僕もIS学園の生徒扱いなんだけど」

いきなり何を言い出すのかと思わないでもないが、言わんとすることは何となく分かった。

確かに俺はIS学園の諸々については正直どうでもいい。

「意識がって話よ。織斑君もだけど甲斐田君は望んでここに来たわけではない。そして織斑君とは違って甲斐田君はISに対して一切興味を持っていなかった。でも三年間をここで過ごさなければならぬいわけで、甲斐田君はその三年間の目的を織斑君に見出した。まさか違うとは言わせないわよ。この一ヶ月半の甲斐田君の行動は全て織斑君のためだけなんだから」

「そうだね」

別に見出したわけではなく最初からそのためにIS学園に来たわけだが、まあわざわざ指摘することでもない。

「甲斐田君のためとか言われても甲斐田君からすればどうでもいいことだから、むしろ煩わしい。今そんな感じでしょう？」

「まさにその通りだね」

「篠ノ之さんが言ってたことだけど男性の地位向上とかもどうでもいい話でしょう？　むしろこの三年間何をして過ごすか程度で」

「よく見てるね」

「私にとって必要なことだから。だったら甲斐田君、『指揮』を楽しん

で三年間過ごしてもいいんじゃないの?」

「は!」

これこそいきなり何を言い出すのかだ。

別に俺は指揮に対しても興味などない。

「入学前に決めてたからって別に初志貫徹するようなことでもないでしょ? それよりももつと楽しいことがあるんだから、素直にそつちに注力すればいいじゃない」

「ちよつと待つて鷹月さん? いきなり何を言ってるの? どうして指揮が出てくるわけ?」

「やっぱり無意識よね。甲斐田君、あなたは指揮をしている時は他のどの時よりも楽しそうにやってたわ。作戦を考えてる時、あの模擬戦で指揮をしている時、一生懸命で楽しそうにやってたじゃない」

「鷹月さんはいったい何を言ってるの?」

こつちは必死だったというのに、楽しそうだったとか言われても困る。

一夏や指揮班の二人が俺に対して思っているほど俺に余裕は一切なかった。

だから過大評価にも程がある。

「じゃあ充実してたって言い換えるわ。あの時、人の乗ってないISとの戦いが終わった後、アリーナに寝転がった甲斐田君の顔は満足そうで、すごく充実してたわ。指揮の醍醐味を十分味わいましたって感じで、羨ましくて仕方なかったわよ」

「それは鷹月さんの勝手な感想であつて、事實は違うんだけど」

確かにやりきった感はあるが、別にそれは指揮に対してではない。博士への邪魔をやりきったという気分だったように思う。

博士の一夏へのちよつかいを邪魔することもまたこのIS学園に来た目的の一つなのだから。

だがそれはさすがに口にはできない。

「やっぱり簡単には認めないか。ねえ甲斐田君、昨日の夜宮崎先輩が甲斐田君に言ったこと、今考えてどう思う?」

「あのダメ出し? それは……まあ言い過ぎなところがかなりあつた

かなと」

「言い方について最初に来るってことは、中身についてそこまで吟味はしてないわね。甲斐田君、あれってほとんど、特に最後の人の乗っけてないISの話なんてこっちの内情を一切考慮しない暴論よ。それこそただ甲斐田君を否定して凹ませるためだけの」
「えっ?」

確かにこっちにはこっちの事情があるのだからとは思ったが。

「リーグマッチの部分についてはもっともなこともあったけど、でも先輩は一方的に言うだけでほとんどこちらの事情を確認したりしてきてないわ。そして話した内容も一般論というわけでもなく、ただこっちがやったこととは正反対の論理。後から考えればいくらでも反論はできた」

「どうして先輩はそんなことを……」

「想像だけど、私達がきちんと反省をしたかってことじゃないかと思う。自分達の中でやったことに対する整理がきちんとできていれば、それは違うって言えたはず。でも私達は先輩が言っているんだからそれが正しいことなんだと思考停止して飲み込まれてしまっていた」
やりかねない。あの先輩達ならやりかねない。

まさにそういう人達だ。

「リーグマッチについては確かにその通りだと反省させられることがたくさんあった。だからこそ私達は先輩の言っていることは正しいと思っちゃったわけなんだけど、最後の人の乗ってないISについては全然違うと思う。大筋において甲斐田君はそこまで間違った判断をしてないと私は思った。自分を囿にしたことはあの場にいた私達からすればして欲しくなかったことだけど、でもみんなに覚悟をさせるという効果があった。そして何より私達は甲斐田君からすれば織り込み済みな犠牲だけで勝利している。もっとうしろした方がよかつた的なことはあっても、責められて全否定されるようなことなんかじゃ全然ない」

「なるほど」

指揮科的には結果うまく行ったんだからそれでいいでは済まない

というのも分かる。

だがリーグマツチにしてもなんであれ優勝の結果を得られたのだから、俺としてはそれだけで十分だった。

「少なくとも今の私には相川さんと谷本さんの扱いを織斑君達が回復するまでの時間稼ぎだと割り切るのにはできないわ。私だったら普通に戦力として数えてたと思う。そして当然二人が駄目になってそこから崩れてた。でも甲斐田君は織斑君篠ノ之さんオルコツトさん凰さんの代表クラスだけを戦力として数えて、私達をプラスアルファ程度に置いていたから戦線が壊れずに済んだ。甲斐田君はきちんと戦力についても考慮してた」

「いや、それは……」

「分かってる。意識してやったことではないってことでしょ。先輩に全部なんとなくやってるって言われたけど、でもなんとなくにしてもやってはいるわけよ。意識するどころかなんとなくですらできなかった私とは全然違う」

そういうことではなく、俺も普通に戦力として入れていたという話である。

どうしてそういうことを言うのかと思ったが、そういえば、俺は医務室で相川さんと谷本さんを慰めるために後付けの論理をでっち上げていた。

だがこういうところから過大評価を受けてしまうのか。

「鷹月さん、それは」

「ごめん、別に今は反省をしようってわけじゃないから。甲斐田君は自分のやったことに対して胸を張っていいということ。自分を卑下する必要なんて全然ない」

「僕は反省とかしてないから何とも言えないけど、でもそれがなんなの？」

「もちろん甲斐田君は周囲をことなんか気にしないで自分の楽しいと思うことをやればいいって話よ。織斑君の話は織斑君の問題であって、甲斐田君が大人しくしていることはまた別の話。織斑君の問題に対する振る舞いが甲斐田君の全てを決めてしまうとかないわ」

まあ、あてつけたとはいえ俺が考えていたのもそういうことだ。
危ない場には近寄らないが、かと言って一夏に近づかないというわけでもないという話である。

「それについてはその通りだと思うけど、でもだからと言って指揮の勉強をするかと言うとまた別の話だよね。というか鷹月さんはどうして僕に指揮をさせようとするわけ？　まさか僕のためだからとか言わないよね？　さっきの言い方からして」

「もちろんよ。昨日言ったじゃない。甲斐田君に負けたくないって。でもこのままじゃ甲斐田君は舞台にすら上がってこないって気づいたのよ。だからね」

「なるほど、自分が勝負をしたいからって話だね」

「ええ、甲斐田君のためとか言われるよりはよっぽど信じられるでしょう？」

「そうかもしれないけど、それだけじゃ動かされることはないね」

「何言ってるの。指揮の道に自分から足を踏み入れたのは他ならぬ甲斐田君自身よ。織斑君のためとはいえ、甲斐田君は自分でそうすることを選んだ。そして今後も続けるつもりがあるのなら、必然的に指揮を学ばなければならないんじゃないかしら？」

鷹月さん的には俺にとつて痛いことを言っただつもりだろう。

だが俺はこれからそのへんを全部先輩達に投げるつもりでいる。

今までやってきたのものなし崩された上でのやむを得ずだし、リーグマッチで一夏を輝かせるという目的は既に達成した。

来月の個人戦も今の一夏なら余計なことをせずとも十分に優勝を狙えるだろう。

もう俺がやらなければならぬような指揮関連など特になく、今後俺がやるべきは一夏に寄ってくる女子のコントロールだ。

ここ数日鈴が一夏の番犬ぶりを発揮しているし、篠ノ之オルコットが一夏の両脇を固めていて他クラスの女子が近づけない状況になりつつある。

このままでは一夏の周囲が固定化されてしまうし、かといって連中も頭寄せ合って考えている割には全く進歩がない。

やはり新しい風が必要だ。とりあえずはハミルトンあたりからだろうか。

なんだ、やはり俺にはやることがたくさんある。

「うーん、まだ余裕あるか。仕方ない。今日のところはこれで引き下がるわ。そろそろ先輩達が甲斐田君の部屋に行ってるかもしれないし」

「僕としては無駄な努力してる暇があったら自分のことに取り組んだほうが良いと思うな」

「もちろん全部自分のためよ。何もかも自分のため。ただ甲斐田君にとってもいい話だというだけで」

「だからって無理矢理やらせるとかしないでね」

言いながら俺は立ち上がる。

だが変に俺のためなどと言ってくるよりはよっぽど気が楽だ。

極端な話俺に突っ込みをさせようとする谷本さんとなんら変わりが無いのだから。

最初は鬱陶しくとも慣れてしまえば特に気にもならなくなるだろう。

「甲斐田君、人は楽しみを知ったらまた味わいたいと思うものよ」
珍しく、鷹月さんの笑顔を見た気がした。

帰り道、廊下に大の字に寝転がった死体が転がっていた。

いや、しくしくと泣いているので生きてはいるようだ。

「夜竹さん、何やってるの?」

「あつ、甲斐田君だ。それがさあ、ナギに廊下で反省してろって部屋に入れてもらえなくて」

「ナギ……ああ、鏡さんか。一緒の部屋なんだっけ?」

「そーだよ。あたしはまだ何もやってないっていうのにさあ」

まだとか言う時点で何かをする気満々だったのは間違いないわけ
で、そういう姿勢について反省しろということではないのだろうか。

「ふーん。でもそうやって寝転がっているとここを通る人にとって邪魔

「じゃないかな」

「えっ？ でも人が通れるくらいは空けてあるよ。そっちを通ればいいじゃない」

「そういう問題でもないんだけど、じゃあ寝転がってるのは鏡さんに対する抗議活動？」

「抗議？ 別にナギの頭が冷えるのを待ってるってだけだけど」
構って欲しくて寝転がっているのかと思ったが、特に意味はないらしい。

だが鏡さんの頭が冷えてもこの姿を見たらまた火が付いてしまうのではないだろうか。

「ねえ夜竹さん、待ってるだけならここじゃなくて別の場所で時間潰せば？ 例えば趣味の写真撮ってくるとか」

「だって機材とか全部部屋の中だもん。前に取りに入った時ナギが入ってくんなくて怒ったし」

「前って、こういうことはよくあるの？」

「よくっていうか……あ、けっこうあるかも。でもこうやって寝転がってれば眠たくなってくる頃にナギが声かけてくれるからちよūdいいいんだ」

鏡さん、なぜ無駄だと分かっているながら同じことを続ける。

だがそういうえば鏡さんは無駄だと分かっているながら文句をつける人だった。

効果はともかく言わずにはいられない人なのだろう。

「それならまあほどほどに……あ、そうだ、夜竹さんに大事なと言わなきゃいけないかった」

「なにになに!! それっておもしろいこと!!」

だらけていた夜竹さんが勢いよく上半身を起こして俺を見る。

暇ではあつたようだ。

「おもしろいことっていうか、よくないことなんだけどさ、夜竹さんて一夏の写真を売りさばいでるよね？」

「えっ!!」

不意打ちに夜竹さんは全身をビクツとさせて、ずるずると後ずさる

うとする。

素直でよろしい。

「趣味ならともかくとしてもそれで商売しちゃうってどうなんだろうね？　IS学園ってそういうのは許されてるんだっけ？」

「ま、まあね……」

「そうなんだ。じゃあ今から織斑先生に確認してみるよ」

「すいません嘘つきました許してください！」

どうしてそんな一瞬でバレるような嘘をつくのか理解できないが、それも行き当たりばったりに生きていくという証か。

しかしこれでよくIS学園に合格できたな。

「そっか。でも今まではやってきたわけで、それはそれで罪だよ。え、やっぱりきちんと自首した方がいいんじゃない？」

「そんな！　もうしません！　もうしませんから！」

「って言われてもなあ。僕が何かをしなくても他の人が密告したら一緒じゃない？」

「それは大丈夫！　買った人には誰にも言わないでって言うてあるから」

「え、でも僕はその買った人から聞いたんだけど」

「そんな！」

鈴とハミルトンが言いよどんだのはそういう約束があったからか。

だが既にハミルトンがあっさり落ちていいるのだが。

「うーん……本当にもうしない？」

「しません！　絶対にしません！」

「一夏の写真を売ったりしない？」

「はい！　もう織斑君の写真を売ったりしません！」

「分かった。じゃあ執行猶予付きで織斑先生には言わないでおくよ。もしこの後一夏の写真が出回ってるのが分かっていたらアウトだけどね」

「しない！　絶対にしない！」

「やっぱりそういう写真が出回ってるとか本人が聞いたら嫌な気持ちになるだろうからさ。お願いね」

「はい！」

夜竹さんは完全に怯えている。

俺に対してなのか織斑先生に対してなのかは分からないが、優しい声で脅した効果は十分あったようだ。

だがあえて一度目は見逃す。

夜竹さんが口だけかどうかを確かめるためだ。

そして見張るのを口実に関係者から話を聞いて販売ルートも確認し、あわよくばそれを俺が乗っ取るという算段だ。

またチクらないのはあまり写真というものについて織斑先生に意識をさせたくないということもある。

「あれ？」

「何？」

「いや、何でもありません！」

「言っておくけど、バレなきやいいって考え方はしないでね。現物がある以上絶対に証拠は残るんだし、僕が見つけられないとは思わないこと」

「はい！ 肝に銘じます！」

俺は満足し、睨まれた蛙をその場に残して、自分の部屋へと足を進めた。

だが、またも俺の前には障害が立ちはだかる。

我が最大の天敵、織斑千冬だ。

完全に迂闊だった。もし俺の方が先に見つけていれば即座に逃げていただろう。

しかし廊下を曲がったところで向こうから歩いてきていたのではもはや逃げようもない。

あと少しだったのに、目的地である自分の部屋はもうすぐ目の前なのに。

「おお、甲斐田か。ちょうどよかった」

「や、休みの日にわざわざ何でしょう？」

「そんな嬉しそうな顔をするな。もっとそういう顔にさせたいと思うではないか」

「わあそれは光栄だなあ」

逃げる以前の問題だった。

それは目的地が同じならぶつかるのも当然だ。

だが甲斐田と苗字呼びしたということは今は教師モードか。確かにその笑顔も教師用の恐怖スマイルだ。

「織斑は？」

「部屋にいますけど」

「今日はお前達にいい話を持ってきた」

「休みの日にわざわざここまでやって来るとはすごく仕事熱心ですね。そんなことしなくても放送で呼び出してくればいいのに」

「むしろ休みの日だからこそだな。見回りのついででもある」

「そうですね。じゃあ別に今日じゃなくて明日でもよかったんじゃないですか？ 急ぎでないのなら」

「そのつもりだったが、お前の話を聞いたものだからな。早めに伝えておこうと思った次第だ」

「僕の話？」

何がバレた。いや、何があった。

写真に始まって五組代表との喧嘩まで、心当たりが多過ぎてどれのことか分からない。

最大限の希望を持って言えば三年生が博士と一夏の件を話しに行ったということだが。

「どうやらお前は今大きなストレスを抱えているようだな。確かに騒ぎになってからここまで息つく暇もなかったと思うが、リーグマッチも終了してようやく落ち着いてきた。だからこのタイミングで息抜きをさせてやろうという話だ」

「息抜き？」

ストレスも意味が分からないが、息抜きはもつと意味不明だ。

ただ間違いなく言えるのはそれはただの口実で、織斑先生はまた何かを企んでいる。

「気を張ってばかりでは精神はもたない、時には気を緩めてリラックスするのも非常に重要な事だ」

「はあ……それで具体的には？」

「せっかちな奴だな。もつと心にゆとりを持って。旧友に会わせてやろう」

「旧友？」

「五反田や御手洗とはあれ以来ほとんど話をしていないだろう？ いい機会であるから旧交を温めてこい」

「弾に数馬ですか？」

「もちろん他に会いたいという人間がいれば言え」

「ますます意味が分からない」

「どうしてここで中学時代の悪友達の名前が出てくる」

「あの連中はI Sとは全く何も関わりがないはずだが」

「ああ、施設の連中については諦めろ。そういう決まりだ」

「いや、それは知ってるからいいですけど、わざわざこっちまで呼びつけるんですか？」

「すると織斑先生はニヤツと、また人の悪い顔で笑った」

「そうではない。喜べ、外出許可が下りたぞ」

「そんなもの、俺も一夏も頼んでさえいないのだが」

8. 和解

「喜べ、外出許可が下りたぞ」

そんな怪し過ぎるものを誰が喜ぶか。

「それは何に対する罰でしょうか？」

「ほう、罰を受ける身に覚えがあるのか？」

「いいえ、罰ならそれは間違いなく冤罪ですが、このパターンは前にあつた気がしたので」

「臆面もなく冤罪と言い切る時点でお前も大概だが、残念ながら今回は罰ではない」

「そうですか。では嫌がらせの類でしょうか？」

「本当にお前は口が減らん。まあいい。部屋に織斑がいるのであれば一緒に説明しよう」

生徒会長なら慌てふためき、鷹月さんならため息のひとつでもついていただろうが、織斑先生は何も動じずに部屋に入れろと促した。

仕方ないので俺も自分の部屋の扉のドアノブに手をかける。鍵はかかっていなかった。

相変わらず一夏は不用心だ。血に餓えた生徒に襲われでもしたらどうする。

「智希よかったぞって千冬姉!？」

部屋の入口にすつ飛んできた一夏が急ブレーキをかけた。

だが俺としては後ろのよからぬ話よりも前の喜び顔の方が非常に気になる。

「おお織斑、休日に押しかけてすまないな。お前達に少し話がある」

「えっ……お前達って俺も？」

「もちろんだ」

「おい智希」

「僕も今ちらつと聞いたところで話はこれから」

「そうか。俺何かしたっけなあ……」

「甲斐田、織斑の方がまだ普通の反応だな」

「そういうのはどうでもいいんで話の方を聞かせてください」

「まったく。だがどうでもいい話でもないが話の本題でもないな。では入るぞ……来客中か」

部屋の中に入ると、確かに来客がいた。しかも大勢。

うちのクラスからは床に正座した四十院さん岸原さんに女の子座りの布仏さん、そして俺のベッドの上をゴロゴロ転がっていて慌てて飛び起きた谷本さん。

そして三年の先輩、宮崎先輩に衛生科の先輩だ。

「織斑先生!」

「指揮科の宮崎に衛生科の佐原か。今しがた小林と木城から話は聞いた」

「では……」

「だがここに来たのはその話ではない。別件だ」

「そうですか。では席を」

「それはいい。別にお前達に聞かれて困るような話でもない」

立ち上がるうとした先輩達を織斑先生は手で制した。

本当に大した話ではないのか、それとも俺達が嫌がらせされる様を見せて広めるつもりか。

「千冬姉、俺何かした?」

「織斑先生だ」

「日曜までかよ」

「休みの日であろうと立場が変わることはない。それで話の本題だが喜べ、外出許可が下りたぞ」

「は?」

当然、一夏も訳が分からないという顔になる。

そしてそのまま俺を見た。

「もちろん僕もそんな申請とかしてないよ」

「じゃあ何なんだ?」

「どうした? 嬉しくないのか? 五反田や御手洗と会えるぞ」

「マジ!」

だが一夏の顔は一転、喜びの表情に変化する。

素直な一夏は言葉通りに受け取ったのだろう。

「ああもちろん本当だ。あれからほとんど会えていないだろうから久しぶりに旧交を温めてくれるといい。他にも会いたいという人間がいれば聞こう。嬉しいだろうか？」

「マジで!?! そりゃ嬉しいに決まってるだろ! おい智希、あいつらに会えるぞ!」

「そうだね」

「何だよ、お前は嬉しくないのか? そりゃ智希のことが知られたのは俺よりもだいぶ後だから、あいつらと会ってなかった時間は違うけどさ」

「そういうことじゃなくて、頼んでもいないことをいきなり言われた時点で、本当のところはどうなんだろうなって思っちゃうよね」

「お前なあ……人の好意は素直に受け取ろうぜ。なあ千冬姉?」

「織斑先生だ」

「はいはい、織斑先生、人の好意は素直に受け取るべきですよね?」

「お前も甲斐田の影響で一言多くなったな。だが甲斐田の言う通りだ。なぜそんな簡単に飛びつく」

「俺?!」

まさか自分に跳ね返ってくるとは思っていなかったのだろう、一夏は自分を指差して大げさとも言えるレベルで驚いてくれた。

「もっと自分の立場に自覚を持て。何もしていないのにうまい話が転がってくるなどとは考えるな」

「騙したのかよ!」

「そうではない。外出許可は事実であり五反田や御手洗と会えるのもその通りだ。だがそれだけではないという話だ」

「ああ、他にもあるってことか」

納得したという感じで、掴みかからんばかりの勢いだった一夏がそのまま床に腰を下ろす。

これからおもしろくないことを言われるのはさすがに想像がついたのだろう。

「友人に会うついでに世間に元気な姿を見せてこいという話だ。どう

やらお前達のことを想像以上に騒ぎになりそうなのでな」

「騒ぎっ？」

「俺達はずっとここにいるのに？」

そういうことか。

本当に博士は余計なことをしてくれた。

「もう耳に入っているかもしれないが、先日の乱入事件の際の映像が世界に出回っている」

「ああ、なんか聞いたな」

「そうか。もちろん報道規制はかかっているが、それでもなかったことにはできない。そして本当に甲斐田は大丈夫なのかという問い合わせが殺到している」

「僕ですか？」

「確かに智希はやられてたけど……でも全然大丈夫だろ？」

「当然。でなきやこうしてないし。あ、もしかして広められた映像がそういう風になってた？」

言いながらそれもまたおかしいと思った。

博士的には俺が前に出てくるのは色んな意味で困るはずだ。

「ただの口実だ。出回っている映像を見たが、甲斐田の存在が恣意的に小さくされていた。それこそ甲斐田の行った指揮などなかったかのようにな」

「なんだそれ！　ありえねえよ！」

「恣意的にと言っただろう。その映像を作った人間がそういう風に見せたかったというだけの話だ」

「ああ、じゃあその映像の智希は？」

「最大限好意的に見て健気、だがまあ情けない姿と言っただろうな」

「あ、やっぱりそうなんですな」

黛先輩は俺に対してオブラートに包んだか。

しかしそれは俺にとって都合な話である。

「それでも外から難癖を付ける理由としては十分だ。ISを動かすことしかできない人間に何をやらせているのかと、拳句の果てあんな目

に遭わせてIS学園は保護をしているのではなかったのかと、そういう批判が出始めている」

「おいそういう言い方はねえだろ」

「甲斐田、気にするか？」

「一ミリも」

「そういうことだ。宮崎、理解したか？」

「はい」

「既に理解していたか。余計だったな」

「いいえ、わざわざありがとうございます」

正座したままの宮崎先輩が深々と頭を下げる。

そういえばこの人も織斑千冬信者だった気がする。

「そういうわけであるから、これくらい普通だという顔を見せてガス抜きをしてこい。実際あれくらいは普通にあることでもあるし、それはもうお前達も分かっているだろう？ 五反田や御手洗に会うついででいい」

「なるほど、そういうことですか」

「つてことは主役は智希か。じゃあ俺は横で適当にしていればいいな」

「そんなわけないでしょ。僕のこととはただの口実なんだから」

言葉通りに受け取って他人事にしようとした一夏に釘を刺す。

基本的にIS委員会などの学者連中以外に俺に興味を持つ人間はいない。難癖をつけてきた輩の狙いはもちろん一夏だ。世界最強たるブリュンヒルデの弟にして映像内で大活躍をした。

「じゃあ何のためにやるんだよ？」

「だから一夏と僕を外に引つ張り出すための口実でしかないんだから、そりゃ出て行ったら一夏も囲まれて質問責めにされるよって話」
「マジかよ」

「今後普通にある話だ。今から少しずつ慣れておけ。一生をIS学園内で過ごすわけにはいかないのだからな」

「えー……」

IS学園に来るまでのことでも思い出したのか、一夏は心底嫌そうな顔をした。

ならば俺もつついてみることにする。

「織斑先生、拒否権はありますか？」

「嫌だからなどといったくだらない理由は認めない」

「一夏の身が危険だからと言うのはくだらなくないと思います」

「俺？」

予想された質問だったのだろう、織斑先生は平然と笑った。

「お前達の警備体制については十分考慮してある」

「でもそれは机上の話ですよ」

「今回が最初のことだからな。だが既に三ヶ月後国外へ出ることが決まっている以上、そこを最初とするわけにはいかない。少なくともそれまでに何度か国内において実際のやり方を固めておく必要がある」

「ちようどいい機会だというわけですか」

「そうだ。規模的にもな。だからその部分はお前達が心配するようなことではない」

「いいえ、大いに心配になります。だって一夏は今現在進行形で狙われているんですから。それもあの篠ノ之博士に」

「当然そこまで考慮に入れての話だ」

やはり織り込み済みか。

だが俺としてはそこで終わらせるわけにはいかない。

「でも相手はこの難攻不落のI S学園に突っ込んでくるような人ですよ？」

「既に話をつけてある」

「は？」

「本人とは交渉済みという話だ。であるからその方面については心配しなくともよい」

確かにそれができるなら一番早いが、本当にあの博士が応じたのだろうか。そんな簡単に。

「というかこの二人は連絡手段を持っていたのか。博士からはともかく、織斑先生からの。」

「それは信用できるんですか？」

「もちろん嘘であることも考慮に入れてある。だがどちらであろうと

問題はない」

「言い切りますね」

「今回は私が出る」

「なんだ、千冬姉がいるなら大丈夫だな」

そうか、よくよく考えたらそもそも今の博士にはちよっかいをかけられるような手持ちがなかった。

四体目の子分機が間に合わなかったと言っていたくらいだ。今の博士はちよっかいをかけようにもかけられない状態だ。

そして織斑千冬という強大な壁まであつては、ここで無理して何かをする必要など全くない。

「それに奴のことだけを考えていればいいわけではない。お前達の存在自体が気に入らない輩もいるのだからな」

「そうなのか？」

「ネットとか見ればいくらでもいるね。目には見えないけど」

と言つても一夏自体はあの織斑千冬の弟ということで、憎むに憎めない微妙な感じであつたりはするのであるのだが。

またそこが狙い目だと俺は考えている。

「結局危険を言い出せばきりが無い。そしてこの一ヶ月半で三年間引きこもる選択肢はなくなった。ならば万難を排して前に進むしかなかろう」

「カナダ旅行は織斑先生が、って何でも無いです」

「甲斐田、全部お前が選んだ道だ。入学初日にな」

「それは……」

「改めて言っておくがお前も希少な男性IS操縦者なのだからな。全部織斑に押し付けられると思うな」

「おい智希、俺に押し付けるってどういうことだよ」

「織斑を押し出してその背中に隠れようとするなという話だ」

「え、むしろ前に出てるのは智希だろ？」

「本当にお前は……。何度も言うが常に意味を考えて行動しろ」

「はあ？」

まあ、気持ちちは分かる。

三年間 I S 学園の中にひきこもらせようと織斑先生が考えたのもむべなるかな。

「さて甲斐田、お前のことだ。私が出ようと問題はあある、などと難癖をつけるのであろう。安心しろ、きちんと計画書を見せてやる」

「いや、誰もそんなことは」

「せめてお前くらいは把握しておけという話だ。今週の放課後を使って計画について叩き込んでやる」

「だから別に計画に文句とか」

「もちろん意見があれば聞く。むしろ出せ。何しろ自分のことなのだからな」

「はい……」

元々織斑千冬第二秘書として拉致されている時間帯ではある。

だが俺はいつになれば自由を得られるのだろうか。

まだまだ発覚していない罪は山とあるのだが。

「そうだ、それでその外出っていつの話なんだ？」

「教師に対しては敬語を使い。来週の日曜だ」

「はいはい了解ですつと。智希、何にしてもあいつらに会えるんだ。

それは喜ぼうぜ」

「そうだね」

織斑先生の意などまるで介さず、面倒事は全部俺に押し付けられると一夏は朗らかに笑った。

そして一夏の面倒を全部俺に押し付けた織斑先生は、頭が痛いとかりに額に手を当てた。

「ごめんなさい。私達は甲斐田君に対して無神経だった。本当にひどいことをした」

鷹月さんの言った通り、宮崎先輩と衛生科の佐原先輩は俺に対して頭を下げた。

「甲斐田君、これは綾が一人でやったことじゃなくて、三年生みんな考えてやったことなの。甲斐田君を本気にさせるにはどうすればい

いだらうかって考えて、ああいうことを綾にやらせた」

「でもそれは甲斐田君を傷つけることでしかなかった。私達は甲斐田君の対する認識を間違えていた」

「それを甲斐田君のクラスの人達に教えられて気づいたの。甲斐田君を一般の生徒達と一緒に考えてはいけないって」

鷹月さんの言ったことそのままだ。

三年生のところに押しかけたクラスメイト達の顔まで立てている。

しかし真剣な表情で俺を見ている四十院さんはいいとして、わたしががんばりました的な得意げな顔をしている谷本さんは何なのか。本当に真面目モードだったのだろうか。

「私の言ったことは、IS学園の生徒ならプライドを刺激させられて発奮したと思う。でも甲斐田君はそうじゃなかったんだよね。ここに無理矢理連れて来られたんだし、私の言ったことなんて何言ってるんだって感じだったよね。本当にごめんなさい」

「もちろんあれで終わりじゃなくて、きちんとフォローというか説明はしようと思ってたんだけど、甲斐田君が来て、クラスの人達が来て、ああ私達は間違っていたんだって気づいたの。だからこうやって謝りにきました」

本気で全面降伏してきた。

鷹月さんに指摘された通り、俺のやったことはある意味あてつけだ。

だから先輩達からすれば俺の株は大いに下がっただろうし、もうこのいつのことは知らんで全然おかしくない。そして俺も一夏だけ残して自分を切り離すつもりだった。

だが先輩達は謝ってきた。自分達の言い分など全て捨てて。

「こちらこそ大人げなかったです。すみません」

「甲斐田君！」

そうするともう俺には選択肢などない。

ここでごねるとただ俺がすねているだけになってしまう。

調子に乗ってごねて一夏のことを要求するのは論外だ。俺の問題から切り離そうとしているのにわざわざくつつけてどうする。

「ごめんねごめんねごめんね……」

「よかったね綾。ありがとう甲斐田君」

堰を切ったように宮崎先輩が泣き出した。

そこまで責任を感じていたのだろうか。先輩達は一步大人の対応を取って俺に対する感情を飲み込んだと思うのだが、実行者たる宮崎先輩はまた違った感情を持つていたのか。

少なくとも目の前で泣きじやくる宮崎先輩は、普段の頼りになる凛々しい姿からは程遠く、どこにでもいる普通の女子だった。

「あーよかった。智希のことだからとんでもないこと言い出すんじゃないかってビクビクしてたぜ」

「なにそれ」

「そのまんまだよ。許して欲しければ、なんて言い出すんじゃないかって。まあそんな時は俺が一発入れてたけどな」

「そんなことしないよ」

もしかしてわざわざギャラリーを置いたのも先輩達の見聞なのだろうか。

ただ謝るだけなら別にクラスメイト連中などいらなのだが、いれどももちろん俺はその目を意識せざるをえない。

俺が感情的にならないように、また余計なことを言い出さないように、こういう場を作ったのだろうか。

クラスメイト連中を見れば岸原さんは当然大泣き、涙腺の緩い谷本さんももらい泣き、布仏さんは笑顔だがなんとなくいつもより嬉しそうな顔に見えた。

ところが四十院さんだけは違った。厳しい顔で宮崎先輩を見ている。指揮班的にはこの場に対して思うところがあるようだ。

俺の視線に気づいて、四十院さんが慌てて笑顔を作る。さすがに場を乱すような真似はしないか。

「え、ええと、甲斐田さん、よかったですね。篠ノ之博士については織斑先生が対応してくれるようですので、当面は問題なさそうです」

「束さんはなんだかんだで千冬姉には弱いからな。まあ懲りてないだろうけど、千冬姉がどうにかしてくれるなら大丈夫だな」

しまった、俺の掲げていた大義名分が持って行かれてしまった。
る。

博士の脅威をもって煽ろうとしていたのに、俺の手中から奪われてしまった。

やられた、博士があつさり織斑先生と話をつけたのは俺に対する牽制の意味合いもある。

「あ、甲斐田君、朝の話だけど、私達はとりあえず織斑先生に預けたわ。もちろん呼ばれば協力します。ただ申し訳ないんだけど七月以降は厳しいの。夏休みに三年は集団模擬戦があつて、卒業後の進路にも関わってくるからどうしてもそつちに力を注ぎたいの。織斑先生に預けたのはそういう意味もあつて」

「そうですか。もちろん無理を言える立場でもないですし、了解です」
「ごめんね」

泣き続ける宮崎先輩の肩を抱いて、衛生科の佐原先輩が俺に追撃をかけてきた。

もちろん佐原先輩にそんなつもりなど一切ないだろうが、俺からすれば大打撃だ。

やろうとしたことが意識無意識にことごとく阻まれてしまった。

「どうした智希？ まだ何かあるのか？」

「え？ いや、人生うまくいかないものだなと思つて」

「そんなのここにいる時点で今さらだな。でもさ」

「何？」

「そんな中でも楽しくやれば、それはそれでいいんじゃないか？」

「気楽だね」

俺からすれば、目的もなく生きていく意味などない。

「ぎーんねーんでーしたー！」

予想するまでもなく、博士は勝ち誇つてきた。

「いやーいい線行つてたとは思ふよ？ もう今までの束さんじゃないんだ！ つていい煽りだと思う。ゴーレムのこともうまくごまかし

たつもりだったのに、よく気づいたよ」

「それはどうも。別に負け惜しみとか言うつもりないです」

「えー、それじゃおもしろくないよー。せっかく東さん大勝利なんだから、もっと悔しがってよー」

「じゃあ千冬さんと連絡取るとかしないだろうと思ひ込んでいたのが敗因です」

「うん、正直するつもりなかったけど、そうすれば智希君の企みを全部潰せると気づいたらもう迷わなかったね」

そうだ、俺の中では博士は出てこないはずだったのだ。

限りなく黒に近いグレーであろうと、わざわざはつきり黒にしてしまふことはない。

姿を見せてはある種の安心を与えてしまふ。それなら疑心暗鬼の方がいい。

「それで、来週何かするんですか？」

「もちろんしないよ。しないって言ったんだから」

「できないではなく？」

「それはまあ……できなくはないけど、でも大したことはできないか。何よりちーちゃんいるし」

わざわざ何かをするほどではないということか。

むしろ警備体制を確認したほうが有益だろう。

「じゃあ次は来月か」

「あ、そっちもなし。東さんはほいほい出てくるような安い女ではないのだよ」

「へー、そうですか」

「ほんとだって。ちーちゃんと約束したし。別に嘘ついて騙し打ちとかしないよ」

「やけに聞き分けがいいんですね」

「世の中はギブアンドテイクで成り立っているのだ」

「脅しはギブアンドテイクとは言わないんですが、何を要求したんですか？」

「いっくんと篝ちゃんに会わせてって」

今度は本人自ら突っ込んで来る気か。

実に安い女だ。

「あ、今失礼なこと思ったね。愛する家族に会いたいというただただ純真な気持ちなのに」

「わーなんてすばらしいんだー。で、それで何する気です?」

「ほんとにもう。いっくんの白式を改良してあげるよっていうのと、箒ちゃんに誕生日プレゼントをあげようと思って。ねえ、何あげたら喜ぶかな?」

「そういうのはクロエに聞いた方がいいと思いますよ」

「当然女の子の意見として聞いているけど、それはそれとして智希君は箒ちゃんの隣の席じゃない。箒ちゃんの最近の好みとか聞いてない?」

「ISでもあげたら喜ぶんじゃないですか」

「適当だなあ。まあ考えたけどさ」

考えたのか。

だがISはもう生産不能だ。博士しかコアを作れないのに作れなくなってしまうのだから。

「まさかそのへんから盗んでくる気ですか?」

「それも考えたんだけどね、今ってコアが完全に管理されてるからなあ。いきなり新しいISが出てきたらもう一発でバレちゃう」

「博士が出てきたものなら新しいISで済むんじゃないですか?」

「束さんのこと知ってる奴は知ってるから無理だね。それに実物突き合わせたらどのみち分かっちゃうよ。あといろいろ面倒なことも起こってるし、だからISはなし」

篠ノ之さんは姉ルートで専用機を手に入れることはできないのか。

まあ篠ノ之束の妹だから、いくらでも専用機手土産に企業は寄って来るのだろうか。

「ま、別に急ぐ話でもないから聞いといて」

「そういえば篠ノ之さんの誕生日っていつですか?」

「七月七日、七夕の日!」

「けっこう先ですね。ちなみに一夏は知ってます?」

「人の名前も覚えられないいっくんが覚えてると思う?」
「ですね」

「というわけでいっくんの方もよろしく!」

誕生日ネタか。

あまり意識していなかったが定番だ。ならば俺もクラスメイト連中の誕生日くらいは把握しておくか。一夏の記憶力に期待するくらいなら俺が教えてやった方が断然いい。

誕生日をきっかけとしてその人について一夏に考えさせれば、もしかしたら何か生まれてくるかもしれない。

「じゃ、東さんはこんなところで。あとくーちゃんよろしく!」

「はい! お兄様! 是非とも言わせていただきたいことがあります!」

「な、何?」

すごい剣幕でクロエが入って来た。

昼は綺麗に収まったはずなのだが。

「お兄様、どうしてあそこで宮崎様を抱きしめてあげないのですか!

あれはどう考えても優しく抱きしめてお兄様の胸の中で泣かせてあげるところでしょう!」

「いや、それはどうだろう」

「いいですか、チャンスはどこにでも転がっているわけではないのです。そして突然やって来るものなのです。ですから、常に意識をして、やって来た時逃さず掴むことが何より大事なんです!」

だがチャンスに何も考えず飛びついてその場で幸運の女神に殴り返された事例を見ているので、俺としては正直賛同しづらい。

というか別に昼のはチャンスでもない。和解が成立したところなのだからむしろ余計なことはいらない方がいいだろう。

「それから、お兄様は周りの方々に対して感謝の言葉がないです。気持ちだけじゃダメなんです。言葉が必要なんです」

「あれ、そんなに言っていない?」

「はい、きつとお兄様は言っているつもりなのでしょうけれど、軽いです。当たり前のように軽く言われては、感謝の気持ちは伝わりませ

ん。例えば今日、全員に向かってまとめてではなく、きちんとそれだけに言っておいてあげてください。そして具体的な言葉をかけてあげてください。そこまですべて初めてお兄様の気持ちは伝わるのです」「なるほど」

これは前にちらつと思つた気がする。

そうだ、整備班に対して感謝に加えて褒め言葉を追加したら意外にテンションが上ってくれたのだった。

まあ一言付け加える程度で効果があるのなら、別に厭うような手間でもない。

「男性はツーカーな関係を好むようですが、女は違うのです。分かっているにしても、言葉にして欲しいのです。お前を愛してると言っていて欲しいんです」

「そういうもんか」

「そういうものなんです」

確かに篠ノ之さんやオルコットは一夏に対してそういう言葉を求めている。

わざわざ俺に確認しに来るのがいい例だ。

一夏はここぞで外すことはないが、またそれによって心を掴んできたのだが、それにしても普段があまりにも適当過ぎる。

これは今後の課題として一夏に働きかけていこう。

「ありがとうクローエ、とても参考になったよ」

「とんでもないです！ ですがお兄様、頭の中で思っているだけではダメですよ。きちんと声に出して実践してこそ意味があるんです」

「それは当然の話だね。頭の中にあるって他人からはないも同然だし」

「その通りです。がんばってくださいー！」

満面の笑顔なクローエを見て、本当に表情豊かになったなと今さらながら思った。

「まったくふざけた話だね。あたしが行かなくてどうするのよ」

目の前で鈴が拗ねている。

「一夏が行って、智希が行って、あたしは行くな？ 何それ？」

独り言のようで、だが聞かせる対象は間違いなく俺だ。

「千冬さんだってあたし達の関係は知ってるのに、どうしてあたしをハブろうとするのよ。何それ意味分かんない」

来週の外出から、鈴は外されてしまったという話である。

「ちよつと智希、何か言いなさいよ」

「残念だったね」

「そういうことじゃないでしょ！ そこは僕が何とかしてやるから待ってる、でしょうが！」

「無茶振りにも程がある」

まあ逃げた一夏の後を追わなかったのはそういうことなのだろう。

こういう時に限って勘のいい一夏は、速攻で飯をかきこんで逃げた。

篠ノ之さん達も早々に食事を切り上げて一夏を追っていった。

後に残されるは俺と、巻き添えを食らった挙句逃げ遅れたハミルトン。

鈴の周囲には不機嫌の波動が渦巻いているので、飲み込まれるのを恐れて誰も近づいてこない。

結果、食堂の一角には奇妙な空間ができ上がっていた。

「り、鈴。そのくらいで……」

「智希なら卑怯な裏技でも使ってごまかすくらいできるでしょ。千冬さんも智希のことは頭痛いって言ってたし、たまには千冬さんを出し抜いてみせなさいよ」

「もう何を無茶苦茶と言っていいか分からなくなるくらいだけど、条件を出されたのならまずそれをクリアしようってところだよ。裏技とか言っていないで正攻法でいけばいいじゃないか」

「はあ？ あたしが加わった場合の計画書を作って出せとか無理に決まってるじゃない」

「じゃあ諦めるしかないね」

「だから、それを裏技的抜け道か何かでどうにかできないのって言うっ

てるの！」

自分ではできないと分かっているのになぜ俺ならできると考えるのか。

鈴も俺もただの学生であり、専門家などでは一切ない。

そもそも裏技などというのはその道に精通しているからこそ見つけられるものだろう。

「そうだ、こういうのはどう？　まず智希が今の計画書を盗んでくる」

「いきなり物騒だ」

「そしてそれをコピーって、あたしの名前を書き加える」

「書き入れただけじゃ計画とは言わないと思う」

「そこはあんたが口先一つでごまかしなさいよ。あたしがいようがいまいが計画に変わりはない！　的な感じ？」

「まます計画とは言えない」

「だって実際そうでしょ。あたしには専用機があるんだから、自分の身くらい自分で守れるわよ」

「そういう問題じゃないって織斑先生は言わなかった？　僕らは守られる立場なわけで、織斑先生がいるし今回は一夏も専用機を使わない前提なんだから。だいたい街中でISを展開するにしても決まりあるの知ってる？」

「そ、それは……じゃあ教えなさいよ」

「ということは鈴は一夏と同じでISの持ち出し許可についても知らないね。というか鈴のは新型機だし、管理官の人からIS学園の外には持ち出すなって言われてるんじゃないの？」

「あ……」

「そういうのも含めて計画は立てられてるんだから、とても素人が手を出せるものじゃないということ」

実際計画書を見せられてどうだと言われても、はあそうですかとか返しようがなかった。

持ち出し許可についてはぱらぱらとめくったらその単語があったので、その場で質問して知った程度だ。

当然一夏も何も知らないので、今回一夏は専用機を持ち出すことす

らできないという話である。

「じゃあどうすればいいのよ？」

「今回は諦めるしかないんじゃない」

「あのさ、それってつまりあたしはあいつらに会っちゃいけないってこと？」

「誰もそんなことは言ってないよ。来週僕らと一緒に行くのは無理だってだけ」

「それだ！」

「は？」

「そうよ、別に一緒に出かけなくてもいいじゃない！」

「まさか……」

「現地合流よ！」

盲点を突いたすばらしいアイデア、なのだろう。鈴の中では。

散々身を持って学んだからこそ言えることだが、そういうのは織斑先生に対して一番やってはいけない行為である。

「うーん……」

「そうと決まればこうしちゃいられない。急いで外出許可を取ってこなきゃ。じゃあティナ！ あとはがんばれ！」

「鈴!？」

こうと決めた鈴は一夏に負けず劣らず早い。

トレイを抱えてあつという間に爆走して行った。

「か、甲斐田君、えっと、それで大丈夫なの？」

「無理。それどころか最悪の選択だね」

「甲斐田君の顔見てあたしもそんな気がした……」

俺が基本そうなのでよく分かるのだが、織斑先生は姑息な手段を嫌う。

むしろ正面からぶつかってくる方があの好みである。

だから普段の鈴は好評価な部類に入っているはずなのだが、あれはいけない。

おそらくこれでまた俺への評価が下がるのだろう。鈴を焚き付けたと。

まあ、今後も下がる要素が多過ぎるし今さら上がるとも思えないのでどうでもいいが。

「鈴を止めに行くならお早めに」

「え、えっと、最悪というのは……」

「そうか、理由がなきや止められないか。理由は単純で、織斑先生はそういう姑息な行為が大嫌いだという話。すぐ判明して問答無用でアウトだろうね」

「そうなんだ」

「せっかく条件なんて出してくれたんだから、鈴もきちんと考えればよかつたのにね」

「えっ？ 甲斐田君、でも計画立てるなんて無理だつて」

「織斑先生もできるわけないって分かって言ってるんだし、その無理難題に対して鈴はどう対処するかなんだよ。考えて何かしらの答えを出せば、きっと相応の評価をしてくれると思うよ」

「何かしらって、甲斐田君の中には答えがあるの？」

「単純なものでは全力土下座からの徹底した泣き落としなど、いくつか思いつく手段はある。」

ああ、山田先生経由でもいいな。あの二人、おそらくここぞでは立場がひっくり返る。

「もちろん百点とか無理だし、ゼロじゃない採点をしてもらってそれによる温情狙いかな。僕の場合基本マイナススタートだから、こういうのはいろんな意味で厳しい。でも鈴ならもうちよつとハードルは低いと思う」

「やっぱりあるんだ」

「あ、言っておくけど織斑先生は鈴が考えて出した答えが欲しいのであって僕の答えじゃない。僕が相手ならもつと無理難題にするだろうし、僕の答えは鈴のものじゃないってすぐバレる。だから僕は鈴に對して何も言うつもりはないから」

「うん、そうだね」

やはりドライなハミルトンはあっさり頷くが、一夏なら薄情者だと言おうだろう。

俺だつて自分が鈴の立場なら四の五の言わずに出せと要求する。

鈴に言わないのは、それによつて計画が変わつてしまつては覚え直しになるから嫌だ、というだけの話である。

「別に二度と会えないつてわけじゃないし、おそらく来月以降なら普通に三人揃つて行ける。鈴も再来週とかに一人で行く分には何も言われないだろうし、この機会じゃないといけない理由なんて何も無い。よつて僕は協力しません」

「うん、それでいいと思う」

残念だつたな鈴、ハミルトンを使つて俺から更に引き出そうとしたのだろうが、そうはいかない。

がんばれなどと口にしたのがお前の敗因だ。ハミルトンがそのまま取り残された風を装えばよかつたのに、そんな言葉を口にしては、ここにハミルトンが残る意味が生じてしまう。

その上鈴はハミルトンを理解していない。

ハミルトンはただ性格がいいだけであつて、特別鈴に義理もないのだ。

性格がいい故に、論理が通らなければ無理強いなどできない。

加えて意外とドライだ。

「そうだハミルトンさん、昨日はありがとう」

「えっ!？」

「僕が五組の人達に絡まれてるつて一夏を呼びに行つてくれたんでしょ。わざわざありがとう」

「と、とんでもないです……」

「その後のことは全く気にする必要ないから。僕のことじゃなくて五組とは間違いなくぶつかる話で、遅いか早いかだけの違いでしかない」

「うん、集団で囲むとかあり得ないし、甲斐田君が本気で怒るくらいだから相当なことだよ。あたしもあの人達の態度見て本気でひどいと思つた」

「あ、それは僕の方も冷静じゃなかつたみたいで」

そうか、そういう風に見えてしまつたか。

ハミルトンまでがそう感じてしまうということは、クラスメイト連中ではもつとだろう。

今日一日俺に対して何かを言ってくることはなかったが、この分では一組と五組は完全に対立関係になってしまったと言えそうだ。

一応一夏が喧嘩を買った形だが、個人戦である以上誰もが当事者になる。

一組と五組の人間が対戦する際はまたややこしいことになりそう
だ。

「そんなの当然だよ。モルモットなんてひどいこと言われたんだから。あたしあの人達のこと絶対に許せない」

「いや、そこまで力入れることでもないよ」

どういふことだろう。ハミルトンはキレかけた鈴を必死で抑えていたと聞いたが、これでは立場が逆だ。鈴は俺の前ではそこまで怒りを露わにしていなかった。

まあ鈴は自分のことの方が大事だし、そのあたりはもう個人戦の場でケリをつければいいと割り切ったのだろうが。

「甲斐田君、全然我慢することとかないよ。なんならあたしに思いきり」

「いやいや、カリカリしても仕方ないってこと。個人戦でケリをつけようってことで収まったんだし、怒り続けても疲れるだけだから」

「甲斐田君がそれでいいのなら……」

母国カナダに言われて俺の点数を稼ぎたいのだろうが、そこまですんばらなくていいと正直思う。

別に俺はハミルトンに恥をかかせようなどとは思っていないし、カナダに対して特に含むものもない。

クラスメイト連中と一緒にでIS学園生徒特有の生真面目さを発揮しているのだろうが、もう少し力を抜いた方がいいと感じてしまうのは余計なお世話だろうか。

「じゃあそろそろ行くか。大分長居しちゃったし」

「あ……うん。そうだ、また鈴の様子は報告するね」

「別にそこまでしなくていいよ」

「あつ、迷惑だった？」

「迷惑とかそういう話じゃ全然ないけど、じゃあ鈴の様子が変だと思ったら教えて。また爆発とかされると困るし」

「うん、分かった。でもあたしこの前の時全然気がつかなかつたし、甲斐田君なら分かると思うからちよくちよく報告行くね」

「まあそのへんはハミルトンさんの判断次第で」

しかしそれにしても、昨日の屋上のことなど全くなかつたかのような態度だ。

冷静になつて人のことなど言える立場ではないと気づいて、四十院さんのように黒歴史として封印してしまったのだろうか。

ちようどいい場だから謝ろうと思つていたのだが、ハミルトンが微塵もそういう空気を出さなかつたので何となく言いそびれてしまつた。

先方は俺に対してマイナスの感情もなさそうだし、下手に蒸し返して藪をつつくような真似はしない方がいいかもしれない。

「つと、なんだ？」

立ち上がつて気づいたが、少し離れた席にテーブルを拳で執拗に叩き続ける生徒達がいる。

見覚えもないので上級生だろうか。

すぐ俺に気づいて、叩くのをやめあからさまに俺から顔を背ける。

明らかに俺を意識した行動だ。もしかして五組的な、俺に対する反感によるものだろうか。

二年生は俺に対する評価が分かれていると新聞部の黛先輩は言つていた。

そして上級生は三組や五組と違って、俺が暗躍してきたことを知っている。

つまり誤解抜きで俺に反感を持っている人がいるわけだ。

ならば今のは俺に対する何らかの警告だろうか。

「ハミル、あれ？」

しかしハミルトンは既に俺の側にはいなかった。

見渡せばちようどトレイを返すところだった。そのそばかす顔は

上機嫌そうだ。

あの連中については気づいていないか。俺の身を心配してみせる割には中途半端だな。

もちろん俺も自分のことだから、他人に全部委ねて安穩とするなどないけれど。

9. 旧友との再会

「お、本物かな？」

と、久しぶりで第一声は相変わらず失礼だった。

ノックもせず扉を開けて覗き込むとは礼儀も何もあつたものではない。

「何だよ本物って。偽物でもいんのかよ」

「むしろ偽物とかいてくれたら色々押し付けられていいね」

「おい弾、これは本物そうだぞ」

「だな。相変わらずの単細胞にひねくれ者、間違いない」

確認し合ってから、中学時代の悪友二人は部屋に入ってくる。

だが本人確認から入るとは、まさか本当に偽物でも出たのだろうか。

「なんだてめえら、久しぶりに会ってやるのが喧嘩売ることかよ」

「あーよかった。やっぱり一夏だ」

「ほっとしたわ」

「どうしたの二人とも？ まさか本当に偽物にでも会った？」

もしそうならぜひとも会いたい。

「悪い悪い。そういうことじゃないんだ。こっちとしちやかなり不安でな」

「不安？」

「もう二人とも完全に染まってるんじゃないかって怖かったんだよ」

「怖かったって、俺らを何だと思ってるんだよ」

「だってさあ、あのIS学園だろ？ 男なんて下等な存在だ！ とかお前らが言い出すんじゃないかって」

「なんだそりゃ？ 下等も何も俺らはそもそも男だぞ？」

ようやく意味が分かった。

このバカ二人は俺と一夏が洗脳されているのではないかと疑っていたようだ。

確かに入学前、IS学園では特定の思想を押し付けてくるのではないかという危惧はあったが。

「二人とも相変わらず頭おかしい行動しかしないね。それを言うなら変わった変わらないの話であって、本物偽物は間違ってるんだけど」「この言い回し、こっちも大丈夫そうだな」

「まあそうなんだけどさ、ぶっちゃけお前らが変わってたら速攻で偽物扱いして帰るつもりだった」

「なんだそれ？」

あえておかしな発言をして俺と一夏の反応を見たとしても言いたそうだ。

だが俺からすれば相変わらずなピントの外れた発言でしかなかったが。

「だってお前らが会いたがってるから来いとかいう呼び出しだぞ？」

命令口調っていうか有無を言わせない感じだったし、その場所が高級ホテルとか怪しいにも程があるわ」

「あー……」

「智希はともかく一夏なら絶対直接連絡してくるはずだと思ってたから、まあ正直この目で見るとまでは信じられなかった」

それで俺は理解した。

一夏をもちろん俺もこの面会の段取りについては全く関わっていない。

全部任せて決まったことに頷いただけだ。

織斑先生があえてはつきり、それでいいのか、と俺に言ったのはこういう事態が起こりうることに對してだったのか。

専門家が考えたことだから問題ないだろうと俺は口々に考えもしなかった。

「何やってんだ千冬姉は。知らない仲じゃないんだからさ」

「電話してきたのは千冬さんじゃなかったぞ。ていうか千冬さんならまあああいう人だからで済むし、本当の話だって分かる」

「ということは知らない人からいきなり電話かかってきた？」

「ああ。千冬さんの部下かなんかだろうけどIS学園の人だって言っ

てたな」

もちろん普通の話であれば、こんな失礼なことなどしないだろう。これはつまり、考えようとさえしなかった俺に対する当てつけだ。

千冬さんは目の前のバカ二人、弾と数馬については十分に把握している。弾のことは小学生時代から知っているし、中学に入って合流した数馬と合わせて一夏を悪の道に引き込むロクでもない輩と認識しているようだった。ちなみにこの二人は中学の時、こともあろうに千冬さんの着替えを覗こうとしてボコボコにされた経験さえある。

少なくとも、この二人は千冬さんが気を遣ったり遠慮を入れるような対象では全くない。

そしてまさにダシにするにはちょうどいい相手だ。

「ごめん二人とも。今分かったけど完全にとぼっちりだ」

「智希？」

「またやられた。つまり僕が見過ごしたから二人が不安になるような事態になったという話で」

「またつて……智希お前とうとう千冬さんに戦争吹っつけたのか!？」

「バカ！ それだけはやるなって散々言っただろ！ 一夏！ なんてお前止めなかつたんだよ!」

「俺!？」

なぜか一夏に飛び火した。

というか俺は散々言われていただろうか。ボコボコにされて以降二人は千冬さんに関わりたがらなくなったと認識はしていたが。

「いつも俺らが体張って止めてただろ！ 見てただろ!」

「そんなことしてたのか？」

「そうだった。こいつは一夏だった。もしかして分かってないんじゃないかと薄々思ってたけどやっぱり分かってなかったか」

「千冬さんの前では二人ともやたら挙動不審になるなあとは思ってたけど」

「そうだな智希。お前もそういう奴だよな」

本当に相も変わらず失礼極まりない男共だ。

クラスメイト連中と比べてどちらが上だろうか。

今度機会があれば失礼度ランキングでも作ってみよう。

「一夏、一応聞いておくけど、今智希と千冬さんの関係ってどうなってる?。」

「智希と千冬姉か? そうだな……智希はもう完全に目をつけられてるって言うか、お互いに隙あらばって感じだな」

「そうか。まあがんばれ。もう俺達は何もできないけどな」

「とぼっちは……もう受けまくってそうだな」

「あ、そういうことか!」

一夏が今初めて知ったかのように手を叩く。

それを見た弾と数馬は最初呆れた表情を見せ、やがて憐れむような顔に変化していった。

「そうだ、最近お前らの映像が出回ってるのって知ってるか?」

お互いの近況について話していると、唐突に弾が口に出した。

もちろん例のウサ耳女製作の映像のことだろう。

「ああ、リーグマツチのやつだろ。ぶっちゃけそのせいでこうやって外出する羽目になったんだけどな」

「そうなのか?」

「まあそれでお前らに会えたんだからよかつたっちゃよかつたんだけど」

何もしていない一夏にとってはきつとそうだろう。

だがそのせいで俺は先週の放課後を全て失っているのだが。

とぼっちりを受けているのはむしろ俺の方ではないだろうか。

「中身は見たか?」

「一応見させられたぞ。というかそもそもその場にいたんだけどな」

「あれって本当にあったことなのか?」

「弾、どういうことだ?」

「だつてさ」

弾は言葉を切つてなぜか俺を見る。

「あれおかしくないか?」

「どういうこと?」

「だって智希って味方のために自分を犠牲にするような健気な奴じゃないだろ?」

一瞬間があり、一夏が吹き出した。

「だよな! そう思うよな!」

「やっぱり嘘だったのか?」

「そんなわけないでしょ。編集されてるって話だよ」

昨日の土曜日は外出前日ということもあって、さすがに一夏も呼ばれた。

そこで明日話題に出されるからと世界に出回っているという映像を見させられたのだが、あまりの編集っぷりに啞然としてしまった。確かに聞いていた通り、俺のやった指揮など存在すらしていなかった。カメラが綺麗に俺を切っていて、俺の姿は時々端に映っている程度でしかなかった。

あれを見た人には俺の存在など味方のピンチに思わず飛び出してやられた奴でしかないだろう。

「編集? あっ、もしかしてあまりにも智希がひどすぎたからかわいそうに思われてああいう形になったのか……」

「はあ?」

「いや、下手をすると逆だったかもしれないな。実は自分のために味方を犠牲をしようとして失敗しただけだったのかも」

「君ら僕のこと何だと思ってるの!?!」

なんとという奴らだ。

その上横では一夏が大爆笑して涙まで溢れさせている。とりあえず蹴った。

「そういうことだったのか。数馬、謎は解けたな」

「ああ、つまりその映像を編集したのは智希、お前だったんだな」

「どうしてそうなる?!」

「どうとう智希は歴史を書き換えることまで始めてしまったのか……」

「いや、俺はいつかやるんじゃないかって思ってたよ」

「よし、もう言葉なんていらないね」

もはや実力行使しかないと拳を振り上げるも、すぐ一夏に抑えられる。

だが横目で見る一夏の顔も憎らしいくらいまでの笑顔だ。

「弾も数馬もほんと変わんねえなあ」

「三ヶ月くらいでそうそう人間変わるかって」

「君ら思いっきり僕らを疑ってたよね」

「まあそう言うなって。思い当たるようなことがあつたんだろ？ 結局お互い変わってなかつたんだからそれでいいじゃんか」

「そういう問題じゃないんだけどなあ」

だが俺はこれ以上の追求を諦めた。このバカ共を論理で問い詰めることの不毛さは十分に身にしみて理解しているからだ。

入っていた体の力を抜くと、一夏も分かつたらしく俺から体を離れた。

「じゃあさ、あの一夏プロモーション映像はどこまで本当だったんだ？」

「なんだその言い方」

「それ以外に言いようがねえだろ」

「大枠としては合ってるよ。起こった出来事は本当」

そう、大枠としては間違っていない。

そして映像抜きにしても一夏の格好良さは見せられたと思う。おそらく博士も俺達が乱入をした時点でそういう方向に切り替えたのだろう。

「何が違ったんだ？」

「智希」

「智希？」

「僕に対する扱いだね。僕の存在が意図的に消されてる」

それ自体に俺は文句など一切ないが、その場にいた一夏にとっては大いに不満だったらしい。

この後ある記者会見ではつきり抗議するとまで息巻いていたが、俺が千冬さんに頼んでやめさせた。

現場を見た関係者には分かる話だし、俺まで篠ノ之東博士に目をつけられる可能性があるのと千冬さんに言われて一夏も思いとどまってくれたようだ。

「消されてるって、お前何したんだよ？」

「智希はあの場を指揮してたんだ。俺達は最初から最後まで全部智希の作戦通りに動いてた」

「最後は一夏が自分でやったじゃない」

「あれは……お前がやられてたからしようがねえだろ」

「指揮？」

「IS学園の生徒がお前の言うことなんて聞くのか？」

「何それ」

一瞬感情的な反発が湧いたが、すぐその意味に思い当たった。

男を下に見ているような女が男の言うことを素直に聞いてくれるのかという話だ。

「違う違う。あのIS学園にいるような女子が男の言うことなんて聞くのかよってことだ」

「何言ってるんだ。みんないい人達だぞ？」

「まあ一夏に寄ってくるようなのは別だろうけどな」

「智希、実際のところはどうなんだ？」

「うちのクラスには偏見とか持ってない人が集められてる。あと担任が千冬さんだし入学前に想像してたようなことはあんまりないね」

「ああ、なるほどな」

正直なところ、入学初日から肩透かしですらあった。

「環境的には中学時代とあんまり変わらないかも。もちろん男が二人しかないから窮屈なのはそうなんだけど」

「なんだ、案外平気そうだな」

「もしかして死にそうな顔して出てくるんじゃないかとも思ってたけどな」

「なんだよ死にそうな顔って？」

「昔から男子に対するいじめとかあっただろ。男二人だけじゃさすがに多勢に無勢もいとこだし」

「俺も智希もいじめられるようなタイプに見えるか？」

「まあそうなんだけどさ、場所が場所だし」

IS学園と言えば一般的な話からすればエリート養成場ではあるが、男の目から見た観点で言えばできるだけ触りたくない場所だ。

中学時代にもIS学園を目指している女子がいたが、そいつらは男の存在など歯牙にもかけていなかった。全員あっさり入試で落ちたようだが。

「おいおい、いじめどころか智希はクラスのみんなを仕切ってこき使ってるくらいなんだぞ」

「何その言い方」

「あ、いや智希はクラスのリーダーをやってるってことだよ」

「あの智希がリーダーだと!？」

「自分からは決して前に出ず裏から人を操ってばかりなああの智希が!？」

「は？」

「そうだ。俺達は変わったんじゃない。成長したんだ」

「ちよつと待とうか」

そうだった。こいつらはこういう悪乗りが大好きな連中だった。

一夏は乗ることはできても自分から振ることはあまりできない。だからこの二ヶ月は存外平穏だったので忘れていた。まあリーグマッチ中警備の人や夜竹さんと組んでやろうとはしていたが。

「いや、成長とはまた違うかもな……。そうだ、自重だ。智希は自重をやめたんだ」

「何その解き放たれた獣みたいな言い方」

「なるほど、確かに千冬さんに喧嘩売るくらいだし、戒めから解き放たれて自由になったと言えそうだ」

「ああ、御手洗数馬と五反田弾という良心の戒めからな……」

「良心という言葉の意味を取り違えているなあ」

「思い出した！　鈴が言ってたぞ。智希が自重をやめたらこうなるんじゃないかと思ってたって」

「あ！　鈴！」

「そうだ鈴！」

「あ」

あの映像に出演していてお互いにその存在を認識していたはずなのに、映像の話題まで出ていたのに、今の今まで全員が全員忘れていた。

今この場に鈴がいなくてよかったと、みんな心の底から感謝しただろう。

「……それで、あれはやっぱり鈴でいいんだよな？」

少し間があつて、弾が声を出した。

「留学つて形でこつちに来たんだつて。本人が言つてた」

「留学か。あいつはもう国籍が日本じゃなくて中国だもんな」

「鈴のおじさんと一緒に日本に戻つてきたわけじゃないんだな」

「そのへんは聞いてねえなあ。今までゴタゴタしてたつてのもあるけど、鈴が触れようとしなかつたし」

鈴の両親は国際結婚で、父親が中国、母親が日本だった。

だが一年ちよい前、鈴の両親は離婚して、鈴は父親の方に引き取られた。そして鈴は父親の本国中国へと引越していった。

「思い出したら食いたくなつてきた。俺にとつちや中華料理つて言う」と鈴のおじさんの味なんだよなあ……」

「おい弾、中華料理ならお前の実家でも普通に作つてるじゃねえか」

「いやうちの店は専門じゃないし、日本人が作った中華料理つて言うか、鈴のおじさんのとは全然違うんだよ。うちの親父もいる場所を間違えてるとか言つてたし、中国に戻つたのもきつと引き抜きだろうつて」

「へえ」

「なんで離婚したんだつてくらいに仲良かったもんな」

もちろん実際のところがどうだったのかは分からない。

悩んでいただろうに、鈴は俺達に対して最後まで一切口にしなかつた。

空港で別れる間際まで、鈴は涙を見せることさえなかった。

「鈴は元気か？」

「全然変わってなかった。ほんっと安心したぜ」

「そうか、それはよかったな」

「身長も全く伸びてなかったね」

「さすがにもう伸びねえだろ」

「本人は未だに諦めてないらしい」

「あ、やっぱ変わってねえわ」

今いる四人に鈴を加えた五人が俺達の中学時代だった。

正確には最初の二年間だけだが、俺達が中学時代をイメージするときはこの五人だ。

中三になつて鈴がいなくなり、一夏も施設を出て半分姉の主夫となり付き合いが減ってしまった。だからなおさらそう思ってしまうというところもあるだろう。

「今日鈴は来られなかったのか？」

「来られなかったというか、なあ？」

「鈴は千冬さんの怒りを買って外出禁止」

「何やったんだよあいつは!？」

どうやらハミルトンは止めなかったようで、鈴はあのままの勢いで特攻して見事に玉砕していた。

俺に文句を言う気力もないくらい凹んでいたので、相当に絞られたのだろう。

ハミルトン経由で話を聞く限り、寮の説教部屋行き一年生第一号は凰鈴音だったようだ。

だから第一号は決して俺ではないのだ。本当に風評被害も甚だし

い。

「姑息なこととして千冬さんが怒ったってだけだよ」

「何やってんだあいつは。智希を見てれば千冬さんにそんなのは通用しないって分かってるだろうに」

「はっ」

「いや、俺も千冬姉に鈴も一緒に行かせてくれって頼んだんだけどさ、

智希の真似事すらできないような奴にかける情けはないだ」と

「そりやそうだな」

「君らは僕を引き合いに出さないと会話できないの!？」

本当に、俺をイラつかせることにかけては日本一な連中だ。

これならまだクラスメイト達の方が可愛げがある。

「じゃあ鈴にはしばらく会えないのか」

「来月か再来月には一緒に来られると思う。千冬姉がそんなこと言うてた」

「あるいは鈴が一人で来るかもね。別に僕らと一緒にじゃなきゃ何も問題は無いんだし」

「そっか。お前らが特別なだけだもんな」

だからこそ今回俺は鈴を助ける気にもならなかったわけだが。

「でも鈴だしなあ。わざわざ一人で俺らに会いに来るかっていうと、来ないんじゃないかね？」

「おいおい、四年だっけ五年だっけ、それくらい長い間住んでたんだから鈴も懐かしくなるとかあるだろう？」

「鈴が引越して来たのは小五の時だったから四年間だな。でもあいつってあんまり場所に愛着持つようなタイプでもないぞ」

「じゃあ人は？ 鈴のことだしIS学園に入学したぞって勝ち誇りに来るんじゃない？ 蘭に」

「あー！」

「また忘れてた！」

「蘭がどうかした？」

弾の妹にして鈴のライバルである五反田蘭など、今回呼んではいないのだが。

「やべえ、放置し過ぎた……」

「蘭も来てるのか？」

「呼んでないから入れてもらえないんじゃないの？」

「それがさあ」

気まずそうに、弾は俺と一夏を見る。

「一夏と智希のことを聞きつけて、無理矢理ついて来た」

ああ、そういう粘着質なしっこい女だった。

「なんだ、来てるなら一緒に来ればよかったのに」

「当然ホテルの入口で止められた」

「そりやそうだ。呼んでないもん」

「なんで呼ばなかったんだよ智希？」

「初回だし鈴もないしまあいいかと思って」

一夏の方こそ忘れていたくせに何を言うかだが、俺は一夏が何も聞かなかったのも何とも言わなかった。

鈴がいるなら離れた場所で仲良く喧嘩させておけばいいが、単体だと面倒だからだ。

「なあ一夏、蘭も呼んできていいよな？」

「いいに決まってるだろ。わざわざ聞くようなことじゃねえよ」

「いや、一応一夏の許可があればってことになったんだよ」

「なんだそれ？」

「蘭が千冬さんと交渉してそうだったらしい」

「らしい？」

千冬さんにまで食って掛かったとは、やはり蘭は面倒な女だ。

というか千冬さんはこいつらの前に顔を出していたのか。

それなら最初から偽物を疑う必要なんてないはずなのだが。

「ホテルのロビーで蘭が暴れてさ」

「何やってんだあいつ？」

「そしたら騒ぎを聞きつけたのか千冬さんが出て来て」

「うん」

「蘭の奴千冬さんの姿を見つけたら『ちふゆさあーん！』って大声で叫びながら突進して行ってなあ」

「なんかすごく想像できるねその光景」

「その勢いのまま千冬さんと交渉してそういうことになったらしい」
「なるほど」

真っ直ぐ突っ込んで行った蘭と姑息なことをしようとした鈴。

はつきり明暗が分かれた形だ。

普段はどちらかという逆だったが。

「でもよく千冬姉がうんって言ったな」

「離れてたからよく分からんけど、あいつなんか紙を取り出して見せながら説明してたぞ」

「紙？」

「教えてくれなかったから俺もよく分からんけど、千冬さんも領いてたし納得はしてる感じだったな」

蘭は交渉の材料まで用意していたのか。

だが千冬さんがその場で認めるような材料とはいったい何だろう。

「ふーん。ま、千冬姉が文句言わなかったなら何も問題ないだろ。早く呼んでこいよ。近くにいろのか？」

「別の部屋で待ってる。じゃあちよつと待つててくれ」

言うやいなや、弾は部屋から飛び出して行った。

一瞬この部屋に戻って来られるのか疑問に思ったが、まあ案内の人くらいはいるだろう。

「蘭か。あいつは今中三だっけ？」

「だな」

「来年どうするんだ？ 確かお嬢様学校だからそのまま上がるんだっけ？」

「普通はそうだな」

「あ、でも鈴がIS学園にいるって知ったら追っかけて来そうだな。あいつらって親友でいいライバル関係だから一緒にいたいって思ってるかも」

「きつとそうだと思うぞ」

一夏に適当に合わせながら、数馬は俺を見る。

そういう認識を一夏に持たせたのは他ならぬ俺だからだろう。

別に間違いではない。鈴と蘭がお互いライバルであり親友であること自体はその通りだ。

ただ、一夏をめぐって、という部分を省いただけの話である。

「IS学園を受験する気かもね。でも受かるのかな？」

「鈴が受かってるんだから大丈夫なんじゃないか？」

「勉強に關しちや圧倒的に鈴の方が上だよ。蘭は必死に勉強するようなタイプでもないし、今からで間に合うのかな？　IS学園を受験するつもりなら中学時代を全部勉強に費やすくらいじゃないといけな
いって聞いたし」

「そういえば中学の時IS学園を目指してるって女子がクラスにいたな。ほんと勉強しかしてないって感じだったけど、IS学園で見かけないってことはきつと落ちたんだろうな」

「それ聞くと鈴ってやっぱ化け物だったんだな。俺らと一緒に遊んでながらIS学園に受かってるんだから」

「とはいえ鈴が普段から勉強などの勝負事に全振りだったのははっきりしている。」

俺達と遊んでいると言ってもダラダラと付き合っているわけではなかった。学校以外での部分は自分のやるべきことを優先していたように思う。

だから鈴がIS学園に受かったと聞かされても、あの鈴ならやりかねないという納得感があった。

「ん？」

と、扉を叩く音がした。

「どうぞ」

弾と数馬はノックもせずに入ってきたが、さすがに蘭はわきまえて
いるようだ。

むしろノックさえせずに扉を開けて覗き込むような真似をする方
がおかしいと言うべきか。

「一夏さんー」

蘭の笑顔が強化されている、と真っ先に思った。

見慣れたひつつめ髪はどこへやら、綺麗に腰まで流して昨日あたり
美容院に行ってきたんだろうなというふんわり感だ。

一方服装は白を基調とした半袖のワンピース。お嬢様の空気を出
したいらしい。だが丈を短くしてすっかり自慢の足も見せている。

スタイルだけなら鈴と蘭は大差なく育っていないが、方向性という

意味では正反対だ。活発さを前に押し出す鈴に対し、蘭はお淑やか方向で攻めようとしている。

そのために一夏と同じ中学に行くことを捨ててまでお嬢様学校に進んでいるのだから、こちらはこちらで一夏への執着は大きい。

「おお」

「お久しぶりです！」

蘭は鈴のように駆け寄るような真似はしなかった。

あくまで上品に、いや上品ぶって、満面の笑顔のまましずしずと一夏に向かって歩みを進める。

横を見ると数馬が、うわあ、と恐ろしい物を見たかのように口を半開きにしていた。

「よお蘭。久しぶりだけど元気そうだな」

「いいえ、全然元気なんかじゃありません」

「え？」

蘭は首を振り、言葉と共に顔を曇らせる。

「蘭、もしかして病気でもしてたのか？」

「だって……こんなにも長い間一夏さんに会えなかったんですから……」

そして両手を胸の前で重ね、上目遣いに一夏を見上げた。

数馬の顔が引きつって固まる。

「何言ってるんだ。たった三ヶ月とかそこらだろ」

「私にはもう十年くらいに感じられましたよ」

もちろん我らが織斑一夏にその程度では通用しない。

だが蘭の方もそのくらい想定済みだとばかりに全く動じず会話を続ける。

「まあなあ。この三ヶ月はいろいろあったし。まさかIS学園に入学することになるとは夢にも思わなかった」

「そうですね。大丈夫ですか？ つらくないですか？ よりによってIS学園だなんて、毎日大変じゃないですか？」

「意外とそうでもないぞ。みんないい人だし」

「みんなってそれは……」

蘭は言葉を濁すと、横目で一瞬俺を見る。その鋭い目は詳しく聞かせろと言っていた。

「ああ、場所が場所だけに蘭も心配か。弾も数馬も同じようなこと考えてたしな。大丈夫、今の俺達は入学前には想像もできなかったくらいに楽しくやれてる」

「そうですか。それはよかったです」

「クラスみんなにはよくしてもらってるし、俺なんかは特に智希には世話になりっぱなしだな」

そして一夏は俺に振る。もちろん深い意味などない。

「智希さんもお久しぶりです」

「久しぶり」

「一夏さんも智希さんも変わらないようで」

「そうだね、中学時代と全く何も変わってないね」

蘭が聞きたかったであろうことを聞いてきたので、俺はそれに答えてやる。

すなわち、現状何も進展なしという話である。

「それを聞いて安心しました」

「鈴もいるし、それなりに楽しくやれてるよ」

「やっぱり鈴音さんが帰ってきてきてたんですね」

「今日はちよつといろいろあつて来られなくて」

「あいつさあ、千冬姉に怒られて外出禁止くらったんだ」

せっかく俺は濁してやったというのに、あっさり一夏がバラしてしまった。

蘭の鈴いじりネタがまた増えた。

「まあ」

「また来月か再来月一緒に来るからそんな時な。もしかしたら鈴が一人で会いに行くかもしれないし」

「それならいろいろお話したいことがありますと鈴音さんにお伝え下さい」

「了解。鈴には言っとく」

「お願いします」

蘭が頭を下げる。

確かに蘭も女しかない中に一夏が放り込まれるとか不安で仕方ないだろう。

俺よりも話のしやすい鈴から実態を聞いておきたいというところか。

「そうだ。一夏さん、私、IS学園を受験することにしました」

「そうか。まあ鈴もいるしな」

「もちろん一夏さんがいるからです」

「そりゃ知り合いが多い方が行く気になるか」

「そういう意味じゃないんですけど」

「でもIS学園って滅茶苦茶難しいんだろ？ 今から始めて間に合うのか？ いや、まともに試験を受けてない俺が言うことじゃないけどさ」

「大丈夫です！」

と、蘭は懐から一枚の紙を取り出した。

「見てください！ 私、IS適性検査でAランクだったんです！」

「へー、そうなのか。でも受験資格のことならCあればいいんじゃないかなかったか？」

「そうだね。だから僕が女なら受験資格はない」

「あれ、知らなかったんですか？ 大つぴらな話ではないですけど、IS適正がAランクだったら事実上もうそれだけで合格ですよ？」

そんな話初めて聞いた。

大つぴらな話でないということとは公然の秘密なのだろうか。

「なんでAランクならそれだけで合格なんだ？」

「だってAランクって毎年受験生の中でも十人くらいしかないですから。生まれつきの話なので努力してどうにかなるものでもないですし、IS学園としても大歓迎だそうです」

確かに、Aランクの数が非常に少ないとは聞いたことがあった。

生徒のほとんどがBランクで、あとはごく少数のAランクに篠ノ之さんのような一芸を持ったCランクという話だった気がする。

「なあ智希、Aランクってそんなに少ないのか？」

「そうだという話は聞いたことがある」

「じゃあうちのクラスだと?」

「オルコットさんはそうだね。あとはリアーデさんも海の向こうから来てるくらいだしそうだと思う。他の人達には質問したこともないから分からないけど、学年で十人ならいて一人くらいじゃないかな」
「そうなのか……。あ、じゃあ鈴は?」

「一年で専用機までもらってるくらいだしまずAだろうね」

鈴的にはむしろ自分がAランクであることを知ってISの道を志したのかもしれない。

「というかAランクって何が違うんだ?」

「反応速度とかが優れてるなんて聞いたりしたけど、Dランクの僕にはちよつと分からない世界だなあ」

「そうか。今度鈴にでも聞いてみるか」

「鈴に聞いても答えは返ってこないと思うよ。だって鈴にはそれが当たりまえなんだから」

「言われてみればそうだな。じゃあますます意味分かんねえぞ。操縦技術が優れてるのと何が違うんだって話だし」

「スタート地点が人より前にある程度の話じゃないかな。千冬さんもあつてないようなものだと言ってるし」

「努力努力うるさい千冬姉からすれば生まれつきの才能とか余計なものだろうなあ」

と言っても本人が世界に数えるほどしかないという最上位のSランクでは、IS適性などあつてないようなものだと言われても説得力は全くない。

「でもまあ受験に有効ってだけで十分過ぎるくらいの話だね。IS学園もAランクの人はできるだけ引き込もうとしている的な話を聞いた気がする。確かそういうイベントもあつたような」

「オープンスクールのことですよね?」

「ああ、それぞれ。蘭も来るの?」

「もちろんです!」

「なんだそれ?」

「中学三年生に対する I S 学園案内だよ。 I S 学園の生徒が参加者
中の施設を案内するんだって」

鷹月さんが言っていた。

事実上 I S 適正 A ランクな中学三年生向けのオープンスクールだ
と。

「へえ、じゃあこっちに来るのか。それはいつなんだ？」

「夏休みです！ 一夏さん、私のエスコートをお願いしますね！」

「俺？」

「もちろんです！」

「ここぞとばかりに畳み掛ける蘭。

まあ頼まれなくても今年は一夏が駆り出されることになるだろう。

俺は D ランクの人間に案内されても嬉しくないだろうからという
理由で逃げようと考えているが。

「あー、でも夏休みだときつと入れ違いになるな。ちょうど I S 学園
にいないから」

「えっ!？」

「いや、俺達夏休みにカナダに行くことになってるんだよ。なあ智希
？」

「ほんとですか!？」

「本んだけど、蘭、オープンスクールの日程って具体的にいつ？」

「夏休み入って最初の週だそうですけど……」

「じゃあ大丈夫だ。カナダに行くのは八月入ってからだし、それも一
週間程度だし」

「あれ、そうだっけ？」

「夏休みは一ヶ月以上あるんだし、全部カナダにいるとかないよ。そ
れに夏休みには三年生の集団模擬戦もあるんだから一夏も見たいで
しょ？」

「そりや見たいな。外国とか行ってる場合じゃない」

俺個人の感覚としては、果たしてカナダ一国で済むのかという気が
している。

大義名分さえ作ればこの際とばかりにねじ込んでくるところが

あるだろう。

できる限り今から適当な予定を入れておいた方がいいかもしれない。友人に会うとかで。

「はー、ほっとしました。一夏さんがいないんじやIS学園とか行く意味ないですし」

「別に行つたつきり帰つてこないわけじゃないぞ?」

「も、もちろんオープンスクールがって意味です」

「ここまでIS学園そのものに興味などないと言い切るのは清々しい。」

入りたくても入れない人間が山ほどいるというのに。

IS学園もフリーパスにしてまでこんなAランクを入学させる意味はあるのだろうか。

「あー、ちよつといいか。蘭、兄として言わせてもらうがお前いつの間にIS適性検査とか受けたんだ? あれけつこう金がかかるだろ。」

「ロクに貯金もできないお前がどっからその金持ってきた?」

「なぜそれを……!?!」

「受けたことあるからに決まつてるだろ。本来ウン万円するものをタダでやらせてやるんだからありがたく思えとかエラそうに言われたわ」

「お兄……」

「まあ起動確認だけの数分で放り出されたからウン万円もしてないだろうけどな」

「数馬、せめて今くらいは真面目にやらせてくれ」

「しまった。外したか」

外すも何もこの空気でよく口に出せたなとすら思える次元だ。

だがこれも日頃の行いによる自業自得だ。話の腰を折られてざまあみろとあえて言いたい。

「蘭」

「その、お父さんをお願いして……」

「やっぱりあのバカ親父か。ほんと娘にだけ甘過ぎだ」
「お兄」

「蘭、こういうのはちよつと見過ごせない。もちろんおふくろには言うからな」

「そんな！」

「当然だ。こんな不平等など許されるわけないだろう」

「え？」

「しかし、俺も鬼じゃあない。だからお前の行動いかんによつては考え直してやってもいいぞ」

家族の真面目な話と思いきや、強烈な勢いでねじ曲がった。

「いいか、ここでの問題は俺達の間の不平等が発生していることだ。だからそれが解消されれば全て丸く収まると思わないか？」

「そういうこと」

「いや、別に俺はどつちでもいいんだぞ？　どちらであろうと俺に損はないし」

「そうね」

一瞬で建前まで捨ててしまった。

すぐに捨てるくらいなら最初から『お前だけ金もらえてずるい』と言え。

「この気持ち、俺はどこに持っていけばいいんだ……？」

「なあ智希、俺間違つてなかつたよな？　あいつ最初から真面目にやる気とかなかつたよな？」

一夏が呆然とし、数馬が俺を揺さぶる。

目の前では結託した兄妹が不敵に笑って悪事に手を染めようとしていた。蘭は一夏の前にいるという意識すら完全に抜けてしまっている。

兄妹帰宅後の未来が容易に想像でき、人間とはどうして余計なことをして自爆してしまう生き物なのだろうかと思った。

「失礼する」

千冬さんが入って来た。左手に本を一冊持っている。

「そろそろ時間だ。話すことも尽きないだろうが、これで最後という

わけでもない。続きはまたの機会にして今日のところはこのあたりで切り上げてもらおう」

「もうそんな時間か」

「この後記者会見やるんだったか？」

「うん。テレビも来てるから夕方のニュースで見られるんじゃないかな」

「千冬さん、隅っこで見させてもらうとかできませんか？」

「我が妹ながら厚かましい奴だな」

「残念だがそれはできない」

当然のごとく蘭の願いは一蹴される。

「ダメですか」

「むしろお前達のためだ。今からマスコミや関係者に目をつけられていいことなどない。もつとも、自身のプライベートを捨てて一夏と智希を引っ張り出す餌になりたいのであれば話は別だがな」

「う……」

「一時期俺達にもしつこかったもんなあ」

「ちよつとあれはもう勘弁だな」

一夏の時は俺も囲まれたし、俺まで発覚した後は学校の周囲が大変なことになっていたそうだ。

「だが別室でテレビ越しに見る分には構わないぞ。生中継があるのだからな」

「そうなのか？」

「昨日そう言ったって言ったよ。聞いてないなって感じだったから覚えてないだろうと思ってたけど」

「あはは……」

一夏は篠ノ之さんの説教を聞き流すかのように俺や千冬さんの説明を右から左に流していた。

しかしこの三人にわざわざ生で見せてやるのか。

元々はそのまま帰す予定だったはずだが、生中継があると急遽決まったのでこの際ついでにということだろうか。

「智希、こんなんで大丈夫なのか？」

「最初からそうだと分かっていたら考えようはあるよ。それに一夏は人前で変に緊張したりしないから、パニックっておかしなこと言うとかないし」

「マスコミ各社の質問も事前に提出させてある。もちろん向こうがこちらの把握していない勝手なことを言うのは自由だが、それをやった結果どうなるかはまともな頭をしていれば分かるだろう」

「でも生中継だから何が起るか分かんないんじゃない？」

確かに、最初はそういう懸念もあったようだ。

だが千冬さんはあえてこれを受け入れたとのことである。

様々な思惑があつての話らしい。

「むしろ向こうが勝手に自爆してくれるのなら今後がやりやすくなるとかあるんだって」

「そうかもしれないけど、そんな簡単にいくもんか……？　一夏の間抜け面見てるのとちょっと不安だぞ」

「なんだそれ！」

「そんなお前達に今日の見どころを教えてやろう。もし智希が何か対応をし始めたらイレギュラーなことが起こったと思え」

「智希？」

「そういうこと。イレギュラー時での対応は僕がやることになってる」

俺が放課後にやらされていたのはほとんどこれである。

つまりイレギュラー時にどう対応・発言するかの新ミューションだ。

「なるほど、要するに一夏は全部智希に押し付けたわけか」

「はあ？」

「だってそうだろう。面倒事は全部智希にやらせようって話だろうに」

「いや、それは、まあ……」

「僕はこの一週間授業以外じゃそれしかやってないね」

こういう質問が来たらこう答える、というのを延々とやっていたわけだ。

分厚い想定問答集を渡されて、最初目眩がした。

「もし智希に詰まるようなことがあれば、それは想定外の話ではなく智希が覚えきれていなかったというだけの話だ。安心して笑うがいい」

「なんでそんなプレッシャーかけるんですか」

「お、それは楽しみだな」

と言っても、実際俺の反応が遅れたらすぐ千冬さんが引き取ってしまおうだろう。

やらされてはいるものの、はっきり言って俺が当てにされているわけでもない。

大人の千冬さんよりも当事者の俺の発言の方が心証がいいという程度の話だ。

本当は一夏の口で言うのがいろんな意味で一番いいのだが、それはとても望めることではなかった。

「では向かうとしようか。と、これを忘れていた。蘭、IS学園を受験するのであれば知り合いの誼だ。せっかくだからプレゼントをやる。問題集だ」

「あ、ありがとうございます」

「オープンスクールでは実力テストもあるからな。この時期でもこれくらいは普通に解けるようになっていて当然だと思え」
「え？」

「オープンスクールでは受験に関するアドバイスも受けているが、にしても基準が分からなければ質問もしづらいだろう。それに適正Aランクというのは妬みやつかみの対象にもなりやすいデリケートな立場だ。周囲の圧力に負けないためにも人一倍の努力と強い心が求められる。ちなみにオープンスクールが適正Aランクのみを対象にしているなどと揶揄されるのは、予めそういう心構えを伝えておくという意味合いもあるのだ」

「は、はい……」

蘭の問題集を持つ手が震えている。

きつと初めてIS学園という現実に触れたのだろう。

「では二人とも会見の場に向かうぞ。三人にはここで昼を食べさせて

やる。この部屋に来るまで不安にさせた詫び料だ。お前達には向こう十年は口にできない料理だから味わって食べるといい」

「マジですか！ 千冬さんイケメン！」

「やったあ！ 千冬さん男前！」

「……」

男二人は現金に喜び、だが蘭は手に持った問題集を呆然と眺めている。

しかし、『不安にさせた』と口にした時、千冬さんは俺を見ていた。やはりこいつらを不安にさせたのは俺のせいだと言いたいようだ。

本当に憎たらしい。

「俺達も食えるんだよね？」

「会見が終わってからだ。この馬鹿共には向こう二十年口にできないものだから楽しみにしておけ」

「おい十年増えたぞ」

「褒めただけなのに……」

いくらあれだろうとなんだろうと本人の目の前で男扱いしてはいけないだろう。織斑千冬が男だったらよかったのに、という言葉はしば世の女性の間で口にされるし、本人も今の反応を見てもまず耳にしているのだから。

でも俺が口にしていた場合は間髪入れず拳骨が落ちていただろうし、言葉だけで済んだ二人はむしろ感謝するべきだと思った。

10. 面会 Round 1

この一週間の苦労はいったい何だったのか。

つくづくそう思わざるをえなかった。

「どうした智希、箸、じやなくてフォークが止まってるぞ」

「あ、ごめん」

「別に謝るようなことじゃないだろ。でもその気持ち分かるぜ」

「え？」

この一週間何もしなかった一夏が？

「ほんとおいしいよなあ。どうやれば同じのを作れるかってずっと考えてるんだけど、何もかも違うんだよ。素材の時点でスーパーなんかとは次元が違うし、寮の食堂でさえ比べようもない。それに何より料理一つ一つの手間が尋常じゃない。このソースとかお前は普通に食べてるけど、何を使って何種類で作られてるんだって感じでもう繊細過ぎて俺には言葉で表現できねえよ。俺にはこの味を出すどころか試行錯誤することさえできないと脱帽するしかなかった」

「そ、そうなんだ」

「ああ。正直俺自分のこと料理できるって自惚れてたけど、このソースの前じゃ口が裂けても料理できますとか言えねえ」

一夏はやたら目の前のソースにこだわっているが、特に舌の肥えていない俺からすれば濃厚でおいしいソース以上の感想はない。

と言っても、ここは弾が口にしたように高級ホテルだ。

IS学園と同じ人工島の中にあって近く、IS学園に用事があり泊まりで来る世界中のIS関係者が宿泊する場所だそうである。

そこで出される料理なのだから、確かにそれ相応のものではあるのだろう。

「じゃあ素直に聞きに行けば？ 全部終わった後にでも」

「バカ、何言ってるんだ。今の俺にそんな資格とかねえよ」

「資格って料理人じゃあるまいし」

「料理人か。前からちよつと興味はあつたんだよな……」

「IS学園を卒業して暇があればって感じだね」

「確かにIS学園の中じゃできることは限られてるな」

IS学園に入学して料理人になりましたとか衛生科の人達以上に意味が分からない。

「ま、おいしいんだから食べるだけの僕らはそれでいいよ」

「どうした智希、何かあつたのか？」

「別に」

「そんな顔してないぞ。さっきの会見の話か？ 何かあつたつけ？」

「それは何もなかったじゃない」

「ああ、少なくとも俺はそう思ってるんだけど。ほんとに何もなかったというか、事前に智希と千冬姉から言われてた通りだったよな」

「最初から最後まで台本通りだったよ。参加者全員に台本配つてたんじゃないかってくらい」

そう、本当に何もなかった。

全てが決められた通りに進んで、何かを考える必要すらなかった。

一夏への質問も分かりやすく、それどころか答えやすいように誘導してくれていて、一夏はそのまま思ったことを口にすればいいだけだった。失言以前の話だった。

その上笑顔の練習をした成果というか、一夏はこれまでからすればものすごく愛想がよく見えた。だからそのお陰でその場にいた人も十分満足している空気になっていたようだ。

またテレビを見た人もこれから見る人も笑顔で明るく答える一夏に好感を抱くだろう。

「じゃあ智希のことについてか？ 変に話題にして束さんの気を引かないように控えめにするって話だったけど、何か問題あつたか？」

「そつちも完璧。僕の体に問題はありませんってきちんと示せたんだから、すべきことはきちんとできてるよ」

「じゃあ何なんだよ。そのやりきれなかった的な不完全燃焼な顔は？」

一夏に的確に指摘されて、思わず俺は一夏を見返す。

そう、この一週間かけて苦勞して身に付けたことが何も使われなかったからである。

あれだけ苦勞して覚えたのに、本当に何も使う機会がなかった。

「え？ 当たりか？ いったい何をやりきれなかったんだ？」

「別に何でもないよ」

「だったらそんな顔すんなって。いったい何なんだよ？」

「あー、甲斐田君はね、この一週間一生懸命がんばったのにそれを活かす機会がなかったってがっかりしてるんだよ」

と、見かねたのか横から声が入った。

部屋の隅に俺達の警護で立っていたIS学園の警備の人だ。俺達と顔なじみの。

「そうなの？」

「そうなんだよ。問題が起こった時はああしようしようって準備してたんだけど、問題が起きなかったから何も対応する必要がなかったって話」

「ああ、そういうことか」

「織斑君はやってないから分からないだろうけど、甲斐田君は毎日放課後一生懸命やってたんだよ。こういう質問が来たらこう答えるとか、急に襲い掛かってくる人がいたらこう逃げるとか、ひとつひとつやってたんだよ」

「う……智希すまん」

「別に。そういうのは元々一夏に期待とかしてないし、一夏もその間遊んでたわけじゃないんだから」

「それでもすまん。無神経だった」

これは俺個人の問題であって、別に一夏がどうこうという話では全くないのだが。

「あたし達からすれば使わずに済んだのはむしろラッキーなんだけだね。こうやってスムーズに進んだのが本当に嬉しいくらい」

「そういうものなのか」

「あ、でもだからって気を抜いてるとかそういうことはないからね。まだ織斑君の写真撮影に甲斐田君へのインタビューが残ってるんだ

し、IS学園に戻るまでは終わってないから」

「誰もそんなこと言ってますよ」

「写真なあ。言われた通りにしてればいいんだよね？」

「ちよつと写真撮るだけだからすぐ終わるよ。時間はかけさせないし織斑君に変な負担をかけたら即座に中止させるから。嫌なら今から中止にしてもいいくらいだし」

「別にそのぐらいならやるよ。千冬姉にもそれくらいはやれって言われてるし」

一夏には喋らせずその姿だけを見せるというのは、俺でなくても考えることだろう。

だが俺には言葉を濁したが、どうも千冬さんは会見がどうなるかでその後についてをちらつかせていたように感じられる。

だから最初の会見が滞りなくうまく行ったということで、じゃあご褒美をあげようという感じなのかもしれない。

「すぐに終わって甲斐田君が終わるのを待つことになると思うから。何しろ甲斐田君には三件もあるし」

「写真だけの俺とは違って大人気だな智希」

「二夏へのインタビューは全部断ったつてただだよ。一夏には百件以上申し込みが来てるんだから。外国からのもあったし」

「そ、そうなのか」

つまり俺に対して来た三件を千冬さんが受けたという話である。

もちろん俺に相談などなかった。いや、その存在は知っていたが、正直断ると思っていた。

決まったから受けろと会見が終わった後に言われ、この後に予定さ
れている。

「あつと、食事の手を止めちゃってごめんね。といつてもあと一時間以上あるから全然余裕だけど」

「それならせっかくだしゆっくり食べるか。それで智希にインタビューとかするのはどういうところなんだ？」

「雑誌が一つに企業が二つ」

「ふーん。智希の方が大変そうだな」

「と言つても全く知らないってわけでもないからね。雑誌の方は、ほら、黛先輩。新聞部の」

「ああ」

「黛先輩のお姉さんなんだって。きっと妹経由で僕のことを聞いているから一夏じゃなくて僕に来たんだと思う」

「そういうえばお前は上級生の方に有名だもんな」

「そして企業の方は、四十院さんのお母さん。リーグマッチの時挨拶してるから顔も知ってる」

「ああ、それは俺も挨拶した気がする。顔は全く覚えてないけど四十院さんがお母さんを連れてきたのは覚えがあるな」

「最後の人は知らないけど、リーグマッチを現場で見てたそうだからIS関係者だね。男の人だし挨拶程度だっという話なのでそこまで変なことではないと思ってる」

「なるほどな。でも大丈夫か」

「何が？」

「智希こそ変なこと言い出しそうじゃないか」

「はっ」

まったく、一夏は俺を何だと思っているのか。

せつかくここまですまく行っているのに、わざわざ自分からぶち壊してどうする。

「いや、今まで智希がやってきたことからして何となく……」

「あのさ、僕は昨日までずっと今日うまくいくようになってやってきたんだけど」

「す、すまん」

「だいたい危険があるなら千冬さん、織斑先生の方で断ってるから」

「そ、そうだよな」

「織斑君。一応あたしが甲斐田君の側にいて禁止事項を口にしようとしたら止めるから、あんまり心配しなくていいよ。ないとは思うけど」

「誰かに見ててもらえるなら安心だな」

「僕の時とはまるで反応が違うね」

禁止事項とは主に篠ノ之束関連である。

そんなもの誰に口にするかという次元だ。

そして警備の人達もそこまで介入できるということは、この人達はやはりそちらが主目的な役割であり警備の部分はむしろおまけというか名目なのだろう。

彼女達の主織斑千冬が目の届かない部分をカバーするという意味合いが大きそうだ。

その上ブリュンヒルデ織斑千冬に心酔していて一流のISS乗り。使い勝手も非常にいいに違いない。

「そ、そういう意味じゃないぞ。一人よりも二人の方が安心というか智希が一人だと心配だというか……」

「一夏、喋るほど墓穴掘るだけだからもう黙って食べようか。まだ残ってるよ」

「そ、そうだな」

「はいはい、この後はデザートが待ってるよ。こここのデザートがどれほどのものか織斑君なら想像できるよね?」

「そうだった! ゆっくり食べてる場合じゃねえ!」

あつという間に気を取り直して、一夏は自分の皿に集中する。

そしてすぐに皿は空となり、満足そうな一夏の姿があった。

「最後にこのソースの味を……」

「さすがに皿を舐めるのはだめ」

食い意地が張っているとは全く別の意味だが、論外過ぎる行動なので俺は一夏の頭を叩いた。

「こんにちは――!」

「初めまして」

「ありがとう――!」

部屋に入った途端テンションマックスだった。

さすがにそこまではしなかったが、ほとんど俺に抱きつかんばかりの勢いで突進してきた。

「何がですか？」

「もちろんこのインタビューを受けてくれたことに決まってるじゃないっ！ほんつと嬉しいわー！」

「そ、そうですか。それは何よりです。とりあえず座りませんか？」
「おつとつと、ごめんね。その前に、わたくしはこういう者です！」

月刊誌『インフィニット・ストライプス』 副編集長 黛 渚子
と書かれた名刺を渡される。

聞いていた通り黛先輩の姉だ。見た目的にも将来の黛先輩、雑誌の編集者だけあつてカジュアルな格好で、千冬さんのような力チツとした服装でもない。基本制服な学生の勝手な感想だが、おしゃれにも気を遣っている社会人というところだろうか。

IS学園の中にいると生徒も教師も職員も基本は制服や作業着なので、こうやって私服姿の人間を見ると新鮮さを感じる。

「甲斐田智希です」

「もちろん存じ上げております。IS学園期待のダークホース！」

「まあ黛先輩のお姉さんならそういう言い方しますよね」

「ふふふ、話ができそうで何よりだわ。どうぞ座って」

「失礼します」

促されて席につく。

黛姉も俺が座つたのを確認してから腰を下ろした。

「さてと、まず始めに、今日これから話すことについては特に記事にするとかしません」

「そうなんですか？」

「そういう条件だからね。だから録音とかもしてないから安心して」
「そう言うと黛姉は両手をひらひらさせ、入り口に立つ警備の人を見る。」

俺の目の前にあるのはペンとメモ帳のみ。鞆すら持ち込んでないようだ。

「もちろん身体検査も受けてるから大丈夫よ」

「別にそこまで言っていないですけど」

「まあかえって怪しいと言われると困っちゃうんだけどね」

「さすがにそういう疑いをかけるとかしないですよ。それより今日は記事にしないなら何を話すんですか？」

「ふむふむ、あんまり無駄な会話とかしたくないタイプかな。今日はね、ごあいさつー！」

「はあ」

とりあえず顔を繋いでおきたいとかそういうことだろうか。

「甲斐田君が今日受けてくれたのは、妹のことがあるからというものある？」

「黛先輩のことがなかったら受けなかったかというとまた話は別ですが」

「うん、もちろんそれだけで受けてくれるとは思ってないけど、最近妹と何か会話とかした？　こちらが取材の申し込みをして以降で」

「特に……そちら関連ではないですね。もちろんすれ違った時は挨拶くらいしますし、二言目には取材させてくれと言われていますが」

「そう、私が言いたいのは、この場について妹は何も関係ないということ」と

「そのへん慎重ですね。黛先輩もそうでしたけど」

「お、妹が甲斐田君にそう思われているというのはとてもいいことだわ」

責任の所在というか、後で文句を言われないうようにということなのだろうけれど。

「で、ごあいさつも含めて何よりも、妹から聞いたことは果たして本当なのかって知りたいわけなの」

「ああ。確かに嘘臭いかも」

「甲斐田君に対するイメージがね、IS学園の外と中じゃもう全然違うんだよ」

「でしようね」

「最初妹から聞いた時はデマでも流したいのかと思った」

そもそも俺は世間に対して露出が極めて少ない。

適正Dランクと判明した時点で潮が引くようにマスコミの数は減ったし、結局日本には俺と一夏以外男性IS操縦者がいないと分

かった時にはもう隔離されていた。

「デマの方が正直嬉しいですね」

「ということはやっぱり本当のことでもいいの？」

「何についてですか？ 言い方があれですがそれなりに風評被害もあるもので」

「なるほど。じゃあ……入学三日目にして一人で三年生のところに乗り込んで、三年生全員を口説き落としたこと」

「口説いたというのがIS関連で協力を得たという意味なら本当です」

「あっさり認めるんだね」

「隠すようなことでも隠せるようなことでもないですし。三年生全員と一部の二年生を巻き込んでるので」

どうせこのへんは妹経由で筒抜けになるのだから、あまり取り繕う意味もない。

「はー。とても男子とは思えないアグレッシブさだねえ」

「どうなんでしょう。他には？」

「いやいや、別にいちいち事実確認をしたいというわけでもないから。何よりそれで時間終わっちゃったらもったいないし」

「僕としては嘘書かれる方が困るんですが」

「だから別に記事とかにしないよ。今日は妹の言ったことが嘘八百でなければそれでいいの。妹だって誤ってると知らずに言ってることもあるだろうし」

妹から情報を鵜呑みにしているわけではないと言いたいようだ。当たり前の話だが。

「じゃあ何について聞きたいんですか？」

「まあまあ。今日はね、初回ということだしまずこちらのスタンスを聞いておいて欲しいの。『インフィニット・ストライプス』はこれまでも、そしてこれからも、IS学園といい関係でありたいと思っ

「はあ」

「こうやって妹から話を聞いてたりするけど、それをそのまま記事に

するとかしてないから。記事を作るときはきちんと取材をして、どう
いう記事になるかまで説明してやっています」

パパラッチなどではないと言うことなのだろうか。

実際どうなのかはともかく。

「基本的にIS学園にいる人達が困るようなことはしたくない。そう
いうこととしてたら信頼されなくなっちゃうからね。今日本で一番I
S学園に食い込めてるといふ自負があるから、わざわざ目先のことに
囚われて不評を買うような真似はしません」

「そうですね。じゃあ妹さん経由で僕とかの話を知っていることにつ
いては？」

IS学園というか織斑先生の見解は予め聞いているが、一応口には
出しておく。

「もちろん、迷惑だというのなら止めるよ。迷惑してる？ あるいは
迷惑だという声はある？」

「風評被害を記事にされたら大迷惑ですね」

「はつきり言ってお目こぼししてもらってる立場だし、又聞きのおふん
わりした話とか怖くて記事にできないから。甲斐田君についての話
を聞いてると何が正しくて何が間違ってるか怪しすぎて、正直に言う
と直接聞いたこと以外はとて記事にできないくらい怖い」

確かにクラス間学年間で俺に対する印象がかけ離れているので、外
から見ればなおさら何が真実なのかややこしい話だろう。

そしてはつきり『お目こぼししてもらっている』と口にできるとい
うことは、お互いに共通認識ができているという話だ。

「それよりも、織斑君のことを書きたい。ある程度は想像できると思
うけど、織斑君に対する要望がすさまじいの。はつきり言っただけでも
織斑君の写真が撮れるってだけでも大勝利で、最悪今のこの場を犠
牲にしても織斑君について何かできなきやって思ってた」

「ああ、それはよく分かります」

そもそも会見が行われることになった経緯からしてそうだ。

「妹は甲斐田君の方が気になってるようだけど、世間の需要はまず織
斑君。今現在とにかく織斑君の情報なら何でもいいから欲しいって

くらいに飢えてる」

「そこまでですか」

「もちろん甲斐田君が自分のことを記事にして欲しいというのなら相談に乗るけど、そういう気持ちはある？」

「一切ないですね」

「うん。だからわざわざこちらにとって危険な地雷しかない甲斐田君周辺のことを記事にするつもりはないと思って大丈夫よ。それよりもこちらとしては甲斐田君には織斑君に対する便宜を図って欲しいと強く願っています」

俺にとつては都合のいい話だ。俺のことは記事にせずひたすら一夏を推したいなど都合が良過ぎるとさえ思える。

「一夏の嫌がることとかさせるつもりはないですけど」

「もちろんもちろん。だからこそね。織斑君はどういうことをされたら嫌がるのか、どういうことならあまり気にしないとか、そういう情報を知りたいわけ。織斑君ともいい関係を築きたいし、手探りでやった結果嫌な気持ちにさせるとかやりたくないのよ」

「そういうことなら無下にするような話ではないですが」

「本当に！ あ、別に今すぐ言つてとかそういうつもりじゃないからね。織斑君への取材が決まったからその前に相談させて、とかそんな感じ」

そんなことなら別にわざわざ俺を呼び出して聞くほどでもないだろう。

「実際その時になつてみないと分かりませんが、聞かれなくてもI S学園側からいろいろ言われると思いますよ。見てて分かると思いますけど一夏はああいう人間なので」

「もちろんそれは当然の話だけど、こちらとしてはやっぱり不安なんだよ。言われたことのニュアンスを取り違えて織斑君の機嫌を損ねるとか一度たりともやりたくないし。信頼を損ねるのはほんと一瞬だって話で、それってきつと私達には致命傷になりかねないの。だっていくらでも私達のような存在はいるし、わざわざ不都合な人間である必要とかないでしょ？」

要するに、将を射んと欲すればなんとやらか。

織斑一夏という人間の価値を考えれば、石橋を叩いて壊すくらいの慎重さが必要だと考えているのだろう。

「なるほど、お気持ちには理解しました」

「本当に！ いや、別に無理に合わせなくていいからね。これだけで信用してもらえるなんてこれっぽっちも思っていないから」

「否定するようなこともでもないという話ですよ。一夏に対するマスコミの方々の熱心さはこの目で見てますし、きっとそうなんだろうなという感じで」

「うん、今はそう理解してもらえれば十分だよ。そして、だからって甲斐田君が私達に便宜を図ってくれるかというのはまた別の話だってことも分かってるから」

「そう言ってもらえるとこちらとしても助かります」

織斑先生が俺に会わせたということからも鑑みて、おそらく一番難しい相手ではあるのだろう。

IS学園とも付き合いが長くそれなりの信頼関係にあり、きっとこちらの事情を理解した上で接してくれるであろう相手だ。

油断すると何も考えずに危険な発言もしてしまうことがある一夏のことを考えれば、向こうの方で配慮してくれるというのはありがたいとさえ思える。

織斑先生は俺にここを基準として考えろとでも言いたそうだ。

「もちろん、気を遣い過ぎた結果他のところに出し抜かれるというのはもつと嫌だ」

「そうでしょうね」

「だから受け身でいるわけではないということも理解してね。例えば今日、私達はこの場を得られたということで、織斑君についても一歩リードできたと思ってる」

「そうなんですか？ 記事とかにできないんですよね？ 写真のことではなく？」

「今日の写真のことならさすがに独占するというのは無理。準備していた私達が代表して撮るっただけで、この後全世界に配られるだろう

から」

一夏の写真や映像を独占した日には暴動になるか。

「それよりも、これだけ話ができたんだからもう大収穫だよ。記事とかそういう次元の話じゃない。だって他の連中って甲斐田君のことまるで気にしてないんだよ？ それどころかあの映像を見て納得してるくらいで」

「あれは……」

「ストップ。私達はそれ以上突っ込むことはしないから。会見で一切触れなかった以上わざわざ踏み込むことはしません」

「リーグマッチの時ってマスクミの人は入れなかったんですか？」

「マスクミや一般の人間が入れるのは年に一度の学園祭の時だけだよ。IS学園から映像や写真をもたらって記事を作ったりするけど、基本的に私達がIS学園の中にまで入ることはないと思って。せいぜい面会室で取材くらいかな」

「なるほど」

警備室のある建物には面会室が大小いくつもあったが、外との接点は基本そこだけなのだろう。

「というわけで、まずは甲斐田君とこうやって話をさせてもらおうところから始めようと思っっています。信頼を築くには何よりコミュニケーションンガン言っただよ。要望とか喜んで聞かせてもらうからあつたらガン言っただよ」

「あ、それなら」

「あるの!?! 何!」

「いや、そちらの作ってる雑誌を見せて欲しいなって。要望も何もどういうことをしてるのか分からないと何も言いようがないですし」

「それ! まさにそれ!」

目の前の温度が一気に上がった。

「まさか今日そこまで言ってもらえるなんて! そうそう、いくら口で立派なお題目並べたって、結果出てきたものがこれかよなんて言われちゃったらもうそれでおしまいだもの。口だけだと言われないうためにもいかにして読んでもらうかって考えてたのよ!」

「いや、そこまで言うことでもないというか、不自然な流れで言ったわけじゃないと思いますが」

「あつ、えーと、そうだ、今ここにいるのが織斑君だった場合、甲斐田君を信用してあえてこういう言い方させてもらうけど、興味ないからいらぬで終わりになってしまおうと思わない？」

「ああ。言いそうだし送られてきても読まなさそうですね」

「やっぱりそうなんだ。人に興味を持ってもらうってすごく難しいことなのよ。しかもそういうのってたいい自分の都合であって、相手からすればうざったいなんでよくあるし。だから今甲斐田君の方から言ってもらえるだなんてもう天にも昇る心地。この後戻ったらすぐ送るから。明日の午前中には届くようにするね。あ、特に見て欲しいところには付箋つけとくわ。送るのは三年分くらいでいいかな？」

「い、いや、まあそれはお任せします」

「さすがに三年分は多いか。じゃあとりあえず一年分送るね。もつと読みたかったらいつでも言つて。あとデータでも送るけど手続きがあつてちよつと時間かかるの。だからそつち派だったら申し訳ないけど届くまでは雑誌で我慢して。でもうちの紙質とか写りに気を遣つてるしデータと見比べても遜色ないから大丈夫よ」

「ここぞとばかりに俺に対してまくし立てる。」

「きつとあちらにとって勝負どころなのだろう。」

だが俺にもその気持ちはよく分かる。何しろ俺も一夏に対してどうにかして興味を持たせようとあれこれ画策してきているのだから。

突破口を見出したのであれば俺だつて躊躇などしない。

「とりあえずは見てみます。一夏はまず興味とか持たないでしょうけど」

「そこまで言わないわよ。もちろん将来的には……っていうのがあるのは否定しないけど、今は甲斐田君に見てもらえるだけで十分だから」

「それならいいです」

「むしろわがままを言わせてもらえるのなら……」

黛姉は最後まで言わずに口の前で手を合わせる。

一応予防線を張ったつもりか。

「もったいぶりますね。聞けるかはともかく言う分には構いませんよ」

「ごめんね。さつきから甲斐田君の理解が良すぎて正直いいのかなって感じなの」

「別に嫌なら嫌って言いますよ」

「ありがとう。じゃあ感想はいつ頃聞かせてもらえるかなあって」

「ああ、そういう話ですね」

これもよく分かる。

時間については俺もリーグマッチ中クラスメイト達に要求しまくっていた話だ。

特に訓練機関連は使う時間を決めさせないとこれ幸いとばかりにいつまでもやっていた。

パイロット班はできるだけ自分の使う時間を長くしようとしていたし、整備班も元に戻す時間など考えずに好き勝手改造し続ける。

時間が限られているだけに、パイロット班同士、整備班同士、パイロット班VS整備班など諍いには事欠かない。

またこの訓練機使用の時間調整については他のクラスも同様で、三組代表ベツティも今は元だが五組代表佐藤も傍から見ていてかなり苦労しているようだった。

何をどうしようが時間が足りなくて絶対に不満が出てくるので、いかにしてその不満を抑えるかという話だ。

三組ベツティはせめて平等にしようと完全ローテーション化したが、自身の訓練の効率について諦めざるをえなかった。五組佐藤は不満が積み重なった結果現五組代表杉山にそこを突かれて代表の座を失った。

そして俺は愛の突進や織斑千冬の写真によって懐柔を試みたが、結局度重なる強権発動が祟って暴君扱いされるに至っている。

「ごめん！ さすがに欲張り過ぎたね。時間とか全然気にしなくていいから。それならまたそのうちIS学園経由で様子を聞かせてもら」
「あ、そういうことじゃないです。そうですね、じゃあ二週間もらって

いいですか?」

「え?」

「暇を持て余してるわけでもないのに、来週来られても多分ロクに話せないと思います。かといってズルズルと来月の半ばに入ってくる個人戦が迫ってくるのでそれどころじゃなさそうで。そうなるともう七月に入っちゃうから、個人的には二週間後しかないかなと」

「あ、うん……」

相手が呆然と俺を見ている。

そこまでおかしなことを言っただつもりもないのだが。というかこの上なく要望に応えたつもりなのだが。

もちろん今後一夏についてそれなりの要求をするつもりなので、その代金の先払いではある。

「感想を言うくらいの会話なら大丈夫だと思うので、二週間後の日曜で面会の希望を出しておいてもらえますか。もうダメって言われた時はどうすればいいかまた考えましょう。決まりとか知らないですけど電話もありますよね」

「う、うん。そうだね……」

なぜか目の前の黛姉が動揺し始めた。

なんだろう、俺に勝手に決められるとは考えていなかったのだろうか。

とは言えこれで文句を言われると正直困ってしまうのだが。

「何か問題があれば言ってください。別にこんなことで無理してもらう必要もないんですから」

「あ、大丈夫! 全然問題ない! 完璧です! 文句のつけようもないくらいです!」

「じゃあそういうことをお願いします」

動揺しているせいかキャラが夜竹さん並の変わりようだ。

自分のペースで話をしないと維持できなかったのだろうか。

「い、言ったからね? 甲斐田君言ったからね? 後からそんなこと言っただけとか言わないですよ?」

「言いませんよそんなこと。というかさつきからどうしたんですか

？」

「二週間後に行くからね？　ほんとに行くからね？　行ったらドタキャンとかやめてよ？」

「問題が起きたらちやんと事前に連絡しますよ。この名刺の番号でいいんですよね？」

「そうそうそれぞれ。いつでもいいから。夜とか気にしなくていいから。出なくても気づき次第すぐ折り返すから」

「時差があるわけじゃないんだし夜はこっちも寝てますって。とかさつきから何なんですか？」

「約束だからね？　絶対約束したからね？　二週間後、そうだ、時間時間。何時にする？　午前？　午後？」

「どつちでもいいですけど、じゃあ午後で」

「分かった。午後ね。それなら午後一で行くからね。忘れないでよ？」

「当日行方不明とかにならないですよ？」

「そんなに嘘臭いんですか？　じゃあそのメモ帳にで良ければ一筆書きますよ」

クラスメイト達が俺を疑うのは日常だが、まさか初対面の人間にまでやられるとは夢にも思わなかった。

ペンとメモ帳を受け取って二週間後について名前付きで書き入れる。

返す時、その受取る手は震えていた。

「いやー、見てて本当におもしろかった」

と、帰り道警備の人は笑った。

「あまりに都合良すぎて立場逆転。行かせてもらうが呼ばれて行くになっちゃった。これが甲斐田君に取り込まれるということか」

「はっ。」

「クラスメイトの人達もきつとそうだったんだろうねえ」

「何言ってるんですか？」

一人勝手に納得しているが、俺はそこまで特別なことをした覚えもないのだが。

「こんにちは」

「お久しぶりです」

「久しぶりってまだあれから二週間も経ってないわよ？ それとも昔に思えてしまうくらい毎日が目まぐるしいのかしらね」

「そこまで深い意味はないです」

次の相手は打って変わって落ち着いていた。

「名刺はまだ持ってる？」

「捨てたりしませんよ」

「それはよかったわ」

「一夏だって捨ててませんが」

「でも二人とも机の中に放り込んでおしまいでしょ？」

「それは、まあそうそう使うものでもないですし」

と言っても軽口が出るあたり気安い感じだ。

一度とはいえ会話したことのある相手でもあるし、どういう雰囲気の間かはお互いに心得ている。

四十院母はそこまで娘の四十院さんに似ていなかった。もちろん顔のパーツだけ拾ってみれば同じものがあると思うが、全体的な印象はあまり似ていない。

母親の方は貫禄すら感じられる落ち着きぶりで、娘はもう少し活動的な印象だろうか。タレ目にいかにもお嬢様な見た目もあって、初対面時四十院さんのことはおっとり系かと思っていた。だが実際話してみれば頭の回転が早いなど感じるはきはきした喋り方で、一夏と会話している時思うようなもどかしさは全くない。

相手の呼吸に合わせて会話できるようで、むしろかなり話しやすい相手だ。こちらが合わせなければならぬ谷本さんや布仏さんとは雲泥の差と言えるだろう。

「さてと、改めて今日はわざわざありがとうございます」

「とんでもないです。というか決定したのは僕じゃないですし」

「あら、最終決定者はもちろん甲斐田君よ。甲斐田君が嫌だって言え

ば誰も無理強いはできないわけだから」

「それはどうでしょうね」

やれと言われたから俺は今ここにいます。

果たして嫌だという権利はあったのだろうか。

「娘經由でお話させてもらっていたのはもちろん知ってるわよね？」

「四十院さんから直接」

「話の内容については？」

「将来についての話くらいで」

「うん」

将来とはもちろん俺の将来の話だろう。

つまりIS学園を卒業した後のことで、卒業したらうちに来ないかな話だろうと想像している。

織斑先生も、今後もあるしいい機会だからできれば話くらいは聞いてやれ、と言っていた。

「卒業したらそちらに就職しないかという話でいいんですか？」

「建前はね」

「建前なんですか？」

微妙に違うらしい。

「だって三年後の甲斐田君がどうなってるかなんて、甲斐田君本人はもちろん世界の誰にも分からないことですよ？ それを今から予約なんて、皮算用にすらならないもの」

「それは……まあそうかもしれませんが」

「織斑君の方はたった一ヶ月ではつきりと道を示したわね。ISパイロットとして進むのはもう間違いないところだろうし、広告塔として計り知れないくらい価値がある。織斑先生の性格からしてきつと競技者の道かなって勝手に想像してはいるけれど」

「あの専用機からしてそうでしょうね」

倉持技研とどういう話をしてそうなったのかは知らないが、一夏の専用機について姉の意向が大いに入っていることは疑いようもない。

剣一本で世界の頂点を極めたブリュンヒルデと同じスタイルであることからまず間違いないだろう。

ちなみにあのウサ耳女は意外なことに一夏の専用機に関わっていないようで、倉持の技術力についてボロクソ言っていた。

「ところが甲斐田君は違う。娘が全く気にも留めてないって言うからこういう言い方するけど、ISパイロットになるという道はまずない。気にする？」

「全く」

「別にこんなことで気を張ることはないからね？」

「本気でどうでもいいことなので」

「そう」

俺が男であるということ抜きにしても、別に世界の誰もがISに乗りたがっているわけではない。

最初に生まれつきで弾かれるような業界であるし、そもそも大多数の一般人の女性は適正を調べてもDランクなのだ。まあCの基準に届かない者は全部Dという下を切り捨てたある意味乱暴な括りではあるが。

「甲斐田君が自分の現状をどう認識しているか分からないけれど、今甲斐田君の存在を必要としているのは、IS原理を研究している基礎研究者。甲斐田君は今研究対象として求められている」

「そうですね。そんなものだと思います」

「うん。だから生きていく分に困ることはないわよね。そんな簡単に謎が解明されるとも思えないし、そもそもISについてはそれ以外の部分ですら分からないことだらけの現状なんだから。IS原理については不明瞭なことが多過ぎてどこも研究予算を削れないし、少なくとも甲斐田君が生きている間くらいは食べるに困ることもないと思うわ」

「はあ」

勧誘どころか人生安泰だと言われてしまった。

いや、四十院母の会社はそういうIS原理について研究しているのだろうか。

だからうちに来ないかという話で。

「その上で、甲斐田君はそれでいいのかという話」

「それでいいというかそんなんですけど」

「そういうことじゃなくて、甲斐田君本人はそれをよしとするか」

「よしも何も現状そうで、僕が決められることじゃないんですが」

「不満とか何もなくてそのままでもいいと思うのならそれはそれでいいと思うわよ。甲斐田君の人生なんだから」

ちよつと違うか。

そんなつままないことしてないでもっとすごいことしようぜ、的な勧誘だろうか。

「えーと、つまりそちらの会社に就職すれば全く違うことができるというような話ですか？」

「あら、そういう風に聞こえた？」

「申し訳ないんですが時間なくて、そちらがどういう会社かまでは把握しきれなくて」

「全然謝ることじゃないわ。そこまでしてもらえてたらむしろびつくりだから。でもそうね、もしうちに来てくれたとしてもそこまで特殊なことはできないわね。何よりうちはISそのものを作っているわけではないもの」

「そうなんですか？」

IS 関連企業とは聞いていたが、ISを開発しているわけではないのか。

パーツを作っているとかそんな感じだろうか。

「もちろん将来的にはと思っっているけれど、今はまだ未来の夢ね。旧来の軍事関係をやっていたせいでIS参入に完全に出遅れたというのもあって」

「ああ、そういえば財閥系でしたね」

「よく覚えていてくれたわね。もしかしてあの子、普段からそういう空気を出してたりする？」

「全然そういうことじゃないです。たまたま記憶にあっただけで」

「それならよかったわ。IS学園でそんな真似をするなんて自殺行為にも程がある話だもの」

四十院母が声を潜める。

四十院さんが超お嬢様だというのはクラスでは誰もが知っている話だ。

もつとも程度の差はあれどクラスメイト達は全員がそれなりの家庭らしく、苦学生のような人は少なくともクラスにはいない。

オルコットなどは本人曰くだが祖国で名のある家系だそうで、立ち振る舞いからしていかにも伝統の重みを背負った貴族という感じだ。

ただ、外国籍であるオルコットとリアーデを除けば、つまり日本人の中でという話だが、どうやら四十院さんはその中でも群を抜いているようだ。相川さんのような一般家庭のクラスメイト達からすれば一歩引いてしまうような存在であるらしい。

直系ではないにしろ本家筋のそれなりにある立場だとか何とか。

「じゃあ何を作ってるんですか？」

「あら、気にしてくれるの？」

「いや、話の流れ的に」

「そうよね。うちは主にIS武装の開発をやっているわ」

「武装って言うと、例えばレーザーとかですか？」

「そうね、レーザー関係は今うちの主力のひとつだわ。何しろこれから伸びしろのあるものだから」

「へえ。そういえばあの時四十院さんはよくレーザー銃を持ち出してくれたなあって思いました。もしかして四十院さんにそういうのはあったのかな？」

「そうそう。実はあの時あの子が手にしていたのはうちのものなの。と言っても意識して選んだわけではなくて、とっさのことだったから見覚えのある武器に手が出ただけだそうよ」

「なるほど」

即座にレーザー銃を取り出した時の四十院さんには頼もしさを感じたものだ。

そして俺も先週あの時の反省をした際にきちんと感謝の意を伝えている。クロエの言に従ってではあるが。

「話がそれちやったわね。だからうちでしかできないことがあるかと言われると、正直うんとは言えないの。レーザー関係だって倉持技

研、織斑君の専用機を開発したところね、そこも作っているし国内ではシェア的にはつきり言って勝負にすらなっていないくらいだから」

「そうなんですか。一夏の整備士さんが倉持は国内ナンバーワンだっ
て自慢してましたが」

「ナンバーワンどころか日本はほとんど倉持ね。日本政府にIS委員
会本部と組んで、向こう十年は盤石な体制だわ」

「それは……大変ですね。割り込む余地すらなさそうに聞こえます
が」

それでは俺を雇う以前の話ではないだろうか。

「日本でなんて最初から勝負する気はないわよ。市場は世界中にある
んだから、勝負は世界で」

「世界ならいけそうなんですか?」

「いけそうどころか勝負どころ。日本はISそのものが開発された国
なだけあって、総合的な技術なら今でも世界のトップよ。同じことを
するのであれば断然日本の方が強い。どうもIS固有の技術が日本
以外の国にはとっつきにくいみたいなの。もちろん追いつき追い越
せでそのうち均質化されてしまうだろうけど、今ならまだ日本の方
が優位。だから世界に食い込むのは今しかないという勢いでやって
いるわけなのよ」

「へー。いろいろあるんですね」

それはきつとIS開発者篠ノ之束が自分のやりやすいようにやつ
たせいだろう。

自分さえ良ければいいでやっていて、かつここまで世界に広める
つもりもなかったのだから、結果その技術は相当に特殊なものになっ
てしまったと言えそうだ。

博士が初めてISの開発を発表した時、世界は誰も相手にしなかつ
た。それはあらゆる面で滅茶苦茶だったからだそうだが、そこには技
術関連も入っていたに違いない。

もっとも、無視されたせいで博士は実力行使によって世界にその存
在を認めさせることにしたわけだが。

「分かってもらえたかしら?」

「十分理解できました。でもですね、そうするとなんですが」「何?」

「わざわざ僕を勧誘とかする意味はあるんでしょうか?」

「ふふっ、もちろんこちらとしてはあるわよ。でも甲斐田君がわざわざうちを選ぶ意味はあるのかと言われると、正直ないわね」

「はつきり言いますね」

「さすがにごまかしようもない事実だもの。それなら正直に言うのが一番よね」

「だったらなおさら何しに来たという次元の話だ。」

「暇を持て余しているわけではあるまいし、社長をやっているならそれなりに忙しい身だろうに。」

「えーと」

「それならいったい何をしに来たんだって顔ね」

「端的に言えばその通りで」

「半分は今の話をしに」

「今の話?」

「うちの会社と言うよりは、IS業界の話ね」

「はあ」

「甲斐田君の将来のためにまずそこから始めましたって言えば、今回は言い訳つくから」

「言い訳する対象とはきつと織斑先生だろうが、織斑先生の部下である警備の人の前で言ってしまったていいのだろうか。」

「今度はいつもの人とは別の人が立っている。ようやく休めると言っていたから今のこの間に休んでいるのだろう。」

「やっぱり建前は必要なのよ。社長なんてやってるものだから下がいろいろうるさくて。無駄なことに時間使うんじゃないって下の人間が怒るの」

「ああ、そっちですか」

「織斑先生のことなら、最初から分かっていると思うわ。甲斐田君がうちを選ぶメリットなんて何も無いことくらいね。O・K.を出してもらえたのはもしかしたら勧誘とはこういうものだというのを見

せたかったのかもしれないわね」

なにやらぶつちやけモードに入ってきた。

俺以前に警備の人がいるのだが、織斑先生に今の話が伝わっても構わないということなのだろうか。

「そういうことはもう半分、これからの話が本題なんですか？」

「もちろんよ！」

「ではそれは」

「当然娘のことに決まっているわ。あの子がIS学園でちゃんとやっているかもう心配で心配で……」

「は？」

社長オーラが急に消えた。

まさか。

「去年の春にIS学園に行きたいなんて言い出した時は何の冗談かと思っただわ。最初私の後を継いでくれる気になったのかと思っただけど、ISパイロットや整備士の資格が欲しいわけじゃないって。そして私の後を継ぐつもりもないって。じゃあ何をしに行くのかって聞いたらIS学園に入ったら指揮科に進むつもりだって言うのよ。呆れてものが言えなかったわ」

「それは……大変でしたね」

「もうダブルシヨックよ。それに合格どころか指揮科だなんて、甲斐田君も知ってるわよね？ 指揮科って学年で上位十人くらいの中に入っていないといけないでしょ。それを中三になって受験するなんて言うような人間が行けるわけじゃないじゃない。それどころか合格からして怪しいわよ。だいたいIS学園を目指すような人は中学に入ったらすぐ、下手をすれば小学生のうちから勉強してるんだから」

「そうらしいですね」

娘のことを心から心配する母親の姿、ではある。だがこれから俺は相手にとっての本題、娘の四十院さんについて長話を聞かされることになるのかもしれない。そのうち質問攻めもありそうだ。

ああ確かに娘の様子を聞き出すにはいい口実であり建前だと思っ

た。

11. 面会 Round 2

娘トークが始まった。

しかし、この状態は俺もよく知っている。

特定の女によくある語りモードだ。

この状態になると女という生き物はひたすら自分の頭に浮かんだことを口から吐き続ける機械となってしまう。

とはいえ目の前の四十院母の状態はまだ軽度だと言えるだろう。まだ俺という存在を意識して話している。俺の反応を見る余裕がある。

説教中の篠ノ之さんや自己演出中の生徒会長よりはよほどましだ。

「でもまあいいわよ。有言実行で見事IS学園に合格したんだからさすがに行くなどは言わないわよ。でもね、合格して初めて気づいたんだけど、あの子は果たしてIS学園でやっていけるのかつて。今まで全部他人にやってもらっていたのにいきなり寮生活だなんて、生きていけるのからして不安だわ」

「いやいやいや、無人島に取り残されたんじゃないんですから。そういうのは四十院さんに限った話でもないですし、きちんとIS学園のサポートがあります」

ルームメイトという協力者もいるとはいえ、三年という長期間親元を離れて暮らすのだ。

当然IS学園も分かっている、生活のための支援を行っている。

俺と一夏には必要なかったが、家事に関する事柄は頼めば教えてもらえるそうだ。

「ああ、甲斐田君はきつとできる人ね。でもね、できない人がちよつと教えてもらったからといってすぐできるようになるとは思わないで。洗濯一つにしてもできない人は本当にできないんだから。甲斐田君も例えば寮で洗濯物が干されているのを見てこれはひどいと思わなかった？」

「寮の裏手には僕と一夏は行かないで欲しいって懇願されているので見たことないですね」

「あ、それはそうですね」

施設で生活していたので別に俺も一夏も今さら気にしたりはしないのだが、女とはそういうのをとことん気にする生き物らしい。

施設にいた時も十歳くらいから俺に洗濯されるのを嫌がるようなのが出てきていた。もちろん全く気にしないのも普通にいたが。

とはいえ弾や数馬を見る限り、きつとそれは正当な反応なのだろうということであれ俺も一夏も文句を言うようなことはない。

「甲斐田君はできる人みたいだけど、それなら家事とか生活の部分で相談はされなかった？ 例えばクラスの人とか」

「そういえばないですね。入学してからずっとばたばたしていたというのもありですけど、誰かが寮で生活してて困っているような話は聞いたことないです。だから四十院さんも大丈夫だと思えますよ」

「あー、さすがに男の子には言えないか。本当はそういうのは男の子の得意分野なんだから積極的に聞きに行くべきなんだけどね」

主夫という一つの未来選択肢が存在している以上、男の方が意識して身に付けるというのはあるだろう。

一夏は別段意識していなかったが今や超一流の主夫になっていたりする。実はズボラな姉のせいも半分入っているだろうが。

「聞かれれば僕も一夏も普通に答えますよ。聞かれたらの話ですが」

「本当に？ でもあの子プライドだけは一人前だし、最近は私の言うことも聞いてくれなくなってきたし、たとえば甲斐田君が声をかけてくれたとしても大丈夫だって言い張るだろうね」

「反抗期ですか」

「そこまでは言わないけれど、年々邪険にされるといいうか、一緒にいてくれなくなつて。背伸びしたいんだらうなと思って接したらそれも気に入らないらしくて、子育ては本当に難しいわ」

「大変そうですね」

愚痴まで入ってきた。と言ってもそれくらいは最初から予想していたので、別にだからどうだというわけでもないが。

こういうのは口に出せばそれなりに満足してくれるし、別に本気で他人の意見など求めているわけでもない。

「そういう子だからね、大丈夫かって聞いても問題ないとかか答えてくれないのよ。ねえ甲斐田君、あの子は、神楽は本当にちゃんとやれているのかしら？」

「いや、生活の部分まではさすがに分かりませんが、少なくとも見ている戸惑っているような感じではなかったと思いますよ。むしろ中庭で優雅にお茶してるイメージでしたね。オルコットさんやりアーデさんと」

「あら、それは本当でいいのね。この前の時お二人からご挨拶されたけれど、社交辞令かなと思ってたわ」

この前とはリーグマツチが終わった後午後にあつたらしい国家、企業間の交流会のことだろう。一夏はお偉いさんの相手と言っていたが。

その時俺は医務室に軟禁されていたので出ていないが、一夏経由で俺の居場所を知った人達はわざわざ医務室まで挨拶に来ていた。四十院母もその一人でそれが初対面だった。

「この目で見たので本当ですよ。それも一回きりというわけでもないです。入学してからしばらくはそういう光景をよく見た気がしますね。すぐにリーグマツチの準備が始まったので一緒にいられる機会は減ったみたいですけど」

「そう。それはほっとしたわ。あ、でも留学生の方々と仲良くしていたということは、裏を返せば他のクラスメイトの人達とは仲良くできなかつたんじゃ……？」

「え？」
なんだろう、これは心配症なのだろうか。それともある種の親馬鹿なのだろうか。

「甲斐田君、もしかしてうちの神楽は村八分にされていたりする？
それでオルコットさんとリアーデさんが見かねて声をかけてくれたというのが真相じゃ……」

「そんなことはまったくもってないです。今いた二人以外でなら、今

は鷹月さんとよく一緒にいますね。あとは……布仏さんと谷本さんかな。この二人も四十院さんと会話しているのをよく見ます」

「鷹月さんに、布仏さんに、谷本さん。それくらい？」

「それくらいって、そんな全員と満遍なく仲いい人なんていませんよ。みんな三、四人くらいで行動してますし、四十院さんも別に例外というわけじゃないです」

「だいたいリーグマッチの準備が始まる前と後でつるむ人間が変わったように思う。」

例えばちびっ子コンビ、布仏さんと岸原さんは入学当初一緒にいた記憶がない。布仏さんはあまりつるまず基本一人で行動していたようだったし、岸原さんは鏡さんとセットだった気がする。

「それならいいけど……じゃあその鷹月さん達とはどんな感じなのかしら？ 仕方なく付き合ってるというような感じではない？」

「なんでそんなに娘さんを貶めるのか分かんないですけど、鷹月さんとはこの一ヶ月指揮班としてずっと一緒にやってきましたから相当に仲いいですよ。鷹月さんも指揮科を目指していて、二人で一緒に勉強しよう的な感じでやってますね」

だがそこに俺まで巻き込まうとしているのは気に食わない。

もちろん俺に宣言した通り鷹月さんの策略だが、今や四十院さんも完全に乗ってしまっている。

ゴレム戦について、まあ鷹月さん達はその名前など知らないが、あの時の反省をしよう、先輩に言われたことについてはつきりさせておこうと持ちかけられた時、俺は断固としてノーを貫けなかった。自分の中に本当のところはどうだったんだろうというモヤモヤが残っていたせいだ。

もっともそれによって少しでも隙を見せてはつけ込まれると悟ったので、以後は拒否を貫けているが。

「なるほど。指揮科を目指しているのはクラスでは二人だけ？」

「そうだと思います。もしかしたら整備班の数人は密かに目指していたりするかもしれませんが、表立って言っているのはその二人だけです」

「それが布仏さんと谷本さん？」

「そういうことでは全然ないです。整備科と、衛生科に行くのか？という感じですし、そもそもその二人は人を仕切れる人間ではないですね」

「ここでは特に関係ない余計なことを言ってしまった。」

俺が勝手に怪しいと思っっているのは鏡さんだ。整備班を纏めていたりして割と仕切りたがりな面がある。こっそり指揮科を目指しているような気がするが、まあ今は下衆の勘ぐりレベルだろう。

だが布仏さんと谷本さんに至ってはまずない。普段から何を考えているのか分かりにくい二人ではあるが、少なくともあれでは人がついてこないだろうと言える。

「じゃあどの二人とはどういう経緯で？」

「それは……：そういうえばいつの間にかって感じですね。リーグマツチ中そこまで接点があるわけでもなかったですし、僕の知らないうちというか……いや、というかそもそも僕がクラスの間関係を全部把握してるとかないですから。四十院さんと鷹月さんについては指揮班で一緒だったから知ってるだけで」

「あら、そうなの？ 神楽は、甲斐田君はクラスの人間関係を全て把握してコントロールしている、とまで言っていたんだけど」

「それ僕はいったい何者なんですか」
むしろコントロールできなくて強権発動ばかりしていたくらいなのだが。

わりと側で見ていたはずなのに四十院さんは俺を何だと思っっている。

「でも神楽が言ってたわよ。誰々と誰々がぶつかると火が大きくなるから近づけさせないとか、誰々と誰々は仲いいから一緒に作業させると効率が上がるとか、そういうコントロールを甲斐田君はしてたつて」

「そういう話ですか。それはむしろ対処療法的な話で」

そっち方面の話か。

最初のは相川さんと鏡さんはぶつかると喧嘩するくせに俺に対し

ては結託して向かってくるので、面倒だから最初からかち合わないようにしたという話だ。

効率が上がるというのはきつと、夜竹さんと田嶋さんは一緒にすると遊び出すという話だろう。だから効率以前に仕事をさせるには鏡さんを監視役に置いておく必要があるというという対処が誤解されている。

四十院さんにそこまで言った覚えもないので、きつとクラスメイト経由でねじ曲がって伝えられたのだろう。

「やっぱりコントロールしてるじゃない。甲斐田君的には自分はまだまだだって言いたいよね」

「まだまだとか言えるような次元でもないです。というか僕のことはどうでもよくて、四十院さんは人間関係で問題とか特に抱えてないと思いますよ」

「日常生活の方はまだ大丈夫そうね。じゃあ神楽は、指揮の方をうまくやれてないでしょう?」

「なんでそんな決め付けるんですか?」

もしかして俺に否定してもらうためにあえてそういう言い方をしているのだろうか。

これも親馬鹿の一つの形だったりするのか。

「この前会った時ね、入学して鼻っ柱を叩き折られましたって顔してたのよ。入学する前はこれでもかかってくらい自信満々だったくせにね」

「入学前は知りませんが、別にそんな感じでもなかったような」

「トップに立つだけが全てじゃない、なんて言い出して、ああこれは敗北感挫折感を味わったんだろうなって思えたのよ。それまではとにかく自分が一番! って感じだったのに」

「それ普通に成長したじゃ駄目なんですか?」

「なにくそ負けるもんか! じゃなくて、もっと別な道もある、だからね。たった一ヶ月でもうそんなことを言い始めるんだから、これは相当にうまくいっていないんだろうなって。日常生活で躓いたかなって思ってたけれど、聞く限りじゃ指揮の方みたいね」

この一ヶ月であったことならもうリーグマッチしかない。
そしてリーグマッチでうまくいかなかったことと言えば、対三組四組戦だろうか。

俺などは、なんだかんで勝てたからよし、なのだが、主導していたあの二人はそれなりにシヨックを受けているようではあった。

色んな意味で考えが甘く足りなかったのは事実だが、俺としては何もかも手探りだったしそんなものだろう、という程度だ。

「思い当たる節がありそうね」

「思い当たるも何もリーグマッチしかないわけですが」

「全勝して優勝したのに？」

「見てたのなら分かると思いますけれど、あれは何一つとしてうまくいってないですから。全部一夏が自分の力で何とかしてくれただけです。あと運が味方についていた」

「そう。もっとうまくやれたはずだ、とは思わなかった？」

鷹月さんがよくそう言い方をする。こうしなきゃいけなかったと。

リーグマッチ本番中ではよく聞いた言葉だが、確かにその通りではあるが、果たしてその時の自分にそういう選択ができたかと考えてみると、怪しいことが多々あったりする。

もちろん俺だって失敗した日にはああすればよかったと後悔して反省する。

だがその選択だってそれなりに考えた上で決めたわけで、その時はそれが最善の選択なはずだった。

だからその時の自分にそれ以上のものを出せたかと考えてみると、実際どうなんだろうと思う。

「本当にやれるはずならその時やれています。でも実際やれてないんだからできなかつたんですよ。もちろん反省としてそう思ったりはしますが」

「甲斐田君つてもしかして人生をやり直したいとか考えないタイプ？」

「記憶とか持ち越さなければ同じことを繰り返すだけだと思います

し、そういうのにはあんまり興味もないですね」

「あら意外。ISに関わらなかつた場合の人生とか考えちゃうものだと」

そんなもの、今の方が断然いいに決まっている。

クロエに出会えて、お陰で博士と出くわしてその後日本に来て一夏と知り合つて、何の文句があるだろうか。

少なくとも、今の俺は自分の意思で考え行動できている。たとえばそれがおまけの人生だとしても。

「そういうのつて自分にプロのスポーツ選手並の才能があつたらとか妄想するのと一緒ですよ。さすがにありえない想像をしてられるほど暇ではないので」

「ふうん。甲斐田君はこんな状況になつても前向きでいられるんだ」

「別に自分の現実を否定することはしないつてだけです。まあここまでそういうことを考える余裕もないくらい目まぐるしいだけかもしれないですけど。……いや、だから別に僕の話はどうでもよくて、娘さんの話ですよ。確かに四十院さんが本番中うまくいかなくて凹んでいたのは事実です。でも今はもう完全に立ち直つてますよ」

「あら、そうなの？」

本当に、話の逸れる人だ。

そんなに娘が心配なら娘のことだけを気にしていればいいのに、変に気を遣つているのか俺はどうなんだと振つてくる。

それともこういうまわりくどいことをするのが上流階級の嗜みなのだろうか。オルコットなども余裕があるときは雑談から入つて本題に入るのが遅いし。

「鷹月さんもそうでしたが、その時の四十院さんが自信を失つていたのは確かです。でも今はもう普通に元気ですよ。別に現実逃避をしてるとかじゃなく、きちんと起こつたことは事実として受け止めていきます」

「本当に？」

「先週に反省会しましたが、引きずつてる様子は全くなかつたですね。むしろとても糧になるいい経験だつたと前向きでしたよ」

「そう」

「四十院さんは終わって数日もしないうちに元気になってました。今はもうやる気に満ち溢れている感じです。来月には個人戦が控えますし、凹んでいる場合じゃないということかもしれません」

リーグマッチが終わって十日ほど経ち、クラスの中もそろそろ優勝の余韻は薄れてきている。

そして一方で、六月末から七月頭の二週間もかけて行われる全員参加な個人戦が待っている。

今度は見ているだけではなく自分が当事者なのだし、何より負けたら終わりのトーナメント戦だ。IS学園の生徒である以上ISに乗って試合を行うのは夢だったろうし、クラス代表以外の生徒にとってはむしろそちらの方が本命だろう。

「そう。それならよかったわ。神楽は何を聞いてももう大丈夫だからとしか言わないんだもの」

「確かにリーグマッチはいろいろあったせいで四十院さんもどこか変だったと思います。たった一ヶ月しか見てないですけどらしからぬおかしな行動をしてたりしました。でも今はもう完全に元気になりますし、張り切ってやっています」

「おかしな行動？」

「んーまあ、そのへんは本人の名誉のためにノーコメントで」

鷹月さんと一緒にクラスメイト連中を煽って俺を軟禁したり、黒歴史を作ったり。

やはりあの頃は四十院さんも情緒不安定になっていた部分があったのだろう。

「何をしたか聞きたいけどダメ？」

「仲間を売るような真似はしません」

「えー、神楽の母親なんだから本人のことくらい聞かせてくれてもいいじゃないの」

「尚更ですよ。十年後に笑い話として本人から聞いてください」

「今だと笑えないんだ……」

入学初日のオルコットの例を鑑みても、自分の黒歴史を暴かれると

非常に痛い。

だから俺は十年後に爆発する時限爆弾を仕掛けることにした。たまにはこういう仕返しもいいだろう。よく考えたら俺は軟禁されたことへの仕返しをまだやっていなかった。

「そういうわけなので四十院さんは大丈夫です。この調子なら初志貫徹して見事指揮科に進むと思いますよ」

「ということは個人戦の方がダメージは大きそうね」

「なんでダメージを受けるのが前提なんですか。もうちよつと自分の娘を信じましょうよ」

これはやはり否定して欲しい系の親馬鹿か。

「甲斐田君、個人戦が終わったらまた神楽の話聞かせてもらえる？」

「それもはや勧誘の口実捨ててませんか？」

「大丈夫、表向きは甲斐田君への勧誘ということにするから」

「そういう問題ではなく」

もしかしたら四十院さんは過保護な親に嫌気が差して自立を志したのかもしれない。

「勧誘だけでは理由付けとして弱いか……。じゃあ業界の話とかもう少しもつともらしい理由を考えておくわ」

「ええとですね、四十院さんが心配なのは分かりますけど、もう少し信じてあげられませんか。それに自分の娘が心配なのはIS学園の生徒の親みんなですよ。娘経由以外では知ることできないのが普通なんだから、自重しましょうよ」

「あら、甲斐田君を通じて知ることができると分かっているのに、どうして自重する必要があるのかしら？」

「今回は僕も織斑先生も知らなかったからです。というか次は建前を捨てた時点で織斑先生が許しませんよ」

「つまり織斑先生を説得すればいいわけね」

「できるものならどうぞ」

この場にいるのは俺と四十院母だけではない。

部屋の入口にIS学園警備の人が立っている。

今はなじみの人ではないが、それでも話は聞こえているだろうし、

当然終わった後織斑先生に報告するだろう。

俺の話だけならともかく、第三者の報告付きでは織斑先生にこいつはダメだと思われるのは間違いない。

「よし、聞きたいことはだいたい聞けたし、今日はこれくらいにしておくわ」

「それはよかったですね」

「今日はありがとう。甲斐田君は本当に話しやすかったし、興味深い話がたくさん聞けました」

「それは何よりです」

「だいぶお疲れみたいね。甲斐田君の今日はこれでおしまい？」

「いえ、もう一件残ってます」

精神的疲労の主な原因は目の前にあるのだが。

「あらそれは大変。でもこういうのって慣れの部分が大きいから、そのうち何とも思わなくなるわよ」

「そうだといいですね」

言いながら俺達は立ち上がる。

だがそれ以前に俺自身が無防備過ぎた。

知り合いの親だということもあって気を抜いていて、正直何も考えていなかった。

「ではまた次の機会に」

「次があるといいですね」

まあ今回は俺にとつての練習のようなものだし、第一織斑先生がこんなくだらないことに時間を使わせるような真似はしないと思うけれど。

「初めまして。デュノア社の黒木和海（くろきかずみ）と申します」

最後の一人は男だった。

年は三十前後くらいだろうか。黒髪短髪な爽やか好青年という見た目で、技術者と聞いていたがむしろアウトドア系な印象だ。

スーツではなく白衣でも着たらそれっぽく見えるのかもしれない

が。

「甲斐田智希です」

「今日はお会いしていただき本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます」

「とんでもないです」

「なんだかすごく社会人という感じだ。」

「一回り以上年上の相手に敬語を使われるとむず痒いような感覚に襲われることを知った。」

「……」

「な、なんですか?」

「失礼。間近で見るとこういう感じなのかと思ひまして」

「笑顔から急に真剣な表情に変わってじっと見られた。」

「値踏みでもされたのだろうか。」

「想像とは違っていましたか?」

「いえ、どういうタイプのリーダーだろうと思っていましたので。一口にリーダーと言ってもいろいろありますので」

「リーダー? 僕が?」

「ええ、あなたは誰よりもリーダーをやっていましたよ。あの集団模倣戦の場で」

「いきなりストレートに突っ込んできた。」

「黛姉はそれ以上突っ込まないと言った。四十院母は流した。」

「だが目の前の社会人は二言目で切り込んできた。」

「それは……」

「座りましょうか。このまま立ち話では足も疲れてしまうでしょう」

「あくまでにごやかに、俺を席へと促した。」

「改めまして、本日この場を設けていただいたことに心よりお礼申し上げます」

「お礼なら織斑先生に言ってください。決めたのは織斑先生ですか」

「なるほど。では後ほど織斑千冬様に感謝を。ですがそれはそれはそ

れとして、拒否をすることもなく快く受けていただいた甲斐田様にも感謝致します」

「とんでもないです」

今日会った三人とも、わざわざ俺について言及している。

織斑先生が全てを決めているであろうことくらい分かっているだろうに。

「さて、今日お伺いしたのは私個人の話であって、特に会社に言われてどうこうというわけではありません」

「そうなんですか?」

「はい。実を言えば話を聞きつけた我が社の社長から言伝を預かって参りましたが、それは全く気にしないでいただいて結構です」

「それでいいんですか?」

社会人扱いと思っていたらあるまじきことを言い始めた。

「本当は一科学者として一個人としてお会いしたかったのに、こんなお使いを頼まれたせいで余計な重しがついてしまいました。このために来たと思われるのは非常に不本意なので、むしろ甲斐田様には全く気にしないでいただけると嬉しいです」

「内容にもよりますけど……気にしてしまうような内容なんでしょうか?」

「正直申し上げます。社長のデユノアは織斑一夏様へ面談を申し込んでいたそうなのですがあっさり断られ、そこへ私のことを聞きつけて無理やりねじ込んできたのです。最後は懇願までされたので従いますが、できれば甲斐田様には聞き流していただければと」

不満やるかたないという表情だ。

だが聞き流せはさすがに言い過ぎではないだろうか。

「余計なお世話かもしれませんが、立場的にそこまで言わなくてもいいのでは……」

「私の見解も同時に甲斐田様に伝えることまで込みでの話ですから。それに聞かされたところでどうしろという話でもありますし」

「とりあえず先に伝言の内容を聞かせてください」

「失礼致しました。では申し上げます。『私の息子を助けてやって欲

しい』 以上です」

「はっ。」

「どういう話かと言うとですね、我が社の社長デュノアの息子は男性
IS操縦者だという話なのです」

とんでもない爆弾発言が飛び出してきた。

世界には四人の男性IS操縦者がいると言われている。

一人目はもちろん我らが織斑一夏。二人目は甲斐田智希、俺のこと
だ。二人とも日本国籍。

そして三人目、四人目がフランスとドイツにいて言われている。

言われている、というのは国がそう発表しただけで、顔も名前も公
表されていないからだ。

だから本当にいるのかと實在すら疑われているのが現状である。

発表から二ヶ月経った今も、両国は沈黙を守ったままだ。

「なるほど。でも助けて欲しいというのはどういうことでしょうか
？」

「単純な家庭内不和です。実の息子であることに間違いはないのです
が、それは妻の子ではなかった。愛人の子だったそうです。しかも長
年妻には隠してきたとのことで」

「はあ」

「ああ、ここは日本でしたね。他の国ならいざ知らず、フランスで妻が
いるのに愛人を作るなんて唾棄すべき行為です。それにきちんとけ
じめをつけるならまだしもずるずると二十年も続けるなど、正直呆れ
てももの言えません」

「そういえば、純愛を謳う国家フランスとは一夫一妻制最後の牙城
だった。」

「当然社長夫人やその娘達は大激怒で、今フランス国内は大騒ぎです。
デュノア社長一家はフランスの模範的な家族だと思われていたこと
もあって余計に非難一色ですね」

「そんなに大騒ぎなんですか？」

「もちろん息子が男性IS操縦者であることは伏せられています。と

いうよりこの様相ではとても公表できないという状況でしょうか」

「そんなに問題なんですか？ その、愛人がいたというのは」

「複数の女性と付き合いたいのであればイタリアにでもスペインにでも移住して『自由恋愛』などと嘯いていればいいのです。デユノアはことフランスにおいて、常日頃は最愛の妻と娘達というポーズを取っておきながら裏でそういう行動をしていた。だから非難されるのです」

二十年も隠し通してきたのならそのまま隠しておけばよいのに、どうして明らかにしてしまったのか。

自分の息子がISを動かせると知ってしまったからなのか。

「なるほど、事情は理解しました。でもどうしてそこで僕や一夏に息子を助けて欲しいのでしょうか？」

「息子と同じ男性IS操縦者である、この一点だけです。私も問い正しましたが、同じ境遇であることから同情を引こうとしているように見えました。有り体に言えば、お二人を利用して自分の立場を守ろうとしているようです」

「子供に罪はないから子供だけでも守ろうとしての話では？」

「表向きはそういう言い方だったので私もお伝えすることに同意しました。ですが個人的に信用できないと思いましたが、こうして私の見解を付け加えることを条件として出しました。社長のデユノアも認めたことですので、甲斐田様が心配するようなことは何もありません」

自分の社員に反対意見も込みだと言われても認めざるをえなかったとは、デユノア社長は相当に切羽詰まっているのか。

社員にここまで堂々と批判されてしまうようではもう風前の灯なのかも知れない。あるいは目の前の社員は反社長派とか。

「確かにだからどうしろという話ですね」

「男性IS操縦者という誼から介入をして欲しいのでしょうか。お二人だけでなく、織斑千冬様やIS委員会にも。何しろ我がデユノア社はラファール・リヴァイブによって今や世界中に大きなシェアを持っていますし、社長個人の話とはいえ長引いては社会的な影響も出かねな

いという懸念もなくなはないのです」

「確かに僕らに何ができるといっわけでもないですし、僕らの後ろにいる人達が目的なら分からなくもないですね」

「ラファールの会社だったのか。」

「ISラファール・リヴァイブはIS学園にも置かれている。先輩やクラスメイト達曰く、ラファールは汎用性なら世界一らしい。」

「IS学園では前衛盾型の打鉄、後方支援型のメルシウトロームと比べて万能型という位置づけだ。」

「基本性能は他の特化型二つよりも劣るが、その分拡張性に優れている。後付の武装によって様々な役割をこなすことができるというのが売りだそうだ。」

「リーグマツチでは三組五組の専用機のないクラスが採用していた。『デュノアの息子は国の庇護下にあるそうですし、身体的な意味での助けなど必要はないでしょう。そして精神的な意味ではそれは家庭の問題であって、騒ぎの元凶とも言えるデュノア本人がどうにかすべきことでしょう。ですからそんなあやふやな言葉で甲斐田様がわざわざ出て行かれる必要などないのです』
「なるほど」

「男性IS操縦者であるデュノアの息子についてはいずれ国を通じた交流があるでしょう。今何の得もないしそもそも関係のないゴタゴタに巻き込まれることなどないです。それは決着がついて落ちて着いてからで何も問題はないと思います」

「デュノア社長が社長をやめて一般人に戻ってからでいいということですね」

「試しにつついてみると、目の前の社会人は俺を見てそれから頭を垂れ、残念そうに深い溜息を吐いた。」

「イラツとはしなかった。だから言いたくなかったんだ顔だったからだ。」

「やはりそう思いますよね。社長派と反社長派の権力争いが行われていると。そして私がそういう政治的な意図を持ってやって来たのだと。だから言いたくなかったのです」

「すいません。そこまで反対されると何かあるのかなと」

「あるとすれば社長個人に対する軽蔑の思いです。誰に対しても誠実でない、そして国家の尊厳を踏みにじった唾棄すべき行為に対して、憤りを感じているからなのです」

「黒木さんはフランスの方なんですか？ 名前から勝手に日本の方かと思っていましたか」

「名前の通り生まれは日本です。今はフランス国籍ですが」

「それは……」

「はい。私はフランスを選びました。世界で唯一、男性を女性と対等と認めている国家、フランスを」

そういう人達がいるというのは聞いたことがあった。

女性優位でない社会があるならこうやって窮屈に暮らしてないでそこに行けばいいじゃないか、と言って本当に行ってしまった人達がいるそうだ。

男女が対等でなければ愛は成立しないと言うお題目を本気で掲げている国、それが一夫一妻制最後の牙城にして『純愛』至上主義国家と呼ばれているフランスである。

そもそも、もはや世界レベルで男の数は女に比べて少ない。

人工授精の技術発展によって子孫を繋いでいくことについてはかろうじて維持できているそうだが、一夫一妻が原則の結婚制度についてはもうどうにもならない。男女一対一で結婚しては女が二、三人余る勘定だから、結婚できない方が多数派になる。

しかしかと言って単純に一夫多妻を認めてしまうと、今度は社会の構造上女が男のために働くという構図になってしまう。女性上位の社会が形作られていく過程で、男達は出世はもちろん職業選択の自由まで奪われている。男がいなくても回る社会になってしまったので、今はもう事実上男は女に養われている状態だ。だが結婚相手を養うならまだ許せても、多数で一人の男を囲うのは男尊女卑時代のハーレムを思い出させて立場が逆転したみたいで抵抗があるらしい。少な

くとも、女性上位を主張してきた偉い人達にとっては。

俺からすればハーレムの定義から間違えていると言いたいくらいだが。

と言っても結婚制度が現状に合わないのは事実なので、各国はそれぞれお国柄に合わせて対応している。

あくまで維持するか、いつそなくしてしまうか、あるいは現状追認でなし崩していくか。

やたら自己主張の激しいヨーロッパでは特に顕著で、フランスでは国ごと心中する勢いで守り、イギリス、ドイツは下からのなし崩しで事実上形骸化させ、イタリア、スペインは結婚制度そのものを撤廃した。

その他新たな形を作ろうとしている国も世界にはある。

そして今、俺の目の前にいるのがフランス人である。

見た目は日本人だが中身はもう完全にフランス人だろう。ある意味フランスで生まれた人よりも気持ちは強いかもしれない。

しかし男でよかった。フランス人の女など俺の中で絶対に一夏には近づけたくない存在の筆頭だ。

誰が純愛思想に凝り固まった女など一夏の側に置かせるものか。

「リーグマツチを見るために日本に来て、そのまま滞在しているという感じですね。もちろん遊んでいるわけではなく、こちらにも支社があるのです。ここで仕事はしていますが」

「何のためってまさか今日のためとか言いませんよね？」

「もちろん今日のためです。正確には、こうやって甲斐田様とお話する機会を得るためですが」

「は？」

俺？ 一夏ではなく、俺？

当然面識などないし、遠く離れたフランスにいたのでは得られる情報など大したものではないだろう。

そもそも日本のマスコミですら俺に興味を持たなかったことであって、この程度かという取材内容だった。

あれからアメリカに飛んだのもいるだろうが、俺についてはあちら

で調べる方が困難なはずだ。いろんな意味で。

「いえ、最初から興味を持っていたという話ではありません。リーグマッチを見て、の話です」

「一夏ではなく？」

「当初の目的が織斑一夏様であったことは否定しません。果たして男性I S操縦者とはどの程度のものかと興味を持つのは私でなくてもそうでしょう」

「じゃあ僕についての話の前に実際に一夏を見た感想聞いてもいいですか？」

「なるほど。……では一言で申し上げると、さすがは織斑千冬様の血縁者、でしょうか」

血で括ってきたか。

「一応血とか遺伝は関係ないことになっているのでは？」

「I S適性の話ならそうでしょう。ですが適正のみで競技が行われるわけではありません。運動神経や反射神経、その他とっさの判断力や経験など、競技である以上はスポーツ選手とそう変わらないでしょう」

「そういう理屈ですか」

「もちろんI S適正が大きく関わっているのも事実です。実力が同じくらいなら適正の差は大きく響きます」

「下駄の高さの違いというわけですね」

織斑先生が努力でどうとでもなると言い切るのはこういう話だろうか。

篠ノ之さんの意見を付け加えると、学生の身分のうちなら、だが。

「偉大な姉とはまた違ったスター性を持っていますね。女性に夢を見せられる男性もいるのだなと感じました」

「へえ」

なるほど確かに篠ノ之さんは一夏に夢を見ている。

だが一方でクラスメイト達は見ていない。それはオルコットも、また鈴木も。

この人の言ったことが本当なら希望の持てる話だ。まあ夢の意味

が俺と同じであればだが。

「三日間、それも数時間程度外から見ただけの話ですので、まるで的外れかもしれませんが」

「いえ、なるほどと思えました」

「それは何よりです。ではもう少し具体的に述べた方がよろしいですか?」

「一夏の話をしに来たわけでもないと思うので十分です」

「お気遣いありがとうございます。では、本当によろやくですが本題です。今日私は、甲斐田様にエールを贈りたいと思います」

「エール?」

なんか気持ち悪いこと言い始めた。

12. 面会 Round 3

「感動しました」

と、初っ端からデュノア社の社員は目を輝かせた。

「まず何よりあそこで誰よりも早く反応したことがすばらしい。警備関連の通路は即座に封鎖されていたとのことですが、だからと言って時間があつたわけでは全くありません。その後同じ場所から警備のISが出て来られなかったということは追って封鎖されたのでしよう。ですからほんの僅かな間隙についてアリーナの中に入った。これは誰にでもできることではないです」

「いや、それは深い考えがあつたわけでは……」

「もちろん何かを熟慮してのことではないでしょう。むしろあれは何だと考え始めていては絶対に間に合いません。考えるより先に体を動かすことができる。専門の訓練を受けていないのに簡単にやってのけるとはまずそれだけで賞賛に値します」

「それなら一夏だつて同じだと思いますよ」

専門の訓練と言うのなら常日頃一夏のそういう姿を見てきたことだろうか。

拙速は何とやらだ。

むしろうだうだして行動を起こさない方が事態は悪化したりするものだし。

「はい、確かに織斑一夏様も動けるでしょう。ですが、織斑一夏様は一人で飛び込んだと思います。甲斐田様は部下を引き連れた上で入った。特筆すべきはここです」

「いや部下つて。それに僕一人が飛び込んだところで意味ないのはさすがに分かっていますし」

「失礼致しました。クラスメイトのお仲間ですね。甲斐田様は考える暇もない一瞬でそこまで判断した。そして甲斐田様の呼びかけに周囲にいたクラスメイト達は素直に従った。躊躇さえせずに。甲斐田

様が動けても周囲が躊躇ってはとても間に合わなかったでしょう。その後を見てもたった一ヶ月ですばらしい信頼関係を築いていますね」

「それについてはみんなに感謝したいですし、しました」

確かにクラスメイト達は何も言わずに聞いてくれた。一夏の名前を出したとはいえ、彼女達はISに乗って乱入しろというとてもない無茶ぶりに応えてくれた。また一方で布仏さんと岸原さんは迷うことなく残る選択をした。誰かが迷っていたらそこに引きずられて俺は中に入れなかったかもしれない。

「指揮されていたことについては全体を通してうまくコントロールされていました。正直競技については詳しくないので具体的にどうのとは言えないのですが、少なくとも全ての事態に対応できていたのは分かります」

「いや、僕本人が思いっきりやられてますけど」

「それも計算通りと言いますか、故障機の使い方として想定範囲内のように見えました。その上味方を奮い立たせる効果まで付け加わって、あの時は本当に舌を巻きました」

「それはさすがに過大評価ですね。そもそも故障機で出てくる時点で論外だと思いますよ」

偶然なのは間違いのないところなのだが、そういう効果があったのは事実なようだ。

俺のやられる姿を見てリタイアしていた谷本さんと相川さんは立ち上がったそうだ。

反省会の時鷹月さんがそう言っていた。四十院さんも一緒に熱く語っていて、偶然だと言っても謙遜しているとしたか受け取ってくれなかった。

「その点については驕らない姿勢もまたすばらしいと申し上げておきましょう。故障機を引いてしまったのは不運でしたが、かえって自分は前に出ないと割り切ることができたので、それはそれでありだったのではないのでしょうか」

「前向きですね。確かにその場ではそういう風に考えてやるのがいい

んでしようけど、後から評価するのであればそこはやっぱりマイナスだと思っています」

「評価。IS学園内部において甲斐田様は評価されていないのですか？」

「楽しそうに語っていた黒木さんが急に真顔になった。」

何か踏んでしまったのだろうか。

「さすがに故障機に乗ったまま出てくるのはダメだろうといろんな人に言われましたね。特殊な状況なので仕方ない部分もあったとフォーはされましたけど」

「そもそも故障機がコアのついたまままで放置されているという状況自体がおかしいと思いませんか？ 機体に問題があったのならコアを入れ替えて予備機と交換しておけばいい話で、それはつまり整備士がその故障機を把握していなかったという事実にはなりません。大事な大会の時期にそういう状況を作ってしまうのは技術者としてどうなのかと思わざるをえませんね」

あ、これはまずい。

故障機も何も四組代表が自分の専用機をそう偽装していたというだけなので、IS学園の整備士が知らないのは当然の話だ。四組代表個人の機体なのだからIS学園の整備士は把握しているわけがないし、それどころか担当の倉持技研でさえ知らないことなのだ。

四組代表は木を隠すなら森の中くらいの気持ちでやったのかもしれないが、やはり無理があったか。

四組代表は大会期間中倉持の追求を躲すために偽装工作をやっていたようだ。どう誤魔化したのかまでは分からないがそれは成功したようで、一夏経由で聞いた話だと倉持は結局確証を掴めなかったとのことである。

さすがに未知の専用化技術ともなれば本人の単独犯行とは想像つくわけもなく、他企業に取り込まれたのだろうという認識なようだ。もちろんそんな企業など存在しないので、哀れ倉持技研は見当違いの方向に突っ走って真実からは遠ざかってしまった。四組代表も全力でその方向に誘導したのは間違いない。

そのへんは俺にはよく分かる執念で、後から思えば怪しかったな
思わせぶりの態度を取ってみたり雨あられの小細工をやったことは
想像に難くない。

かつての自分を思い出して実に気持ち悪い。

本当にあのウサ耳女は余計なことをしてくれた。

「そのへんの事情は僕にはよく分かりませんし、まして誰かを責める
つもりなんて一切ありません。むしろズタボロにしてしまつてごめ
んなさいと平謝りですね」

「大変申し訳ありません。外部の人間が口が過ぎました」

穏やかに、だがこれ以上突っ込むなという空気を出してみたら素直
に従ってくれた。まあ俺がお世話になつてる人デイスとか何考え
てるの的な不快感なので、正当性も十分にある。

正直四組代表のことなどどうでもいいが、事実が明らかになつてし
まうとそこから芋づる式に俺のことまで表に出されてしまう。

博士は知られたつて別にどうつてことないと言った。が、考えるま
でもなく俺がブリュンヒルデと同等の権限を持つているなどと知ら
れては、どうつてことないで済むわけがない。

専用機を動かせてしまうなど専用機 of 概念を根底から崩してしま
う事実なわけで、つまりマスターキーを持っている俺は盗んだISで
走り出すことが可能なわけだ。

世界中に警戒されねえはずがない。実際にやるかという問題では
なく、そういうことが可能だという話で。

少なくとも、俺はこの事実を知つてはいけけない。

「そういう感じなので手放して評価されているというわけではないで
すね」

「それは相応の評価ならされているということでしょうかよろしいですか
?」

「相応と言うか、まあ人によりますが。それが何か?」

「なかったことにされているわけではないですよね?」

ああ、そういうことか。

ようやく黒木さんが言ったエールの意味が分かった。

「僕に対する偏見とかで理解していない一年生もいますが、評価はさ
ておき概ね理解はされています」

「それを聞いて安心しました。あれがIS関係者の総意などとは絶対に
信じたくなかったので」

「あれですか」

言うまでもなく、もうお互いに言いたいことは分かっている。

今回の発端となったウサ耳女編集の一夏プロモーション映像だ。

「見た時は目を疑いました。まさかなかったとことにしてしまうのか
と。織斑様がどの話ではありません。甲斐田様の存在意義
を認めないというのです。こんなことが許されていいのかと」

「おもしろいくらい僕がいなかったですね」

昨日一夏と一緒に見たが、見終わる前から一夏は相当に怒ってい
た。その後も会見で全部ぶちまけるとまで激怒していた。

つまり、博士のやり過ぎである。

いや、俺自身に文句など一切ない。むしろ見終わって拍手したくな
るくらいの出来栄えだった。

完璧に俺の意を汲んでくれて、一夏をこれでもかと前に押し出し俺
をいたのかレベルにまで落とし込む。そして俺がやられるシーンは
唯一の見せ場とばかりにきっちり映し、そのことによってなおさらそ
の後の一夏が光り輝く。

最終的な意味であれば俺も博士も一夏を推すことに相違はない。
だから目論見が失敗に終わった時点で博士は今回の件を一夏推して
進めることに切り替えた。俺を前面に出すという嫌がらせをしな
かったあたり、博士も素直に負けを認める的な気分だったのだろう。
しかし、それを見た人がどう感じるかはまた別の話だった。

現場にいてかつ俺に対して好意的に見ていた場合、ああまで捻じ曲
げられては目の前の人のように思うのはむしろ必然と言えそうだ。
数としては二人かそこらのごく少数にしても。

「……それでよろしいのですか?」

「いいも何も映像を作ったのは僕じゃないですし」

「不当な評価をされたままで構わないと?」

「突っ込みますね」

言いながら俺は後ろを見る。

入り口脇にはIS学園の警備の人が立っていて、会話が危険な方向に向かったら介入するはずだ。

だが、警備の人はニコツと笑顔を返してきただけだった。いつもの馴染みの人であれば一言くらい口にくれたかもしれないが、今いるのはまた別の人だ。警備室で見た記憶はあるがそんなに会話をした覚えもない。助け船はなさそうだ。

「お気遣いありがとうございます。ラインは心得ているつもりです」

「そうですか。じゃあ返答を言うと……ISに関する評価なんてどうでもいい、でしょうか」

「……なるほど」

「別に僕は上を目指してるとかかないですし、そもそも望んでこっちに来たわけじゃないですから」

「そうですか……。では少し私の話をさせていただいてもよろしいでしょうか」

「え？　はあ、どうぞ」

いきなり何をとったが、表情からして本題の一つではあるのだろう。

黒木さんは真っ直ぐに俺を見た。

「見ての通り、私は男です。それなのにISを開発する仕事に就いています。なぜだと思えますか？」

「実はISを動かせたとかじゃないですよね」

「もちろんISに乗ってもピクリとも動きません。ですがISに乗って空を飛びたいという夢を見てしまったのです」

俺を見る黒木さんの目はそれまでとは打って変わって澄んでいた。

「と言っても当時は素人同然だったので、勤めていた会社を辞めて勉強して工学系の大学に入り直しました」

「それは相当に思いきりましたね」

「そのまま会社において自分に何ができるかを考えると、どうせなら好きにやった方がいいと思つた次第です。男なので将来を期待されているわけでもないですし、これは日本の制度上の問題でしたが」

「日本のですか？」

「日本の外に出て気づいたことですが、特にヨーロッパは意外と緩いですね。はつきり言ってしまうえば形式上に制限があつても、実際はどうでもなります」

「へえ」

「言い方が悪いですが、使えるのであれば使う、でしょうか。そのあたりはプラグマティックと言うか、抜け道はきちんと用意されていますね」

「抜け目ないとか現金だということなのだろう。」

イデオロギーは横に置いておいて、やる気があつて使えるのなら男だろうと使うし使うことのできるようにしておこうという感じか。

「そういえばそちらも社長は男の人なんですよ。だからフランスに移住したんですか？」

「……実物はあれでしたが、実際問題ISを研究したい男が受け入れられるのはフランスくらいしかないでしょう。男にも動かせるISを開発しようとしている人間など、もしアメリカに行ったら生きては帰つてこれないかもしれませんね」

軽い冗談のようで黒木さんは笑うが、あのアメリカでそんなことを始めたらまず間違いなく糾弾されるだろう。まして男が。

アメリカとは日本をも超える世界最大の女性上位主義国家であり、そしてISに関しては二流以下と目されている。

黒木さんのような男が行つては死にに來たのかと言われそうだ。

「男にも動かせるISですか」

「無理だと思えますか？」

「できると思えますよ」

「それはご自身のことから？」

「いいえ、僕達のごとは一切関係なく、誰にでも動かせるISは作れると思えますよ」

だって既に、ISを動かせない女が作り上げている。

能力云々の話ではなく、理論として実際の話として、可能は可能なのだ。

「それは……」

「黒木さんのことは全く知らないのです、黒木さんが作ることができかかは分かりません。でも、そういうものが作れるか無理かと言われたら、できると思います」

黒木さんは真っ直ぐに俺を見る。今度は夢見る少年ではなく、科学者の目で。

いや、あの場を見ていたならゴーレムがどういうものかはさすがに分かっているだろう。

軽く誘導したつもりだが、この人は正直俺とか例外中の例外を相手にしてないでゴーレムを保持しているIS学園かIS委員会に突っ込むべきだ。

「……」

「あの……」

「今日は来て本当によかったです」

と、黒木さんは急に笑った。

「私の周りではですね、実際のところは無理だろうというのが多数派なのです」

「でも……」

「特殊過ぎて真似できない、実際は単なる誤魔化しであってそれっぽくしているだけだ、ただの茶番だ、そもそもISとは認められない、そういう声が非常に大きい」

「はあ」

もしそうなら博士の目論見が丸つぶれだ。

IS委員会が隠す以前にそもそも誰も乗ってこないでは。

これはイデオロギーの問題か、それともやはり博士が卓越過ぎるのか。

「でも、甲斐田様ははっきりできると言われた」

「いや、技術的なことは全く分からないので」

「だからこそです。世界で一番中立的な意見として、素直に受け入れられるのだという話です」

「なんですかそれ」

「ISという存在を理解していて、かつ思い入れが一切ないという意味です。男性では動かせないのもそもそもISを理解できません。女性はまず適性で弾かれて、かつ選抜されるので強い思いのない人は携われません。その上個人的な感情まで加わってくると中立的ではなくなります」

「だいぶ乱暴というか、そもそも僕のはなんとなくでしかないんですが」

世界一中立はさすがに大げさ過ぎる。

「表現力が拙いのは本当に申し訳ありませんが、ではクラスメイトの方々に聞いてみてください。あれをISと認められるかと。おそらくISの定義に始まっていろいろな意見が返ってくると思います」

「それ結局僕が無知だからって話じゃないですか」

「ISは理屈の部分で碌に説明されていない世界です。むしろ既存の思考法では正解から遠ざかってしまうとまで言われています。頭の中でぐるぐる考えるよりも、ISパイロットの口にする感覚を紐解いた方が断然早いそうです。世界に両手で数えられるほどしかないSランクパイロットは、ISについて語ろうとすると急に感覚的になります。あの理知的な織斑千冬様でさえ言葉にするのは本当に難しいと常に言っています。少なくとも現状、感覚先行なのがISの世界です」

そんなことないと科学者の黒木さんには言っておきたいが、残念ながら今のところはその通りだ。

もちろんこうやればこうなると経験的には分かっているのだから、説明されていなくとも理論自体はあるのだろう。

だが既存の物理法則に従ってくれないので、現在の人類の科学は通用しない。ISだけはどうにも説明できない。

発明者は本人しかできない生産に追われているという理由で基礎研究を進めなかった。そしてとどめに行方不明になってしまってい

る。

本来であれば誰も手を出さずの代物だ。だが、そのまま放置するにはISはあまりにも強力過ぎた。

核攻撃すら通さない絶対防衛という理不尽な性能のおかげで、極端な話IS一機で既存の軍隊は相手にできる。

結果ISに手を出さず出さないで世界のパワーバランスは大きく変わってしまう状況となってしまう、例えばいち早くISに手を付けた日本に単独で戦って勝てる国はないと言われている。

一方かつて世界の警察とまで呼ばれた軍事国家アメリカは、諸事情でIS参入が相当遅れた結果今やもう軍事的には二流とまで揶揄されるようになってしまっている。

「と言われても人のなんとなくを根拠にされても困るんですが……」

「もちろん盾にしたところで誰かを納得させられるようなことではないでしょう。先ほどの発言は本当にでき上がってこそ意味を持つものですから。単純に私の心構えのようなものです」

「僕のところには殴り込んでくる人がいなければそれでいいです」

「もちろんです。ですが甲斐田様も発言にはお気をつけ下さい。取っ掛かりの欲しい研究者達は何気ない言葉にも勝手に食いついたりしてきますので」

「今まさに食いつかれましたね」

「大変失礼致しました。ですが手探りな現状ではそうするしかないというのもあるのです。今後授業で学んでいく過程で出てくるとは思いますが」

言われて俺を研究対象にしているIS委員会の学者連中を思い出した。

俺の発言を一言一句メモったり録音したりしていて、そんなに信用できないのかもしれないが、バカなのかと思っていたが、職務に忠実な結果だったようだ。

最初にそう言っておけばこちらも気を遣ったのに、先入観なしの状態で喋らせたかったのだろうか。

「勝手に勘ぐられるのはあまり気持ちのいいものじゃないですね」

「現実問題諍いに発展していますし、インタビューなどでは質問禁止事項となりつつあります。Sランクパイロット達はもう公の場でISについて語ることはないでしょうね」

言葉尻を捕えて追求されてばかりでは誰が話すかという気にもなるだろう。

「よく分かりました。ちょっと驚きましたけど」

「ですが今日のことについてはご安心ください。もちろん言いふらすような真似は致しませんので。正直に言えば、私が男性も動かせるISを完成させた暁には肩を押してくれた一つのエピソードとして語らせていただきたいですが」

「できあがった時には思う存分自慢してください。作り上げたからこそ言えることだと思うので」

「ありがとうございます」

別に成し遂げた後なら好きにすればいいだろう。

果たしてそれが何年先になるか分からないし、そもそも俺自身がその時この世に存在しているか知らないが。

「でもですね」

「はい」

「だからと言って僕が何か協力をできるかと言うと、まず無理だと思います。ご存知の通りIS委員会に縛られている身ですし、将来男性IS操縦者のいるフランス所属になることもありえないですから」

「それはご心配されずとも大丈夫です。本日私は甲斐田様とただお話をしたかったですだけで、何かの便宜を図っていたくような期待など一切しておりませんし、もし万一甲斐田様がお気を利かせてくださったとしても遠慮させていただくつもりでしたから」

「そうなんですか？」

これは意外だった。

男にも動かせるIS開発をしているという時点でそのためにやって来たと思っていたのだが。

「当然の話です。そんなことをしてはじゃあ自分もと次から次に甲斐田様の元へやって来ることでしよう。私は自分の利益のために甲斐

田様に迷惑をかけるような行為をするつもりは全くありません」

「いやまあ、そちらがそれでいいのならいいんですが」

「あの映像を見て甲斐田様が不当な扱いをされているのではないかと
いうことが私の一番の懸念でした。そうでないのであれば私から特
に何かを言うことはありません」

「それはないので大丈夫です」

「何よりです。そうですね、ですがあえて願望を言うのであれば、十年
二十年先になるかもしれませんが、私が完成させた時は一度そのIS
に乗っていただければ嬉しいという程度でしょうか。もちろん実験
など抜きにして」

「その時になってみないと分かりませんが、特に拒絶するような話で
もないと思うのでその時は言ってくください」

「ありがとうございます」

むしろ一夏に何か利用できないかと一瞬思ったが、よく考えるまで
もなく一夏は専用機持ちなのでそれ以外の機体には乗れなかった。
残念。

「さてと、他に何かありますか?」

「いえ、十分です。甲斐田様と言葉を交わすことが目的でしたし、その
上懸念まで解消できました。これ以上望むことはありません」

「それは何よりです。この後はフランスに戻るんですか?」

「仕事をしていなかったわけではないのですが、いい加減帰らないと
私の席がなくなってしまうので。またIS開発の日々に戻りま
す」

「そうですね」

「もしフランスまで来られることがありましたら観光案内致しますの
でデユノア社までご連絡ください。男女同権の国ですから男だから
どうだということもありませんのでご遠慮なく」

「そうですね。その時可能でしたら」

「言いながら立ち上がる。」

「ようやくこれで終わりだ。」

差し向かいで気を遣いながら話すというのはそれなりに疲れるも

のだと実感した。

「戻ったか。だいぶかかったな」

控室に入った時、一夏はいなかった。いたのは姉の方である。

「さすがに三件は疲れました。一夏はトイレとかですか？」

「いや、暇を持って余してホテルの厨房へ行った」

「厨房って……」

「想像した通りだ。料理の話を知りたいらしい」

呆れたことだがじっと待っていていられないのが織斑一夏だ。

なじみの警備の人もないので一緒に行ったのだろう。なら大丈夫か。

「写真撮影の方はどうだったんですか？」

「それは万事滞りなくだ。一夏が愛想よく対応していたので撮影側も満足だろう」

「それはよかった」

「あれだけできるのであれば口さえ開かせなければそれなりにやれるな。一ヶ月でよく躡けてくれた」

「やったのは僕じゃないですけどね」

やったのは三年衛生科の先輩達であり、谷本さんだ。

先輩達は笑顔の作り方を、谷本さんは人前での立ち振る舞いを一夏に叩き込んでいた。

まあ谷本さんのはどこか偏りのある気がしたが。

「次までになどとは言わないが、きちんと会話もできるようにさせておけ」

「それは僕に言うことかなあ」

「一夏を自分の前に出したいのであれば避けて通れない道だ。どの道お前はそのつもりだろうし、私もそのことについては邪魔をするつもりもない」

それはつまり邪魔をするつもりのある事柄もあるという話である。

「はいはいそうですね。おっしゃる通りですね」

「後は智希のことだ。会見はさておき今日三件受けてどうだった？」

「疲れました」

「そうか。だが耳に優しい言葉は聞けただろう。少なくとも気分が悪いことはあるまい」

「そりや初っ端から僕が不機嫌になるようなことなんて言うわけないです」

「そういう意味ではない。望んでいた言葉が聞けて、持ち上げられて、気持ちよく会話できたのではないかということだ」

千冬さんは笑った。だがその笑みは含みのある怪しい笑顔だ。

「どういう意味ですか？」

「そのままだ。言って欲しかったことを口にしてくれて、肯定してくれて、背中まで押してもらえる。気疲れはしても楽しいひとときだっただろうということだ」

まさか全てが茶番だったとは言えない。

「仕組んでたって話ですか？」

「そのようなことは一切していない。彼らには注意事項を伝えただけだ」

「じゃあなんでそういう言い方するんですか？ 警備の人から聞いた感想ですか？」

「智希、お前も例外ではないという話だ」

「何の話ですか？」

さすがにそれだけでピンとくるわけがない。

「一夏に対して私は、自分の立場に自覚を持って、何もしていないのにもうまい話が転がってくるとは考えるなど言った。それは智希についても同じことだ」

「それはどうでしょう」

「いいか、何度も言うがお前も希少な男性IS操縦者なのだからな。その点において一夏と差などない。それがお前の立場だ」

「それくらい分かってますけど」

「本当に理解しているのであれば無防備な行動などしない。お前は自分に対して甘い言葉でうまい話を持ちかけてくる人間がいるとは考

えていないだろうか？ それこそ今も」

「そりゃあ僕自身が何かできるわけでもないですし」

あの映像に対する反応からしてそうだが、IS学園の外において俺の価値など正直ない。

それ以前に露出すらほとんどされていないのだから、何をどう利用するか以前の問題だ。

「やはりそうか。智希、お前は自分の価値判断を絶対のものとして考えているようだが、生憎それは人によりけりだ。分かり易い例を挙げよう。お前は一夏を口で言いくるめて従わせることができる。それは一夏を利用したい人間にとっては立派な価値となるのではないか？」

「そういう話ですか」

黛姉の話だと言いたいのだろう。

それは会話した時から感じていた。将を射んと欲すればなんとやらだと。

「であればお前を利用しようと甘い声で寄ってきてもおかしいことはないだろう。それは理解できるな？」

「はい」

「そうすれば今度は智希について調べ、智希に合わせて話をする。今日お前は全て雑談をしている程度の気分だったろうが、相手は暇な学生ではない。目的を持ち、きちんと準備をした上で智希に会いに来ているのだぞ」

「それは……」

「初対面な上に極めて情報の得にくい相手だ。認識の間違いも多々あっただろう。だからそれは会話をすることによって修正していく。どうでもいい会話ほど智希のパーソナリティを掴むための手段だ」

「それは……そこまで……」

四十院母の娘トークにそんな深い意味があったのだろうか。

「少なくとも私にはこのタイミングで一夏ではなく智希に向かってくるような人間を侮る理由などない。今回の三人は外出が決まった時点で智希と話をさせてくれと言ってきた。リーグマッチ終了時点で

お前に対して何らかの価値を見出していたわけだ」

「何らかって何ですか。何となく想像つくのもありますけどこっちは知りたいくらいですが」

「自分のことなのだから自分で考えろ。直接会話をしたのだからそのための材料は十分にあるだろう」

「えー。それはちよつとスパルタ過ぎませんか?」

「別に考えなければならぬということでもないのだぞ。その場その場で会話して判断してもいいのだからな」

「それ気がついたらがんじがらめにされてるパターンじゃないですか」

「相手に主導権を全部渡すのだ。それは相手の土俵で戦うことになるだろうな」

何となく言いたことが見えてきた。

弾と数馬のことといい、千冬さんは俺が何もしなかったことを問題視している。

「いいようにやられたくなかったらちゃんど準備をしておけて話ですぬ。でも今回については正直そんな時間もなかったと思うんですけど」

「智希、お前は普段ひねくれている割に思考停止すると途端に素直になり過ぎる。では聞くが、この一週間、お前がやってきたことは必要だったか?」

「結果的には必要なかったですね」

「そういう意味ではない。それはお前がやらなければならないことだったかという話だ」

「いやいや、やれって言ったの千冬さんじゃないですか」

「つまりお前はやれと言われたからやったのであって、特に意味はないのだな?」

「だから、一夏には無理だから代わりにって話ですよ?」

「それは智希でなければならぬことなのか?」

「え?」

それを言われてしまえば、正直なところ俺が当てにされていたわけ

ではない。

千冬さんが答えてもいいし俺の方が心証がいい程度の話だ。

「面談する相手について調べたいからそれはできないと言えば十分時間はあっただろう。私に全部任せるでもいいし、何なら一夏を引っ張ってきて無理矢理やらせればいい」

「え？ いや、そもそもインタビューをやるかどうかすら決まっていなかったじゃないですか」

「それは私に判断を投げてそれきりだからだな。智希は意思表示をせず結局どうなったかの確認さえしなかった。判断を迷うにしても三人のうち二人はその気になれば家族を通して連絡可能な相手だ。申請が必要だが電話で直接会話もできる。まあ軽く相手の家族と会話くらいはしたかもしれないが、お前はやりたいともやりたくないとも言わなかった。どうせ一夏と同じで断るだろうと勝手に考えていたのだろうか」

「そんなこと言ったって、たとえ希望を言っても聞いてくれなさそうだし」

「もちろんくだらない理由であれば却下はしただろう。だが意思表示すらしないのは論外だ。よって私はどちらでもいいと判断して一夏の写真撮影と合わせて交渉の材料に使った」

やはり会見後に言ってきたのはそういうことだったのだろう。

「うーん……。あのー、今回の件ってそこまでする必要あったんですか？ いや、今後のことも考えてやってるといえるのは理解してるんですが」

「あるかないかと言われたら、ないな」

「ないんですか！ じゃあなんでやったんですか？」

「まあ三者ともどうとでもなる相手だからな。お前が何を言おうがどういう選択をしようが、こちらでリカバリーは効く。であるからこの際お前に考えさせようと思った」

「考えさせるって何をですか」

「もちろん自分自身についてだ。お前は一夏については激しく執着するが、自分のこととなると途端に意思薄弱になる。だが一般人ならま

だしも、お前は世界に四人しかいない男性IS操縦者の一人だ。望ま
ずともお前の周囲には人がやってくる。そして自分の意思がない人
間など鴨でしかない」

「それは……」

「もちろん、それでいい、流される人生でいいというのであれば特に言
うことはない。一夏のように譲れない部分だけを抑えて生きるとい
うのもそれはそれで一つの生き方だ」

「極端なことを言えば、事が成った暁にはそれ以外のことは全部どう
でもいい。」

だが、そこに至る過程で自分の自由が効かないというのもまた問題
だ。

俺が行動しなければ俺の望む一夏の姿は決して見られないのだか
ら。

「言いたいことは理解しました。ちょっと僕に構い過ぎじゃないかっ
て気がしないでもないですけど」

「頼まれたからな、私達の母に。いや、お前達にとっては祖母か」

「ああ、そういうことですか」

「他の連中と同じようにお前も自立するところまでは見ていくという
話だ。年長者としての務めでもある」

「みんなは元気にしてますか?」

「ああ、智希よりもはるかに早く一夏から自立しつつあるぞ」

「それはこの前まで直に見てたから知ってます。でもまあバラバラで
もみんな元気にやっているのであれば特に言うことはありません」

ある意味一夏に囚われた同志、とでも言えばいいだろうか。

「また会える日は来る」

「期待せずに待ってます」

「そうか。さて、大分遅くなっちゃったが一夏を呼んでくるとしよ
う」

「ここで待ってればいいですか?」

「すぐ連れて戻る。そうだな、その間に今日あったことを思い返して
おくといい」

「反省ですか」

「今後どうするかも含めて考えろ。それは智希自身の事柄なのだから」

千冬さんが部屋から出て行き、俺は近くの椅子に腰を下ろす。

今日の三人への対応については俺に任せる、あるいは俺の意思を尊重するところだろうか。

警備の人達から報告を聞いて問題ないと判断したのか。さつき終わった三人目については今まさに報告を聞いているのだろう。

さてどうしたものか。

黛姉については次の約束をしている。だから当然次回のことを考えなければならぬ。これはいい。

四十院母については本当にくだらない娘話であるのなら断つてもいい。だが真の目的が別にあるのであれば、断つてそれで終わりにはならないだろう。当然次の手がやって来るだろうし、やり方も変えてくるはずだ。まずは今日の会話を思い出して吟味し直すのが先か。

フランスの技術者については母国に帰るそうなので、今すぐ何かがあるというわけではないだろう。会話した内容は果たしてどこまで本当のことだったのだろうかという程度か。

もちろん夜竹さんではないので、事実とは異なつたすぐにバレるような嘘をつくことはないだろう。例えば俺へのメールとやらがご機嫌取りのおまけで、デュノア社社長の言葉を伝えることが本命のような主客逆転。気にしないでは気にしろという話だ。

このあたりはきちんと紙に書き出して明確にしておいた方がいいだろう。無視するにしても理解した上でやらなければならぬ。

そうやって思考に没頭していると、扉がノックされ姉弟が入ってきた。一夏は上機嫌、というよりは興奮気味だ。何があつたかは火を見るよりも明らかである。

「おう智希！ だいぶ時間かかったな。俺暇だったからこのシエフの人達に話を聞かせてもらってさあ」

「それはよかつたね。ええと、今日はこれで終わりですか？」

「後は帰るだけだ。車は裏に用意してある」

「そうですか。じゃあ行こうか一夏」

「お、おう」

「どうしたの？」

「ぐ機嫌だった一夏が急に真顔になって俺を見る。

「いや、智希の方は大変だったのかなって」

「僕？ 時間はかかったけどお喋りをしてただけだよ。半分以上は雑談だったね」

「そ、そうか」

「それがどうかしたの？」

「いや、なんか難しい顔してるしまた問題でも起こったのかと」

「問題？ そうだね、まだ何が問題かを考えてる段階かな」

「そりやまたややこしそうな話だな」

「まだ何も起こってはいない。」

俺が『何を』問題とし、それに対して『どう』行動するかだ。

何もせずにリアクションオンリーでは、欲しい物を得ることはできないだろう。後手後手に回ってせいぜいおこぼれに預かるくらいだ。

それなら自分から行動して好ましい状況を作った方が断然いい。

「話はまた車に乗ってからにしろ。改めて言っておくが廊下でベラベラ話をするのはなしだ」

「そうですね。じゃあ行こうか」

「お、おう」

言いながら俺達は歩き始める。

個人戦まで一ヶ月、仕込みの時間は十分にある。

俺自身に価値があるのなら、それを有効活用しない手はない。

意に沿って動かすという意味において、自分ほど使い勝手のいい駒はないだろう。

今まではできる限り自分を舞台の外側においてきた。だがそうではなく、俺も登場人物のひとりとして舞台に乗ればいいのだ。

13. 平穏な一日（午前）

目を覚ますと既に一夏は部屋にはいなかった。

今日も朝練に行ったのだろう。毎日よく続くというか、毎朝早起きしてご苦労なことだ。

我がらが一年一組は見事リーグマッチを優勝した結果、特典として練習機を二台自由に使えることとなった。と言っても実際使えるのは授業で使われていない時だけだが。

そして最初は皆喜んで放課後順番に使っていた。しかしすぐに問題が生じる。

すなわち、どう考えても時間が足りないという事実だ。

全くやる気のない俺を抜いてクラス三十一人、一夏とオルコットには専用機があるにしても、残りが二十九人もいては練習機二台では一人あたりの時間など雀の涙。毎日乗るなどとても無理な状況だ。よくて週に二時間程度だろうか。

まあそれだけならリーグマッチ準備中の期間でも同じことだったのだが、あの時はまだ皆最低限の自制はできた。なぜなら全てはリーグマッチに出場する一夏のためという名目があったからだ。その上俺に強権発動までされてはしぶしぶでも従わざるをえなかった。

ところが今回はまるで事情が違う。今回は来月に行われる個人戦を見据えての話だ。つまりクラス全員が出場者でありすなわち当事者となる。だから自分自身が使いたいし簡単に譲りたくない。

リーグマッチ準備中に仲良くなつて遠慮がなくなつてしまったことも奪い合いの激しさに拍車をかけたのだろう。単純にローテーション化させようにも週一回でいいから纏めて二時間使わせるなどといった要望が飛び出したりして、一時は一向に纏まる気配すらなかったほどだ。

「そして夜が駄目なら朝があるか。執念だなあ」

ベッドから降りて冷蔵庫を開け水を取り出す。

六月を目の前にしてこのところ急に気温が上がってきた。四月

はそうでもなかったが喉の乾く季節に入ったようだ。

最初、クラスメイト達は使用時間の延長を申し出たそう。夜にもうちよつと使わせてくれという話だったが、これは速攻で却下される。毎日夜に練習機の整備があるので駄目とのことである。まあこれはリーグマッチの時点でも断られていたことだ。

それで再び争奪戦の火が燃えかけたのだが、そんな状況を救ったのは篠ノ之さんだった。

この剣道部員は毎朝早く起きて竹刀で素振りをしていたそう。そして気づいた。今のこの時間なら整備の終わった訓練機が遊んでいるじゃないかと。

と言っても夜が無理なんだから普通は早朝なんでもっての他だろう、と周囲は揃って首を振る。常識的に考えればそう。整備士に朝早く起きてこいという話になってしまう。

だが篠ノ之さんはムキになったのか一歩も引かず、それなら認めさせてみせると鼻息荒く意気込んで申請に行ったのだが、なんとあっさり許可が下りてしまった。申請の書式までしつかりあって、三日前までに申請をしておけば当日朝当直の整備士が訓練機を出してくれるとのことである。朝五時から七時まで二時間。たったではない。数が絶対的に足りない訓練機を使えるのだから貴重過ぎる時間だ。

宮崎先輩に話を振ってみると競争率が上がるし自分達が使いたいから言わずに隠していたそうで舌を出した。上級生は下級生に対して徹底的に隠し通す的な暗黙の了解があるらしく、ついでに口止めまでされた。一年一組の分は既に確保されているからいいが、朝の訓練機もまた競争だそう。リーグマッチの際あっさり予約を譲ってくれたなと思っていたが、朝の分をカモフラージュする目的もあったよう。うだ。

本当にIS学園という場所はいやらしい。何がいやらしいってそういう情報を生徒に伝えようとさえしないのがいやらしい。ここにはコロンスの卵がゴロゴロ転がっている。その程度ということさえもきちんと確認をしておかなければならないのだろう。

ちなみに鼻高々な篠ノ之さんに対してなぜそれをリーグマッチの

時に口にしてくれなかったのかと言ってみたところ、俺に向かって竹刀が飛んできた。

「七時過ぎ……一夏は直接食堂に行ってるか」

パジャマを脱いで制服に着替える。

食事の時くらいパジャマでもいいような気もするのだが、TPO的に駄目だそうである。

男の俺は着替えるだけで済むが、髪型その他身だしなみを整えなければならぬ女子は大変だろう。

寝癖だけ鏡で確認して、部屋を後にした。

食堂に着くと一夏達は既に席に就いていた。

牛乳を口にしながらい夏が俺に向かって手を振る。

朝食のメニューをざっと見、やはり選ぶのが面倒なのでいつものAセットにした。

一夏の両隣に正面は既に埋まっていて、俺のために空けてあったであろう端の席につく。

「おはよう。今日はシャワー浴びた？」

「浴びた浴びた。つーか今日はもう汗だくだった。ここんところ暑くなってきたよな」

「もう六月だからね。もうすぐ梅雨に入って蒸し暑くなるんじゃない」

「だなー。まあISスーツが汗は吸ってくれるけど、着たまま授業はさすがにもう無理」

「こここのところ面倒臭がって横着していたようだが、自然の力には勝てなかったようだ。」

「智希はまたAセット？ あんた少しは食べる物に気を遣いなさいよ。というかそればっか食べて飽きないの？」

「別に」

「何を食べるかは個人の自由ですが、せめて一通り食べてみてはいかがでしょうか？ その上で選ばれるのであればそれが一番いいとは

思いますが……」

「特にこれで困るとかないし」

「そういう問題ではない。いいか、食とは人が生きるのに不可欠な要素だが同時に人の心を豊かにする大事なものだ。その時何を食るかというのは非常に重要な話であつてだな……」

いつも通り篠ノ之さんの説教が始まったので目の前のAセットに集中することにする。

しかし今や篠ノ之さんの説教をまともに聞く人間などほとんどいないのによくやる。まあ説教をすること自体が快感というか趣味なのだろうけれど。

「お、おはよう甲斐田君。よく眠れた？」

「んーまあぼちぼち」

今日もハミルトンは時間を合わせてきたのか。一夏達は朝練のためにこここのところ早起きだが、二組のハミルトンは一組の訓練機を使う権利はない。

身だしなみまで整えて、毎日ご苦労さまです。

「こここのところ暑いよね。あたし昨日の午後はIS実技の授業だったんだけど日差しが強くて……」

「そうなんだ」

ハミルトンが何事かを話しているが俺は一夏のように右から左に流す。

どうせいつもの女子特有な大して意味のない会話だ。

慣れないことを一生懸命やっているのは傍から見ればいじましいとでもいう感じなのだろうが、無理してがんばっているのを見続けていると正直うーんと思ってしまう。

まあ谷本さんの無理矢理な振りよりはまし……いや似たようなものか。

「ちよつと智希、あんた寝ぼけてんの？ それとも何か考え事？ とにかく人が話をしてるんだから、ちゃんと聞きなさいよ」

「ん？ ああごめんごめん。ちよつとね」

「まったくもう。ティナ、あんたも聞いてないなと思つたら耳引つ張

るくらいはしなさい。こいつはすぐ自分の世界に飛んでっちゃうんだから」

「ご、ごめん……」

「別に謝るようなことじゃないでしょ。一夏にしても智希にしても男子なんだから、あたし達の感覚のままでもやってちゃダメだって話」

「なあそれだけ聞くと俺達は人間じゃないみたいだぞ」

「まあまあ。人それぞれという話ですわ。それよりも甲斐田さんは何か気にかかることでも？」

ほらオルコットが助け船を出してきた。こういう状況なら奴はそうするだろう。

またそれは狙っていたことでもある。

「うーん、気がかりってほどでもないけど、個人戦の話」

「個人戦ですか？」

「うん。もう一ヶ月を切ってるのに、まだルールが発表されてない」

「そういえば先週もそのようなことを言っていたな。それがどうした？」

篠ノ之さんまで食いついてきた。まあこっちは特に何かを考えての話ではないだろうが。

「だって明後日から六月だよ。六月最終週に行われるのは決まってるのに、レギュレーションが未だに発表されないのはおかしいでしょ。リーグマッチのルールは入学した時にはもう対戦順まで決まってるのにさ」

「確かにそうですね」

「ただ単に甲斐田が見つけていないだけではないのか？」

「先週織斑先生に聞いたら『まだ決まっていない』って返されたんだよ」

自分で探せではなく決まっていないだった。

念のため山田先生にも確認をしたが、本当に決まっていないようだった。

「じゃあ……例年通りなんじゃないの？ 毎年一対一の模擬戦でトーナメント形式なんでしょ？ 勝ち負けなんかはリーグマッチと同じ

で、だったらルールの発表なんて別に直前でもいいんじゃない?」

「そんな単純な話で済めば楽なだけだね」

「何よそれ。あたしが単細胞だとしても言いたいわけ?」

「そんなこと誰も言っていないよ」

「あ、俺分かった! 対戦表がまだできてないんだ! だって……何人いるんだっけ? 一年は?」

「僕ら含めて百五十二人」

「そんだけいれば……楽勝か」

自分で振っておいて自分で突っ込んでしまった。その通りではあるが。

しかし鈴木もこんな簡単に乗ってしまうのだから単細胞は否定しなくていいかもしれない。自分最優先な人間だから他人に気を遣うにも限度があるという話なのだろうけれど。

「まあ極論紙で書いてもできるレベルではあるな」

「悪かったよ。でも智希の言う通り何かはあるんじゃないのか?」

だってあの千冬姉が決められないんだからさあ」

「あえて隠していたりするのでしょうか……」

「僕への嫌がらせならあり得るけどみんなにまで影響する範囲でやるかなあつて」

「智希……あんたはそこまで自覚してるくせにちふ、織斑先生に噛み付くのをやめないわけ? あたしはもうここにいる間は絶対に逆らわないって決心したんだけど」

失礼な。

俺が噛み付いているわけではない。ただ向こうが俺の邪魔をしてくるだけだ。

「甲斐田は妙なところで骨があるとでも言うべきか」

「とぼつちりを受けるのは主に俺なだけだな」

「そんなこと」

「まあまあ。案外レギュレーションも既に決まっているのではないですか? 甲斐田さんが確認をされたのは先週だそうですし」

勇気を出して発しようとしたハミルトンの言葉は、オルコットに

よって遮られる。

さすがに鈴も気づいたようで、ムツとした顔をオルコットに向けた。一方のオルコットは気がつかなかったかのようなすまし顔で流す。

本当に鈴とは雲泥の差でオルコットは気を利かせてくれる。

もつとも、所変われば一転して敵となり変わってしまったのだけだ。ど。

「そうだね。ホームルームの時に聞いてみようか」

「はい。もし決まっていらないようでしたらこの際踏み込んでみるのもいいかもしれませんわね」

「甲斐田のお家芸だな」

「リーグマツチの時みたいにいきなり俺に振るとかそういうのはやめてくれよー」

「はいはい。じゃあみんな食べ終わったことだし行こうか」

篠ノ之さんと一夏は相変わらずの平常運転。

もう呆れを通り越して安心さえ感じさせてくれるレベルな空気の読まなさだ。

まあ、元々この二人に望むべきことではないので、むしろ流れに従い余計なことをしなかったことを褒めるべきなのだろう。

「まだ決まっていない。決まれば発表する」

織斑先生は先週と同じ言葉を繰り返した。

「まだですか。もう六月なんですけど」

「それがどうした」

「どうしたじやないですよ。準備しなきゃいけないんだからさっさと発表してください。未だに公開されないとかそんなに複雑なルールなのかって思っちゃいます」

「ほう、熱心なことだな。ようやく甲斐田も学校の行事に真剣に取り組もうというのだな」

「ええ、このクラスのためにも」

「ふっ」

鼻で笑われた。さすがに俺の口から出る言葉としては嘘臭すぎたか。

「甲斐田君、先週も言いましたが別に意地悪をしているわけではないのですよ。本当に決まっていけないと言いますか、まだ発表できる状況ではなくてですね」

「山田先生」

「え？ どういうことですか？」

山田先生の言葉を織斑先生が遮った。つまり山田先生が余計なことを言ったあるいは言いかけた。

やはり出し渋っているのだろうか。

「甲斐田、お前が邪推してしまうのはある意味仕方のないことではあるが、今回に限っては別にお前にとって嫌がらせの類では全くない」「それ裏返すと普段の行動が嫌がらせになってしまふんですけど」

「貴様の間違った行動を正す行為は貴様の立場からは嫌がらせに見えるという話だ。そして今回の発表が遅れているのは貴様に対する意思は何もないということだ」

「分かりました。色々と言いたいことはありますが話の筋ではないのでとりあえず引つ込めます」

「なんで智希はいちいち一言言わないと気が済まないんだろうな？」

「負けん気が強いということであろう」

「あのさ、僕を挟んでそういう会話はしないで欲しいんだけど」

本当にこの二人は話の腰を折ってくれる。

「心配せずとも直前になるようなことはない。近々発表する予定であるし、きちんと全員に教室で伝える予定だ。間違っても知らないままになるようなことなどない」

「近々っていつですか？ 例えば一週間前とか二週間前は近々に入るんですか？」

「分かった。来週だ。これでいいか？」

「来週と言っても幅ありますけど。それに来週の金曜あたりに事情が変わって延期とか言い出すんじゃないですか？」

「貴様は本当に他人の神経を逆撫でするのが得意だな」

「智希、そのへんにしとけ。悪いことは言わないから」

「落ち着け甲斐田。こういう時は場の空気を読んでだな……」

「は？」

さすがに篠ノ之さんの口から空気とか言われたくない。

「甲斐田君もいい加減にしなさい。手段と目的が入れ替わりかけてるわよ。甲斐田君は個人戦のルールについて聞きたかったんでしょ。そしてそれは来週には教室で発表してくれると。織斑先生が今言えるのはそこまで。これ以上突っ込む意味はないわよ」

「鷹月さんナイス！」

「よくやった鷹月！」

「なんなの君らは」

結局この二人は茶々入れだけしかしなかった。本当に何なのか。

「鷹月、感謝する」

「いいえ、それよりも早く授業を始めてください。貴重なIS実技の時間なんですから、こんな不毛な言い争いとか勘弁して欲しいです」

「あ」

鷹月さんが俺を睨んでいる。

見渡すとクラスメイト達も似たようなものだ。

そんな中谷本さんがうんうんと頷き、布仏さんが爆笑する姿は珍しく俺にとって心安らぐ光景だった。

ISの実技は週一回、一組は土曜の午前中を使っで行われる。朝や放課後はあくまで自主訓練であり、新たな事柄を学ぶのはやはりこの時間だ。

今週は多くの生徒から強い要望があったということで、イグニッション・ブーストについて前倒しで指導してくれるとのことだ。本来は二学期に教わるものだそうだが、リーグマッチにおいて一、二、四組が繰り出したことにより一年生達はその存在を把握して個人戦に向けて必要だと認識したらしい。確かにこれがあるないで大違いな

のは事実なので、知識だけで無理をされるよりはということになったようだ。

「それで加速の切り替えについてはどこまで細かくできるかだと思うのよ」

「ああ、一夏が四組代表から逃げる時やってたね」

「そうそう。あの時は普通に見てたけど、今やってみたら相当に難易度高いわ。加速停止加速の切り替えを瞬時ですべてさらに相手の予想を外さなきゃいけない。それを集中力切れかけの状態ですべてたんだからやっぱり相当なセンスよ」

「賭けてもいいけど今やったらできないよ」

「まさか……とは言えないのが織斑君ね。でも本番じゃきつとやってしまいうんどうなってると思うわ」

さつきから鷹月さんが俺の側を離れてくれない。

自分の訓練もそこに俺のところへやってきて、こうやってイグニッション・ブーストの考察や活用について語り続けている。

右から左に流そうにも俺の返事を要求してくるのでそうもいかず、その上アリーナでは逃げ場もないのでやむを得ず付き合い続けている。まあこうやって真面目そうにしていけばサボれるし変なのに絡まれないだろうというのもあるけれど。

「うわ、なんだあの動き？」

「確認するまでもなく谷本さんね。というかどうしてクネクネしたまま加速できるのよ!? 意味分かんないし気持ち悪いわー」

「いやあ、これは意表をつけるなあ」

「あんなのは一回限りの初見殺しなだけよ。不気味なだけで動きとしては単純だから」

「言われてみればあれって明らかに無駄多いな」

ゴーレム戦では目の錯覚かと思ったが、やはり谷本さんのISにおける動きはおかしい。

ISとは金属の塊なはずなのに、谷本さんが乗るとクネクネグニャグニャした印象になってしまう。

制御がまるでできていないのかと思ったが、鷹月さんによれば完璧

に制御できているからこそああいう動きができるらしい。ISを自分の体のように動かすというのはISを操縦する上で大事なことだそうだが、つまり谷本さんはそれができた上で余計なことまでしてしまっているようだ。ちゃんとすればできるのにやらない。まさに谷本さんそのものだ。

「ほんとあの人見てると腹立つわ」

「鷹月さんは谷本さんに厳しいよね」

「よりによって甲斐田君に言われたくないわね」

「ごもつともです。あ、落ちた」

「無理な動かし方して負荷が頭にきたと予想」

「大丈夫かな」

「あれで影響あるようなら甲斐田君なんてもう命がないわよ」

谷本さんは自分で落ちを付けたのだろうか、とどうでもいいことが浮かんだ。

「やつほー！ アリーナデートは楽しいかなー？」

「はい？」

「何言ってるのこの人？」

ISに乗ったまま俺達のところへやってきたのは相川さん、とりアーデさん。

ISに乗れてテンションが上がっているようだ。

「ハイヘーイ！ デートならもうちよっとくつついたらどうですかー！」

「うわうっぎ」

「リアーデさん、相変わらず声大きいね」

「オウこの美声を褒め称えるとはさすがでーす！ お礼に一曲歌いましょうかー!?!」

声が大きいいと言っただけで褒めてもいないし美しいとも言っていない。

医務室でいきなり超大声で歌い出して医務の先生をブチ切れさせたくせに、やはり反省の色はまるでないようだ。

「ごじや声も響かないし遠慮しとくよ」

「甲斐田君は相変わらず謙虚ですなー！ 奥ゆかしいですー！」

「それはどうも」

「だけでもうちよつと情熱を持った方がいいですよー！ 愛は我慢するようなものではないのでーすー！」

「どうしようこいつ殴りたい」

鷹月さんはむしろ気に入らない人間の方が多いのではないだろうか。

「おつとごめん。マリアはそのへんにしておこうか。一応聞いとくけどデート中じゃないんだよね？ もしそうだったらすぐに退散するけど？」

「授業中に衆人環視の中デートって聞いたことないなあ」

「バカバカしい。せつかくISに乗れてるんだからつまんないこと言っていないで真面目に練習しなさいよ」

「あ、ごめんなさいごめんなさい。真面目な話。ISの」

「おや、テンションが上がりまくってノリでやってきたわけではないようだ。」

「イグニツション・ブースト？ それなら素直に先生に聞けばいいんじゃない？」

「いや、イグニツション・ブースト自体は前からできてたからいいんだけど、それを組み合わせた動きについてちよつと相談があつて」

「へえ」

「さつきからマリアを相手にして攻撃の練習をしてるだけどうまくいなくて、ことごとく躲されるんだ」

「情熱の国スペインから派遣された留学生ナメんなですー！」

「リアーデさんはちよつと黙ってようか」

「それで？」

「ちよつとあたしの動きを見てほしいなあと思つて」

本気で真面目な相談だった。

恋愛戦線を離脱するところなるのか。もはや一夏に見向きもしない。

「そういうこと。見て感想言えばいいのね？」

「できれば改善案も付け加えてくれるとうれしいかな」

「あんまり期待されてもなあ。正直パイロット班として一夏の訓練に付き合ってた人達の方がよっぽど分かっていると思うよ？」

「いやいや、こちらは見て分析することにかけては学年一な方々だし」

「はいはい、私はおまけてわけね。じゃあ時間もないだろうしさっさと始めて」

どうも鷹月さんはリーグマッチ以降自分を下に置きたがる。

一歩間違えれば卑屈になってしまうのだが、基本的には俺から吸収して追い抜いてやるぜという下克上心満載に強気だ。その結果周囲からは力関係を認め合っていたいいライバル関係のように思われているようだ。

正直に言えば迷惑なのだが、鷹月さんと四十院さんが織斑先生に働きかけて俺を放課後の作業から解放してくれたので頭が上がらず文句を言いつらい。この連中は全て計算ずくでやっているからなおさら質が悪いのだ。

「ありがとー！　じゃあマリア、さつきと同じ感じでよろしくー！」

「まっかせなさーい！」

「相川さんはもうリアーデさんにまで迫り着いたのね。この人も成長速度が半端ないわ」

「そんなに？」

「ええ、リーグマッチで自分のことを不甲斐ないと反省したんでしょうね。人が変わったみたいに真面目にやってるのは甲斐田君も見るでしょ」

「ああ、どっちかというところ今の姿が本来の相川さんなんだろうけど」

見返してみせると言っていたが、本当にすっぱり切り替えたようだ。

あの明るさはそのままに勉強やI Sに熱心になり、元々対人スキルが高いこともあってか周囲は驚きつつも好意的に受け止めている。

元パイロット班の連中もそれに引きずられる形で自主的な訓練に取り組むようになっていし、意外とクラスへの影響は大きいよう

だ。

きつと個人戦でもそれなりの成績を残すのだろう。

「あら、あれは合図待ちのようね。甲斐田君よろしく」

「そこまで堅苦しくやることもないんだけどなあ」

苦笑しながら俺は合図のために手を挙げた。

独占禁止法発動である。

「捕獲完了ですーす！」

「よし、このまま食堂へ！」

「智希！　お願いだから助けてくれ！」

「甲斐田！　早くどうにかしろ！　お前の仕事だろう！」

「甲斐田さんはこういう時のためにいらっしやるのではないですか！」

「君らは僕をなんだと思ってるの」

一夏がズルズルと引きずられていき、篠ノ之さんとオルコットが羽交い締めになっている。

何も知らない人間が見たら白昼堂々行われる凄惨な誘拐現場だろう。

「相川！　この裏切り者め！」

「わたくし達の友情はその程度でしたの!？」

「悪いね、約束なんだ」

ノリノリで悪役のように笑う相川さん。篠ノ之さんを抑えるのは一苦労だろうに、余裕の表情を保ったままだ。

一方オルコットを抑えているのは整備班の田嶋さん。こちらもニヤニヤと笑いながらだが、この二人の関係性はよく分からない。想像するに買収だろうか。あるいは悪乗りか。普段は夜竹さんとするんでいるだけにロクでもない性格であることはよく知っているが。

「約束だと!?　貴様、どこの悪魔と契約した!」

「ああもうわたくし達の知っている相川さんではないのですね……」

「人は変わるんだよ。良くも悪くもね」

よく分からない小芝居が始まってしまった。

傍観するかそれとも見なかったことにして立ち去るかどちらがい
いだらう。

「目を覚ませ相川！ お前はそんな奴じゃなかったはずだ！」

「何があつたのですか？ きつとやむにやまれぬ事情を抱えているの
でしょう。 お願いですからそれを教えて下さいませ」

「どうかさあ、原因というか悪いのは君達の方なんだけど。 さすが
に織斑君を独占し過ぎ。 外から見るとちよつとひどいよ」

つまりはそういう話である。

平たく言えば、この連中は調子に乗り過ぎた。

直接的な要因を言えばそれは鈴の加入だろう。

鈴は一夏との付き合いが長いだけあって、一夏の扱いを心得ている
だけでなく周囲のあしらい方も手馴れている。

その結果、篠ノ之オルコットでは不可能だった一夏に纏わり付くク
ラスメイト含めた女生徒の排除に成功した。 一夏と四六時中行動で
きるようになったのだ。

普通であればそのまま篠ノ之さんとオルコットも同じように排除
されていたはずだが、鈴の方にはそれができない事情が生じていた。
まず、オルコットに対しては私怨でボコボコにしてしまったので後
ろめたい。 鈴が謝罪して和解はしたものの、自分の武器を理解してい
るオルコットに匂わされるともうそれ以上は踏み込めなくなってい
まっている。 よつて一夏の側から排除するなど到底不可能になつて
しまつていた。

一方篠ノ之さんに対しては、鈴が恩義を感じているようだ。

謝罪を行う際取り持ったのが篠ノ之さんであり、その後も鈴が一組
に来た時は話しかけたりして鈴が受け入れられる空気を作っていた。
それまではオルコットの件によつて一組内では敵扱い、ラスボス扱い
されていたので、これは鈴にとつて非常にありがたかつたようであ
る。 篠ノ之さんは元々鈴に同情していたせいもあつて他人事ではな
かつたのだろうが、この結果鈴は恩人を踏みにじるような真似はでき

なくなってしまうた。

そしてここ二週間近く、篠ノ之オルコット鈴の三社カルテルによる一夏独占状態が続いているのが現状だ。

「別に抜け駆け禁止とかそういうのはなかったけどさあ、ちよつとやり過ぎじゃない?」

「そ、それは……」

「それは正当な行動による結果であって……」

「しかもそのへんは全部凰さんにやらせてるし。みんな事情は知ってるけど、だからってそこにあぐらかいて何もしてないのを見ちやうとあれ何なのって思うのは自然な話だよー」

別にそんなのは早い者勝ち囲んだ者勝ちでいいだろうが、篠ノ之オルコットの両名はそこに後ろめたさを感じてしまっているようだ。

なまじりリーグマッチ中に仲良くしてしまつたのがいけなかったのだろう。同志意識が芽生えてしまったので、面と向かって言われてしまふとだから何だとふんぞり返れない。

鈴の方はこれまでもそういう視線を浴び続けてきたので今さら気にしたりはしないが、篠ノ之オルコットはこれが初めてである。あの様子ではおそらくここ最近風当たりが強くなってきたのを薄々は感じ取っていただろう。

「ま、そんなの認められないというのならこれから奪い返しに行けばいいと思うよ。織斑君の前で毎回争奪戦をすればいいんじゃない?」
「う……」

「一夏さんの目の前で……」

「そうなるとどんどんエスカレートして最後はガチになつちやうけどね」

やっぱり相川さんは二人と比べて精神的に上だ。

拳を振り上げるだけでなく落とすどころまで用意してきた。

もちろん二人に自信があればこのまま突き進むの一手だ。耳を貸す必要などない。

だがこの二人がそんな段階にいるはずがない。そして孤立上等で突っ込む覚悟もない。

であるから選択肢としてはひとまず以前の状態に戻す一択であるのだが。

「……」

「……」

袋小路に追い詰められてもなお決断できない二人は俺を見てくる。しかもさすがのような目で。

これが二人にとっての俺の価値か。

「さて僕は何を期待されているんだろうか」

「いや、甲斐田ならこの場を一発逆転する何かが……」

「甲斐田さんでなければこの進退窮まった場はどうにも……」

まだ望みを捨てていないようだ。

それなら俺としてはこうだろう。

「うーん、じゃあとりあえず一夏達を追いかけて食堂に行ってみれば？」

「だ、だが……」

「それでは問題は何も……」

「でもさ、一夏は攫われていったわけじゃない。心細くて泣いてるかもしれないし、その場合は救い出してあげないと」

「それだ！」

「さすがですわ！」

あっさり乗った。

「そうだな！一夏が困っているのだから仕方ないな！」

「そうですわ！わたくし達は囚われた一夏さんを救わなければなりません！」

二人は勝ち誇った顔を相川さんに向けて、それから疾走して行った。

「甲斐田君」

「いやーうまくいくといいなー」

「どちらが……って聞くまでもないか」

「どつくに一夏の機嫌は直ってるだろうしね。それくらいは準備してるんでしょっ。」

「多分」

「ま、一夏の方も最近クラスの人達と会話してない気がするとか言ってたし、大丈夫だと思うよ」

「あの二人は遠くから涙目かあ」

リーグマツチ当時は自分達の立場をわきまえていたのに、ここ最近一夏を独占して目が曇ってしまったのだろう。

差はあれど、他のクラスメイト達を引き離していようと、自分自身の一夏との距離の認識を見誤っているからこういうことになる。

「やっぱ甲斐田君を敵に回しちゃいけないなあ……」

「それはクラスの誰もが知ってること。問題はその行動が自分にとってどうなのか分かりづらいということだよ。お疲れ。助かったよ」

「いえいえ。またご贔屓に」

「報酬は例の口座に、じゃなくて明日ね」

「まいど〜」

時代劇の下っ端のような態度になって、ペコペコしながら田嶋さんは去って行った。

「相川さんはいったい何をやってるわけ？」

「いやー、ここのとこ自分のことでみんなに色々助けてもらってるからさー、機会があればこうやって恩返しをしてるんだよ」

「今おもいつきり田嶋さんを雇ってる感じだったよね？」

「あ、マリア達じゃなくてそっち？ あれは田嶋さんの趣味だって」

「ごめんまるで意味が分からない」

「んーあたしもよく分かんないけど、そういうのが好きなんじゃないの？ さっきの悪役風演技も田嶋さんの提案でやったんだけど、意外と楽しかったよ」

「オーケー。触らない方がいい世界だということとは分かった。相川さんがそれでいいのなら僕としては何も言うことはありません」

これはあれだ、深淵に手を触れてはいけなとかそういう話だ。

「別になんでもいいよ。さてと、あたしもお昼にしようかな。甲斐田君は昼どうするの？」

「弁当とかないし普通に食堂かな。相川さんは弁当？」

「そ。今日は天気もいいし屋上で。じゃ」

手をひらひらさせながら、相川さんは去って行った。

この人は本格的に自由人になってしまったようだ。

そういえば鈴が出てこなかったなと思いつつ食堂へと足を進める。

あの場に鈴がいたら話は全く変わってきただろう。全員を取り押さえることができなくなるし、そもそも鈴はどちらに付くのかという問題も出てきた。

とまあ、あつたかもしれない可能性について考えながら食堂に到着すると、あつさり答えが出てしまった。

食堂入り口の隅に三人いる。鈴、ハミルトン、そして夜竹さんだ。

あれは見るからに取り引きを行っている姿だ。これは許すまじ。

鈴には一夏の写真をタダで提供してやったというのに、それだけでは飽き足らぬか。

そして夜竹さんに至ってはやはり口約束なんて守れる人間ではなかったようだ。

現行犯逮捕をすべく歩みを早めると、何かを感じ取ったかのようにいきなりハミルトンが振り返る。そして目が合つてハミルトンの目と口が大きく開く。

続いて鈴に夜竹さんもこちらに気づき、特に夜竹さんはこれはやばいという顔に一瞬で変化した。

はい有罪確定。もはや神妙にお縄に付くしかないだろうと思い歩みを緩めたところ、既に意識の外にあったハミルトンがいきなり逃げ出した。

思わずそちらに気を取られてハミルトンの走って行った方向を見してしまう。だがすぐに夜竹さんから意識を外してしまったと目を戻すと、既に夜竹さんの姿はなかった。逃げられた。

場に残るは鈴ただ一人。こちらは一瞬の出来事に理解が及ばなかったようで、呆然としている。

鈴を見る。鈴も俺に気づき、目が合う。

やがて鈴はニコツと笑い、俺も笑顔を返す。そして鈴は脱兎のごとく逃げ出し、最後場に立っているのは俺一人となる。

こうして俺の頭の中に、鈴と夜竹さんの部屋を訪れて詰問を行うというスケジュールが追加されることとなった。

14. 平穏な一日（午後）

人からもらったものであろうと、自由は自由だ。

というわけで俺は一人足を早める。うかうかしては捕まってしまうからだ。

昨日までは自動的に連行されていた。右から左に、これは行く場所が変わっただけではないかと気づくのにそう時間はかからなかった。今までは織斑先生、今は鷹月四十院。やることは事務作業から指揮関連のお勉強である。

いや、別に暇を持て余しているのならやったっていい。今までのように絶対拒否などと言う気はない。

今しばらく一夏に対する影響力を保持する意味でも、指揮について多少の知識を得ておくことは無駄にはならないはずだ。

個人戦はまだしも二学期三学期の行事をにらむと、一夏の嫁候補に指揮官タイプがない以上は俺が担わなければ一夏に対する特別な便宜を図ることができない。

オルコットならできたかもしれないが、残念ながら奴は専用機持ちでパイロットコース一直線。どうしても優先度的に自分が最上位に来てしまう。まだ一夏を自分の前に押し出すことまではしてくれないだろう。

一方で一組の指揮科志望の連中は、呆れるほど一夏に興味なし。これは正直なところ誤算だった。

一夏の潜在能力を考えればこういうタイプこそ一夏に惚れ込んでくれるだろうと算盤を弾いていたのだが、実際は微塵もそういう方向で興味を示すようなことがなかった。

その上俺が女子を一夏にけしかけていることまで理解しているの、俺から何かをすることもできない。取り付く島もないとはこういうことだろうか。

もう来年になってから指揮科の人間で探すか、今年であれば三組の

ベツティブレーンの連中を捕まえるくらいしかないだろう。ただ後者は話をしている鷹月さん達にも及ばないレベルに見えるので、能力的に不安であつたりする。

とりあえずのところ、今は一夏をサポートしてくれる人間が欲しい。篠ノ之さんではIS関連以外では役に立ちそうもないことがもう俺の中で確定してしまった。有事には強いかもしれないが普段が弱すぎる。鈴には殴り合い上等の世界しかない上にやはり自分が一番だ。

感覚としては四十院さんが一夏に惚れてくれれば一番よかったのだが、なかなか世の中うまくいかないものである。

「あれ、かいだーだ。一人でなにしているの〜?」

「何って普通に歩いてるんだけど、あ」

外から校舎に入ってきたのは布仏さんだった。そしてもう一人。

「なに〜?」

「ええと、そちらは……」

「かんちゃん。そういえば初めてだね〜」

四組代表更識妹である。

ああ確かにこうやって至近距離で面と向かいになるのは初めてだろう。

更識妹に対する俺の評価は、日々成長している、だ。

何が成長しているって、俺に対する態度の取り繕い方が日々上達しているのだ。

最初はひどかった。俺を見つけるや挙動不審に慌てふためき、逃げる。俺の視界から消えようとする。

これはもしかして振りなのだろうか、とさえ思った。もし姉がやっていた日には叱責を免れないほどの次元だ。だが見るからに本人は大真面目にやっているようなので、その意を汲んで俺は見ないふりをすることにした。ちなみに谷本さんであれば見たと相手に認識をさせた上で流しただろうか。

まあ、尾行していたのがバレたのではないかと怯えていたのだろうけれど。

だがさすがに本人的にもこれはよくないと思っただらしい。俺を刺激しないようにか、次第に態度を取り繕うようになった。さりげなく歩く方向を変えてみたり、何かを思い出した風に足早に通り過ぎようとしてみたり、日々工夫を重ねる様子が見受けられる。今では止まらずに俺の横を通り過ぎることができくらいだ。

もちろん普段一緒に行動をしている人間がいれば、お前はいつたい何をやってるんだと突っ込まれたろう。だがいつ見ても更識妹は一人だった。布仏さんが側にいるのは朝夕校舎外にいる時と昼食時くらいなものらしく、校舎内では別行動なためか二人がいる場に出くわしたことはない。まさに今回が初めてである。

「初めまして。甲斐田智希です」

「……」

更識妹は軽く頷いたのみで、言葉を発することさえなかった。視線も下げたままである。

何も知らなければああそういう人なんだろうなと思うところだが、残念ながらこいつに限っては違う。

俺と同種の間人であるのであれば、今は絶賛パニくり中だ。

やばい何も準備してないどうしよう!!? もういつそ隣の人間を差し出して逃げられないか……! と脳を全力で回転させようとして意味不明な方向に走っている、そんな状態である。

さらに俺のことを認識していれば、これはもう絶対に視線を合わせてはいけない、合わせた瞬間にやられる……! くらいは考えていそうだ。もちろん何がやられるのかは本人も分かっていない。

「かいだーは知ってるよね〜?」

「四組代表の人でしょ。あと生徒会長の妹さん」

「……!」

生徒会長という単語に反応して、更識妹は反射的に顔を上げる。いや、なぜそれをという顔をしないで欲しい。さすがに知っていて当然だろう。布仏さんの前で更識妹について何かを口にしたことはな

かったが、一夏の対戦相手なのだから調べられていないはずがないとは考えないのか。というか姉から何もなかったのか。姉に俺のことを聞いたのではなかったのか。

「あれ、生徒会長の人から何も聞いてなかった？」

「……」

試しに振ってみると、あからさまに警戒し再び顔を下げた視線を外す。きつと頭の中では最大級の警告音が鳴らされていることだろう。どうやってこの場を乗り切るか、を考えようにも考えが纏まらない、そんな状態。

「かいちよーはかいだーのことがんちゃんには何も言っていなかったね。だからかんちゃん知らないよ」

「そうなんだ」

「……！」

よくやった本音！ 褒めてつかわす！ だろうか。

だが俺として気にかかるのは布仏さんがそれを言い切ったということだ。そんなもの一対一で布仏さんのいないところで会話しているかもしれないのだから、本人に代わって言い切るようなことではない。つまりそれは事実なのだろう。この姉妹は一対一で会話するよなことはない。

まあ、理由はよく分かる。姉がうざった過ぎて布仏さんを間に挟まないとやってられないとかそういう感じだ。妹命とかちよつと勘弁してくれということだ。

「そいつは失礼。でも意外だな。あの人の性格からして喋りまくってそうだけど」

「それはね、なんか刺激しちやいけないんだって。かんちゃんはジュリエットじゃないんだって言ってた」

「はあ、そうなんだ」

あれ以来生徒会長が妹について何かを口にしたことはない。

そもそも布仏姉が出張ってくるようになったこともあり、口論バトルの頻度がめつきり少なくなってしまった。

最近谷本さんの相手だけでは物足りなさを感じてしまうあたり、や

はり俺は心のどこかで楽しさを感じていたようだ。

「……」

「じゃあまた」

「え、せっかくなんだからもっとお話ししようよ」

何を余計なことを、と俺と更識妹の心はおそらく一つになった。

俺はもちろんできる限り関わりたくないし、向こうだって準備なしの遭遇ではやり過ぎしたいはずだ。

なのに布仏さんは邪気のない笑顔を俺達に向かって振りまく。俺達が吸血鬼だったらそのまま笑顔の光で消滅させられそうだ。

「いや、でもこれから行くところがあって」

「かぐ？ それならすぐそこでかいだーを探してたけど」

「あー、四十院さんね。ちなみにどのへんにいた？」

布仏さんは自分が入ってきた方を指差す。外に張っているか。ま
ずい、読まれている。

一応アリーナ方向へ行つたと偽装はしてきていたのだが、俺の行動を当たり前のように読んでくる鷹月さんが先読みして網を張っていると考えた方がよさそうだならばどうする。

一．外へと強行突破。

二．この二人と行動する。

三．一人でアリーナへと向かう。

一は無理矢理なら可能だがリスクが大きい。後に響くという意味で。

二は更識妹という爆弾を抱えることになる。

三は一夏や俺を逆恨みしている篠ノ之オルコットに捕まってしま
う可能性がある。

「そうだね、ちよつとくらいなら時間あるか。じゃあ中庭にでも行こ
うか」

「やった〜！」

「……！」

布仏さんがバンザイし、更識妹は固まる。

一瞬の判断ではあるが、他と違って俺に対して攻めに来ていない更識妹が一番与し易そうだという結論である。

「そこまでよっ!」

だが実際に行われるのは第四の可能性だった。

「とうとう尻尾を出したわねっ!」

生徒会長の鼻息が荒い。というより肩で息をしている。そんなに全力疾走をしてきたのか。

「息を忍ばせて相手が緩むまで待つとは、なんて悪魔的な男子なの!もしかして杞憂だったかと思うくらいになって行動を起こすとは、本当に油断のならない相手ね!」

「うわあ」

「お〜!」

「……」

布仏さんが手を叩いて喜ぶ。更識妹はまた余計なのが、という感じだろうか。

だがこれはチャンスだ。俺だけでなく、更識妹にとっても。

「何の話ですか? 今たまたま出くわしただけですけれど」

「ふん、もう騙されないわよ。こういう場合に甲斐田君が計算をしなわけがないことくらい分かってるわ。虚の言う通りね」

布仏姉は普段何を生徒会長に吹き込んでいるのか。

俺の虚像がおかしな方向に進んでしまう。

「あれ、そういえば布仏先輩はいないんですか?」

「虚? それがあの子は体力ないのよ。いや、もちろん人並み以上ではあるんだけど、私について行くにはちよつと足りなくてね。今一生懸命追ってきてはいると思うんだけど」

「布仏さんは走るの得意だったりしないの?」

「あんまり上手じゃないかな」

「じゃあそういう家系ではないってことなのかな。でもこうやって必要になりそうな場合もあるみたいだから、整備科志望だからって手を

抜くわけにはいかないね」

「うん！ 私もがんばるよ！」

「そうそう、本音ちゃんは虚みたいに逃げてちゃダメよ。役割とかそういう言い訳はしないで、きちんと日々体は鍛えないと……つてそういうことじゃなくて！」

ものの見事に乗ってくれるから生徒会長とやり合うのは楽しい。

谷本さんはこういう時芝居がかり過ぎなのだ。

あの人は自然に会話をするのがどれほど大事かを学ばなければ未来などない。

「ああ、布仏先輩の話でしたね。話がそれました」

「待って。その前から思いつきりずれてるから。いい、私が言いたいのはね」

「いや、これは大事なことです。あのですね、どうも会長は布仏先輩を無条件に信じ過ぎています。もうちょっと考えてください」

「何を言い出すの！ 虚は私が生まれた時からずっと一緒なのよ！」

あの子については私が一番良く分かってるんだから、他人が口を挟まないで！」

「おっしゃるとおりです。ある意味この世で一番お互いに通じ合っている相手かもしれません。でもですね、お二人の間にはどうしても決定的な違いがあるんです」

「な、何よそれは？」

さあ更識妹、お前の頭脳的瞬発力はどの程度だ。

「立場が違うんです。布仏先輩はあくまで会長を支える立場であつて、対等ではないんです。そしてそのことによつて意識の齟齬が生まれてくる」

「どういうこと？」

「分かり易い例を挙げましょう。布仏先輩は僕を生徒会に入らせようと執拗に勧めてくる。会長が散々止めて欲しいと言っているのにも関わらずだ」

「た、確かに……」

「もちろん布仏先輩に私心なんてないでしょう。純粹に会長のための

思って提案をしている。そこに疑いの余地はない。でも、それでも会長は反対なわけだ」

個人的には布仏姉はおもしろがってやっているように見える。

妹を見てもこの姉妹はこういう風に遊ぶのが大好きそうだ。どこまで計算をしているかまでは分からないが、イレギュラーな出来事に興味を示すことは妹と共通しているような感じがする。

「そうね、虚があそこまで言うんだからって思わないこともないんだけど……」

「そこです。確かに布仏先輩から学ぶことは多いでしょう。一年の違いは大きいわけで、やっぱり経験の差はあるんです。でも、だからって何もかも言いなりになってしまうのは違うと思いませんか？ 会長だつて一人の人間としてはつきりとした意思を持っているんだから」

「そ、それはもちろんそうあるべきなんだろうけど……」

「もちろんその通りだと思うのであればそうすればいい。だけど絶対に違うと思つたらそれは貫くべきだ。だつて会長は操り人形じゃないしそうなりたくもないでしょう？」

「操り人形だなんて……」

「楯無さまを洗脳しようとするだなんて、さすがに見過ごすわけには参りませんね」

「えっ!？」

来た。さあ更識妹、チャンスはここから数秒だ。

姉の視界から外れ意識も飛んだ隙に、逃げろ。

「甲斐田君、そういうのは感心しませんね。楯無さま、今のは完全に詐欺師の論理ですよ」

「ええっ!？」

「洗脳だなんて物騒ですね。布仏先輩がいるのにそんなことできるわけじゃないじゃないですか」

「はい、もちろん私が来るのを分かっているんですけど、本気ではなかったでしょう。ですが楯無さまとお話をするのでしたら、きちんと楯無さまと向き合つて欲しいものですね」

「虚？ どういうこと？」

これはバレている。

姉ではなく妹に聞かせたことが。

「楯無さまがここへいらっしやった理由はなんでしたか？」

「それは……あつ！ 簪ちゃん！」

生徒会長が慌てて振り返ると、そこにお目当ての更識妹の姿はなかった。

今がチャンスだと反応はできたようだ。

「簪ちゃんがいない！ どこへやったの！」

「いやいや、自分で逃げて行きましたよ」

「なんで!？」

「そんなこと僕に言われても……」

俺が場を作ったにせよ、逃げを打ったのは更識妹本人の意思だ。

俺の関与することではない。

「しまった……私としたことが……」

「妹さんが心配なら追っかけた方がいいんじゃないですか？ どうしていなくなったのかは知りませんが」

「言われなくても！ 覚えてなさい！」

憤然としながら、生徒会長は校舎の外へと走って行った。

布仏姉もそれを追いかけようとし、すぐに止まって振り返る。

「楯無さまが甲斐田君を気にする理由がようやく分かりました。すごく似ているんですね」

「似ているっ！」

「お礼に今日のところは勧誘を控えておきます」

「これからもずつとというわけには行きませんか？」

「それだけは無理な相談ですね。では」

無理な相談と言うか。そこまでか。

と、俺の袖が引つ張られる。

「どうかした？」

「かいだーって、ずるい」

見れば珍しく、本当に珍しく、布仏さんが怒った顔をしていた。

こんな顔を見るのはオルコットがボコボコにされた時以来だろうか、頬を膨らませている。もちろん微塵も怖くはない。

「ずるいつてどういふこと?」

「べーだー!」

小学生かという仕草をして、布仏さんは駆けて行った。

ああ、初対面なのに俺の意思が親友更識妹に通じてしまったことが悔しいのだろう。かわいい嫉妬だ。

どうやら姉も妹も俺のやったことを理解したようだ。

しかし更識妹が素直に姉妹のように額面通りに受け取ってくれるのであれば、話は簡単だ。

その程度であればはつきり言ってどうとでもなる。脅威どころか敵ですらない。

でも、きつとそうはならないだろう。

素直にはならず思いきりひねくれて、裏を読んでくるに違いない。

自分の意思ではなく布仏さんの意思に従われた方が俺は嫌だと感づいてくるだろう。

結局のところ、更識妹は一人だ。正直言って一人では大したことは何もできない。基本的に俺の周りには一夏やクラスメイト連中がいるし、クラスを離れたとしても三組に顔を出すくらいだ。たとえ一人の時を尾行したってたかがしれている。

だから俺のことを調べたいのであれば、一人でやってないで布仏さんを間に挟むべきなのだ。今後も俺に関わるつもりならまあそうするだろう。

そしてそれは俺にとってはコントロール下におけるといふ話である。はつきり言って一人で暴発されるのが一番怖い。やけになって一人撒き散らして事態を悪化させてしまうのはもうたくさんだ。

だから俺はあえて踏み込んでいく。

「さて、ようやく落ち着いたし、この後は……」

「それはもちろん資料室ですよ。昨日そういう約束をしましたよね?」

心臓が止まった。

顔を上げると笑顔の四十院さんが目の前に立っている。いつの間に。

「四十院さん……」

「食後の散歩はお済みですか？　ですが少し時間がかかり過ぎではないでしょうか。それから行く先は言ってもらわないと」

「いや、それは……」

「せっかくの土曜日です。のんびりしたいのは分かりますが、時間は有限なのでそろそろ参りませうか」

これは口では無理だ。もはや強行突破しかない。

慌てて後ろを振り返ると、なんと鷹月さんが走ってきた。

「いたいた！　こんなところにいたのね、布仏さんの言った通りだったわ」

売られた。

ということは方角からしておそらく布仏姉が四十院さんにチクつていたくさい。そして回り込まれたと。

これはまずい、挟まれた。

「甲斐田君、私達と行くか織斑先生のところに行くかどっちか選びなさい。それ以外の選択は明日からの不自由な生活を意味することになるわよ」

「それすごい脅迫なんだけど」

「それが娑婆に出る条件なんだから何もおかしいことではないんだけれど？」

「娑婆って言っちゃったよ……」

俺の立場は自由人ではなく、執行猶予付き保護観察処分だけだったのか。

いや、それ以前にIS学園自体が監獄だった。

「じゃあ行きませうか」

「今日のメインはラファールの武装についてですね」

俺の両側を二人が挟む。

そして逃げないようという理由を口にして四十院さんが俺の首を掴む。

その姿はまさに連行される罪人だ。

勝負に勝って試合に負けたとはまさにこのことだろう、と俺は自嘲するしかなかった。

「いくらなんでも固定砲台はやり過ぎだと思ふのよ」

「ですがそこまでやらなければあの重火力は達成できません」

「コンセプトになんでもありにしたいんだろうけど、機動力が売りのラファールでやることかなあとは正直思う」

飯を食べながらお勉強だなんて、俺はなんと熱心な生徒なのだろうか。

というか明日に持ち越しではダメなのか。いくら時間で追い出されたとはいえ、きりのいいところまでと言いつついつまでも話を続けるのはどうなのか。もっとメリハリを持って生活すべきではないのか。

そしてそれを口にできない俺はいったい何なのか。

「よう智希、楽しそうだけど何話してんだ？」

「一夏」

「ラファールの武装についてですよ」

「え、その何が楽しいんだ？」

「ラファールの武装はいろんなバリエーションがあつて多彩なのよ。だから語ることも多いわけ」

「あ、そう」

「一夏さん、一夏さんの零落白夜は世界に一つしかないすばらしいものですよ」

「そうだぞ。下手な武装など及びもしない唯一無二の武器だ」

武装が剣一本しかない一夏が拗ねた。慌ててオルコットと篠ノ之さんがフォローする。

周囲が色々な武装を使っているのに自分は使えないというのはいい気持ちではないようだ。

「みなさん食事はもうほとんど終わりのようですよ」

オルコットが俺の目の前でにこやかに笑う。すなわち俺の前の席に座った。いや潰した。

朝は味方、夜は敵。

六人がけの残りの席ついたのは一夏と篠ノ之さん。こちらの二人に意図などないが、それはつまり弾かれたのが鈴とハミルトンであるということだ。二人とも隣のテーブルの席に座っている。もつとも、鈴は昼の件があるのでどのみち俺の近くには近づいて来なかっただろうけれど。

「今日は三人で学ばれたのですか？」

「さすがに毎日先輩達を引つ張り出すわけにはいかないし」

「なるほど、神楽さんは甲斐田さんと一緒に充実した時間でしたか？」

「はい、とても楽しく過ごすことができました」

うわ、あからさまにも程がある。

もう少しさり気なくはできないもののだろうか。

それともこれ見よがしにやるのが作戦なのだろうか。

名前を出されなかった鷹月さんは我関せずの表情で黙々と食べている。

「ラファールの武装についてですか……いろいろと意見を交換されたのでしょうか、やはり同じものを見ているも考え方の違いは出てきたりしますか？」

「それはよくありますね」

「なるほど。ではそうですね、例えば……神楽さんから見て甲斐田さんはどうでしょう？」

「意外……と言っては失礼かもしれませんが、一つ一つが堅実ですね。奇をてらうようなやり方はあまり好まないようです」

「そうなのですか？ それは確かに正直なところ意外でした」

「それは本当か？ あの甲斐田だぞ？」

「そうだな。智希っていつもちやぶ台をひっくり返してるイメージなんだけど」

実に間違ったイメージである。俺を何だと思っているのか。

「そんなの必要ないならいらないでしょ。奇策ってそもそも普通に

やったら勝てないからやむを得ず使うものなんだし」

「そりゃあそうだけど、いや、正直そういうのが好きかと思ってた」

「おっしやる通りですが、積極的に使って行って相手の混乱を狙う印象でしたわ」

「まず奇策ありきかと思っていた」

「それってただ単に性格が悪いだけじゃない」

俺が突っ込むと、三人とも黙った。

沈黙は肯定と解釈する。今度分かせてやる必要がありそうだ。

「で、では……甲斐田さんから見て神楽さんはいかがでしょう？」

「四十院さんこそ奇策とか大好きだね。一発逆転とか大掛かりな仕掛けとかそういうのを考えたがるよ」

「自分でも思いますが派手な方が好きですね。その方が楽しいですから」

「それは何となく分かりますわ」

「へー、そうだったのか」

「私としてはそちらの方が意外だな。誰かを補佐するタイプかと思っていたぞ」

「好みとしては、という話です。適正としてはそうかもしれないね」

これは感想が割れた。

俺やオルコットは初期から見ているので知っているが、パイロット班から見れば印象はまた変わってくるだろう。

四十院さんも指揮班としての決定があった上で他の班に連絡を伝えていたわけで、少なくとも議論する様子などは見せていない。そうすると暴君として悪名高かった俺の意思を伝える存在として認識されたりもしただろう。

「あと鷹月さんは慎重派だよ。石橋を叩いて渡るのがモットーだつて」

「奇策にやられるとか冗談じゃないわよ。普通にやれば勝てるのにひっくり返されて負けとかみっともない」

余計なことを言って巻き込むな、とばかりに鷹月さんはめんどくさそうに答える。

俺としては積極的に助けて欲しいのだが。

「へー、おもしろいもんだな。いろいろあつてバランスが取れていていのか?」

「どちらかというとき堅実寄りですわね」

「実際は攻めていた気もするがな」

リーグマツチでは作戦通りに行ったためしなど一度もない。

初戦では一夏が暴走、二戦目は完全に裏をかかれる、三戦目はやり過ぎて失敗、四戦目は一夏の独壇場、おまけは出たとこ勝負。反省をすればするほど自分達の存在は何だったのかと思わざるをえない。

だからこそ鷹月さんは個人戦に期するものがあるように見える。シードと訓練機もあるし、是が非でも一組全員をいいところまで進めてみせようと意識しているようだ。だからこそこうやって毎日俺達を引っ張って熱心に行っているのだろう。

ちなみに四十院さんの方は別な方向に意識が行っているのでそこまですでもないが。

「個人戦が楽しみですわね」

「今回は私も出るからな。大いに期待させてもらう」

「そうか、朝智希がルールルール言ってたのは個人戦をどうするかって考えていたからなのか」

「もちろんそうですよ」

当然一夏のためである。他の連中などどうでもいい。

まあ今の実力を考えれば一夏は普通に優勝候補であるのだが、特に専用機持ちには油断ができない。

射撃専門のオルコットや更識妹とは元々相性が悪いし、鈴木日に日に機体を自分のものとしつつある。

それに訓練での勝率だけなら大きく負け越している篠ノ之さんのような存在もある。一組連中は一夏の手の内を理解しているので足をすくわれる可能性だって普通にあるのだ。

その上他のクラスに俺の知らないダークホースがいるかもしれないことを考えると、時間はいくらあつても足りない。

三組にはまた入り込むつもりだし、五組は新代表杉山を使つてかき

回そうと考えを温めてはいるのだが、いかんせんルールが分からなければ動きづらい。

織斑先生のあの感じではまた余計なことを企んでいるのは間違いないので、早くどうにかしたいところではある。

「ルールが分からないんじゃないかな対策はできなさそうだな」

「はい、ですから毎日こうやって機体についての知識を得るところから始めているのですよ。リーグマッチの際は時間がなくて正直なところ網羅できていませんでした」

「なるほど、どのような事態にも対応できるようにというわけなのだな」

「それにわたくし達一組はシードですわ。ですから他のクラスの戦いぶりを観戦することができのです。予め対策を考えられるのはとても心強いことですわ」

これが俺達の最大の利点である。

おそらく最初の二、三日一組の出番はないだろう。二組から五組の潰し合いを観戦することになる。

その間はまず自分のブロックの試合を見ればいい。一組が登場しからは一組の連中が負けるような試合をチェックしていけばいい。

そして一組以外は勝ち続けてもきつと毎日連戦を繰り返すことになるので、当然疲労も溜まってくる。月曜に始まって決勝は日曜日、それはどれほどのものだろう。

鈴や更識妹やベッティといった代表クラスと言えど一回戦から戦わなければならぬのだ。

どう考えても一組が有利なようになっていく。リーグマッチ優勝の価値はそれだけあった。織斑先生に食らいついておいて本当に良かった。

「そうだ、個人戦には智希も出るんだしたまには一緒に訓練でも」

「明日は無理だよ。IS委員会の人達が来る日だから」

「そうか……」

「甲斐田さんのデータ取りの日ですか。それでは仕方ないですね」

「……数日一夏は隙あらば俺に訓練を勧めてくる。」

一度は理解を示しておきながらだが、自分が訓練をしているうちに俺だつてやれば楽しめるに違いないと考えてしまったようだ。

鷹月さん達に付き合っているのはそれを逃れる意味合いもあった。「じゃあ食べ終わつたし先行くね」

「おう」

「では私達も行きましょうか」

「はいはい」

四十院さんと鷹月さんも立ち上がる。別についてくる必要もないのだが。

出口でちらりと振り返ると、空いた席に速攻で鈴達が座っていた。

部屋に戻ると、ドアの前で土下座する二体の姿があつた。

その脇にも二人、今にも頭を踏みつけそうな顔の鏡さん。そして苦笑いしている相川さん。

「とりあえず誰だか分からないから顔上げて」

恐る恐る上がってくる顔は、夜竹さんと田嶋さんのものだった。両者とも神妙な顔をしている。

ふむ、自首しに来たか。

「ほら」

いきなり鏡さんが夜竹さんを蹴る。いったい何が始まるのか。

「この度は大変ご迷惑をおかけ致しました」

「誠に申し訳ございません」

再び二人が頭を下げる。仰々しく。

「何のことか想像つかないこともないけど、とりあえずは事情を聞かせて」

比較的冷静そうな相川さんに向けて口にする。

すると相川さんは申し訳なさそうな顔になった。

「あー、夜竹さんのことなだけども、元々はあたしが原因なんだ」「へえ」

「ほら、昼間にあたしマリア達の手伝いをしてたじゃない？」

「やってたね」

「それで作戦としてどうしても鳳さんが邪魔だったから、田嶋さんに足止めをお願いしてたんだ」

「なるほど、でも田嶋さんはあの場にいたよね」

「うん、それはつまり田嶋さんから夜竹さんに足止めをまたお願い？

してたそうで」

「ああ」

「で、その足止めの方法が織斑君の写真を利用することだったらしいんだ」

一応筋は通っている。いや通ってきたと言うべきか。

「あたしは知らなかったんだけど、甲斐田君が織斑君の写真を売るのは禁止してたそうじゃない。だけど夜竹さんは鳳さんを足止めする方法がどうしても思いつかなくて、ついやっちゃったそうだよ」

「そうなんだ。でもそれならどうして田嶋さんまで土下座してるわけ？」

「それはわたしがそそのかしました」

「なるほど。ちなみに夜竹さんの事情は？」

「もちろん理解した上です」

「へえ」

「ちよつとくらいならバレないだろうと思つてつい」

「まあ魔が差すつてあるよね」

役割分担も見えてきた。

と、もう一人いたか。

「ちなみに鏡さんがここにいるのは？」

「さゆかが青い顔して部屋に駆け込んでくるから、何事かと思つて問い詰めたのよ。それで事情を理解して、そんな布団被つて震えてても

甲斐田君が乗り込んでくるだけだからって関係者集めてこちらから自首させたわけ」

「なるほどねえ」

「まあやったことはどうかと思うけど、今回に限っては私利私欲にまみれてやったわけでもないし情状酌量の余地くらいはあるんじゃない

い？　こうやって自分から謝りにも来てるんだしさ」

「鏡さんにしちや優しいね」

「失礼な。いつもはさゆかが反省しようとするから怒ってるだけよ」

「それは失礼しました」

綺麗に纏めてきたと言うべきか。

さて発起人はどちらだったのだろうか。

「そちらの事情は理解したよ。まあでも夜竹さんのやったことはやったことだからね。やっぱり二度としないように織斑先生に」

「それだけはお許しを！」

「甲斐田くん、それってつまり生徒全体に広がるというか、一斉に家探しが始まつちやうわけじゃない。さすがにそれは大ごと過ぎると思うのよ」

「どうだろう」

「それに言っちやあなんだけど、甲斐田君だって織斑先生の写真を持ってたわけじゃない？　いや別にお金は絡んでないにしても、織斑先生があれを見ていい気持ちになるかっていうとそうじゃないでしょ？　下手に藪はつつかない方がいいと思うのよ」

「ああ、そういえばそんなのもあったね」

「それは……」

と俺は何でもないことのように言う。

奴らにとつての防衛ラインはそこか。

だがそれは俺にとつても最終防衛ラインにあたる。若き日の織斑先生の写真をばらまいている俺は、織斑先生にとつては夜竹さんどころではない罪である。

藪をつつかないとは言われるまでもなく明白なことだ。

「でもこれを見逃したとしても夜竹さんはまたやるよね」

「しません！　もう絶対にしません！」

「口では何とでも言えるし前もそう言ってたよね」

「それは……でも今回は絶対に本当なんです！」

「あたしとか鏡さんが見てて怪しい動きをしたら報告するよ。あたし

はパイロット班、鏡さんは整備班の人達と仲いいから、夜竹さんが何かをしたら絶対に分かると思うんだ」

「外部の鳳さんについては甲斐田くんが見てればいいんじゃない？付き合い長いそうだしそういうのは分かるでしょ？」

「きちんと考えてはきたみたいだね」

打ち合わせはしっかりしているようだ。

だが俺はこの連中が整備班会議初日に保身に走ったことを覚えている。残念ながらそれだけでは駄目だ。

「そ、それなら……」

「じゃあ僕からも」

「えっ!？」

「でもそれには話を通さないと行けない人がいるから数日待つてね。元々夜竹さんが約束を破ったらしようしようって考えてたことなんだけど」

「そ、それはいったい……」

「もし断られたときはまた考え直さないといけないから、それはまた決まってから。別にそんな怖がるようなことじゃないよ」

「ひいっ……!？」

夜竹さんは俺に何をされるのかと怯えている。この数日は罪にこのくがよい。

一方他の連中の様子を見ると、ぱつと見揃って緩んでいるようだ。つまり守るべきところは守ることができたということなのだろう。

果たしてそれは家宅搜索を避けることだったのか、あるいは。

「あ」

相川さんが俺を見て何か気づいた。

「甲斐田君、貸し一つで」

と手を合わせてくる。

この場はこれ以上突っ込んでくれるなどというお願いだ。

やはりこの場は全て仕組まれている。

脚本は相川さんか鏡さんか、演出はきつと田嶋さんだろう。依頼者は夜竹さんの後ろに誰かいる。

なぜなら夜竹さんがダメージを被るだけなら本人以外は困らないからだ。この連中にとって夜竹さんは守るべき存在ではない。

ある意味夜竹さんを犠牲にすることによって成果を手にする尊い作戦と言えるだろう。

「じゃあ事情は概ね理解できたってことで、今日はこんなところで」前を向くと、座ったままの夜竹さんと田嶋さんが素早く飛び退いて部屋への道を開ける。

俺はそのままドアを開けて入り、しっかり鍵をかけた。

15. 平穏な一日(夜)

「いやー、智希君はモテモテで困っちゃうねえ」

俺が入る前からスタンバイしていたらしき博士は相変わらずうざかった。

「今を見てその感想が出るとはとうとう頭が腐ってしまいましたか」

「さっきのはああ美しい友情とでも言うべきかな」

「どういう意味ですか？ よく考えたら覗くことが可能なんだし、その気になれば一部始終を知れますよね？」

このウサ耳女は一夏や妹や俺に関することであれば興味も示さないだろうから、つまりはそういうことなのだろう。

「そのまんまの意味だよ。乙女の秘密は守ってあげるのが優しい優しい東さんなのさ」

「自分や自分に連なる人間以外はゴミ屑なんじゃなかったんですか？」

「人は最初からゴミなんじゃなくてゴミになるんだよ」

博士らしからぬ言い回しだ。

何かあったのだろうか。

「つまり僕も博士も今はともかくゴミになってしまいう可能性があるのか」

「そうだね。だからこそ東さんも智希君も前に進むんだ」

「本当にどうしたんですか？ まさかクロエが病気になったとか言いませんよね？」

「私は元気ですっ！」

横からクロエが飛び出してきたが、すぐ博士に押されて画面外へと追いやられる。

「くーちゃんはちよっと待ってね。先にお話しとかないといけないから」

「すみませんです東さま……」

「話？　またよからぬことを企んでるんですね。何が大人しくしてるだ」

「いやいやいや、今回に限っては束さんじゃないから。智希君、君なんだよ」

「はあ」

何を今さらという話だ。

それは確かに俺は個人戦に向けていろいろと企んでいるし、これからも企む予定だ。

「まあ博士が大人しくしてるのなら特に何も言うことはないです」

「そうじゃなくて、智希君が荒らしちゃうかもしれないからその前にちよつと考えようよ、という話なんだよ」

「ほう。今までのように自分のやりたいようにやることを荒らすと言うのなら、特に自重する気はありませんが」

「うん、それは別にいいんだ。好きだけやればいい。でもさ、もう自分に関わりあいのないことならさ、どうだっていいじゃない。大事なのは未来。それでいいじゃないか」

「はあ？　いったい何が言いたいんです？」

「だからさ、智希君にとつて今一番重要なのはいつくんに関することであつて、再優先とすべきはそれだよねって話」

「言いたいことは分かりました。僕の優先度が変わりかねない話なんですね。で、それは？」

「それは……」

「言わないとクロエに聞きますよ。それともクロエまで黙らせますか？」

「いや別に黙ってるつもりもなかったけどさ、どうせすぐ分かるし……VTシステム」

「へえ」

なるほど博士が言いよんだ理由はよく分かった。

心なしか心臓の鼓動が早くなったような気もする。

「まだいたんですか。全部潰したって言いませんでした？　そのためにクロエを探してアメリカにまで来たんですよね？」

「うん、記録上は」

「記録に残ってないのによく分かりましたね」

「束さんが見れば一発なのに、まさか堂々とIS学園にやって来るとは思わなかった」

「はい？ それ何考えてるんですか!？」

「分かんない。単純に送ってきた人間が知らないのかもしれない。経歴ロンドリングのためかもしれない。IS学園ならかえって安全だとか考えたのかもしれない。そういうレベル以前に、今も無事なんだしもしかしたら見逃してくれたんじゃないか甘いこと思ってるのかもしれない」

呆れたとしか言いようがない。

IS学園が博士の監視下にあることくらいはさすがに理解しているだろう。

それなのに出てきた。

まさか博士はIS学園に対してはリーグマッチ時のような干渉しできないなどと考えているのではないだろうか。

あれは一夏用であって、その上今は篠ノ之東ネットワークがIS学園上に構築されている。

千冬さんを気にしなければ一人ピンポイントで潰すくらいなら普通にやれるそうだし、その気になれば博士は決定的映像を世界に公開することだってできるのだ。

「せっかく博士が跡形もなく闇に葬ってくれたのに、わざわざ表舞台に出すとか意味分かんないんですけど」

「そうなんだよ」

「あ、アメリカ絡み？」

「今さら？ あの国こそ関わり自体を消されて喜んでるんだよ？ むしろこっち来んな状態だよ」

「じゃあ何なんですか？」

「だから分かんないって言ってるじゃない」

「役立たないなあ」

「あ、智希君がそういうこと言う!？」

「お二人とも冷静になってください！」

思わず罵り合いに発展しそうになってしまった。

クロエに出てこられてさすがに我に返る。

「失礼しました」

「うん、お互いちよつと落ち着かなきゃね。クーちゃんありがとう」

「いえ」

「で、どうします?」

「最低限度意図を確かめた上で対処したい」

「なるほど」

「だからさ、はっきり言うけど智希君は関わらないで欲しい」

ああ、それが言いたかったのか。

「へえ」

「いや、智希君の事情はよく知ってるよ? でも智希君が頼まれたの

はクーちゃんのことであって、VTシステム自体にどうのって話じゃ

ないよね?」

「俺はあなたにそこまで言いました?」

「私は君から聞いたよ」

「行間を繋げて勝手に話を作らないで欲しいんですけど」

「そんなこと言って、君はもう何もできないじゃないか。『あれ』はも

うないんだよ?」

「それは……」

『あれ』がない以上君は暴走することさえできないんだ。そんな君に

いったい何ができるの?」

「……」

俺は答えられない。

多少は口が回るようになっただけで、今の俺は何も持っていないの

だ。

更識妹が持っているような無鉄砲な傲慢ささえも、今の俺にはな

い。

「ネットワークがあるから決定的な証拠はすぐ掴めると思う。そして

別にそれを隠すつもりはない。どう対処するかについてもちゃんと

言う。それじゃ駄目かな?」

「……少なくともその邪魔をするような真似はしたくないですね」

「よかった。それならいいんだ」

「博士、ちなみにそれはどういう形でやって来るんですか? 年齢的にあれですよ?」

「そこまで分かっているのならその通りだよ。もうまもなく智希君の前に現れるんじゃないかな」

「IS学園の生徒としてか……。ギリギリあり得ると言えばあり得るのか?」

「まあ年なんてそのへんはどうとでも……。いやなんでもない」

博士が慌てて否定したのはもちろん画面外のクロエに睨まれたからに違いない。

「転入生ってIS学園的にありなんですかね? 毎年すごい受験倍率だって言うのに」

「あ、それなんだけどね、ぶつぶ、もっとおもしろいことがあるんだ」

「へえ、何でしょう?」

「んー、それは実際にその場を見た方が楽しめるところから、内緒!」
「何ですかそれ?」

果たしておもしろい楽しめるところは誰にとつての話なのか。

「まあ笑えるから楽しみにしておきなよ。というわけでクーちゃんお待ちさせ!」

「はい! お兄様、今日という今日はちゃんと考えていただきますよ!」

「待った待った。その前に」

「あら、何でしょう?」

さすがに今の会話をしておいてクロエをスルーはあり得ない。

「いやだからさ、今僕と博士の話の話を横で聞いてたわけじゃない」

「ああ、そのことでしたらお兄様のお好きなようにどうぞ。もう私が関与することではありませんので」

「待ってクーちゃん、そこは東さんの言うこと聞いてって言って!」

「お兄様がお気の済むようにどうぞ」

「やだこの子反抗期!？」

「束さま、こう言った方がお兄様は私達のことを考えてくれるのです」

「むしろ大人だった!」

「それは僕のいない時に言って欲しかった」

「ではこの話はここまでと言うことで、お兄様」

笑顔のクロエが真剣な表情へと変化する。気が重い。

「神楽様とティナ様について、いい加減目をそらさずにきちんと考えていただきます!」

未来の義姉妄想が高じて、とうとう名前呼びになってしまった。

「だから何度も言ってるけどさ、そういうんじゃないから」

「こちらは何度も言っていますですがそうなんです!」

「うん、確かに狙われているのはそうだけど、でもそれは恋愛みたなものじゃないから。どっちも計算でやってるんだから」

「違います!」

「違わない。両方ともバックというか黒幕がしっかり見えてる。カナダという国に企業の社長。自分のところがのし上がるために僕を利用しようとしているのははっきりしてる」

カナダという国はアメリカ大陸にあり、長らくアメリカの軍事的傘下にあった。ところがアメリカがISの存在によって世界の警察の地位から転がり落ちてしまい、カナダはISという新兵器の脅威から自国を守るために対応を迫られる。

だが国内が纏まらず、アメリカ派欧州派旧国連派自立派と入り乱れて自前のISを開発するどころではなかったらしい。

IS委員会の発足によりかろうじて自国の安全は保証されたものの、今後の指針については相変わらず諸派入り乱れて今も見出だせていない状態にある。

で、そんな時に現れたのが一夏と俺だ。

カナダはリーグマツチにおける中国の陰謀に巻き込まれた結果、ハミルトンを通じて俺や一夏と繋がりを持つことができた。

これは国内において針が傾くような大きな出来事だったらしく、国内の情勢は今一気に動いているとのことである。

そんな中最前線に、矢面に立つのはハミルトン。

想像するに今やカナダにとっての生命線にまでなってしまうている。

だからハミルトンへのプレッシャーが半端ない。最初は仲良くしとけくらいだったのだろうが、要求がどんどんエスカレートしていったに違いない。

今はもう何が何でも絶対に捕まえておけという状態になってしまっているのだろう。そして一夏を捕まえることなどクラスも違ったり到底不可能だから、結果矛先が俺に向かつて来ている。

「お兄様はティナ様の一生懸命な姿を見て何とも思わないのですか！」

「思うよ。毎日無理してがんばってる感がすごくて、見ていてかわいそうだ」

「だからそれは全然間違っています！」

期待にどこまで応えられるかは別として、俺もカナダを邪険にするつもりはない。

だから無理しなくていいとハミルトンにはやんわりと言っているのだが、本人は好きでやっているような答えを笑顔と一緒に返してくるのだ。

確かにちゃんと行動していますというアピールは必要だから、俺の方もほどほどの対応で好きにやらせている。

「でも言われるほどひどい対応でもないでしょ？」

「ひど過ぎですよ！ あれはいくらなんでもあんまりです！ わざわざ鈍感キャラを演じなくてもいいじゃないですか！」

「でもさ、ああいうのって分かってるのを相手に見せた上で無視しての方がひどいと思う。それよりも分かってないんだから仕方ない、つて方がいいよ」

「お兄様、何を言っているのかさっぱり分かりません。素直にそのお気持ちに伝えてあげればいいじゃないですか」

「それやると極論は拒絶になっちゃうから、そうするとハミルトンさんが困るでしょ。だから夏休みまではこのまま行こうかなど」

「三ヶ月も暖簾に腕押しとか、ティナ様が哀れ過ぎます……」

「三ヶ月なんてすぐすぐ」

もはや年単位になつてしまつている鈴なんかよりは全然ましだろう。

そういえば鈴もハミルトンを応援している。見る限り中国の指示ではないようだが、こいつはあの手この手でハミルトンを押してきて非常にうざい。クロエと同じで夢を見過ぎである。

「ちよつと待つてください。そうすると神楽様はどうなつてしまふんですか？ まさか三年間生殺しですか？」

「あつちはお母さんの方をどうにかすれば何とかなるよ。元々親からの指示なんだから」

「お兄様、何度言えば分かつてくれるんです？ ですからあれは神楽様の純粋な想いであつて、お母様は後押しをしてくれているだけなんです」

「甘い甘い。あれは親馬鹿を装つてるだけ。そういう計画なんだよ」

「計画つて……」

「僕を四十院さんの婿にして、僕を通じてIS業界に本格的に参入する。完全に出遅れてるから突破口が欲しいんだよ。僕と言うよりは僕の肩書狙いだね」

気づいてみれば何のこともない。

母と娘の動きがリンクし過ぎである。

リーグマツチ終了後から始まるだなんて、明らかに母親の指示だ。

「ですが、神楽様のあの態度を見れば分かると思うんです」

「ああ、あれか。ちよつとスキンシップを狙い過ぎだよ。オルコットさんから教わつてるんだらうけど全然やり慣れてないというか、オルコットさんが一夏にやつてるみたいにならなくて自然にやらないと。顔赤くしてやつてちや意味ないよね？」

「それでどうしてそういう感想が出てくるんですか!？」

「いや、だから照れちゃつてやりきれないってことでしょ？ そう

いう素人っぽさを見せられるときさすがにうーんと思っちゃうよ」

「私はいつたい何をどうすればお兄様に理解してもらおうことができるのでしょうか……」

クロエが絶望的な顔になってうつむくが、まあいつもの話である。夢から目を覚ますまではしばらくこうだろう。

しかし四十院さんもオルコットに助けを求めたのは微妙だった。

いや、オルコット自体は優秀だ。すごく気が利いていて、四十院さんがいない場ではハミルトンや鈴を自然にブロックしてくれている。

だがいかんせんやり方が日本的ではない。

日本人は欧米と違ってスキンシップを人前でやらないので、いきなりやられると何だこいつとなってしまうのだ。

幼少から慣れているオルコットの動きは洗練されていて、すごく絵になる。だから一夏にアタックした際周囲は呆然と見ているだけで、何も手を出すことができなかった。

しかし四十院さんは違う。仮にもお嬢様なのだからもつとできていいはずなのに、やたらと照れる。あの母親はそのあたりを躱けてこなかったのだろうか。

個人的に四十院さんは頼る相手を変えた方がいいと思う。しかしじゃあ誰ならいいかと言われると、俺の知り合いではこれという人もいない。下手に広められておもちやにされないことを願うのみだ。

上流階級とはそういうものなのだろうが、親から無茶振りされて大変だなと思うことしきりである。

「なあ智希、千冬姉が来る前に正直に言ってくれ。お前今度は何をやったんだ？」

「何もしてないし僕のせいなら僕しか呼ばれないよね？」

「いや、どうせ俺はとぼっちりに決まってる。弾と数馬から言われてやっと目が覚めたぜ」

「あの二人を信じる方が周りから血迷ったって言われると思うよ」

あの面会以来一夏は俺に対して警戒心が強くなってしまった。

本当にあのバカ共は余計なことをしてくれる。

「だから俺は何もやってねえぞ！　なのになんで説教部屋に呼ばれるんだよ！」

「そんなの知らないよ。というか一夏は説教部屋の存在を知ってたんだ」

「鈴から聞いてた。ちなみにあいつさっきの呼び出し放送の後頭抱えて怯えてたぞ。なんかブツブツ言ってたし、あんなに弱々しい鈴は初めて見たかもしれない」

「織斑先生は鈴に何を言ったんだろう。説教部屋行き第一号だけに気合入ってたのかな？」

「第一号はお前だろ？」

「それはデマ」

「智希ってここに来たことあるんじゃないやなかったのか？」

「ここに来るのは三回目かな」

「やっぱりお前の方が先なんじゃないか」

「ここに来た意味合いが全然違うんだけど」

だが俺が誤解を解く前に織斑先生が入ってきてしまった。

仕方ない、説明は後にしよう。

「すまない。あの後すぐに電話がかかってきて遅れてしまった」

「千冬姉、悪いのは俺じゃなくて全部智希なんだ」

「何だ？　また何かやらかしたのか？」

「だから、俺にも罪があると思ったからこうやって呼び出したんだろう？」

「要するに後ろめたさがあるわけなのだな？」

「はあ!?　どうしてそうなるんだよ！」

どうしても何も言い訳から始めてしまっっては、誰が見てもそうしか思えない。

「自首するのであればついでに聞くぞ？」

「いったい何を自首するんだよ！　だから俺は何もしてないって言ってるだろ！」

「甲斐田、織斑は何をした？」

「被害妄想です」

「何だ、ただの馬鹿か」

「はあ!？」

「説教部屋に呼ばれたというのが恐怖を増大させているみたいで」

「……風か。やはり薬が効きすぎたか」

織斑先生は目を閉じて額をトントンと叩く。

やはりということは本人にも自覚があったらしい。

「甲斐田を相手にしていると他の人間に対して加減を間違えて困る」

「ここにも僕を引き合いに出さないと会話できない人がいる」

「自業自得だ」

「やーい! いや何でもありません……」

俺と織斑先生に睨まれてようやく一夏が大人しくなる。

「それで、二人揃って呼び出した理由は何ですか？ 一応言っておきますけど僕の方にも心当たりはないですよ?」

「呼び出す場所を間違えたな。別に叱責するために呼んだわけではない」

「なんだ……よかった……」

「いったいどれだけ怖がってるの?」

「だって鈴がさあ」

「雑談は後でやれ。それで本題だが、お前達にお願いが来ている。これは全くもって強制ではない」

「はいはい。僕達が自主的にそれを選ばなければならぬですね」

「マジかよ」

「あまり人目につきたくなかったのだが場所が悪過ぎたな。文字通りの話だ。嫌ならこの場で断ってくれて全然構わない。断ったからどうだという話でもない」

「ほう」

珍しい。やけに下手だ。

「その内容だが、そこに至るまで順を追って説明しよう。まず明日I S学園に転入生が到着する」

「転入生!」

「マジかよー！」

まさに先ほど俺が口にしたばかりの単語だ。

「一応は明後日六月一日付けという話だが、ここに住むことになるかな。前日のうちに到着する予定で当然荷物もある。荷物も同じ飛行機ではあるがまあ本人の方が先に着くだろう」

「その人の出迎えをしてくれないかって話ですか？」

「それくらいなら全然やるぞ？」

「まあ待て。話はまだある。それでこの寮に住むにあたって、本人が要望を出してきた。親元を離れ初めての海外生活に不安があるので、お前達二人のどちらかと同部屋にさせてもらえないだろうか？」

「それは……正直どうなんだ？　俺達である必要はないって言うか、むしろ俺達はダメだろ？」

「そういうことじゃないよ。むしろ僕達でなきゃいけないんだ」

つまりはそういう話である。

なるほど、ここ一連の出来事が繋がってきた。

「はあ？　いやいやダメだろ。さすがに高校生にもなって女子と同じ部屋がよくないのは俺にでも分かるぞ？」

「織斑、ヒントをやろう。転入生の母国は、フランスだ」

「フランス？　フランス、フランス……フランスって何かあったっけ？」

「この程度すら期待できないのか……」

「まあ無理ですね」

「甲斐田……こういうことを言うのは教育者として失格かもしれないが、この馬鹿を何とかしてくれ……」

「確かに匙を投げるのは教育者失格ですねえ」

「何だよ二人とも。だからフランスがどうしたんだよ？」

一夏は苛立ちげに俺達を見回す。

別に頭が悪いわけではない。記憶力だってそれなりだ。

ただ、興味を抱かない事柄については清々しいまでに覚えようとし
ないだけだ。

「一夏、まずフランスには男性IS操縦者がいる」

「それってフランスだったっけ？ 顔も見たことないし存在すら忘れてたわ」

「まあ一夏はそうだよ。そして明日ここにやってくるのがその男性 I S 操縦者なんだ」

「マジかよ！ それなら早く言えよ！」

一転、一夏が大きな喜びを露わにする。

弾や数馬と馬鹿をしたい年頃だ。同性の出現の喜びは相当なものだろう。

「会話から察して欲しかったのだがな」

「それを今の一夏に求めるのは正直酷かなあと」

「そりゃあ迎えに行かないとな！ どうせなら空港まで……智希、外出許可は当日じゃダメなんだっけ？」

「駄目に決まってるよ」

「そうか……じゃあ正門で待つことにするか」

可能なら空港まで迎えに行こうとは相当な勢いだ。

今の今まで存在すら忘れていたというのに。

「そのあたりは後で話せ。今は別の話だ」

「別の話……ああ、部屋のことか。確かに不安だって言うなら応えてやりたいとこだな。智希、どうしようか？」

「一夏よろしく。僕が部屋を出るから」

「はあ!？」

「即答だ!？」

そんなもの考えるまでもない。

俺が出るの一手だ。

「智希、ちよつと待て。お前なんでそんな早く決められるんだよ？」

「考えるまでもないでしょ。一夏の方が僕より面倒見いいんだし」

「いや、お前だって俺達と一緒に暮らしてたじゃないか。やれって言われたらお前だってできるだろう？」

「できるできないじゃなくてやるやらないの話だよ。一夏はフランスの男子と同部屋になるのが嫌なの？ 相手にするのが面倒？」

「そんなわけないだろ」

「じゃあ何も問題はないね」

そう、一夏で何も問題はないのだ。

「そりゃそうだけどさあ……」

「甲斐田、一つ聞かせろ。これはお前にとって想定内の話か？」

「想定……そうですね、三人目四人目がIS学園に来ることがあるかもしれないとは思っていました」

「そうか、ではもう一つ。その判断は自分の中できちんと考えた上で話で、感情に従ったものではないのかな？」

「当然です」

「分かった。ではそのようにしよう。織斑もそれでいいな？」

「それは……別にいいけど」

「甲斐田、正直に言うがそれは予想外だった」

「みたいです」

織斑千冬を驚かせたというのはそれだけでかなり楽しい出来事だった。

「あれだけ前振りがあれば当然その流れで進むと思っていたのだが、分からないものだな」

「物事には優先順位というものがありました」

「いや、別に甲斐田の判断についてとやかく言うつもりはない。誰に強制されることでもなく、十分に考慮した上で話であればそれは尊重されてしかるべきものだ」

考慮とかそういう次元の話ではない。

一夏が一人部屋とか、さあどうぞ襲ってくださいという所業でしかないのだ。

碌に部屋の鍵すらかけない一夏ではセキュリティも何もあったものではない。もともと施設では他人任せで防犯の意識が薄いし、姉との生活では警備が常駐していたのとオートロック任せで鍵を忘れて外出するほどである。

ここに来てからは口を酸っぱくして言っているのだが、IS学園の生徒が盗みなんてするわけがないという乱暴な理由で一夏は右から左だ。

こんな状況で一人部屋暮らしを始めた日には、一夏の周囲で盗難が横行することになるだろう。なくなるのは金目のものではない。一夏の私物だ。歯ブラシあたりが最有力候補か。

そして容疑者候補が多過ぎて犯人の絞込みすら困難だ。もちろんその気になれば犯人の炙り出しくらい可能だが、歯ブラシ一本で捜査活動など時間の無駄でしかない。

俺にとっては選択肢など最初からないのだ。

「どうした千冬姉？　なんか変だぞ？」

「別に何も無い。だが一応言っておくが、同部屋になったと言っても以後変更不可という話ではないのだからな。相性の問題もあつたりするだろう。また相手が慣れてきたのであれば再び部屋割りを戻すということも十分に考えられる。場合によっては三人とも一人部屋にするということになるかもしれない。全ては流動的な話であつて、何かしらの不都合を感じた場合は遠慮無く口にしてくれて構わないぞ」

「らしくないですね。決まったからにはその範囲で努力しろと言うのかと思つてましたけど」

「一般の生徒であればそう言うだろう。だが部屋割りを決める際は性格なども考慮したうえでの話であるし、そもそもお前達は希少な男性IS操縦者なのだからな。この程度の配慮はしよう」

やけに歯切れが悪い。

織斑先生には珍しく当てが外れたようだ。

確かに本人も言つていた通り、今までの流れではフランス関係の対応は俺がすることになるのが自然だ。

フランス国内の騒動やデュノア一家の問題など、とても一夏に解決を求めることではない。そもそも一夏に力技以外での問題解決能力を求めること自体が間違つている。

だがそんなものは別に同部屋でなくたってできるだろう。確かに同部屋なら密室なので外ではできない会話がやりやすいが、それなら例えば俺の部屋に呼んでやればいい。他にも会議室など場所はいくらでもある。

織斑先生にしては珍しい手落ちな気もするが、フランス男子の面倒を見ることと問題の相談に乗ることは全く別の話だ。

それなら俺にとって大事なものは、同部屋にして一夏とフランス男子を仲良くさせることである。

元々一夏は男友達を欲しがっていた。相手がどういうタイプかまでは分からないが、最初に不安を訴えるくらいだから間違っても弾達のような神経の凶太い人間ではないだろう。

だったら一夏に面倒を見させて恩義を感じてもらった方がいい。

フランスということで思想が少し気になるが、それは会話をしていれば分かるだろう。できれば気配りのできる性格であることを望む。

「分かりました。ではさっさと引越しの準備をします。と言っても女子じゃないんで大して荷物はないですけど」

「そうだ、引越し先はどこになるんだ？」

「確か奥の部屋が空いてるんじゃないかな？ ほらいつもは防火シャッターが閉まってる先」

「ああ、あそこか」

「一応三年生の住む別棟も空いているぞ？」

生徒数が増えた結果、今年から三年生は増築された別棟に移っている。

だから俺達のいる本館には増えた生徒を差し引いて三十人分くらいは部屋が余っているはずだ。

「さすがにそれはちよつと」

「すぐそこにあるんだからそれでいいじゃないか」

「分かった。ではそうしよう。いや待て……それならこの際織斑達の部屋もその区画に移動させるか。お互い近い方がいいだろう」

「えー？ そんなの必要ないだろ？ そもそもそこまで離れてないし」

「引越し作業が面倒なんだね」

「甲斐田を一人野放しにしておく方が危険だと思わないか？」

「それは……あるな。しょうがない、引越すか」

「あつさり納得しちゃった」

「部屋が違うと言っても同じ男性IS操縦者、気兼ねなくお互いの部屋を行き来するといいだろう」

「はいはい監視のためですね」

面倒臭さを上回るとは一夏にとって俺は何なのか。

と言つても別に距離など問題ではない。一人部屋というのは俺にとって大きな利点がある。

何より一夏の目を気にせず博士やクロエと会話をすることができ
るのだ。

VTシステムの問題もあるし博士との連携をやりやすいのはタイミング的に実にありがたい。

「じゃあさっさと引越しの準備をするか」

「そうだね。あ、そういうえば明日のいつ頃到着とか分かります?」

「手続き関係もあるそうなので午前中に着くようなことはないだろう」

「じゃあそこまで焦る必要もないか。そもそも備え付けがほとんどだしな」

「追い出されるわけでもないし荷物は順次移動でいい気がしてきた」

「さすがにそれは認めない。期限は午前中として午後には清掃を入れる」

「そこまで甘くはないか……」

「当たり前だ。どうせそういう形でなし崩して事実上二部屋使う気なのだろう?」

「まさか」

「智希ってそういうミヨーなところで頭働かせるよなあ」

失礼な。

本気でやるのなら誰が織斑先生の前で口にするか。

確かに二部屋あればそれなりに使いでがあると思うが、別に必須というほどでもない。

いやそれよりもクラスの連中が知ったら溜まり場場遊び場として占拠しそうだ。責任だけ全部俺に押し付けて。

今のところ取り立てて不都合を感じているわけでもないし、特に別

拠点は必要ないだろう。

「とはいえ甲斐田、明日は定期検査が入っているだろう」

「あ、そうだった」

「それって朝からじゃなかったか」

「だね」

「おいそれじゃ時間ないぞ」

これはつまり今夜中に終わらせておけということになる。

「運ぶのはこちらから人を出す。纏められるだけ纏めておけ」

「お願いします」

「俺も部屋を出るし忘れ物あったらすぐ分かるさ」

「そうだね」

「話は以上だ」

織斑先生が立ち上がって出て行き、俺達も続く。

俺の荷物はどれだけあったか。ああ、少なくとも一夏の写真は見つからないようにしておかなければ。

「楽しみだな」

「何が？」

「何ってフランスの男子に決まってるだろ」

「ああ、そうだった。引越しのことで上書きされてたよ」

「おいおい、大丈夫か？」

確かに、第三の男性IS操縦士がどんな人間か俺も楽しみだ。

いろいろと問題は抱えているようだが、俺と同種の男だ。一夏とは違う感覚を持っているかもしれない。

元からISを動かせた一夏とは違って、フランスの男はISを動かせるようになった人間であるはずだ。果たしてどんな出来事があったのだろうか。

もちろんすぐに聞けるような軽い話ではないだろうから、それはかなり先の話になるかもしれない。俺もその時のために相手が納得するような話を作っておこう。

まあ、まずは一夏だ。一夏と仲良くなつて友情を育んでもらおう。世界に四人では向こうだって同じことを考えているはずだ。むしろ

そのために日本にやって来るのだろう。

できれば気の利く性格であると嬉しい。ISをそれなりに動かせるともつといい。もし純愛主義ならさっさと恋人でも作らせるか。少々危険だが一夏にいい影響を与えてくれるかもしれない。

考え始めるとたくさん溢れてくる。

それは期待であり、俺にとつてのある種の希望だ。

できることなら普段の一夏を任せられるくらいであると嬉しいのだけれど。

16. 転入生

「昼飯時を大きく過ぎた食堂は閑散としていた。

この食堂は日中ずっと営業しているわけではない。

朝も昼も二時間程度しかやっていないので、宮崎先輩曰く運悪く食べそびれることもたまにあるそうだ。

その上ピーク時は混み具合が激しい。特にこの二年で生徒数が一割以上増えたこともあって、タイミングを誤ると席にありつけないことまであるようだ。だから上級生の弁当率が日に日に上がっているそうで、地下にある売店のラインナップもそれと比例して充実しているとのことである。

「来年も再来年も生徒数が増えるのはほぼ確実だし、甲斐田君も今のうちに弁当生活を始めておけば？」と宮崎先輩は自分で作った弁当片手に笑っていた。個人戦が終わったら一夏を煽ってみることにしよう。

「あれ、甲斐田君は今からお昼なんですか？」

振り返れば岸原さんだ。

丸眼鏡カチューシャのちびっ子はここで勉強をするつもりなのか、教科書にノート、文房具を抱えている。

「うん、今日はIS委員会の人達が来てて」

「今までやってたんですか?! もう二時ですよ!」

「研究者って夢中になると時間を忘れる人種みたい」

言いながら俺は食堂の人に取ってもらっておいた自分の昼食を受け取る。

嫌な予感がしたので寮を出る前をお願いしておいて正解だった。

俺がすぐそばの席に腰を下ろすと岸原さんも俺の向かいの席の椅子を引いた。何か話でもあるらしい。

「お腹空いたって言えない空気だったんですか？」

「言ってるんだけどまさかもうちよつともうちよつとが二時間も続く

とは思わなかった」

「そ、それは災難でしたね……」

後から空腹時のデータを見たかったとか口にしていたが、どう見ても言い訳でしかない。まあ連中には俺に気を遣うという意識もないから、言い訳を出す程度には自覚があったのだろう。

最近の様子を見てみると連中はどうも何かしらの成果が欲しいらしい。せっかく希少な男性IS操縦者を研究対象として確保できたのに、出てくる数値は一般人レベルの平凡な低い数値。データは規約上世界に公開されているので、俺がISを動かせるだけの一般人と変わらないことくらいしか示せていない。

謎を解くどころの話ではなく、上からつつかれたりしているのだろう。

「はつきり言って前より大変だよ」

「そうなんですか？ でも今は週に一回から二週間に一回にしても良かったって言ってませんでしたか？」

「それ完全に落とし穴で、前は午前中だけだったのが今は一日がかりになっちゃったんだよ。だからトータルの拘束時間としては前より多い」

「はー……。それは大変ですねえ……」

リーグマツチを控えていて時間が欲しかったので奴らに掛け合った結果がこれだ。

目先のことだけを考えるとトータルマイナスになる場合もあると学んだはずだったのに、またやってしまった。

織斑先生にはなぜ自分を通さなかったのかと怒られた。先に織斑先生に話していれば最低限同程度には調整したとのことである。

そして自分で決めたことなのだから決めた通りにやれと言われて今に至る。

「ということは食べた後にまた続きがあるんですか？」

「あるよ」

「それは残念です。お暇でしたら食事後に甲斐田君のご意見をお聞きしたかったんですが」

「それは何についての?」

食べながら岸原さんの方に視線をやると、ノートを広げている。ノートには所狭しと書き込みがされていた。

「リーグマッチの各試合における甲斐田君の見解をお聞きしたくて」

「まだリーグマッチの反省なんてしてたの?」

「いえ、リーグマッチは個人戦に向けて私達にとって一番の教材なんです。形式が同じ一対一ですし、現在の学年最高レベルの試合ですし、試合の内容についても参考になる部分がたくさんあるんです」

「身近な教材だってわけだね」

「はい。ですから甲斐田君の目から見た感想を聞きたかったのですが……」

「そのあたりはパイロット班の人達の方がいいと思うけどなあ。実際に試合をやる立場からの意見の方が実感こもってるよ」

待機室で観戦していた時、パイロット班の連中は戦っている一夏に近い視点で見ている。

試合をやる立場ならそちらの方がためになるだろう。

「そちらの方は一通り聞いたので大丈夫です」

「一通りってまさか全員?」

「あつ、えーと、勉強会をやったんです。甲斐田君達がやっているように私達も」

「そんなことしてたんだ。参加者はクラスの全員なの?」

「いえ、部活ある人もいますし、訓練機を使える日の人はもちろんそっちですし、用事がある人だっています。だからその時々時間のある人だけです」

「でも参加できる人は参加してるんだ」

おそらく個人戦に向けて次は自分だと意気込んでいるのだろう。

もちろん個人個人でやるべきことはあるにしても、話し合った方が理解は深まるのだから。

しかし本当に真面目過ぎる。教師に教わるだけでは満足できないのか。

「みんな甲斐田君の意見は聞いておきたいってよく言ってるんです」

「僕の？ 指揮の視点なら鷹月さんか四十院さんにでも聞けばいいんじゃないの？ 少なくとも僕よりは時間取れると思うよ？」

「そのお二人にはもうお聞きしました。だから大丈夫です」

「じゃあ別に僕の話を書く必要とかないじゃない」

「そんなことないです！ 鷹月さん達の話聞いてみんなますます甲斐田君の話を聞いておかなきゃって言っていて」

あの二人は俺についていったい何を言ったのか。

リーグマッチの反省会では俺のことを過大評価気味だったしかなり怖い。

「僕の意見って言うけど、僕の何をみんなは気にしてるわけ？」

「それはもちろんその発想力の源です！ 例えば四組戦三組戦では甲斐田君だけが試合の内容を理解していました。凰さんに対しては根底からひっくり返したじゃないですか。この部分において私達は甲斐田君に遠く及ばないんです。だから甲斐田君の話を聞けば得るものは絶対にあるはずなんです！」

「いやあ……それはどうだろう？ なんとなくだって鷹月さん達には言っただけけど、そういうのは聞いてない？」

「それも聞きました。つまり甲斐田君の中では言語化されていないということですね。だから甲斐田君の話を聞いてみんな議論すれば、そういうことだったのか分かるかもしれないんです」

なんて面倒臭い連中だ。勢い余って俺の分析まで始めようとしている。

訓練機を使える時間に限りがあるのでこういう方向にまで手を伸ばしているのだろうか、もっと他にやることはないのか。

鈴戦なんて性質上俺でしか気づけないような事情だったのだから、特殊過ぎて参考にすらならないだろうに。

「うん……まあ、言いたいことは分かったよ。時間があつたらね」
「ありがとうございます！」

もちろん時間などあるはずがない。それを鷹月さんと四十院さんのせいにして責任は全部押し付けるのだ。

「鷹月さんと四十院さんにはお話をしてあるので今度お願いすること

になると思います！」

保護観察処分である俺の目論見は儚くも泡のように消えて行った。

寮の入り口の扉を開けるといつもの比ではなく騒がしかった。

休憩室を見渡すとこの時間にしてはあちらこちらに生徒がいる。もう噂になっているのだろう。

と、誰かが口にしたのか俺に向かって一斉に視線が飛んでくる。だが話しかけてくる生徒はいないようだ。見た感じ知った顔もなさそうだし、そしてそういう生徒は未だに俺に話しかけてくることもない。ちなみに一夏に対しては時々思い切って突っ込んでくる生徒がいる。

「よう、寮の中は大騒ぎだけど、話は聞いてるのかい？」

さっさと上へ上がろうと前を向いたところ、休憩室とは反対側から声がかかった。

顔を向けると元・五組代表の佐藤だ。クラスからハブられてぼつち状態が長いくせに、相変わらず姉御系の強気な笑顔である。まあ元々動じてもいなかったが。

とりあえず手招きしているのでやむなくそちら側へと近寄った。ぼつちオーラではないだろうが周囲にいた生徒がそそくさと離れていく。

「ええ、昨日のうちに。おかげで部屋を引っ越しです」

「ああ、だから朝からどたばたやってたんだね」

「そういうことです。そんなに大騒ぎですか？」

「そりゃそうだろう。また増えたんだ」

「実物はもう到着してます？」

「二時間くらい前だったかな？ 正門からここまで行列ができて何のパレードだと思っちゃったよ」

「それは相当ですね」

一夏は本当に正門まで迎えに行ったようだ。ならば篠ノ之さん達もついて行ったのだろう。

しかしそんなことをすれば騒ぎになるのも当然だ。見知らぬ男子が一夏の横を歩いていくのだから。

ひとまずは無事に着いてくれてよかった。

「よかったね。仲間が増えるのはやっぱり嬉しいだろう?」

「ありがとうございます。二人と三人じゃかなり違うんじゃないかと思ってます」

もちろんそのフランス男子がどういう人間かにもよるが、やはり三人というのは大きい。

単純に考えてプレッシャー二割減である。全てを受け流す一夏にとっては一緒だが、より多くの人数で固まった方が心強いのだ。

「じゃあさっそくその顔を見に」

「ああ待った待った。急いでもどこ悪いんだけどちよつとあなたに話がある」

「なんででしょう? その人についてはまだ顔も知らないので何とも言えないんですが」

まさかそのフランス男子を紹介してくれとかくだらないことを言うのではないだろうな。

もしそうならおととい出直して来いだ。

「いやいや、そっちは別にどうでもいいんだ。話はあなたのことだよ」「僕ですか?」

「ああ、聞くところによるとあんたは相当な食わせもんだそうじゃないか」

佐藤がニヤツと笑う。ようやくバレたか。

別にそれ自体は今さらどうということもない。

というか元々はこちらから話をしに行く予定ですらあった。

「はあ」

「ああ、別に隠さなくていい。上級生達の間ではもう常識だそうだし、遅かれ早かれという話だからね」

「では謝ります。すみませんでした」

「いやいや、そういうことを言いたいわけじゃない。そもそもあんたはあたし達に対して何もしてないし、あたし達がそれ以前のレベル

だったというのには自分でよく分かっている」

「そういうわけでは……」

正直なところ情報は流している。その結果そこまで脅威でもなく、初戦の相手としてはちようどいいだろう、くらいの認識だった。だから手強いと目されていた三組にやったような工作めいたことはしなかっただけの話である。

「そっちのことはもう今さらどうでもいいんだ。話をしたいのは未来のこと、今後のことだね」

「今後つて言うとは……」

「もちろん個人戦とそれ以後の話だ。はつきり言うと、あなたのアドバイスが欲しい。ISのね」

そっち系か。

上級生に過大評価気味な俺の話を聞かされて、こいつは使えるとも考えてしまったのか。

「別に付きつきりにしろなんて言わない。時々見て意見をもらえるだけがいい」

「曖昧な要求ですね」

「それはあんた次第だからね。そしてもちろんタダとも言わない」「へえ、それは？」

「あなたの駒になろう。あんたはこのIS学園でやりたいことがあるんだろ？ なら人手は必要だろう」

「そういう話ですか」

さて怪しいにも程がある。

まさかぼっち生活はやはり寂しかったと言うわけでもあるまい。

俺の話を聞いて自分で考えたか、それとも誰か、例えば上級生に焚き付けられたか。俺が何かを企んでいそうなのはクラスメイト連中ですら察している。だから今までの俺の行動を見ていけばそういう考えに至るのは特別ありえないことでもない。

もちろん否定するだけなら何言っただこいつで終わりだ。面倒事などごめんだというのであればその一手だ。だがそうやって危険を回避して安穩に過ごすなどという道はとうの昔に消えている。

それに何よりこのまま切り捨ててしまうには駒という単語に後ろ髪を引かれてしまう。

自分に従ってくれる人間がいると楽かつ効率的なのはリーグマツチで十分過ぎるほど経験しているのだから。

この際聞くだけは聞いてみるとしよう。

「もちろん今のあたしは一人だ。だけどそんなのは前言った通り個人戦までの話で、杉山の化けの皮なんてすぐに剥がれる。今でさえもう不満が出始めてるくらいだからね。再び以前のようになるだろう」

「ちよつと皮算用が多いですね。もしかしてそのための協力まで求めますか?」

「そこまでは言わない。なんなら個人戦が終わってそうなった後からで全く構わない」

「ではその時にまた改めて。個人戦についてはがんばってください」

「即決で断らなかつたね。なら希望はあると見ていいのかい?」

「どうぞでしょう」

「ああだこうだと苦労して言いくるめるよりも、素直に言うことを聞いてくれる人間がいるとやりやすいよ、と自己アピールもしておこうか」

これは痛いところを突いてきた。

最近の一組連中は昼の件を見ても、個人戦を意識して自分が自分になってきている。

リーグマツチのようにはいかないのはもう明白だ。

どうにかならないかと考えてはいるのだが、個人戦の怪しそうなルールが見えない以上はつきりとした手を打てないのが現状である。

このままでは、うまいこと言いくるめてせめて一夏にとつてもプラスに働くようにしよう、というので精一杯なのだ。

「何なら個人戦の前でも必要だったら声かけてくれて構わないよ。もちろんその時は対価も欲しいけどね」

「じゃあ……どうしても困ったときはお願いするかもしれないですけど」

「それは上々。邪魔してごめんね。それじゃ」

満足した気で佐藤は去って行った。

基本的に今の佐藤はぼつちなので、一人でできることなどたかが知れている。今すぐ欲しいわけでもない。

上級生などどこかの紐付きな可能性も普通にあるが、本人が相当自我の強い人間であることはよく知っている。

はつきり言って自意識をつつけば俺にとってはなんとでもなる相手の範疇だ。実際にリーグマッチ中は俺を疑いすらしなかった。

黒幕の存在も含めて、俺に対してどの程度の価値を認めていて何を求めているのか、しばらく様子を見ようか試してみよう。

そう決めて俺はエレベーターへと再び足を動かした。

せつかく上まで上がったのにまた下に戻る羽目になってしまった。

新しい自分の部屋にはドアに張り紙がされており、殴り書いた一夏の汚い字によると一階の食堂にいるそうである。

旧部屋の鍵は取られてまだ新しい鍵をもらっていない以上、俺に行く場所はない。仕方がないので再び来た道を引き返すことになった。

途中で知った顔があれば教えてもらえたのだろうが、生憎出会うことはなかった。よく考えればそういう連中は軒並み食堂に行ったに違いない。

食堂に着くと探すまでもなかった。

そこだけ異常な盛り上がりを見せている一角がある。そして周囲の視線も釘付けだ。

迷うことなく俺はそこに向けて歩みを進める。

そしてそこには、いた。

「智希ー、っつちだー」

一夏がこちらに向けて手を振る。

どうやらオルコットがいち早く俺に気づいて、一夏に声をかけたようだ。俺の位置を示すためかこちらに手を向けている。きつと篠ノ之さんを取られて一夏の隣りに座れなかったのだろう。そのため一夏とは距離があつたおかげで視界が広がったというところか。

だがこの連中のことは今はどうでもいい。問題はそちら側ではなく、篠ノ之さんの反対側だ。

そいつはいつもはオルコットが占めている一夏の隣りに座っていた。俺に気づき、笑顔から緊張した様子に変わって立ち上がる。

まず目についたのは金髪。それ自体はフランス人なのだから特に珍しいことではないが、後ろで髪を縛っている。男にしてはかなり長いなと思ったが、よく考えたら弾も長髪だった。きちんと整えられているし、短髪で碌に気を遣っていない俺のような人間が何かを言うべきではないだろう。

あと思うのは小さい。もしかしたら身長百六十もないのではなからうか。服のサイズが合っていないのか緩めではつきりとした体つきは分からないが、見た感じこの年代の男にしては華奢というレベルで分類されてしまいそうだ。

欧米の男とはもう少し体格がいいイメージだったが、実物がこういうのだからこれも偏見になるのだろうか。

だが顔は綺麗に整っている。美形であることは間違いない。その真剣な表情はかっこいい、よりは、凛々しい、だろうか。それは男に使う言葉なのかというのはこの際置いて置く。

「シャルル、あれが智希だ」

一夏はもう名前呼びをしているようだ。きつと初対面の時点ですう呼ぶことにしたのだろう。

女子に対しては名前呼びのハードルが高いのだが、男子に対しては本当にゆるゆるだ。俺の時も俺が警戒をしているというのにいきなり踏み込んできて、自分のことも名前で呼ぶようにとしつこかった。

「初めまして」

「は、初めましてっ！」

意外なところで先方は緊張していた。

これは一夏やその周りの連中によからぬことを吹きこまれたせいだろうか。それとも外から情報収集をした結果尾ひれのついた噂を耳にしてしまったか。

何にしてもまだ俺を同種の人間をして見てくれているわけではな

いようだ。

「名前は当然知ってると思うけど一応、甲斐田智希です。シャルル・デュノア君でいいのかな？」

「はい、えっ!？」

「なんだ、智希は名前知ってたのか」

「まあ実は」

「そ、そうだったんですか……」

ちよつとカマをかけてみる。

シャルルというのは今一夏が呼んだから、デュノアはこの前の面会で知っただけだ。

デュノア社社員黒木さんとの会話についてデュノアが知っていれば、苗字を知られているのは納得できるはずだ。黒木さんについて口にするのであればそれはもう公の話になる。

知らない、あるいは公の話ではないのであれば、デュノアはどうして知ったのかを聞いてくるだろう。

黒木さんの立場が本人の言った通りなのかどうか、少なくとも判断材料の一つにはなる。

「甲斐田は知っていたのだな。なのに一夏、お前はなぜ知らないと言った？ さては聞き流したな」

「いや、そんなことは……あるかもしれない……」

「まったく。横断幕を用意しようにも名前が分からなければ意味がないではないか。ようこそと書くだけでは本人が見て自分のことだと分からないだろう」

「う……それは……」

「箒さん、お気持ちは十分過ぎるほど分かりますが、今は一夏さんを叱責する場ではありませんわ。デュノアさんを歓迎する場ですのでここは抑えましょう」

「そうですよー！ こんなおめでたい場なのですからー！」

「リアーデさんは声をもう少し抑えてくださいませ」

「む……確かにそうだったな。申し訳ない」

だと言うのに、篠ノ之さんが説教チャンスとばかりに口を出してし

まったため、デュノアの発言のタイミングが飛ばされてしまった。もう挨拶は終わりとばかりに周囲に促されて腰を下ろしてしまっている。本当に何余計なことをしてくれるのか。

「智希は飯食べてきたのか？」

「ここに来たばかりなのにそれはないよ」

「職員用の食堂があるんだろ？ そっちで食べてきたのかと思って」

「真っ直ぐ帰ってきたよ。デュノア君が着いてるだろうと思って急いで」

最近はその周辺にしていると警備の人など顔見知りになった職員連中に捕まって連行されてしまうので、あまり近寄ってはいない。

学生時代が懐かしいのかゴシップでも知りたいのか、やたらと学校生活について質問してくるので非常に面倒なのだ。

「俺達はこういう感じでみんなで食べたぞ」

「大皿広げてパーティね。ああ歓迎パーティか」

「つってもちよつと遅かったな。もう大きいのは残ってないみたいだ」

「じゃあしようがない。何か適当に」

「そんな甲斐田君のために！」

何事かと思つて振り向くと、得意げな顔の谷本さんがいた。

片膝を地につけてもう片方は立て、差し出すかのように平たい皿を俺に近づける。

「谷本さん」

「いやー私は本当に気が利くなあ！」

「これ全部お菓子なんだけど。しかも甘いもの系だけだし」

「疲れた時には甘いものですよ！ ね、すごく気が利いてると思いませんか？」

「あのさ、僕はお腹が空いているのであって、欲しいのは普通にご飯だよね」

「そんなー！」

ここしばらくの谷本さんは迷走を始めた感がある。前はもう少し分かりやすかったはずなのだが。いやあからさま過ぎたと言うべき

か。

鑑みるに、俺に突っ込みをさせたくて考え過ぎてしまっているのではないだろうか。

突っ込みをしようにもはやどう突っ込んで欲しいのかさっぱり分からない。それともこれでよかったりするのか。それすら分からない。

そしてそんな状況にデユノアは当然ついていけないはずもなく、ぽかんとしてこの意味不明なやり取りを眺めている。

「かいだーにこんな美味しいものはもったいないよ。私が食べる！」

「本音ちゃん!？」

「本音さん昨日からどうしたんですか？ やっぱり怒ってます？」

いきなり布仏さんが割って入ってきた。

昨日俺のことを売ったくせに、まだ根に持ったままらしい。

「布仏さん、あのさ」

「ふーんだ！」

「また子供みたいな」

「ああ、怒りの原因は甲斐田君だったんですね。甲斐田君、素直に謝った方がいいですよ」

「岸原さんちよつと待って。どうして僕が悪いことになってるわけ？」

「違うんですか?」

「僕が関わってるかというと確かに関わってるけど、別に僕は悪くない。というか布仏さんが勝手に怒ってるだけで」

「ほらやっぱり甲斐田君じゃないですか」

「あの布仏さんが怒るってこりや相当なことだな。智希お前何したんだよ?」

「いちいち甲斐田に目くじらを立てても仕方ないのだが、やはり腹が立つものは立つからな」

「布仏さんも人間ですわ。耐えられなくなることもあるのでしよう」
「とりあえず外野は黙ろうか」

人が多過ぎて収拾つかなくなってきた。

だが完全にアウエーだ。周囲を見渡しても俺の味方はいない。理不尽過ぎる。

「ごめんね急にうるさくして。いつもこういう感じなんだ」

「う、うん。大丈夫、ちよつとびっくりはしたけど」

「おい智希がごまかし始めたぞ」

「単なる苦し紛れであろう」

「あのさ、今は何の場？ デュノア君の歓迎会じゃないの？ 主役を置き去りにするとかそれはさすがに違うと思うんだけど？」

これはごまかしなどではない。正当な発言だ。

まったくもって俺を責め立てるための場ではないのだ。

そして俺は別にキレた振りをしたわけではない。これは正当な怒りだ。

この場を逃れるにはこれしかないとは微塵も考えていたりしないのだ。

「す、すまん……」

「確かに軽率だった」

「デュノアさん、誠に申し訳ありませんわ」

「大丈夫大丈夫、みんな賑やかで楽しそうでいいなって思いながら見てたから」

笑顔でデュノアは手を振る。どこからか感嘆のため息が漏れたのは気のせいだろうか。

とりあえずデュノアは空気読まない系ではなさそうだ。よかった。

「デュノア君はもう荷物は片付いた？」

「それがまだなんだ。着いたばかりというのもあつて」

「そうか、着いてすぐ一夏にここまで引つ張り出されたならそうなるよね」

「ちよつと待て智希。どうしてピンポイントで俺なんだよ？」

「そんなの一夏しかいないじゃない。どうせ正門からパレードみたいに行列作って、部屋に着いた時にはもう收拾つかなかったんでしょ？」

「すいこ」

「だからなんでそんな見てたかのように当ててくるんだよ!？」

デユノアは素直に感心した顔をしているが、佐藤からの情報を加味すればそんなものは手に取るように分かる。

クラスメイト連中の力を借りてこうやって囲わなければ溢れる生徒の波を防げなかったのは想像に堅くない。

その結果、この場にはいない鈴などはクラスという強固な枠によって弾かれてしまったのだろう。

「一夏はこの後部屋に戻ったら当然デユノア君を手伝うんだよ？　まさか自分のが終わってないとは言わないよね？」

「それは言われるまでもないし、俺の方はもうバッチリだ。なんせ箒達が手伝ってくれたからな！」

「あー、手伝わせちゃったか……」

俺があたりを見回すと、篠ノ之さんやオルコットを含めた何人かがあからさまに目をそらして合わせようとしない。

これは後で一夏が俺のところへあれがないこれがないと駆け込んでくるパターンだ。

連中もすっかり頭を働かせてくれる。きつとゴミとして捨てられてしまったとかこの際処分をしておいたなどという言い訳を用意しているのだろう。

まあそれは明日デユノアの足りないものを買うついでに一夏の分も買うか。いや、むしろ奴らに買わせよう。俺が言えば当然喜んで買ってくれるだろうから。

「そこまで気を遣わなくて大丈夫だよ。荷物と言ってもそこまで大量でもないから。一人でやれるよ」

「こんなこと言ってるけど、一夏、分かってるよね？」

「もちろんだ。こういう遠慮はそのまま受け止めちゃいけないことくらい俺でも分かる。迷惑かけた分シャルルが何もしないでいいくらい働かせ」

「よし」

「大丈夫、本当に大丈夫だから。自分でやれるよ」

「そういう遠慮は俺達の間じゃないぞ？　これからもいろいろ迷

感かけるだろうし、何かやれることがあったらお互い様だ」

「うん、そうだね。でも荷物の整理ならむしろ自分でやった方がいいんだ。だってどこに何があるか分からなくなっちゃうかもしれないし」

「なるほど、確かに一夏にやらせると一夏までその場所を忘れそうだ」
「おい、それを言うなら智希の方が怪しいぞ。だいたい俺はそういうの好きだし得意なんだからな。というかお前の分まで俺はやってるぞ」

「確かにそうかもね、ごめんごめん」

と俺はデュノアの態度を見て一夏に振って流す。

デュノアはもしかしたらパーソナルスペースに踏み込んで来られるのを好まないタイプかもしれない。

一人っ子によくあるパターンで、小さい頃から個室、自分の空間を持っていたりすると他人が入ってくるのを嫌がるのはそれなりにいる。施設でもいた。

生まれてから今まで母親と二人きりだとして、その上生活に他人が介在していなかったとしたら、そういうのをまるで気にしない一夏にズカズカと踏み込まれては気分を害してしまうかもしれない。これは部屋の配置を間違えたか。

いや待て、それはおかしい。そもそも相部屋を頼んできたのはデュノアだ。つまりデュノアの意思ではないということなのだろうか。例えば父親が無理矢理押し込んだとか。

やはりこのあたりには複雑な事情が隠れていそうな気がする。

「それよりも甲斐田君はご飯まだなんだよね？ お腹ペコペコだろうし頼んできた方がいいと思うよ。やっぱりお菓子ばかりじゃね？」

「そうだった。確かに食べるものは食べたい。じゃあちよつと行って来る」

「いつてらっしやい」

俺は立ち上がり、デュノアが笑顔で手を振る。

しかしデュノアについては正直予想外だった。意外とどころではなく普通だ。

更識妹を見た時のような感覚くらいはあるかと想像していたのだが、そんな負の要素は欠片もない。

近さで言うなら佇まいやその洗練された動きからオルコットだろうか。外国人、いや上流階級に対する偏見かも知れないが、きちんと躰けられた育ちの良さを感じる。愛人の子とはいえ大企業の社長の息子なのだから、さすがにそれなりの教育を受けているのは当然なのかもしれない。

もちろん取り繕い方が上手くて俺が分かっていないだけなのかもしれないが、果たして。

適当に目についたメニューを注文して待っていると、鈴がこつちに向かって来るのが視界に入った。ハミルトンもいる。不満で頬が膨れた顔からして、一組の歓迎会場から弾かれた文句を言いに来たのだろう。

当たり前だが今は鈴などを相手にしている場合ではない。俺は気づかないふりをして受け取り、さっさと足早に逃げ出した。

デユノアはなんと専用機持ちだった。

「と言つても一夏やオルコットさんみたいに完全な専用機じゃなくて、汎用の機体に専用化処理をしただけなんだけどね」

「やっぱリファール・リヴァイブ?」

「うん。さすがに別の会社の機体を使うのはね」

「ん? どういうことだ?」

「一夏、シャルルはラファールを作ってる会社の社長の息子だよ?」

「今まで話に出てなかった?」

「あ、さつき四十院さんがそういう話をしてたな。なるほど、ラファールか」

普通はデユノア社だけで話が通じてしまうので、ラファールと結びつけることのできない一夏ではピンと来ないのもむべなるかな。

だが呼び方のような話には敏感で、自分だけ名前呼びで俺とデユノアが名字呼びなのはおかしいと言い出し、俺達は強制的にお互いを名

前呼びさせられることになってしまった。

「織斑君はさすがに基本事項の知識くらいは入れておいた方がいいですよ。こちらは当然通じているものと思つて話をしてしまひますので、いつかアドバイスをして正しく伝わらなくなつてしまうことがあるかもしれない」

「うん、なんか俺もそんな気がしてきた。もうちよつと真面目にやろう。ありがとう四十院さん」

「それ僕が常々言つてることなんだけど」

「う……いやそれは……」

「甲斐田さんは織斑君を理解していますので、きちんと織斑君が正しく理解できるように話すことができます。だから今までは何も問題が起きなかつたのでしよう」

「そ、そうだな！ さすが、四十院さんはよく分かつてるよ！」

一夏が大きく笑つてごまかすが、確かにこれは一理ある話だ。

その通り、俺は一夏がちゃんと理解しているか顔を見れば分かる。そしてリーグマツチの際も、鷹月さんや四十院さんが一夏に話をしていてこれは通じてないと思つたら間に入つていた。織斑先生ですらたまに俺に翻訳を求めることがあるくらいだ。

もしかして一夏に合わせて話すというのは、ある意味一夏を甘やかすことになつていたのでないだろうか。

「二人ともすごく仲いいんだね。付き合いも長いのか？」

「つつても三年くらいだな」

「長さだけなら一夏は小学生から知つてる鈴の方が僕より長いね。そういうえば篠ノ之さんで一夏と一緒にいたのはどれくらいだっけ？」

「私か？ 幼少期の話ではあるが、まあ五年というところか」

「あれ、そんなに長かつたのか？」

「か、数えればそうなる！」

これはもしかして一夏を眺めていた時期があつたということなのだろうか。

まあ物心着いた頃の話だし、深くは追求すまい。

「篠ノ之さんは映像見たけどすごかつたね。近接戦の動きとして全く

無駄がなかった」

「あれは……あの場での役割を果たしたただけで、言われる程のものではない。ただ守りに徹したただだからな」

「全然そんなことないよ。まさに守りの打鉄を体現してたというか、あれじゃいつまでやっても相手は篠ノ之さんを突破することができなかっただろうね」

「お前も甲斐田と同じく口を回す輩か。だがこういう場であるし今は素直に褒め言葉として受け取っておこう」

「ふふつ、どういたしまして」

「篠ノ之さんが照れてる。珍しい」

「だから甲斐田はどうして余計な一言を追加しなければ気が済まないのだ！」

一夏と一緒に俺に対して茶々を入れておきながら何を言う。

自分が気にしているのなら人の振り見て我が振り直せ。もちろん俺は他人がやってくるなら自分もやるなので、自重する気などさらさらがないが。

「デュノア君デュノア君、今言った映像ってもしかしてネットで出回ってるのかいうやつ？」

「それも見たよ」

「ということはあたしはみつともなく映ってるんだろうなあ」

「君は相川さんだよな？ 全然そんなことなかった。必死で戦ってたのはしっかり映ってたよ。あの時は一夏がすぐ入ってきてたけど、たまたま一発もらなかっただけだしまだまだ全然いけたのは分かるから」

「うわ、危ない危ない。その笑顔はヤバいね。一ヶ月前のあたしだったら完全に惚れてたわ」

「そうなんだ。それは残念だなあ。一ヶ月前にここに来られたらよかったのに」

「きゅくん」

誰だバカな擬音を口に出した奴は。

見渡すと整備班の数名がうつとりとした顔をしていて、ちよつと犯人の判別は難しそうだ。

「でも後で会社の人撮った映像を見たんだけどね、それでネットで出回ってる映像がひどいものなんだって分かった」

「だよな！ あれはいくらなんでもねえぞ！」

「甲斐田君の扱いがひどかったんだって？ あたし達は見てないんだけどさ」

「ひどいってもんじゃないよ。智希のやった指揮を最初からなかったかのようにするなんて、正直呆れて物も言えない。一夏のことをよく見せるためだったんだろうって言われてるけど、それにしてもやり方がひど過ぎる」

「私達はただ目の前に必死で、何かを考える余裕は全くありませんでした。最後までやれたのはひとえに甲斐田さんがすべてを考えて私達を導いてくれたからです」

「うん。あくまで外から見た印象でしかないけど、みんな不安とか迷いは全くなかったよね。この人は信頼されてるんだなあって思った」
俺の心証を良くしたい四十院さんはともかく、デュノアも少し俺を持ち上げ過ぎだ。いや、それを言うなら篠ノ之さんや相川さんに対してもそうだから、今は満遍なくと言った方がいいかもしれない。

それは転入生として既存の集団に溶け込むための努力なのだろうか。

少なくとも、それが今のところ順調に進んでいるのは間違いない。

「どうだ？」

「どうだって何がですか？」

ようやくお開きとなりクラスの連中と別れて、俺は宿直室に新しい部屋の鍵を取りに来ている。

そして織斑先生が二言目に出した一言だ。

「もちろんデュノアと話をした感想に決まっている」

「んー、いい人そうですね。一夏とは違って全然気が利くし」

「そうか」

「協調性のある人は大歓迎です」

「それはよかったな。では智希、男性IS操縦士としてはどうだ？」
「ここで名前呼びですか。専用機までもらってるそうですね。動きとかはまだ見てないので何とも」

「そういう話ではなく、何か普段とは変わったことを感じなかったか？」

「ああ、そっち系の話ですか。それなら一夏の時と一緒にです。特に何もなし」

「特に何も無い？」

千冬さんは素直に疑問に思ったようで、オウム返しをしてきた。
そこは疑問に思うところだろうか。

「正直に言うとか何かないかなって期待してたりもしたんですが、全く何もなかったですね。まあ一夏の時もそうだったので、そういうものなんでしようけど」

「待て、一夏の初対面の際もそうだったのか？」

「あれ、言いませんでしたっけ？ 別に一夏と初めて会った時も何かを感じたとかそういうことはありませんでしたよ。超能力者じゃないんだし、出会ってビビッとくるとかあるわけじゃないです」
「そうか」

これはなぜか期待される話で、俺と一夏は何かで通じ合っているような誤解をよくされる。

しかも一般市民が言っているのではなく、発生源はどうもISパイロットにあるらしい。

どうやらその人達には口にしづらい何かがあるようで、俺と一夏にも何かあるのではないかと思っている人もいるとのことである。

そんなもの普通なら何を非科学的なと一蹴されるところだがそこはISの世界、もしかしたらという気持ちで研究者連中は俺や一夏に質問をできていた。だが当然何も無いよで終わってそれきりだ。

しかしまさか千冬さんまでがそういうのを気にしているとは思わなかった。

「変なことを聞いて済まなかった。これが智希の部屋の鍵だ。そしてこちらが一夏とデュノアの部屋のものだ」

「一夏もシャルルも僕の部屋の鍵は持つてるんですよ？」

「当然だ。部屋を分けておいてなんだが、デュノアと一夏の様子は気にしておいて欲しい」

「シャルルはともかく一夏もですか」

「デュノアと同部屋の一夏の様子を見ての方が分かりやすいだろう？ もし何かあったとしても知らない相手では変化したかさえも判断しづらいだろうからな」

俺がデュノアと同部屋にならなかったのは千冬さんにとってそこまで誤算だったのだろうか。

昨日からどうにも言い訳がましい。もしくは奥歯に物が挟まった言い方だろうか。

「なんかそれかえって面倒だなあ」

「智希の意思はもちろん尊重する。だがそれはそれとして、私としてもやらなければならないことはあるのだ」

「大変ですね」

「自分で選んだことだから仕方ない。それくらいはお前にも分かるだろう？」

「それもそうですね」

デュノアの件について千冬さんは俺に対して強制してこない。

以前にああいう説教をしたため、俺がすっかり考えて行動しているように見えれば無下にはできないのだ。

もちろん事態がまずくなるようであれば即介入はしてくるだろう。今の時点でそれをしないのは俺がどうしようとしているのか分からないからだ。まだ何もしていないのはもちろん、方向性すら見えないからだろう。

俺が一夏とデュノアを一緒にした意味は何か、千冬さんは考え続けているはずだ。

「智希、お前も事情がある程度把握しているから言うが、お前に何ができるか期待している」

「これは珍しい。千冬さんが僕に期待とか初めてじゃないですか？」

「私にできなくて智希にできることはある。それは一夏だっけそう

だ」

「万能な千冬さんならその気になればなんともなるでしょうに」

「力技で解決することは万能と言わない。もちろんいざとなれば躊躇することは無いが、私はそういう解決策を好まない」

「わざわざ大きなヒントをありがとうございます」

「喋り過ぎたな。行け」

「ではお休みなさい」

一礼して俺は宿直室を出る。

やはり千冬さんとしては俺に介入して欲しいようだ。

穏便でない解決手段なら既にある。だがそれを使いたくないと。

だから千冬さんが俺に求めているのは丸く収めることである。それも男性IS操縦者という立場を使って。

確かにこれは千冬さんにはできないことだ。あの人が動けばどうやったって上からの強制になる。その上織斑千冬という名前が出てきては世界規模の大ごとになり過ぎるのだ。

今の織斑千冬の立場は一介の教師である。たとえ世界中に名前が知られていたとしても、たとえ今も強力な影響力を保持していたとしても、ただの教師という立場では国家や企業の問題に口を出すことなどできない。しかも直接的には何の関係もないのだ。

つまり本気でやろうとするのであれば裏からやらなければならぬのだが、そもそも関係もない千冬さんにわざわざそこまでする理由があるのか。こうやって動いているということはきつとあるのだろう。

博士が言っていたことだが、千冬さんがしがらみによってがんにがらめにされているというのは俺の想像以上なのかもしれない。

が、それは千冬さんの都合であって俺の都合ではない。

もちろん男性IS操縦士が関わっているので俺達への影響も大いにあるのだろう。

だから俺は俺にとって都合のいいように動くつもりだし、それは千冬さんも理解している。強制しないのはきつとそういう理由もある。

それにしても期待していると言うのなら詳しい事情くらい教えろ

と思うが、俺は自分で勝手にやると言ったも同然なのでじゃあ勝手にやれということなのか。

そういうスパルタ的なのはもう少しどうにかならないのかと俺は思わざるをえなかった。

「甲斐田くん、お客さんだよー!」

自分の名前を呼ばれて振り向くと、鏡さんが手を挙げていた。

誰が来たかと思えば三組代表のベッティである。教室の入口に立って、笑顔で手を振っている。

さて何だろうか。

「わざわざ一組まで来るなんて珍しいね。どうしたの?」

「甲斐田君織斑君に挨拶をしたって言うてるから連れてきたんだよ」

「僕と一夏?」

「そうそう。織斑君が見当たらないみたいだけど、今いないの?」

「トイレに走って行ったから今は無理だね」

「あー、それは運が悪かったね」

と、ベッティは振り向く。

ベッティの体に隠れて俺からは見えなかったようだ。そいつは。

「それは残念だ。彼についてはまた改めて伺うとしよう」

「律儀だねえ」

「当然の話だ。かの特別な人物なのだからな。礼儀は尽くさなければならぬ」

「固いなあ」

そいつは鈴くらいだろうか。おそらく身長百五十もない。だからベッティとは身長差があり、俺と同じくらいの高さなベッティを見上げて答えている。

そして俺の視線に気づき、体をこちらに向けて真っ直ぐに俺を見る。いや見上げる。

「失礼した。ラウラ・ボーデヴィツヒだ。今日付けでここISS学園に

おいて学ぶこととなった」

「……」

「甲斐田君？」

「ああごめん、甲斐田智希です」

「これからよろしくお願いします」

「う、うん」

「ラウラちゃんは三組の転入生で、ドイツから来たんだって。しかも専用機まであるらしいよ」

「ちゃん付けはやめろ。失礼だぞ」

「まあまあ、固いこと言わないの」

何かじやれているが、そんなのはどうでもいい。

心構えはしていたつもりだが、実際見た時の衝撃は想像以上だった。

なにせそのままだからだ。

「まだ一日も経っていないのに馴れ馴れしいぞ」

「じゃあ時間が過ぎればいいわけね」

「そういう問題ではない」

身長はクロエとそう変わらないだろう。あの見慣れた見事な銀髪もそのまま目の前にある。

そして何よりその口調、その雰囲気。それはもはや俺の中にしか存在しないかつてのクロエそのものだった。

「これは手強いなあ……甲斐田君？」

「全く、貴様が余計なことをするから呆れているではないか」

「ごめんごめん、さっそく馴染んでいるみたいでよかった」

「よかった？」

「いやいや、別に深い意味はないから」

違う。明らかに違う点がある。

クロエは前も、今も、そんなものは付けていない。

「その目はどうしたの？」

「ほう」

「ちよつと甲斐田君!？」

そいつは左目に眼帯をしていた。

だが俺の言葉に何も動じることはなく、軽く笑ってみせる。

「人は個人として立ち上がる時、傷を負うことがある。意思の力により重力を引き剥がして埋もれた中から立ち上がる時、周囲の環境によつてはあちらこちらから傷をつけられてしまう。それは私のように体の一部かもしれないし、あるいは心の中かもしれない。私の場合はたまたま他人から見える部分だったというだけの話だ」

「なるほどね」

最初から用意された答えではあるだろう。

だがそう言われては初対面でそれ以上突っ込む気になれない。

躲してきたこの状況で無理矢理押し入るのは、馬鹿か空気を読めないかのどちらかだ。

それ以前にそもそも初対面でいきなりそういうことを口にする時点で失礼にあたる。

それも承知で素の反応を見てみたかったのだが、その程度は想定内だったようだ。

「説明が足りないか？」

「十分過ぎるくらい理解できたよ」

「それはよかった。君に失望せずに済んだ」

「二人ともどういうこと？」

ベツティが置いて行かれているが、このあたりは俺も慣れたものだ。

かつてのクロエを想定して話をすればいいだけなのだから。

「聞けば君は我が教官、織斑千冬先生と幼少の頃から親交があるそうではないか。できれば暇のあるときにでも私の知らない教官の話を聞かせてもらえると嬉しい」

「そのくらいならいつでも」

「それは有り難い」

「な、なんかよく分かんないけど、織斑先生繋がりで仲良くできそうなわけね」

ベツティが置き去りにされる中、俺達は笑顔で握手をする。

その手はやはり暖かかった。

「ではこれで失礼させてもらう。と言っても織斑一夏君への挨拶でまたすぐ来ることになるのだがな」

「一夏には伝えておくよ」

「よろしくお願いする」

むしろ奴にとつてはそれが本命だろう。

博士と話をした時はすっかり抜けていたが、一番最初に考えるべきは一夏だった。

しかも母国はドイツ。第四の男性IS操縦者がいる国なのだから、何らかの目的を持ってやって来たのは火を見るよりも明らかだ。

ボーデヴィツヒを間に挟んできたのも一夏関連で何かあるのかもしない。

「三組にも転入生がいるんだ」

「ていうかそもそもIS学園に転入制度とかあったの？」

「人形みたいに綺麗な子だったね」

「それなのに軍人口調とかギャップ萌えってやつですかー」

後ろでクラスメイト連中がどうでもいい会話をしている中、俺はぼんやりと遠ざかる小さな後ろ姿を眺めていた。

17. 酢豚とサンドイッチ

一人になって楽になったかと思えば、意外とそうではないかもしれない。

ふと気づいて、俺一人のものとなった部屋を眺める。

二人部屋を一人で使っているだけなので、当然何もかも二つずつ揃っている。ベッドも机もそのまま置いてある。

思うのはスペースが増えた、ではなく、一人で掃除する範囲が増えた、だ。

よく考えたら、いや考えるまでもなくこの部屋を管理するのは俺である。つまり俺が何もしなければ何も変わらない。

一般的には当たり前だが、俺にとっては当たり前の話ではなかった。何しろ今までは一夏が全部やっていてくれたのだから。片付けも掃除も洗濯も、俺が何も言わずともやってくれていた。その上余力まであるようで、もらったとはいえこの前から植物まで育て始めているほどこだ。見渡してもないのでそれは一夏が持つて行ったのだろうけれど。

だが、もしかしてこれから俺は自分でやらなければならないのか。しばし考える。

そして一つの案を思いつき、実行してみることにした。

「よし、掃除とかしないのでらしらないふりをしてたら一夏が見かねてやってくれるかもしれない」

「いやいやいや、それは普通に自分でやろうよ！」

誰に言ったわけでもないのに突っ込みが入る。

合わせて映像が俺の目の前に出てきた。

「あれ博士、いたんですか？ 出てこないからいないのかと」

「深刻そうな顔で考え込んでたから邪魔しないように待ってたんだよ！ それなのに出てきた結論はそれ!? 思わず突っ込んだんじゃないか！」

「そんなの知りませんよ。それに僕にとっては大事なことですから」

「智希君にヒモとしての才能を感じてしまった……」

「失礼な」

「いっくんに養われて何もしないで過ごす日々とかやめてよ……」

「そこに魅力を感じないわけじゃないですけどさすがにやりませんよ」

「魅力を感じちゃってるんだ……」

「ついに分かりました！ お兄様に合っているのは世話を焼いてくれる母性愛に溢れた女性だったのです！」

興奮気味なクロエが画面外から飛び出してきた。この前といい最近自己主張が激しくなっているような気がする。

「クロエはちよつと黙ってようか」

「ひどいです！」

「博士と話をしなきゃいけないから、ね？」

「それなら……」

「一応クロエにも関係ある話だから聞いておいて」

「はい」

「あれねえ……」

クロエを宥めて、俺と博士はため息を吐きそうな顔で向き合う。

議題は言うまでもない。

「考えるまでもなく、目的は普通にいっくんだね」

「ドイツでしたからね。それはそうでしょう。僕らは慌てすぎでした」

思いもよらない存在がいきなり飛び出してきたとはいえ、俺は冷静ではなかった。博士も俺につられてしまい二人してクロエにたしなめられたほどである。

「まあ、あのテンションは仕方ない。で、今後の話なんだけど」

「あの様子じゃ向こうは僕には絡んでこないんじゃないですか？ どう見ても一夏の方に興味ありありでしたよ」

俺と一夏に対する挨拶での差だ。

奴はどうやら織斑千冬信者であるらしく、実の弟である一夏に会え

てそれなりに感情が高ぶっているようだった、

俺については失礼な発言をしたこともあつてか距離は遠めで、一方一夏に対しては相手が照れるくらいまじまじと見て観察していた。

それは別に俺でなくとも分かるレベルだったようで、周囲もそう見たらしい。態度に差があることに對して文句を言っているのもいた。

ちなみにデユノアとは既に面識があるようで、顔を合わせるの二回目とのことである。一言二言言葉を交わすだけだった。こちらに興味はあるのかなのか。

「個人的な感情はあるにせよ普通に任務を抱えてやってきたっぽい。だけど奴にはちよつと問題があつて」

「問題ですか」

「ぶつちやけちーちゃんが絡んでる可能性が高い」

「えー」

「そいつね、ちーちゃんがドイツにいた頃の教え子なんだ」

「は？」

奴はそんな公の存在なのか。

それはあり得ることなのか。

「ちよつと待つてください。どうしてそれを博士が知らないんですか？」

「う……それは……そのへん、その後のドイツ関係はくーちゃんに全部任せてたから……」

「へー」

「いや、データはちゃんとあるよ。映像にも撮つてたし、どういうISに乗つてたとかどういう訓練をしてたとか、引つ張り出したら記録は全部あつたよ？」

「じゃあ博士が認識してないのは……」

「くーちゃんに気づけてそれは無理な話だよね」

「ああ」

「すみません……」

「クロエは何も悪くないよ。だって気づくための材料を何も持つてないんだから」

今のクロエに気づけというのは完全に無理だ。

だって今は知識として後から知っただけで、何もかも全部吹っ飛んでしまったのだから。

「それでもすみません……」

「いや、銀髪眼帯だけじゃ僕でも分からない。その奥まで見られれば別だけど、あとはISでの動きを分析するしかないかな。まあ博士が直接見たらすぐに分かったんだろうけどね」

「嫌味たらしいなあ。でもくーちゃんは訓練の様子とか見て纏めてくれてたんだし、それで違和感を覚えなかったんだからもうどうにもならない」

「それこそ絶対に無理ですよ。今のクロエには何も残ってないんだからそもそも感じようがないんだし」

「そうだね。それにあのVTシステムがまさかちーちゃんの側にあるとか誰が思っかって話なんだし」

VTシステム。

正式名称はValkyrie Trace System(ヴァルキリー・トレース・システム)。

一言で言えば、織斑千冬の動きを完全コピーすれば世界最強になれるんじゃないか、と考えたどこかの馬鹿によって作られたISに搭載するプログラムである。

しかしそれは世界中から総スカンを喰らい、現在は名指しで開発が禁止されている。

ところがドイツという国は諦められなかったらしく、その後もこっそりと研究を続けたらしい。

そしてそれは当時逃亡中だった篠ノ之束の知るところとなり、その極秘施設は徹底的に破壊されたとのことである。博士が言いたがらないのでそこは想像するしかないが、自分ではできない以上おそらく当時の協力者にやらせたのだろう。

それから博士はしばらく残党や同じような連中の搜索と排除を行い、その過程でアメリカに来て俺やクロエと出会うことになるわけだ。

「いやー、本家本元を見れば本物に近づけるとか考えたんじゃないですか？」

「そうだったら話はすーごい楽なんだけど、問題はそいつをちーちゃん自身が引つ張りだしたんじゃないかって感じで」

「千冬さんが自分から？ どうして？」

「そんなのちーちゃんじゃないから知らないよ。同情したとかそういうことなんだろうけど」

「同情する要素があの中にあるんですか？」

「いやほら、そいつは実験に使われた被害者なんだから」

「あー」

それを言われるとさすがに否定できない。

国が違うとはいえクロエがまさにそうだったのだから。

VTシステムは搭乗者と直の連携が必要になるそうで、そのためにはつきり言って人体改造同然の投薬や手術やその他もろもろが行われたらしい。そしてその対象となった被験者はなんとこれまた違法実験、男を人工的に作ることでできないかとあれこれやって失敗してできた女だそうで、もはや役満をぶつちぎっている。

もうやばすぎて真相を知った世界の首脳は満場一致で闇に葬ってしまったとのことだ。運良く何者かが証拠ごと勝手に潰してくれたというのもあって。

ただそれ以来IS委員会におけるドイツの立場はその国の規模とはかけ離れて極めて低くなっているようだ。もはや発言権はないに等しいらしい。

一方のドイツ国内ではまことしやかに囁かれる噂の一つで済んでいるのがせめてもの救いと言うべきか。今はもう加害者も被害者もないのだから。いないはずだったのだが。

「でもあんなのが残ってちやいくらなんでも危ないでしょ？ それとも千冬さんは操縦者の体の中にあるVTシステムを消す方法を見つけた？」

「それはムリ。ちーちゃんでもむり。たとえ資料を持ってて子分の研究者にやらせたとしても無理」

「言い切りますね」

「今世界でそこまで進んでいる研究者はいないんだ。あれってISの構造と密接に関わってるから、操縦者から切り離すにはそれ相応の知識が必要。そして現状はよくてその三段階ぐらい前にいるかな」

「だから作った側の知識を使えば？」

「あのクズどもは本当に闇雲にやってただけだよ。だから変なとこまで触っちゃってて暴走すると大変なことになるんだ。しかもそれで出せた成果はちーちゃんに瞬殺されるレベルなんだから、もう話にもならないよ」

「でも……」

「うん、クロニクル博士は闇雲の中から一等の宝くじを引き当てただけなんだ。燃えかけの研究ノートをちらつと見たけど、『あれ』はたまうまくいっただけ。それも不完全なままだったのは智希君も知ってることだよ？ 全くケアできてない部分があつて、その結果くーちゃんは生まれてからの記憶まで全部消えてしまった」

正確には、消したのは俺である。俺はそうなる可能性まで聞かされた上でそうした。

「やっぱり無理だったんだよね」

「お兄様、何度でも言いますよ。私は今幸せです」

と、クロエが入ってきた。しまった。久しぶりに気を遣わせてしまった。

クロエはその黒になった両目で真っ直ぐに俺を見据える。

「クロニクル博士、いえお父様の記憶は私の中にはありません。ですがその愛情についてはお兄様から十分なほど教えていただいています。私を救ってくれたことに心から感謝していますし、愛情について疑うことなどありません。だから私は甲斐田ではなくクロニクルを名乗っているんです」

「知ってる」

「でしたらもう昔のことを思い悩むのはやめてください。今私は幸せで、お兄様は自由に好きなことができます。そこに何か問題はありますか？」

「なんにもないね」

「そうです！ お兄様は今のよう自由な思いきりやればいいんです！」

「束さんとしてはもうちよっ」

「はいはい分かりました。同じことを繰り返すのはもうやめましょう。で、今後については？」

「あ、ちよつと照れてる。まあそれはいいとして、これからちよつとドイツ行って来るね。さすがに情報が足りないんだ。特にここ一年については放置気味だったから、一度洗い直しておきたいし」
「なるほど」

今はどこにいるのか知らないが、出向く必要まであるのか。

それはいったい何をするためだろう。

「知識のある智希君がいて暴走するのはないと思うけど、万一暴走したとしてもちーちゃんいるからね。あのゴミどもみたいに取り込まれるとかないように、その時は智希君が人が近づかないようにしているよ」

「あんなのに好んで近づいていく馬鹿はさすがにいないですよ」

「それもそうか」

「とりあえずは了解です。まあ奴も僕に興味ないだろうから問題はなんでしょう。あ、そうだ、クロエも一緒に行くの？」

「もちろんです！ 終わったら変装して束さまとショッピングをするんです！」

「また服を買うのか。そんなにいるとは思えないけどね」

「何を言うんですか！ 女は日々努力をしているからこそ女なんです！」

さてクラスメイト連中はその区分によると何人が女なのかと考えてしまうが、思い浮かぶ感じでは意外とみんな努力しているなど思った。

もちろん一夏という存在もあるのだろうが、制服社会の中ちよつとしたお洒落に余念のない女子は多い。

制服に何かを足していたりするし、鈴などは完全にいじって変えて

しまっている。

たまに俺が気づいて指摘すると得意そうな顔になるので、やはり連中も意識してやっているのだろう。

このあたりを我らが一夏に期待するのはまず無理だが、デユノアは目ざといどころか褒め方まで知っていそうな感じだ。

俺も得意ではないので、デユノアから一夏が学ばばいろいろよさそうである。

とそんな感じで、クロエが自分の買い物について目を輝かせてあれこれ語っている中、俺は聞き流しつつもぼんやりと考えていた。

六月に入ったとはいえまだ梅雨に突入というほどではない。

屋上から見上げる先は未だ綺麗な青空だ。

「よし、じゃあみんな揃ったし始めるとするか」

「う、うん。でも本当にいいの？」

「ついでだついで。元々いつかやろうって話はしてて、それがたまたま今日になったってだけだ。だからシャルルはたまたま居合わせてラッキーでいいと思うぞ」

「そうそう。気になるなら次は自分もやってみればいいんじゃない？」

あ、シャルルは料理できるの？」

「簡単なものなら……」

「じゃあ何も問題ない。まあ僕は食べるだけだけどね」

「甲斐田の面の皮の厚さは本当にどうにかならんものか」

何か言っているのもいるが、そんなものはやりたい奴がやればいいのだ。

俺はやる気もないのでその場に居合わせたら喜んで食べる、それだけだ。

「まさかここにいる人達はみんな作ってきたの？」

「さすがに全員が全員というわけではなからう。人には得手不得手があるのだからな」

「と言いましてもせっかく一夏さんが試食をしてくれるのですもの。」

この際と思う方はそれなりにいるようですわ。かく言うわたくしも準備させていただきました」

「それは楽しみだな。セシリアは何を作ってきたんだ？」

「開けてのお楽しみということ。すぐですわ」

一夏が機嫌よくオルコットに笑いかけ、オルコットも笑顔で持っていたバスケットを持ち上げる。

要するに、試食と称して一夏に自分の手作り料理を食べてもらおうの会である。

一夏が超料理上手なのは周知の事実で、俺としては一夏の舌を満足させるのは無理だと連中は引いてしまうのかと思っていた。

だがさすがにそのあたりはしたたかで、逆にそれを利用して一夏にアドバイスを貰うと理由をでっち上げ、そして一夏は喜んで当然のように乗ってしまっている。

「でも昨日はそのデユノア君のおかげで食堂がすごいことになってたから、今日ここで弁当というのは正解だったわね。今頃食堂に行った奴は歯ぎしりしてるんじゃない？」

「迷惑かけてごめんね」

「別に責めてるわけじゃないわよ。ちょうどよかったっただけ。しばらくは物珍しきで大変だろうけど、そのうち慣れるし落ち着くから。一夏や智希の時もすごかったらしいけど、今じゃこいつらは何食わぬ顔で行き来してるんだし」

「ふふっ、それはとても心強い言葉だね」

そして鈴までいる。

こいつはてつきり知らずに置いて行かれると思っていたのだが、きちんと情報収集をしていたらしい。ちゃっかり弁当片手について来ていた。

中身はどうせ一夏の好物にして十八番の酢豚だろうが、まあそれは俺にとっても懐かしい味なのでいい。

問題は、ハミルトンまでが弁当を抱えていることだ。鈴に付き合い合わせたのだろうが、俺に食べさせるではそもそも趣旨が違うとは考えなかったのか。それに何を作ったのか正直不安である。一応は鈴が

見ていただろうから、そこまで恐ろしい物ではないだろうが。

ちなみに四十院さんは料理ができないようで、潔くなのかこの場にはいない。鷹月さんがいるのは意外だった。単純に料理の批評が欲しいのだろうか。

「まあ話はそのへんにして早く食べようぜ。俺も腹空いたし。で、誰が最初に食べさせてくれるんだ？」

一夏の言葉と共に、時が止まる。

一番打者、先鋒、ファーストアタッカー。その役割は重要だ。何しろそれがこの場の一夏にとって基準となってしまうのだから。

自信があるのであれば思い切って出るのもいい。だがそれ以降に自分よりも上の人間がいた場合、自分の印象はあつという間にかき消されてしまうかもしれない。

ならばできるだけ後に回すか。それはそれで難しい。遅くなってしまうと一夏の食欲が満たされてしまうかもしれないのだ。満腹になってしまつては味わつてもらうどころではない。

一瞬で連中はそのことを感じ取つたのだろう。じりじりとあたりを牽制する様子が伺える。篠ノ之さんはやはり迷っている。一方オルコットは余裕そうな表情だ。どうやらいつでも問題ないほど自信があるらしい。鈴に至つては最初から動く気配がない。酢豚のような濃い味は後の方がいいとでも判断したか。

「みんなそんなに怖がることないぞ。別に酷評とかするつもりなんてないし」

一夏が笑顔で見回すも、それでも踏ん切りを付けられた人間はいない。

おそらく連中にとつては永遠にも等しい数秒の時間が流れる。

「あれ、誰も行かないの？　じゃあ私が」

ついに手を挙げた勇者は誰だと視線が集中する。

「お、谷本さんか。なんかそのバスケットは懐かしいな」

「毎日お世話になりましたねえ」

なるほど、この場において利害関係のない谷本さんならトップバッターとして適任だ。

その上リーグマッチの際は衛生班として一夏にサンドイッチを作っていた。だから一夏も既にその味を理解している。

これ以上ない適役だ。

「それで、何を作ってきたんだ？」

「じゃじゃーん！ たまごサンドでーす！」

時が止まった。俺と一夏だけの。

バスケットの中には所狭しとあの、どこまでも味が変わらないサンドイッチがひしめいている。

「え、あれ？」

「そうでーす！」

「あの、それって俺はもう散々食べたんだけど」

「いやー、甲斐田君もそうだったけどあのがつつきぶりはよっぽどこれを気に入ってくれたんだなあって」

「え、いやそれは……」

「さあどうぞー！ なんなら全部食べちゃってもいいよ！」

同室の布仏さんに学んだのだろうか。今の谷本さんに全く邪念は見られない。本気で俺達がそれらを好んで食べていたと思っている。

違う、そうじゃない。味が平坦過ぎて一気にかき込むしかなかっただけなのだ。

「じゃ、じゃあ……」

「どうぞどうぞー！」

一夏は一つ手に取り、口に入れる。それからああこの味は久しぶりだなーという顔になった。

そう、別にまずくはないのだ。あえて言うなら普通。たまごサンドと聞いて思い浮かぶ味そのままである。ただその量が尋常ではないだけで。

「えつと、そうだ、味なんだけど」

「ああ、別にそんなのはいいよ。おいしく食べてくれてるのはもう知ってるから。それよりも遠慮しないでどんどんどうぞー！」

どうしよう、という目で一夏は俺を見る。もちろん俺は笑顔で拳を握ってがんばれと返す。当たり前だ。一夏の残した分が俺に回って

くるのは分かりきっている。だからできるだけ一夏に消費させるのだ。

だが一夏の方もそんな俺の思惑を感じ取ったらしい。信じていたのに裏切られたという悲壮な顔になり、周囲を見渡して助けを求め

る。「ま、まあ谷本、今日のところはそのへんにしておいてくれな

いか？ 何しろこの後には私達の作った料理も一夏に食べて貰う予定だ。その前に満腹になってしまつてはさすがにな」

「おっと、それはそうでした！ これは失礼！」

「谷本さんごめんな。せっかく作ってもらつて悪いんだけど、まだみんなの分があるんだ」

「いやいや、全然お気になさらずに」

利害が一致した。

確かに篠ノ之さん達としても一夏に満腹になられては困るのだ。フォローに出るのも当然の話である。

しかし谷本さんもどうしてそういう時に限つて空気を読む。いつもの傍若無人さはどうした。そこは周りの目など気にせず一夏の口に押し込むべきではないのか。

そして一夏はざまあみろという目で上から俺を見る。自身の危機を乗り越えたことにより強気になつてしまったようだ。

おのれ一夏、だが俺がこの程度で終わりだと思ふな。

「じゃあ甲斐田君もどうぞー！」

「どうもありがとう。いただくよ」

「どんどん食べてねー！」

「そうだ谷本さん、せっかくだからみんなにも配つてみたら？ これだけあるんだしみんなにも食べてもらつた方がいいよ」

「あれ？ 私は別に構わないけど甲斐田君はいいの？ 自分の分は何も用意してないんだよね？」

「そうだけど僕も一夏のついでに食べさせてもらうつもりだから大丈夫。谷本さんもそれをあげて代わりに自分ももらえばいいんじゃないかな？」

「なるほどそれはグッドアイデアです！ ではさつそく！」

手を叩いて喜び、谷本さんは近くにいる順番待ち状態の連中にサンドイツチを配り始めた。

ミツシヨンコンプリート。危機回避成功。

量が多いだけなのだから周囲に分散させてしまえばいい話である。

一夏を見ると二番手は篠ノ之さんのようだ。唐揚げを食べている。同時に俺を観察していたらしく、俺の危機回避能力に驚いたのか目を丸くしている。そしてすぐ何事かに気づいたようで、俺を睨みつけてきた。

それはもちろん最初からそうしろよという抗議である。

「あんた達はいつもいつも何バカやってんのよ」

「いてっ！」

一部始終を見ていたらしき鈴が俺の頭を叩いた。

試食会は概ね順調だ。

まだ準備した全員が一夏に食べてもらったわけではないが、あれからずつといい雰囲気が進んでいる。

篠ノ之さんは一夏の好物である唐揚げを用意していた。味付けについても一夏の好みをリサーチしていたようで、一夏は大喜びで頬張っていた。

そしてその後の一夏のべた褒めぶりにはさすがの篠ノ之さんも相好を崩してしまい、今も人前で顔が緩んでいるのに気づかないようだ。ご機嫌な顔をして幸せいっぱいである。

さらにこの事実是他の連中に希望を与える。篠ノ之さんの料理はまあいいところ普通であり、出したものも基本の唐揚げである。それで一夏がここまで喜んでくれるのだから、多少なりとも自信のある者は力が入ったようだ。実際、次から次と美味しいものを出されて一夏は味の指摘やダメ出しをするどころではない。いいところを取り上げては褒めるばかりで、またその褒め方も料理ができる人間の言葉であるため説得力はある。

結果、製造工場のように頬の緩んだ女生徒が生産され、場の空気はピンク色が次第に濃くなつていった。

「ふん、どいつもこいつもその程度で一夏を喜ばせようとか甘いわね」そんな空気を打ち破つたのは鈴だった。

今こそ真打ち登場だとばかりに立ち上がり、弁当箱を両手に持つて一夏の前へと進む。

一夏も理解したようだ。今までの緩んだ顔から一転、気を引き締めて膝を正す。

そう、一年ぶりに鈴の酢豚が食べられるのだ。

酢豚は一夏の好物の中でも上位に入る。正確には本職の中華料理人である鈴の父親の酢豚が一夏にとって最高の酢豚なのだが、娘はその事実を知ってから数年、父親の元研鑽を重ねてきた。

その結果鈴は一夏好みに味付けをアレンジすることによって、父親には及ばないものの、一夏が何も言葉を発せず一心不乱に食べ続ける酢豚を作り上げることに成功する。

そして鈴が賢いのは、そのレシピを一夏に教えなかつたことだ。

料理のできる一夏は自分で作りたいから当然のように鈴に教える請おうとする。だが鈴は企業秘密を大義名分に掲げて首を縦に振ることがなかつた。つまり、鈴に作ってもらわなければその酢豚を食べられないようにしたのだ。胃袋による困い込みという古典的手法である。

しかし一夏も負けてはいない。自らその酢豚を作り上げるべく独自に研究を行う。その時の一夏は酢豚ばかり作るようになってしまい、同時期俺は酢豚の匂いを嗅ぐだけでうんざりしたものだ。鈴も意地を張っていたが一夏は一夏で対抗意識を燃やしていた。

だが悲しいかな所詮は素人、本職に独学で勝とうなど無謀が過ぎる。ほどなく諦めて一夏は鈴の前に膝を屈することとなった。俺や施設の仲間が総出でいいかげんにしろとやめさせたとも言う。

ここまでは鳳鈴音大勝利である。だが運命の女神は鈴に微笑まなかつた。

中華料理禁止令を俺によって施行された一夏は気づく。そうだ、中

華料理は別に自分で作らなくても鈴の店で食べればいいじゃないかと。

それからの一夏は中華関係に手を出すのをやめ、日本料理にその興味の矛先を向けていく。そして今や様々な料理を会得するに至る。

その後梯子を外された鈴が俺のせいだと八つ当たりで襲いかかってきたが、俺も対策に余念はない。予め用意していたDとK（諸事情により匿名）という名のサンドバッグを差し出すことにより、何とか事なきを得た。

酢豚、中華料理という点で一夏の中に確固たる地位を占めることができたのだから、それはそれで一つの成果だろう、と俺は鈴に対して説得を行う。ひとしきり暴れて頭の冷えた鈴も八つ当たりでしかないことに気づき、幾多の犠牲を生みながら二週間という長きに渡って続いた戦乱はようやく終結の時を迎えることとなった。

「鈴、一年ぶりだな。まさか腕は落ちてないだろうな？」

「あたしがいたのは本場よ。上がることはあっても下がるだなんてとてもあり得ないわ。一夏の方こそ舌は衰えてないでしょうね？」

「ふっ、それはこれから分かることだ。鈴、食べさせてもらおうぞ」「どうぞ。感想はしっかりと聞かせてもらおうわよ」

先程まであった緩んだ空気はどこへやら、今は緊迫した空気が場に広がっている。

誰もが固唾を呑んで見守り、声を発することさええない。

そんな中一夏は鈴から弁当箱を受け取り、床において手を合わせ一礼する。それから弁当箱の蓋をゆっくりと開けていく。

鈴はここに来る前に食堂まで行って電子レンジを使って温めたのだろう。弁当箱が開いた途端に酢豚の香りが一気に広がる。その匂いは確かに俺の記憶にあるものと同じだった。

一夏は目を閉じて鼻からその香りを吸い込む。その顔には懐かしさが見える。きっと俺と同じ感覚に入っているに違いない。

それから一夏は満足したかのように笑みを浮かべながら目を開ける。そして箸に手を伸ばし、左手で弁当箱を持ち上げた。

誰かが喉を鳴らしたのが分かった。今この場は一夏の一举一動に

視線が注がれている。

もちろん一夏は周囲のことなんて一切気にしていない。一夏の目に映っているのは目の前にある箱の中身だけだ。

箸はそのまま箱の中へと入っていき、やがて赤い塊が飛び出してくる。塊はそのまま一夏の口の中へと吸い込まれて行った。

二度、三度、一夏の顎が動く。一度止まり、またゆっくりと、噛みしめるように一夏は顎を動かしていく。やがて飲み込んだようだ。喉が動いたのが分かった。

そして一夏はまた同じ動作を繰り返すのだろう、と俺は思っていた。皆もそうだったに違いない。だが一夏はその予想を大きく裏切る。

なんと一夏は箸を置き、弁当箱の蓋を閉めた。そしてそのまま弁当箱を脇に寄せ、膝を立てて前に動き鈴との距離を詰める。

鈴の顔が驚愕に彩られる。俺も同じ気持ちだ。何か問題でもあったのか。いや、鈴の酢豚に限ってそんなことなどあるわけがない。俺だって鈴の酢豚は何度も食べている。一度足りともまずかつたりするようなことはなかった。まして今は一年ぶりの場。鈴が何か手落ちをするようなことなど絶対にはあり得ないと言い切れる。なのに一夏はいったい何を考えている？

一夏は大きく両手を広げる。何が始まるのか。当然鈴は身構える。そして一夏はそのまま鈴を抱き締めた。

「えっ?」

「これだ、これなんだよ! 俺が食べたかった酢豚はこれなんだ!」

まったく理解が追いつかない。

今一夏は何をしているのか。

「ちよ、ちよつと一夏!?!」

「ああ思い出した! これが俺の求めていた味なんだ! 今ならできるんじゃないかと思って何度も挑戦して出せなかったこの味、それは確かにここにあった!」

いったい何が起こっているのだろう。一夏が鈴を抱き締めて興奮している。

まるで離れ離れになっていた恋人に出会えたかのような喜びだ。人ではなく酔豚だが。

と、俺は異変に気づく。

「一夏！ その手を離して！」

「何を言ってるんだ智希！ 酔豚だぞ酔豚！ ほら、俺達の中学時代はここにあったんだよ！」

「こつちこそ何言ってるか分かんないよ！ いいからその両腕を広げて！」

「は？ だから何言ってるんだお前？」

好ましい反応をしない俺に不満そうだが、一夏はしぶしぶ両腕を緩める。

するとその中であつた鈴の体がゆつくりと倒れた。

「あ、鈴！」

「あーあ」

鈴はのぼせてゆでダコになっていた。目も回している。

もちろん一夏に強く抱き締められたせいだ。加減の問題ではなく、他ならぬ一夏に抱き締められたというのが主な要因である。

「すまん鈴！ 大丈夫か!？」

「あーあー、そんな揺すつちや駄目だつて」

「ど、どうすれば……」

「そのへんに寝かせとけばいいよ。すぐに回復するから」

「わ、分かった……」

俺に言われるがまま一夏は鈴の体を横たえる。

一夏はやってしまったと不安そうだが、別に心配するほどではない。

だつて鈴の顔はこれ以上なく幸せそうなのだから。

目を閉じたままなだけで明らかに意識も戻っている。今は幸せを噛みしめているだけだ。

というかちよつとニヤニヤし過ぎで気持ち悪い。

「えーと……」

一夏が頭をかく。

どうしたものかと困っているようだ。

鈴の弁当箱をチラ見しているあたり、酢豚を食べたいのだが横たわっている鈴の手前やりづらいというところだろうか。

「つ、次はわたくしの番ですわー！」

と、立ち上がったオルコットが左腕を広げ声を張り上げる。

確かにあんな場面を見せられては心穏やかでいられないだろう。

「おお、次はどうとうセシリアか」

「今の余韻など全て消し飛ばしてみせますわー！」

「そりゃあ楽しみだ」

大した自信である。

一夏もこれ幸いとばかりに乗った。

一方俺はその隙に鈴の弁当箱に手を伸ばそうとし、すぐ鈴の視線に捕まって引つ込めざるをえなくなってしまうていた。

さて最終挑戦者、セシリア・オルコットである。

もしかしたら挑戦者自体はまだいたりするかもしれないが、見ていた感じ残っている中で大物と言えるのはオルコットくらいだろう。鷹月さんなどは純粹に料理指導目的のようだし、整備班連中に至っては一夏よりもデユノア目当てだ。まだ残っていて鈴に対抗できるような存在と言えどもオルコットしかない。

「なかなか楽しい見世物でした。つい高みの見物に興じてしまいましたわ」

「はっ。」

血の気の多い鈴が反応して起き上がる。

だがオルコットはまるで視界に入れていないという風情で、意にも介さない。

「ですがそれもここまで。これまでの全ては前座に過ぎなかつたのですわ」

「これは相当な自信だ」

「セシリアはいったい何を作ってきたんだ？」

「失礼をば致しました。少々勿体振り過ぎましたわね。では参ります」

そう言うオルコットは満面の笑みを浮かべ、自分のバスケットを持って一夏の元へと歩み始める。その優雅な姿は周囲を圧倒していた。貴族、いやこれはもう女王と言つていいかもしれない。

「くっ」

その存在感に気圧されたのか、鈴が歯を軋ませる。

鈴とオルコット。同じく一夏を想えどその姿は実に対照的だ。庶民の鈴に対して上流階級たるオルコット。世が世なら非支配者と支配者の関係ですらある。

その上オルコットはぼつと出の成金などではない。伝統の重みを背負った筋金入りの貴族だ。それは今のこの姿が身を持って証明している。圧倒的なその存在感。これは個人の力だけで出せるような代物ではない。代々積み重ねてきた祖先の力がオルコットの体には纏われているのだ。

「セシリア」

「お待ちせ致しました一夏さん、さあどうぞ！」

そしてオルコットはバスケットを開けて中身を一夏に見せる。

すると、一夏の目が点になった。

「へ？」

「どうぞ、遠慮などなさらずに！」

「いや……え？」

どうしたのだろうか。生憎こちらからバスケットの中身は見えない。

一夏の表情は肩すかしを食らったような、意表を突かれたような感じだ。

やがて一夏は困惑した顔になり、俺の方を向いた。

俺も気になるので二人の側へと向かう。

「どうしたの一夏……え？」

横からバスケットの中身を覗き込んで、俺も一夏と全く同じ感覚に襲われた。

この感情を何と言っていていいか、確かに俺も分からない。

「何やってんのよ二人とも……サンドイッチ？」

見かねたのか鈴まで入って来た。近くにいた連中もわらわらと寄って来ている。

そう、オルコットのバスケットの中に入っていたのは、ぱつと見何の変哲もないサンドイッチだった。

「皆様方、何か？」

「いや、別に何かかってわけじゃなくて……」

そうだ、別に何か問題があるわけではない。

バスケットの中にサンドイッチ。それ自体はごく普通のことでおかしいことは何もない。

だがなんだろうこの感じは。

俺だけでなく、オルコットの周囲には疑問符が満ち溢れる。

「一夏さん？」

「いや、別に悪いとかそういうことじゃないんだけど、サンドイッチなのかと思つて」

「それがどうかしましたか？」

一夏が曖昧な言葉を口にするも、オルコット本人は何も気にしていない様子だ。

はつきり言つて拍子抜けである。あれだけでもつたいぶつて出て来たのに、蓋を開けてみればただのサンドイッチでは。

いや待て、これはもしかして味に秘密があるのかもしれない。

「そうか、なるほど。これは見た目で判断をするなどということなんだな。そうなんだろセシリア？」

「はい？ ええまあ、口に入れるものですから味も大事だと思いますわ」

「うん……うん？」

一夏が俺と同じ思考に至るも、オルコットの返事は要領を得ない。特に何かを意識して仕掛けてきたと言うことではないのか。

いや、さつきから俺達とオルコットとの間にはどこか噛み合わないさ、意識のズレを感じてしまう。

ただの思い過ごしなのだろうか。それとも致命的な何かがあるのか。

「いいから一夏はさっさと食べなさいよ。それで分かるでしょ?」

「確かにそうだった。そういう話だよな。セシリア、一つもうぞ?」

「どうぞ、ご賞味くださいませ!」

鈴の言う通りだ。謎に対する回答はすぐ目の前にある。

一夏は目の前のバスケットに手を伸ばし、中にあるサンドイッチを一つ取り出した。

うん、見た目はごく普通のサンドイッチだ。

「じゃあ、いただきます」

「……」

さすがにオルコットもこの瞬間は息を呑んで見守る。

一夏は手に持ったサンドイッチをそのまま口の中に入れた。

と、いきなり一夏の目が大きく見開かれる。擬音でも聞こえてきそうな勢いだ。

「一夏?」

「一夏さん?」

だが一夏は周囲の声には何も答えず、あぐらをかいてそのままサンドイッチの残りを食べ始めた。

目を閉じて、黙々と食べ続けている。がつつくという感じでもなく、ゆつくりと。

どういうことだろう。単純にそのまま言葉も出ないということなのだろうか。

やがて一夏は手にしたサンドイッチの全てを飲み込んで井の中に収めてしまった。

「一夏さん、どうでしたか?」

「一夏?」

一夏は目を瞑ったままで、問いに答えることはない。

場に新たな疑問符が生じてしまった。一夏の態度の意味は何なのか。

いや、やはりその答えは目の前にあるのだろうか。

「これはもう食べてみるしかないか。オルコットさん、ひとつちようだい」

「は、はい……」

俺はバスケットに手を伸ばし、中のサンドイッチを取り出した。

やはり見た目では特に何の特徴もないサンドイッチである。

「じゃあいただきます、ぶっ！」

「ええっ!？」

「うわ！」

「吐いた！」

今俺の口の中にもものすごい衝撃が走った。

舌が食べることを拒否した。脳ではない。脳がうまいまずいを判断する前に、舌がこれは人間の食するものではないと全力で否定した。

にがいとかまずいとかそういう次元の話ではない。今俺は命の危機さえ感じてしまった。遅れて冷や汗がどつと湧いてくる。いったい俺の身に何があったのだろう。気がつけば俺は膝を地につけていた。

「甲斐田さん！」

目の前にいるオルコットが自分のハンカチを差し出してくる。

受け取って顔の汗を拭く。自分の中の衝撃は次第に収まっていき、呼吸も落ち着いてくる。

大きく息を吐いて、ようやく俺を自分を取り戻した。

「か、甲斐田さん。い、一体何が……?」

オルコットがおそろおそろ聞いてくる。つまりこれは意図したことではないのか。

そんなこと言われてもオルコットが知らないのに俺に分かるわけないだろう。

「このバカ！」

「あいたっ！」

頭にもものすごい衝撃と痛みが響き渡る。

反射的に声のした方を見上げるとそれは鈴だった。怒っている。

その上拳まで握っている。さつきはパーだったのに、今はグーだ。痛みも倍以上違う。

「鈴、一体何を……」

鈴は俺の問いかけに答えない。黙ったまま右手をあっち向けホイをするかのように俺の左側へと動かす。俺もその動きに合わせて左を向くと、鈴の言わんとすることが理解できた。

そこにはハミルトンがいる。俺の吐き出したサンドイッチの直撃を受けて、涙目になったハミルトンがいる。

「あ……」

「あんたねえ、よりによって女の子に向かって吐くとか何考えてるの！ いい大人が酔っ払ってやりましたじゃないのよ！ とつさのことにしてもわざわざ横向くとかそれはないでしょー！」

「いや、それは……」

確かに一瞬の出来事ではある。

想像だがおそらく俺には目の前にいた一夏とオルコットのことが念頭にあつて、とつさに横を向いてしまったのかもしれない。

正直言つて衝撃が強過ぎて自分が何をしたかも覚えていない。正解は密集しているので飛び散るのを覚悟で下に向かって吐くのだらうか。だが俺は吐く方向の訓練などしたこともないので、とつさに正しい行動を行うなどとても無理な話である。

とはいえ、やってしまったことは隠しようもない事実だ。

「あの、ハミルトンさん、ごめん……」

「う、ううん。気にしないで……」

サンドイッチの欠片が当たっただけなので、物理的なダメージなどないに等しいだろう。

もちろん問題は精神的なダメージだ。

どう見てもお互い気にしないで流せるような空気ではない。やってしまったのはこちらなのだし、これはもうさつきと全面降伏するが吉である。

「えっと、染みになっちゃうから早く拭いた方がいいと思うんだけど、手伝おうか？」

「ええっ!? いや大丈夫! 自分でやれるから!」

「じゃあ……せめて手洗い場まで付き添った方がいいかな?」

「それも大丈夫! 歩けないわけじゃないし!」

「それなら……他に何かやってほしいことはある? 何でもするけど?」

「ん? 今なんでもするって言ったわね?」

しまった。鈴に言葉尻を取られてしまった。

どうせハミルトンなら大丈夫だと断ってくるだろうと思って口にしていたのに、実際そうだったのに、横に余計なのがいるのを失念していた。

勝ち誇った顔の鈴がそのまま俺とハミルトンの間に入ってくる。

「智希の言う通りさっさと拭いた方がいいのは事実だから、急いで手洗い場まで行くわよ。お詫びについてはまた改めてってことで」

「待った。だからそれは僕が」

「女の子の体に触るとかそれもうご褒美じゃない。そんなに心配しなくてもまた改めて言わせてもらおうわよ」

「いやいや、言うのはハミルトンさんであって鈴じゃないよね?」

「そんなの当たり前じゃない。ええ、あたしじゃなくてティナよ」

「だからさ、これは僕とハミルトンさんの問題であって、鈴は関係ないよね? 鈴が横から口を出して嫌がらせで僕にはできないようなことを要求されても困るんだけど」

「ああ、確かにティナが智希にはとても無理なことを言い出したら智希も困るわね。じゃあ安心しなさい。あたしがティナにアドバイスをして智希でもやれるような範囲で収めてあげるから」

「何それ!？」

なんとということだ。鈴のくせにどうしてそういう返しができる。自分のことには碌に頭が動かないくせに、他人のこととなるとなぜ途端に頭も口も回るのか。

しかも今できることという話をしていたのに、お詫びという方向に話をすり替えている。

鈴に何があった。何がそこまで鈴の脳をフル回転させている。

いや、今まさにあったではないか。一夏に抱きしめてもらうとうう、鈴の人生でベスト三にも入るような出来事が。それだ。今の鈴は全身が活力に満ち溢れているのだ。

まったく、一夏も余計なことをしてくれる。

そう思つて一夏のいる方を向くと、一夏は床の上であぐらをかいていて、まだ目を瞑つたままだった。さつきから一夏はいったい何がしたいのか。

「一夏、もういい加減目を開けたら？」

「そういえばずっと静かね」

「一夏さん？」

だが一夏の反応がない。どうしたのだろうか。

「ほら一夏、まだオルコットさんへの感想が残ってるでしょ？ さつさと引導を渡してあげなよ」

「な、何ですのその言い方は!？」

「あーもうそっちは勝手にやってて。テイナごめん、行くわよ」

しかしそれでも一夏は動かない。何を意地になっているのだろう。みんなに放置されたのがそんなに悔しいのか。

こちらはそれどころではなかったというのに。

「ちよつと待て皆。先程から一夏の様子がおかしい」

「篠ノ之さん？」

「かれこれ数分ではあるが、一夏が全く動かない」

会話に全く加わっていないかった篠ノ之さんが声を出す。

「こういう時でさえ一夏再優先なのか。」

「ねえ、こういうこと言うのは何なんだけどさ」

「シャルル？ 何か気になることでも？」

「一夏つて食べたんだよね？」

「うん、さつきからみんなの作ったのを食べてたよね。もう全員分行つたのかな？」

「そうじゃなくて、その、あれを……」

デュノアが気まずそうに視線を動かす。その先には、オルコットのバスケットがあつた。

「あ」

「つまり……」

「一夏は……」

「皆様どうかしましたか？」

誰もが気づいた。ただ一人元凶を残して。

そう、俺が即座に吐いたサンドイッチを、一夏は全部食べてしまっていたのだ。

「一夏！」

「一夏！ しつかりしろ！」

「これって気を失ってるんじゃない！」

「一夏さんが!? なぜですの!?!」

「オルコットさんはちよつと黙ってて」

「保健室保健室！」

「違う違う！ ここは医務室だから！」

「じゃあ医務室まで運ぶの!?!」

「この状況なら先生呼んでくるべきでしょ！」

場は一転、騒然となる。

「急いで呼んでくる」

「篠ノ之さんお願い」

「あ、織斑君はそのまま寝かせて。完全に飲み込んでたし詰まってるわけじゃないと思う」

「一応気道確保はしておくね」

「え？ え？」

「いいからオルコットさんは座ってて」

俺も含めて、事態に気づいたクラスメイト達はもう大騒ぎだ。

数分とはいえ一夏が失神したまま放置など大失態にも程がある。

「このバカはもう！ なんで全部食べたのよ！」

「何であろうとわざわざ作ってもらったものを吐くなんてできなかつたんだらうね」

「それにも限度があるでしょ！」

それが織斑一夏であるのも事実だが、鈴の言う通り限度はあるべき

だ。

一夏が即吐いてくれれば俺も口にはなかつたはずなのに、ある意味俺にまでとぼつちりが飛んできている。

そんな一夏はこの後すぐ目を覚まし、何事もなかつたかのように脳
天気には笑っていた。

そして駆けてきた医務の先生に雷を落とされることになるのはごく当然の話である。

18. フランスとドイツの専用機

二年の階の廊下は全く空気が違う。

三年は俺に対して優しい。歩いていると普通に声をかけてくるし、時には某写真の取り引きを求めてきたり某組織への勧誘をしてくるものもある。クラスメイト連中のように俺をけなしたりしないので、正直なところ一番居心地が良かったりもする。

特に指揮科の先輩達は確実に俺に目をつけ、いやかかっているようで、いろいろと学園の話聞かせてくれる。このIS学園は非常に親切な場所で、ただ口を開けて待つているだけでは情報など何も落ちてこない。だからこちらから主体的に動く必要があるのだが、情報収集に三年指揮科の教室はうってつけである。

学園生活のあれこれに始まって、IS知識、行事、体談。予め知っておけるのははつきり言って大きなアドバンテージだ。もちろん経験してみるとまた違って見えるのかもしれないが、事前に準備を行う上では何も知らないのでは天と地ほどに違う。

もつとも、先輩方は俺の質問の仕方が悪いと相応の返事しか返してくれないし、しばしば答えを言わず俺に考えさせようとするのが面倒ではあるけれど。

一方、一年はエリアによって大分状況が変わってくる。

鈴やハミルトンのいる二組は相変わらず俺に対して関心を持っていない。変わったことといえば一夏に興味を示すようになったくらいか。ただしそれはリーグマッチ優勝者という点で関心があるくらいで、せいぜいアリーナで訓練する一夏の姿を見ている程度だ。普段は寄ってくることさえない。

三組は概ね俺に対して好意的なままである。クラス代表のベツティによって統制が取れているので、トップダウンな形だがある意味一組より集団として纏まっていると言えるかもしれない。

そしてあのラウラ・ボーデヴィツヒがここに転入してきている。

四組はあまり良く分からない。クラス代表を更識妹に押し付けておきながら持ち上げることもなく、今も完全放置のままという意味不明な状態が続いている。

更識妹本人がコミュニケーションを取ろうとしないというのもあるのだろうが、奴は仮にも日本の代表候補生という肩書を持っている。多少は近づくと奴がいてもいいと思うのだが、少数のグループに分かれて固まったままなそうさ。ここは二組と並んでクラスの体をなしていない。

五組はリーグマッチ終了後クーデターが起こって、当代表だった佐藤がその座を追いやられた。リーグマッチ全敗の責任を追求されて辞任とかこの政治組織だと思わざるをえない。

追われた佐藤も個人戦を通じて奪い返す気満々だし、外に対しては一組三組と対立状態。はつきり言って一年の火薬庫状態だ。

俺にとっても新代表の杉山が男子否定路線なので、できることなら近づきたくない場所である。

とまあ上も下もいろいろだが、真ん中の二年は基本接触が少ないのでどうにも掴みづらい。

はつきり言えるのは、今すれ違う二年生達の目にあるのは俺に対する警戒心であるということだろう。

「はいどうぞ。砂糖は一つでいい？ ミルクもいる？」

「砂糖だけで大丈夫です」

黛先輩は空気を讀んだ。

二年のエリアは俺にとって居心地の悪い場所だろうと認識していたようで、話があると訪れた俺をそのままの中庭まで連れ出した。

このコーヒーはわざわざ新聞部の部員に持ってこさせたようだ。別に自販機ので十分だと思っただが。

「ごめんね。部室にお菓子までは常備してなくて」

「いや、さすがにそこまでしてもらわなくても」

黛先輩が顔の前で両手を合わせる。そういえば姉も似たような動作をしていた気がする。

「いえいえ、甲斐田君に失礼があつてはいけませんから」

「それお姉さんに言われたんですか？」

「だつてすごい怖い声で言うんだもん。あの姉がビビるつて相当なことだよ。甲斐田君はいつたい何をしたの？」

「何をしたと言う程でも……というか聞いてないんですか？」

ビビるはさすがに言い過ぎだと思ふが、俺の機嫌を損ねたくないという気持ちは分らないでもない。

雑誌記者黛姉にとつて、俺は是が非でも取材をしたい一夏に繋がる貴重な存在である。

もし万一俺を怒らせて一夏へあることないこと言われてしまった日には首を括りたくなるだろう。

「負けたとしか教えてくれなかった。私じゃ相手にもならないから絶対に変な気は起こすなつて」

「負けたつて別に勝負とかしてないです。というかそれつて黛先輩が伝えた僕の噂を真に受けてるんじゃないですか？ 噂が変な方向に膨らんでるのは先輩も知つてますよね？」

「説教部屋の件はほんとごめん！」

「ああ、あれですか。僕が説教部屋に呼び出されるも一歩も引かずに織斑先生と激論を交わしたつて。しかもそれを二度三度つて。どう考えてもおかしいです」

「それは……甲斐田君なら絶対やつたに違いないという謎の説得力があつて……」

「ないですよ一ミリも。説教部屋に呼ばれた生徒がどうなるかは上級生の人ならよく知つてる話じゃないんですか？」

実際鈴はトラウマレベルにまでダメージを受けていた。

「待つて。ちよつと待つて。確かに普通はそうなんだけど、うん、普通そんなことないのは分かつてる。でも甲斐田君つてこのIS学園で唯一織斑先生に楯突いてる、じゃなかった立ち向かつてる生徒なの。だから説教部屋の件はきつとその一環だろうつて……」

「そういう話ですか……」

はつきり言うつと、入学時から俺は織斑先生に対して負け続けてい

た。

敵はまるで最初から俺の手の内を知っているかのように、先読みして対応してくる。

これは明らかに大人だからというような問題ではない。他の先生達は話をしていてもそこまでやりにくい相手だとは思わないのだ。

やはり相性が最悪だということなのだろう。

俺の手法など全て事前に経験済みで、対処方法まで心得ているという程の状態だ。旗色が悪いとかそういう次元の話ですらない。

もしかしたら俺のような人間が側にいたので全部分かるというように不運な事情があったりするのだろうか。

「ま、まあ全部誤解だって分かったんだし、人の噂もねー!」

「三年生は爆笑するし、二年生の廊下ではじろじろ睨まれるし、なんか僕の立場がおかしなことになっていつてる気がします」

「あー、二年はちよつと負のスパイラルに入っちゃったかもしれない。どうもこういうことが笑い話になってないんだよね」

「最初から笑い話じゃないです」

しかしここ数週間で二年生の視線が厳しくなっているのは感じる。

リーグマッチ直後はもう少し興味的な目もあったのだが、会見のあたりから胡散臭いもののように見られている気がする。少し前だが食堂で二年らしき生徒達が俺の近くで邪魔だとばかりに机を叩いていたし、影に隠れていたものが顕在化しつつあるのかもしれない。

「この学園の空気なら絶対そういうのは面白がるはずなんだけどなあ」

「それはそれでどうかと思います」

「やっぱり織斑先生にたっちゃんという大きな存在があるのよ」

「だから生徒会長はいじめじゃないですって」

「でも本人がまた騙されたとか今回もやられたとか悔しがってるのを見ると、二年としてはどうして同情する方向に行っちゃうの」

「生徒会長っていつもあんな感じじゃないんですか?」

「全然違うわよ。いつもはもつとしっかりしてとても頼りになるくらいなんだけど、甲斐田君の前に出ると途端に余裕なくなつて力入り

過ぎなのが不思議。もしかしたらそれが素なのかもしれないけど、いつもかっこいい姿を見てきた周りとしてはね」

つまり俺は二年生の間で何様だこいつ状態になっっているわけだ。

元々男という存在を快く見ていない生徒もいるだろうし、意外と根は深いのかもしれない。

「話がずれました。とりあえずそっちはいいです。いやよくはないですけどすぐにどうこうできる話でもないので。それで話というのは実はお願いがあります。無理なら無理で全然構わないんですが」「なるほど、つまり私がそれを自主的に実行すればいいんだね?」

「なんでそうなるんですか」

「だって、今の私には甲斐田君にお願いをされたら断る選択肢はないんだよ? 姉にも言われてるし説教部屋の件もあるし」

黛先輩は両手を頬に当てて眉毛をへの字に曲げる。

しかしそれはいくらなんでもビビリ過ぎだ。姉妹揃って何をやっているのか。

そもそも無理にでも聞いてもらわなければならぬ事態なら最初からそういう風に話を持っていくわけで、今回は多少なりとも下手に出たつもりだったのだが。

いや、会話の最初で責める方向に行ってしまったのが失敗だったかもしれない。

「というか、実行も何も先輩にできないことだったらどうするんですか?」

「甲斐田君が言ってくるんだからきつと私にできるギリギリを狙ってくるんですよ?」

「先輩の限界を見極めるとかいったい僕は何者ですか。もういいや、ええと、お願いというのは一人新聞部で面倒を見ていただきたい人がいます」

「待って! それだけで監視をつけられるとか甲斐田君はどれだけ厳しいのよ!」

「どんだけ僕に後ろめたいんですか」

もしかして俺の噂を一番信じているのはこの人ではないだろうか。

俺の話題に詳しい割には直接話をする機会が少ないので、勝手に脳内で俺の虚像を増幅させているような気がする。

「甲斐田君落ち着いて。いくらなんでもそれはやり過ぎだわ。私達を信頼できないのは分かる。でもね、そういうことをして行ったらきりがないの。行き着く先は本当に恐怖政治よ」

「先輩はさつきから怖がり過ぎです。今の僕には先輩に対して含むものは何もないです。純粹に困っているから先輩の力を借りたいんです」

「今の甲斐田君……はいなんでもありません。うん、えっと、それでその人はどういう人なの？ 面倒見るとして私に何を求めているの？」

ようやく本題にまでたどり着くことができた。

できる限り円滑なコミュニケーションを、と思つて雑談には応じるようにしてきたが、この分ではさつきと言いたいことを言つてしまつた方がかえつて話がスムーズに進むのではないだろうか。

「うちのクラスに夜竹さんと言う人がいまして、映像とか写真とか得意なんですけどその人を新聞部で面倒見てもらえないかと思ひまして」

「まさか人員の斡旋をしてくるとは思わなかつた」

「その人写真撮るのはいいんですけど、一夏の写真を撮つて売りさばいたりしてるんですよ。そういうことされると困るし、かと言つて趣味を禁止するのは可哀想なのでそちらで役立ててもらえないかなあ」と

「なるほど……でもそれは甲斐田君もいや何でもありませんよ。ん？」

「ちよつと待つて。今夜竹さんつて言つた？」

「言いました。知り合ひでした？」

すると黛先輩が思い出したかのように手を叩いた。

「これは何かあつたか。」

「その子つて前に私が食堂で甲斐田君と話してた時に引きずられてきた子だよな？」

「そういえばそんなことありましたね」

「実は私その後夜竹さんを勧誘してたんだよ。自前で機材を持つてる

レベルだなんて欲しいってもんじゃないから」

「なるほど。ということは断られたんですか？」

「うん。どこかに属するんじゃないかって自由気ままにやりたいんだ的な理由で。だから聞きたいんだけど、それはその夜竹さんの意思？」

「違います」

それは罰である。

自由気ままにしているから余計なことをするのであって、それならどこかに縛ってしまえばいいのだ。

「違うんだ……あ、商売敵だからいやなんでもないです」

「駄目ですか？」

「いや、さすがに本人の意思を無視しては……」

「もうかなり目に余る行動なんですよ。知り合いにちよつと売るくらいならまだしも、クラスを超えて広くやり始めてて、完全に商売化するんじゃないかってくらいで」

「でもねえ……うーん……」

確かに夜竹さん本人を飛び越えてやる話ではない。普通は。

「先輩、僕思うんですけど、一夏や僕のクラスメイトが新聞部にいたらすごく便利だとは思いませんか？ 情報の齟齬がなくなるし、意思の疎通をしやすくなるし、相互理解が深まるんじゃないかと思うんですよ」

「それは……いや……」

よし、即座に断らなかつた。思いの外ぐらついでにしてくれている。

ならば押す。

「それに夜竹さん本人も全然役に立たないってわけじゃないですし。先輩も勧誘をしたのなら分かると思いますけど、僕もやめさせるのは可哀想だと思うくらいうまいですよ、写真撮るの。リーグマツチの映像撮ってもらってたんですけど、こちらのあやふやな意図をきちんと汲み取って撮ってくれて、作戦を考える上ではすごく助かりました。そういう優れた能力を学園に知られたら禁止されてしまうようなつまらない行為で無駄遣いをしてしまうのはもったいないと思いませんか？」

「それは、まあ……」

黛先輩自身にとつてもいると嬉しい存在ではあるのだ。そして夜竹さんのためにもなる。

外堀はどんどん埋まって行っている。というわけでもう一押し。

「僕も夜竹さんにそういう行為はやめて欲しいって言ってるんですけど、全然聞いてくれないんですよ。この前も他のクラスの人に一夏の写真を売ろうとしてみましたし、このまま続けて行ったら先生達に見つかってしまうのは時間の問題です。もしそうなったら機材を取り上げられてしまうかもしれないし、それは夜竹さんにとつても不幸なことだと思っんです」

「そ、そうね。それは確かにその通りね」

「でも今なら止められるんです。僕の手だけじゃ無理かもしれませんが、先輩や新聞部の方々のお力を借りることができれば」

「……」

まだ葛藤している。意外と意思が強かった。

それなら解放してあげよう。責任という名の重圧から。

「じゃあ先輩、今からその夜竹さんのところに行きませんか？ 僕から夜竹さんに新聞部に入ってもらえないかってお願いをします。それで断られるようならこの件は諦めますから」

「な、なるほど……」

「夜竹さんも当事者だしバカじゃないから、意味は分かると思うんです。その上で僕らの気持ち伝わって受けてくれるのであれば、それは何も問題ないと思いませんか？」

「そ、そうね、その通りね」

「それならさっそく行きましょう」

言うや俺は立ち上がり、紙コップの中身を飲み干す。

黛先輩も慌てて立ち上がった。

道中ここから先はもう考えることをさせない。姉の話一夏の話俺の話、いくらでも話題はある。先輩にとって気がついたら終わっていたでいいのだ。俺にそそのかされてしまったでいいのだ。

我関せずの姿勢を貫けず関わってしまった以上、もう次善の策を取

るしかない。終わってから気が変わって放逐しても何もいいことはない。夜竹さん本人も納得しているのだから、きちんと更生させれば何も問題ない、でいいのだ。

その後夜竹さんのところに行つて話をしたところ、それだけでいいのかと逆に喜ばれてしまった。むしろがんばりますとなぜかやる気まで見せている。

もう少し絶望感を出してくれるかと思っていたので拍子抜けである。この数日かなり元気がなかったのだがいったいどんな想像をしていたのだろう。そもそもきちんと理解をしているかさえ怪しい。

黛先輩は後ろめたさもあつてか心の底からほっとしたようで、作り笑顔から本物の笑顔になつてよろしくと挨拶をしていた。

誰も困つたりしないのだからきつとこれがいい解決方法だったのだ、と俺は思うことにして、仲良くカメラトークを始めた二人の姿を眺めた。

放課後のアリーナには大勢の見物客が詰めかけていた。

それはそうだろう。何しろ第三の男性IS操縦士がIS学園に来て初めて訓練をしているのだから。

見渡して、俺の保護観察者二人の元へ向かう。

「甲斐田君こつちよ。用事ってかなり遅かったじゃない」

「何かトラブルでもありましたか？」

「別に何事もなく終わったよ。それでどう？」

「デュノア君のこと？ それはもちろんかっこいい、じゃなくてさすがは専用機持ちという動きね」

「あまり才能という言葉は使いたくないのですが、ISに触つて二ヶ月程度でここまでとはある意味織斑君よりもその単語を感じています」

「へえ」

それは素直にすごいと言わざるをえない。

一夏は入学から毎日のように訓練を続けてここまで来た。

その結果穴も多いとはいえ、初心者揃いの一年生の中では頭一つ抜け出るくらいに成長している。

それに匹敵するような動きとはどの程度のものだろうか。

「今は……一夏がクラスの誰かの相手をしてるのか」

「今日は岸原さんと国津さんね。今やってるのは岸原さんかな。ついさっきまではデュノア君もやってたんだけど」

「休憩中ですね。あちらで囲まれているのがデュノア君です」

四十院さんに示された方向には笑顔のデュノアが整備班連中に囲まれている。

と言つてもせいぜい数名だが、一夏に興味のない連中はあつさりデュノアに食いついていた。

今のところ一夏から鞍替えするようなのはいいないようだ。

「休憩に入つてももう長いの?」

「ついさっきだからもう少しかかるんじゃない?」

「なるほど」

「甲斐田さん、どちらへ?」

「シャルルと話をしてくる」

「えっ!?!」

鷹月さんに驚かれた。

もしかして逃げるとでも思われたのだろうか。

「別に真っ直ぐ行くよ」

「ではお供させていただけますね」

「信用ないんだなあ」

「あ、当たり前よ。甲斐田君のことだから一時間後になるかもしれないし。うん、仕方ないからついて行ってあげるわよ」

なんだか鷹月さんが押し付けがましい。

四十院さんを見ると特に何も気にしていない様子だ。気のせいかな。

「デュノア君と何を話すの?」

「シャルルも疲れ気味だったからね。体調とか大丈夫かなって」

「そうなの?」

「まだ慣れてなくて眠りが浅いみたい。朝見るとあんまり回復してないなあって顔なんだよ」

「そうなんだ。それは心配」

「枕が変わって眠れないようなことなのでしようか」

「どうかそれ大丈夫なの？ 織斑君は気づいてないわけ？」

「気づいていないわけじゃないけど、眠るのは本人だからね。一夏も気は遣ってるみたいだけどシャルルが遠慮深いというか、共同生活には全然慣れてない感じ」

俺も一夏もそのあたりは完全に慣れてしまっているが、何もかも初めのデユノアにはやはり勝手が違うのだろう。

聞いてくれば俺も一夏も教えてやれるのだが、どうもデユノアは人に頼るよりもまず自分でやろうとする性格らしい。

別にそんなところで気を張らなくてもいいのに、根が真面目なのだろう。今日だってようやくISが届いたのだからとアリーナにまでやって来ていた。

「やあ智希！」

IS姿のデユノアはこちらを見つけると笑顔で手を振ってきた。

ぱっと見だが疲れているという感じではなさそうだ。

「休憩中？」

「うん、別に全然大丈夫なんだけど、一夏が休めって」

「何かあったの？」

「そうじゃなくて、今は疲れる前に休んでおくべきだって言うんだよ。智希もそうだけど一夏も少し心配性じゃない？」

「シャルルが朝元気な顔して起きてくれれば言わなくて済むんだけどね」

「あはは、それはごめん」

「ちよつとデユノア君、本当に大丈夫なの？ 織斑君の言う通り無理することないのよ？」

鷹月さんが割って入ってきた。委員長気質にでも引っかかったか。

「君は鷹月さんだよな？ 全然大丈夫。そうでなきやこうやってISなんて動かせないから」

「眠れないのなら医務の先生に相談してみたら？ 睡眠導入剤は出してくれると思うわよ？」

「そうだね、日常生活に支障が出るようならそうしてみるよ。ありがとう鷹月さん」

「べ、別にこれくらいお礼言われるようなことじゃないから」

「おや珍しい。鷹月さんが照れている。」

「そう言えば鷹月さんは人の世話を焼く割に感謝を伝えられることが少ないかもしれない。」

「整備班に感謝の気持ちを伝えるのは効果的だったし、今度俺もやってみよう。もしかしたら鷹月さんの俺への態度が和らいでくれるかもしれない。」

「それがシャルルの専用機？」

「うん、見ての通りラファールだつて分かるよね？」

「と言つても専用機だけあつてかなり改造されてるね。ここにある訓練機と何が違うの？」

「そうだね……やっぱり一番の違いは汎用性を捨てて射撃に寄せてるところかな」

「へー、汎用性ってラファールの代名詞だった気がするけど」

「うーん、捨てるは言い過ぎか。射撃関連ならなんでもこいにしたつて感じかな？」

「え、どういうこと？」

「甲斐田くん甲斐田くん、この機体すごいよ。バススロットの中に銃関連の武装が二十個もしまつてあるんだつて」

「デユノアを囲んでいた一人である鏡さんが横から口を出してきた。」

「武装を二十個。さすがにそれは多過ぎではないだろうか。」

「それ意味あるの？ とてもいっぺんには使えないでしょ？」

「だから、デユノア君はそのたくさんの武装を高速で切り替えて使うのよ。さつき見てたらぱっぱぱ出てきて、みんなもうびっくり！」

「高速で切り替え？」

「うん、それが僕の特技なんだ。だから機体もそれに合わせてこうい

う形になつてゐるわけ」

「なるほど」

通常、バススロットにしまつてある武装を取り出すには数秒の間がかかる。これは競技において重大な問題で、はつきり言つてその時間は大きなタイムロスであり隙となる。

熟練者ならまた話は別だろうが、学生レベルでは致命的ともいえる次元だ。だから少人数の競技で武装切り替えを活用するのは相当に難しい。実際リーグマッチでベツティは使い切れず鈴にその隙を突かれて敗北してしまつてゐる。集団戦になつてようやく使い道が出てくる程度だろうか。

もちろん武装が剣一本しかない我々が織斑一夏には全く関係のない話である。

「実際どういうものかはこの後見せるよ。すごく便利なのは分かつてもらえると思う」

「ん？ 特技？」

「そうだよ」

「それつてもしかして、ワンオフ・アビリティ？」

それなら納得だ。

俺が専用機込みでISを動かせるように、デュノアも覚醒済みなのだろう。

やはりデュノアは未覚醒な一夏と違ってこちら側なのだ。

「え？」

「甲斐田君、何言つてるの？」

「いくらなんでもワンオフつて、言葉の意味分かつてる？」

「あれ？」

だが俺の目の前にあるのはクラスメイト連中の失笑と、困つた顔で笑うデュノアの姿だつた。

この空気は知つてゐる。授業中一夏が的外れなことを口にして笑われる時のものだ。

「そんな大層なものじゃないよ。言葉通りで得意なだけだから」

「ワンオフねえ……個人で使えるのは世界に十数人しかいないんだつ

け？」

「なんか必殺技に目覚めるようなものなんですよ？」

「必ずしも攻撃技術ということではないそうですが」

「それにしてもワンオフもらえてそれが高速切り替えだったら泣くわね」

「というか甲斐田くん、それじゃ織斑君のこと馬鹿にできないよ」

またどさくさ紛れに鏡さんが俺のことをディスプレイしてきた。

この女は隙あらば攻撃してくるので面倒臭い。

とはいえ俺の発言は余りにも的が外れていたようだ。

「ごめんごめん、もしかしたらそうじゃないのかなと思っただけ」

「さすがにそれはないよ」

「鷹月さんと四十院さんに聞いたんだけど、シャルルってISの操縦技術がすごいそうじゃない。ISを動かせるようになってたった二ヶ月でそこまでできるようになるだなんて、そういう何か特別なことでもあったのかなと思って」

だから俺は別の方向に踏み込んだ。

ワンオフや特技など別にどうでもいい。問題は俺と同じような出来事があったかどうかだ。

ISを動かせるようになる過程での出来事が。

「うーん、特に思い当たることはないかな」

「そっか。残念」

「甲斐田くん、恥ずかしいのは分かるけどちよつとしつこいよ」

「ごまかすには苦しいわね」

「甲斐田さん、その程度で甲斐田さんの評価が下がるわけではありませんので大丈夫ですよ」

外野は何か言っているが、十分だ。

今一瞬デユノアの素が出た。すぐ取り戻して笑ってみせたが、ほんの一瞬だけ、デユノアは固まった。

やはり何かはあったのだ。

もちろん今すぐ語ってもらえるようなことではないのは分かっている。だがお互いに同じような経験をしていることはこれで伝わっ

ただろう。

いずれ機会があれば、どちらからともなく口にするようになるのは間違いない。

「そういえばさつきからなんか騒がしくない？」

と、鏡さんがあたりを見回すが、確かにアリーナは騒然としていた。俺達の会話が聞こえていたはずもないし、別に聞かれても困るようなことも話していないのだが。

「甲斐田君！」

声に反応してその方向を見ると、ラファールに乗った岸原さんがこつちに来るのが分かった。

一夏に何かあったのか。

「あれを！」

岸原さんの示す方向を見て、納得した。

アリーナの中を一夏に向かって真っ直ぐと、自分のISに乗ったラウラ・ボーデヴィツヒが歩いていった。

その漆黒のISは俺にとって不快な色だった。

「やあ織斑一夏君、私のことは覚えてるか？」

「三組の転入生だろ。悪いけど名前は覚えてない」

「そうか、では改めて名乗ろう。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「ボーデヴィツヒね。それで？」

「何かまだ説明が必要か？」

「話しかけてきたからには用事があるんだろ。さつきと言えよ」

「これは嫌われたものだな。少しは会話を楽しみたかったのだが」

「あんだだけガン見されたら気味悪いつて普通は思うだろ」

一夏にしては珍しく、塩対応である。

本人も言っている通り、初対面の印象がよくなかったのは間違いない。

だがそれだけなら今までも普通にいた。

きつと一夏は今何とも言えない感覚を味わっているのだろう。例

えば目の前に自分の姉の空気があるような。

「それは改めて謝罪をするが本当に失礼なことをした。申し訳ない。君に対して確かに教官と同じ遺伝子を持っていると感じてしまい、気づけばその有様だった」

「お前も千冬姉が神なわけね。別に好きにすりやいいけど俺は千冬姉じゃないんだからな」

「それはその通りだ。確かに君は教官ではない」

「そうだな。話は終わりか？」

「いやいやこれからだ。どうだろう、今から私と手合わせをしてもらえないだろうか」

まあ、ISに乗ってやってきたのだからそれしかない。

そして当然一夏も乗り気ではない。

「お前の相手をしてる暇はねえな」

「何を言っている。君は今訓練をしているのだろう？」

「ああそうだ。だからお前を相手にしてる時間なんてねえんだよ」

「これはおかしなことを。初心者を相手にするよりは自分より上位の人間を相手にする方が何倍も有益なはずだ」

「ふーん、お前は俺よりも上だって言いたいわけね。で？」

「それが理解できておきながらその先が分からないとは君も不思議な人間だな。簡単な話だ。初心者などより優先すべきはこの私であるというだけのことだ」

「何言ってるんだこいつ？」

一夏にその論理ではとても無理だ。

何しろ一夏は自分のためではなくクラスメイト達のためにこうやって訓練に付き合っているのだから。

リーグマツチのお礼だと毎日早朝から張り切っているくらいなので、ボーデヴィツヒの論理は一夏にとって論外である。

「本当に分からないのか？ 分からない振りをしているだけではないのか？」

「だから、俺にとって何より優先すべきなのはクラスのみんなであつて、お前のようなどうでもいい奴じゃないんだよ。それに俺よりも上

の人間なんていくらでもいるし、自分の訓練ならその人達とやればい
いからお前なんて必要ない」

「これまた珍しい。一夏が頭を使っている。」

「それはつまり本気で苛立っているということでもある。」

「なるほど、よく分かった。つまり君は怖気づいているのだな」

「はっ」

「そうだろう？ 私に打ちのめされて地べたに這いつくばるのが怖い
からそうやって言い訳を重ねて逃げようとしている」

「なんだと？」

「あ、これはまずい。」

「苛つき度全開の一夏にシンプルな煽りなど、着火させるには最良の
条件だ。」

「やれやれ、ウォーミングアップ程度で本気を出すつもりなどなかつ
たのだがな。気の緩んだ私に怯えてしまう程度ではただの姉の七光
なだけだったか」

「言ったな」

「はいはいそこまで！ 二人とも落ち着いて！」

一触即発の二人の間に入ったのは俺ではなかった。デュノアだ。

いや、俺も間に入ろうとしていた。だがISに乗っている分、デュ
ノアの方が早かったのだ。

声を出そうとしたらデュノアが俺の前を進んでいて、タイミングを
逃してしまった。

「はつきり言ってこれは、嫌な予感がする。」

「シャルル」

「どうした？ 同じ境遇の人間同士、傷の舐め合いにでも来たのか？」

「ボーデヴィツヒさんはウォーミングアップしたいんだよね？ ちよ
うどよかった。僕も体を動かしたいところだったんだ。相手をして
もらえないかな？」

「ほう」

「おいシャルル！」

「予感的中。」

これは想定していた中で俺にとって非常に嬉しくない展開だ。

「一夏はみんなと休憩しておいて。こんなルーキー程度なら肩慣らしにちょうどいいし、終わったらまたみんなの手伝いをするから」

「ふっ、アンテイクに乗っていると脳まで古くなってしまおうような。であればさっさとスクラップにしてしまった方が新装できそう
だ」

「あ、智希。ルーキーとかアンテイクとかどういう意味だ？」

「後で聞いてみればいいと思うよ」

こういうカツコつけた言い回しも含めて、まさにヨーロッパだ。机の上で握手して机の下で蹴り合う。逆もまた然り。

本当は近寄らないのが一番なのだろう。

「いや、それはどうでもいいからやめさせてくれよ」

「二人とも乗り気だからいいんじゃない？ やらせときなよ」

「何言ってるんだお前！」

「あ、一夏は二人の邪魔だから下がって。始められないから」

「おい智希！」

俺は連中に背を向けて元いた場所へと歩き始める。

本当はこのまま帰ってしまいたい。

だが二人の動きを見ることができるのでからそれは我慢すべきだ。

「分かったよ！ でもシャルルが危なそうなら問答無用で入るからな
！」

「安心して一夏。時間ももったいないしさっさと終わらせるよ」

「好きな時に入ってきて来い。まとめて相手をしてやる」

そして一夏も離れ、フランスVSドイツ、専用機同士の俺にとって
どうでもいい争いが始まった。

とは言うものの、どちらも全く本気ではない。

ジャブの応酬、もしくは小手調べと言ったところか。

まずデュノアは昨日の夜自分の専用機がIS学園に届いたばかり
である。

デユノアの専用機は本人とは別に一旦デユノア社の日本支社に送られていて、と言つてもこの近所だそうだが、整備点検が行われた上でここまで届けられていた。

だから今日は機体の動作確認が主目的になつてはいるはずであり、模擬戦のような大掛かりな動きをする公的な予定はなかっただろう。

実際喧嘩をふっかけておきながらデユノアは機能確認、武装の試し打ちという感じで、次々に武装を切り替えてはボーデヴィツヒに向かって発射していた。

一方のドイツ人も似たようなものか。

昨日までボーデヴィツヒがアリーナに現れたというような話は聞いていない。自主訓練でもしていれば話題にならないわけがないし、一夏達も毎日この場所にいたのだ。訓練場所はいくつかあるのかち合わなかつた可能性もなくはないが、それでも新たな専用機が動いているとなれば話の種になる。現五組代表と違って俺はクラスに引きこもっているわけではないので、そんな目新しい話題があれば上級生同級生どこからか聞こえてくるはずだ。

そんなボーデヴィツヒの動きは回避の練習という感じで、雨あられと飛んでくるデユノアの銃撃を空中で旋回しながら避け続けている。

特に攻撃を試みるような動作もなく、全くの無表情で飛び続けている。今はお前の番だとも言うように、まるでデユノアに武装のお披露目をさせているかのように。

「すごい……」

「何が？」

鷹月さんが見惚れたように視線を送っている。その先にあるのはデユノアだ。

「何がすごいってあの攻撃の多彩さよ。しかもそれらを近距離から遠距離まで澱みなく切り替えて、全く無駄にしていけない。次はどれにしようじゃなくて完全に武装全てを把握して自分のものにしていくよ。ただ切り替えるのが速いんじゃないかって、高速で適切に切り替えられるのよ」

「まさしくこれこそが技術ですね。ただ使えるではなく使いこなす。

言うだけなら簡単ですが、それ相応の訓練をしなければ普通は身に付けられないものです。ちなみにこれは織斑君の一番弱い部分ですね」「一夏の?」

「はい。織斑君の基礎能力はご承知のように非常に高いのですが、それを十全に発揮することができていません。それは自分の能力をきちんと理解して使えていないからです。ですがどうしても感覚先行になってしまふ織斑君では体に覚えさせるしかなく、お世辞にも効率はよくないですね」

「それでも相当よくはなつただけだなあ」

今考えればリーグマツチの時は、本番なら一夏はきつとやってくれるだろう、というかなり危うい期待で一夏を送り出していた。

実際にやってくれたしうまく行つたのでよかつたのだが、可能性だけなら全試合何もできずに終わってしまうことも十分あり得たのだ。

「同じ男性IS操縦者でも見れば見るほど織斑君とは対照的ね。感覚型の織斑君に対して理論型のデュノア君。そしてどちらも自分の方向に飛び抜けている」

「なるほど」

「あつ、甲斐田さんは甲斐田さんでISとはまた違った別の方向に飛び抜けていますから」

「別に何も言つてないよ」

頼んでもいないフォローをご苦労様だが、鷹月さんの意見はおもしろい。

デュノアは一夏並みの才能を別方向で見せているというわけだ。

一夏もリーグマツチで優勝したが、それはあくまで同世代での話になる。先輩達からすればたった二ヶ月でここまで、という感覚であり、同じ土俵に並べてみれば及ぶべくもない。

一夏が期待されているのは才能という名の成長速度であり、未来である。そしてデュノアにも同等の期待ができるという話だ。

つまり、俺にとっては一夏のISにおけるパートナーとしてこれ以上ない存在になれるということなのだ。

男というのもまた都合がいい。今の篠ノ之さんのスタイルではそ

の場所を勤めることができない。他の人間では帯嚢の痛し痒し。いずれどうにかしなければと考えていたところだった。

「ねえ、いつまで逃げ回るの？ いい加減飽きて来たんだけど」

「もういいのか？」

「何かを頼んだ覚えはないよ」

「そうか。観客もいることだし気を利かせてやったのだがな。その程度も分からないような輩に気遣いなど無駄だったか」

「何もできなかつたの間違いじゃないの？」

「ふん。一分後に同じ言葉が吐けるかな？」

ようやくボーデヴィツヒの攻撃ターンだ。

さあ最新のVTシステムは俺に何を見せてくれるのか。

「まずは景気づけだ」

ボーデヴィツヒはその右肩に巨大な銃を、それを銃と言っているのかわからないが出す。そしてデユノアめがけてぶっ放した。

「シャルル！」

その威力は銃の見た目通り広範囲に渡り、デユノアの周辺を巻き込んで弾ける。

一夏はデユノアに何かあったら即飛び出す勢いだ。じりじりと前に進んで俺達からも距離がある。

「その程度でっ！」

「当たり前だ」

回避して空中に飛んだデユノアめがけてボーデヴィツヒが突っ込んでくる。

ボーデヴィツヒは突撃しながら機体から、先に刃のついた紐、いやワイヤーのようなものをいくつも出す。まさかこんなものがボーデヴィツヒの攻撃手段なのか。

一方デユノアは即座に反応し、機関銃を出して弾幕を張る。だが威力が足りなかったようだ。ボーデヴィツヒの装甲を貫けずボーデヴィツヒはそのまま突っ込んでくる。

そして刃のついたワイヤーが伸び、デユノアに襲いかかった。

「気持ち悪いもの出して来るね！」

デユノアはそのままの姿勢で後ろに飛び、即座に武装を切り替えて大きめの銃を出す。そして器用にワイヤーの刃を連続で撃つてその向かう方向を逸らして四散させた。

ボーデヴィツヒに向かつての道が開かれる。

「これでっー！」

そのままデユノアは真つ直ぐ特攻する。

シールド状になっていた左腕が開き、太さのある銛のような鉄の棒が現れる。

ブレードにしては丸いなど思ったがもしかしてあれを打ち出すのだろうか。

「ふんー！」

だがボーデヴィツヒも全く動じていない。

弾き飛ばされたワイヤーを再び制御してその矛先をデユノアに向ける。一方で両手にブレード、いや手刀くらいの長さの小剣を出し、構えてデユノアに突撃する。

デユノアはそのまま左腕から射出するのかと思いきや、右手の銃を乱射した。ボーデヴィツヒはデユノアの左を警戒していたのか回避しきれない。何発かもらう。しかしボーデヴィツヒの勢いは止まらず、デユノアに肉薄する。そしてワイヤーの刃がデユノアに迫る。

「もらったー！」

一歩早かったのはデユノアだった。左腕から銛が射出される。

ボーデヴィツヒもそれは予期していたのだろう、体をそらしてギリギリでの回避を試みる。見るからに連射できるものではないし躲せば勝ちだ。そして銛はボーデヴィツヒを貫くことなく通り過ぎていく。

デユノアの体が揺らいでいる。反動と言うよりはどうかやらワイヤーの刃が先に届いていたようだ。デユノアは狙った通りに撃てなかったか。

それから二人が態勢を整えるのはほぼ同時だった。だが取った行動は違う。デユノアは回避、ボーデヴィツヒは攻撃である。そしてそれは肉薄されていたデユノアに不利だった。

デユノアは全てを回避しきれずワイヤーの刃をいくつかもらう。だが高威力の銃を至近距離で当てることによってボーデヴィツヒの勢いを削ぎ、そのまま脱出した。

「シャルル！」

今にも一夏が飛び出しそうだ。

潮時か。

「一夏！ 来ないで！」

「ほらさっさと入って来い。このままでは友人がやられてしまうぞ？」

「言われなくても！」

「あーちよつと待った。みんなもう十分でしょ？」

「智希!?!」

俺は制服姿という生身の体のまま場に入る。

ボーデヴィツヒもデユノアもここで俺が介入するのまでは想定していなかっただろう。

残念だが俺だつて大事な登場人物の一人なのだ。

「シャルルは体を動かせたり武装の確認は十分できたでしょ？ ボーデヴィツヒさんもウォーミングアップをしに来たのであればこれ以上やる必要ないんじゃない？」

「智希……?」

「ふん、雑魚は引っ込んでいろ」

デユノアは困惑し、ボーデヴィツヒは吐き捨てる。

だがISスーツさえ着ていない生身の体である俺がここにいる限り、再開はできない。そして強制的に排除するなどこの二人はその立場に絶対にできない。俺の身に何かあってはいけないのだ。二人とも感情的にやっているわけではないので、理性のブレーキがどうしてもかかる。

つまりここからは俺の時間だ。

「ねえ、ボーデヴィツヒさん、あなたにとって千冬さんは何？」

「いきなり何を言う」

「てつきり千冬さんみたいになりたいのかと思ってたけど、今見た限

りじゃ全然違うなと思って」

「だから何を言っている」

「ISに乗ってる時も乗ってない時も、この人は千冬さんになりたい人なんだろうなって感じだったのに、動き始めたら急に別人になっちゃったからさ、不思議に思ってる」

「何意味不明なことを言っている」

「ねえ一夏、一夏もそう思うよね？」

「俺？」

「一夏と話をした時は千冬さんみたいな空気を出そうとしてたのに、動き始めたらさっぱりそんな雰囲気はなくなったと思わない？」
「それは……確かに言われてみるとそうだな。ああ！ 智希お前よく分かったな。そうだよ、さっきのムズムズする感覚は千冬姉だよ！」
「なんだと!？」

VTシステムは織斑千冬の現役時代の動きを完全コピーしている。そしてそのプログラムは搭乗者を記録された織斑千冬のように動かすことさえある。搭乗者本人が知らないままに。

さすがにそれはISに搭乗してる時だけなので、さっきの俺の台詞は半分嘘である。

だがボーデヴィツヒがその動きをVTシステムに支配されていたのはデュノアと戦い始める前だけだった。デュノアとの茶番中ボーデヴィツヒはボーデヴィツヒ本人であって、エセ織斑千冬では全くなかったのだ。

これはどういうことか。俺にはすぐ分かった。ごく簡単な話で、矯正されたのだ。それをやったのは誰か。もちろん教官としてドイツでボーデヴィツヒを教えていた織斑千冬だ。

そんなことをした理由も何となく分かる。暴走させないために、VTシステムの支配から脱却させたのだろう。まだ完全ではないようだが動き始めれば支配の範囲外に出られるのだから、暴走の危険はほぼない。

と言ってもVTシステムの構造さえ知らないのにどうやってそんなことをしてのけるのか大いに疑問だが、まああの織斑千冬だ。篠ノ

之束に勝るとも劣らない規格外なのだし、凡人の俺が考えても仕方ないことなのだろう。

「智希、一夏……いったいどういうこと？」

「えっ？ えーと……すまん智希説明してくれ」

「はいはい。要するにボーデヴィツヒさんはよくいる千冬さんに憧れている人で、千冬さんみたいになりたいって思ってるし普段はそれなりにそれっぽくできてるんだけど、ISにおいてはまるでできてないってこと」

「やめろー」

グサグサと俺につつかれてボーデヴィツヒがたまらず声を荒げる。

別にこの説明はVTシステムとは関係ない。織斑千冬信者が言われたら嫌なことを羅列しただけだ。よくあるやつだと言われ真似すらできてないと笑われそれを言う相手は自分の神を名前呼び。俺が織斑千冬信者だったら絶対に殴りかかる。自重できているボーデヴィツヒの忍耐力は賞賛に値するだろう。

「あ、ごめんなさい。本人の前で言うことじゃなかった。口が過ぎました」

「お前今のはいくらなんでもひど過ぎだろ」

「でもまあ、よくあることだし。ほら、篠ノ之さんとかも全然できてないじゃない」

「ああ、確かに箒は千冬姉じゃなくてもはや箒以外の何者でもないな」
「ちよ、ちよつと二人とも……」

慌ててデュノアが俺達をたしなめようとするが、残念、もう遅い。話の腰は完全に砕かれた。こういう時空気を読まない一夏は大いに役に立ってくれる。

「えーと……」

「興が削がれた。失礼する」

案の定、デュノアは困ったように頭を掻き、ボーデヴィツヒはこの場はもうどうにもならないと諦めた。

そして俺は全神経を集中させる。

その結果、デユノアとボーデヴィツヒが一瞬目を合わせて合図したのを見逃すことなく目撃することができた。

19. タツグマツチのレギュレーション

最近、と言つてもまだ一週間も過ぎていないのだが、デュノアの周りに人が集まりつつある。

それ自体は特に不思議なことではない。体が小さいとはいえ中性的な顔立ちで、非常に整っている。よく日本人が憧れを覚える外国人とはこういう凛々しい顔立ちだろうか。ちよつと違うか。

だが何より愛想がすごくいい。きちんと相手の目を見て話を聞く。来る前に全員の名前を覚えていたようで、会話中に名前を呼びながら話をしている。夜竹さんの名前を間違えて覚えていたことさえあつた一夏どころではない。

受け答えがちゃんとしているのも大きな要因だろう。一夏は聞こうとすらすらに流すし、俺は聞いているふりをして流す。だから会話を弾ませてくれるデュノアといれば、男子と楽しく話ができるという身近に男がいなかった女子の願望がかなえられるのだ。

さすがはフランス人、女の望むものを心得ている。

「シャルルってすげえなあ。あんなにペラペラ話してて疲れたりしないんだろうか？俺も見習った方がいいのかな？」

「そういうのは人それぞれだ。自分の性質に合わないことをしても仕方あるまい」

「そうですね。一夏さんは一夏さんらしくあればいいのです」

この二人がそういうことを言うのはもちろん一夏に愛想よくされてしまつてはライバルが増えるからである。

元パイロット班連中から手痛い反撃を喰らつて、さすがに調子に乗っていた二人も目を覚ました。

以前のように元パイロット班連中の輪に戻っていたので、謝罪でもしたのか関係は修復されたのだろう。

今はもう二人とも終始一夏にべつたりするようないこともなく、篠ノ之さんは剣道部に行くようになったし、オルコットも四十院さん達と

お茶をするようになっていた。

「谷本さん、もうそれくらいで」

「ううう……しつづれいしましたあー!」

「甲斐田君、だからいい加減謝った方がいいですよ。ほら、本音さんは本気で怒ってます」

そして俺の周りにいるのはこれである。

政略結婚狙いに相手募集のための芸披露、あとは余計なお節介。色気の欠片もない。

向こうでは小学生が相変わらず頬を膨らませているし、わざわざ俺のところはまだ集まってくる人間など何かしら方向性を間違えたのばかりだ。クロエもこういうのを相手にしろとか無理が過ぎるのではないだろうか。いや、やはり話の種にしているだけであって、本気で言っているわけではないのだろう。

もっとも、弾や数馬ならこういう光景でも血の涙を流して羨ましがるとはだろうか。

「どうした智希？ 珍しく静かだけど？」

「僕普段そんなに騒がしい？」

「そう言われるといつもは周りが騒いでるか泣いてるかかって感じだな」

「まさに今の状態ではないか」

「それもそうか。でも智希、もういい加減布仏さんに謝れよ。いつまで意地張ってんだ」

「だからそれは」

「甲斐田さんにしては意外ですわね。口だけで済むのだからとすぐに謝ると思っていましたわ」

ナチュラルに失礼なオルコットだが、俺も痛いところを突かれて思わず顔をしかめてしまう。

その通りだ。口で済むのならなんということはない。勘の鋭い一夏だって騙せるのだから謝罪する空気を出すことなど大した手間でもない。

俺にとっての問題とはそれだけでは済まないことだ。ここまで

怒ってみせているということは、布仏さんの狙いは明確だ。だから嫌なのだ。

「みんな待って。そんなに責めたらかえってやりづくなるよ」

「シャルル？」

そんな中横から口を出したのはデユノアである。整備班連中と話をしていたはずなのに、聖徳太子か。

一夏の向こう、整備班女子に囲まれた中から優雅に立ち上がるその姿は貴公子。漫画ならバックに花でも咲き誇っていそうだ。意識してか無意識か、どちらにしても自然でさまになっているのは間違いない。

「きつとどちらにも言い分はあるんだろうけど、このままじゃ何も変わらないよね？　まずはお互いに、意地を張ったのを謝ることから始めたらどうかな？」

「おお」

「きゅきゅーん」

またバカな擬音を口に出したのがある。

だがそんなのはどうでもいい。問題はそういうことではないのだ。

「ダメ？　まだ立ち上がれない？」

「ならば立ち上がらせてみせましょう！」

「あ、ちよつと！」

俺の腕を引っ張って強引に立ち上がらせようとするのは谷本さんだ。今しがた泣きながら走り去ったはずなのに、いつの間にか戻ってきている。

しかし残念だったな。女子一人の力では俺を持ち上げるには足りないのだ。

「何……!?!　動かない!?!」

「だって相棒がないじゃない」

こういう時いつも谷本さんに反応して助けていたのは布仏さんである。だが今は向こうで膨れている。

「くっ……!」

「そ、それなら私が……」

と思っただらここで四十院さんが出てきた。相変わらずのおっかなびつくりへっぴり腰だ。

照れてないでもつとがんばれ四十院神楽。

「はいはい分かりました」

だがさすがにみつともない姿なので諦めて立ち上がった。顔を上げると視線の先には、布仏さんがそっぽを向きながら俺を待っている。

そしてデュノアが笑った。

「大丈夫。そういうのつてきちんと話をしたら全然大したことなかったりするんだ。すごく不安だろうけど杞憂だよ」

確かに、デュノアのこと杞憂であってくれろとすごく嬉しかった。

調べたが、はつきり言つてこのISS学園に転入制度などない。

これまでISS学園にいる外国籍の生徒は全て入試を突破した人間だった。

今年合格した一年生は五人。一組にイギリスのセシリア・オルコット、スペインのマリア・リアーデ。二組に中国の鳳鈴音とカナダのティナ・ハミルトン。そして三組にイタリアのアニータ・ベッティである。四組五組にはいない。

彼女達は一般の生徒とは別枠で、だがある意味一般の生徒以上の倍率の中で勝ち上がってきている。

まず受験資格からしてその国の中で一人。つまり最初に国家の推薦を受けなければならぬ。日本は元々ISS先進国として有名で、世界最初のISS教育機関であるISS学園の人気は高かった。その上一年からあの織斑千冬が教壇に立つということになり、激戦度はこれまでの比ではなく高まっている。

だからオルコットも鈴も、母国の選抜試験を勝ち抜いて来ている。嘘か本当か知らないが、鈴はライバル達を全員なぎ倒したと言っていた。

もうこの時点でおそらく一般の生徒よりも上である。だが彼女達が合格するにはもう一段階、今度は別の国のライバル達を上回らなければならぬ。そして応募国は五十以上。実に倍率十倍である。

今年はこれまでよりも定員が増やされたことにより、留学生の枠も増えると言われていたのだが、蓋を開けてみれば例年通りの五人だけだった。これはIS学園が建前はともかく事実上日本のための教育機関であり、国策上外国籍の人間を受け入れることに消極的なのだろう、とテレビでは言っていた。

ただ批判が相当に大きかったそうなので、来年どうなるかは分からない。

ともかく、そんな状況なのだからぼつと出の人間が転入生として簡単に入ってくるなど普通はありえない。それなら入試は何だったのかという話になってしまう。

しかし、ここに来て例外が二例も生まれてきていた。

一人はシャルル・デュノア。だがこれは誰もが納得できる。世界に四人しかいない男性IS操縦者の一人で、しかも残りのうち二人がIS学園にいる。安全上の問題など特別許可を出す理由はいくらでもあっただろう。ちなみに俺と一夏は形式上だけではあっても入学試験を受けており、制度的な問題はない。

だがラウラ・ボーデヴィツヒ。この例外は意味不明である。

たとえ専用機を持っていようと女だ。入試をすつ飛ばして転入しましたなど落ちた人間からすればとても許されることではないだろう。

一瞬本当は男である可能性を考えたがすぐ打ち消された。男ならそもそも隠す必要がない。それに男に偽装するのは調べればすぐ分かる話だし、IS学園のような軍隊並みの組織がまず見逃すはずがない。織斑先生に話のついでに聞くとボーデヴィツヒは女だと失笑された。やはりボーデヴィツヒは女生徒として入学してきている。

結局詳細までは教えてくれなかったものの、織斑先生は言外にボーデヴィツヒが特別であることを認めた。つまりボーデヴィツヒの入学には前例のない例外が認められるほどの理由がある。

もちろん、VTシステムだろう。そして主導したのは織斑千冬に違いない。少なくとも、ボーデヴィツヒを指名したのは織斑先生だ。

そしてどうしてこのタイミングでなのか。

「智希ー、シャンプーとか貸してくれ」

ノックもせずに一夏が入ってきた。思考が中断される。

鍵をかけていても合鍵を持っているので好き勝手出入りしてくる。

「まだ買ってないの？ 毎日毎日借りに来るのはおかしいと思わない？」

「いや、だから隣にあればあるしわざわざ買うのもどうかなく思ってる」

「あのさ、隣でももう別の部屋なんだから、いい加減自分の分くらい自分で用意しようよ。まさかシャルルも持ってないとは言わないよね？」

「シャルルは自分のを持つてるな」

「じゃあシャルルに借りればいいじゃない」

「それが貸してくれないんだよ。これは自分のだからって」

「まあ普通はそうか」

寮のような共同生活をしている人間は、次第に自分の物という感覚が薄れてくる。

共用で使った方が楽だし便利なので、使えるものはみんなで作おうになるのだ。これがエスカレートすると服などにまで至ったりする。「でもシャルルはちよつと潔癖なところがあるかもしれない。何かと自分のものは自分のものだって感じて」

「欧米人は個人主義だ的な話じゃない？ それに風呂にしてもあつちはシャワーだけで浴槽とかあんまりないんでしょ？」

「そうそう！ 湯船に浸かったりしないんだってな。ここの大浴場の話をしたらびっくりしてたぞ」

「それなら今度みんなが入ろうか。僕も結局まだ一回しか入れてないし」

「俺もそう言ったんだけどシャルルはあんまり乗り気じゃないんだよ。やっぱあの素晴らしさを知らないからなんだろうな」

「体験してみないと分からないことってあるよね。そういうのは連れ

て行かないと」

「そうだな。まあ一回入れれば病みつきになるだろ。よっと」

結論は出たはずなのに、なぜか一夏は俺のベッドに寝転がった。シャンプー一式を借りに來ただけではなかったのか。

「まだ話でもあるの？」

「別に」

「じゃあなんで寝転がってるわけ？」

「なんかさあ、シャルルがやたら気を遣うんだよ」

「何を？」

「智希のところに行つた方がいいんじゃないかって」

「それ監視的な意味？」

「違う違う。自分が割り込んだのが申し訳ないとかなんとか」

「それはまた気にし過ぎだなあ」

と言うものの、今の俺ではデュノアが自由に行動したいためではな
いかと思つてしまふ。

よし、今後は基本一夏を張り付けておくか。一夏は目立ち過ぎる
し、側にいると怪しい行動もできないだろう。

「つーわけでしばらく時間潰させてくれ」

「駄目駄目。それならなおのことさっさと戻る」

「はあ？　なんでだよ？」

「だつて言う通りにしてたらシャルルの余計な気遣いが正しいつてこ
とになつちやうじゃない。それじゃますます気を遣わせちやうよ」

「それは……そうかもな」

「ほらすぐシャンプーとか持つて戻る」

「いや、だからつてそんな急ぐことないだろ。シャルルは今風呂に
入つてるんだからさ」

「どうせシャワーなんだからすぐ終わるよ。今戻れば入れ替わりで
ちやうどいいんじゃない？」

「あいつ結構長いぞ。それにまだ入つてたのかと思つたらいつの間
か出てるし、なんかタイミングを読みづらいんだよ」

「それならなおのことシャルルが出た時に一夏が部屋にいないとね。」

はいさつさと行く」

「へいへい」

「あ、自分の部屋の鍵はちゃんと閉める」

「はいはい分かりました。シャルルも鍵かけろってうるさいんだよなあ……」

ブツブツ言いながら一夏はシャンプー一式の入ったたらいを持って出て行った。

「甲斐田、今度は何があったのだ？」

「また僕？」

「そ、そう言われましても、甲斐田さんなら事情を知っているのではと……」

この二人は何かあるとすぐ俺のところに来て。一夏については。

「僕が一夏に何かを吹き込んだって言いたいわけ？」

「そ、そういうことではない。だが一夏の様子がおかしいのは事実であって……」

「別に甲斐田さんが悪いということではないのです。急に一夏さんに余所余所しくされてはむしろわたくし達が何かをしてしまったのではないかと……」

普段であれば俺のせいだと決めつけて怒鳴り込んで来るところだろうが、ここのところ弱気になっているのかいつもの勢いが無い。

この前まで調子に乗っていた反動でもあるのだろう。

「と言われてもさ、僕も篠ノ之さん達と同じ立場なんだけど」

「だ、だから、何かを知っているのではないかと……」

「理由もなく登校をぐい一緒にさせてもらうことを拒否されるだなんて初めてです。重大な事件が起こってるのでは……」

「数分の距離を先に行ってくれて言われたのがそんなにショックなわけ？ そんなの今までもあったことじゃない」

もちろん二人の言いたいことは分かっているが、あえてこう言っ

問題を矮小化させる。

「というか勝手に火花を大きくされる方が面倒臭い。」

「違うー。いや、確かに事象としてはそうだ。だがな、あの一夏の態度はやはり普通ではないと思うのだ。何か問題を抱えているような、そして私達を巻き込まないようにしているような、そんな印象を受けてしまうのだ」

「わたくしはそこまでは申しませんが、わたくし達が一夏さんにご迷惑をおかけしているのであれば、一刻も早く謝罪をしまして原因を取り除かなければならないと……」

「二人ともちよつと深刻に捉え過ぎてない？ 一夏の一举一動にあたふたしてたらきりないし身が持たないよ？」

俺は何でもないことであるかのように、呆れた口調で言う。

二人の疑念を和らげることもそうだが、周囲に大したことはないと思わせるためだ。

そうしておけば多少一夏の態度がぎこちなくても、騒ぎにまではならないからだ。

「それはそうかもしれないが……」

「甲斐田さんがそうおっしゃるのでしたら……」

結局この二人はまだ一夏のことを信じきれていない。自分の感覚にすら不安を覚えている。

そしてこうやってすぐ俺に頼ってしまうがゆえに、自分で考えることを放棄してしまっているのだ。

水は低きに流れるではないが、二人揃って安直な道を求め過ぎだ。

鈴がいるときは全部鈴任せにしてあぐらをかくし、四月の頃の努力する姿勢はどこへ行ってしまったのか。

「そういえばこれは前にも思った気がする。その時は篠ノ之さんに対してだったが、ということはあれから一ヶ月経っても何も変わっていないということだ。」

リーグマツチで俺が出張りすぎたせいだろうか。

「うーす」

「みんなおはよう。今日は雨だねー」

一夏とデュノアが教室に入ってきた。

一夏はさつきよりはマシか。デュノアが笑顔で平然としているのは当然として。

「みんなさつきは悪かったな」

「戸締まりを意識するようになったのはいいことだと思うよ」

「ま、まあ智希にもシャルルにもあんだけ言われたらさー」

がんばれ一夏、もう少しだ。

なんとも言えない表情で見ている篠ノ之オルコットなど気にするな。

「デュノアくんおはよう！」

「やあ鏡さんおはよう。あれ、今日は髪がしっとり目なのは雨のせい？」

「あ、気づいてくれた!? 実は昨日言ってくれた通りシャンプーを変えてみて……」

横では実に面倒そうな会話が繰り広げられていた。

一生懸命な鏡さんの姿を見ているといつものお返しに鼻で笑ってやりたくなってしまう。

だが今は一夏のフォローが先決だ。

何しろ早くも一夏はデュノアから、何事かの秘密を打ち明けられたようなのだから。

「ほんとだ。一夏がちゃんと宿題してる」

「俺だってやるときはやるのさ」

「ほんとシャルルさまさままだなあ。僕の時はずぐ投げてたのに」

「だってお前は教えてくれないし」

「分かるものは教えてたつもりだけど？ それに僕だって自分の分があるし、一夏に付きつきりってわけにはいかないよ」

「それはそうだけどさあ」

俺と一夏が会話し始めると、篠ノ之さんとオルコットは諦めたようで自分の席へ戻って行った。

俺を間に挟まないと成立しない関係など健全ではない。どうしたらいいかは自分で考えろ。

一夏とくだらない話をしているうちに、織斑先生達が教室に入ってきた。

全員すぐさま会話を止めて席につく。

織斑先生が教壇に立ち、一瞥して欠席者がいないのを確認する。この人は出席簿を持ち歩いている割に口に出して出席を取ろうとしない。出席簿は魔剣としてしか意味を為していないのではないかと最近思うようになってきた。

「では今月末に行われるタッグマッチの詳細を配る」

「タッグマッチ？」

織斑先生は何も答えず無言で紙を配っていく。

手にした紙を見ると一年生は二対二のトーナメント戦だと書いてある。二対二だと。

「先生！」

「どうした鷹月？」

「タッグマッチって二学期の行事じゃなかったんですか!？」

こういう時反応の速い鷹月さんが手を上げて立ち上がる。

そうだ、去年の年間行事を調べた時はそうだった。六月は一対一であって、二対二になるのは二学期のはずだった。

「昨年まではな。今年から変更になった」

「変更になって……クラス代表の人達と違って私達はいきなり二対二なんですか？ どうしてそんな変更を」

「元々決まっていた話だ。入学人数が大幅に増えたことにより一対一の個人戦では一週間で終わらせることが厳しくなってしまった。運営の問題ではない。生徒達の体力上の問題だ」

「それなら日程を伸ばせば……」

「カリキュラム上不可能だ。長期休みを潰す検討もしたが今年は特殊事情もあってそれができない」

織斑先生はちらりと俺と一夏に視線をやる。

確かに夏休みはカナダ訪問があるし、おそらくそれだけでは済まないのだろう。別に俺達を不参加にすれば済む話ではない。例えば俺達の警備だなんだでIS学園の人員を取られてしまうというような

問題もある。

この前の外出の準備を見ていて、たったあれだけのイベントに数多くの人間が関わっていることを知った。

「とはいえお前達にとってそれは不利なことではない。むしろ大いに有利に働くだろう」

「どういう意味ですか？」

「二人になればできることが大幅に増えるという話だ」

「ああ。一足す一が三になるって言う……」

「昨年までは見るに耐えず益も少ない行事だった。学園側としても改善という意識で変更を決定している。お前達は余計なことを考えずただ目の前に全力を尽くせばいい」

何を無茶な、と一瞬思ったが、よく考えればこれは一夏にとってこの上なくありがたい変更だ。

特に一夏のような特化型は一人ではできることが少ない。レベルが低い状態で縛りプレイをしているようなもので、工夫を凝らすうにもそもそも選択肢がないのだ。それはリーグマッチで散々思い悩んだので実感として痛いほどよく分かる。

だが相方がいれば、一夏のその攻撃性能は飛躍的にその存在感を増す。例えば相方が防御・サポートを担当すれば一夏は攻撃だけに専念できるかもしれない。それは対戦相手にとって手のつけられない程の脅威だ。

「対戦の組み合わせは一週間前に発表する。であるから来週の金曜までに自分のパートナーを決めて申請しろ」

「えっ？」

俺はその事実思い当たり、思わず声が出る。

織斑先生も分かったようで、笑って俺を見下ろした。

「どうした甲斐田？」

「うちのクラス、奇数ですよ？」

「全体では偶数であるから問題ない。期日までにパートナーを決められない人間はこちらで勝手に決めるので心配するな」

「シード権は？」

「そのあたりは全部書いてあるから読め。一組の生徒は規定通り全員がシード権を持つ。それは他クラスの生徒が一組の生徒と組んだ場合にも適用される。もちろん、シード権を持つ生徒が増えるほどシードの価値は下がるがな」

ようやく俺の頭を働かせる時が来た。

まずは奇数となってしまっている一組をどうするか、そして一夏のパートナーを誰にするのかだ。

「ちよつとみんな聞いてー!」

授業が終わり織斑先生が出て行くやいなや、鷹月さんが教壇に立つて両手を付き、教室中に声を広げる。

よし、予想通りだ。もつとも出て行かないようなら焚き付けるつもりだったが。

「タッグマッチの件でみんなに話、いやお願いがあるの。強制するよ。うなことではないんだけど、話くらいは聞いてもらえないかしら」
「どうぞー」

相川さんが即座に反応する。と言っても聞きたくない人などいな。いだろうけれど。

「ありがとう。タッグマッチのパートナーなんだけど、できれば余つてしまう一人を除いて全員がこのクラスで組んでももらえないかってことなのよ。理由はもちろんあるわ。それがシード権を一番有効活用できるから」

「具体的にはですね」

と四十院さんが立ち上がって前へと出て行く。このへんの呼吸は一ヶ月一緒にいただけあってぴったりだ。まさか織斑先生の授業中にこつそり打ち合わせをしていたわけではないだろうが、組み合わせのことを考えれば同じ結論に到達するのはごく自然な話である。

「私達がクラス内のみで組むことによって、全員が二回戦まで免除になります。日程的にはおそらく月火水の三日間を観戦と準備に費やすことができるでしょう。組み合わせは事前に分かっていますし、対

戦相手の試合を二回も見ることができません。これは圧倒的なアドバンテージです」

「優勝まで五回、他のクラスは七回。連日試合を続けることになるし、疲労度を考えると相当に有利よ。優勝はともかく上を目指すことを考えると、乗らない理由はないんじゃないかしら」

「組み合わせ数の都合上初戦で一組同士の対戦が一つ出てきてしまうのですが、そこはどうしようもありません。と言っても他クラスの代表に当たる場合もありますし、このあたりはもうくじ運だと思いません」

メリットのみを示さないあたりは良心の現れだろうか。俺ならこのあたりは決まってから言うし聞かれない限り自分から口にするつもりもない。

まあどの道逃げられない部分がある。さてこの二人はどうするつもりか。

「でもさあ、一番大事なことがあるよね？」

「もちろんよ。曖昧になんてしないわ」

踏み込んだのは相川さんだった。この人は今やクラスで完全に中立の立ち位置にいるので、自由に発言ができる。度胸もあるし頭の回転も早いし本当に惜しい。何かの拍子に気が変わって一夏の愛人になりたいとか言ってくれたりしないものか。

「余ってしまう一人は誰なのかという話ですね？」

「そうそう。その人だけは他のクラスの人と組まないといけないわけじゃない。奇数なのは三組だから三組の人になるの？」

「いいえ、どのクラスの誰でも構いません。織斑先生が言っています。パートナーが決まらなかった生徒はこちらで勝手に決めると。別にわざわざ私達が配慮をする必要もないのです」

「それでいいんだ」

相川さんは一瞬俺を見ていた。

そう、鷹月さん達の意見を素直に解釈すると、余りの人間は俺一択になる。なぜなら俺は戦力として全く当てにならず、そもそも組む相手として不適當だからだ。そういうババは外に押し付けるに限る。

だがこの二人は俺の存在を意識しあえて配慮を見せている。余る人間の立場を外の人間を連れてくる権利を持つと置き換えたのだ。

俺ならそんな七面倒なことはせずババのままです。鷹月さんの立場なら全く別なところに対価を用意した上で説得するだろうか。

「はい。ですから例えば説得できるのであれば二組の凰さんを連れて来てもいいわけです」

「うわ、それは魅力的だ。まあさすがに説得は無理だろうけど」

「そうでしょうか？ シード権というメリットもありますし、無下にはされないかもしれませんよ？」

なるほど確かにそれはメリットだ。優勝を目指す代表クラスにとっては。

いや、これは使いようによつてはどうとでもなるか。

鷹月さん達でさえそれをメリットと捉えているのだから、言わんや他クラスをや。それなりに魅力的な取引材料として映るかもしれない。

本質を考えると、シード権をメリットと呼べるかどうかはかなり怪しいのだけれど。

「そういうわけだから、他クラスの人と組みたい人がいたらその人に声をかける前にこちらに教えてもらえないかしら？ 別に先着一人

だけなんて言わないわ。せめて奇数にしておきたいのよ。そうすればシード権の流出を最低限に抑えられるから」

「声をかけられちゃった場合はどうするの？」

「その時はできれば即答しないで欲しいけど……無理なら事後で構わないわ。トーナメントの山にいびつな部分が出てくると思うけど、そこはもう運ね」

鷹月さんはあっさり譲歩してしまった。これは甘過ぎではないだろうか。

俺からしたら運で片付けてしまうような問題ではない気がする。

自分の力でどうとでもなるのであれば、自分でどうにかすればいい。自分の手の及ばない事柄に対して運という単語を使うべきではないか。

この場合の運とは、おそらく織斑先生達が恣意的に決めるであろうトーナメントの組み合わせである。

「実際誰と組むかは今すぐ決められるようなものでもないし、少し時間をかけましょうか。来週の金曜日までまるまる二週間あるわけだし、クラスの中で調整していけばいいと思うのよ」

「相性や自分のスタイルがあると思います。誰と組めば一番効果的かをこれから考えて行きましょう」

二人は一夏とデュノアを見ながら言った。この後すぐに始まる一夏デュノア争奪戦を見据えての話なのだろう。

だが俺にはそんな悠長なという感想しか出てこない。

そんなものは今日中に決めてしまえばいい。別に本決まりでなくて仮でもいい。申請を止めておけばよくてあくまで対外的な話だ。最低でも枠組みを作って、クラス全員を囲い込んで外から余計な話だ。最下位を受けられないようにしておかなければならない。それにそうしておけばクラスの連中も外を見なくなる。奇数とかそういう問題ではない。

今すぐやるべきなのは余りの一人を確定させることで、そのためにまず俺の説得を始めるべきなのだ。俺がごねてこれは無理だとなった段階で次の可能性を考えればいい。

はつきり言って俺は条件をつけて受けるつもりだった。俺がISに興味を持っていないことはみんな知っているのだから、変に気を遣う必要など全くない。

説得を受ける立場なのだからと前に出るのを自重したのは失敗だったか。

いや、それとも単に俺が焦っているだけで、深刻に捉え過ぎなのだろうか。

鷹月さんと四十院さんの意図は分かる。

彼女達はクラス全方位に配慮をした。

別にそれ自体が間違っているわけではない。今回は全員が当事者であり、一夏のためというリーグマッチでフル活用されたこの大義名

分を使えない。悪いけど今回はババ引いて、など絶対に通らない。無理を言うからには最低でも相応の対価を必要とする。

配慮自体は必要なのだ。各自の要望を聞いた上で、調整しなければならぬ。

そのことは俺だつて考えていた。

問題は、指揮班の立ち位置をどこに置くかだ。

俺がさっきの授業中に考えていたのは、指揮班が全てを統括する形だ。

要望は聞く。仲の良い者同士で組みたいのであればそうすればいい。それ以外はそれぞれに自分がやりたいISでの戦闘スタイルを聞いて、それらをマッチングさせる。

あくまで誰と誰が組むかを考えるのはこちらである。言われた方が納得できるのであればそれで決め、できないのであれば理由を聞いて再度考える。複数候補を出して本人同士で直接話し合つて決めるもいい。

俺から見れば代表クラスが抜けているだけで、他はそこまで差もない。だから先に形を決めてそれに沿つてやらせればいい、と考えていた。

もちろんそうするのは一夏のパートナーを俺の好きなようにできるといふ利点があるからこそである。一夏は俺が説得するので問題ない。

一方で鷹月さん達が言ったのは、基本的に本人に全てをやらせる形だ。

自分がどうしたいかは自分で考える。組みたい相手との交渉も自分でやる。決まった後二人でどうやって行くかは二人で考えよう。そういう形だ。

だからこの場合指揮班は全体の状況を把握している程度で、特に何かをするわけではない。あくまでシード権の保持だけを目的としている緩い枠である。

しかしそれはある意味仕方のない部分もある。何しろ鷹月さんと四十院さんも当事者、自分のことも考えなければならぬのだ。

問題があれば間に入るし、困っている時は相談に乗る。だがわざわざごこちらから乗り込んでいくことまではしない。極論を言えばそうなる。

まあそんなにうまくいくはずは絶対にならない。一夏やデュノアの争奪戦が当事者間で解決できるわけがない。仲の良い者同士で組んだとして、戦闘スタイルやバランスをどうするか二人で突き詰められるのか。間違いなく不安になって相談しに来るに決まっている。

その方面に詳しく手慣れている、と目されている指揮班に面倒ごとが集まってくるのは火を見るよりも明らかだろう。

あるべき論でいけば鷹月さんたちが正しい。

自分のことなのだから自分でやれだ。

だがベストを尽くそうと思ったら人に聞くのも一つの手段だ。そんなの知るか突っぱねてもいいが、組む相手についてお願いをしてしまった以上できることなら邪険にはしたくないだろう。今後のこともある。

だから俺の場合はどうせ来るのなら最初から管理してやる。だ。

俺自身はタッグマッチにやる気もないのでちようどいい。さすがに鷹月さんたちは俺にやれとは言えないが、俺が自分からやると言えば乗る奴は乗るだろう、と思っていた。

結局鷹月さんと四十院さんは俺に対してまで配慮を見せた。これはその結果だ。

「なーんかみんな大変そうだな。ま、俺達には関係ない話だけどき」

「どうして関係ないわけ？」

「俺と智希は別に関係ないだろ。同じクラスでいいなら二人で組む分には何も問題ないわけだし」

「は？ 僕と一夏が組むとかまだ何も決まってないんだけど」

「え、なんでだよ？ 俺じゃ嫌なのか？」

「僕と一夏が組んだ場合、シャルルはどうなるの？」

「それは……あ」

一夏が慌てて振り返る。デュノアは何ともないという顔で笑っていた。

「そんなの気にしなくて全然大丈夫だよ、一夏」

「いや、でもだな……」

「か、甲斐田の言う通りだぞ！」

さあ始まった。

篠ノ之さんが逃すものかと立ち上がる。

「デュノアは転入したてなのだからな。いろいろと不安もあるだろう。ここは学園内の事情に詳しい甲斐田がデュノアの側に付いておくのが一番だ」

「俺じゃダメなのかよ？」

「い、一夏では少々不安が残るだろうし、そのな」

「なんだよそれ。じゃあ俺はどうなるんだ？」

「それは心配するな。私が面倒を見てやろう。だから何も問題は」

「おおありですわ！」

オルコット参戦。

篠ノ之さんの言葉を遮ってそのまま繋ぐあたり息もぴったりだ。

一夏の優勝のためにもできれば二人は組まないで欲しい。

「セシリア……！」

「危ないところでした。一夏さん、騙されてはいけませんわ。ですが大丈夫です。万事、このセシリア・オルコットにお任せくださいませ」

「そ、そうなのか。じゃあ俺はどうすれば……」

「それはもちろん、このわたたくしとペアになればいいのです！ そうすればわたたくしが全てを解決してみせますわ！」

「一夏を殺しかけたくせに何言ってるのよ！」

「あ、あなたは……！」

扉が開いて颯爽と鈴登場。

きつとタイミングを見計らっていたのだろう。

あ、鈴の後ろにハミルトンまでいる。これは俺にとつてよろしくない。

「ほんつとうに油断も隙もあったもんじゃないわね。でも全部聞かせてもらったわ。あたしがいい解決方法を教えてあげようじゃない。奇数で余るのならそれを一夏にすればいいのよ。一夏はあたしが引

き取ってあげるから。よかったわね一夏」

「あれ、それ俺は喜ぶとこなの？」

「り、鈴。それじゃあたしは……」

話を聞いていた割にはこちらも力技だ。それではハミルトンがこの場にいる意味がなくなってしまうのだがそれでいいのか。俺はいいが。

「ちよーつと待った！ さつきからデユノアさんと甲斐田くんが組む前提になってるけど、それは違うでしょ！ 親友なんだから普通に織斑くんと甲斐田くんが組めばいいじゃない！」

「そうだそうだ！」

「鏡さん……！ 親友なんだから普通はそうだよな！」

ここで伏兵鏡さん率いる整備班の突撃。

後方支援があるあたり組織化までされている。

一夏が親友とかいう単語に感動しているのは別にどうでもいい。

「だいたい甲斐田くんみたいな人間と組もうって人は織斑くん以外ないんだから、素直にそうしとけばいいのよ」

「そうだそうだ！」

「いや、それはいくらなんでも智希に対してひどいんじゃないかと……」

「織斑君の言う通りです。少なくとも私は……」

「あつ……」

「ニヤニヤ」

俺をデイスるのに余念がない鏡さんはもういいとして、相川さんがよろしくない。

わざわざ口にまで出して、四十院さんとハミルトンについて完全に勘づいている。自由人とはすなわち傍観者。視界が広ければ見えるものは見えるだろう。

「でもそうになったらシャルルは」

「それは問題ない。デユノアくんは私が面倒見るから平気平気」

「そうだそう……ナギそれは普通におかしくない？」

「いきなり素に戻るな田嶋！」

「つまり男子は全員バラければいいという話ですねー！ それはそうとして織斑君はそろそろ私と組むべきですよー！」

「リアーデさんは急に大声出さないでー！」

場は順調に混沌へと突き進んでいる。

鷹月さんはいったいどうやってこの場を収めるつもりなのだろうか。

「デュノア君、いつもこんな感じではあるんだけど、ここはデュノア君がはつきり言わないと収まらないと思うのよ」

「鷹月さん？ そうなのかな……？」

「ええ、間違いないわ。逆に言えばデュノア君が口にすればいいだけの話。だからビシッと言ってあげて」

「分かった。それで何て言えばいいの？」

「そんなの決まってるわ。僕のパートナーはもう決まってるって言えばいいのよ」

「決まってるの!? そ、それはいったい……？」

「とりあえず私って言うっておけば問題ないから。後は私が何とかする」

「なるほど……あれ？」

駄目だ。

まったく役に立ちそうもない。

どいつもこいつも自分のことしか考えていない。

「かいだー、これどうするの?」

「これはもうどうしようもないと思います」

「命じてくれればなんでもやりますよー！」

「谷本さん、なんでもとか言っちゃ絶対に駄目だ。そういうのはひどい目に遭うって相場が決まっているんだから」

「おお甲斐田君が私に構ってくれた……！」

「喜ぶところはそこじゃないなあ」

「かいだー」

布仏さんがまた俺の袖を引っ張る。

昨日ようやく機嫌が直ったのはいいが、その対価をこの後昼に支払

わなければならぬのは気が重い。

「確かにこのままだと織斑先生が戻ってきて大変なことになる」

「それは！……別にいいのではないでしょうか？　むしろそれで全てが収まるのでは？」

「何言ってるんだ。それじゃ僕達まで巻き込まれちゃうんだよ？　連帯責任という名の下に、あの出席簿が僕達の頭の上に振ってくるんだ」

「そんな！　私は何もしてないですよ！」

「そんな理屈が通じる人じゃない。事実僕は無実なのに何度もとばかりを受けているんだ。ちゃんと離れたところにいたのに」

あの屈辱の日々は決して忘れるものか。

場の中心にいたのならともかく、すっかり安全地帯まで退避していたのにあの悪魔はわざわざ俺のところに来てやってきて魔剣を振り下ろした。

どう考えても理不尽である。つまり戦闘が始まってしまってもはや言葉は何の役にも立たないのだ。

「それは逃げたところで罪はなくならないと言うことなのでは……」

「とにかく、このままにしておけないのは確かだ」

「どうするの？」

「やってみる」

俺は机の中からノートを取り出し、壇上に立つ。

そしてノートを思いきり教壇に叩きつけた。

「ひえっ！」

「甲斐田君!?!」

場が一瞬で静まり、一斉に視線がこちらへと向く。

俺は無言で右手のノートを顔の高さにまで上げ、それからノートを横から縦へと手首を返した。

一方で左手はまっすぐに横、すなわち教室の入り口を指し示す。

もうすぐ織斑先生がやってくるぞ、そして魔剣が振り下ろされるぞという警告である。

あえて言葉にしないのはその光景を想像させるためだ。もはや俺

達のDNAにまで刻み込まれたその恐怖、分からない人間などここにはいない。

「……！」

効果はてきめんだった。

俺の姿を見たクラスメイト達は脱兎のごとく、蜘蛛の子を散らすように自分の席へと戻って行く。鈴とハミルトンは後ろの扉から脱出していった。

ここまで効果絶大だとは、これなら今後も混乱を収める手段として十分に使えるかもしれない。

「虎の威を借りる解決手段はあまり感心しないな」

心臓が止まった。ここ最近止まり過ぎである。

見たくもないが意志の力で首を左に向けると、目に映るのは腕を組んで扉に寄りかかった織斑先生の姿だ。

なんとということか。クラスメイト連中は俺の意図を理解して反応したのではなく、俺の左手の先にある存在に脊髄反射しただけだったのだ。

だがここから俺はどうすればいい。二の句が出てこない。

「とはいえ一発で収めたことは評価しよう。今回に限り見逃してやるからさっさと席につけ。授業を始める」

「は、はい……」

九死に一生を得た俺は我ながら流れるような動きで自分の席へと戻る。あちらこちらから安堵のため息が漏れた。俺の無事にほっとしたからではない。おまけで纏めて自分達も見逃してもらえたからである。

しかし本当に危ないところだった。止めに入ったはずなのに全ての罪を引き受けてしまうところだった。

収めたという言い方からして、織斑先生は一瞬で状況を判断したということになる。さすがは織斑千冬というところか。やはり英雄は英雄……いや待て……違う、これは畏だ。

よく考えればこれはDVの構造と全く同じだ。普段は恐怖で支配し、時折優しい顔を見せてそのギャップで相手を依存させていく。ま

さに今俺がやられたことではないか。

なんという悪魔的な女だ。俺がどうしても言うことを聞かないから精神面で揺さぶりをかけてきたのだろう。危うく感謝してしまうところだった。

そのまま授業が始まり、俺は織斑千冬に対する警戒の意識を新たに
する。

それはまだ先かもしれないが、いつの日か織斑千冬の鼻をあかしてやるのだ。

なおその場は見逃されたクラスメイト連中だが、授業という名の休戦状態が終わった後再び抗争を始め、すぐさま引き返してきた織斑先生の手によって大虐殺の憂き目を見ることとなった。

20. 自分のやるべきこと

天候に左右される程度の気分というのもどうかと思うが、今現在の窓の外を見て明るくなれる奴などいないだろう。

「どうしたの智希？」

「雨降ってるなーと思って」

「ああ、これが日本の梅雨ってやつなんだね。すごい湿気」

「フランスは違うのか？」

「この時期ならむしろ乾いてるよ。天気もいいし、むしろ過ごしやすい時期かなあ」

「へえ、そういうもんか」

「あとちよつと暑いね。この湿気のせいもあるんだろうけど」

デユノアが暑そうにして手で扇ぐ。

確かに俺達と違って長袖のままではそろそろきつくなってくるかもしれない。

今年の五月は温度が高かったようで、一夏などはさつきと半袖に変えていた。

女連中は紫外線を気にしてか長袖なままなのが多いが、雨の日くらいはという感じで二の腕から先が見えているのもちらほらいる。

「オルコットさんは湿気よりも暑さって言った。雨が降っていて暑いだなんてここは熱帯なのかって。でもリアーデさんには天気は関係なさそう」

「あの人最近やけにうるさくないか？ いや、元々声は大きかったけどさ」

「あ、それは僕もびつくりした。声が一段階高いよね。なんというか……イヤホンで音楽を聞きながら喋ってる人みたいな感じ？」

「前からあんなものだしそのうち慣れるよ。いきなり話しかけられるとびつくりするのは変わらないだろうけど」

このあたりは相川さんが戦線離脱し、彼女が纏めていたパイロット

班の抑えが効かなくなってしまったからだ。

パイロット班はこの前一夏を白昼堂々誘拐していたし、わりと好き勝手行動するようになってきている。

ここにも失って初めて分かるありがたみがあった。

「それはそうと、まだ来ないの？ その、更識さんて人は？」

「布仏さんが連れてくるそうだけど来ないね」

「じゃあまだ一夏のお弁当はお預けかあ。ちなみにどういう人？」

「四組のクラス代表だな。性格は……智希？」

「僕はこの前通りすがりに挨拶をしたくらいだよ。一夏の方が知ってるんじゃないの？ 同じ倉持技研の管轄なんですよ？」

「そうなんだ」

「いや、と言っても話とかしたことないしなあ。俺と目が合うと逃げる人くらいしか分からない」

「そんなものなんだ」

そんなものどころではない。

一夏の記憶にインプットされているだけで俺からしたら驚きものだ。

リーグマッチの時に情報収集として聞いたのだが、春休み一夏が倉持技研にいた時よく顔を合わせたそうさ。だがその度に更識妹は逃げてしまい、あまりの挙動不審さに覚えていたとのことである。

今となっては博士からもらった専用化技術の存在を隠したかったのだろうと想像できるが、にしてもかえってそれで相手に印象づけてしまつては全く意味がない。

このあたりの抜けっぷりは姉妹だと思つてしまつた。

「後は……リーグマッチで試合したくらいかな？ まあぶっちゃけほとんど俺の負けなんだけど」

「ああ、もしかして打鉄の人？ 見た見た！」

「シャルルはリーグマッチの試合まで見てるの？ それはIS学園の公式映像で？」

「あつ、えつと、会社の人撮つててそれを見せてもらったんだ」

「やっぱりみんなそういうのやつてるんだね」

「なんで俺をわざとわざ？」

「それはもう一夏のことでは全世界が注目してるからね。何しろ世界初の男性操縦者なんだから！」

「うわー、そういうのはちよつと止めて欲しいな。別にISを動かせるだけで、他のみんなと違いがあるわけじゃないんだからさ」

「それは実際見なきゃ分からないよ。リーグマッチは初めての機会だからみんな気になって見に来たんだし」

「それもそうか。じゃあそれでみんな分かっただろうし、これっきりだといいな」

もちろんこれっきりで済まされるわけがない。

むしろあれで一夏の新たな価値を世界は知ったことだろう。

「待てよ。まさかタッグマッチも同じような感じなのか？」

「あはは、それはないから大丈夫だよ」

「だね」

「そうなのか智希？」

「一夏は自分も参加するんだからルールくらい読もうよ。タッグマッチは学年の行事だから、外部どころか上級生も見に来られない。来るとしてもせいぜい授業のない土曜の午後、日曜くらいかな。準決勝と決勝だけ」

「なんだ、そんなもんか」

と言うより基本的に学園の行事はほとんどそうだ。

IS学園は国の軍隊すら弾き返す要塞であり、そんな場所に簡単に他所の人間を入れるような真似などしない。

特に今年からは一夏や俺、果てはデュノアという特別な立場の人間がいるのだから。

「にしてもおせえ……あ、あれか」

「どれどれ？」

「ほら、あそこに布仏さんがいるだろ？」

「ああ」

いい加減待ちくたびれた中でやって来たのはいつもより増して嬉しそうな顔で手を振る布仏さん、そして、また面倒臭いことに巻き込

みやがって、という設定を作ってきたであろう顔の更識妹である。
やはり俺のアドバイスを素直に受け取ってくれるような真っ直ぐな人間ではなかった。

布仏さんは本当にしつこかった。

それは時折一夏が俺に対して見せる粘着性と同種のものである。
つまり、絶対に俺が悪いので意地でも謝らせてやるという実に迷惑な意気込みだ。

元々、俺は更識妹の感情を知っている。そして布仏さんもそのことを承知している。

それはリーグマツチの対更識妹戦において気づき、その場で布仏さんに確認をしたからだ。

更識妹の意識が内側に向いていて、それを布仏さんはなんとかしたい。ここまではおそらくお互いの共通認識になっていただろう。リーグマツチ後しばしば布仏さんは俺と更識妹を引き合わせようとしていたし、俺も知らないふりをしなかった。結局たまたま出くわすまで実現はしなかったが、それでも布仏さんが俺に期待をしていたのは事実だ。

ところが、出くわした際俺は布仏さんの期待とは完全に逆の発言をした。

姉同士の関係と妹同士の関係がイコールであるのを引き合いにした間接的な言い方ではあるが、そんな他人の言うことに従ってないで自分の好きなようにやればいいじゃないか、と姉越しに言ったのだ。

俺と同じ種類な人間というのもあって更識妹はそういう言い回しを理解できる。姉同士の関係を自分に置き換えて考えられる。それで奴はその場から逃げた。俺と話をさせようとする布仏さんの意思に反して、俺から逃げたいという自分の感情を優先させたのだ。姉と俺の力関係を知っていれば姉が撃退されるのは目に見えている。だからその前にだ。

おそらく、これは四人の関係では起こり得なかったことだろう。い

つもであれば布仏姉が間に入り仲裁して終わったに違いない。だからこそ布仏姉妹は気づいた。俺が余計なことをしやがったと。

結果布仏さんは怒り、姉も腹いせに俺の居場所を四十院さんに教えて売ったという顛末である。

とはいえ俺も最初はそんなの知ったことかという感情だったのが、後で思い返して気づいてしまった。

事の前に俺は話をしたいという布仏さんの提案を受け入れている。協力するという姿勢を見せてしまっていたのだ。

それでいながら突然の手のひら返し。持ち上げておきながら叩き落とすとは何事かと怒ってしまうのはむべなるかな。

結局は俺が行き当たりばったりな対応をしたしっぺ返しである。夜竹さんのことを全く笑えない。

当時俺は身の安全を目的としていたのであって、更識妹については二の次である。素直に生徒会長を撃退してそのまま二人と当たり障りなく会話して時間を潰せばよいのであって、わざわざあんな込み入ったことをする必要など全くもって、ない。

だがああいうことをしてしまった理由も分かっている。生徒会長だ。こここのところやり合っていないのもあって、俺はせっかくだからいつもとは違うことをしたいと考えてしまったのだ。

その結果があれば、あろうことか俺はあの場で一番警戒すべき更識妹と通じ合うという全く意味不明な行為を行ってしまったている。

更識妹も後で気づいて、俺が何のためにああいうことをしたのかと首をひねっているだろう。だが残念ながら完全にノリだ。深い意味など全く存在しない。

だからこそ全部有耶無耶にして何もなかったことにしたかったのだが、当然そうは問屋が卸さない。

なまじ更識妹と意思疎通ができることを見せてしまったが故に、ここは絶対に引かないと布仏さんに決意させてしまったのだ。

やはり姉妹だ。俺を追い込む狡猾さは持っている。とりあえず謝つとけ的な空気を作られてしまった時点で俺は終了である。

そして観念した俺はお詫びとして一緒に昼を食べるといふ約束を

取り付けられ、今日がやって来た。

「ごめんね〜」

「遅いよ布仏さーん。俺もう腹減って死にそうだったんだぜ」

「ごめんなさーい」

「一夏、そういう言い方は」

「いいんだよシャルル。こういう時は変にいいよとか言わない方がいいんだ。次は気をつけるよな、布仏さん？」

「うん！」

普段は空気を読まなくせにこの気の遣いようである。

だが別に一夏が急に改心したとかそういう話ではない。

一夏が完全に布仏さんを子供扱いしているという話だ。

これはチビ共に対する態度であって、同じ年の同級生に向けるべきものではない。確かにこここのところの布仏さんの態度は小学生じみていたが、それは俺を追い込む意図があつてのものである。素直な一夏はそのまま受け止めてしまったようだ。

とはいえこれが完全な演技ならまだ嘘臭くもあつたりするのだが、半分は天然でやっているだけに質が悪い。

自分の性質が子供っぽいことを半ば理解した上で受け入れている。

なぜなら、そうでなければこいつの側にはいられないから。

「ふふっ。あ、初めまして。シャルル・デユノアです。今週から転入生としてI S学園に来てます」

「転入……？」

「うん」

「それは……別にいいか」

「どうかしたの？」

「かんちゃん、名前名前」

「ああ……更識簪です……」

「よろしく。更識さん」

デユノアスマイル無効。

更識妹はデユノアに対して特に興味もないようだ。

転入に引つかかったのはそんな制度あったのかということだろう。

「じゃあ自己紹介も終わったところでさっさと食べようぜ」

「そうだね。ちなみに僕とシャルルの分も一夏作」

「おおー！ おりむー！」

「大丈夫だ。言われなくとも布仏さんが摘みたいだろうと思ってちよつと多めに作ってあるぜ」

「さすがだー！」

「けどどうせなら布仏さんののも食わせてくれよ。それ自分で作ったんだろ？」

「とりかえっこねー」

ようやく昼の時間となり俺達は弁当を広げる。

布仏さんと更識妹の弁当の中身は同じだ。布仏さん作だろう。

お、更識妹が一夏の弁当をチラ見した。

こちらに興味はあるようだ。

「これちよーだいー！」

「つて言いながらも取ってるじゃねえか。はいよ。もう一個」

「もう一個くれるの？」

「更識さんにも食べてもらわないといけないだろ？」

「え、私は……」

「おりむーかつこいいー！」

「ふっ、これくらいなんともないぜ」

意外と一夏もノリノリである。

だがこれはあれだ。施設で年少組を相手にするやり方だ。

一夏は布仏さんどころか更識妹まで同じカテゴリで括ってしまったている。

確かに今の更識妹のような斜に構えた系もいたが、それでいいのだろうかと正直思わざるをえない。

いくらなんでも高校生を小学生扱いは……いや、改めて見ると更識妹は鈴と大差なく育っていない。自分の姉が基準になっている一夏

では更識妹が子供に分類されてしまったか。隣に布仏さんもいるし。

「いただきますーすー！」

「更識さんもどうぞ。せっかく作ったんだしもつたいないからな」

「え……はい……」

「おいしー!」

「だろ? 昨日から仕込みしてたんだぜ。味が染み込んで口の中でこ
うぐわつとくるだろ?」

「くるくる!」

「すごい……なんて濃厚な……」

「シャルルは昨日味見とかしなかったの?」

「うん。食べた時の感動がなくなるからって一夏が食べさせてくれな
くて」

「そこまでしなくても」

「何言ってるんだ。こういうのは最初が肝心なんだよ。俺は初めて食べ
てもらおう人には可能な限りその時の最高な状態で食べて欲しいんだ」
「どういうことだわりなんだか」

一夏の料理を食べ慣れている俺からすれば、今日の味付けは濃
いなー、程度である。

とはいえ一夏曰く俺ほど食べさせがいのない人間はいないそう
なので、あまり自分の主張を声高に叫ぶつもりもないけれど。

しばらく賑やかに食事が進む。

基本的には布仏さんとデュノアが食べては驚き一夏が喜ぶの繰り
返しだ。

俺と更識妹は基本的に黙々と食べ続けている。

だが更識妹にとって一夏の料理は目を見張るものだったらしく、チ
ラチラと一夏の弁当を見ていた。

そしてさすがは一夏、料理のことかつ自分にとって子供のサインな
らば見逃さない。

いつもの無神経さはどこに行ったのかというレベルで気を利かせ
ていく。

ついでにこれはどうだこっちも食べてくれと、次々と更識妹に差し
出していった。

更識妹も最初は遠慮がちにおそるおそるだったのが、次第に受け取

るスピードが早くなっていく。

こんな面倒なイベントやってらんねえよロールプレイはどうしたと言いたい。というかお前は一夏を嫌っているのではなかったのか。

「ぶー！」

「智希お前さあ、せめてもう少し心のこもった言葉で言っつてやれよ」

「え？ だからおいしいって言ったじゃない」

「うーん、智希はさ、もう少し感情を込めて言っつた方がいいんじゃないかな？ きつとおいしいという気持ちはあるんだろうけど、それが表に出てきてないんだよ」

「なるほど……」

「いやいや、シャルルそれは違うぞ。こいつは何食つても一緒なんだ。いつ聞いてもおいしいしか言わねえし」

「失礼な」

おいしいものをおいしいと言っつているだけなのにこの扱いである。

別に専門家ではないし一夏のように料理を趣味にしているわけでもないのだから、そんな専門用語を要求すること自体が間違っつている。

それならまだデユノアの方が説得力がある。

「かいだーはもつと勉強しなさい！」

「僕？」

「そうだな、智希は学ぶべきだ」

「はあ？」

「あはは。でも智希は作っつてくれた人の気持ちを考えるところから始めたらどうか？ そうすればもう少し言葉にしようつて気になるかもしれないし」

「だからこそおいしいって言っつてるつもりなんだけどなあ」

「ダメだこりゃ」

「あはは……」

理不尽な集中砲火で実に腹立たしい。

と、ごまかすついでにふと更識妹を見ると当たり前のようにつ目をそらす。

だがそれ自体はどうでもいい。今こいつは俺を観察していた。尾行してみたり、この女はいったい何がしたいのか。

甲斐田の秘密を知ってしまったとでも思っているのだろうか、それでどうしたいのかが分からない。

それとも自分でも分かっているののだろうか。

「ごちそうさま〜！」

「もういいのか？ まだ残ってるぞ？」

「おりむーのもらいすぎてもうお腹いっぱい」

「そうか。まあ俺もけっこう作ったしな」

「じゃあこのへんでお開きにしようか」

広げていた弁当を畳む。

結局この場はただ弁当を食ただけで何事もなく終わった。終わらせた。

クラスメイト連中の轟々たる非難を浴びながらも一夏とデユノアを引っ張り出したのだ。もし更識妹が何かを企んでいたとしても何もできないように。

「じゃあ本音……私はこれで……」

「うん！ かんちゃんありがとう！」

「あー更識さん、また機会あったら食べてくれよな？」

「ええ、機会があれば、ぜひとも……」

「更識さんまたね！」

よしこれで社交辞令も終わって……ぜひとも？

ああそうか、更識妹には次の機会があつていいわけだ。

大義名分付きで堂々と俺を観察できる。布仏さんどうのではなく、自分自身の好奇心としての話だ。

「じゃあ僕らも戻ることにはしようか」

「あつ、かいだー。ちよつといい？」

「いいけど何？」

「えーつと……」

「どうしたんだ布仏さん？」

「一夏、先に行つてようか。話があるのは智希みただし」

「そうか？　じゃあ先に教室に戻ってるぞ」

「でゆっちーありがとう！」

デュノアはそれには答えず笑顔で手を振って出て行った。

こういう風に一夏の側で気を回してくれるとかなりいいかもしれない。

「かいだー、それでね」

「うん」

さて布仏さんは俺に何を聞きたいのか。

「今度のタッグマッチなんだけど、私かんちゃんと一緒に組んだらダメかな？」

なるほど、そういう相談なわけだ。

自分にとってどうかではなく、更識妹にとって。

結論から言えば駄目である。

なぜなら優勝候補の一人である更識妹に楽をさせてしまうから。

更識妹が布仏さんと組むと、シード権が発生してしまう。

つまり一夏と同条件になってしまうので、対戦した時に勝負が厳しくなってしまうのだ。

奇襲したとはいえリーグマッチで更識妹は完全に一夏を上回っていた。だからまともに戦った場合勝ちを計算するところではない。

更識妹本人もリベンジに燃えて無駄に意気込んでくるだろうし、その上今回はクラスメイトたちの協力も薄い。

それに何より布仏さんが敵に回ってしまうのがかなり痛いのだ。

更識妹の情報について期待するというよりも、一夏の情報が筒抜けになってしまうのが厳しい。奴ならこれ幸いとばかりに布仏さんから情報収集を行うだろう。そして味方ならば布仏さんも喜んで伝えるのは間違いない。

また布仏さんのISの実力自体はさほどでもないが、幼馴染である以上息はぴったりだろう。下手に連携までされてしまえば足下を掬われかねない怖さが十分にある。

結論として一夏に問題なく勝ってもらうには、まず相方を四組の初心者にして足を引つ張ってもらわなければならない。

そして更識妹には一回戦から連日連戦を続けて疲労してもらおう必要があるだろう。

だから俺は布仏さんを更識妹と組ませるわけにはいかない。

「具体的なことを考える前に、まず布仏さんがどうしたいかだ」

「私？ 私ならかんちゃんと一緒にいたいよ」

「そういうことじゃない。布仏さんは更識さんにどうなって欲しいか」

もちろん俺の本心など口にできないので、大外から埋めていくことにする。

うまく誘導して布仏さんが自分でそれを選ぶようにしなければならぬ。

「それは……」

「布仏さんを見てるとき、何をしたいのかわからないんだ。がんばってるのは分かるんだけど、目的地が見えない。だから協力を求められても応えようがない。今さっきみたいにこんなのでいいのなら僕でも一夏でもできるけど、それで布仏さんの目的は達成されるの？」

「もくてき……」

「もうちよつと具体的に言った方がいいか。例えばこれを続けて更識さんが僕や一夏やシャルルと仲が良くなったとして、それで布仏さんは満足できるの？ それで十分？」

「ううん、みんなと仲良くなつてほしい」

「みんなって誰？」

「えっ……？」

「一生かけても世界中の人と仲良くなるなんてできないよ、時間的に。じゃあ布仏さんは今やろうとしてることをどこまでやればいいと考えてるの？」

「……」

回りくどいにも程があるが仕方ない。

だが実際そうだ。布仏さんとはかく今自分にできることを必死

にやろうとしているだけに過ぎないのだ。だから何も進まない。

「僕の勝手な想像だけだし、友達を一人一人作っていつてその輪をどんどん広げていこう、布仏さんが考えてるのはこんな感じかな？ 間違ってる？」

「あつてる」

「うん。じゃあそこに僕を選んだわけは？」

「かいだーならかんちゃんのことを分かってくれと思うたから」

「なるほど。それなら残念ながら僕は今の更識さんにとって仲良くなる相手として不適當だと言うしかない」

「どうして？」

俺の自虐だとしても取ったのだろうか。布仏さんは心外だとばかりに抗議の目を向ける。

まあ本心では俺も更識妹も仲良くしたくないのが事実だろうが、この場合は関係ない。

外面的な話である。

「もし一組に出入りするようになったら、更識さんはいよいよ四組内で孤立するよ。これが三組とか五組ならまだしも、よりによって一組だ。男子が三人もいる特別なクラス。ああ更識さんは一人でいるのが好きなんかじゃなくて、自分にふさわしくないと思ってる人間を相手にしない人なんだ。更識さんにとって四組の自分達はもう完全に切り捨てられたんだって」

「そんな……！」

だがこれはある程度事実になってしまっただろう。

更識妹は機体持ちの代表候補生、元々クラス内で浮いている上にリーグマッチによって一人だけ突出し過ぎた。

それでもここまで孤高を貫いてきたので、表面上は保たれている。しかしそんな状態で評判が微妙な俺はともかく一夏やデユノアと仲良くしたらどうなるか。

水面下にあった不満が一気に噴出してくるのは想像に難くない。

「そんな奴らなんか相手にする必要ないって思うかもしれないけど、それは外から見て言える話であつて自分のことじゃないからだ。実

際その環境に置かれるのは更識さんで、これから少なくとも十ヶ月はそんな状態になってしまおう。今よりひどい事態になってしまうのは間違いないんだけど、それは仕方のないことだと割り切る？」

「……」

その光景を想像してか、布仏さんはうつむく。

本人が選んだならまだしも、自分の手で親友を追い込むことになるかもしれないのだ。

ちなみに鈴もある程度同じ状態だが、こちらはまるで気にしていない。何より自分の中に一夏という大きな幹を抱えているので、全くぶれないのだ。寄るべきものがあれば人は強くなる。それにクラス内にハミルトンという話相手もいるし、クラス内の関係性が希薄なものも問題の深刻さを和らげている。

まあ更識妹本人も気にしないだろう。きつと奴は博士から専用化技術をもらえたことで、自分を特別な人間だと過信している。周囲の人間など有象無象と片付けて気にも留めていないのは簡単に想像できる。

それに今の状態だって実は自分で選んだ道だ。その延長線上にあるなら別に文句もなく受け入れるだろう。

だが布仏さんとしてはそうはいかない。親友が誤った道を進んでいると思っているのです、同じ方向には進ませたくないのだ。

とはいえ最初に俺が言ったように目的意識が曖昧なので、どうすべきか何を大事にすべきかがはっきりしていない。だから自分では何も決断できない。

「でもさ、今回のタッグマッチはいい機会だと思っただよ」

「……？」

いきなり変わった話題に釣られて布仏さんが顔を上げた。

ようやく本題に入れる。

「誰かと組まなきゃいけないのなら、それこそ同じクラスの人と組めばいいんだ。クラスの人達と仲良くするのにこんないい機会はないと思わない？」

「あ……」

沈んでいた布仏さんの顔がぱつと開く。

今までは手も足も出せない状態だったかもしれないが、これを取っ掛かりにできるのだ。

こちらから話しかける理由ができる。そして更識妹はISのパートナーとして申し分ないどころではない。

「例えばさ、いつも三人で固まってる人達なんかは二人組を作ったら一人余るんだよ。だからそういうところに入っていけば一人じゃないって三人と話ができるよね？」

「うん！」

「布仏さんも思ってたことだろうけど別に最初から全員と仲良くしないでいいじゃない。まずはどこかの一員として認められれば、今度はグループ同士とかで交流は増えていくと思うよ。そうやってどんどん広げていけばいいんじゃないかな？」

「うん！ あ、でもかんちゃんは……？」

「言うことを聞いてくれないかもって？ それなら大丈夫。魔法の言葉がある」

「何それ!？」

期待に溢れた眼差しで布仏さんは俺に催促する。

魔法の言葉と大げさに言ったが別に大したことではない。

「クラスの人に言われて他のクラスの人と組めなくなりました。ごめんなさい。だからかんちゃんが組む人を探すの手伝います」

「……それだけ？」

「うん」

「それだけでかんちゃんか？」

「パートナーなんて誰でもいいとか言うと思う？」

「うん」

「言わないよ」

「どうして？」

「だって、更識さんは一夏と鈴にリベンジをしないとイケないんだから」

あつ、と布仏さんの口が開く。

一夏に対しては自爆、鈴には自分が失敗した初見殺しを使われて負ける。

はつきり言っただけなんだ。

俺が更識妹の立場なら絶対にそのままにはしておけない。一夏との試合中に思ったが奴は俺と同じ粘着性の感情を持っている。機会があるのにみすみす逃すなんてもつたいたくない真似は絶対にしない。最低でも一夏と鈴のどちらかを潰さなければ気が済まないだろう。

「そのためにはパートナーは誰でもいいとは言えないよね」

「うん」

「もちろん、そういう理由だから布仏さんが間に入って上手いことやらないといけない。相手にそっぽを向かれないようにしないとね」

「うんうん」

布仏さんと組めなくなった時点で更識妹に組む相手はいなくなる。

奴は五組の佐藤に匹敵するぼっちなので、そもそも話を持ちかける相手が存在しないのだ。

だから布仏さんの提案は渡りに船である。

わざわざ間に入ってくれるのだから利用しないはずがない。

一夏や鈴の周辺を見ていればさすがに一人だけでは厳しいのは明らかなのだ。

「そうだ、それならいつそすぐに決めなくていいかもしれないな。更識さんは自分の機体を持つてるんだし、あれって専用化処理された打鉄でしょ？ 一時的に専用化を解いてクラスの人達に乗ってもらおうとかすればすごく喜ばれると思うよ」

「そんなこととしていいの？」

「今は更識さんのものなんだから更識さんの好きにすればいいじゃない。技術的なことは知らないけど、一夏達が専用化したままなのはデータ取りがあるからでしょ。更識さんには別にそういうのもないみたいだし、今までも好きにやってるみたいなんだから特に問題はないんじゃないかな」

「は〜」

「あ、そういうのは全部布仏さんがやらせたっただけで見せておく

といいかもしれない。そうしておけばクラスの人達もそのうち気づいて布仏さんに協力してくれるようになると思うし」

「そうかな?」

「友達のために一生懸命がんばっていれば、見てくれる人はきつというと思う」

我ながらいいことを思いついてしまった。

これが実現できれば更識妹本人の訓練時間が減る。

ぜひとも布仏さんにはがんばってもらいたい。

「えへへ」

「あー布仏さん、今は簡単に言っちゃったけど、実際やるとなるとすごい大変だよ? 相当きついと思うし、うまくいくとは限らない。理屈なんてすつ飛ばして感情的にもう気に入らないとかあるかもしれないよ。これでもう安心だなんて考えないでね」

「大丈夫!」

「言い切るね」

「だってかいだーが考えてくれたことなんだから!」

布仏さんは俺が今まで見てきた中でも強度MAXの笑顔を放ってきた。

基本的にいつも笑顔な人ではあるが、毎日見ていれば細かな違いも分かってくる。

笑顔の中でも表情豊かということなのだが、果たして更識妹はこの笑顔をきちんとして見ているのだろうか。

「うーん、始まる前から弱音もないか。まあいいや、実際やってみての話だし、もう時間だからいい加減行こうか」

「うん!」

言い終わるやいなや、布仏さんは自分と更識妹の弁当箱を抱えて走って行った。

できることならうまく行って欲しい。そして更識妹をぬるま湯に沈めて欲しい。

今も布仏さんを切れない時点でお前は徹底できないのだ。ひとりぼっちにはなれないのだ。

ならば暖かさを思い出してしまったらどうなるか。それでもその意地を保ち続けられるのか。できればそのまま浸かって安穩としてくれたら嬉しい。

と、今の自分こそまさにそうではないかという焦りの感情が急に湧き上がってきた。

「なるほど、個人戦がなくなっちゃったわけか」

宮崎先輩はざっと一瞥しただけで、ルールの書かれた紙を隣にいる先輩に渡した。

「はい。そのことについて意見を聞きたいことがあります」

「それは確かに急に変わったかと思っただけなら不審に思うわよね」

読み込んだりするのかと思っただけが、他の先輩達も流し読み状態で次々と隣に流していく。

あつという間に俺の周囲にいた指揮科十人の間で回されてしまった。

そして後ろの方にいる衛生科の佐原先輩に回されようとするも、先輩はいらないと手を振って返してしまっている。こちらは興味すらないようだ。

三年生は総勢百人。うち指揮科が十人で衛生科は八人。同じ教室を使っている一般の授業は一緒に受けているそうだ。

他はパイロット科で一クラス三十人、整備科で二クラス二十六人ずつ。合計四クラスになる。

指揮科パイロット科には定員があるのでここは定数、衛生科は変わり者が選り、残りが整備科という勘定だ。

ということは万一俺が指揮科に進んだ日には同じ教室に谷本さんが存在してしまうのだろうか。

それはすごく嫌な感じがする。

「よしみんな読んだわね。それで、何が聞きたいの？」

「すぐ教えてくれるんですか？」

「もちろん質問の内容と質問の仕方によるけど、何？」

「そうですね、やっぱり先輩方の見解が聞きたいです。何よりどうして変更がなされたのか。これは去年までを知らない僕では想像しづらいことなので」

「うんうん。まず甲斐田君はどう思ったの？ それから聞かせて」
これである。

質問をしたのに質問で返された。

そして俺の話す内容に合わせて返答をしてくるのだ。最終的には教えてくれるにしても、面倒なことこの上ない。

「その前に情報として、織斑先生は学園にとって改善であると言いました。そして今までは見るに耐えず益も少ない行事だと評していました」

「あー……」

何人かの先輩達が苦い顔をする。

つまり思い当たる節があるということなのか。

「僕としてはそこから想像するしかありません。だから、できる人とできない人の差が激し過ぎて、できる人とできない人が試合をしたらとても見てられないようなことになるし、またお互いのためにもならない、ということかなと」

「うん。まあそれも正解」

「ということとは他にも？」

「できない人同士がやってもぐだぐだになるだけで、ためになるかという正直あんまりならないわね。そしてほとんどの試合はそれ」
「なるほど」

だがそんなことは当たり前と言えれば当たり前の話だ。

一年生にとつてのデビュー戦なのだから、思ったようにいかないことの方が多だろう。

リーグマッチはクラス代表という元々できる生徒が出るものだし、ゴーレム戦の場にいられた篠ノ之さんなどは例外中の例外にあたる。しかしそれなら二対二にしようと同じことなのではないだろうか。

「納得した？」

「いいえ、それならわざわざ二対二にする意味がありません。二対二

になると何が改善されるんですか?」

「織斑先生は何か言ってた?」

「えーと……二人になればできることが大幅に増える、だったかな」

「そうね。それだけ?」

「後は……ああ、日程上の問題もあると。人数が増え過ぎて一週間じゃ終わらない。生徒達の体力的に厳しい」

「あ、そっちも気にしたか?」

「どういうことでしょうか?」

「そっちはできる人向けの話。毎日試合をしてると疲れちゃって、最終日の決勝とかもうへ口へ口でがっかりな試合になりがちなのよ。がっかりと言うか地味というか、最後はただの体力比べになったりして」

「プロや大会の試合じゃないんだし、そこは問題になるところではないのでは?」

「連戦における体力の問題なんてまだ何も知らない一年生に求めることかと言うと全く違うのよ。そういうのはちゃんと試合をできるようになってから気にするべきで、一試合のペース配分すら分からない一年生にいきなり理解しろって言っても無理」

「そうだろうか。」

既にリーグマッチで俺達は日程について意識させられている。

連戦の日と休みの時間について真剣に考えたのだが。

「綾、甲斐田君は納得してないよ」

「そうね。じゃあ……理屈の部分では分かったつもりになれても、実感としては全く別の話だと言うことかしら」

「いいえ、そういうことじゃなくて、リーグマッチで僕達はそのあたりを考えて実行までしています。二日半の日程で、連戦の日と午前午後どこかで休みの時間があって、そこはかなり気をつけた部分なんです」

「あつ、そういうことかー!」

と、宮崎先輩は何か気づいたように声を上げた。

言い方からして何か繋がったらしい。

「ええと、甲斐田君、まず去年まではリーグマッチで日程を気にする必要はなかった」

「そうなんですか?」

「だって気にする必要なんてないもの。何しろ毎年四クラスしかなかったんだから」

「あ」

確かに、四クラスでは空きなど出るわけがない。

しかも総当り三試合で済むのだから、土日の一日半で終わってしま

う。
「三試合だけならまあ勢いで押し通せるからね。大観衆もあるし、気がついたら終わってるくらい」

「確かにそうですね」

三試合だったら俺はどうしただろう。

休むよりもむしろ一夏の気持ちを切らさないことを優先させたよ
うな気がする。

「つまり今年の一年生はクラス代表の姿を見ているので、最初からあ
る程度は連戦の疲れについて意識しながらやれる。別に全員が気に
する必要はなくて、クラス代表や優勝を目指すような生徒が理解して
いればいい」

「綾、これ行けるよ! 一日で二試合になるのが土曜の準々決勝と準
決勝だけだ!」

「それ下手すると一回戦からの勝ち抜けまであるわね」

「一試合かそこら減っただけなのにそんなに楽になるとは……」

ということとは、ますますシード権の意義が薄れてしまう。

いや、やはりそういうことなのだろう。これもある意味ヒントだ。

「あ、ごめんね甲斐田君。うん、確かにこれは改善だわ。生徒は明確な
目的意識を持ってタッグマッチに臨むことができる」

「時期を前倒ししたただけなのにそんなに違うんですか?」

「これは二対二というだけで前倒しなんかじゃ全然ないわよ。第一、
一年の二学期にやるタッグマッチはトーナメント形式じゃないから。
総当りのリーグ戦なんだけど、リーグ間での試合はないの。成績の上

から順に六分割されて、その中で、つまり実力の近い者同士で試合をするわけ。だからどの試合も接戦になるし、その結果指揮科パイロット科を目指せるかどうかはつきりと見えてしまう」

「そういえばこのIS学園は入学してからも競争だった。」

指揮科は上位十人、まあパイロット科志望もいるだろうからもう少し低くても行けるかもしれないが、それでも上位にいないければ話にならない。

パイロット科は定員三十。成績の近い者同士で集められたらボーダーラインのリーグはまさに激闘となるだろう。

その中に整備科志望が混じっていたらどうなるのか気になるどころだが、そのあたりはまた別に配慮されるのかもしれない。リーグ分けの前に志望科を聞いておいて調整するとかで。それに六分割では端数も出る。

なんにしても今年はまた変わってくる話だ。

「ちなみに、日程について理解してないようなクラスはどうなるんですか？ 実際あるんですけれど」

「そういうクラスは優勝なんてとても狙えるレベルじゃないから、特に気にする必要もないわね。多少は勝ち抜けたとしてもすぐ息切れするわ」

「一日一試合でも？」

「やってみれば分かることだけど、何も考えずにやれるのはせいぜい三日。きちんと最初から心と体をコントロールしてないとそこから先は持たない」

「そういうものですか」

「それも意識しながらやっていてようやく理解できる話で、だから最初に言っただけで何も知らない一年生にいきなり求めるようなことじゃないのよ」

確かにこれは一回戦から優勝を目指す場合に必要な話だ。初心者では先を見通すどころか目の前の試合をこなすだけで手一杯だろう。

「ということは今回の変更はできる人向けの改善ですか？」

「もちろん違うわよ。甲斐田君も自分で口にしたじゃない。二人にな

ればできることが増えるって」

「ああ」

「リーグマッチをやったのなら痛いほど分かると思うけど、一人じゃもうどうにもならないことが山ほどあるわ。でもそれが二人になった途端、ものすごく楽になるのよ。そうだ、既に指揮を経験済みの甲斐田君なら実感として理解できるんじゃないかしら？ 役割分担ができるってすごく嬉しいことだと思わない？」

「思います。それはよく分かります」

「一対一で渡り合えるような一夏や篠ノ之さんはともかく、ゴーレム戦において他の面々は防御や牽制に役割を特化してようやく戦う形にできた。一人で何もかもこなすことは簡単な話ではないのだ。」

なるほど、たとえ初心者だろうと役割が単純化されれば様になる
と。

「と言ってもISの基本である一対一を飛ばすのはどうなんだって意見もあるだろうし、来年以降については今年やってみてどうかかって話ね。思うような結果にならなかつたらまた来年からは一対一に戻るかもしれない」

「僕ら次第ですか。実際どうなるんだろうな」

「甲斐田君のクラスにはシード権があるから、はつきり言ってるリーグマッチと同じ感覚でやれるわよ。ええと、今回の場合だと何回戦から？」

「三回戦だから木曜からだねー。優勝目指すなら木金やって土曜に二試合。決勝は日曜。先が見えてる分もう勢いで突っ走った方がかえっていい結果出そう。無理に手綱を引かなくていいし、もしかしたら織斑君の独壇場になるかもしれない」

「という話。正直今回甲斐田君の出番はないわね。パートナー選びさえ間違えなければ今の織斑君なら放っておいても決勝までは行けるわ」

「ライバルはむしろクラスメイトになるだろうねー」

「でもさっきの話だと一回戦から勝ち上がってくる可能性もあるんですよね？」

今しがた話したように、先輩達によればそれが十分できる状況だ。だとしたらしつかり計算して上がってくるのを警戒する必要があるのではないだろうか。

見回すと先輩達は難しい顔になって脳内で計算しているようだが、その表情は芳しくない。

「うん。一般的な話としてはそうね。でも今年の一年生に当てはめると、該当する候補がちよつと見当たらないの。本人の資質というよりはパートナーの問題ね。きちんと計算しながら息を合わせて勝ち上がってこられるかと言うと……準備期間が二週間じゃ厳しいかな?」
「そうでしょうか? 例えば二組の鈴、鳳鈴音とティナ・ハミルトンがいます。留学生レベルで組めば十分いけるとは思いますけど? 実際仲いいので組みそうですし」

「ああ、甲斐田君なら真つ先に警戒する相手ね。でも大丈夫よ。その二人、多分息が合わないから。二人とも自分が自分だから、上からやらされないと相手に合わせようとしないうよ」

「そうなんですか?」

「誰かが矯正しなければそう。しても二週間じゃきつと無理」

リーグマッチに出た鈴はともかくとして、ハミルトンまで把握しているのか。

正直言つて俺はハミルトンがISでどんな動きをするのか知らない。留学生なのだからリアーデさんや三組のベッティ並にできるだろうと想像している程度だ。

しかし先程から先輩達の様子がおかしい。急にやる気がなくなつたような。

聞いてもいないことまで喋り始めたし、もしかして興味が失せたのだろうか。

「他のクラスは……四組五組は論外。どうせ甲斐田君は一組の人間を外に出す気もないだろうし。三組は転入生がどうなのかってところだけど、あの子は多分学校の行事とか興味ないタイプね。求道者系と言うか、自分のことしか気にしてない感じ。一回戦で初心者と当たつてやるだけ無駄だとか言い出して棄権しそう」

「はあ……」

それどころかボーデヴィツヒまで抑えている。しかも性格の分析まで。

「まだ転入から一週間も経っていないのだが。」

「まだ何かある？ クラス内のことなら甲斐田君が一番よく分かっているでしょ？」

「先輩、こういう言い方はあれなんですけど、もしかして興味なくなりました？」

「それはね。だって外からの指揮を必要とする場面がないもの。確かに全員参加なんだから、余計なこととしてないでまず自分のやるべきことに集中しろ、というのはその通りなんだけどね」

「やっぱりそうだった。」

無理やり出張ってかき回すなど趣味ではないということか。

「ならば、俺は少し前から頭にあつたことを口にしてみる。」

「じゃあ例えばですよ？ 一組全員にシード権を捨てさせたら？」
「え？」

場の空気が一瞬で変わった。張り詰めたというべきか。

宮崎先輩だけでなく、三年指揮班全員の目が鋭く俺を向いている。

「いや、それが一番正しい行動だと思うんですけど、そうしたらいろいろ変わりますか？」

「……甲斐田君？」

「はい」

「それ、誰から聞いたの？」

「誰からって……」

「クラスの誰かが言ってたの？」

「言うも何も、書いてあるじゃないですか。シード権は放棄できると」

「はー……」

がつくりと頭を垂れ、宮崎先輩は大きいため息を吐く。

「そんなにまずいことを言ってしまったのだろうか。」

「どうしてよりによって甲斐田君が気づくかなあ？ そこから一番遠

いところにいるはずなのに」

「綾、むしろ一番遠いからこそでしょ。だって甲斐田君は当事者じゃないんだから」

「いやいや、僕も一応参加はするんですけど」

「当事者意識がゼロってことよ。どうせさっさと負けようって考えるでしょ？」

「それはまあ……」

当事者意識を持っていないは以前鷹月さんにも言われた。

と言われてもそもそも俺は枠の外にいるのだから、仕方のない話だ
と思うのだが。

「甲斐田君、シード権についてクラスの人達は何て言ってる？ あの
指揮科志望の子達でいいけど」

「有効活用しようって言うてるから捨てる気はなさそうですね」

「駄目か……。ちなみに、甲斐田君はこのことを口にした？」

「してません。今日ここで聞こうと思っていたので」

「そっか。じゃあこの後はどうしようと考えてるの？ シード権につ
いて」

「どうしようも何も、二択じゃないんですか？ 言うのか、言わないの
か」

「言うの？ 言わないの？」

「それは……」

正直なところ迷っているのが現状だ。

本来は言うべきなのかもしれないが、一夏のことを考えるとこのま
ま知らない振りをしておいた方がいい気もしている。

今お墨付きまでもらってしまったのだ。ここからわざわざ余計な
ことをする必要はあるのだろうか。

「迷ってるんだ。つまり言わない選択肢があるわけね」

「わざわざ言うまでもないというか」

「そのへんはやっぱり当事者意識のなさね。仕方のないことではある
けれど。でも甲斐田君、言った方が甲斐田君のやることができるわよ
？ このまま暇を持て余すよりはよっぽどいいんじゃない？」

「あ」

と、閃いた。

ならばいつその状況を逆手に取るのはどうだろうか。

「……というのはどうでしょう?」

「……甲斐田君、さすがにその発想はなかったわ。いや、確かに甲斐田君のやることはできるけれど……」

「意味分かんない」

「そんなことして何になるの!?!」

「そういう系の趣味あるの?」

「回りくどい? いやいや、そんな次元はもはや遥かに飛び越えてるよな……」

「ジャイアントキリング? いやなんか違う気がする……」

俺が何もしなくてもいい状態である。ならば、俺は全く別のことをしていればいいのだ。

部屋まで戻ると、自分の部屋の前に人だかりがきている。

今度は何があった。

「あ、智希!」

すぐに一夏が気づいて俺に向かって手を振る。早く来いと。

夜竹さんあたりがまた何かやらかしたのだろうか。

他の連中も俺に気づき、部屋に向かって道を開ける。

「何あれ?」

部屋のドアの前にはボーデヴィツヒが、背筋を伸ばして正座していた。

「またも意味が分からない。」

「一夏、これどういうこと?」

「俺に言うな。こいつに聞いても智希を待っているだけだとしか言っ
てくれないし」

「おお、待っていたぞ」

「こういどこから突っ込んでいいか分からないようなのは本当に

困る。

俺に用があるのはいいとして、どうして部屋の前で正座しなければならぬのか。

「ええと、何かご用でしょうか？　もしかして苦情ですか」

今思い出したが、俺はどさくさ紛れに思いきりこいつを罵っていた。

有耶無耶にしたとはいえ、後で思い返してこれは許せないと乗り込んでくるのは十分ありそうだ。

もしかしたら果たし状くらいは出されるかもしれない。

「何を言う。苦情を言いに来たのであればこのような態度でいるわけなどないだろう」

「そ、そうですか。と言つても僕はあなたに対して失礼なことを言つてしまったわけですし」

「失礼……？　ああ、君も気に病んでくれていたのだな。確かに耳に痛い、心にまで突き刺さるほど研ぎ澄まされた鋭い言葉だった。だが大丈夫だ。私は真実の言葉に目を背けるような真似はしない。正面から全部受け止めて耐えてみせる」

「ま、まあ、気にしてないならいいです……」

もしかして俺は初対面での会話を誤っていたか。

こういう仰々しい話し方が好きな奴だと思われてしまったのか。

「とりあえず、立ちませんか？」

「それはできない。今の私は君の前に立つような立場ではない」

「ええ？」

こいつは何かやらかしてしまったのだろうか。

と言つても特に何かをされた覚えもないのだが。

「実は、君に是非ともお願いしたいことがあつて来た」

「あ、それが本題なんですね」

「先程からのへりくだった口調はやめてもらえないだろうか。むしろ私が教えを請う立場なのだから」

「はっ」

ボーデヴィツヒは真つ直ぐに背を伸ばしたまま俺を見上げ、それか

ら両手を床につけ、そして体を前に倒した。

いわゆる土下座である。

「頼む！ 私に教官、織斑千冬先生について教えてくれ！」

「はい？」

「私は、全てにおいて教官のようになりたいのだ！」

いや、それは困る。その、VTシステム的に考えて。

21. パートナー決めを巡る諸々

IS学園に入学してから土下座ばかりされている気がするが、かと言って偉くなった気分などみじんも感じられない。

もちろんそれはほとんど谷本さんのせいだ。ファーストチョイスが土下座では、その価値など俺の中では既に大暴落している。

しかしこの前は夜竹さんと田嶋さんに芝居の入った土下座をされたし、もしかして俺は土下座しておけばどうにかなるとでも思われているのだろうか。

「頼むー」

俺が何も答えないので、ボーデヴィツヒは再度声を上げる。

周囲は俺が何と返すのか固唾を呑んで見守っているようだ。

「受ける受けないの前に理由を聞かせて欲しいんだけど、どうして僕なの？ 実の弟である一夏じゃ駄目なの？」

「俺!？」

一夏が悲鳴を上げる。

見ると胸の前で両手を激しく振っていた。腰が引けて今にも逃げ出しそうだ。

「確かに当初は織斑一夏君に尋ねるつもりだった」

「マジかよー」

「だが先日の一件で理解したのだ。甲斐田君、君もまた家族であったのだと」

「はあ?」

意図的か天然か、こいつは今論理を飛ばした。

仰々しい掛け合いの大好きなヨーロッパ人のようだから、きつとわざとだろう。

もちろん一夏はまるでついていけない。

「別に血は繋がってないよ」

「へ?」

「家族を繋ぐものは血だけではないだろう。絆があれば人は家族とな

れる」

「おい何言つてんだ？」

「それなら僕のどこを見て絆を感じたのか聞かせて欲しいところだね」

「智希？」

「教官のファーストネームを呼べる人間などこの世界には数えるほどしかない。それが許されているだけで君は特別な人間だ」

それを言ってしまうと弾や数馬までそうなるのだが、あの二人を見てもボーデヴィツヒは同じことを言えるのだろうか。

俺も普段は織斑先生と呼んでいるし、あの時は奴の神を下に落とすために千冬さんと言っただけだ。

だがボーデヴィツヒは逆に俺を上げてしまったという話である。

「そういう考え方が千冬さんを遠くに追いやってしまうと思うんだけどなあ」

「何を言う。教官こそ唯一無二、絶対的な存在として世界の頂点に君臨すべきなのだ」

「やばい、こいつらが何言ってるかまったく分かんねえ」

解説役がいないので一夏は頭を抱える。

その役を務められるデュノアはこの場にいるわけにはいかないのだから仕方ない。

「とはいえ、家族としてそのような感情を持つのはこの私でも理解できる。いや、むしろ家族だからこそと言うべきか」

「僕からするとそういう線引が一番駄目なんだけどなあ」

「もういいか、後で聞こう」

一夏が投げた。

少なくともボーデヴィツヒが自分ではなく俺に興味を抱いているとは感じたのだろう。

だが一夏の態度は正解だ。無理に入ってこなくて助かった。

こいつの性質上あまり一夏に矛先を向けて欲しくない。

「まあいいや、別にそこで議論するつもりもないし。それで話は最初に戻るんだけど、僕でなければならない理由は？ 家族なら一夏

だって当てはまるでしょ?」

「また俺に戻ってきた!」

「いやいや、それはもちろん君が言葉を持っているからだ。織斑一夏君も同じ感覚は有しているようだが、生憎と彼は感覚先行型のようだ。であれば先にまず君に頭を垂れるのが当然の話だろう」

「よかった。やっぱり智希が目当てで俺は大丈夫そうだ」

全然大丈夫ではない。

俺が断つたら次は一夏だと言っているのだから。

とはいえ俺もボーデヴィツヒを一夏に近づけるわけにはいかない。今は安全でも、織斑千冬をよく知っている一夏ではボーデヴィツヒを元に戻してしまう可能性があるからだ。コンマ何パーセント以下の可能性であろうとゼロでない以上安心はできない。

だから少なくとも博士が戻ってくるまでは俺が見ておかなければならないのだろう。織斑先生がどこまで対処してくれるかだが、さすがにつきつきりでボーデヴィツヒを見るわけではないだろうしその場に居合わせてくれるとも限らない。

まあ博士が大丈夫と踏んだ以上まず危険はないように思う。むしろ俺が余計なことをしない方がいいのかもしれない。

とはいえ向こうからやって来る以上、せめて視界に収めておきたいのもまた事実なわけで。

「別に千冬さんの話をするくらいなら構わないけど、だからってどこをどうしろとは言えないよ? ボーデヴィツヒさんも知っているとと思うけど、僕のIS知識はほぼないに等しいから」

「おお! 受けてもらえるのか!」

「よくやった智希!」

「じゃあお近づきの印に」

誰の味方だか分からない一夏は無視して、俺は懐から常備している写真を取り出す。

もちろんこの二ヶ月多くの生徒を虜としてきたあの写真である。

「ああ、あれかあ……」

「というかすぐ取り出せるあたりが怖いよね?」

決着がついて安心したのか、周囲にいたクラスメイト連中が声を出し始める。

とはいえ俺が一瞥すると一斉に目をそらすあたり、巻き込まれまいという危機意識は持っているようだ。

「いったい何を……？」

ボーデヴィツヒは座ったままでは失礼と思ったのかわざわざ立ち上がった。

そして立ち上がったボーデヴィツヒに俺は写真を渡してやる。

「こ、これは……！」

案の定、写真を受け取ったボーデヴィツヒは声も体も震わせた。

分かっていたことだが織斑千冬信者であることに間違いはないようだ。

「僕らと同じ年の千冬さん」

「なんと……！」

俺の言葉を聞くやいなや、ボーデヴィツヒの体が崩れ落ちた。全身の力が抜け落ちたという様子である。もちろん写真だけはしっかりと掴んで離さない。視線も写真に釘付けなままだ。

「は、はは……！」

「いい写真でしょ？ これはこのIS学園の一部の生徒にしか出回っていないものだよ。もちろん世界のどこを探してもない代物だ」

「そのようなものを……！」

言葉を発しながらも、ボーデヴィツヒは写真から目を離さない。離せないと言うべきか。

とりあえず今はこれでいいだろう。

「じゃあ今日はこんなところで。また」

「ま、待ってくれ！」

ボーデヴィツヒが我に返る前にと思ったのだが、存外復活は早かった。

おかわりは許さないと決意しながら俺は振り返る。

すると床に崩れ落ちたボーデヴィツヒは、実に情けない顔を俺に向けていた。

「す、すまないが、私の部屋まで手を貸してもらえないだろうか。情けないことに腰が抜けてしまった」

この写真を見て腰を抜かす奴は初めてだ。

「へー、そんなことがあったんだ」

「最後ちよつと意味分かんなかったけどな」

「確かにお姫様抱っこコールは意味不明だった」

ボーデヴィツヒに肩を貸そうとしたところ、いきなり周囲からブーイングが起こった。

何事かと振り返ればクラスメイト連中がそこはお姫様抱っこで連れて行くべきだと主張してきたのだ。

何を馬鹿なことをと無視するもブーイングは止まない。ボーデヴィツヒは再び写真に見入ってしまったって反応すらない。

どうしたものかと一瞬思ったが、考えるまでもなく乗るようなことではない。結局俺はボーデヴィツヒを背負って部屋まで連れて行った。

道中のボーデヴィツヒは写真に釘付けで、それ以外は上の空という子供状態だったというのが何とも分からない。それまでの軍人めいた喋り方はなんだったのか。

「あはは、それは大変だったね。ボーデヴィツヒさんの部屋は遠かったの？」

「それがすぐそこというか」

「先週まで俺達がいた部屋だったな」

「そっか、二人はここに移ったばかりだったね」

俺のいた部屋であるということは、つまり博士から常時監視可能な場所であるということである。

空いた部屋にそのまま放り込まれただけだが、これは俺にとってラッキーな話だ。

「なんか変な奴だったな」

「僕の部屋の前で正座してるしね」

「それはちよつと見たかったなあ。残念」

いやいやデユノア、残念ではなくてうまく合わせて逃げられたらう。

あの場においてはデユノアのスタンス上間に入らなければならなくなる。

俺と話を付けてもらうためにも、デユノアはあの場に存在してはいけなかったのだ。

一度なら偶然でも二度三度と続けばそれは意図的であることを疑わざるをえない。

とはいえ今回も入れ替わりのタイミングが綺麗だし、この前は俺の仕掛けに合わせて茶番を盛り上げてくれたのだから実に素直だ。

だいたい篠ノ之さんもオルコットも鈴も俺さえも、つまり邪魔をできる人間が全員揃っていない場をわざわざ用意した時点で怪しいとは思わなかったのか。

篠ノ之さんを剣道部に、オルコットを料理教室に、鈴をその監督役に、同時に送り出してさらに俺は用事で空ける。そしてアリーナにいるのは一夏と整備班の数人のみ。そのことを知ってから急に気が変わってやっぱり訓練に行きたいなどと言い出しては、何かをやる気になったというのをさすがに疑いたくなる。

俺のいない間にやると思っていたが俺の到着まで待っていた。想像するに俺を観客として置いておき、俺の反応や感想も材料とするつもりだったか。もし俺が邪魔に入るようならデユノアが先に出て制する予定で、実際にもそうしている。後は流れで一夏を誘い込めばいい。やりたいことはすぐに分かった。

それで俺は入るタイミングを窺って、あえて生身の体でその場に突っ込んだわけだ。

ISでやりあっている場に入って行くなど危険過ぎるから普通はやれない。だからこそ虚を突くことができた。

結局俺は自分の身を人質にしたわけだが、威嚇すらしてこなかったので怖さなど全くない。明らかにボーデヴィツヒには俺に傷を付け

てはいけないという意味が働いていたし、デユノアはそのスタンスからも言わずもがなである。

そして最後にアイコンタクト。それどころか頷いて合図までされ
ては、偶然で片づけることなど俺にはできない。意味は予定狂ったか
ら作戦会議、だろうか。

「でも智希、お前はこれからあいつの相手をするのか？」

「仕方ないよ。写真とかあげて適当に千冬さんの昔話でもしておけば
満足するでしょ」

「きっぱり断ればよかったのに。あ、もしかしてあんなのにビビって
たのか？」

「僕が断ると今度は一夏に纏わり付くようになるんだけど、その方が
いい？」

「はあ!? いやいやいや、それは勘弁してくれよ」

「じゃあこれからボーデヴィツヒさんのところに行つて……」

「すまん智希！俺が悪かった！」

「あはは、でも智希は本当にそれでいいの？」

「いいも何ももう受けちゃったからね。織斑千冬信者の取り扱いはや
く分かつてるから別にそこまで大変な作業でもないよ」

作戦会議の結果はボーデヴィツヒ敵対路線の変更、だろうか。

千載一遇の機会を逃してしまつた以上、今後同じことはもう望めな
い。

なぜならそんな事件があつたと分かれば一夏の周囲が固められる
からだ。一夏の周囲には専用機持ちが二人もいるので、一夏まで手を
伸ばすためには毎回その二人を排除する必要がある。その上篠
ノ之さんのようなパイロット班までいてはさすがに非効率的だ。ま
た生徒という立場上そこまで無理もできない。

その結果が今しがたの話か。俺経由で一夏の情報を取ろうとい
うことなのかもしれない。

敵ボーデヴィツヒ味方デユノアの構造から、一夏担当デユノア、俺
担当ボーデヴィツヒ、に移行したとも言えそうだ。

「そっか。でも本当に無理してやることじゃないよ。なんなら僕があ

いつに話をつけに行ってもいいし。その時は力づくでもやめさせるから」

「やけに好戦的だね」

「だって智希に邪魔されて決着をつけられなかったんだからさ。あれじゃ僕の方が弱いみたいじゃないか」

「そんなこと……ああ、あるね」

「あつ、そういうこと言う!？」

「智希お前なあ」

「冗談冗談。まあ態度がひどいとかだったらまた考えるよ」

「もう……」

そうか、デユノアとボーデヴィツヒは裏で話をつけられる。

ならばうまくやればデユノア経由でボーデヴィツヒをコントロールできるかもしれない。

今度ボーデヴィツヒの様子を見た上で可能かどうか実験してみよう。

「ボーデヴィツヒさんについては実際話をしてみてだね。あの様子じゃ織斑千冬信者だというのは間違いないから、そのラインで話をしていれば特に問題ないと思う」

「まあお前がいいならいいけどさ」

「何かあつたら言つてよ?。」

「ま、今はこんなところかな」

言いながら俺は話は終わりだという仕草で立ち上がる。

もちろんこの後に本題が待っているのは承知した上で。

「あ、智希」

「まだボーデヴィツヒさんについて何かあるの?。」

「いや、そうじゃなくてだな」

「何かあつたの?。」

「えつと……あ、そのタッグマッチについてだな」

「タッグマッチねえ」

言いかけたがやめた。

おそらくデユノアがやめさせた。後ろで制服を引っ張るでもした

か。

一夏に話せてもまだ俺には話せないということなのだろうか。

「智希、僕はパートナーをどうしたらいいかなと思って」

「ああ、今日は大変だったね」

「僕と組みたいと言ってくれるのは本当に光栄だと思うんだけど、僕はまだ来たばかりだからみんなのことをよく知らないし決めようがないんだ。どうやったら決められるかな？」

「それを言ったら俺もだな。鈴には隣のクラスだから無理だって言うけれど、クラスの人はなあ」

残念鈴はここで脱落。

まあ元々芽などないが。

「そんなの男同士で組めばいいじゃない」

「そうすると俺達は三人なんだから、誰か一人が余って困るだろ。前にそういうのは気にしてないって聞いたから言うけど、ろくに訓練もしない智希に組む相手がいないのは分かってるんだ。お前は俺がシャルルのどちらかと組むしかない」

「一夏」

「どうしたの一夏？ 僕に気を遣うとか何かあった？」

「茶化すな。みんな真剣なんだ。だから真剣にやるつもりのないお前はクラスのみんなと組むべきじゃないってことだ」

珍しく一夏が強く出てきた。

日々クラスメイト達の努力する姿を見ているからこそだろう。

だが俺からすれば真剣であればそれでいいというわけでは全くない。

「でもそうすると今度は一夏もシャルルも真剣じゃないってことになるけど？」

「そういうことならシャルルもなしだな。やっぱりお前は俺と組むしかない。シャルル、悪いけど俺は智希と組む」

「ううん。むしろそれが一番だと思うよ。じゃあ二人はそれでいいとして、残るは僕なんだけど、どうやって決めようか？」

「もうあみだでいいんじゃないか？」

「あみだ？」

「ああ、日本のくじのことなんだけどな。ええと、紙は……」

「待った待った。何勝手に決めてるわけ？ 僕はうんとは一言も言っていないんだけど」

「冗談ではない。」

一夏が俺と組むという最悪の事態を實現させてたまるか。

「はあ？ お前俺の話を聞いてたのか？」

「聞いてたからこそだけど？」

「じゃあお前は誰と組むんだよ？」

「少なくとも一夏と組むのはないな」

「はあ!？」

「二人とも落ち着いて。ほら、智希にはもう当てがあるんだよ」

「そうなのか？」

「当てはないよ」

「ないのかよ!」

シード権がある以上、その気になれば俺の相手など簡単に見つかるはずだ。

まあその場合最終的には詐欺行為になってしまいかもしれないが。

「はあ……。一夏、今真剣がどうのって言ったけど、一夏は真剣じゃないわけ？」

「んなことあるか。みんなもがんばってるんだし俺だって全力でやるに決まってる」

「じゃあ真剣でない僕と組む理由は？」

「今のお前を受け入れられるのは俺くらいしかないからだ」

「どういう意味？」

「やる気ないんだろ？ じゃあそのままでもいいってことだよ」

「なにそれ」

呆れた。

この男はタッグマッチなのに一人でやろうとしている。

「一夏？ それってどういうこと？ やる気のない智希がそのままでもいいって、タッグマッチは二人だよな？」

「だから試合始まったから智希はさっさとギブアップしてやめていいってことだ。後は全部俺がやるから」

「ギブアップしたら一夏も負けじゃない」

「じゃあ終わるまでお前は隅っこで座ってる。俺が負けたら降参でいいから」

「ちよつと一夏?! それタッグマッチの意味がないじゃないか!」

「仕方ないだろ。智希にやる気はないんだし俺もそれでいいと思ってるんだから」

「それは違うでしょ! そこはやる気にさせるとかやらせるじゃないの!」

「普通はそうかもな。でも俺達は違うんだ」

「一夏?」

まだ一夏の中では俺達の中にデュノアが含まれないのだろうか。

「俺と智希は望んでここに来たわけじゃない。元々ISに興味があったわけじゃないんだ。俺はISを動かして楽しいと思えたからこうやってやれてるけど、智希はそうじゃない。俺とは逆で苦痛なんだ。やらされてるだけで、できることならやりたくないんだよ」

「そ、そこまでの?」

「できることならやりたくないというのはその通りかな」

「どうでもいいことなら適当にやるんだよこいつは。授業とかちゃんとしてるし勉強もしてるだろ。でもISは違うんだよ。智希にとって適当にでもやりたくないことなんだよ。だから俺は無理矢理やらせるとかしたくないんだ」

「一夏……」

前に訓練を逃げたのがそこまで一夏の中に刻み込まれていたか。

あの頃は俺も不安定な状態だったが、それにしてもらいからぬ行為をしてしまったようだ。

「智希は今みたいに千冬姉に喧嘩売ったり指揮をしたり好きなことをやってればいいんだ。まあ俺は智希に指揮をやって欲しいと思ってるけどな」

「それはなあ……」

「しぶしぶでもやってるんだからまんざらじゃないんだろ？ だからタッグマッチはみんなの面倒を見てやってくれないか？ お前自身はやんなくていいからさ」

「それは誰かに言われた話？」

「いいや、俺の考えだ。でもそれが一番だろ？」

「なるほどね。言いたいことは理解した」

「そうか……」

「え？ 一夏？ どうしたの？」

肩を落とした一夏にデュノアが慌てるが、既に俺達の間で意思の交換は行われたという話だ。

「悪いけど、僕はもうタッグマッチで何をするかは決めてるから」

「だよなあ、智希が考えないわけがないよな」

「そ、そうなの？」

「あーあ、俺にとつちや久々の大ヒットだったんだけどな」

「まあ悪くない考えではあるね。何も考えてなかったら乗っかるうかなと思えるくらいには」

「それつまりダメってことじゃねえか。お前が何も考えないわけないだろ」

「そうとも言う」

「けっ、これだ」

デュノアがついていけなくて困っているが、これはまあ仕方ない。付き合いの長さの問題だ。

「そういうわけだから、僕は自分のことは全部自分でやる。だから二人とも何も心配する必要はない」

「おう」

「智希がそれでいいのなら……」

「そして残った一夏とシャルルが組めば一組の問題は全部解決される。後は勝手に組めばいい」

「それはそれでいいのか？」

「むしろそれしかない。それ以外の選択肢は混乱して無駄に時間を失うだけだから」

男であるということに加えて、今の一夏にはリーグマッチ優勝者という肩書きがついている。

一夏を好きかどうかに関わらず、優勝なり上位なりを狙うにはまず組みたいと思える相手なのだ。

だからデュノア以外の誰と組もうが絶対に摩擦は起きる。男同士で組むという大義名分であれば少なくとも表面化はしないだろう。なんであいつがとはさすがにならない。

もちろんそれは表向きの話で、俺には俺なりの理由があるけれど。

「確かに智希がいないんじや纏めるのは無理だもんな」

「えっ、一夏？」

「どうした？」

「今智希がいないって……」

「だってクラスの外に出て行くんだから、俺達の面倒見るのは無理だろ。うちのクラスは一人余るんだぞ？」

「でも奇数でいいのなら……」

「それはやらせない。というかシード権の有効活用をするのなら余りは一人に決まってるんだ。そしてそれは元々僕しかいないんだよ」

「そんなことは……」

「一夏やシャルルと組まない時点で僕に組む相手はいない。僕と組むということは事実上タッグマッチを捨てることになるからね。今の一組にそういう人はいないでしょ？」

案外谷本さんや夜竹さんあたりなら簡単に捨ててくれそうな気がしないでもないが、別に捨ててもらいたいわけではないので気にしないことにする。

「それならパートナーを外で見つけてくるだけなんだから、見つかった後はまた……」

「こいつはいつも何かを企んでるんだ。それで今度はそれをクラスの外でやるってことだ。そうなんだろう？」

「まあね」

「一応聞くけどそれは一組の中じゃできないのか？」

「やってもいいけどそれじゃおもしろくない」

「え？」

「そういうことか。じゃあ仕方ないな」

「仕方ないって……」

「というわけで、タッグマッチの間シャルルは一夏の面倒を見て欲しい」

「えっ!？」

もちろん一夏をそのまま放り出すような真似はしない。

いいタイミングでいい人材がやって来たのだ。ならば有効活用させてもらおう。

それに一夏の側には男女関係なくミイラ取りはミイラになってしまうと相場が決まっているのだ。

「面倒見ろって何だよそれ？」

「だって放っておいたら一夏は自分の訓練をしなさそうだし」

「はあ？ 毎日やってるじゃねえか」

「最近一夏がやってるのってクラスのみんなの手助けであって、自分の訓練じゃないよね。それはいつまで続けるつもりなの？」

「それは……」

「だからシャルルにそのへんの管理をお願いしたいってわけだ。二人でやるんだから呼吸とか合わせないといけないだろうし、自分達の訓練も必要だよな？」

「そ、それはそうだけど……」

どうしたデュノア。欲しがっているものをくれてやると言っているのだぞ。

フランスとドイツ。IS学園においてこの二つの国が今共通して欲しいものなんて一つだ。

男性IS操縦士織斑一夏のISデータ。何しろどちらの国も男性IS操縦者を抱えているのだから。

俺のデータは世界に公開されているから誰でも見られる。だが一夏のデータは倉持技研が企業秘密として抱え込んでいるので、外からは見えない。だから欲しければIS学園の中で自分で調べるしかない。

それでも俺のように箸にも棒にもかからない程度ならまだ気にも留めなかっただろうが、一夏はリーグマッチでその才能の片鱗を見せてしまった。しかもその男はブリュンヒルデ織斑千冬の実の弟。年に一度の公開行事を見る程度では気が済まなくなってしまうか。

デュノアのIS操縦技術を見るに、おそらくフランスはデュノアを鍛えて大々的に発表するつもりだったのだろう。

ところが先に一夏がそのポジションを取ってしまったている。ただISを動かせるだけでなく、高レベルでそれをやれる。デュノア社は頭を抱えたに違いない。

それで同じように困っていたドイツと組んで、IS委員会や織斑千冬まで動かして人員を送り込んできた。フランスはデュノア一家の問題もあるのでほとぼり冷ましついでに男性IS操縦者本人を送り込む。ドイツの方もVTシステム関係者を送り込んでいるあたりそれなりの事情がありそうだ。これは博士が戻って来てから聞けばいい。

「別にこれはただの提案であって、もっといい方法があるのならそうすればいいと思うよ？ 腹をくくってシャルルが全員と面接して決めるとかでもいいし。一夏はまあ適当にそのへんの人でいいんじゃないかな。自分じゃ決められないだろうしそのうち殴り合いでもして決まるから」

「おい扱いがいきなり雑になったぞ」

「ふふっ、そうだね。じゃあ一夏のためにもそうするとしようか。よろしくね一夏」

「シャルルまで乗るなよ……」

俺は倉持の人間ではないので、一夏のISデータを持って行かれたところで別に困ることはない。

データがあれば劇的に強くなるのなら、VTシステムがとうの昔に世界を制している。

あくまでそれは比較材料、研究材料であって、それ自体で何かができるわけではないのだ。

それに既にイギリスや中国がオルコットや鈴を通して情報収集を

しているのだし、今さら一つ二つ国が増えたところで大した違いもない。

まあ倉持だってI S学園という目に見える場所に出した時点である程度は覚悟しているだろう。

「ちなみに、智希は何をするつもりなの？」

「内緒」

「えー」

「聞いても無駄だ。またロクでもないことなのは確かだけどな」

「まあ一夏達は関わらずに済んだことを喜ばばいいんじゃないかな」

「それほんとに何する気!？」

「いやマジでそうなのかもしれない……」

風を吹かせて桶屋織斑一夏を儲けさせてやろうという試みだが、果たして。

俺がその言葉を言った瞬間、鷹月さんと四十院さんが固まった。

今日も雨。そろそろ梅雨到来なのかもしれない。

だがドーム状のアーリーナは屋根で覆われているので、今は完全に室内状態だ。元々シールドバリアと同等の防御膜が広く張られているはずだったが、屋根は屋根で可動式のもものが別にあるようだ。雨は別に対処しなければならぬということなのだろうか。

「ちよつと待って甲斐田君。それは分かかって言ってるわけ？」

「どうにかすると一言で纏められてもさすがにそれだけでは……」

数秒して二人はようやく再起動した。

だがまだ事態を理解していない。当然だ。俺が何でもないことのように軽く言ったからだ。

「それだけでも何も言ったとおりだよ。僕は自分でクラスの外にパートナーを見つけてくるから、みんなはクラス内で組んでって。何かおかしなことでもあった？」

「いや、そういうことじゃなくて……」

「見つけてくると簡単に言われましても……」

「と言ってもそれ以上言いようがないんだけど」

「あ、もしかしてもう他のクラスの人から声がかかったとかあった？

昨日の今日ですぐ来るとは思わなかったんだけど」

「それは来てないわ。というより誰と誰が組むかなんてまだ一組も決まってるじゃないし」

「じゃあ何も問題はないね。シード権を最大限有効活用するのなら余りは一人にするべきだ。そして僕が手を挙げたんだからここで打ち切ってしまう方がいい」

これで全て問題は解決された、という勢いで俺は口にする。

だが実際そうである。それで済むのであれば一番なのだ。二人にとっては。

「甲斐田君、もしかしてもう誰と組むのか決めた？」

「そつ、それは誰ですか!! いくらなんでも早くありませんか!!」

四十院さんが慌てたように言う。

もしかしてハミルトンに先を越されたとも思ったか。

「別に誰も決まってるじゃないよ。それはこれから」

「これからって……当てでもあるの?」

「ないよ」

「ないの!?!」

昨日も同じ会話をした気がする。

「じゃ、じゃあどうするのよ……?」

「それくらいなんとかなるんじゃないかな? シード権もあるし」

「なんとかなるってあのね……」

「今回の場合は甲斐田さんはデユノア君と組むのが一番なのでは……?」

「は? それを言うなら織斑君でしょ?」

「え? ああそうでしたね。失礼しました」

二人とも一応案は持っていたようだ。

結局一組の問題は一夏、デユノア、俺の男子三人をどう分けるかなのだ。

もつと言えば特に俺の存在が癌なので、誰かに諦めてもらうか、

いつそ外に追いやるか選ぶ必要がある。

俺にやる気を出させるといふ方向性については、先月の逃亡事件があるので見込みとして薄い。無理矢理やらせるのは一夏でも無理だったし、普段の俺の姿を見ていればやる気にさせる前に本番が来てしまふと簡単に想像できる。

だからもうさっさと割り切るしかないのだが、この二人にはそれができなかった。

「一夏ならシャルルと組ませる。それが一番の平和的解決方法だからね」

「えっ!？」

「男同士で組むって言われたら誰も文句は言えなくなるでしょ?」

「そ、それは……」

「それは私も考えましたが、そうすると甲斐田さんが……」

「だから僕は自分で探すって話。シード権を片手にね」

「でもシード権があったところで、甲斐田君は気にしてないからはつきり言うけど、勝てないでしょ? それでもシード権がメリットになるの?」

「なるよ。ただで三回戦行きなんだから」

「でもそれで負けちゃ……」

「どうせ一回戦負けだと思ってる人にはお得だよ。何もしなくても三回戦進出という結果が残るんだからね」

「そういう風に使うわけ?」

鷹月さんが苦い顔になる。四十院さんも不満そうだ。

それはそうだろう。真面目に準備したのに組み合わせが悪くて一回戦負けになった生徒よりも上扱いをされてしまうのだから。

だが俺からすればそもそもそういう考え方をすること自体が間違っている。結果が全てだという話では全くない。物事の優先順位を取り違えているからだ。

二人ともタッグマッチに変更された意味を考えていないし、自分達が当たり前に考えていることに対して裏を取っていない。

俺がよくやる目先に囚われて最終的にはトータルでマイナスとい

う状態だ。

「それならわた」

「逆に言えばそういう理由だから、僕としてもクラスの人とは組めない」

「えっ?」

「だってタッグマッチを捨てるだなんて進路について諦めろって言うようなものだから。だから僕と組めるのはせいぜい整備科でいいと思ってるやる気もないような人くらいしかいないんだけど、そんな人はこのクラスにはいないでしょ?」

「……」

四十院さん封殺完了。

この人とハミルトンに限り博打を打ってくる可能性があるのだが、四十院さんには進路を引き合いに出して黙らせた。

まあ本当は簡単に反論できるのだが、それができればそもそもシールド権に囚われていない。

「実を言えば別に無理して決める必要もないんだよ。放っておいても織斑先生が勝手に決めてくれるから。だから僕に当たっちゃった人はご愁傷さまでもいんだけど、せっかくだし知り合いを回って話をしてみようかと考えてるだけ」

「そこまで考えてるのなら特に何も言うことはないわ」

「甲斐田さんは本当にそれでよろしいのですか?」

「もし見つけられれば誰にも迷惑がかからないし、がんばる必要もないし、わりといい考えかなとは思ってるけど」

「そうですか」

「こんな感じで俺に幻滅して親に反抗してくれればいいのだが、まあそこまでは望むまい。」

「じゃあそういうわけだから、後はクラスのみんなをクラス内で組ませるようにしておいて。って、この感じじゃみんな聞いているか。もちろん強制するようなことじゃないけど、せっかくだからね」

「分かったわ」

「……」

鷹月さんが不承不承という感じで頷き、四十院さんは俯く。もしかしたら四十院さんは天秤にかけてしまったこと自体を後悔したかもしれない。少しやり過ぎたか。

だがやってしまったものはもうどうにもならないので、表面上は笑顔のまま俺は二人から離れる。

すると俺を追って別の二人がやって来た。これはちようどいい。

「甲斐田」

「甲斐田さん」

「どうかしたの?」

「一応聞くが、お前が真面目にやるといふ選択肢はないのか?」

「ないよ」

「それはどうせできないからと考えているのであれば間違っているぞ。甲斐田が真面目にやるのであれば、できるできないについて何かを言う人間はこのクラスにはいない。結果についても同じだ」

「それくらい知ってるよ」

「ではどうしてでしょうか?」

「簡単な話で、僕にはやりたいことがあるから、そっちに時間を取られる余裕はないんだよね」

「はい?」

俺の答えが予想外だったのだろう。

篠ノ之さんとオルコツトは目を丸くする。

「やりたいことだと!」

「うん」

「そ、それはいったい……?」

「あ、別にクラスの人達にどうこうって話じゃないから。みんなが真面目にやってるのを邪魔するつもりとかないし、何かをしてもらおうとかそういうものもないから安心して」

「い、いや、そういうことではなくてだな……」

「いったい何をされるおつもりでしょうか?」

「それは内緒。今は言えないかな」

「どうということだ?」

「そのうち分かるよ」

「そのうちと言われましても……」

「それ以前にできるかどうかはまだ分からないしね」

交渉の必要があるので駄目な可能性もまだありはする。

だが先輩達に話した感触では大丈夫そうだ。

そして織斑先生も今回は邪魔ができないという仕様だから、実現する現実味は十分にある。

「そんなことよりも二人とも自分のことを考えなきゃ。聞いてただろうけど、悪いけど一夏とは組ませないからね。早く自分のパートナーを見つけないと」

「そ、それは……」

「どうしても駄目なのでしょうか？」

「未練がましいね。誰が得するってわけじゃないんだから、大人しく受け入れてよ」

一応俺もデュノアを抜いた場合にクラスメイトで誰が適切かを考えた。

篠ノ之さん。剣しか持たない前衛同士で組んでどうする。初心者相手なら一対一を作って圧倒するだろうが、連携なんてあったものではない。飛び道具がない分代表クラスやクラスメイト連中に対しては相性も悪い。

オルコット。一見前衛と後衛でよさそうだが、スタイル的に二人は合わない。オルコットが後衛であるから、二人では必然的に一夏は守りの部分を担当しなければならなくなる。回避に優れているとはいえ一夏の機体は攻撃特化なので、攻撃の比重が減ってはもったいない。

鈴。そもそも二組なので候補外。あえて考えてみると、こいつと組むと鈴主体になってしまつて、一夏がサポートに回らなければならなくなつてしまう。先輩達も言っていたが鈴は自分が自分であり、何事においても相手に合わせるという行為が苦手である。一夏と鈴の関係性を考えてみれば一夏が鈴のために動かなければならなくなるだろう。一夏は主役でなければならぬので俺的に却下。

リアーデさん。前衛向きであり留学生なだけあって、クラスの中でも抜けて高レベルだ。だがいかんせん感覚的過ぎる。それは一夏と匹敵するレベルであり、かと言って二人が話すのを聞いていても息が合っているとは言い難い。きつと連携どころではなくお互いがお互いの邪魔をすることになってしまいうだろう。

相川さん。最近目を見張るほどの急成長を遂げているが、どこかに特化しているわけではなくまだ全方位的に力不足。二人組ではなく三人四人いたら便利だろうが、二人では負担が大きくておそらく連戦では体力的にもたない。

鷹月さんもしくは四十院さん。デュノアが駄目だった場合の第一候補。何より一夏を理解していて一夏に指示ができる。二人ともゴーレム戦を経験していて、自分の役割を果たした上にその場で考えることもできるので臨機応変な対応が可能。二人の違いは確実に行くのであれば鷹月さん、攻撃的に行くのであれば四十院さんだろうか。

谷本さん。意外と操縦技術を持っている。だがあのおかしな動きを一夏に移させてなるものか。絶対に組ませない。絶対にだ。

他のパイロット班は一段落ち、整備班はもう一段落ちるので候補にはならない。

「駄目か……」

「仕方ありませんわね」

「ところで二人は一緒に組むの？　ここのところずっと一緒だし」

「え？」

「えっ？」

と言いつつも俺はこの二人に組んで欲しくない。

二人が組むと篠ノ之さんが防御担当、オルコットが攻撃担当になって非常に噛み合うからだ。

いつも一緒だから呼吸も合わせられるだろう。ゴーレム戦を経験しているので試合の感覚も分かる。そして二人とも代表クラスの実力。

はつきり言って優勝候補の一角に上がってしまう。パートナーが

弱いクラス代表では普通に勝てないかもしれない。

「一夏の中じや二人はもうセット感覚になってるし、周りから見てもそうだと思うよ」

「何？」

「一夏さんが？」

「それはそうでしょ。あれだけ一緒にいるんだから。まあタッグマッチで活躍したら二人まとめて褒めてくれるんじゃないかな？」

「む」

「それは……」

微妙にくすぐってみる。

一夏に個人として見てもらえずセット扱いでいいのかと。

「二人とはいえ今回はチーム戦だからね。どちらの方が活躍したか言うような話じゃないし、そりゃあ評価は二人まとめてだよ」

「それは確かに」

「そうなりますわね」

危機感が必要だが同時に焦りを生む。

こここのところ立場が激しく上下しているので、二人ともどうにかしなければならぬと感じているだろう。

誰と組むのが適切か。自分と同じ立場の人間と組むのはどうなのか。

もっといい相手がいるのではないか。

「甲斐田、私は誰と組むのが適当だろうか？」

「それはわたくしも質問したいですわね」

「うーん、でも聞いた通り今回僕は自分のことで手一杯だからなあ。何か困ったら鷹月さんと四十院さんに相談したらいいんじゃないかな？」

「私は甲斐田の意見が聞きたいのだが」

「じゃあ二人に相談してそれでも解決しなかったらまた来て。まさかあの二人じゃ頼りにならないとは言わないよね？」

「む、さすがにそうは言わないが」

「分かりましたわ。まずは指揮班のお二人に相談させていただきます」

す」

そして俺は矛先を指揮班の二人に向ける。

お互いに意識させるためだ。

元々篠ノ之さんと鷹月さんは同部屋で仲がいい。オルコットと四十院さんも入学当初からお茶をする仲である。

上を狙っている鷹月さんと四十院さんであれば、目の前の相手と組むのが自分にとってベストだとすぐ気づくはずだ。そして同時にこの二人を組ませるというもつたいないことをしてはならないと。

篠ノ之さんとオルコットも指揮班という頼りにできる存在であれば、組む相手として適当であると納得できるだろう。一緒にゴーレム戦を戦ったというのもプラスの材料だ。

一夏とデユノアという枷が外れた以上、自分が誰と組むかというのは大問題である。早い者勝ちなので有力候補を捕まえるのに悠長なことはしてられない。申請期限までまだ時間はあるなどと言っている場合ではないのだ。

「あ、先生来た。じゃあ僕は隅っこで見てるから」

「お前は清々しいまでにやる気を見せないのだな」

「一度きちんとやってみればそれなりに得るものはあると思うのですが……」

「気が向いたらね」

まあ一生向くことなどないのだが、手を振って俺は二人から離れる。

そして篠ノ之さんとオルコットは俺が何を言うまでもなく指揮班の二人のところへ向かって行った。

「あ、一夏ちよつとこつちに来なさい！」

IS実技の授業が終わって教室に戻ろうとしたら、廊下の向こうから鈴がやって来た。

隣にハミルトンもいる。なるほど用件は明らかだ。

「どうした鈴？」

「どうしたじゃないわよ！ あんたそのデユノア君と組むって本当?!?」

「そうだけど」

「智希はどうするのよ！ こいつと組みたがる人なんていないじゃない!」

「言われてるぞ智希」

「ほんと失礼だよね」

「あはは……」

一夏から俺、俺からデユノアと流れてデユノアが苦笑する。

「笑いごとじゃないんだからね！ あんた組む人は決まってるの!」

「まだ決まってるよ」

「そういう言い方するってことは当てくらいはあるのね?」

「当てもないよ」

「ないの!」

相手は違えど三度目のやり取り。

「まあまあ鈴、落ち着け。こいつが何も考えてないわけないんだからさ」

「当てもないくせに考えてるってどういうことよ？ いいから一夏が

智希と組んであげなさい。シード権を渡したくないからあたし達と

組めないってのは理解したから」

「やけに聞き分けがいいんだね」

「一夏と智希が組むのなら納得してあげるわ」

「それなら一夏とシャルルでも納得できるよね?」

「は？ 智希、あたしはあんたのためを思って言っただけなのよ?」

「別にそんなこと頼んでないけど」

「はあ!」

相変わらず鈴の導火線が短いのは困りものだが、鈴の意図は理解した。

付き合いが長いだけに、冷静に考えて一夏と同じ結論に達したのだろう。俺が一夏以外とは組めない。

そして一夏と組むのが俺であれば許容範囲として受け入れられる

と。

「別に僕のことなら知り合いはそれなりにいるし、どうとでもなるよ。それよりも鈴の方が問題なんだから」

「はあ？ あたしの何が問題なのよ？」

「鈴って入学が遅れたし、一組に入り浸りだから友達がいらないじゃない。はつきり言ってる僕より組める人がいないよね？」

「な、何を言ってるのよ。それくらい普通にいるから」

「その人に断られなければね。だからハミルトンさん、お願いだから鈴と組んでもらえないかな？」

「えっ!？」

「ちよつと智希！」

「ハミルトンさんに断られちゃうと鈴は本気で組む人がいなくなるんだ。友達としてそれはさすがに忍びないからさ、お願い」

「う、うん。元々そういう話はしてたし」

「そっか。わざわざ気を利かせてくれてありがとう」

「は、はい……」

これでハミルトンも封殺。

四十院さんとハミルトンは上からの指令でタッグマッチを捨ててまで俺と組もうとする可能性があった。

もし俺が困った姿を見せたりしたら、それを伝え聞いた大人達がそういう判断をする恐れは大いにある。

何しろ知っている大人達からしてみれば、その気になればタッグマッチは普通に捨てられるのだから。

「よかったね鈴」

「べ、別にあたしは元々そういう話だったんだから。それよりも智希、あんたはどうするのよ？」

「僕のことならどうとでもなるから大丈夫だよ」

「大丈夫なわけじゃないじゃない。あんたのことを知ってる人ならみんな断るわよ。いい、これは今まで訓練をサボってきたつけなんだからね、きちんと反省して……」

「鈴まで説教始めないですよ。篠ノ之さんじゃないんだから」

「ハッ!? 確かに今あたし箒っぽかったかもしれない……ってそういうことじゃなくて、ほんとにあんたはどうすんのよ!？」

「だからちゃんと考えてるって」

「具体的には?」

「シード権を売る」

「売る?」

「僕と組めばただで三回戦進出」

「進出って……あ! 智希あんた、そんなことして恥ずかしくないの!？」

「別に。どうせすぐ負けるんだし」

「ああそうね、智希はそういう奴よね。じゃあ一夏、あんたはそれでいいの」

さすがに鈴は俺について心得ている。これは話しても無駄だと。

いきなり振られた一夏は困ったように頭をかいた。

「智希とは昨日話したんだけど、智希の好きにさせてやってくれ。本人も言ってる通り何も考えてないわけじゃないのは確かなんだから」「じゃあ何考えてるのよ?」

「知らん」

「それくらい聞きなさいよ!」

「教えてくれないんだから仕方ねえだろ。智希が本気で言わないって言ったら言わないのはお前も知ってるだろ。いつだったか鈴にぶん殴られても言わなかったじゃねえか」

「そ、それは……」

「思い出したくもないことを思い出させてくれてありがとう」

「あ、いや、それはだな……」

「冗談だよ。別に一夏にも鈴にも何かさせようとかないから気にしなくていいよ。何してるかはそのうち分かるだろうし」

「ホントに何する気よ……」

「きつと鈴はあっそで済ませる程度のこと」

「はいはい。まーたくっだらなことを始めるわけね」

確かに鈴にとつてはくだらないことだろう。俺にとつても実験的

な要素が大いにある。

そして失敗したところで大して痛くないから、ここ最近ではかなり気楽にやれるのだ。

「じゃあ話は終わりでいいかな？ いい加減行こうか」

「だいぶ時間食ったな。今日は弁当作ってて正解だったぜ」

「あーちよつと待って。智希にもう一つ話があるから」

「まだあんのかよ」

しまった。もう終わったと油断して逃げそびれた。

心なしか鈴が生き生きしてきたような。

「智希にだけだから一夏とデュノア君は行っていいわよ」

「そんな」

「そうか、じゃあ遠慮なく」

「あ、薄情者」

「別に俺達には用がないんだからいいだろ。鈴、すぐ終わるのか？」

「それは智希次第ね」

「じゃあダメだな。シャルル、行こうぜ」

「いいの？」

「鈴と智希の顔からしてさっさと逃げるべきなんだよこういう時は」

「そ、そうなんだ……」

さすがは一夏、相変わらずいい勘をしている。

もし残ったら鈴の味方をさせられるだろう。そして俺から文句を言われるだろう。

だからこの場合は即逃げるのが正解である。

一夏はそのまま足早に去って行き、デュノアも一度こちらを不安そうに見てから一夏を追いかけて行った。

「はあ……」

「その顔じゃもう分かってるようね」

「そうだね。分かってるからさっさと要求を言って」

「ほんとこういう時はつまんない奴ねえ……」

「鈴」

「大丈夫。いい智希、あんたはこの前ティナに失礼なことしたわよね

？」

「前置きとかいいから要求をどうぞ」

「まったく。そのお詫びになんでもするわね？」

「できることならね。場合によっては絶縁覚悟で断固拒否するけど」

「怖いこと言うわね。でもまあつつつたく難しいことはないから大丈夫よ」

「じゃあそれは何？」

「智希はこれから、テイナのことをテイナと呼びなさい！」

「は？」

なるほど、そう来たか。それは確かに断れない。

「あ、意味分かる？ ハミルトンじゃなくてテイナって呼べってことなんだけど？」

「ああ、そういうことか」

「やっぱ分かってなかったか。ね、簡単でしょ？ まさかできないとは言わせないわよ」

「そりや言わないけど、わざわざそうさせる理由は？」

「あたし達って夏休みにカナダに行くわけじゃない？ それなのに

鈴、一夏、智希、ハミルトン、はおかしいでしょ？」

「今何かおかしいところあった？」

「あのねえ、一人だけ苗字呼びじゃ仲間外れみたいじゃない」

「いや、それ以前に僕達は元々中学からの知り合いなわけで」

「あんたねえ、あたし達がカナダに行くのは親善目的なのよ？ それ

なのにテイナだけ苗字呼びだと本当にこいつらは仲いいのかわかってなっっちゃうじゃない」

鈴にしてはよくもまあ理論を組んできたものだ。

やはり一夏に抱き締められて脳細胞が活性化されたのか。

ならば今度篠ノ之さんやオルコットにも試してみるとしよう。

「ちなみにそれ一夏にも言わせるの？」

「当然じゃない」

「一夏に言うことを聞かせるような話ってあったっけ？」

「ないわよ。別に一夏なら理由話せば納得するようなことだし」

「じゃあ僕はそうじゃないと?」

「当たり前じゃない。どうせあんたのことだから、いいや、これはフォーマルな場なんだからむしろ全員苗字で呼び合うべきだ、とか言い出すでしょ? だからこうやって強制させるのよ」

「なんだそれ」

まさかの大当たりである。本当に鈴はどうしてしまったのか。

呼び方の問題などカナダに行くことになった時点で気づいていた。

俺としては特にカナダをこちらに引き込む理由もないので、ほどほどの距離を作っておこうと考えていたのだ。

それなのに要求どころか逃げ道を潰すまでしてくるとは。

せめて反省して今後は鈴に対する認識を改めきちんと警戒するようにしよう。

「じゃあこれで納得したってことでいいわね?」

「はあ……。これって鈴の考えだけど、ハミルトンさんはそれでいいの?」

「ティナ!」

「ティナさんはそれでいいの?」

「もう一声!」

「叩き売りじゃないんだから。何の話?」

「さんもいらない!」

「別にそれはあっていいでしょ」

「何言ってるのよ。あんた今の自分の立場分かってる?」

「そうきたか……」

「はいもう一回最初から!」

「はいはい。これって鈴の考えなんだけど、ティナはそれでいいの?」

「うん。むしろその方が……!」

「そっか。じゃあ今後はそういうことでよろしく」

「うん」

「ティナ!」

「あ、えっと……よろしく、智希」

「はいよくできました!」

なんだろう、ものすごくいたたまれない。

しかしそれにしても鈴はどうしてここまで熱心なのか。

……いや、分かった。そういうことか。ハミルトンは鈴にとって初めての女友達なのだ。

鈴は基本人とつるまないし、つるんでも俺達は男なので女相手のようにはいかない。

一応一つ下の蘭という友人はいるが、奴は同時に一夏を巡るライブでもあるからお互いに牽制してしまう。

小学校高学年から一夏関連で同級生相手に暴れ回っていたので、鈴に近づいてくる人間自体が少なかった。

だからこうやって気楽に話せる友達ができて嬉しいのだろう。

利害関係もないし、蘭とは違って飛び抜けて優秀な鈴と同レベルで会話できるので話をしていて噛み合わないこともない。

きっとこれは鈴の友人として微笑ましく見ておくのがいいのだろう。後で一夏にも言っておこう。

「じゃあもういいかな？ 実を言うところの後行かなきや行けない場所があつて、あんまり余裕ないんだ」

「そうなの。それは引き止めて悪かったわ。もう大丈夫だから行つていいわよ」

「それはどうも。じゃあまた」
「またね！」

いちいち付き合わされるハミルトンも大変だろうが、これは親善の話として悪いことでもないから素直に受け入れたのだろう。あるいは鈴に対して引つ込みがつかなくなつてしまったか。

あまりエスカレートされてはお互いに迷惑なので、ひどくなりそうならまた対策を考える必要があるかもしれない。

歩きながら振り返ると、鈴はまだはしゃいでいた。

余計なことに時間を取られてしまった。

俺は一番目の目的地へと向かって足早に廊下を進む。

途中、四組の教室前を通る。通りすがりに目をやると、布仏さんの姿が見えた。

いつもの笑顔のまま口を動かし、身振り手振りで場を盛り上げようとしているようだ。

だがぱつと見の感触では孤軍奮闘と言ったところか。今までの積み重ねもあるし、急にやったところでさすがにすぐうまくいくということはないのだろう。

言い出した手前もある。今度様子を聞いて、どうにもならなさそうならまた別のやり方を考えた方がいいかもしれない。

少なくとも更識妹にタッグマッチのパートナーとしての価値は十分過ぎるほどある。本人に組む意思があり布仏さんを通じて交渉可能なのだから、誰も見つからないということはないはずなのだ。

そして目的地に到着する。

既に席は知っているの、俺は前側ではなく後ろの扉を開けた。

「失礼しまーす」

一瞬で教室内が静まり返る。いきなり男の声が聞こえればそうもなるだろう。

奴は窓側の一番後ろ、まさにぼっち席と言える場所で弁当を食べていた。よかった。いた。

静寂の中俺は元五組代表で現ぼっち、佐藤に向かって歩みを進める。

佐藤は箸を持ち上げたまま呆然と俺を見ていた。

「ああよかったいたいた。佐藤さん、ちよつとお話があるんだけどいい？」

「あ、ああ……」

「と言つても長くなるので、ご飯止めちゃって悪いんだけどいったんしまつてそれ持つて一緒に来て」

「えっ？」

「二度三度同じ説明をするのもなんだからさ。はいしまつてしまつて」

「え？ いや、だが何の話を……？」

「この前佐藤さんが僕にお願いをしに来たじゃない。それに応えてあげますって話だよ。だからむしろ望むところでしょう？」

「そ、それは……」

敬語も捨て有無を言わせない口調で混乱状態の佐藤を押し切る。

悪いがここではノーと言わせない。

佐藤を急かして弁当を片付けさせる。

「じゃあ行こうか。ついて来て」

「あ、ああ」

「ちよつと待て！」

当然、横槍は入る。

声のした方を向くと現五組代表の杉山が立ち上がっていた。

「ああもう出て行くのお構いなく」

「そういうことじゃないから！ 何勝手に入って来てんの!？」

「別に関所とかなかったし通行料を払う義務はないよ」

「はい!? あんたバカにしてんの!？」

「別に馬鹿になんてしてないよ。馬鹿にするまでもない雑魚なんだし相手にもしてないだけ」

「はあ!？」

と言いつつ相手にしているのはもちろん煽るためである。

どうでもいいとはいえ五組も参加者だ。大して期待もしないが賑やかしくらいにはなるだろう。

「佐藤さんにポッコボコにされるような人なんてお呼びじゃないんで。じゃ」

「いいから待ってって言ってるでしょうが！ 男が偉そうに」

「キンキンうるさいなあ。五組のみなさんも大変ですね？ こんなのにごき使われ続けるとか」

「さつきから何ふざけたこと言ってるの!？」

「でも今度のタッグマッチで化けの皮が剥がれるんで、みなさんも冷静に考え直した方がいいですよ」

「だからいい加減に!？」

そして俺は扉を蹴りつける。

再び教室は一瞬で静まり返った。

こういうことをするとますます男は野蛮だと言われてしまうのだが、効果的であるのもまた事実だ。

女があの手この手で男を押さえ込もうとするのは実に理解できる話である。

「行こうか」

「あ、ああ……」

「それじゃ失礼しましたー」

廊下に出たらきちんと扉は閉める。そして確認。よし、特に壊れてはいない。

音を出したただけなので大丈夫なのは分かっているが、万一壊していたらまた面倒なことになる。

「じゃあついて来て」

「あ、ああ……」

もはやオウム返ししかしなくなった佐藤を引き連れて、最終目的地である俺の演説会場へと足を進めた。

「三組だと……う？」

はつきり言つて五組の教室から数十メートル、目と鼻の先である。

だが佐藤が我に返るだけの距離ではあったようだ。

「そうだよ。とりあえず佐藤さんは一緒に話を聞いてて。乗るかどうかはその後でいいし、別にその場で決めろとも言わないから」

「わ、分かった」

今度は教室の前の扉を開ける。もちろんそのまま入って行くなどしない。

「おお！ そちらからわざわざ来てくれたのか!？」

扉を開けるやボーデヴィツヒが笑顔を浮かべてやって来る。

だが奴の元いた場所がおかしい。どう見てもベツティの膝の上だ。

まるで逃げ出すかのような動きだったので、もしかしたらおもちゃにされていたのかもしれない。

「あ、別にボーデヴィツヒさんに用はないんで」
「なんと」

ボーデヴィツヒはそのまま体勢を崩して床へと滑った。
まるで漫画のような、いや子供のような動きだ。

教室内はくすくすと微笑ましい光景を見るような暖かい眼差しである。

「ベツティさん」

私？ という仕草で三組代表ベツティは自分の顔に向かって指を向ける。

正確には俺の目的は三組の全員だが。

「この三組って奇数ですけど、タッグマッチのために外から誰か連れてくるとかそのへんの対策しました？」

「いや？ 昨日知った話だしまだそういう段階じゃないけど」

「ならよかった。とてもいい候補を連れて来ました」

「えっ!?!」

そして俺は自分の後ろに立つ佐藤を指し示す。

いきなり呼ばれた佐藤もびつくりだろう。

「なおベツティさんのタッグマッチのパートナー候補でもあります」

「は!?!」

「ええっ!?!」

「これで二人はタッグマッチの優勝を目指すことができる」

啞然とする二人を尻目に、俺は壇上へと上がる。

「そして三組のみなさん、優勝なんて二人に任せて放り投げて、その代わりにこの三週間、つまりタッグマッチを有意義なものにしてみませんか？」

2.2. お届け物

教師役などという慣れない役回りを押し付けられて肩が凝った。

今はようやく質問攻めも落ち着き、場は緩んだ空気となり雑談が始まっている。

「甲斐田君、お疲れ様でした。水を持って来ましたのでどうぞ飲んでください」

「わざわざありがとうございます」

「いいえこれくらい。むしろ途中で水を切らしてしまつて申し訳なかつたです」

「喋り続けるとけつこう喉つて乾くもんだね。それとも梅雨のせいなのか？」

「どうなのでしょう？ 私はあまり話す方ではないのであまりピンとこないのですけれど」

ようやく訪れた土曜の自由時間は、この勉強会によってほとんど潰されてしまった。

先週軽い気持ちで岸原さんのお願いに頷いてしまつた報いである。

「まあなんでもいいか。でもそれにしてもみんな暇なのかな？」

「そういうわけでは全くないと思えますけれど、どうかしましたか？」

「だつてこの場にクラスのほとんど全員がいるじゃない。今いないのは一夏とシャルルと……整備班の何人かくらい？ もつと他にやることないのかと普通は思うよ」

「そんなことはありません！ みんな甲斐田君の話聞くために都合つけてきたんですから！」

「大げさな」

「全然大げさな話じゃないですよ。これからタッグマッチが始まるんですし、みんな今学べることは学んでおきたいんです。だつて集団戦なんて最高のサンプルじゃないですか」

土曜の午後ならみんな自分の好きなことをしたいだろうから参加

者も少ないはずだ、と見積もったのは完全に誤算だった。

むしろ土曜の午後なら長時間できると喜ばれてしまい、クラスメイ
ト連中もそれならとわざわざ都合を合わせてしまったようである。
素直に平日の放課後にして夕食の時間だからで打ち切れればよかった。
おかげでもう三時間も付き合わされる羽目になってしまっている。

「サンプルねえ」

「でも甲斐田君はすごかったと思います。あ、集団戦のこともそう
なんですけれど、今日この場であんなに激みなく話し続けられるだ
なんて。私だったら絶対言葉に詰まっちゃいます」

「それは指揮班で反省会をやったからだよ。できる範囲で分析も
したし、今日はそれを話しただけ。だから鷹月さん達から聞いた時と
内容は一緒でしょ？」

「そうでもなかったですよ。鷹月さんと四十院さんの話ではあく
まで指揮される側としての立場でしたし、今日は完全に指揮をする
側の視点です。そういう風に見えるのかってすごく参考になりました」

「別に指揮科を目指すわけでもないならそこまで知る必要ない
と思うけど。それとも岸原さんって実は指揮科目指してるの？」

「とんでもありません！ 無理なものもありますけど、それ以前
に私は人の前に立って話すのが苦手ですから」

岸原さんは冗談じゃないとばかりに両手を振るが、まあ確かにこの
丸眼鏡ちびっ子は人前に出たがるタイプではない。どちらかなどと
言うまでもなく、今日のように裏方として走り回っている姿が板に
ついている。

今回俺を引っ張り出す算段をしたのは岸原さんだそうで、実行に
まできつけたあたり企画して何かをやるという方向に適正があるの
だろう。

「ちよつと甲斐田君、やっぱり反省会の時は全部喋ってなかつた
わね。わざわざこうやって勉強会の形を取って正解だったわ」

「そんなに言うほどでもないと思うけど」

「何言ってるのよ。私達が聞いた時は適当に答えてたくせに、今日
他の人達から厳しく突っ込まれたらポロポロ漏らしてたじゃない。無

人機を見破った時の話なんて聞いてないわよ」

「そうだっけ？」

「これだから。どうせあの時はさっさと終わらせようって適当に流したんだらうけど」

「うーん、あんまり覚えてないなあ」

と言うのは後で作った話だからである。

ゴードンに関連についてはさすがに元から思いつく素地があったとは言えない。

鷹月さんに突っ込まれた時は誤魔化すしかなかったが、今回突っ込まれると困る部分については事前にもっともらしく捏造しておいた。その差だ。

「はあ、この分じゃもつと隠してるんがあるそうね」

「隠してるだなんて人聞きの悪い」

「できればこの場で暴いておきたいところなんだけど、この後時間ある？」

「それは無理。これから一夏のところに行かないと行けないから」

「織斑君？ 今日倉持技研が定期検査で来てるんじゃないか？」

「そうなんだけど、倉持のお偉いさんが来てるみたいで僕に会いたいと言ってるそうなんだよ。用件とかよく分からないからいつまでかかるのかという感じ」

「それなら仕方ないわね……あ、そうだ、それとは別件なんだけど、夜に相談させてもらっていい？」

「相談？ 何を？」

「詳細はその時話すけど、今は個人的なことだけ」

と、鷹月さんは周りを気にする仕草を見せた。

タッグマッチ関連で何か問題でも起きたのだろうか。明日でなく夜とはそれなりに緊急性がありそうだ。

「解決できるかはともかく聞くだけなら」

「ありがとう！ じゃあまた夜に甲斐田君の部屋まで呼びに行くわ」

「あ、それなら八時から一時間はいないからそこは外してね。今日は

「一夏とシャルルと大浴場に行く予定だから」

「そうなの？」

「うん。シャルルはいつもシャワーだけで日本の風呂には入ったことないんだって。だから一度体験してもらおうって一夏と話をしたんだ」

「そうなんだ。今日って予約入ってたかしら……？」

「予約をしたのは僕だからさすがに予約し忘れとかないよ」

デュノアから何事かを聞いて以来、一夏の態度がたびたびおかしくなる。

今日もISスーツに着替える時に俺を更衣室の外まで連れ出し、りしていた。

デュノアが恥ずかしがってるからなどという意味の分からない言い訳をしていたし、何かを隠そうとしているのは間違いない。

俺としても嫌な予感がしてきたので、この際確かめようと言う話だ。本人達には五組の教室に寄る前に伝言しておいたのもう知ってはいるだろう。

「それもそうか。私の見落としね」

「僕もまだ一回しか入ってないけど、あの大浴場って開放的で雰囲気がいいじゃない。リラククスするにはいいかなと思って」

「そういえばデュノア君は寝れてないとか言ってたわね。分かったわ。じゃあ九時くらいに」

「了解。岸原さん、もう行っっていいかな？ 別に時間決まってるわけじゃないけどあんまり待たせるのも何だからさ」

「あつ、ありがとうございます。もう大丈夫です」

「じゃああとよろしく」

言うや俺は早々にこの場から逃げ出した。

もう十分過ぎるほど義理は果たした。いい加減俺の好きにさせてもらう。

と言っても、この後も俺の意思ではなかったりするが。

それにしても倉持技研の偉い人が俺に用とは何だろう。まさか俺に所属しろとか言うような話ではないだろうし、俺から何か聞きたい

ことでもあるのか。

更識妹関連だとかなり面倒なことになるので触りたくないのだが、向こうから来てしまった以上がどうしようもない。

とりあえずは相手の反応を見て対応を考えることにし、俺はアリーナへと向かうことにした。

察を出ようとしたらデュノアに出くわした。

ちようどエレベーターが開いたところで、ばったりと向かい合った形だ。

俺を見るやデュノアは目を丸くして口を開き、それから慌てて両手を後ろにやる。

「何そんなに驚いてるの？」

「あ、いやちよつと不意打ちだったから」

「別に隠さなくていいよ」

「えっ!？」

「それって薬でしょ？」

俺を見てから隠したのではさすがに見えてしまう。

それは小さな白い紙袋で、ついこの間見たものとまったく同じだ。

「ど、どうしてそれを……!？」

「この前一夏が気を失った時、医務の先生が念のためって一夏に胃薬を渡してたじゃない、その紙袋に入れて。医務の先生のところに行ってきたんだ」

「う、うん……」

「やっぱりまだ眠れないの？」

「えっ? あ、うん、なんかいい加減強情張ってるみたいだし、鷹月さんに言われた通り素直に頼ってみようかなと」

「ということは睡眠関係以外にもあるわけだ」

「えっ!？」

俺の質問に対して意外だという反応をされては、その袋の中に別の薬も入っていることくらい容易に想像できる。

これはいよいよ俺の危惧が現実のものとなってきた。

「別に何の薬を飲んでるとか詮索するつもりはないから。医務の先生に相談して、薬をもらってきたんだよね？」

「う、うん……」

「ならいいよ。素人が口出すようなことじゃないし。でもその上で聞くけど、僕らに何かできることはある？ いや、と言うよりは気を遣って欲しいことになるか」

「ううん、それは全然大丈夫。先生に相談して、とりあえず薬飲んでみて様子を見ようって話だから」

「そっか。それならいいんだ。じゃあお大事に」

「う、うん……。あ、どこへ？」

「よく分かんないんだけど、一夏の所属してる会社の人に呼ばれたんで行って来るよ。だから多分一夏と一緒に戻ってくることになると思う」

「分かった」

「そんなに遅くはならないと思うけど、待ちきれなかったら先にご飯食べてて」

「でも遅くなったら寝ちゃってるかも」

「だからそんなに遅くは……ああ、そういうことか。じゃあその時は食堂の人に話をして、シャルルの分を取っておいてもらうよ」

「ありがとう。その時はよろしく」

お互い笑顔でシャルルと別れる。

だが俺の心は外の空と同じで灰色だ。デュノアが変調をきたしているようなのだから。

もちろん日本の気候も要因の一つではあるだろうが、根源が海に向うにあるのは間違いない。

デュノアの母国フランスではデュノア一家のスカンダルで大騒ぎになっている。そして今や渦中のだ真ん中にいたデュノアは母国を出なければならぬほどの状況だ。

それは心労も蓄積されるだろう。

タツグマツチに巻き込んでしまったのは早計過ぎたか。そちらに

集中していればかえって余計なことを考えずに済むかもしれないと思っていたのだが。

それに母国から指示を受けているのだろうし、一夏の側にいてその役割を果たせば少なくともその方面でストレスの追加はないだろうと考えていた。

と言っても、今の状況がそこまで悪いかと言うとそうでもない。

今のデュノアは弱っている。これは俺にとっては好機だ。

そんな状態で一夏の側にいたらどうなるか。はつきり言つてカモネギである。

この方面に関しては男女など関係ない。一夏から直接あれこれ世話をされた日には、あつという間にデュノアは一夏に取り込まれるだろう。

今は意識が母国や家族に向いているかもしれないが、そのうち重心がだんだんこちら側にかかってくる。一夏を中心として物事を考えるようになってくる。そうなればしめたものだ。俺がわざわざ何か特別なことをしなくとも、デュノアはこちら側の人間になる。

とどめに俺が男性IS操縦者として共有できる感覚の話をすればもう迷わないだろう。元からISを動かせる一夏には分からない感覚だが、デュノアなら理解できるはずだ。それで完全に一蓮托生にできる。

そうなればもうデュノアにとって母国の問題など些細なことだ。できれば夏休みまでにこちらに引き込んで、夏休みにフランスに行つて全部終わらせてしまいたいところである。

だからこそタッグマッチは渡りに船だった。一夏と二人で何かをやるほど効果的なことはない。極端な話今回のタッグマッチは捨ててもいい。デュノアを引き込めるのであればだが。

もちろん俺は俺でやれることをやる。幸いにして今回は俺の出演が無いほど余裕があるのだ。ならば俺はお膳立てすることに力を注ごう。うまくやれば理想的な結果になるし、どれかがうまくいけばまあ今回はよしだ。

アリーナの指定された場所に着くと、一夏はまだテスト中だった。指示されてのことだろうが、自分の専用機に乗って曲芸飛行のように飛び回っている。イグニッション・ブーストも多用しているようにだし、なるほどできることが増えればテスト項目も複雑になっていくのだろう。

「甲斐田君こっちつすよー！」

「はい？」

ぼんやり見ていると声がかかった。

見ると大きく手を振っている作業服姿の女性がいる。誰だったか。ああ、リーグマッチの時機体の整備要員として待機室にいた人だ。

「今日は悪かったつすねえ。わざわざ来てもらっちゃって！」

「いえいえとんでもないです。今一夏は何をしてるんですか？」

「負荷試験つすよ。イグニッション・ブーストは便利なんすけど、機体と操縦者に負荷がかかるんでどこまでできるのかって話つす」

「そんなに危ないものでしたっけ？」

「競技程度なら特に問題はないつす。その前に本人が疲れるんで。今は機体の限界性能を調べるために機体にだけ無理矢理負荷をかけてるところつすね」

「そういうのって今までやってなかつたんですか？」

「織斑君が乗った上でどうかという話つす。専用化処理によって機体の性能が底上げされてるんで、織斑君が乗った状態でないと確かめられないんすよ」

「なるほど、一夏がイグニッション・ブーストを使えるようになったからこそですね」

見る限り一夏も疲れ果てているという感じではない。飽きてはいらぬようだが。

やがて一夏が俺に気づき、嬉しそうに両手を大きく振る。どうやらかなり退屈していたらしい。

だがその気持ちはよく分かる。あれをしろこれをしると言われるだけで、こちらとしてはただ従うだけだ。何時間もやらされてはうん

ざりしてしまふ。

俺ならまだ解説を聞いたりして気を紛らわそうとするのだが、一夏はその方面に興味が一切ない。今飛び回る姿を見ても相当に雑だし、早く終われと願いながら時間を潰すつもりで適当にやっているのだろう。

「あ、今日はもう無理っすね」

「そんなの分かるんですか？」

「甲斐田君が来たからもう終わりだと思って完全にやる気なくなってるっす。ほら、周りも片付けを始めたっすよ」

「それでいいんですか？」

「いいも何もそうするしかないっす。こっちとしちやお願ひしてやつてもらってる立場だし、これ以上無理は言えないっす」

前言撤回。わがままが許されるとは大分俺と違っていい立ち位置にいる。

俺などは昼飯の要求を二時間も無視され続けたというのに。

「はーあ。甲斐田君は卒業したらうちに来ないっすか？」

「いきなり何ですか？」

「あの織斑君に言うことを聞かせられるんだからそりゃあ大歓迎っすよ。もうそれだけで給料払ってもいいと思えるくらいで」

「いやいや、給料を払うのはあなたじゃないんですから」

「意外といけるかもしないっすよ？ 芸能人のマネージャーみたいな感じで」

「一応僕もISを動かせるんですが、それだけでいいんですか？」

「あつ、そういえばそうだったっす！ それは確かに厳しいっすねえ……そうだ、実はISを動かせませんでしたとかそういうことはないっすか？」

「じゃあまずは全世界に公表されているデータを改ざんするところからですね」

この人も疲れているのだろう。もはや言っていることが滅茶苦茶である。

しかし一夏はここでは相当に問題児なようだ。言われてみれば一

夏は普段から周囲にたしなめられるような発言が多い。日常であれば俺や周りにいる人間が容赦なく突っ込むが、この人達は立场上強く言えないのだろう。そうなるのと誕生するのはわがまま小僧となる。

「智希おせーぞ。終わったならさっさと来てくれよ」

「終わってさっさと来たのが今なんだけど」

「はあ？ あれからもう三時間以上経ってるだろ？ お前のことだからさっさと終わらせて遊んでたんじゃないのか？」

「失礼な。今までその三時間ずっとやってたんだから。時間がかかったのはクラスのほとんどが参加したからだし、疑うんならみんなに聞いてみれば？ あ、でも一夏なら僕がみんなを脅迫したとか言いそうだね」

「悪かったよ。勉強会とか言ってたから一時間くらいで終わると思ってたんだ。三時間もやってたのか」

「質問攻めではつきり言って疲れたね。タッグマッチのためになるとか言ってたし、みんな本当に真剣なんだよ」

「そ、そうなのか……。やばいな、俺だけ置いて行かれた気分だ」

ようやく現実を認識して一夏がしゅんとなる。

一夏も休み休みにしても三時間もISに乗り続けていたのだから、それはそれでアドバンテージになるはずなのだが。

「ああ甲斐田君はやっぱうちに来て欲しいっす」

「まだ引っ張るんですか」

「何の話だ？」

「僕が倉持技研に就職しないかって話。それで一夏に真面目にやらせようって」

「う、それは……。あれ、意外といいんじゃないか？ 智希がいたら俺も

退屈しないで済むし」

「そうっすよね！」

「じゃあ二人で仲良く日本を世界を説得してください」

「そんな……。二人で仲良くだなんて……」

「二人で全部やれとかそれはちよつと無理だな」

「そこで梯子を外すっすか!？」

「はいはい漫才はそこまで。甲斐田君ごめんね」

振り返れば見慣れた一夏担当の技術者が呆れた顔で立っていた。

「いい甲斐田君、これから起こることについては深く考えちゃ駄目よ」
「何ですかそれは？」

「そういう何とかなぜとか考えちゃいけない。ただあるがままを受け流す」

「はい？」

「智希、この人の言ってることは何も間違っちゃいない。本当にそういうことなんだ」

「一夏まで」

「別に感じろとかそういう話じゃない。大事なのは気にしないことなんだ。それさえ守れば何も問題はない。ないはずなんだ」

「いったい何が始まるわけ？」

「そういうことを考え始めたら終わりよ。いいこと、甲斐田君は今からうちの所長に会って挨拶をし、当たり前障りなく会話して終わらせる。ただそのことだけを考えて」

「それ以外に何があるんですか？」

「何も無いわ。それ以外に何もあるはずがない。そうでなければならぬのよ」

この二人はわざわざ俺の不安を煽って何がしたいのか。

揃って真剣な顔ではあるが、善意で言っているのか、それとも悪意、すなわち悪乗りして言っているのか判断しかねる。

「だいたい言うことが本当であるのなら、流す行為こそ相手の思うつぼだ。相手はそういう必死に流そうとしている姿を見て心の中で笑っているのだから。」

「とりあえず言いたいことは理解しました。それで、その所長さんはいつ来るんですか？」

「さつき連絡入れたからすぐ来ると思うわ。きっと今は準備中」

「そうですか」

「それまでは……そうね、座禅でもしてましようか」

「なるほど、心を落ち着かせるためにもいいかもな」

俺としてはどちらかと言うところの二人に突っ込みを入れたい。

「普通に雑談してればいいじゃないですか。一夏、相川さんに伝言頼んでただんだけど聞いた？」

「あ、それな」

「聞いてるならいいよ。シャルルには？ さっき出くわした時に聞きそびれちゃったんだけど」

「うん、一緒にいたからシャルルも知ってる。それでだな」

「まだ躊躇ってるの？ 怖がってるだけならもうさっさと連れて行くよ」

「あのさ、それなんだけどな、シャルルがどうしても嫌だって言ってる」

「そこまで怖がってるの？ というかISには水中訓練とかあるんだし、水を怖がってたなら駄目なんだけど」

「いや、別に怖いとかそういうことじゃないんだ。その……」

「恥ずかしい？」

「そうそれ！ シャルルが恥ずかしいから嫌だって言ってるんだよ」

「へえ、それを一夏は聞いちゃうわけ？」

「だって本人がそう言ってるんだから仕方ないだろ」

「僕の場合は無理矢理脱がして風呂に叩き込んだ癖に？」

「あ。そ、それは……」

どうしてできもしない嘘をつこうとするのか。しかも俺相手に。

素直にデュノアに任せていればいいものを、変にやる気を出すからこういうことになる。

だが一夏の心情は理解できた。たまにある、心配で放っておけない病が発症しているようだ。

「はあ。要するにシャルルは見られたくないんだね？」

「えっ!？」

「午前中もそうだったじゃない。着替えを見られたくないんでしょ？」

「いや、それは、その……」

「分かったよ。じゃあ寮に戻ったら大浴場はキャンセルしておくから」

「いいのか？」

「いいも何も嫌なんですよ？ シャルルにはもう言わないからって伝えておいて」

「お、おう……」

別に俺は一夏をいじめたいわけではない。

デユノアにしてもそうだ。

「ちなみに、その理由は一生言えないようなこと？」

「それはない」

「言い切るね」

「さすがにそんなことはさせない。ただ今は……踏ん切りが付かないだけなんだ」

「ならいいや。じゃあ付け加えて伝えて欲しいんだけど、できればタッグマッチが終わった後、遅くても夏休みの前には踏ん切りをつけてって」

「伝えるだけなら伝えるけど……夏休み前ってそんなに急ぐことなのか？」

「一ヶ月あつて言えないならもう言えないよ。それに多分夏休みはフランス行くことになるだろうし、早いに越したことはないから」

「フランス？ そんなの聞いてねえぞ」

まだそういう話は全く出ていない。だが俺の中ではもう確定だ。

誰も言い出さなければ俺が言う。

「シャルルの周りが大変なことになってるくらい知ってる。だからそのままにはしておけないでしょ？」

「智希……お前知ってるのか？」

「おおまかな話くらいだけだね。どの道逃げたままじゃ何も解決はないんだ。だったらさっさと乗り込んで決着をつけよう」

「それは……そうだな」

「他でもない仲間のためだしね」

「仲間？」

「シャルルは僕らの仲間でしょ？」

「それは……ああ、そうだな」

「じゃあこの話はこれで終わり。それではお待たせしました！」

「えっ!？」

どうせもうスタンバっているだろうと思い、虚空に向かって声を出す。

できれば入ってくる方向に向かって言いたかったが、生憎とこの部屋にはドアが三つもあるので指定まではできない。

「……?」

「来ないぞ?」

「ふむ」

まだ早かったか。

てつきり準備は最初から済んでいて、本人が到着すれば始められるくらいにはしていると思っていたのだが。

「ん?」

「なんだこの音?」

「あ」

何かが動く音がすると思ったらすぐにその正体は分かった。

部屋のと真ん中、机の上の天井の一部がゆっくりと開いていく。

「動いてる!」

「あーまた改造された!」

二人ともあるがままを受け入れろと言いながら速攻で反応している。

なるほどこれでは毎回いいように遊ばれてしまうだろう。

天井の穴は人が一人通れるくらいの大きさに広がって止まった。

そしてそこから鉄の梯子がゆっくりと降りてくる。

「な、なるほど、今回はそこから……」

「また意味のないこととして……!」

二人とも視線は天井に釘付けだ。

ということは敵は普通に来る。

「どーもこんにちはー！」

「ええっ!？」

「そっちかよー！」

その所長らしき女性は普通にドアを開けて入ってきた。

「初めまして」

「初めましてー！ 倉持技研第二研究所所長の篝火ヒカルノ（かがりび ひかるの）と申しませう！」

「甲斐田智希です」

「あ、こちらは私の名刺です。どうぞお持ちください」

「これはわざわざご丁寧に」

そして俺達は普通に挨拶を交わす。

確かに名乗った通り俺を呼び出した張本人なようだ。

「すみませんねーわざわざ来てもらっちゃって」

「とんでもないです。こちらこそ用事がありました」

「そんな、無理を言つて来てもらったのに気を遣われなくても」

「でも篝火さんこそかなり急いで来られたんですね？ 髪が汗で濡れていますよ」

「いえいえ、これは汗なんかじゃないです。実は今まで海で漁をやつてまして、つい夢中になってしまつて」

「なるほど、そういうことでしたか。ちなみに成果はどうでしたか？」

「それが全然で。できれば大物を釣り上げておみやげとして持って行ってもらいたかったのですが、かかるのは小物ばかりで」

「それは残念でしたね」

「あ、でもおみやげ分くらいはありますので、どうぞお持ち下さい」

「これはわざわざありがとうございます」

「待てっ！ 待て待てっ！」

耐え切れなくなつたのか一夏が割つて入ってきた。

せっかく俺は二人の言つた通りに行動していたというのに。

「どうしたの一夏?？」

「どうしたじゃねえよ！ 何お前普通に話してんだよ！」

「普通に話をして何かおかしいこともあるの?？」

「大ありだよ！ 漁ってなんだよ！ そこは普通に会話するところじゃないだろ！ ドン引きしながらも何事もなかったかのように流すところだろ！ むしろお前の方から振ってんじゃねえよ！」

「いや？ だって篝火さんはまさにそういう格好じゃない」

篝火所長の格好は上からシユノーケルに水中マスク、水着と見せかけてISスーツ、手には銚とおみやげ用の魚の入った袋、下に足ひれである。

どこからどう見ても素潜りしてきましたという姿だ。

「水着からおかしくないだよ！ この場でそんな格好してること自体がおかしいだろ！ IS学園の中に海なんかねえよ！ 池はあるけど釣りは禁止だよ！」

「一夏、それは違う」

「な、何が違うんだ？」

「篝火さんが着てるのは水着じゃない。ISスーツだ」

「どうでもいいわ！」

「ISスーツって水着と一緒にしていいんですか？」

「うーん、確かに水着としての役割も果たせますので広義では含めていいと思いますが、性能の差を考えるとさすがに一緒にされるのは……」

「だって。それはそうだよね」

「よーし分かった。お前は俺の話の聞くつもりがないんだな」

しまった。遊び過ぎた。

一夏は一発殴らないと気が済まないという形相になってしまっている。

すると篝火所長は手にしていた銚を一夏に向ける。

「な、なんだよ」

「甲斐田君とお話があるのでちよつと大人しくしててね」

「うわっ！」

「きゃあっ！」

言うや銚からなぜか網が発射され、あつという間に一夏と倉持の人は絡め取られる。

障害物競走で身動きが取れなくなったような状態だ。

「じゃあ甲斐田君、こちらへどうぞ」

「あ、はい」

篝火所長は入ってきたところとは別のドアを指し示す。

一瞬降りてきた梯子の上に登ることを期待してしまっただけの内緒だ。

「まさか乗ってくれるとは思わなかった」

「あ、駄目でした？」

「こうやって話ができたんだから何も問題なし。最初の予定ではあの網で甲斐田君を攫うつもりだったんだけど、乗ってくれたおかげで久しぶりに楽しいひとときが過ごせて幸せだったわ」

「それは何よりです」

ということは入ってきてからは全てアドリブか。

これはもしかしたら好敵手を見つけてしまったかもしれない。

生徒会長など足下にも及ばない高レベルな相手だ。

「さて話の前に、この部屋は完全に密室になって、盗聴や盗撮される恐れは一切なし。それは倉持技研に限らず、IS学園からも、それ以外からも」

「それ以外？」

「ええそうよ。それ以外からも」

妙に気になる言い回しだ。強調するあたり怪しいが、まさか博士のネットワークに気づいているとも言えるのだろうか。

「よく分からないけど分かりました」

「うん。それで今日私が甲斐田君をお呼びした用件はただ一つ。お届け物よ」

「お届け物？」

はて、わざわざ密室で渡さなければならぬものとは何だろう。そして送ってきた相手は誰だろう。今怪しいのはフランス、ドイツあたりだが、あの二人を飛び越えて俺に届くというのも何かおかしい。

「どうぞ」

机に置かれたのを見た瞬間、心臓が飛び出しそうになった。

なぜ『あれ』が、ここにある。

「よかった。反応してくれたってことはこれが何だか知ってるわけね。何が何だか分からないって顔をされたらどうしようかと思っただわ」

「……」

「そんな顔しないで。私はこれが何であるか知らないし、一切詮索するつもりもない。私の役割はただこれを甲斐田君に届けることだけ」「二ついいですか?」

「なんなりと」

「伝言とかその手の類はありますか?」

「いいえ、ただこれを渡してもらえばいいとだけ」

「そうですか」

今現在その存在を知っているのは世界で二人しかいない。

俺と博士だ。

クロニクル博士はもうこの世にいないし、クロエは記憶ごと吹き飛んでしまっている。まあ博士が教えていれば知ってはいるだろうが、それはあくまで知識としてでしかない。

クロニクル博士は一つしか作れず、それは俺がクロエに使って壊してしまった。

つまりこれを作って送ってきたのは博士以外にありえない。そして構造を把握している博士にしか作れない代物だ。

「ではありがたくいただきます」

「はーっ、よかった」

「そんなに大きく息を吐くようなことですか?」

「私にとってはね。甲斐田君が受け取ってくれたら天国、拒否されたら地獄一直線で命の危険さえある、そんな状況だったから」

「それは……確かにありそうですね。心労をおかけしました」

「それだけで理解でき……ああごめんなさい。なんでもないから」

「別に大丈夫ですよ。命までかけるつもりでやってもらったのに仇で

返すなんてことはできませんから」

「それでもごめんなさい。詮索しないって言うっておきながらこれで」
篝火所長は額に冷や汗までかいている。

気持ちは分からなくもない。今まさに深淵を覗き込んでしまった状態なのだから。

俺と博士が繋がっているなど誰が想像できようか。

だが博士がリスクを承知で託したということはそれ相応の信頼があるのだろう。

いや待て、もしかして博士は倉持のところに行った？

「二ついいですか？ 全くの別件なんですが」

「え、ええ」

「更識さんのことって、どれくらい知ってます？」

「それは……何も知らないって言わなきゃいけない立場ね」

「なるほど」

更識妹は博士から専用化技術の情報を得ている。

つまり、一夏を監視していたついでにしても更識妹は博士から手の届く場所にいた。

元来博士は他人に興味を持たない人間だ。一夏を追いかけているだけなら更識妹の姿がちよつと視界に入ろうと気にも留めないだろう。一夏に出くわすと毎回逃げる姿を見ていたくらいでは。

だが更識妹は利用価値があると認められた。なんとなく俺と同じ空気を感じたからというのもあるだろうが、それだけでは博士が自発的に動く理由にまではならない。

リーグマツチでの博士の本命はゴーレムだ。あくまで更識妹についてはおまけ程度でしかなかった。

おそらく、それくらいならいいかと博士の背中を押す提案をしたのは目の前の女だろう。

今、何も知らないとは言えなかった。この場で嘘をついても俺が博士に問い合わせる手段を持っていたらすぐバレるからだ。いや、最初の発言からして篠ノ之束ネットワークの存在について知っている。自分で気づいたか知らされたか、どちらにしても隠すことができない

のは理解している。

「更識さんのことはこのままにしておくんですか？」

「みんなががんばって見つけてくれるの待ちね」

「今は見当違いの方向に走ってるのは分かってますよね？」

「もちろんよ。でも外の可能性が全部潰れたら最後はもう本人を問い詰めるしかなくなるわ。今は遠慮して何も言えない状態だけれど、そうせざるをえない時はいずれ来る」

篝火所長はためらうことなく返してくる。腹を括ったか。

倉持技研にとって、何か一つでも博士から引き出せればそれは貴重な財産となる。

そして博士の気まぐれにより更識妹にもたらされた専用化技術もそうなるはずだった。

だがもたらされた本人が抱え込んでしまうのはさすがに予想外だっただろう。

「それならちよつとした情報を。今なら更識さんの意識が外に向いてますよ」

「えっ？」

「タツグマツチと一緒に組むパートナーを見つけないといけないんですけれど、彼女はああなので組める人がいないんです。だから見つけるためには外に目を向けなければならぬ」

「でも更識だし親友の……」

「それは僕が本人にやめさせました。この機会にクラスの人達と仲良くするためと言って」

「甲斐田君……」

「あ、別に何かをして欲しいってことじゃないです。布仏さんも四組の中で親友に友達ができるようがんばってるし、そのうちパートナーは見つかるでしょう。今のはただの情報です」

「それならなぜわざわざそんなことを？」

「んー、僕にはお届け物に対してお礼できるものが何もないんですよね。かといってありきたりなことをされても別に嬉しくないだろうし、それならこういう僕しか知らないことを伝えるくらいしかないか

など。更識さんが意地を張って倉持の人達が困ってるなどというのは特にここ一ヶ月見てきましたので」

正直なところ、知っているならとつと更識妹を管理しろ、と言いたい。

篝火所長が言った通り、更識妹の専用化技術については結局時間の問題でしかない。本人は相手が何も言っていないのをいいことに安穩としているようだが、その気になれば倉持技研は強制的に調査できるのだ。更識妹はあくまで倉持技研の所属なのだから。

そしてその過程で俺の秘密を知ってしまったとしたら、倉持はどうするだろうか。技術者集団だけにすぐ気づくだろう。専用化の概念を覆してしまうとか爆弾過ぎると。

IS委員会に伝えて公表するか？ 自身の専用化技術の出自を問われるのできるわけがない。織斑先生にお伺いを立てるか？ これはあるかもしれない。だが織斑先生は技術者ではない。知ったからと言って何ができるわけではないのだ。せいぜい俺を問い詰めるくらいしかないが、俺が白を切つて驚けばそれまでである。いや、それではその後織斑千冬配下の科学者に将来の手柄を持つて行かれてしまうことになるので、むしろ企業としては簡単に渡したくないか。

ということは企業秘密として抱え込むことを選択する公算が高い。そして篝火所長は今できた俺とのチャネルを活用しようとするだろう。

それなら更識妹に爆発されるよりは何十倍もましだ。少なくとも現時点で倉持が俺のことを知らないのは間違いない。つまり更識妹が今も隠し通している。

「事が荒立たずに済めばそれに越したことはないかな、くらいの気持ちです。更識さんの親友に相談はされましたけど、僕の力でどうにかして欲しいと言われたわけでもないですし。だから別に僕の名前を隠さなくていいですよ。倉持の人には僕から聞いた話だ、で」

「いいの？」

「そうですね、意気投合して話をしたらたまたま更識さんの話題になつて僕が口にした、くらいでいいんじゃないですか？ もちろんこ

の機に何かをするつもりがあるのならですが」

「今なら簪ちゃんに聞く耳があるよって話でいいのね?」

「そうです。だって更識さんは一夏にリーグマッチの借りを返さないといけないんですから。そんな時に何であれ手助けがあると嬉しいですよ?」

「簪ちゃんがそんなことを……?」

「もちろんそれは僕の想像です。でもきつと当たっていると思いますよ?」

更識妹が強化されてしまうのは嬉しくないが、そのパートナーが数段落ちるのは確実なのでとりあえずよしとする。

それに宮崎先輩に聞いたところ、毎年クラス代表はそれぞれブロックが分かれるそう。だから更識妹とは最低準決勝までは当たらない。いや、例年通りなら一組代表と四組代表が当たるのは決勝になる。おそらく準決勝が鈴・ハミルトンだろう。鈴をクラス代表のハミルトンと組ませたのはそういう意味合いもある。

疲労度を考えれば決勝は一番差の出る状態になる。機動力を活かすタイプの更識妹にとって苦しくなるのは間違いない。一方の一夏はシードで二試合少ない。だから俺は一組にシード権を捨てさせないのだ。

「本当にありがとう。その情報は有効活用させてもらうわ」

「とんでもないです。命をかけた対価にしては小さ過ぎるでしょうけれど、そのへんはまた今後の機会ということ」

「その言葉が十分過ぎるほどの対価になるわ。もう借りなんて気にしないですね」

「そうですか。ではこれはありがたいとだけいただいていきます」

俺はそれを胸ポケットにしまって立ち上がる。

博士が送ってきた理由はもう明白だ。保険である。

もしボーデヴィツヒのVTシステムが暴走し、織斑先生も間に合わないような事態になってしまった場合、これを使って俺が止めろという話なのだ。

クロエにやったように、ボーデヴィツヒの記憶人格全てを吹き飛ば

して。

「あ、甲斐田君」

「何でしょう？」

もう話は終わりだと思っていたのだがまだ何かあるのか。

「どうせだからこのおみやげ、持って行かない？」

大浴場の予約は既に取り消された後だった。

「シャルルがやったんだろ」

一夏は何でもないことのように言う。

「やり方なんて知ってたんだ」

「そんなのは誰かに聞けばいいじゃねえか。時間は十分あったんだし、別におかしいことでもないだろ」

「それはそうなんだけど……」

「どうせシャルルに確認すれば頭下げてごめんって言うぞ。後で聞いといてやるよ。それよりもさっさと買い物行こうぜ。せっかかない鯖が手に入ったんだ」

一夏の機嫌は篝火おみやげの魚によってあっさり直ってしまった。いた。

切り身ではなく一匹丸々が一夏の料理心をくすぐったのだろうか。

まあ大浴場の話題をぶり返したくないというのもあるだろうが。

「いいけど荷物持ちとかいる？ そんなに買い物あるの？」

「言われてみるとそこまですでもないな。むしろこれを先に持って帰ってもらった方がよさそうだ」

「了解。先に戻ってるね」

「じゃあこの後織斑君のことは任せて！」

「さあ織斑君は私をエスコートするのでーす！」

「あーマリアずるい！」

「リアーデさん、お願いだから俺の耳元で大声出すのはやめてくれ」

パイロット班連中に囲まれて一夏は購買部の地下へと向かって

行った。

相川さんに鍛えられたのか連中もめざとくなつたものだ。アリーナからの帰り道に待ち構えているとは驚きである。

もはや篠ノ之さんやオルコットなど完全に出し抜かれている。鈴は夜竹さんと仲良くしたりして情報収集に努めているようだが、一組からの情報を遮断されるとついてこれなくなってしまう。

とはいえこの光景は俺にとって望むべきものだ。傍から見れば今の一夏は取っ替え引っ替え女の敵状態だが、その気のある女子からすれば逆に自分にもチャンスはあるということになる。

ちよつと前の三社カルテル独占状態よりはよほど夢のある話だ。だから俺も気を遣って席を外した。俺がいると一夏と話をしたい彼女達にとつては邪魔になるのだから。

「あれ？ 甲斐田君何それ？」

「おみやげ」

「おみやげ？ IS学園で生の魚がおみやげって意味分かんないわね」

「もらったんだからしょうがないじゃないか」

「あげる方も何考えてるかって話だけどあっさり受け取るのもどうなんだか」

「別にこつちには一夏がいるし、新鮮な魚が食べられるんだから何も問題はなないよ。まあ鷹月さんには全く関係ない話だけどね」

「食べるだけのくせに偉そうね。でも織斑君宛てなら納得か」

匂いもあるしさつさと魚を持ち帰ろうとしたら鷹月さんに捕まわった。

タンブラー片手に歩いていたので勉強の小休止に散歩でもしていたのだろうか。

とはいえ俺もさつさと魚から解放されたいので立ち止まりはしない。

「織斑君のところに行くって聞いたけど一緒じゃないの？」

「一夏は今地下で買い物中。これをおいしく食べるために材料を揃えるんだって」

「この前の屋上でも思ったけど織斑君はISを動かせなかった方が幸せな人生を送れたでしようね」

「どうだろう。というかそれを言うならむしろ僕なんだけど」

「は？ 甲斐田君はどこにしようかと甲斐田君でしょ。どこにしようがどういう立場に置かれようが、好き勝手やってるのは間違いないわ」「断言してくるね」

鷹月さんは俺を持ち上げる割には辛辣だ。

持ち上げるならせめて敬意くらい示せとたまに思う。

「男子にとつてIS学園に今の立場で放り込まれるよりきつい環境なんてそうそうないわ。それなのにこうやって我が物顔で歩いてるんだから、どこにしようが一緒だと言うのは百人中百人が納得する話よ」

「そこで同情の方向には行かないのか」

「その必要があればそうするわよ。 同情とかして欲しい？」

「必要ないね」

「敷地内を男子一人で歩き回って平気なんだものね。こっちとしても余計なことを考えるだけ無駄だわ」

「それはみんな言うね。僕としちゃ逆にIS学園という場所だからこそ大手を振って歩けるという話なんだけど。自分の人生を捨てて殴りかかってくる人なんていないし」

最初は俺も不安はあったが、すぐに慣れた。

なんだかんだで俺も一夏も特別な立ち位置なのだ。口では言われても物理的な被害の心配は少ない。極論そこらの女子なら殴りかかってこられても体格差で返り討ちにできる。ISには絶対防衛がある。怖いのは包丁を持ち出されての不意打ちくらいだろうか。まあその時はその時だ。

「なるほど。そういう考え方もあるか。だったらわざわざそういう敵を作らないことね。また五組にちよっかいかけたそうじゃない」

「今日の話なのによく知ってるね」

「上級生が甲斐田君の話題を情報規制してたんだって？ それがなく なったから今はすぐ広まるわよ。もう甲斐田君は完全に曲者扱いさ

れてるし」

「なるほど、それは好都合」

「それも計算づくか……。ねえ、今度は何をやる気？」

「それを聞かれたらみんなのためになることと答えようかな」

「はいはい、まともに答える気はないわけね」

「ひどいなあ。嘘は何も言っていないのに」

実際そうである。

誰かに損をさせては恨まれてしまう。

まあ気づかないようなのはさすがにどうしようもないのだが、今回は一年生達のためになることをしてあげるのだ。結果的に、だが。

IS学園は生徒達に自主性を求める。だが俺のやり方は強制的にその方向に持つていくことで、手法に違いはあれど出てくる結果としては同じだ。もちろん強制と言っても各自がそれを自分で選択するように仕向けるだけであり、無理にやらせるわけではない。

「まあすぐ分かるだろうしいわ。それより甲斐田君は織斑君を待つだけならこの後時間あるの？」

「ああ、昼に言ってた話？」

「うん」

「この魚を置いてくれば体は空くよ」

「じゃあちよつと時間もらっていい？」

「全然構わないよ。でも会議室は空いてるかな……？」

深刻そうな顔なので相当に重要な話のようだ。しかも前倒ししたことは緊急性まである。

今回は立場上一組に関われなくなるので、今のうちに不安の種は取り除いておきたいところだ。

「それならこの際甲斐田君の部屋でいい？ 別に長居をするつもりはないから」

「鷹月さんがいいならいいけど……。じゃあちよつと一夏達の部屋に置いてくるから」

「あ、そういえば部屋の鍵は？」

「僕らはお互いに合鍵持つてる」

「そ、そうなんだ……」

「じゃあちよつと待ってて」

急いで鍵を開け一夏達の部屋に入る。

話をしているところを見られたくないとは相当にデリケートな話題なのかもしれない。

デュノアはいなかった。

冷蔵庫を開けて魚を放り込む。匂いなど知ったことか。俺の部屋の冷蔵庫ではない。

すぐに戻ろうとして、ふと違和感を覚えて振り返る。

部屋が狭く感じられるような……仕切られている？

一夏はわざわざしないだろうし、デュノアの要望なのだろうか。

とりあえず今は関係ないので気にしないことにする。

「ごめんお待たせ」

「う、うん」

隣の部屋なのですぐだ。

一夏の部屋の鍵を閉め、自分の部屋の鍵を開ける。

俺の後に続いて鷹月さんが入ってきた。

「一人とはいえ殺風景ね」

「みんなこんなもんじゃない？」

「というか掃除してる？ 微妙に薄汚れた感が」

「そんなの別にいいでしょ。床に座りたくないなら椅子でもベッドでもどうぞぞ」

「ご、ごめん」

結局鷹月さんはベッドの方に腰掛けた。俺は椅子に座る。

「それで、話って？」

「うん、折り入って相談させてもらいたいんだけど」

鷹月さんは膝の上で拳を握り、真剣な表情で俺を見る。

「デュノア君とお近づきになりたいんだけど、どうすればいいかしら？」

まずい、鷹月さんがこれでは一組はバラバラだ。

23. 計画

よくよく考えれば予想できる事態だった。一組だけが例外などありえない。

「まだ来て一週間だから仕方ないと言うのは分かるわよ。でもね、言葉と態度にギャップがあり過ぎだわ。口ではあんなに優しいのに体の方は拒否してると言うか、溶け込んでいるようで絶対的な壁がある感じがして……」

目の前では鷹月さんがダラダラとどうでもいいことを喋り続けている。

俺という重しがなくなったことにより、一組は空中分解してしまっていた。

リーグマツチの準備期間中、心がけていたことがある。

それはクラス全員の意識を同じ方向に向けることだ。

一夏を中心に置いてその勝利のために行動させ、個人の思惑は二の次にする。

訓練中、せっかくISが使えるのだからそれはみんな自分のためになるようなことをしたくなる。だが俺はあくまで一夏にとって必要であることだけをやらせた。さんざん文句を言われたが、結局そういう輩は自分の欲を一夏よりも優先しているだけに過ぎない。だからいくら口で勝とうとしても、一夏のためという大義名分を上回れないのだ。連戦連敗を繰り返してこの連中はゲーム感覚で遊んでいるのかとさえ思った。

結局期間中に一夏と自分の訓練をうまく両立できたのは二人しかない。篠ノ之さんとオルコットだ。

二人だけは俺の顔色を窺っていた。そして俺が見逃すラインを探っていた。その結果、篠ノ之さんは一夏の攻撃を受け止める役であれば俺が何も言わないと気づき、オルコットはそのビット攻撃で一夏

の回避訓練を助ける役割であれば問題ないと把握する。そしてその範囲で自分の技術を磨こうとしたのだ。

だからこそ俺はゴレム戦で迷うことなく篠ノ之さんを防御役に、オルコットを攻撃役に任命できたというのもある。

他の連中はいかに俺を言い負かすかしか考えていなかったのだからすれば論外だった。

とはいえそれで二人がリーグマッチ後も何かと俺の顔色を窺ってしまうことになるのは予想外だったが。

しかしそれらのことは全て俺が強制したことであって、彼女達の自由意志ではなかった。

今まで抑圧されていた分、俺が自分の役割終了と後ろに下がったら、さあこれからは自分達の時代だ、となってしまうのは想像に難くない。

その上タッグマッチは全員が当事者。一夏のためはもう使えない。その結果が今だ。

五組がリーグマッチ後権力闘争を始めたように、一組はそれぞれが思い思いの行動を始めてしまったのだ。

俺からすれば根っこは同じである。こういうことになるからこそ毎年個人戦が行われていたのだと今俺は実感として理解できた。

「ねえ、聞いてる?」

「聞いてるよ。シャルルってあれで相当神経質だよ。潔癖症な部分もあるし、上辺の言葉を信じちやうと心の距離は広がっていくだけだろうね」

「やっぱりそうよね。オルコットさんやリアーデさんを見ると外国の人ってもっとオープンなのかと思ってたけど」

「鈴……はほとんど日本人か。ハミルトンさんとか見るとそういう人だけじゃないってのは分かるでしょ?」

「あら、ティナって呼ばなくていいの?」

「もう知ってるんだ。というか告げ口でもする気? 本人いないんだから別にいいじゃない。僕が織斑先生と千冬さんを使い分けてると一緒だよ」

「ごめんごめん。ちょっと話題になってたから。でも甲斐田君だったわね」

「何その言い方」

「友人として甲斐田君が甲斐田君で安心したってこと。それで話戻るけど、じゃあデュノア君にはどういう風に接していけばいいかしら？」

いちいち引つかかる言い回しだが、まあそれは今に始まったことではない。

しかしどうしたものか。

「クラスみんなを参考にするのははつきり言ってよくないね」

「そうなの？」

「そういう方面においてシャルルはそつがないどころか隙もないよ。ひたすら押したところで暖簾に腕押し。気づかないんじゃないよ。気づいた上で知らない振りをしてくる。そしてじれちやった人から順に玉砕。一夏と違ってきちんと応対する分質が悪いと言えるかもしれない」

「そ、そこまでなんだ……」

「短期決戦は絶対に無理だね。裏を返せば早い者勝ちで持っていかれる心配もないってことだけれど」

ここで別に嘘をつくつもりはない。男の俺でさえまだ警戒されている状態なのだから、女子に至っては論外であるというだけだ。

「まだ焦ることはないって話ね」

「たった一週間程度で焦ってるようじゃとても無理」

「そうは言っても、織斑君みたいに時間が経てば経つほどライバルが増えるのは間違いないんだし、今のうちにできる限り引き離しておきたいというのは分かるでしょ？」

「今のうちにねえ……」

「男子には分からない感情かもしれないけど、世の中女の方が圧倒的に多いんだから、行動しなかったら何も得られないわ。漫画みたいに向こうからやっては来てくれないのよ」

「どっちかと言うと今は周囲の自爆を見守る時期だと思っただけだな

あ

「そのへん含めて、計画的にやりたいのよ。指揮科を目指してる身としては学業をおろそかにできないし」

指揮科を目指すような生徒ですらこれか。やはり個人戦は絶対に必要だった。

恋愛にうつつを抜かすというような話ではなく、意識の問題だ。

きつと織斑先生の中でこの点において今合格点をあげられるのは、学年レベルで相川さん一人くらいだろう。

「指揮科と言えばさ、鷹月さんはタッグマッチのパートナーは決まったの？」

「指揮科と言えば？ 篠ノ之さんと組もうかって話はしてるけど」

「ああ、同室だもんね」

「そういう言い方するあたり相変わらず嫌らしいわね。当然上を目指すためにはパートナーが重要なことくらい理解してるわよ」

「上を目指すつもりかして優勝する気？」

「今年は専用機持ちが多いしそれは厳しいかもしれないけど、でもせめてベスト八は目指したいわね」

「ベスト八で十六人。指揮科狙うならそのあたりは必要ってことか」

「そうよ。専用機持ちや留学生はパイロット科確定だから、そのへんは差し引いてね」

「なるほど、そういう計算ね」

全然駄目である。具体性が何もない。

やはりこれはIS学園に合格するような生徒だからこそなのだろう。

自分に対して絶対の自信を持っている。

「タッグマッチの話題を出すということは、この行事でいい成績を残すことがデユノア君に対しても重要ななの？」

「あー、でもまあトーナメント形式なんだし、運に左右される部分が大きいよね」

「それが問題なのよ。初戦でいきなり織斑君と当たってしまう可能性もあるわけで、それで初戦負けとか最悪じゃない。まあさすがにそう

「いう場合は試合内容とか見てくれると思うけど」

「そこまで分かっているのならもう一步踏み込んでくれ。」

初っ端から運などに左右されてしまうトーナメント形式自体がおかしいのだと。極端な話一回戦で負けようが決勝で負けようが同じだど。重要なのは優勝者以外全員が負けることなのだど。

「でもこれからいくらでも挽回は効くんだからさ、それはそれとして受け止めるしかないよ」

「そういう考え方は甘えよ。次があるとか思ってたら一年なんてあっという間に過ぎるわ。そして気づいた時にはもう手遅れね」

「それはそうだね」

その通りである。

いつ気づくかが問題なのであって、それは早ければ早いほどいい。

そのリミットが去年までは二学期に行われるタッグマッチであり、おそらくそこが本当の努力を始める最終ラインとなるのだろう。年によってはもう手遅れなことがあるかもしれない。

だからこそ、気づいてしまえばタッグマッチの結果自体はどうでもいい。

「それで、デュノア君と何の関係があるの?」

「あ、えーつと、なんにしても埋もれてたら駄目だつてことだよ。みんなやってることをしてもその他大勢の一人でしかないわけだし、同じ分野で出し抜くんじゃなくてまず何かにおいて唯一の人になるのが先だと思う」

「唯一って何について?」

「それはその人それぞれと言うか、鷹月さんなら指揮班というみんなと違う部分があるんだし、今回のタッグマッチにおいて違いをどれだけ見せられるかじゃないかな」

「なるほど……でも指揮の方に偏り過ぎちゃうと今度は自分の方が心配になってくるのよね……」

「そのへんはうまくやるしかないね。見えないところでやっても直接的な効果はないし、大事なものは存在感を見せることだと思うよ」

「存在感か……」

この際なので鷹月さんを誘導してしまうことにする。

母国の件が片付くまではどうにもならないから、まずはタツグマツチに注力しろ。

「少なくとも、シャルルが好むのは頼りになる人かまるきりダメな人かどっちかだと思うよ」

「本当にっ!? ってどうしてそんなに極端なわけ?」

「基本的には黙って見てられなくてつい手を貸しちゃう系だから、面倒見がいいのある人とは相性がいい。でも無理をし過ぎなくらいまでがんばっちゃう人でもあるから、ここぞで頼りになる人には弱いと思う」

「い、一週間でそこまで分かるんだ……」

要するに人として一夏と非常に合うという話だ。

ここ一週間デュノアを見ていて思ったが、普段はだらしない一夏に細かくフォローを入れているが、体に変調をきたしているように芯は強くない。他人に頼るのが苦手なようで、こちら側から無理やり入っていかねければならない。一夏はそのあたり変な遠慮をしないで突っ込んでいくのでデュノアとしても頼りやすいだろう。多分いざという時には二人の立場は逆転するに違いない。

ちなみに俺はあえて一夏とは逆に踏み込まない姿勢を取っている。

その方が一夏が際立つからだ。

一夏がデュノアの心を捕まえてしまえば後はどうとでもなる。

「じゃあどちらを選ぶべきかは分かるよね?」

「そんなの決まってるじゃない」

「え? ダメな方を選ぶの?」

「は?」

「すいません冗談です」

「よろしい。なんてね。ありがとう甲斐田君。やっぱり相談してよかったわ」

「どういたしまして」

「それじゃまた月曜に。おやすみ」

「っていう時間でもないけどね」

「甲斐田君はそういう余計な一言が駄目なのよね」

「はいはい分かったからさっさと帰る」

「まったく。じゃあおじゃましました」

呆れた風を装いながらも口調は弾んでいる。

心の中ではスキップ状態なんだろうなと思いつつながら鷹月さんが出て行く後ろ姿を眺めた。

日曜だというのに今日も雨。

午後には面会が二件もあるので雨の中歩いて行かなければならぬのは憂鬱だ。

窓の側から机に戻って椅子に腰掛ける。

一組をどうするか考え直す必要がある。

俺がこのまま三組に手を貸して一組を放置してしまうと、一組は痛い目を見てしまうかもしれない。

別にそれだけならどうということはないが、一組の連中がことごとく敗退してしまうとタッグマッチの後半戦は去年までと変わらない光景になってしまう。

おそらくそれは織斑先生やIS学園上層部の望むところではない。わざわざシードなどというルールを設けたからには、タッグマッチの後半戦はシード組が盛り上げるべきなのだ。

一週間あるうちの前半は三組、後半は一組が中心となって盛り上げれば、今回変更されたタッグマッチは実に有意義だったと評価されるだろう。そしてその中で一夏が優勝できればもう言うことはない。

一組の連中は傍目には毎日一生懸命やっているようだったが、実のところは緩んでいる。リーグマッチから一ヶ月が過ぎ、あの時の熱も収まってきてしまったのだろう。

それもこれも競争していないからだ。入学してから比較されるような競技もなく未だ無風状態、彼女達は自分の立ち位置を知らない。今までずっと一番だったから、その感覚が抜け切れていない。

だからこそその個人戦、タッグマッチだ。一年生はここで負けること

によってようやく立ち止まる。そして足元を見てIS学園における自分の立ち位置を知る。そこから九ヶ月にわたる競争が始まるのだ。もちろん優勝者も頂上にたどり着いて後ろを振り返り、今来た道の険しさを知るだろう。要するに今回の行事はある意味儀式である。そういうわけで見るに耐えないと言われようが毎年行われてきたのだ。

しかし俺としてはそれでは困る。

儀式において一夏が優勝したところで、大して対外的な価値がないからだ。

リーグマッチとは違って完全に内向けの行事、しかも上級生から見えるのはせいぜい最後の二試合程度。ただ勝ちましただけでは何の意味もない。せいぜい一夏の成績表に一行追加されるくらいだろう。それなら俺はタッグマッチという行事の中に価値を作る。評価をする織斑先生や教師達にとって、参加者である一年生達にとって。その中で優勝することによって一夏に新たな付加価値を付ける。

だからこそ一組連中にはがんばってもらわなければならないのだが、このままでは非常によろしくない。今回直接的にはやれない以上、間接的にでも影響を及ぼす何かを考えなければならぬだろう。

と、インターホンが鳴る。

日曜の午前中から来るとは意外と早かった。

「はいはい」

「甲斐田君、期限よりは早いけど三組としての返事をしに来たわ」

ドアを開けると予想通りの人間と予想外の人間がいた。

三組代表ベッティ、元五組代表佐藤、そしてボーデヴィツヒだ。

「そこに座っちゃうのはどうなの？」

「いいの。ここがラウラちゃんの定位置なんだから」

「だからちゃん付けはやめろと言っているだろう」

ベッティはベッドの上に腰掛け、自分の膝の上にボーデヴィツヒを座らせた。そして抱き枕のように抱え込む。

そしてボーデヴィツヒ本人も素直に従っている。

「ボーデヴィツヒさんのその位置はありなわけ？」

「仕方ないだろう。この手の輩は私が折れるまで譲らないのだから。我が母国でもそうだったが、逆にこうしておけば大人しくなるということでもある」

「ボーデヴィツヒさんがそれでいいならいいけど」

ドイツでもおもちゃにされていたのでされ慣れているということなのだろう。

本人が納得しているのであればとやかく言うまい。

「さて昨日の返事なんだけど、三組全員の総意として、甲斐田君の案に乗るわ」

「それは何より」

「みんなで話したんだけど、確かに勝敗を越えて中身の部分で自分のためになるしアピールできるのは非常に大きい。リスクの有る話じゃなくて付加価値ができるということね」

「その通り。このタッグマッチ、優勝を狙う必要は全くない。たとえばここで優勝できたとしても、一年の終わりに抜かれていたら意味がないからだ」

「そうね。IS学園は私達に競争をさせたいんだから」

「こんな初っ端で全てを決めてしまうくらいなら受験の時点で最初から学科は分ける。もしするにしても運の要素なんてわざわざ作らない。大事なのは一年後の状態であって、今どうなのかは問題にならないんだ」

入学当初、俺は織斑先生の手伝いで上級生の成績表を見ている。

時間がなかったので細かく見たわけではないが、少なくとも二年生の成績表を見ていて個人戦の結果を気にした覚えはない。せいぜい生徒会長が一年の時総なめにした行事のうちの一つ程度だ。

もし個人戦の成績が大きな割合を占めているのであれば、根拠として目につくはずである。あの時俺は優秀な人を探していたから、優秀とされる根拠に個人戦の成績があれば判断材料として見比べていただろう。

だがそうでないということとは、やはり結果自体が問題なのではない。そして今回評価してもらえぬ点とは、このタッグマッチにおいて自分が何をできたかだ。

「だから最初からタッグマッチは捨てろって話ね」

「捨てるんじゃない。目標を明確にする。現実的に可能な目標として、三回勝ちきることを目指す。負けるにしても出せるものは全部出して今自分のできることをやりきる。だからたとえクラス代表と当たろうが全く問題はない。大事なものは勝敗じゃなくて、今の自分がどこまでやれるかを知ることだからだ」

「うん」

ベッティは真剣な表情で頷く。

このあたりは昨日の時点で伝えたことであり、今は確認でしかない。

「シード権がない時点で優勝は現実的な目標じゃない。一年生じゃ体力精神力がもたないからだ。これは三年の先輩に聞いたことだから間違いないんだけど、毎日試合をやっていると疲労が溜まってきてもにやれるのはまあ三日。となるとトーナメント上火曜から始める人で三回戦が限度。しかも三回戦からは全く疲労のない一組が出てくるから非常に不利な状況でもある。だからもう最初から準々決勝以降のことは考えない。勝ってから考えるし三回戦までに出せるものは全部出して出し惜しみしない」

「でもあたし達だけは違うんだろ？」

と佐藤が口を挟む。

これもできるものならやってみろレベルでしかないのだが。

「佐藤さんとベッティが組む場合に限り優勝を目指すことが可能になる。もちろん目指せるだけであって、優勝できるというわけじゃないけどね」

「あくまで優勝を目指して計画的にやっていることを見せるわけだね？」

「そう。優勝を目指すための絶対条件として、代表クラスの実力者同士で組まなければならない。そうしないと実力の劣る人間が確実に

穴になるからだ。そして一人はクラス代表であることが望ましい」
「それがあたしがこいつと組むメリットであると。ベツティの組めば他のクラス代表とはブロックが分かれるから」
「勝ち上がるのが目的なら強いと分かっている相手は先延ばしにした方がいいよね。元気な内に倒すって考え方もあるけど、それで疲れて次で負けてちや意味がないし、真剣勝負の場数を増やした方が経験になる」

「そもそも早い段階で当たってくれる保証もないか」

負けさせることが目的なのだから、実力者同士を固めるような真似はしないでらう。運だけで勝ち上がることをさせないために、クラス代表はもちろん代表クラスの実力を持つ生徒もできるだけバラけさせるはずだ。別に俺がそうして欲しいわけではなく、学園側の意図からすれば自然とそうせざるをえない。

「でもその点で一つだけ。四ブロックで五クラスなんだけど、いったいどのクラスが割を食うの？」

「そういう聞き方をするってことはもう答えは出てるよね？ それはもちろん五組に決まっている」

「まあそうよね」

「どういうことだベツティ？」

「だって五組はリーグマッチで全敗。しかもその後には代表交代。わざわざ他のクラス代表を押しつけて優遇する理由なんてないわ」

「まあな」

「別にあてこすつたわけじゃないから怒らないで。むしろ一緒のブロックになった方がありがたいのよ」

「そうなのか？ いやそれ以前にそうなるのか？」

「一緒のブロックになれるかは五分だね。普通に考えると五組と一緒にするのはリーグマッチで一勝二敗の三組か四組。ありがたいというのは実力者扱いされる割に実力が追いついてなくて、十分勝ちを見込める相手だから」

「それならむしろはつきりと身の丈を分かせてやりたいところだな」

新しく五組代表となった杉山もその立場上それなりの扱いは受けるだろう。篠ノ之さんやオルコットと同等か、それより一つ上か。

ならば準々決勝で当たることが一番望ましい。ベッティ達にとつてではなく、一夏にとつてだ。そして織斑先生の気質からして、クラス代表を奪うような生徒にあえてリーグマツチ優勝者を当ててくる可能性は十分ある。

「他に何か質問はある？ 別に今じゃなくてもいいけど」

「ええ、具体的な質問は必要に応じてさせてもらうわ。その上で今聞いておきたいことが二つ。一つはもちろん甲斐田君のこと。そしてもう一つはラウラちゃんのことよ」

「だからいい加減ちゃん付けはやめろ」

ベッティに抱き締められたままのボーデヴィツヒが顔を上に向けて咎める。

その姿はどう見ても背伸びをしている小……中学生だ。

ベッティも可愛くてしようがないらしく、顔を緩めた。

「もう仕方ないわねえ。じゃあ先にラウラのことから。昨日甲斐田君は一切触れなかったけど、ラウラの扱いはどうするつもり？ この子は専用機まで持つてるし操縦技術もすごいんだけど、それは知ってる？」

「知ってるよ。何しろ千冬さんに一年間も教示を受けたんだからね」

「なぜそれを知っている！？」 口にした覚えはないぞ！

「あれ、違った？ 千冬さんのことを教官と言ってるし、別に隠されてるようなことでもないと思っただけでしょ？」

「……なるほど、確かにそうだ。その気になれば調べられることだったな」

「プロフィールはもう把握済みなわけね」

「そういうわけだからはつきり言っつて、今回のタッグマツチはボーデヴィツヒさんにとって意味がないんだ。どうしてかと言うとボーデヴィツヒさんが既に千冬さんから教わったことを今から始めようと言うだけなんだから」

これは事実である。が、全てではない。

ボーデヴィツヒが俺から見ても爆弾を抱えている以上、できるだけ蚊帳の外に置いておきたいのだ。いくら可能性は低かろうと。

特に一夏と絡ませたくない。一夏はボーデヴィツヒから千冬さんを感じ取っていた。だがそれは千冬さんではなくVTシステムだ。つまり二人の間で化学反応が起こってしまった場合、万が一億が一の可能性が実現してしまう恐れがある。

「私が教官から学んだことか」

「後で言おうと思っただけで、今回ボーデヴィツヒさんには先生役をやってほしい。自分が千冬さんから教わったことをみんなに伝えるという役割。そうすればボーデヴィツヒさんにも参加する意味が出てくると思うからさ」

「教官の代わりをしろという話か。だがなぜそれが私のためになる？」

「千冬さんの立場に立ってみることで千冬さんの心を知ることが出来る。きつと教わる立場じゃ見えなかったこと気づかなかったことがたくさん出てくると思うよ」

「きよ、教官の心か……！ それは胸が踊らされるな！」

あっさり乗った。ボーデヴィツヒは千冬さんを想像してか興奮している。

こいつが織斑千冬信者でよかった。

「当たり前だけど機密になるようなことは言わなくていい。でもこういう教育メソッドの交換的な話は世界中で行われてるらしいし、そこまで神経質になることもないと思うけど」

「その点は心配しなくていい。元々他国の留学生を受け入れる行為にはそういう側面を期待されている部分もある。一応確認してみるが、大まかな部分では問題ないだろう」

「ラウラも日本のIS教育を学びに来てるわけだしね」

IS学園は基本日本のための組織なので、留学生に一方的に吸収して帰られてしまっってはわざわざ入れる意味がない。

留学生が欧州方面に偏ってしまうのは、受け入れることで得るものがあるかどうかまで選別された結果かもしれない。

「もちろんあと二週間しかないから大したことはできない。だからボーデヴィツヒさんはまず千冬さんから教わった一年間を思い出して、自分が学んだことをひたすら書き出して文字に言葉にしていく。まさか何も思いつかないとかないよね？」

「そんなはずがあるか！ 私は教官との出会いから全てを記憶しているぞー！」

「もはや愛ねえ」

「そして出てきたものはこのクラスの指揮科志望の人達が取捨選択する。今取り入れることができそうなものをね。できないものも今後の財産になるだろうし、無駄なことは何もない」

「今後のためにもなるわけね」

実際何が出てくるかは分からないし、使えるかどうかも不透明だ。

だがボーデヴィツヒは織斑千冬によっておそろくゼロから教育し直されている。VTシステムの支配から脱却するため、VTシステムに頼ることのないやり方を教えられているはずだ。

だからそれは初心者に対して通じる部分があるのではないか、というのが俺の予想だ。

まあ別に何もなくてもいい。博士が戻ってくるまでボーデヴィツヒの行動を制限できればそれでよしである。保険は使われない方が保険屋も喜ぶという話で。

「その後はどうするのだ？」

「終わったら話をしよう。約束したから僕も相手をするし、僕がその場にいなかつたらクラスのみんなでもいい。きっとボーデヴィツヒさんは理解できないことがたくさん出てくると思うんだ。千冬さんはその時何を思っていたのか。千冬さんのその行動に何の意味があったのか。そのことについて話し合おう」

「話し合えばそれは理解できるものなのか？」

「少なくとも僕は千冬さんについて、ボーデヴィツヒさんよりも知っている。実の弟である一夏からいろいろと聞かされてるし、時期は違っても同じ場所で育った。だから世間一般では知られていないようなエピソードもけっこう知ってるよ。千冬さんを理解する上で助

けとなる情報を出せると思うんだ」

「おお！ それは是非とも聞かせてもらいたい！」

「それは私も普通に気になるわね。織斑千冬の知られざる話とかそうそう聞けないわよ」

「同じく」

よしよし。いつも邪魔ばかりしてくれるがこういう時は役に立つ。

加えて俺は博士からも情報を得ているので、出せるネタには事欠かない。あの写真だって実は博士の『ちーちゃんコレクション』からかつぱらってきたものである。

「まあボーデヴィッツヒさんから大した話が出てこないようなら僕も思い出さないかもしれないけどね」

「それは挑戦状か？ いいだろう。私の教官に対する熱き想いを事細かに示してみせようではないか」

「それは楽しみにしてる。それでタッグマッチ本番の方なんだけど、みんなのためにもほどほどにしておいてもらえないかな？ パートナーのサポートに徹して、本気は出さない方向で。できれば実技が得意でない人と組んで助けてあげて欲しい。パートナーの体力が限界になったら終わりにするくらいな感じ。ぶっちゃけこういうのには興味ないでしょ？」

「あるかないかと問われれば、特にないな」

「成績についてもボーデヴィッツヒさんなら後でいくらでも挽回できるし、そもそも今回の比重なんてないに等しいから」

「それが皆のためになるというのであればそうしよう」

「ありがとう。具体的なことはまた話をしよう。じゃあボーデヴィッツヒさんについてはこんなところで」

なんとかうまく行った。

本当は明日にでも話をつけようと思っていたのだが、向こうから来てくれて手間が省ける。

もつとごねて条件をつけてくるかもしれないと思っていたので、少し拍子抜けではある。

だが奴も母国ドイツからの指示がある。俺に近づけるとなればあ

えて機嫌を損ねるような真似はしなかったのかも知れない。

「じゃあ後はこれで最後ね。先に言っておくけどよほどのことでない限りやっぱり乗らないとか言わないから。その上で聞かせてもらいたいんだけど」

「うん」

「甲斐田君は、何のためにこんなことをするわけ？　これで甲斐田君に何の得があるの？」

やはり来た。当然それは俺でなくとも気になるだろう。

だから俺は用意していた『IS学園の価値観に合わせた』答えを口にする。

「理由は簡単で、僕にはこの一年で実績が必要だから」

その方がおもしろいから、という理由は一見便利なように見える。

なぜなら相手に思考を放棄させることができるからだ。個人の嗜好はその人のものであつて、しかも感覚的である以上相手はその存在を否定することができない。だって好きなものは好きなんだからと言われたら、ああそうですかとしか返しようがないのだ。

もちろんその嗜好が世間一般の価値観から大きく外れていれば、それは変態の烙印を押されたりする。反社会的行為にまで至つてしまえば世間から隔離されてしまうことさえあるかもしれない。

だがその人がそれを好きだということは事実であつて、その事実自体は理屈で否定できるものではないのだ。ただしその態度が嘘臭いなどというのはまた別の話である。

俺が一夏にそう言った時、一夏はすぐに納得した。それは一夏が俺のことを知っていて、俺をそういう奴だと規定しているからだ。どうせ問い詰めてもまともに答えないというような諦めもあつただろう。だがこれで一夏は思考することを投げ出した。

しかし三組連中にはそうはいかない。その方がおもしろいからという理由を押し通した場合、連中の中に残る感情は俺に対する不審感

である。

本当は騙そうとしているのではないか、裏で何かを企んでいるのではないか、実はうまくいかないのを承知で実験台にされているのではないか。そういう気持ちが付き纏う。まして俺についての情報が拡散されてしまった今、一年生にとって俺に対する認識は得体の知れない奴なのだ。

だから俺は最初の時点からそういう感情を払拭しようと努めなければならぬ。そして行動でも示し、結果を持って納得させる。

少なくともスタート地点から躓くわけにはいかない。

だからIS学園の生徒であれば共感できる理由を前に押し出すのだ。

「実績？」

「そう実績。何のためかと言うとね、僕は指揮科を目指そうと思うんだ」

「へえ」

「だけど今のままじゃ絶対に不可能だ。まず成績の時点で遠く及ばないし、実技で全く見込みがないのも分かってる。だから特例として認めさせるために特別な何かが必要なんだ」

「でも甲斐田君は男性IS操縦者なんだし、言えば普通に通るんじゃないの？」

「パイロット科ならね。このまま何も言わなかったら僕は一夏と一緒にみんなとは枠外でパイロット科に進まされると思うよ。周囲が僕に対して望んでいるのはモルモットであることだから」

「そういう言い方はやめて。それは五組の杉山が言ったことでしょうか？」

「知ってたんだ。じゃあテストパイロットであることを求められている、と言い直そうか。だけどその中に指揮なんて言葉はない。むしろ余計なことだろうね。三学期になっていきなり指揮科に行きたいとか言っても即却下されるのは目に見えてる」

「それは……どうなんだろう……？」

「前例がない話なので何とも言えないが、簡単な話ではないだろうな。」

少なくとも指揮科に行けなかった連中が文句を言い出すのは目に見える」

「IS委員会の学者連中は全力で阻止しようとするだろう。」

織斑先生が横槍を入れた結果が今の状態だ。当初の予定ではIS実技の時間俺は別の場所で調査に付き合わされる予定だった。俺ごときにIS実技を学ばせても無駄であるという理由で。

だから俺が指揮を学ぶなど全く意味のない行為であると連中は考えるだろう。そしてそんな時間があればこちらに回せと言うに違いない。

「だからこそだね。特例として認めさせるためにそれだけの根拠をこれから一年間で作る。しかも目に見える形で。その第一歩が今回のタッグマッチというわけなんだ」

「なるほど。理屈としては理解できたわ」

「そうなるなら今度は別の疑問が湧いてくるな。それならどうして三組を選んだ？　なんであたしをわざわざ引っぱり出した？　気心の知れた一組ではダメなのか？」

そら来た。

ここで誰でもよかったなど言っただけはいけない。むしろ俺にとって必要なのだからと言わなければならぬ。

決して一方的な関係であるかのように見せてはいけないのだ。

「三組でなければならぬ理由と一組では駄目な理由だね？　まず一組の方から言おうか。最初からシード権持つてる人達を活躍させても大した意味はないから。そうだね、組み合わせに恵まれればだけど、僕が本気でやれば準々決勝に残る十六組を全員一組の人間にすることは可能だ。つまり三回戦に上がってきた二組から五組の人達を全て撃破できるって話ね」

「それはまた大きく出たわね」

「クラス代表の人達の力量と特徴はもう把握してるし、ダークホースが出てきても二試合見られて専用機のような落とし穴もないから対策は余裕でできる。一組のペアは誰と誰が組むかを僕が決めるから、最適な形で組み合わせられるしね。実技の苦手な人がクラス代表と

当たつたらさすがに厳しいけど、パイロット科を目指す人なら勝ちは十分見込めると思ってるよ」

「大した自信だな」

佐藤が感心したように言うが、そんなことをするつもりは一切ないので実際に起こりえない仮定の話なら何とでも言える。

一組に関わるなら俺はむしろ篠ノ之さんとオルコットを分けたようにできる限り戦力を分散させるだろう。ほどほどで負けてもらうために。

それに他のクラス代表についても俺が加担しない場合はパートナーが穴になるので、一夏を勝たせることに限定すればどうとでもなる。鈴とハミルトンは先輩情報で連携できないことが分かっているので十分に付け込める。宮崎先輩の言った通り一組さえどうにかできれば確かに放っておけるだろう。

ちなみに一組全員にシード権を捨てさせることについては、それは一組連中のためにはなるだろうが、今の一夏に役立つかというと正直怪しいのでやるつもりはない。今さら一夏が初心者とやって得るものがあるのかという話だ。そんなものは日々の訓練で事足りているし、真剣勝負だって既に何度も行っている。

だが一夏以外の一組連中であれば、真剣勝負の機会をできるだけ増やすと言う意味で、シード権なんてさっさと捨てた方がいい。デビュー戦なのだからいきなり三回戦からやっても仕方ない。ゲームのように強い相手とやった方が経験値が多いというわけではないのだ。むしろ二回も勝ち上がった相手であるため、試合に慣れた相手にいいようにされて学ぶ以前に何もできないまま終わってしまう恐れがある。

まあ実際のところは訓練機確保によって一組は他クラスよりも訓練時間が多いので、初心者レベルではその差が顕著に出てくるだろう。加えて相手の対策もできるのでいきなり三回戦であろうといい勝負はできると思う。

だったらシード権を捨てて一、二回戦を真剣勝負の空気や試合の感覚を学んで調整する準備期間に当てた方が有意義だ。現状同条件で

あれば一組の方に分があるのは間違いないところなので、相手が悪くなければ勝ちとは十分見込める。その他優勝を目標にしてできる限り省エネで戦うなどの工夫もできるだろう。わざわざ一夏にやらせる程でもないが。

評価についてもこれからいくらでも挽回可能なのだから結果なんて気にすることはない。一学期の時点で三回戦負けと一回戦負けに大した違いもない。むしろ今のうちに経験を積んで競争に勝つための下地を作っておくべきだろう。

しかし残念なことにそうなる可能性は薄い。鷹月さんと四十院さんは織斑先生の言葉通り目の前の行事を一生懸命やろうとしていて、シード権を大事にするとクラスを縛ってしまった。だから他のクラスメイト連中もシードを前提として全てを考えるので土台を疑うことはしないだろう。常にいい成績を、一番を取ること当たり前にしてきた人達だ。この状況からあえて捨てるという選択ができるかと言うと厳しい気がする。

一方でこれらのことは一夏には全く当て嵌まらない。

まず俺もそうだが一夏は競争の外にいる。国家や企業がついてさらに専用機持ちの時点でいくら成績が悪かろうがパイロット科はもう確定だ。というか一夏が整備科に行って何の意味があるのかという話である。

経験についても一夏はオルコットとの模擬戦やリーグマッチによって今の一年生が必要としている事柄を既にクリアしている。

だから本当はクラスメイト達のサポート役に回るべきなのだろう。名目上はクラス代表でもあるのだから、リーグマッチの経験をクラスメイト達に還元してタッグマッチを導く。そういう役割を本来は求められているはずだ。

大問題は一夏がリーダータイプの間では全くないことである。これは俺が一夏をクラス代表に据えた弊害だ。本人が今やっているのはリーグマッチの恩返しであり、タッグマッチをどうするかなんて一ミリも考えていない。それ以前に考えることは自分の役割ではないとさえ思っている。

織斑先生の本音としては、だったら俺が責任持ってやれ、だろう。だが生憎IS学園という場所はそういう指示をいちいちしたりしないところである。自分で気づいて実行しろという場所なので、俺は逆手に取り安心して気づかなかったことにして何もしない。

とは言っても他のクラスも似たような状況だ。まともにクラスを引っ張れるのは三組のベツティくらいで、他は二組も四組も五組もクラス代表は基本自分のことしか考えていない。ひどい話だが毎年こんなものなのだろうか。それとも今年が特殊なのだろうか。

だが逆に言えばこの点で他のクラスと差をつけることができるという話で、俺が三組に目をつけた理由の一つでもある。

「だけどそんなことをしてもあまり意味はないんだ。元々有利な人達を活躍させたところで順当でしかないからね。だったら別のクラスに行つてそこで目を見張る成果を出した方がいい」

「ジャイアントキリングをした方が見栄えがいいという話か」

「そうだね。それで一組以外を見渡したら選択肢は三組しかなかった。別に知ってる人が多いからじゃないよ。クラスとして一番纏まっているからだ。既にベツティさんがよく纏めてくれているのでゼロから始めなくていいのは成果を出す上で非常に大きいんだ」

「あらそこで褒めてくれるとは。でも確かに甲斐田君にとって都合がいいのはそうでしょうね」

ベツティがボーデヴィツヒの頭を撫でてボーデヴィツヒが嫌そうな顔を上に向ける。

俺が自分の話を始めてからボーデヴィツヒは口を出すこともなく静かだ。きつと俺を観察して分析でもしているのだろうか。

「と言っても、今のままの三組に優位性があるかと言うとそこまでないよ。三回戦で初めて一組が出てくるから残りの四クラスで三回戦の席を争わないといけないんだけど、その席は十五個。一組は僕も含めて十七ペアあるからね。十五個の席を六十ペアで争うとして、三組はどれだけ入れるかと言うと、よくて五つくらいだろうね。それも組み合わせがよかった場合の話」

「はつきり言ってくれるわね。その根拠は？」

「だって入学してたった二ヶ月じゃみんな大した差なんてないから。三組五組が訓練機を使うようになったのは一組よりも半月遅い。だからまだ一ヶ月も経ってないし、いくら二組四組が使えてないと言っても一人あたりの時間を考えると雀の涙だよ。そうなると入学時の能力差がそのまま出てくる。と言うことはこれからの二週間を他のクラスと似たようなことをしてたら差は埋まらないし広がらないよね?。」

「それを甲斐田君がどうにかしてくれるという話なのね?。」

「もちろん実際やるのは三組の人達だけだね。三組が他のクラスと違うのは集団の力で戦えることだ。これは今回一組もできない。なぜなら一組を纏めるべき僕がここにいるから」

「五組は?。」

「はつきり言ってあれは纏まってないでしょ? 杉山さんが前に出て周りも合わせているだけで、周りには支える意思がない」

「どうして分かる?。」

「だって昨日、誰も杉山さんをフォローしようとしなかった。あの場で杉山さんは一人だけ浮いていた」

俺が音を立てて強制的に黙らせた形だが、それ以前に俺は敵地だというのに囲まれなかった。ただ見ているだけで誰も何もしなかったのだ。そして杉山が反応しても後に続かない。五組の連中は下手に関わらない方を選択した。

佐藤も不満が溜まっていてと言っていたが、代表杉山の求心力は確実に低下している。

「それに五組はこの後勝手に混乱状態になるから、そのまま放っておけばいい」

「混乱状態?。」

「また今度説明するよ。今は三組の話。そういうわけで今回三組に限っては集団の力を個人に上乗せすることができる。他のクラスはペアと言っても個々の単位でしかない。それで差をつける。あるいは差を縮める」

「集団の力ねえ……。分かるような、分からないような」

「具体的な話はまた明日みんなの前で言うけど、システムマッチクに、みんなと一緒に訓練しようってことかな」

「じゃあそれはその時間くとして、明日って今日はダメ？ なんなら今からみんなを集めるけど？」

「それが僕はこの後午後から面会が二件も入ってるんだ。雑誌記者の人で、あ、この前お願いしたよね？ その話」

「ああ、あれね。時間かかるの？」

「二件もあるしちよつと終わる時間は分からないからごめん」

「なら仕方ないか」

前回約束した雑誌記者黛姉である。そしてやはり一度では終わらなかった四十院母。

タッグマッチとは全く関係ないが、これはこれでこなさなければならぬ。

どちらも早くどうにかしておきたい問題ではあるので。

「とりあえず僕の理由はこんなところだね。だから本音を言えば三組の人達にはできるだけ勝ち上がって欲しい。でも現実的に考えると三回戦を勝つのがやっとかなって思ってる。二人についても正直優勝は厳しいと考えてる。もちろんできる限りはやるけど」

「特例を認めさせて指揮科に進むためにもね」

「特定のクラスだけ突出した結果を出す。これが僕の今回の目的だ。大して差のない集団に僕が力を貸してそこだけ伸びる。それが目に見える僕の成果となる。どこまでやれるかは分からないけど、最大限の効果を目指したい」

「それがあたし達のためになるのであれば何でもいいさ。じゃあこれから三週間よろしく頼むよ」

「こちらこそ」

別に嘘ではない。三組の連中がんばってもらいたいのはその通りだ。

一回戦二回戦は三組の独壇場になることが望ましい。

ただ、一組は一組で三組以上にがんばってもらわなければならぬ。

正直に言えば完全に有利な状況なのに俺がいない程度で三組に抜かれてしまうようでは論外だ。

しかし全体的に緩んでしまっている今の状態は不安である。

俺が三組についたと知れば多少は危機感を抱くかもしれないが、それだけでは弱い。外部要因だけでは足りないだろう。俺のいない状況でも再び纏まつてもらう必要があるだろう。

となればやはり要となる鷹月さん四十院さんを煽るか。二人共俺への感情を抜きにしても、指揮科を指すくらいだからそれ相応のプライドはある。ならばそこをつつかせてもらおう。そのためにもちょうどいい人間もいた。

それに俺を敵として意識すれば団結もしやすいだろう。

「しかし意外だったな」

「どうしたのボーデヴィツヒさん？」

「二人目の男性IS操縦者がここまで自信家とは」

「全然自信家なんかじゃないよ。自分の未来にとって必要だからそうするだけだし」

「ああ別に悪い意味で言ったのではない。自らの運命を自らの力で切り開こうとするその姿勢に共感したということなのだ。男にもそういう人間がいるのだな」

「それこそ人それぞれだよ」

自信も何も、今の俺は自分を大きく見せなければならぬ。そうしないと信用されないし、人はついてこないからだ。誰が不安げな顔をしている人間について行こうと思うだろうか。

「じゃあ今はこんなところか」

「そうね。あ、そうだ。甲斐田君はどうするの？」

「何について？」

「甲斐田君のパートナー。うちは佐藤が来て偶数になっちゃったから、今度は甲斐田君が余るんだだけど？」

「ああ、それなら僕はぎりぎりまで誰とも組まない」

「それはなぜ？」

「だって僕が誰とも組まないことによって、まだパートナーを決めき

れていない人に対するプレッシャーになるから」

「プレッシャー？」

ベッティは怪訝な顔をするが、佐藤は当事者なだけにすぐ気づいて目を丸くした。

「佐藤さんを五組から引き抜いて三組に連れて来たことにより、三組は偶数、五組は奇数になった。つまり、今現在五組は強制ババ抜きに引き込まれたんだ」

「ババ抜き？」

「このまま放っておいたら五組の誰かは僕というババと組まなければならなくなる。特に五組の人達にとって僕はいろんな意味で組みたくない相手だ、さあ代表の杉山さんはどうするだろうね？」

「クラスの誰かに押し付ける……もしくは他のクラスから連れてくる？」

「それはもう二組か四組しかない。一組はシード権を渡したくないから外とは組まないし。でも引き抜いたら今度は引き抜かれたクラスがババを引くことになる。じゃあどうやって説得するんだろうね？」

二組の人も四組の人もわざわざ他のクラスの人と組む意味はない。騙してペアを組むなんて認められてないし、後で気づいた場合は先生に申し立てればペアを解消できる。ルール上ペアを組むには両者の完全な合意が必要なんだから」

勝手に人の名前を書いて申請するのは許さないという話である。そしてその場で騙すような真似も認めないということだ。

「それってできるの？」

「別に不可能なことじゃないよ。個人的な伝手を使うか、二組あたりのクラスのことなんてどうでもいいと考えてる一匹狼を見つければいい。まあその人が納得するだけの対価を出せるのかって話ではあるけどね」

「うわあ……」

「なんとという嫌がらせ……」

ベッティと佐藤が絶句する。

現在俺についての情報規制が解けたことにより、鷹月さん曰く学年

内には俺が胡散臭い人間であるという噂が広がりつつあるそうだが。その上世界の誰もが知ってる話として俺はISをただ動かせるだけであり、戦力には全くなならない。望んで組むような相手では全くないだろう。

だからこそ俺はその事実を活用する。

「僕と組むのはいったい誰になるんだろうね？」

それは無理矢理押し付けられたかわいそうな人か、競争に加わる気のないやる気なし人間か、それとも三回戦進出を特典だと信じているおめでたい人だろうか。

いずれにしても俺がかける言葉は一つである。

ご愁傷さま。

24. 『嫁』

目の前の相手は服装からして気合が入っているという風情だった。

この前のカジユアルな格好はどこへやら、今回はきつちりとスーツに身を固めて並々ならぬ意気込みを感じる。

その隣も戦闘態勢は万全という感じだ。初顔合わせだが三十代、子持ちのキャリアアウーマンといったところだろうか。紹介ともらった名刺によれば編集長だそうである。

本来この場は堅苦しい話をする予定ではなかったはずなのだが。挨拶を終えて軽く言葉を交わし、さあ本題だとばかりに黛姉が口を開く。

「それで、読んでもらえた？」

「もちろんです。こちらからお願ひしたことですし」

「じゃあ……甲斐田君の目から見た感想を聞かせてもらえないかな？」

これだけである。予定としては。

向こうが作っている雑誌を送るので、俺の感想を聞かせて欲しい。はつきり言つて雑談程度の話でしかない。

くつろいだ姿でお茶でも飲みながら談笑するのが本来の姿だっただろう。

「と言つてもどこから話せばいいですか？ 何しろ三年分は相当な量でしたから」

「まさか後からもう二年分送ってくれと言われるとは思わなかったわ。もう一回聞くけど、本当に読んでくれたの？」

「もちろん量が量だけに事細かに読むとかそれは無理です。後から送ってもらった二年分は流し読み程度ですが読みましたよ」

別に気に入ったからとかそういう話ではない。比較材料としての話だ。

その雑誌の内容は毎年コロコロ変わるものなのか、それとも毎年企

画が定番化しているかだ。

「なるほど。本音を言えばそれだけでもう感無量なんだけれど、甲斐田君としては目新しかったのかしら？ 何しろこの雑誌は男の人の目なんて一切気にしてないし、全くの別世界かもしれないから」

「知ってる人が出てたのでそうでもなかったですよ」

「誰!? あ、もしかして……」

「そうです。生徒会長の人です。薄々そうじゃないかと思ってましたけど、あの人って目立ちたがりなんですか?」

「あはは、それはもちろん、たっちゃんはそのうちの大好きよ。でも存在感あって華もあるし、あれこそIS学園を目指す女の子が憧れる姿ね」

雑誌を見て驚いたのが、生徒会長出過ぎ、なことだ。

この半年間毎号出演している。それはインタビュー記事であったり写真であったり何かをする企画であったりと様々だが、IS学園に関する内容では圧倒的な出現率を誇っていた。

その上一年時の行事を総なめに行っているのだから、この一年はまさに更識……楯無の一年だったのだろう。ちなみに最新号ではパイロット科初の生徒会長就任が讃えられていた。

なるほどそんな絶大な人気を誇る人間を毎回毎回涙目にさせてしまつては、俺に反感を持つ生徒が出てくるのも納得だ。

「ということは今の一年生にもそれなりに知られてるんですね」

「それはもちろん! 例えばたっちゃんにはこういうエピソードがあつて、そ」

「あ、別にそういうのはいいです。特に興味が有るわけでもないのよ」「そ、そう。……ええと、知ってる顔はそのくらい?」

「二年生にはほとんど知り合いがいらないですよね。知った顔ならむしろ三年生の方が多いいんです」

「甲斐田君は三年生に知り合いが多いの?」

「編集長、それが甲斐田君最初の武勇伝です。入学三日目にして単身で三年指揮科の教室に乗り込み、その場にいた生徒全員を説き伏せたという」

「ああ、その時に知り合ったのね」

武勇伝とか説き伏せたという単語が引つかかるが、噂というのはえてしてそういうものなのだろうか。

「それが武勇伝なのは知りませんが、その時以来三年の先輩方には何かと助けてもらってます。雑誌で見たのはおとしの宮崎先輩と佐原先輩ですね」

「ああ、指揮科と衛生科に行った子ね。あの時は確か宮崎さんが一人じゃ嫌だって言い出して、たまたまその時側にいた佐原さんに頼み込んで一緒に出てもらったのよね……。あ、ごめんなさい。甲斐田君はこういう話に興味なかったわね」

「いえ、せっかくなので聞かせてください」

生徒会長は正直どうでもいいが、宮崎先輩はどうでもよくない。

雑誌の話をしたら顔を真っ赤にして即刻燃やせと騒いだので、いじるネタとして使えそうだ。三年生は基本的に俺をいじろうとするので、反撃材料があるに越したことはない。

「そ、そっちには興味あるんだ……。と言つてもそれくらいで、特に何か変わったことがあったわけではないのよね。基本的にIS学園の子って素直だし、きちんとやってくれるからこちらとしても困ることもないのよ」

「そうなんですか」

「じゃあ……。甲斐田君が昔の宮崎さんを見た感想はどう？ だいぶ変わった？ それとも全然変わってない感じ？」

「あ、それは全然雰囲気違ってました。二年前の姿はもうちよつと幼さが出てるといふか、活発そうでしたね。今は落ち着いていてどちらかと言うと大人な雰囲気で、やっぱり二年も経つと成長するんですね」

「ふふっ、そうね」

黛姉が今日初めて緩んだ顔になって笑う。

宮崎先輩の二年前の姿を見た印象としては、鷹月さんを柔らかくしてもっと元気にした感じだろうか。

もちろん俺が同じ指揮科という括りで見ているからかもしれない

し、黛姉がそういう風に見えるような写真を選んだ結果かもしれないが。

「ちなみに、今年もやるんですよね？　その今年の一年生を紹介するという企画は」

「そら来た！　という顔で黛姉は一瞬で切り替えて背筋を伸ばす。わざわざこんな話題を出したのはこれが目的である。」

「俺もそうだが、先方もただ雑談をして終わりにするつもりはないよ。うだ。」

「それはもちろん、やれるものならやりたいわ。ここ数年の定番と言ってもいい企画で、毎回大好評でもあるんだし」

「じゃあもしそこに一夏がいたら嬉しいですか？」

「それが可能ならぜひとも！　と言いたいんだけど、さすがにこればかりは甲斐田君の一存でどうこうできることじゃないのよ。ただ本人にうんと言わせれば、いえ本人がうんと言ったからだけではダメで、そこに至る過程にはいろいろ面倒なことが待ち構えているの」

「一夏にも一応置かれた立場がありますからね」

「当然そんなことは百も承知である。」

「一夏にうんと言わせればなんとでもなる環境などその姉が見過ごすわけもない。」

「それなら話が早いわ。甲斐田君だから話すけど、実は私達もその未来を実現させたいと思っていて、これから交渉を始めようとしているのよ」

「その交渉相手は誰ですか？」

「それが一つじゃないのが大変なところ。まず織斑君の所属している倉持技研。そして日本政府にも話を通さないといけない。と言っても倉持技研にも日本政府にもその手のやり方は決まってるから、このあたりは特に難癖を付けられるような心配もないはず」

「と言うことは難癖を付けて断ろうとする相手がいるわけですね」

「ご名答。さすがね。最後の難関はIS学園。正確に言えば織斑君の姉である織斑先生。はつきり言って現状は難攻不落状態。別に私達に限った話じゃないけど、織斑君への取材の申し込みはここでござい

とくシャツアウトされてしまっているの」

しかしそれは仕方のない部分もあったりする。

これまでの一夏では危なっかし過ぎて、とても外には出せなかっただろう。

何しろ配慮など一切なく、思ったままを口にしてしまうのだから。

「でもこの前外出して会見までしましたよね？」

「もちろん甲斐田君は分かかって言ってるのよね？ あの時は甲斐田君のことを名目にして織斑君を無理矢理引っ張り出したに過ぎないんだから。それに写真だけは撮れたけど結局織斑君へのインタビューは軒並み却下されてるし」

ということやはりあの一連に至る騒動を起こしたのは日本の、いや世界のマスコミ連中なのだろう。

博士によつて流出した映像が引き起こした騒ぎとも言えるが。

「その後も変わりませんか？」

「変わるも何も相変わらずよ？ 先週も駄目もとで申し込んでやっぱ駄目だったし」

「そうですか。それはタイミングがちよつとだけ早かったかもしれないね」

「早かった？」

「だって、織斑先生の許可なら僕がもう取りましたから」

「えっ!？」

早い話が先に根回しをしてしまったということである。

入学当初とは事情はだいぶ変わっており、今の織斑先生なら選別した結果断ることはあっても、絶対に取材を拒否するということはない。

カナダへ行くことを決めた時点で織斑先生は完全に方針転換をした。それはつまり納得できる理由があれば一夏への取材も受けるという話だ。

現状取材を受けないのは単に一夏がとても人前に出せるレベルではないからである。

「あ、ついでに倉持と日本政府にも一夏経由で話は通してます。どち

らもどんどんやってくれというノリだそうなので、申し込めば特に問題もないと思いますよ」

「ええっ!？」

「ちよ、ちよっと待って甲斐田君、話が飛び過ぎてないかしら？ それほこれから始めることであって、なぜ話が進んでいる状態になっているの？」

慌てたのか横で話を聞くだけだった編集長が口を挟んできた。

しかし物事を決められる責任者がいたのは幸運だ。この場で判断を迫ることができる。

「あれ？　もしかして余計なことでしたか？　雑誌を見たら毎年やってるみたいだし、特に問題もないと思ったんですけれど？」

「い、いや、そういうことじゃなくてね……」

「無理なら無理で別にいいですよ。この話はなくなりましたで終わりなので」

「待って！　そういうことじゃないの。すごく嬉しいわ。あの織斑先生を説得するだなんて本当にすごい。でもね、まだ存在もしていなかった話をどうして甲斐田君は進めようとしているの？」

そんなものは決まっている。俺の考えた形でやらせるためだ。

別にデイトールは好きにすればいいが、大枠では俺の考えた範囲で行うことに意味がある。

そのために各方面にまで手を伸ばしたのだ。

「それが必要なことだから、では駄目ですか？」

「もう少し詳しく」

「じゃあ……黛さんは僕らの夏休みについて知ってますか？」

「それは……噂程度なら……」

「別に隠してる話でもないですからね。おそろく知ってる通り、僕と一夏は夏休みカナダに行きます。目的は一応親善のためです」

「うん」

「今の織斑先生は方向転換をしたんです。一夏を人前に出さない姿勢を百八十度改めました。だからこの前外出をしましたし、夏休みにはカナダへ行きます」

「なるほど。それで？」

「つまり今の一夏には人前に出るといふ経験が必要なんです。今の一夏は危なっかしくて、見ていてとても不安なので」

「それはさすがに言い過ぎじゃない？ この前の織斑君はとても立派だったと思うし、その後のニュースを見ても完全に好意的よ？」

「あれは一夏とあの場をそのために仕込んだからです。台本に沿って動かしてあげないと、今の一夏は何もできません」

完全に台本通りで、俺が一週間かけて覚えた事柄は何一つ出番もなかったほどだ。

とはいえそれで世間が一夏に対して気にしていることを理解できたので、後から考えればまるきり無駄ではなかったと信じたい。

「要するに二週間前の会見は一夏が人前に出るための練習です」

「裏ではそんな目的があつたわけか」

「そうです。そして今回も同じ理由です」

「私達は練習台だと」

「言い方は悪いですがこちらの目的としてはそうなります。今後もしインタビュールなんかを受ける機会が出てきますし、早く一夏を慣れさせおきたいんです」

「なるほどねえ……それで私達を選ばれたと」

こちらの意を汲んでくれる取材側などまさに練習相手としてうってつけである。

一夏に対する世間の態度を見ているとそこまで心配しなくていいかもしれないが、それでもいい相手がいるのであればそちらを選ぶのは当然の話だろう。

「選ぶと言っていると語弊がありますね。むしろ黛さん達だからこそ言える話なわけで」

「待って。まだ会うの二回目なのにそんなこと言われると信頼が重すぎるんだけど」

「いや、この雑誌のことですよ。今までやってきたこの範囲でやってくれるのであれば特に問題もないだろうということですよ」

「それはそれで今度は試されてる気がする……！」

「落ち着きなさい。うちの部下が失礼してごめんね。甲斐田君、つまりこれは織斑先生ではなく甲斐田君主導の話なのね？」

「別に織斑先生からやれと言われた話ではないです」

「それならなぜ……いや、今はいいわ。とりあえず甲斐田君の案に乗るか乗らないかという話なのは理解しました。条件は練習のために織斑君を出すことだけ？」

「あ、それなら出して欲しい人が他にも」

「他にも誰かいるの？」

雑誌の読者は一夏を求めているかもしれないが、一夏一人だけでは去年までの企画とそう変わりなく、物足りなくて芸もない。

だから一夏がより引き立つよう紙面を彩る賑やかさも用意したい。「今年の留学生五人にもこの話をしました。それで全員からオツケーをもらってます。もちろん母国の方にも話をしてもらって。どの国も快く許可を出してくれましたよ」

「えっ?」

「イギリスのオルコットさん、スペインのリアーデさん、中国の嵐さん、カナダのハミルトンさん、イタリアのベッテイさんの五人です」話をしたのは一週間ほど前である。だが土曜までに返事をしろと伝えさせたところ、どの国も翌日許可を返してきた。詳細はまた別途詰めさせて欲しいとのことだが、やること自体に文句はないようだ。何しろあの織斑一夏と一緒に取材を受けて雑誌に載るのだから、それは国としても見逃せないだろう。あの中国の管理官は直接俺に電話までかけてきた。

「と言っても本当にやるのであれば詳細を聞かせて欲しいそうです。これは各国の担当者の名刺のコピーなんですけど、この人達に連絡しあげてください」

「あ、はい……」

「全員日本在住だから別にその国にまで行けって話ではないですよ?」

「それはそうでない困るわ……」

黛姉は完全に固まり、編集長は呆然と俺が差し出した紙を眺めてい

る。

悪いがこのまま逃がすつもりはない。

今回のことはそちらではなくこちらから持ち出した話だ。だから断ることは普通に可能である。納得させるためとはいえ織斑先生の話をしてしまったので、別に俺を通さずとも今後取材はできる。

だから俺は今回付加価値をつける。織斑先生の影響力は絶大だ。中国の管理官などは完全に目上扱いしていたし、本人がその気になればいくらでもその力は行使できるだろう。

しかし生憎と織斑先生は基本的に不干渉主義である。一夏に取材を受けさせるからと言つて、じゃあ他の連中もとはならない。相談されたら聞くだろうが、それはあくまで教師としての範疇でしかない。

それなら俺は織斑先生ならやらないことをやってみせようという話なのだ。

「別に中身に対してどうこう言うつもりはありません。奇抜なことをして欲しいというような話ではなくて、これまでやってきた企画にこのメンバーを入れて欲しいというだけですから」

「……本当にそれだけ？」

「あれば言いますけど、今のところはそれくらいですね。あ、別に後から難癖をつけようとか全く思つてませんよ」

「甲斐田君は？ 甲斐田君はそのメンバーの中に入ってるの？」

「うーん、正直に言えば僕は出たくないのが本音ですけど、出ないことで問題が生じるようならまた考えます」

「そう」

このへんの世間の事情はちよつと読めない。

別に俺などいなくても大丈夫だろうが、出ないことによつて俺が不遇をかこっているなどと変に勘ぐられても困る。この前の外出ではまさに俺のことを材料として使われてしまったし、徹底的に隠れるというのはかえつて怪しまれるだろう。

とはいえ俺としては取材の日に定期検査の予定が入ってしまうつもりだが。

「それで、どうですか？ やりますか？ やりませんか？」

「はー……」

編集長は下を向いて深い溜息を吐き、それから顔を上げる。

その表情は腹をくくっていた。

「やるもやらないもここまで来ると選択肢は一つね。ありがたくお受けします。甲斐田君の努力を無駄にしないためにも」

「別に僕の努力とか話をしただけですけどね」

「話を企画から実行にまで持っていくのは立派な努力よ。黛もそれでもいいわね？」

「えっ!? いや編集長がいいのならいいですけど……なんかまた立場が逆転してしまったような……」

「これが甲斐田君のやり方なのよ。私も今回身にしみて理解できたわ。あ、別に甲斐田君のことを悪く言ってるわけじゃないから」

「はあ」

外堀を埋めて逃げ場をなくすのはよくある常套手段だと思いが、まあやってくれるのであればとやかくは言うまい。

「さてと、じゃあ織斑君以外の留学生についてそれぞれ人となりを教えてくださいませんか？ 取材をするにもそれ以前の交渉をするにも事前準備が必要だから」

「それはそうですね。じゃあまずはイギリスのオルコットさんなんですけれど……」

とりあえずこちらの意図を伝えることはできた。

ここからは彼らの領分であって、素人の俺が余計な口を挟んでも邪魔なだけだろう。

俺としては方向性さえ逸脱しなければ後は好きにしてもらって構わない。

留学生を引っ張ってきたのも実を言えば鈴とオルコットを一夏のお目付け役にするためだ。

鈴は一夏がおかしなことをしようとしたら殴ってでも止めるだろうし、オルコットは一夏の独特の感覚を翻訳できる。他の三人は誌面を華やかにしてくれればそれでいい。

そして俺が一夏の側にいると一夏は俺に全部丸投げして何も考え

ようとしないので、その場に俺がいけないことにも意味はある。まあその場合は鈴とオルコットに頼るのだろうが、最初のうちはそれも仕方ない。それは徐々に一人の場を作っていけばいい。

まずは選択肢の中から選ぶことができるようにならなければだ。

雑誌記者二人は意気揚々……ではなく一分一秒でも惜しいという勢いで帰って行った。

外との交渉以前に企画を一から作り直さなければならぬので、戻って緊急会議をすることである。

しかし少々話を大きくし過ぎてしまったかもしれない。俺の頭の中では今月中に取材をしてもらって夏休み前、正確にはカナダに行く前に雑誌を出してもらいたかった。だが六カ国にまでわたる話になってしまったこともあり、今から始めるのでは交渉や手続き上物理的に不可能らしい。

日程的な話をするに夏休み前に取材、そして夏休み終わりに雑誌が出る、というのが限界だそう。週刊誌ならまた話は違ったかもしれないが、月刊誌では仕方のない事だと言えるだろう。

八月の終わりに出るのであれば九月半ばの学園祭を見据えられるので、取材の件はそこに焦点を当てた方がよさそう。六、七月が世間の話題的にも無風状態になってしまふのは残念だが。

「こんにちは。今日はわざわざお招きいただき光栄だわ」

さて息をつく暇もなく次の相手、四十院母である。

俺がその言葉を発すると、四十院母は最初きよとんとした顔をし、それから笑い出した。

「おかしいですか?」

「ええ本当に。なるほど、甲斐田君はうちの娘をそういう風に見てたのね」

やはりしらばっくれてきた。

認めた上で何かを言ってくる可能性も考えたが、まずはそう返して

くるのが普通だ。

ただ俺は指摘をしただけなのだから。

「違いますか?」

「私が娘の神楽を甲斐田君にけしかけている、ね。残念だけれど全くの見当違いと言わざるをえないわ」

「そうですか」

別に認めるとは思っていない。大事なものは釘を差すことだ。

俺がIS学園の中にいる以上目の前の女は娘を通じてしか俺に干渉できない。今日のように直接会うのは俺がそう望んだ場合のみである。

だから俺に対して何かを企んでいようが無駄だということを示す。

「うーん、議論をしたって顔じやないわね」

「いくら議論をしたところでそのつもりはないと言い張れますから。そんなことをしても無駄だと言いたいです」

「なるほどー。そういう風に自己完結をしちゃったか。言っておくけど私に言ったところで何も変わらないわよ? 甲斐田君は娘の態度からそう感じたってことでもいいの? それとも誰かにそう言われたりした?」

「他人は関係ないです。僕がそう思っただけで」

周囲はむしろ変な空気を出し始めている分面倒だ。相川さんとか。

「そっか。つまり甲斐田君は迷惑しているわけね?」

「そうです」

「じゃあそれをそのまま神楽に言えばいいと思うわ。迷惑だから以後近づくなつて。というよりどうして直接本人に言わないの?」

「やらされているんだから本人に言ったところで解決はしないじゃないですか。大元をどうにかしないと」

「やらされている? 甲斐田君の目からはそう見えるの?」

「そうです。いちいちやるのがぎこちないというか不自然とか、無理してやってる感がひどくて、下手な演技を延々と見せられているみたいでいたたまれないですよ」

最近はまだ痛々しくていい加減かわいそうになってきた。

だからこそ四十院母から面会の申し込みがあり来月あたりを希望とあつたのを今日に早めさせたのだ。社長だから無理は利かないかと思つたがあつさりやつてきたのは幸いだった。

「あー、そういうことか……。あの子らしいと言えばその通りだけれど、どうしたものか……。甲斐田君、これから二つの選択肢を示すから選んでもらえないかしら？」

「何の話ですか？」

「甲斐田君が今後取るべき道の話。一つはもう面倒だから以後娘とは関わり合いにならないという選択。それなら今言ったように、迷惑だから近づくなつてあの子に言えばいいわ。これまでの関係はもう保てないだろうけど、少なくとも甲斐田君は今の煩わしい状態から解放される」

「なるほど」

ということとは次が本命なのだろう。

「もう一つは、これから私の言う話を聞いてどうするかを判断するという選択。別に大してややこしい話でもないし聞かなきやよかつた的なことでもないけれど、所詮は他人の事情だからね。変に踏み込みたくないというのであれば無理強いはいしなわ」

「つまりできれば聞いて欲しいということですね」

「それはもちろん。私達がこうやって話をしていることも影響しているだろうし」

「それますます聞いてくださいと言ってるじゃないですか。それなら最初からそう言つてくださいよ」

「そうは言つても、一応逃げ道は用意しておかないと」

別な事情があるか。

だが穏便な解決を望むことができるのならその方がよしだ。

リーグマツチを一緒に取り組んだ仲間だし、俺だつてわざわざ四十院さんとの仲を険悪にしたいわけではない。そのためにこうやって本人を飛び越えて話をしようとしたわけだし。

「ここで終わると僕が人でなしにされそうなので、聞くだけは聞きませす」

「ふふつ、ありがとう。まずさつき甲斐田君が言った、娘をけしかけるという話なんだけど、実は入学前にそれ系の話を娘にしたことがあるの」

「は？」

やはりそういう発想をする人間だったか。

あながち俺の想像も外的外れではなかったかもしれない。

「あ、その時は甲斐田君のことなんて何も知らなかったし眼中にもなかったわ。当然織斑君の話。織斑君は結婚相手として最適だよって神楽に言ったの」

「なるほど。それで四十院さんの反応はどうでした？ 怒りましたか？」

「別に怒ってはなかったわね。元々私達には少なからず結婚にはそういう恋愛以外の要素も含まれているというのを理解していたから、自分の結婚相手としてどうか見てみるって」

「ということは一夏は四十院さんのお目になわなかったのか」

クラスメイト達の様子を見て意外だと思ったのは、一夏に計算づくで近づいてくるのがないということだった。

何しろ一夏はあのブリュンヒルデ織斑千冬の弟だ。それだけで一夏に近づく価値がある。

それに見た目的にも同じ遺伝子を持っているのが分かる。二人横に並べれば織斑千冬の男バージョンとも言えるだろう。

中身は少々残念だが、男に対して知性を求めない女であればむしろ好都合である。家事万能であることを合わせると、計算する女ほどよだれを垂らす人材だ。

中学時代は少なからずいた。だが一夏はそういうのが感覚的に分かるらしく、自分の中でそう判断すると途端に塩対応となる。最初は計算で近づいた女子は後から本気になって、時既に遅しだった。

IS学園の生徒に計算オンリーなのがないのは、きつと今の自分に対して絶対の自信を持っていて、誰かに寄りかかる必要がないからなのだろう、と俺は想像している。

なればこそおそらくその自信を失うであろうタッグマッチは俺の

中でチャンスでもあるのだが。

「入学してしばらくしてから話した時は、織斑君は結婚相手としてあり得ないって言ってたわね。一緒にいてもきつとイライラするだけだろうって」

「意外と四十院さんって辛辣なんですね」

「あの子は結構毒吐くわよ？ 甲斐田君は聞いたことないの？」

「言われてみれば僕もいろいろ言われていた気がします」

最近を持ち上げられてばかりだったので失念していたが、そういえばリーグマツチ期間中は鷹月さんやオルコットと共に俺をぞんざいに扱って毒を吐いていた。

「リーグマツチが終わった後は織斑君を見直したようなことを言ってたわね。決める時にきちんとは決めるのはすばらしいと。でも普段が普段だから一緒に暮らすのはとても無理だと」

「けっこうシビアに見えますね」

「愛情がなければそんなものよ。そしてここからは想像なんだけれど、神楽はその理論を織斑君の隣にいた甲斐田君に当てはめてしまった」

「は？」

意味が分からない。なぜ俺に当てはめる必要がある。

「リーグマツチが終わった後、あの子は明らかに凹んでいたわ。それは前回に話した通りで、自分のやったことが何もかもうまくいかなかった、神楽は完全に自信を失ってしまった。これは甲斐田君にも分かる話よね？」

「はい」

「そんな中、神楽の隣には甲斐田君がいた。さらに甲斐田君は神楽がとてもしできないような活躍をしていた」

「活躍って言うほどのことでもないですけど」

「この場合は客観的な話ではなくて、神楽の中でのことね。最後はアドリブで指揮までしてのけて見事勝利。これで神楽の中にすっぽりはまってしまったのよ。ああこの人こそ私の夫になる人なんだと」

「なんですかそれ!?!」

なんという飛躍……ではない。

はつきり言つてよく分かる。まさに俺が今からやろうとしていることなのだから。

タッグマッチで敗れて自信を失ってしまった女生徒達に一夏という夢を見せる。それが俺の裏の、真の目的だ。

「要するに一種の刷り込みね。甲斐田君、リーグマッチが終わった後神楽と何かなかった？　もしくは何か言われなかった？」

「いや、そう言われても特に……」

四十院さんの態度が変わったのはいつだったろうか。

おそらく宮崎先輩にリーグマッチの反省会でボコボコにされたあたりだろうが、あの時の俺は精神的におかしい状態だった。特に何も気にせず流していた可能性が高い。

「はつきり言つて今の神楽は完全に引つ込みがなくなっている状態ね。きつと不安で立ち止まれないんだと思うわ。それに計算してやるのなら甲斐田君に不審がられてる時点で完全にアウトじゃない。だいたい私が本気でやらせるのならそんな真似はさせないわよ？　三年かけてじっくりと逃げられないように囲い込むでしょうね」

「それはやめてください」

今恐ろしいことを言われたが、確かに計画的にやるにはさすがすぎる。

俺との永続的な関係を求めるのであれば、今やっていることは全くもって効果的とは言えない。

「というのが私の想像。想像だけどこれでも母親だしそう遠くないと思うわよ……」

「いや、なんかいろいろ腑に落ちました。過大評価気味なのはずっと思っていましたし、あり得ないことが起こってる時点で何かあるんだろうなと」

「過大評価？　あり得ない？　そこまで言わなくても」

「それはそうでしょう。たまたまうまく行ったのを実力みたいに見えるのは過大評価以外の何者でもないです」

「なるほど、それが甲斐田君の自己評価なわけね。でもどんな形であ

れ成功という体験は自信に繋がるものではないかしら?」

「ISで自信を持ったところで僕には意味のない話ですし」

ISにおいて俺は誰からも何も求められてはいない。学者連中もいずれ諦めるだろう。

俺はISに乗って何かを為すことはできないのだから。

「それが甲斐田君にとっての原点か。謙虚とはまた違う話ね」

「別に何でもいいです。それより話を戻しますけど、僕としては穏便に済む解決方法を求めたいんですが」

「神楽に突き付けてやるのが手っ取り早いと思うけどねえ」

「それじゃ四十院さんの黒歴史量産じゃないですか。あれなんか前にもあったような……まあいいや、さすがにタッグマッチを前にそういうこと言うのはどうかかと」

「あら心配してくれるの? 迷惑している相手に対して?」

「別に嫌ってるわけじゃないですよ。無理してやろうとしているのが忍びないというか」

「要するに神楽のおかしな行動が収まってくればいいわけね?」

「そうです。できれば本人の中だけで収まるくらいがベストで」

もつと言えば、なかったことにしてやるからくだらないこととしてないでさっさとタッグマッチに取り組み、だ。

四十院さんはオルコットと組むのだから、優勝候補に名を連ねる存在である。ゴーレム戦を見ても俺の期待以上の働きをしてくれたし、今回もそれなりの結果を出してもらわなければならぬ。できれば鈴や更識妹などを撃破してくれると嬉しい。

「うーん、そうなると会話の中で間接的に気づかせるくらいしかないわね……。それなら甲斐田君の得意技じゃないの? この場合は別に自意識過剰とかではないから変に気にしなくて大丈夫よ?」

「まったく得意にはしてないですね。むしろ母親の方がやりやすいんじゃないですか?」

「でもあの子はわりと私の話を聞いてくれないしなあ……」

娘のことなのだからグダグダ言っていないでやれだ。

元はといえば娘に余計なことを言ったのが引き金なのだから。

「まあ根本的な要因は私の方にあるし、じゃあ夜にでも電話して言うだけは言ってみるわ。月曜に何も変わってなかったらごめんね」

「やるからにはちゃんとお願いしますね」

アリバイ作りで適当な電話だけして終わらせそうな気がしないでもないが、一日くらいは様子を見るか。駄目な場合はもうこの母親のせいにして俺が言ってしまうおう。

「ちなみに甲斐田君に迷惑をかけているのは神楽だけ？」

「四十院さんだけなら少しくらい流そうかって気にもなるんですが」

「あらモテモテじゃない。意外と甲斐田君も隅に置けないのね」

「冗談でもそういうのはやめてください。一夏とはわけが違いますから」

「ちよつと言い過ぎだったか。ごめんね」

もしかして、ハミルトンも同じなのだろうか。

直接言われているのではなく、鈴が母国の管理官からやられていたように心理的に誘導されているとか。

ルームメイトである鈴にも煽られて、もしかしたら今のハミルトンは視界が狭くなっているのかもしれない。

だが普段のハミルトンの様子など知らないので、鈴のように異変に気づくのは難しいか。ひとまず会話をしてみても例えば強迫観念に駆られているなどの不自然なところがないか観察してみよう。

「じゃあこの話はこんなところで。それより今度のタッグマッチなんだけれど、甲斐田君は何をするつもりなの？」

「どこで聞いたんですかその話？ 四十院さんが何か言っていました？」

「あら、本当に何かやるんだ」

「知らないで言っただんですか」

「外の人間が知るわけじゃないじゃない。でもね、甲斐田君のことを知っている人ならみんな楽しみにしているとと思うわよ？」

「何ですかその娯楽みたいな言い方」

そういえば警備の人達も俺が何をやるのかとしつこかった。俺を何だと思っているのか。

「そうね、素人は織斑君に期待し、玄人は甲斐田君を楽しみにする、という感じかしら？」

「どの方面の玄人なんだかなあ」

下級生から同級生、二年生くらいまでは俺を胡散臭い顔で見ているが、三年生以上の大人達は俺を面白がって見る。

いったいその差は何なのだろう。

「私がこうやって甲斐田君とお話したいのはね、甲斐田君は次に何を考えて何をしてくれるんだろうと思っっているからよ」

「社長って意外と暇なんですネ」

いずれにしても邪魔さえしなければギャラリーなどどうでもいい。俺は俺のやりたいことをやるのみだ。

IS学園の寮の部屋にテレビはない。

だが寮の中に二台だけ存在する場所がある。食堂と休憩室だ。

と言ってもテレビの電源が付いている時間は限られているし、映っているのも常に国営放送のみで民放が映されることはない。

ニュースなどはフィルターがかかっているとはいえ部屋にあるP
Cから見られるので、わざわざテレビを見に来るような生徒は少ない
そうだ。俺も一夏も特に見たい番組もないので、入学してからはテレ
ビを見ない生活だと言えるだろう。なければならないで意外と支障もな
かった。

であるのだが。

「よーよーねえちゃん、いいもん持つてるじゃねえか」

「ああこれだけは！ 今日一日飛び回って集めた食料なのです！」

「そういうことは聞いてねえんだ。いいからさっさとよこしな」

「そんなご無体な！ 見ての通り私には幼い子供が！」

「じゃあ怪我をさせたくなかったら素直になった方がいいぞ」

「ああつ！ そのくちばしでつつかないで！」

テレビから出た音声ではない。食堂のテレビは遙か先にあつてこ
こには声も届かない。

つまりその言葉を発したのはこの場にいる二人である。この二人は並んで座ってテレビを見ながら会話とも言えない会話をしていた。

「二人とも何やってるの?」

「あ、甲斐田君だ。聞いてたのならそのまんまだよ」

「ごめん夜竹さん、そのまんまとか言われても意味が分からない」

「あれですよ甲斐田君。よくあるアテレコごっこ」

「田嶋さんにとってはよくあることなのかもしれないけど、少なくとも自然番組に当てる声として間違っていると思うのは僕だけだろうか」

「わたしは甲斐田君だけだと思ふなあ」

「そっか。それは失礼しました」

つい突っ込んでしまったが、そもそもこの二人とまともな会話をしようと試みることで自体が無駄な行為だった。何しろクラスにおいてフリーダムさでは並ぶ者もないほど突き抜けているコンピだ。

ちなみに谷本さんはソロ活動を行っているのだが、その矛先が全て俺向けなため、クラスメイト連中は特に被害を被っていない。せいぜい鷹月さんがイライラして四十院さんが情けの声をかけるくらいである。

「つとそうだ。ちよつと話をしたいことが」

「えっ!?!」

「どうかしたの?」

流してそのまま去ろうとして、ふと思いついたことがあったので振り返る。

後ろめたさのあるらしい夜竹さんがビクツと体を揺らした。

「そ、そうだ! あたしにはこれから用事があった! 智子あとよろしく!」

「へっ?」

「あ」

言いながら夜竹さんは素早く立ち上がり、お盆を持って走り出す。前もそうだったが瞬発力だけはすごい。

走りながらも夜竹さんは残ったスープがもったいないでも思っ

たのか、片手で持って口にあおろうとする。だがその行為によって逆にバランスを崩し、そのまま綺麗にコケてお盆に乗っていた皿の中身をぶちまけた。

「それで話ってなに？」

「田嶋さんも意外と動じない人だよね」

「だって気にしちやったら助けなきやいけなくなるし」

「ドライでもあったか。まあいいや、田嶋さんってタツグマツチは誰と組むか決めた？」

「まあ普通にさゆかと」

田嶋さんの視線の先では夜竹さんがしくしくと泣きながら床を拭いていた。その隣には割烹着姿の食堂の人がなぜか竹刀を持って仁王立ちしているが、それはあえて気にしないことにする。

「田嶋さんは順当に夜竹さんとか。みんなそんな感じで決めてるの？」

「そこまでは分かんないけど、昨日今日でだいたい決まったんじゃないかな？ 織斑君とデユノア君が組むことが知られてからはあつという間だったよ」

「それはそうだろうね」

土曜の午前中のうちに一夏デユノアに加えて鷹月篠ノ之、四十院オルクottも決まっただろう。クラスの有力メンバーがあつという間に決まっては、さすがに周囲も焦る。誰もが早い者勝ちだと気づいて次々とペアは成立してくれたようだ。

「それがどうしたの？ 甲斐田君は他のクラスの人と組むって聞いたけど」

「うん、まあ僕のこととはどうでもいいんだ。じゃあみんなはもう真面目に取り組む感じ？」

「そんな雰囲気だねー。でも今回はリーグマツチの時と違って楽しくなさそう」

「へえ。どうしてそう思うの？」

「だってみんな自分のことしか考えてない感じだもん。リーグマツチの時みたいにみんな楽しくがんばろーって空気じゃなくて、他人な

んて知ったことかー、って感じがして」

「二人組とはいえ個人戦だしそうなるだろうね」

よし予想通りだ。

クラスメイト達ではなく、田嶋さんである。

馬鹿騒ぎしたい人間としては、そういう雰囲気を見たいわけがない。

「甲斐田君がいなくてこうなっちゃうのかって思った」

「別に僕は関係ないよ。もともとがそういう話だし、今回僕がやれることなんてないから」

「うそだー。三組の人達と集まってコソコソ話をしてたじゃない。今度三組で何かするんでしょ?」

「よく知ってるね」

「それって一組じゃダメなの? 一組でやってまたみんな楽しんでやろうよー」

「それは無理な話だね。だって一組でやったっておもしろくもなんともないから」

「うーん、それならどうしようもないか」

おもしろくないで普通に納得するあたりも好都合だ。

それなら俺はおもしろさを提供してやれる。

「じゃあ田嶋さん、僕はタッグマッチを楽しく過ごそうとしてるんだけど、田嶋さんも乗ってみる?」

「何それ!」

「僕としても今回のタッグマッチはつまんないわけなんだよ。だってみんな自分のことばかりきりで、僕がやることないしね。だから考えたんだ。じゃあこのタッグマッチそのものを僕が盛り上げてやろうと」

「そんなことやろうとしてるの!? やるやる!」

「まあまあ落ち着いて。あんまり人に聞かれたくない話なんだから」

声を潜めて俺は周囲を見渡す。

幸いこの席は食堂の隅であり、また近くに人はいない。

「おつとごめんさい」

「まず僕は三組に声をかけてやる気にさせた。あと五組から元代表

の、あ、五組はリーグマッチが終わった後クーデターとかあったんだけど、それで追われた人を引っこ抜いて三組に入れた。これで三組が偶数、五組が奇数になった」

「ふんふん」

「一方で今僕は一人余ってる状態だ。だからこのままだと奇数となった五組の人は僕と組まなければならぬ。でも五組の人達って僕のことを嫌ってるから僕なんかとは絶対に組みたくない。どうなると思う？」

「押し付け合いか、他のクラスに手を出す？」

「きつとそうだろうね。それはまだどうなってるか分からない。今はここまで。おととい思いついて昨日から始めたんだ。だからやりたいいことはまだまだたくさんある」

「次はどうするの？ 二組？ 四組？」

「まあまあ落ち着いて。次は一組だ」

よし完全に乗った。

今の一組を放置するには不安がある以上、俺だけでは手が足りない。

だからこそその田嶋さんだ。

「一組？ クラスのみんなはやる気十分みたいだけど？」

「はつきり言って全然足りない。僕としては一組は今回のラスボスなんだ。シード権もあるし、他のクラスからしたら強大な敵であって欲しい。でも今のままじゃちょっと力不足な気がしてて」

「それでもないと思うけどなあ。甲斐田君が敵に回るかもしれないってみんなビクビクしてたよ？」

「不安に思ってるだけじゃ駄目なんだよ。それを前向きの力に変えないと。だから田嶋さんの力を借りたい」

「わたしが？ 無理無理！ みんなをやる気にさせるとかそんな大それたことできるわけないって！」

「声大きいよ。別にみんなをやる気にさせるとかそんなことする必要ない。たった一人を煽ればいいんだ」

「二人って……鷹月さんとか四十院さんなら甲斐田君がやった方が絶

「対早いって」

「違う違う。それはね、鏡さん」

「ナギ?」

鏡ナギ。俺をデイスることにかけてはクラス一な口の非常に悪い女だ。

だが今回は一組のキーパーソンとなりうる。

「鏡さんてさ、実のところは指揮科狙いだよね?」

「それは多分そうだと思う。誰も聞いたことないけど、雰囲気的に」

「普段から整備班を纏めてるもんね。あと鷹月さんとやたら喧嘩するし」

「あー、あれはライバル視してるよねってみんな言ってる。でもそれと何の関係が?」

「だからさ、鏡さんに今が一組を纏めるチャンスだよって言えばいい。整備班だけでなくパイロット班の人達の信頼を得るいい機会だって」

リーグマツチ初期、一夏に指揮班の四人と衛生班の一人を除いて全員が整備班だった。だが二十六人で一纏まりはさすがに多過ぎたので、戦術を考えるパイロット班と機体について考える整備班に分かれた。そしてそれはリーグマツチ後も一緒に行動するグループのような形となって続いている。

だから同じクラスとはいえ完全に分かれて行動し続けたため、ずっと整備班でいた鏡さんはパイロット班の連中とは関係性が薄いのだ。パイロット班のリーダー格だった相川さんとはそれなりにやり合って仲良くなっていたが、残念ながら相川さんはリーグマツチ後に自由人となってしまった。仕切りたがりの鏡さんとしては全く干渉できないグループがあるのは嬉しくないだろう。

「なるほどー、それは確かにやる気になりそうかも」

「そのへんは言い方次第だね。田嶋さんなら鏡さんのことはよく分かっているだろうし、やる気にさせるくらいなら普通にできるんじゃない?」

「うん、それならできそう」

「やる気をちよつとつづくだけで別に悪いことするわけでもないし、

後ろめたいとかもないでしょう。」

「ナギなら言わなくても勝手にやりそうなことだし、特には」

「とりあえずはそれだけやってももらえれば十分だよ。後は勝手に進んでいくから、一組がどうなってるかを時々僕に教えてくれると嬉しい」

「それだけでいいの？」

「田嶋さんもタツグマッチあるし、特に無理強いはしない。それに一組みんなの様子を見てるだけでけっこう時間食うし忙しいと思うよ」

「そういうもんかな？」

「まあ暇だったら言つて。それに観察してる時間はすつごく楽しいと思う」

「そもそもどの程度できるか分からない以上仕事は振れない。リーグマッチ中は夜竹さんと一緒に遊んではかりだったというのもある。俺としては一組の様子をスパイしてくれるだけで十分助かるのだ。」

「リーグマッチとはまた違った空気になりそう……」

「僕みたいに無理矢理やらせるとか今回はできないから、みんな苦労すると思うよ。あ、鏡さんが前に出たら当然鷹月さんや四十院さんとぶつかるわけで、かなりやり合はずだ。どういう形に落ち着くかというのも観察して楽しめばいいんじゃないかな」

「それは楽しいのかな？　なんかギスギスしそうな気も」

「そんなのはリーグマッチで散々見てるでしょ。今さらだよ。それに二週間しかないんだからグズグズはしてられない。自分のこともあつるし、収まる場所に収まるよ。大事なのはそうやってラスボスとして力をつけてくれることだ」

「あ、そういえばそうだった」

「他のクラスの様子は僕が教えてあげる。そんな感じでどんどん盛り上がっていくのを肌で感じて、さらに特等席から全部を見られるんだ。こんな経験はなかなかできないよ？」

「よくもまあそんなことを思いつくんだね」

田嶋さんが呆れたように言うが、もちろんこれは田嶋さん向けの説明である。

俺は別に途中経過など興味はない。

興味があるのは自分のやろうとしている数々の事柄がどれほどうまくいくかだ。

「でどうする？ やる？ それともこのまま退屈な日々を過ごす？」

「そんなこと言われたらもうやるしかないじゃない。ナギに一言言うだけなんだしラクショーだよ」

「よしきた。じゃあ田嶋さんは一組担当としてよろしく。と言っても残りは全部僕だし、全クラスに干渉できるかは分からないけど」

「なんかスパイごっこみたくておもしろそう。あ、そうだ、連絡とかどうするの？ さすがにしょっちゅう二人で話してたりしたら怪しまれるよ？」

「そうだね……ああ、ちようどいい場所があつた。ほら、田嶋さんには親友がいるじゃないか」

「親友？」

夜竹さんの方を見ると拭き終わったのか、夜竹さんは立ち上がってペコペコと頭を下げている。

「そう親友。いつも一緒に遊んでいた親友の夜竹さんが新聞部に入つて忙しくなつてしまった。だから田嶋さんは暇になつて新聞部の部屋まで遊びに行くんだ」

「なにそれ？」

「そしたらそこは居心地がよくて、田嶋さんはついつい入り浸りになつてしまう。そして僕は夜竹さんの様子を見るために時々新聞部の部屋に行く。ほら何も不自然なことはないじゃない」

「うわあ……」

「ああ、新聞部の部長さんは知つた仲だし僕が話をつけるから。それにこういう事情なら話せば喜んで乗ってくれる人だし」

「そんな簡単にポンポン出てくるとか、やっぱ甲斐田君は敵に回しちゃいけないなあ」

「敵味方にこだわるとあんまりおもしろくないよ。あと夜竹さんは趣味の写真で遊ばせておけばいいと思う。それか新聞部の人にこき使ってもらうか」

映像というスキルはあるにせよ、夜竹さんが何かの役に立つかは怪しい。本番が始まったら一夏を中心に俺の監修の元で撮らせようとは思うが。

「わたしがやってることとはもう完全に規模が違うなあ……」

「別に根っこは変わらないんじゃない？ 日常を毎日より楽しく過ごすために自分から行動する、っていうのは田嶋さんもそうでしょ？」

「それもそうだね」

「いやーまいったまいった。あのおばさん毎回毎回うるさくてさー」

なぜか夜竹さんが戻ってきた。犯人は現場に戻ってくる……ではないか。

毎回ということは今回が初犯ではなく常習犯なのか。食堂の人に竹刀まで持ち出させるとは、夜竹さんはいったい何をやらかしたのだろう。

「さゆか？」

「智子は見えてないで助けてよー」

「いやだって、甲斐田君に捕まってたし」

「あ、そうだった。甲斐田くん。そこで颯爽と現れて困っているクラスメイトを助けるのがリーダーじゃないんですかー？」

「夜竹さん。あのさ」

「何？ 言い訳する気？」

「夜竹さんは予定があるんじゃないの？」

「あ」

逃げ出しておきながら戻って来るという意味不明な行動をしていたことによく気づき、夜竹さんは固まる。

だが数秒して立ち直り、くるっと俺に背を向けて一目散に逃げ出した。

「まあ、ああいう子ですから」

「別にそんなに怯えなくていいんだけどなあ。今さら問い詰める気もないし」

「えっ？」

「ああ田嶋さんも心配しなくていいよ。田嶋さん達が僕に隠そうとし

ていることを暴こうなんてまったく思っていないから」

「参りました。もう甲斐田君には逆らいません」

観念したという感じで、田嶋さんは深々と頭を下げた。

「そうか、教官は甘党だったのか。特に何かに対して執着を見せない
ので好き嫌いはないのかと思っていただぞ」

「あれで一応隠してるつもりらしいよ。自分のイメージに合わない
なことを気にしてるらしくて」

「確かにそれはあるだろうな。教官は世界から見て神のような存在。
であるのに甘いものを食べて頬を膨らませている姿は見せづら
いだろう」

「まあプロの職人からするとバレバレだそうだけどね。だからそう
いう人達は千冬さんに何かを作る機会があったら全身全霊を込めて
作るらしいよ。千冬さんの顔を崩すのが職人にとっての夢なんだ
ってさ」

「ははは、それは微笑ましい話だな。だが私もその気持ちは分かるぞ。
教官が心から幸せそうに笑う姿を見られた日には、もしかしたら満足
して死んでしまうかもしれない」

「それはそれでどうかと思うけど」
「もちろん言葉の綾だ。いつの日か教官の笑顔を自分に向けて欲しい
という願望だ」

かくして織斑千冬大暴露大会である。主催者は俺。

部屋に戻ったらまたしてもドアの前でボーデヴィツヒが正座して
待っていた。

俺が頼んだことについてはそれはそれとして、千冬さんの話を聞き
たいらしい。

本当は同時にやってごまかすつもりだったのだが仕方ない。まっ
たく餌をやらなかった結果拗ねられても困る。

そういうわけで恐縮するわけでもなくボーデヴィツヒは当たり前
のように俺の部屋に入って来ていた。

「しかし先程の話は驚いたぞ。まさか中学生時代の教官が道場破りを行っていたとは」

「自分の正体がバレないように仮面をつけてたつてというのがあれだよ。思春期の中学生まつさかりな感じで」

「正直に言えばシヨックだ。だがひたすらに力を追い求めていた時代と思えばぎりぎり納得できないこともない。まあ大人相手にことごとく討ち果たしたという事実については爽快に思えるな。若年といえどさすがは教官だ」

博士伝手でこういうエピソードを数多く知っているからこそ、俺はいまいち千冬さんに尊敬の念を抱けないのかもしれない。

「でもボーデヴィツヒさんも道場破りなんて単語をよく知ってたね。ドイツにもそういうことってあるの?」

「もちろんないぞ。私が知っているのは学んだからだ」
「へえ。それは日本について?」

「教官の母国であるからな。当然の話だ。だから私のことはそこらの留学生とは一緒にしないでもらおう。私は日本に詳しいのだ」

「それはまた大した自信だね」

織斑千冬信者は世界中至るところにいる。だから信者指数が高じればこういうのも出てくるか。

「そうだな……ああ、日本には『嫁』という単語があるだろう。妻や夫という意味を内包した伴侶に対するととも見事な言葉だ」
「ん?」

「ふふふ、そんなことまで知っているのかという顔だな。『俺の嫁』。すばらしい響きの言葉だと思う。自分のものだど強烈に主張する愛情表現、時には次元すら超えると聞く」

「んん?」

「どうした? あまりの深さに声も出せないのか? しかしそれも仕方のないことだろう。私が日本に対して造詣が深いからこそ表現できるのだからな」

ボーデヴィツヒは目を輝かせて得意げな顔をしている。

だが何かが違う。いや何もかも違うと言うべきか。

「えーつと……要するにボーデヴィツヒさんは千冬さんのことを嫁にしたいわけなんだ」

「馬鹿者！ 何を言う！ 我が神に対してそのような恐れ多いことを口にできるか！」

「あ、そうですか」

とうとう自分で神と言ってしまった。信者脳ここに極まれり。

「いいか、『嫁』と言うのはだな……教官の家族である君になら口にしても大丈夫だろう。私にとっては、織斑一夏君のことなのだ」

「一夏？」

意味が分からない。なぜそこで急に一夏が出てくる。

ボーデヴィツヒの一夏に対する態度を見ていると、全くそういう感情は見えなかったのだが。

「織斑一夏君を私の『嫁』にし、婚姻関係を結ぶことにより」「ことにより？」

「私は教官にとって家族に、いや『妹』になることができるのだ！」

これはやばい。妹になりたいとかクロエみたいなことを言い始めた。

相手が神過ぎて自分のものにするこすら望まないとは。

「ああ、安心するがいい。だからと言って君の親友をないがしろにするような真似はしない。私がよき妻となるのは当然の話であるし、愛人の数人くらい普通に認めよう。いずれ生まれる娘にも深い愛情を注ぎ、円満な家庭を作ること約束する。何も問題は無い」

「はあ……」

安心できる要素が何一つないし、問題しかない。というか娘が生まれるのは確定なのか。

しかしもうなんというかこじらせ過ぎだ。信者力が限界突破して二周三周してしまっている。

もういつそ『あれ』を使って問答無用でぶっ飛ばしてやろうか。まあ用途が違うのでさすがにやらないけれど。

2.5. 各クラスの動向

便りがないのはいい知らせ、とこの場合は言っていないのだろうか。

博士が戻ってこない。

ドイツに行くと言ってから十日経ったが、未だ俺の前に姿を見せることがない。

果たして問題があったのかなかったのか、結局どうなのだろう。

もし重大な問題が発覚した場合、博士なら即座に対処するのは間違いない。

元々博士はVTシステムの存在を許さないと世界各地を回って潰していた。IS学園という場所でなければ俺に何かを言う前にまず潰しにかかったはずだ。

だが今回は千冬さんの息がかかっている可能性が高いと言うことで慎重になって、情報収集のためわざわざドイツへと向かった。今現在博士は千冬さんとの約束により一夏やIS学園にちよつかいを出せない。本当に約束を守る気があるのか試されている可能性が十分にある。

俺に『あれ』を託したのもそういう意味合いがあるのだろう。いざと言う時俺が勝手に動く分には約束を違えたことにはならないからだ。もちろんそれは表向きの話ではあるが、今博士がIS学園内で何かをしたければ俺にやらせるのが一番安全である。

であれば現状少なくとも緊急性はなさそうだ。VTシステムの存在を把握している千冬さんもいるし。

まあ、クロエも言っていた通り普通に観光を楽しんでいるというのが実際のところなのだろう。

博士は研究者によくありがちなところで出不精である。俺と一緒にいた一年間でもそうだったが、放っておけばいつまでも部屋に閉じこもって研究に没頭してしまう。

この機会にクロエがあちらこちらへと引つ張り回しているのは容

易に想像できる話だ。

それにここ最近毎日ボーデヴィツヒの顔を見ていて、特に問題になりそうなことも見当たらない。いずれどうにかするのだろうが、今すぐしなければならぬという事柄はないのだろう。

「かいだーかいだー!」

教室に入ろうとしたら廊下の向こうから呼ぶ声がした。もちろん俺をそう呼ぶのは一人しかいない。

顔を声のした方に向けると、今日も朝から笑顔の布仏さんが手を振りながら走ってきた。俺達が来た側でないということは、もしかして四組の教室に寄ってから来たのだろうか。

「おはよう布仏さん」

「おはよーかいだー。ちよつといい?」

「別にいいけど」

「じゃあ智希、先に行ってるね」

「と言うか目の前が教室なだけだな」

デュノアと一夏はそのまま教室に入ってしまった。

布仏さんは俺の袖を引いて廊下の隅まで歩いて行く。それから手を離して振り返り、笑顔のまま深々とお辞儀をした。

「かいだー、本当にありがとう」

「どういたしまして……と言う前にそれは何について?」

「昨日ね、かんちゃんと四組の人達と一緒に、かんちゃんの会社の人達のところに行っただ」

倉持が動いたか。篝火所長本人かその指示を受けた部下か、無事更識妹を引つ張り出せたようだ。

「ああ、IS学園にある倉持技研のエリアに行ったわけね」

「かいだーは行ったことあるの?」

「先週に用があつてね。それで、更識さんの話?」

「うん! 倉持技研の人達が四組のみんなを招待してくれて、中をいろいろ見せてくれたんだ!」

また倉持もあからさまな手を打ってきたものだ。特定の誰かではなく四組丸ごと更識妹の味方につけようと言う魂胆か。

四組の連中に打算として、倉持技研がバックにいる更識妹と仲良くして損はない、と思わせる方向性だろう。

強引だが更識妹の意識が外に向いているというチャンスは今しかないので、悠長なことなど言ってる場合ではない。倉持技研は更識妹の家族ではなく企業なのだから、年月をかけて長い目で見守るといふわけにはいかないのだ。

それに一夏もいるとはいえ更識妹は企業の広告塔でもあるし、周囲と協調できないような人間であっては困るのだろう。

「それはまた平日なのに大がかりな話だね。布仏さんも行ったんだ？」

「うん、ついでだからいいよって。みんな楽しそうにしてたよ」

「職場見学みたいなものか。整備科行く人には将来働く場所かもしれないしね」

「打鉄にも乗せてもらったよ。四組の人達はあんまり乗れてなかったみたいで、すごく嬉しそうだった」

「それはよかったね」

その様子なら倉持の思惑としてはうまく行ったようだ。

かえって更識妹が嫉妬を買うような可能性もなくはないので、そのあたりは倉持もうまいことやったのだろう。

「うん！ でもね、それだけじゃなかったんだ」

「他に何かあったの？」

「かんちゃんと呼ばれて別のところに行った後ね、倉持技研の人がみんなにお願いしてきたんだ。リーグマツチの時おりむーの側にいた人。その人がかんちゃんを助けてあげて欲しいって」

「へえ」

さすがに利だけでは終わらせなかったようだ。きちんと情にも訴えている。

どちらかだけでは反発する人間が出てくるので、どちらでも許せる理由を作っておくことは肝要だ。

ここしばらくの布仏さんの姿を見ていれば、情で訴える意味も十分にあるだろう。

「かんちゃんはあるあいう子だから、倉持技研の人達はみんな心配して
るんだって。大変だろうけど一人にしないであげてって。感情表現
が苦手だけどいい子なんだよって」
「なるほどね」

感情のままに行動しては人間関係は成立しない。どちらかの、
あるいは双方の歩み寄りがある。

内向きな性格を考えると更識妹にそれをやらせるのは難しい。だ
から四組の生徒達に大人な態度で一段上がって歩み寄ってもらおう
というわけだ。今なら更識妹に受け入れられる土壌があるのだから、
まさに千載一遇のチャンスと言えるだろう。

「みんなもね、分かりましたって言ってくれたんだ。それで私にごめ
んねって謝ってくれたの。かんちゃんのために一生懸命にやってた
のに無視してごめんねって」

「それはよかったね。布仏さんの気持ちはちゃんと通じたわけだ」

「うん！ みんないい人達だった！」

「それなら後は更識さん本人か。これが一番の難関な気がするけど」
頭の上では分かかっていても、感情が追いつかなくて意固地になっ
てしまう可能性は普通にある。

あるいは引つ込みがつかないと言うべきか。

「かんちゃんもね、嬉しそうにしてたよ。これならやれるとか言っ
たし、かいだーの言った通りタッグマッチのことだよね？」

「二人で何もかもやるなんてとても無理な話だからね。一夏や鈴に勝
ちたいという気持ちか一人だけでやってやるという意地を上回った
かな？」

おそらく奴は自分の中で理由付けして逃げただろう。これは頼る
んじやなくて利用してやるんだと。

だがそういう言い訳は深みに嵌る第一歩だ。先に外堀を埋められ
て囲まれてしまったら、いずれ逃げ場はなくなる。

更識妹に対しては篝火所長自らが出ただろう。あの博士を乗せる
提案までする人だ。俺で見通せるようなことが分からないはずはな
い。更識妹の浅い考えなど全部お見通しの上でうまく誘導したと考

えてよさそうだ。

「うん、きつとそうだよ。だからかいだー、本当にありがとう」

「今の話に僕は出てこなかったんだけど？」

「倉持技研の所長さんが最後帰る前にに教えてくれたんだ。これを考えたのは全部かいだーなんだよって」

「はっ。」

篝火所長は何を言っているのか。

俺はただ煽っただけで、それ以外は一切何も関わっていない。そもそも昨日そういう出来事があったことすら知らない。

「今ならかんちゃんの話聞いてくれるからって提案しに来たって。さっき言った先週の用ってそれなんだよね？」

「あー、そういうことか」

一瞬失敗した場合の責任を俺に押し付けるつもりかと思っただが、逆だ。うまくいったからこそ俺の手柄として譲ってきたのだ。

俺の名前を使っていたといいと言ったがそういう風に使うか。確かに倉持技研が自分達のためにやったと言うよりも、俺が布仏さんを心配して行動した結果にした方が何かと都合がいい。倉持技研は善意の第三者になれるのだから。

と言っても倉持技研の篝火所長以外の人達は全員そういう気持ちなのだろうけれど。

「やっぱり。かいだーは本当にすごいな」

「言っておくけど僕自身は何もしてないよ。あ、実際に行動するとう意味だね。更識さんと四組の人達を取り持とうと努力したのは布仏さんだし、そんな大がかりなことをしてのけたのは倉持技研だ。僕はちよつと口を出したただけだから」

「ううん、全然そんなことないよ。だってかいだーが何も言わなかったら、何も変わらなかつたんだから。かいだーはみんなに道を示してくれたんだ。みんなが幸せになれる道を」

確かに今回は誰も損をしていない。篝火所長は晴れて専用化技術を手に入れられただろうし、その部下達は更識妹との関係改善ができた。布仏さんは親友に友達を作るといふ目的が達せそうだし、四組連

中も倉持エリアを見学してISに乗れた。更識妹はタッグマッチに向けて自分の機体の強化ができる。

あえて言うなら俺は別にそんな手柄などいらなかったということだろうか。俺は更識妹を倉持の管理下に置かせるのが目的で、それは十分達成できたのだから。

まあ篝火所長からは俺が何も得をしていないように見えたので、せめてこれくらいはと考えたのかもしれない。突っ返すとまた何か余計なことをしてきそうな気もするので、これはそのまま受け取っておこう。せいぜい布仏さんが俺に感謝する程度の話だし。

「別にうまく行ったのなら何でもいいよ」

「ねえかいだー。かいだーは何かして欲しいことある？ 困ってることとかない?」

「急に何の話?」

「お礼。今何か欲しいものとかない?」

「ああ、そういう話ね。特に何も無いよ」

「本当に? 何でもいいよ?」

「何でもとか簡単に言っちゃ駄目だ。そういうのは痛い目に遭うって相場が決まってるんだから」

「えっ?」

「あ、ごめん何でもない。じゃあ布仏さんは更識さんの側にいてあげてってことかな?」

「そんなの全然お礼にならないよ」

いや、俺としてはぜひとも望みたいことなのだが。更識妹が暴走しないよう見張っていて欲しいとは切実に思う。

「うーん、じゃあさ、僕と布仏さんが逆の立場だったとしたら、お礼に何かしたいとか言われても、そんなつもりでやったんじゃないって思うでしょ?」

「あ……」

「そもそもそういう希望とかあったら僕は最初から言うよ。やってあげるから代わりにこれやって。今回何も言わなかったのはうまくいかなかった時に責任を取るつもりがないからで、本当は口を出し

ておきながら無責任な話だよ」

「かいだー」

「だから今回はうまくいってよかったね、だけでいいんじゃないかな？」

「そんなこと言って、うまくいかなかったらかいだーは絶対に次を考えるんだ」

「それはどうだろう」

実際どうかと言われれば、更識妹を倉持の管理下に置くための方法くらいは考えるだろう。

だが友達云々など正直どうでもいい。タッグマッチで更識妹と布仏さんが組まなければそれでよしなのだから、それ以外は勝手にやってくれだ。

「ねえかいだー、お姉ちゃんが言ったことなんだけどね」

「うん？」

「かいだーとかんちゃんとは似てるって。だからかいちよーはかいだーのことが放っておけないんだって」

「そうなんだ。僕はそうは思わないけどね。いや、更識さんのことはそんなに知らないけど」

自分でもそう思っているせいか、他人に指摘されるとやけに腹が立つ。

秘密を知られてしまったようなのでやむを得ず関わっているが、本来であれば自分を見ているみたいで気持ち悪いので可能な限り関わりが合いになりたくない相手だ。

「私もその時はそうなのかなって思ったけど、今は違うよ」

「そうなの？」

「かいだーの方がずっと大人だし、もつとかっこいいと思う」

真っ直ぐ俺に向かってそう言うと、布仏さんは俺の脇を抜け、走って教室へと入って行った。

いや、それでは更識妹が子供でかっこ悪いことになってしまうのだが、親友に対してそれでいいのだろうか。天然とはいえ俺を上げるにしても表現の仕方を間違えている気がする。

それとも、布仏さんは今回更識妹に対して嫌な感情を抱いてしまったのだろうか。今さらな気がしないでもないが、あまりに自分のことしか考えていない姿に嫌気が差したとか。

だがそれなら俺も更識妹と本質的には変わらない。ただ表に出さない術を心得ているだけの違いだ。もつともそれこそが決定的な差とも言えるが。

まあいい。とりあえず俺の目的は達成できた。

更識妹は四組内に囲い込まれた。後はゆっくり腐っていつてくれ。四組にはリーダーシップを取る人間がいないので、緩い集まりではない。集団としての力を発揮できないので特に怖くもない。

また一方で四組連中が今回クラスという集団を意識したことにより、おそらく五組はもう手を出せなくなつた。誰かが五組の誘いに乗って奇数になつてしまつてはクラスの和が乱れるので、四組の生徒達は敏感に反応するはずだ。

リーダーシップはないにしても、更識妹が中心に来てしまつた以上これからクラスとしての和が形作られて行くのだろう。むしろ五組が変にちよつかいをかけたりしたらかえつて纏まつていくのかもしれない。

何にしても、俺としては布仏さんに対して十分よくやってくれたと感謝の言葉を述べるのみだ。

布仏さんの懸命な努力の素地があつてこそ、今の状態へと導かれたのだから。

「ちよつと智希、あたしのところに苦情が殺到してるんだけど」

昼休みを告げる鐘の音と共に鈴が入ってきた。榊原先生はまだ教室に居るのだが、織斑先生でなければ怖くないとでも言いたげだ。

「何いきなり」

「何じゃないわよ。あんたが今クラスを股にかけてやってることがこつちにも飛び火してるんだから」

「はあ?」

どうやら影響が二組にも及んできたようだ。明日がパートナー申請の期限とあつては五組の杉山も焦つてきたか。

榊原先生が苦笑しながら出て行き、入れ替わりにハミルトンが入ってきた。

「あんたが五組の人を引っこ抜いたりするから、五組の連中が困つてうちのクラスに手を出してきたんだつて話よ」

「それで僕に苦情を言われても困るんだけど。文句があるのなら五組に行けばいいじゃない」

「根っこをどうにかしないとまた次の問題が起こるだけでしょ。何がみんなのためになることよ。得してるのは三組だけで、五組もうちのクラスもいい迷惑じゃない」

「そんな目先の話で物を言つたんじゃないんだけどなあ。それに奇数のクラスがどうにかしなきゃいけないのは事実なんだから、どの道起こつた問題だよ」

「今あるのはあんたが起こしてる問題でしょ。智希が素直に三組の人と組んだらそれで済んだのに、余計なことをした結果じゃない」

「でも僕と組んでくれる人が三組にはいなかったんだから、それは仕方のないことだよね」

もちろん大嘘である。最初から五組の佐藤を連れて行つたのだから。

嫌がらせと周囲には思われているが、他のクラスを動かすために俺は誰とも組まなかつたのだ。

「はあ。まあそういう言い方すると思つたわ。あたしが何かを言つたところで智希が止まるとも思えないけど、智希のことであたしもいろいろ言われてるんだから文句くらいは言わせなさい」

「クラスの人達に何て言われたの？」

「智希はいったい何を企んでるのかつて。自分の存在を嫌がらせに使うとか気味が悪いつて。ただ三組に肩入れするだけにしてはおかしいつて」

「へえ」

さすがにここまであからさまにやると裏を疑う人間も出てきたか。

そう、俺のペアを組まないという行動は五組への嫌がらせにはなっても、三組のためになるかと言うと実は怪しい。

「やっぱり何か目的があるわけね。ティナの言う通りだわ」

「ハミ、ティナが？」

「いい加減名前で呼ぶの慣れなさいよ。ええそうよ。ティナに感謝しなさい。ティナがうちのクラスのみんなを抑えてくれたんだからね。智希は嫌がらせとかそんなつまらないことでやったりしないって」

「なんかそれだけ聞くともっと悪いこととしてそうだね」

「自分で言うな」

「いてっ」

鈴が手刀を俺の頭に落としてきた。突っ込みなので威力もないと思ったら意外と痛い。

「知り合いだとしても言われちゃうよね。ティナ、迷惑かけてごめんね」

「ううん、それくらい全然平気」

「二組の人達は五組から色々言われて今も困ってるの？」

「パートナー決めのことならもう全員決まったかな？ 明日が申請の期限だし、さっさと決めてしまえばもう何も言えないだろうってみんな言ってる。ねえ鈴？」

「放つといいたらくじで智希と組まされちゃう可能性もあるからねえ。うちのクラスは偶数なんだから普通にやってくれば別に問題もないのよ。そもそもみんな今までズルズルと決めずにいるから余計なちよつかいを出されたわけだし」

ハミルトンと組めなかったら自分こそ危なかったわけなのだが、鈴は完全に他人事だ。

勢い良く入ってきたのはポーズだったか。あるいは俺に文句を言っただけで憂さ晴らしでもしたかったのだろう。

「じゃあもう既に問題は解決されたってことで」

「待って待って待ちなさい。嫌がらせでないんならこれで終わりじゃないんでしょ？ どうせやめろって言っても聞かないのは分かっているから、せめて何をするつもりかくらいは言いなさいよ。心の準備くらい

させてあげなさい」

「別に何もしないよ」

「本当に？」

「そんなに信用ならない？」

「当たり前じゃない」

まあ俺を知っている鈴ならそう言うだろう。

だが他の二組連中はどうなのだろうか。もしかして鈴が余計な口を入れている気がしないでもない。

「本番まで土日を二回挟むとはいえあと十日くらいか。はつきり言ってその程度の時間じゃ何もできないよ。僕にはただでさえ三組のことがあるしね。でもまあ、気になって仕方がないのなら三組の訓練してる様子でも見てくればいいんじゃないかな？」

「どういうこと？」

「鈴じゃなくて二組の人達への話ね。その光景を見て何を感じて何と思うかだ。僕が今言えるのはそれくらいかな」

「なんか曖昧な話ね」

「はつきりと答えを言ってくれないのがIS学園だよ。だから僕もそれに倣うというだけだのこと」

伝言を口にしてしているようで、実は周囲で聞き耳を立てているであろうクラスメイト連中への言葉でもある。

田嶋さんによればクラスメイト達はやはり俺の動向が気になるらしい。実質的な話を言えばIS訓練の絶対量で一組は他のクラスを大きく引き離しているのだが、当事者からは見えづらいようだ。

三組は既に目的意識を持って行動している。ただ目の前の行事を闇雲にがんばるのではなく、あれもこれもと欲張るのではなく、三回戦、すなわち対一組戦までに照準を合わせている。

目標を明確にしたのでそこから逆算していったわけなのだが、その結果準備期間がたった二週間では到底時間が足りないという結論に達する。一組以外はともかく、俺から得た一組の情報を分析するところのままでは大惨敗になってしまうと三組のブレーン連中は頭を抱えた。当然だ。入学して三ヶ月程度では訓練の絶対量がそのまま響い

てしまうのだから。例えばイグニッション・ブーストを使いこなせる生徒など三組は片手の指にも及ばないが、一組連中はパイロット班、すなわちクラスの半分は自在に扱う。既にそれくらいの差が出ている。

だから今の三組連中は目の色が違う。このままでは三回戦どころか二回戦に勝ち上がることもすら運に任せる状態なのだ。

無理して勝つ必要はないと頭で分かっているけど、IS学園に合格しただけあってプライドは人一倍ある。今までの人生を一番で過ごしてきたのに、いきなり後塵を拝するなど簡単に認められるわけがない。

彼女達はタッグマッチを前に競争のスタートラインに立てたと言えるだろう。翻って一組で現状それが意識できてるのはおそらく相川さん一人だけだ。ここまで二ヶ月特に比べられる機会がなかったこともあり、留学生連中でさえ緩んでしまっている。一組連中はここでは勝てるかもしれないが、それに安穩としてしまっただけは追い抜かれるのは時間の問題である。専用機どうではなく、同じだけ与えられた時間をどう使うかでその程度の差などあつという間に縮まるだろう。

「不安に思うのは先が見えないからだよ。だったら自分の目で確かめてみればいいじゃないって話」

「まあそれはそうね。じゃあそう言っとくわ。あ、ちなみに卑劣な作戦をしかけるとかそういうのはやらないってことでいいのよね？」

「しないしない。この程度の行事でそんなつまらないことはしない」「この程度？」

「あ、ごめん。僕自身にはやる気が全くないって話なだけ。別に鈴たちがどうのってことじゃないから」

「ふうん。まあいいけど」

リーグマッチの時は鈴の不安を煽って不安定な状態にさせたわけだ、必要とあれば躊躇はしないという話である。あの時は外部の目もあり是が非でも勝利という事実が欲しかった。

だが今回はそこまででもない。三組の様子を見ろと言ったのはそ

れが刺激になりそうだからだ。

三組の真剣な様子を見れば他のクラスも危機感を持つかもしれない。リーグマッチの時とは違って今回は他人事ではない。こんなこととして遊んでないで自分もやらなければ、とでも思わせればしめたものである。

「じゃ、そういうことで」

「あ、ちよつと待ちなさい。どこ行くのよ?」

「どこへも何も、もうお昼だし」

「だから、一夏に作らせたそのお弁当を持ってどこへ行くのかって聞いているのよ」

「三組」

「また? あんた毎日行つてない?」

「何か問題でも?」

「おおありよ。毎日毎日行かなくなつたつていいじゃない」

「いや、そういうのは人に言われることでもないと思うんだけど。それとも鈴は僕が三組に行くとか何か困るの? 二組の人達に変なことはないつて今言つたでしょ?」

「別にあたしは困らないけど、そんな毎日行かれると三組には何かあるのかつて思うわよ。ほら、なんか人形みたいな転入生とかいるんですよ? 最近そいつと楽しそうに話をしてるのをよく見るつて聞かし」

「ボーデヴィツヒさんのこと?」

それはむしろ纏わり付かれているというのが正解なのだが。

最近奴は俺といればベツティ以外は自分をおもちやにしてこないと気づいたようだ。

俺の近くには他クラスの佐藤もよくいるし、俺の正体発覚以来三組の連中は俺とは心理的な距離が遠い。用もないのに気軽に話しかけるような存在ではなくなり、一步引いて接してくるためそれがボーデヴィツヒにとつては安全圏になつたという話である。

そして奴は俺から織斑千冬の情報を得ようとやたらと話しかけてくるため、外からはそういう風に見えるのだろう。

「そうよ、そいつ。何？ 話をしててそんなに楽しいの？」

「楽しい楽しくないの問題じゃないなあ。あえて言うなら……義務？」

「義務？ 何よそれ？」

「千冬さんの昔話をするって約束したし、ボーデヴィツヒさんの担当みたいな感じ？」

「疑問形で言われてもこっちが分かるわけじゃないじゃない。でもまあ好き好んでやってるわけじゃないのね？」

「好き好んでってそういう言い方はどうかと思うけど、必要だからそうしてるわけで」

「そう。それならいいわ。じゃあ行っていいわよ」

「なんだそれ」

言いながらもようやく俺は立ち上がる。鈴には時間を食わされてばかりだ。

「じゃあティナ、あたし達は屋上行こっか。どうせ一夏はそこにいるだろうし」

「さすがに一夏が抜け出したのに気づかなかったわけじゃないんだね」

「当たり前じゃない。あんなコントみたいな動きされて気づかない奴とかいないわよ」

俺と鈴の話が始まるや、一夏はデユノアを連れ出してこっそり教室から出て行った。

誰もついていかなかったのできつと今頃一夏は気配を消して抜け出すことができたのご満悦だろう。

だがそれは鈴もクラスメイト連中も俺と会話をする事聞くことを優先させたに過ぎない。そして久しぶりの晴れとあつては一夏が屋上に向かうことなど誰でもお見通しだ。

俺としてはそこを逆手に取るくらいはやって欲しいのだが、残念ながら一夏は良くも悪くも素直であるという話だった。

三組の教室の扉を開けると、また見知らぬ顔があった。

「また？」

「入ってきて第一声がそれか」

「そう言われても、こうも毎日続くとさあ」

「それだけあの馬鹿が信頼を失って行っているということだ」

「想像以上に杉山さんはクラスを纏めきれないなあ」

これで五人目である。五組代表杉山を見限ってこっちに付くとやって来たのは。

最初の生徒は避難民だった。俺と組むことを押し付けられそうになって、もう五組の輪の中にいたくないと三組の戸を叩いてきたのだ。気の弱そうな女子で、佐藤もここに居させてやってくれと頼んできたのでやむなく置くことにした。これで五組は再び偶数となり、早々に俺の目論見は潰えたかのように見えた。

だがそれで終わらないのがややこしいところで、次の日五組の別の女子がやって来た。理由を聞けばクラスメイトに押し付けられるという行為が自分的に許せなかったそうである。杉山に啖呵切つて出てきたそうで、結果としてまた五組は奇数に戻ってしまった。

ここで杉山は自分のクラスでは荒れそうだと二組を目をつけたらしい。知り合いがいたのか二組の空気を知っていたのか、とにかく二組に多数生息する一匹狼を捕まえようとでも考えたのだろう。だが結果は鈴の言っていた通りで、怪しまれるだけで終わってしまった。いくらでもやりようはあったと思うのだが、交渉は得意ではなかったのかもしれない。

その上もう二人やってきたのが昨日だ。二人はペアを組んだ上で五組を抜けてきたとのことである。理由は杉山が整備科志望の生徒には訓練機を使わせてくれないので、どうせ使えないのなら訓練機の抽選に毎日参加する義務はないと反抗した結果のようだ。俺も似たようなことはしたが、時々整備班に訓練機を渡して改造を楽ませたりしてガス抜きには努めたつもりだ。たった数日で杉山は気を利かせられる余裕をなくしてしまったのかもしれない。それともこれまでの積み重ねだろうか。

そして今日である。

「えーと、あなたも僕と組めって押し付けられた？」

「いえ、そういうわけではないんですけど、このままだと誰かがそうなるかもしれないってみんな言っていて、だったらもういつそ自分から行った方がいいんじゃないかと……」

「二組はもう完全にアウトだからね。次は四組に行くのかなって思ってたけど内側で解決させるつもりなのかな？」

「そうなんですか？」

「いやいや、自分のクラスのことですよ」

「杉山さんは何も教えてくれないので……」

状況を知らせることさえしていないのか。それでは不安を煽るだけだ。

確かにうまくいっていないのを伝えるのはやりづらいかもしれないが、どの道雰囲気で周囲は察してしまうのだ。さっさとゲロって素直に助けを求めた方がいい。杉山は一人で抱え込んでどうにかしようとするタイプなのだろう。長生きはできない類だ。

「そっか。これは二組の人から直接聞いた話だけど、二組の人達ももう全員がクラス内でパートナーを決めてる。だからもう五組の入る余地はないんだ」

「それは甲斐田君がそうさせたんですか？」

「いやいやいや、僕は何もしてないって。ただ杉山さん達が失敗しただけだよ」

「佐藤さん？」

「少なくともあたし達が知る範囲では何もしてないな」

「あっ……」

「ちよつと待って。今何かすごい誤解が生まれたみたいんだけど」

「甲斐田、別にあたしたちが知らなくていいことは言う必要ないからな。知りたいとも思わないし」

「やっぱり……全部手のひらの上だったんだ……」

駄目だ。これは何を言おうと信じてもらえないパターンに入った。

一組のクラスメイト連中も時々似たような態度を見せるが、そんな

に俺は胡散臭いのだろうか。

「もういいや、ついでに言うのと四組もクラスとして纏まり始めてるから、杉山さんが手を出すにはもう遅いよ。よって五組の人達が今不安に思ってることは明日現実となっただろうね」

「ああ、最近四組には一組の人が出入りしてますもんね。杉山さんもそれで手を出しづらかったみたいで」

「あなた何も知らされてないって言う割には詳しいね？」

「教えてもらえないのなら自分で調べるしかないじゃないですか。その結果このまま泥船に乗り続けるのはまずいと思ったからこうやって出てきたんですよ」

「なるほどね。でもどうせ出てくるなら昨日の人達みたいにペアを決めて一緒に来ればよかったのに」

「それは私も思いましたけど、実際やるとなるとそんな簡単にはいかないですよ。みんな佐藤さんを見てるから、自分もそうなるんじゃないかという思いがあつて」

ある意味見せしめとして佐藤は孤立させられているわけで、五組の生徒達としては下手なことをすれば明日は我が身だったのだろう。

しかしここに来て大人しくしているのに被害を受けるような事態になってしまったので、危機感を感じた順に動き始めたところか。

「確かに無理は言えないか。でもパートナーがいなくなると僕と組むしかなくなるわけで、それは理解してる？」

「さすがにそれくらい分かってます」

「ふむ。佐藤さん、五組の人が佐藤さんも含めて六人になっちゃったんだけど、僕と組むのは誰にしようか？」

「それは甲斐田が決めることだろう。たとえあたしに組めと言ってもそれは従うぞ？」

「いやいや、佐藤さんはベッティさんと連携を高めてもらわないと。僕は五組の人のことを知らないから佐藤さんの意見を聞きたいわけ」

「そういう話なら目の前にいる菅原でいいんじゃないか？ 本人も分

かってやって来たみたいだし」

「あ、菅原です」

「ごめん、最初に名前を聞くべきだったね。じゃそういうことで……」
「ちよつと待ってくれ」

離れた場所から声がかかる。そちらに目をやると、ボーデヴィツヒが手を上げていた。ベッティの膝の上に座ったまま。

「ボーデヴィツヒさん？」

「その件で一つ提案があるのだがいいだろうか？」

「どうぞ」

「ありがとう。甲斐田智希君のパートナーとなるべき人物についてだが、それはこの私では駄目だろうか？」

「ボーデヴィツヒさんが？ それはどうして？」

「むしろ今回の行事に取り組むに当たって一番の適役だと思う。私達が組めば皆の迷惑にならないからだ」

「そういう話ね」

俺もそれを考えなかったわけではない。ボーデヴィツヒの言う通りやる気のない者同士で収まりがいいのは確かだ。

言い出さなかったのはあまりボーデヴィツヒを一夏の視界に入れたくないからである。

俺の試合となれば一夏も見に来るだろう。その場で負けるつもりだし大丈夫だとは思うが、一夏がボーデヴィツヒを見て余計な感情を抱いてしまわないか一抹の不安がある。ボーデヴィツヒの中に自分の姉を見て変な興味を持ってしまわないかという恐れだ。この前はなんとなくだったろうが、今度ははつきり意識して見るのだから。

今の一夏にはボーデヴィツヒに対してマイナスの感情が働いているので、自分から近づくことはないだろうし特に心配もない。わざわざ藪をつつくような真似をすることもないだろうと思っていた。

「もちろん皆の邪魔をするつもりは微塵もない。このクラスの皆と当たった場合、あるいは助けを求めてやってきたそちらの五組の生徒に当たった時も、勝ちを譲ると約束する」

「ラウラもそこまで気を遣わなくてもいいと思うけどねえ」

「同じ年とはいえ私は教官の教えを受けて皆よりも一年ほど先に進んでいるのだから当然だろう。むしろ一人暴れてしまう方が大人げない行為で失礼だ」

「そうだね。じゃあそうしようか。菅原さんも三組の人と組んでもらっていいかな？」

「いや、いいも何もむしろそこまでしてくれるんですかという感じなんですけど……」

「ならそういうことで。この後紹介するから挨拶しておいて」

変に怖がついていても仕方ない。同じIS学園の生徒である以上いずれば目にするのだ。

ならば俺の方から一夏が間違った方向に行かないよう誘導し続けるべきだろう。

「ありがとう。では甲斐田智希君、これからよろしく願います」

「こちらこそわざわざ気を遣ってくれてありがとう」

「実を言えば少し試してみたいことができたのだ。だから礼を言われるような話では全くない」

「試してみたいこと？」

「いや、それは私事で甲斐田智希君とも皆とも全く関係のない話であるから気にしないでくれ。もちろん迷惑をかけるような真似はしない」

「そう言われても気になるんだけど」

「今回の行事を私なりに楽しもうというだけだ。初戦でクラスの皆と当たるようなことになればやるつもりもない程度の話であるから、特に気に留めるほどのことではない」

俺と組むことによりボーデヴィツヒもシード権を得る。だからあまり余計なことはして欲しくないのだが、無理矢理聞き出してやめさせるべきだろうか。

「まあラウラも一週間退屈するわけだし、楽しみくらいは欲しいわよね」

「一度やってみたかった程度だ」

「だからそれは何よ？」

「大したことではない」

ベツティが食い下がるもボーデヴィツヒは答えようとしな
い。笑顔を浮かべているのでそこまでおかしなことではなさそうだが、
いったい何をやるつもりだろう。

まあ俺もその場にはいるわけだし、よくないと思っただらすぐにやめ
させればいい話か。

「意外とこの子は強情ね。あ、甲斐田君、お弁当持ってきたなら食べな
がら話をさせてもらいたいんだけど」

「どうかした？」

「他のクラスの情報を知ってそうだから聞きたいなって」

「ああ、それね。言っておくけど僕が何かしたわけじゃないから」

教室で鈴に捕まり今も会話をしたいぶ時間が過ぎてしまった。

さつさと食べて次の行動に移ろう。

タツグマツチ本番までやるべきことは山ほどあるのだから。

「うん、みんなぞろぞろとアリーナに向かったよ」

新聞部の部室で俺に用意されたはずの茶菓子をぱくつきながら、田
嶋さんはそう返してきた。

「よしよし。さあこの後みんなはどう反応するかな？」

「やっぱり昼休みのあれはクラスみんなに聞かせてたんだ」

「そんなの当然じゃない。疑問はきちんと解決させてあげないとね」

「うわあ……みんなあつさり誘導されてる」

「別に特別なことはしてないよ。誰もが当然の行動をしているだけ
だ」

人は自分にとって自然な行動をしている限り疑問を感じない。疑
問を抱くのは自然に進めなくて立ち止まった時だ。

彼女達は三組の訓練風景を見て何を感じてどう考えるだろうか。

「でもなんか新鮮」

「何の話？」

「裏を知っているとこんなにも違って見えるんだ」

「そりゃあね」

「誰も甲斐田君に勝てないわけだ。甲斐田君から見える世界はわたしたちとは全く別物なんだから」

「そういう勝ち負け基準でものを考えるからよくないんだよ。だいたい僕に勝ったからなんだって話だ」

途中で手段と目的がひっくり返るから俺にいいようにされてしまうのだ。

それに勝ち負けを言うのなら俺が決定権を持っている時点で最初から俺の勝ち確定である。正論や論理で言い負かそうとしたところで雲行きが怪しくなれば俺は強権を発動させるだけだし、そもそも議論するつもりからしてない。

「でも甲斐田君に勝つってクラスじゃ相当なステータスなんだけどなあ」

「何それ」

「だから最近クラスの中で風さんの評価が上がってるんだ。あの甲斐田君と対等に渡り合うなんてすごいって」

「またつまんないこと話してるね。それよりもクラスの様子を教えてください。一夏とかシャルルとか」

「えーっと、織斑君はともかくとして、その……デュノア……君については触らない方がいいんだよね？」

「様子がおかしいとかだったら教えてほしいけど、シャルル個人については近づかない方がいいと思うなあ。相当ややこしいことになってるから」

「うん分かった。わたしたち一般人が近づいたら火傷しそうだもんね」

世間的には公表されていない存在ですらある。俺としても余計な口出しをされても困るし、デュノアについてはしばらくそっとしておいて欲しいところだ。

デュノアはクラスにも完全に溶け込んだし、転入当初の騒がしさも最近はやまりつつある。

「あと基本的に僕が知ってそんなことはわざわざ言わなくていいよ。」

何から何まで説明しろとか言わないからさ。知りたいのはどっちかと言うと僕のいない場で何があったかだ」

「それだと織斑君については特に言うこともないかなあ。みんなの相手をしながら自分の訓練もするようになったくらい。普段については一緒にいる甲斐田君の方がよく分かっていると思うし」

「うん。それならオツケー」

と言っても部屋を離れて一夏と距離が遠くなってしまったのは事実だ。間近で見ているからこそ理解できる事柄は意外と多かつたことに気づいた。

まあ代わりではないがデュノアが側に付いていてくれるので、実のところはそこまで心配していない。デュノアはかなり面倒見がよかつた。さすがにデリケートな話なので家族構成などは聞けていないが、もしかしたら下に妹でもいるのかもしれない。

「あとはナギと鷹月さんがぶつかり始めたことくらいかな？　なんか今後の方針がどうだとかで」

「四十院さんは？」

「間に挟まれて困ってる。ナギがやたら張り切ってるし、対抗して鷹月さんも自分アピールをするようになった感じ」

「そういう空気は感じてたけどそこまで？」

「あー、甲斐田君がいるところではやらないからだろうね。二人共甲斐田君がいなくなってから動き出すから」

「僕が三組に手を貸してるから警戒してかな」

「うーん、どっちかと言うと甲斐田君に気を遣ってじゃない？　二人共甲斐田君に投げれば済むことなのは分かっているだろうし」

「それはどうだろう。僕に内部事情を漏らしたくないという意識だと思っようよ」

「ふーん。そんなもんか」

リーグマッチの時を鑑みれば、手の内を晒すような真似はしないと二人とも意識しているだろう。

もしかしたら弱みを見せたらそこからつけ込まれるくらいは思っているかもしれない。

「他のみんなの反応は？」

「びみよー。指揮班に頼りたい人とそんなの自分でやるって人がいてお世辞にも纏まってるとは言えないかも」

「それはまあそうなるだろうね」

「こうやって見ると甲斐田君との差がはつきりしちゃうね。甲斐田君はいかに他人を引き込むのがうまいかっていう」

「別におだてなくていいよ。そういうのを求めてるんじゃないから」

「そんな意味じゃなかったんだけど、まあいいや。パイロット班の人達がわりと自分でやるって感じだね。相川さんとか真つ先に自分のことは放っておいてとか言ってたし」

「へえ」

「あの人ほんとに変わったよねー。リーグマッチ終わった後泣いてたし、あれが原因なんだろうけど」

「今回はリアーデさんと組んだそうだし、ダークホースになりつつあるね」

後から聞いた話だが実は相川さんの動きが一番早かったそうだ。タッグマッチのレギュレーションが発表されたその日の昼にはリアーデさんを口説いていたらしい。

また他の誰でもなくリアーデさんというのが的を得ている。一組に有力候補は数あれど、ペアを組むまで至るには交渉が大変だ。一夏やデユノアなど論外だろうし、篠ノ之オルコットは基本一夏しか見えない。指揮班はクラスに引っ張られて自分のことがおろそかになる可能性がある。俺だつて一夏を指揮班の二人と組ませる場合は全体から切り離すつもりだった。そうなると捕まえやすくてかつ操縦技術が優れている筆頭はリアーデさんだ。一夏のことなど俺かデユノアと組むだろうからそもそも見込みからしてないと言えればいい。

まあタッグマッチの意義を考えるとそこまでする必要は全くないのだが、誰よりも真剣にやろうとしているという点で十分合格だろう。

「整備班のみんなはいつも通り。なんだかんだでナギは面倒見いいからね。口うるさいけど」

「整備班を纏めてたのは伊達じゃなかったわけだ」

「今回うまくやれたらそれなりに信頼は得られるんじゃないかな？
煽っておいてなんだけどね」

「そのエネルギーを鷹月さんとぶつかると方向に使わなければよかつた
んだけどなあ」

鷹月さんの方は俺が煽つたので相当にやる気を見せている。鏡さんは田嶋さんが煽つた。

その結果二人は見事に衝突してしまったわけだが、やはり四十院さんを加えて三人ではいけないものか。

加えて二人共デュノア狙いであつたりするので、つい張り合つてしまふというのもあるのだろう。元々言い争う仲でもあつたわけだし。

「今のところクラスはそんな感じかな？ あ、最近布仏さんが教室にいないんだけど、それは甲斐田君の仕業つてことでいいんだよね？」

「仕業つて、みんなそういう風に僕を見てくるよね」

「だって実際そうじゃない。違うの？」

「まあそうだけどさ」

「それは四組絡みの話？」

「うん。この後話すよ」

「それは楽しみ」

「じゃあ一組はこんなものかな」

「そうだねー。あ、ここ最近甲斐田君についてちよつとおもしろい話があるんだ」

そう言うのと田嶋さんはニヤツと笑つた。

なんだろう、そこはかたなく下衆びた感じがする。

「何それ？」

「甲斐田智希ロリコン疑惑」

「は？」

「甲斐田君はですね、元々年上好きだと思われてたわけなんですよ。上級生と仲良さそうに会話してるし、ここで働いてる大人の人達とも普通に話してるでしょ。これはきつと甲斐田君の大人の女を求める心がそうさせているんだろうって」

「田嶋さんはいったい何を言ってるの？」

「ところがここに来て急展開！ 人形みたいな転入生と急接近！ 毎日にこやかに話す二人の姿を見ていれば、これは怪しいとみんな思うわけなのですよ」

「はあ？」

「真実を確かめるべく我々取材班は彼をよく知る人物に話を聞くことにしました。そうですね、プライベートの都合上仮に〇君としておきましようか」

唐突にワイドショーが始まってしまった。谷本さんとは別次元でフリーダム過ぎる。

ある程度は覚悟していたつもりだが、まさか何の前振りもなくいきなり行われるとまでは想像していなかった。

「その〇君曰く、中学時代の甲斐田君はあまり子供達に好かれていなかったようです。なんでも〇君のように最後まで付き合わず、面倒になるとあしらい始める姿が不評だったようです」

「またつまんないことに力入れるね」

「ですからおり、失礼〇君は言っていました。きっとあいつは子供が好きじゃないんだらうと。今回の事態についてはとても驚いていましたね」

「それなら疑惑は払拭されたんじや？」

仕方ないので俺も付き合うことにする。別に頭ごなしにやめさせて機嫌を損ねるほどのことでもない。

「ですがそれでは現在の状況に説明がつきません。あの姿形では甲斐田君のストライクゾーンから外れるはずです。それなのになぜ甲斐田君は彼女に近づこうとするのか」

「普通に向こうから来たじゃ駄目なわけ？」

「その子に対する甲斐田君の態度は他とは違ってもつぱらの評判です。それは同級生を奴隷のごとくこき使う悪魔のような顔でもなく、上級生と楽しく会話する普通の生徒の顔でもなく、なんでも優しい目をしているのだとか」

どうやら俺はテレビの向こうで感想を口にする視聴者であるらし

い。直接返すのではなく、きつとみなさんそう思ってますよね的なやり取りだ。

「娘に対する親としての愛情のようなものをその子に感じたのか？いえ、そんなものがあるなら他の子供達へもその愛情を注げるはず。やはりその子は甲斐田君にとって特別なのです」

「それ以前に子供がいるような年じゃないし」

「真実はやはり本人達の中にあるのでしよう。そこで我々は本丸に突撃取材を試みることにしました！」

「まさか……」

「ですが残念なことに、先方からは取材拒否の返事が戻ってきただけでした。曰く、あまりにもくだらなさ過ぎてとても話などする気にはなれないとのことですよ」

「当たり前だ。後で謝つとこう」

まさかボーデヴィツヒにまで突っ込んで行ったのか。面識など全くないだろうに、意味不明なバイタリテイだ。

「こうして我々は真実を手にすることはできませんでした。真実はみなさんの中にある、今はそれでいいのではないのでしょうか」

「しかも最後全部ぶん投げた」

「で、結局甲斐田君の本命って誰？」

「いい加減にしろ」

「あいたっ！」

鈴に倣って、俺は手刀を田嶋さんの額に落とす。

26. タツグマッチの組み合わせ

トーナメントの対戦表が配られた。

教室が静まり返る中、織斑先生と山田先生が出て行く。

だがクラスメイト連中は見向きもせず、一心不乱に配られた紙を見ている。ようやくはつきりと自分の位置が見えたのだ。ここからどうしていくか、具体的に考えることができる。皮算用になるかはさておき、早く見通しくらいは立てておきたいだろう。

「智希、残念だけどこれだと俺達は決勝まで当たらないんだな」

「つまり今回は当たらないってことだね」

「千冬姉のことだから俺達を最初にぶつけてくると思ってたんだけどなあ」

「それも可能性としてはあったけど、くじだし公平さを考えるとそうならない気はしてた」

「そんなもんか」

俺と一夏の位置は山の端と端、まあ一番遠いところに離されたなどという感じだった。

俺から見て、このトーナメント表は明らかにくじではなかった。

なぜなら俺の知る実力者達が均等に配置されている。一回きりのくじであれば多少は偏るはずだ。どこかで実力者同士が固まる死の山と呼ばれるような潰し合いの場所が出てきていいはずである。

それがないということは、恣意的に並べられた可能性が高い。もちろん俺の知らないダークホースの存在もあるだろうが、それは俺から見て穴になっている山にいるのだろう。少なくとも俺の知っている実力者達が綺麗に分かれた時点で作為があるのは間違いない。

「こうやって見ると知らない人ばっかだな」

「そりゃあ百五十人もいればほとんどは知らない人だよな」

「智希ならそれなりに知ってる人もいるんじゃないのか？」

「と言っても半分もないよ。それに一組以外は顔くらいしか知らない

い人ばっかりだし」

「智希でそれなら他のみんなはもつとそうだろうな。なんか自己紹介の場になつたりして」

「あはは、試合の前にみんな挨拶から始めるんだ」

「そうそう、どうも初めましてシャルル・デュノアですつてな」

「まあ実際活躍した人は名前覚えてもらえるだろうね」

言われて気づいたがそういう意味合いもあるか。

特に今年はそうなのかもしれないが、意外とクラスの壁は厚い。元々IS学園は全国から集まってくるので、同じ中学出身ということが極めて少ないそうだ。受験の時点で学校からの推薦が必要なため、合格以前に受験者からして数人、しかも全員が合格できるわけではないのでなかなかそういうことにはならないのだろう。

加えて生徒の半分は部活もやらないため、ますますクラスが世界の中心となってしまう。だから五組のような事態にもなってしまったりするわけだが。

「織斑君、準々決勝で会おう」

「相川さん？ そうなのか？」

「ちゃんと見てよー。ほら、同じ山じゃん」

「ほんとだ。ええと、このAブロックの決勝が準々決勝になるのか」

「そこから？ あ、それとも何？ 優勝して当然だからあたしとか全然眼中にないって？」

「いやそういうことじゃなくてだな」

「冗談冗談。マリアと一緒に上がってくるつもりだからその時はよろしくね」

「織斑くーん！ 悲しいことですが勝負とは非常なものなのでーす！

不運だったと思って諦めてくださーい！」

「言つたな。俺も簡単に負ける気はねえぞ」

横に並べたら壮観なのかもしれないが、生憎と配られた紙は縦長でA B C Dの四ブロックに分かれて並べられていた。

一夏・デュノアの位置はAブロックの一番最初、これは一組代表だからかりーグマッチ優勝者だからか。

もつともシードなので登場は三回戦、木曜からになるのだが。

「でも相川さん、一夏の前に強敵を破らないとね。五組の代表の人がいるから」

「ああ、この印はクラス代表ってことなんだ」

「他を見てもそうみたいだね」

「そっか。四ブロックだけど五クラスあるからどこかで重なっちゃうんだ」

「そういうこと。もちろんそれ以前に初戦で負けてるようじゃ論外だけど」

「そんなことあるわけない……わけじゃないのよね？」

「当然」

組み合わせも決まったしもう隠す必要はない。

せいぜい煽って危機感を持ってもらう。

「三回戦だし弱い人は上がってこれないよ。つまり一組の相手は全員強いから簡単にはいかないと思う」

「だよー。……ちなみに、その五組の代表の人って強い？ リーグマッチの時とは別の人でしょ？」

「さすがにそれくらいは知ってるか。うん、別の人。強いかどうかは自分の目で確かめよう。二回も見られるんだからさ」

「ちえっ。やっぱ教えてくれないか。でも安心して。そいつと当たったら絶対勝つつもりだから」

「やけに強気だね」

「だってそいつ甲斐田君にひどいこと言った奴じゃん。あたしだけじゃなくてクラス全員許せないと思ってるし」

そういうえばそうだった。

俺が喧嘩を売ってしまったせいで、一組は五組と対立関係にあるのだった。

「ああ！ あいつか！ なら俺もボコボコにしてやりてえな」

「残念でした。そいつはあたしがやるので織斑君には回ってきません」

「なんだよそれ。俺にもやらせてくれよ」

「トーナメント上そうなんだから仕方ないじゃん。それとも織斑君はあたしに負けろって言うの？」

「そんなこと言わねえよ。じゃあそいつは任せた！」
「任された！」

意外とモチベーションになっっているようだ。

俺も五組の佐藤に肩入れた以上、五組代表杉山にはさっさと負けてもらった方がありがたい。相川さんなら実力的には同格くらいだろうか。訓練量を合わせると普通に勝てるかもしれない。

本音を言えば一夏に杉山を倒してもらった方が絵になるので、そうして欲しいと思うけれど。

「そうと決まれば特訓でーす！ 行きますよ清香！」

「えっ？ どこへ？」

「グラウンドで走り込みに決まってまーす！」

「またー？」

「清香に足りないのは一に二に体力でーす！ 体力がなければ何も始まりませーん！」

「はいはい分かりました。じゃあ行ってきます」

「いってらっしゃい」

「がんばれよー」

テンション下がったという顔になりながらも相川さんはリアーデさんと出て行った。

リアーデさんも天然だが馬鹿ではない。今の相川さんに必要な事柄を理解している。

体力が尽きて集中力がなくなるのが目下の相川さんの課題だ。

「一夏さん！ わたくしとうとうこの機会を得ました！ 是が非でも勝ってあの時の雪辱を晴らしてみせますわ！」

「セシリア？ いきなりどうしたんだ？」

相川さん達が去るやオルコットが入ってきた。待ち構えていたのだろうか。

ちなみに篠ノ之さんもいるがオルコットに順番を譲ったようだ。

「見てくださいますわ！ こういうことですわ！」

「ああ、なるほどね」

オルコットの指先にある名前は鈴だった。すなわち、リーグマッチ前に鈴にボコボコにされたリベンジということなのだろう。

一夏のいるAブロックは、はつきり言って一夏の独壇場である。

俺の知る対抗馬は相川・リアーデペアと五組代表杉山くらい。しかもその二者は一夏と当たる前に潰し合ってくれ。その他同じ山のクラスメイトは整備班。先輩達の言葉を信じれば他のクラスに一夏とデュノアを倒せるほどのダークホースはいない。

織斑先生達が公平になるよう組み合わせ表を作った結果だろう。一夏に次々と強敵を当てるような逆えこひいきはやれないのだ。やはりタッグマッチという行事の性質上偏らせることはできない。現状の実力的に一組が他のクラスを上回っている、均等にするにはどうしても一組の戦力を分散させる必要がある。そうなるは今やクラスでも最上位の実力者となった一夏の周囲は必然的に弱くなるのだ。

このあたりは予想通りである。

そしてBブロック。ここには二組代表であるハミルトンがいる。そしてそのハミルトンと鈴が組んだことによりこのペアが最有力候補だ。

一方でその対抗馬が、オルコット・四十院ペアになる。

「でもそれは初見殺しの不意打ちなんだし、そこまで言わなくてもいいんじゃないの？ 四組代表の更識さんもそれで鈴に負けてるし」「甲斐田さん、確かに事実としてはそうなのでしょう。ですが、それでも負けは負けです。あれだけ啖呵を切っておきながらの敗戦ではとても言い訳などできませんわ」

その場になかったので聞いた程度だが、啖呵というよりは売り言葉に買い言葉らしく、俺からすればどっちもどっちである。

それにリーグマッチ後オルコットは鈴に当てつけるような言動をしていたし、そういう一方的なのはどうかと思わないでもない。

とはいえ鈴とハミルトンのペアは俺の中で一夏の優勝を脅かす存在でもあるので、勝手に盛り上がりすぎて潰し合いをしてくれるのは大歓迎だ。

「それで変な方向に行かないのであればいいか。でも上ばかり見て足を掬われないようにね」

「もはやわたくしに慢心という言葉はありません。他ならぬ甲斐田さんに教えていただいたことですので」

「僕？」

「はい。わたくしは入学して早々に教えられました。まさかもうお忘れですか？」

「ああ、そういう話ね。僕というよりは先輩達だけど」

「絵を描いたのは甲斐田さんですわ。甲斐田さんの策略でわたくしは勝って当然の試合を落としました。その後鳳さんにも実力で負け、わたくしは現状二連敗です。もうこれ以上負け続けるわけには参りません」

ギャンブル狂のような言い回しだが、要は負け癖を付けたくないというようなことだろうか。

相手が悪かった話とはいえ、オルコットの入学からここまでうまく行っていると言いがたい。

自己顕示欲も人並み以上にあるし、今回を浮上のきっかけにしたいという感じが。

「今度は気負いすぎて空回りしないようにね」

「確かに一人であったのならそういうことがあるかもしれませんが。ですが今回は二人ですわ。何かがおかしくなったとき、困ったとき、お互いに助け合うことができるのです」

「そうだね」

オルコットはそう言うのと離れた席にいる四十院さんに視線をやり、それから内緒話をするかのように顔を俺の耳に近づけた。

「ですから言わせていただきますが、神楽さんに一言お声をかけてあげていただけませんか？ 甲斐田さんもこのままずっと気まぐずいままでは居心地が悪いでしょうし」

口を手で覆い隠して、俺にだけ聞こえるように言ってきた。
四十院さんとはもう一週間以上まともに会話をしていない。

「必要でしたら場を設けるくらいは」

「いいよ、自分でやる」

「ありがとうございます」

オルコットは笑顔で俺から離れた。

親から言われて相当堪えたのか、四十院さんは完全に萎縮してしまっていた。

俺に纏わり付かなくなったのはいいのだが、そう両極端だとそれはそれでやりづらい。

四十院さんのおかげでエネルギーが足りないせいか、鷹月さんと鏡さんの衝突をまともに取りなせていない状態だ。

更識妹に対する四組生徒ではないが、俺の方から行くしかないのだろう。せつかくオルコットと組んだのだから、このままタッグマッチで情けないことになられても困る。もう鈴に勝てとは言わないがせめて一夏と当たる前に鈴の体力を奪ってくれるくらいはしてもらわないと。

それはそれとして切り替えて欲しかったのだが、人間そんな簡単にはいかないということなのだろうか。

「ま、オルコットさんは一夏へのリベンジもあるしね」

「俺?」

「そうですね。一夏さん、今度は正々堂々と試合を致しましょう」

「う……それ言われると今はきついな」

「別に一夏さんに含むものはございませんわ。あの時のわたくしは甲斐田さんに負けたのであって、一夏さんに負けたとは考えていないということですよ」

「なるほど、つまり決着をつけようって話だな?」

「はい。同じクラスである以上真剣勝負の場で一夏さんと競える機会などそうそうありませんわ。今度は慢心なく油断なく全力でやらせていただきます」

「ああ、俺だって今ならセシリアに負ける気はしない。ええと、セシリ

アと当たるのは……」

「準決勝ですわ」

「分かった。俺もそこまで全力で勝ち抜いてみせる。シャルル、頼むぞ」

「うん！」

「凰さんに勝ち一夏さんに勝ち、最後決勝では箒さんに勝利して優勝したいものですわね」

そう言つて、笑顔のままオルコットは後ろを振り返る。

その先には腕を組んだ篠ノ之さんが不敵な笑みを浮かべていた。

「ふっ、そういえば私達はまともにやりあつたことがなかったな」

「ですがお互いに手の内は知り尽くしているはずですわ。とてもいい試合になるでしょう」

「だがそれは鈴音に一夏を破つてからの話だな。残念だがセシリアには皮算用をするには越えるべき山が多過ぎる」

「それは箒さんも同じでしょう？」

「少なくともセシリアよりは大分楽だろう」

「いいえ、箒さんには大きな山がありますわ。ある意味わたくしの前にあるよりも大きな山が。何しろ甲斐田さんを打ち破らなければならぬのですから」

もちろん俺自身のことを言っているわけではない。

篠ノ之さんのいるCブロックに、俺のくつつけた三組代表ベツティと元五組代表佐藤のペアがいるという話である。

Cブロックは死の山と言うほどではないが群雄割拠状態だ。一、三組の中堅どころが多い。

まず一組からは篠ノ之・鷹月ペアを含めパイロット班のペアが三つもある。一組同士での潰し合いからして激しい。

その上三組からはベツティ・佐藤ペアは優勝候補。まあ佐藤は五組だが。その他三組内での実力者も二ペアいるし、一、二回戦でうまく勢いに乗れば一組撃破も不可能ではない。

潰し合いで疲労した結果漁夫の利を持っていかれることも普通にある。ありそうだし、ここは順当に行かなさそうなブロックである。

「だが相手にとつて不足はない。クラス代表者二人とやれるなどむしろ望むところだ」

「五組の佐藤さんはもうクラス代表じゃないけどね」

「こうなってくるとそれすら甲斐田の策略と思えてくるな」

「さすがにそれは言い過ぎ」

「少なくともその状況を利用したのは事実だろう。リーグマッチ出場者同士で組むなど完全に優勝狙いだ。しかもその後ろには甲斐田がいる。これほど燃える状況はない」

「俺なら冗談じゃねえって思うけどな。あいつらに智希が口出しするんだろ？ 正直一番やりたくねえ」

一夏が心底嫌そうな顔をしている。

正直に言えばベツティと佐藤を使えるのなら頭の中では一夏にも勝てると思う。

一夏の弱点を徹底的に突いて実力を発揮させなければいい。一夏は調子の波が非常に激しいので、上向きにさせる要素を潰していけば終始こちらのペースで試合を進められる。更識妹もベツティも一夏に勝てなかったのは自分が優勢の状況で一夏に立て直す時間を与えてしまったからだ。

と言っても実際のところはうまくいかないだろう。少しずつ歯車が噛み合わなくなつて、最後に逆転されてしまうのは想像に堅くない。今や同等の実力で今の一夏に勝つには針の穴も通さない繊細さが必要なのだが、それは入学したての一年生に望むようなことではない。

現状で技術的にそれを望めるのは篠ノ之さんくらいだろうか。先輩達のお墨付きであるその安定感を持つて一夏対策を実行すれば、本番で一夏にいいところを出させずシャットアウトすることは可能かもしれない。

「私は楽しみだな。セシリアや鈴音と違って私は甲斐田と相對していないから、なおさらそう思えるのかもしれないが」

「箒はつえーなあ。俺はここまで智希に勝たせてもらってるようなもんだし、正直不安なんだけど」

「一夏にしてはめずらしく弱気だね」

「なんつーか目標がないって言うか、先が見えないんだよな。今やってることはそれでいいのかっていう」

「自分で考えてこなかったつけだね。ちよūdいいい機会だから自分で考えなよ」

「んなこと言われても急にできるわけねえだろ。なあシャルル?」

「まあまあ一夏、大丈夫。今一夏がやってることは間違ってるし、実際に前に進んでるから」

「シャルルがそう言うんだからそうなんだろうけどさ」

「どうやらデュノアはリーダータイプではなさそうさ」

よく気が利くし面倒見もいいのでそっち系かと思っていたが、人を引っ張っていく側ではないのだろう。

あえて言うならサポート系か。あくまで前に進むのは一夏であり、デュノアはそれを横で支える感じだ。アドバイスはできても強引に引っ張るまではやれないので、進む方向は一夏の意味に委ねられる。こういう場合きちんと筋道立てて考えることをしてこなかった一夏では自分の考えに自信が持てないので、どうしても不安が付き纏ってしまう。

やはり一夏の頭脳になるべき人間が必要である。四十院さんともう完全に無理だと分かったし、どうしたものか。思い当たる生徒がない。一夏の周囲に人を増やしての合議制にしても、どのみちそれを纏める人間はいる。悩ましい問題だ。

「さてと」

「なんだ、もう行くのか?」

「そうだけど何かある?」

「別に何かあるってわけじゃないけど、最近智希と会話してない気がするんだよな」

「いやいや、毎日顔合わせてるじゃない。隣の席だし、ちよūdちよūd話はしてるよね?」

「そういうことじゃなくてだな、きちんと話をしてないといふかなんというか……うまく言葉にはできないんだけど何か足りない気がするんだよ」

「自分でも分からないようなことだと僕にはもっと分からないなあ。例えばシャルルがうざったくて耐えられないとか?」

「僕!?!」

「そんなこと一言も言っただけよ。シャルルにはほんと助けられてるし」

「脅かさないでよ」

「俺じゃねえよ、智希だろ。まあいいや、行ってくれ」

「何それ」

軽く振ったつもりだったがデュノアに想像以上に驚かれてしまった。

デュノアは意外とアドリブには強くないのかもしれない。普段は心構えができているからそつなく対応できるというだけで。

「甲斐田君」

教室を出ようとしたら呼び止められた。

振り返ってその顔を見て、納得した。

「初戦、よろしくお願いします」

「こちらこそ」

頭を下げてきたのは岸原さん、すなわち俺とボーデヴィツヒの初戦の相手である。

一年生は百五十四人、定員は百五十人だったのだが俺と一夏に加えて転入生が二人増えたため、現在はその数字である。

その数字の元トーナメント表を作ると、一か所だけいびつな山ができる。そこだけシード権持ち同士が初戦である三回戦を戦うことになるのだ。

それが俺とボーデヴィツヒの余り者ペア対岸原、鏡ペアである。

俺は唯一シード権を持ちながら外のクラスの人間と組んだ。だか

らそこに来るのはある程度予想された事態だった。

「と言つても僕はいないも同然だけどね」

「そうなんですか?」

「知つての通り僕はまともにやる気ないし、実質二対一だよ」

「そういう言い方は……」

「事実なんだからしようがない。特に隠すようなことでもないし」

「ということは甲斐田くんは私たちに勝ちを譲ってくれるわけ?」

目ざとく岸原さんの相方が入ってきた。

クラス一俺に対して口が悪い鏡さんである。

「どうだろう。それはボーデヴィツヒさん次第かな?」

「何? 向こうは一人だけでやる気なの?」

「知らない」

「は?」

「知らないものは知らないとしか言いようがないよね。その時になれば分かるんじゃない?」

「何それ? 甲斐田くんのパートナーなんですよ?」

「うん」

「うんじゃなくて」

「教えてくれないんだから仕方ない。なんかやりたいらしいからそれやって気が済むかどうかだね」

「はあ?」

一応情報として伝えておく。何かを企んでいる、というほどでもなさそうな軽いものようだが、心構えくらいはさせておくべきだろう。

「甲斐田君、全く意味が分からないんですけれど……」

「僕もよく分からない。でも一応言っておくとボーデヴィツヒさんが本気でやったら二人だろうとかなわないよ。簡単に言うと上級生を相手にするようなものだから」

「そうなんですか!」

「本人が言うにはカリキュラム的にここみんなより一年先に進んだそうだから、実力的には二年生くらいかな? しかも専用機持ち」

「何よそれ!？」

「まあだから大人げないことはしないって言ってたけど、実際どうなるかは分からない。僕の想像では二人を試して合格かどうかで先に進ませてくれるかを決めるんじゃないかと思ってる」

奴の性格からしてきつとそういうことだろうと俺は考えている。

いくら初心者と言ってもみつともない真似をする相手に対して勝ちはやらない的な。天然だがあれで生真面目だし。

「試すつて、いったい何をしてくるわけ？」

「そもそも僕の想像だからなんとも言えないけど、フリーパスで勝ちを譲ってくれないと思うよ。それなりの何かは見せない」と

「それなりつて何よ？」

「だから全部僕の想像だつて。少なくとも相手が一人だからつてなめた態度を取つたりしたら全力で叩き潰されるだろうね」

「それだけ聞くと向こうの方がなめてる感じだけだ」

「僕が言いたいのは手を抜いたり楽をしようとしたりしないようにつてこと。せつかく上に行けそうな場所に入ったんだ。初戦で躓いたりしたくはないよね」

「分かりました。全力でやるようにということですね」

「結局はそういうこと。だから鏡さんも普段の僕に対する態度は試合の時だけはやめておいた方がいいよ。ボーデヴィツヒさんにはそのまま受け止められちゃうから」

「な」

「ご忠告ありがとうございます」

「とんでもない。信じるかどうかはそちら次第」

鏡さんに一太刀浴びせて俺は教室から出た。

Dブロックは一見狙い目である。はつきりとした有力候補は四組代表の更識妹くらいで、一組三組にはそこまで突出した存在がない。い。

ということはきつと二、四、五組のパイロット科志望の生徒がいるのだろう。

だが岸原さんと鏡さんもうまくやれば整備班ながらベスト十六く

らいは目指せる。俺とボーデヴィツヒを抜けば次は三戦やって疲労した他クラスか谷本、布仏ペアだ。どちらもスカウティングと対策ができれば試合は問題なくやれる。その先はおそらく更識妹が上がってきそうなので難しいかもしれないが、鏡さん的にはパイロット科志望の生徒を押しつけてベスト十六なら十分だろう。密かに指揮科を目指す鏡さんにとっては降って湧いたチャンスとも言えるのだ。

足早に三組の教室へと向かう。

組み合わせが決まったのでようやく三組の連中に個々の一組対策を授けてやれる。

現状まともなぶつかっては三組の勝ち目は薄いので、まともにやらない方法でやるしかない。

共通して言えるのは一組にとって三回戦が初戦になるということだ。三組としてはそこを最大限に生かすしかない。

スカウティングして対策してくるのならそれを無にしてやればいいという話だが、果たしてどこまでやれるか。

今回は一夏にやったような個人にあわせたやり方ではないため、ちゃんとやってくれるかその人任せで正直自信は持てない。雑な作戦だと我ながら思わざるをえなかった。

校舎の屋上になると西日がすごかった。

もう少し遅い時間にしておいた方がよかったかもしれない。顔がはつきりと見えるのは嫌かと思っただけこの時間にしたのだが、少々甘かったようだ。今なら顔の赤さくらいなら多少は隠せるかという程度だ。

西日が強い分影ははつきりとしかも長く出る。相手は既に来ていた。

まあ外の景色を見ながら会話をすれば顔を見なくて済むか。

「甲斐田さん……」

「お待たせ。まだ時間には早いけどけっこう早く来てた？」

「いえ……」

四十院さんにいつもの覇気はない。目にも不安の色が濃く漂っている。確かに重症だったようだ。

これでは確かにオルコットも心配になるだろう。

「そっか。じゃあ今わざわざ来てもらったことなんだけど」

「甲斐田さん」

「何？」

「甲斐田さんのお話の前に、私の話をさせてもらってもいいでしょうか？」

「いいよ、どうぞ」

「ありがとうございます」

即答する。

四十院さんの目に力が戻っていたからだ。

不安な顔のままグダグダ話を始めるようなら俺から話すか、ちゃんと思意を持って喋るのであればむしろその方がいい。俺のことではなく四十院さんのことなのだし。

「私の母はですね、とても優秀なんです」

「そうなんだ」

「新しいことを始めるのが好きみたいで、会社を作っては新しい事業を立ち上げ、それが軌道に乗ったら部下や一族の人間に渡してまた次のことを始める、そんな人なのです」

「バイタリテイのありそうな人だとは思ったかな。四十院さんの一族の人達はみんなのそうなの？」

「とんでもないです。母は一族の中でも変わり種で、椅子が温まることのない落ち着きのない人間として呆れられていますね。ただ優秀であることは誰も否定しません」

「結果を出しているのならそうだろうね」

会社を作っては潰してでは誰も付いてこないだろう。渡された会社が内情滅茶苦茶では突っ返されるだろう。実績を積み上げているから周囲はやめさせようとしないのだ。

泳いでないと死んでしまう魚のようではあるが。

「そんな母がですね、甲斐田さんのことをすごく褒めていたんです」
「僕？」

「はい。最初は甲斐田さんが女であればよかったのにと」
「は？」

「それからですね、甲斐田さんがISを動かさなければよかったのにと」

「何それ？」

「それならもう迷わずスカウトしたのにと。方針を伝えておけば全部自分で考えてやってくれる人間なんてそうそういないのだと」

「そういう話か」

「はい。とても残念がっていました」

自由にやらせてくれるようで、恐ろしいタイプの上司と言えるかもしれない。

確信して言えるが、そういう場合の方針とはまず間違いなく無茶振りである。具体的にこれをやれではなく、解決策を考えるとところからやれという超丸投げだ。

全くもって冗談ではない。

「つまり僕は男でかつISを動かせることによって助かったと考えていいのだろうか」

「ふふっ、どうでしょう。甲斐田さんがつまらない人生を送るのなら攫ってやろう、くらいは考えているかもしれないね」

「怖っ」

もしかしたら俺は値踏みされていたのかもしれない。やたら俺について聞かれた気がするし。

それに俺が四十院母の今の会社に入る意味はないとしても、次に作る会社に意味を持たせてきたりは普通にあり得そうだ。それどころか俺と会話をして俺が興味を持ちそうな分野に手を出してきたりとか。

油断していたら気がついた時にはレールの上に乗っている、そんな恐ろしい相手だ。

「そんな母の姿と甲斐田さんを見ていたら、ふと思ったんです。甲斐

田さんと一緒にいれば私は母に勝てるのではないかと」

「え？」

「正直に申し上げますが、私は母に何一つ勝てる気がしません。今の話ではなく、将来を考えても勝てるビジョンがまるで浮かばないのです」

「勝ち負けかあ……」

「ええ、甲斐田さんにとってはきつとくだらないことでしょう。ですが私は幼い頃から母の優秀な姿を見てきました。そしてそれがどれだけすごいことなのかを理解するにつれて、同時に自分が情けなくなりました。実の娘なのにどれだけ違うのかと」

「そういう話ね」

親が優秀過ぎて劣等感を持ってしまおうとは、ある意味贅沢だと言えるかもしれない。

俺や一夏の周りには比較対象さえなかったのだから。

「ですから甲斐田さんのような人が側にいてくれたら、私は母に勝てるくらい強くなれるかもしれないと考えてしまっただんです」

「なるほどね。でもそれってさ」

「はい。たとえばいつか母に勝ったと思っても、勝ったのは甲斐田さんであって私ではないですよね」

間違っているわけではないが、正解でもない。

それは漠然と物事を考えていると嵌まる落とし穴である。

「四十院さんってさ、正直友達少ないよね」

「え？」

「やっぱりその敬語口調がいけないのかな？ タメ口じゃないからなんとなく壁を作ってしまう的な。あ、でもそれだけなら岸原さんもそうか。ということは問題は口調というわけでもないのか」

「甲斐田さん？」

「そうなると思えられるのは人との距離のとり方か。確かにリーグマッチの時もうちよっとうまくやってくればなあと思ったことは何度もあるんだよね。わざわざ引つかかる言い方しなくてもはいつも思ってた」

「あの……」

「でもそういうのができない人だとは思ってないんだよ。気を遣って
るなと思えるときはきちんとできてるし。だからなんでやらないん
だろうと疑問だったんだけど、今分かった。それは四十院さんにとつ
て必要なことじゃなかったからだ」

「すみません甲斐田さん。今の話はどういうことなのか……」

遠くから話をして一度四十院さんの意識を切り離したただけだ。

ジメツとした感情を引きずられたままでは会話にならない。

「四十院さんてさ、僕のこと優秀だと思っ？」

「はい。それは思います」

「それはなぜ？ 言っておくけど僕はみんなみたいに必死に勉強とか
してこなかったよ？」

「勉強のような努力ではどうにもならない事柄を甲斐田さんは会得し
ているからです」

「はいそれが間違い」

「え？」

「冗談じゃない。今の僕は僕なりに努力した結果であって、もともと
そうだったわけじゃないんだから」

なぜここの連中は俺を過大評価するのか、この一ヶ月考えた。そし
て気づいたのは俺はここの連中が持っているものを持っていると
いうことだ。

「甲斐田さん……」

「僕は自分がこれっぽっちも優秀ではなく一人では何もできないこと
を知っている。だから自分の望みを達成するためには人に叶えても
らうしかない。よく僕は口先だけだって言われるけど、それしかない
んだから仕方ないんだ。昔はそれすらなかったし、僕からしたらこれ
でもだいぶましになったんだ」

「……」

「僕からしたら四十院さんなんて超がつくほど優秀だよ。だって自分
の望みを自分で叶えられるんだから。今親に勝てないって言ったけ
ど、それは最初から勝つつもりがないんだから当然の話だよね」

「え？」

俺の話は導入であって実はどうでもいい。

実体のない幻影に向かってシャドーボクシングをしていても永遠に当たらないということだ。

「はつきり言うけど四十院さんなら勝てるよ。今じゃなくてもいずれは。対象が僕と会話した人ならね。だってあの人娘の前で思いつきりかっこつけてるだけだし、四十院さんが思ってるほど完璧じゃない。四十院さんが勝てないと思ってるのは四十院さんが自分の中に作り上げた理想の母親像だ」

「えっ……」

「勝とうと思っただけで敵の分析から始めないと。四十院さんはすごい言い方してるだけで弱点とかまるで探してないでしょ？ それに何を持って勝ちとするかの勝利条件とか決めた？ 別になんでもいいんだよ。客観的な話じゃないんだから自分の中で勝ちならそれで。そういうの考えたことある？」

「それは……」

俺も人のことを言えるわけではないが、頭の中でぐるぐるやっていとそのうち訳が分からなくなってドツボに嵌ってしまう。

ここ一ヶ月の四十院さんはきつとそういう状態だったのだろう。母親だけでなく俺に対しても。

ちなみに本当に親に勝てるかどうかは知らないが、まあ一つくらいあるだろう。別に全てにおいて勝てるというわけではない。

「あと四十院さんは勝利に対する執着も薄いと思う。勝てないとか言いながら同世代には勝つのが当たり前だったから、普通にやれば普通に勝てると思ってる。それが最初に言ったことで、リーグマッチの時に行動が徹底していなかった。あの時しっかりやればパイロット班の人達の信頼も得られたはずなのに、全然できなかったのは自分でも分かってるでしょ？」

「はい」

四十院さんが真剣な表情で頷く。よし乗ってきた。

こうやってわざわざ時間を使うのだから、俺もただ慰めて終わりに

するつもりなどない。

「それはさ、四十院さんが優秀だからなんだよ。結局自分でどうにかできると思ってるしどうにかしてきたから、他人に頼る必要性が自分の中で薄い。だからパイロット班の人達に対して上から突き放したような言い方になってしまっただけで反発される」

「そこまで見られていたんですね」

「苦情の届く先は僕だからね。一応言っておくけどその後四十院さんには伝えたよ。ピンと来てないなって感じだったけど」

「恥ずかしいです……」

もちろん自分のことなど全て棚に上げる。

そういうことを言い始めると俺は反発の嵐を強権発動で押し潰していた。

だからはつきり言って四十院さんどころではないのだが、今は関係ないのだ。

「でもまあ終わってしまったことはもうどうしようもない。大事なのは反省して次にどう生かすかだ」

「はい」

「そうするとこれからの二週間ってすごくいい機会だよな」

「それはタッグマツチのことでしょうか？」

「もちろん。四十院さんは人を指揮するとかそれ以前にまず人との距離をうまく取れるようにならないと。僕だって最初から喋れたわけじゃないし。だからまずオルコットさんと二人でちゃんとやれるかというところから始めたらどうか？　今までもアドバイスをもらってたみたいだし」

「そ、それは……」

きつと今四十院さんの顔は赤くなっているのだろう。夕日に照らされて分らないが。

しかしオルコットももう少しマシな指導をしてくれればよかったのに。

「と言っても実際うまく行ったかどうか分かりづらいか。じゃあ一つ課題を出そう」

「課題ですか？」

「うん。鈴とハミルトンさんに勝てるか」

「えっ？」

「はつきり言うね。このままやったら四十院さん達は準々決勝で鈴達に負ける。しかも敗因は四十院さん」

「私ですか!？」

「だって四人の中じゃ四十院さんが穴だし。他三人は留学生だよ？
操縦技術じゃ一番負けてるのは間違いない」

「それはそうでしょうけれど……」

個々でやり合った場合、四十院さんとオルコットではかなり分が悪い。

二人とも前衛型ではないので、特に正面から叩き潰しに来る鈴はやりにくい相手なのだ。

逃げるだけでなく闘牛士のように受け流す技術が必要になる。

「二対一を作られたらもう駄目だね。四十院さんが持ちこたえられなくてそこから崩れる。だからそうさせないようにオルコットさんと連携する必要がある」

「連携……」

「それが課題の一つね。オルコットさんと呼吸を合わせられるか。あ、ちなみにオルコットさんの方はできるよ。ネックになるのは四十院さん。どう合わせるかは任せるけど、オルコットさんに合わせてもらうようじゃとても勝ち目はない。オルコットさんの力がセーブされちゃうからね」

「はっ」

多対一を得意とするという触れ込みではあるが、オルコットの機体は近接戦を苦手としているしその本領を發揮できるのはやはり支援機としてだろう。

連携ありきの機体なのだし、オルコットの動きを見ているでも連携の意識は強い。まあゴーレム戦の時は多少不安の残る動きではあったが。

「もう一つは勝つためにどこまで執着できるか。普通にやったら勝て

ない相手に何をすればいいかだね。今回は一夏のような一発逆転もない。積み上げて勝つしかないんだけど、どうすればそれができるか。僕の中にはもうある」

「あるのですか!？」

「あるよ。それは先週鈴とハミルトンさんが組むという時点で考えた。別に一夏に勝たせるというような話じゃなくて、一般論としてね」

「それは……」

「もちろんそれは課題だから言うわけないけど、まあ僕が二人のことを知っているからというのがあるか。一言だけ言うと二人とも自分勝手だから連携できないということ」

鈴はともかくハミルトンについては宮崎先輩から聞いた話である。

だが俺の方でも考えてみると、気を遣っているようで時折見せるドライさを鑑みれば、少なくともハミルトンは根本のところ人で人に合わせるのを得意としていない。

だとすれば俺はそこを突く。一足す一を一にする。

「自分勝手ですか……」

「そこから先は自分で考えよう。あ、もちろんオルコットさんと相談してね。僕の中じゃ二人なら勝つことは可能だから」

「甲斐田さん、一つ質問をさせてもらえませんか?」

「答えられることなら答えるけど」

「ありがとうございます。どうして甲斐田さんは私にここまでしてくれるのですか? はつきり申し上げて私は甲斐田さんに迷惑しかかけていません。甲斐田さんにとってここまでする価値はないはずですよ」

「そんな卑屈なこと言わないですよ」

「いいえ、事実です」

そんなもの、一夏の対戦相手として鈴ハミルトンよりもオルコット四十院の方がいいからに決まっている。

一夏では鈴に一对一を仕掛けられたら素直に乗ってしまう。一对一が二つなど連携も何もあったものではないし完全に相手のペース

だ。その日は二試合あるし体力的に一番厳しいところである。鈴と激しく打ち合つて一夏に消耗されたくない。

その点四十院さんとオルコットなら連携ありきで来てくれるので、疲労度を考えるともう後がない鈴のような特攻はしてこない。だから結局は地力の差がそのまま出て来るはずだ。それならデユノアでも試合のコントロールは可能だろう。

とはいえさすがにこれは口にできない。

「うーん、同じクラスだからじゃ駄目？」

「甲斐田さんは既に三組に手を貸しています。それに二組のお二人の方が甲斐田さんにとつて親しい相手です」

「鈴はともかくハミルトンさんまで？」

「だって……お互いにお名前で呼び合う間柄ではないですか。私とオルコットさんよりも肩入れしておかしくないはずですよ」

「はあ、そういう話ね。それ全然違う」

「え？」

あれだけ大騒ぎしたのにどうして知らないのかと思つたが、そういえばあの時四十院さんはその場にいなかった。

オルコットは二件もの殺人未遂犯であり気が動転していたから覚えていないのだろう。

もしかしたらハミルトンのことも四十院さんの暴走に拍車をかけていたのかもしれない。

「ハミルトンさんのことを名前で呼んでるのは鈴に強制されたからだよ。ほら、僕らが夏休みにハミルトンさんの母国カナダに行くのは知ってるでしょ？ まあそれからして織斑先生に嵌められたんだけどさ。だから親善で行くから今のうちにお互い名前で呼び慣れておけて話。それだけ」

「……本当に？」

「それ以外に何があるって話なんだけど」

「本当の本当にそうなんですか？」

「意外としつこいね。それなら今こうやって四十院さんにアドバイスしたのが答えにならない？ リーグマッチと一緒に指揮班をやった

仲間なんだし」

「仲間……」

「あ、あれ？ 僕にとってはそうだったんだけど、四十院さんにとっては違った？」

待ってくれ。意を決して仲間とか臭いセリフを吐いたのに自分だけとか冗談ではない。

このままでは俺の心の黒歴史ノートに記載されてしまう。

「はいー」

「違うの!？」

「あ、そういうことじゃないです！ 違うんです！ あ、そうじゃなくて違うじゃないんです！」

「どっちだよー！」

思わず突っ込んでしまったが、四十院さんが動転しているだけで俺の黒歴史方面でないことはすぐ分かった。

「……」

「……」

「ふふっ……」

「まったく」

四十院さんは笑顔で、さらに両目から涙を流していた。

「私……もう完全に甲斐田さんに嫌われたものかと……」

「ちよつと暴走されたくらいで嫌ってたらとつくに僕は世界中の人が嫌いになってるだろうね。最近で言えばリーグマツチの時の鈴とか絶交ものだと思わない?」

「でも……」

「それに僕もあんまり人のことは言えない。先月勢い余って五組に喧嘩売ったりしちやったし。一夏とか鷹月さんに怒られたよ」

「でも私は……」

「別に僕が気にしてないからいいで終わりの話だよ。事情も分かったし、四十院さんと仲違いをしたいわけじゃないんだから」

俺のことなどどうでもいいのでさっさとタッグマッチに取り組め、だ。

今の対価となる要求は既にした。鈴とハミルトンを倒して来い。倒せなくてもせめて弱らせて来い。

「はい」

「ならこの話はこれでおしまい。タッグマッチがんばってね。せっかく課題を出したんだし」

「あ、あのー！」

「まだ何かある?」

「甲斐田さんは、私達が勝てると思いますか? その、凰さん達に」
「勝てるよ。勝つために必要な事柄を実行できればね。つまり今のままじゃ駄目だったことなんだけど」

一応保険をかけておく。

勝てると言ったのに負けたじゃないかと後で難癖をつけられたら困るからだ。

「分かりました。私のことを仲間だと言ってくれた甲斐田さんを信じます」

「あ、うん」

「今の私には十分過ぎるほどの言葉です。ありがとうございました」

深々と頭を下げて、四十院さんは走って行った。

まあこんなものだろうか。

とは言うものの、鈴は普通に強い。

なんだかんだで鈴はこの一ヶ月訓練を重ねて専用機を自分のものとしつつある。

元々操縦技術に優れているし、一対一ではとても確実に勝てるとは言えない相手だ。

二対二であることや連戦の疲れなど諸条件が揃ってこそ言える話であり、そもそも代表クラスの實力を持っていなければ土俵に乗ることからして厳しい。

その点で言えば俺の見る限り四十院さんはギリギリであり、その頭脳と積極的な性格を加味してようやくやくだ。フル活用しなければ勝つのは難しいだろう。

果たしてこれから一週間程度、準々決勝まで二週間弱でどれだけや

れるだろうか。

まあ、いずれにしてもその先で勝つのは一夏である。

鈴が勝とうが四十院さんが勝とうが、激戦になればなるほどその後午後にある準決勝に響いてくるのだから。

俺としては一夏が漁夫の利を持って行けるようお膳立てを整えるだけである。

「すまない、二人だけで会うのはこれきりにしよう」

「は？」

ボーデヴィツヒがまた意味不明なことを言い始めた。

「私もまさかこのような事態になるとは夢にも思わなかった。いや、君は悪いわけではない。全ては私の浅はかさが招いたことなのだ」

「はあ……」

俯いて右手を前に出し、やたらと芝居がかった動作だ。

例によつて嫌な予感がする。

「運命とはかくも残酷なものなのか。私に関わらなければきつと君は今も安穩としていられただろうに、このようなことになってしまつて本当に申し訳ない」

悲しげに首を振つて、頭を下げてきた。

これはきつと自分の世界に入つていくという状態だ。感情の高ぶつた篠ノ之さんや生徒会長がたまにやる。

「あの一」

「分かっている。君は何を言わずともいい。ただただ、私から謝るのみだ」

「はあ……」

この手の輩は自分の中だけで話を進めてしまうので、本当にやりづら。

どうして俺の周りにはこういう人間が多いのだろう。こうやって俺が相手にしてしまうからだろうか。

「君に対して誠実であるため正直に言おう。私には打算があつた。織

斑一夏君のことを知るため、そして近づくため、彼の親友である君に話しかけた。それは事実だ」

「はあ」

そんなもの『嫁』とか言い出した時点でそうだろうとは思っていた。実に今さらな話であり、俺が何も分かっていないとこいつは考えていたのだろうか。

「軽蔑しているだろうか？ そうだ、私はその程度の俗物的な女であり、君が心に描いた理想の姿とはかけ離れているのだ」

「は？」

もう何を言っているのか分からない。

ボーデヴィツヒが信者脳全開で俗物根性丸出しなことくらいよく分かっているつもりなのだが。

「だから目を覚まして欲しい。私の事など忘れて、自分の幸せとは何か見つめ直すのだ。大丈夫だ、君は一人ではない。すばらしい友人達が君の周りにはいるのだから」

「はあ……」

別に俺は織斑千冬教に入信した覚えはないし、そもそも勧誘されてすらない。

そういう幸せとか宗教が大好きそうな言葉を持つてこられても困る。

「ああそうだな。急に言われても理解が追いつかない、いや頭が理解しようとするのを拒否してしまうだろう。ならば心を鬼にして言わせてもらおう。残念だが、私は君の想いに応えることはできないのだ」

「は……」

もう言葉が出てこない。どこから突っ込んでいいか分からない。いったい何をどうすればそういうことになってしまうのか。

「なぜ知っているのかという顔だな。いくら隠そうとしても、人の心とは表に出てきてしまうものなのだ。そしてそれは当事者だけに限らず、やはり分かる者には分かってしまうのだ」

「あ」

田嶋か。

本当にあの馬鹿は余計なことをしてくれた。

「君としては秘めておきたかった想いかもしれない。だが現実とはいつも残酷なものだ。君の純粋な想いなどあつという間にかき消され、玩具にされてしまう事態がもうすぐそこまで迫っている。だから私はそうなってしまう前に全ての幕を引いてしまうことにした」
「なるほど」

ようやく腑に落ちた。

要するに田嶋というパラッチがいるからさっさと全てを終わらせてしまおうと言いたいのだろう。

清清しいままで到的外れである。

「分かつてくれたか！ いや、私のことを卑怯者と罵ってくれて構わないのだぞ？ ただ私が保身に走っているだけだ。私も知らぬ存ぜぬを通すなど数多くの対策を考えた。だがそれらはどれも君を騙す行為で不誠実であり、この状態を続けていても騒ぎが大きくなるだけだ。だからこそこそうやって全てをなかつたことにするしかないのだ！」

「そんな力説しなくても」

こいつに限っては素でそう考えていそうだから恐ろしい。

普通であれば自意識過剰だとまずは自分を戒めるところなのだが、この天然は自身の考えに微塵も疑問を抱くことをしない。独善的にも程がある。

「ああ、確かに急に言われてすぐ信じろなど無理のある話だろう。だが今後起こる出来事を見てもえればきつとそれは真実だったと気づいてもらえると思う」

「今後ねえ」

「しばらく……そうだな、タッグマッチまでお互い距離を置こう。そうすれば見えてくるものはあるはずだ」

言うだけ言って、気取ったままボーデヴィツヒは去って行った。

廊下に一人俺は取り残される。

とりあえず、田嶋を見つけ出して説教だ。

27. 噂の真相への足がかり

俺もよく口先だけと言われるが、果たしてこいつはどこまでそのようなのだろう。

「だから本当です！ 本当なんですって！」

目の前では田嶋が全力土下座をしながらも言い逃れしようとしている。

見た目的には完全降伏だ。いつものような余裕は微塵もない。

何とかして俺に許してもらおうと必死なように見える。

「そういう地雷踏んだと思つたら最初から謝りますから！ 大ごとにならないうちに、こうやって甲斐田君に土下座しに行きます！」

「へえ、つまりボーデヴィツヒさんはそういう風には見えなかったと？」

「そうです！ 今言つた通り完全に鼻であしらわれて、ああこれはお互い完全に脈ないなと思つたからネタにしたんです！ ガチだったら絶対にそんな真似はしません！」

「ガチねえ」

田嶋の態度は俺に対して完全に恐れ慄いているように見える。いつかの夜竹さんの比ではない。

だが俺としては田嶋が小芝居を好む人間であることを知っている以上、そのまま受け取ることはできない。一世一代の演技かもしれないからだ。

「笑い話で済むと思つたんです！ その転入生の人も見た目とは違つて大人っぽい雰囲気だったし、その場は最後笑つて流してくれたんです！」

「でもさ、実際には僕はとんでもない誤解をされちゃつただけだ」

「そういう反応をするような人だったらすぐ分かります！ この冗談が通じないって。いつもこういうことをしてるからわたしはいつも相手のリアクションはきちんと見てます！ だから冗談の通じな

い鷹月さんとかには行かないでしょ！」

「そんな逆ギレされても困るんだけど。ボーデヴィツヒさんには通じなかったわけだし」

「だからそれはおかしいんです！ そんなマジに受け止めてるようには全然見えなかつたんです！」

だがそれを言ってしまったえば田嶋の目が節穴だったということではない。

そもそもボーデヴィツヒには二面性がある。織斑千冬に憧れてそうなるうと真似している部分と、本人が元から持つ素の部分だ。

やたら固い言い回しを好んで使おうとしたりするが、実際の内面は年齢以上に幼い。クラスメイト連中におもちゃにされても、どう見ても嫌がる様子もなくされるがままになっている。口では大人の態度を取っているような言い方だが、あれは誰が見ても素直に受け入れていた。

その他気を抜いているときは子供のような動きになっているし、周囲から見れば背伸びをしている子供のようには見ええないのだ。

結局田嶋は表面だけを見て安心してしまっていたのだろう。

「ま、どちらにしても事実は一つだ。田嶋さんの冗談をボーデヴィツヒさんは真に受けた。いくらそんなはずはないとか言ってもこれは認めざるをえないことだよな？」

「それは……その……」

「別に僕を貶めようとかじゃなくて軽い気持ちでやったのは分かった。でも、それは思わぬ方向に行ってしまったんだ。これは素直に認めるべきじゃない？」

「……はい……」

それでも不承不承という顔で、田嶋は頷きながらも下を向いた。どうやら本心では納得がいかないらしい。

ということとは田嶋とは別に煽った人間がいるかもしれない。ベツティや三組連中が怪しい。

さっさと事実関係を明らかにしてボーデヴィツヒの誤解を解こう。と、会議室のドアがノックされる。

ガラス越しに見えるのは鷹月さんだ。余計なお世話をしに来たか。仕方ないので鍵を開ける。

「何？」

「話は終わった？ それくらいにしておいてあげなさいよ。見た感じもう十分でしょ？」

「見てたの？」

「十秒くらいはね」

「じゃあなぜここに？ たまたま通りがかったの？」

「私の部屋まで助けを求めて駆け込んできたからよ。何事かと思つたわ」

鷹月さんが振り返ると、その先には愛想笑いを浮かべた夜竹さんがいた。

田嶋の首根っこを掴んで会議室まで連行したのはやり過ぎだったか。

「はあ。夜竹さんが田嶋さんを心配してか」

「甲斐田君、なにとぞ智子にご慈悲を……」

「さゆか！」

「はい小芝居はしない。言っておくけど今はそれ逆効果だからね」

言われた途端二人とも真顔になって背筋を正し、夜竹さんは直立不動、田嶋は床に正座の姿勢を取った。こいつらは本当に分かっているのか。

「確かにこんなんじや甲斐田君が怒るのも無理ないわね。やっぱりまだ続けていいわよ」

「そんな！」

「だいたい分かったからいいか。田嶋さんはもう行っていいよ」

「ありがとうございます！」

俺の気が変わらないうちにという勢いで、田嶋は会議室から脱兎のごとく逃げ出して行った。

入れ替わりに鷹月さんが入ってくる。

「甲斐田君はよく田嶋さんとか夜竹さんを相手にする気になれるわね」

「鷹月さんとは絶対に合わないタイプだよ。鷹月さんが二人と喋ってるの見たことない気がする」

「それがお互いのためでしょ」

「確かに」

鷹月さんは基本誰に対しても物怖じせずに向かっっていくのだが、この二人に対してだけは触れようとしない。リーグマッチの時は必ず俺が鏡さんを挟んでいた。

「今回は夜竹さんが私に助けを求めくらいだから相当な事態かと思っただけだけど、実際どうなの？」

「夜竹さんにそう見えたとしたら、僕に見せしめ的な気持ちがあったからかな？」

「じゃあ夜竹さんの過剰反応でいいの？」

「そうだね。と言うかここところ夜竹さんは僕に対してそんな感じ」

「なんだ、心配して損したわ」

鷹月さんが呆れた顔になってため息を吐く。

まあそうだろう。普段接していない相手が急にやって来たのだから、委員長気質の人間として放っておけないのはよく分かる。

「ということわざわざご苦労さまでした」

「ちなみに、結局何だったわけ？」

「田嶋さんがデマを流して、僕が興味もない人から振られるというよく分からない事態になっちゃっただけ」

「何それ？」

しまった、鷹月さんが食いついてしまった。興味津々な顔で椅子に腰を下ろしてしまった。

そういえばいつもとは違い、最近の鷹月さんはそういう俗っぽい人間になっているのだった。

「そのまんまだよ。田嶋さんが最近よく話をしてるからって僕と三組の転入生のボーデヴィツヒさんの仲を疑って、それをボーデヴィツヒさんが真に受けちゃったって話。本当に迷惑なことしてくれるよ」

「それは……また災難な話ね」

「本当に。だから今田嶋さんを尋問して事実関係を確認しようとしたところ」

「まあ甲斐田君がそのままにしておくわけではないわよね」
「当然」

「でもその転入生もどうなの？ そんな簡単に真に受けちゃうとか。そういう人なの？」

「残念ながらね。はつきり言ってあまり冗談が通じない人で」

「そうなんだ。甲斐田君や織斑君に挨拶してるのを見た感じではそういう人には見えなかったけれど。見た目とは違ってもっと大人な感じ」

結局そういうところで田嶋は勘違いしてしまったのだろう。

とは言えボーデヴィツヒと少し話をしてみればすぐ分かる程度の話ではあるが。

「田嶋さんも同じように考えて冗談で済むと思ってやっちゃったみたい」

「なるほど、そういう話だったわけね」

「うん。後は三組の人達が乗ってるかもしれないのでそのへんを確認だね。それで全部はつきりさせてボーデヴィツヒさんの誤解を解く」
「それなら特に言うことはないわね。もつとややこしいことになってるかと思っただけど」

「むしろそうならないように今動いてると感じる」

放っておけばワイドショーよろしく騒ぎ立てるのがいるのは間違いない。

鈴が俺とボーデヴィツヒのことを気にしていたし、下手をすればクラスの外にまで広がってしまう可能性がある。

「ならいいわ。……じゃあ……ちよつと別の話いい？」

「いいけど何？」

「その……デュノア君のことなんだけど、やっぱり甲斐田君の言った通りだった」

「へえ」

「最近になってデュノア君の周りはかなり落ち着いたと思う。織斑君

みたいにはならなかった」

「なるほど」

やはりデュノアは意識して行動している人間なので、周囲も分かっていたのだろう。

むしろそれでもめげない鷹月さんは根性があるとでも言うべきか。

「本当に玉砕したかどうかまでは分からないけれど、クラスの間みんなの距離が前ほどじゃないのは確かなのよね。みんなデュノア君に対して必要以上に近づかなくなったと言うべきか」

「タッグマッチも近いしそれどころじゃないというのもありそうだけど」

「確かにそれはあるわね。特に甲斐田君と初戦で当たる鏡さんなんて完全に空気変わったもの」

「あー。まあ別に僕自身は何もしてないんだけどね」

「思いつきり煽ってたじゃない」

「そういえばそうだった」

鏡さんはクラスどころではなくなってしまったのかもしれない。少し脅し過ぎたか。

「おかげでスムーズに話を進められるようになったわ。それに最近デュノア君とも普通に会話できるようになったし、四十院さんも甲斐田君が立ち直らせてくれたんでしょ？　ほんと甲斐田君には敵わないわね」

「いや、別に鷹月さんに援護射撃したつもりはないよ」

「さすがにそこまで自惚れてるわけじゃないわ。ただ私にとって都合が良くなっただけの話。甲斐田君がどこまで計算してやってるのは分からないけれど、私はこの状況を利用させてもらってる」

「余裕だね。クラスのみんなはそういう感じじゃないみたいだけど」

以前のように甘く見ているという感じではない。

先を見通せているという状態なのだろうか。

「むしろみんなが甲斐田君のことを怖がり過ぎなのよ。疑心暗鬼になって何されるか分からない的な漠然とした不安を持つてる。きちんと考えれば全然そんなことはないって分かるはずなのにね」

「言うね。僕が三組に肩入れしてるのは事実なんだけど」

「肩入れするにしてもやり方があるわよ。あれだけ大つぴらにやって、しかも三組以外にも手を出しているところを見れば、甲斐田君の本当の目的が三組を使って一組に痛い目を遭わせるなんてそんな単純な話じゃないことくらい分かるわよ」

「なるほど」

俯瞰して全体を見れば、俺が三組のためだけに行動していないことはすぐ分かる。鈴伝手ではあるが実際に二組の連中も疑っていた。

俺としてはそのあたりで疑心暗鬼にしてケツを叩く的な意味合いがあった。動機はなんであれ必死にさせてタッグマッチを例年のような行事にしないために。

「あ、別にだから本当の目的を言えって話じゃないわよ。それは今後を見て自分で分析するから。終わった後答え合わせさせてもらうわ」
「鷹月さんさ、そこまでやるのは手を広げ過ぎじゃない？ それ以前にまず自分のことを心配しないと。まずはパートナーの篠ノ之さんの足を引つ張らないようにするのが最優先なんじゃないの？」

「そのくらい言われなくても分かっているわよ。だいたい甲斐田君はもうそのあたりを読みきっているしよ？ 甲斐田君がわざわざ一組を離れた理由を考えたらすぐ思い当たったわ。今回のタッグマッチはあらゆる面で一組にとって有利過ぎるのよ」

「あ、それか」

ようやく思い至ったか。

客観的な事実を並べると、現状一組の絶対的優位は動かないのだ。俺のようなイレギュラー要素がない限り。

だから俺は誰も計算できない不確定要素として動くしかなかった。そうしなければいずれ一組連中は安穩としてしまう。

「安心して。みんなには言っていないから。甲斐田君がそう考えたように私もその方がいいと思ってる。みんなのためには」

「僕と鷹月さんが同じように考えたかは分からないけどね」

「それも終わった後答え合わせさせてもらうわ。と言っても今まで甲斐田君がヒントを出してくれていたことはさすがに分かっているから」

「ならいいや。じゃあ一組のことはよろしく」

「任せて。今やれる最大限の結果を出してみせるわ」

「いや、そこまで気合入れなくていいんだけど」

そんな自信満々にされると逆に不安になる。あっさり足元を掴われそうで。

まあ悪い方向に行っているわけではないので、そこまでおかしなことにはならないとは思いたい。

食堂に入ろうとしたら鈴に呼び止められた。ハミルトンもいる。

こつちへこいと手招きしている。

「なんだよ鈴？ 話あるなら飯食いながらじゃダメなのか？ 俺腹減って仕方ないんだけど」

「じゃあ一夏達は行っていいわよ」

「鈴？」

「一夏には後で話すわ。智希だけ来なさい」

「なんだそれ？」

「いいから」

「よく分かんねえな。じゃあ智希、先に行ってるぞ」

「分かった」

「シャルル」

「あ、うん」

一夏とデュノアはそのまま食堂に入っていく、俺は鈴達のいる方へと足の向きを変える。

二人の顔色からしてあまり嬉しい話ではなさそう。

「何？」

「あんたさ、ここ最近自分のことでもいろいろ言われてるのは理解してる？」

「いろいろと言われても」

「それこそあることないことよ。智希はここのことこ派手に動いてたでしょ？ そりゃあ智希を知らない人からすれば怪しく見えるわよ」

「ああ、そういう話ね」

「ホントに分かつてる?」

鈴に言われずともいろんな人達から聞いている。

やはりただ男というだけで、このIS学園で俺は目立つのだ。一夏と違つて俺は一人で動いていることが特に最近が多い。もちろん行く先にはそれぞれ相手がいるのだが、用事が別だったりするので移動するときは一入だ。常にクラスの女子に囲まれている一夏とは全く別の光景である。

「陰口くらいなら気にしないよ。別にそんなの今さらだし」

「そうなんだ……」

「ティナ、ちよつと待ってね。あのね智希、分かっているのならもうちよつと自分の行動について考えなさい。このままだと陰口が誹謗中傷になるわよ」

「へえ」

俺としてはむしろよく今まで出てこなかったという話ではあるが。

「もうデマを流す奴まで出てきてるわよ。まあ犯人なんて分かりきつた話だけど」

「デマねえ」

「五組よ五組。あんた派手に喧嘩売つたでしょ。今智希のことが噂になつてるからここぞとばかりに反撃を始めたつて話に決まつてるじゃない」

「そんな簡単に決めつけるのもどうかと思うけど、ちなみにそのデマの内容つて何?」

「それは……」

「デマだつて分かっているんだから別に気にしないよ」

「もう一回言うけどデマだからね? 智希が他クラスの女子を口説こうとしたけど失敗して見事に振られたつて」

本当に申し訳ないがその犯人は一組だ。

「はあ」

「だからデマだつて言ったでしょ。でもほら気にするじゃない」「いやそういうことじゃなくて」

「あたしもティナもそんなバカバカしいデマは気にしないけど、智希のことを知らない奴はそうなのかって思っちゃうでしょ。智希は元々誤解されやすいんだから、もうちょつと自分の行動を省みてね……」

「鈴はほんとに篠ノ之さんと仲良くなったね。今の喋り方は篠ノ之さんの説教そのままだよ」

「嘘っ!? ってごまかすな! あんたもつままないことで誤解されたくはないでしょ!」

「誤解されたくないからさつさと収めようとしたのに、鈴にそんな大声で騒がれたら本当に困る」

「え?」

「昨日の今日で鈴の耳にまで届くかあ……ほんと噂って広がるの早いね」

あるいは新聞部の黛先輩が言っていたことだが、ここにいる人間はニュースに飢えているので何かあるとすぐ飛びつくということなのだろうか。

「智希?」

「当然デマだよ」

「ああよかった。まさか智希に限ってそんなことはないと思ってたけど」

「どういう意味?」

「そのまんまよ。でもまあ知ってるのなら話は早いわ。心当たりがあるのならそういう誤解されるような行動は慎みなさいよ。中学までと違って智希は人に見られているんだから」

普段から人に見られている、という点では鈴もハミルトンも当て嵌まる。留学生であり、国を代表して派遣されている立場だ。

だから一般の生徒よりはそのへんに対して敏感であるのだろう。

「分かった。気をつける」

「言っておいてなんだけどやけに素直ね」

「鈴もティナもそういう立場じゃない。僕よりもよく知っているんだから、それは素直に聞くんよ」

「そ、そう。そうだ、それならあたしとティナが普段の心構えについて教えてあげよつか？ もちろん一夏も呼んでね。夏休み前になつてバタバタするよりも今のうちにやって実践しておいた方がいいでしょ？」

「それは今やるべきことではないなあ。と言うか鈴、来週にはタツグマツチが始まるんだからそんなことしてる場合じゃないんじゃない？ 鈴はリーグマツチに出て顔を知られてるんだし、鈴を倒そうと狙ってる人も多いと思うよ？」

「へえ、例えばセシリアとかね？」

そんなことくらい分かっているとばかりに、鈴はニヤツと笑った。

「オルコットさんもきつとそうだろうね」

「セシリアがリベンジを狙ってることくらい百も承知よ。だけどそんなんじやセシリアはあたしには勝てない。返り討ちにしてやるわ」

「大した自信だね」

「あたしを目標にする程度の奴はあたしには勝てないわ。あたしは今までずっとそんな連中を全部なぎ倒してここまで来たんだし、そんな奴らに対してどうすればいいかはよく分かっているんだから」

「なるほど。じゃあ鈴は一夏にリベンジしようって気持ちはないんだ？」

「リベンジとかそういうつままない気持ちはないわね。次勝つたからと言って以前負けた事実がなくなるわけじゃないし。あたしは一番になりたいのであって、誰か特定の人間に勝ちたいわけじゃないのよ。もちろん優勝するためには一夏が最大の障害だつてのは分かっているけどね」

鈴の持論なのだろう。いつもより話し方に熱が入っていた。

「智希、あたしも負けたくないから」

「ティナ？」

「元々勝ちたいと思ってた相手だし、絶対に勝ってみせる。鈴の足手まといになんかならないから」

「大丈夫よティナ。ティナなら絶対にやれる！」

これは意外だった。ハミルトンもオルコットに対して含むものが

あるのか。

留学生用の入学試験の時にでも負けたのだろうか。

「と言っても一回戦からだし、先は長いよ。オルコットさんに当たるまで四回勝たないといけないわけだし、足下を掬われないようにね」
「何言ってるの。あたし達は優勝を目指してるのよ。智希のことだからきつと体力的な話を言いたいんでしようけど、それくらいリーグマッチの経験を生かして普通に勝ち抜いてみせるわ」

「むしろ毎日試合をしてた方が試合勘が研ぎ澄まされていくと思うし」

「分かっているのならいいよ。がんばって優勝目指して」

「うんっ！」

「ねえ智希、ちなみにあんたはどう思ってるの？ セシリア達はあたとティナに勝てると思ってる？」

口では強気ながら不安もあるのだろうか。鈴は意外な質問を投げてきた。

「普通にやったら鈴とティナの勝ちだろうね」

「じゃあそこに智希が手を貸したら」

「どういう意味？」

「そのまんまよ。あんたの悪知恵がセシリアに追加されたらって話よ」

「ああ、そういうことね。心配しなくてもオルコットさんにこうやったら鈴に勝てるよとか言ってるし、言うつもりもないから」

全くもって嘘は言っていない。

俺はオルコットには何も言っていない。

四十院さんに対しても具体的にどうのとは言っていない。ただヒントを出したただけだ。

「何よ、つまりあんたが口出しすればあたし達には勝てるよでも言いたいの？」

「当然」

「言い切るわね」

「もちろん今の鈴ならという限定付きではあるけど」

「それでも大した自信じゃない。言っておくけどリーグマッチの時と一緒にしないでよ。あたしもあれから訓練を重ねてきたんだからね」
「それくらい知ってるよ。だから今の鈴って言ったわけなんだし、タッグマッチに限っての話」

「ホントに？」

「まあまあ鈴、きつと智希の中にはもう作戦があるんだよ。でもそれをあの人達に言うようなことはしないって言ってるんだから大丈夫」
これくらいにしておこうという感じでハミルトンが入ってきた。

なるほど二人にとっては俺が懸念事項の一つか。

リーグマッチで一夏を支援したように、俺が一組連中に対して口出しするのではないか、という不安だ。

俺が三組に手を貸しているのは二人も知っているし、たかだか一週間で何ができるという話だが、最低限確認くらいはしておきたいのだろう。

「今回僕は高みの見物をさせてもらうつもりだから、そういう心配をするのなら二人が決勝まで上がってからの話。はつきり言うけど、決勝以外は僕が口出ししたところで三組の人達じゃ鈴とティナに勝つのはまず無理だし」

「あら、あたし達に勝てる作戦があるんじゃないの？」

「鈴、そういうことじゃないよ。決勝に上がった時が勝負だって智希は言いたい」

「ティナ？」

「そうだよね智希？ あたし達が気をつけるべきは三組の代表の人達だってことなんだよね？」

「言い方悪かったか。その通り、手を貸している以上三組のベツティさん達には言うよってこと。僕的に三組で鈴とティナに勝てる可能性があるのはその二人だけで、当たるとしたら決勝だから」

「ふうん、そういうこと」

もちろん三組の他の連中にも一応言うつもりではあるが、おそらく遂行できないだろう。最低限正面から鈴にぶつかって打ち合えるだけの技量は必要だ。だが見る限りベツティと佐藤以外の面々は策以

前に正面から力で押し切られてしまう。

三組には初戦で鈴達と当たってしまった不運な生徒もいるし、現状ではどこまで粘れるか程度でしかないのだ。

「と言ってもそういうのは準々決勝でオルコットさん、準決勝で一夏に勝つてからの話だし、僕の見立てじゃ二人はオルコットさんには勝つても一夏に勝てるかなあと感じるんだけどね」

「言われなくても今は学年で一夏が一番強いことくらい分かってるわよ」

「先に言っておくとシャルルも全然穴にはならないからね。一夏と同等と考えておいた方がいいよ」

「それも知ってるわ。油断して甘く見てやられるとかありえないから」

さすがに普段から一夏達と訓練していれば、デユノアの技量もある程度把握しているか。

「余計なお世話だったね。じゃあ僕も鈴に決勝は楽だったとか言われないように気をつけよう」

「あたしも決勝で智希が何をしてくるか楽しみにしておくわ」

「いやいや、やるのはベッティさん達であって僕じゃないよ」

「あたしの中じゃ実質智希よ。どっちもあたしが勝った相手だし後ろに智希がいなきや恐れるほどでもないんだから」

また鈴も舐めた言い方だが、実際リーグマッチではベッティも佐藤も鈴に正面から力負けしている。

単独なら次やつても負けない自信はあるのだろう。

「二人にはそう伝えておくよ」

「決勝を楽しみにしてるから首洗って待ってなさいとも言っておいて」

「また挑発するような真似を」

もつとも、それ以前にベッティと佐藤は篠ノ之さんや更識妹を破らなければならぬわけで、それはそれで相当に厳しい話ではあるのだけれど。

28. 噂の真相へと至る過程

説明するとベッティは首を傾げた。

「いや？ そんな話初めて聞いた」

三組にまでは届いていなかったのか。

「甲斐田君がラウラにねえ……。ちよつとそれは想像の範囲外だわ。私だけじゃなくてクラスみんなそうだと思うわよ」

「クラスのみんなとは言い切るね」

「だって甲斐田君は年上好きだし、さすがにラウラはいろんな意味で遠過ぎるわよ」

「ちよつと待つて。その年上好きが確定事項になつてるのはおかしい」

「あ、ごめん自覚なしだったのね。気にしないで。こつちの話だから」「いやいや、そういうことじゃなくて」

最近俺の周りで小芝居を始める人間が多くなってきたような気がする。ベッティまでも俺で遊ぼうとしている。

ボーデヴィツヒにやるのは分かるが俺は違うだろう。

「まあ冗談はさておき、甲斐田君がラウラの相手をしてるのは、子守みたいなものよね。ラウラが織斑先生大好きなのはみんな知ってるし、甲斐田君に話をせがんでるのを見るとよくて兄と妹くらい。それ以上はイメージできないわね」

「なるほど」

「甲斐田君の態度を見てもあまり乗り気じゃないのはよく分かるし、妄想するには少し材料が足りないかな？」

「妄想つて……」

「あ、もちろん新たなネタを提供してくれたのはありがたいことだし、新しい風を吹かせてくれたことに感謝ね」

「あのさ、さつきから材料とかネタとか不穏な単語が飛び交ってるんだけど。新しい風つて何？」

「三角関係の話にするとか意外とおもしろいかもしれないわね……」

「はあ？」

俺の不安を煽って何がしたいのか。

最大限譲歩して俺に慣れてきたという事なのかかもしれないが、妄想の材料など俺としては全力でご免被りたいのだが。

「冗談冗談。でもそういうわけだからうちのクラスが絡んでるってことはないわ。全く噂にもなってないし、当事者以外はまだ一組の中だけでの話ね」

「なるほど。じゃあ鈴も一組で聞いただけなのか。それはよかった」
「後はラウラときちんと話をすればいいんじゃない？」

「そうだね。あーでも何て言おう」

「それはもちろんばっさりと。ラウラのいい顔が見れそうで楽しみだわ」

「うわあ……」

「あの一、ちよつといいですか？」

晴れてボーデヴィツヒの黒歴史誕生かと思ったら、横から声がかかった。

見れば五組から逃げてきた人が手を上げている。確か菅原さんだったか。

「何？」

「今話を聞いて思ったんですけど、それうちのクラスの杉山さん達の仕業じゃないでしょうか？」

「どういうこと？」

「聞いてていかにも杉山さんのやりそうな誹謗中傷だと思ったので。佐藤さん？」

「ああ、あたしもそれは思った。あのバカなら喜んでやりそうだ」

「それちよつと穏やかな話じゃないわね。佐藤、それは甲斐田君に対する嫌がらせ？」

「そういうことだ」

確かに奴はこのところ俺に一方的にやられているので、機会があれば何かをしようとしてもおかしくない。タッグマッチでは俺と決勝まで当たらないのだ。俺を直接ぶちのめす機会はないに等しい。

自分とはもかく俺が決勝まで上がってくるとはさすがに考えていないだろうし。だから何かやるとすればこういう間接的なことしかできない。

「組み合わせが決まった途端にそういう話が出るって変だと思いませんか？ 明らかに甲斐田君が狙い撃ちされてるといふか、そもそも二人はペアを組んでるんだから一緒にいておかしいこともないわけですし」

「まあ変と言われれば変ではあるわね」

「それに知ってる人からすればおかしい話だそうじゃないですか。私はそうなんだって思いましたけど、それはお二人のことを知らないからなわけで、よく知らないからこそミスマッチなボーデヴィツヒさんが対象になってしまったんじゃないかと」

「そうだな。本気でゴシップを狙うならボーデヴィツヒではなく一組の人間をターゲットにした方が信憑性はある」

「二人とも考え過ぎじゃない？ 一組の子がラウラをからかってラウラが本気にしちやっただけよ」

なるほど五組の二人にとってはそうである方がいいのか。

本当に田嶋とは別に杉山がボーデヴィツヒを煽っていたとしても、俺に対してそんな事実を認めるわけがない。だから疑いがかかるだけで十分なのだ。クラス内での五組代表杉山への不審感がますます増大するのだから。

とはいえ絶対にはと言い切れる話でもない。確かに杉山ならいかにもやりそうな嫌がらせではある。

「甲斐田、どう思う？」

「まあそんなのは本人に聞くのが一番だよな」

「杉山にか？ まさかそれは認めるわけないだろう」

「そうじゃないよ。ボーデヴィツヒさん。僕について誰から聞いたかって話だよ。一組の田嶋さんだけならほんとに何でもない話で、それ以外に誰かいたら煽ってる人がいるよねってこと」

「言われてみればそれだけのことね。ラウラ！」

ベツティが声を上げてボーデヴィツヒを呼ぶ。

当のボーデヴィツヒは自分の席に座っていたが、三組の生徒達に囲まれ髪をああでもないこうでもないといじられて遊ばれている。

最近俺の側にいたから三組連中が寄ってこなかっただけで、俺から離れたら即そうなるのは自明の理である。

「どうした?」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど……いいわ、そつちに行く」「そうか」

ボーデヴィツヒの銀髪は自身の腰まで届くほどの長さなためか、遊ぶにはもつてこいらしい。今は三つ編みにされていて、はつきり言つて高校生どころか中学生に見えるかも怪しい姿だ。その眼帯も今はかえつて子供らしく見えてしまう。

「ボーデヴィツヒさん」

「や、やあ甲斐田智希君! きよ、今日もいい天気だな!」

「普通に雨降つてるけど」

「わ、私にとってはいい天気なのだ!」

完全に挙動不審である。挙げた手の動きもカクカクしていてロボットのようだ。

前回カツコつけておきながら即逃げたのは単に耐えられなかっただけか。

「それは失礼。真面目な話なんだけど、どうも僕を中傷する噂が流れてるみたいで」

「それは本当か?」

よしボーデヴィツヒが切り替えた。真剣な顔つきになっている。

あえて深刻そうない回しをして正解だった。

「うん。なんか僕が見境なく女子を声をかけては口説いてるような話になつてて」

「何だと!」

「甲斐田君?」

「まあまあ、ちよつと聞いてて。だからボーデヴィツヒさんに聞きたいんだけど、ボーデヴィツヒさんが僕について聞いた噂ってどういう感じだった? それとも特に何も聞いてない?」

全く見当違いの話を出したのはボーデヴィツヒ自身の口から全てを言わせるためだ。既に俺は田嶋から事情聴取を終えている。だからボーデヴィツヒの言と田嶋の自白内容が一致すれば何も問題はなはずだ。田嶋はボーデヴィツヒに対して俺との関係について聞いただけである。

逆に言えばここで俺の知らない事柄が出てこられると困るわけだが。

「それは……まさに君が口にした内容そのままだ……」

「え？」

「まさか……いや、よくよく考えればその通りだ。確かにこんな話など誹謗中傷以外の何物でもない。甲斐田智希君、本当に申し訳なかった！」

机に両手をつけて、ボーデヴィツヒは深々と頭を下げる。

瓢箪から駒が出てしまった。

「ちよ、ちよつとラウラ、どういうこと？」

「どうもこうもない。私は甲斐田智希君への誹謗中傷を安易に信じてしまったという話だ。本当にすまなかった！」

「うーん」

「次は自分がターゲットになっていると言われ気が動転してしまっていた。本当に申し訳ない。私にはそのような経験が微塵もないので完全に冷静さを失っていた」

今回に限らずこれまでの行動を見ても、ボーデヴィツヒの行動が常にオーバーアクション過ぎるのは疑いようもない。

いちいち振り回され過ぎである。誰かれ構わずコロコロと素直に信じてはこうやっていいように動かされてしまうだろう。

「参ったな……」

「君がジ、ジゴロであるという話を聞いていて遂に私にまで来たのかと……」

「ラウラはジゴロなんて単語よく知ってたわね。日本じゃヒモって言うんだっけ？」

「甲斐田智希君の普段の行動を考えると至極もつとも思えてしまい

……」

「ああ、なるほど」

「はあ!？」

「だって甲斐田君って良くも悪くも普通の男子とは違うから。何よりこうやって女の子に囲まれて平気な男子はまず女好きだっていうのが定説だからね。私の国にはけっこういるのよ」

「何の定説!？」

確かに男は少数派なため基本固まって行動するものだが、俺や一夏の場合はそもそも周りに男がいないのだからどうしようもない。

以前鷹月さんに言った通り、このIS学園はかえって安全なので俺も一人で行動できているだけなのだ。

「別に甲斐田君がそうだって言ってるわけじゃなくて、一般的な話よ。甲斐田君のことを何も知らない人から見れば、甲斐田君はそういう風に見えてもおかしくないから」

「なんてことだ……」

「真相は元々ラウラが甲斐田君の噂を聞いてたところに一組の子が止めを刺したって感じかな? そこまで根が深いことではなさそうね」

「うーん……ボーデヴィツヒさん。ちなみのその噂ってどのへんから聞いたの?」

「え? いや、それは……」

「噂だからまた聞きとか耳にした程度で誰だかまでは分からないか」

転入したばかりのボーデヴィツヒでは人の顔もほとんど覚えられていないだろう。加えて本人が簡単に信じてしまう人間であるし噂をたどっていくのも厳しそうだ。

「す、すまない。このクラスの生徒でないことは確かなのだが……」

「あ、でもそうなると五組の作業ってことも普通にありえるわね。噂話をしてる振りして通りがかったラウラに聞かせてやるだけでいいわけだし」

「その場合は明確に甲斐田を中傷していることになるな」

「だったらタッグマッチどうのというよりは地道なネガティブキャンペーンということじゃないでしょうか。何も知らないボーデヴィツ

ヒさんに変な先入観を植え付ける的な」

五組の二人まで入ってきた。

だがそういう風に疑いだしてしまふときりがない。

俺からすれば本気で明らかにしようとするのなら、まずこの場にいる五組の連中を疑うことから始めなければならぬ。佐藤と菅原さんが組んで杉山を追い落とすために俺を引っ張り出そうとしているとか、そもそも菅原さんが杉山のスパイだとか、ただ疑うだけならいくらでもできる。可能性だけなら極端な話三年の先輩達がおもしろがつてやったことすらあり得てしまう。

しかしながら人を疑う行為は諸刃の剣だ。真実と引き換えに相手から不信という空気が返ってくる。田嶋のように一組連中相手なら俺も強気に出るが、ここではそうはいかない。まだ俺はここで何も成果を出していないのだ。少なくとも疑いを表に出してはいけない。

助けを求めてやってきた五組の連中を何も言わずに受け入れたのはそういう意味合いもある。

結論。やはり今この場で誰かを疑って見せるのは得策ではない。

「よし、やめよう」

「甲斐田君？」

「むやみに犯人探しするだけ時間の無駄だ。僕らにそんな暇はない」「まあな」

「確かにタッグマッチの本番まで一週間を切っているのだからな。うん、甲斐田智希君が正しい」

「案外それが目的なのかもしれないですね。そうやって小細工してタッグマッチに集中させないの的な」

誰か反論してくるかと思っただが、全員あっさり頷いた。

表面的には俺を尊重する姿勢があるようだ。あるいはその方がいいのか。

「でも一応聞いておくけど、甲斐田君自身はそれでいいの？ 甲斐田君にとって不本意な噂が流されたか流されようとしてるわけなんだけど」

「そのへんはある程度仕方ないと思ってる。入学前のもつと言われる

と思つてたし、正直に言えば現状は十分恵まれてるよ」

「これで恵まれてるか……」

「ま、まあ甲斐田はこの程度で堪えるような玉でもないしな」

「強いですね」

本音ではあるが少しやり過ぎたかもしれない。

今しがた不信について考えてしまったので、微塵も周囲を疑っていないように見せるためだったのだが。

「じゃあ、誤解も解けたことだしこのへんにしておこうか。ボーデヴィツヒさん、全然そういうのつてないから今まで通りでお願いね」
「本当に申し訳なかった」

「うん。まあ不運なことが重なつたと思つて流して。さてと、真面目に取り組むべき話題に話を戻そうか。ああそうだ、ベッティさんと佐藤さんに鈴から言付けをもらつて……」

流れでボーデヴィツヒの黒歴史を有耶無耶にして、俺はタツグマツチに話題を切り替えた。

IS学園の寮には宿直室があり、教職員が交代で夜に詰めている。まあIS学園自体が隔離された空間なので、外からの危険などないし、警備の必要があるわけではない。単純に不測の事態があつた時の連絡役だ。生徒達は何かあつたときはここに駆け込めという話である。

ただ、だからと言つて生徒達の相談を受け付けたりするわけではない。勉強の質問に行つても明日にしろと跳ね返されてしまうらしい。あくまで緊急の事態に備える業務であつて、それ以上のことはしないという話である。

それなのに、俺は宿直室に呼ばれていた。

「説教部屋じゃないんですね」

「そうするとお前達は異常に怯えるからな。おかげでもうあの場所は説教部屋としてしか使えなくなつてしまつた」

「きつと誰かがやり過ぎたんでしょうね」

俺を呼んだのはもちろん織斑先生である。

だが俺の部屋に遊びに来ていた一夏がその後説教部屋に連行されるものと哀れんでいたのので、呼び出し場所を宿直室にする意味はきつとなかったように思う。

「さあな。それでわざわざ来てもらったことについてだが」

「あれ、説教部屋で話すんじゃないんですか？」

「智希、今はやめておこう。全く個人的な話だ」

「はあ」

名前呼びということは今では教師としてではないと。

いつの間にか俺と千冬さんの間ではお互いの呼び方でモードを切り替えることになってしまった。

こんなところで親友は似てくるのか。

「話と言うのはラウラ・ボーデヴィツヒのことだ。お前は奴とペアを組むのだな」

「まあ、成り行きで」

「そうか。これは私が個人的に思っていることで、別に強制するような話では全くないのだが、できればタッグマッチが終わった後も奴とは友人関係を続けて欲しい」

「それは別に教師としてでもいいんじゃないですか？」

「いや、これは私個人の希望だ。なぜなら私はラウラを後見しており、ラウラは私から見て智希と同じ立ち位置にいる。であればこそだ」

わざわざ日本にまで呼んだことだし、VTシステムだけの関係だけではないのか。

「それは家族とかいないってことでもいいんですか？」

「そうだ。ラウラは天涯孤独であるため、私以外に頼れる人間がいない。とは言え無理をしてこちらまで呼ぶつもりはなかったのだが、今回巻き込まれてしまった形だ」

わざわざ呼んだわけではない。

巻き込まれた。誰に？ もちろんドイツという国に。

「ボーデヴィツヒさんが向こうでうまく行っていなかったとかそういう話ではないんですね？」

「報告を見る限りでは特に問題なさそうだった。もちろん仔細までは分からないが。だが私にとって丁度いいと言うのも事実だった。私の目が届いてかつ安全な場所はここしかないのだからな」

「なんか物騒な話になってきましたね」

きつとVTシステムのことを言っているのだろう。ドイツにいると危険だと言うのはもちろん博士の存在があるからだ。

単純に博士が気づいていなかったので放置されていただけだが、知らない側からしてみたら不安で仕方なくなるのも分からなくはない。

これまで博士が問答無用で関係者を潰してきたことを考えれば、千冬さんとしてもボーデヴィツヒを守るためにはIS学園にいてくれた方が都合がいいという話か。

リーグマツチ後のゴーレムを見て、沈黙を続けていた博士がついに動き出してしまったと考えただろうから。

「もちろん厄介事など御免だと言うのであればそれはそれで構わない。だがお前も分かっているだろうが、先方は智希の感情を気にして動いてくれるわけではないのだ。現に向こうの方から寄って来ただろう?」

「確かに僕もフランスとドイツが纏めてやって来て何も無いとは思いませんでしたけど」

「そういう話だ。であればついでにラウラの面倒を見てくれないかという個人的な願いだ」

「と言っても今ボーデヴィツヒさんは向こう側なんじゃ?」

「何、それは簡単な話だ。智希が鈴音に対してやったようにすればいい。そうすればラウラも板挟みにならずに済むし、全てが丸く収まる」

「また難題を吹っかけてきた」

「既にお前が自分の力でやってのけたことだ。不可能な話では全くない」

要するにドイツの企みを叩き潰した上で、ボーデヴィツヒに手を差し伸べてドイツとのパイプ役にしろと。

他の国なら知るかと言いたいが、生憎とドイツは第四の男性IS操

縦者がいる国だ。今後関わらずに済むということはないのだろう。

であれば向こうからちよつかいをかけてきたこの状況を逆手に取り、自分にとって有利な方向に持つていけという話か。

「ちなみに、千冬さんはどこまで関わってるんですか？」

「完全に蚊帳の外に置かれている。主導しているのはどうやらＩＳ委員会のようだ。おかげで情報が全く降りてこず裏で何を企んでいるか分からない。何をしたいかは明確だが何のためにやっているかが見えない」

「何をしたいかというのは僕と一夏のデータ収集でいいんですよね？」

「行動からしてそれ以外にない」

「千冬さんの力じゃどうにかできないんですか？」

「この件は日本が完全に外されている。ＩＳ委員会、フランス、ドイツが共謀しているのは間違いないところなのだが」

「千冬さん今は日本に所属でしたっけ？」

「そうだ。通常こういう場合はどこからリークがあるのだが、今回は全くない。ガードが堅すぎてどの国も掴めていないのが現状だ」

「千冬さんにできないことを学生の僕にやれってそれ無理じゃありません？」

大人ができないことを一学生にやらせようとか無茶振りにも程がある。

四十院母だつてさすがにそこまではしないだろう。

「別に私と同じことをやれというわけではない。智希ができることやればいい話で、それにお前の相手も同じ学生だ。ラウラやデユノアでは正直なところお前の相手にはならないだろう？」

「シャルル？」

「どうの昔にお前も気づいているだろうが、実に馬鹿馬鹿しい行為をしてくれている。呆れて相手をする気にもなれないのだろうが、さつさと楽にしてやれ」

馬鹿馬鹿しいと言えばその通りだ。素直に堂々と正面から俺と一夏に頼めばいいのに、あくまでコソコソと裏でやっているのだから。

なぜそこまで執拗に隠して一方的な関係にしようとするのか。

「うーん、どうして二国ともそんなに隠したがってるんでしょうね？」
「それだけの理由があるのだろうか。一般的によく言われるのは実は男性IS操縦者などいないという話だが」

「千冬さんそれ信じてます？」

「今回の件で本当にそうかもしれないと感じられる程度にはな。さすがに一国だけではなく二国も同じ行為をしているとは思いたくないが」

「まあそうですね」

「国際的地位の低下したドイツはともかく、フランスは男性でも起動できるISの開発を行っている。わざわざそのような虚偽を発表する必要などないのだからな」

「そういえばこの前外出した時に面会したフランスの黒木さんがその技術者だった。当然千冬さんも知ってはいるか。」

「いつそもう千冬さんがボーデヴィツヒさん達に尋問すれば手っ取り早いのでは？」

「尋問とか言うな。その辺りは事前に根回しされていて、IS委員会直々に名指しで私の干渉を禁止してきている。当然ながら当の二人も警戒しているし、私がおかを言えばすぐ二人は報告を上げるだろう。ラウラも例外ではなく、わざわざ私に釘を差してきた。ここにいたいから何も聞かないでくれと」

「つまり千冬さんが直接やれないから僕にやれと」

ボーデヴィツヒが事実上人質なので動けない状態か。

「前々から俺を引き込もうとしている時点で自分で動けない何かがあるのだろうかとは思っていた。」

博士の言った通り、日本という国に、教師という立場に縛られてもどかしい思いをしているようだ。

「いくら世界一の実力を持つとうとIS学園の機密に関わつていようと、今の千冬さんの公的な立場はあくまで一介の教師でしかない。」

「別に害もないと思うのであれば放っておけばいい。向こうも隠したがつているのだからな。ただ今後先方の思うように行かなければ次

第にエスカレートして行くのは目に見えている」

「結局はそれなんですよね。今のところ貧乏くじを引きそうなのは倉持技研だけですし」

別に勝手にデータを収集するくらいなら好きにやればいい。フランスやドイツに限らずイギリスや中国もきつとやっているのだから。それに俺はIS委員会の管轄であり、今も学者連中は俺に対して好き勝手してくれている。

だから割りを食うのは一方的にデータを持っていかれる倉持技研である。と言ってもある程度は覚悟しているだろうし、さすがに肝心な部分は隠しているに違いない。

問題は、今後データを取るためにわざわざ俺や一夏に干渉してくることである。

「倉持技研も薄々は勘付いているようだ。元々情報に対しては敏感であるからな」

「本当に僕らのデータを取りまくって何がしたいんでしょうね？」

「特に最近は何か焦りを感じる。智希、お前もIS委員会の人間と接していてそれは感じないか？」

「ああ、言われてみれば。確かに拘束時間が長くなってきましたね。でもあの人達って千冬さんの管轄じゃなかったんですか？」

「そうなるはずだったが今はもう完全に切り離されてしまった。今の私は技術者集団にはそこまで影響を及ぼせないのだ。それに元々がパイロットだからな」

ブリュンヒルデ織斑千冬と云えどそういうのはあるのか。

世間的な話であればその影響力は絶大で、世界に並ぶ者などいないのだけれど。

「とりあえず言いたいことは分かりました」

「基本的には自分の心配をしてくれればいい。私個人の願いとしてラウラに目をかけてやって欲しいだけだ。当事者として巻き込まれてはいるがあいつを一人にさせたくないのにな」

「少なくともそれは大丈夫だと思いますよ。ちゃんと三組には馴染んでいます」

「そうか。それはよかった」

「専用機までもらってるくらいですし、十分優秀だから僕とか関係なく大丈夫だと思います」

「ほう。それはお前の目から見てもそう思えるか？」

「普通に使いこなしてますよね。というか千冬さんが鍛えたんでしょ？」

「いや、ラウラに専用機が貸与されたのは私が抜けてからの話だ。大方私とのパイプを期待されての話だろう」

「はあ」

専用機の話振ってみたがさすがにVTシステムについて漏らすことはないか。

国際条約において名指しで禁止されているものだし、今現在この世に存在しているはずがない代物である。普通は口が裂けても言えない。

そして俺の方からも口にはできない。知識として知っているだけならともかく、ボーデヴィツヒの機体に搭載されていることまで看破してしまっているのだから、なぜそれが分かるという話になってしまう。

もちろん最悪の場合『あれ』を使うので仕方ないが、それは最後の手段だ。よほどのことがない限りたとえ暴走したとしても千冬さんが対処してくれるのは間違いない。

「それで、どうする？」

「これからタッグマッチが始まるのでひとまずは様子見ですね。どのみち向こうも余裕はないでしょうし」

「そうか。そちらは智希の思い通りに進んでいるようだな」

「別に悪いことは何もしてないですよ？」

「相変わらずその方面には悪知恵を働かせるものだ」

「やだなあ。学年みんなやる気になっていいことづくめじゃないですか。その方が負けた時にいい経験として受け止められますよ」

「そこまで理解してやっているのであればもう何も言わん。できればお前もそうであって欲しかったのだがな」

「それは僕に望むことではないですね」

ボーデヴィツヒ個人の問題とフランスドイツの問題は完全に別の話であることが分かった。

おかげで俺も別々に考えられる。さしあたってはボーデヴィツヒについて心配する必要がなくなった。

ならば今回のタッグマッチはボーデヴィツヒを引き込む機会として使えるだろう。千冬さんの紐がついているのであれば鈴の時のようにドイツとのコネクションにするのも悪くない。

「全く。だが今言った通り相手は智希の都合に合わせて動いてくれるわけではないのだからな」

「それくらい分かっています」

「ラウラも目を離すとすぐに走って行ってしまおう。智希と違って素直を通り越して馬鹿正直であるから騙されてしまわないか心配だ」

「あ」

「どうした？」

そういえばそうだった。その可能性を見落としていた。

「いや、ちよつと引つかかかってた問題の答えが見えたもので」

「ふむ。ラウラ絡みか」

「確かに千冬さんの心配はもつともだと思うので、僕もちゃんと口にしておこうと思います」

「また何か悪だくみを思いついたようだな」

「やだなあ。目をかけてやってくれと言ったのは千冬さんの方じゃないですか」

自分が思いつくことくらい他人にも浮かぶのであって、自分だけにはあり得ない。

それはリーグマッチで身をもって学んだ事実だった。

29. 真相からタツグマッチへ

教室の扉を開けると、中にはデュノア一人だけだった。

「智希」

「あれ、シャルル一人？ 一夏は？」

「一夏がクラスの女の子達にすごい勢いで連れて行かれちゃって……今どうしようかなって思ってたところなんだ」

「リアーデさん達か。最近ほんと遠慮しなくなったなあ」

「あはは、あれは最近のことなんだ」

「前は相川さんが抑えててくれたんだけど、今は完全に解き放たれた獣みたいになってる。別にやめろとは言わないけどもうちよつと重しをやってくれないかなあ」

笑いながらデュノアは自分の席に腰を下ろした。攫われた一夏を追いかけて行くわけでもなく俺の話に付き合ってくれるらしい。

「ああ、相川さんと言えばみんな変わったって言うてるね。僕が来た時には今の感じだったから、そうなんだってくらいだけど」

「話を聞いているのならその通りだよ。変わったと言うよりは元々そうだったと言う方が正しいんじゃないかな」

「なるほど、そうかもね」

「ま、人の話とか噂なんて話半分以下だから、シャルルも鵜呑みにしないで自分の目で見たものを信じた方がいいよ」

「そうだね」

「……」

「智希？」

俺はデュノアの隣り、一夏の席に座って顔を机に伏せる。

デュノアが心配そうに声をかけてきた。

「ほんと参るよなあ。好き放題言ってくれちゃってさ」

「どうしたの智希？ 誰かに何か言われた？」

「まあね……」

「やっぱり男子に対してそういうのってあるんだね。僕はまだ直接聞

いたことはないけど」

「シャルルもそのうち耳にすると思うよ。あることないこと」

「やっぱりそうだよね……」

デュノアが俯く。

転入以後デュノアはほぼ常に一夏と行動を共にしている。そして一夏の周りにはクラスメイト連中が誰かしらいる。だから悪意をぶつけられることなどまずない。

個人で突っ込んでくるなど不可能だし、集団なら五組くらいしかないが、五組は俺が喧嘩を売ってしまった結果冷戦状態になっているので話しかけてくるようなこともない。

通りすがりで言うにはデュノア側が大集団なのでそもそも届かない。一人で行動し続けた結果今では陰口など普通にある俺とは雲泥の差である。

「気にしたって仕方のないものだととは分かってるつもりだけどね……」

「うん……」

「……」

「ねえ智希」

「何？」

「その、いったい何を言われたの？」

「別に聞いてもおもしろい話じゃないよ」

「それはきつとそうなんだだろうけど、それでもそのまま溜め込んでしまふよりはいいと思うんだ。言葉にしてみました方が楽になるってあると思うよ」

「それはまあ……」

「あ、もちろんどうしても嫌だって言うのなら無理強いはしないけど」

この気配りの仕方はさすがだ。

俺の出す構ってオーラを見逃さずに流さずにきちんと対応しようとしている。

「と言ってもシャルルに限らず一組の人ならもう誰でも知ってる話だけど 最近僕に関して流れてる噂のこと。まったく失礼にも程があ

る話だよ」

「えっ？ それは……」

「僕が誰それに振られましたくらいならまだ勘違いされたんだなで済むけど、言うに事欠いて僕が次々と女子を口説いて回ってるからね。完全に悪意ありきで話が作られてるよ」

「まさか……」

「まあ噂の内容からして出どころは五組あたりなんだろうけどさ、シャルルはその話聞いた時どう思った？ あり得ないよね？」

「う、うん……」

「でも信じたり疑ったりしてしまう人はいるわけで、おかげで三組の人達が僕を変に警戒するようになってしまったんだよね。次は自分じゃないか的な感じ。このままじゃタッグマッチどころじゃないよ」

「いつの間にかそんなことになってるんだ……」

呆然とデュノアが呟く。

「そういうわけで早いとこどうにかしなきゃいけないんだけど、おかしなことがあるんだよ。五組から出た話にしては一組も三組もみんな信じ過ぎだと言うのがあって、普通五組から聞いた話ならみんなすぐには信じたりしないはずなんだ。一組も三組も五組とは仲悪いからね」

「なるほど」

「おそらくその噂を広めようとしてる人がいる。だからまずはその人を探し出したい。と言っても三組の方は目星がついてるけど」

「えっ？」

「実は今三組には五組から逃げてきたとか言う人達がいるんだよ。だから単純に考えてその人達の誰かだろうね。そもそも今の三組には他のクラスとつるんで何かをするような人はいないから。問題は一組だ」

「うん」

真剣な表情になってデュノアは頷いた。

「とりあえず怪しそうな人から尋問していこうかと思ってて」

「ちよ、ちよっと待って。尋問って……」

「ああ、一組の人達には強く言った方がボロを出すから。例えば後ろめたさがあれば関り合いを消そうとしてそんな噂なんて知らないとか言っちゃうんだ。でもちよつと周囲を当たれば嘘ついたってすぐ分かる。シャルルもクラスの人達から僕のこといろいろ聞いてるだろうけど、僕が強い言い方をするのはだいたいそういうとき」

「そうだったんだ……」

「鏡さんあたりかな。普通に言っただし。シャルルはわりと鏡さんと話してる気がするけど僕の噂について何か聞いてない？」

「いや……特には聞いてないかな。それに話すと言っても最近はどうでもないよ」

「それは残念。あ、そうだ。そういえば僕の噂って一組ではどう言われている？ シャルルは何て聞いた？」

「えっ？」

「三組とは噂の形が変わってるかとも思っただけ。聞いたんでしょ？ その内容」

「そ、それは……」

「別に僕はもう知ってるわけだし言いづらいもないよね？ さっき僕が言ったそのままの内容だった？」

「う、うん……」

「なるほど。シャルルのその感じじやもつときつい言い方されてそうだね。ちなみに何て？」

「ま、まあ噂だよ。噂なんて尾ひれがついて行くものだし」

「一応聞かせて」

「それは……智希はジゴロで見境なく女子を口説いて回ってるって……。でもそれはあくまで噂であって」

「そっか。よく分かったよ」

デユノアは俺を慰めるかのように笑顔を作る。

本当によく分かった。

「で、でもいきなり尋問はさすがにやり過ぎだよ。噂の大元を調べたいならもつとやり方はあるって。なんなら僕も協力するからさ」

「そうだね。それならシャルルにはぜひともお願いしたいことが」

「何？ 僕にできることなら」

「ああ、やっぱりそこで何でもするとか言わないのはさすがだね」

「えっ？」

「ごめん何でもない。それでお願いしたいのは」

「うん」

「これ以上ボーデヴィツヒさんを振り回すのはやめにしてもらえないかってことなんだ」

「……えっ？」

笑顔のまま、デユノアは固まった。

「一夏にけしかけたり僕に近づかせたり僕から引き離したり、この短期間にボーデヴィツヒさんをあっちこっち振り回し過ぎだよ。ボーデヴィツヒさんが扱いやすいのかもしれないけど、そういう誘導の仕方は感心できるやり方じゃないと思うんだ」

「……」

「ボーデヴィツヒさんは素直に信じ込んで突っ走ってしまっただから、コントロールするのならもう少し気を遣ってやろうよ。方角だけ向けて勝手に走らせるんじゃないかと、どう走るかまで示さない」と

「え、えっと……」

「あとさ、いくらその方が都合いいからと言って、すぐにバレてしまうような嘘はよくないと思うな。夜竹さんがよくやるんだけど、それって結局誰も得しないんだよね。日本の諺で嘘も方便って言うんだけど、嘘をつくなら最低でもきちんと成立するようにしないと使うことはできないんだから」

「と、智希……いったい何を……？」

笑顔のまま、絞り出すような声をデユノアは発した。

俺は真面目くさった顔のまま続ける。

「シャルルは僕に誘導されてたとはいえ、はやる気持ちを抑えて、そんな噂なんて知らないと言うべきだったんだよ。だってその噂はシャルルとボーデヴィツヒさんの中にしか存在しないんだからさ。世間一般やネットの話ならともかく、こんな狭い人間関係じゃ元をたどるのなんてそこまで難しいことじゃないんだ。女子って基本的に噂話

が大好きだし」

「……」

改めて田嶋と夜竹さんを使いクラスメイト連中を確認させたが、知らないどころか噂にすらなっていないなかった。デユノア除く一夏の周囲は俺が聞いたが同様だ。転入したばかりのデユノアにその噂を知る伝手はない。その他二組には鈴、三組は既に聞いていて、四組には布仏さん、五組には三組にいる五組連中に確認させたが一ミリも出てこなかった。ついでに二年は黛先輩と生徒会長、三年は宮崎先輩に指揮科衛生科の先輩に布仏先輩。噂を広めようとする誰かがいるのであればどこかで引つかかるはずだ。俺を中傷したのであればまず噂として広めなければならぬ。俺が聞いた人達はゴシツプ好きだったり俺に興味を示しているので、その人達まで届かないレベルであればとても噂になっているとは言えない。

「それとも誰から聞いたか覚えてないって言う？ でもさ、今度はボーデヴィツヒさんが誰から聞いたかって考えると、そもそも選択肢がほとんどないんだよ。確かにボーデヴィツヒさんは素直だけど、誰の言葉でも信じるってわけじゃない。自分が信用している人間の言葉でなければ駄目なんだ。現に田嶋さんとか鼻であしらわれたしね。じゃあそれは誰だってあたっていくと、最終的にはシャルル一人しか残らない」

「だ、だからってそこで僕が出てくるのは……」

「シャルル、フランスとドイツからいきなりやって来てその関係性を疑われないと思った？ わざわざ一夏を篠ノ之さん達から引き離したらずぐ食いついて、ボーデヴィツヒさんをけしかけた時点で僕の中では確定してた。その情報はシャルルにしか知らせてなかったしね。でもうまく行かなかったからってあの場で視線を合わせて頷き合うのはよくないな。少なくとも僕の前でそういうのを見せちゃいけないよ」

俺がボーデヴィツヒをコントロールしようと考えたように、デユノアだって同じことを思いつくのだ。

ボーデヴィツヒは天然ゆえ素で突飛な行動をするので、かえって怪

しまれづらい。そういう人だからで周囲は済ませて深く考えようとしないのである。

それは俺も考えていたことだった。何をどう取り繕おうが疑う人間は疑う。だから俺はよく視点をずらしたりして目くらましをするのだが、デュノアもボーデヴィツヒを前に押し出して自身はその影に隠れていた。

「と、智希？ それはちよつと勘ぐり過ぎじゃないかな？ 思い込みで見ると全部が怪しく見えたりするし、そういう風に最初から疑ってかかるっていうのは……」

「なるほど、全ては僕の思い込みであり妄想だって話か。確かに決定的な物証もないのに、決め付けはよくないね」

「そ、そうだよ。僕もよく分からなくて怪しまれるような行動だったのかもしれないけど、だか」

「じゃあ僕がボーデヴィツヒさんに何をしようがシャルルには関係ないってことでいいんだよね？」

「え？」

博士が戻ってくればいくらでも密会の証拠など見つかるのだろうが、生憎と博士は未だ俺のところ顔を出さない。

なので次善の策としてこれ以上の行動を封じさせてもらおう。

「ボーデヴィツヒさんの行動がいい加減怪し過ぎるから、一度問い詰めないといけないと思ってたんだ。一夏のデータをこっそり取ろうとしてたりするんだけどもうバレバレで。てっきりシャルルの指示かと思ってただけで、違うなら本人に聞くしかないよね」

「そ、そういうのはドイツに限らず他の国もやってたり……」

「そうなんだ。じゃあ他の人達にも聞かないといけないなあ」

もうデュノアに先程までの余裕はない。

口では取り繕うも顔がそんなはずはないと反応してしまっている。当たり前だ、俺の作り話なのだから。

ボーデヴィツヒはあれから一夏に近づこうとしていない。俺担当なのだから当然の話なのだが。

「と、智希……」

「ごめんねシャルル、疑ったりして。ここのところ I S 委員会の人達とか見てたら神経質になってたみたいだ。あの人達が切羽詰まり過ぎでそのピリピリが僕にも移ってたかな」
「……」

「さてと、時間食っちゃったし行くか」

「あ……」

笑顔で俺は立ち上がる。

別にデュノアを完全に追い詰めるつもりはない。少し前までは元気がなかったこともある。

だから余計なことなどせずしばらく大人しくしていてくれればそれでいい。

「そこまでだ！」

「え？」

大声と共に教室の扉が勢いよく開く。

見ればボーデヴィツヒが、大きく息を切らしながら立っていた。

ボーデヴィツヒはアリーナにいたはずだが、ここまで全速力で走って来たようだ。

「あ……」

「ふう、間に合ったか」

「ボーデヴィツヒさん？」

ボーデヴィツヒは佇まいを直すと息を整えながら教室に入り、扉を閉めた。

そして俺の前までやって来て俺を見上げる。

「先に疑問に答えよう。なぜ私がここにやって来たか。それは君達の会話が聞こえていたからだ」

「ちよつとー！」

「デュノアは少し黙っていてくれ。どのようにして聞いていたか。それは我々がコア・ネットワークを介した二人だけの専用回線を持つて

いて、その回線越しに聞いていたのだ」

「我々？」

「今君の横に座っているだろう。専用機持ち同士だからこそできる芸当だ」

ボーデヴィツヒの視線の先はもちろんデユノアである。

二人はそうやって意思疎通を行っていたのか。

専用機同士だと内緒話ができるらしい。

「もちろん通常は国家を越えて専用回線を持つなど認められない。すなわちこれはお互いの国家から特別に認められたという証でもある」
「なるほど。でもどうしてわざわざそんなことを？」

「一方的にこちらだけ患者にされるわけにはいかないからな。最低限同じ穴のムジナだと認識してもらおう必要がある」

「どういうことだよ！」

「デユノア、貴様は今私を見捨てようとしていなかったか？ いや、こ
うまでいいように使われておいて言えることではないかもしれない
が」

「そんなことは！」

いきなり仲間割れが始まってしまった。

もしかしたら一枚岩ではなかったのかもしれない。

「全ては貴様が焦って行動した結果だ。何もかも彼の手のひらの上で
は言い訳のしようもない」

「君だって納得してたじゃないか」

「自分の責任から逃げるつもりはない」

「十分逃げてるよ」

言い合いになってしまったのでとりあえず俺は一夏の席に腰を下
ろす。

すると二人は俺を意識してすぐに口を閉じた。

別に好きだけやってくれてよかったのだが。

「で、事情は説明してもらえるの？」

「それは……」

「本当に申し訳ないのだがそれはできない」

「へえ」

「しないのではなくできないのだ。なぜなら我々はその結果生じるかもしれない事態に責任を取れないし、またその権限もない」
「何それ？」

「そのままの意味だ。その結果取り返しのつかない事態になってしまった場合、我々にはもうどうしようもなくなくなってしまふ。だから君と織斑一夏君、それから教官には絶対に口にできないのだ」
「取り返しのつかない事態？」

「そうだ」

「どうということだろう。」

俺や一夏が聞いてはいけない話とは何だ。

それに千冬さんまで弾かれるというのもまた意味不明である。

「ごめん、意味が分からない」

「それはそうだと思う。だが私としても立場上そうとしか言えないのだ。君と織斑一夏君に大きな不利益をもたらしてしまうかもしれないと思うと、とても口にはできない」

「不利益か……」

「そう言われると益々気になってしまふと言うのはよく分かる。別に私も意地悪をしたいわけではないのだが」

「じゃあ最初から近づいて来て欲しくなかったなあ」

「まさにその通りだが、それはこちら側の勝手な都合だな。君も気づいている通り、切羽詰っている事情がある」

「そんな他人事な！」

デュノアが憤慨し、ボーデヴィツヒが冷めているというのは距離から来る温度差か。

デュノアは当事者だがボーデヴィツヒは千冬さん対策として巻き込まれたに過ぎない。

「参ったなあ」

「さて、そこで提案だ。この後私は甲斐田智希君が気づいていたと報告を上げる。そしてその際君にだけ事情を伝えるように要請したいと思う」

「へえ」

「何勝手なことを！」

「その代わり織斑一夏君と教官にはこのまま内緒にしておいてもらいたいというお願いだ」

「なるほど、そう来たか」

「ちよつと待ってよ！」

「まあまあ落ち着いて。別にボーデヴィツヒさん個人の意見じゃないんだらうから」

「えっ？」

ドイツにとってはこれもまた想定されていた事態なのだろう。

ということはこの温度差は、デュノアボーデヴィツヒと言うよりはフランスドイツの差なのだろうか。

「さすがだな。その通り、フランスはどうだか知らないが、我が国は最初からうまく行くとは考えていない。むしろ賭けの要素が大き過ぎるとさえ思っている」

「やつてもいないうちからそんな」

「その内容を……いや彼の前ではまだ口にできないな。デュノア、それは後で話をしよう。どの道現地での協力者は必要なのだ。ならば甲斐田智希君よりふさわしい相手はいないだろう」

「それは……」

つまり俺がその不利益を被ってでも一夏の方を優先したいという話である。

確かに元々この連中が欲しがっていたのは俺ではなく一夏のデータだ。

俺のデータなど欲しいものはとうにIS委員会が取っているだろうし。

「言いたいことは分かった。でも好奇心を満たせるだけであとはその不利益？ を受けるだけなら、到底うんとは言えないね」

「それはそうだろうな。もちろん我が国としてはそれ相応の対価は用意したいと考えている」

「対価か」

「今後君の面倒を一生見るくらいは普通に出す」

「つまりそれだけの不利益を僕は受けることになるわけだ」

「……我々としては君が納得するような相応の対価を用意したい」
「不利益の中身は言えないの？」

「事情と密接に繋がっているので話す時は一緒になつてしまふな」
「話にならないね」

デメリットも示さずメリットさえ大したことがない。

論外である。

「要望があれば是非とも教えてもらいたい。最大限叶えられるよう努力する。極端な話IS学園を退学したいでも構わない」

「ちよつと待つて！ そんな勝手に話を進めな」

「もはや状況は大きく変化してしまつたのだ。フランスが何もしないのであればこちらから進めるしかない。このままでは最悪の事態を迎えてしまうかもしれないことが分からないのか！ 現に甲斐田智希君が気づいてしまつたのだぞー！」

「それは……」

ボーデヴィツヒがデュノアを一喝する。

最悪の事態とは何だ。一夏にまで伝わってしまうことか。あるいはその先か。

いずれにせよ先方にとつて俺の存在は重要ではない。俺自身のデータは全部IS委員会が持つていて、それではどうしようもないからこうやって一夏に手を出そうとしているのだろうから。

「退学しても構わないというのは、つまりそれを認められるIS委員会もグルだということではないんだよね？ そちらにとつては僕が一夏に話してしまうのが一番怖いんだ」

「……やはりそこまで見抜いていたか。その通りだ。ふう、完全に君を見誤つていたな」

「それは僕のことを知らないんだからしようがないんじゃない？」

「我々ではない。IS委員会の面々だ。君については素直でとりたてて特徴のない、人畜無害な少年であると我々は教えられていた。とんだ節穴だとしか言いようがない」

「あー、まああの人達にとってはそうだろうね」

IS委員会の学者連中である。

確かに奴らにとって俺はその程度の存在だろう。特に文句も言わなかったし、何かを要求したりもしなかった。あえて言うならリーグマッチの際に検査の日程変更をお願いしたくらいか。それも結局は向こうのいいようにされてしまったので、なるほど俺は扱いやすい子供くらいに思われているわけだ。

「ところが来てみれば全く話が違う。人畜無害どころか完全にクラスを掌握し、さらに手を伸ばそうとしている。君達二人がぼんくらであることを前提にした穴だらけの策など何も通用するわけがない。男性を問答無用で下に見る女性上位主義者の欠点だな。だが思えば私も転入した際デュノアが君に同室を断られた時点で疑うべきだったのだろう」

「僕が断った?」

「元々デュノアと君が同室になるはずが、土壇場で君がひっくり返したと聞いているぞ? 最初から我々を疑っていて自由な立場で監視するためだろうが、確かに事前にはなくその場でやられてしまったのもうどうしようもない。そこからこの一ヶ月弱、こちらはただ一人相撲をしていただけだったようだ」

「あー、まあそれは……」

さすがにそれは深読みし過ぎである。

俺としては監視が目的ならすぐそばにいた方がやりやすい。

あの時は単に一夏を一人部屋にするのが危険だと思っただけだ。

「そこから先は君も知つての通りだ。初っ端から躓いた拳句担当を変えたりして対応していたつもりだが、全て手のひらの上だった。君の目にはさぞかし滑稽に映っていたことだろう」

「別にそこまでは思っていないけど」

「それは失礼した。だがこれ以上泳がすつもりはないと今日このようになってしまったのは事実だ。全てが先回りされてしまっている」

違う。先回りされてしまったのは俺の方だ。

博士がいらない以上現状維持の曖昧なままにしておいて余計な行動

だけ封じるつもりだったのに、向こうから踏み込まれてしまった。

そうしたのももちろんボーデヴィツヒではない。その後ろにいるドイツの人間だ。おそらく俺が噂の確認のために大きく動いたことから勘付かれてしまった。デュノアはもちろんボーデヴィツヒ本人には気取られないようにしたつもりだが、その後ろまでは見ていなかった。俺の行動の意味を考えれば、矛先がボーデヴィツヒに向いているのはすぐ分かってしまう。何しろボーデヴィツヒは俺に対して嘘をついて誤魔化そうとし、俺はその確認を行っていたのだから。

ボーデヴィツヒ自身は大丈夫だと感じてても、離れたところから見ればまずいと思うのは当然の話である。

考えが一段階足りなかった。デュノアが考えたように俺が考えたように、ボーデヴィツヒを送り出した人間だって同じことを考えるのだ。遠隔でボーデヴィツヒをコントロールしようと。指示を出すのとはまた別の話で。

「うん、とりあえず反省は後で自分でやって。それよりも大事なものはこれからのことだ。交渉の前段階として確認したいことやお願いしておきたいことがある」

「喜んで聞かせてもらおう」

「まず何より、ドイツ単独の提案とかされても内容がどうあれ乗るつもりはないということ。シャルルの様子を見る限りフランスは寝耳に水みたいなんだけど、後からちゃぶ台をひっくり返されるとかごめんなので、意見を纏めてからまた来て欲しいな」

「確かにその通りだ。一度持ち帰らせてもらおう。だがそれはつまり交渉のテーブルに乗ってくれるということでもいいのだろうか？」

「もちろん聞く耳を持たないという選択肢もあるけど、その場合二人はどうなるの？」

「その場合我々は本国に強制送還だな。失敗したからというよりも、君達の耳に届かなくするため」

「そんな簡単に諦めるの？」

「それ以上に責任を取れない。優先度の問題だ」

「ああ、取り返しがつかないからか」

ボーデヴィツヒの言によどみはない。おそらく向こうは既にシミュレートを終えている。

この状態は俺も分かる。先月の会見に当たってこうきたらこうすると叩き込まれたからだ。

だとすれば今俺は主導しているようで、向こうの作った道に沿わされているに過ぎないか。

ならば俺が今できることは一つしかない。

「他には？」

「こういう交渉をするなら普通はまず千冬さんにするべきなのに、あえて蚊帳の外に置く理由は？ 千冬さんは知らないんだよね？」

「それは簡単な話だ。教官では交渉にもならないと分かっているからだ」

「話を持ちかけることすらしないの？」

「そうだ。なぜなら我々には最悪の事態であっても、教官にとってはそうではないからだ。むしろ教官にとっては好ましいことであるとさえ思う。私個人としても同じ意見だ」

一夏がその事実を知るとはIS委員会フランスドイツにとっては最悪の事態で、千冬さんにとっては好ましい。そして一度知ってしまつてはもう取り返しがつかないかもしれない。また向こうはデータを取ることによつて一夏に何かを求めている。それは俺にもデユノアにもドイツの男性操縦者にもないものである。

「だから僕だけを取り込むのか」

「むしろ君がとても話の通じる相手であるからこそだな」

「話を聞いたら気が変わつて一夏に言つちやうとか考えないわけ？」

「もちろんそういう危惧もあるが、その場合我々は責任から免れる。ああ、当然ながら君に対する責任は全うさせてもらうが」

「約束を破つたのは僕だから一夏に対する責任は僕に来ると」

「そういう話だ。だが君の行動を見る限りそのようなことはまずしないだろうと確信している」

それは果たして信用されての話か。もちろん違うだろう。

つまり俺は一夏にとって不利益な行動をしないだろうと見込まれ

ているようだ。

実によく知らない。俺は相手の影さえ見えないのに、向こうは一方的に俺を見ている。おそらくデュノアが聞き込んだりして集めた情報が共有されているのだろう。俺の存在がイレギュラーであればなおさら着目するのは想像に堅くない。

一番まずいのは向こうが出してくる材料に対して俺は何も吟味するための根拠を持っていないことである。

やはりこのままではあやふやな状態で決断をしなければならなくなってしまう。

「そこまで信頼して言ってくれるのならとても無下にはできないね」

「おおー。話を聞いてくれるのか！ 私個人としても教官と碌に話もできないまま祖国へ帰りたくはなかったのだ！」

「ああ、確かにそういう立場じゃ話をしづらいよね。でもそれなら最初からIS学園を受験すればよかったのに」

「それは私もそうしたかったのだが……いろいろと事情があつてな……」

ボーデヴィツヒの顔が曇った。

それは千冬さんがそう言ったのか、あるいはドイツが認めなかったのか。何しろVTシステムという超特大の問題がある。

「余計なこと聞いてちゃったね、ごめん。あとは……その不利益とかいうのについてもうちよつと開示して欲しいってことかな。まあ聞いただけで病気になるましたとか怪我したとかないのは分かるけど」

「普通はね」

「デュノア！」

「シャルル？」

「あ、ごめんごめん。一般的な話だよ。別に病気とか怪我とかそんなことはありえないから」

「そういう不安を煽るような発言は控えてくれ。心配しなくても大丈夫だ。五体満足なことなど当然であるし、不利益と言っても教官であれば無視してしまうような話だ。私としても君にとってはきつと不利益ではないと思っている」

「ふうん」

「不利益というのは我々から見た話であるし、世間一般的な価値基準においてのことだ。我々がこうやって君に話を持ちかけるのも、問題はないと判断しての話なのだから」

ボーデヴィツヒの言葉が早くなった。これが遠隔操作の弱点でもある。

思わぬ事態が生じた場合、その人の素が出てしまう。それはボーデヴィツヒも例外ではない。

ドイツはまだフランスを取り込めておらず、デュノアがどう出るかを計算しきれていなかった。この場に駆け込んで来たことからして準備が整っていないかったのだろう。俺にとって数少ない幸運だ。

つまりデュノアの一言は俺にとって検討に値する言葉のようである。

「まあまあ、そのあたりはそちらで意思統一しておいて。シャルルも寝耳に水で何勝手に話を進めるんだって言ってるし、僕のところにはお互い納得してから来て」

「す、すまなかった。では急いで……」

「待った。あと別に急がなくていいから。もうすぐタツグマッチが始まるわけで、僕が忙しいのはボーデヴィツヒさんも知ってるでしょ？

だから最低限僕が落ち着いてからにしてもらえないかな？ タツグマッチ中暇をもてましてるか、あるいは終わってからくらいで」

「そ、そうか。だが……」

「別に一夏にも千冬さんにも何も言わないから。現状維持ならそちらもとりあえずは文句ないでしょ？」

今の俺にできること。

それはもう時間稼ぎしかない。事情を調べあげた博士が戻ってくるまでの。

博士が未だに戻ってこない理由は分かった。ドイツだけでは済まなくなってきたからだ。フランス、IS委員会本部のある日本まで調べなければならなくなったに違いない。

いくら博士が天才といえど、その体は一つしかない。そしてその隣

にいるのはクロエ一人だけである。ボーデヴィツヒの存在を見逃していたりゴーレムの生産が間に合わなかったように、物理的な制約はどうしてもあるのだ。倉持技研の篝火所長のような協力者もいるだろうが、問題が問題だけにどこまで関わらせるかというのもある。基本的に博士は他人を信用しないので、それは最低限になるだろう。そうすると当然博士の負担は重くなる。

少なくとも観光を楽しんで遊び過ぎたなどという話ではないだろう。

「わ、分かった。そう伝えよう」

「よろしく。じゃああとはそちらで。あ、シャルルもそれでいい？」

「う、うん……」

言いながら俺は立ち上がった。教室の扉まで歩いて行き、それから振り返る。

「あ、そうだシャルル、一応聞いておきたいんだけど、もちろん一夏はそのへん何も知らないってことでいいんだよね？」

「へっ？ それはそうだけど？」

「そう。ならいいんだ」

「智希？」

カマかけ失敗。

一夏は何事かをデュノアから聞いているようなのだが、それはまた別の話だったようだ。

ということはそれはデュノア一家絡みの話か。思えばそちらの問題もあるのだった。

実に頭が痛い。

はつきり言つて、ドイツの一方的な提案など断るのは簡単だ。全部聞かなかつたことにして二人を母国に追い返せばいい。それで一夏はその不利益とやらを受けなくて済むし、ドイツフランスがいなくなるので今後余計な心配もしなくていい。

だがそうしてしまうのは正直もつたいない。せつかくデュノアという人間がわざわざ海を越えて来てくれたのだ。一夏のためにもできればこのまま引き止めたい。ボーデヴィツヒもVTシステムとい

う大問題がある以上、少なくとも博士が戻るまでは目の届くところに置いておきたい。この際最後の男性IS操縦者がいるドイツとのパイプを作っておきたいというのもある。それに片方だけ送り返すなど無理だろうし。

その不利益についても程度による。ボーデヴィツヒの話をそのまま信じるわけではないが、千冬さんにとつてそうでないのであれば全く問題はない。仮に問題があったとしても、別に俺だけであれば構わない。最悪俺のところまで止めてしまえばいいのだから。

実際俺に何かあれば千冬さんも動かざるをえないだろうし、俺がいなくともデュノアが残っていればまあ大丈夫だろう。

「変なこと聞いてごめん。大前提が崩れてたらこれからやること何も意味ないなと思っただけ。あとボーデヴィツヒさんにも聞くのを忘れてた」

「何だ？」

「本当に、ドイツにISを動かせる男はいるの？」

「ああ、その話か」

警戒の色を見せていたボーデヴィツヒが何でもないことのように笑った。

「この質問は想定内だったらしい。」

「心配せずとも我が母国ドイツにおいて彼はISを動かしてみせた。それは間違いなところであるし、はっきり記録もされている」

「そうなんだ。ボーデヴィツヒさんはその人を知ってるの？」

「直接の面識はない。だが関係者の間では有名な話で、彼はなんとISを奪って逃走しようとしたのだ。それで男性ながら操縦できるところが発覚した」

「へえ」

「男性であるから大丈夫だろうと誰もが油断していた結果だ。そしてそれは織斑一夏君がISを動かしてみせる以前の話でもある。実は一年近く早かったのだ」

「それは」

「つまり我が国の彼が男性IS操縦者第一号であるという話だな。フ

ランスはそれよりも後だった。とはいえ織斑一夏君よりも先ではあるが」

笑いながらボーデヴィツヒはデュノアに振る。

振られたデュノアは苦笑した。

「だからフランスが二番目で一夏が三人目、智希は最後なんだよ、実は」

「それは驚いた」

「そうだろう。大々的に発表しようとする準備をしていたら先を越されてしまったという話なのだ。しかもそれがあの織斑一夏君であったのだから、もう関係者一同地団駄を踏んで悔しがったと聞いている」

「それはそうだろうね」

「フランスも同じだよ。見栄えよく飛べるようにって散々訓練させられたのが全部パー。別に一番じゃなくてもやればよかったのに」

「ああ、だからシャルルはあそこまでI Sを動かせるのか」

「えっ？ あ、うん、そうだね」

そもそも時系列が違うのであれば納得である。

相当にスパルタもされたのだろうが、二十種類の武装を使いこなしてみせるなど並大抵のことではない。二、三ヶ月程度では代表候補生クラスでさえ自身の武装を使いこなせていないのだから。一夏に至っては一つしかないし。

だがそれだけの時間もあつたのであればいろいろと腑に落ちる。

もっとも俺がI Sを初めて動かしたのはもう五年も前になるし、ただ時間があればいいというわけでもないけれど。

「彼についてはいざれ交流する機会があるだろう。その時を楽しみにして欲しいし、できれば今回のことをその第一歩とさせてもらいたいものだ」

「なるほど、僕を引き込むために準備はしてるみたいだね」

「分かってもらえて何よりだ」

「でもI Sを奪って逃げるか。なるほどね」

「なるほど？ どういうことだ？」

「同じ男性I S操縦者として気持ち分かるって話だよ、シャルルは

分かるんじゃない?」

「えっ!? い、いや、どうだろう……」

「ごめん、余計なこと聞いちゃったね。今のは気にしないで」

「ちよつと待ってくれ。気持ちが分かるとはどういう意味だ?」

ボーデヴィツヒが食いついてしまった。

デュノアがいたとはいえ余計なことを口にしてしまったか。

デュノアだけがいる場で言うべきだった。デュノアは負の方向に傾いているようなのだから、このあたりについては特に気を遣わなければならなかったのに。

「あー、まあIS動かせたらそりゃ最初は嬉しいよねって話」

「なるほど、だが君は……」

「僕だって最初はそういう気持ちもあつたよ。すぐになくなったけど」

「そうか」

「このへんは男でないと分からない感覚だから、ボーデヴィツヒさんが気にしても仕方ないよ。だからシャルルに変なこと言うのはやめてね」

「わ、分かった……」

せっかくデュノアも一夏の側にいて落ち着いてきたようなのだから、ボーデヴィツヒに変にかき回されたくない。

デュノアのことを考えても向こうの提案を無下にすべきではないか。

「おっと、話が長くなっちゃったね。二人ともしばらくは今までと同じようによろしくね。僕も振ったり匂わせたりはしないから。じゃあそういうことで」

返事も聞かずに俺は教室を出る。

先手を打ったつもりが横から懷に踏み込まれてしまった。かなりの誤算だ。

お互いに準備できていなかったというのがせめてもの幸いだろうか。

最悪は今ある材料だけでどうにかしなければならぬかもしれないかもしれな

い。

ここまで広範囲にわたる話になると、俺の置かれた立場では情報の部分で外との接点がある博士か千冬さんに頼る必要がある。だが今は事実上それを封じられた形だ。こちらから博士に連絡を取る手段がないし、千冬さんに話をするのは全てをご破算にすることに他ならない。いやドイツの思惑が俺を千冬さんから引き離すことにあるようなので、全部鵜呑みにはできないが。と言ってもその裏を取る術もない。

唯一の救いは窓口がデユノアとボーデヴィツヒであることくらいか。

今回は隠れてやる以上、中国の時のように黒幕が表に出てくることできない。

デユノアもボーデヴィツヒも言われたことを遂行する能力はあるようだが、アドリブに弱そうだ。少なくとも反応の仕方からして中国の管理官のレベルはない。

ならばそこを突破口にしていくしかないか。いかに二人の想定を上回る言葉を出すことができるか。それによってできた穴を広げることができるか。

もつともこの状況では、相手の思惑に乗った上でどうするかしかないかもしれない。

それでも何も知らないまま振り回されるよりはよほどましであるし、変に大ごとにされる前に俺のところまで止められるのは十分ありだ。どちらにしても不利益という言葉がある以上、一夏にまで届かせるわけにはいかない。

それに最悪どうなろうと千冬さんにぶちまけて後を任せる手もあるし、だから向こうにとつても賭けではあるのだろう。俺を取り込んだとしても俺が爆弾であることに変わりはない。最低限俺の意思を尊重する姿勢くらいは見せるはずだ。

結局は俺が駆け引きできるかだ。向こうは俺をただ一人の個人として見て利用しようとしている。だが俺には博士という隠れた繋がりがある。

そのギャップをどう生かすか。ただ利用されて終わりにしないためには、相手から見えない部分でどうにかするしかないのだろう。

「よし、注意事項はこんなところね。もちろんみんな分かってるだろうけど、念のためだから。これだけががんばって失格負けとか笑う気もなれないし」

ベッティの演説が終わりそうだ。

演説と言っても別に長々とやったわけではないが。

「このへんがあいつとあたしの違いか」

「佐藤さんはどっちかと言えれば黙って自分について来いって感じですよんね」

「上に立つ人間は行動してなんぼだろ」

「それでも言葉が欲しいって人はそれなりにいますからねー」

「まあ実際杉山にやられたのはそれが原因でもあるし、あたしがおろそかにし過ぎたのは事実だな」

ベッティが大きく身振り手振りを交えて自身のクラスメイトに話をする中、俺や飛び出してきた五組の連中は少し離れて眺めている。あとボーデヴィッツヒも。

「甲斐田君はどうだったんですか？ リーグマッチのときですけど」

「僕？ どうだったかな……なんか喋れってみんなに言われて言わされた気はする」

「それで何と言ったんだ？」

「うーん、覚えてないってことは大したことは言っていないと思う。それにリーグマッチで試合するのは一夏だけだったし、みんな自分のやるべきことをやろうくらいじゃないかな？」

「なるほど、きちんと役割分担ができていたんですね」

「聞けば聞くほどこっちに勝ち目はなかったな」

と言っても初戦の時は一夏のメンタルコントロールができていなかったのだから、正直うまくやれたとは言いがたいだろう。一夏の勝利が揺るがなかったのは間違いないが、内実はまた別の話だ。

「甲斐田くーん！　なんか一言ちようだい」

「僕？　別にいいよ。特にないし」

「そんなこと言わずに。私達をここまで連れてきたのは甲斐田君なんだから、さすがに一言くらいはかけてもらわないと」

「えー」

「はいじゃあよろしく！」

ベツティイから笑顔で無茶振りされてしまった。周囲の視線が俺に集中する。

面倒だが何か言わないと収まらないようだ。

「あー、じゃあベツティイさんとは逆のこと言うね。最大限がんばるのは当然としても、今日ここにいる人達の半分は負ける」

「お、おい」

「あ、と言っても初日の試合は一回戦の半分だけだから、今日は半分の半分か。でも負ける人がそれなりに出るのは事実だ。全員勝つなんてありえない」

「うわー……」

「二週間程度じゃ付け焼き刃でしかなくて、元からあつた絶対的な差を埋めることなんてできない。一組のことをを抜きにしても」

初戦で鈴と当たってしまった二人の生徒の目が強くなる。この場ではそれを一番自覚しているだろう。

「だから気楽にやろう、ということじゃ全くない。全部出しきっておかないとほんと後悔するよって話。これから一週間あるのに自分の出番は今日で終わっちゃうかもしれないんだ。後はただ見学して勝った人の手伝いをするだけ。分かっているつもり」

「……」

「最大限やり切ってこれで負けたのならもう仕方ないと思えるようにすること。もちろん感情的に悔しいのはどうしようもないけど、せめて理屈の上では納得できるように、自分に足りなかったものを自覚できるように」

見渡すと全員黙って聞いている。聞き流している生徒はいない。

と言ってもほとんどは、でも自分は違うと心では思っているだろう

けれど。

「別に負けたからどうだって話じゃないけど、勝った方がいいのは事実だ。真剣勝負という貴重な経験の場が増えるわけだからね。これはパイロット科とか整備科とか関係ない。そういう場を知っておかないといざという時何が大事か分からなくなる。可能な限り自身で体験しておくべきだ。それができるときに」

「……」

「でも幸いなことに、みんな最低一回はその経験ができる。だからそれは大事にしたいよね。もしかしたら相手が弱くて拍子抜けしたりするかもしれないけど、その場合は次がある。二回戦に勝っても三回戦の一組が強いのはもう間違いない。一組だけは実技経験が多いから入学時の差もひっくり返してくるよ。そうやっていざれ勝てない相手にぶつかるんだ。負けるまでに自分は何を得られるか。自分のことなんだから自分で考えよう。……そんなところかな」

「嫌そうだった割には長々とやってくれたわね。実は準備してた？」

「別に特別なことは言っていないよ。全部今まで言ってきたとこだし」

「そ、そう。まあいいわ。よし、じゃあみんな、気合い入れ直したところで行こう！」

ベツティの号令と共に大きなかけ声が上がる。

リーグマツチの時とは違ってあえて負荷をかけていく言い方にしてみたが、これで三組連中はどうなるだろうか。勢い全開になるか、それとも気負い過ぎてしまうのか。ちょうどいいので一回戦の戦績と合わせて見てみることにしてみよう。

「さすがだな君は」

「喋り慣れてる奴はああいうのがすらすら出てくるんだな」

「私みんなの視線がこっちに向いた時うわって思いました」

「別にベツティさんと逆のことを言ったただだよ。それよりもみんなもがんばってね。僕は木曜まで試合ないから観戦してるよ。と言っても考えることもたくさんあるし暇ってわけではないけど」

「そういえば君と組む私もそうだった。だが君とは違って私は暇を持って余してしまっそうだな……」

「やることないなら普通に試合を見てればいいんじゃない？ 別に自分のブロックだけしか見ちゃいけないってことはないんだから」

「それもそうだな。君はどの試合を見る？」

「さすがに今日ある十六試合全部を見るのは無理だから、見たい試合を優先してあとは流し見かな」

「しつかり観戦計画もあるんですね」

「と言っても一回戦は別に重要でもない。二日で三十試合と数からして多いし、その割に見る程でもない試合ばかりである。運が良ければダークホースを見つけられるかというくらいだろうか。」

それよりもやっておきたいのは鈴や更識妹など実力者の様子を見ておくことだろう。俺の想像と比べて実際はどれだけ差があるか。それによって大勢が変わってくる。

「それなら私も一緒にさせてもらっていいだろうか？」

「あたしもいいか？」

「あ、それなら私も」

「ボーデヴィツヒさんはともかくとして、そっちの二人は自分の方はいいの？」

「私今日は試合ないですし、四回戦以降の相手とか気にしても仕方ないですから」

「それなら純粹に勉強として強い奴の試合を見ておいた方がいい。甲斐田が見たいならそれなりの奴だろうか？」

「まあこれから見る鈴は優勝候補だしね。好きに」

言いながら俺は歩き出す。ボーデヴィツヒ達もついてくる。

今回は会場が分かれていて移動が面倒だ。

結局博士が戻ってこないまま、タッグマッチは始まった。

30. タツグマツチ一日目 難題

全く何もできなかった、というのはきつと目の前の光景のことを言うのだろう。

アリーナの中でIS姿の彼女達が呆然としている。

全力を出すどころではない。

本当に何もできないままただ攻撃を受けただけで終わってしまったのだ。

二人とも鈴とハミルトンによる開幕即イグニッション・ブーストの速攻で沈んでしまっていた。

「嘘でしょ……」

俺の隣りに座る三組代表ベッティが呆然とした声を出す。

「いや……あいつらその可能性もあるって最初から分かってたんじゃないのか……?」

「甲斐田君が普通にあり得るって言ってましたよね……」

五組の佐藤と菅原さんもそんな馬鹿などでも言いたいようだ。

「ふむ……しっかりと気持ちを入れる前に終わらされしまったようだな。タツグマツチ最初の試合という緊張もあったのだろうが、地に足を着けられなかったか」

そんな中、一人ボーデヴィツヒは顎に手を当てながら分析していた。

試合の入り方に失敗したか。もちろんそれもあるだろうが、常時強烈なプレッシャーをかけてくるのが鈴にとつての正攻法だ。初見ではクラス代表であるベッティや佐藤でさえ飲み込まれてしまったのだ。

いくら対戦相手の彼女たちがパイロット科志望の生徒とはいえ、初めでの真剣勝負の場で敵が鈴というのは相手が悪過ぎた。しかも相手のハミルトンまでさすがは留学生という動きを見せて、鈴が落とす

よりも早く自分の相手を沈めてしまっていた。まあ鈴はどちらかと言うと速攻型ではないが、それでも鈴は開幕即決めると言わんばかりの連打を繰り返していたのだ。

だがそれよりも先にハミルトンは相手を翻弄して一発も攻撃を受けないまま、かすらせさせずに落としたのである。予想通りで当然のことかもしれないが、技術的にベッティや佐藤と同等以上で間違いない。

スタイル的には一夏やベッティに近いだろうか。ブレード一本しか出していなかったし、一夏とハミルトンが試合をしたらさぞ一夏は楽しくて仕方ないだろうなというのが実際に見た感想だ。

「うーん、鈴がもうちょつと思慮深ければなあ」

「どういうこと?」

「鈴が開幕特攻なんて馬鹿なことしなきゃこつちもいい経験が積めたのにとあって」

「は?」

「どういう意味ですか?」

「実際相手に何もさせなかったわけであるし、戦術としてそこまで間違っているとは思わないが?」

「確かにこの試合を勝つことだけが目的なら、ふわふわしている相手に対しての奇襲攻撃は十分すぎるくらい有効だろう。」

だが優勝までの道のりとして考えれば、鈴はシード権なしの生徒の中で一番のアドバンテージをドブに捨てたとしか言い様がない。

「ベッティさんと佐藤さんもああいう馬鹿な真似はしないでよ?」

「あ、ああ」

「バカな真似? ……ああ、そういうこと」

「どういうことだベッティ?」

「要するにね、甲斐田君は一戦も無駄にするなって言ってるのよ」
ベッティには伝わったようだ。そうでなければ意味がない。

こちらは決勝までの道筋を立ててやっている。それぞれの試合に意味があり、やるべきことが存在する。

たとえば速攻で沈めることができるような相手であろうと、連携の確

認その他やれることやりたいことはいくらでもあるのだ。

それをさつきと終わらせるなんて実にもつたいない。

「そういう話か。だが体力的な話を考えれば速攻で終わらせるのがそこまで悪いことだとは思わないぞ。実際あたしはリーグマッチで連戦による体力の消耗があつたのは否めない。ましてや今回は一週間の長丁場だ」

「あら、まるで疲れてなかったら私に勝てたかのような言い回しね」

「なんだと?」

「まあまあ。でも佐藤さん、それはコントロールが必要だという話であつて、短ければそれでいいという話じゃないんだ。例えば長期戦になる場合だつてあるんだし、試合後のコントロールだけじゃなくて試合中のコントロールだつて必要なんだから。それに実際に試合の場だからこそ分かることもある」

「な、なるほど」

「だいたい鈴は明日試合ないんだよ? 一回戦は二日に分けられて行われるから今日試合した人は明日は休みだ。だから鈴は今からケチる必要なんてないはずなんだ」

「今日の疲れは明日で回復できますもんね」

この分であれば鈴とハミルトンは戦術は考えていても戦略までは考えていなさそうだ。

もちろん優勝を見据えて体力の温存などは考慮しているようだが、それは目の前の相手を順番に倒していけばいつかは優勝できる、程度でしかない。

「甲斐田智希君、勝者の二人がこちらに向かって手を振っているぞ?」

応えてあげないのか?」

「鈴はよく見つけたな……ってほどでもないか」

「リーグマッチの時と違ってスカスカですからね」

数千人も収容できるアリーナにせいぜい百人くらいなのだから寂しいものだ。

と言つてもそれでも今の試合はタッグマッチ最初の試合で、おそろくこれから試合を控えている生徒以外はほとんどがこの場にいる。

同時に別会場でも試合は行われているが、何と云ってもリーグマツチで準優勝だった鈴の初戦だ。自分に関係ない試合よりは普通に気になるだろう。

アリーナの中にいる鈴は思い通りにいったおかげか、どうだ見たかともも言いたげな得意顔だ。ハミルトンはテンションが上がっているのか、こちらに向かって激しく両手を振りながら満面の笑顔で飛び跳ねている。

仕方ないので俺も手を振って応える。

「ま、この分なら一夏よりも鈴達が決勝に上がってきてくれた方が勝てるね」

「ほう、君にはもう勝ち筋が見えているようだな」

「と言うよりは今の試合を見て予想の範囲内だったって話なだけけどね」

「それは頼もしいわね。甲斐田君が味方でよかったわ。ねえ佐藤？」

「否定はしないがあたし達が甲斐田の作戦を実行できるかはまた別の話だ」

「まあね。さてと、甲斐田君、この後はどうするの？」

「いやいや、負けた二人のところへ行くに決まってるじゃない。放っておく気？」

「おっとそうでした。じゃあ行きましようか」

アリーナの中でも放送で出場者は控室に戻るよう言われている。だが榎原先生の言い方は砕けていて、通常の授業の延長線のような感じだ。

どうやら今回はリーグマッチの時と違ってそこまでかしまった空気ではないようだ。まあ内輪の行事だと言うのもあるのだろう。

俺達は立ち上がり二人が戻ってくる控室へと向かった。

控室に着くと我に返ったであろう敗者の二人が抱き合って大泣きしていた。

結果としては瞬殺されてしまったという形だが、技術的な話をする

とそこまで絶望的な差があったわけではない。二人ともパイロット科志望だし、俺としても最初を乗り切れてさえいれば鈴達ともそれに打ち合えたと思っっている。

足りなかったのは経験値だ。それも真剣勝負の場の。篠ノ之さん的には覚悟とでも言うだろうか。

面食らったのは二人が俺に対して泣きながらごめんなさいを連呼してきたことだ。

もしかして俺が怒っているとも思っただのだろうか。

だが泣きながらなので途切れ途切れな単語を拾っていくと、どうやら二人は俺の言ったことを分かったつもりになって実際は分かっているなかつたと言いたいようだ。

マインドとハート、頭で理解することと心で感じることは別物だということなのだろう。

「これが甲斐田君の言ってる負ける意味か」

「ただ負けだけを言うならあたしもベツティは何度も経験してるけどな」

「リーグマッチのことを言ってるなら自分は負けから学んだって言うる？」

「だから言ったんだ。ただ負けただけじゃ意味がない」

「……そうね。私もこの一ヶ月は甘かったなあ。リーグマッチで試合した相手に今やって勝てるか自信持てない」

「一ヶ月後に全員参加の個人戦があるのは最初から分かってたのにな」

「まあまあお二人とも。でも今は個人戦じゃなくてタッグマッチですよ。そして甲斐田君もいるじゃないですか」

場の空気もあってしんみりしかけた空気を菅原さんが戻す。

やはり菅原さんはそっち側だ。

「そうだな」

「甲斐田君よろしくね」

「もちろん僕にできることはやるよ。ただ試合をするのは僕ではないというのと、勝負なんだから相手もいるってことだ。なかなか思い通

りにはいつてくれないうのを覚えておいてね」

「まさに今見た光景だな」

「これはみんなに伝えておかないと。ええと、次にみんなが集まれそうなのは……」

「あ、じゃあちよつと抜けていい？ 次に見る試合の場所で再集合つてことで」

俺は手を挙げると周囲は揃って驚いた顔を見せた。

いや、そんなにおかしなことを言った覚えはないのだが。

「甲斐田君……今度は一体何を始めるつもり？」

「は？」

「それは元々考えていたことなのか？ それとも今の試合を見て思いついたことなのか？」

「はい？」

「さすがだな。君は常に自分のやるべきことを理解し先を見て行動しているのだな」

「ボーデヴィツヒさん？」

「このへんが私達との違いなんですわね」

なんだかよく分からないがまた的外れな深読みをされている気がする。

別に大した意味もなかったのだが。

「いや、鈴に一言声をかけてこようかなって思っただけだよ。後で無視したとか言われたくないから」

「なるほど、相手が一試合終えて一息ついたところで心理戦をしかけようって話なのね」

「え？」

「手伝えることがあればやるぞ？ 話を合わせる程度ならあたしでもいいだろう？」

「いやいや、大所帯で行くとかえって警戒されるだけだし、ほんとに一言かけてくるだけだから」

瞬殺とはいえ試合で体を動かして、鈴は気分が高揚しているだろう。なのにそんな中集団でぞろぞろと行ったら鈴の短い導火線に火

を付けてしまうかもしれない。

誰がわざわざ好き好んで虎の尾を踏むような真似をするか。本来であれば触りにさえ行きたくないのだが、後から文句を言われないうちにやむを得ずなのだ。

「佐藤さん、甲斐田君は一人でやる必要があるから抜けるって言ったんですよ。私達にやって欲しいことがあったら最初から言うでしょうし、ここは甲斐田君にお任せするということで」

「まあ……それもそうか」

「邪魔となるのは我らにとつても本意ではないだろう。ここは甲斐田智希君のやりたいようにやらせるべきだ。ただ、いくらIS学園の中とはいえ安全上男子が一人で行動するのはいかがなものかと思う」

「またそれか」

あれ以来、ボーデヴィツヒは一見俺の身を案じている発言をするようになった。

もちろんドイツ本国の指示だろうが、いちいち口を挟んでくるので正直鬱陶しい。

特に俺が一人でうろろろするのが気に入らないようだ。外の世界ならいざ知らず、ここはIS学園なのだからかえって安全だと言うのに。

「またなどと言わないで欲しい。男子が一人で出歩くなど本来はありえない行動なのだぞ。その上君は希少な男性IS操縦者。本来であれば四方を護衛で固めるべきなのだ」

「だからそれはIS学園だからこそだよ。ここ以上に安全な場所はないから僕もこうやって大手を振って歩いてるんだって」

「でも実際甲斐田君は一人でいたところをうちのクラスの杉山さん達に絡まれてますよね？ 二三人ならまだしも大勢に囲まれて安全だつて言えるかと言うと……」

別にその程度……と正直思うところだが、口に出すのは止めた。

ベッティと佐藤がしかめっ面になったからだ。どちらも一人でいた俺に絡んできている。

その程度などと言ってわざわざ二人の気分を害することもない。

「はいはい、じゃあ専用機持ちのボーデヴィツヒさんについてきてもらおうかな」

「うむ、この私に任せて欲しい。君に害をなそうとするものは全力で排除してみせよう」

「いやいや、IS学園の中なんだからそこは穏便にね」

結局こいつが言いたいのはこれである。言うまでもなく監視のためだ。

デュノアが一夏に付いているので自分は俺に付くという話である。

ついでに千冬さんの話も聞けて一石二鳥だとも考えていそうだ。

「じゃあラウラは甲斐田君のことをよろしくね。でも邪魔はしちやダメよ?」

「それは言われるまでもない。護衛が口を挟むなどあり得ないことなのだからな」

ボーデヴィツヒが腰に手を当てて得意げに胸を張り、その頭を笑顔のベツティが優しく撫でている。

そんな光景を見る見つけ、ボーデヴィツヒが俺の横にいても抑止力になる気が全くしないと思わざるをえなかった。

まさか二十分近くも待たされるとは思わなかった。

タイミングが悪かったといえはその通りだ。

ノックして声をかけると、数秒の沈黙の後今着替え中だから待てという鈴の怒鳴り声が返ってきた。

でもたかだかISスーツを脱いで制服に着替えるだけで二十分はないだろう。シャワーでも浴びていたのだろうが、それにしても俺が来るまでも時間はあつたはずだ。負けた三組の二人がしばらく泣いていたように、きつと勝利の喜びではしゃいでいたに違いない。

横にボーデヴィツヒがいてくれたので雑談して時間を潰せたが、危うく一人寂しく廊下に突っ立って待つ羽目になるところだった。

そして今ようやくお許しが出たので中に入る。ボーデヴィツヒは顔見知りでもないし遠慮して廊下で待つそうだ。

「あんだねえ、来るつもりがあつたなら最初から言っておきなさいよ。女の子には準備があるんだから」

さらにこれである。

出迎えは両手を腰に当てての仁王立ち。ただ同じ姿勢のボーデヴィツヒよりは子供に見えなかった。と言つても中学一年生と三年生程度の違いではあるけれど。

「準備つて着替えるだけでしょ。これでも時間置いて来たのに、まさか僕が来た時もシャワーとか浴びてないとは思わなかった」

「は？ あんた何言つてんの？ 智希が来た時にはシャワーくらいとつくに浴びてたわよ」

「え？ じゃあこの二十分近く何してたの？」

「だ、か、ら、準備があるつて言つたじゃない。いい智希、女の子は男子と違って身だしなみを整えるの」

「でもさすがに二十分は……」

「それはシャワーとか浴びたんだから仕方ないじゃない。髪も濡れちゃうしいろいろ落ちちゃうし」

「にしても……」

「あーもう、じゃあ理解しなくていいからそういうものだって覚えておきなさい。それよりもあんた何しに来たのよ？ なんかあたし達に文句とか言いたいことでもあるの？」

勢いで無理矢理押し切ってきた。

扉の向こうではやけにどたばたしていたようだったが一体何をしていたのだろうか。

まあ別にどうでもいいか。鈴も言うのが面倒そうだし詮索するほどでもないだろう。

「別に文句とかないよ。単純に一回戦勝利おめでとうつて言いに来ただけ」

「本当に!?!」

と横からハミルトンが入ってきた。

これはさつきからのテンションの高さそのままだ。

「やあティナ、ほんとにすごかったよ。完勝だったじゃない。無傷ど

「ころか相手にまともに攻撃さえさせなかったね。正直びっくりしたよ」

「あ、ありがとう……」

「あら智希、あんたやけに素直じゃない。いつもならここで負け惜しみのひとつでも口にしてそうなのに」

「らしくないからやめろとか言うならそうしてもいいけど？」

「バカ、そういうことじゃなくて褒めてるのよ。いい智希、そうやって素直になれば周りの人もちゃんと受け入れてくれるんだからね」

ニヤニヤしながら鈴が入って来て説教まで始めた。

「というかどこが褒めているのか分からないし、別に俺は拒絶されたりしてもいいよ」

「はいはい。でもティナはさすが留学生だね。ISの動かし方を分かってる。リーグマッチに出てるても一夏以外には勝てたんじゃないかな」

「それは……どうだろう？」

「しつかり一夏を外すあたりが嫌らしいわね。自分がいるから一夏には勝てないよっていう自画自賛？」

「僕がいようがいまいが結果は一緒だったよ。リーグマッチに関してはね」

「全然そんなことないよ！ 一組を纏めてたのは智希なんだし！」

「せっかく来たのでこの際一夏の強さを意識させようと思ったが、ちよつと失敗した。」

俺の方に矛先が向いてしまった。

「智希がいなきや一夏に勝てた気がしないでもないけど、まあ負け惜しみよね。でもティナが他のクラス代表とやっても勝てそうなのは同意するわ。もちろん留学生なんだからそうでないといけないんだけど」

「それもあつて鈴とティナのペアに穴なんてないと分かっただけはいたんだけど、今の試合だからね。あの二人別に弱くはないんだよ」

「うん、動き方からしてこれは絶対に乗せちゃいけないと思った」

「最初パニックってその後立て直そうとはしてたわね。でもそういう

のをこつちに見せてた時点で逆手に取られる一択よ」

考える暇を与えない、もしくはもつと混乱を誘う、という話である。完全に見透かされていいようにされてしまつて当然だ。

「だよね。でも初っ端から鈴が全力で突っ込んでくるかもしれないと言つておいたのにこれだからね。僕としちやもうどうにもならなかつた」

「智希は鈴がそうするかもしれないつて分かつてたの？」

「鈴の性格からしてあり得るつて話ね。でもそれを正面から打ち破つたんだから二人はすごいよ」

「智希が褒めるとかかえつて怖いわね。なんか裏がありそうで」

「鈴」

「まあ鈴がそう言うのは分かる。でも結果が出てるのの後からグチグチ言つてもみつともないから負けは負けとしても認めないと。それに今の話は本題に入る前の雑談みたいなものだし」

「じゃああんたはわざわざ何しに来たのよ？」

「忠告しに来た」

「へえ」

訝しんでいた鈴の目に力が入つた。

一方ハミルトンの目にはなぜだか喜びの感情が見える。

「このままじゃ一夏に勝てないよ？ シャルルとティナはいい勝負になるとしても、鈴が一夏に勝ち切れない。そもそも一回戦から試合する鈴はスタミナの部分で一夏にハンデがあるんだから、持久戦になったら鈴の方が崩れる」

「それくらい分かつてるわよ。だからこうやつて速攻で沈めたんじやない」

「疲労は日々蓄積されるよ。それに二回戦はともかく三回戦以降は今以上の相手ばかりだ。はつきり言つて初戦で速攻を使ったのは正直よくなかつた。同じ手はもう通用しない」

「別に構わないわ。さつきみたいに正面から問答無用で叩き潰せばいいだけの話だし」

「待つて鈴、だから智希はもうそれは止めた方がいいつて言つてるの」

要するに、鈴とハミルトンは一回戦から張り切り過ぎた、という話である。

あんなものを見せられたら次以降の対戦相手は間違いなく対策を打つに決まっている。

そしてその目指す先は泥沼の持久戦だ。

「さすがティナは分かってくれてる。今後の対戦相手は鈴とティナのやりたいようにやらせてくれないんだけど、それでも力押しの無理攻めをしようとしたら無駄に体力を消耗するだけだって話」

「それは……」

「相手の意図が明確なら対策も立てやすいよね。むしろやりやすい相手だ」

「ホントにそこまでしてくるの？」

「少なくとも僕はそうする。四回戦以降で三組の人が二人と当たった時は徹底的にやらせてもらうよ。さっきのお返しとばかりにね」

「ああ、智希なら確かにやるわね」

「つまり智希はもう少し考えて動けって言いたいんだよね？」

同意を求めてハミルトンが笑顔で俺を見てきた。

もちろん俺は頷く。

「うん。別に二人が馬鹿だとかそういうことを言いたいんじゃないよ？　ただ仮にも優勝を目指すんだったら、それにふさわしい姿を見せて欲しいってこと。このままじゃ二人はは確実に、もう一回言うよ、確実に一夏から返り討ちにされる。しかも楽勝で。今の僕にはそういう未来しか見えない」

「い、言い切るわね」

「だからわざわざここまで来たんだ。どうせ鈴のことだから何か裏があるとか思ってた信じてくれないさそうだしはつきり言うけど、一夏が元気なまま決勝まで上がってこられたらこっちに勝ち目がなくて困るんだよ。ただでさえこっちは一回戦からの連日連戦で疲労困憊なんだから、決勝の相手が元気な一夏とシャルルなんて冗談じゃない」

「なるほど、そういうこと。智希が忠告とか絶対何か企んでると思ってたけど」

鈴が腑に落ちたように深く頷いた。

やはり俺のことを疑っていたようだ。

もちろんそれは正解である。

「智希、つまりあたし達は決勝までは手を取り合えるんだよね？」

「いやいや、それまでにでも三組の人が当たったら当然勝ちに行くよ？　ただA Bブロックで一夏と一番いい勝負をできそうなのが二人なわけで、その二人に簡単に負けられたら困るって話なただだよ」

「うん、今はそれでいいよ。必要としてくれるのなら。でもそれならあたし達のことを見ててね？」

「別に頼まれなくても普通に気になるし見るよ」

「ありがとう！　そ、それで、この後なんだけど、一緒に観戦しない？」

「あ、それは無理」

「えっ……」

しまった、言葉の選択を間違えた。

見るからにハミルトンへ大ダメージを与えてしまった。

「ちよつと智希！」

「ごめん、言い方が悪かった。この後二人が見たい試合って二回戦の相手になる人達の試合でしょ？　どうせ二回戦で二人に負けるんだから正直僕にとっては見る価値がないんだ」

「あ、そういうこと……」

「別にそんな気は遣わなくていいわよ？　智希の見たい試合に合わせるから」

「鈴、今の本気で言ってる？」

「えっ？」

「あっ」

ハミルトンは気づいた。もちろん気づくと分かって言ったのではあるけれど。

真剣な顔になったハミルトンは鈴に向き直る。

「鈴、あたし達はそういうところから変えていかないといけないんだ」

「テイナ？」

「智希、そうだよ。試合なんだから相手がいるんだよね」

「そういうこと。がんばって」

「うんっ！」

俺に向けられたハミルトンの笑顔を見て、不意に布仏さんの顔が浮かんだ。

ああ、この花開くような表情は強度MAXの笑顔というやつだ。

「テイ、テイナ？」

「鈴、行こう。あたし達はまず相手のことを知らないといけないんだから」

言いながらハミルトンは自分の荷物を持ち、扉を開ける。

開いた先にはボーデヴィツヒが直立不動で立っていた。

「あなたは……」

「話をするのは初めてだな。ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツより今月からIS学園に編入している」

「……テイナ・ハミルトンです。カナダから来ています」

「誤解なきように明言させてもらうが、私が今ここにいるのは甲斐田智希君の護衛のためだ。それ以上の意味はない」

「はあ」

「そして、個人的には君の想いが成就することを願っている」
「！」

そう言ったボーデヴィツヒの顔は普段からするとらしからぬ、優しさに溢れたとでも言えそうな表情だった。

ハミルトンはこちらに背を向けているので、その表情は見えない。
「がんばってくれ」

ハミルトンはそれには答えず、ただ頭を下げてから走っていった。
「あんた、いい奴じゃない。鳳鈴音よ」

余計なことを言いながら鈴がハミルトンを追いかけて行く。
「さて」

二人を見送ってから、ボーデヴィツヒがこちらへと向き直った。
「少々敵に塩を送り過ぎのように思えるが」

「そう？」

「いや、別に咎めているわけではない。説明してくれた通りその意図

も分かる。だがそこまで奮起させる必要があったのかと疑問に思っただけだ」

「ああ、そういう話」

「もちろん君が確信を持ってやるからには必要なのだろうな。そうか、織斑一夏君は今やそこまでのものなのか」

なるほど、ついでにボーデヴィツヒも勘違いしてくれたか。

ならばあえて誤解は正すまい。

「試合になったら僕はもう何もできないからね。それまでに何ができるかってことだよ」

「全体を見据えられているからこそここまでできるのだな。将来の対戦相手の対戦相手にまで目を配るとは、これこそまさにお膳立てと言いうのだろう」

確かに、今やっているのはお膳立てだ。

ただしそれはベツティと佐藤のためではなく、一夏のためのものがある。

そういうわけで俺は鈴とハミルトンのペアに弱点を作る。宮崎先輩の言った弱点とは最上級生である宮崎先輩から見た弱点であり、入学したばかりの一年生にとってはまだ弱点にならない。

またその弱点とは俺が突くことのできる弱点でも足りない。試合をするのは俺ではないからだ。鈴ハミルトンと試合をするのは、またその作戦を考えるのは四十院オルコットのペアである。

だから俺はここからの数試合で四十院さんとオルコットが作戦を立てられるような弱点として昇華させる。四十院さんもオルコットも俺と同じ指揮班だったのでどういう考え方をするのかは分かっている。終着点は既に決まっただけでそこまではほぼ一本道だ。

彼女達四人がIS学園の生徒として最善を尽くすのであれば、俺の思うように進んでくれるはずである。

「と言ってもみんなにとっては余計なお世話かもしれないけどね」

「そんなことは決してない。君のような優秀な指揮官なら安心してついていけるといふものだ」

「いやいや、優秀なのはみんなであって僕じゃないよ。いつも学ばさ

れてばかりだし」

「その謙虚な姿勢があるからこそ慢心なく突き進んでいけるのだろうな」

別に謙虚して言っているのではない。本心だ。

彼女達は優秀であるからこそ、俺が論理を示せば納得し、自分から行動してくれる。方向性さえ示しておけば逐一確認しなくていいというのは本当に楽だ。つきつきりになるまでもなく俺はまた別のことができる。

それに学ばされているというのもまた事実だ。

ただ一言褒めに行くだけのはずが、心理戦という言葉を俺に教えてくれたおかげでここへ来る道中に一連を組み立てることができた。

さらにボーデヴィツヒに対するデュノアやドイツの上司の行動から、人を間接的に動かすことを学べた。俺を胡散臭い目で見てくる鈴を動かすなら、鈴の信頼するハミルトンを使えば直接鈴を言いくるめるの比べて労力が数倍違う。鈴の拳が飛んで来るかもしれないという薄氷を踏む必要もなく、自主的にやってくれるので見張っておくまでもない。

自分一人で何もかもやろうとしていたかつてからすれば天国みたいなものである。

「それでも結果どうなるかはまた別の話だけどね。さてと、かなり時間食っちゃったし行こうか」

「おお、もうこんな時間か。急いだ方がよさそうだな」

ボーデヴィツヒは俺の護衛という意識からか、真剣な顔に切り替えた。

「うわー、くつきり差が出たねー」

俺の出した今日の勝敗表を見て、田嶋が目を丸くした。

「五組がひどいね。クラス代表以外全敗はさすがに驚いた」

「んでその分三組が勝ったと。半分近くは三組が勝ったんだ」

「二組四組が五勝三勝だから、確かに五組の分を三組が取ったと言っ

てよさそうだね」

今日行われたのは一回戦の半分強である十六試合。A B ブロックの試合である。

各クラス八チーム出場したわけであるが、実力が均等であれば各クラス四勝前後になるはずだ。

ところが五組はクラス代表杉山しか勝てなかったという話である。大惨敗と言っていないだろう。

「三組は七勝……っていうか嵐さんに負けたのはしょうがないとしてほとんど全勝じゃん」

「みんなに半分は負けるよって脅しといたんだけどそれがいい方向に行っただのかな？」

「そ、そんなことしてたの？ 甲斐田君の脅しとかそりや必死になるよー」

「それどういう意味？」

「へっ？ いやいや、悪い意味で言ってるわけじゃないですからー」

夜竹さんほどではないにしろ、田嶋もたいがい考えなしに言葉を発する。

もっともこの手の俺を貶める発言は今やクラス全員に共通する話か。

「はあ。まあいいけど五組についてはある程度予想できてたんだよね。だってクラス代表の杉山さんとその取り巻きで訓練時間を独占してたし」

「あー、そういう不公平あるとかわいそうだねー」

「でも明日は五組ももうちよつと巻き返してくると思う。三組と一緒に訓練してた人達が出るし、杉山さんの取り巻きも明日だから」

「ていうか甲斐田君の支配下にいる五組の人達って実質三組だし、五組がダメダメってことには変わりなさそう」

支配下とかまた舌の根が乾かないうちにこの田嶋は、と言いたいが最近はもういちいち目くじらを立てるのも面倒になってきた。

クラスメイト連中はもしかしたらもう無意識にやっているのかもしれない。

「でも三組も明日は今日ほどはうまくいかないと思う。今日は相手がよかった部分もけっこうあったから。明日は二四組のパイロット科希望者がそれなりにいそうだし、特にDブロックは厳しいかも」

「甲斐田君は今日の試合を見て明日の予想ができるの？」

「別に予想ってほどでもないよ。全体的なレベルは変わらないんだから今日弱めだったら明日はもう少し強そうとかその程度。誰でも考えられるようなこと」

「いやー、普通の人はそこまで気にしないと思うなー」

「田嶋さんに普通とか言われても何も説得力はないね。さてと、今日の一組なんだけど」

「あつ、ちよつと待って。その前に……報告？」

そんな疑問形で言われても困る。

「一組のこと以外で何かあった？」

「いや、甲斐田君の命令なのかもしれないけど、甲斐田君と一緒にいた五組の人で……ほらセミロングで人懐っこそうな顔してる人」

「その言い方からすると菅原さんかな」

佐藤はどちらかなどというまでもなく姉御系だし、他の五組連中は佐藤か菅原さんを挟んで接してくるのできつと菅原さんのことだろう。

「うん、名前知らないけどきつとその人。で今日その人がなんか怪しいというか、コソコソした感じで話をしてる現場をちらっと見ちゃって」

「それで？」

「だから、なんか怪しいって話で」

「それは話の内容が？」

「周りを気にしてたから近づけなかったんだけど、いかにも怪しいーって感じでこうわたしの第六感がふつつつと」

「なるほど。話をしてた相手は分かる？」

「リボンの色で一年生だってことは分かったけど……」

「ふむ」

まあ普通に考えれば五組のクラスメイトだろう。

杉山のところから出てきた以上、自分のクラスメイトと話すにしてもあまり大つぴらにできなさそうなのは分かる。

それだけなら特に気にするような話でもないが。

「それって甲斐田君の命令？」

「違うよ」

「こう誰かに聞かれちゃいけないな真剣さがありましたね、わたしとしてはこれ絶対何かあるって感じなんですよ。いかにも裏で暗躍してますって雰囲気です」

誰が田嶋の直感など信じるか、と個人的には言いたいが、この前のボーデヴィツヒについてはそう外れたものでもなかった。

事件に対する嗅覚、という意味では田嶋の本質に沿う事柄でもある。

「あ、そうだ。それはいつの話？」

「ついさっき。ここに来る前」

「新聞部の部室に来る途中か……」

「それでわたし思ったんですよ。実はあの人五組のスパイで、こつちの情報を流してたんじやないかって。そうだったらすごくおもしろいと思わない？」

「おもしろい……って田嶋さんにとってはそうか。じゃあそれは、本当に目撃したの？」

「いやいや、実際この目ではつきり見ましたって！」

「そうじゃなくて、あえて目撃させられたんじやないの？　って話」

「それは！」

一笑と共に切り捨ててもいいが、この際あえて乗っかってみる。せつかく乗り気になっているのだ。

五組関連の話なら田嶋にかき回させるのもいいだろう。

「だっておかしいと思わない？　周りを気にしてたのなら普通田嶋さんのことだって気にするよ」

「ま、まさか……わたしは泳がされていた……？」

「この前のごたごたで向こうは田嶋さんのことを知っててもおかしくないしね。例えば元々僕との関係を疑ってて、そういう場を見せて田

嶋さんが僕に報告に行くのを確認するとか」

「そんな！　もしかして尾行とかされちゃってた!?!」

「かもしれないって話だよ。五組としては一組と三組の関係はすごく気になるだろうしね。一組にも三組にも喧嘩を売っている以上手を組まれたりしたら困るわけだし」

「そ、そういうことだったのか……」

こつちが不安になるくらいあっさり乗ってしまった。

まあいい。元々傍観者の意識だったのだろうが、残念ながらお前も当事者の一人だ。

本当に楽しみたければ自分も舞台上がれ。

「と言っても今のは全部僕の想像だよ。実際どうかは分からないし、別に何かされたわけじゃないんだから放っておいていいかもしれない」

「そんなことできるわけないって！　だってクラスのみんなが困ることになるかもしれないだよー」

「いや、さすがにそこまでは」

「甲斐田君を集団で取り囲むような人達だよ？　少なくとも何考えてるかはつきりさせとかないと危ない」

「田嶋さんちよつと落ち着こう」

「さゆか！」

「ほえっ?」

いきなり呼ばれて、長椅子に寝転んで自分の撮った写真を眺めていた夜竹さんが顔を上げる。

見るからに全く話を聞いていなかったようだ。

「行こう！　クラスの平和を守るために!」

「な、なんかよく分かんないけど分かった」

「いったいどこへ行こうというのか。もう夕方だと言うのに。」

「田嶋さんちよつと待って」

「大丈夫！　もうハマはしないから」

「そうじゃなくて、行く前に報告。今日の一組の様子は?」

「ああそれ。えーと……特に異常なし！　以上!」

「ええ!？」

「さゆか、行こう!」

「はい」

妙な使命感に目覚めた田嶋が部室から飛び出していき、夜竹さんがカメラを持って追いかけていく。

新聞部の人達が気を利かせてくれて席を外してくれていた結果、俺は部屋に一人取り残された。

そういえば前にもこういうことがあった気がする。

しかしどうしよう。新聞部員でない俺は部室の鍵を持っていないのでここから動けない。

「よお」

シャワーを浴びて明日のことでも考えようかとぼんやりしていた午後九時過ぎ、ドアを開けると立っていたのは一夏だった。

珍しいことがあるものだ。いつもは鍵をかけていても合鍵使って問答無用で入ってくるくせに。

「どうしたの一夏? 何かあった?」

「ちよつと話をしに来た」

「話? 今日全然話せなかったからとかそういうこと?」

と言っても今更な話だ。

俺と一夏が一日別行動を取るなんて別に珍しいことでもない。休日の検査やリーグマッチの訓練などこれまでも普通にあった。

あえて言うなら今日は昼夜食事も別だったし朝会話をして以来とということだが。

「あー、それはそれで今日だけじゃなくてここしばらくについて言いたいことはあるんだが、今はそうじゃない」

「なんか真面目な話がありそうだね」

「まあな」

頷くと一夏は首を動かして自分の後ろを指し示す。

見れば一夏の体の後ろにデュノアが隠れていた。

「シャルル？」

「や、やあ……」

返事をしたデュノアにいつもの笑顔はなく、むしろ強張って、緊張しているようだった。

「じゃあ入るぞ。やっぱり忙しいからダメだとかないよな？」

「そういうのは優先度の問題だよ。大事な話なら聞くから」

「お、おじやまします……」

聞きながらも足を止めないあたり、一夏はいつもと変わらず問答無用で話をする気満々である。

だが一夏は二人部屋につき余っている側の椅子に座り、デュノアをベッドの方に促した。

俺はてつきり一夏がベッドの方に来ると思いついで自分のベッドに腰掛けてしまったが、この配置では話をするのに微妙な距離だ。俺からは一夏よりもデュノアの方が近い。

これはどういうことだろう。

「さてと、話があると言ったけど話をするのは俺じゃない。智希とシャルルだ」

「シャルルが？ 何か問題でもあった？」

「いや、それは……」

「大ありだよお互いに。お前ら、話をしなすぎだ。最近つてことじゃなくて、シャルルが転入してきたからずっとだ」

それはあえてそうしていたことだ。

デュノアのことは最初から疑っていたし、デュノアに一夏を頼らせる的な意味合いもある。

そして疑いは予想通りで、デュノアも一夏べつたりになって目論見はうまくいったはずだ。

俺としては特に問題もない。

「そうかな？ 僕も忙しかったし一夏がシャルルの面倒見てくれたから別にいいかと思ってたんだけど」

「分かってる。お前があえてそうしてるってことくらいは。それに智

希は智希で忙しくていろいろ大変だったのも見てれば分かる」

「まあね」

「智希がシャルに最大限気を遣ってるってことはじゅーぶん分かってる。その上でだ」

「うん」

果たして一夏は何を言い出すのか。

お前らもうちよつと仲良くしろよと間に入るにはもったいぶり過ぎだ。

「俺の目からは何かがよくなったようには全然見えない。いや、智希が俺の知らないところで何かをしてくれてるのかもしれないけど、少なくともそれはシャルにまで届いてない」

「い、一夏、だから」

「シャルはちよつと黙っててくれ。もちろん俺も反省してる。シャルがすぐく言いづらそうだったし智希が突っ込んでこなかったから、俺も大丈夫かと思って甘えてた。でもそれは間違ってた」

一夏が言っているのはおそらくデュノア家の事情のことだろう。

俺としては一夏が聞いているようだし特に急ぐこともないと思っ
て放置している。

デュノアが薬を飲んでいたりと精神に変調をきたしているのは把握していたが、表面上デュノアは落ち着いていて特に問題があるようにも見えなかった。

デュノアにはいつも一夏がついているし、何かあればすぐに分かるだろうとそこまで心配はしていなかったのだ。

つまり、今一夏が来たということは何らかの問題が生じたということである。

心当たりはもちろんある。一週間ほど前の出来事だろう。

デュノアは俺に嵌められてボーデヴィツヒ共々俺に正体をバラしてしまっていた。

もしかしたらそのせいで今デュノアは心身ともに調子が悪くなっているのかもしれない。

「そういうことね」

「俺も先月は変に踏み込んで智希に嫌な思いをさせちゃったし、正直遠慮がちになってた。でもこのままじゃマズいと思ったからこうして来たんだ」

「なるほど、一夏の気持ちは理解した」

「サンキュー。でだ、俺としては二人は一度きちんと話をした方がいいと思うんだ。智希は遠慮せずに、シャルはビビらずに」

「ビビらずに？」

思わずデュノアの方を向くと相手は反射的に俯いた。

待て、俺にビビるとはどういうことだ。
「ああそうだ。シャルはもう智希にビビりまくってるぞ。それも最近の話じゃなくて、転入してきてからずっとだ」

「えー……」

「その顔はやっぱ分かってなさそうだな。この一ヶ月でちゃんと話をすればそういうこともなかったんだろうけど、智希が気を利かせた結果お互いビミョーな距離になっちゃったって感じなんだよな」

「ごめん、正直そこまでは意識してなかった」

普段のデュノアはわりと完璧系の人間で、万事においてそつがなかった。

取り繕っているのは分かっていたが、それを完璧にやれているならまだまだ大丈夫だろうと思っていたのだ。

様子がおかしくなったりボロを出し始めたりしたら警戒しようか、くらいで。

「あ、だからって智希だけのせいだとかそういうことじゃない。もちろんシャルにだって問題はあある。俺のことはともかくとして智希に對して後ろめたいから、及び腰になってるのは間違いない」

「へえ」

「どうせお前のことだから分かった上で黙っててくれてるんだろうけど、シャルにとっては相当きつかったみたいなんだ。いつ殺されるか分からない的な不安かな？」

「いや殺されるって」

「シャルにとってはそれくらい感覚だったんだよ。智希からしたら

それくらいしてくるならそれ相応の度胸を持つてるだろうって考えたんだろうけどさ、シャルはそこまで強くないんだ。どこにでもいる普通の……人間だ」

妙なところで間があったが一夏の言いたいことは理解できた。

そうか、俺の存在がデユノアにプレッシャーを与えていたか。

実に心外な話である。

新聞部部長の黛先輩と同じで、俺に関する尾ひれの付いた噂を真に受けてしまったに違いない。

「うん、よく分かったよ。それならまずは誤解を解いておかないとね。きつと恐ろしい人間とか思われてそうだし」

「そうそう。そんな感じだ。あ、もちろん智希だけじゃなくてシャルにも話してもらおうからな。もう智希は分かっているからいいじゃないかって、ちゃんと自分の口で言うんだ」

「い、一夏……」

「大丈夫だ。こういうのは喋ったらすごい楽になるんだ。なんでこんなにウジウジしてたんだろうって思えるくらいにな。それに話した後のこと心配なくていい。智希なら絶対になんとかしてくれる。今までずっと智希に助けてもらってきた俺が言うんだから間違いない」

「いやいやいや、僕にだって無理なものは無理なんだけど」

さすがにそれは買いかぶりにも程がある。

大抵の場合において俺自身が何とかしたわけではない。クラス代表を決める模擬戦にしろリーグマッチにしろ、誰かに何とかしてもらっただけなのだ。

俺自身に何かを成し遂げる能力はない。ことI Sに関してはおさら。

「智希で無理なら他の誰にだって無理だ。いろんな人達からお前がこの二ヶ月でやり遂げたことがどれだけすごいかって聞かされたぜ」

「だから、それにも限度はあるわけで」

「あー……、要するにだ、智希以上にシャルの悩みを解決できそうな人はいないってことなんだ。それこそ千冬姉よりもだ」

「千冬さんよりも?」

「そうだ」

一夏がまつすぐに俺を見て頷く。

つまりそれは男性IS操縦者に関する事柄に他ならない。

ということはこの一ヶ月のデュノアに対する態度は完全に失敗だった。

問題を抱えたデュノアを宙ぶらりんなまま放置してしまったからだ。

俺は一夏に任せず何を置いてもまずデュノアに対処すべきだった。「そっか。それなら僕も楽観視して見通しが甘かったのは間違いないね」

「まあそのへんは後で話そう。まずはシャルが話しやすくなるように、智希からいろいろ話をしてくれないか?」

「また無茶振りを」

「こう言われてるけど実際はどうだったとかそんな感じでいいからさ。そういうのだったらいくらでもあるだろ?」

笑顔でそんな簡単なことのように言われても困る。

しかしデュノアの緊張を和らげられるような話題など……とりあえずはお互いにとって共通となりそうな話だろうか。

そうだ、そういえばあれがあった。

「はいはい。じゃあ……シャルルは僕と初めて会った時、自分の名前を知ってるってびっくりしなかった?」

「う、うん。フランスの国民も知らないトップシークレットをどうして知ってるんだらうって」

「まあそうだよね」

「あ、でも智希にもすぐく関係あるし話だし誰かから教えてもらってたのかなって」

千冬さんですら存在を確認できていないのに、まして俺が名前まで知れるわけがない。

ただ俺の場合は向こうから俺に会いに来てくれたというだけの話である。

「実はね、シャルルが来る一、二週間前だったかな、デュノア社の人と会ったんだ」

「えっ、誰!？」

「黒木さんと名乗ってたね。黒木……和海さんだったかな」

「あの人!？」

デュノアは驚きと共に顔を険しくした。

なるほど、知り合いか。そしてデュノアはその黒木さんを快く思っていない。

「ちよつと待て智希。いつの間にそんなことしてたんだよ?」

「先月に外出した時だよ。僕は三人の人と面会をしたじゃない。そのうちの一人がデュノア社の黒木さん」

「ああ、あん時か。じゃあどうしてそれを俺に言ってくれなかったんだよ」

「一夏は聞こうとさえしてなかったけど、帰りのタクシーで僕は言っただよ。まあ一夏は同じ男性IS操縦者がフランスにいることすら知らなかったんだから、覚えてなくて当然といえば当然なんだけどね」

「えっ!?! そうなの!?!」

「あ、いや、それは……」
自ら地雷原に突っ込んでいくというもはや恒例行事とも言える一夏の自爆行為だが、さすがにデュノアにとつても予想外だったようだ。

だがそれはそうだろう。まさか世界に四人しかいない自分の仲間の居場所すら把握していなかったとは夢にも思うまい。

織斑一夏とは人格的にはこれ以上なく信頼できるが、相談相手としてはこれ以上なく信用ならない人間である。

「いちか〜……」

「そういうわけだから、僕も一夏がなんとかしてくるなんて最初から考えてない。一夏がどうにかしようと思ったら今みたいに相談に来るだろうって想像してた」

「ま、まあ実際そうだしな」

「一夏のきつとなんとかなるってそういうことだったんだ。ずーつと

智希に相談しに行こうしか言わなかったけど、智希に全部丸投げするつもりだったんだ」

「いやだって、俺としたらそれが一番なんだし……」

デュノアが頬を膨らませて抗議し、抗議を受けた一夏が動揺してたじろぐ。

何かしらの考えを持った上で相談に行くのと、何も考えようとせず全部丸投げにしようとするのは天と地ほども違う。

デュノアからしたらこの数週間はいったいなんだったのかとでも言いたくなるだろう。

「で、でも、シャルだってずーっと決心がつかないって先延ばしにしてたじゃないか。いくら俺が大丈夫だって言っても言い訳してき」

「言い訳って、だから僕にだっていろいろ都合つてもものがあつて」

「あーはいはい。うまい具合に噛み合ってここまで時間が過ぎたのは理解できたよ。喧嘩の続きは部屋に戻ってやってもらおうとして、とりあえず話を戻そうか」

「あつ、ごめんなさい！」

「そ、そうだな」

俺の常套手段ではあるが、一夏を使って場の空気を和らげた。

デュノアも少しは肩の力が抜けたようだ。

「それでその黒木さんから、フランスの男性IS操縦者はデュノア社の社長の息子だって教えてもらったわけなんだ」
「なるほど……」

「あとシャルルのお父さんが今大変なことになってるって」

「……それ、相当ひどい言い方してたよね？」

「そうだね。呆れてものも言えないって」

「その点に関してだけは僕も同意するよ。誰に対しても不誠実極まる話なのは事実だから」

このあたりはデュノアも純愛主義国家フランスの人間か。

隣のイタリアやスペインに行けばその程度で大騒ぎするののかという反応が返ってくるような話であるし。

「そのへん一夏はシャルルから聞いているよね？」

「シャルのお父さんの話か？ 愛人作って二つの家族があったんだよな。まあ確かにこそこそしてシャル達をいなかった扱いしてたのはよくないな」

「だから一夏、問題はそういうことじゃなくて」

「ストップストップ。その問題は文化の違いとかあつていろいろやこしいから今は置いておこう。それよりもう一つあつて、その時黒木さんから言伝てをもらったんだ。シャルルのお父さんからの」

「言伝て？」

危ない危ない。肩の力が抜けたはいいが今度は変な方向に熱が入ってしまうところだった。

黒木さんの時も感じたがフランスの人間はこの手に話にはヒートアップしてしまいそうだ。

幸いこの一ヶ月での一夏の言動に変化はなかったから、一夏がデュノアに毒されていないことは分かっている。俺も常々正反対の論理を一夏には言っているし。

だがデュノアが一夏を純愛思想に教化しようとしているのは間違いなさそうである。今後は嚴重な注意が必要だ。

「うん。確か、自分の息子が困っているから助けて欲しい、だったかな」

「ええっ!？」

「それ驚くようなこと？」

「う、うん……。智希に対して助けて欲しい……?」

子を思う親の気持ちとして一般的にそこまでおかしい話ではないと思うが。

ああ、デュノアが疑問に感じたのはなぜ俺に対してということか。

「伝言の形になったのはシャルルのお父さんは一夏に面会を申し込んで断られてたというのがあると思う。僕の方に来てた黒木さんの方は認められたからそういう形になったんだろね」

「ああ、そういうこと」

「だから僕に対してというよりは、僕や一夏の後ろにいる千冬さんや日本に対してってことじゃないかな」

もつともそれだと今度はその後千冬さんや日本から徹底して隠そうとする意味が分からなくなるが、黒木さんの態度を鑑みるに単純にフランスも一枚岩ではないということなのかもしれない。

「へー、俺にも来てたのか。まあ千冬姉が断つたんだろぅけどさ」

「あの頃はシャルルのお父さんだからとかじゃなくて全部断つてたからね」

「でもあの人達がそんな危ない橋を渡るのかな……？」

「シャルル、あの人達って誰のこと？ シャルルのお父さん？ それとも黒木さん？」

「両方だよ」

顔を上げたデュノアには明確に怒りの感情があった。

「智希も知つての通りこれはすごくデリケートな問題で、誰も責任を取りたがってないんだよ。だからあの人達がそんな自分にとって危険な行為をするのかって疑問なんだ」

「まあシャルルのお父さんには社長って立場があるからなんとなく分からないでもないけど、黒木さんも？」

「そうだよ。だってあの人は何もしてくれなかった。デュノア社の中じゃ問題解決に対して一番近い立場にいるはずなのに、今自分にできることは何もないとか何とか言ってるわろぅとしなかったんだ。責任取らされて自分の研究をできなくなるのが嫌だったんだろぅけどさ。でもその裏で日本に来て智希に会ってる？ ますます信用ならないよ」

黒木さんがデュノア社でやっているのは男でも動かせるISの開発だ。

一見男性IS操縦者とは深い関係がありそうにも見える。

しかしデュノアが言うには黒木さんはデュノアに関わろうとしなかった。また俺に対しても協力を求めているわけではないとはつきり言っている。

それは科学者としての見地からなのか、それともまた別に意味があるのか。

「でも黒木さんが僕にフランスの事情を教えてくれたのは事実だ」

「うん。つまりそこまでの危険を犯す価値があつたってことなんだろうね。例えば僕が来る前に伝えておいた方が何かと都合がいいとか」「どういうこと?」

「そのおかげで智希がいろいろ準備できたんだから、十分意味はあつたよ。知つての通り僕達は最初から智希に警戒されてた結果何もうまくいかなかったじゃないか」

デュノア的には反対勢力の仕業とでも言いたいのだろうか。

デュノアやボーデヴィツヒ側と対立する集団があつて、黒木さんはそちら側の目的に沿ってやってきたとか。

だが向こうの事情を把握しているわけではないが、デュノアの論理には少々飛躍があるように見える。

俺という外からは不確定要素の固まりにIS学園での大部分を投げてしまっているのは、いくらなんでも計画としてずさん過ぎる。俺はIS委員会から無能扱いされているくらいなのだ。たかだかりーグマツチのゴーレム戦だけ見てそこまで俺に委ねられるだろうか。

どうもこのあたりはデュノアの私情が入っていきそう。

「うーん、でも黒木さんてシャルルのお父さんに対して否定的な感じだったんだけど、実は仲良かったりするの? でも今回のことで幻滅したとか?」

「元々知つてたし、最初からいい感情は持つてなかつたよ。むしろ僕達に対して同情的だった。でも自分の身に降りかかりそうになつたらすぐ逃げたから、所詮はその程度だったんだろうけど」

「そつか。ということは今回のことは利害が一致したからとかそんな感じかな?」

「そうじゃないかな。責任を押し付けられる相手がいるなら喜んで握手するよ。誰も彼もみんなが責任責任と言つて押し付け合いをしているのが現状だし」

吐き捨てるようなデュノアの発言には嫌悪感がありありと見えた。

よく分かった。今のデュノアは信頼していた大人に裏切られた子供だ。

横目で見ると一夏も難しい顔をしている。施設にはその手の連中

がたくさんいたから、一夏も十分理解できるのだ。

そこには何もできない無力な自分がいて、その苛立ちを誰かにぶつけないには無理だ。

であるならば。

「なるほどね。となると何についての責任をたらい回しにしているのが気になるところだけど」

「それは……」

「あとシャルルがどうしてそこまで入れ込んで自分の力で何とかしようとしてるかも疑問かな」

「……」

デュノアが言いよどむ。

結局はそこだ。大の大人が揃って解決できない問題とは何なのか。そしてフランスから遙か日本までデュノアを駆り立てた動機は何なのか。

「シャル」

「一夏」

「自分の口から言うんだ。たとえば智希にとっては分かりきってることだとしても」

「……」

「シャルの口から言わないと、何も始まらないんだ。誰かに何かを助けてもらいたかったら、まず助けてって言うところから始めようぜ」

「……うん」

折れ曲がっていたデュノアの首がまっすぐに伸びる。

ようやくその目には決意の火が灯っていた。

「智希、智希も知ってることだろうけど、改めて言うね。まずフランスの男性 I S 操縦者は僕じゃなくて僕の弟、エミールだ。そしてその姉である僕は目くらましと時間稼ぎのためにエミールの身代わりとして日本の I S 学園に来たんだ」

「うん……うん？」

「あ、目くらましの方は知らなかったのかな？ 今フランスの男性 I S 操縦者が日本にいるって公式に発表することはしないんだけど、国

内にリークして今フランスにはいないらしいって空気を作ろうとしてるんだよ」

「な、なるほど」

いやいや、目くらましとかそんなことはどうでもいい。

今俺の知らない情報が山ほど出てきてしまったではないか。

弟？ 姉？ ちょっと待て。

「それでここからは智希も絶対に知らない話なんだけど、今エミールには大きな災難が降りかかっている。もう三ヶ月経つんだけど何も変わっていない状態で、現状は一夏と智希、特に一夏のISデータから何かヒントになるものはないかって探してるところなんだ」

「そうか、そう繋がるのか」

「うん。そして僕は二人の言動から何か得られるかもしれないから全て記録しろって指示されてる。今はやってないけど二人という時はずっと録音してた」

「回線は？」

「ああ、ISごと置いてきたから大丈夫だよ。今のこの会話は僕達三人しか聞いてない」

デュノアの言う災難とはボーデヴィツヒの言っていた不利益と同じだろう。俺と一夏には言えないからぼかしてきたか。

しかしこれはドイツをハブってフランスが動いたか、それとも一夏に説得されたデュノア個人の行動か。

待て待て、そういうのはもう後で考えればいい。

まずは情報を整理しなければ。フランスの男性IS操縦者はデュノアではなくてデュノアの弟。そしてデュノアはその姉。姉、姉、姉、つまり女。なんとということだ。

俺はIS学園に入学して以来最大級のポカをやらかしてしまった。

「なんかシャルが災難とか変な言い方してるけどさ、要は原因不明の病気みたいなもんらしいぜ」

「そうなんだ。だとすると僕には何もできなさそうだね」

「いや、それが精神的な病気なんだと。だから話を聞くとか……そうだ、カウンセリング的なことは俺達にもできるんじゃないかと思つて

な」

「同じ立場である僕達だからこそか」

デュノアを見ると頷いた。

「どうやらこれは一夏向けの説明のようだ。」

さすがにデュノアも最後の希望である一夏を危険に晒すような真似はしていないか。責任以前に本当に取り返しがつかないならそうするしかない。

「ということはデュノアは自分から正体をバラしたのではなく一夏にバレてしまったのだろう。あの織斑一夏なら着替えとかシャワーとかいくらでもその機会はある。まあ一夏にとってはよくあることだから、本人的にもまたやってしまった程度の意識しかないだろうが。」

それに男に化けられるくらいだしデュノアも鈴レベルで大して育っていないだろう。だからこの一ヶ月も施設時代の共同生活の延長線上で収まってくれるはずだ。

いや待て、希望的観測だけで話を進めてどうする。デュノアのいなところできちんと一夏本人に確認しておかないと。

「ああもう駄目だ、さつきから思考が乱れに乱れている。」

考え直すことが多過ぎてどこから始めればいいのか整理できていない。

「しかもこの状況で会話を続けるとか無理だ。」

よし、この場は切ってしまうおう。

「でだな」

「待った待った。とりあえず状況は分かった。でも今すぐいい案を出せとか言われてもそれは無理だから。それに専門家じゃないんだし本人と話もできないのに対処を考えようってそれは相当に厳しい」

「智希こそ最後まで話を聞けよ。フランスにいる奴に今から話しに行けるわけないだろ。シャルが今困ってるのはそういうことじゃない」「どうと?」

デュノアの方に顔を向けると、デュノアはさつきまでとは打って変わって弱々しい目になっていた。

「僕は、エミールに会いたいんだ」

「会いたい？」

「あれから、エミールが男性IS操縦者だって分かってから、僕は一度も会えてないんだ。最初の頃電話で数回話せただけ」

「会えてないって……発覚したのはけっこう前の話じゃなかった？」

「そうだね、そろそろ一年になるよ」

なるほど、保護という名の下に家族から引き離されたか。

だがそれもまたここ日本からは遠い話だ。

「そっか。でもシャルルは今フランスから遠く離れた日本にいる」

「うん。いつまでも埒が明かないから掛け合っただ。それで出された条件がこれ。日本に来て、エミールの身代わりをする。そして今ある問題に対して何らかの成果を出す。そうすれば僕とお母さんはエミールに会える」

「それはまた無理難題を飲んじやったね」

「重々承知だよ。どの道問題を解決しないとエミールは自由になれないんだ。だったら僕がやる。誰もやろうとしてくれないのなら家族である僕がやるしかないじゃないか」

そう話すデュノアの目には悲壮な決意とでも言えそうな厳しさがあつた。

全部背負って日本まで来たのか。

確かにそれではプレッシャーに押し負けてしまうはずだ。

いや、それどころかここに来る前から追い詰められていたのだから。

「分かった。シャルルの事情は理解できた。でも『成果』かあ……。向こうの解釈次第でどうとでもなっちゃうのがなあ……」

「うん。だから誰の目から見ても、って成果じゃないといけないんだ」

「最低限解決のための取っ掛かり、事実上解決してみせろだね」

正直なところフランス上層部から期待されているわけではないのだろう。

藁をも掴むではなく、とりあえず今日の前をデュノアを使って誤魔化す程度の話だ。

である以上いくらデュノアが成果を出そうと、誤魔化しが効かなくなるまでは認められることはないに違いない。

難題どころではない。まともによつては勝負にすらならない。

「ま、そういうわけだから智希にどうにかして欲しいんだ」

「簡単に言ってくれるね。まともにするのはほぼ無理。可能なら諦めろって言いたいくらいだよ」

「えっ、それは……」

「おいおい、何言ってるんだよ。まともにはできないならまともじゃない方法を見つけてくるのが甲斐田智希だろ？ お前が今までやってきたことだよ」

「はあ」

何も理解していない一夏は気楽なものだ。俺としてはもう溜め息しか出てこない。

だいたい災難とか不利益とかいう中身さえ知らされていないのに解決しろとかそもそも無理だ。本気でどうにかしようと思つたら俺はその災難とか不利益の中に突っ込んで行く必要がある。当然一夏にやらせるわけにはいかないわけだし。

一瞬もういつそフランスとドイツを切り捨てるかとも思つたが、その災難とか不利益に一夏が捕まってしまう可能性が残っている。

このまま放置しておいていいかというところなことは全くなかつた。

結局、最初から俺に選択肢などなかつたのだ。

「智希？」

「うん、現状の再認識はできたよ。こうなつたらもうやれるところまでやるしかないというのは間違いなさそうだ」

「ほんとに？」

「さすが智希！」

「あ、もちろん今名案があるわけじゃないよ。それはこれから作っていくしかない。というわけで今日はもういいかな？ 考えたいことが山ほどできたから」

「おう！ 邪魔だつて言うなら速攻で帰るぜ！」

「もう一夏は。でも智希、何か手伝えることはない？ 何でもするよ？」

「何でもとか言っちゃ駄目だ。そういうのはひどい目に遭うって相場が決まってるんだから」

「えっ？」

「あ、ごめん何でもない。うん、一人で考えたいし大丈夫」

「それならこのまま帰るね」

精神的に落ち着いたデュノアは微笑むと立ち上がった。

一夏はもう既に部屋の外だ。

「あ、そうだ」

「どうかした？」

「大事なことを忘れてた」

まだ何かあるのか。正直これ以上は勘弁して欲しい。

そんな俺の気持ちなど知る由もなくデュノアは笑顔のまま俺に向き直った。

「僕の名前だけどね、シャルルじゃなくてシャルロット」

「ああ」

「改めて、シャルロット・デュノアです。よろしく」

なるほど、これは確かにどこからどう見ても女子だ。

仮面を被っていないデュノアは見た目も雰囲気も何もかも女の形をしていた。

31. タツグマツチ二日目 暗躍

いい加減俺に慣れたということなのだろうが、かといって付きまわれるのも閉口する。

「アニータはちよつと受けに回り過ぎだったよね」

「でも佐藤さんが前に出てたからある程度そうなるのは仕方ないと思うんだけど」

「だったら足並み揃えてアニータも攻めて押すべきでしょ。あれだ之間に入られて分断されると困るじゃない」

「いやむしろ佐藤さんが一人出過ぎなのが問題なわけで……」

さかんに俺の横で議論が行われている。

やっているのは俺がベツティのブレーションと呼んでいる、三組の指揮科志望な生徒達だ。

ベツティと佐藤が試合に行き、菅原さんも自分のパートナーに呼ばれていなくなったのだが、代わりにこの連中が俺の側に寄ってきていた。

「アニータはずつとバランスを取ってたんだよ。佐藤さんが前のめりになってるんだから後ろを取らせるわけにはいかないだし」

「そうそう。アニータの相手はけっこう後ろを気にしてたよ。あれ絶対隙あらば佐藤さんを後ろから攻撃しようって思ってたって」

「でもこんなじゃ連携できてたとは言い難いと思う。結局佐藤さんが落とすまで一対一になってたじゃない。押し切ったとは言え作戦的には向こうの思い通りで分断されたも同然じゃないの？」

「いやいや、それはそれでいいんだよ。個々の実力は明らかにこっちが上だったんだから、一対一にさせちゃいけないのはむしろ向こうなわけで」

「甲斐田君的にはそのへんどう思うっ？」

勝手にやってくれるのであれば放っておくだけなのだが、議論し

ながらも時折俺に水を向けてくるから面倒だ。

試合中も散々俺に聞いてきたし、この質問攻めは鷹月さんや四十院さんを彷彿とさせる。

指揮科を目指すような連中はどいつもこいつも質問、いや議論魔ばかりだ。

「えーっと、まず佐藤さんが前に出るというのは最初から決めてたわけで、それ自体は特にどうこう言うことじゃないと思うけど」

「にしてもあんなにガンガン押し込もうとするのはどうなの？ 下手すれば挟撃されてたんだし」

「だからそうさせないようにベツティさんが動いてたわけで、その結果ベツティさんの相手はパートナーの方に気を取られて集中できてなかったじゃない。そして救援できずにそのまま佐藤さんが落ちちやつたから万事休すで」

「でもそれってアニータが一方的にフォローしてただけで連携とは言わないよね」

「いやいや、役割分担してしつかりその役割を果たすのは十分連携してるって。連携できてなかったらそこをつけ込まれるんだから」

言いたいことは分かった。

要するに今の試合で佐藤が華々しく活躍してベツティが佐藤のサポート役に見えてしまったのが気に入らないのだろう。

連中はずっと二人が派手に動き回って華麗に入れ替わったりして無双する姿を想像していたに違いない。

いや、別にあの二人であればやらせればそういう動きもできるのだろうが、一回戦は作戦からしてコンセプトが違っていただけだ。

佐藤とベツティのペアはCブロックの決勝、すなわち準々決勝でおそらく篠ノ之・鷹月ペアと戦わなければならぬ。そして正直なところ篠ノ之さんは近接戦における総合力を言えば一夏以上である。

よって勝つには何より篠ノ之さんを一人だけで押さえ込む必要がある。二人がかりになってしまいうようなでは鷹月さんの思う壺できつといいようにされてしまうだろう。

それで俺はそのミッションを佐藤に課した。ベツティにしなかつ

たのは実力の問題ではなく、佐藤よりベツティの方が器用だからだ。一方のベツティには鷹月さんに篠ノ之さんへの援護をさせず、さらに鷹月さんをできる限り早く落としてもらう。時間がかかつては疲労もあるのでこちらに不利だからだ。

二人の性格的にもその方がいいだろう。実際話したときも納得していたようだったし。

つまり一回戦は準々決勝を想定した予行演習のようなもので、相手が弱い内に感覚を掴んでおこうという話だ。

というようなことを佐藤とベツティには伝えていたのだが、この様子ではブレーン連中はそこまで聞いていなかったようである。

全員が参加者なのだしまず自分のことが第一だ。大まかな方針くらは知っているだろうが、個々の対戦相手のことまでは把握する余裕がなかったのだろう。

「うーん……」

「とりあえず二人のところに行こうか。反省会をするのなら本人達がいた方がいいだろうし」

「それもそうか。分かった。みんな行こう！」

言うや待ちきれないと言った風情で立ち上がり彼女達は駆けて行った。

もちろん俺は微塵も張り切っていないのでゆつくりと腰を上げる。

振り返ると俺の斜め後ろに陣取るボーデヴィツヒも彼女達を見送っていた。

「ふむ、どこも自分のリーダーには華々しさを求めるのだな」

「ドイツでもそうだったの？」

「ああ」

「ちなみボーデヴィツヒさんはどちら側？」

「求められる方だ。リーダーは皆がついていきたいと思える姿を見せるべきだとクラリツサは言っていた」

「リーダーか」

「私は専用機を授けられるという極めて恵まれた立場にある。であるから皆の期待には応えて当然であるし、それにふさわしい人間であり

たいと常に思っている」

「へえ」

「ああ、クラリツサと言うのはドイツでの私の親友だ。いや、向こうは私を立てたがっているが、私は親友だと思っている」

「そうなんだ」

「ま、まあクラリツサは時折私を子供扱いするし、敬うつもりがあるのならそのような真似はやめて欲しいと思うのだがな」

言いながら恥ずかしくなったのか、最後ボーデヴィツヒは早口だった。

佐藤とベツテイのいる控室では大して議論にもならなかった。

その主な要因としては二人とも上機嫌だったからだろう。

先に行っていたブレーション連中は俺が着くまでに丸め込まれたらしく、特にヒートアップした様子もなく落ち着いて会話をしていた。

どうやら見るからに佐藤もベツテイも手応えを感じたようだ。

実際の試合も派手さはないが堅実に相手を押さえ込んだという感じだったし、試合中のお互いの認識に食い違いもなかったのだろう。

そのあたりについては俺もベツテイ達に限らず口を酸っぱくして言っていた。実力的に近い相手ならば後はプラスアルファで何を出せるかだ。そのための連携であり、連携するためには二人の息が合っていないければならない。そうでなければむしろ味方の足を引っ張ってしまう。

既にリーグマッチを経験している佐藤とベツテイは一人で全部こなさなければならぬ大変さを理解していた。だからこそ他の連中よりも強い意識を持ってここまでやってこられたのだろう。

また一対一ではなく二対二であることも大きい。一年生はとても熟練者には程遠いためミスがつきものだが、二人ならばお互いにフォローをすることができる。

不意の予期せぬ出来事への対応というのは何も相手の行動に対してばかりではない。

むしろ崩れやすいのは自分達のミスからだ。

作戦というのはどうしてもうまくやれる前提で立ててしまうものだが、一夏の思い通りにいかなさを痛感している俺としては最初からうまくやってくれるなんて信じていない。

だから俺は同一の目的意識を共有してそれに沿って極端な話アドリブで行動しろと言っていたのだが、二人はまだそこまではできないと決まり事を作って対応するようにしているようだ。

そしてこの試合でうまく機能させられたこともきつと手応えの一つなのだろう。

試合でいくつかミスらしきものはあったが全くつけ込まれていないし、そもそも相手に勘付かれてさえいなかった。

「ちよつと待ってくれ」

次の対戦相手の試合を見るベッテイ達と別れてすぐ、アリーナから出たところでボーデヴィツヒが呼び止めた。

振り返るとボーデヴィツヒは険しい顔になり、進もうとしていた先を見ている。

「何かあった？」

「それはむしろこれからある、だな。甲斐田智希君、申し訳ないが引き返して遠回りをして行こう。何、次の試合までまだ時間は十分あるので問題なく間に合う」

「その前にこのまま進むと何はあるかを教えて欲しいんだけど」

「……おそらく君のことを待ち構えている集団がいる」

「へえ、よく分かったね。ぱつと見集団なんていないけど」

振り返って見渡してもこちらに向かつて来るような集団はない。いやそもそも集団と呼べるような塊さえない。

「連絡があった」

「連絡……？ ああ、シャルルか」

「あのような連中など相手にする必要はないと言っているし私も同意見だ。もちろんいよいよとなれば全力で君を守ってみせるが、相手が相手であるしわざわざ火中の栗を拾うこともないだろう」

「五組かあ」

そういえばデュノアとボーデヴィツヒは専用回線で内緒話ができるのだった。

たむろしている五組連中をデュノアが見つけて知らせてきたのだろう。

しかし便利だな。

「待ちぼうけさせて頭を冷やさせるのも悪くはないだろう」

「もつと怒りそうな気もするけど」

「何、こちらは相手の姿を見てさえないのだ。ただ向こうが間抜けだったという話で君に何も責任はない」

「そういう理屈が通用してくれるならこんなことにはなっていないんだけどね」

言いながら俺は前へと足を進める。

だいたい読めた。もはや崩壊しかけの五組など特に怖くもない。

「お、おい！ 聞いているのか！」

「もちろん聞いた上でだよ」

「なぜわざわざ自ら炎に飛び込もうとする？」

「だって炎じゃなくて燃料が切れかけの焚き火だからね」

「な、なるほど。もはや風前の灯火であるからいつそのことここで吹き消そうと言うのだな？」

「違うよ。こんな早々に火が消えちゃったら困るじゃない」

「なんだと!？」

さすがに一回戦も終わらないうちからクラスごと存在感が消えられては盛り上がらない。

せめてもう二日、二回戦が終わるまではがんばってもらわないと。クラス代表の杉山には最低四回戦、できれば一夏と当たる準々決勝まで上がって欲しい。

IS学園的にも自滅ではなく折られた方が今後のためになるだろうし。

「まあそれ以前にこんなところで騒いでたらすぐ先生か警備の人達が来るよ」

「確かに大人達の目に触れさせて日の当たる場所に持つていくのは十

分ありだな……」

「そうそう。変に見えないところで陰湿なことされるよりも何かしたらずぐ疑われる状態に持っていった方がいいよ」

「分かった。君がそこまで覚悟をしているのなら私に異存はない。ただ今は私が君の前を歩かせてもらおう。万が一があつてはいけなからな」

そう言つてボーデヴィツヒは威風堂々と俺の前に出た。

身長百五十センチもない女子が俺の前を歩く。誰がどう見ても護衛とは思われないだろう。

「もし刃物が持ち出されるようならすぐ逃げてくれ。訓練を受けていない女生徒を蹴散らすなど容易いが、それでも集団を相手に一人では多少の時間を要する。そして守るべき君さえいなければいくらでもやりようはあるのだ」

「いや別にそういう方向に持っていくつもりとかないから」

「もちろん万が一の話だ。穩便に済めばそれに越したことはない」

そうは言うもののボーデヴィツヒの口調はいくらか弾んでいた。問答無用で引き離そうとしないあたり、もしかしたらこいつも鈴と同じ種類の人間かもしれない。

鈴にいい奴とか言われるくらいだ。拳で解決する方が好きなタイプだとしても全くおかしくない。

まあ、と言つてもこの後ボーデヴィツヒの望む展開にはならないだろう。

なぜなら五組代表杉山の目的は、この場で俺を潰すことにあるわけではないのだから。

現場に着くと始まっていた。

既に騒ぎになっていた。

五組の生徒はクラス代表杉山含む十人ほどで、おそらくこれが杉山派の中心となるメンバーなのだろう。

そして相對しているのは二人、こちらに背を向けているので顔は見

えないが、誰であるかはすぐに分かった。その特徴的とも言える声の大ききで。

「うわ」

「あれは一組の留学生だな。スペインの方か」

屋外であろうと変わらさず響き渡る大声だ。

「負け犬がピーピーみつともないですねー！」

「八つ当たりとかほんとかつこ悪いよー？」

スペインからの留学生リアーデさん、に相川さんである。

「だからそういうことを言ってるんじゃない！」

「知ってるなら答えればいいし、知らないならさっさと消えろ！」

「この人達何マジになってんの？」

「みつともないですねー」

どうしよう。このまま回れ右しようか。

一瞬迷って足を止めかけるも、ボーデヴィツヒが構わず突き進んで行き向こうに気づかれてしまった。

「あつ、来ましたー！」

「えっ？ あー」

「甲斐田くーん。どうして来るんですかー」

「いやそんなこと言われても」

杉山の取り巻きの声で視線が俺に集中し、相川さん達も振り返る。

その顔は言葉通りなぜ来るのかと文句を言っていた。

そんな嫌そうな顔をされても困るのだが。

「はっ。まあいいわ。じゃあもうあんたらに用はないからさっさと消えて」

「は？」

「まあまあ清香、こちらでもフモーな会話を続けることはありませんーん」
リアーデさんがにこやかに相川さんの肩を叩く。遠くに聞かせているのではないかとさえ思える大声で。

相川さんはよくこの人間拡声器といつも一緒にいられるな。

「あー、まあそれもそうか。じゃあ行こうか甲斐田君」

「えっ？」

「ここはアツいですし一刻も早く日陰に行きましょうー！」

「二人とも何言ってるの？」

足を止めて疑問を返すと、二人は真顔で俺を見、それから揃って深く溜め息を吐いた。

何だそのこいつ何も分かってない動的な動作は。

「甲斐田君てさあ、遠くを広く見渡すのは得意だけど目の前のことって全然見てないよねー」

「デリカシーがないのは織斑君ですが、せめて人の好意くらいは察して欲しいものですねー」

「いきなりひどいこと言われた」

会って早々にこれである。

本当に一組連中は俺に対する敬意の欠片もない。勉強会で俺を持ち上げてバランスが取っているとしても言うのか。

「うんうん。じゃあ向こうで説明してあげるから行こうか」

「アリーナのリフレッシュルームでいいでしょうー。まだ次の試合まで時間はありまーす」

「いやいや、行くわけじゃないじゃない。そっちから来たのにわざわざ戻るとかないし」

「あーもう、いいから来て」

「こうなったらもう引きずっていきましようー！」

「あつ、ちよつと」

「待てっ！ 茶番はいい加減にしろー！」

強制連行されそうになったところで、ようやく静止の声がかかる。まさか杉山に突っ込みを任せる日が来るとは夢にも思わなかった。

「チャバン？」

「違う違う。甲斐田君が本気で分かってないだけ」

「はっ。なし崩して逃げようとかそうはいくか。いいからその男を置いてすぐ消えろ」

これ以上話の主導権を渡すかとかばかりに杉山が前に出てきた。

予想通り、相当に余裕がない状態なのだろう。

「何か用？」

「甲斐田君、こんな相手にすることないって」

「そうですよー。時間のムダです」

「外野は黙ってる。私が話をしたいのはそのモルモットだから」

挑発の言葉に相川さんとリアーデさんの顔色が変わる。

俺に対する挑発だったのだろうが、これは余計な方向に火を付けてしまったのだから失敗だ。

相川さんとリアーデさんがても動かなくなってしまう。

「あのさあ」

「選ぶ言葉の選択を間違えるのはいただけませんねー」

「事実を述べることの何がおかしい？ それにはつきり自覚しておくべきことではないの？」

クラスで佐藤とやり合ってこういう言い合いには慣れているのだろう。

杉山は落ち着きを取り戻してニヤついている。

だがその態度は正解だ。最初から議論をする気などないのでむきになった方が負けである。

この女性上位主義的上から目線状態は会話が成立しないのだ。

「まったくもって事実じゃないね。だいたい」

「まあまあ相川さん、そのくらいにしておいてあげよう」

「甲斐田君？ あのさ、ここは引いていいとこじゃないよ？ 今後I

S学園で過ごしていくためにも」

「そういうことじゃなくて、かわいそうだからこれ以上いじめるのはやめておこうって話」

「えっ?」

「はあ!？」

正直俺もやろうとしていることは同じである。

相手の土俵で話をせず自分の土俵に持ってきて一方的に押し付ける。それも相手が無視できない状況にして。

杉山の失敗はリアーデさんの言う通り言葉の選択を間違えたことだ。

モルモットという単語は俺を引きつける言葉ではない。

「杉山さんはさ、もう本当に切羽詰まってるんだよ。タッグマッチが始まったばかりなのにクラスメイト達にそっぽを向かれて、もうここにいる人達しか支持してくれなくなっちゃったんだ」

「そ、そうなの？」

「違う！」

「昨日五組は散々だったのが決定打だったんだろうね。義務だけ押し付けられて何も報いてくれないから当然といえば当然なだけだよ」
「やめろ！」

「だからこうやって僕という敵がいないとまとまれないんだよ。それなのにここで完全論破しちゃったら五組は完全崩壊しちゃうんだ。かわいそうだしこれ以上いじめるのはやめにしようよ」

「甲斐田君って……」

杉山が怒り、相川さんが絶句する。

この場から離れてくれないのなら相川さんとリアーデさんには観客になってもらおう。

杉山達も二人の存在を俺の言葉に対する判断材料にできるだろう。

「ちよつと待って。こいつ今『これ以上』って言ったわ」

「そんなこと言ったっけ？」

「二度も言っておきながら誤魔化すな！ 杉山さん、やっぱりこいつの仕業だよ」

「なんだと！」

取り巻きの一人から声上がり、俺はしらばっくってみせる。

俺を胡散臭く見ているなら効果的であるだろう。

甚だ不本意ではあるけれど。

「やっぱりうちのクラスの人間に手を出してたんだ……」

「その手を出すっていう言い方はちよつと」

「五人引き離して終わりに見せかけて、裏で手を伸ばし続けてたのか」
「なるほど、いつでも爆発させられる状態を作ってたってわけね」

「いやいや、何のことだかさっぱり」

「甲斐田君って……」

「そういえばそう言う人でしたー」

実に腹が立つが、相川さんとリアーデさんの俺に対する疑い目はナイスだ。

杉山達に自分達の想像の信憑性を高めてくれる。

本当は一切何もしていないのだが。

「おい」

「何のことを言ってるのか分からないけどきつと誤解じゃないかな」

「チツ、白々しい」

「でもまあ、これまでの自分の行動に問題がなかったか振り返って考えてみた方がいいと思うよ」

「お前の行動が見えなかった私を間抜けだと言いたいわけだな」

「とんでもない、全部言葉通りの意味で」

「もういい。はつきりした以上用は済んだ。みんな行こう」

杉山は特に俺を罵ることもなく背を向けて、そのまま歩いていった。

取り巻き達も俺を睨んでから後を追う。

「甲斐田君つてもものすごく悪役が似合うよね。こう自然な感じで悪者」

「最後だけ見たらドス黒い黒幕ですわねー」

相変わらず好き勝手言ってくれるが、今回に限ってはそういう印象を持たせるためなので何も言うまい。

五組で具体的に何があったかは知らないが、こういうことが起きているかは理解している。

とりあえずこれで五組は収まるだろう。

何もかも全部俺のせいにはできるのだから。

「さてと、僕も行くのかな。そういえばAブロックの二人は今日の試合がCDブロックだからあんまり関係ないのかな?」

「あー、甲斐田君は知らないか。一組は全員で分担して見てるよ」

「分担?」

「そうそう。自分に関係するところは当然として、それ以外についても情報共有したいし」

「なるほど、自分とは関係なくても使えそうな技術とかあるかもしれ

ないしね」

「そんな感じ。まあ三組だってやってるんだらうけど」

そんなことは全くもって、ない。

三組は誰もが自分のことに手一杯だ。

俺がそう仕向けたせいもあるが、ベツティと佐藤以外で四回戦以降のことを考えている生徒はいない。

いや、実力的に考えていても仕方ないという部分もあるのだが、そもそも一、二回戦を突破すること以上のことを考える余裕がない。

俺が集めて集約しないと情報などとても共有できない状態なのだ。もちろん、一組と三組では事情が異なる。

三回戦から登場の一組は最初の三日間暇であるし、四回戦以降を見据えて動く必要がある。

だが今の三組が一組と同じ立場だとして、果たして今の一組と同じ行動ができるだろうか。

おそらく、自主的にはできない。

俺やベツティやそのブレーンがやらせればやる。だが個々人の意識として、情報共有のため自分に関係ない試合を見に行けと言ったら嫌な顔をするだろう。

そんな時間があったら自分のことに使いたい、だ。

ここ一ヶ月の三組はベツティを中心としたトップダウン形式になっているので横の意識が薄い。一組のようなパイロット班整備班的なチーム意識がない。

それはそれでスタイルの違いなのだからやりようはあるのだが、今回に限ってはどうか。そのままでもよかったのか悪かったのか、タッグマッチにおいてその意識が吉と出るか凶と出るか。

「清香、行きましょう」

「そうだね。あの連中はさすがに戻ってこないだろうし」

「じゃあまた」

「うん。じゃあねー」

相川さんとリアーデさんは手を振ってアリーナに向かって歩いていった。

俺はずっと静かにしていたボーデヴィツヒを見る。

「お待たせ。行こうか」

「あ、ああ」

「どうかした？」

「そのだな……君はもつと自分のことを大事にした方がいいのではないかと思う」

「またそれか」

「いや、これは男性IS操縦者であるからとかそういう意味ではない。もつと根源的な話で、自分の身を最終的に守るのは自分であるということだ」

「なんか哲学的な話に聞こえるね」

「そういえばこいつはそういう仰々しい言い回しを好む人間だった。もちろん私も人に偉そうな口を叩ける身ではない。ただ、クラリツサが常々私に言っていたのはこういうことだったのかと思ったただだ」

「ふうん」

「変なことを言って済まなかった。忘れてくれ。さて、念のため私が前を歩こう」

自分でもよく分かっていたのだから打ち切り、ボーデヴィツヒは俺に背を向けて歩き始めた。

と、後ろからこちらに走ってくる足音が聞こえたので振り返る。

見ればリアーデさんが手を振って近づいて来ていた。

「甲斐田くーん！」

「何か忘れもの？」

「はい。ちよつと」

俺の目の前まで来たリアーデさんは手招きをする。耳を貸せということらしい。

声の大き過ぎるリアーデさんにひそひそ話など不可能だと思っただが、そうしろとしつこいのでやむをえず耳を出す。

「フランスの彼女に、気を配ってあげてくださいね」

思わずリアーデさんの顔を見ると、リアーデさんは何も答えず笑顔

のまま領き、踵を返して走っていった。

「どうした？ 何かあったのか？」

距離のあったボーデヴィツヒは聞こえなかったようだ。

これは重大な事実が発覚した。

あの女、実は声量を下げられるじゃないか。

二日目の午後に入り、最後のクラス代表、四組の更識簪が登場した。俺が気になるのは更識簪がどういう生徒と組んだかだが、それについては既に布仏さんから聞いている。結局パイロット科志望で入学前からIS操縦経験のある生徒に落ち着いたとのことである。聞く限りその人選は他人から見ても順当という感じのようだ。

またその選定にあたっては四組内で一大イベントがあったそうだが、倉持技研がわざわざ休日に打鉄を四組のために貸してくれたとのことである。

IS学園内の倉持エリアにて一日かけて更識簪のパートナー決めが行われて決まったと、布仏さんが嬉しそうに教えてくれた。

他のクラスが聞いたら文句を言いたくなるような鼻負ぶりだが、更識簪は元々倉持技研の管轄であり、企業の広告塔でもある。

堂々とやるあたり倉持的には便宜を図って当然くらいの感覚なのかもしれない。

「やった！ 勝った！」

「かんちゃんおめでとー！」

そして勝敗が決した。

普通に、危なげなく四組代表とそのパートナーは勝利したと言える試合だった。

更識簪は終始落ち着いていて、後衛として相手の攻撃を全てシャットアウトしてみせた。

地味ではあるが堅実で、細部にまで目の行き届いた確かな技術を持っていると見た者は感じる働きぶりだっただろう。

またこの試合での更識簪にリーグマッチでの一夏戦や鈴戦のような激しさは一切なかった。何事にも動じない冷静さを持ってパートナーを完璧にサポートし、相手を手詰まりにした上で押し切って文句をつけようのない完勝だった、というのが一般的な評価になるだろうか。

「更識さーん！ 楓ー！ すごかったよー！」

「おめでとー！！」

「楓がこっちに手を振ってる！」

「あはは、更識さんが無理矢理手を振らされてる！」

「もう、更識さんはそういうの苦手なのに楓はしょうがないなー」

横では四組の大応援団が歓声を上げている。

ぱつと見の人数からして、試合を控えていない四組の生徒はほぼ全員いるのではないだろうか。

ここまでの雰囲気を見るからに、四組は更識簪を中心にして緩い空気でまとまったと言えそうだ。

「あ、更識さんが楓の手を振り払った」

「楓が謝ってる謝ってる！」

「さすがにいつまでもやってたら恥ずかしいよねー」

「楓は嬉しくてテンション上がってる感じだけど」

俺の目に映るのはコミュニケーションをしているコミュ障だ。

自分はコミュニケーションをできないんじゃない、やらないだけだ、とでも思っているのだろう。

だが実際やらせたら奴は確実にできない。やろうと思つてすぐに見えるものではないのだから。できる人間は最初から自然にやつているし、俺達のような人間は覚悟を決めてやろうとしない限り一生できないのだ。

とは言つてもその態度が許されるというのは同じ種類の人間からすると非常に羨ましい。

更識簪は俺などより遥かに優秀だから、全部自分で何とかできて人に頼らずとも生きてこられたのだろう。あの過保護過ぎる姉もいるし。

才能あれば七難隠す。芸術家タイプにはよくある話である。

「ねーねー甲斐田君的には本音ちゃんのプロ友はどうだった？」

「あ、それあたしも聞きたい」

「更識さんと楓は優勝できそう？」

「今の見てたらけっこういけるんじゃないか思うんだけど」

一方で緩い空気だからか、四組連中は俺に対してやけに馴れ馴れしい。

ほとんど初対面なはずなのに、男の俺に対してなぜここまで近寄ってくるのか。

まあ原因は分かっている。俺の横でニコニコいつもの笑顔を見せている布仏さんだ。

この親友とは真逆ともいえるコミュカの塊は、あつという間に四組に溶け込んだ。

それだけなら俺には関係ない話なのだが、問題は布仏さんが俺のことを四組内で喧伝しまくったのだ。更識簪のために倉持を引っ張り出したのは俺であり、全部俺のお陰だと褒めそやしたらしい。

結果四組内で俺は、困っているクラスメイトのために骨を折って行動し見事解決までしてみせるとてもいい奴認定されてしまった。

もちろん俺に関する怪しい噂も届いていたが、布仏さんが全部否定して回ったようだ。

布仏さんがまっすぐに裏表もなくとても性格がいいことは四組内でも認識されている。それが災いして俺は布仏さんの保証で信頼を得てしまったという結末である。

俺単体では胡散臭がられてばかりなのに、この差はいったい何なのだろうか。

ともあれ、俺の失敗は布仏さんからお礼を貰わなかったことだ。

そのせいで布仏さんを申し訳ない気持ちにさせてしまい、結果せめて事実をきちんと広めなければならぬと布仏さんが必要以上に駆り立てられてしまった。

ただより高いものはないという言葉を、俺は別の意味で味わったと言えるだろう。

「うーん、優勝は……ちよつと厳しいと思うかな」

「えー！」

「なんでー!？」

「リーグマッチでも一組の織斑君にほとんど勝ってたじゃない」

「それに五組には勝ったし二組ともいい勝負してたでしょー！」

マシンガンのように俺に対して非難の言葉が浴びせられる。

別にお世辞を言ってもよかったのだが、この発言は更識簪に伝わってしまう。俺の言葉であれば奴は間違いなく勘ぐるだろうから、ここは更識簪を意識して言葉を発するべきだ。

「今の試合を見る限り更識さんは全力を出してないし」

「だったらもつといけるってことじゃ？」

「それはつまり全力を出せないってことなんだよ。パートナーの人に合わせようとする、どうしても更識さんは力を抑えないといけない」

「楓が問題だって言うの？」

「楓ってそんなダメ？　うちのクラスじゃ更識さんの次にISを動かせる人なんだけど」

「全然ダメってことはないよ。ただその楓さんが全力でやるにはどうしても更識さんの方が合わせないといけないって話。そして合わせようとする分更識さんの力は抑えられる」

その楓とか言うパートナーの動きを見ていて、ゴレム戦時の相川さんよりも上だろうとは感じた。

あの時相川さんや谷本さんの代わりにいてくれたらもう少し一夏や鈴を温存できたと思えるほどではある。

ただ代表クラスとやり合うには引き出しの数が少ないように見えた。多彩な攻撃手段を持っている更識簪やベッティよりは一夏や鈴や佐藤のように自分の得意なやり方を貫くタイプだ。

「うーん……」

「じゃあ、楓が更識さんに合わせるの？」

「作戦的には十分ありだけど、更識さんの全力についていけないのか、それを続けて体力的に持つのかという問題がある。もちろん更識さん

はそんなの分かってて、総合力を考えたらその楓さんに思いっきりやってもらった方がいいと判断したんじゃないかと思うけど」

「はー……」

「そういえばなんかそのへんを訓練してた気がするなあ」

更識簪の最大の弱点はクラス内においてはつきりとした権限を持つていないことにある。

なまじコミュ障キャラとして認識されてしまったため、まあ実際そうなのだが、周囲の意見に押し通されてしまう。

要望を言うことは可能でも、大勢が決してしまった場合はひっくり返すことができない。

この場合更識簪のパートナーは単純に一番うまい生徒がいいだろうという流れになってしまったため、はつきりと異を唱えることができなかった。

まあ本当は普通にできるのだが、なまじコミュ障ロールをしているという意識があるため、更識簪は空気を悪くしそうな行動を取れなくなってしまうている。

これまで傍若無人に振る舞えたのは他人のことなどどうでもよかったから。だが今はタッグマッチのために周囲を利用してやるのだという意識がある。よって空気を悪くしてそっぽを向かれるのが怖いので、流れができてしまった後はもう逆らうことができないのだ。

加減を理解していれば普通にできるのだが、これまで他人を遠ざけてきた更識簪にいきなりやれというのはとても無理だろう。

当の本人もその範囲で最善を尽くすしかないと腹をくくったのが今の一回戦である。

「それに優勝は厳しいっていうのも今の状態で考えるってだけで、今後どうなるかはまだ分からないよ。こういう真剣勝負はすごく成長できるし、場合によっては化けることさえあるんだから」

「なるほど！　つまり優勝は楓次第ってわけね！」

「楓が更識さんの足を引っ張らなければいいわけか」

「優勝まであと六試合もあるんでしょ？　じゃあいけるいける！」

元々クラス代表と渡り合える実力はありそうだから、あながち嘘と
言うわけでもない。

更識簪にとってベストなタイプのパートナーではないというだけ
で。

今のままでもDブロックを勝ち抜くことまではできるだろう。た
だその先の準決勝がきつとベツティ達か篠ノ之さん達になるので、お
そらくそこが厳しい。

ベツティ達には俺がいるし、篠ノ之さんには鷹月さんが付いてい
る。五試合も見せては穴などいくらでも見つかるのは間違いない。

「よし、じゃあ楓には後でお説教だ！」

「見た感じ調子に乗ってそうだしねー」

「それじゃ次行こうか。場所はここだけ？」

「えつと……これは移動だよ。さっきの試合見たところ」

「またー？」

「あ、うちのクラス次は二試合あった。しょうがない。半分に別れて
行こうか」

「どつちもここじゃないんだ。みんなちゅうもーく！」

四組は律儀にクラスメイトの出る試合を揃って応援しているよう
だ。

そういえば、五クラスもあって他に四組と同じことをしているクラ
スがない。

今回は二人ペアとは言え個人戦だけあって、自分のことに手一杯
なのがほとんどだ。

「いやあ、勝った勝った」

「かんちゃんほつとしてた〜」

「よく分かるね」

「うん！ だつてかんちゃんのことだもん！」

「よつ、さすがは幼馴染！」

「まあそれはいいんだけどさ、ずっと疑問だったんだけど」

「はい？」

「どーしたの〜？」

「どうしてここに谷本さんがいるの？」

布仏さんを挟んだ向こう側に、俺が来る前から平然と谷本さんが座っていた。

俺以上に四組との接点などないだろうに、普通に会話もして四組の集団に馴染んでいたのが不思議過ぎる。

そんな話など全く聞いたことなかったのだが、もしかしてこれまでも布仏さんにくっついて四組に出入りしていたのだろうか。

「えっ、だって私本音ちゃんとはパートナーですし」

「ゆーことはお部屋も一緒だしいつも一緒だよ？」

「そういえば同部屋だっけ。いや、谷本さんが四組に縁があるとか聞いたことなかったから」

「確かに知り合いか誰もいなかったなあ」

「ああ、ということはこれまでに布仏さんと一緒に四組に来てたからか」

「へ？ 四組の人と顔を合わせたのは今日が初めてだよ？」

「まじですか」

思わず素で返してしまったが、これは驚きだ。

単に馴れ馴れしいだけの奴ならいくらでもいるが、人間関係とは相手あつてのものである。初対面から一、二時間程度では馴染むと言っても普通は限度があるだろう。

だが谷本さんはたったその程度の時間で違和感なく四組の空気に溶け込んでいた。俺も初っ端に四組の人間が馴れ馴れしかったこともあつて、話しかけられるまでは四組の生徒が布仏さんの横に座っていると錯覚していたくらいだ。

今の試合中も布仏さんや四組連中と一緒にあって騒いでいたし、俺やボーデヴィツヒのようなお客様空間にいるという感じは全くしなかった。

これは俺と同じく布仏さんに信頼を保証してもらったのだろうか、それとも谷本さんの持つコミュニケーションのおかげなのだろうか、はたまた女とはそういうものなのだろうか。

「かいだー？」

「なんかおかしいことありました？」

「ごめんごめん、谷本さんが四組の人達に迷惑かけてないか心配だっただけだから」

「むー！ ゆーこはそんなことしないよー！」

「そうだよ！ 私甲斐田君と鷹月さん以外には迷惑をかけたらしません！」

「へえ。僕に迷惑かけるつもりがあるんだね」

「あつ……」

しまったと谷本さんが手で口を覆う。

そういえば、鷹月さん以外から谷本さんに対する文句を聞いた覚えがない。

今まで俺は自分だけがターゲットになっていたというせいだと考えてきたが、俺相手にしろ普段から谷本さんが教室で騒いでいるのは事実だ。

それなのに谷本さんはクラスメイトのヘイトを一切買っていないようである。唯一の例外が鷹月さんだが、この人はこの人で谷本さんに対して個人的に含むものを持っているからのように見える。

これも谷本さんのコミュ力とやらのおかげなのだろうか。まあ元々ちゃんとやろうとすればできる人だ。俺や鷹月さん以外にはちゃんとしているのだろう。

それはそれで非常に腹の立つ話ではあるのだが。

「すいませんでしたっ！」

「お〜！」

「相変わらず速いね」

失言を悟るや谷本さんは流れるように土下座の体勢に移った。

久しぶりに見たが、これまでの動きよりも格段にキレがいい。

鷹月さんに対しては土下座などしない人なのでこの土下座は完全に対俺用なのだが、もしかして土下座の練習でもしていたりするのだろうか。

「えっ、何？」

「あたし土下座って生で初めて見たかも」

「なんかかつこいいね」

「主従関係？」

「そんなプレイとかあるの？」

これがかつこいいと感じる美意識はどうかと思わないでもないが、少なくとも見た目が整っているのは間違いない。指先まで揃って完全にシンメトリーであり、相当にやり慣れていることもあって様になっているのは確かだ。

そして人前だろうがためらいすらなくやってのけるこのクソ度胸。

「かいだー」

「はいはい。もういいよ」

「はーい。で、甲斐田君次はどこ行くの？」

「かんちゃんのとこに行こー！」

さらに数秒前まで土下座していたとは思えない切り替えの速さ。元々何とも思っていないのだろうけれど。

結局馬鹿馬鹿しいと思わされてしまっている時点で谷本さんの術中なのだ。

「行かないよ。次の試合までにやることもあるんだから」

「え〜」

「ありや、行かないんだ。てつきり』その程度で優勝しようとは片腹痛いわ！』とか言いに行くのかなって思ってたけど」

「僕はどこのライバルキャラなんだろうか。しかも主人公と当たる直前で見知らぬダークホースにコロツと負ける系」

せつかくの機会であるからあえて煽りに行くのも考えないではなかったが、今しがた四組の生徒達と話をしたのでその内容が伝われば十分だ。

更識簪は別に優勝そのものに興味はない。目的は一夏もしくは鈴にリベンジを果たすことだ。

だが二人とはどちらかかつ決勝まで当たらないという組分けなので、結果的に優勝を目指さざるを得ないというだけである。

また奴は俺が背後にいるベツティ佐藤のペアを準決勝で破る必要があることも知っている。

なので更識簪に優勝は厳しいと俺が言っていたと伝われば、それは準決勝で負けることを示唆していると考えられるだろう。少なくとも俺の存在を無視はできない。

そうなれば更識簪の力点がずれる。決勝から準決勝に焦点が移動する。

俺に対して最大限警戒をしてくれればその分一夏対策にかける時間と意識が減ってしまうだろう。それが俺の狙いだ。

「……」

「ん？」

「本音ちゃんっ！」

「うんっ！」

「私、やったよー！」

「おめでとー！」

その瞬間俺は察した。

完全に油断して、谷本さんと普通に会話してしまった。

「今のすごく自然だったよね!？」

「うん！」

「そうそう。こういう流れでやりたかったんだよ！」

「うんうん」

「師匠に弟子入りして特訓した甲斐があったー！」

「ゆーこはがんばったよ〜」

全身で感動を露わにする谷本さん。

よしよしと手を伸ばして谷本さんの頭を撫でる布仏さん。

そして敗北に打ちひしがれそうになる俺。

何度俺は繰り返してしまおうのか。心底分かっていたはずなのに。

「じゃ、僕は行くね」

「あつ、はい！」

「かいだーまたね〜！」

大喜びの谷本さんとこやかな布仏さんに手を振られ、俺は背を向ける。

せめて何も発さないのが俺の最後のプライドだ。

敗者はただ黙って去るのみ。

唇をかみしめて前を向くと、目の前でボーデヴィツヒが首を傾げていた。

「ふむ……今の会話のどこに勝負の要素があつたか全く分からないのだが、とにかく君は負けたのだな？」

やかましい。

「もう、智希は無茶し過ぎるよ」

「別に大丈夫だって分かつてたからね。それにボーデヴィツヒさんもついててくれたし」

「それでもわざわざ自分から突っ込んでいくことなんてないんだからね」

ベッドに腰掛けたデュノアは開口一番説教を始めてきた。

「と言っても篠ノ之さんの説教とは全く次元が違う。いい悪いの差ではなく、文字通り全然別物だという意味である。」

篠ノ之さんの説教は啓蒙でもしようとしているというか、教師的な空気だ。

一方でデュノアのは一夏をたしなめている時のような、家族に対するそれだ。

弟がいるのだし、姉が弟を叱るような感覚なのだろう。

「でも放っておくわけにもいかなかったんだよ。こっちは五組の人達を数人抱えてるんだし、その人達の安全のためにも」

「あつ、そういえば……」

「その人達が八つ当たりされる可能性がある」

「五組って昨日ひどかったみたいだけど、今日はどうだったの？」

「あれ、シャルは知らないの？」

「一組は夜に会議で共有するから、いいかなと思ってそこまで確認はしなかったんだ」

「ああ、今一夏が聞いているわけか」

「うん」

昼に相川さんから聞いたことだが、一組は担当を決めて試合を観戦しているそうだ。

さらに一夏とデュノアが言うには夜にそれらの情報を持ち寄って分析を行っているとのことである。鈴やベツティや更識簪といった要注意人物に対しては夜竹さんが撮影を行って対策まで共有しようとしているようだ。

なんだかんだで鷹月さんと四十院さんがバラバラになりかけたクラスを再度まとめあげたのだろう。

元々人としてのスペックは俺よりも遥かに上な人達だ。やること分かっているのなら俺などよりも高いレベルでやってのけられる。

俺のように強権発動などしなくても理屈で納得させられるのだろうし、実際離れかけていた相川さん達も従わせていた。

やはり俺がIS関連で何かをできるのは今だけ、せいぜい一学期だけのようだ。二学期以降はきつと徐々に差をつけられていくのだろう。

「じゃあ今日の結果だけ言うと、今日は十四試合あって二組が二勝、三組が五勝、四組が二勝、五組が五勝だった」

「それなら五組は盛り返せたんだ」

「数字上はね。ただし五勝のうち三勝は僕ら側の人達」

「あっ」

「正確に言うと三組と五組で組んだペアが二つあって、今日どちらも勝ったから便宜上三組一、五組一で計算してる」

佐藤に菅原さんのことである。

クラスの違う佐藤とベツティを組ませたため菅原さんは三組の生徒と組んだ。

「それって……」

「五組を抜け出した六人が得をしたっていう結果だね」

「行動を起こしたからこそ成果を得られたってことだと思うけど」

「理屈では納得しても、感情はまた別ものだから」

「そうだよね……」

思い当たることでもあったのか、デユノアが俯く。

それは自分のことか、それとも自分に近い誰かのことか。

「そんなわけで五組が実質惨敗であることに変わりはない。五組の中核メンバーですら半分しか勝てなかったくらいだし」

「じゃあ三組は……昨日七勝してるから足して十二勝!?!」

「五組分の三勝を足すと十五勝。二回戦三十個の椅子のうち半分取れたね」

「それはまた……明暗がくつきり分かれちゃったわけなんだ」

正直ここまでとは思っていなかった。

平均値で七勝だから十勝くらいが目標だろうと考えていたのだ。

ところが三組の生徒達は思いの外奮戦してくれた。最初に俺が負荷をかけたのが効いたのか、それとも鈴に瞬殺された二人の姿が焼き付いていたのか。

その二人は初日の最初の試合で敗退して以降クラスメイトのサポートに走り回っていた。きつと切り替えられたわけではなく別のことをして頭を一杯にしていたかったからだろうが、それでもその懸命な姿は周囲に何かを感じさせるには十分だったと思う。

俺は一回戦の三分の一しか見ていないが、ほとんどの試合は技術的にそこまで差があるわけでもなかった。となると勝敗を分けたのはメンタル面の要素が非常に大きい。焦ったり動揺したりすると一気に不利になる光景が数多く見られた。

また二人組なため自分のことだけを考えていればいいわけではなく、相手への注意も払わなければならないのだ。

同時に考えなければならぬことが多過ぎて、マルチタスクを実行できる生徒でなければいきなり二対二のタッグマッチは厳しいと思わざるを得ない。

ISにおける初めての真剣勝負という緊張もあるし、まず何より手を付けるべきだったのは精神面だったと今さらながら痛感したというのがこの二日の感想だ。

「タッグマッチの間は僕の方に矛先を向けておく必要があった。変にちよっかい出されたりしてつまらないことに意識を囚われてほしく

ないからね」

「それは……分からないでもないけど、だからってあんなに刺激しなくとも」

「同時に発奮してもらおう目的もある。この後負けた後にきちんと折れてもらわないといけないから」

「折れてもらう？ どういうこと？」

理解できなかったらしくデユノアが眉を寄せる。

そういえばこのことを知っているのは三組関係者と鷹月さんくらいだ。

一組のデユノアが知らないということは、鷹月さんはあえてクラス内で共有することをしなかったのだろう。せいぜい指揮班仲間の四十院さんに話す程度か。

鷹月さんは気を引き締めさせるよりは勢いで押す方を選んだのだろうか。俺の目にはクラスメイト連中が緩んでいたように見えたが、下手にブレーキを踏ませない方がいいと判断したか。

鷹月さんの性格的には締めにかかると思っていたが、四十院さんの意見を汲んだか、それともまた何か別の方法で締めたのか。

「聞いてないのか。じゃあ鷹月さんに聞いてみるといいよ。シャルが知ってていいと判断したら答えてくれるかもしれない」

「鷹月さん？ 五組の話なのにどうして一組の鷹月さんが出てくるの？」

「別に五組だけに関係する話じゃないからね。シャルが知らないのなら僕の口から言っただけのことなのか分からないから僕は言わない」

「どういうこと？」

せっかくだから鷹月さん個人への援護射撃でもするかと思って言っただけ、気づいた。

そういえば、二十四時間ほど前に知ったばかりの事実だが、デユノアは男装している女だ。

しまった。これはまずい。俺は敗北確定の恋愛に首を突っ込んでしまっている。

しかも今の俺は真実を知りながらけしかけているという非難確定

の所業を行ってしまった。

どうしよう。実はデュノアが同性愛者だったりしないだろうか。いや駄目だ。それ以前に鷹月さんがそうではない。

俺は心底どうでもいい内容についての爆弾を抱えてしまった。

「タッグマツチ全体に関わることで、気づくか気づかないか的な話なんだよ。一般の生徒向けのことだからシャルは教えてもらってもいいかもね」

「僕には関係ない話なの？」

「専用機持ちクラスなら当然考えてること、くらいかな」

「うーん、ちよっと見当がつかないけど、とりあえず明日鷹月さんに聞いてみるよ」

釈然とはしていないようだが、デュノアはそれ以上突っ込むことはしてこなかった。

このあたりが空気を読める読めないの違いだろうか。

いいから言えと押し通そうとする一夏、言うつもりがないのなら素直に引くデュノア。

「まあそんな感じだから僕のごときは心配しなくて大丈夫。何の考えもなしにやってるわけじゃないって理解してもらえれば」

「それはもちろん智希がしっかり考えてやってることくらいは分かっているつもりだけど、わざわざ危ない橋を渡ることはしないで欲しいな。さつき智希が言ったように理屈と感情は別物なんだから」

「それも込みでちゃんと顔を見てやってるよ。いざとなったらボーデヴィッツヒさんもいるし、ここはIS学園なんだし」

「それでも、無茶をしないで欲しいと僕個人は思ってる」
デュノアは心底氣遣っているかのように俺の目を覗く。

確かにデュノアの立場からするとそうだ。俺の思考はそちら側に使って欲しいだろうから。極端な話デュノアは自分の弟以外のことはどうでもよく、俺に余計なことをして欲しくない。

「まあそのへんは毎日ボーデヴィッツヒさんから散々言われてるし、注意してやるよ。それよりも大事な話をしようか」

「う、うん」

ようやく来たどデュノアは背を伸ばし、膝の上の拳を握りしめて体を固くする。

わざわざデュノアを呼んだのはこのためだ。タツグマツチのことなど正直どうでもいい。

本当は一夏も連れてきてどこまで理解しているか反応を見たかったのだが、生憎と今は一組の会議に出ている。正確にはあえて一夏に会議を任せてデュノアはやって来た。

一夏に全てを話せない事情がある以上、込み合った話をするためには仕方ないと言えは仕方ない。

「まず話をする前に、今のこのことをボーデヴィツヒさんは、ドイツは知ってる?」

「ううん、言っていないから知らないはず。専用機も置いてきてる」

「フランスとドイツって監視し合ってる関係?」

「そこまではやってない。そもそもお互い同じ立場にあって目的も一緒だし、切羽詰ってて駆け引きをしているような余裕もないから」

「温度差はあるようだったけど」

「それは僕と彼女の立場による違いだよ。向こうは任務の一つではないけど僕はなんとしてでも解決したい。その差が智希にはそう見えるんだと思う」

「うん、きつとそうだろうね。じゃあ今ボーデヴィツヒさんがシャルを尾行してる可能性は?」

「それは……少なくとも昨日今日はないと思うよ。だって智希も知ってるだろうけど、彼女はしょっちゅう同じクラスの人達に部屋に上がり込まれて遊ばれてるでしょ? 僕が部屋を出る前もそうだったよ」

専用回線越しに聞いていたであろうデュノアが苦笑する。

人形のようなボーデヴィツヒの姿はかわいいもの好きの女子高生にとつてはたまらないとも言えはいいだろうか。

気を抜いた時に見せるボーデヴィツヒの子供っぽいしぐさが彼女達の心を掴んで離さないそうさ。また普段の軍人のような言動も背伸びをしているようで微笑ましいらしい。

「それならもう一つ突っ込んで聞くよ? シャルはこのことをドイツ

には知って欲しくない?」

「それは……」

「あるいは、フランスにも知って欲しくない?」
「!」

俯きそうになっていたデュノアの顔が反射的に上がる。そしてその目は大きく見開かれている。

その素直な姿に思わず俺は笑ってしまった。

なるほど、デュノアは自分の母国すら信頼できなくなっている。

つまりこの一連はデュノアの個人的な行動だ。もしかしたら一夏との関係も含めて。

「うん、分かった。じゃあ突っ込まれた時は僕が一組についてスパイしてるってことにしようか。中身は実際を適当に話してくれていいよ。スパイしてるのは事実だから」

「智希……」

「さて大枠が決まったところで本題に入ろうか。と言っても話をするのは僕じゃない。シャルだ」

「僕!」 え、えっと、ちよっと待って」

少し話を速く進め過ぎたか。

デュノアが追いついて来ていない。

仕方ないのでデュノアが落ち着くを待つ。

「ごめん、ようやく消化できた。それで、僕は何を話せばいいの?」

「たくさんあるよ。シャルのこと、シャルの家族のこと、ここ一年のこと、フランスのこと、ドイツのこと。あとは日本や一夏のこととかね」
「一夏のこと?」

「まあそのへんはおいおい。とにかく僕の知らないことを聞きたい」

「そうは言っても……智希ならだいたいは知ってるんじゃないかな?」

僕の名前まできっちり抑えてる時点でもう十分詳しそうだし」

「いやいや、外から見える話じゃなくて、当事者ど真ん中にいる人の視点から知りたいんだよ。さっき温度差の話とかあったけど、やっぱり外側から見るのと内側から見るのじゃ全然違うんだからさ」

「な、なるほど」

納得したようにデュノアが頷く。

そんなことを言いながら俺は何も知らないのだが、結果知ってしまったら一緒だ。

昨日まで知らなかった事柄も今日知ればそれからはもう常識になる。

決して今さら何も知りませんとは言いつらいとかそういう話ではないのだ。

「別に今日全部話せとは言わないし、後で思い出したら付け加えてもいいよ。幸いこの一週間はタッグマッチで時間もあるし」

「わ、分かった。じゃあ何から話をすれば……」

「何より知りたいのはシャルの家族の話だね」

「それはエミールの、弟のこと？」

「も含めた家族の話。たとえば親子関係を姉弟は最初から知っていたのかとか」

「そういうこと」

「そういうのは本人じゃないと分からない話だよな？ そのへんを時系列で話してくれば嬉しいかな」

デュノアが真剣な、いや少し怒りの籠った顔になって俺を見る。

もちろんその怒りは俺に対して向いているわけではない。

「うん、分かった。じゃあ最初から話すと、僕達は三人で、お母さんとエミールと僕の三人でずっと生きてきた。父親なんて書類上の存在でしかないと思ってた」

「フランスでもごく一般的な家庭と言えるのかな」

「あるべき論で言えばよくない話だけど、実際男の人の数の方が少ないんだから大多数はそうなっちゃうよね。かといって父親のいる家庭の方が上だみたいな風潮はどうかと思うけど」

「そのへんはフランスも変わらないか」

「あ、ごめん。話が逸れちゃったね。でも少なくとも別に僕達は何とも思ってたかったんだ。お母さんは働きながらしつかり僕達を育ててくれたし、エミールもいい子だし、三人で幸せに暮らしてた」

「うん」

「お母さんはいつも落ち着いてる人であまり喋る方じゃなくて、僕が喋ってることの方が多かったかな？ でもきちんと聞いてくれてたし、笑顔で頷きながら優しく僕の疑問なんかに答えてくれた。エミールもお母さんのことが大好きで、小さい頃は甘えん坊ですつとお母さんの手を離さなかつたくらいなんだ」

自分の家族を語るデュノアはとても楽しそうで、そして幸せそうだった。

きつと何もなければそのままごく普通の家族として過ごしていったのだろう。

「エミールってどんな子？」

「あ、ごめん。そのあたりも話さないかね。エミールは智希も知ってる通り今十四歳で、僕と年子って言うのかな？ 性格はお母さんによく似てて、僕と違って外で体を動かすよりも部屋で本を読んでいるのが好きなんだ。ちよつと引つ込み思案なところがあるけど、とても優しい子だよ」

「なるほど」

「あ、今全然似てない姉弟だとか思ったでしょ？ 一夏もそんな顔してた」

「いやいやいや、そんなわけないじゃない」

「本当に〜？ 一夏も今の智希みたいに焦ってたけど」

「いくらなんでも勘ぐり過ぎだよ。別にこんなところで茶化そうとか思っていないから」

「そ、そう。ごめん」

「それよりも続き。家族の事情に突っ込むけどどうしてそれが変わったのか」

別にデュノアの方にも一夏の方にも問題があったわけではない。

実親のいない一夏が実親とはそんなものなのかと思っただけだろう。実でない親や姉妹ならたくさんいるのだが、子供の数が多いののでどうしても親を独占というわけにはいかない。

俺の場合は片方でもそういう親がいるなら十分幸せだろうと思っただけ程度である。

「うん……。エミールが十二歳の時に、ふと自分のお父さんはどんな人だろうって口にしたんだ。僕は特に興味もなかったんだけど、お母さんが困った顔で笑ってごめんねって言って、その時は何か触れちゃいけないものがあるような空気だった。エミールは昔の本を読んで自分の父親という存在が気になっただけで、それから自分で調べてみたい。しばらくして僕に笑顔で言ったんだ。お姉ちゃん僕達のお父さんが分かったよって。それがテレビの向こうでインタビューを受けてるあの人だった」

「十二歳で自分の父親を突き止めたのか」

「お母さんの部屋を漁ったらいろいろ出てきたんだって。写真とか手書きのクリスマスカードとかいろいろ。今までそういうことをしない子だったし、お母さんも油断してたんだと思う。僕は特に興味もなかったし」

「にしてもよく今と結び付けられたなあ」

「それは僕も思ったけど、その時は友達と一緒にやってたんだって。まさかもうガールフレンドができたのかと思ったけど全然そんなじゃなかった。小学生の遊び感覚だったんみたい」

それは別にどうでもいい。

「もちろん僕は怒ったよ。いくら家族と言ってもやっていいことと悪いことがあるって。エミールもちやんと理解してくれた。でも、その後エミールは言ったんだ。一度でいいからお父さんと話をしてみたいって」

「うん」

「その時僕はお母さんの顔が浮かんだんだ。エミールが父親のことを聞いた時、笑顔の奥で悲しそうだったお母さんの顔が。それで僕は腹が立ってきた」

「え？」

「お母さんを捨てて今もあんなに悲しい顔をさせているあいつを許せないって。せめて一発ひっぱりたいってやりたいて」

「それは……」

「別に今さら責任を取れとかそういうことじゃないよ。僕達は幸せに

暮らせてたんだし。ただ恨み言の一つと一発叩くくらいはしてやりたいと思っただんだ」

「なるほど」

「それで僕はエミールに分かったと言った。一度でいいなら合わせてあげると」

「また無謀なことを」

相手はそのへんの一般人ではない。

フランス有数の大企業の社長だ。

全くもつていきなり突撃して会えるわけがない。

まあ子供特有の無鉄砲さなのかもしれないが、それはそれとして今の姿も見ると、もしかしたらデュノアは一度こうと決めたら難易度など考えずに突き進む人間なのかもしれない。

「それは最初から分かってるよ。ただ相手の正体もはつきりしてるんだ」

「大企業の社長さんだね」

「そう。ISを作ってる会社。そしてちょうどその時、中学生向けのIS代表候補生募集があったんだ」

「まさに渡りに船だと」

「うん。同じ場所に入り込めればいつか機会はあると思った。と言っても募集要項を見たら自分の力じゃどうしようもない大きなハードルがあったただけだね」

「ハードル？」

「IS適正Aランク限定という努力ではどうしようもないハードル」

遺伝すら関係ないとされるIS適正は、本当の意味で運と言えるかもしれない。

「確かにそれはどうにもできないね。だけどシヤルはそれを乗り越えられたんだ」

「本当に幸運なことに、だね。適性検査を受けたらAランクが出て、僕は試験に臨む権利を得ることができた」

「それはおめでどうと言っただけいいのかな」

「ふふっ、確かにAランクが出なかった方が結果的にはよかったかも

しれないね。いや、どのみち一夏と智希が出てきてたんだから、結局一斉検査されて一緒だね」

「一緒ではないかな。だってそのおかげでISの世界に入ってエミールのために何かができるわけなんだし」

「確かにそうだね。ありがとう」

俺に何を感謝するのかと一瞬思ったが、自分のやってきたことは無駄じゃないと俺がフォローしたように感じたのだろう。

ただデュノア個人にとって、ISの世界に入ったことがよかったのかどうかは分からない。

「それから僕は猛勉強して、ついに代表候補生の座を勝ち取ることができた。エミールも協力してくれて家事とか家のことをすごく助けてもらったんだ。お母さんはもしかしたら察してたかもしれないけど、何も言わずにがんばれって背中を押してくれた。本当に二人のお陰で僕は代表候補生になれたと思ってる」

「うん」

「ISパイロットのお給料はすごくいいし、将来お母さんに楽をさせてあげたい。エミールには約束通り父親に会わせてあげたい。願いの方は十年先の話だけど、約束の機会はすぐにやってきた」

それまで楽しそうに話していたデュノアの口調が変わる。

一言一句聞き逃すなどばかりに俺を見据えた。

「代表候補生の任命式があったんだ。その時は家族も呼んでよくて、さらにあの人もラファールの会社の社長として出席していた。僕達は初めて一堂に会した」

「それで話はできたの?」

「結果的にはできたみたい。僕はその場にいなかったけど」

「どういうこと?」

「電話越しにエミールがそう言ったから。あれ以来僕はエミールの顔を見てない」

そういえば昨日そんなことを言っていた。

「あの日なぜかエミールは迷子になって、どうしてだかISの格納庫にいたんだって。セキュリティ上絶対に一般人に行けるはずのない

場所だよ。そしてさらにエミールは男子なのにラファールを起動して、任命式の行われている広場に飛んできた」

どこかで聞いたような話だ。

「うん、一夏の時と全く同じだよ。一夏もよく覚えてない気がついたら目の前にISがあつたつて、エミールと同じことを言つてた」

「僕もそんな話を聞いたね」

「これは偶然？ それとも必然？ 智希はどう思う？」

「僕の場合はそうじゃなかったからなんとも言えないけど、四人目の人がそうならきつと必然じゃないかな？」

「なるほど……」

デユノアが下を向いて考え込む。

まあ、何となく分かった。

やはりそのエミールはこちら側と同類の人間だ。

「でもね」

ほんの数秒の間だったろうが、思い出したかのようにデユノアが顔を上げる。

「確かなこととして、あのときのエミールはこれ以上ないくらいの笑顔だったんだ。それだけは間違いない」

つまり、今のエミールは笑顔ではないというわけだ。

果たしてそれは、誰のせいなのか。

そこまで見えると、『不利益』の内容が分かった気がした。